

叙

世界の舞臺でいふ第十九基督世紀は最早お仕舞に近くなつて來た。その間に際立つて吾人の眼を射る文學の方の新顯象から云へば、佛蘭西のゴンクウル、フロオベルこの方の製作に、自然主義といふ名の附いた一種特異な産物がある。その筆の使ひかたは、どこまでも實際のまゝを平に叙して、くだらぬ事をも除かず、特色のあることにも別に氣をとめぬ。その種子を擧げて見れば、酒のみに子に親の因果が報つて來て、氣ちがひじみたものになるやうな話を書くのは、いはゆる遺傳を詩の種子に使ふのだ。かういふ類の詩の出て來たのはラマルクが発見して、ダル文に活用せられた方則が詩の境にはいつたからだ。又人間の動物的な側を誇張して、性欲すなはち劣等を色氣を行爲の唯一の原動力にしたやうな人物を寫すのは、いはゆる病理を詩の種子に使ふのだ。かういふ類の詩の出て來たのは、伊太利のマンテガツツア、獨逸のクラフト、エエビングなどの醫學上の論説が詩の境にはいつたからだ。たとひ又病理にまではならぬ、まだ生理の中に立ち留つて居る種子があつても、それは男女の間がらを糞と蜜との混合物と看做して居るに過ぎないのだ。繪畫の方では色に重きを置くことが新に始まると一しよに、標準的人物の美人や英雄などを種子にすることが廢れて、貧乏人、労働者を寫すことになつた。そのうちにクウルベエ、ミレエあたりから次第に目立つて來た傾向から、外光主義が生れた、晝面はたゞ流動する日の光ばかりだ。その作には意味だの、趣意だのといふものがあつてはならぬ。人物の並んで居るのも、果ものがころがつて居るのも同じことだ。さてかやうな風潮がいつまでも人に満足を與へる譯に行かぬのは、始から分つて居る。文

學の方では、スカンヂナキヤの偏屈者イブセンと佛蘭西の野暮人ゾラとの全盛時代はいつか過ぎ去つた。外の形をありの儘に寫す手段から、内の心を同じやうに寫さうとして、しばらくは心理的分析に熱衷して居た。それから進んで今獨逸の劇場を占領して居るハウプトマンの一派がいかにも卑い人物にも、動物的でない眞人間の情があるといふことを戯曲の上に見せ始めれば、ステファン、ゲオルグの派は俚俗を避けて觀面の情を明白な言葉に歌ふ一種の抒情詩を起した。繪畫の方では、エツワアル、マネエが一派の全盛時代がやはり下り坂になつた。クレエン、ビヨックリンの外すべて一種の抒情的な興を寓した變體が際立つて重んぜられ始めた。扱この第十九世紀の新しい産物たる藝術は我國にどういふ影響を與へたか。此間にもとより明治このかたの藝術に對して發するのだ。文學の方を見れば、僅に二人の二葉亭が自然派の一面たる心理的分析の作を出した事がある外には、擧げていふ程、此影響を受けて居ぬ。紅葉が自然派の他の一面として、外の形を平に叙する法に傾いて居るといふことは、其の作のすべてに通じていはれるといふ譯ではなく、逍遙はむしろ第十六から第十七世紀に跨つた、シエクスピイヤ盛時の文學に眼を注いで居て、露伴の熱した作は、ギョオテが彼ヲルテエル、ルウソオと違つて、その生活して居た第十八世紀に縛せられて居ぬといふ評に似た特別な色を見せて來るやうだ。繪畫の方では、日本畫に西洋趣味を入れるの入れたのといふ人もあるが、今の過去の分だけ取り上げて言つて見るに、勿論此世紀の特産物の事ではない。これに反して今うつくり這入つて來た外光派は英吉利の「ブレラフェリット」派から得るところが有つたと同じく、幾分か日本畫からも或る物を取つて居る。さて世界の舞臺でいふ第十九世紀の文學美術には、今の始に遡つて見ると、抹殺し難いあまたの病弊があるとしても、今の間には又多少の不朽の

價のある製作品がある。うこで吾人の美に對する心理上の働きには、一面に製作があれば、一面に感納があるから、此製作品に對する感納は奈何と問ふ必要が生ずる。これが審美學上の問題になる。固より審美學には製作の側も入つて居るが、作者はその天分次第で勝手に何でも作る習になつて居るから、さほど審美學の檢束を受けはせぬ。これに反して感納性の働きの藝術的批評は、古來審美學を以て今の根據として居る。扱西洋に有り合せのシエルリング等の抽象理想的審美學から、フエヒネルが折衷的審美學に至るまで、いづれも第十八世紀頃までの製作品を評するには充分の根據とするに足るものであるが、これを第十九世紀の製作品に應用して見ると、到底不十分だといふ事が掩はれぬ事實になつた。イブセン、ストリングベルク、ズウデルマン、ハウプトマン等の戯曲に心を崇うし情を清めるといふばかりの標準を持つて行く譯にも行かず、フオンテエンプロオ、エチンボロオの繪畫に美の線はかうなくてはならぬといふ定規を當てて見る譯にも行かぬ。西洋に原理に騎るといふ諺がある。文學美術の批評の上でも、何か一つの原理を据ゑて置いて、これに合はぬものは一切排斥することゝなれば、これが原理に騎つて跳ね廻るのだ。今はかの古い審美學の原理に騎り廻つて、排斥せられぬ新藝術を排斥するやうな詰らぬ事は、誰もせぬ。古い審美學の狭くて用に立たぬものになつたことは分明だ。それだから現にゾラなどの初の頃の議論は、この隙間に突込んで、きつぱり審美學は不用だと斷ずるまでになつた。この審美學不用論のやゝ精細に尤らしくなつて居る一派は佛蘭西ではテエンの藝術哲學、璉馬ではフランデスの十九世紀文學を始として、獨逸人キルヘルム、シエレルの詩學のやうに、審美學を敘述的學問とすることを勉めて居る。此叙述派の一人たる澳大利のバアルは、審美的博物學の外には、審美學は無いと云つた。此

流義を極端に推して行けば、勢一種の平等見に墜ちざることを得ぬ。人は人で、蟲は蟲で、牡丹の花は牡丹の花で、微の花は微の花なるが如く、甲の詩人は甲の詩人、乙の詩人は乙の詩人、唯々その一人々に就いての研究は出来るが、それが好いと悪いとは言はれぬ。彼のブランドスが種の製作者を評した模様は實際此の如き方法であつた。この頃或人はこれを護謄人形主義と稱したのも無理ではない。己は何もフェヒネルのとほけた流義に倣つて、高等女學校の生徒を集めて、その常識をたよりにホルバインの聖母の像を鑒定せしめやうとはせぬが、試に普通の人情にも訴へて見るが好い。一冊の小説を読む人も、一幅の圖畫を観る人も、これに對して好いか悪いかいふ判断を下すのは、己むことを得ぬ。判断を下すには標準がある。標準を立てれば最早少くも一種の藝術観が生ずる。その藝術観はかやうな物が好いと感納の側からいふと共に、かやうな物を作つて貰ひたいと製作の側へも注文をするやうになる。さて斯う成り立つた藝術観といふものに、自然の景色などの美、自然美に對する自然觀をも加へて、學問的に組み立てる段になると、即ち標準的審美學になる。たとひ今までの標準的審美學が用に堪へぬやうになつたといつても、すぐはこれに懲りて、もう審美學はいらぬと斷ずるのは、固より太早計である。又審美學のわづからにして標準的なるべきを忘れて、これを敘述的にして仕舞はうといふのも、矢張り無理な考に相違ない。己は人の解剖と蟲の解剖と博物學上にそれ／＼の興味があることを一面に認めるけれど、近松が戯曲の性格論と假名垣魯文の小説の性格論とにそれ／＼の價値があらうとは一面に認め得ぬ。己は牡丹の花の構造と微の花の構造と博物學上にそれ／＼の見どころがあることを一面に認めるけれど、團十郎の藝と福圓の藝とにそれ／＼の妙趣があらうとは一面に認め得ぬ。倫理學は人間といふものは、

こんな事をすると叙述する計でなく、人間の所行はかうあれかしと教へる。倫理學は人間といふものは、こんな風に考へて居ると叙述する計でなく、人間の考はかくなうてはならぬと教へる。己は審美學に限つて、こんな詩がある、こんな書があると言つたのみで済む筈がないと信ずる。己は倫理學の善惡を分つ如く、論理學の正否を分つ如く、審美學はこの側からの好いか悪いかを分たねばならぬ、美か醜かを辨せねばならぬと信ずる。その上にわれこり敘述派の批評家をれと名告つて居る人の著述にも、知らず識らずの間に評價の語が下してある、好も悪も分けてある。彼等は天晴標準的學問の圈内を脱した積で、依然其中に居る。彼等は皮の外へは出で得ぬのだ。原來昔の標準的審美學の嫌はれたのは何故であるか。例のシエルリングや、又具象理想の側ではあつてもヘエゲルなどのやうに、漫然と形而上學の中から演繹して來た美の標準で、杓子定規の論を立てたからではないか。然るに此等の系統に基いた批評をする時代は既に過ぎ去つた。キョストリン、フイツシエルは勿論、縦令釘鉋の弊はあるにしてもフェヒネルあたりからは、藝術界の新現象に對する歸納的解釋を求める方鍼、心理上に製作感納の兩境を究める方鍼はしつかり立つて居て、標準的審美學進歩の大道はひろ／＼と向に見えて居る。譬へば製作の側に於いて、空想とは何んなものか、神來とは何んなものかといふ問題、感納の側に於いて、悲壯は何だとか、滑稽は何だとかいふ問題の類の如きは、全く審美學の形而上門を離れても成り立ち得る。己は嘗て我國の藝術的批評に手を下した時、此種の審美問題の最完備して居るハルトマンの審美學を選んで根據とした。或人はこれを見て苟くもハルトマンの審美學を以て根據とする以上は、その哲學全系統をも信ぜねばならぬと云つた。然し己はハルトマンの無意識の研究に充分の重みのあることを認めるとはいひな

ら、其全系統を城廓にしてうに安坐する積でもなければ、又其審美學の形而上門を悉く取り出して切實にする積でもない。斯ういふと飄輕な人が出て来て、然らばなせ古今の哲學をお究になつて、活殺の手段を擅になされて、御自分の哲學系統をお立になつて、それから審美學を成就せられては何如などといふかも知れぬ。シヨオペンハウエルの言に、哲學で家を成した人は、網を張つた蜘蛛の様なものだといふことがある。その網は即ち哲學系統で、その網の主人たる蜘蛛が、外の蜘蛛に近づくには、争闘の目的より外に目的はない。ハルトマンの網として居る無意識哲學は、一時或人が第九世紀は鐵道とハルトマンを生んだといつた程盛に行はれた。併しハルトマンの流行はその無意識論に止まつて居て、その審美學は餘り世間の注意を惹いたものではない。その審美學は本人の雜著の外には、これを實地の藝術的批評に應用して見たものも殆無。今はハルトマンの流行の一面は既に過去に屬して、その次にはやつたニイチエの人間以上の人間主義さへうろ／＼下火になつて居る。勿論それは流行の一面であつて不易の反面から見れば、ハルトマンと頷頷する程の蜘蛛はかのフエヒルの流を酌んで近年新系統を公にしたウンドの外には差當り有るまい。これ等に比べて見ると、ニイチエなどの立言は殆哲學とはいはれぬ位であらう。それであるからハルトマンの審美學は、特にその形而上門の偉觀をなすのみでなく、その單一問題に至つても目下最も完備して居るのだ。それだから此審美學からは、第十九世紀の文學美術を見ても、自然派の中の存活の價のある側は、その頗る進歩した具象理想主義で包容して居る。進んで新理想派の製作はどうかといふに、たとひ技巧上に昔の所謂理想派に殊なるところがあつても、自然派の遺物と見られる分子が残つて居るところがあつても、固よりこれを包容して餘あるのだ。こゝに出て一つ網を張るには、シヨオ

ペンハウエルとロツチエとの血脈を引いて居る形而上派のハルトマンなどをば土臺から動かさし、生理學者から化けた經驗派のウンドなどをば藥籠中の物にして、新しい哲學が成り立つやうにせねばなるまい。併しそのやうな仕事は、脳髓の器械が別詭に出來て居て、生涯をうれに委ねる人物に任せ置いて好い事であらう。況や審美上の單一問題はその形而上門を離れて成り立ち得るものであるから、己の書く藝術的批評などには、形而上派と經驗派との争はさほど密接に關聯して居らぬのだ。さて己が批評の根據としてハルトマンの標準的審美學を取つてから、審美學といふ一科學の我國に於ける價値と、ハルトマンといふ一學者の我國に於ける勢力とに多少の影響を及ぼしたことは、反對者でも認めぬ譯には行かぬ。文部省が非形而上學派といふよりは、寧ろ非學問派なるエロンの美學を中江篤介氏に譯させて印行したのは、明治十六年であつた。これは我國の文學美術には、殆何の影響をも及ぼさなかつた。大學はじめ處々の學校で、或は審美學の講義に今までのない重みを置くやうになり、或は始めて審美學の講座を置くことになり、今では専門の審美學者といふ人々さへ出て來たのは、少くもその動因の一つとして己が明治二十二年から二十七年まで、二三の同志の友達と一しよに出した棚草紙の中の、極めて稱い論文に促されたものだといつても過言ではあるまい。これと同時に、或は直接に或は間接に、ハルトマンの哲學に目を注ぐ人が出て來て、今まで我國では殆全く經驗派に押し潰されて居た形而上派の哲學さへ、こゝかして講究せられるやうになつた。そこで審美學の専門家のある、ハルトマンなどをば高閣に束ねても好いと威張る人のある今の世になつても、まだ審美學といへば己の名が出る。己の名が出れば、すぐにハルトマンの名が相伴つて來る。僕をハルトマン一點張の批評家として冷かすと共に、人を射るには先づ馬を射るとかいふ

譯で、ハルトマンに對する攻撃さへ始つた。己も迷惑だが、ハルトマンの迷惑も亦想ひ遣られる。己は果してハルトマン一點張であらうか。ハルトマンの審美學に騎りまはつて、馬を射られると落ちるであらうか。事實は立派にこれに對する反證を擧げて居る。己の文學美術上の批評は略々柵草紙時代を限つて、二三うれより前のものとうれより後のものとのを加へて、こゝに月草の一卷をなした。この中に集めてある文章は、目次で見られるとほり、種々の機會に遭遇して作つたものであるが、又うの諸篇を一貫する標準的審美學の脈絡の存じて居ることは、索引で見られるとほりだ。卷の過半は批評の批評ともいふべき性質のものであつて、すべての議論めいた部分、それから短評、解嘲に至るまで、此範圍内に在る。これに書評と劇評とが添へてあるが、書の方は猿崖子（原田直二郎君）の技巧上の鑒識に負ふ所のものが多い。また劇の方は全く三木竹二（弟篤次郎）の筆に成つて居る。文學的製作品の評の少いのは、當時己が此區域に手を出す意がなかつたため、所謂近刊雜評の數篇は或は著者の委頼に依り、或は新聞雜誌社の請求に應じたに過ぎぬ。要するに此等の諸篇に著してある難駁は、皆嚴重に論理的に筆を下したもので、ハルトマンの説はうの引證の主要なる部分を占めて居るに過ぎぬ。己は某の事はハルトマンの所見に合はぬから悪いといつたことは決してない。うれだから他人がこれを反駁するには、縦令ハルトマンの説が引いてあつても、何の妨にもならぬ筈だ。但し或る時はわざと身をハルトマンが地位に置いて立言したこともあるが、（鳥有先生の論）それとてもハルトマンの或る所見を信仰箇條らしく提起した譯では無い。うの上ハルトマンの前後の審美家の説で、ハルトマンの筆に上らぬものも、又審美家でない藝術史家、藝術批評家の説も、及ぶ限り顧慮してある。うれだから己は自分の書いたものを、悉くハルトマンから出た

やうに評して居るのを見るたびに、うの人のハルトマンを讀んだか讀まぬかを疑はずに居られぬ。さて今から後の審美學の進歩は、どの方面から來るかといふに、要するに藝術史上の事實が積つて來て、學問上の解釋を促すのであらう。即ち經驗の方面であらう。若し第十九世紀の自然主義に根ざした藝術を包容するために、昔の抽象理想的審美學が不足になつたやうに、後の藝術を包容するために今の具象理想的審美學が不足になることがあつたら、己は喜んで今の藝術觀をうの方角に擴めもし、又ずつと土臺から變へもする積だ。己はこの意味で、前途の進歩を望んで居る。これが叙だ。明治二十九年十一月千駄木の觀潮樓で

關外漁史が書く。

目次

柵草紙の山房論文

逍遙子の諸評語	一
早稲田文學の沒理想	一七
早稲田文學の沒却理想	二六
逍遙子と烏有先生と	三四
早稲田文學の後沒理想	六二
エミル、ゾラが沒理想	九五
外山正一氏の畫論を駁す	九八
美術論場の争闘は未だ其勝敗を決せざる乎 (綠外生)	一三七
外山正一氏の畫論を再評して諸家の駁説に旁及す	一四一
林忠正氏の演説	一五九
矢野文雄氏と九鬼隆一氏との美術論	一六一
讀日本新聞西洋技術家論	一六七
朗月齋主人に與ふる書	一七〇
繪畫偶評	
其一、觀馬臺の展畫會	一七五

其二、又饒舌(篠屋子).....	一七九
其三、又又饒舌.....	一八一
其四、油畫輝裂.....	二〇〇
其五、上野公園の油畫彫刻會.....	二〇一
其六、彌生館の油畫彫刻會.....	二一四
我國洋畫の流派に就きて.....	二二四
再び洋畫の流派に就きて.....	二二六
「パンoram」の事に就きて某に與ふる書.....	二三〇
原田直二郎に與ふる書.....	二三三
與某等論型品書.....	二三七
告彫造家檄.....	二四〇
競技規程.....	二四一
言文論.....	二四二
學堂居士の文話.....	二五一
木堂學人の文のはなし.....	二五三
れなし人の文の死活.....	二五五
朗讀法につきての爭.....	二五六
逍遙子の朗讀說.....	二六五

美妙齋主人が韻文論.....	二七一
平仄に就きて.....	二七八
再び平仄に就きて.....	二八八
三たび平仄に就きて.....	二八九
路功處士といふ奇異なる外形論者.....	二九〇
熊谷直好と八田知紀と.....	二九二
文海の藻屑.....	二九五
今の諸家の小説論を讀みて.....	二九八
今の批評家の詩眼.....	三〇九
自評に就いての異議.....	三三一
公衆とは何物.....	三四七
匿名.....	三六一
正太夫一たび漣を難ず.....	三六四
正太夫再び漣を難ず.....	三六四
正太夫三たび漣を難ず.....	三六六
差出口.....	三六七
柵山人が自評說.....	三六八
與芝廼園論粹書.....	三六八
目次.....	三七〇

山房放語……………三八六

長し長し……………三八七

理を履む人……………三八七

重譯……………三八七

朝顔……………三八七

禽蟲八句……………三八八

見聲聞色……………三八九

星隕爲石……………三九〇

ねくりもの……………三九〇

是怪非怪……………三九〇

嚼蠟充飯……………三九〇

誇人特色……………三九〇

在無爲對……………三九〇

青葡萄の如き眼……………三九一

鱸をやく臭……………三九一

正當順序……………三九一

身の上の防禦……………三九一

かゝるためし……………三九一

月と鴈と……………三九二

惡血と枵腹と……………三九二

蛙の面に水……………三九二

學者臭……………三九二

書齋と客坐敷と……………三九三

狭か狭にあらざるか……………三九三

中道とは何ぞ……………三九三

毒を制する毒……………三九四

唯これを指せ……………三九四

彼厭長此厭短……………三九四

三然……………三九四

時代と流派と……………三九四

蠶魚の群に入る……………三九五

木乃伊……………三九五

味ふべき言……………三九五

奇遇といふべし……………三九六

魔王の決闘狀……………三九七

防箭一筋……………三九八

宣戰	三九九
蠶魚豈靈ならむや	四〇〇
燕雀何が大いなる	四〇〇
文を賣らむ耶藥を賣らむ耶	四〇〇
これも一斑	四〇一
自稱長者	四〇一
生嚼だにねせず	四〇一
魔王の申譯	四〇二
語格と字義と	四〇三
人間以上	四〇四
神にあらず	四〇四
失聲變色	四〇五
官能的快美	四〇五
雛形	四〇五
鸚鵡主義	四〇五
意氣と野暮と	四〇六
蕙心社用語集	四〇六
今の丁參政	四〇六

魔王が再度の申譯	四〇六
蕙心社用語集のつゞき	四〇七
望天不知生	四〇七
耐忍とは何ぞ	四〇七
山房拊掌談	四〇八
掲帝々々を三下り	四〇八
忘々生の質問	四〇九
忘々生が質問のつゞき	四〇九
白雲以上	四一〇
雜誌材料の無盡藏	四一一
誣妄といへるこそ誣妄なれ	四一一
ふた面	四一二
批評の秘訣	四一二
義捐小説	四一三
正太夫と義捐小説の發起者と	四一三
厄介物	四一四
韻文と句讀と	四一六
詩と韻文と	四一七

正本と裏帳と 四一八

青年文學 四一八

諷刺小説 四一九

言と文と 四一九

批評家無用論 四一九

角を撓めて牛をな殺しう 四二〇

民争へども衡は折られず 四二〇

恩怨と有用無用と 四二一

半瓶の浙瀝も空瓶に優る 四二一

持論豈得易からむや 四二二

朗讀問題 四二二

低級術と羈絆術とを過重すること勿れ 四二四

悲中の快感 四二七

遺傳的習慣 四二八

空論國 四三〇

「ポエトリー」と詩と 四三二

近刊雜評 四三四

報知異聞に題す 四三四

掘出し物を讀みて 四三六

露小袖の評を見て 四三八

小野篁に就きて 四三八

少年文學に題す 四三八

春雨傘の評 四三九

少年學士の序 四四一

こわれ指環の評 四四二

學園花壇の評 四四三

天鼓 四四四

和文消息全書 四四五

作文初問三之選合卷 四四六

美術世界題言 四四七

烈眞具に題す 四四八

菩提樹畔逍遙の評 四四八

星亨氏の獨逸帝國の未來 四四九

報知記者の人種相忌の説 四五一

想起録 四五一

讀醜論 四五五

醜美の差別 四六二

新聞雜誌

東漸雜誌に就きて巖々生に言ふ 四六九

讀賣新聞の解停を祝す 四六九

國民新聞發刊の祝詞に代へて 四七一

肖像に添へて國民新聞社に寄する書 四七一

徳富蘇峰氏に答ふる書 四七四

解停の日に國民新聞社に寄す 四七六

忍月居士の江湖新聞社に入るを祝して 四七六

自由新聞の歌人に問ふ 四七七

柵草紙の本領を論ず 四七八

柵草紙と劇と 四八一

答無名氏論柵草紙書 四八二

解嘲

空像記に就きて(澤水烏) 四九一

答忍月論幽玄書 四九三

忍月が再び我に答ふる書を見て 五〇四

舞姫に就きて氣取半之丞に與ふる書(相澤謙吉) 五〇八

再び氣取半之丞に與ふる書(同) 五一五

文使に就きて忍月居士に與ふる書 五二五

再び忍月居士に與ふる書 五二六

三たび忍月居士に與ふる書 五二八

四たび忍月居士に與ふる書 五三〇

埋木に就きて 五三一

戯曲の翻譯法を説いて或る批評家に示す 五三一

俤に就きて 五三九

麻布閑人に答ふる文 五四〇

鑿轍錄 五四二

思軒居士が耳の芝居目の芝居 五四六

演劇改良論者の偏見に驚く 五六四

再び劇を論じて世の評家に答ふ 五六九

演劇場裡の詩人 五九〇

答俳優某論自憑書 六〇九

歐洲の劇場(ささのや筆記) 六一三

西洋芝居の番附 六一七

答某論劇評故實書 六二〇

劇品劇評

答評劇者某論夢幻劇書 六二二

演藝協會の事につきて忍月居士に告ぐ 六二八

演藝協會の事につきて再び忍月居士に告ぐ 六三〇

はなむけ 六三三

癸巳の歳旦歌舞伎新報社主に與ふる書 六三三

讀罪過論 六三四

文學上の創造權 六四二

並木五瓶の事を記す(以下三木竹二稿) 六四三

梅玉の書簡及逸事 六五〇

中村霞仙の事を記す 六五六

觀劇偶評 六六一

仇名艸由縁八房 六六二

長崎新聞日待夜語 六六六

繪本太功記十段目 六六七

夏雨濡練込 六六八

明治二十二年の戯曲 六六八

富山城雪解清水 六七五

神明恵和合取組 六七八

相馬平氏二代譚 六八七

御談雁金染 七〇〇

道成寺 七〇〇

ひとつ家 七〇一

上野の戦争 七一〇

勸進帳 七一〇

伊達摸様春着襦 七一一

妹春山婦女庭訓 七一一

與話情浮名横櫛 七一一

市川余八様にまゐらす 七二〇

武勇譽出世景清 七二五

千本櫻、一谷嫩軍記、太功記十段目(再世) 七五七

鹽原多助一代記 七五九

箱根山曾我初夢 七六四

梯子乗出初時業 七七二

東下向天明日記 七七四

生寫實處女油畫 七七七

伊勢三郎	七八〇
大江山土蜘蛛奇談、浮名種蔭天網島	七八九
天一坊大岡政談	七九〇
一谷嫩軍記熊谷陣屋(再出)	七九〇
寬濶出立廓鞘當	七九四
求馬塚身替新田	七九六
女楠	七九七
鴉舞、鶯娘	七九七
毛剃九右衛門	七九九
北國奇談譽仇討	七九九
川中島配膳	八〇一
橋供養梵字文覺	八〇一
姫山姥	八〇一
摘絞鮮血染野晒(再出、長崎新聞日待夜語)	八〇三
一谷嫩軍記(三出)	八〇三
隅田川續傳	八〇三
八犬傳、(自神宮川至圓塚山)大藏卿、扇谷熊谷	八〇七
鎮西八郎英傑譚、蜘蛛拍子舞	八一三

新薄雪物語	八一六
三日太平記	八一六
本朝醉菩提	八一六
戀女房染分手綱	八二一
太鼓音智勇三略	八二二
加茂空屋運動競	八二六
名末世千代田松	八二七
賤機帶斑女物狂	八二八
夏祭浪花鑑	八二八
怪談牡丹燈籠	八三二
菊慈童	八三五
本朝廿四孝	八五五
是吾妻浮名讀賣	八五五
八幡祭禮宵宮賑	八五五
今文覺助命刺繡	八五九
伊勢音頭戀寐及	八六〇
仕立卸薩摩上布	八六五
與話情浮名橫櫛(再出)	八六六

關原譽凱歌	八七六
皿屋敷化粧姿見	八八五
太鼓音智勇三略(再出)	八八六
四季眺千種色彩	八八八
阿波鳴門	八八九
英雄後藤義心傳	八八九
通俗西遊記	八九〇
賤嶽真書太閤記	八九二
松名高紅葉京橋	八九二
忠臣藏三段目	八九四
蜂の巢	八九五
鹽山邸	八九五
士農工商	八九六
四組重葺繪定紋	八九六
隅田川乗切講談	八九八
犬莊士尊樓	八九八
雙蝶々曲輪日記	八九九
相馬太郎孝軍談	九〇三

義經腰越狀	九〇六
彫刻左小刀	九〇八
安政三組蓋	九〇九
奴風廓春風	九〇九
楠公遺訓軍歌譽	九一九
優風流景清外傳	九二〇
雪月花眺賜	九二一
難波戰記和睦盟	九二三
戀女房染分手綱(再出)	九二四
誰根岸成就掛額	九二四
拜賀卷、鏡獅子、黒手組、忍岡戀曲者	九二八
山開目黒新富士と壇浦兜軍記と	九三八
忠臣血染御朱印	九四二
中將姫	九四四
籠釣瓶花街酔醒と太功記驚の森岩の場と	九四五
十二時會稽曾我	九四七
勘進帳(再出)	九四七
梅雨小袖黄八丈	九四八

時代物陳列舞臺、愛宕連歌誓文臺、新七つ面……………九六二
 明治二十七年初芝居の豫評……………九六九
 嗚呼忠臣楠柯夢……………九七二
 瀧夜叉……………九七三
 夢結蝶鳥追……………九七五
 本朝廿四孝(再出)……………九七六
 明烏春泡雪……………九七六
 伊賀越道中雙六、一谷嫩軍記、(四出)三千兩駿河土産、女鳴神……………九八五
 新門辰己小金井……………九八九
 實錄先代萩……………九九二
 鈴音真似操……………九九二
 霜夜鐘十字辻笠……………九九三
 源平布引瀧……………九九三



月 草

柵草紙の山房論文

森 鷗 外 著



我に問ふ、何故に久しく文を論ぜざるかと。我は反問せむとす、何故に久しく論ずべき文を出さざるかと。我が文學上の評論をなさんといひし誓は、今やいたづら事になりなむとす。其答果して誰が上にか歸すべき。

露伴子はりの著當世外道の面に於いて、柔弱者の口を藉りて我に戯れていはく。鷗外は技術論者にして、唯學校教師たるに適すと。是言善く我病に中れり。然れども今の世のありさまは、文を論ずる人に理を説かしむるを奈何せむ。こはわれ一人の上にはあらじ。

近刊の新聞雜誌中、論ずべき文少からざるべし。我眼豆の如く、葡萄の如くにして未だこれを發見せず。幸に今人が文を論じたる文數篇を獲たれば、一日千朶山房に兀坐して、聊又これを論ず。(明治二十四年九月より十二月に至る)

逍遙子の諸評語

小説三張(小半漫言七一画より)及梓神子(春道金漫筆一五一画より)

さきにわれ忍月、不知庵、謫天の三人を目して新文界の批評家とせしことあり。當時は實に此三人を除きては、批評を事とする人なかりき。去年より今年(明治二十四年)にかけては、忍月居士の評漸く零言瑣語の姿になりゆき、不知庵の評は漸く感情の境より出で、一種の諦視しがたき理義の

柵草紙の山房論文

道に入りはじめたり。獨り謫天情仙のみ舊に依りて、言ふこと稀なれども、中ること多からむことを求むるに似たり。この間別に注目すべき批評家二人を獲つ。うを誰とかする。逍遙子と露伴子と即是なり。並に是れ自ら詩人たる人にしあれば、いづれも阿堵中の味えも知らざる輩とは、目を同うして論ずべからざる由あらむ。われ固より善詩人は即好判者なりといふものならねど、自ら經營の難きを知るものは、猥に杓子定規うち振りて、柄鑿りの形を殊にして、相容れざるやうなる言をばいかゞ出さむ。二子の文を論ずるや、其趣相距ること遠けれど、約していへば、逍遙子は能くものを容れ、露伴子は能くものを穿つ。左に少しく逍遙子が批評眼を覗かむ。

逍遙子の評能くものを容るとは何の謂ぞ。答へていはく。批評眼も亦哲理眼なり。人ありて哲學の一統を立つるときは、うの時の人智の階級にて、及ばむ限のあらゆる事物は、合して一機關をなし、其理の動くところ、悉く其源に顧應せでは協はじ。批評も亦然なり。能くものを容るゝ批評は、其標準の完美なること想ふに堪へたり。劉海峰のいはく。居高以臨下。不至於爭。爲其不足與我角也。至於才力之均敵。而惟恐其不能相勝。於是紛紜之辨以生。是故知道者。視天下之岐趨異說。皆未嘗出於吾道之外。故其心恢然有餘。夫恢然有餘。而於物無所不包。蓋逍遙子が能くものを容るゝは、うの地位人より高きこと一等なればなるべし。

逍遙子は演繹評を嫌ひて、歸納評を取り、理想標準を抛たむとする人なり。然れども子も亦我を立てゝ人の著作を評する上は、絶て標準なきこと能はじ。われ其小説三派及梓神子をみて、うの取るところの方鍼を認めたり。

逍遙子の小説三派とは何をか謂ふ。其一を固有派又主事派又物語派と名づけ、次を折衷派又性情派又

人情派と名づけ、末なるを人間派と名づく。

固有派は事を主とし、人を客とし、事柄を先にし、人物を後にす。主人公をば必ずしも設けず。たまくこれを設けても、事の脈絡を繋ぐも料にしたるのみ。されば大かたの事變は、主人公の性行より起らしめずして、偶然外より來らしむ。是に於て人物は客觀なり。此派の作者は俗にいへる三世因果の説を理想とし、若くは天命の説を理想とするなり。我曲亭、種彦などに此流義ありて、外國にては、中古の物語類はいふも更なり、スモオレット、フイ、ルヂングなど此派に屬し、スコット、ヂッケンズといへども間々これに近し。此派は人に配すれば支體の如く、畫に配すれば文人畫の梅の如く、學問に配すれば常識の如し。

折衷派は人を主とし、事を客とし、事を先にし、人を後にす。人を主とすとは、人の性情を活寫するを主とする謂にて、事を先にするは、事によりて性情を寫さむとすればなり。此派にては人物は主觀なり。但し事と人との間には、主客後先あるのみなれば、人物必ず主觀なるにはあらず。サツカレエなど此派に屬したり。スコット、ヂッケンズ等は固有派と此派との間に跨りたり。物に譬くといへば、人に配して五感の如く、畫に配して一枝の梅の密畫の如く、學問に配して理學の如し。

人間派は人を因とし、事を縁とす。うの因とするところは人の性情にして、うの縁とするところは事變なり。此派の小説にては、先づ人を因とし、事を縁として一果を寫し、此果若くは他の事變をも合せて縁として更に一果を寫し、其果若くは他の新事件をも合せて縁として更にまた一果を寫し、終に大詰の大破裂若くは大圓滿に至りて休む。ギョオテ、シエクスピイアの如し。近世の魯獨などに此派多し。物に譬へていはむに、人に於ては魂の如く、畫に於ては油畫の梅の如く、學問に於て

は哲學の如し。

以上は逍遙子が小説三派の差別なり。あはれ此けぢめをばいしくも立てつるものかな。今の文界に出で、小説の派を分たむとせしもの多しといへども、何人か能く右に出でむ。われ嘗てゴツトシヤルが詩學に據り、理想實際の二派を分ちて、時の人の批評法を論ぜしことありしが、今はひと昔になりぬ。程經て心をハルトマンが哲學に傾け、其審美の卷に至りて、得るところあるものゝ如し。その頃料らずも外山正一氏の書論を讀みて、我懐けるところに衝突せるを覺じ、遂に技癢に禁へずして反駁の文を草しつ。かゝればわれはハルトマンが審美の標準を以て、書をあげつろひしことあれども、嘗て小説に及ばざりき。今やりを果すべき時は來ぬ。いで逍遙子が批評眼を覗くに、ハルトマンが鑿鑿をもてせばや。

夫れ固有と云ひ、折衷と云ひ、人間と云ふ、この義は皆ハルトマンが審美學の中に存せり。今多くその文を引かむもやうなし。唯爰にハルトマンが哲學上の用語例によりて、右の三目を譯せば足りなむ。固有は類想なり、折衷は個想なり、人間は小天地想なり。

逍遙子のいはく。固有派にては、甲人に於ける天命も、乙人に於ける天命も、汎然漠然として一なるが如く、平等の理はあれども、差別の實なし。死したる概念はあれども活きたる概念はなく、「ゼネラリチイ」はあれども、「インヂヂユアリチイ」はなし。所謂固有派の死したる概念を具ふるところ、「ゼネラリチイ」を存するところ、これをこりハルトマンは類括の意を取りて類想と名づけたるなれ。折衷派にいたりては、逍遙子活きたる觀念ありといひ、「インヂヂユアリチイ」ありといふ。是れハルトマンが個々の活物の意を取りて個想と名づけたるものにあらずしてなにぞや。所謂

人間派に至りては、人事の間に因果現然として、個人を寫すは是れ個人のために寫すならず、寫すところは捕來たる個人の不朽の象なり。この象や露伴子の所謂靈臺の眞火、宇宙の命根の聖火と相觸着して、以て一條の大火柱を成せるところに生ず。(美術世界の題言)ハルトマンが個物の能く一天地をなして、大千世界と相呼應するところより、小天地想と名づけしは是なり。

然はあれど固有、折衷、人間の三目は逍遙子立てる派となしつ。類想、個想、小天地想の三目は、ハルトマン分ちて美の階級としつ。二家はわれをして殆岐に泣かじめむとす。

ハルトマンが類想、個想、小天地想の三目を分ちて、美の階級とせし所以は、其審美學の根本に根ざしありてなり。彼は抽象的理想派の審美學を排して、結象的理想派の審美學を興さむとす。彼が眼にては、唯官能上に快きばかりなる無意識形美より、美術の奧義、幽玄の境界なる小天地想までは、抽象的より、結象的に向ひて進む街道にて、類想と個想(小天地想)とは、彼幽玄の都に近き一里塚の名に過ぎず。

ハルトマンのいはく。類想の鑄型めきて含めるところ少く、久く趣味上の興を繋ぐに堪へざること、眞の美の僅に個想の境に生ずることをば、今や趣味識の經驗事實なりといひても、殆反對者に逢はざるべし。類想の模型には盡くる期あり。後れて出づる美術家は様に依りて胡盧を畫くことを免れず。(審美學下卷一八七面)ハルトマンは類想を卑みて個想を貴みたり。

ハルトマンのいはく。個物には階級あり。高下一様ならず。その最低きものと最高きものとは、人の觀念の及ばざるところなれば、個物を見るごとに、これより高きものなきことなく、又これより低きものなきことなし。個物は高しといへども類にあらず。個物は眞實せるものにて、類は抽象し

たるものなり。最高最下の間なる個物は、これより下れる個物を包みて肢節とすること、大天地の世にありとあらゆる個物を包みて肢節とする如くなり。彼は梯を隔て、大天地を望めり。されば個想は絶対対象の想にあらざるゆゑに分想なれども、又小天地の完想として見らるべし。(同上九五面) ハルトマンは眞の個想を、おのづから小天地想たるべきものと看做したり。蓋人事の間に後先ありて因果なきは、因果なきにあらず、因果のいまだ充分にあらはれざるものにて、小天地想ならざる個想は、即是れいまだ至らざる個想ならむのみ。

逍遙子とても、固有、折衷、人間の三目を立て、流派とせしは、あながち尊卑を其間に置かざりしにはあらざるべし。折衷派だに稀なる今の我小説界にて、人間派を求めむは、文學に忠誠なる判者の事にあらざるとやうに、時の務をねもひて、迂濶なる批評家をねどろかさむとしたる蹟、歴々として見ゆるならずや。

されば逍遙子が類想、個想、小天地想といふ美の三級を藉りもて来て、今の文界の衆生のために、盛に小乗を説きしは、ねそらくは是れ作者あはれとねもひてならむ、批評家憎しとねもひてならむのみ。逍遙子は類想の固有派、個想の折衷派、小天地想の人間派の別を立て、さて獅子吼をなしていはく。此別を非なりとする人あらむ乎。其人は事物の平等を見て、差別を見ざる人なり。世に絶對あるを知りて、相對あるを知らざる人なり。一あるを知りて、萬億あるを知らざる人なり。國家あるを知りて、われあるを知らざる人なり。我あるを知らざるは死せるなり、死灰なり。現に類想、個想、小天地想の別だに知らず、批評の業に従ふ輩は、かく叱咤せられも可なるべし。然れども彼三派に優劣なしと見よといはをいかに。

逍遙子は類想派は常識の如く、個想派は理學の如く、小天地想派は哲學の如くなりといへど、若譬を進めて、哲學は科學の親なるゆゑに、小天地想派は常に個想派に優れり、常識は科學の材たるに過ぎねば、類想派は最下なりといはゞ、大なる僥事ならむといへり。われれもふに恐らくは然らず。哲學は科學の親なる如く、個想に小天地の義あり。ダルキン、ハックスレーが説、謬妄哲理に優りたるはダルキン、ハックスレーが説の中に世界の眞理あればなり。謬妄哲理の彼等が歸納説に及ばざるは、りの謬妄なるために、苟くも近世の哲學統といはれむ程のものは、ダルキン、ハックスレーが説をも容れざるべからず。(ハルトマンが「ダルキニスムス」の論を見よ) 類想の身きは模型に盡くる期ありといひしハルトマンが言を見ても知るべからむ。逍遙子は想に縁りて派を立て、これを梅櫻の色殊なるに比べ、類想派の作家に向ひて、個想派の作を求めむは、ふりたる梅園に向ひて其花の櫻ならざるを笑ふ如しといひ、今の批評家を鳥許の風流雄なりといへり。夫れ逍遙子が一味の雨は、もろくの草木を沾すに足りなむ。然れども類想と個想との別はねうらくは梅と櫻との別に殊なるべし。花に譬へていはゞ、類想家の作も個想家の作も、ねなむ櫻なるべけれど、かなたは日蔭に咲きて、色香少く、こなたは「インスピラチオン」の朝日をうけて、匂ひ常ならぬ花の如しとやいふべからむ。日蔭に生ふる櫻に向ひて、色香深き花を求めむは無理ならむ。りの花の色香少きを評せむは、必ずしも無理ならむ。逍遙子は嵐に似たる批評家の花に慈ならざるを怪めども、われは逍遙子が花に慈なるに過ぎて、風を憎むことの太甚きを怪めり。若批評の上に絶て褒貶をかりせば、我文界はいとど荒野とやなりなむ。

逍遙子は我文界に小天地想の人間派なきを認めき。(我國はいまだギョオテ、シエクスピイヤを出さ

ず) 逍遙子は我舊作家を以て類想の固有派に屬せりとなし、我新作家を以て未だ至らざる個想の折衷派となしつ。われは此評の殻を嚙碎きて、其肉の甘さと其核の苦さを味ふ。人間派なきは大詩人なきなり、妙手なきなり。舊作家の固有派に屬するは、其凡手なるためなり。新作家の折衷派に屬するは、其小家數たることを免れざるためなり。かの不知庵のあるじが如く、今の我國の小説家は、等級ありといへば、言はずして流派を立てつるは逍遙子なり。具眼の人誰かこの肉中の核を認めざらむ。

或ひそのいはく。逍遙子はげに今の我文界に人間派なきを認めき。されど其言にいはずや。嘗て「ミッドル、マアチ」を見しに、ジョルジ、エリオット女史が作に人間派の旨に愜へるところあり。其外にもれなき派を汲む人ありや知らねど、英國にての人間派詩人はこれのみならむも計り難かり。夫の近世の魯獨にこそ人間派の小説家も多しとは聞きつれ。うもいと近きほどの事なり。又佛蘭西なる諸作家バルザック、ユウゴオ、ゾラ、ドオデエの徒は、或は人情派の界を超えて、人間派に入れりともいふべからむが、これとてもまた近世の作家なり。詮ずるところ人間主義の小説界に入りしは、十九世紀に於ける特相といふも誣言にあらず。尙いと稱きほどの顯象なり云々。是れ人間派は新きものにて、漢學者若くは御國まなびせし人の小説家になりたるに向ひて、人間派に入れといはむことの理なきを明にしたるにあらずや。こはまことに其故ある事なり。然れども逍遙子は別に世相派といふものを立て、これにホオマアを算したるなり。彼の漢學者若くは國學者たる小説家に對して求むべきは、此種叙事詩の大作なるべし。これその推理上能くすべきものなればなり。又東洋に個物主義なしといはむか、これは屢聞にし説なり。ヨハンネス、シエルいはく。東洋戯曲の最偉なるは印

度詞曲なれど、印度詞曲の雄は、遂に此詩體の質を知らざりき。蓋戯曲の質は、個人がみつから自在にものを定むる性より生ず。惜むらくは東洋の靈魂は、かゝる個物主義を得るに至りしこと、絶てなかりき。(世界文學史一の卷一七面)是れ東洋に個想なかりきといふ説の一例なり。吾邦の詩人には果して眞に個想なかりしか。ギョオテ、シエクスピヤが詩に見わたる如き個想なかりしか。若無くば、小天地想を美の極意とする立脚點より見て、吾邦古來大詩人なしといはむのみ。世の批評家に大和魂ありて、古來なかりし大詩人を今の文界に求めむとせば、われ唯これを壯なりといはむ。

小説三派の外、逍遙子は別に詩の二派を立てたり。其一を叙情派又理想派といひ、其二を世相派又造化派といふ。

叙情派は理想を宗とす。理想とは心の世界なり、虚の世界なり。此派の詩人は我を尺度として世間を度る。彼は理想の高大圓滿ならむことを望み、自家の極致の其作の中に飛動せむことを期す。其小なるや、一身の哀觀を歌ふに過ぎざれども、其大なるや、作者乾坤を呑みて、能く天命を釋し、一世の豫言者たることを得べし。其さま猶雲に冲る高嶽のごとく、彌高うして彌著し。其さまは又猶萬里の長堤のごとし。遠うして更に遠しといふとも、詮ずるに踏破しがたきにあらず。ダンテ、マアロオ、ミルトン、カアライル、バイロン、ヲオツヲオス、ブラウニング等は家數に大小ありといへども皆叙情詩人なり。

世相派は自然を宗とす。自然とは物の世界なり、實の世界なり。此派の詩人は我を解脱して、世間相を寫す。その望むところは、作者の影空くして、ひとへに世態の著からむことなり。其小なるや、

管見の小世態を寫すに止まれど、其大なるや、能く造化を壺中に縮めて、鎮に不言の救世主たらしむ。其狀猶邊なき蒼海のごとく、彌大にして彌茫々たり。又猶底知らぬ湖のごとし。深くして更に深く、遂に其底を究むべからず。ホオマア、シエクスピイヤ、ギョオテ、スコット、エリオット等は、家數の大小こり相殊なれ、此派の詩人なり。

逍遙子が叙情、世相の二派は、ハルトマンが審美學上、叙情詩、叙事詩の二門に當れり。

ハルトマンのいはく。叙情詩は客觀の相に勝ちたる主觀の情を以てその質とす。その客觀の相を捕來るは、感情の主觀を高うもし、深うもせむとてのみ。(下卷七四五面)是れ豈逍遙子が所謂、我を尺度として世間を度るところにあらずや。

又いはく。叙事詩は客觀相を以て、その偏勝の質とす。その主觀の情は、唯半掩はれてかすかに響きいづるのみ。(同所)是れ豈逍遙子が所謂、我を解脱して世間相を寫すものにあらずや。

ハルトマンは此二門の外に、戯曲門 Dramatik を立て、いはく。叙情詩にては、主觀の情、客觀の相に勝ち、叙事詩にては、客觀の相、主觀の情に勝ちたれども、戯曲に至りては、情と相との平均を取戻さむとす。さればヘゲルが審美學にて、戯曲は叙情、叙事の二門にて偏勝したる兩義を合併したりといへる、固より善し。唯キルヒマンが戯曲の叙情、叙事の二詩門に殊なるは、場の上に於て興行すべきところありといひしも、亦未だ嘗て善からずばあらず、(同所)逍遙子が「ドラマ」はこれに殊なり。固有、折衷、人間の三派を分つときは、人間派を以て、最狭き意義にていふ「ドラマ」の結構とす。これに對する叙事詩は固有派に屬し、折衷派は「ドラマ」と叙事詩との界に立てり。その叙事詩となるは、事を先にすること甚きときにして、その「ドラマ」となるは人を主とすること重

きときなり。又叙情、世相の二派を立つるときは、世相詩人を以て「ドラマチスト」とし、以て叙情詩人の「リリカル、ポエト」に對したり。人間派の旨、若小天地想に在らば、是れ叙情詩、叙事詩、戯曲の三門を通じて求めらるべきものなれば、われこれに配するに「ドラマ」を以てせむを欲せず。彼客觀相をして偏勝せしむる世相詩人の作、即没主觀情詩(梓神子にいはゆる没理想詩)は、もとより相と感と並び至らむことを望める戯曲にあざれば、これを「ドラマ」といはむも亦願はしき事にあらず。

因にいふ。國會文苑に出でし戯曲論中、戯曲の標準の條にて、忍月居士は逍遙子の所謂「ドラマ」をさながらに戯曲のことと看做して反駁を試みつ。こは逍遙子が言に、今の批評家狂言作者に向ひて「ドラマ」を求むるは底事とありしに据りたるなるべし。されど逍遙子が所謂「ドラマ」には、單に戯曲といはむよりは廣き義あり。忍月居士はそれを認めざりしにや。

逍遙子が叙情、世相の二派、ハルトマンが叙情詩、叙事詩の二門に當れることは既にいひき。然れども更に其區別の立てかたをのみかみかみみるに、いまだ其義を悉さざるどころあらむを恐る。われ思ふに所謂叙情と世相との目には、別に普通の意義にて理想、實際の兩語に當れるところあるべし。

ゴットシャルのいはく。造化を摸倣し、實を寫すことより出づるを實際主義といひ、理想の世界、精神の領地より出づるを理想主義といふ。(詩學上卷九九面)是れ逍遙子が所謂自然を宗とする世相派と理想を宗とする叙情派とに通へり。又いはく。實際主義に偏したるものは、心なき造化を宗としたる美術品を得べく、理想主義に偏したるものは、造化なき心を宗としたる美術品を得べし。(同所)是れ逍遙子が所謂管見の小世態を描くものと、一身の哀觀を歌ふものとに近し。

ハルトマンは理想派、實際派の別を認めず。彼は抽象を棄て、結象を取り、類想を卑みて個想を尊めり。嘗て美術の革命を説いてはいはく。革命者實際主義といひ、自然主義といふものを奉ずるは、其假面のみ。自然には個物ありて類なし。この故に美術を以て模倣となすは、固より謬見なれど、其謬見中には自然を模倣せむとするこゝろ抽象したる類型を模倣せむとするに優りたれ。類には實なくして個物には實あり。この故に極致をみだりなりとして、實を美術の材にせむとするものは、これのつから類想を遠離りて個想に近寄らむとす。革命者の勢力は其源、小天地想に在り。うの妄なりとして棄てし極致は類の極致のみ。革命者は類の極致の外、別に個物の極致あることを知らざるなり。美は實を離れたる映象なれば、美術に實を取らむやうなし。想の相をなすとき、實に似たることあるは、偶然のみ。個物の美、類の美より美なるは、實に近きためにあらず。實の美なると類美の作より甚しきは、實の結象したる個物に適へること作に勝りたればなり。(審美學下卷一八八及一八九面)

われおもふに所謂理想主義を叙情詩の門の専有に歸し、所謂實際主義を叙事詩の門の専有に歸する如きは恐らくは妥ならざる論ならむ。理想主義の類想を宗とする弊、實際主義の個想を宗とする利、いづれも叙情詩、叙事詩、戯曲の三門を通じて見るべきものなり。たもなる事を少し擧げて、詩の映象躍如たる理想主義の利と、瑣事を數ふること多くして聽者を倦ましむる實際主義の弊とも亦然なり。(下卷七一八面)逍遙子がホオマア、シエクスピイヤ、ギョオテの三家を世相派の實際主義を乗るものに列せしは、ゴットシャルがねなじ三家にジャン、ポオルを加へて實を役する理想主義、即ち眞の實際主義を乗るものとせしと、殆符節を合する如し。(詩學上卷一〇二面)若實際主義にして

叙事詩の門の専有に歸すべきものならば、此群に入りたるギョオテは、こゝに洩れたるシルレルなごより立超ねたる叙情詩の大家たらしむ様なかるべきをや。(姑くフイツシエルに據る、審美學三の卷一三五二面)

逍遙子は叙情、世相の二派を立てたる標準を以て、我國の節奏文を批評し、上は短歌、長歌より下は連歌、俳諧、謠曲、淨瑠璃に至るまで、(淨瑠璃のある部分を除く外は)おほむね理想詩(叙情派)に屬すといひて、世相派の詩少きを歎きつ。こゝに所謂理想詩をば、類想詩と解しても善かるべく、又(謠曲、淨瑠璃をも除かば)叙情詩と解しても善かるべし。



因に云ふ。逍遙子が梅花道人を樂天詩人なりとせしは面白し。ハルトマンが詩統よりいひても、梅花道人が詩は儘に樂天詩なるべし。上に詩統の畧圖を示せり。

又云ふ。忍月居士はみづからハルトマンを祖述すと稱しながら、小説三派及梅花詞集評を讀みしときは、忽認めて人と事とおなじおもしろさをあたふるものとなし、(國會、人物と人事)忽又認めて事を従とし、人を主とするものとなしつるのみ。(同新聞、人物、人事に就きて逍遙先生に寄す)と題したる文及此頃の文學界)かくてなほハルトマンを祖述すといはむはいとなん影護かるべき。逍遙子が前の三派、後の二派に就きては既に論じ畢んぬ。これよりは其批評の標準を措いて、其批評の手段に及ばむ。

逍遙子おもへらく。批評は著作の本旨の所在を發揮することをもて專とすべし。歸納的なるべし。沒理想的なるべし。モオルトンが唱ふる如く、科學的なるべし。標準に拘泥することなかれ。手前勸の理想を荷ぎまはることなかれ。嗜好にあやまたることなかれ。演繹的なることなかれ。芋蟲一疋を解剖するにも、人間を解剖するにおなじく、其間に上下優劣をわかれ動物學者の心こり頼もしけれ。批評とはもと褒貶の謂にあらず。

こは實に今の批評家の弊を撻むる論なり。唯夫れ弊を撻むる論なり。かるが故に淺偏なるにはあらずやとれもはるゝふしなきにあらず。凡う世の中にて觀察と云ひ、探究と云ふ心のはたらきには、一つとして歸納法の力を藉らざるものなし。人の著作を批評せむるときも、先づ觀察し、探究せではかなはじ。是れ科學的手段なり。是れ歸納的批評なり。然はあれど觀察し畢り、研究し畢りて判斷を下さんずる曉には、理想をかへるべけんや。理想とは審美的觀念なり。

標準とは審美學上に古今の美術品をみて、歸納し得たる經驗則なり。唯哲學者は經驗則を経験則として應用せず、これをわが哲學統裡に收めたる上にて活かし使はむとするのみ。審美的觀念は拉甸人が争ふべからぬものと定めし一人々々の嗜好にあらず。學問上にあきらめ得たる趣味なり、「エステジス」なり。拘泥すればこそ標準を憎め。手前勸なればこり、杓子定規なればこり理想を厭へ。蠅を昆蟲なりといひ、拙き小説家を固有派なりといふときは、實際にわがづから褒貶存ず。是れ演繹的批評ならざらむや。

逍遙子又いへらく。批評家は猶植物家の植物を評する如く、動物家の動物を評する如く、理想を離れて其物を評すべしといふのみなり。われの某は世に益あり、又は益なしといふは、當世又は未來世に對しての評判なり。これは科學的批評にあらずして、實地應用批評などいふべし。純粹評判と應用評判とは殊なり。

これも亦今の批評家の弊を撻むる論なり。うの偏なるが如き迹あることは、上の歸納、演繹の辨にわなじ。われれもふにわなじはよる世の中に、用と無用との別ほどむづかしきものはあらじ。物々而責之用、用亦窮矣と東坡外傳の首に題せし西疇子が言もれもはるゝは、二三の新聞の文學を視ることろの狭さなり。文學國を滅ぼすといふものあり。(讀賣)文士は樂隊の如し、事あるときは何の用をもなさずと罵るものあり。(中新聞)美を度外に視ること能はざる人性を知らず、趣味の高卑より國民の分野分ること知らぬ人々なればこそ、かゝる決斷をなすならぬ。如法これ等の輩に向ひては、應用評判を斥けて、純粹評判を勸むる逍遙子が言、大に開發の功を奏するなるべし。然はあれど必ず用を問はじといふも科學的手段を講ずるものゝ迷ならまし。動植をきはむる學者の心は、世

の常用をばげに問はざるべけれど、進化説を唱ふる人は、微蟲を解剖するときも、これに懐ける説の旨に慍はむことを願はざるにあらず。唯科學の公心あるをもて、預期せしところに反せし事實をも、言はで止むごときことならむのみ。生物の最微なるを細菌とす。世界第一の細菌學者コッホはつねに其徒に誨へていはく。利害なき細菌を取りて、一々種を定め名を命ぜむはいともれろかなるべしと。されば膠中に栽えたるとき、紫色を見する水中の細菌、立派なる拉甸名を得たるは、利害なき中にも、その紫の色に出にければなりかし。今の小説界に入り入りぬる人の作を取りて、一々蠅を解く勞を取らむこと、さりとは難義ならむか。われは逍遙子が縦合りの量をせばめずとも、少しく用の有無を顧み、利害なき「バクテリア」を措いて、蝶になるべき蠅を取り、再びは世の無頼子に牛刀鶏を割く(文苑)といはれざらむを望む。

逍遙子はまた世の批評家が二千餘年前に死せし人の肋骨を息杖にして、アリストテレスなどが言を引用ぬるを笑ひき。こは眞の卓見なり。然はあれど審美學の道理には、アリストテレスが詩學にて早くも充分に發揮せられたるものなきにあらず。レツシグがハムブルクにありて、二千零八十九年前に死せしアリストテレスを引きけむも、吾人が今年の文界に立ちて、二千二百三十三年前に死せしアリストテレスを引かむも、れそらくは大なるけぢめなかるべし。支那學者が道徳を説きて、いつも先王の道といふを笑ふものはさはなり。されど獨逸の民がいまもユスチニヤンの法典を參考律にするを笑ふを聞かず。是れ識者のつらく慮るべきところなり。モオルトンはげに新なるべし。セント、ブウはげに近かるべし。されどアリストテレスも廢つべからず。

自ら註す。梓神子の取次の翁が言を、直に逍遙子が言とせしを疑ふ人もあるべし。されど作家が言

と作家が其作中の人にいはしむる言とは、時ありて大差なきをば、フイツシエルも斷言せしことあり。(流俗及裏語一四七面)况や逍遙子はさこのやみどりに對して、わが批評に關しての意見は、近頃の讀賣新聞に、戯文もてほごいひ顯しれきぬといひしをや。(文苑、明治二十四年九月)

早稻田文學の沒理想

逍遙子この頃記實家となりて時文評論を作る。時文評論とは早稻田文學の一欄にして、現實を記するを旨とするものなり。逍遙子は何故に記實家となりたるか。曰く談理を嫌ひてなり。逍遙子は何故に談理を嫌へるか。曰く理の實より小ならむことを慮りてなり、理想世界の現實世界より狭からむことを思議してなり。今の言にいへらく。今の談理家の言ふところは空漠にして、今の見るところは獨斷に過ぎず。今の談理家はこれの〳〵のが方寸の小宇宙に彷徨逍遙して、我が思ふところのみを正しとし、これを尺度として大世界の事を裁斷せんとす。今のさま恰も未だ巨人島にわたらぬガリワルの如く、また未だガリワルを見ざる「リビエウシヤン」の如く、豕を抱いて臭きことを忘れ、古井の底に栖みて天を窺ふ。かゝる小理想家の説くところ何のやくにか立たむと。

逍遙子はかく理を談ずることを斥けたり。されど今の理を談ぜざるは、談ぜざるを以て談ずるなり。今の作るところの時文評論は評論にあらず。評論ならむとす。今の人を教ふる手段にいはいはく。我は實を記して汝に歸納の材を與ふ。汝が眼、汝が心はこれのづからこれを歸納して、明治文學の活機を悟り、以て明治文學大歸一大調和の策を立てよ。汝の機を悟り策を立つることを得るに至るは、或は遅からむ。今は我手段の劇樂ならざるためなり、持樂たるためなりと。

時文評論を讀む人は、いづれの處よりか此大歸納力を得來たるべき。いはく心中沒理想これなり。

時文評論を書く人は、いつれの處よりかろの大記實法を得來るべき。いはく常識これなり、常見これなり。

常識、常見の何物なるかは、よくも知らず。逍遙子はたゞ「コンモン、センス」といふ一英語を示しのみなればなり。沒理想の何物なるかはシエクスピイヤ脚本評註の緒言に見たり。その言いはく。造化は無心なり。自然は善惡のいつれにも偏りたりとは見えず。固より意地わるき繼母の如きものとも見えねば、慈母とも見えず。さるに數奇失意の人は造化を怨み、自然を憤りて、此世を穢土と罵り、苦界と謂るなり。さて亦得意の人はこれに反して造化を情深き慈母のやうにねもひて、此世を樂園とねもへり。必竟人々の思做し次第にて、苦とも樂とも見らるゝが自然の本相なり。此故に造化の作用を解釋するに、彼宿命教の旨を以てするも解し得べく、又耶蘇教の旨を以てするも解し得べし。其他老、莊、楊、墨、儒、佛若しくは古今東西の哲學者がねもひくの見解も、これを造化にあてはめて、強ち當らざるにあらず、否、造化といふものは、此等無數の解釋を悉く容れても餘あるなり。祇園精舎の鐘の聲、浮屠氏は聞きて寂滅爲樂の響なりといふべきが、待宵には情人が何と聞くらむ。沙羅雙樹の花の色、厭世の目には諸行無常の形とも見ゆらむが、愁を知らぬ乙女は何さまに眺むらむ。要するに造化の本意を人未だこれを得知らず、只これに愁の心ありて秋の哀を知り、前に其心樂しくして春の花鳥を樂しと見るのみと。

造化既に沒理想なり。造化に似たる沒理想の詩を作るものは大詩人なるべし。こゝに於いてや人にはシエクスピイヤを取り、體には「ドラマ」を取る。シエクスピイヤがバイロン、スヰフトより大なるは彼は理想なく、此はれのが理想をあらはせばなり。「ドラマ」の小説より全きは、彼は理想なく、

此は作者の理想を含みたればなり。作者能く理想なきに至るときは、人に神の如くにもねもはれ、聖人の如くにもねもはれ、至人の如くにもねもはるべし。近松も沒理想なり。彼も境遇次第にては、たとひシエクスピイヤには及ばずとするも、我國の淨瑠璃作者にて終らむよりは迥に優りたる位地に上りぬらむ。「キング、リヤア」の悲劇は馬琴の作に似て勸懲の旨意いと著く見られたれども、作者みづからが評論の詞、絶つて篇中になきゆゑ、見るものゝ理想次第にて強ち勸懲の作を見做すを要せず、別に解釋を加ふること自在なり。然るに曲亭の作を見れば、例へば墓六夫婦の性格の如き、頗る自然に似て活動したれども、作者叙事の間にて明に勸懲の旨なりといへれば、人も亦これを沒理想と評すると能はずと。

夫れ造化既に沒理想なり、作者と詩と皆沒理想になりたれば、逍遙子が沒理想の時文評論を作れるも宜なり。世の批評家はねほしといへども、逍遙子がこたびの大議論を聞きては、皆口をつぐんで物言はず。偶々物言ふ人ありといへども、唯賞讃のこと葉を重ねて、眞價を秤らむとするに至らず。(青年文學第一の成語)平生批評を専にせざる人々の中には、多少これに對して意見を述べたる人ありといへども、大抵片言隻句にして、人の心をあかしむるに由なし。ねのれも大同小異の見を懐いたれば、自然、沒理想の論に少からぬ同意を表したといふは美妙齋なり。(國民新聞)讀者の沒理想をたのみて、時文評論を評論ならぬ評論となし、記實となすと聽きて、これに服したるは漣山人なり。(讀賣新聞)シエクスピイヤを沒理想とする論、若し逍遙子が獨造の見ならば、これを歐文に譯して歐人に見せまほしといふは抱一庵主人なり。(報知新聞)この三人はねもなる讀者なるべし。撫象子のいはく。シエクスピイヤが理想はいと大きやかなりしを見て、沒理想なりといふは誤なり。

シエクスピイヤは豫言者なりき。豫言者とは大理想家をいふなりと。(女學雜誌第二九〇號)これを一人の難者とす。不知庵主人のいはく。沒理想は極めて好文字なり。然れども春の屋は沒理想といふ理想を立てたるなり。是れ或は眞理に近からむかは知らねど、われ未だ遽に同意することを得ずと。(國民新聞)これを一人の踟躕者とす。實を記して評論に代ふる逍遙子が趣意に連山人の服せしを、特書して表しだしと正直太夫といふものあり。(國會)これを一人の傍觀者とす。ここに鳥有先生といふ談理家ありけり。理を談ずることを旨とする一大文學雜誌を發行せむとれもへども未だ果さず。鳥有先生は何故に談理家となりぬるか。曰く記實にあかであり。鳥有先生は何故に記實にあかざるか。曰く萬有と萬念と一に歸せしむべきことをれもひてなり。造化の無理性にしてまた有理性なるを思議してなり。その言にいへらく。物に逢ひて美を感じ、物を造りて美をなす。是れ評者と作者との境界なり、美術の境界なり、文學の境界なり。美はこれを拆いて繁き意義となし、これを統べて深き考思となすべし。羅馬なる聖彼得塔を觀てミケランジェロが作りし雛形の美に驚くは、建築を視る眼あるもの之皆能くするところなるべし。これを美なりと記さば、記實者の役濟むべけれど、談理者はそれにて足れりとすべからず。かの佛朗西人それがしが如く、高等靜論の算法によりて古人が不用意にして靜性の極處に至れるを看破してこそ、その美なる所以を知るべきなれ。ライブニッツが樂調の美を知るを無意識中の算術といひしもれなむ談理の境なり。若し美の義を碎いて理に入ることあらずは、審美學は起らざるべし。まだ巨人島を見ざるガリワルが實を知ることの小なるはまことにをかしかるべけれど、いまだ理に通ぜざるために論理をあやまりたる批評をなす人あらば、これも可笑しからむ。逍遙子が記實の文を讀むには、大歸納力を具へ

ざるべからず。鳥有先生が談理の言を聞くには、當りまへの理解力を備ふるのみにて足れり。

鳥有先生は逍遙子が常識を貴むを聞きて、これを難じていはく。シャフツベライが内官論はふりたり。リイドが常識も今の哲學の程度より見るときは、わうらくは取るに足らざるべし。蓋常識は凡識と相隣せり。變を斥くるはよけれど、非凡を容れざるはわるかるべし。國利民福をもとむる便を知らむとならば、政治家として常識を説きても善かるべく、經濟家として常見を唱へても善かるべけれど、常識は基督を生せず、常見は釋迦を成さず、「コンモン、センス」の間には一個の大詩人を着くべきところだにあらざるべしと。

鳥有先生はまた逍遙子が沒理想の論を駁していはく。世界はひとり實なるのみならず、また想のみち／＼たるあり。逍遙子は沒理性界(意志界)を見て理性界を見ず。意識界を見て無意識界を見ず。意識生じて主觀と客觀と纒に分かるゝ所以をれもはず。老、莊、楊、墨、孔丘、釋迦、其他古今の哲學者が觀得たる世界を小なりとして、自ら片輪なる世界を造らむは果敢なきさみならず。後天にのみ注げる眼はダルボン論を守りても事足るべけれどそれにて造化は盡されず。棘は誰か磨き成したる。羽は誰か書き成したる。棘の同じさまなるは姑く置かむ。孔雀の羽のいろ／＼は羽の翰より受くる養れなきに、色彩の變化は一本ごとに殊なり。その相殊なる色彩の合して渾身の紋理をなすは、先天の理想にはあらざるかと。

鳥有先生既に理性界を觀、無意識界を觀て、美の理想ありといひ、又これに適へる極致ありといへり。さればとて先生はいにしへの人の立てし抽象理想論の迂濶なる跡を追はむとにもあらず、またこの世紀の生理、心理の新果實を容れざるにもあらず。その言にいへらく。祇園精舎の鐘の聲、沙

羅雙樹の花の色。彼を聞いて寂滅爲樂を感ずるものあれば、また待人こひしとかこつものあり。此を見て諸行無常と観ずるものあれば、またひたすらに愛でたがるものもあるべし。されど先づ實相々々と追ひ行きたる極端に達して、人間の官能を除き去りてれもへ。聲も、色も、色はもと色ならず。聲も色も分子の動きさまの相殊なるのみ。純粹なる實相には聲もなく、色もなし。さて一步をゆづりて、人間の官能聲を成すべき分子の波を耳に受けて、是れ聲なりといひ、色を成すべき分子の波を目に受けて、是れ色なりといふ。これすなはち意識界なり。祇園精舎の鐘われがねならば、聞くものこれを厭はしとし、われ鐘ならずば好まじとせむ。沙羅雙樹の花萎ればなならば、見る人これより去り、しほれ花ならずはこれに就かむ。厭はしとして去り、好まじとして就く。これ猶後天より來れる決斷なり。さばれ破がねならぬ祇園精舎の鐘を聞くものは、待人戀ひしともれもひ、寂滅爲樂とも感ずべけれど、其聲の美に感ずるは一なり。沙羅雙樹の花の色を見るものは、諸行無常とも感じ、また只管にめでたしとも眺むれど、其色の美に感ずるは一つなり。この聲、この色をまことに美なりとは、耳ありて能く聞くために感ずるにあらず、目ありて能く視るために感ずるにあらず。先天の理想はこの時暗中より躍り出で、此聲美なり、この色美なりと叫ぶなり。これ感納性の上の理想にあらずや。

いかに珍らしき樂にも自然ならぬ聲はなく、いかにめでたき畫にも自然ならぬ色はなし。意識の中に聲を調へても樂となすべく、意識の中に色を施しても畫となすべきは言ふまでもあらし。されどモツアルトはみづから美しく強き夢の裡より其調を得たりといへり。こは畫工の上にも詩人の上にもあることにて、所謂神來即是なり。眞の美術家の製作は無意識の邊より來る。これ製作性の上の理想にあらずや。

理想にあらずや。

若し没理想を説く人のいへるが如く、言葉のうちこれの理想のあらはれざる戯曲に長ずるためにシエクスピイア大なり、おのが理想のあらはるゝ叙情詩若しくは小説に長ずるためにバイロン、ス井フト小なりといはざ、これシエクスピイアとバイロンとス井フトとをたま／＼其詩體を殊にせしために大小の別生じたるのみにて、その本來の才分境地には大小なかるべし。そが上に戯曲に理想あらはれず、叙情詩若しくは小説に理想あらはるといふは、戯曲にあらはるゝ客觀の相(所觀)は叙情詩若しくは小説に於けるより多く、叙情詩若しくは小説にあらはるゝ主觀の感は戯曲に於けるより多きがためにしかれもはるゝのみにして、其實は戯曲にも、叙情詩若しくは小説にも、作者の理想、作者の極致はあらはるゝなり。唯其理想は抽象によりて生じ、摸型に従ひてあらはるゝ古理想家の類想にあらずして、結象して生じ、無意識の邊より躍り出づる個想なり、小天地想なり。大詩人の神の如く、聖人の如く、至人の如くれもはるゝは理想なきがためならず、その理想の個想なるためなり、小天地想なるためなり。太虚の無意識中より意識界に取り繼がれずして生れたる造化と、れな心無意識中より作者(シエクスピイア)の意識界を経て生れ出でし詩(戯曲)と相似たるに何の不思議あらむ。唯無意識中よりの神來には眞の大詩人ならでは多く逢はず。是を以てシエクスピイアが戯曲古今に獨歩す。さればバイロン、ス井フトのともがら、たとひ多く戯曲を作りぬとも、シエクスピイアにれなじき境地には至らざるべく、近松は戯曲を作りけれども、その客觀相をあらはしたる中に類想に近きところあれば到底シエクスピイアには及ばざるべし。「キング、リヤア」は戯曲にして、作者みづからが評論なしといへども、勸懲の旨ありと見ば、しか見ても可なり。勸懲の劇を

作らむとして、いたづらに人物をならべ、脚色を立てたるをこり卑みもすべけれ、曲中人物の性格一に活動せる小天地の作をば勸懲の旨ありとて斥くるものあらむや。墓六夫婦が事に小天地想あらはれたらば、作者の詞に勸懲の旨ありとて、何ぞ病とするに足らむ。

英吉利古今の文士戯曲を作りしもの幾百千家ぞ。うの作りし戯曲幾千萬篇ぞ。この幾千萬篇か知れぬ戯曲は、戯曲の體裁として作者自らが評論の詞をば挿まざりしならん、皆所謂没理想なりしならん。さるに彼數百千家はうの名、骨と與に朽ちぬ。ひとりシエクスピイヤが威靈今にいたるまでもいやちこなるは何故ぞ。彼數百千家は小家數にして、ひとりシエクスピイヤの大詩人たるは何故ぞ。又叙情詩と小説とには、作者の理想あらはるといひ、没理想に至ること能はずといはむ、叙情詩に長ずる大詩人、小説に長ずる大詩人は果して生ずべからざるか。又叙事詩の旨は純粹なる客觀相にあれば、うの没理想に至り易きこと迥に戯曲の上にあらむに、没理想を説く人の戯曲を取りて叙事詩を取らざるは何故ぞ。おほよは是等の間に答ふる人なき間は、シエクスピイヤに理想なしともいはず、理想なきを大詩人の本相なりともいはずとせむ、烏有先生は説けりとぞ。

われ山房にありて興來れば文を論ず。この頃逍遙子が言を聞いて實を記することの功徳を知り、また烏有先生が言を聞いて理を談ずることの利益を覺りぬ。逍遙子が實を記するはよしと雖、その事實によりて談理を廢せむとするはあしかりなん。烏有先生が理を談ずるは辯を好むに似たれども、うの記實にあかず思へるは無理ならじ。逍遙子は早稲田に隠れて記實の直筆を揮へ。われは且らく烏有先生に代りて、山房に居て文を論ぜむ。

附記、其言を取らず

主觀の情を卑みて、客觀の相を尊む。是に於て乎、今の叙事詩すくなき世にありては戯曲をして第一位に居らしめざることあたはざるべし。これを早稲田文學が没理想を説きて戯曲を嗜む所以とす。われは其意を取りて其言を取らず。没理想は没理想にあらずして、没主觀なればなり。

俄羅斯の人ツルゲニエフ小説喧嘩買 Brekojor を著す。獨逸の人井ルヘルム、ランゲ其文を讀みて作者が喧嘩買を惡みながらも敢て一貶辭を挿まざるを稱へて止まず。馬琴が筆力、能く墓六を寫せるに、猶評を叙事の間に挿むことを免れざりしは、婦幼のために書を著すといふ志の卑きがためなり。早稲田文學が八犬傳にあきたらざる所ありとするは、豈馬琴が叙事の間に評を挿みしを以てならずや。われは其意を取りて其言を取らず。没理想は没理想にあらずして、没挿評なればなり。

シエクスピイヤは大詩人なり。その作の造化に似たるは、曲中の人物一々無意識界より生れいで、これのくうの個想を具へたればなり。うの作の自然に似たるは、作者の才、様に依りて胡盧を畫く世の類想家に立ち超へたりければなり。早稲田文學はこれに縁りて、シエクスピイヤを没理想なりとす。われは其意を取りて其言を取らず。没理想は没理想にあらずして、没類想なればなり。虛心になりて世界を見よ。うここに哲學あらむ。平氣になりて文學の現勢を見よ。うここに評論あらむ。悟は大道なり。學は迂路なり。まことや成心は悟の道の稻麻竹葦にして、學の路の荆棘なれば、誰かはこれを破り、これを除かむことを欲せざらむ。然りとて理を談ずるを聞くことだに能はざる世の味者に、成心あらせじと願ひて、唯實を記したるのみを見て悟れといはむは、わうらくは難題ならむ。早稲田文學が文壇の牛耳をとりて大道を説くは善し。われ豈其意を取らざらむや。されど其言は則ちわが取らざる所なり。故いかにいふに、早稲田文學は讀者の没理想を命にして言を立つ

といへど、所謂没理想は没理想にあらずして、没成心なればなり。われは早稲田文學と共に戯曲を嗜み、早稲田文學と共に叙事中に評を挿まざる小説を愛し、早稲田文學と共に造化に似たる詩を好み、早稲田文學と共に悟を貴む。然れどもわれは早稲田文學と共に没理想を説かず。烏有先生既に没理想を一主義として辨じたれば、われは唯わが没理想といふ語を取らざる所以を言ふ。(明治二十四年十二月)

早稲田文學の没却理想

没却理想は一に没理想といひ、一に不見理想といひ、一に如是理想本來空といひ、一に平等理想といふ。其要は理想を没却し、埋没して、これを見ざらむとし、衆理想の本來空なるを説くにありといふ。これを説くものは誰ぞ。時文評論の記者逍遙子なり。

逍遙子が没却理想を説くや、一面はこれによりて造化に對する彼のそれが立脚點を指定し、一面はこれによりて詩文に對する彼のそれが平等見を護持す。かなたは一派の形而上論なり。こなたは一系の審美學なり。

逍遙子が形而上論はいかに。

逍遙子は理想を没却せしむといふ。さらばその没却せむとする理想とは何物ぞ。答へてはいはく。個々の小理想家、個々の庸人、若くは世の見て大理想家となせる思索家が斷じて、造化の心、造化の極致と定めたるものゝ名なり。かゝる衆理想の没却せらるゝことをば、無理想といひてもさし支なしと。

さらば何物か他の衆理想を没却する。答へてはいはく。今人の智の及ぶ限にては、無底無邊無究無限

の絶對なり。この絶對は即ち造化にして、其名を没却理想とす。

さらば逍遙子が絶對はいかにしてか他の衆理想を没却する。答へてはいはく。衆理想は皆是なり。是れ絶對は之を納るゝを以てなり。逍遙子は是なりと雖も之を崇めず。是を以て衆理想の奴となることなし。衆理想は皆非なり。是れ絶對はいつれの理想にも掩はれざるを以てなり。逍遙子は非なりとなしてこれに泥まず。是を以て衆理想の奴となることなし。衆理想は即ち差別相にして、没却理想は即ち唯一相、平等相なりと。

れもしろきかな逍遙子が言。りの人々の寫象中なる衆多をして本來空に歸せしめたるはバルメニデエスにや似たらむ。りの人々の理性を衆多に屬せしめて、この差別相に對する平等相を立てたるはプロチヌスにや似たらむ。

ライブニッツのいはく。總ての哲學系は皆是なり、皆非なり。その是なるはりの立つるところなり。りの非なるはりの斥くるところなりと。(井クトル、クザンはこれによりて折衷派を興しき)ヘエゲルもまた衆哲學派の立脚點に比較的の權利を與へたり。これ等も逍遙子が言に似通ひたるところありむ。

されど逍遙子が没却理想にはねほいに研究を要すべきところあり。

逍遙子が絶對の衆理想を没却するや、衆理想皆是にして又皆非なるがためなりといふ。且く此判斷に注意せよ。常理に依るに、是と非とは矛盾の意義にして、りの二つのものゝ間に第三以上の意義を容れざるものなり。こはかの大と小との如く、りの間に稍大、稍小の如き階級を容るべき反對の意義にねぢからず。反對のみなる意義に於いては、着眼次第にて衆理想皆大なりともいふべく、衆

理想皆小なりといふべけれど、矛盾の意義に於いては、縦令その着眼點殊なりとて、衆理想皆是なり、皆非なりといはむこと、尋常の論理の許すところにはあらざるべし。逍遙子が衆理想皆是なりといふや、その着眼點は造化これを納るといふにあり。逍遙子が衆理想皆非なりといふや、その着眼點は未だ造化を掩ふに足らずといふにあり。未だ造化を掩ふに足らずとは何の謂ぞ。答へていはく。これも造化より小なるなり。されば逍遙子が着眼點は、その言葉を二様にしてあらはされたりといへども、到底唯一つなるを論なからむ。衆理想に附するに、是といひ非といふ矛盾の意義を以てするは、縦令その着眼點殊なりといへども、尋常の論理の許さざる所なり。ざるをいはむや、其着眼點はたゞ一つなるをや。かのライブニッツが言の如きはすこぶるこれに殊なり。ライブニッツは總ての哲學系皆是なり、皆非なりといふと雖、その是なりとするは總ての哲學系の立てたる所々に限りて、その非なりとするは總ての哲學系の斥くるところに限りたり。これを取り分けての判断パルチクレル（一分法）とす。逍遙子は衆理想皆是なりとするときも、衆理想皆非なりとするときも、衆理想の全體を指したり。これを引き括めての判断ウニェルザル（全分法）とす。取り分けての判断は同一體（前陳）に矛盾の義（後陳）を附すること許しすべけれど、引き括めての判断はありらくはかゝる自在を得せしめざるべし。斯の如くよの常なる判断法より見るときは、皆是なる衆理想は同時に皆非なるに由なく、皆非なる衆理想は同時に皆是なるに由なからむ。さらば同一の事物を是とも非とも見るべきは果していかなる境界なるか。答へていはく。是もなく

非もなき境界なり。絶對の境界なり。

大宗教家と大哲學者とのごとき自在の辨證ヂヤレンツをなさむとするものは、大抵絶對の地位にありて言ふ。（聖教量「スペクラチオン」）逍遙子は豈釋迦と共に法華涅槃の經を説いて、有に非ず、空に非ず、亦有、亦空といはむとするか。逍遙子は豈莊周と共に齊物論を作りて、儒墨の是非を嘲り、その非とするところを是とし、その是とするところを非とせむとするか。

夫れ絶對には是非もなければ彼我もなし。されどその能く是非なきものは何ぞや。その能く彼我なきものは何ぞや。答へていはく。空間を脱したればなり。時間を離れたればなり。質といひ、絶對といふものは顯象（事相）にあらざればなり。

絶對の相對を現するや、空間は彼我を立て、時間は後先をなす。既に相對あり、彼我後先あり。この顯象世界の中、争でか是非なきことを得べき。佛家はこれを體象方といひ、ハルトマンはこれを質用といふ。シヨオベンハウエルが所謂「プリンチピウム、インヂヰヅアチオ、ニス」は空間時間をこの理より視たるなり。

ここに此顯象世界の法廷にありて裁判をなさむとするものあり。又此顯象世界の文壇にありて批評をなさむとするものあり。その宣告、その評論は縦令絶對の上よりしても實相を撥無すべからず。盗む者と盗まるゝ者と、みな是なり、皆非なりといひてはれうらくは裁判にはなるべからず。論理を守るものと、論理を守らざるものと、皆是なり、皆非なりといひてはれうらくは批評にはなるべからず。

逍遙子は此顯象世界の文壇にありて我を立て、その立てたる我をして偶なからしめむとす。いづく

んぞその我の我にあらずして、うの能立我の似能立我に過ぎざるものなるを知らむ。逍遙子にして若し能く欲無限（即欲絶對）の我を立てば、何故に是を是とし、非を非とすべき道を、是も是にあらず、非も非にあらずる處より發明し來りて、新にうの惡平等見を擲つこと、嘗てうの惡差別見を擲ちしが如くならざる。

われは且く逍遙子が上をいはずして、絶對に向ひて説かむ。

絶對よ。何ぞ汝が名を更ふることの頻なる。眞如といひ、太虚といひ、玄といひ、無といひ、静といひ、空といひ、一といひ、絶對といひ、質といひ、絶對我といひ、絶對主客兩觀といひ、絶對理想といひ、意志といひ、無意識といふ。學者既にうのわづらはしさに堪へざらむとす。ざるを汝は猶新に没理想といはざることを得ざるか。既に没理想といへり。今また何ぞ没却理想といひ、不見理想といひ、平等理想といひ、如是理想本來空といはむとするに至れる。

絶對よ。汝は能く萬物を没却すといふ。さらば没却理想は汝がために最適切なる名なるべし。しかはあれど汝が能く萬物を没却するは、没却理想と呼ばれてより始て然るにはあらず。何故に汝は眞如といはれて足れりとせざる。玄といはれて足れりとせざる。乃至無意識といはれて、足れりとせざる。

絶對よ。汝を喚び來たるものにはくさくあり。一向専念に眞理を求むるものあり。れのが轉迷開悟の緒にせむとするものあり。已むことを得ずして言を立つといふものあり。今時文評論の裏にあらはれたるは、うもくまた何の目的ありてなるか。

絶對よ。逍遙子は汝をねほいなる心と名づけむとして猶與へり。こは神在すといふに等しからむを

れられてなり。逍遙子は汝を大理想と名づけむとして猶與へり。こは大理想の何物なるかを證すべからざるを慮りてなり。逍遙子は絶對の意味にて汝を有心ともせず、無心ともせざりき、また有理想ともせず、無理想ともせざりき。汝は逍遙子に敬して遠けられたるか。我は逍遙子が心を用いたることの深きに感ず。

然はあれど絶對よ。逍遙子は有心とも斷せず、無心とも斷せず、理想の有無の定まらざるを消極なりといへり。消極立たば積極立たむ。汝が絶對若し相對とせられればいかに。絶對よ。心せよ。

われはこれより逍遙子が上をいはむ。

逍遙子の時文評論は果して絶對の地位（聖教量）にありて言ふか。

さらば逍遙子は衆理想皆是なり、衆理想皆非なりといふことを得む。われは唯うの一切世間の法に説き及ばざるを惜む。

逍遙子の時文評論は果して相對の地位（比量）にありて言ふか。

さらば逍遙子は空間に禁められ、時間に縛られ、はては論理に窘められむ。衆理想皆是なりとは、逍遙子に言はざるべし。彼は衆理想の中に於て論理にたがひたるものを發見すべければなり。衆理想皆非なりとは、逍遙子に言はざるべし。彼はこれが理想の衆理想と共に非ならむとき、れうろしき絶對的無理想の淵に臨むべければなり。

これを逍遙子が形而上論とす。逍遙子のいはく。われは敢て形而上論をなさず。われは方便を説くのみ。われは無邊際の大洋を渡る舟筏を造るのみと。殊に知らず、古今哲學の系統は悉く是れ方便なるを、悉く是れ舟筏なるを。

さて逍遙子が審美學はいかに。

逍遙子のいはく。わが詩文に對する没却理想は没却作家なり、不見作家なり。作家の没却せられて見ゆるは、うの客觀的なるがためなり。されば詩文に對する没却理想は客觀を評する言葉ともいふべしとなり。

逍遙子が没却せむとする作家とは何物ぞ。答へていはく。作家の自己なり、自身なり、其小天地なり、其性情なり、其理想なり。作家の理想の没却せられて見ゆるなりたる、若くは見ること難くなりたるを活平等相といふ。

作家の没却せらるゝや、殘るところは何物ぞ。答へていはく。こゝに活差別相といふものあり。詩文の中なる個々の人物、れの一々其特質ありて云爲するさま是なり。こゝに又活平等相といふものあり。その特質ある人物の云爲する間に、これを支配すべき因縁果の理法ありて一貫するさま是なり。されば見ゆるものは作家の理想にして、見ゆるものは人間の理法なり。

逍遙子は既に有理想とも、無理想とも定まらざる大天地を畫き成せり。されどりの小天地に至りては理想あることを免れず。作家の理想は蓋し絶對の意味にても有るならむ。

作家の理想は衆理想の一なり。されば衆理想の没却せらるゝときは、作家の理想も亦たこれと共に没却せらるゝことを免れざるべし。こゝは絶對の上より瞰下しての事なり。この顯象世界にて作家に理想ありといはゞ、うの有るや、必ず絶對の意味にても有るならむ。

逍遙子は作家の理想を没却すといふ。作家の理想は縱令没却せらるゝといへども、見ゆるなりぬといへども、又見ること難くなりぬといへども、うの没却せらるゝは、先づ存じて、而る後に没却せら

るゝならむ、先づ見ゆべく、又見ること易かるべき由ありて、而る後に見ゆるなり、又見ること難くなりぬるならむ。

作家理想あり。シエクスピイア理想あり。逍遙子は唯シエクスピイアの理想を以て人間以上の理想なりとせず、大理想なりとせざるのみ。

さらばシエクスピイアの理想大理想なるにあらず、衆評者の理想小理想なるにあらずして、衆評者のシエクスピイアが作を評して其旨を窺ひ盡すこと能はざるは何故ぞ。逍遙子答へていはく。シエクスピイアが作は衆評者の理想を没却して、併せて又シエクスピイア自己の理想を没却すればなり。さらばシエクスピイアの理想大理想にあらず、衆評者の理想小理想にあらざるに、衆評者の作家となりて作をなしたるとき、若くは他のかいなでの作家の作をなしたるとき、うの作の衆評者の理想と作家自身の理想とを没却すること、シエクスピイアが作の如くならざるは何故ぞ。逍遙子は未だこれに答へざりき。

逍遙子のいはく。没却作家は客觀を評する言葉なりと。ねほより詩の上にて觀の主客を言ふものは、大抵作家の感情を以て主觀とし、作家の觀相を以て客觀とす。叙情詩を主觀とするは是を以てなり。叙事詩を客觀とするは是を以てなり。戯曲には觀の主客等々存せりといふものから、シルレルが曲とシエクスピイアが曲とを比べ見れば、彼には作家の感情多く、これには作家の觀相多きを知らむ。シエクスピイアが作を客觀なりとするは豈これがためならずや。逍遙子若し没却作家とは作家の主觀的感情を没却する義なりといはゞ、われも亦た左右なくうの客觀を評したる言葉なるを認めしな

ざるを逍遙子が没却せむとするは主観的感情にあらず、極致なり、理想なり。作家は理想あれども、その作をなすや、理想なからしむ。詩は是に於て臨時無理想の作用になれるものと如し。これを「ドラマ」といふ。されば「ドラマ」といふ無理想詩の中にはれもに無理想時の主感情を歌ふ叙情詩もあるべく、れもに無理想時の客観相を寫す叙事詩もあるべく、無理想の時の感情と観相とを役したる戯曲もあるべく、又小説もあるべし。無理想の感情と無理想の観相とは、若しこれあらば、蓋し審美上に精究すべきものならむ。

無理想詩に活差別相あり。是れ理想を没却したる個想なり。又活平等相あり。是れ理想を没却したる小天地想なり。

活差別相の人物は、理想を没却したる個人なり。これは現實の個人を摸倣したるものとすべきならむか。活平等相の理法は、理想を没却したる因果なり。これは目的なくして人間を左右する物力を摸倣したるならむか。かの無理想の感情と無理想の観相との是の如き摸倣をなすさまは、若しこれあらば、審美上にいよく精究すべきものならむ。

逍遙子は活平等相即活差別相、活差別相即活平等相なりといふ。これは審美上に圓融即法の門を開いて、活平等相の小天地を理具と看倣し、活差別相の個想を事造と看倣したるならむ。これはわが個想即小天地想といへるに似たり。

これを逍遙子が審美學とす。われは時文評論の無理想より立て來りたる審美學の果實を見るべき日を待たむのみ。(明治二十五年三月)

逍遙子と烏有先生と

逍遙子没理想を唱へて記實の業を操り、談理のやうなさを吹聴す。われこれを評せむとするに當りて、烏有先生が有理想の説を擧げたり。この間わが談理の業を廻護したるころもありき。ここに評するは逍遙子が烏有先生に答へし文なり。

烏有先生とは誰ぞ。答へていはく。獨逸の人カル、ロオベルト、エツワルト、フオン、ハルトマンなり。わが山房論文を著すや、れもにハルトマンが審美學に據りて言を立つ。逍遙子は没理想論出で、その勢ほとく我國の文學界を風靡せむとするを見て、われはハルトマンが現世紀の有理想論を鈔して世の文學者に示しむなり。

逍遙子は没却理想なり。没却理想は造化に對してこゝ有理想無理想を決せざれ、詩文に對しては既にこれを作家の臨時無理想の中より生ぜしめられたれば、争でかこれを無理想ならずといふことを得む。ハルトマンは有理想なり。造化に對しても、また詩文に對しても。

さきにわが逍遙子とハルトマンとの兩家の説を併べ擧げしときは、われ逍遙子が没理想といひし語を語のまゝに解して無理想の義となし、逍遙子を以て造化無理想、詩文無理想と説くものとなして、これを二者皆有理想と説けるハルトマンに比べたりき。逍遙子がそれまでに公にせし文は、わがかく解することを妨げざりしなり。

さらばわがれのれが談理の業を廻護せむために、ハルトマンが有理想論を出ししは何故ぞ。答へていはく。逍遙子は談理の今の我文學界に益少かるべきことを證せむために、其没理想を引いたればなり。

逍遙子のいはく。烏有先生が談理を重んずべしといふや、毎に絶對の意味にていふか。即ち古今東

西の大なる談理家即ち哲學者といふきはをも、うが眼中に置きていへるならむ。これ理といふ字を絶對に解したるなり。わが後にせむといふ談理は然らず。今新聞などに見ゆる偏りたる論を指せるなり。うの根柢に一系の哲理もなうして、一時の感の浮べるまゝに、或は好惡に驅られて衆他を排し、或は狭き經驗を尺度として大なる人間を是非するが如き頑陋偏僻なる小理想をいへるなりと。これに由りて觀るに、逍遙子が後にせむとするは、偏りたる談理なり、好惡に左右せらるゝ談理なり、狭き經驗を尺度としたる談理なり。一系の哲理を根柢としたる談理は、逍遙子後にせむとはせざるが如し。

ハルトマンの烏有先生はひとり一系の哲理を根柢としたるのみならず、また自ら一系を立てたるものなり。さればハルトマンが言若し我筆を借りて出でずして、たゞちに其口より出でば、うは逍遙子のために後にすべきものとせられざるべきか。

答へていはく。おうらくは然らず。ハルトマンは有理想なり。かるが故に無理想を非とす。その談理は逍遙子がために偏りたりとせられざること能はず。こはひとりハルトマンが上のみならず。造化無理想と唱ふる實踐派の哲學者は造化有理想と唱ふる形而上派の哲學者を非とす。これも逍遙子がために偏りたりとせらるべし。すべての哲學者は逍遙子がために偏りたりとせられざること能はざるは、これにて知らるべし。況や好惡の念強かりしシヨオペンハウエルが如きもの、若くは僻境に居りて經驗少かりけるカントが如きもの、争でか偏僻頑陋と看做されざらむ。

されど逍遙子は猶一つの要約を立て、談理を後にせむとしたり。そはうの後にせむとするものを、今の新聞などに見ゆるものなりとことわりたることは是なり。今の新聞などに見ゆる談理には、まこ

とに後にすべきものおほからむ。さばれうの後にすべきは、れうらくは偏りたるためならし、好惡のために左右せらるゝためならし、又狭き經驗を尺度としたるためならし。

われうの由りて來たることを求めて、少しく得るところあるに似たり。蓋し新聞雜誌などに見ゆる談理は、現量智より出づるもの(露伴子か批評の類)少くして、比量智より來たるもの多し。現量智生の理に對しては、うの歸するところの新なると舊きとを問はむよしもなく、うの明にするところの廣きと狭きとを問はむよしもなく、比量智生の理に對しては、之に歴史上の定規を當てて、うの芻狗なるを示すことを得べく、これを論理上の眼鏡もて見て、その妄斷に過ぎざるを論し易かるべし。逍遙子が後にせむとするところはれそらくはうの芻狗に屬したるものならむ、れうらくはうの妄斷に過ぎざるものならむ。

かゝる比量家をして古人の文を讀ましめ、論理の學を講せしめむとす。これ教育の道なり。これ積極の法なり。早稲田文學などはこれを司るものか。

かゝる比量家をしてうの言の芻狗に屬するを知らしめ、うの論の妄斷に過ぎざるを知らしむ。これ批評の道なり。これ消極の法なり。われ等の記述は及ばずながらもこれに當るものゝ一たらむとす。

この二つの道は並び行はれて相悖らざるものなり。ざるを逍遙子われ記實を先にす、人は談理を先にせよといはずして、記實は益多ければ先にすべきものなり、談理は益少なければ後にすべきものなりとやうにいひき。談理を廻護する論は是に於てや興りぬ。

逍遙子が談理の後にすべきを説くや、その偏りたるが故といひ、うの好惡あるが故といひ、うの經驗少きが故といひ、哲學者を其範圍の外に置かむとす。殊に知らず、偏りたり、好惡あり、經驗少

しとして、うの後にすべきを證せむとする時は、いかなる大哲學者の言も到底後にすべきものとせらるゝことを免れざるを。

さらば逍遙子が後にせざらむとする偏らざる談理とは何物ぞ。われは恐る、唯逍遙子自己の没却理想論のみならむことを。

逍遙子のいはく。烏有先生がこれに對して理を談せむとする文壇は、今の文壇のうちの俊秀ならむ人々を標準として觀察するか。わが眼中の文壇は初學後進の猶穉きを標準としたるなり。早稲田文學の講述を讀まむ人々を目的としたるなり。これも見解の相異なる一點ならむと。

わがれにもハルトマンの審美學に基いたる批評は、特に所謂先進に對するにもあらず、又所謂後進に對するにもあらず。すべての立言者はわがために同一なる方法を以て批評せらる。

逍遙子いはく。わが謂ふ小理想家は經驗足らざるがためにうの識見狭きものなり。一道の皮相を奉じて方寸の世界に安んじ、我師の教をのみ無雙の靈玉と輕信して、初より他山の石を求めず、みだりに儒佛を祖述し、また東西の哲理を談ずるものなり。彼等の心中には談理を迎ふる傾向なし。一旦夕の談理争でか能く一世の傾向を醸さむ。これを醸す策は衆美を一堂に會して相見する機會を得せしむるに若かず。是れ記實の文の先にすべき所以なり。是れ審美の論説を聞くべき初發心を作るに等しと。

識見の狭きもの、師の教を輕信するものに談理を迎ふる傾向なきことは或は有らむ。されどかゝる烏滸のむれもの果して喜んで記實の文を讀むを必とすべきか。これもいとく覺束なし。一世の傾向を醸さむとするものは積極なる教育の道に由るべきは、固より其所なり。されどこれと同時に消

極なる批評の道の行はるゝを認めざらむとせば、わうらくは偏頗に陥るべし。逍遙子は談理無功德と説きしにあらず。われは記實の功德を疑ひしことなし。唯逍遙子は談理を後にすべきものとして記實を先にすべきものとし、われは談理と記實とに後先なからしめむとするのみ。

ハルトマンは吾師なり。逍遙子がいはゆる書籍の形したる師なり。わが多くの審美の説を信ずるは輕信ならむも知られず。逍遙子が没却理想の分際よりわれを見ば、まことに未だ河東の地を踏まずして白頭の冢をことなりとする人に似たらむ、また未だジュリエットに逢はずして、ロザリンを慕へるロメオに似たらむ。されどわれは早稲田文學中に聚りたる衆美を見ざらむとして目を掩ふものにあらず。われに示すにハルトマンが審美學のうちにて我が假借し來れる部分を打ち毀すに足るべき無理想の審美學を以てせよ。われは頃刻も躊躇せずして無理想派に與すべし。

早稲田文學の美を一堂に聚むるや、實を先にして理を後にせむといふ。われその美なる實（こはハルトマンが審美學にはなきものなり）を聚め來りて、一世の傾向を醸し成したる曉を待ち得て、逍遙子が無理想派審美學を聞かむを願ふこといと切なり。

亦た疑はず。されど耳を掩ひて理を聞かざるものありといはゞ目を閉ぢて實を見ざるものありともいふべし。われ嘗て文を學ぶものに告げていはく。洋學先生の教固より聞くべし。漢學先生の教も聞かざるべからず。我國文の格式に至りては、宜しく和學先生の前に叩頭して其教を奉ずべしと。されば我が早稲田文學の聚美の堂を指ざして、あれを見よといはむ聲も、或は全く無功德にはあらざるべきか。

逍遙子のいはく。人間の文明史は衆我競争の記録ならむ。われ豈衆我を排せむや。されど衆我にも差等あり。その最下なるものは理想を闘はずことをせずして憎悪を闘はず。火を放ちてこの詞林の荆棘を焚かむか。うの理想の美をも併せて灰燼とするに忍びず。われは他の衆我をして相見じめむがために文學的博物場を開いたり。若し衆我をして一和せしめむとせば、われに衆我を容れて餘ある宇宙大の理想なかるべからず。われ未だこれに當るに違あらずと。

人間の文明史を衆我競争の記録なりとの言はいとめでたし。ハルトマンがこゝ葉に、哲學の歴史は古今に亘れる對話なりとあるも同じこゝろなるべし。逍遙子はこれを知りて、その競争をして俎豆の間にのみ行はれしめむとし、衆我の旗鼓の間に相見えむとするを容さず。

歐羅巴の平和はタルラン、メツテルニヒが手にのみ握られたりしにあらず。拿破崙が戰畧、ブリュッヘルが兵威こゝ大勢を左右することを得つるなれ。

最下の衆我にはげに憎悪を闘はずものあらむ。されど彼輩もわれ汝を憎むとはいはず、必ずわれ是なり、汝非なりといふ。これに對して皆是皆非なりとのみいひて、偏執ありて憎むものにも、公平にして憎まるるものにも同じ權利を與ふるものは没却理想なり。論理を奉じて批評の道を行ふものは則ち然らず。是を是とし、非を非として、かの憎悪の筆鋒を避けず。玉石を併せ焚かばこそ、崑山の火をも嫌はめ。淘汰して玉を存する批評の道は必ずしも無益ならじ。わが審美の標準には過失もあるべく、わが論理の繩墨には錯誤もあるべけれど、山房の論文豈理想の美を焚く火ならむや。

逍遙子の文を好める、早稲田文學の中に文學的博物場を開いたり。わが武を尙べる、わがはかなき草紙の裏に筆戰墨闘の庭を設けたり。彼は積極なる教育の道を履めれば、陳列して審査せざる傾あ

り。かるが故に世には早稲田文學を講義録のみなりといふものあり。我は消極なる批評の道に由れば、緒に觸れては言へども科を立てては説かざる傾あり。かるが故に世にはわが草紙を過激なる書なりとれもふものもあらむ。われは敢て批評を以てかゝる草紙の本色なりとはいはず。われは敢て講義を以て注疏の書として行はるる筈のものなりとはいはず。われは唯記實と談理との後先なく並び行はれむことを願ふのみ。

逍遙子は衆我をして一和せしめむには宇宙大の理想なかるべからずといへり。製作の上にてシエクスビイヤの理想を大ならずとする逍遙子が、感納の上にていかなる大理想家あらむとれもひて、これに文壇を一統する任を與へむとすらむ。かゝる文壇の慈氏、詞場のメシヤスは果していつか出現すべき。獨逸にレッシングといふものありき。彼は筆戰の間に名を成して、屍を馬草に裹まむの志を曠うせざりき。わが平生欣慕するところは是れ。

逍遙子のいはく。われは談理を獨人佛人の流を酌むものに委ねて、みづから「アングロサクソン」の常見を師とせむとするのみ。されば記實を先にして談理を後にすとはわが上をいへるに過ぎず。われ未だ曾て談理を斥くべしといひしことなしと。

こは因明にいはゆる自比量なれば、その後にはすべしといふ談理も早稲田文學の談理に限りたるべし。さるを逍遙子が談理の事を言ふや、毎に全文學界の談理を指す如し。所謂衆理想、所謂萬理想、所謂分析の理論、所謂小理想、所謂小理屈、所謂杓子定規等是なり。わが逍遙子が言を自比量と看做さずして其比量と看做すはこゝを以ての故なり。

逍遙子が言にいへらく。分析の理論は味者に益せずと。そが分身なる小羊子はいへらく。明治文壇

を碁盤と見立て、詩歌小説の魂膽を機械的遊戯とごつちやにし、棋將碁うち混ぜたる入法外の差出口、五ならべの初心者をつかまへても、初より八段に桂馬飛せさせむと肝を煎り、まだ歩もつかぬ盤面に指さして、うれ王手をと氣を焦燥ち、嗚呼この堂々たる手の裏に、金は無いが、銀將無きかとうれたがり、今にして、斷ち截らずば、末を奈何と懸念貌、仔細らしく意味取りちがへて濫用する圍棋詞の粘、塗、抑、約いと五月蠅しと。是れ昧者、初心者に向ひては談理の甲斐なからむとて、これを斥けむとする心をあらはしたるものにあらずや。

ねなし小羊子は又云へらく。詩人は生ると古人もいひき。天稟ならむは教へずとも大なる詩人となりぬべし。野に生ふる花卉の麗しき、青山の自然の風姿、白水のたのづからなる情韻、豈人間の所爲ならむ。その底蘊は天稟にあるべき詩歌小説を、杓子定規の理窟詩にて作り出さむこと覺束なし。理窟でこねては新粉でもうまい格好は出来ぬ例、所詮は手錬と胸とにあるを、生ざりの指南、邪魔になるとも盡未來益に立ちさうな害もなしと。又云へらく。天成の詩人に向ひて生中の小理窟を指南せむは、猿廻與二郎に聞きかぢりの老莊が教説き聞かせて一時の惑を醸すに同じと。こは詩人に對して理を談ずることの、邪魔になりても益には絶ててならざるべきを説きて、談理を斥けむとする心をあらはしたるものにあらずや。

談理既に昧者に益なく、又天成の詩人にも益なしといふ。さらば天成の哲學者、理論家などにも亦たたうらくは益なしといふに至らむ。かくても談理を斥けずといはるべきか。

われれもふに總ての學問は人を益するを待ちて纔に成立つとも定めがたかるべし。談理まことに毫釐の益を文壇に與ふることなからむか。われ未だ輒ちこれを斥けむとせざるべし。そは兎まれ角ま

れ、昧者初心ものといはるゝ人にも俯して教を受くるものと、仰いで言を立つるものとあり。早稲田文學が教育の道は俯して教を受くるものには直に影響すべしといへども、昧者にしてみづから其昧を曉らず、仰いで言を立つるものに向ひて、汝は昧者なり、我が聚美の堂に來りて看よとのみひて、うの効あるべきか。

われはかいなでの詩人に向ひて、大詩人になれともいはず、又大詩人に向ひて審美の理を談せむともせず。されど苟も言を立つるものに逢ふときは、昧者と雖も打ち棄てれくことなし。早稲田文學にして其記實を以て理を聴くこと初發心を作るといはず、われはまた我が談理を以て美を觀ることの初發心を作るといはず。

逍遙子また言へることあり。われは空理を後にして現實を先にす。現實に對するに空理を以てしたるは、佛家のいはゆる色即是空の空なるか知らねど、よの常の用語に従ふときは、こゝにても實を揚げ理を抑へたるに似たらむか。

逍遙子のいはく。美のこゝろを碎いて理に入るべきことをば、われ非せしことなし。これを非せしやうにおもはれたるは、沒理想を無理想とせむはれたるがためなりと。

逍遙子が沒理想は無理想にあらずして、沒却理想なることは既に聞きつ。されど逍遙子はその沒却理想の立脚點より談理を斥くるものなり、談理の後にすべきを説くものなり。かの美のこゝろを碎いて理に入りたる審美論、豈ひとり斥けられざらむや、豈ひとり後にすべきものとせられざらむや。

逍遙子のいはく。われは記實を以て徐々傾向を誘致せむとす。これ一種の持藥なり。難ずるものは

何爲ず劇薬を投ぜざるといふ。嗚呼、かれ等は劇薬のいとく用ぬ易くして、人間を益しがたき理を知らず。何ぞ共に醫道を語るに足らむと。

記實は果して持薬なるか。談理は果して劇薬なるか。劇薬は果して用ぬ易くして、人間を益しがたきか。劇薬の是の如くなるは果して談理に似たるか。われは逍遙子が我を以て共に醫道を語るに足るものとなすや、あらずやを知らず。されど我國の醫史に據れば、温補の方盛に用ぬられて、漢醫の道衰へたるを、吉益東洞、永富獨嘯庵の輩起りて、古方を唱へ、劇薬を用ぬ、一度は廻瀾の功を奏しき。今の西曆第十九世紀の醫道に至りては、おろくは復た持薬の名を口にするものなからむ。われは固より譬喩の跛足になり易きを知れば、こゝに持薬劇薬の事を論ぜず。われは唯逍遙子がこゝにても持薬に譬へたる積極なる教育の道を以て人間を益し易きものとし、劇薬に譬へたる消極なる批評の道を以て人間を益し難きものとしたるを認るのみ。われは唯逍遙子が劇薬なる批評の道を用ぬ易きものとして人に委ね、これれ奮ひて持薬なる教育の道の用ぬ難きに當りたるを記臆しおかむのみ。

逍遙子のいはく。烏有先生はわが常識といひ、「コンモン、センス」といひしを難せしが、わが然か言ひしは常識哲學の事にあらず、造化人間の事をこの物によりて料理せむとせしにあらず、われは我が記實の務をなすに當りて、公平なる着眼によらむといふのみ、愛憎を離れたる常の判断力を以てせむといふのみと。

常識の公平なる着眼の義なることは此解を得て知りぬ。常識の公平は愛憎を離るゝより生ずるなるべし。われは没却理想の公平を願ひて立ちしものなるべく、愛憎を離れむとして立ちしものなるべし。

きをわもへり。されどわれは没却理想の愛憎を離れて公平に至るをば、顯象世界を撥無したる上の事となすを以て、没却理想の見、即ち逍遙子の見を以て常人の判断力とすることの當れりや、あらずやを疑ふ。

われも亦た公平ならむと願ふものなり、愛憎を離れむと欲するものなり。されどわれは論理を守りて是非を立つ。かるが故にわが公平とするところ、わが愛憎を離れたりとすることは、是を是とするにあり、非を非とするにあり。われは敢て衆理想皆是なり、皆非なりとはいはざるなり。

逍遙子のいはく。われは世界に想絶無なりと説かず、また想みちたりと説かず。烏有先生は想みちたりと斷言す。われは未だ大理想を得ざる消極なり。烏有先生は既に大理想を得たる積極なり。かるが故にわれはれもむろに記實の事に従ひ、烏有先生は進んで談理の筆を揮ふと。

逍遙子はまことに造化の有理想無理想を定めず。ハルトマンはまことに造化の有理想を定めたり。されど逍遙子を以て未得大理想とし、ハルトマンを以て既得大理想とせむはいかか。

われ未だ没却理想を信じて、この禿たる談理の筆を擲ち、逍遙子が驥尾に附いて、記實の事に従ふこと能はずといへども、逍遙子は既に没却理想を立てたれば、これも既得大理想といふべきものにはあらざるか。ハルトマンが其無意識哲學を作るや、辨證ヂヤレクチョウの一道を避けて、歸納演繹の論理を用ぬき。ハルトマンは是を是とするものなり、非を非とするものなり。その造化有理想といひて、造化無理想といふものにも、造化有理想にあらず、無理想にあらずといふものにも反きたるはこゝを以てなり。逍遙子が没却理想、若し眞能立ならば、その理想の大なること、豈ハルトマンが比ならむや。ハルトマンが系統の如きものは、所謂衆小理想の一つとして、逍遙子が大理想に併呑せらるべき

のみ。

われ嘗ていはく。われは且く鳥有先生に代りて、山房に居て文を論ぜむと。こはまことに山房論文の縁起なり。わが頑冥なる、今の文學界に立ちて評論を事とすべき器にあらず。平生少しく獨逸語を解するを以て、たま／＼ハルトマンが審美學を得てこれを讀み、その結象理想を立て、世の所謂實際派をわが系中に收め得たるを喜べるあまりに、わが草紙を機關として山房論文を作るに至りぬ。されば論文のはじめの篇にも、逍遙子が批評眼をのぞくに、ハルトマンが眼鏡を以てせばやとことわりたりき。

逍遙子はわれを以て鳥有先生なりとし、われを以て既に大理想を得たるものとし、われを以て胸に

一系の哲理あるものとして、讚歎至らざるところなし。嗚呼、是れ果してその真心なるか。

われは鳥有先生にあらず。われはハルトマンの鳥有先生が逍遙子の言を聞かば斯くいふべしとおもひ量りて、沒理想の評を作りしのみ。

われは哲學系統を有するものにあらず。されどわれは哲學系統なくして理を談ずることの何の不都合もなかるべきを信ず。レッシングは人のために歐羅巴第一の批評家といはれき。レッシングが談じたる理は哲學に好材料を與へき。されどレッシングは哲學系統を立てしことなし。あらず。或時は哲學系統を立つることの詩人にはふさはしからざるを論じて、普魯西學士會院の懸賞募文を非難するに至りぬ。

わが頑冥なる、曷むぞ敢てレッシングを以てみづから比せむや。されどわれもレッシングも文壇に立ちて談理の業をなすものなり。わが第十九基督世紀のハルトマンが唯一論に取るところあるは、

其れ猶レッシングが第十七基督世紀のスピノツアが唯一論に取るところありしがごときか。

逍遙子のわれを鳥有先生なりとして讚歎するや、一種のれもしろき手段を用ひたり。何を何ぞといふにかの小羊子が白日の夢と題したる華文是なり。逍遙子はうの初にわが來しかたを説きつ。是を低級の談理界とす。譬へば猶ほ一知半解の禪のごときものならむ。ここに使はれたる自嘲の筆法は上に引いたる節々（談理を斥くる證）にても、その一斑を知るに足らむ。逍遙子は次にわが愚痴と題して、白日の夢の塊の縁起を示しつ。塊とは沒却理想系の謂なるべし。是を間級の記實界とす。譬へば猶ほ小乘禪のごときものならむ。この段の終には鳥有先生が事を擧げて、わが沒理想を評せし文をゆかしき琴の音なりといふ。鳥有先生が見地は逍遙子より高しとしたり。是を高級の談理界とす。譬へば猶ほ大乘禪のごときものならむ。逍遙子はわれに微塵ばかりなる推察力を役すること許さむか。逍遙子が自ら記實の間級に居りて、陽には我を談理の高級に祭り込み、陰には我を談理の低級に蹴落したる形迹は、わがらくは掩ふべからざるものなるべし。ある人我に語つていひけらく。釋迦がわが來しかたを説いて提婆達多を罵りしは、罵ることの極めて深きものなり。逍遙子が言も亦罵り得て好からずや。

逍遙子のいはく。われは無理想をシエクスピイアが本體とせず。沒却理想を大詩人の本體とせず。わがシエクスピイア沒理想といひしは、直接に評注の方法に關繫して、間接に詩論に關繫すと。逍遙子はシエクスピイアが本體をも説かず、大詩人の本體をも説かずと。さらばわれも強ひてその本體本領を問はむとせざるべし。逍遙子が沒却理想の詩論（審美學）に於ける關繫を我位地より見たるところをば既にいひぬ。

逍遙子のいはく。バイロン等が作の度量はシエクスピイアが作の度量に劣れり。かなたは解し易く、評し易くして、こなたは解し難く、評し難し。われはバイロン等とシエクスピイアとの優劣、その作の度量の優劣に存ずるとはいはずと。

シエクスピイアとバイロン等との優劣をば逍遙子説かずと。さらばわれもを問はざるべし。さらば逍遙子は常に「ドラマ」主義といふものを唱へたり。その所謂「ドラマ」は作家がその理想を没却して作りし詩なり。既に主義といはず、かく臨時無理想にして作りたる詩を度量優れりとし、さらぬを度量劣れりとするものならむ。叙情詩を作ることバイロン等が如きものは、逍遙子に理想を没却すること充分ならざるものとせらるべく、戯曲を作ることシエクスピイア等が如きものは、逍遙子に理想を没却すること充分なるものとせらるべし。されば叙情詩人は逍遙子がために概ね其作の度量劣りたるものとせられ、戯曲作者はこれがために概ね其作の度量優りたるものとせらるべし。逍遙子はその作の度量によりて詩人の優劣を定めずといふと雖、詩人は叙情詩を作ること慣るゝと、戯曲を作ること慣るゝとによりて、逍遙子がために其作の度量を軒輊せらるゝことを免れず。此の如き待遇は果して公平なる判断力より生ずるものなるか。詩人はその所長を殊にするために、逍遙子が批評眼に逢ひたる時幸不幸あるにはあらざるか。逍遙子が所謂「ドラマ」主義は戯曲に厚くして、叙情詩に薄きにはあらざるか。是れ我問の本意なりき。

逍遙子のいはく。シエクスピイアと近松とは、われ其質必ず等しといはず、その詩人としての技倆必ず同じといはず、二人は皆理想をあらはさざる理想家なりき。英國の小理想家なる評者どもは、或は宗教上に、或は没美學的俗見をもてシエクスピイアを評しき。そのさま群盲象を語るに殊なら

ずしていと可笑し。近松も英國に生れたらましかば、かゝる大出世をやなしかむとれもはると。

シエクスピイアが質、シエクスピイアが詩人としての技倆、近松が質、近松が詩人としての技倆をば、逍遙子言はずと。さらばうれにてもよし。

逍遙子が「ドラマ」主義の審美學によれば、理想を没却してあらはさざるを詩人の旨とす。されば逍遙子はシエクスピイアと近松とが此旨を同うしたるを認めたるなり、シエクスピイアと近松とが「ドラマ」主義に適へるを認めたるなり。

シエクスピイアの作には個想比較的によく、近松が作には類想比較的によくとして、彼を揚げ此を抑へたるは我なり。二者の間に等差を立てざるは逍遙子なり。(逍遙子が等差を立てざるは等差なしとのころにあらず、等差の有無を語らじとのころなりといふ、下の面相の辨と合せ見るべし) 英吉利の評者が逍遙子に嗤笑せられたるは氣の毒なることなり。彼等が果して逍遙子と共にシエクスピイアと近松との間に等差を立てずして、これがために近松大出世をなすに至るべきか、あらざるかは、われこれを断ずること能はず。

逍遙子のいはく。詩文の没却理想は一面相より見て立てたるなり。されば没却理想の戯曲すなはち大戯曲なるにあらず。没却理想の詩文を作るものすなはち大詩人なるにあらずと。

逍遙子が詩文に對する没却理想は審美上の立言なることは疑ふべからず。われは當初これを評して、逍遙子が審美學なりとしたり。

「ドラマ」主義は逍遙子が久しく唱ふるところなり。「ドラマ」の所謂没却理想の詩なることはこゝに辨ずることを要せず。さらば逍遙子は詩文の没却理想を詩文の一面相なりとし、没却理想の戯曲即ち

大戯曲なるにあらざるといひ、没却理想の詩文を作るものすなはち大詩人なるにあらざるといふ。これは没却理想の外に、詩文の面相あるべきを定めねきて、うの面相をばいかなるものとも断らず、以て自家の主義の擴大せらるるを避け、以て詩の質と詩人の技倆とを直評するに至るを免れむとするものなり。

逍遙子は既に没却理想以外に詩文の面相あることを公言しつ。されど逍遙子はうの面相の何物なるかを示さざるのみならず、またその面相のまことに有るべき所以をも示さざりき。よの常の論理に従ふときは、一事物の有る所以を示さざる間は、これを有りと認めずして無しと認むべきものなれば、われは逍遙子が既に指し示したる没却理想を唯一面相なりとして評論することを得べし。若しまた面相といふ語に既に唯一ならざる意義ありとせば、われは没却理想を面相といふを非なりとして評論することを得べし、没却理想を質なりとして評論することを得べし。かゝる評論をなさむ折のわが責は、他日逍遙子が没却理想を併び立つべき第二以上の面相を示したるとき、或はこれを駁議し、或はさきの没却理想を詩文の唯一質としての評論を訂正するにあるべきのみ。

されどわれは今此權利を用ゐざるべし。此權利を用ゐざる上は、詩文の没却理想以外の面相の有るべきことを妄信すべきか。答へていはく、あらず。さらば又詩文の没却理想を逍遙子が審美學なりとしたる評論を取消すべきか。答へていはく、あらず。

逍遙子が没却理想は依然たる逍遙子が審美學なり。その没却作家以外の面相、没却理想以外の面相をば逍遙子不説として顧みざることを得べく、われはこれを不問にして棄ておくことを得べし。唯逍遙子が審美學は復た圓通の道にあらざして、缺陷の論たらむのみ。これを一面相の審美學と謂ふ。

逍遙子のいはく、没却理想はシエクスピイヤが傑作に於いてこれを見る。われはシエクスピイヤが作皆没却理想なりといはずと。

こは逍遙子が平等見も猶ほシエクスピイヤが作中に於いて傑不傑の分を立てたるものに似たり。さて皆没却理想なりといはずとは、傑作は没却理想にして、不傑作は非没却理想なりとのこゝろなるべし。

逍遙子がシエクスピイヤの作中に於いて傑不傑の分を立てたるは、上に所謂度量の大小に同じかるべし。さらば度量の大小は即ち作の傑不傑にして作の傑不傑は即ち理想の没却非没却なるべし。

逍遙子のいはく、シエクスピイヤの衆戯曲家に殊なるは花形の寶鏡の玻璃製の小鏡に殊なるが如し。われはシエクスピイヤの傑作を没却理想なりとすれども、總ての「ドラマ」没却理想なりといはずと。

こは逍遙子が特り没却理想なる戯曲と没却理想ならざる戯曲とを分ちたるのみならず、能く没却理想なる戯曲を作る詩人と、没却理想なる戯曲を作ること能はざる詩人とを別ちたる言なり。

逍遙子はこれによりて作者の高下をば定めずといふ。されど没却理想なると没却理想ならざるに於て、作の度量の優れると劣れるとを知るは、逍遙子が一面相審美學の標準なれば、シエクスピイヤは到底一面相の上の大詩人たるに差支なかるべく、うの他の衆戯曲家は到底一面相の上の小家數たるに差支なかるべし。

逍遙子が没却理想は、當初戯曲の體裁に伴へるが如くなりき。われはこれがために戯曲にして没却理想ならざるものゝありやなしやを疑ひき。今や、没却理想ならざる戯曲あることをば、逍遙子みづか

ら言へり。シエクスピイヤが曲中既に没却理想ならざるものあるが如く、文學史上に名を列ねたる衆戯曲家には、終身一篇の没却理想なる戯曲をも作り得ざりしもの多きなるべし。ハルトマンが如き審美家も、必ずしも戯曲の旨と戯曲の體と相伴へりとはせず。戯曲の旨ありて叙情詩の體をなすものを「ドラマ」的叙情詩と名け、又小説中にも「ドラマ」の旨入りたる多しといへるは、戯曲の旨の戯曲ならぬ詩の體に伴ふべきを示したるなり。戯曲の體あるものに三種を分ちて、一つを叙情戯曲といひ、次を叙事戯曲といひ、次を「ドラマ」的戯曲といひたるは、戯曲の體の戯曲ならぬ詩の旨をも含むべきを示したるなり。獨り戯曲の體ありて「ドラマ」の旨なきものに至りては、ハルトマン等が知らざるところなるに、逍遙子はシエクスピイヤが作の傑出ならざるものたるに然るたぐひありといひ、又衆戯曲家の作に然るたぐひ多しといふ。こは逍遙子か「ドラマ」といふ語のよの常の意義とはいたく殊なるがためなるべし。

逍遙子が「ドラマ」の叙情詩にも、叙事詩にも、戯曲にも、小説にも通すべき意義あるが如くなることをば嘗て論じおきつ。されどこの詩の諸體に通ずるは「ドラマ」の體として通ずるにはあらず、所謂没却理想の旨として通ずるなり。宜なるかな、没却理想ならざる戯曲といふもの出来て、遂に「ドラマ」の旨なき戯曲を現じ來れること。われ是に於いてや、逍遙子が猶ほ戯曲と書して「ドラマ」と傍訓するを怪み、その「ドラマ」即ち没却理想詩と戯曲との限界尙未だ明ならざるを惜みき。逍遙子のいはく、「ドラマ」に大「ドラマ」と小「ドラマ」とあり。大なるものは活差別相を具へ、

小なるものはこれをも具ふることなし。「ドラマ」は没却理想の詩なり。大没却理想詩は活差別相を具へたるが故に、これを没却理想なりとし、小没却理想詩は活差別相を具へざるが故に、これを没却理想ならざるとす。

こは逍遙子がはじめてりの所謂「ドラマ」の體を表し出したる言葉なり。蓋し逍遙子が「ドラマ」は没却理想を以てりの旨とし、没却理想を以てりの體としたるならむ。こゝろみに詩の諸體に就いて、作者の客觀的叙法を用いて、評(感情によれる言葉)なからしむべきものを求むるに、吟體詩には叙事詩あり、戯曲あり、讀體詩には小説あり。りのこゝに入ることを能はざるものは唯叙情詩の一體のみ。

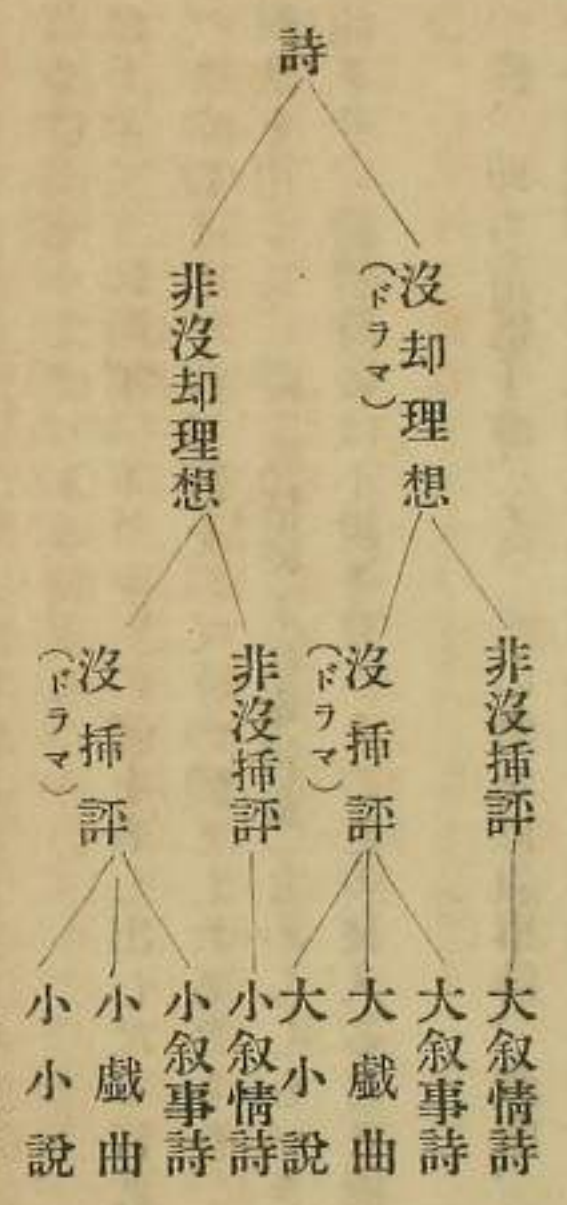
されば没却理想の性、即ち逍遙子が「ドラマ」の體をば叙事詩、戯曲、小説の三つのもの、皆通じて具へたるならむ。今没却理想といふ「ドラマ」の體と、没却理想といふ「ドラマ」の旨との占領すべき審美上の區域を並べ擧ぐるときは左の如し。



さて没挿評の大小、即ち「ドラマ」の大小は活差別相の有無によりて分るといへど、活差別相即活平等相は没却作家即没却理想の現ずるところに過ぎざれば、没挿評詩の大なるものと小なるものと細區別は左の如くなるべし。

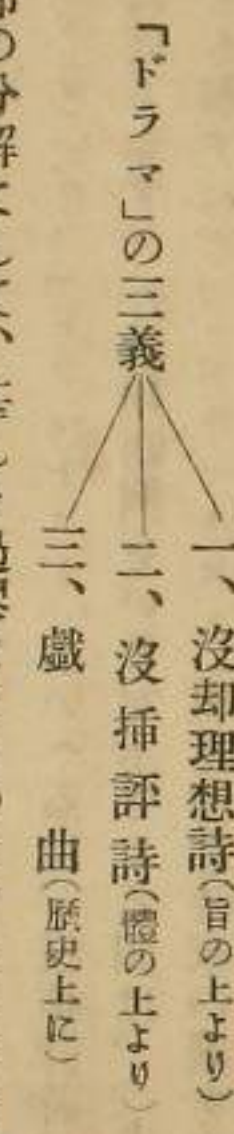


さて没却理想と没却理想との二つを基として、詩の全域を組立つるときは、そのさまればよそ左の如くなるべし。



右の表を見るときは、逍遙子が「ドラマ」の旨なりとする没却理想と逍遙子が「ドラマ」の體なりとする没却理想とは並び存することと並び存せざることとありて一様ならず。旨としての「ドラマ」(没却理想詩)はすべて詩體を通じて、その大なるもの、その傑なるもの、その度量優りたるものを統べたり。體としての「ドラマ」(没却理想詩)は叙事詩、戯曲、小説の三體に通じて、叙情詩に通せず、大小、傑不傑、度量の優劣に至りては、その問ふところにあらず。

われ是に至りて「ドラマ」と戯曲との、逍遙子が用語上に大差別あるを明にすることを得しが、逍遙子が猶ほ戯曲と書して「ドラマ」と傍訓することある所以は、遂にこれを明にするに由なし。或は思ふに逍遙子は「ドラマ」といふ語を三義に分ち用ゐるものか。



若しこの數節の分解にして、甚しき過謬なきものとするときは、逍遙子が用語の變通自在にして逍遙子が立言の殆端倪すべからざりしを知るに足らむ。逍遙子のいはく。われ「ドラマ」の例に鬼貫が俳句と宗吾が實傳と引きしことあり。没却理想即没却理想と解せられしはこれがためならむと。



標草紙の山房論文

わが當初沒理想の語に沒挿評の義を含ませたる逍遙子が言を疑ひしは、沒理想の義、後に沒却理想の義と改まりて、別に沒挿評の義を生じ、遂には沒却理想にして沒挿評にあらざるもの（詩にては大叙情詩）と沒却理想にあらざりて沒挿評なるもの（詩にては小叙事詩、小戯曲、小小説）とを生ずべきを預知するに由なかりければなり。われはまことに沒理想の語に沒挿評の義を含ませたるを疑ひき、されど沒理想即沒挿評とあやまり解せしにあらざり。故わが當時の言にいはく。沒理想は沒理想にあらざりて沒挿評なることあるを見たりと。

逍遙子のいはく。叙情詩人の極大なるは預言者なり。「ドラマチスト」の極大なるは不言の救世主なり。彼も此も沒却理想なり。ざるを我叙情詩に薄くして、「ドラマ」に厚しとやうにいふものあるは違へり也。

こゝに「ドラマ」といひ、「ドラマチスト」といへるは、沒挿評詩、沒挿評詩人にして、沒却理想詩、沒却理想詩人にあらず。この用語例をいまだ示さざる間は、「ドラマ」即沒理想詩の義を沒挿評詩とも無理想詩とも解すべく、「ドラマチスト」即沒理想詩家の義を沒挿評詩家とも無理想詩家とも解すべかりしなり。

逍遙子のいはく。叙事詩の沒理想を取らざるかと怪まれたるは、沒理想をわが好尚の唯一點とれもはれしためならむ。こは人の誤解なるべしと。

逍遙子が叙事詩の沒理想を取らざるかと疑はれしは、うの沒理想の義と「ドラマ」の義とのさだかならざりしためなれば、これを敵智の誤解といはむよりは、立言の失當といふべきならむ。沒却理想は唯一點にあらざりて、一面相なりといへども、敵智の判断に變易なきことは上に辨じたる如し。

逍遙子は烏有先生に向ひて四問をなしていはく。
第一問、先生が戯曲を評して理想見たりといふは、人物の上に理想あらはるといふことなるか。
第二問、押並ての戯曲の上をかくいふか。
第三問、シエクスピイアが理想はうの傑作の全局にあらはれたりといふか。ミルトン、バイロン等が叙情詩の如くに。
第四問、シエクスピイアが理想はうの傑作の全局にあらはれたりといふか。衆戯曲家の作の如くに。

烏有先生の四答は必ず皆一向記を作さむ。
第一答、然り。
第二答、然り。
第三答、然り。
第四答、然り。

さらば烏有先生が皆然りといふは何故ぞ。答へていはく。逍遙子は美の主観情のみを指して想とし、美の客観相を指して非想とすれども、ハルトマンは主客兩観想を立つ。されば哲學者の比量より生じ來るべき美の義は即ち是れ美の主観想なり。美の主観想と共に美の客観想立てばこそ、抽象美（類想）を本尊にしたる舊理想家を排して、結象美（個想）を極致にしたる新理想家にはなりぬるなれ。（審美學第二卷、序九及一〇面）

逍遙子は詩に理想あらはれたるもの（非沒却理想詩、小詩）と理想あらはれざるもの（沒却理想詩、

大詩)とを分てり。うの理想あらはれざるところには、何物かあらはれたる。逍遙子はこれを活差別相及活平等相なりといふ。彼は個物的にして此は因果的なり。個物的にして個想ならざるものは、若し個物の實ならずば、個物の實の摸造なるべし。因果的にして目的なきものは、若し物力の實ならずば、物力の實の摸作なるべし。

ハルトマンは藝術を摸倣の低級に墮落すに忍びず。故藝術の上に個物の實の摸造を立てずして個想を立て、物力の實の摸作を立てずして小天地想を立つ。

逍遙子が非没却理想詩即小詩はハルトマンが類想の詩なり、抽象美の詩なり。逍遙子が没却理想詩即大詩はハルトマンが個想、小天地想の詩なり、結象美の詩なり。

ハルトマンが美は皆想にして、實にもあらず、實の摸倣にもあらず。實相實相と追ひゆくときは、聲も聲にあらず、色も色にあらずといふ極微の論は先に示しつ。實相既にかくの如くんば、これを摸倣したるもの、はた何の聲をかなし、何の色をかなさむ。これをハルトマンが稱く實を立てたる論を破する段とす。(卷二、一乃至三画)

美既に實にあらずといはざる、美は主観にありといふ説必ず起らむ。詩人の詩を空想裏より得來たるや、(内美術品)これを言葉となして、主観より客観に移さで止まむや。(外美術品)若し美は主観にありといはざる、是の如く外美術品の成る所以、遂に解すべからず。今一步を進めて、かゝる外美術品の吟者讀者に主観の美を感得せしむる所以を問はざる、美を主観にありとする論いよ／＼窮せむ。また作者は歳を閲して一詩を成したるに、これを吟じ、これを讀むものは、皆一齊にねなし主観をなすこと一瞬間を出でずとせむか。作者の難と吟者讀者の易との分る／＼所以は、到底美を主観にあ

りとするものと得て解するところにあらず。これを主観想に偏りたる論を破する段とす。(卷二、三乃至四画)

美既に實にあらず、又實の摸倣にあらず、又主観想にあらずといはざる、かの稱く實を立てたる論にもあらず、この主観想に偏りたる論にもあざる第三論必ず起らむ。蓋し主観の美を生ずるは作者の上に限れり。吟者讀者はたのが官能によりて、客観實なる字形若くは聲波を受く。この時に當りて、客観想なる詩の美は、かの客観實なる字形若くは聲波に即きて、吟者讀者を侵すなり。外美術品は客観實なるを以て、自ら美なるにあらず。されど作者のその主観より生じたる美を、外美術品に移したきたるために、外美術品は吟者讀者に美なる空想圖を現せしむべき因縁となれり。美は實にあらず。然れども實に即くにあらずは、主観に入ること能はず。その實に即いたる美の主観に入るに當りて、實より離れたるを美の映象といふ。これを先天によりて實を立てたる論となす。(卷二、五面以下)

譬喩を以ていふときは、稱き立實論は阿含の如く、偏りたる主観想論は般若の如く、先天立實論は法華涅槃の如し。されど造化の上に於いて、阿含の有と般若の空とを法華涅槃の非有非空の裏に收め入るゝには、聖教量に待つことあり。我が審美學の美世界の上に於いては、ハルトマンの鳥有先生が比量猶ほ能く稱き立實論と偏りたる主観想論とを調和するに餘あり。これを我評論の立脚點とす。われ我が立脚點にありて逍遙子が四問を聽かむに、その第一問にて人物の上にあらはるといふ理想は個想を指したるなり。個想のあらはれたるをば、いかでか理想あらはれたりといふべからざらむ。故われは鳥有先生をして答へしめていはく。然り。

第二問に押並ての戯曲の上の理想といふは、類想をも個想をも兼ねていふなり。こゝにてもわれは鳥有先生をして答へしめてはいはく。然り。

第三問にてシエクスピイアが傑作の全局に理想現れたること、バイロン、スワフト等が叙情詩の上にあらはれたるが如くなりやといへるは、叙情詩に見ゆること多き能感の情のシエクスピイアが作にて見ゆること少く、叙情詩に見ゆること少き能觀の相のシエクスピイアが作にて見ゆることを擧げて、情を想とし、相を非想とする見解より、シエクスピイアが傑作をば想あはれたりとし難からむと問ひ究めたるなり。されど我が立脚點よりみるときは、感情は主觀の理想にして、觀相は客觀の理想なり。故われは鳥有先生をして答へしめてはいはく。然り。

第四問にてシエクスピイアが傑作の全局にあらはれたる理想を、衆戲曲家の作の上にあらはれたる理想におなじきかといへるは、類想を想とし、個想を非想とする見解より出でたる言に過ぎず。故われは鳥有先生をして答へしめてはいはく。然り。

逍遙子は第一及第二問に逢ひて、鳥有先生をして然りといはしむるを怪まず。逍遙子は唯鳥有先生が第三及第四問に逢ひて、然りといふを怪むべきのみ。

われ逍遙子に従ひて能觀の相を理想にあらずとせむか。われは乃ちこれを實とするに至らむ。能觀の相を實とする時は、詩は摸實の言語となりて、詩人は摸實の器械とならむ。これ我が忍びざるところなり。逍遙子が論法は能く非想非實をも立つべけれど、(聖教量)わが論法は想と實との間に第三者を容ること能はず。(比量)是を以てわれはいふ、能觀の相は實にあらずして想なりと。われ逍遙子に従ひて個想を理想にあらずとせむか。わがこれを實とするに至るべきこと亦た復た是

の如し。是を以てわれはいふ、個想は實にあらずして想なりと。

夫れ非想とは何ぞや。吾人比量の見を以てするときは非想は即ち實なり。かるが故に吾人比量の見を以て逍遙子が非想論即没却理想論をみるときは、是れ現實主義のみ、自然主義のみ。圖らざりき、逍遙子は覆面したるヅラならむとは。

さるに逍遙子は現實自然といふ表詮比量の我をも立てず、非理想無理想といふ遮詮比量の我をも立てずして、没却理想即大理想、衆理想皆是非といふ聖教量の我を立てたり。何ぞうの見地の高くして遠きや。さる見地にありながら、猶鳥有先生に告げてはいはく。我は漸く學に志せり。今より修行門に入りて素材を蒐めむと。圖らざりき、我が早稻田文壇にこの微行の釋迦を見むとは。逍遙子のいはく。相對の象の絶對の體より生ずる究竟の目的は何ぞと。

ハルトマンの鳥有先生これを聞かば、唯わが無意識の哲學を讀めといはむ。われは唯反問して、衆理想の象の没却理想の體より出沒する究竟の目的は何ぞといはむのみ。嗚呼、我と逍遙子とはいづれか學に志すものぞ、いづれか修行地にあるものぞ。

因にいふ。逍遙子の没理想の語を没主觀、没挿評、没類想、没成心の數義に用ゐたるや、われ山房論文の附録に於いてうの義を取りてうの言を取らずといひき。逍遙子答辨を作りて、われに我が意の違へるを責む。われはこれを讀みて、違へるものゝ我が意なるか、將た逍遙子の意なるかを疑へり。夫れ逍遙子が能立の没理想は一語數義なりしこと、うの能立の「ドラマ」の一語數義なるが如し。われ若しよの常の敵智を以てこれに對せむか。われは唯隨處に立者が自語相違の過に陥りたるを示し、ならむ。さるをわれ一步を立者に譲りて、われ其意を取りて、其言を取らずとい

ひき。こはわが逍遙子を敬するところより出でしなり。されば一語數義の沒理想はみづから違ひたり。(自違)是れ立者の似能立ならむのみ。一語數義の沒理想をばわが違へたるにあらず。(非他違)是れ敵智の眞能破にはあらざるか。(明治二十五年二月)

早稲田文學の後沒理想

逍遙子れほいに後沒理想の論を説き、説き畢りて書をわれにねくりていはく。沒理想に關する論辨はこれにて一旦止むべし。されど汝はわがこたびの論のうちにて難駁を蒙りたるものなれば、正當なる防禦せよといふ。

逍遙子まことにこれのみにて其論辨を止めたらむに、われこれに對して言ふところあらむか。最終の言葉は我口より出づべし。若しわれこれに對して言ふところなからむか。最終の言葉は彼の口より出でし儘なるべし。

最終の言葉を出だすものには、必ず多少の影護きところあり。奈何といふにその敵手の復た言はざるは、言ふべき理なきがためにあらずして、理あれども敢て言はざるがためにはあらずやと疑ふものもあるべければなり。

われ若し逍遙子が書(所謂矢ぶみ)にいへるところに隨ひて、その後沒理想論を駁せむか。これ逍遙子を影護き地位より救ひ出して、却りてみづからねなし地位に陥るに似たるべし。この謀はわがためにいと拙からむ。

勿論逍遙子はわれに防禦せよといひて、われに逆寄せよといはず。わが防がむことをば彼望めども、攻めむことをばかれ望まざるなるべし。然はあれど筆戰墨闘の間にては、防ぐことと攻むることと

の別をなさむこと甚難し。防ぐとは我言の非ならざるを示すなり。攻むとは彼の言の非なるを示すなり。我言の非ならざるを示さむとするときは、勢かれの言の非なるを示さざることを能はず。彼の言の非なるを示さむとするときは、勢わが言の非ならざるを示さざるべからず。

われ縱令逍遙子が言に従ひて、攻めずして防がむとすといへども、防禦のために放つ矢石の敵を傷ること、攻戦のために放てるものに殊ならざるべし。

逍遙子既に復た出で、戰ふころなしといふを、われ若し猶矢石を放ちてこれを傷ることあらば、たとひ我學は我より出でたるにあらずといへども、たとひ我學はかれの矢ぶみもて促し挑みたるどころなりといへども、わが最終の言葉にはねそらくは影護きところあることを免れずして、我謀は到底太だ拙しとせらるゝに至らむ。

今までは逍遙子の時文評論と我山房論文と、まことに戦争をなし居たるものとせむか。わがために謀るときは、最終の言葉を逍遙子に譲りねきて、わが軍を旋らすに若くものなからむ。

然はあれど我が早稲田文學に對して出し、言を顧みるに、ねほよそ三つあり。曰早稲田文學の沒理想、曰早稲田文學の沒却理想、曰逍遙子と烏有先生と。就中初の文と中の文とは到底戦争の文といはむよりは平和の文といふべく覺ゆれば、まことに筆鋒をかなたに向けそめたるは、ねそらくは後の一文ならむ。今われ若し逍遙子の書のいふところに従ひて、最後に逍遙子が言の非なるを鳴らしと止まむとせば、われは影護き地位に陥る如しといへども、われ嚴に批評の區域を守らむことをつとめて、逍遙子が後沒理想論を評すること、嘗てその沒理想を評し、その沒却理想を評せしときを如くならむか。世間ねそらくは能くこれを以て我を累するものなからむ。

夫れ古人は九原より起たしむべきものにあらず。されど吾人は敢て古人の言を評することあり。逍遙子まことに口を噤みて、復た没理想を説かずといへども、われこれを評すること古人の文を評するが如くならば、又何病とすべけん。矧や逍遙子は古人にあらざるを以て、その一旦擲ちたる椽大の筆を、再びとり上ぐることを得べきをや。

われ今この文に題して早稲田文學の後没理想といふ。われは此題の逍遙子に嫌はるべきを知れり。然れどもわれは又此題の逍遙子が論を指して善く中れるを知れり。

逍遙子の始て没理想を説くや、われこれを評するに當りて、其用語を襲用して没理想といひき。没理想は字のまゝに解して無理想なり。逍遙子がそれまでに公にせし文は、我が斯く解することを妨げざりき。あらず、世人の斯く解することを妨げざりき。あらず、世人も我も斯く解するより外に解すべきやうなかりき。後逍遙子は没字に附するに埋没若くは没却の義を以てして、これを無の義に解せしを誤解なりといひき。

世人はいざ知らず、われは没理想を無理想と解して、わが評者たる地位より罪を逍遙子に獲たりとすべきものなりや否や。ねほよそ批評の力の及ぶ所は、評せらるゝ論旨の文字にあらはれたる範圍より外に出づること能はず。逍遙子は世人にも我にも必ず無理想の義なりとれもはるべき没理想の語を用ゐて、別に解釋を附せざりき。而して逍遙子が文は篇ごとに分明なる結末ありき。逍遙子が胸裡たとひ始より没却理想ありきとしても、其當時の文を評するものはこれを推察する責あるべうもあらず。若し文字の上にあらはれたるところに就ての評を誤解なりとせらるゝときは、批評とは隱微を穿鑿する義になりて、遂には比量の境界を脱し、論理の範圍を離るゝに至らむ。危しども危

きことならずや。

逍遙子は胸に没却理想といふ一主義を著へて、これを文字にあらはさず、没理想といふ一術語を製してこれに解釋を附せざりき。これ恐らくは誤り説けるなるべし。説くことの誤りたるを措いて問はず、評することを誤りたりと責むればとて、評者いかでか罪に服すべき。

逍遙子若し我に求むるに其言論を評することを以てせずして、其蘊蓄を評することを以てせば、我批評眼の太だ鈍きがために、逍遙子を以て、はじめ没理想の語を無理想の義に用ゐ、わが鳥有先生の言を引いてこれを評せしを見て、遽に没字に附するに没却の義を以てしたるものとするが如きことなしと言ひ難し。わが逍遙子の意に違ふをも憚らで、穿鑿の評を避け、文字の上に見れたる論の評を作すものは、かゝる危険を犯さるゝこと甚しければなり。

わが没理想を評せし後、逍遙子はその没却理想の主義を示しき。逍遙子はこの主義を示したる後も舊に依りて没理想といふ語を用ゐたりしに、われはこれを評するに當りて、没却理想といひて、前の評に混せざらしめき。逍遙子のいはく、没は没却なり、埋没なり。されど無を絶無、本来無とだにせずば、無なりと解せられても差支なしといへり。われは絶無ならざる無を以て無に非ずとし、多少その有を認めたるものとす。われは本来無ならざる無を以て無にあらざるとし、早晚その有を認めたるものとす。かるが故にわが評者たる地位にありては、此間にねごそかなる限界を設けて、没理想より没却理想に入りたる始終を明にせむとしたること、當然の理なるべし。

今やわれ此文に題して後没理想といへり。これは逍遙子がこのころ説くところの前に説きし没理想にもあらず、中ごろ説いたる没却理想にもあらざることを分明なればなり。われはこゝに没却理想と後

没理想との最著き差別を擧げて、わが命名の根據を定めむ。

逍遙子は没却理想を立て、衆理想皆是皆非なりといひき。われこれを評していはく。逍遙子若しみづから絶對の地位に居り、聖教量を以て言を立てば、かくいひても好かるべし。惜むらくは逍遙子一切世間の法に説き及ばずといひき。此評出で、後、逍遙子は後没理想論を作りて、今までの出世間法に世間法を加へたり。

後没理想の論にいへらく。さきに欲無限の我を立て、衆理想皆是皆非なりといひしは、造化に對し、絶對に對する個人の逍遙なり。早稲田文學の時文評論記者として現世に對する逍遙はやはり有限の我を立て、義務を盡せり。かなたは常にして、こなたは變なり。わが生涯は是の如く二境に分れたりといへり。

逍遙子はこの言を作して、れのれが生涯を、造化の絶對に對する生涯と人間の相對に對する生涯とに分ちたるは洵にさることなるべけれど、評者たる我は此後没理想論の毫も前度の没却理想論とれなじからざるを見る、夫れ衆理想とは何ぞや。所謂理想の何物なるかは姑く問はず。その衆人の懐抱するところなるより見れば、衆理想は言ふまでもなき世間の理想なり、相對の理想なり。この世間の理想に對し、相對の理想に對して、欲無限の我を立てむとしつればこそ、逍遙子は星川子がためには萬理想を踏み付けて儼立したるさま、天台一萬八千尺、碧林瑤草、瓊樓玉闕、烟霧の裏にほの見ゆる如しと稱へられ、我がためにはいとも畏き聖教量によりて言を立てつと評せられ玉ひしなれ。是れ早稲田文學の没却理想なりき。今や逍遙子はその欲無限の我を以て、絶對を研究する天職を竭さむといひ、りの欲有限の我を以て相對に對する料理をなすといふ。されど絶對はれのづからにし

て無限なり。逍遙子が欲無限の我を立てるを待たず。相對はれのづからにして有限なり。逍遙子が欲有限の我を立てるを待たず。絶對に對しては限あらせじと欲し、相對に對しては限あらせむと欲すといふは、唯是れ絶對と相對との別より出でたる自然の境界にて、此間には誰も逍遙子が特殊の面目を見出すことなからむ。是れ今の早稲田文學の後没理想なり。

逍遙子は今後没理想を以てれのれが本意なりとし、評者たる我が嘗て早稲田文學の没却理想論中に於いて、その中に埋没したりし後没理想の生涯を穿鑿し得ざりしを咎めて、これを誤解なりといふ。殊に知らず、相對に對しては欲有限の我を立て、聖教量を潜上なりといふ逍遙子が、嘗て一たび相對なる衆理想に對して皆是皆非の斷案を下し、れのれ欲無限の我を立て、衆理想家を濟度せむとするが如きさまを見せしは、全く是れ誤り説きたるものなるを。

わが此文に題して後没理想といふことの止むべからざるはこれのみにて明なるべし。いでや、これより逍遙子が後没理想の論を評しこころみてむ。

逍遙子は先づ

没理想の由來

を説きて、かたはらハルトマンの審美學と我評論とに及びぬ。

われは此篇を讀みて、始て逍遙子が理想といふもの、解釋を聞くことを得たり。蓋し逍遙子が所謂理想は個人が平生の經驗學識等によりて宇宙の事を思議し、現世の緣起、人間の由來、現世と人間との何たる、此世を統ぶる力、人間未來の歸宿、生死の理、靈魂、天命、鬼神等に關して覺悟したるところなりといふ。逍遙子が所謂理想は個人が哲學上の所見なり。

わが見るところを以てすれば、個人の哲學上所見は比量智なり。詩といひ、美文といふものは現量智なり。若し直ちに比量の所見を詩に入るときは、レッシングが嘗てポオプを論ぜしとき、ルクレツツをためしに引きて詩人の衣を藉りたる哲學者なりと笑ひしにや似るべき。いかなる樂天の詩も、いかなる厭世の詩も、一たび思議にわたりては詩天地より逐ひ出さるべきこと勿論なり。

既に詩を認めて思議を経べからざるものとし、現量智生のものとするときは、作者の哲學上所見は到底明白に其詩中にあること能はざる理由あり。一時の詩興にて浮世を悲しと觀じ、また人間を樂しと觀ずるは、哲學上の厭世主義若くは樂天主義にあらず。哲學上の厭世樂天などの主義を明白にあらはすには、先づ用語例を定めざるべからず。その用語には解釋を附せざるべからず。その用語をば必ず一たび解釋したるとほりに使ひ、他の意味には使ふべからず。その用語のかはりには他の意味同じと見ゆる語を据うべからず。世間豈かく窮屈なる法度を守りて詩を作るものあらむや。

詩人は音響のために言葉を換ふるものなり。詩人は觀相に繼ぐに觀相を以てすれども、意義に接するに意義を以てすることなきものなり。詩人は言葉とことと大小相掩はざる諸譬喩を出すことを好むものなり。詩人は哲學者の如く論理の道を行きて單より複に赴くことなきものなり。これ等は皆詩人の明白に其哲學上所見を詩中に入らずこと能はざる理由なり。

されど詩人はひとりその哲學上所見を詩中に入らずこと能はざるのみならず、またこれをあらはすことを欲せざるべし。われは前段なる不能の理由をも、たもレッシングによりて陳じられたれば、ことに不欲の理由を陳ずるに當りても、又レッシングが論に據らむとす。

レッシングのいはく、哲學上の所見をあらはすには、必ずしもいづれの部分も同じやうに明白なることを要せず。二三の眞理は直に根拠より出づべけれど、その他の眞理は斷案と斷案とを積み疊ねてはじめて出だすことを得べし。この斷案に斷案をかさねて出だしたる眞理は、他の哲學者の立脚點より見るときは、却りて又直に根拠より出づべきものならむ。哲學者は人の塵下に倚ること能はざるものなり。哲學者はたとひ明なる室のみならず、暗き房もありといへども、みづから一家を營みて、うここに安ずべき責を負へり。詩人に至りてはこれに殊なり。その作るところは節々人に入ることを深からざるべからず。一篇の詩には光明透徹して一點の翳あらしむべからず。此故に詩人は快樂を寫さむとするときはエビクウルと共に語り、徳操を寫さむとするときはストアと共に語るべし。セチカ若しその所見の根拠を守りつゝも、詩を作りて快樂を寫さむとしたらまじかば、その果なきさまいかなるべき。これに反してエビクウル派の人若し徳操を歌はむをりには、その徳操といふものゝ姿逐に遊女の姿にあらはるべしといへり。(雜文神學及哲學部一面以下)

作者の哲學上所見は既に明白に詩中に入らざるべきものにあらず。されど常の生活にて歡喜の實感に富めるものは、其審美感の中に樂天の情ほの見ゆべく、常の生活にて悲哀の實感に富めるものは、其審美感の中に厭世の情ほの見ゆべし。これを作者の主觀といふ。

所觀の相と能感の情と互に相出入して、兩者の上に超出せるものゝ成就したる詩を戯曲といふ。ハルトマンのいはく、戯曲の作者は全く個人の主觀(能感)を遠離して、深く曲中人物の主觀に潜めり。個人の主觀の時ありて曲中人物の主觀に入ることあるは、意識ありて入るにあらず、料らずも流れ入るなりといへり。(審美學下卷七四九面)

されば明白に詩中にあらはるべきものにあらざるは獨り作者の哲學上所見のみにあらず、うの詩を作るに臨みて動かしたる樂天厭世の情も亦戯曲などの中に明白にあらはるべきものにあらず。さればシエクスピイアが曲にシエクスピイアといふ個人の主觀のあらはれざるは、唯曲の妙處といふのみにて、戯曲といふものゝ本體に緣起したる性質に過ぎず。わが嘗て没却理想を論ずるに當りて、早稲田文學の没却理想は没却理想にあらずして没却主觀なりとせむはこれに於ての辨に逍遙子は別に論を立て、主觀といふ語を却けつ。うの亞米利加の人エワレットが言を引きての辨にいへらく。吾黨とエワレットとの所謂主觀は私情なり。直現情感なり。平生の談話、愁歎、誹謗、罵詈、辨難等の如き狹隘なる利害なり。叙情詩人はたとひ情感を歌ふといへども、うは公情なり。再現情感なり。主觀の影なり。主觀の映畫なり。傑作中の哀悼、戀愛、慨世、憂國等の如く小利害を脱したるものなりといへり。

わが見るところを以てすればエワレットと早稲田黨との所謂主觀は審美感にあらずして實感なり。美人の畫に對する人の情は審美感なり。活きたる美人に對する人の情は實感なり。劇を観て泣くは審美感なり。民をわもひて泣くは實感なり。こはひとり感納性の上のみにあらず。轉じて製作性の上より説くときは平生の談話、愁歎、誹謗、罵詈、辨難等をありのまゝに言葉にあらはすは實感なり。哀悼、戀愛、慨世、憂國等の詩人の傑作中にあらはるゝは審美感なり。エワレットと早稲田黨との彼と此とを分てるはまことにさることながら、うのあなたを私情なりとし、あなたを公情なりとするは頗妥ならず。うの私情なりとする罵詈、辨難にも國家をおもひて奸民を罵詈し、學術を唱へて迂儒を辨難するが如く公なるものがあるが如く、うの公情なりとする哀悼、戀愛にも個人に對

して動くときは到底私を免れざるものあるべし。又エワレットと早稲田黨とが實感を直現なりといひ、審美感を再現なりといへるは、あなたに實に逢ひて直に起ると殊にて、審美感のハルトマンが所謂約束ある前納 *conditionale Anticipation* として起るを見て立てたる區別なるべし。(審美學下巻四二面) 原來審美感は思議して起すものにあらずして、意識なくして起すものにはあれど、美人の畫に對して起す審美感は活きたる美人に逢ひたらむをりに起すべき實感の約束の前納と看做さるゝことを得べし。かつて戀せしことある人はうの既往の戀の實感を喚びおこして、此の如き前納感をなすべく、まだ戀知らぬ少年はこれの *本能* を役して戀といふものはかくあるべしと思ひ遣りて、此の如き前納感をなすべきは親易き理ならむ。

さればエワレットと早稲田黨との主觀といひ、私情といひ、直現情感といへるものは詩人の實感なり。彼等の主觀の影といひ、主觀の映畫といひ、再現情感といへるものは詩人の審美感なり。

わが詩を論ずるや、常に詩人の實感をば度外視したりき。故にかにといふに詩人も固より人なれば、飢うれば食はむことを思ひ、倦めば眠らむことを思ふが如き實感なきこと能はずといへども、うの實感の直ちに歌ひ出すべきものにあらざるは言ふまでもなければなり。詩人の詩を作るときの主觀は審美感ならざること能はざるは言ふまでもなければなり。

夫れ作者の哲學上所見のあらはるべからざるは詩の本性なり。作者の實感のあらはるべからざるもまた詩の本性なり。詩は初より没却哲理なるべきものなり。詩は又初より没却實感なるべきものなり。逍遙子がシエクスピイアの戯曲を評せし言葉の天下の耳目を驚かしは抑何故ぞや。答へていはく。シエクスピイアの曲を没却理想なりといひければなり。シエクスピイアの曲を没却理想なりとい

ひしを、世の人も我も、プラトオ以來哲學上に多少の定義ある理想を無しとせるなりとおもひければなり。逍遙子が其黨人と共に沒主觀の名を却けて我評を難せしはいと面白けれど、その面白き様なるは抑何故ぞや。答へて云く。わがシエクスピイアの曲に能觀の相勝ちたるをシルレルの曲に能觀の情勝ちたるを説きしを難じて、苟くも大家の作には主觀あるべからずといひければなり。わが所謂能觀の情、主觀の感は審美感にして、古今の審美學者が認めて正當なる叙情詩の部分となしたるものなるを、實感なるべく見ゆるやうに言ひ做しければなり。獨り奈何せむ、逍遙子が所謂理想は作者の哲學上所見にして、その所謂主觀は作者の實感なることを。詩中にはあつからにして作者の哲學上所見をあらはすことなし。逍遙子がその埋没を發明するを待たず。詩中にはあつからにして作者の實感をあらはすことなし。逍遙子が其黨人と共にその埋没を宣言するを待たず。詩の沒却哲理にして又沒却實感なるは詩の本體の當に然らしむべきところなれば、此間には誰も逍遙子と其黨人との特殊の面目を見出すことなからむ。

逍遙子の後沒理想論をなすや、肚裏に沒却哲理詩の義を藏して、筆頭には舊に依りて沒理想の字を寫し出せり。その言にいはく。わが用ゆる如き意に理想といふ語を用ゆること、勿論幾多審美學者が古來用ゐたりたる先例に違背すべしといふ。逍遙子何人なればか、敢て古今の審美學者の一九びも理想といはざりしものを名づけて理想といはむとすらむ。その實感を主觀といへるに至りては、亞米利加の人某が言に基づけりといふものから、そのことさらに古今審美學者の用語例を蔑にして、故もなく新字面を作れるはおなじかるべし。

沒理想の由來といふ文には、又逍遙子がシエクスピイアを究めんとする方鍼を示されたり。逍遙子

はこの段にて更にシエクスピイアが曲を論じて、ハルトマンが所謂曲中人物の主觀(個想)に活差別相といふ名を附したること、作者が能く癖 Idiosyncrasie を避けて無私 Nicht interested sein なるに至りしを所謂理想(實は作者の哲學上所見)の見えずなりたる由縁なりと認めて、これに活平等相といふ名を附したることをこわり、此兩相をシエクスピイアが客觀を評したる言葉なりとし、これにて評し到らざる所謂シエクスピイアが主觀といふものを、おのが十餘年を期して究めまく思ふ神秘なりといへり。

わが見るところを以てすれば、逍遙子はシエクスピイアが詩の全局面に客觀といふ名を附けたる後、更に牆の外なる別天地あるやうにおもひてこれに主觀といふ名を負はせたるなり。逍遙子が所謂シエクスピイアの主觀はシエクスピイアといふ個人の哲學上所見なり。シエクスピイアといふ個人其詩中にあらはざりける實感なり。

おほより一詩人の哲學上所見は、その詩巻中にて求めがたきものにて、その困難は詩の巧なるに従ひて増さり、又詩の叙情體を離るゝと共に加はるものなり。さればシエクスピイアの哲學上所見とりの實感を知らむと欲して、猶りの戯曲をあさらむは、氷を鑽りて火を覓め、沙を壓して油を出さむとするにや似たらむ。かゝる願あるものは速にシエクスピイアが戯曲の集を抛ちて専らその傳記を搜るべし。想ふに、この般の探究は審美學者若くは戯曲を評するものとなすべきところとせむよりは、歴史家若くは傳記を作るに意あるものとなすべきところとすべきならむ。さればわれは逍遙子が十餘年を期したる探究をも、審美上若くは詩を評する上よりは、あまりありがたしと思はず。

次に逍遙子は千八百八十四年に無名氏が作りしシエクスピイア論に見えたるプラトオが理想を擧げて、この希臘古儒の理想を逍遙子自家の所謂理想と山房論文の理想とに比べたり。逍遙子のいはく。プラトオの理想は鴈外の理想にはあらざるかといへり。われ答へて云く。あらず。天地の間には常住するものあり、生滅するものあり。この常住のもの、時間の羈絆を離れたるものならんは、古今の哲學者は敢て理想と名づけざりき。プラトオとハルトマンとは理想を以て時間を離れたる、意識なき思想なりとす。されどプラトオは其理想を體として現世を象とし、彼を實在として此を幻影とせしに、ハルトマンは其理想を非實在として現世に體象あらしむ。われは現世の象後には體ありて實在すとれもふがゆゑに、わが理想はプラトオが理想に殊なり。逍遙子のいはく。わが所謂理想もプラトオが理想の意にて差支なしといへり。われ竊にこれもへらく。逍遙子がシエクスピイアを評するとき用ひし理想といふ語はシエクスピイアが哲學上の所見なり。今の當代の理想（實は哲學風潮なるべし）とすら解すべからざることをば、逍遙子みづからことわりたるに、これをプラトオが哲學統なる世界の實在常住の本體たる思想即ちプラトオが理想に取られても差支なしとは何事ぞ。逍遙子のいはく。わが所謂理想をプラトオが理想に取られても差支なけれど、シエクスピイアの理想（哲學上所見）が抜くべからざる説によりて明證せられざる間は、沒理想（實は沒却哲理）の名目を取除くべき由縁を知らずといへり。われ又竊におもへらく。沒却哲理は詩の須く備ふべき性なり。シエクスピイアの戯曲いかでか沒却哲理ならざらむ。逍遙子理想といふ語を哲學上所見の義に用ひる限は、沒理想の名目、取除けずと雖可なり。唯逍遙子はその所謂理想の一家の命名にして、古今の哲學者、審美家の用語例に違へるを忘れざらむことを要するのみ。

次に逍遙子はシエクスピイアを論ぜし無名氏の語にて圓滿なる意味にての摸倣といへるを紹介せり。蓋し逍遙子は摸倣に高級なるものと低級なるものとありとして、今の高級なるものを神を師とすといひ、今の低級なるものを貌を師とすといへり。所謂圓滿なる意味にての摸倣は神を師とする高級の摸倣なりと云ふなる。

わが見るところを以てすれば、摸倣は必ず低級なるものにて、まことの藝術上の製作は無意識の作用なること屢々論せる如し。無意識中なる神來の製作には、たとひ圓滿といふ「プレチカアト」を添へたればとて、摸倣といふ名を下さむやうなし。摸倣といふ語には着意の義あればなり、有意識の義あればなり。師神師貌の別に至りては漢學者流の套語に過ぎず。また何の辨すべきところかあらむ。

次に逍遙子はシエクスピイアを評せし無名氏が用ひし「レアル」の語を實と譯し、「アンレアル」の語を虚と譯して、其實を鴈外の所謂實におなじとし、其虚を鴈外の所謂虚に適へりとしたり。われは「アンレアル」を虚と譯せずして、非實と譯す。こは虚實の對の我國及支那の談理者に濫用せられたるを嫌ひてなり。現に無名氏の實は我が所謂實に應じ、無名氏の非實はわが所謂虚に應じたれど、兩者全く同じきにはあらず。無名氏はプラトオ論者なりといへば、今の實を幻影とし、其非實を本體とすべく、われはプラトオ論者にあらずれば、我實を實在せしめ、わが非實の想を實在せしめず。

次に逍遙子は上に見えたる實非實の縁によりて、これが活差別相、活平等相の別を立てたることに説き及びて、山房論文に活差別相を個物的なりとし、活平等相を理法的なりと評したるを非なりと

せり。

逍遙子のいはく。活差別相は「ドラマ」の體を観るに國を萬民としてみる如く、地球を五大洲としてみる如くすることにて、活平等相はたなじ體を観るに國を一國としてみる如く、地球を一地球としてみる如くすることなり。差別相は實にあらず。平等相は非實即ち想にあらず。又差別相は個物的ならず。平等相は理法的ならずといふ。

わが見るところを以てすれば、活差別相の「ドラマ」に於けること國を観るものゝ萬民としてみる如く、地球を観るものゝ五大洲としてみる如しといへるは、曲を其中なる個々の人物としてみることに相違なかるべく、活平等相の「ドラマ」に於けること國を一國と觀じ、地球を一地球と觀ずる如しといへるは、曲を一曲としてみることに相違なかるべし。曲を其中なる個々の人物としてみるは、我地位よりしても、かのシエクスピヤを評せし無名氏の實とはしがたし。故いかにといふにプラトオが見るところによるときは、實（即ち無名氏の實ならむ）は創造的 *επινοητικόν* なるものにして、曲中の人物は擬造的 *επινοητικόν* に過ぎざればなり。されど我山房論文にて、曲を其中なる個々の人物として見たる活差別相を、個物的なりといへるに、又何の妄ならざるところかあらむ。さて曲を一曲として見ることに、無名氏の想即プラトオの理想にあらずるは、我地位よりも知らるゝなり。故いかにといふに、プラトオが理想界は天外にあり (*ἐξωκοσμικόν*) といふに、詩人の手に成りたる戯曲は、プラトオが説に據るときは實世界のいやしき摸倣に過ぎざればなり。されど我山房論文にて、曲を一曲として見たる活平等相を、法律の萬民を一國にまごむる如く、地理の五洲を一球に統ぶる如き論理的因果的なるもの *das Logische* と評せしに又何の妄ならざるところかあらむ。

逍遙子は沒理想の由來を説き畢りて、虚設の人物公平入道常見といふものをして

陣頭に馬を立てゝわれに宣らせて

いはく。逍遙が談理を後にするは、汝が記實を後にすると、其本意において相異なるどころなし。逍遙は特に時文評論に對してしこいへるなり。逍遙が世間に向ひての願は記實と談理との前後なく並び行はれむことなり。逍遙は汎く世間に向ひて談理を後にせしめむとせしにあらざといふ。こは談理を後にし、記實を先にすといふ自説を自比量なりとするなり。

わが見るところを以てすれば、逍遙子が沒却理想期の説に、談理は今世に益少ければ後にすべし記實は今世に益多ければ先にすべしとやうにいへるは、特に時文評論に對しての自比量にあらずして、汎く世間に對しての共比量なりとは、逍遙子と鳥有先生とと題したる我評に詳なり。今逍遙子の後沒理想論は談理を後にすべく、記實を先にすべきものゝ時文評論に限れることを明にしたる。その共比量にあらずして、自比量なることを明にしたる。こはまふとに然もあるべきことなり。逍遙子は又常見にいはするやう。沒理想は個人たる逍遙が方便なり。逍遙はこれを以て無限に對し、またこれによりて「ドラマ」を修む。時文評論記者たる逍遙には、別に有限に對する主義の沒理想に非ざるあり。この辨を補説したる假造の人物雅俗折衷之助といふものゝ言にいはく。鴈外は個人たる逍遙と時文評論記者とを混ぜり。これを第一誤解とす。鴈外は絶對に對する逍遙と一種の對相對主義を奉ずる逍遙とを混ぜり。これを第二誤解とす。鴈外は吾人と名乗り出でたる時文評論記者と絶對に對する逍遙とを混ぜり。これを第三の誤解とす。さて有限に對する別の主義のいかなるものなるかは他日沒理想と題したる書一卷をあらはして、逍遙子みづから説くべしとなり。蓋し逍遙子は

こゝにて常見和尚と折衷之助とにその資格とこれの對絕對及對相對の兩生涯を告げさせしなり。われは先づ逍遙子の具足したるくさくさの資格を審査せむ。逍遙子の個人たるや、その肚裏に絕對に對する沒理想（實は哲學上若くは形而上論上無所見）とシエクスピイヤが戯曲に對する沒理想（實は作者の哲學上所見の沒却）とを蓄へたり。逍遙子の時文評論記者たるや、現世の相對に對する腹稿の主義を蓄へたり。この區別をば早稻田文學にて、常見和尚と雅俗折衷之助との二人かはるく、陳じたり。さるにおなじ早稻田文學の別處にてあやしきことこゝり出來したれ。何を何ぞといふに、かの相對に對する腹稿の主義を懷きて、現在の小宇宙に對する處分をなすといふ資格の逍遙子は忽ち主人となりて一家を治むるものとなり、人民となりて國に對するものとなり、教師として學校に勤むるものとなりぬることこれなり。われおもふに一家を治むる主人は個人なるべし、國に對する一個の人民も個人なるべし、學校に對する一個の教師も個人なるべし。時文評論記者にあらざるべし。されば雅俗折衷之助はこゝに至りて、個人たる逍遙にも、絕對に對する沒理想（形而上論上無所見）とシエクスピイヤが戯曲に對する沒理想（作者の哲學上所見の沒却）とを奉ずる個人逍遙の外に、腹稿主義を奉ずる個人逍遙あることを示したるなり。こゝに逍遙子の諸資格を總括するときは、第一、兩種の沒理想を奉ずる個人逍遙。第二、腹稿主義を奉ずる個人逍遙。第三、腹稿主義を奉ずる早稻田文學記者たる逍遙。以上をばより三種とす。いでや、これより上に列擧せられたる三種の誤解といふものを辨じ試みむ。

假に一步をゆづりねきて、逍遙子の三資格に明なる區別あるとき、評者はこれを守るべきものとせむか。所謂第一誤解の條に見えたる區別はいと覺束なきものなるべし。故いかにといふに個人たる人なるどころ相同じければなり。さて第二誤解の條に見えたる區別も亦いと覺束なきものなるべし。故いかにといふに對絕對逍遙は記者をなさずといふといへども、個人逍遙は對相對なること記者にねなじき時あればなり。

逍遙子の三資格の區別は、その明ならざることは是の如し。されどたとひ此區別明なることありと雖も、そのいろ／＼の資格にありて唱ふる論を、かれこれと併せ考へて、わが批評眼のりのすべの資格に通ずる論なることを認むるときは、批評の上にて復た論者の諸資格の區別を顧みざることあるべし。されば逍遙子まことにわれを以て人を誣ふるものとし、常識なきものとし、資格を重ぜざる時弊に染みたるものとなさむとすときは、宜しくわが逍遙子の諸資格の區別を顧みざりしを證するを以て足れりとせずして、これの諸資格の區別の明なりや、あらずやを考へ、次にこれの論旨のこれが諸資格に通ずるや、あらずやを考ふべし。

われはこれより逍遙子が對絕對及對相對の兩生涯に及ばむ。逍遙子が對絕對生涯はその後沒理想期に在いては、絕對に對して哲學上乃至形而上論上に見る所なきことを指示するに過ぎず。その欲無限の我といふものは無限なる造化を無限ならしむといふに過ぎず。この地位の事に關しては、下方にて雅俗折衷之助が軍配に對する我が反擊の條にしるすところを參看せよ。

さて逍遙子が對相對生涯は其腹稿のみの主義なれば今これを評せむすべを知らず。われは唯此腹稿主義の山房論文の逍遙子に向ひて世間法を求めし後に出でたるものなることを記憶しむのみ。常見和尙は又いはく。逍遙は迷惑して立脚地なし。鴈外はハルトマンの哲學といふ立脚地あり。さるに逍遙が鴈外の理想の何物なるかを問ひしとき鴈外がこれに答へざりしは不親切なりといふ。わが見るところを以てすれば、理想といふ語はプラトオよりこのかた今の第十九基督世紀に至るまでくさくさの變化をなしたり。逍遙子若し我に理想の何物たるかを問ひたらまじかば、我は唯今の第十九基督世紀の形而上論の理想なりと答へしならむ。われは逍遙子が如く古今の哲學者乃至審美學者の用語例に違へる用語例を創設するものにあらねば、かゝる間に答ふるには許多の言葉を費さざるべし。

されど逍遙子はいまだ明にわが理想といふものを一の用語として問ひしことなし。逍遙子は唯相對の象の絶對の體より生ずる究竟の目的は何ぞと尋ねつることありしに、われ答へて、ハルトマンの烏有先生これを聞かば、我無意識の哲學を讀めといはむ、われは衆理想の象の没却理想の體より出沒する究竟の目的は何ぞと反問せむのみといひき。れもふに我を不親切なりと難ぜらるゝは、わが草紙のハルトマンが無意識哲學を鈔録し若くは講述せざるがためなるべし。

難波津に藤村居士といふものありて、教育時論に一篇の文(一元論と二元論)を載せ、われにおなじやうなる詰問をなしていはく。逍遙子汝に問ふところありしに、汝は顧みて他をいひ、思想の化石になりたる書籍に問へなどいへるは、討論の常法を失ふものなりといへり。われは果して逍遙子に對して不親切なるか、討論の常法を失ひしか。「ハルトマン、リテラツウル」

は廣大なり。中に就いてハルトマンが親ら書きしものゝみを讀みても一朝にして讀み盡すべからず。今の無意識哲學の如きはハルトマン自ら認めて我哲學の期程 Programmi に過ぎずとせり。われ若し我草紙にて無意識哲學を講ぜむとせば、果して幾歲月をか要すべき。われ若し我草紙にてこれを鈔せむか。ねうらくは近時坊間に行はるゝ哲學史中の一段に似たるものとなるべし。これをば齋令忍ぶべしとあきらめても、かゝる講説、鈔録は詮ずるところ彼のハルトマンが原書とれなく、思想の化石とせらるゝことを免れざるべし。さればこゝ我は烏有先生をして無意識哲學を讀めと答へしめしなれ。我親切こゝはこれのみにて足らんずらめ。矧や逍遙子は早くよりハルトマンが無意識哲學を帳中の秘となしたるをば、我に語りしものあるをや。又討論の方法につきては、われ常に敵手をしてその出でむと欲するところに出でしめ、強ひて正兵をもてせよともいはねば、又あながち奇兵をもてせよともいはず。されば早稲田方はいかなる手段を用いて、いかなる方角より攻寄すといへども、うはわが問ふところにあらず。獨りかなたにては、我討論法に不親切なるところありと認め、或傍觀者も亦これと共に我討論法の過失を責む。われこれにねどるかされて窃にうの當れりや否やをねもふに、逍遙子がわれに問ひしところのハルトマンが哲學系の世界究竟の目的をば、われ必ずしもこの紙上に寫し出すべき責なきに似たり。かの逍遙子がみづから無意識哲學を藏して、又みづからこれを讀む眼を持ちたること、かの逍遙子が隨信行を須たずして隨法行を作し得べき人なることは既に我責を輕うするに足るものなれど、われは姑くこれを度外に措き、進みて今の世の學者の間にて、言論の争をなさむとするとき、いかなるものを互に知りたりと預期すべきかを問はむとす。苟も今の學者として、哲學上の論戰をなさむとするものは、近世のれもなる哲學

告げむ。うの嘗て示したる一面といふものは審美上には全體をなすべき筈のものなることを。うの認めたる第二面の神秘はもとより審美學の範圍外にあるものなることを。和尙われに問うていはく。没理想（實は形而上論上無所見）の語を造化に對して方便として用ゐるは可なりやといふ。

われはこれに對して諾ともいふべく否ともいふべし。いかなればか我は諾といふことを得る。答へていはく。逍遙子が理想は哲學上所見の義なり、形而上論上所見の義なり。逍遙子が一時の方便にてこゝに見るところなしといはむは固より勝手たるべし。さて此義を語るに没理想の三字を用ゐるは、あまたの不利あるが如くなりといへども、必ずしも他人の遮り留むべきことにはあらず。かるが故にわれはしばらくこれを諾して、うのこれを用ゐることの不利を告げられかむとす。第一、没理想の理想を常の義に取られ、没をも常の無といふ義に取らるゝときは、造化に永劫不滅のものなきやうに解せらるべし。是に於いてや、逍遙子の懷疑 *Skepticisms* は認めて虚無 *Nihilismus* とせらるゝ虞あり。第二、逍遙子は文學界に於いて大勢力あるものなれば、うの造語の流通するに至らむことは疑ふべからずとしても、古今の哲學者及審美學者が用ゐられたる理想の語は矢張うの用ゐられたる義に使はるゝこと止まざるべく、逍遙子は斷わらずこれと戦はざることを能はず。うの没字に附するに埋没の義を以てせむとするについても、亦漢字の義を論ずるものと永く相抗せざるべからず。さらば又怎なればか我はこれを不可とすることを得べき。ねほよ造語はその必要ありてはじめて造らるべきものなり。こゝに個人ありて、われ形而上の事については少しも見るところなしといはむがために一新語を造れりとせむか。われは將にうの不必要なることを言ふを憚らざらむとす。あ

ほよそ造語はうの既往の歴史を以て人の寛恕を得べき權利なきものなれば、うのこれを造るに當りて鄭重なる商量をなさざるべからず。こゝに文人ありて解しがたき文字、若くは錯り解し易き文字、若くは解釋を附するにあらでは毫も解すべからざる文字、若くは解釋ありといへども尙且解しがたき文字を聯ねて新に語を製せむとせば、われはうの不可なることを鳴らすを憚らざるべし。造化に對する没理想の如きもの即是なり。

和尙重ねて問うていはく。さらばシエクスピイヤが作の客觀（實は曲の全體）を没理想（哲學上所見の没却）といふは可なりや、奈何。

答へていはく。逍遙子既にシエクスピイヤが曲の全體を客觀となづけ、哲學上所見の没却せらるゝことを没理想となづけて、さてうの所謂客觀の没理想なるを説けるは義に在りて不可なることなし。故いかにといふに詩は固より實感をあらはすべきものにあらずして、シエクスピイヤが曲は充分に詩の約束を具へたるものなればなり。されどこの意味にて没理想といふ語を使ふことにつきては、われ諾して而して又否まむとす。その理由は上に造化に對する没理想のために辨じたるが如し。和尙は次に時文評論の記實主義の自比量なるか、共比量なるかを問はれしが、うはこなたに向ひて問ふべきことにあらざるが上に、既にこの篇のはじめにてもこれにつきて一言しつれば、今復別に答ふべきところなし。

公平入道常見が陣頭の宣言畢りて、逍遙子は又英和字典膳といふ假設人物を出し、これにいと勇ましき軍歌を歌はせ、うの響と共にわが論陣を攻めたるが、その時の雅俗折衷之助が

軍配

に對するわが反撃は左の如し。

折衷之助が先づ言ひしは逍遙子が對絕對及對相對の二生涯の差別なりき。されどこれに就きては既に辨じおきたり。ここには唯逍遙子が對絕對地位の説明を擧げて、聊又これを評せむ。

折衷之助のいはく。逍遙子が對絕對の地位を始の空といふ。これは終の空に對していふなり。又始の絕對といふ。これは終の絕對に對していふなり。又覺前の空といふ。これは覺後の空に對していふなり。

この地位は立脚點にあらずして數學點なり。(これは城南評論記者に對して逍遙子自ら言へるなれど、折衷之助が言葉の中には立脚點ともいへること時文評論にて見るべし)この地位は靜坐にあらずして動くべき性を具へたるものなり。この地位は停りたる水の如し。唯今のいづかたに流るべきかを知らざるのみ。この地位は「タブラ、ラザ」なり。心頭の印銘はことごとく消除し去れり。この地位は發程なり。終の空、終の絕對の歸着處なるに殊なり。この地位は未生なり。覺後の空の死して空に歸したるが如きに殊なり。覺前空の無明にして不知なるや、覺後空の知にして覺なるに殊なりと雖、衆理想(衆人の哲學上所見)はいづれより見ても皆是皆非なりといふ。

われは逍遙子が絕對に對する沒理想といふものゝ形而上論上の無所見に過ぎざることを認めき。ここに示されたる、許多の異名ある覺前空は要するに無所見の説明に過ぎず。されど其用語といひ、其引論といひ、一つとして人の耳目を驚かさざるものなければ、われは今の説明の當れりや否やを評することの無益ならざるを信ず。

覺前空は覺後空に對していふなり。さて覺後空をいかなるものと問ふに、逍遙子はこれを覺といひ、知といひ、悟道徹底といひ、聖教量といへり。思ふに逍遙子は聖教量にあらずして衆理想(衆

人の哲學上所見)を是ともせず、非ともせざるものは何かあると捜し求めて、つひにこの「タブラ、ラザ」を獲たるなるべし。此の如き人心の「タブラ、ラザ」は、われらの心理上に不可得なることを知ると雖、ここには姑く今の存在を認めて、これを有したりとれもへる逍遙子が上を評して見む。

逍遙子は其覺前空の地位に住して、われはいづかたにも進むことを得べしといへり。されど逍遙子にして試に一步を動して見よ。この一步形而上派に近づきたるときは、忽ち經驗派のれに反對せるを見む。この一步經驗派に近づきたるときは、忽ち形而上派のれに反對せるを見む。逍遙子は到底學問の比量界にありて歩々の進前をなし得べきにあらざること、これにて明なるべし。さらば逍遙子はいづかたにも歩を移さざらむか。我は恐る、逍遙子が徒に心の虛無におち入りて、無明窟裡に今の生を了せむことを。

さはれ逍遙子は其覺前空の地位に住して、われをば何人も倒さじ、わが沒理想(形而上論上無所見)をば誰も破らじと誇りて、別にわが望める轉迷開悟の途を示したり。今の言にいはく。わが沒理想は南山の壽の如く、かげず崩れざるべく、不壞金剛の磐石の如く、芥子劫に亘りて依然たるべし。わが論は宇宙をねなじく、萬理想はわろか萬哲學系を容れて餘あり。絕對無二の大真理が古今の哲學を殘なく折伏し、融會し、若くは悉く併呑統一して宇宙を貫き、太陽系を花鬘ともし、「チブテユン」の軌道をば靴紐ともし、無上無比不増不減の妙光を發ちて、如々然としてあらはれざる間は、此方便的沒理想の魂魄は彌勒の世は來るとも「ミレンニヤム」は到るとも、時間と共に無終無極無盡無窮なるべしとなり。

げに天晴なる廣言なるかな。逍遙子をばまことに何人も倒さざるべし。後沒理想論をばまことに

誰も破らざるべし。然はあれど我竊にれもひ見るにうの如倒さざるは、倒すべからざるものあるが故にはあらずして、倒すべきもの見ざるが故なり。うの如破らざるは、後没理想主義の轉ばすべからざる巖に似たるためにはあらずして、捉ふべからざる風に似たるためなり。譬へば地に横れる人の如し。誰か得てこれを倒さむ。又空屋の如し。盜何のためにか入らむ。善いかな。奪ふべからざる立脚點は立脚點なしといふ立脚點なり。善いかな。争ふべからざる形而上論は形而上には見るところなしといふ形而上論なり。

われは前段にて逍遙子が一步を動かすことに、必ず敵を得べきことを示しつるが、この段に至りて見れば、逍遙子は決して哲學の比量界に居らむとする人にあらず。逍遙子が未來には唯左の三途あるべきのみ。第一、上に示したるが如く心の虚無を以てその主義とし、永くうの「タブラ、ラザ」を守ること。第二、これの無二の大眞理を産み出づること。第三、無二の大眞理のこれが外より來るを待ちて、うの所謂數學點より目覺ましき檀溪の一躍をなしてこれに就くこと即是なり。

さらば逍遙子の第二若くは第三種の地位を得て、心中に無二の眞理を懐いたるときはいかならむ。ここに又三法あり。第一、個人たる逍遙子無二の眞理を懐きて止むこと。第二、逍遙子人間に向ひて、わが言ふところは眞理なれば爾等これを信ぜよといふこと。第三、逍遙子人間に向ひて、わが言ふところは眞理なり、其故は云々とうの得たることを證せむとすること即是なり。

さらば逍遙子の第二法若くは第三法に出でたるときはいかならむ。第二法はすなはち宗教の道なり。われ逍遙子のこの時に及びて佛敎を説くべきか、基督敎を説くべきか、將た逍遙敎を説くべきかを知らねど、これをば姑く問題の外におくべし。第三法はすなはち哲學の道なり。

古今哲學を以て名を青史に垂るゝもの幾人ぞ。かれ等は皆自ら無二の眞理を懐けりとれもひたりき。あらず、かれ等は或はまことに無二の眞理を懐きしときあるべし。されど果なきものは人の力なり。一たび比量智を役して、れのが聖敎量智を證せむとするときは、障礙乃ち生じて、缺漏つひに掩ふべからず。是れ哲學の哲學たる所以にして、又哲學の宗教にあらざる所以なるべし。

逍遙子の眞理を得るや、かれはいかにして吾等がためにこれを證すべきか。われ等は預め望む、うの舉證の迹のせめてはハルトマン輩の如き理想家の上に出でむことを。

逍遙子はまた折衷之助をして宣らすらく。儒家の仁、浮屠氏の涅槃、老、莊、カントが道も逍遙子が没理想とれなむやうに世にあらはれたるを、儒外が見たらましかば、うの反難に逢ふことは没理想にれなむかるべし。殊にはカアライル、エマルソンが如く文章險怪なるものは所詮儒外の假借せざるどころとなりしならむといふ。

わが聞くところを以てすれば、儒家の仁はまことに多義なり、佛徒の涅槃は大小乘によりて大に其義を殊にせり。されど儒家の仁を説けるが以前に、數千年の歴史ある仁といふものあるを、儒家の殆全く殊なるものを作りて、別に仁といふものとなしにあらざり。仁も涅槃も理想も世につれ、人につれて變化すべしといへども、始終これを一貫する意義なきにあらず。うの他道家の玄を説けるなんどを見ても、れうらくは一つとしてかの逍遙子が前没理想、没却理想、後没理想とれなむやうなる次第をなして、世にあらはれしものあるまじ。何ぞいはむや、用語例の極めて嚴重なるカントが如きものをや。又逍遙子は儒外既に我に向ひて假借するところなければ、文章險怪なるカアライル、エマルソン等も儒外に逢はば無慚なる扱をや受けむといへり。殊に知らず、カアライルがギョオテ

の衣鉢を傳へて一種の汎神論をなし、業を尊み産を崇めたる、エマルソンが盛に獨逸哲學をうのふる里に流布せしめたる、皆我が敬するところなるを。殊に知らず、我は逍遙子の主義を評せむとするに臨みてその文章に眩惑せらるゝほどの不幸には陥らざりしを。

次に逍遙子は折衷之助にいはしむるやう。鴈外は古今の哲學系をことごとく方便なりといひき。鴈外既にハルトマンを奉ずといふ上はハルトマンが一系統を確信すべきに、これをも方便なりといふこり心得られぬ。鴈外果してハルトマンが哲學系を方便とせば、これ逍遙子が没理想を方便とすると同じからむ。かくても鴈外は尙逍遙が地位を難せむとするやといふ。

わが見るところを以てすれば、逍遙子が地位は決して我にれなじからず。逍遙子は聖教量には居らずといふといへども、かれは比量を嫌ひて、既にうの心を「タブラ、ラザ」となし、機を見て無二の眞理を一擲みにせむと控へたり。我心は逍遙子が如く「タブラ、ラザ」とはなすべからざる心なり、われは我比量界にありて、歩々學にころごし、念々道を求めたり。さてわが今の立脚點はしばしば言ひしが如く文學美術の批評に従事するがための立脚點にして、この立脚點はハルトマンが審美學なれど、われは必ずしもハルトマンが全系を確信せずして、これより後人も人智の開けゆくに従ひて、たとひいかなる唯物論ありて、ひと時は榮ゆといへども、ハルトマンが無意識哲學よりも完全なるハルトマンが哲學よりも眞理に近き一大極致の生ずべきをねもへり。われはレッツシングと共にわが比量界にありて、無二の眞理を掴まむとする願を立てずして、無二の眞理に向ふ道を離れし願を立てるものなり。されば逍遙子には逍遙子の方便あり。我にはわが方便あり。兩個の地位は決してひとしなみに見らるべきものにあらずかし。

折衷之助は次に傳ふるやう。鴈外若し逍遙の所謂理想（作者の哲學上所見）をシエクスピイヤが作中にて見得たりとなさば、かれ宜くこれを解釋すべし。若し又逍遙の所謂理想ならぬ理想を鴈外理想としたらましかば、うは彼が誤解のみ。若し又古の諸家がシエクスピイヤの着想の根據なりといへるが如きものを、鴈外見出だして我黨に告げむか。我黨は廻ち五大洲を睥睨して彼の千魂萬魂といはれたりし怪物、わが日の本の鴈外將軍が審美の利劍に劈かれて、つひにこりうが正體をあらはしつれど、浴くとつ國びとにのらまくす。若し又鴈外わが理想を言ひがたき理想なりといはむか。吾黨望を失はむといふ。

わが所謂理想は逍遙子の所謂理想ならぬと、この間にはわが解することの誤りたるどころなくして、却りて逍遙子が説くことの誤りたることあること、既にしばしば辨せし如し。逍遙子が所謂理想（作者の哲學上所見）のシエクスピイヤが曲中にて求むべきものならぬことも亦同じ。逍遙子が鴈外若しシエクスピイヤの千魂萬魂を一つに統べたるものを見出さば、わのれこれを歐羅巴に吹聴して呉れんずといはるゝは、あはれめたき厚誼なるものから、原來シエクスピイヤが千魂萬魂はレッツシングが所謂、快樂を寫さむとするときはエビクウルと共に語り、徳操を寫さむとするときはストアと共に語るものにて、其根據たる一系といふものあらむやうなし。さればわれ將たいかにしてかろの無きものを見出し得べき。又逍遙子が知らむとするシエクスピイヤが理想、即ちシエクスピイヤが平生の哲學上所見及其實感を尋ね出さむこと、これも歴史上にわもしろかるべき事業なれば、逍遙子若しまことにこれを發見せむ折には、われに五大洲を睥睨する大眼力もなく、われに浴くとつ國人に告げ知らずべき大音聲もなければ、我力の及ばむ限は敢て披露の勞を取りて、早稲田黨の厚

誼に酬いんずること勿論なり。またわが使ふ理想といふ語に至りてはむづかしきものにもあらねば、いひがたきこともなし。天造人爲すべての美を貫きたる時間に限らるる思想なりとも、審美世界の論理的なりとも、ひとへに言はざる言ひつべし。

次に折衷之助は逍遙子が旨を承けたる軍配の大詰として、没主観（没實感）見理想（哲學上所見の現出）といふ詩品を立て、鵬外のために傷けられたりを見たるシルレルを辨護せむと試みたり。

われシルレルが曲中に主観頗る現れたりといひしは審美的主観の情にして實感にあらず。逍遙子が實感を主観とする心より、我判断を軽々しと思はれたるは、恐らくは逍遙子が自ら軽々しく今の歐羅巴多數の審美家の用ひ慣れたる語を我儘なる意義に用ひしたためならむか。シルレルが詩には素より實感なし。うを早稲田流に没主観といはむは勝手たるべし。シルレルが詩には素よりポオザ公が自由と「コスモポリチック」との思想の如く、一種の哲學上所見の審美的主観の情となりてあらはれたるあり。うを早稲田流に見理想といはむこと、これも亦勝手たるべし。

折衷之助が軍配めざましき論戦畢りて、逍遙子はさらに

軍評議

といふものを開きける。先づわが没却理想の評のこまかなるところに答へざるゆゑよしを常見和尚に言はせ、次には折衷之助に鵬外とハルトマンとを全くねじ人に看做して事問ふべき譯ありと辨せさせたり。さてうの仔細をたづぬれば、わが山房論文に烏有先生といふ談理家ありて、理を談ずるを旨とする大文學雜誌を發行せむとして未だ果さずとあるを見て、ハルトマン舶來せざらむ限は、鵬外即ちハルトマンと看做すべきならむといへるなり。

ハルトマンが審美學の序にいはく。われは此書のあまりに大冊にならむことをねりて、應用審美學の區域に入らむことを避けたり。されどこのわがこの區域に入ること能はざるがゆゑならぬは、わが小品にて知れかしといへり。（審美學下巻序八面）斯くハルトマンは文學美術の批評の如き審美學の應用に志ありて、多くこれに及ぶに遑あらざりしを、わが山房論文は寓意語をもて出しとなり。ざるを折衷之助の羅織に巧なる、わが文學雜誌の發行といひし言葉を、日本にてと限りても言ひたりけむやうに解き僻めて、ハルトマンみづから海を渡りて來ずてはかなはぬやうにいへるのみ。うが上に若しかの言葉をハルトマンが上に當らずといはざる、折衷之助は何の依るところありてか、これを我上に當れりとはしたりけむ。われまことに忘むことを知らずして、我草紙を所謂大文學雜誌に當てたりとせば、未だうの發行を果さずといふ言葉いかにしてわが口より出づべき。

評定のうちには又、これば早稲田文學の時文評論記者がわが山房論文に答ふるに戯文もてしたるを常見和尚に難せさせ、折衷之助をして敵に權變ある上はわれも奇兵を出さむこと然るべしと辨せしめたり。

わが見るところを以てすれば、辨難の文はいふもさらなり、批評の文にも權變あるは争ふべからざることなれども、うを戯文を以て論文に代ふる分疏にせむはいかがあるべき。逍遙子が眞面目なる語をなすと、戯文を作るとは、吾が關するところならぬぞ、世に逍遙子が才なくして、華文を作りて審美上の論をなし、遂には虎を畫いて狗に類するが如き人出でなむことをれりれ、こゝに昔年シヤスレルが審美的華文の弊を論じたる卷（審美學首卷四六面以下）の中より一ひら二ひらを鈔出して、聊我草紙を讀むらむ人の戒とす。

シヤスレルのいはく。審美的華文を作るものは、その作るところに詩趣あるやうにねもはるゝを奇貨として人を欺き、欺かれたる人はうの文致の非凡なるを稱するに至る。ジャン、ポオルは審美上に善く事を解する人なりき。うの説くところの裏面には多く眞理ありけれども、性癖にして文奇なるがために、しばしば論斷の過失に陥りき。後の世に出でこれに學ぶものは、殆ど審美學の寄生となりさがりて、技藝の家に此學の納れられざる媒とさへなりぬ。されど普通教育を受たりといへどもまことの識見なき俗間の人には華文の毒に中てらるゝものいと多かり。さるは彼等その大膽なる言葉にねどろかさされ、うの苦もなく讀まるゝことの心安さにいざなはるゝを以てなり。華文家はまことの思索家の言葉には含蓄多くして修飾少きを、乾燥なりと笑ひ、氣鋭なしと嘲りて、これれが音節をととのへ、誇張を事としたる文の中に、果敢なき思想を包みたるを耻とせず。うの弊まことに言ふに堪へず。又専門審美家のうちにも粧飾語を弄ぶものあり。粧飾語はねほむね序にねほく、篇の首にねほし。此類の學者は先づ人を香なき造りばなに等しき文字もて飾りたる花苑に導きて、うれよりさうくしき技藝史の榮圃に案内する習なるが、うの花苑と榮圃との境にて文體の俄に變ずるさまいと可笑し。此類の學者は能く自ら欺き、また能く人を欺けども、人ありてうの繁文を削り、うの要旨を尋ねむとするときは、或はうの包めるところ何の思想をもなさざることあり、或は極めて平凡なる意味となることあり、或はうの筋違なる想像なるを見ることありといへり。軍評議ありし夜、逍遙子が夢に見ねにきといふ文珠菩薩の

剛意見

はたご智慧もなき息争の勸告なり。我もあながち戦を好むにあらねど、逍遙子がジャン、ポオル、

カアライルにもをさく劣るまじき審美的華文をあらはしたるに、これを評論せざらむこと、口惜しかるべうれもひなりて、果は最終の言葉を出さむことの影響さをさへ打ち忘れてなむ。(明治二十五年六月)

エミル、ゾラが没理想

今の歐羅巴の美術は大抵没理想派の賜なり。没理想派の賜をばわれ受けて、没理想派の論をばわれ斥く。されば壁を留めて櫃を還すを我山房の謀とするなり。

實際主義といひ、極實主義といひ、自然主義といふ、うの言葉はねなじからずといへども、孰か没理想ならざる。美術を評し、文學を論ずるに當りて、没理想を基とするものは、獨逸に文庫 *Magazin* の一黨あり、スカンデナヴィヤにイブセンが餘流あり、英吉利にも俄羅斯にもうの人あれど、概皆エミル、ゾラを宗とす。

わが見るところを以ていへば、ゾラが小説に就いての没理想論は試験小説 *Le roman expérimental* と題したる數篇の「エッセイ」にあり。うの劇に就いての没理想論は劇部にての自然派 *Le naturalisme au théâtre* (*Annales du théâtre*, 1879) と題したる文にあり。またうの畫に就いての没理想主義はマネエが油繪を評したる文 (*L'Événement*, 1866) にあり。ゾラが立言は一系をなしたる哲學にもあらず、また首尾全き審美論にもあらず、そのあらましを左に記せむ。

ゾラはその主義を説いていはく。我主義は新しき自然學を文と術とに應用する符號なり。「クラッシュック」の符號は行はるゝこと二世紀なりき。「ロマンチック」の符號はこれに繼いで起りしかど、其運命は一世紀の四分の一にだに至らず。我主義は實に「ロマンチック」を前驅にして出でたるものな

り。我主義は系統にあらずまた黨派にあらず。奉ずるところは唯眞のみ。眞は實なり、造化なり。美は實の一面に過ぎずと。

されば小説に「ロマン」の名をあたるはゾラが好むところにあらず。「ロマン」といふ字には、つくり物語といふに近き義ありて、作者の空想に待つことあればなり。たほよそ自然學の方便には観察と試験とあり。観察のみにて看到りがたきところに看到らむとするには試験ある耳。小説は公衆の前にて行ふ試験の記事なり。小説は分析的批評なり。「ロマン」の字に代ふるに「エチユウド」の字を以てせば頗妥ならむ。さて試験の結果は事實なり。事實に向ひて其利害を問ふべからざることを、化學の上に窒素の人を傷ふことあるを怒るに由なきが如くなるべし。これをゾラが小説論とす。劇に於いても略れなむ。作者の空想より産れ出でたるものは、これを舞臺に上して活動すべからず。戯曲もまた宜く試験の結果なるべし。その小説に殊なるは、細に叙すること、詳に言ふこととのために餘地を留めざる處にあり。細に叙すること能はざるかはりに、舞臺の道具立あり。詳に言ふこと能はざるかはりにには作者の働にて一顰一笑の間に事の情を悟らしむることを得べし。これをゾラが劇の論とす。

ゾラは書を以て術となすを嫌ふ。故奈何といふに、術といふ語には極致を求むるが如き義を含みたるべし。書は宜しく造化を寫すべし。造化にあらず、眞にあらずして、夢の如く、稱物語の如きものを寫すものをば、書工となすに足らず。然はあれど實際派なりとて、たゞの光寫圖のやうなる書を作り、いたづらに事實を摸倣するは惡し。書工にはおのゝ其特異なる眼あり、其特異なる性temperamentありて、これに慥ひたる新しきものを製作するを其本分とす。要するに書には個人的

と實在的とあるべし。個人的なるものは人より來り、實在的なるものは造化より來る。造化は常住にして平等なれども、人は不常住にして變化極なし。美術品は個人の性の地より觀たる造化の一片なり。これをゾラが書論とす。

夫れ新しき自然學を美術に應用するは固より善し。然れどもゾラが言の如く、美に代ふるに實を以てし、術に代ふるに批評と試験とを以てするときは、矛盾の迹つひに掩ふべからざるに至らむ。ゾラが「エッセイ」の一(Da la morale)を見るに、新聞記者の醜き刑事を録して厭はず、却りて小説家の筆の美ならざるを責むるを笑へり。こは小説に對する審美の感と刑事に對する記實の感とを分たずして、遂に小説を見ること刑事を見るが如くなるに至りしなり。さるにゾラは書を論ずるに至りて忽ち光寫圖に等しき書を取らずといふ。若し新聞に出でたる刑事の記録と、詩人の作りたる小説とを測るに、れなむ定規を以てすべくんば、光寫圖の妙は繪畫の妙に同じからむ。ゾラは書に於ては取捨の別を立てながら、文に於ては去就の分を明にせざりき。

蓋しゾラは天のなせる詩人なれば、そのれは空想を遠離けて批評をなし、試験をなすをたもひつゝも、神來に逢ひ、空想を役したり。ゾラは沒理想論を唱へつゝも大理學家の業をなしたり。彼が小説に於て造り物語を取らず、劇に於て舞臺に上して活動すべからざるものを取らず、又書に於て夢の如く、稱物語の如きものを寫したるを取らざるは、即是れ類想を斥くるなり。彼が文と術とに應用し得たるものは造化に似て造化にあらず。その事實とも見ゆ、試験の結果とも見え、將た眞ともおもはれしは即是れ個想なり。彼が美術品を以て個人の性の地より觀たる造化の一片となすは、即是れ小天地の圖に對して大天地の影を望む境界なり。

近頃我國にて造化を以て美術を説かむと試みし人は、前に撫象子あり、後に逍遙子あり。撫象子が自然主義は沒理想に非ずして有理想なり。その極致は古の希臘人に似て善と美とを併せたるものなり。さればおなじく自然といひ、造化といへど、ゾラが自然は弱肉強食の自然なるに、撫象子が造化は蝶舞ひ鳥歌ふ造化なり。逍遙子が自然主義は則ちこれに反す。その沒理想の造化は酷だゾラが造化に肖たり。されば逍遙子とゾラとは共に客觀を揚げて主觀を抑へ、叙事の間に評を挿むことを嫌ひたり。逍遙子戯曲の文を以て讀者の思倣し次第にていかやうにも見ゆるものとなしてこれを尊めば、ゾラは小説の文を以て利害を問ふべからざる事實となしてこれを庇ふ。これ等の處を細に比べ論せば、いともしろかるべけれど、また折もあらむとれもひて止みぬ。(明治二十五年一月)

外山正一氏の畫論を駁す

明治美術會の總集をなさんとするや、(明治二十三年)外山正一氏は預新聞紙に廣告して曰く。余は此時に當りて、多年抱持したる繪畫上の意見を示さむと。今の新聞紙に見はれたる日本繪畫の未來と題する長文は即此なり。外山氏の畫論は其多年抱持せられたる所なるに、余が咄嗟の間に此文を草してこれを駁せむとするは、或は量を知らざることの甚しきものならむ。而れども日本繪畫の將來は實に現時の大問題なり。外山氏が論は撰材命題の間に踟躕して、邦畫の發達に利益少なきものなり。余は外山氏が論を以て、日本繪畫の將來の方嚮を指定し得たるものとなすこと能はず。是に於いてや、自ら禁ずること能はずして言ふ。

第一、五里霧中

論に云く。方今吾邦繪畫の事を談ずるものは、大約二流派に屬す。即ち一は外人の稱揚におだてられて、今日宇内の活美術は、特り日本にのみ存在するなりと妄信する族なり。一は日本は尙ほ半開國なり。西洋は文明國なり。半開國の事物は其何たるを問はず、渾て文明國の事物には及ばざる理なり。繪畫の如きと雖、固より然らざるはなしと、只漠然たる臆斷をなしてとりすまじ居る輩なり。又云く。何故に日本畫は西洋畫に優れるか。曰く西洋畫は眞物に似するを旨とすれども、日本畫に至りては、物の精神を寫すを旨とせりと。何故に西洋畫は日本畫に優れるか。曰く西洋畫は濃淡自在なり。遠近の寫法完全なりと。蓋し何物の美術品と雖、眞物に由らざるものはあらざるならむ。何物の繪畫と雖、濃淡寫景のみを以て盡くせりとすべきものはあらざるならむ。今この繪畫を談ずるものは、實に五里霧中に在りといはずんばあるべからざるなり。是れ一段の要旨なり。外山正一氏は蓋し此東西兩派の争を擧げて、その並に誤れるを示さむとするならむ。今の東派畫家にして、果して宇内の活美術を以て日本にのみ在りと思ひ、又精神を寫すことを以て日本畫の特有法なりと思ひたらむか、今の東派畫家は五里霧中に在りといふ諍を免れざるべし。今の西派畫家にして、果して西洋の文明、東洋文明の上に超出したれば畫も亦應に然るべしとのみいひ、又濃淡遠近法の精細なるを以てこれ等が特有の技倆なりとれもひたらむか、西派畫家も亦應に此諍を辭すること能はざるべし。

然りと雖、兩派の争は果して此の如くなる乎。其言ふ所は此の如く粗大にして事に切ならざる乎。余は輒信すること能はず。今の西派の油畫家が材を故國に采りて其技を試みむとすることは則ち之あり。今の東派の水彩畫家が法を外邦に藉りて其術を長せむとすることは則ち之あり。別に東派の畫家

中固く城地を守りて益東洋趣味を發揮せむとするものあるも、亦余が知る所なり。此數目的は現に單獨に之を追ふものあり。社を結びて之を尋ぬるものあり。是れ皆余が親ら観る所なるを以て、余は直に外山氏の指す所を以て今の東西二派の心を獲たるものとなすこと能はず。

外山氏の所謂西洋畫又洋畫とは何ぞ。油畫にあらずや。其所謂日本畫又倭畫とは何ぞ。我墨畫と水彩畫とにあらずや。我には古より油畫なけれど、彼には古より油畫に非ざる畫あり。曰水彩畫、曰乾彩畫、曰掩色畫、曰鮮畫、曰水硝畫等是なり。(以上繪類)其他色を施さざるものは別に線畫(單にいふ畫)の類を成したり。故に苟くも東西兩派の畫を擧げて之れを比較せむとするときは、其類の相近きものを以て相對せしめざるべからず。若し我水彩畫を論ぜむとするときは、之を彼の水彩畫に比すべくして、之を彼の油畫に比すべからず。我邦已に油畫なれば、彼の油畫を取りてこれに比すべきものは、我になきこと明なり。若し外山氏が擧げし如く、我西派の油畫家が我東派の水彩畫家と濃淡の別を争ふことあらば、是れ今の五里霧中に在ること外山氏を待ちて知ることならず。

余が伯林に在りし頃、郷友書を寄せて問ふ。大日本私立衛生會は、日本の劍術と西洋の體操との優劣を討議す。足下の見る所は奈何と。余驚いて曰く。若し日本の擊劍を西洋の擊劍に比せむとせば則ち可ならむ。今の西洋の敵手なき體操は、固より我に類なきものなれば、これを取りて我擊劍に比し、其優劣を言はむとするは、殆無用の辯ならむと。蓋し油畫の事も亦彼體操の類のみ。誰か之れを比するに我墨畫水彩畫等を以てせむとする者ぞ。韓非曰はずや。人不食十日則死。大寒之隆不衣亦死。謂之衣食孰急於人。則是不可一無也。天下何ぞ衣食の争の多きや。

夫れ油畫は我邦に於いて勢力ある新輸入物なり。我墨畫若くは水彩畫のこれに對して占むべき地步

を論ぜむと欲する者あらば、先づ西洋諸邦に於いて西洋の線畫水彩畫等が油畫に向ひて占めたる地步を考ふべし。又我水彩畫と彼の水彩畫との優劣を考ふべし。又水彩畫と油畫との普通の差別を考ふべし。是の如く條理を立て、考へたるにあらざるものは、必ず是れ漠然たる臆斷ならむ。外山氏のこれを指斥することなしと雖、其取るに足るものなきや明なり。

第二、畫題に困みたりとは眞乎

若し東西兩派の畫を論じて、線畫と彩畫との別を立てず、油彩と水彩との異を問はざらむと欲するときは、是れ審美家の所謂内術品の事に局して、外術品の事に及ぼざるものなり。

内術品は畫家の空想界裡に在りて、これを外に擬定せしめたるものを外術品とす。内術品の製作は技術(技巧)を要せず。外術品の製作は技術あるにあらでは能はず。彼線畫彩畫の別油彩水彩の異などは、固より技術上の事なれば、外術品上の問題なり。この問題に拘らずして畫を説くものは、たもひの外に公益少なし。故いかんといふに内術品の製作はこれを教へて得さすべきこと難く、畫家の空想は多く天賦に出づるものなればなり。

余は以爲らく。今の邦畫の進歩をねもひて之を言論に發せむと欲するものは、宜しく主として意を外術品に注ぐべし。何如といふに是れ練磨の結果たることを得べき技術の能く左右する所なればなり。之に反して彼内術品は人工にて之を長せむこと難く、空想獨り之を作ることを得るものなり。口舌を以て之を論ずと雖、其効少からむ。試に萬邦の史乘を見よ。大畫工大彫工は多く學問ありて其業を成したるにあらず。天賦の空想に頼りて其力を逞うしたるのみ。苟も内術品の改良を謀らむと欲せば、後來望あるべき少年畫家を庇育扶助するに若かざらむ。之を言論に訴ふるは抑亦末なり。

然りと雖已に外山氏の畫論の出でたる上は、余も亦聊之に對する意見を述べむと欲す。彼油畫と邦畫との得失の如きは、固より我論及せむとする所に非ず。故いかにといふに外山氏の畫論は内術品の事に關し、油畫水彩畫墨畫等の別は自ら其境域の外に在ればなり。

外山氏は我畫家を以て、東派西派の別なく、畫題に困みたるものとなし、昨年(明治二十二年)小西湖畔の觀馬臺に掛けたりし油畫、今年(明治二十三年)の第三回勸業博覽會に出したる油畫邦畫等を引きて之を證せむと企てたり。中に云へることあり。鷹に非ざるは瀑布なり。藤に非ざるは櫻なり。天人に非ざるは鍾馗なり。虎を使ふ羅漢に非ざるは龍を使ふ羅漢なり。肴屋の店の如きものに非ざるは鳥屋の店の如きものなり。植木屋の店に非ざるは八百屋の店なり。唐人の機織に非ざるは公家の花見なり。子供の漁に非ざるは高砂の翁媪なり。戦争の畫に非ざるは犬追物の畫なり。悉く有りふれたる畫題に過ぎざるなり。

此引證は果して外山氏の畫論に利なるものなりや。此事實は果して題に困みたる迹を示すものなりや。余は大に之を疑ふ。試に往いて巴里の「サロン」に遊べ。又倫敦の「バアリングトン、ハウス」若くは「グロウノル、ガレリイ」に遊べ。又伯林の國民畫廊及ホンラアトとフォン、ベエルレとの常開畫堂若くは「ミュンヘン」の美術會に遊べ。其畫題(畫材)の貧富は果して之に似たる筆法にて抹殺すべからざる乎。こゝにて南瓜を畫けば彼處にて林檎を畫き、此處にて觀音を畫けばかこにて「マドンナ」を畫く差異はあるべけれど、余は其題目若くは材料に性別あるを見て量別あることを知らず。

余は外山氏の擧げたる所を見て、畫材の富を認めれども、其貧を認むること能はず。外山氏が一千餘言を費して數へたる畫材の一斑をのみ上には寫したるなれど、宗教畫あり、歴史畫あり、動物畫あり、

靜物畫あり、風俗畫あり。何處の國の畫堂を尋ねても、これに過ぎたる繁富に遇ふことは、いとも難かるべしと思はる。

均しく是れ「マドンナ」なり。ラファエルも畫き、ガブリエル、マックスも畫きたり。均しく是れ觀音なり。巨勢も作り、原田氏も作りたり。一畫題と雖、古今の人はこれによりて各其技倆を見はすことを得るなり。况やその此の如く繁富なるをや。

畢竟繪畫巧拙の別は、畫題其物に在らずして、畫家の空想と技倆との、奈何に一畫材を使得るかに在り。我邦將來の畫を論ぜむと欲する者も、我邦現今の畫を評せむと欲する者も、其眼を注ぐべき處は、必ずしも畫材其物に在らずして、奈何に畫材を使ふかに在り。十里の花堤は人力車を着けたりと雖、其畫の拙を掩ふに足らず。大都の街衢には「ストライク」をなす工人を添へたりと雖、其畫の拙を藏するに足らず。苟くも一國の畫の將來を托もひて、計畫する所あらむと欲するものは、題目材料の多きが上に多きを加へ、新なるが上に新なるを添へむとのみすべきにあらざるなり。若徒に題と材との多く且新なるを求めむとするものあらば、是れ畫家に對して甚不親切なるものと謂ふべし。

外山氏は今の畫題を擧げて、うのありふれたるを笑ひ、且曰く。窮せずては斯かる畫題をば決して選ばざるなり。和流の畫人も、洋風の畫人も互に我流義の優りたることを誇れども、其畫く所の繪畫によりて之を證すべしといはれたらむには、これに窮せざるものはあらざるならむと。今の東派と西派とをして、果して優劣を争ふ心あらしめむも、余は其相争ふに製作性と技術とを以てして、決して材と題とを以てせざるを信ず。

論に云く。今の油畫の撰ぶ所の畫題は、建築に非ざるは景色、々に非ざるは歴史、々に非ざるは想像に由らざるはなし。而してこの此等を選ぶは、職として其形を取るに過ぎざるなり。思想を取るものは極めて少し。故に其畫く所は建築なるも、景色なるも、歴史的なるも、想像的なるも、全く無味なることを免れず、全く死物なることを免れずと。

外山氏は今の邦人の畫に、形を見て思想を見ず。故に之を歎くといへり。所謂形は必ずや質に對するに非ずして髓に對するものならむ。又所謂思想は後に「コンセプトウ、ステエジ」を思想的段階と譯したるより見れば、「コンチエブチオン」ならむも計られねど、尋常思想といへば、「イデエ」の事となるべし。

引例に曰く。殿堂は殿堂に過ぎざるなり。菜圃は菜圃に過ぎざるなり。軍人は軍人に過ぎざるなり。死したる雉は死したる雉に過ぎざるなりと。所謂思想にして、果して「イデエ」の譯語ならしめむ乎。何故に彼殿堂なるに過ぎざる殿堂に思想なきか。何故に彼軍人なるに過ぎざる軍人に思想なきか。余を以て之を見れば、彼殿堂に過ぎざる殿堂にも、殿堂といふ思想は必ず存じたり。彼軍人なるに過ぎざる軍人にも軍人といふ思想は必ず存じたり。

余は外山氏が示したる例に依りて、外山氏の意の在るべき所を推測するに、外山氏の所謂思想は則ち個想のみ。個想とは類想に對していふ思想なり。

殿堂に過ぎざる殿堂の平々なるも、軍人に過ぎざる軍人の凡々なるも、是れ其畫ける所の殿堂といへる類なればなり、軍人といへる類なればなり、審美的個人主義を闕きたればなり。軍人を畫きたると

き、其軍服制作の粉本とならずして、美術品となる所以は、這箇の軍人、一種の面目を備へて、此幅の畫、個想の現れたるものたるに足ればなり。動物の畫も亦一個々其態分明なるがために美術品中に列せらるれど、動物畫中に挿みたる圖は、全く之に殊なり。彼靜物畫花卉風景に至りても、亦必ず他に附與したる畫家みずからの思想あるべきなり。余は思想の必要を認めて、殿堂に過ぎざる殿堂を昇むと雖、亦外山氏の殿堂に過ぎざる殿堂に思想なしといへるを怪む。

論に又曰く。西洋の畫人は、古今想像に屬する事物を畫くもの多しとは、吾邦の油畫かきの間に知れ度りたる所なり。是に於いて、吾邦の油畫かきにも、想像的のものを書かむと企つるものあり。彼「ラオコオン」の燒直しの如き、彼龍に乗りたる觀音の如き、彼海面に茫然たる天人の如き、何れも皆此企よりして生じたるものならざるはなし。然して彼等油畫かきが常に實物を模寫するのみならずして、想像物を書かむと企つる其志の程は如何にも神妙なれども、これをなすの始末、これを仕遂ぐる方畧に至りては、實に笑はずんばあるべからざるなり。今の油畫かきは少しも眞物に依らざる想像物を書かんと企つるものなりと。論者は是れより説起して、神靈惡魔を見たることなきものゝ畫きたる神靈惡魔の神靈惡魔に非ざるは、猶美人を見たることなきものゝ畫きたる美人の美人に非ざることといへり。

さて此神靈惡魔などの想像畫の、古今名人の手に出でたるものゝ、一として眞物に依らざるものなき證據として、ラファエルが「マドンナ」其妻の貌より出でたりといふ説、ラスキンが西曆十九世紀の英吉利の少女を基として「マドンナ」を畫くことを知らざる英國の畫人は、「マドンナ」を畫き得じといふ説などを擧げたり。

余は既に外山氏が個想と類想との別を説かむとせしを、其證例より發明せしが、此に至りて又外山氏が美術と國風との關係を説かむとするを、其證例より發明したり。

夫れラファエルが「マドンナ」を畫きて、猶太人となさずしてウルピンとなし、ラスキンが「マドンナ」を畫かんとする英人に、西曆第十九世紀の英國少女を基とせよと教へたるは、譬へば猶シエクスビイヤが戯曲中の伊太利人に、英人の性を備へたるもの多きがごとし。是れ國風の詩に入る道理にして、遠く其源を尋ねれば、經驗の美術に使はるゝ因縁なり。ラファエルの伊太利畫家たる所以、シエクスピイヤの英吉利作者たる所以は、或は此に在らむ。

然りと雖、外山氏が之を擧げて、神靈惡魔などの想像畫の眞物に依らざるべからざる證となさむとするは、恐らくは未其當を得ざるものならむ。ラファエルが「マドンナ」を畫くに、此のれが妾に依りたりといふは、「マドンナ」の眞物に依りたるにあらず。ラファエルが畫ける「マドンナ」の「マドンナ」にして此のれが妾に非ざる所以は、果していつれの邊より來し。爰に凡匠ありて「マドンナ」を畫かむに、其妻妾を以て模型とせむ乎。彼は果して「マドンナ」を畫き得べきや。余は其畫の妻妾とならむを恐るゝなり。而して外山氏は曰く。美人を見たることなきものゝ畫きたる美人は美人にはあらざるなり。惡魔に出逢ひたることなきものゝ畫きたる惡魔は惡魔にはあらざるなり。是れ其證せんと欲する所は、美人には美人の眞物を基とし惡魔には惡魔の眞物を基とすべき理なるに、其擧げたるラファエルは「マドンナ」の眞物を基としたるにあらず、此のれが妾とせし美人の眞物を基としたりといへるにて、引證の跛足なることこれより甚きはなし。外山氏は何故に此處に於て、ラファエルが「マドンナ」を見たることを示して、以て其理を發揮せざりし乎。想像畫とても固より依

る所なかるべからず。其依る所は又經驗なり。唯彼美人を畫くものは、直接に眞エリテトレアルを實なる活美人より掬うることを得れども、こゝにては古美術品に依り、經典に依り、間接に眞イデアを想なる文と美術品とに取らざるべからず。彼は直接の經驗にして、此は間接の經驗なり。此間接の經驗の能く内術品となるは、時として更に之に近き實物即模型に須つことあるべきは、余も亦之を承認すれども、想像畫を作るものが、必ずラファエルの其妾に於ける如き模型を使ふべき理は、之を覩ること能はざるなり。

余のバツリヤに在るや、家ガブリエル、マックスと相隣したりしに、友人獲蛭子はマックスに師事したれば、時に往いてこれを訪ひ、又其畫を作るを見き。マックスが著名なる「アスタルテ」を畫きし時も、余は之を覩ふことを得しが、彼は此の如き想像畫を作るに、模型を用ゐることなかりき。又佛蘭西のマクシム、ドユ、カンが「サロン」の評にも、カバチルが其想像畫を作るとき、多く模型に拘泥したるを笑ひて曰く。同一なる裸體女子なり。忽にして以てエニユスとなし忽にして又マドレユスとなすと。されば想像畫を作るものが、之に近き實物を藉來りて、想なる眞を得むと欲するときは、實に其弊に勝へざることなきにあらざるなり。

外山氏は引證を誤りたること此の如し。而れども其想像畫を作るものに向ひて、必ず曾て之を見たることあるべき理を説いたるは、流石に彼軍人に過ぎざる軍人に思想なしといへる類にあらず、別に其本意あるに似たり。故いかんといふに論に畫家の神靈を見る處を叙したる一節あればなり。曰く神靈に觸れ神靈に感じて、あち難有やあち尊やと心根に銘じ、信心全身に充滿したる時に際して畫きたる神靈の肖像こそは、即ち見るものをして必ず崇拜の心を發さしめむとするの神像なるべけれ。

此の如くにして、特に此の如くにして、始めて能く眞に高尚なる想像畫を書き出すことを得るなりと。
 是一條は美術家の空想と宗教家の信仰ケルツスとを混同したるものにて、畫論上よりは大きな謬見なれど、そは後に言ふべし。

第四、自然美と美術と

論に云く。畫は固より眞物に依らざるべからずと雖、固より眞物の畫なることを要せざるなり。否眞物の畫は眞の畫にはあらざるなり。畫は眞物に依て更に高尚なる想像を描出したるものならずんばあるべからざるなりと。此一節は恐らくは自然美と美術とを明にせむとしたるならむ。畫を眞物に依らざるべからずとせしは、彼物オントゲノイ育上にも、類育上フィロゲノイにも、美術の最初級たる摸倣を明にしたるにて、畫は先づ自然を摸倣せざる可らずといふことならむ。眞物の畫なることを要せずとは、自然は未だ必ずしも美ならず、或は美を盡さずといふ意ならむ。眞物の畫は眞の畫にあらずとは、自然美の術美に劣れる所以を明にしたるならむ。其更に描出すべき高尚なる想像とは、垢を除き塵を去るにて、論者が是より先きにも、肉體の美人を畫けりと雖、肉體の美人を畫きたるにはあらざるなり、其畫きたる美人の影像には、肉體の美人に附添ひたる不完全なる點は附着せざるなりといへるに同じかるべし。是れ素より汎通の大道理なり。而れども外山氏は直に語を續いで曰く。畫は實體として外界に存在するの現象を摸寫したるものなることを要せざるなり。當時我も人も外界に存在するものなりと想像する所の現象を眞物に基いて製出したるものなることを要するなり。畫人は我も信じ、人も信じ得るものを畫かずんばあらざるなり。龍を畫くもの、眞に龍ありと信せずんばあるべし。

からざるなり。龍を畫いて喝采を得む乎。之を畫くものも、之を看るものも、眞に龍ありと信ずるものならずんばあるべからざるなり。自ら信ぜざるものを畫いて喝采を得むとするは、愚の至といはざるべからずと。

此に至りて外山氏は又美術家の空想と宗教家の信仰若くは安信とを混同したれど、之を辨ずることは後に譲らむ。

第五、信仰と美術と

古は信仰即美術なりき。ルチャンが聖神を目に見ゆる神と云しも此心なり。ヘルメス、トリスメギストスが作れりといふ書に、神を二等に分ち、上等を最靈の神の作れるものとし、下等を人間の手より出でたるものとしたり。他のアンゼラム、フォイエルバハが如きも、かゝる例を引きたること多し。神を信ずるものは、聖神の前にて歌ひ、聖神の前にて哭し、悲痛慘怛のをりふしは、聖神の膝を抱きしなり。

既にして聖神も畫神も、來り觀る民の多く信仰者ならざる時代に逢ふべし。此不信者の中に審美眼を備ふるものは出づるなり。塑りたる神は變じて神を題としたる美術的埒品となり、畫きたる神は變じて神を題としたる美術的埒品となる。ラファエルが「マドンナ、チ、サン、シストオ」も、之を「サント、シキスツス」寺の高座のために畫きし時は、畫きたる童貞女、畫きたる基督兒として價ありしものならめど、今は一美術畫のみ。而れども一美術畫としては、今も其價減せず。是に於いて、宗教の信仰と宗教の美術とは相分れたり。宗教の美術は宗教の信仰を離れて獨立したり。此分裂と獨立とは、果して何の原因ありて成就するものなる乎。曰く宗教の沿革は自ら之をして然

らしめしなり。太古自然教の神は無形の自然なりしを、漸くにして獸形の標を借りてこれを現はすこととなりぬ。此獸形主義は進みて人形主義となりたり。宗教のこれより又進みて實を離れ想に著くこと、加特力教後に抗抵教出する如くなるや、民の信仰には塑神畫神を得て満足すること能はず。是れ彼「マドンナ、ヂ、サン、シストオ」さへ、信仰物たる性を失ひて、美術品とならざること能はざる所以なり。

世の美術家には信仰と美術との分裂を是認せざるものあり。此人々のためには、宗教史の紀を閲し却を経る毎に、前紀の宗教中より材を資りたる畫は、其信仰物たる性と共に其美術品たる性を失ふものなり。外山氏の如きも其一人ならむ。彼が神靈の想像畫に對して起さしめむとする崇拜心は、蓋し審美的假感にあらずして、宗教的實感なり。劇を觀て泣く心の如きものにあらずして、怙を喪ひて泣く心の如きものなり。彼が想像畫に於いて必ず我も人も外界に存在するものなりと想像する所の現象を寫し出さむことを求めたるは、宗教の信仰を離れたる宗教の美術の存在を認めざるなり。

インスブルックに僧あり。ヨゼフ、ユングマンといふ。嘗て審美學二卷を著はして、多く宗教畫の事を論じたり。(千八百八十六年第三版を出しぬ)其取る所の意見も、亦略外山氏と同じ。ユングマンは宗教美術品の必ず「エルパウエンド」ならむことを欲す。是れ美術品の能く人をして信仰せしめむことを求むるなり。此意を推して是を擴むるときは、希臘の神は加特力教の天地に於いて新に畫材たるべき價を失ひ、「マドンナ」は抗抵教の天地に於いて新に畫材たるべき價を失ふべし。是れ外山氏が今立てる所の地位なり。而れども余は更に一步を進めて論の繼續を求めむに、若美術品にして果して必ず信仰品ならざるべからずば、ラファエルが「マドンナ」は、抗抵教の天地に於いて

は、嘗て美術品たりしものたるに過ぎずして、決して復今も美術品たるものにあらざるべし。是れ恐らくは外山氏と雖斷言すること能はざる所ならむ。

夫れ宗教には實に遠離りて想に近着かむとする傾向あり。故に將來の宗教は畫材を與ふること少かるべく、今の宗教も亦最早多く新畫材を出すこと能はざるべし。獨り畫のみならず、彫刻も舞も劇も、既に信仰界を脱せむとする勢あり。此意味に於いては、宗教畫の將來は實に望少きに似たり。而れども基督教の天地にて、古希臘の神を材としたる美術の滅びざる如く、縱令後來佛教破滅の天地ありとするも、印度神學は永く畫題を遺さむこと知るべきなり。此意味に於いては宗教畫の將來は遠からむ。

蓋し實を遠離りたるものにも、許多の階級あり。想像界に在りて實を遠離りたること最甚きものは、彼エントツプが話中の能言動物、又桃太郎が部下の犬狹などならむ。これらは獨り實を遠離ること甚きのみならず、亦殆實に反したり。此階級のもの畫題に適應せず、殊に濃油色を用ゆる油畫に入るべからざることは、ハルトマン等も之を痛論したり。ハルトマン又曰く。ギョオテの全集に密畫を入れたるものも、後の世に至りて或は出でむ。而れどもりの達人の一顧に遇ふに足らざること明なり。是れ實に畫家の服膺すべき所なり。

同じく是れ想像界に屬するものなれど、級一級を進みて、前宗教紀に屬したる古希臘の神、東洋の風神雷神などに至りては、古の民は之を實天地の間に嵌めこみたることあるほどなれば、其實を去ること彼能言動物ほど遠きものにはあらず。彼獸形なる鬼畜は姑く置き、觀音大士の如く、天人の如く、人形なるものゝ以て油畫材となすべきは、希臘神學中の畫材と擇ぶことなきなり。又殆かの

人となりたる神象^{テオファニー}、基督教中の童女聖兒と擇ぶことなきなり。

故に余は今の佛蘭西に於いて、カバネル、モロオ、ブグロオ、フロランタン、ボンナ、コラン、メソニエ、バンジャマン、コンスタン等が宗教畫を作り、今の獨逸に於いて、フリッツ、アウグスト、カウルバハが家法を守りて宗教畫を作り、リヨフツ、ピロツチイ、アツヘンバハ、ガブリエル、マックス等が宗教畫を作り、今の英吉利に於いてアルマ、タデマが宗教畫を作るを怪まず。又何ぞ援崖子が騎龍瀧水の觀音大士を書きしを怪まむや。

此の如くに説來らば、或は加特力教の信仰なからむ世に、「マドンナ」畫中に怎麼の想髓あり、佛教の信仰なからむ世に、觀音畫中に怎麼の想髓ありて、能く美術品たるを得るかを怪む人あらむ。余は其疑を解くに小天地主義を以てせむ。觀音の人形は畫中に入りて個想なかるべからず。故に畫觀音は個想上より見て一人なり。而れども觀音の人形は畫中に入りて又小天地主義を懷かざるべからず。故に畫觀音は小天地主義上より見て一人に非ざるなり。蓋し人形中に佛性あり、人性あり。此小天地主義上より見れば人々皆觀音なり。彼永遠なる宗教畫の將來は、實に這裏に存ず。

此一解を闕きたるものは殊に云く。神佛の畫には體格の目的に適へること、^{カメナチオン}肉色^{カメナチオン}の人のごときことゝを嫌ふ。是れ人形外に神佛を求めて、猶畫家に向ひて人形を藉りて神佛を畫かむことを求むるものなり。是れ人形に非ざる人形を求むるものなり。ユングマンの徒即此なり。外山氏に至りては、則ち毫も人形主義に求むることなし、毫も人形に求むることなし。唯人に求むることあるのみ。外山氏は此故に宗教畫の將來を打滅さむとしたり。

古の畫工は億兆の胸裡に佛あるときに佛を畫き、當時世人の信心を満足せしめ當時世人の感情に訴

ふることを知りたるは、或は外山氏の言の如くならむ。今の畫工の佛を畫けるときは此念なからむ。彼は民に宗教的の實感あるを見て、奇貨居くべしとなして佛を畫きたりとするときは、恰も是れ今の政治家が政治小説を著して自黨の利を謀らむとする如く、審美的にあらざる雜駭なる目的を追ふものなりしにあらざや。此は佛を畫きて之を民の實感に訴へず、之を民の審美感に訴へむとす。其清淨なる念は實に開明世界の美術家たるに負かざるものならずや。近頃一雜誌を讀みしに人ありて賄賂事件の小説に入らざりしを怪みたり。余は謂へらく。今の小説家に賄賂事件の小説を求むる心は、即是れ今の畫家に佛畫を求めざる心なり。誰か文學世界には外山氏なしといふ。

第六、感納制作の兩性

論に云く。畫人は信ずるところありて始めて畫くことを努めよ。感動するところありて始めて畫くことを努めよ。「インスピレーション」を得て始めて畫くことを努めよ。われまことに龍なりと思ひ得る如きものを畫き出すにあらざれば、人をして龍なりと思はしむることは出來ざるなり。われまことに龍なりと思ひ得る如きものを畫き得るにあらざるものは、龍を畫くことを止めよ。われ眞に觀音なりと思ひ得る如きものを畫き出すにあらざれば人は人をして觀音なりと思はしむることは出來ざるなり。われ眞に觀音なりと思ひ得る如きものを畫き得るにあらざるものは、觀音を畫くことを止めよ。

外山氏の畫家に求むる所は、信ずる所と感動する所と「インスピレーション」との三なり。其所謂信を以て宗教上の信仰なりとせむ乎。うの必ずしも美術家の要する所にあらざるは、已に之を論じたり。余は今感動と「インスピレーション」との、畫を作るに當りて、何如なる關係あるかをいひ試みんと

余は既に空想の多くは天賦にして、長ぜむことの難きものなることを論じて、大書工大彫工の教へて成すべからざることを明にせむとしたり。余は又技術の錬磨の結果たるべきを論じて、大書工たること能はず、大彫工たること能はざるもの、或は之を致すべきを示さむとしたり。而れども是れ空想の毫も錬磨すべからざるに非ず、技術の毫も天賦を要せざるにあらず。能く空想の天賦を長育して、之をして働かせしむるに至るものは、天下其人少く、技術の田地は其廣狹こゝ相殊なれ、なべて世の人の領する所なるを謂ふなり。

技術の習得も亦固より一種天賦の性なかるべからず。此田地は即感納性なり。感納性は多少人々の有する所なり。聳者は以て樂人を成すべからず。聳者は以て書工を成すべからず。而れども能く視るものにして記憶、經驗、嗜好等に乏からざるときは、繪畫の技術は以て習得すべし。且感納性は能く人をして山水花卉の如き自然美を愛せしめ、又能く人をして畫を讀み圖を弄ぶ如く術美を解せしむ。

然れども感納性は已に存するものに對する關係にして、未だ存せざるものに對する關係にあらず。感納性には製作の能あることなし。製作性は蓋し空想の特有なり。而して製作性は彼感納性の如く、齊しく自然美と術美とに亘るものにあらず、單に之を術美にのみ施すべきものなり。

外山氏は畫家に向ひて感動する所ありて始めて畫くことを努めよと云ふ。此感動は果して何物なるか。論中別にわれ自ら感動して人も亦感動すべしなどいふ語あるより見れば、感動は感納性の働いたるに過ぎざるべし。外山氏が又畫家に向ひて「インスピレーション」を得て始めて畫くことを努め

よといへる此「インスピレーション」は、果して何物なるか。若ハルトマン等の意義を取るときは比較的意識あらざる空想より一層深きものにて、絶對的に意識あらざる一動機なり。所謂奇想の天外より來るものなり。之を要するに「インスピレーション」は製作性の働いたること明なり。

是に由りて觀れば、外山氏は獨り宗教的信仰を美術中に求めたるのみならず、感動を説來たりて忽「インスピレーション」に入り、感納性と製作性の間に殆其別を見ざらむとす。

第七、時代の好尚

書には自ら時に適へるものと時に適はざるものとあり。譬へば現代の宗教畫を作るものにして、彼肉色あれば神靈ならず、神靈ならんと欲すれば人形ならずといふ首鼠兩端に苦めらるゝ如きは、是れ時に適はざるなり。今若宗教畫を作りて、之を出すに小天地主義を以てするものあらむ乎。是れ時に適へるものなり。

我所謂時に適へりとは、時代の好尚に投ずるに非ず。我所謂時に適はずとは、時人の毀譽の外に立つに非ず。時に適へりとは、人世の類育史上の一點に立ちて、其時代に適ひたる識力あるを謂ふなり。時に適はずとは、此識力なくして、暗中搜索するものを謂ふなり。時好に投ずるものは、一進一退止むときなければ、時に適へるものは、千古萬古進むことありて退くことなし。昔人の所謂文章千古事なども、蓋し此意のみ。

獨り畫のみならず、獨り造術のみならず、獨り美術のみならず、人世の事業は時好に投ずることなくして、時に適ひてこゝ高尚なりとはいふべけれ。時好に投ずるは陋弊にして、多少人々の免れざる所なり。先覺者の言論を以て之を勸進することを須むざるなり。

外山氏は東西古今の畫題の變遷を叙し來りて曰く。何故に希臘に於いても、耶蘇教社會に於いても、日本に於いても、最初行はれたる繪畫は何れも多くは宗教畫にして、歴史的天然的人事的等の畫は稍や後の世に至りて始めて大に行はるゝに至りたるか。是れ素より明なる理由あることなり。夫れ太古に在りては、人の最も大切と思ひたるものは、神佛に外ならざるなり。太古に在りて最飾るべき建築は、即神社佛閣に外ならざるなり。太古に在りて人の最貴重する畫は、神佛の畫に外ならざるなり。太古に在りて人の感情を最満足せしむる畫は神佛の畫に外ならざるなり。神佛の畫は當時人の崇拜する所なり。神佛の事は當時人の崇拜する所なり。神佛の事は當時人の何れも注意する所なり。左れば當時に在りては宗教畫の必要最多かりしなりと。

當時の人の最大切とせしもの、當時の人の最飾るべき建築、當時の人の宗教的に最崇拜すること、當時の人の最注意する所を取りて、當時の人の最貴重する畫、當時の人の最感情を満足せしむるに堪へたる畫を作りしは、是れ當時の人の好に投じたるなり。

ラファエルが「マドンナ」は人の「マドンナ」を崇拜する時に當りて人に崇拜せしめむとて書きしなり。時好に投じたるものなり。而れどもラファエルが「マドンナ」の好畫圖なるは當時の好に投じたるためにあらず。若然らば此一幅は當時價ありて今價なかるべきなり。當時の好に投じて書きたる「マドンナ」は幾何ぞ。其今に存して人に愛重せられざるものは、時好に投じたるのみなりし故なり。獨ラファエルは時好に投じたる題の外に、時好に投ぜざる想を得て、其英邁たる技術を以て、之を發揮したりしなり。

ラファエルが「マドンナ」は古作なれども、時に適ひたり。ラファエルはいにしへ早く自得の奇想

ありて、小天地主義を持したりき。さればこそ聖母の面の尋常一般なる時人、彼が妾などには似たるなれ。ラファエルは或は此理をわもひしにあらず、或は意識あらずして此理を得たるならむ。「インスピラチオン」の源流は、彼がために意あらざる間に湧きしならむ。外山氏は曰く。夫れ當時の畫人たる、王公のために使役せらるゝ役人なるか、然らざるは僧侶のために使役せらるゝ傭人同様のものなり。ラファエル、キンチ、ミケランジ等はともに甚見識ありたる畫人なりきと雖、常に法皇のために種々なる方法を以て驅立てられて、寺院禮拜堂等の飾の爲に技倆を顯はすことに汲々たりしなりと。嗚呼此蹟や、實に千載の下、人を泣かしむるに足りぬべし。ラファエル等の此間に立ちて、勢時好に投ぜざること能はざりしに、猶能く好畫を作りしは、是れ其大畫手たる所以なるべし。

余以爲らく。今の鑿畫者の人形の神佛若くは神人の圖に對するや、其新古を問はず、必ず小天地主義を以て之を品評すべし。此主義を含めること愈深くして其畫愈高し。之を畫ける人は其時代に依り、其學識に依りて、或は意識ありてこれを爲し、或は意識なくして之を爲したりと雖、之を鑿するもの、繩墨は則一なり。故いかんといふに鑿畫も論文も、時代の好尚を離れて、纔に其正を得べきものなればなりと。鑿畫家の繩墨は既に此の如く時好を脱離すべきものなり。而れども此繩墨も亦審美學の進歩と共に進歩すべきものなり。時に適ふべきものなり。時に適ひたる繩墨は今古何れの時代の好尚にも關せずして畫品を定むることを得べし。

空想と云ひ、「インスピラチオン」と云ふ、皆製作性に屬するものにて、教へて之を長じ、習ひて之を得ることの難きものなる故に、大畫工大彫工は大詩人と同じく世に出づること甚稀なり。故に學

盛にして術衰ふる歎あるなり。若夫れ鑑畫の法は固より感納性に基くを以て、他の技術と共に進み、他の審美學と共に進まむ。近時ギオワンニイ、モレルリスがクロウ、カワルカセル輩の窠臼を脱して、別に一家を成したるなども其好例なるべし。

外山氏は已に古今の畫家のれほく時好に投じたる迹を擧げて、又論じて曰く。されば畫題の變遷は必ず時勢の變遷に伴はずんばあるべからざるなり。畫題の變遷は必ず内外情勢の異同に應ぜずんばあるべからざるなり。何の國何の時代を論ぜず、世に行はるゝ畫題は、當時世人の最注意し、當時世人の感情に最關係を有する事物たらざるべからざるなり。若此の如くならざるものを畫くに於いては、決して名作は出來ざるなり、決して自分を満足せしめ、世人を感動せしむる如き畫を畫くことは出來ざるなり。蓋當時世人の注意せざる事物、當時世人の感情に關係なき事物は、畫人自らに於ても注意せざるものなればなり、畫人自らの感情にも關係なきものなればなりと。さて外山氏が昔時法皇のラファエル等を願使せし如く、近時に至り大將は我勝利を得たる合戦の畫を畫かせんと欲し、王公は我肖像を畫かせむと欲し、宮殿は繪畫を以て其内部を飾ること必要となれりとして、之を擧げて畫題の變ぜざるべからざるを論じ、畫題を更へよと勸むるは、余猶其當を得たるものなりや否やを疑ふ。

かの時世の好尚の法皇將軍王公などの力を藉りて畫工に迫り、之をして題を變ぜしむるや、憫むべき畫工は唯命是隨ひて、法皇將軍王公などの注文する圖を作るならむ。復學者の故らに奮ひてこれを勸説することを要せざるなり。外山氏の意は恐くは此に在らず。却りてかの當時世人の感情に關係なき事物は、畫人自らに於ても注意せざるものなれば、之を畫くと雖、決して名作は出來ずとい

ふ處に存するなるべし。

繪畫題中果して世人の感情に關係なき事物あらむ乎。畫人自家の注意せざるものあらむ乎。獨り之を畫いて名作を得べからざるのみならず、畫家は決して之を畫くこと能はざるべし。然れども外山氏の所謂時人の感情に關係なきもの、若くは畫家の自ら注意せざるものとは、前紀の宗教より出でたる畫材なり。前紀の宗教より出でたる畫材は、其教の衰微と俱に、民の信仰を失ひたるものなれども、猶能く世人の感情を惹く處あり、猶能く畫家の注意を催す處あり。此畫材は失信の佛の舊に依りて柔和忍辱の標に似たる意味ある如く、一種小天地的價值ありて、能く此の如きを致すなり。外山氏が時代の好尚に従ひて、畫題の變遷したるを示さむとて記したる、西洋と日本との畫題沿革は、頗爲めにする所ありて、筆を曲げたる迹あるに似たり。而れども余は他の三千七百餘言に對して、一々に之を辨駁すること能はず。左に其百之一をいはむ。

論に云く。美術的の繪畫に就いて言へば、太古に行はれたる畫題中最多きものは宗教的のものなり。次に行はれたる畫題中最多きものは歴史的天然的肖像的のものなり。人事的の畫題の如きは蓋最後に最多く行はるゝものなりと。

宗教畫の盛時の頗古きは外山氏がいふ所の如し。而れども希臘の宗教畫といふものは、世に傳ふること希なり。之を記傳に徴すれば、戰圖あり、肖像あり、又レエン、メナルが美術史などにも論じたる如く、習畫スチイズの類や多かりけむ。鳥の喙クビきぬといふツオイクシスが葡萄、これと伎倆を闘はしたるバラシウスが帷幕は證とするに耐へたり。宗教畫の眞の盛時は太古に非ずして中古なり、寺政の盛時と相伴ひしなり。而して其餘波は近時の初に及びぬ。是れ畫の美術品として作られしに非ず、

信仰品として作られし故なり。其良匠の手に出でしもの、美術品なるは偶然のみ。今の歐洲の宗教畫は、之に反して純然たる美術品なり。純然たる美術品は、他の信仰品の如く、民庶の需要に應ずるものにあらざる故、其製作の實數或は舊時の如くならずと雖、其減じたるものは信仰品の減じたるにて、美術品の減じたるに非ず。

外山氏は宗教畫に次ぎて行はれしを歴史畫天然畫肖像畫なりとし、其緣起を説いて曰く。最初此の如く(耶穌教社會又古日本社會の如く)宗教思想のみ盛なりし社會と雖、次第に開明に赴きて、人事は繁劇になり、歴史上の事件は増加し、人物は尊大になり、天然に注意するに至りて、始めて追々と宗教的のもののみを畫く風薄らぎて、或は歴史的の畫を畫くものあるに至り、或は花鳥山水を畫くものあるに至り、或は肖像を畫くものあるに至り、或は人事を畫くものあるに至るなりと。

歴史畫は古にもありしが、其發達の後世に至りて盛なることを得たるは自ら其故あり。歴史畫の起れるは、歴史上の事件の増加したるためならず、歴史學の漸く其問題を看破し得て、開化史の體裁備はり、故實の探討精くなれるためなり。余は外山氏の明此に想到らずして、徒に歴史上の事件の増加にのみ着目せしを怪まざるばあらず。

天然畫と肖像とに至りては、余其宗教畫に後れたりといふ事實を確認すること能はず。天然畫とは景畫動物畫靜物畫などを總括したる名なるべければ、其一種景畫に於いては、固より後世を待ちて盛なりし蹟あるなり。而れども動物畫と云ひ、靜物畫といふ、皆古に盛なりき。宗教畫の盛なるより前に盛なりき。肖像も亦然り。我邦の畫史の如きは、余が深く極めし所ならねど、百濟河成が寫生畫、飛鳥常則が動植畫などは、以て其時代の傾向を卜するに足るべく、又彼巨勢金岡も主として畫

像を作るに長せしにあらずや。

外山氏は人事的畫題を以て最後に最多く行はるものとしたり。我菱川師宣が江戸畫などより思へば、此言も理あるに似たれど、歐洲の畫史などにては、人事の頗る古く、又古代に盛なりしを見る。人事畫即風俗畫の「ジャンル」の名あるは、ナジャンが徒ジャコボ、ダ、ボンテより起りし語にて、希臘のパンファイルが家裡の生活を畫きしなどは姑く置き、フレミヤ派のジャン、ブルユゲル、テニエ父子を始とし、ミエリス、オスタアド、ムリルロの徒は、皆早く三百年前以上に於いて、風俗畫に長じたりき。之を最後といはむは恐らくは妥ならず。

外山氏の時代の好尚を崇べるや、殆理財的に美術を説きたる如き迹あるに至れり。一たびは我美術品の一般人民のために作りたるものに非ずして、僅少なる王公貴人のために作りたるものなることを歎じ、一たびは又佛畫の盛時を説いて、曼陀羅は必要なり、藥師如來の畫は必要なり、地藏尊の畫は必要なり、毘沙門天の畫は必要なり、阿彌陀佛の畫は必要なり、是等は當時破竹の勢なりし佛教のために必要なりしなり、當時に在りては、宗教畫の必要最多かりしなり、宗教畫の需要最盛なりしなりと云ふ。夫れ美術の一般人民の美術たらしむことは、誰も願ふ所なれど、外山氏が説きたる如く、宗教的需要に應じて佛畫を作る如きことを喜ぶときは、俗氣は美術天地を蔽ひて、千萬劫を経とも、美術の浮ぶ瀬なからむ。故いかにといふに古佛畫の需要多かりしは、美術品の需要多かりしに非ず、信仰品の需要多かりしなり。美術以外の需要に對して、美術品の供給を増減せんとするは、實の又實、美術の眞境を離ること甚遠ければなり。

第八、二畫則の妄

外山正一氏の畫論を駁す

論に曰く。何故に古昔の畫人は、神佛の名畫を多く書き得たるか。古昔の畫人は自ら宗教心強くして、眞に神佛を信じたるものなればなり。古昔の畫人の如く宗教心強くして眞に神佛を信じたるものは、宜く神佛の畫を書くべきなり。今の畫人の如く宗教心薄くして神佛を信ぜざるものは、神佛を書くことを止めよ。若し之をして神佛を畫かしむるも、決して見るものをして感動せしむること出来ざるなり。龍を信ぜず、觀音を信ぜずして、觀音の龍に乗れる畫を畫かむか。其畫く所は見る人をして觀音の龍に騎るの畫とはれもしむること能はずして、松明のあかりにてキャリネの女の網渡りをする畫なるかと疑はしむるなりと。神佛の畫を書くもの、信仰心を要せざることは、俳優の賊に扮するとき、偷心あること、若くは偷心あるものを愛することを要せざる如し。而れども俳優の技は尙是れ感納的なり。彼小説家が賊の傳を編めるとき、其爲す所の製作的なるも、余は小説家に向ひて賊心を求め、又賊をなすものを愛する心を求むることの非なるを知る。畫工が信仰者に非ずして能く宗教畫を作り、色を好むものに非ずして能く情事畫を作るも、小説家が賊心なく又盜を愛する心なくして能く賊の傳を作るも、審美的假感の實感と殊なればなり。彼等に向ひて審美的假感を求めずして實感を求めんと欲す。外山氏の言、余其頗妥ならざる所あるを見る。ガブリエル、マックスは「マドンナ」を畫くと雖、「マドンナ」を信ずることを要せざるなり。援崖子は觀音と龍とを畫けりと雖、觀音と龍とを信ずることを要せざるなり。唯「マドンナ」の小天地思想のマックスが空想を動かし、觀音の小天地思想の援崖子が空想を動かしたるありて、此等の畫は成りしなり。此等の畫の成りしを見て、余は二家に向ひて此の如き審美的假感を求めて足れりとあもふなり、復マックスに加特力教の信仰を求め、援崖子に佛敎の信仰を求めざるなり。マックスが

「マドンナ」にして果して神聖なる慈母の如く、援崖子が觀音にして果して繩技を演ずる「キャリネ」の女の如くならば、是れマックスが感納性と製作性と技術との中、孰れか援崖子の右に出でたるのみ。マックスが宗教的信仰心の援崖子が宗教的信仰心の右に出でたるに非ざるなり。或は將に曰はむとす。小説家の賊心なく、又盜を愛する心なくして能く盜俠の傳を作るべきは、洵にさもあらむ。而れども小説家は賊心なく又賊をなすものを愛する心なしと雖、尙賊の江湖の間に存活するを信ぜべし。彼神佛の畫を作らむとするものは、今特に神佛を信仰せざるのみならず、又神佛若くは人形の神佛の實在するものなるを信ぜざるべし。是れ其製作を妨げ又其製作したる美術品をして價値なきものとならしむる媒ならむと。是れ少しく理あるに似たり。而れども神佛を人形にて出すことは、民のひさしく慣れ見たる所に於て、宗教滅後の人も、亦宗教盛時の人の之を實在するものと想ひ、之を實在物の間に嵌めて想ひしことを知りたるものなれば、其實在を信ぜずとのみ云ひて、之を畫くことを非なりとせむは、其當を得たるものにあらず。况や小天地思想は神佛の人形をして永活久存せしむるをや。外山氏は此の如く説き來りて、法を二條に約して曰く。畫題撰擇に關して吾人の心得べきことあり。第一、畫題は當時人の最注意する所の事物を選むべきこと、第二、畫題は尙も畫人の感情を動かしたるものに非ずんば取るべからざること則是なり。而して今の畫人を見るに、此二則には全く無頓着なるものゝ如しと。

此二則は恐らくは並に非ならむ。第一、畫題は當時人の最注意する所の事物を選ばむとすべきものにあらず。故いかにといふに此の如く時好に投じ世俗に阿りたる畫には、今の意識ありて畫くこと

古より甚き時代に於いて、眞美術品たるべき價あるものを得むこと難かるべければなり。此の如く題を選ぶ書工は、其志商賈の如く、老子の所謂人見其跋、猶之魁然たるものなるべければなり。第二、畫題は必ずしも畫人の實感を動かしたるものなることを要せず。經驗は洵に製作の源なり。故にいつか作家の實感に觸れたるもの、製作品の胎を結ぶべきはさることながら、作家は未だこれに實感に觸れざるものをも、其會て實感に觸れたるもの、間より、自在に結構することを得べし。畫題の必ずしも畫人の實感を動かしたるものなることを要せざるはこれがためなり。唯外山氏は感情と云ひ、余は實感と云ふ。是換字の止みがたき所以は、外山氏が實感を感情といひしためなり。民の信仰心などを例に引けるにても、其實感にして審美的假感にあらざるを知るに足らむ。

第九、風俗畫

余將來の畫材を推すに、宗教畫若くは神學畫は小天地思想の發抒に依りて盛なるべく、歴史畫は開化史の進歩に依りて盛なるべく、動物畫に至りては近時獸性を知ること深くなりて、愈出で愈奇なり。殊に英國に於いてはランドシイル以降獸を書くことの多きが爲に、識者は畫に神聖なる處を失はむとするを歎きたり。景畫靜物畫は自然美の採り盡すべからざる如く、千載を経とも衰ふべくも覺えず。肖像の如きは別は是れ一格、古今に通じて盛衰少きものならむ。

外山氏は獨人事畫を以て將來最盛なるべきものとす。其言に云く。従前最少く行はれたる畫題にして、今後最も行はるべきものは蓋人事的の畫題なるが如し。今後一機軸を出さむとする畫人は、必ず人事的の畫題を選ばべきなり。今後名畫と稱せらるるものを畫くものは、必ず人事的の畫題を撰ぶ畫人なるべし。今後の名畫は多くは人事的の畫題に拘はるものならむことは予の前知して疑は

ざる所なりと。又曰く。今の吾邦の如き、宗教的并に天然的の時代を脱して、將に人事的の時代に至らむとするものなりと。

人事畫にして果して風俗畫を謂へるならむ乎。果して「ジャンル」を謂へるならむ乎。余も亦其將來の世界に於いて盛なるべきことを知る。人事の繁き、人境の濶き、畫材に供すべき地位ジヤクシヤンを出すこと何ぞ限らむ。余の其盛を下すはこれがためなり。而れども風俗畫の盛は他の材を畫ける畫の盛と並行すべきのみ。他の材を畫ける畫を凌いで、其上に軼出せむこと覺束なし。今の歐洲の新畫を挂けたる畫堂に入りて見るに、風俗畫の多きことは争ふべからず。而れども巨匠大家の作れる大結構の畫を數ふれば、殆一の風俗畫を見ず。若中以下の畫工の作れるものを除きて群畫を閱するときは、材を風俗に采るもの、少きこと古畫堂の挂くる所と異なることなし。是れ恐らくは故なきにあらざるべし。

今の畫を作るものに、何の畫か最難きと問はゞ、恐らくは復狗馬の難を説かずして、宗教畫神學畫歴史畫の難を説くべし。小天地的思想は高し。開化史的智識は得易からず。大畫工にあらざるものは一步を此境に着くこと能はざるべし。之に反して彼風俗畫の如きは、僅に數葉の習畫フジヤンを畢りたるものも、時に或は之を能くせむ。これに由りて看れば風俗畫の今盛にして後世にも盛なるべきは或は然らむ。然れども後の一機軸を出さむとする畫人の必ず材を風俗に取り、又後の名畫の必ず風俗畫なるべきは、余の信ぜざる所なり。

外山氏の將來の繪畫世界にて、人事畫の魁を占むべきを預言するや、其原因たるべきものを擧げたること一にして足らず。其従前最少く行はれたる畫題なるは、第一因とせられしに似たり。余は已

に風俗畫の必ずしも従前最少く行はれしものならざることを言ひぬ。世の開け世の進むに従ひて、特り益錯雜繁多になるものは即人事なり、世の開け世の進むに従ひて、日に月に千變萬化するものは即ち人事なりと云へるは、其第二因ならむ。これは余も上に擧げて、風俗畫の尋常畫匠の手に出づるもの多かるべき證としたり。人事畫に眞の趣味ありといふは、其第三因ならむ。風俗畫の俗尚に合ひ易くして審美的趣味を出すに至る者の世々指を屈するに過ぎざるは、古今畫家の殆異議を其間に挟まざる所なり。將來世人の最多く注意せむとするものは人事に外ならざるなり、今世に於て最多く人の心を奪はむとするものは即人事なりと云へるは、其第四因ならむ。こは又時代の好尚上より着眼したるにて、余は既に其眞美術に影響少かるべきを論じぬ。

第十、所謂人事畫と所謂思想畫と

風俗畫の範圍は猶甚小ならず。其高き者は直に歴史畫と相隣りて、時に材を小説稗史に取り、單稱的地位を寫出するものなり。而れども此種の風俗畫は之を作ること易からざるを以て、今極めて多きものにあらず。今極めて多きはこれより低き風俗畫なり。

外山氏は歴史畫の人事畫の如く盛なるべからざることを信する者なり。故に其所謂人事畫の高風俗畫を容れざるは疑ふべきにあらず。獨り高風俗畫を容れざるのみならず、低風俗畫中に就いても、尙大に擇ぶ所あるに似たり。論に云く。予輩の人事畫と稱するものは、浮世繪者流の畫く如きもの謂には非ざるなり。又土佐家繪卷物の畫の如きものにも非ざるなり。予輩の人事畫と稱するものは他に一種あるなりと。論の末に思想畫を談ずる處に至りて、又我邦古來の畫人を刺りて曰く。人事畫を畫かむか。花見の有様、營業の状態等を描出するに過ぎざるなり。土佐家の人事畫は巧なり

といへり。然れども之を褒むるものは火附を捕ふる狀況趣味あること、火焰の眞に迫りたることを稱贊する外に出づること能はざるなりと。

則ち知る、外山氏の所謂人事畫は大抵左式の如きものなることを。

人事畫——風俗畫——(高風俗畫+民業、遊覽、人災等の圖)

若廣大なる畫材の府より見るときは、風俗畫の領域既に狭し。風俗畫より高風俗畫を引去りたるもの愈狭し。風俗畫より高風俗畫を引去りて残れるものより、民業遊覽人災等の畫を引去りたるものは又愈狭し。これを以て將來の畫材に供して、以て此區域以外の畫材を凌がむとするは、余の輒信すること能はざる所なり。

然りと雖外山氏も亦將來の畫材を以て、此人事畫の殘片、此狹義の人事畫にのみ限りたるにあらず。其全く遠けむとしたるは宗教畫のみなり。論に云く。龍の如き、鬼の如き、佛の如き、神の如き、地獄の如き、極樂の如きは、今日に在りては既に不適當なる畫題となりたるものなり。今の畫人にして之を畫かむとするものは、必ず失敗せずんばあるべからざるなりと。彼歴史畫景畫動物畫靜物畫風俗畫肖像等に至りては、外山氏も亦餘喘を引くことを容さむとせり。論に云く。今日に於いて適當なる畫題は、花鳥(靜動)山水(景)禽獸(動)人物(風、肖)歴史人事(風)等の數種に屬するものなり。蓋花鳥山水禽獸等は今後と雖猶廣く行はるべき畫題なり。歴史的及肖像的の畫題は従前よりも多く行はれむとするものなりと。こゝに廣く行はるべしと云ひ、多く行はれむと云へるは、一瞥の下願望を屬したるに似たれど、熱視すれば大に非なり。故奈何といふに外山氏は已に自今以後の畫人の苟くも名畫を作らむとするものと、一機軸を出さむとするものに向ひては、必ず人事的の畫

題を選ぶべしと云ひしが故に、其人事的ならざる畫題を選ばむものは、一機軸を出すこと能はず、名畫を作ること能はざる理なればなり。

外山氏は既に畫材上より畫を論じて、其後に望あるものと後に望なきものとを判たむとせしが、論の末に至りて、又他の分類法を繪畫に施さむとしたり。

古より畫を分つものは、或は畫材に依り、或は技術に依り、或は尺度に依るを常とせり。畫材に依るものは歴史畫と風俗畫とを分つ類なり。技術に依るものは油畫と水彩畫とを分つ類なり。尺度に依るものは小畫と云ひ、中畫と云ひ、大畫と云へり。外山氏の論の末に至りて用ぬし分類は、此等の外に立ちたるものなり。

外山氏は曰く。畫は形狀を表するものあり。活動を表するものあり。情緒を表するものあり。思想を表するものありと。此形狀畫活動畫情緒畫思想畫の四種は余其いかなるものなるかを知らず。而れども情緒畫と思想畫とは猶外山氏の自ら下したる解釋あり。

論に云く。古來吾邦の繪畫たる、想像的のものと雖、専ら單純なる情緒の表象に拘はるものなり。錯雜なる思想に拘はるものにはあらざるなりと。こゝにて外山氏が忽ち情緒の上に單純の二字を添へ出し、思想の上に複雜の二字を添へ出したるを見れば、所謂情緒とは恐らくは單純なる情緒を表したるものならむ、所謂思想とは恐くは複雜なる思想を表したるものならむ。我此推測の大に謬れるものに非ざること、外山氏が自ら下したる思想畫の稍長き釋義にて知られたり。論に云く。思想畫とは果して如何なるものか。従前(日本)の繪畫の如く特に形狀を描出したるものか。謂には非ざるなり。従前の繪畫の如く特に活動を表出したるものか。謂には非ざるなり。従前の繪畫の如く特に活動を表出したるものか。謂には非ざるなり。

く特更に單純なる情緒を表出したるものか。謂にはあらざるなり。予の所謂思想畫とは即ち錯雜なる思想を含有したるものか。謂なり、錯雜なる思想を表出したるものか。謂なりと。情緒畫思想畫より外の畫には、外山氏の直に解釋を下したるを見ざれど、論中別に形狀畫の解釋に似たるもの一條あり。今の想像畫と稱するものは、大約線と彩色とを程々に分配したるものに過ぎざるなり。線を寄せ彩色を分配して、僅に形のみを畫きたる畫は、裝飾畫に過ぎざるなり、眞の美術畫に非ざるなりと。是に由りて看れば、所謂形狀畫は美術畫に非ざる裝飾畫なるかと疑し測らる。

既にして外山氏は上に擧げし四種の中思想畫を除きたる三種を總括して、感納的段階畫となし、思想畫をしてこれに對したる思想的段階畫たらしめむとするものに似たり。論に云く。今日迄は吾邦の畫人は尙感納的段階即「レセプチウ、ステエシ」receptive stage にあるものなり、未だ思想的段階即「コンセプチウ、ステエシ」conceptive stage には登らざるものなり。然れども今後は勉めて思想的段階に登らざるべからざるなりと。

繪畫

感納的段階畫 (模倣畫?)

思想的段階畫

形狀畫

活動畫

情緒畫

思想畫

(裝飾畫?)

(單純情緒畫)

(複雜思想畫)

外山正一氏の論を駁す

右の式中感納的段階畫の下に模倣畫と注せしは故あることなり。外山氏は今後の我畫工が思想的段階に登らざるべからざるを説きて以爲へらく。之をなすに非ずんば、吾邦の繪畫をして新面目を顯はさしむることは出来ざらん。之を爲すに非ずんば、明治の繪畫は徒に舊來の繪畫を模倣するものに過ぎざらん。感納的段階畫の模倣畫なるべきはこれよりして推したるなり。此分類法は事多くして理少き一場の演説のみにては解すべからざるものなり。余は外山氏が更にこれを詳説せんことを求むるものなり。而れども論に見わたる處のみに就いて一二の臆斷を加ふるべきは下の如くならむ。

第十一、兩段階

余は外山氏の分類を見て形狀畫の何物なるを知らず、又活動畫の何物なるを知らず。唯其名を視て、其義を聞かざればなり。余は又情緒畫と思想畫との何物なるを知らず。其義を聞けりといへども、未だこれに頼りて發明する所あるに至らざればなり。彼總括の二稱の如きは、附記したる英語にて略其字義を知りたるのみ。

單に字義上より見る時は、「レセブチウ、ステエジ」の感納的段階たること辨を須たず、「コンセブチウ、ステエジ」の思想的段階たるに至りては頗る解し難き所あり。思想の語は此處にて分明に「イデエ」の譯に非ず、「コンチエブチオン」の譯となりぬ。感納の「レチエブチオン」たるは英語を待たずして知らるれど、思想の「コンチエブチオン」たるべきは英語を得て纔に知りぬ。

「コンチエブチオン」(外山氏の思想)は審美學上既に定義あり。「コンチエブチオン」とは美術家の空

想裡にて内術品の始めて顯形を成す時なり。空想の胎を結ぶ時なり。製作の緒に就く時なり。故に「コンチエブチオン」なければ製作なし。製作なき美術は感納に止まるものなり、「レチエブチオン」に止まるものなり、複製に止まるものなり、「レプロックチオン」に止まるものなり。歌曲を作るものは製作なり。絲肉を役して之を度するものは複製なり。畫圖を作るものは製作なり。繪畫にして果して感納的「コンチエブチオン」的の兩段階を設くべくむば、其感納的段階は摹寫畫を謂ふなるべく、其「コンチエブチオン」的段階は製作畫を謂ふなるべし。

余は外山氏の設けたる兩段階の果して此の如き意味あるものなりや否やを知らず。而れども尋常審美學の用語例より見るときは、兩段階の意味は此の如くならざるべからず。外山氏の曰く。今日までは吾邦人の畫は尙感納的段階にあるものなりと。若我兩段階の解釋をして不幸にして誤らざるものならしめむ乎。今日までは我日本の畫人は皆摹寫畫を作りしなりと外山氏は、我見解は恐らくは外山氏の心を獲たるものならむ。

世人は模倣畫の果して何物なるかを知れりや。歐洲にてこゝ模倣畫を畫堂に懸ることもあれ。我國の慣用語を以て此意義を表さんとするときは、模倣畫は偽筆たることを免れず、贋品たることを免かれず、模倣畫は即ち偽筆畫なり、贋作畫なり。偽筆畫と云ひ、贋作畫と云ふ、其稱は極めて卑し。而れども余は此語を擧げて模倣畫を貶する意あるに非ず。偽筆畫を貶し、贋作畫を貶することの甚き我習俗は、恐らくは未だ美術の全體を解せず

して、美術品を取るに術を以てせず、人を以てし、又時を以てする結果なるべし。然れども贋作偽筆等の名目は猶人を欺かんとする心ありて書きしに似たる嫌あり。若語の簡ならんことを欲せば、思想的段階書といはむより書の正本オリジナルといふべし、感納的段階書といはむよりは書の謄本といふべし。

或は曰く。然らず。外山氏はいかにも舊來の繪畫を摸倣すと云ひたれど、所謂感納的段階書は今日までの我邦の書を總括したるなれば、苟くも日本書といふ美術書ありと認むる以上は、謄本のみなるべき理なし。外山氏は恐くは書を摸倣するもののみを感納的段階書に數へしに非ず。自然も以て摸倣して書となすべし、彫像も以て摸倣して書となすべし。これも所謂摸倣書の範圍に屬するものならむと。

按ずるに或者の言は或は然らん。書者の感納性あり、技術あるや、自然も摸倣すべし、彫像も摸倣すべし、之を摸倣して以て書圖となすことを得べし。此自然摸倣の書、彫像摸倣の書は書者の製作的空想を借ることなきものなるべし。果して然らば是れ上にも引ける動植物書中の圖式の類なり。要するに工藝品にして美術品にあらず。若摸倣したる書にして猶美術品たらんことを求めば、其正本已に書として美術品たりしに依らざるべからざればなり。

外山氏の曰く。今日までは吾邦の畫人は尙感納的段階にあるものなりと。若此兩段階の解釋をして不幸にして誤らざるものならしめむ乎。今日までの我日本の畫人は皆非美術品なる書を作りしなりと外山氏の斷定せしこととなるなり。

余は初流石に斷定することを猶豫せり、外山氏が巨勢金岡以下幾多の日本畫師を非美術品なる繪畫

を作りしものとしたりとは、又油畫の我に入りしより以來の近代の名匠大家の書を非美術品としたりとは。而れども今や或者の言を得て外山氏の思想的感納的兩段階の書を以て正本謄本の別ありとなさず美術書と非美術書又工藝書との別ありとせざること能はざるに至れり。今にして思へば外山氏は已に今の想像書を以て眞美術にあらずとしたれば、その今日までの邦書を悉く美術品外に置きしも怪むに足らざるなり。論に云く。今の想像書と稱するものは太約線と彩色とを程々に分配したるものに過ぎざるなり。線を寄せ彩色を分配して僅に形のみを書きたる書は裝飾畫に過ぎざるなり、眞の美術書にはあらざるなりと。

ここに外山氏の所謂裝飾畫の歐洲にて「デコラチオンス、マアレライ」と名づくるものと同からざるは言を須たす。彼の「デコラチオン」書中には眞美術品あればなり。以上論ぜし處にて外山氏が分類式と畫材説とを再閱するに、其要左の如くなるべし。

繪畫

非美術畫 (工藝畫)

美術畫

(古今邦畫)

(今後邦畫)

感納的段階書 (摸倣畫)

形狀畫

活動畫

情緒畫

(單純情緒畫)

思想的段階書

思想畫

(複雜思想畫)

外山正一氏の畫論を駁す

感納的段階畫材

宗教畫 歷史畫 動物畫
靜物畫 景畫 肖像

思想的段階畫材

人事畫 歷史畫 動物畫
靜物畫 景畫 肖像

(人事畫)

此分類と畫材説とは、實に前古に其比を見ざる所なり。唯憾む外山氏がその斯の如くならざるべからざる所以を示すことの充分ならずの偶示したる所の尋常の審美學的法則に合はざることを。

外山氏は猶其所謂思想畫を説明せむとして、畫材數種を擧げたれど、これとても邦畫の將來を覺悟するに足るべき者とは見ゆ。今其目を數ふるに凡五つ。曰皇公が病牀にありて徳川公と對面する圖、これは歴史畫なり。曰源頼朝の墓の圖、これは景畫なり。曰荷車を引きたる馬を一人の馬方の引きこづぎ、一人の馬方の尻の方より打たむとする圖。曰車夫の楫棒の上に倒れて死したる頭の邊に錢貨散亂し、老人の立ちてこれを見、群車夫の耳語し、二人の外客の後影を見せたる圖。曰貧夫の橋欄より幼兒を水に投せんとするを小童の争ひ止むる圖。曰一は荷車を男の挽きて子を負ひたる婦の後より推したると一は子に乳房を含ませたる婦人を乗せて車夫の行けるとの對圖。これ等は都て風俗畫なり。

外山氏が思想畫の思想已に「イデオ」にあらず、又個想類想などの義にあらず、必ず「コンチエブチオン」なりとすれば、空想動作の「利那」なり。所謂複雑なる思想は、内術品の胎を成せるとき、其局面の大にして其用材の廣きにやあらむ。

試に頼朝が墓の圖を思へ。葛蘿菩薩に被はれたる一塊の石山を背にして立ち、木の間より海見の

たりとて、其頼朝の墓なることだに、外術品を見たるのみにて知るべからず。此畫の始めて畫家の空想に浮びしとき、其「コンチエブチオン」は果して複雑なるべき乎。余大に感ふ。此一石一山一水の畫胎は、圖成りて之に對するものと感納と共に極めて簡單なるものなり。極めて平凡なるものなり。

論に云く。此は何人の墓なるぞ。伊豆の片隅より起りて旭將軍を粟津原に滅ぼし、先づ源氏の一統を遂げ、平家を西海に沈めて、終に海内を一統したる源頼朝の墓なりと。此名乗は誰かこれをなす。説明書を待ちて知るべき歟。作家に問ひて知るべき歟。外山氏が説ける如く、之を日光の廟に比し、之が時代の遠近を想ふは、皆畫家の「コンチエブチオン」の裏にあらざるなり。此複雑なる考案は美術製作の境地を去ること遠く、又看者感納の閾域を隔たりたること遠し。

知るべし、頼朝の墓の圖は「コンチエブチオン」の思想の複雑なるものにあらざることを。其他外山氏の擧げたる例に、一として複雑の「コンチエブチオン」を要するものなく、又其墓の頼朝の墓の老翁の父なることは奈何にして知らるべき乎。老翁の父なることは猶知るべし。後影の見ゆる外客の車より下りし人なることは奈何にして知らるべき乎。妻子を車に載せたりといふ車夫の畫にて、其載せたる母子の車夫の妻子なることは奈何にして知らるべき乎。此類猶あるべし。

余嘗て東京にて笑覽會といふものを觀しことあり。一瓶の水、之に題して阿弓阿鶴の涙なりと曰ふ。一笠一筇、之に題して石童丸が筇笠なりと曰ふ。題を見て物を知るべく、物は題を得て始て奇なり。外山氏の思想畫例は余其笑覽會中の物ならんかを疑ふのみ。未だ以て外山氏の所謂思想畫の何物な

外山正一氏の畫論を駁す

るかを窺知るに足らざるなり。

第十二、餘波

外山氏は日本繪畫の未來を説いて宗教畫を破棄せむとし、却りて望を風俗畫の一細區域に屬し、今に至るまでの日本畫を美術畫にあらずとし、一種の分類法を立て、其説明の債を世間に負ひたり。以良都女子は曰く。一讀の價值ありと。民友子は曰く。眞面目の演説なりと。一讀の價值は或は有らむ。眞面目なる處は或は存じたらむ。而れども余は之に服すること能はずして此文を草することゝなりぬ。

獨怪むべきは彼明治美術會が世人の會の主務者に之を駁せむとするものありと傳へしを聞きて、東京新報社に投じたる書なり。其文に曰く。外山文學博士の演説に就き、明治美術會の主務者は此演説を喜ばざるのみならず、大に之を反駁せむと怒りたるものあり云々と御掲載有之候處、右は全く無根の事にて、本會の主務者は頗迷惑仕候間、乍御手数明日の紙上に於いて正誤被下度候。尤も會員と申すも甚多數のこと故、中に或は論旨を解せずして愚痴を述ぶるもの有之候とも、其等は會員中にて有るか無きかの輩にて、有力なる會員は皆満足賛成致居候と。明治美術會の有名なる會員は、我邦今日までの畫を美術品に非ずして感納的段階畫なりといふ説を承認したる乎。忍池の觀馬所に挂けたる會員の油畫なども非美術品なりとする乎。其満足賛成の意果して安くにか在る。外山氏の論の出づるや、主務者の所謂有るか無きかの輩の愚痴を述べしは無理ならず。其述べたる所は果して愚痴なりや。其述ぶる所ありしは果して外山氏の論旨を解せざるためなりや。余は之を揣知すること能はず。而れども彼等の會員中の有力者と共に賛成の意を表せざるものは、又何ぞ外山氏

の論旨の解すべからざるを解したるに非ざるを知らむや。

因に云ふ。後に女學雜誌を閲すれば曰く。外山博士日本繪畫の未來の説甚好し。吾人は嘗に之を賛成するのみならず、兼てより之を主張し、又兼てより其將來の日あらんことを祈り且待つものなりと。女學記者の卓識猶此言をなす。余又何をか言はん。(明治二十三年五月)

美術論場の争闘は未だ其勝敗を決せざる乎(縁外生)

明治美術會の總會にて、外山博士が三年間の持論を三時間の演説とせられしとき、我東西兩派の畫家は一時騒然、喜ぶものあり、驚くものあり、又憤る者もありしに、未だ幾ならずして鴈外漁史の駁論出で、次で東京新報社は彼此を對照比較して、大に世人の注意を索めむとしたり。而れども余は未だ外山博士がこれに對して自ら辯ずる所ありしを知らず。知らずや、外山博士に向ひて再論を求むるものは、獨り鴈外と東京新報社とのみならず、又爛々生あり又國民新聞社あるを。

外山博士の再論にして出でずんば、世間幾多の畫家は望洋の歎止みがたく、去就の惑散するに由なくして、遂に其業を曠しくせむ。是れ恐らくは斯道に厚き博士の本意にあらざるべし。抑も博士は果してラスキン、テエンの舊説と大和錦の記事とを剽竊して、併せて其眞を謬りし乎。其「コンセプション」と理想とを混じ、又宗教的信仰心と審美的假感とを混じ、又感納性と製作性とを混じたりといふは果して眞なる乎。堂々たる大學の教授、嘿爾として一言の以てこれに應ずるときは、眞個に降旗を樹て甲冑を解きたるものなる乎。其繪事分類法は果して鴈外の列記したる如くなる乎。若し然らば此分類法を新製する必要は何の邊にある乎。博士の所謂感納的段階畫にして果して非美術畫と同一義ならば、我邦古今の畫の悉く非美術畫なる證據は何の處にある乎。其宗教畫

を以て今に宜しからずとする理由は如何なる乎。其所謂人事畫の畫題は果して詩歌の題にして繪畫の題にあらず、東京新報の附録畫は眞に博士の病にあたりしものなる乎。博士は既に自ら情機發動の時ならでは畫くべからずと云ひ、又自ら畫家のために許多の畫題を撰びたり。余は博士の畫題の世の畫家の情機を挑起するに耐へたりや否やを疑ふものなり。詩文に課題といふものあり。多く蒙者のために設く。古來或は巧妙なる篇章の課題に由りて成りしことありと雖、今のこれを自然に得たるものに比すれば、未だ曾て興味索然たらずんばあらず。外山博士は固より己れが撰びし所の題を世の畫家に授けしに非ず。若し此の如き情機の發動あらば果して畫を作るべきやと問ひしのみなり。而れども詩文の課題には未だ詩となすべからず、文となすべからざるものを見ず。博士の畫題にして果して畫となすべからざることを、鴈外等の言ふ所の如く、又強てこれを畫となしたるもの東京新報の附録畫の如くなりとせば、其畫家に求めたる所乃ち太だ妄なることなからむや。

畫の技たる其重點は果して何の處にかある。外山博士はこれを題に歸したり。題とは蓋し畫材ならむ。鴈外と東京新報記者とは畫材を重ずること此の如く甚からずして、却りて畫家の技術を以て獎勵すべきものとなしたり。彼林忠正氏の如きも亦然り。蓋しこれを細論すれば、重點の落つる處は、恰も畫材と技術との間に在り。鴈外の所謂内術品は即是なり。畫材を撰ぶは易し。技術を磨くは難し。その易きものは固より辯を費すに足らず。其難きものも猶勉めて而して得べし。唯彼内術品の胎を成すは天賦なり。民友子の所謂天光あるものにあらずは能はざるなり。かの外山博士に對して駁論するものは、内術品の天才に由りて成るべく、技術の鍊磨すべきを舉

げて、博士の天才に由るにあらずは成りがたき内術品を説き、鍊磨すべき技術を説かざるを怪みたり。嗚呼、余が博士に向ひて其再論を促す所以は特にこれのみにあらざるなり。請ふこれを聽かむことを。

古人の既に耗費したるものは、宗教的歴史のなどの畫題なり、その未だ識らざりしものは人事的畫題なり、故に名を後世に傳へむとするものは、人事畫を作れとは、外山博士の勸説する所にあらずや。余が博士に勸めむとする所も亦略これに似たり。古よりプラトオ、アリストファニス、アリストテレス、プロテン、シャフツバライ、ホオム、テドロオ、井ンケルマン、レッツシグ、カント、シエルリグ、ワイセ、ヘエゲル、ヘルバルト、シャスレル、ハルトマン等は已に許多の審美的論題を左扯右牽し、殆どこれをして芻狗たらしめむとしたり。外山博士は遺憾ながら其後にいでられたれば、宜しく一大見識を發揮して、以て千古の眼を醒すべし。恰好し、博士は已に思想の定義、美術の境内にて宗教的信仰心の必要、東洋畫の美術に非ざる理などを説かむとして其端を闡かれたり。若し一步を進めて其證を擧げ、其基を牢うせられれば、東洋世界俄然一大審美家を起したりとやいはむ。亦快からずや。故に余は外山博士に向ひて、新畫題のそれならで新論題を示し、そのこれに依りて名を後世に傳へられむことを希望せざんばあらざるなり。

鴈外は明治美術會に問ふに、今の嘗て忍池の畔、東台の上に懸けし油畫の美術品ならざる乎といふことを以てしたり。明治美術會の主務者にして果して之と同一たる見解を以て、博士の演説を満足賛成したりとせむ乎。その自ら非美術品を作り、揚々として世に示しむこと掩ふ可らず。若し其見解は鴈外と殊なりといはば、何ぞ迅にこれを世に公にして、冤を雪ぎ蔑を防がざる。余は會の主務

者の外山博士の演説を解せずして、輕率にも満足賛成の意を表し、又これを新聞紙に録載せしめたるを信ずること能はざるを以て、敢て此請をなすなり。嗚呼、明治美術會にして我此請を容れざらむ乎、明治美術會は決して美術會に非ざるべし。其稱號はいかにして保護せらるべき乎。

然りと雖明治美術會の主務者は、必ずしも明治美術會の全體と同視すべきにあらず。彼東京新報に出でたる辯明書は、或は全會の意見を表したるものにあらずして、會の主務者の意を表したるものならむも知られず。唯其言に有力と云ひ、多數を占めたるものと云ふより推測すれば、會の有力者と多數員とは、主務者をして此公布をなさしめたるに似たり。果して然らば余は四百有餘の會員中一個の是れ男兒なるなしと謂はむと欲するものなり。

余頃日猿崖子を訪ふ。寒暄を叙したる後、余曰く。君は已に畫を觀馬臺に陳べ、又博覽會に列ねられたり。毀譽紛々是れ或は君の意に介せざる所ならむ。而れども君は亦明治美術會主務者の一人なり。果して自家の焦心苦慮して作りいだしたる油畫幅を非美術品中に投じ去むとするか。彼曰く。我は我術を鍊磨し、我想を發揮して、以て自ら樂むのみ。外山博士の罵詈に於て何かあらむと。余又曰く。君が洒脫の胸襟、固より應に然るべし。而れども其明治美術會の主務者として、此の如き辯明書を出されしは、僕が解すること能はざる所なりと。曰く彼辯明書は毫も我が知る所に非ず。我は唯その何人の手に出でしかを問はむと欲して未だ果さざるのみと。余はこれを聽きて少しく發明する所なきにあらずと雖、これを言ふことを屑とせざるなり。

鴈外が駁論は東京新報社の之に應じたるあり。彼爛々生の言も亦これと大同小異のみ。鴈外が駁議を被りたるものは、外山博士と云ひ、明治美術會と云ふ、皆寂として語なきは何ぞや。獨り女學

雜誌ありて直に之に答へたり。女學雜誌の答は、或は未だ以て答となすに足らざるべし。而れども之を博士と明治美術會とに比するときは、挺然獨出大に嘉稱するに堪へたり。或は曰く。博士等は目下大に計畫する所あり。その堅甲厲兵以て敵に當る日は、當に近きに在るべしと。余未だ其是なりや否やを知らず。(明治二十三年五月)

外山正一氏の畫論を再評して諸家の駁論に旁及す

余が外山正一氏の畫論に向ひて試みし前度の批評の後、これに關する異議の世に出でたるもの少からず。東京新報には記者の時事評欄に聯載せし、美術論場に一大戰端を開かむとすを題したる文と、爛々生といふ人の外山博士の繪畫論を評すといふ投書と、美術論場の争鬪は未だ其勝敗を決せざる乎といふ縁外樵夫の投書とあり。毎日新聞には明治美術會員大森惟中氏の外山博士の演説を讀むといふ一篇あり。日日新聞には青山鐵槍氏が駁外山文學博士日本繪畫之未來論説といふ文あり。日本人には郷人加部殿夫氏が外山博士の演説に答ふといふ文あり。此類猶多かるべけれど、余が目撃せし所のみ就きていへば略此の如し。

外山氏にして此許多の駁論答議を讀み、又我前度の文を讀みたらば、必ず自家演説中の字句の人々の感納性に觸れて、くさくさの意義となりしに驚きたまふならむ。又或は人々の己れが意義を誤解せしを歎かるゝならむ。然れども余は思ふ、外山氏のこの驚この歎は、決して其當を得たるものにならむ、一字一句のくさくさの意義となりし如くなるも、己れの意義の人々に誤解せられたる如くなるも、決して其困を外に求むべきならず、職として自家用語の公明ならざるに由るものなりと。余は左に外山氏が錯用の語と諸家のこれに對して下したる解釋とに就いて、詳に論ぜむと欲す。是

れ我再評の綱領なり。されどこれに先だちて一言せざるは、外山氏と反外山諸氏との書に對する地位なり。又余が書に對する地位なり。

外山氏は其所謂思想畫の例を示したるをり、一種ごとに反歸句法を以てこれを結びぬ。曰く予輩は畫人にあらざるなり。予輩は此問に答ふること能はざるものなり。諸君は畫人なり。此問に答へずばあるべからざるなりと。夫れ外山氏は已に畫人に非ず。畫人に非ざる故に、一材の畫に入るべきか否ざるかを知らずといはば、其日本將來の繪畫のために、畫題の撰擇を論じたるも、恐らくは徒勞ならむ。余は信ず、此反歸句中の意は、全く外山氏謙遜の美德を表するものなることを。然れども此語中に於いて、外山氏の承認したりと覺ゆる一種の道理あり。うは外山氏の畫人を以て一材の畫に入るべきか然らざるかを判せざるべからざるものとし、畫人に非ざる人を以て此判斷の責に任ずること少くも畫人よりは淺きものとしたる事なり。

反外山諸氏の中にも炯々生は曰く。要するに外山先生は博學多識の御方なれども、決して専門の美術家とは見受奉らず。其繪畫論の如きは、蓋學術上大發明をなさるゝ御片手仕事なれば、之を駁するものこゝり反りて大人氣なきに似たれど。所謂美術家とは余其何物なるかを知らねど、尋常の意義にては美術的製作をなす人なり。譬へば畫人の如し。炯々生にして此意義の美術家を應に繪畫論をなすべき人物なりとなしたらば、是れ畫人に非ざる人の繪畫論をなすを踰分越權となしたるに似て、其見大に外山氏の懐ける所に近き者ならむ。彼加部嚴夫氏が博士自らが畫人にあらずして、かくも熱心に、かくも長々しく論辯して、世間の畫人を警醒叱咤せられしは、實に博士の博士たる所以ならむと感服するの外なしと云ひ、又かく云ふ余も畫家専門の者にあらず、唯日本畫事を嗜むこ

と茲に數年、故に聊か斯道の難易を経験せりと云ふ迄のことなれば、其邊は豫め御了知下されたしと云はれしも、重を畫家専門の者に歸して、繪事を論ずるものも亦主として専門畫家より出づべき筈なるやうに聞ゆ。されば自家も日本畫事を嗜みて斯道の難易を経験したる旁修畫人にてありながら、猶自ら遙りてかく斷りたり。其意を推すに、畫人にあらずして畫を論ずることは、縦令博士たる者には然るべきも、尋常は當然の事にあらずと思へるに似たり。彼青山鐵槍氏に至りては、則博士は繪畫の實業は未だ習得せざる由、さすれば全く岡目見と見ゆ、僕も繪畫は竹の葉、蘭の莖も畫得ず、故に畫家の事なれば其是非得失は申す筈なし、御同様畫人より見れば素人なりとて、畫人に非ざる人を畫に於ける素人となし、其畫事の是非得失を言へるを分外の事の如くせられたれば、これも亦外山氏の自ら占めたる地步に似たり。

これ等の言に徴して考ふれば、畫人以外の論畫者は諸家の論によりて悉く門外漢とせられたるかとおもはれたり。獨り東京新報記者ありて、外山氏の畫論を評して曰く。外山正一氏は文學博士なり。哲學の椅子を帝國大學に占むるものなり。其審美的學識は氏が専門の一科に屬すべきものなりと。劈空落し來れる審美的學識の五字は、分明に論畫者の應に占むべき地步を指定したるものにして、此一解を得てこそ畫人以外の論畫者の必ずしも門外漢ならず、必ずしも素人ならぬことは定まりたれ。蓋畫を作ることには於ては、畫人の専門家にして、畫人にあらざる人の素人なる如く、畫を論ずることには於ては、審美家の専門家にして、審美家にあらざる人は縦令畫人なりとも素人なること争ふべからざる道理なり。大森惟中氏は外山氏を以て文學歴史家となし、其繪畫の事に通じたるものならざるを斷言しぬ。文學歴史家にして果して美文(詩)學の史家ならば、其根據とする所、審美學を

棄て、他にあるべからず。若美文學史家にして審美學に通ぜずば、是れ美文學史家といふ名に負きたるものならむ。

余嘗てシヤスレルの審美學を讀みしに、論美者の階級種類を示したる一表あり。其要左の如し。

第一、覺悟、感應して斷ず 素人(鑒識家)

(若眼は實際的)

美術家 (美術友)

聚藏家 商

發行商 骨董商

第二、理解、思議して斷ず 年表家(討究家)

(若眼は理論的)

典故家 美術史家

第三、眞理、貫徹して斷ず 空想的審美家(審美學者)

(若眼は哲學的)

思議的審美家 眞の審美學者

シヤスレルが意を明にせむに、人の美に對する判斷は三級の發育をなすものにて、初級なる覺悟に於いては、本來一體、未だ差別を生ぜず。彼なく又此なし。中級なる理解に於いては、始めて差別を生ず。或は彼或は此なり。後級なる眞理に於いては、差別を滅殺して一に歸す。彼も亦此も亦なり。横に此表を見れば、曰素人、曰年表家、曰空想的審美家。これ等の人の判斷は直に成りしものにて、批評なく思議なし。故いかにといふに年表家の理解にも、空想的審美家の所謂眞理にも、直に覺悟する傾あり。此兩人物は理解的素人、眞理的素人と看做すことを得ればなり。横の次級は曰鑒識家、曰討究家、曰審美學者。これ等の人の判斷は思議に由りて得たるなり。中にも製作を事と

せずして品評を事とする美術家、典故家、思議的審美家は純に思議をなすものにて、美術友、美術史家、眞の審美學者に至りては、實際の着眼漸く疎く、將に眞理に近づかむとし、又眞理の室に闖入す。骨董商の品目簿は賣買の後に一篇の譜となりて美術史の芽を萌し、美術史の眞手眼は審美學あるにあらでは得べからざるもこれがためなり。

又縦に此表を見れば、先づ覺悟の判斷をなすものの中に、素人と鑒識家と相對したるあり。鑒識家とは美術家と美術友とを總べたるなり。美術家の美術品を製造するや、直覺なり、不可思議なり。其美を論ぜむとする時は、已に思議に陥らざることを能はず。ラファエル、ミケランジェロ等は詩を賦して美を讚せしことなどはあれども、好みて美を論ぜしものにあらず。うの好みて論ぜしはホガルスと云ひ、メンクスと云ふ、皆眞の作家に非ず。而れども彼徒は能く畫を作り、兼て能く畫を論ぜし者なれば、若論畫の責にして果して畫人の負ふべき者なりせば、其畫論は大に觀るべき筈ならむ。うの然らざるに由りて思へば、畫人中に於いて眞の論畫者を求めむとすること、譬へば外山、加部、青山氏若くは畑々生の如きものは、恐らくはいまだ論畫者の地位を審にせざりしものならむ。素人の畫を論ずるや、單にこれの感が感性にのみ基つげども、畫人に於いては技術上の經驗と製作性との暗々地に動くありて、却りて其明を損ずることあるべし。二者の弊あるは本一個々の好尚の相殊なるためなり。これを矯正すべき學識なきためなり。故に西諺に云く。趣味は争ふべからずと。

美術家に對する美術友は美術を愛し、且之を解するものなり。而れども此愛に虚實あり。此解に深淺あり。ルイ第十四世の陋なるより、パワソヤのシャック伯が忠なるに至り、又井ンケルマン、レツシングが高きに至る、皆美術友と名くべきものなり。美術友中に聚藏家となるものあり。聚藏家

外山正一氏の畫論を駁す

と相對立して斷つ相争ふものを商とす。これに新美術品の發行商と古美術品を賣買する骨董商とあり。所謂旁修美術家は専門の美術家にあらずして、時に美術的製作をなすものなれば、其畫を作るや畫人たり、其畫を論ずるや美術友たり。木村孔恭など其人ならむ。彼加部氏が自ら占めたる地步も或はこれに近きもの乎。

縦の次級には年表家と討究家と相對したり。美術年表家は美術の紀事を以てその任とすれども、蒐集の力ありて淘汰の力なし。狩野永納が本朝畫史もワザリが美術史も俱に此難を追れざるべし。討究家中にて稍低きは多く古書を読み美術を論ずる典故家なり。これには字義に拘泥する迹などありて、達眼あるは稀なり。美術史家といはるゝに至ては、多少の學識ありて、編次の間に呈露すべし。縦の末級にても猶感應の結果を含めるものあり。審美的の事を言ふ毎に、これを情感に訴ふるのみにて足れりとす。ジャン、パウルの類これなり。之に對する審美學者をシャスレルの猶二段に分ちしは、獨創の一系あるにあらずして一哲儒をなさずといふ理に基きたるにて、所謂思議的審美家は博采約取を事とする撰釋家なり。哲儒の猶一系を創立せざるものなり。

このシャスレルの論美者の級圖の悉く取るに耐へたりや否やは、余が問はむと欲する所にあらず。余は唯之を藉來りて、論美者若くは論畫者の必ずしも、美術家若くは畫人なることを要せざるを明にせむとれもひしのみ。眞は一のみ。美も亦一のみ。人々相殊なる趣味は眞趣味にあらず。眞趣味を求むるには審美學以外に道あるべからず。外山氏が畫題を出しての以て畫となすべきか然らざるかを問ひしは謙辭ならむ。その根据とする所は必ずや審美學なるべし。故に炯々生のこれを片手業とせしは過てり。加部氏が其熱心と長舌とに驚きたるは違へり。青山氏が岡目見と名づけて始よ

り之を輕視せむとせしは粗率なり。大森氏が文學歴史的眼睛を審美の光なきやうに云ひしは偏頗なり。外山氏は審美家として畫を論ずべき資格あり。わが草紙は始より審美的批評眼を備へむことを勉むるものなれば之を駁したり。東京新報記者の外山氏の畫を論じたるを怪まざりしは固より其所なり。彼炯々生、加部、青山、大森諸氏に至りても、自ら地歩を占むることをこゝ嫌ひたれ、其論難せし事は大抵審美的争闘と看做すべきものに似たり。

唯夫れ外山氏は審美家なり。畫を論ずべき資格あるものなり。故に余はその論じたる方法の備はらずして、の用ぬたる言語の精ならざるを疑はざること能はず。是れ余が既に一たびこれを駁して、今又再び之を駁せむとする所以なり。外山氏にして果して素人たり、岡目の觀察をなすものたり、片手業をなすものたらば、余豈度を重ねてこれを駁せむや。

第一、形美と體美と

外山氏の畫論の本領は思想の二字に歸着したるものなり。その古今の邦畫を棄てむとしたるは思想なきがためにあらずや。の將來の邦畫を改めむとしたるは思想あらしめむためにあらずや。思想、思想。此二字にして其定義明ならむには、滔々たる數萬言の論說も讀者をして渙然冰釋せしめしなるべし。豈青山氏の所謂亡羊の歎あらむや。然るに外山氏の所謂思想は變幻無極、段を逐ひて其意義を易へ殆捕捉すべからざるものに似たり。是れ豈其眞定義の太深奥なるために然るものならむや。苟くも之を諦視せば、其眞成の定義あるにあらずして、漫に許多の意義を附會したるものなるを知らむ。余は此許多の意義を一々に指定して、以て外山氏用語の精確ならざることを明にせむ。我前度の論は外山氏の所謂思想を釋くに二義を以てしたり。曰個想、曰内術品の結胎これなり。思

想を以て理想イデアならむと思ふは最近の解にて、既に爛々生も尙も繪畫たる以上は何物か思想畫にあらざるといひぬ。さて「イデア」としたる上にて、外山氏が殿堂たるに過ぎざる殿堂は畫を成さず、軍人たるに過ぎざる軍人は畫を成さずと説かれしに依りて、殿堂たり軍人たるのみにあらざる殿堂軍人の「イデア」を求めたればこり、類想に對すべき個想をば得たりしなれ。又思想を以て「コンチエブチオン」ならむとして、内術品の結胎の意義に當てしは、外山氏が邦畫の兩段階を説かれし時、一を感納的とし、其譯を「レセブチウ」と云ひ、一を思想的とし、其譯を「コンセブチウ」と云ひしに依れるなりき。この二解は余が敢て妄に私を加へたるにあらず。奈何といふに、殿堂たるに過ぎざる殿堂の以て畫となすべからざるものと、殿堂たるのみにあらざる殿堂の以て畫となすべきものとの別は、那邊に去りてか之を求むべき。内術品の結胎にあらざる畫家の「コンチエブチオン」は審美學上、那邊に向ひて之を尋ぬべき。到底類想個想の別、内術品の結胎の義にあらざして、此位に充つべきものなかるべければなり。

然れども思想を以て個想となし、又内術品の結胎となしたるのみにて、既に我前度の論に於いて其極端までも推及せし如く、矛盾の處左右逢はざるなきほどにて、此一蹉跌は余をして外山氏の畫論を再三讀せしめ、余をして外山氏の腦裡に混沌の形をなしたりし思想の分子を發明せしめたり。余は大森氏が三たび彼論を讀みて三様の解釋を下したりといふを聞きて同感の情をなすこと深し。蓋此多形性ポリモルフィスムは外山氏畫論の特性ならむ。余は先づ發明したり、外山氏の所謂思想の獨り個想たり美術品の結胎たるのみならず、亦美の髓なるべきことを。美の髓とは美の形に對したるものを謂ふなり。

外山氏の曰く。思想畫とは果して如何なるもの、謂なりや。従前の繪畫の如く、特に形狀を描出したるもの、謂にはあらざるなり。従前の繪畫の如く、特に活動を表出したるもの、謂にはあらざるなり。従前の繪畫の如く、殊更に單純なる情緒を表出したるもの、謂にはあらざるなり。予の所謂思想畫とは、則ち錯雜なる思想を含有したるもの、謂なり。錯雜なる思想を表出したるもの、謂なり。之を別言すれば、思想畫は形狀畫にあらず、活動畫にあらず、情緒畫にあらず、思想畫は思想畫なりといふこととなるべし。是より先に畫は形狀を表するものあり、活動を表するものあり、情緒を表するものあり、思想を表するものあり、古來吾邦の繪畫たる、大率皆形狀を表するものなり、活動を表するものなり、情緒を表するものなり、思想を表するものに至りては稀なりとありて、今日までの邦畫の悉く形狀畫、活動畫、情緒畫などなるべきをば論されたりき。

此論法は思想の義を釋きては形狀畫と活動畫と情緒畫とに非ずと云ひ、形狀畫と活動畫と情緒畫との義を釋きては思想畫に非ずとしたるのみにて、此四種の畫の差別はいふもさらなり、其存在だにこれに依りては曉り得べからず。

其釋義の扉は既に叩けども應ぜず。試に背後に環りて問はむ。外山氏は形狀畫の一例を明示せられし乎。曰否。活動畫の一例を明示せられし乎。曰否。情緒畫の例に至りても亦通篇これを見ず。彼猛くして規射する鷹、劍を舞はし槍を揮ふ合戦、形狀に風韻を加へきといふ山水、慈悲温順の佛は、余等其思想畫に非ざるを聞けども、孰れか形狀畫、孰れか活動畫、孰れか情緒畫なるを聞かず。故に余は前度の論に於いて、形狀活動情緒の三畫を以ていかなるものとも知られずと斷じぬ。思想畫の例に就きては既にも云ひしが又後にもいはむ。

形状畫は特に形状を描出したるものなりといへり。ホガルスは美線を論じ、美妙齋主人は曲線の美を説きたれど、未だ直線の圖、曲線の圖、圓形の圖、方形の圖などいふ美術畫を作りしものあるを聞かず。特に形状を描出したる畫は安くにかある。活動畫は特に活動を表出したるものなりといへり。流水の圖も飛禽の圖も流るといふ動性が主なる歟、水が主なる歟、飛ぶことゝ禽と孰れか特寫せられしなどと問はば、恐らくはこれを判する人なからむ。特に活動を表出したる畫は安くにかある。唯情緒に至りては、特にこれを描き、特にこれを表すること難からざるべきのみ。

外山氏は奈何にして形状畫、活動畫などいふものを見得たりし乎。之を思ひて止まず、遂に一説を得たり。形美と體美との關係即此なり。盖外山氏は眞個の美を推求して、これを日本將來の繪畫に與へむと欲し、美の形骸は何ぞ、美の精髓は何ぞといふ問を心裡にて起ししならむ。是に於て乎、彼數學的に人を悦ばしむる形状の美も動學的に人を悦ばしむる活動の美も、要するに形美に止まりたるを悟り、進みて體美の在るべき所を討尋し、自ら得たりと思ふ體美を、漫然思想と名づけて、彼思想畫例中に收めたるものならむ。

此推測は深く外山氏が畫論の胚胎したる處に入りたるものにて、之を探るは一種の冒險事業なるに似たれど、余は前度の論に於いて、外山氏が用ぬし二箇の英語のみを基として、論の大眼目たる感納、思想兩畫の別を解し去りし後、或は己が不親切なる論斷をなししにあらざるやと疑ひて、自ら安ずること能はず、遂に此揣摩手段を出ずに至りしなり。

外山氏にして若我推測の如く、形美を措て體美を求めむとしたる者ならば、余は其個想に逢ひ、小天地主義に逢はずして、遂に體美の面を見ざりしを悲まずばあらざるなり。故奈何といふに個想以外、

小天地主義ある個想以外に體美なかるべければなり、彼實際派詩人の心理的觀察の近世に至りて勢力あるも、其終末に於いて得べき所は、此體美なるべければなり。外山氏にして若個想に逢ひ、小天地主義に逢ひたらば、死したる車夫、馬を打つ馬丁、兒を乗つる翁、垂死の英雄、故墓碣などの畫材中に體美を求めず、一幅の觀音の圖にも、一卷の山水の畫にも、隨處其美を發明して、自枝頭十分の春を愛づることを得べかりしものを。

第二、情感と考思と

余は又發明したり、外山氏の所謂思想の獨り個想たり、美術品の結胎たり、美の髓たるのみならず、亦考思なるべきことを。考思は理解の働ある者なれば、情感の覺悟の働あると殊なり。

外山氏は思想畫の思想に複雑といふ語を添へ出して、之に對するに單純なる情緒を以てしたり。思ふに情緒の單純なるは情感の直に覺悟するものなる意あればならむ。思想の複雑なるは考思の理解を経る意を含みたればならむ。思想畫例中源右府の故墓碣を兎廟に比ぶる處を指摘せし我言に云く。此複雑なる考案は美術製作の境地を去ること遠く、又看者感納の領域を隔たりたること遠しと。盖考思は固より畫に入るべきものに非ざればなり。我前度の論は此情思の關係を審にするに違あらざりしが、幸に加部氏は之を詰難して、殆餘蘊なからしめたれば、且之を左に抄せむ。

其文に曰く。佛畫は慈悲温順を表し、山水は形状を表して氣韻あり、鷹は猛狀を表して射撃の狀を呈はし、合戦は合戦の慘狀を表し、花見は花見、營業は營業の情態を描出し、火焰は火焰が眞に迫りたらば、畫事に於いて他に何を必要めむ。通宵之を考ふるも、未だ其他に何物を表出し、何物を要むるかを知らず。畫は元來博士の所謂單純なる情緒を表象するが其本色にして、錯雜なる思想を表

出し得べきものにあらざるべし。即ち感納的のものにして、思想的のものにあらざるべし。博士もいはずや、畫人は宜く事物に觸れて感動したるものを畫くべしと。種々様々の理屈は知らず、幼兒が慈母に離れて迷兒となれるを見れば、何人も憫とおもひ、幼兒を打つものあれば、何人も無情とおもひて打つものを憎むが、即ち感情にて、即ち其單純なる情緒を表出するの境界に至りたらば、畫に於いて上乘の位置に在るものにあらずや。然るを博士は尙ほ未だ足れりとせず、思想的の畫を畫けといはるれど、其本條に掲げられたる畫題を以てこれを見れば、尙ほ感納的の畫題といはむより外なきが如し。原より博士は其題中に於いて、種々の思想を縷述して示されたれど、其下に論ずる如く、思想は畫を見る人に在りて、畫人自らは其感納する所を畫くに止らずや。こは畫のみにも限らず、詩歌の如きも、理屈を述べて複雑なる思想を定數の文字に寫出する物にはあらず。喜怒哀樂に感ずる時、忽に言辭となりて發するもの、即ち詩歌の本旨ならずや。故に詩歌を稱して啗嗟詠歎の聲なりと云はずや。若詩なり、歌なり、理屈を並べて自ら之を傑作なりと自負すとも、誰か之を感賞せむ。博士は物に感動せしとき即ち畫けと云ひ、又畫人は詩人ならずばあるべからずと云ひながら、爰には錯雜なる思想を畫けと云ふ。自家撞着も亦甚しからずや。

以上加部氏の駁議なり。長きを厭はずして寫出したるは、其痛切なるを愛づる餘になむありける。今の西洋詩學にては、詩の範圍を擴めたるゆゑ、詩は必ず情動的にて考思を取ることなきとは斷言し難し。叙事詩と戯曲との裡にては、情感固より其主に居れど、考思を以て補綴することなきにあらず。所謂諷刺の詩學に於けるや、身しと雖其位置を奪ふに由なし。而れども造術、殊に繪事に於いては、考思の以て材となすべからざることを炳焉たり。

外山氏が故墓碣の如き自然美を觀て、這裡に複雑なる思想ありと思ひしは、自家の聯想にて、早く景色の外に逸し去りたるを覺えざりしためのみ。

第三、葛藤の有無

余は又發明したり、外山氏の所謂思想の獨り個想、美術品の結胎、美の髓、考思の四義あるのみならず、亦葛藤ある美の變ともいふべき一義を含みたるを。蓋人の感納性は自然の美に觸るるも、美術の美に逢ふも、大抵情感上より動く者たることは、既に上にいひし如し。此情感はこれを考思に比ぶれば、頗單純なるものなり。外山氏の思想畫題なりとして擧示せられたる自然美も、その美なる限は必ず情感上に人を動かさし、或はこれを憫み、或はこれを悲むべきことは、加部氏の言ふ所の如し。これに由りて三百年の治亂を思ひ、將家の成敗を考ふるなどは聯想にして、畫と直接の關係あるにあらず。考思の複雑、豈畫を以て出し得べき者ならむや。而れども均く是れ情感なり。其間尙單純なるものと複雑なるものとの差別なきこと能はず。

比較的單純なる情感を起すものは葛藤(衝突)なき美なり。比較的複雑なる情感を起すものは葛藤ある美なり。兩者は皆美の變なり。美の我に對したるもの我より大に我より強ければ高といふ美の變生ず。譬へば英雄豪傑の美の如し。我より小に我より弱ければ柔といふ美の變生ず。譬へば美人好女の美の如し。其平を得たるものを美の正ともいふべからむ。高と云ひ、柔と云ふ、大小強弱より起る變なれども、必ずしも其高に壓せられ、其柔に悦ばせらるるものありて、其高と柔とを襯染することを要せず。苟くもかゝるものあらば、必ずこれに壓せられむ、これに悦ばせられむと思做さるれば足れり。故に高柔などいふ美の變には本來葛藤なし。此種の變の他に猶逸といふべきも

のあり。高も柔もいつにても葛藤を生ずべきものなり。人を壓し人を悦ばすべきものなり。其人を壓し人を悦ばす等の葛藤なきは偶然のみ。逸に至りては巖居川觀の高士の美の如く、別に葛藤を防ぐに足るものありて、輕々しく侵すべからず。故に逸を葛藤の外に超出したる美の變とす。然らば則ち葛藤ある美の變とは抑何物ぞ。喜と云ひ悲と云ひ滑稽と云ひ悲壯と云ふ、皆物の物に觸れたる結果にあらざるはなし。悲喜、悲壯滑稽などは皆葛藤ある美の變なり。

凡う繪畫其他の造術に使はるるものには葛藤なき美多くして葛藤ある美少く、詩賦などに使はるるものにはこれに反して葛藤ある美多く葛藤なき美少し。葛藤あるものは尋存として出ずに適し、葛藤なきものは並存として出ずに適すればなり。

我邦古今の畫は山水と云ひ花鳥と云ふ、皆外山氏の取ることを屑とせざる所なり。今のこれ等のもの多く我畫の材となりし所以を論じたる言に云く。本邦には優美なる花鳥、絶妙なる景色、全國到る所に存在して、人の心を奪ひたること、佛教は人心をして凡俗を離れて花鳥山水を樂ましむる傾向あること、儒教は人を風雅に導き仙骨を帯びしめ、清風明月の間に遊ばしめむとする性質あること、吾邦の掛物の如く、室内裝飾を専ら目的とする畫に在りては、花鳥山水の如き畫題最適したるものなること、是等諸般の事情は、本邦の畫人並に本邦の畫人を使役したる人をして、常に最花鳥山水に注意せしめ、常に最花鳥山水を樂ましめたる所以なり。是則本邦畫人の多く之を畫きたる原因なるが如しと。我に優美なる花鳥多きことは果して南歐の上に在る乎。余は遽にこれを斷ずること能はずと雖、ホイナム、エルスト、コペルが花卉の艶なるは、多く我畫に遜らざるべし。我に絶妙なる景色多きことは果して瑞西の上に在る乎。是れ或は應に然るべしと雖、人の景色を尋ねて遊

ぶもの多きは恐らくは歐洲の民に若くものなからむ。清風明月の間に逸興を寄するものは、必ずしも儒佛兩教の之を致すに非ず。テオクリット、井ルギル、ゲスネル等の詩卷を披かば、嵐氣苔香の人を撲つ如き感あらむ。多く室内の裝飾となさざる畫を作りし國は何處にかある。之を西洋に求むるも恐くは得がたからむ。嗚呼、山水花鳥の畫に入ること多きは、豈必ずしも外山氏が擧げたる如き原因ありて然るならむや。其美に葛藤なきために畫材となり易きのみ。而して外山氏は之を排斥したり。今の排斥したるは葛藤なき美なればといふ緣故ありての事かと思ゆ。

今これに反して外山氏が勸めたる思想畫の例を見るに、中には鎌倉將軍の墓の如く無葛藤なる自然なきにあらねど、之を除きたる外の數例は、一として葛藤ある材に非ざるなし。將軍の墓固より葛藤ある材にあらねど、外山氏のこれを取りたるは、今の葛藤なき處を取りたるにあらず。これに依りて起るべき理解を取りたるなれば、此破格も亦殆破格にあらず。外山氏は葛藤ある美を畫家の匾架の下に献じたること明なり。

彼英雄の末路を表したる、豊公が病牀にて徳川氏の祖と語る圖を除き去りて、外山氏思想畫例を歴視せよ。外山氏の好める葛藤は悉く同一の原因あるを發明せむ。曰馬丁の疲馬を打つ圖、曰外客の車夫の死を冷視したる圖、曰貧人の子を水に投ぜむとする圖、曰車挽く男女のさまを表裏より寫したる圖、皆是れ人間貧富の差別より起りたる葛藤なり。原役者と被役者との關係より生じたる葛藤なり。約言すれば社會的葛藤なり。

余外山氏の心を推測するに、其哲學者たり德學者たる地位は、此人をして意を社會問題に注がしめしに、平生清風明月の興趣を抛ちて顧みざりし肚裏にも、猶一片の美を愛する能力存じれば、

彼社會問題の之に觸れて暗々地に所謂思想畫題となりたるにはあらずや。馬の打たるも被役者として打たるなり。車夫の死したるも被役者として死したるなり。子を棄つる親も車を挽く夫妻も、勞力と受用との不平均を表するに耐へたるものなり。外山氏が畫題の多く此の如きは、豈其れ偶然ならむや。余は信ず、外山氏の演説の一時素人をして同感を表せしめしも、亦必ず此社會的葛藤を表出したる題例に由るもの多かりしことを。

嘗て伯林に在りて、魯人某の新著小説を讀みしに、一畫師ありて、其遇の轆轤を憤ほりて、常に沈鬱悲激の念を懷き、蒸氣機關室中の工夫が流汗面に被りたるさまを圖したることを記したり。繪畫を以て社會問題を表出せむとしたる人は、早く外山氏の前にもありしなり。唯憾む、外山氏の畫材とせむとしたるものは、皆特に造術に適せざること我前度の論駁にて明にせし如く、又其複雑なる葛藤の始より丹青に抗抵すべきものなりしを。余を以て之を見れば、彼の魯人某の小説中の畫材の如きも、亦恐くは觀るに足るべき畫圖を成さざらむ。

青山氏は外山氏の畫論を駁して曰く。凡て人間萬事皆正則あり、變則あり。例之ば世に盛衰あり、物に表裡あるが如し。博士の畫論千萬言なれども、之を約せば此二言に出ず。僕より見れば今の畫家は正則多くして變則少しと言ふは可なり。一概に正則を抹殺し唯變則のみを主張するは解せざる所なり。夫れ娛樂歡欣は人の好む所、艱苦憂愁は人の惡む所、故に畫人多く花鳥山水人目を娛ましむるものを畫くを常とす。人の石碑や、人の頓死や、此不祥の物を描く、其妙鬼神を泣かしむるも、好事家博士の如き人はいざ知らず、普通人情より推せば、買手稀なるべし。故に僕より見れば、博士の畫想は殆ど一も取べきなし。斯く素人にて感服せざる畫情を、况や畫人の感服は如何あるべきかと。

畫材は買手の多少によりて定むべからず。素人畫人の意見は未だ以て畫材の適否を決すべからず。而れども青山氏が正變二則を以て外山氏畫論の病を指定せしは大に善し。物の葛藤なきは常態なり、正則なり。其之あるは非常態なり、變則なり。受用の勞役に酬ゆべきものなきは非常態、變則の最甚しきものなるべし。

余はこれにて此篇を終へむと欲す。剩す所は唯一あり。即我前度の論に見えたる内術品上の問題と外術品上の問題との關係なり。

畫材の事は原畫人の空想に在りて、其製作性の關する所なり。此能は教へて長じ難きものなれば、他の外術品をなす技術の人の感納性に關するたぐひに非ずとは、余が既に言ひし所なり。此論旨は東京新報記者もこれに左袒すと云ひぬ。大森氏も亦博士が美術に通ぜざるは勿論にして、一も畫體の事に論及せず、形象、布置、用筆、用墨等の技術上に關する問題を言はず、自ら妄信せる西洋說に基き、單に新畫題を撰ぶべしと臆斷せしに過ぎざるなりとて、外山氏の技術を措いて、内術品の事のみ注意せしを難じぬ。獨り加部氏が繪畫の妙は畫題の撰擇にあらず、趣向にも形象にもあらずして、技術に在りと道破せしは、稍極端に亘れりやと思はるゝのみ。

又頃日林忠正氏が明治美術會の月次會にて演べたる外山氏畫論に對する異議を見るに、これも技術を重ること度に過ぎたるに似たり。その技術を細叙して濃淡、遠近、輕重、剛柔、冷温、乾潤などに及びて、ドラクローアが言など引き、畫題以外に繪事の要素あるべきことを明にしたるは善けれど、所謂思想(又精神)に對するに實體を以てはいはく。予は唯畫人が思想を描出するに熱心なる餘、實體を蔑視する病弊を憂ふるものなり。畫人が實體を寫す困難に向ひて戦ふ力盡きて、實體は

寫して眞に迫ること能はざるものなりと放棄する流弊を責むるものなり。實體は取るに足らず、精神を通ずるは畫の目的なりと唱へ、實體と精神との關係如何を究めず、莊嚴術（こは眼界美術を二分したる一にて、美術の實體なりといふ、以て美術の精神なりといふ所謂精神術に對したるなり）を忘るゝ流弊を責むるものなり。美術と哲學とを混じ、畫を無形の理論に取違ふる流弊を矯むるものなりと。是れ空論のみ。實體果して哲學上の實體ならむ乎、畫に於いては絹素のみ、油塗のみ。實體果して抽象に反對したるものにて、美なる映象ならむ乎、之を措いて美安くにかあらむ。技術は哲學に非ず。而れども美術を論ずるは哲學の事なり。畫は無形の理論に非ず。而れども畫を論ずるは無形の理論を以てせざるべからず。之を非なりといふ意にもあらざるべし。然りと雖世に美術を哲學と混ぜしものあり、畫を無形の理論としたるものありといふ證據なくば、是れ空論に非ずして何ぞ。

余等と同じく技術を論ずることの緊要にして、内術品を論ずることの實益少きに優りたるをいひしは、緩急の別こそあれ、上の諸家皆然り。唯技術を論ずることを重ざるに止らずして、技術其物を重ざること甚しく、遂に内術品を蔑視するに至りしものは、立言の宜きを得たるものにあらざるべきのみ。

外山氏を駁撃したる論者の中にも、亦大に内術品を重じたるものあり。炯々生是なり。曰く。余の意に謂へらく。大家の大家たる所は、新奇の題を書き出して人心を眩惑せむよりは、寧普通にして廣大なる感情に訴ふるに在り。語を換へて之を言へば、畫題にあらざりて畫題を表示する趣致に在り。畫題其物は固よりいまだ内術品を成さず。趣致の重すべきこと分明なり。レッスینگは畫工

コンチイの口を借りて、ミケランジェロは手なき者に生れたりとも、猶大畫匠ならむと云はせぬ。是も内術品を重じたるものなり。縁外が重點の落つる處は恰も畫材と技術との間に在り、隅外が所謂内術品は即是なりといひしも同じ。而れども更にこれを精査すれば、重點は右にも落ちず、左にも落ちず、又中間にも落ちず、畫材（畫題）も内術品も技術も皆一に歸したる處にあり。シヤスレル云はずや。美術品の成るに當りて、其原動力は初なり。發揮は其次なり。是れ客觀的詩學上の効に於てのみ然るにあらず。技術上よりも然るなり。然れども美術品を判斷するには、其次なるものを以て主とせざるべからず。是れ主觀的美術上の製作の結果なればなり。此問題に於きても眞理は中央ならぬ湊合點に在り、相反したるものゝ調和せられたる高等の湊合點に在り。 (明治二十三年六月)

林忠正氏の演説

明治二十三年五月二十一日地學協會にて開かれたる明治美術會の月次會には、林忠正氏が外山博士の演説を讀むといふ題の演説あり。次いで柳源吉氏の講話、十餘人の五分演説といふもの、名畫縮圖數十枚の陳列などありと聞きて往きぬ。講話と五分演説とは原敬氏の出でて時間なき爲に開きがたき由を告げられぬ。名畫縮圖といへるは伯林とドレスデンとの兩畫堂に掛けたる畫圖のおもなるものを、彼處にて縮摸印行して旅人に賣るものなりき。珍らしといふにしもあらねど、ドレスデン畫堂の兩「マドンナ」など、いつ見ても飽かぬ心地せられぬ。

余がゆきしときは林忠正氏が演説の最中なりき。唯見る俊秀の一男子、尖髭天を指したるが、大判の紙に記したる「コンチエプト」を机狭しと展開きて語れるを。此人は美術の定義と云ふもの五つ六つ並べて、皆歐洲大家の言なればといひて軒輊せず。美術の分類につきては、これを眼界の美術、耳

界の美術の二に分れたり。眼界美術の好例は畫にて、耳界美術の好例は詩なりとの事なり。余輩は其樂を以て耳界美術の例となさず、詩を以て心界美術に列せざりし故を知らむと欲すれども、演說中には別に理由を陳べられざりき。眼耳二界の美術中にて最人にわかり易きは畫なり。故に古來美術を説くものは必ず畫を説きて、人の他の美術に推及するに任せたり。畫の要は實體と思想とを寫すに在り。外山博士は思想にのみ留目せられたれど、畫家の思想ありて之を手腕に發揮すること能はざるは、猶啞人の思を舒ぶること能はずして、畢生呻吟することと。こゝにて滿堂関然たりき。思想ありて畫の成らざるは、今匠の病なれ。博士は濃淡を寫し形體を畫くは、已に我畫家の能くする所なりといへど、眞に濃淡を知りしは千古一レムブランドあり、眞に形體を畫きしは千古一ミケランジェロあるのみ。我畫家は宜しく思想を後にして技術を勉め、佛人ドラクロアが畫則を守りて、物の堅脆乾濕をも寫し出し得るに至るべし。この段は演說中の最好處なり。實體思想などいふことの定義の微しく漠然たる憾はありたれど、外山氏の畫題論などより見れば、一層親切なるものにて、外山氏畫論の病をば此人も看破したりけり。思想畫に至りては、此人其一種高等のものなるを承認したりと見ゆ。感納的段階と思想的段階とは一躍の差のみ。外山博士は躍りて上れといはれたれど、此一躍は千萬人中の一人にあらではなし難し。ラファエル、ミケランジェロ、ルウベンス、レムブランドなどのみず此一躍をばなし得しものなる云々。是れ古今東西の畫家を以て悉く感納的段階畫家となし、一二の名匠をのみ除き去りしなり。余は唯此人が何故少しく外山氏の所謂感納的思想との意味を温尋して、然る後に此一解を下さざりしかを怪むのみ。茫々たる千古冤に泣くもの幾人ぞ。外山氏の所謂感納的段階畫はわが論せし如く非美術畫の別名のみ。其思想的段階畫のみこゝ

美術の畫には數ふべきものなれ。而るにラファエル等を除きたる伊太利の畫工、レムブランドを除きたる和蘭の畫工等をして、美術家の斑に列し得ざらしめむとせしは、意味不明の術語を弄びたればなり。かへすくも口惜しきことなり。林忠正氏は余其何人なるを知らず。演說中に多く佛語を挾まれしにて、佛國に在りし人ならむと推して聽き居たるに、日本固有の技術にて畫きたる畫は、後來發達すべきものならず、其古きものは把翫に堪へたりとの説に至りて、現に自分も古畫を賣りて口を糊するものなりといはれたるにて、其古畫を鬻ぐ人なるを知り得たり。(明治二十三年六月)

矢野文雄氏と九鬼隆一氏との美術論

外山正一氏が畫論出でより後、世にあらはれし美術に關する言論は、報知新聞に見わし繪畫論、附日本油畫評と、東京新報に載せられたりし美術論とを主なるものとす。彼は矢野文雄氏が明治美術會にて演說せし趣意にて、此は九鬼隆一氏が京都美術協會にて講話せし筆記なり。矢野氏は自ら繪畫論と題して、その論の區域を狭くしたれど、その説きしところは、一々これを他の美術に應用することを得べきものなれば、今九鬼氏の論とならべ擧げて、單に美術論といふ。余はこゝに兩家の論旨を批評するに當りて、そのねほむね醇正にして、また彼外山正一氏が言のこどくならざるを喜ぶなり。

矢野氏は美術の性質を論ぜむとして、却りて美術の製作上の事をいひぬ。故にそのこれを言ひて淺きところは、美術製作の摸倣論となり、そのこれを言ひて深きところは、美術製作の想化論となりたるなり。されば美術製作の前階級ともいふべき摸倣、想化、聯合の三つに就きて、矢野氏は前

たること掩ふべからず。蓋し彼此皆想化の結果なり。想化にはこれのづから深淺ありて、その淺きものは猶摸倣に近く、實物に依傍して、あの枝の南に出でたるを東へ向け、あの花の俯向きたるを仰がしめむといふ如く、僅に變更をなす。これは感納性の働く境界なり。想化の深きものは已に空想を役して實物に勝りたる空想圖を作り、これを寫し出すなり。これは製作性の働く境界なり。矢野氏が奇態といふものゝ裡につきて歴史美を除き、これに旨味といふものを併ずるときは、略々想化の境界を示すに足らむ。唯惜む、矢野氏が當初奇態に歴史美をくはへて異類を混淆し、奇態と旨味とを別にして同類を分離せしことを。

矢野氏は第三に聯合 Combination の事を説いてはいはく。各部は實なり。全體は虚なり。各部の實をあつめて、全體の虚を作るものは繪畫なり。一石一逕一草一木の實をあつめて、虛山水を作るも、骨格面相衣服態度一々の實をあつめて、虚なる聖母子の像を作るも皆同じ。小説を作るもこれに似たり。これは矢野氏の聯合論と見做すことを得べし。聯合は蓋し想化の更に一步を進めたるものなり。想化にては一實物につきて變更をなすのみなれど、聯合に至りては、許多の實物につきてあちこちと撰擇し、これを一つにまとめて用ゐることを得るなり。而れどもラファエルが聖母子の像は、決して此の如く單純なる摸倣想化聯合等にて生じたるものにあらず、必ずや別に偉大なる空想の働ありて、製作の本境を経來りしものなるべし。唯矢野氏はこれに論及せざりしのみ、製作の前階級を踰ざりしのみ。

矢野氏の本論はここに盡きたり。然れども矢野氏はその摸倣（摸眞）と想化（奇態及旨味）との傍に、美麗といふものを添出したたり。これは審美學上に美と曰ひ美妙と曰ふ如く廣きものにあらず。

その解釋は左の如くなりき。室内の壁の白々を見ゆるは與なし。これに畫を懸れば美麗なる。ここに畫といふは着色のものに限るにあらず。縦合水墨なりとも、猶摸倣あるを以てここに算入すべし。この美麗を愛するものは、いまだ眞に繪畫をめぐつるものにあらず。これ等の人は絨緞の美き摸倣を見ても喜ぶべく、染匠の染出でし五色の花形を見ても喜ぶべし云々。

この解釋に依りて見るときは、矢野氏の美麗はきはめて狭き意味あるものあり。余はハルトマンが立てたる美の結象階級の大綱を左に掲げて、矢野氏の美麗の領分を定めむとす。

美の結象階級

- 一、無意識形美 即ち官能的に快きもの
- 二、第一級形美 即ち數學的に心に適ふもの
- 三、第二級形美 即ち動學的に心に適ふもの
- 四、第三級形美 即ち被動的に目的に適ひたるもの
- 五、第四級形美 即ち活動するもの
- 六、第五級形美 即ち類想的なるもの
- 七、結象美 即ち小天地的にして且つ個想的なるもの

矢野氏の美麗は先づ分明に無意識形美を含みたり。奈何といふに彼白壁の白きよりは摸倣あらむことを望むといふ心は、視學的に官能の快を求むるなるべければなり。彼は又分明に第一級形美を含みたり。奈何といふに彼染摸倣花形をも線畫、彩畫とそれなしく愛する心は必ず數學的に定むべき形を取るものなるべければなり。これより進みて第二級以上の美に至りては、決して矢野氏の所謂美

麗の能く含むところにあらず。
矢野氏のかくの如くみづから美麗の義を立てたるは善し。然れどもこれを彼摸倣及想化と一列にならべたるは頗道理に違へり。摸倣と想化とは美術製作の區域に屬するものなるに、所謂美麗は狭く取りたる美の意義に過ぎず。

矢野氏はみづから其説を約していはく。美麗摸眞奇態旨味の四つの中にて、美麗と摸眞とは手術に屬し、奇態と旨味とは意匠に屬すと。こゝに手術と云ひ、意匠と云へるは、則ち矢野氏の本論の美術製作論に陥りたる明證なり。而してうの意匠といふものと、手術といふものとを審査するに、多く是れ感納性の働にて、製作性の働は殆其存否明ならざる如し。奇態と旨味とは想化作用なれば、げに意匠を要すべけれど、これを行ふは手術なり。若し摸眞即ち摸倣を以て手術となすときは、想化をも手術とせざることを能はず。強て其別を求めば、摸倣は意匠を要せざる手術にて、想化は意匠を要する手術ともいふべき歟。美麗に至りては、美術製作には關係なきものなれば、こゝに入るべきにあらず。矢野氏は次いで我邦今日の油畫を評していはく。我邦今日の油畫は能く摸眞をなすものなり。而れどもこれにては満足すべからず。今よりは宜く進みて奇態と旨味とを求むべしと。若此言を然りとせば、我邦にはいまだ眞の美術製作を見ざるなり。奈何といふに彼神來の時空想の働にて美術品を成さむには、摸倣想化聯合の前階級皆備れりと雖猶足らざるべし。况や摸倣ありて想化なきもの、能く何の繪畫をかなさむ。矢野氏の言は親切なりといへども、初めて美術を事とするものに對してこれを言はざる可ならむ、老成なる美術家に向ひてこれをいふは無益なるべし。

九鬼氏は美の人生に於ける地位を論じぬ。その二大部分は、曰美と需要との關係、曰美と道德との

關係是なり。

美と需要との關係に於いては、美術家の檢束せらるゝは、唯畫法の必要のみなりといひて、うの例には同じく蜀中の山水を畫くに李將軍は一月を費し吳道子は三日にして成したれど人これを軒輊せざるを引き、世の經濟上より美術の實用を説くものを排し、美と道德との關係に於いては、美術品の古暴主の娛樂をなすは永久の事にあらず、將來は公衆の共有和樂に基きたる美術あるべしと説きて、世の美術を以て奢靡文弱の風を導くものなりといふものを排したる、是れ九鬼氏が論の主眼なり。余が考にては九鬼氏は美と需要との關係を論ぜむとして、これを論じ盡さず、美と道德との關係を論ぜむとして、却りて美と需要との關係を補説せしものなり。美術家が經濟上の實用を顧みずして、獨り自ら製作をなすは、是れ世の不正當なる需要を却くといふのみにて、世には別にかの獨り自ら製作せし美術品に對する需要あるなり。又美術品の奢靡の具となる否とも、固より需要論の一部なり。人間の需要に實なるものと想なるものとありて、彼足りて僅に此に及ぶは順序なり。實なる需要を充たしめたる上に、更に想なる需要を充たしめむとするは、是れ或意味にて必ず奢靡なり。故に美はいつも奢靡品なりといふことを得べし。此奢靡品のいにしへは暴主の受用にのみ供せられしを、今よりは民の受用に供せしめむといふ九鬼氏の言甚善し。而れどもこれを美と道德との關係の論としては、少しく安ならざるところあり。九鬼氏は別に古物探究の事を説きしが、直接に美術に關係せざるを以てこゝには省きつ。(明治二十四年一月)

讀日本新聞西洋技術家論

今の吏となりて技術の政をなせるもの、東洋の術を保護せむがために、西洋の術を排斥す。西洋の術をなすもの、これを片手打なりとして、不平の鳴をなすに、日本新聞は西洋技術家と題したる論文を作りて、今の吏となりて西洋の術を排斥するものを回護せむとしたり。

ここに象山隠士といふものありて、日本新聞が平生の國粹論を、あまり飛んでもなき方角まで擔ぎゆかむとするを見るに忍びずして、起ちて西洋技術家のために言ふところあり。今の難駁一々肯緊に當れりと覺ゆるものから、かの日本新聞が論の首にもつたいらしく据え置きたる頗る無法なる保護非保護の辨を駁し洩しつとおもふことの殘惜さに、聊象山の隠士が尻につきて一本參らむと存ずるなり。

日本新聞記者はおもへらく。すべて西洋の事物を崇拜するものは、政府の保護を頼むこと、これれ等記者などより少き筈なり。西洋技術家は右様なる崇拜者なり。さるに政府の保護に待つことあるは不都合なりといへり。

不審尤至極せり。われは西洋技術者と或る方角に向ひては袂を聯ねて行かむとするものなれば、彼徒のおもなる人々を知れり。かの人々の裡には、日本新聞記者が理想の技術家の如く、政府の保護などをば芥の如くにおもひなすもの一にして足らず。されどこれは此たびの西洋技術家の運動とは、何の關係もなきことなり。奈何といふに西洋技術家は此たびの運動に於て、決して政府の保護といふものをあり難き限なるものにれもひて、今の恩蔭の下に立たむとのみ願ふにあらず。彼徒は此たびの運動に於て、政府が競争の自由を害して、いたづらに東洋技術家を保護せむとするに心昏みて、むやみに西洋技術を排斥せむとするを憎み、以後はかゝる片手打なる處置なからむことを望めるなり。

されば西洋技術家は必ずしも政府の東西の術を併せて保護せむことを願ふにはあらずして、かれは政府の西洋の術を保護せざるが如く、東洋の術をも保護せざらむことを願ひ、若くは兩術の保護の止むべからざる以上は、その保護の平等ならむことを願ふなり。日本新聞記者が言はこれに反して、徹頭徹尾片手打なるさへあるに、今の技術といふものゝ性質に昧きこと甚し。かの記者は理想界の生産物なる技術品を實相界の生産物なる穀物などゝ同一視したりと見ゆ。その證は記者が引きいでし佛蘭西十八世紀の放任論に存せり。その文にいはいはく。西洋十八世紀の放任論すなはち「レッセエ、バッセエ」といへる主義は政府の干渉保護を害ありとしたるものなり。西洋技術家は斯くこりれもふべきなれ云々。

抑佛蘭西の「レッセエ、バッセエ」の主義は、かの「メルカンチリズム」Mercantilisme といはれたる保護貿易論に反對したる「フィシオクラチイ」Physiocratie なり。「フィシオクラチイ」は穀物などの輸出を容易にして、今の輸入を困難にするを旨とせり。これは實相界の生産物に對する處分なり。れもふに日本新聞記者はこの實相界の生産物に對する處分を、技術品の上へ應用せむとするか。國民のこれがために受くる精神上の壓制果して奈何ならむ。國民の發達のこれがために害せらるること亦果して奈何ならむ。

そが上にかの「フィシオクラチイ」に於いても、生産の輔になるべきものをば成るべき丈多く輸入することを願へり。西洋の術は、假に實相界と理想界との別を餘所にして見るに、生産物にはあらずして、生産の輔になるべきものなり。されば西洋の術を排斥するは、「フィシオクラチイ」にも協はざるものといはむ。

われは西洋技術と或る方角に向ひて並び行かむとするのみにて、西洋の事物を崇拜するものにはあらねど、かの宗教の自由、言論の自由と俱に技術競争の自由を尊むものなり。又たこの意味に於いてはグウル子エが「レッツセエ、フエエル、レッツセエ、バツセエ」(Laissez faire, laissez passer; (fourmy)にも左袒するものなり。されば又われは神道若くは佛教のために、基督教を國內にねかじとするものを非とするに俱に、東洋の術のために、西洋の術を排斥するものを非とするなり。われは國粹を説く言論の自由のみ願ひて、外粹を輸入せむとする言論の自由をば願はざるべきやうなる偏見を笑ふと俱に、東洋の術の保護せられむことをのみ願ひて、西洋の術を排斥せむとするものを笑ふなり。是に於いてや、彌次馬たることを嫌はずして言ふ。(明治二十五年八月)

朗月齋主人に與ふる書

朗月齋主人足下。日本新聞第千七百七十三號の第一面狹しと陥みはたがつての御論拜讀仕りぬ。我政府にして果して日本技術を保護する旁、まことに西洋技術を排斥せば、足下も我に同ずべく、國內一般の人士も我に同ずべしとのねん言足下が流石に全く道理を辨へざる人に非るを知る。われ豈足下に對して一言することを吝まむや。夫れ西洋技術を排斥したりとれもへるに、足下はさることなしといへり。然れども我は政府實に西洋技術を排斥したりとれもへるに、足下はさることなしといへり。足下の目を以て政府の西洋技術に對する處置を見るときは、其間唯不保護の痕を認むべくして、毫も排斥の跡を視ることなしとなり。足下は自家の此の如き觀察を恃むこと大なるがために、我が政府まことに西洋技術を排斥したりといふを、捏造の言とするに至れり。甚い哉、足下が今の技術界のまことの事情に通せざること。足下は西洋技術家が近ごろ公にせし洋

技排斥例證及美術保護論といふものを見ずや。九鬼氏と其徒とが或は演説を以てし、或は著作を以てして、隨處に西洋技術を排斥したる例證は歴々として存じたるにあらずや。かの例證にして天下の信を得るに足れる以上は、何者か能く政府西洋技術を排斥せずと謂はむ。西洋の語に鐵の如き事實といふことあり。足下は何の力を以てかこの鐵の如きものを打ち毀たむとする。

足下若しかの例證を破ること能はずして、今の政府西洋技術を排斥せずといふときは、是れ足下自ら欺けるなり。足下若しかの例證を破ること能はずして、我を捏造の言をなすものなりといふときは、是れ足下人を欺けるなり。足下其れ自ら省みよや。

我前論にいはいく。政府東洋技術を保護せざること、今の西洋技術を保護せざるが如くならむか。今の技術界には不平なるものなかるべし。政府東洋の技術に同一なる保護を與へむか。今の技術界には、うれにても不平なるものなきことを得む。されば我が望むところは、技術界に於ける競争の自由なり。

足下の我論を駁するや、この一段に對してことさらに聴かざる似して、我を以て西洋技術の保護を得ざるを憤れるものとなせり。我はまことに憤るところありて前論を草しき。されどわが憤は、足下がほしいまゝに人の心をはかりていへる如く、東洋技術の保護を得たるを嫉みての憤にはあらず。わが憤は今の技術の政をなすもの、毎に片手打なる處置をなして、技術競争の自由を害するを慨きての憤なり。請ふらくは足下之れを審にせよ。

足下のいはく。西洋技術家と其加擔者とは政府の不保護を非とせり。こは保護せられざるべき、其技術の成立たざるを慮りてならむ。こは西洋技術家の愧づべきところなりといふ。

我が政府の西洋技術を排斥するを非として、そのこれを保護せざるを非とせざることは、既に屢辨じたる如し。されど足下は猶或は爾が非とするところは不保護にあらずして排斥なりとも言はざる言へ、排斥をせざるは排斥せらるゝがために其技術の成立たざるを慮れるにて、これも亦愧づべきならむと言はむ。甚い哉、足下が言の轉倒したること。今の技術界にありて保護を被りたるもの、乃至足下の所謂特別保護を被りたるものは東洋技術なり。今の技術界にありて斷つて排斥せられ、つゆばかりも保護せられざるものは西洋技術なり。試に少く事理を辨へたるものに問ひ玉へ。現に保護を被りて僅に餘喘をたもてるもの強きか。現に排斥を被りたれども百たび折るゝも撓むことなきもの強きか。われはここに於て愧づべきものゝ西洋技術家にあらずして、東洋技術家ならむことをある。

足下のいはく。日本新聞が東洋技術の保護を國産輸出輸入の上の保護に比べたるは至當なり。これを宗教の保護に比べむは奇怪なり、陋劣なりといふ。夫れ理想界の技術は實相界の國産とひとしなみに論ずべきにあらざる由をば、既に前論にてことわりなきつれば、復た贅せざるべし。わが何故に宗教の事に言ひ及びしかの理をば聊ここに説かむ。

宗教と技術とは均く是れ理想界のものなるは、辨ずる迄もあらざるべし。足下は二者にねほいなる別ありといひて、其證據には宗教の目的感化を他に及ぼさむとするにありて、技術の性質玩味を人の撰擇に任ずるにありといふことを挙げ玉へり。先づ足下に告げまほしきは、足下が東洋技術の特別保護をよしとする論者にてありながら、殊勝らしくも、猶技術の玩味を人の撰擇に任ずべしとせらるゝ事なり。技術の玩味果して人の撰擇に任ずべくば、その競争の自由をこそ願ふべきなれ、い

かでか片手打なる特別保護をよしとせむ。次に宗教の目的と技術の性質との上につきて、足下は相反するものありといへど、これ將た違へり。奈何といふに、宗教若し感化を他に及ぼさむとする目的ありといふべくば、技術も亦た民の好尚を進めんとする目的ありといふべし。かなたは福を求むる心の上の感化なり。こなたは美を審にする心の上の感化なり。又技術若し玩味を人の撰擇に任ずべきものとなすべくば、宗教も亦た民の去就を勝手にすべき性質のものこそいふべからめ。されば憲法第二十八條にも、我國民に信教の自由を賦與せられたり。足下は人の撰擇に任ずべきものを技術のみなりとれもひ玉へりや。

足下のいはく。西洋技術家と其加擔者とは西洋技術の保護を欲す。こは所謂國教といふものゝ思想の自由有害ありといふことを主張しながら新來の一宗教を將て、同じく國教たらしめんとする如しといふ。われ竊に足下の妙論に對して分析を試むるに、その要ねほむね左の如くなるべし。足下は東洋技術を以て日本の國教に比して、さて我が西洋技術をして東洋技術と並び立たしめんとするを、國教の下に又一國教を加ふといふに似たりとしたるなり。足下はかく對比して、我が國教を非としながら、二種の國教を立てむとする如きを笑ひ玉ふなり。

甚いかな、足下の言の不倫なること。足下はひとり技術の事に通じ玉はざるのみならず、亦宗教の事にも通じ玉はずと見たり。夫れ技術に競争の自由を與ふべきは、猶宗教を人民の自由に任ずべきがごとし。北米の一たび起りてより、(西曆千七百九十一年)宗教の自由は殆開明諸國の常となりたり。技術も亦應に是の如くなるべし。足下は已に一國教あるところへまた一國教を加ふといへど、國教といふ字をルウソオ等が意に取りても、(religion civile)又國の標準となしたる宗教と解しても、

又國の専奉する宗門を解しても、(confession) 二個の國教といふことあらむやうなし。足下が譬喩に窮したることも亦甚しからずや。

足下のいはく。大中學は西洋の學を傳へ、別に古典講習科の設ありて東洋の學を授く。一を擧げて一を廢すべきにあらず。(古典講習科は今絶つたり) 此は教育制度の實行なり。保護にはあらざるなりといふ。此言より推すに、足下は教育制度の實行に於いては東西洋の學に偏頗なかるべきものなれども、技術の保護に於いては偏頗ありても可なりとれもへるならむか。聞かまほしきは其然る所以の理にぞある。われは文科大學に於いて、西洋の文學を傳ふると共に、日本支那の古典をも授くるを可とするに均しく、官立の技術學校にては東西洋の技術を併せ存じて、學徒をしてこれの／＼の好むところに從ひて業をなさしむるに至らむを望むこといと切なり。足下は大學に於て東西洋の學の偏廢すべからざるを論じて、これを技術の上に及ぼさんとするは西洋技術の保護を求むる委頼心のみなりといへど、わが強ち西洋技術の保護を求むるものにあらざることは、既に屢論せしところなれば言はず。足下は東洋技術の保護せらるゝを至當なりとするものなり。足下は技術保護の全體を無益とするものにあらざるなり。されば足下は特に西洋技術の保護を不要なりとするのみ。さて足下のりの理由とするところはいかん。足下のいはく。西洋技術は希臘羅馬以來數千年の歴史あり。若し發育すべき力其技術の中に存せば、氣を揉むことを要せずして、これのづから摩天の材たらむ。是れ政府の保護を須むざる所以なりといふ。われ若し足下が口吻を學ぶことを嫌はずば、われは同一なる論法によりて東洋技術の保護を須たざることを證せむもいと易からむ。東洋技術は上代三韓と交通せるころよりの數千年の歴史あり。若しこの技術の中に發育すべき力存じたらば、政

府豈これを保護することをもちわむや。われは斯く説き來りて、更に左の如く言ふことを得べし。東洋技術の政府の保護をもちわむることは是の如し。かの西洋技術に至りては、繪畫に遠近法備れるが如く、分明に輸入すべき價值あるものなれども、西洋にての如く、歴史上に地を占めたるにあらねば、政府は宜しく特にこれを保護して、その盛に我國に行はれ、我民の趣味を長ずる媒とならんことをつとむべし。我國新技術の時代はこの輸入物の根固まりたる上にてこそ始めて興るべきなれ。足下試にこの論を以て自家の論に比較せよ。足下が好みて使ふところの器械はたまく、以て自ら傷るに足るものなるを知らむ。

足下は又最後に九鬼氏等の東洋技術に偏倚したるを私人としての事なりとし、技術の政には關係なきものなりとせり。拙きかな、足下が辨護説。東京美術學校に東洋技術の科を設けて西洋技術の科を設けざるは私人の所爲か。かの洋技排斥例證中なる審査官長の演説は私人の立言か。願はくは足下いたづらに遁辭を構へて反對者のために笑はれ玉ふな。

技術界の大問題は實に目前に横れり。足下まことにこれを決することに與りて力あらむと欲せば、願はくは正々堂々の筆陣を張りて戦へ。(明治二十五年八月)

繪畫偶評

其一、觀馬臺の展畫會

明治美術會が小西湖畔の觀馬臺上に催したる油畫展覽會(明治二十二年)は、實に余等をして河の圖を出したるが如き想をなさしめたり。何ぞや。今の日本の美術家は、多く我邦固有の繪畫に一種の

妙趣あるを知りて、西歐の書法にも亦大に長處の傳ふべきあるを忘るゝものゝ如く、或は一二の外人が媚を献じ旨を奉じて、西畫の短を擧げ東畫の長を稱ふるを妄信することなきかの嫌あり。嗚呼、余等は固より國畫の風韻を知らざるに非ず。又今の歐米人中に我美術を見て狂せるが如くこれを讚美して止まざるものあるを知らざるにあらず。又他の歐人が現時の同邦人の趣味の下れるを厭へる餘、我美術を藉り來りてこれを矯正せんとするものあるを知らざるにあらず。又或歐人、例へばブリクマンの如きが、日本の美術をして長く歐人の愛顧を受けしめんとせば、須くその固有の純性を保存し、殊邦の分子を輸入して、以てその趣味を傷けざらしむべしといへるを知らざるにあらず。而れども余等は國人の審美的智識を高尚にするには、西畫を取るべき必要あるを知れり。又歐米人の日本畫に心醉するは一時の流行を逐ふに過ぎざることを知れり。又我邦の美術の歐洲の時弊を矯正せんがために存在するものにもあらず、歐人の愛顧を受けんがために存在するものにもあざることを知れり。余等は嘗て獨逸の「アルゲマイネ、ツァイツング」にてこの意見を陳べしとき、エドムンド、ナウマンのために毫も美術を解せずと罵られたり。今や余等を罵るものは或は應に我同胞中に在るべし。余等はこれを知ると雖、復た顧慮するに違あざざるなり。

今回の展畫に就いて、日日新聞は總體の出來の宜き實に先年の繪畫共進會ごろの比に非ず、日本畫の依々進まざるに較べては、其進歩の早きこと驚くに堪へたりと云ひ、僅にその蘊蓄の氣象に乏きを擧げて備らんことを求め、鶯谷の梅の屋は東京新報に於いて、畫帖の全體を通覽するに、洋風繪畫の進歩せしは、殆外人の眼を驚かしむるばかりなり、且皆日本固有の趣味を寫しは甚だ外人に誇るに堪へたりと褒め、僅に意匠の時勢に先ちて、却りて卑劣に失するが如きを刺りたり。想ふに

是れ皆世の具眼の士の評なるべく、余等も大體に於いては殊見なし。余等は唯一二の畫區に就いて、左に私見を述べんと欲す。亦此盛舉に逢ひて心これを喜べる餘に出づ。冀はくはこの會も亦漸く其盛を致し、他年披展縱覽の宏大なるは、遂に「サロン」「パアリングトン、ハウス」の如きに至らん。

第一室。夏と題したる山本芳翠氏の金髮美人。左手を右肩に加へ眸を凝して視る處。體には紅紗を纏へるのみ。これといふ妙趣を發見すること能はず。梅の屋は畫家の繪にあらざるが如しとさへいへり。松岡壽氏の果嶺。頗好けれども別に評すべきところなし。淺井忠氏の敗祠破屋。前に垂柳の鬚々たるあり。頗る味ありて筆力も見ゆれど、「スケッチ」に似たと尖巧なるを嫌ふ。村舎の屋上は何にて葺きたるものやらん。岩下氏出品、マリイ、デ、ランデリイが河に臨める民家の前に雞の啄める圖は妙品なり。これを淺井氏の畫に比するときは、彼の「スケッチ」に近きこと彌明ならん。佐々木氏出品、ケルミニイの女兒。右手に白薔薇一輪を摘み取れるが、肘を刺されたるがために左指にて探り見る處。日々新聞の殊に勝れたりとの評太謬れるにはあらずと覺ゆ。されど眞にこれに勝れるは田邊氏出品、ラセルリイの畫なり。一婢の一蹠一轆を麻柱の環に繋ぐ處。婢の上半截を寫せる中に、蓬頭整はず、鬢の後れ毛襟にかゝれる、紅の肩巾の色澤、一として温雅の趣を存せざることなし。疎々筆を下して此佳境に至るは巧手といふべし。澁澤氏出品、シイマが剃羊の圖。場中の壓卷。老翁が羊を壓したる手、剪刀を取りたる手は勿論、破椅に倚れる壯年の男子、衣を縫へる婦、羊に向へる兒等に至るまで一間筆なし。高島氏出品、ルイス、ド、グジエンクウルが插花瓶、伊藤氏出品、伊太利の古畫哺乳の圖、皆好し。澁澤氏出品、シイマの牧羊少婦杖を操れる圖は神韻飄忽たり。されど剃羊に輸すること一等。岩下氏出品、サキニイが俯して環を弄び笑容掬するが如き少女、

岡村氏出品、テイロルが骨牌を持てる老夫と絃を鼓する男子との圖、皆好し。第二室菊葉派の小泉成一氏が小春の日和は紡績の老婦を畫きて、犬張子をあしらひたり。婦の面は一種の赭色にて此派の通法とはいひ乍ら面白からず。渡邊鐵太郎氏の果を盛れる籃に雞。味あり。色を吝めり。房州明金が崎は緑に過ぎたり。大村徳松氏の寺院は人物なきが故に寂寥たり。柳源吉氏が秋花叢裡の二少女。評すべき處なし。松岡壽氏の畫ける肖像、二神純孝氏の暖日、蝶を飛ばしたる意匠は例の流義なれど一評なし。目黒辰次郎氏の田舎。筆力大に見るべし。唯設色上遠近を辨つことに注意せられたし。小山正太郎氏の山里の嫁入。牛背の花嫁は梅のやの攻撃を受けしも無理ならずと思ふ節なきにあらず。空の色も妥ならず。松井昇氏の春磯。太好し。惜しいかな、水中に立てる人物舟のこなたの人物に比すれば餘り大き過ぎたり。舟傍に蹲まれる兒の紅半臂を着たる、猿に似たりといふ人もありきとぞ。佐久間文吾氏の豊年。藁屋の前に旗幟を建てたり。日々新聞にて幟上の文字薄墨に過ぎたりと云へど、余等は心付かざりき。然し屋上の一種暗澹たる色は素焼の玩具の小屋に似たり。芳翠氏の星。白雲堆裏に臥したる美人。隙間より碧空を見せ、淡き「ブロンド」なる髪の上に星輝げり。素人感しの趣向なり。龜井至一氏の抱孩少女は愛嬌の題に適へり。抱くもの抱かるもの、皆を顔の設色好し。衣帯も好し。先づは合作。柳源吉氏の菜花満野。天色と云ひ花色と云ふ、感服し難し。松岡壽氏の兵士は好し。松井昇氏の秋林晚暉、評なし。淺井忠氏の春畝。屋前數株の木餘りに模糊たり。木理に畫けるものには塚原律子の不動、櫻井忠剛氏の梟あり。梟は觀るべし。脇屋本吉氏の神祠。日々新聞にて駈出しの提灯屋の仕事ならんといふ評、酷なれども故なきにあらず。櫻井忠剛氏が傘の美人は氣取りたるものかな。丸山宣光氏の老媪肖像。面色の

蠟めきたるは奈何。赤城鉦太郎氏の竹取。銀地に畫きたり。趣味多し。而れども亦尖巧なり。水野正英氏が紅葉狩、松本昇氏が村驛、並に評なし。目黒辰太郎氏が厨の圖。さし入るゝは月光にや。本多錦太郎氏の田家。大目籠は目立ちたり。龜岡歌子の甲冑。上半は磊落なる筆法、男子漢の氣象見ゆ、下半は繊細なる筆法、婦人の好尙見ゆ。此等をや半陰半陽體とはいふべき。揚忠三郎氏の寂寥。雲を凌げる杉の木の間神社黒々と寂し。さくま氏(佐久間文吾氏にもや)の兒孫歸來日已斜。遠近の關係頗る妥なり。小代爲重氏が櫻下の米車、評なし。同人芝の山門。妙なり。惜しい哉、貼紙は降りさうなり。柳源吾氏の戦後は頭何ぞ大なるや。脚何ぞ短きや。岡精一氏の寒夜は衣を縫へる婦を寫す。評なし。五姓田照海氏の浴衣葵を摘む美人は旨い哉。小泉成一氏の南都の亂入は世論囂々たりしかど評を闕ぐ。この所に收獲の圖あり。敢て評せず。二神純孝氏の咄來矣。假面の上下り見ゆる眞の面も假面めきたり。印藤眞楯氏の負薪の婦、評なし。岡精一氏の搜索、即ち是れ酒旗を林頭に出し、蝴蝶を馬後に飛ばしむる趣向歟。經櫃の畔の足跡、思はせぶりと謂ふべし。布地粗にして設色足らず。寺内は高きに過ぎて、人目の視角を熟くも計られざりしかと覺し。第三室には渡邊文三郎氏が林間の村婦、岡村常之丞、村井昇兩氏の驛路等あれど、二世五姓田芳柳氏の人物、淺井忠氏の馬背の村女、目に付きたり。餘は略す。要するに今回の展畫序次は阪路を下るが如き念ありき。歩に従ひて佳境より出づとも謂ふべきにや。

其二、又饒舌(獲蛭子)

昔は竹田叟畫を論じて山中人饒舌を著しぬ。今内國勸業博覽會の第三回の開場をなすや、(明治二十三年)國民新聞社は余に請ひて其繪畫の鑒賞考辨の事に任せしめむとす。憾むらくは余が今の地位

は會場に出で、一々の繪畫につきてこれを評するに便ならざるものあり。故に余は唯其全體の形勢に就きて卑見を述べ、以て前約を踐まむとす。要するに又饒舌に他ならず。奈何せむ我識見の淺薄にして古の竹田叟に及ばざること遠きを。

今の見る所を以て第一回、第二回の開場のをりに現はれたりし結果に比せんか。其進歩の迹は分明に見えたり。されど是れ西洋畫に就きての事にて、東洋畫に至りては、則概ね其勢萎靡振はざるに似たり。彼は其數少くして其品高く、此は其數衆くして其品は稍や低きが如し。

我邦人の西洋畫に入るや、恰も昔時の文人が漢詩を學びそめしをりの如く、和習餘ありて歐洲の趣味足らざりしが、今や漸く其歩を進めて、和習の陋を棄て、闐然として西洋作家の室に入らむとするものに似たり。故に其作る所の畫は觀るべきもの少しとなさず。若夫れこれに反して東洋畫家は近時に至りて僅に微しく歐洲の趣味を帯び來たりしが故に、其面目に一種不了の處ありて、却りて昔時の純然たる東洋習味を存したるものに劣れるかと思はる。

東洋畫家にして其地歩を失はざらむとせば或は姑く其城池に據りて己が特異の面目を守るに若くものなからん歟。畢竟半粧の美人は素面天に朝する貌國夫人に若かざればなり。

西洋畫の邦人の手に成れるものゝ含める西洋分子は西洋畫之を獲たるなり。西洋畫は其版圖を擴めたるなり。東洋畫の含める西洋分子はこれに反して己れが領地を失ひたるなり。着色と云ひ寫形と云ふ、其西洋畫より東洋畫に移し來たるものは、猶何となく全體の調和を紊して、これを物に譬ふれば人に衣服を借りたる如し。

余は偶衣服の事に想到りたれば更に又譬を此に取りていはむに、邦人の洋服を衣たるはりの西洋の

裁制を學ぶこと愈深くして、之を穿てるものゝ態度愈美なり。邦人の邦服を衣て、其袖を窄くし、其袴を細くし、漸く洋服に似たる姿を得むとするや、又何の趣をか成さむ。

苟も邦畫にして之を永久に存すべき價値ありとせば、其保存の策は則其面目を革めざるに在り。之に添ふるに西洋趣味の蛇足を以てして、以て其進歩を計らむとするは、影を追ひ風を捉へ、遂に得る所なくして止むべきものならむ。余が見る所を以てすれば、東洋畫は決して西洋畫の分子を添加して之を長育すべきものに非ざるなり、之を爲すは全く東洋畫を棄て去りて西洋畫を取ることの優れるに若かざるべし。

蓋し四條派には四條派の寫形着色法あり。狩野派には狩野派の寫形着色法あり。余は西洋の遠近法を用ゆ、西洋の色彩を藉り來たりし四條派若くは狩野派を以て、行末に望あるべきものとなすこと能はざるなり。譬へば坊間の錦繪の如し。東錦繪は江都古來の名物なりしが、今之に代りて現はれし石版錦畫は果して何の趣味かある。是れ已に錦畫にして錦畫に非ず。寧西洋の石版畫を以て我邦の人物景色を寫すに若かず。故に余は今回の博覽會に於いて西洋畫の進歩の著きを喜ぶと俱に東洋畫の改新の法未だ必ずしも其宜きを得ざるに似たるを歎ず。西洋畫は益獎勵すべし。日本畫は須く保存すべし。若又日本畫の進歩を圖らむとせば、之を外に求むることの非にして、之を内に長ずることの是なるは、復疑ふ可らず。卑見此の如し。世人余が饒舌を咎むることなくんば幸甚。

其三、又又饒舌

猿帷子第三回内國勸業博覽會の繪畫を論じて、これに題するに又饒舌の三字を以てす。蓋これを竹田居士の畫論に取りたりといへり。既にして子は飄然として筆を擲ち去り、人をして子房山に入る

が如き想をなさしむ。是に於いてや評畫の重任忽我身上に墮來りぬ。瘦蝨子の饒舌といひしは本是れ謙辭なれども、我饒舌は眞成に豊干が饒舌に似て、後には瘡となりて罪ほろぼすやうなる目にあはむ。題して又々饒舌といふ、豈謙辭ならむや、豈謙辭ならむや。

山本爲二郎氏は二幅の油畫を掛けさせたり。一は紅葉の圖にして一は月前の鳥の圖なり。紅葉の圖。當初畫家の落想はいかにおもしろかりけむと推測らる。されど粧飾の工夫に凝りすぎたるにや、筆にあらはしたる處にては思の外に眼を射す。巖石の形、輪困たる木のふりなどより推すに、深山の景を見ゆれば、出したる籃輿中の少女の旅すがた、さもあるべし。されどうら若き身にて山路のひとり旅、楓の一枝輿に折添へたる優長なる處、餘程の風流女子と見ゆたり。一人ふたりの道づれありてはあしきにや。雲はあれど碧きところの明に見ゆる空なるに、山の峽に雲にはあらで霧とおぼしきものゝ立籠めたるはいかにぞや。萬樹の紅葉、全幅の調和を得るにたれば霧を立たせしにや。橋よりあなたに見ゆる水はいとよく寫されたり。されど立田川の錦、中絶したるにはあらで、橋よりこなたにのみ落紅亂點、帯にてはきよせて棄てたりやと疑はる。日あたりは渾て善きに輿丁の姿は望ましきほどに浮かず。紅葉の間には緑の草木もあれば、自らに補色をなし、其調を穩にすること難きものなるべけれど、今少し工夫ありたらましかば、品一等を止すことを得べかりしならむを、惜むべき事なりかし。

月前の鳥の圖、填飾の意匠か。深意ありといはゞ凡庸者の窺知る所にあらず。月の輪の大きさ。東洋畫にはかくの如きをも見しことあれど、油畫には珍し。鳥は鳩にや。雁鳥などは月の畫に伴ふが常なれど、鳩ならばこれも珍し。打見る處ねどりにあらじ。殊に右なるは睡むげにも見ゆず。

次は伊藤快彦氏の蟹釣と裳となり。蟹釣の圖、我邦にては珍しく罪のなき「ジャンル」の趣向を立てたるものかな。塀の上より枝さしいだしたる木は布置に窮したるにはあらずや。蟹にはかく赤きもなきにしもあらざめれど、善罵の客は烹たるものに似たりなどいふなるべし。岸邊に立ちたる子の手足、四條の併行線を作したるは、勢止むことを得ざりしならめど奇なり。水は善し。この類の畫趣はまだこゝには多く見ゆぬに、先づ祖子の鞭を着けしは面白し。後繼者の出でむこと余等の切に望むところなり。

裳の圖、あしらひたるものゝ中にて、孔雀の羽は我俗にては嫌ふもの多きに、こゝにあるは輸入主義見ゆたり。文箱、短冊、梅の折枝はいかなる意にか詳ならねど、花見にゆきて歸りたるをりといはゞいふべし。衣の光澤は油色なりとはいへ善く出だしたり。此畫にて最喜ぶべき處は、裏地に壁の模様を見せたる骨折の迹なり。世の常の畫師ならば、筆の掃除したらむやうにあちこち塗りまはし、こゝにこそ佳趣はあれと誇りに示すべきを、さる手段を用ひぬ此畫家のゆかし。東京新報の楯の舎、七色、塵外などいふ人々は、原田直二郎氏の肖像を論じて、餘地は他との調和悪きに因り、雅致なく凡俗に流れたり、若し太筆にて筆跡を顯はし云々したらば、實に完全のものも成るべからむといひしが、彼人々の見る所が却りて凡俗には近かるべき。如何といふに肖像にして果して用筆の精を極めたらば、裏地は目に立たぬが調和宜きを得たりといふべきものにて、裏地に筆痕を留め、それにて姿を取らむとするなど、凡工藏拙の陋策を喜べるは、阿堵中の味をしらぬものなればなり。こゝは此幅に關したる事ならねど、序なればかくはしるしつ。

五姓田芳柳氏の日本の「ラオコオン」。人物は好けれど頭少し大なり。且面もち、まなざしことさら

めきたり。蛇の大なる、艸木の形など熱帯に遠からずと見ゆ。沖繩近き處にや。意匠は我邦にては珍らし。師とすべきことと覺ゆ。唯色調の暗に過ぎたるは、早く已に幾とせをか經ぬらむと見ゆ。之を千載に傳へむの心あらば、今少し明く寫したかりしなり。チジアン、ラファエルの昔「ラヅウル」色多く用おしをりのうれならねど、暗く寫すことの度に踰わたるは惜し。

揚忠三郎氏の春の景。一川平野を貫き、岸上に三々五々の茅舎あり。水中に立てる子供は何をか漁する。此景を寫し出し趣意は何れの邊にある。春曉清冷の色を見せ、人の目を洗はむためなるよりは、寧實景の摸寫に近かるべし。空は晴たる處に春雲の澹々たるを點出せるにはあらで、一面の濛然たる色、先づ沈みたりともいふべきやうなり。朝霧のなほ晴れやらぬなめれど、極目漠々たるは奈何ぞや。草の黄を帯びたるは、水に入りて遊ぶころにはふさはしからぬにあらざや。岸樹に濃緑を塗抹したるが、戲園の道具立めきて見ゆ、全幅の調子をはづれて際立ちたり。白を含みし雲の裏に着けたる一隻の鷺は、初見出し得ざりしが、近く寄りて之を得たり。あはれ此鷺、右岸の水際などに下りたらば此好風景を助けましを。背向になりて立ちたる人物、カサノフが倫敦のハイド、バアクにて見きと書いたる姿も思ひいでられて、餘りといへば行儀悪し。人物の數はまだ足らぬ心地す。兩二箇の舟、實際の排置面白し。此畫にして人を動かす春色二三分を着けたらんに、其價いかならむとれもひやらる。

本田錦吉郎氏の天女。東洋の神學的畫材を伊太利あたりの粉本に依りて寫し出し來たるに似たり。芙蓉峯前一株の松、之を着けたる作家の用心、門外漢にはありがたきことならめど、必ずなくてはなぬものとも思はれず。天女は肌肉硬きに過ぎて、飄沓たる風致なし。羽翹は大なる鳶に借りた

るにはあらずや。又この鳶は舶來の鳶かと疑はる。足を見るに空氣を踏みてりの空氣の頗る堅きかと思はるゝはいかに。拇趾の殊更に開きたるより推せば、天女も鞋はきしことありしか。天女の翔るさまは、余等も見しことなけれど、世の飛禽の足は開きたるを見しことなし。されど原田氏の觀音を除きては、今陳ねたる油畫の中にて、此畫が宗教畫及神學畫中の觀るに足るものなるべき。

五百城熊吉氏の看花の圖。文學世界にて元祿々々と呼ぶ聲は一時滿都の勢なりしが、今や丹青の領分に入りて、此一幅觀花の圖となりたり。着想の程面白し、面白し。されどかくいひしのみにては、藤の屋の君にかぶれたりなどおもはれむも口惜し。善しとよく見てこり善しとはいはぬ。櫻雲幾堆の間に幕張りわたしたる前に少女の立姿、顔は人を動かすに堪へたるあてやかさ、唯知らず、心何をか思へるを。頭は並より大なる方とは人相書めきたり。胸を掩ひかくさむとするは我俗なれど、餘りに窪みたれば頭は大きく見ゆなるべき。髪は紙張子めきたるは當時の梳粧することながら、今少し髪らしくはならぬものにや。團扇かざしたる右手のやさしきに比べては、左の手左利らしく覺ゆ。衣の模様は眞に通りて甚巧なり。周圍に點出したる器什も亦然り。地上の蝴蝶も東皇の使とみにてゆかし。唯輕々看過す客はこゝに心付かぬもあらむ。五百城氏は「コロリスト」なり。樹脂色を用ゐること少く、保存の點より見ても善しとれもはる。此類の油畫の出づるは斯道の進歩とれもはれていと頼もし。

渡邊いう子の老翁の肖像。鬚髯美しといふ評を下すべきか。楯の舎等は猿峯子の書いたる像を評して、顔色少し赤きに過ぎて拙し、されど飲酒後の容貌を寫しにやと覺悟して見ば、難あるまじく思はるといひしが、此圖の方は又遙に赤し。されど人の肖像は肖せざることを得ぬものなり。猿峯

子が書いたる某太守の面の色は、遣臣見て真に逼れりといひきと聞きぬれば、難なかるべうれもはる。渡邊氏の圖も然らむか。像の側の筆架を何のためにかと思ひしが、後に聞けば畫家の姿なればとのことなり。果して然らば別に意匠あるべきにや。善罵の客は廣告めきたりといひしが、必ずしも無理ならず。

龜井至一氏の美人彈琴の圖。命題はいと面白し。されどいかなる場合にか明には知られず。調子を合せ果てゝ彈きはじめむとする處にや。面は鼻口のあたり善し。目には今少し姿致あらば一際美しからむ。このまゝにては顔のみ見て奈何なる「エキस्पレッション」も定めがたし。後に引きたる屏風、細に箔れたる其畫樣など至極力を用ゐたりと見えて善し。然るに左の隅に至りて櫛の屋流の曖昧模糊になりたるは惜みても餘りあり。日本家の奥なれば、敞明ならぬも理なれど、髮の暗きに過ぎたるは微瑕なるべし。帯以下に比ぶれば、振袖の皺襞粗にして見ぐるし。左袖の模様の水僊は衣の地を離れて浮きいでたり。時代より見て都合もあるべけれど、底面に變化なきこと甚しく見ゆれば、適當の鬚襖を敷きてたゞみの一部を藏したかりき。又饒舌に愛唾子は西洋趣味の日本畫に入るを嫌ひしが、西洋畫にても此種の圖の屏風などに西洋趣味加はりたらば、いかに見ぐるしからむを、此に出でざりし作家の用心卓なり。

五百城熊吉氏の河原ありびの圖。ねなじ人の看花に比ぶれば稍未了畫に傾きて劣れりと見ゆれど、落想流石に妙なり。これ程の數多き人物を體よく組立てたる腕なみくならず。某の五百羅漢の記を學びて一人々々に其態度を寫さば、幾紙を費してか畢るべき。技術などの事知らぬ身にて、細に結撰の事を論ぜむも不遜なれど、左の方に見ゆる遠山の高きは目に障りたり。實際の景なりとしも

いはゞ止むことを得ざれど、少しは加減ありたきものなりき。右の方の柳、その木下蔭を流るゝ水、皆難なし。前にさゞ波のたちたる水を寫したるが、こは餘りに畫の如し。前岸稜だちて暗きは、此晴日にて反射光の多かるべきに何故ぞや。これなくば、岸の上の人物尙一層引立ちて見ゆべかりしを惜むべし。

深谷利世氏の月夜の山河。實景か知らねど、彩石畫を粉本とせしには似たらずや。荒井布三郎氏の二見が浦。出日か没日か、色あひにては分らねど、何れにせよ凄凉の景なり。目黒辰太郎氏の鐵棒ひき。此許多の彩色を藉り來りて寫し出したる處此の如きは、果して徒勞にはあらざるか。余は吉原の事に明なるものならねど、俄と唱ふる舞にいつる鐵棒ひきの女は男粧なりといへり。されば鐵棒ひきは素男子の業にして、女子は唯これに擬するのみ。西歐の大畫師の戯曲の人物を寫すや、直に曲中の人物を畫きて復優人のこれに扮したるを畫かぬを常とす。是れ人を感ずることの深淺あるを知らばなり。若鐵棒ひきを寫さむとれもは何ぞ鐵棒ひきの丈夫を寫さずして、去りて女子のこれに擬したるを寫さむとするや。且權に一步を譲りて男粧したる鐵棒ひきの女子を寫すべしとするも、これには一廉の趣意なくてはかなはず。其これなきは一片の寫眞圖と何をか擇ばむ。然らずして猶識者の一顧を得むとするには、絶凡の技倆ありて、其正形撰色の間に傳ふべきものなかるべからず。此畫は果して能くこれに當るべきか。廣瀬孝次氏の田舎の景。好き習畫なり。空の濶きに過ぎたるを覺ゆ。目黒氏の羽子板もちたる女兒の肖像。巧なりとはあらねど、鐵棒ひきに優れること遠からむ。

岡部みち子の厨婢が皿を毀ちたる圖。「ジャンル」の意匠ただ好けれど、明暗の分さだかならねば、

光線の効果碎けて、全幅落つきたる處なし。板の間の光澤あまりに目立ちたり。女の面は模糊として粗に流れたり。竈の火餘りに黄なり。

根岸金平氏の春の景。空と遠き處とは善し。右の方人家あるあたりも亦善し。桑畑は筆を費したる準に遠近のけちめ明ならず。Y字の形をなしたる岐路は實景なりや知らねど、曲線の美を盡したりとは見えず。

小豆澤芳子の水閣。女史の耐忍力見わたる微細なり。されど林木池水などの設色淋し。樓榭も亦然り。澤油あしかりしにや、又引きかたの宜しきを得ざりしにや、横より見れば碓柯蝦蟇背の如し。畫は固より横より見るべきならねど、かく見ゆるやうにては保存上にも不便あらむ。

野崎兼清氏の名古屋城。何れの妙處ありて採擇に遭ひしものにか。宇貝勇氏の棘鬘一尾。何處より吊下がらるものとも知られねば、靜物畫としては趣意に足らぬ處ありげなり。綱殿の肖像なるべければ、水産館中に遷すべきにやなどいひし人あり。而れども肖像ならば寫し得て善し。矢野文彦氏の果臝。並びたる魚に比すれば布置も整ひて好し。眞に逼りたりといはむより彩石板に逼りたりといふべきか。北村田鶴子の歌よむ姫。又細緻なり。意匠れもしろけれど、肌肉硬きに過ぎ、衣も亦木人をいろどりたるにはあらずやと疑はる。御園繁氏の箱根驛。遠岫は畫として善し。駒が嶽ならばあまりに圓なり。驛舎は輪廓の堅固なるためにや、箱庭めきて見ゆ。高橋ます子の束髮女子の肖像。設色など巧なり。顔も好けれど、少し左右の齊しからざる處ありて福來病めきたり。日高德太郎氏の懸崖の下に一舟を着けたる圖。愛らしき趣ある好習畫なり。安松富士太郎氏の二王門。門の結構好し。これより前の遠近明ならず。敷石軟なる如し。

丸山宣光氏の萬歳の圖。何處の評にてかねきものに似たりといへるを見しが、其何故におきものに似たるかを考ふるに、勢然らざることを得ざるものあり。うは鶴居鴨居筵席など、一室の形を總て並行遠近法にて組立てたるさへあるに、兩個の人物の一行をなして立ちたるを寫し出したればなり。げに其さま床の間にねきもの据ゑたるも毫も殊なることなし。評家の言我を欺かざるなり。されど流石に畫家も流動の趣を解したればこそ、彼は直立し、此は腰を折りたるやうに寫したりけめ。唯憾む、その更に一步を進めて兩個の内一人をして、一步進み若くは一步退かしめざりしことを。萬歳は寔に滑稽畫の好材料なり。此日本固有の性格を具へたるものを拾ひしは極めて善し。若し後の此材を用ゐるものをして、益其規模を大にせしめば一幅の好風俗畫を得むこと復疑ふべからず。印藤眞楯氏が前代の看花。花の下に集ひたる男女のさまにて花みならむとは誰も推すれど、趣意の明ならざるため、興味索然たるを覺ゆ。想ふに餘りに寫法に苦みたるゆゑ、通幅の精神何處へか失せたるにあらずや。櫻はかくまで千朶萬朶いやが上に畫かずともあるべきに。看よ五百城氏が彼處此處に點出したる手際の非凡なるを。畢竟山を隔て、烟を見るが如き畫趣は東洋流なりといはざいへ、率直に思ひつきしまゝを悉く寫し出すのみ手柄なりとはなし難からむ。靜石子詩あり曰く。半窓寒月有餘清。枕上一枝疎影橫。多事孤山林處士。萬梅花底了平生。亦此意なるべし。中景の人物、丘陵の陰より半身を挺出したるさま、出來の善からぬために、土中より湧き出でたるごとし。同じ人の古代の應募兵。れもしろき題意なるかな。されど一群の組立意を弄することの過ぎたるにや、實際に遠きに似たり。壯丁は善く出來たれど、翁は立姿なるため少し權衡を失ひたり。妻と媼との位置一わたり善し。然れども媼の面の笑を帯びたるやうなるは如何なる故とも承けがたし。壯

丁の前なる穉兒の形は妙ならず。又思ふに、此兒の父を遮留めむとするは離別の圖意に切なるに似て却りて人を動かすに足らず、其無心なる處を寫したらましかばいよ／＼哀しかるべきを、惜むべし。

脇屋本吉氏の遠村の雞鳴。橋上のさつ男の忙はしげに行く處、人をして恍然として其景を思はしむ。唯何故に曉靄を寫さざりしかを疑ふのみ。旭日の影ほのかに見ゆるやうなるに、丹朱の勝ちたるは奈何。かくては既に鶏鳴の時を過ぎたりと思はる。

中村録助氏の嵐山花候の圖。渡月橋よりあなたを寫したりとすれば、未だ嵐山の形を得ざるものなることは已に報知新聞の評者も心づきて、橋は短く水は狭く花ある處も實に乖へりといへり。されどりは姑く置き、觀者より左の方の山脈伸び過ぎたりとれもふは奈何。實景の善からぬを正したるにや。山の一角に桃紅色を着けたるは、日高く人影地に在るをりに似合しからず。水は死にたり。橋杭に遠近の別なきは、近眼半釐の兩家もいひしが其間より對岸を透して見るところ未だ寫し畢らざりしにあらずや。山腹の家歴々として指點すべきわりに、櫻花綠樹など鮮ならず。人物に東京風のものあるは必ずしも瀛車の便を借りしにあらず、今の西京或は東に倣ふ人の多きに依るならん歟。かくはいへど好個の風俗畫にて、人物の配置も大抵宜きを得たるに設色も善し。

宮川守蔭氏の芝の靈屋の一部分。堂の狀は先づ難なし。背後なる丘陵林木は未だ至らざるところあり。人物なきを憾みし人ありしが無理ならず。小林萬吾氏の芝東照廟。殿堂欄干など寫し得て好けれど陰翳の處餘りに反射光に置し。樹木にあきがきぬと戯れ評したる人あるを聞きて、さもあらむ木の葉の一片もなく空の淋しさよと云ひし人あり。鳩には議論多く、已に汚點とまで評せし人あれ

ど、飛びたるものと降りたるものと大小の太だ殊なる處には誰も心付かざりけむ。飛びたるは少し遠しとはいへ、翼を展べたるに降りたるものより小く見ゆべき理なし、奈何。土色は赭に過ぎたり。實はかゝる處には砂礫を布きたるが常なるに、これを畫かざりしは省筆ならむ。

大森善三氏の兒女の羽子板を持ちたる圖。一凡字は免れがたき所なるべけれど、之を目黒氏の霜やけ子に比ぶれば、猶觀るべからむ。おなじ人の社門の圖。畫伯の眼睛の構造奈何ならむと醫家の問ひしもことわりなり。されど又携帶寫眞器にて取りたる小圖を此梓縁に嵌めたるならむといふ人もありき。畢竟此等の評の出づるも、距離點を取ること近きに過ぎて、視線角外に景物を着けたる故なるべし。門外の一神官は門内を歩ませたきものなりき。其代りには前なる道に參詣人などあらば寂寥ならざるべし。うは兎も角も全體より見て人物少なければ、之を添へて格を損ずる憂はなからむ。

三輪幸之助氏の富山市と題したる圖。丘岳樹木など色を吝むに過ぎたり。行旅の師徒二人の面はいかに見ても枯骨の塚中よりぬけ出でたるもののみれはれて、此世の人らしからず。神中絲子の紫姫幼時の圖。布置の點より見れば、門楹上一活字を題したきものなり。龜井氏が評判の彈琴女子の如く、紫女が姿と室内の器什との關係を更へなば、好局面を成しけむものを。背後の屏風も其半を寫さば事足りなむ。机も一角にてよかりしならむ。況や鴨居の戸の上端などをや。人物の頭顱はうつむきたりといへ餘りに大なり。垂髻の上の光は毛の透きて赤き地の見ゆるやうなり。これも偶人に似たりといふ評を助くる端となるべし。花瓶の形浮かぬために、挿みたる藤の花は机上に投げたるやうなり。あはれこの畫落想の奇なりしを、かく打毀ちしはをしむべき限なり。心手の間了々

たらぬ處あればなるべし。これも土瀝青色勝ちて遠望すれば梓の内洞然たり。

丸山健策氏の上野杉林の圖。これは彰義隊の戦争のよしなれば、歴史畫の歴史畫たる所を今少し發揮せまほしきものなりき。闘士の脚の長さよ。敵は已に杉の巨幹にて掩はれ。又烟にて掩はれたるは遺憾なり。油色料の製作は今著く其歩を進めたる世なるに、これを使ふ畫家のおもひの外に其光彩を見はさざるは何ぞや。ファン、デイク、レムブランドなどの畫の陰になりたる處、一瞥すれば黯澹たるやうにて却りて色の膽なるを思ひ玉へや。

小代爲重氏の海濱に貝を鬻ぐ圖。國民新聞は嘗て街頭麵包を賣る圖を出し、とき、世評善かりしが、これも新なる着想なり。されど或は西洋畫に粉本ありて其趣を取り、少しくこれの意匠を加へたるにはあらずやとれもはるゝ節少からず。殊にいぶかしきは空あひなり。雲態萬狀こゝに書き出されたるやうなるもあるべけれど、彼蒼々たるものがかく奇を出さむとは思ひかけざりき。舟あり、馬あり。彼は近く此は遠きに、大さは殆同じ。家鴨の遊べるはれかしからず。一臥狗などこそ着けたきものなれ。砂原に遠近の別なし。前の方に蹲踞したる一人物は何事をなすにか分らず。人にも質したれど分らぬは我のみならず。願はくは畫伯これを教へよ。若し此人物には趣意なしといはゞ、是れいかなる大結構に於いても許すべき限にあらざるべしと思ふが奈何。遠處の丘陵下に一帶の紅を着けたるは果して花か。

おなじ人の函嶺の浴樓。恐らくは是れ畫家が自ら許す所の超凡拔群の意匠ならむ。然れども謎語を以て詩の上乗となさざるかざりは、覺束なき價值なるべうれもはる。浴樓の事にしあれば、既に汚れたる痕見ゆるも無理ならじ。傘なども白露ならねど無分別なるおき所かな。落ちたる一朵の紅花、着けたるは果して花か。

薔薇ならむとおもへど、形は櫻花なり。唯かゝる大輪は世に絶えて無き所なり。菜花一枝も亦然り。畫題を倦怠とせば二三の書卷などありたかりき。兩圖とも縁に意匠を弄したれど、却りて人をして厭嫌の心を起さしむ。

高島信氏の田園の景。好未了畫なり。林木は模糊に過ぎたりと覺ゆ。おなじ人の芝の山門。柱上の枘組多きに過ぐ。門を寫すことの密なりしわりて人物の用筆太粗なり。畫品は田園の景と一般なり。

安藤伸太郎氏の別墅の花候。この題は後世のためにもなるべくれもはれてあり難し。敢て難せむとの心ならねど、これ程の結撰をなさば、何故に今少し之を大にせざりし。衣紋なども分明に見ゆべかりしを。而れども衣色の各相殊なる處に心を用おられしは、西歐名家の跡を踏まれしなれど興あり。初め一たび見しをりには満目の結縷草、道もあらねば山野ならむとれもひぬ。傘の重なりあひたるも亦大に此想像を助くるものなりき。其別墅なることは後に題を示されて悟り得たり。一友人は蛇の目の日傘は當時貴人の用ぬ所なりなどいひしが、これは必ずしも然らざるべし。櫻の影の尖細りたるは光線の工合訝かし。さて櫻のみにて一株の綠樹も見ぬは、やゝ淋しき心地す。一夕露伴子を訪ふ。其小説を論ずる言に云く。凡う一事を叙するに多く物を使ふものあり。又少きもそのあり。富贍は固より可なれど、物多ければ中には落付かぬ處も出來べし。故に細心の人には勉めて之を省くことあり。想ふに此畫にも故らに物を省きたる處あるならむ。序にいほむ。風俗を調ぶるは、畫家の止むこと能はざる所なれば、此畫の如く先づ近き頃より始めて、漸く遠きに及ぶに若くはなし。この宮女の衣なども畫家の苦心想ひやられたり。之に反して彼紫女幼時の圖の如きは、

室内の構造と云ひ、机と云ひ、花瓶と云ふ何等の「アナクロニスムス」がや。

原田直次郎氏の毛利敬親公の肖像。斯公は明治初年にみまかられしことなれば、生前には充分なる寫眞機もあらざりけむ。又縦令當時に善き寫眞を傳へたるものありて此幅の粉本となりきとするも、色褪せ光滅びて、今は明に認めがたきものとなりたるむ。作家は是れ年少の士なれば、固よりまた公の面を見るに及ばざりしならむ。而るに此圖一たび出で、長藩の遺臣皆先公を見る如き想ありと謂ふは、用心の精しければなるべし。肉色を知らずして畫像を作れる、難きことこれより甚きはなかるべし。而るに作家は其眞を傳へ得たり。是れ問訊探討の結果なるべけれど、要するに良工苦心の處にあらずんばあらず。米の將軍ワルラス嘗て耶穌基督の事蹟を編みて稗史となす。其境地を叙する、唯僅に斷簡零墨を基として、他は總て空に憑て結撰したり。大統領其意を憐み、授くるに孔子坦テンナツル府駐劄公使の任を以てす。將軍乃ち其稿を懐いて自ら其境に臨みしに、山川丘壑一として自家文中の山川丘壑ならざるはなかりき。今此像の如きも亦應に如是の觀をなすべし。此圖に對して排撃を試みしもの極めて衆し。或は曰く髮際の處拙なりと。而るに公を識るものは曰く頭髮尤有たりと。或は曰く面赤きに過ぐと。而るに遺臣の曰く面貌尤有たりと。果して然らば則ち百の排撃者ありと雖、其れこれを奈何にかせむ。像の手に至りては楯の屋はこれを賞し、近眼子はこれを貶しぬ。これによりても其瑕瑾の分明なる瑕瑾ならぬは知らるべし。されど公平なる眼睛を以て評せむに、全幅最拙なりし處は手なるべし。其失は近眼子の云へる如く圓に失せりや否や、之を明言するに由なけれど、自ら自然に遠きやうなるを覺ゆ。懷にしたる物の外に露れたる處、其標本を得ざりしにや、少しく摸稜手段を用ゆしに似たり。楯の屋等は曰く。描けりといふよりは、寧塗抹したるに過ぎ

ずとやいはむ。言を換へてこれをいはむ、美術品の價值なく、吾人の嗜好に満足を與へざる者ならむと。嗚呼、此の如くに一より二、二より三と塗抹することを得なば、能事畢らむ。胸に成竹あればとて、之を寫すには節々にして累ねざることを得ざるにあらずや。

れなじ人の灑水觀音の圖。此たびの陳列畫中にて褒貶共に喧きはこの畫なるべし。幅の大にして規模も之に適ひたりといふは公論ならむ。觀音大士の面、たれも評せしを聞かず。凡う神佛人物、何れに拘らず、畫手の最心を用ゐる所は面なるべきに、一言のこれに及ぶなきは何事ぞや。かくても畫を評し得たりといふことは思を費さずして知得べし。蓋し古來の觀音畫は唯品類の美を得て、未だ個人の美を得ざりしものなれば、千篇一律襲踏摸擬せしに過ぎず。今特に觀音の臨凡降世の相を畫かむと企てしは何等の大膽ぞや。其面貌の果して應に此の如くなるべきや否やは、わが知る所ならねど、其新なる處のみにて進歩の迹は見るべからむ。これより後某博士が褊狹の説にのみ心を傾けずして、佛畫を作らむとするものあらば、努古畫の形を摸せむとなせそ。手脚は善し。素衣の裁制は尋常の法と毫しく殊にて、今の印度の僧衣に似たるところあるやうなり。報知の評者は背後の火はこれなきを優れりとすといひしが、是れ決して洋畫を知れるもの、言に非ず。邦畫の觀音ならば其白衣胡粉一抹にて可ならむ。而れども既に紫雲を寫し又火を寫して其光をして衣上に映せしめしは、亦以て着色の精を窺ふべし。誰か背後の火を無用なりとする。或人は此觀音を見て餘りに美なるために猥褻の念を起すといひしが、凡そ彫刻にても畫像にても又詩賦にても、これを作りし匠人の故らに狡猾の手段を弄して、人の慾火を煽ぐ如きは、素より尤むべし。何如といふに其目的既

に美術の境地を離れたればなり。而れども端嚴の相もこれを盡きて肌膚骨肉其真に迫らむとするときは、俗士のこれに對して妄念を生ずることあるべきは多言を費さずして知るべし。是れ美術家の罪にあらずして觀者の罪なるのみ。豈道ふに足らむや。苟くも清淨の心を以てこれを見れば、この觀音大士の相、實に膜拜するに耐へたり。騎れる所の龍は其腹潤白にて堅實ならず、或人々の面を笑ふ如しといへるは口を開きたればなるべし。舌は通常真直に挺出したる處を寫すものなるに、此彎曲を得て舌肉の力見たり。牙を前に寄せたるも善く注意したりといふべし。觀者より見て左の下隅、爪の見ゆる處は何となく物足らぬ心地す。これにて結構弛みたるは憾むべし。山らしきもの見わたるは近眼子も已に指斥したる如く、少し近きに過ぎたり。

曾山幸彦氏の武者畫。鎧を衣て弓を彎かむとする姿、油畫にては新なる意匠といふべし。面にて目立つ處は鼻の曲りたるなり。蓋し模型ありしならむ。右脚は餘りに短し。手の太きに支那の弓足めきたる足權衡を失ひたり。筵は拙し。櫻樹の幹は着色と云ひ描法と云ふ塗抹の範域を脱せず。金箔金粉は歐洲にても第十四、第十五世紀のころに宗教畫などに用ゐられためしあれど、今の世にては油色にて黄金色を出さんこゝ畫家の本意なるべけれ。已に金を置く上は又銀をも置き、遂には其他のものをも畫かずして貼付くるやうにならむも計りがたかり。色紙の地までもおされざりしは幸なり。ハルトマンの曰く。劇場の裝飾も畫にて出すべきを、其景を助けむとて戸の開きたる隙より眞の庭苑を見せむとするときは、全く美の映象を失ふべしと。此畫の金箔も亦劇場の道具立に嵌めこみし眞園のみ。嘗て明治二十年の工藝品競進會に於いて塚原女史の流鏑馬の圖を觀しが、此幅と酷肖せり。櫻の木、莖席、幕などはいふもさらなり、莖の間より莖花の頭を擡げたるまでおなじきは

故ありぬべきことなり。或は是れれなき粉本ありての事なるか。何にもせよ、曾山氏の畫は曩に衆に見せし農夫書を讀む圖を畫かれしよりは、分明に進歩の迹見にてめでたし。

佐久間文吾氏の清水觀音堂眞景。あらはしたるは堂の裏面なり。奈何なる故にかまことの堂よりは、大なるやうに見ゆ。堂内の舞媛は楞嚴を讀むべき佳人とも覺えず。僅に西都の俗を見せむとのみの事ならば、別に結構もあるべきに、厭ふべし。同じ人の和氣清麿還奏の圖。好題目なるかな。清まろの面難なけれど、俯して睨みたるまなざし何故とも心得がたし。冠と袴との制も穿鑿の届かざりしにや、微しなばろ氣なり。殿堂もほの暗く、規模哀しげなり。輪奐の美はあらずとも一工夫あらまほしきものなりき。且此題の畫を書かむとすれば、大結構を要すべきに、かく狭小のものなりしも奈何。

二神純孝氏の慈悲者の殺生。此題に照して寺院の内景を見るに、宗門を錯りしにはあらずやとれもはるれど、故實家に質したきものなり。或は曰く。是れ某伽藍の寫眞なり。之に人物を着け題を命じたるは、抑も後の事ならん。果して然らば、余又何をかいほむ。圖面の狭くして且長き間に填めたる堂の高さ、一目には見わたしがたし。讀畫者の忙想ふべし。同じ人の伏兵の圖は、時は明治の某年なり。處は何處なるか知らず。看者より左の家の戸を開放ちて、向ひの店に暖簾さへ掛けたるを見れば、民の安堵奈何ならむ。或は蒼皇逃去りし跡なるか。右の上の隅に當りて鉛筆の縦線四條ばかりありくと見わたるは、磊落の極人のれもはも程も心に介せざるならむ。烏絲欄上の油畫は實に新發明なるかな。此圖に伏兵の二字を漫然題し去りしは、かの南都の伽藍に平軍の入りし圖、大塔宮を搜索する圖、近くは又上に評せし慈悲者の殺生の圖と等しく、一流の病弊掩ふべからず。

外山氏の畫論の前半の意も我より意を迎へて其解を求むるときは、かゝる畫風を矯正せんとの心にも聞ゆべし。井欄のあたりには、村人傭夫など一二人着けたらむには、猶見るべかりけむものを。岡精一氏の山内一豊が妻の圖。伊太利公使の演説ならねど、此實際主義の世に、所謂時代ものゝ狂言にもなかるべき夫人が打扮は何事ぞや。此衣、此裳、これあらば山内の家に馬を買ふ金なしとはいはせじ。良き衣をも弊れたるやうに寫してこそ史の本文には協ふべけれ。

石原白道氏の都下風埃飛揚の圖と題したる一幅。織巧なれども愛すべき處なきにしもあらず。笈裡の佛像其外にも多く金泥を用ひたりと見たり。油色金泥と混ぜたるは一新手段なれど純油色には若かざるやうなり。黒き筐の車夫の頭に撞き當りしやうに見ゆるは僻目にや。建築などを極て密に寫出したるわりには、人物の手などに未了の處少からず。今一つ人物に就いて解剖上の問題あり。うは笈を後より抑へたる男の兩脚の間に見えたる草鞋穿きたる踵なり。こは原來何人の踵なるか。

龜岡歌子の今様男舞の圖。是れ紅葉館中の人なること莫らむや。美は則美なり。別に評すべき點もなし。東城鉦太郎氏の馬。前なる三匹の背の一直線を作したるは、布置宜しきを得たりと謂ふべからず。白馬の後脚尾に隠れたりとはいへ、餘りに怪し。其後に半ば見ゆる驪も地より生れたるやうにて、其白馬との間も分明ならず。畫の意匠は解しがたし。東坡の曰く。廐馬多肉尻腫圓。肉中畫骨誇尤難。東城氏縦令今の韓幹たること能はざるも、今一層力を用ひられたきものなり。岡精一氏の清水臺の朝霧。人物を着けざるを故らしたるやうに見せむとしたるは、所謂作者狡猾の手段ならむ。忍びがへしなれば、恰好し外山氏思想畫の例の如く臺上より飛下る人など着けたらば奈何。

塚原律子の清少納言初瀬詣の圖。女史にふさはしき題意、面白き事なり。故實をも一わたり調べたり

と見ゆ。衣の色など善く敷きたれど、遠近の差は未だ充分ならず。緋の袴の質ひらくと薄し。色も洋紅に近きは妙ならず。畫面の下端殊に左の隅の明きすぎて鋪板のぬりいたく目立ち、清女が足もとあぶなし。

櫻井忠剛氏の鷺の兔を攫みたる圖。鏝にて塗りたるやうなり。羽翹など形を成したるのみなるに、頭のみは密に寫したれば、調和を失ひたり。甚明なる空の下に甚暗き水あり。空の色は毫も水に映ぜざる理は發明し難し。鷺の後の方の水面に諸汁の如きもの滴たりたるは何ぞや。巖の水に印したる影は善けれど、水の色渾て濁れり。海は狂瀾怒濤ありと見ゆるに、看者より左の岸邊の靜謐なるはいぶかし。

これまでにて博覽會館の油畫は評し畢りぬ。さて首を回らずに、頃日日々新聞の案内記にも見られたる如く、名ある畫家のこのたびの會は何をも出さぬが多きは怪むべし。小山、松岡、淺井、柳、松井、中丸、川村、高橋などいはるゝ方々是なり。記に云く。博覽會は二三年前より知れたるものを畫くに際なしといふやうなることもあるまじと。げにうれも一わたり聞けたれど又れもひかへせば、十日一水、五日一石など云ふは、昔々の物語に聞く所にて今のためしに引くべくもあらず。油畫の入りしより彼歐洲の名匠大家が一頓五年を費すに似たることも今は必ずしも罕ならざるべし。此たびに出でずば次のたびに出で、一飛天に沖り、一鳴人を驚かすなるべし。彼西より還りて程もなき加地氏などは自ら是れ例外なり。余は始より其畫の此たびの會に出でざりしを怪まず。

序なればかの案内記の作者にいはむ。記中の畫評、文字婉曲、褒むる如く貶す如く、名狀すべからざる妙處ありて、余が敬服する所なり。而れども加地氏に對しては、此まで餘り世に知られざりし

が今回の審査官に擢でられて、其名頗に芳しと云ひ、原田氏に向ひては大名を大「カバン」と共に擔ひ歸朝早々本會の審査官に撰ばれたる大先生と云ひたるなどは、西より還りて未だ歳を閱せざるに、早く其地歩を占め得たるを嫌ふといふのみにて其平素畫きたる所に就いて公明正大なる批評を試むる勇氣ありしにあらざり。故に面目厭ふ可きものあり。又た記に五百城氏の元祿之春を評して彩料のこなし荒しといひしなどは、あまりに油畫傳色の法に疎きに似たり。此館の列幅中にて、この圖ほど色彩の麗しきもの他にあるべうも思はれぬものを。且木の間の空を眞黒に塗潰したるは夜景かそれもへば、主眼の美人の額にかざせる團扇に日光のかけあり、又幕の内の男女の顔もありくくと見ゆと云ひしも、尋常生理的の目睛を具へたる人の言とも覺ゆ。此木の間の色を眞黒に見むものは他にあるべからず。いかにも濃碧を使ひて暗きは誰も知る所なれど、これがために前なる人物浮きいでてめでたしとこころ思へ、之を難ぜむは僻事ならずや。其櫻井氏の怪しげなる鷺に、近きあたり動物を啖盡させむとしたるなども、亦これに似たるものずきならむのみ。

其四、油畫輝裂

博覽會の開けてより僅に三月。余はこのごろ美術館に入りて一驚を喫したることあり。何を何ぞといふに、岡精一氏の清水堂の畫面の輝裂したることなり。年を経たる畫のかゝる禍に逢へるはうの

例もあらむ。然れども僅に三月にして此の如きは未曾有の事なり。色料の調和の宜きを得ざりしか、澤油の分量其多寡を錯りしか。いづれにせよ畫家の耻これより大なるはなからむ。或人のいはく。油畫のひびは古になきものなり。フランデルン、獨逸のむかしの畫にもなく、ルウ

ベンス師弟が畫にもなく、ラファエル、レオナルド、ダ、キント、ギド、レニ、ムリロ等が畫にもなし。今のこれあるは此基督世紀の半よりの事なり。さて今の油畫には何故に輝裂することあるかと問はんに、畫工の色料の事を講ずること漸く衰へ、麻布木板などの製に心を用ゆること次第に粗なるがためなるべし。色料の性を知らずして漫に間色を作るは固より不可なり。かの一時人目を眩せんとして厚く色を敷くものも、後の患を遺すことを知らざるなり。色料中にも亦土瀝青の如く甚恐るべきものあり。又乾しぐすり Siccativ 用ゐての失錯もあらん。されば寒暑のために裂けたりなどいふは遁辭なり云々。

其五、上野公園の油畫彫刻會

油畫彫刻會は明治美術會の催したるところにして、其場所は上野公園内なる華族會館なり。原來明治美術會の美術品を陳列して人に見するは春秋の二季なるが、春季の催は這回を以て始とす。油畫彫刻會の第一回は明治二十二年の秋忍池の畔にて之を催し、其第二回は明治二十三年の秋華族會館にてこれを行ひき。この回の陳列品は其員數前の兩度に比して頗る少きに似たり。余が往きて觀しは、展覽の初(明治二十四年五月十一日)を距ること僅に六日なりければ、出品者の懈もあるべし。然れども遅れて出づべき品の數もればよそは推知せらるるものなれば、全員數の前二回に及ばざるべきことは明ならむ。

是れ抑何故ぞや。余はれもへらく。春季の會の秋季の會に若かざるは其一因ならむ。秋季の會には夏季の業出で、春季の會には冬季の業出づ。冬日の短きが上に、歳暮に向ひての忙はしきは、美術家といへども免れざるものなれば、これを夏日の長くして、人々暇多きに較ぶべからず。春季の會の秋季の會に若かざるは、這回のみにはあらざるべし。是れ明治美術會のために累とすべきものにあらず。

然りといへどもこの回の陳列品の太寡きには、猶第二因あるに似たり。明治美術會の第十二回報告（明治二十四年四月十八日發行）は春季會規則を載せたり。その第三項にいはいはく。出品は會員の自作品に限る、但参考品はこの限にあらずと。其意蓋出品人たらむと欲するものをして、悉く明治美術會に入らしめむとするに在り。彼等若し悉く明治美術會に入るときは、會費を收むるもの多くして會の資産は漸く大なるべし。然れども會の資産を殖やさむとして、徒に會費の多からむことを願ふは、恐らくは策の得たるものにあらざるべし。明治美術會は今わづかに春秋二季の會を以てその事業としたり。これを除きては、所謂月次會を開きて美術上の演説をなし、月報を作りてこれを會員に頒つことあるのみ。この會にして若し資産を殖やすに意あらば、豈別にその途なからむや。油畫彫刻會を以て常置のものとなして、春秋兩季に別に大會をなすことは、既に其計畫あるよしにて、これも其一つなるべし。余は規則第十一項に見えたる出品賣價の一割を會に收むる法を可とするものにあらずといへども、會既に常置の性質を得ば、入場料の収入のづから多からむ。次に革むべきは月報の體裁なり。今までの月報は非賣品なれど、若し其體裁を改めてこれを賣るときは、是れ亦一財源ならむ。然らば明治美術會の月刊報告は奈何してこれを改革すべきか。彼月刊報告をして

賣品たる價值あらしむる法は奈何。凡る月報の收むるところ二あり。日文、日圖。其文は大抵月次會の演説なり。是れ固より可なり。然れども能く美を造くるものは、未だ必ずしも能く美を論ぜず。美術家は未だ必ずしも審美家をならず。我明治美術會の前に外山正一氏を請じて日本の繪畫を談せしめ、後に井上哲二郎氏を招きて、東西洋の美術を比較したる論を演べしめたるは、並に是れ月報の好材料なるべけれど、彼第十二回報告に出でたる五分演説といふものに至りては、余其價值を見ざるなり。明治美術會員たる美術家にして、力を月次會にあらはさむとせば、語るに口を以てせずして、腕を以てすべきのみ。彼等は五分演説をなすことを廢めて、其造りたる美術品を來衆に示すべきのみ。要するに月報の文は、審美家の手に出でざるべからず、哲學者の手に出でざるべからず。月報の圖に至りては、陳列品の中につきて其尤を抜き、これを摸寫して以て冊子に挿むべきこと勿論なり。明治美術會は既に摸寫圖を其報告に收めしこと二たびなりしが、其寫法の粗にして用意の密ならざる、未だ人意を飽かしむるに足らず。是れ將た革めざるべからず。月報の改革にして果して成就せば、通常、贊助、名譽の三種の會員の間に存じたる不平均の跡も漸く減すべし。贊助會員と名譽會員とは固より美術の進歩を以て意となすものなれば、明治美術會のために金を棄てたりとて、これを惜むべきにあらず、又敢てこれに對する報を求むべきにあらずといへども、彼等にして若し賣品たることを得べき月報を得ば、其満足の念、應に舊に倍するなるべし。况や他の三種の會員の地方に在るものをや。陳列品は又獨りこれを複寫して月報中に挿むべきのみならず、若し適當の方便を以て精良なる複寫圖を製し、これを會の來衆に賣るときは、これも亦一財源ならむ。且つ此複寫圖は坊間に於いてこれを鬻がしむるときは、漸く以て卑陋なる石板畫を壓倒すべく、獨り明

治美術會の利のみならず、亦社會の幸なるべし。明治美術會の其資産を殖やすべき途は此の如く其れ衆きに、人々のこれに由らずして徒に會員の多からむことを望まるとは、余の解すること能はざるところなり。上に擧げし出品の制限は理論上或は會員の數を増すべきものなれども、これを實際に試むるときは恐らくは其目的を達しがたかるべし。故にかにといふに美術家にして能く獨立して其技を行ふものは、必ずしも團體の力を藉らず、又必ずしも展覽會の出品者たる名譽を求めざるべし。是れ其弊の一なり。美術家にして其技能未だ熟せず、猶人に師事することを要するものは、團體に依りて利を得ること、僅に出品の便を得るのみに止まるべければ、そのこれがために會費を出すことを欲せざるや宜なるべし。是れ其弊の二なり。展覽大會の期を覗ひて一時の會員となり、忽又去るがごとき美術家も或は必無にあらざるべし。是れ其弊の三なり。美術家の會員たることを欲せずして、其作を沽るに意あるものは、或は他人をして權に會員たらしめ、其名を署して其れが作を出すことあるべし。是れ其弊の四なり。嗚呼、此多弊の制限は、實に今回の陳列品をして寡小ならしめし一因にあらずや。

此回陳列したる美術品には、油畫と彫刻品とあるべきことは、既に會の名目にて明なれども、其場に臨みてこれを見れば、彫刻品は實に晨星寥寥たり。是れ彫工の畫工より少きにも依るべしといへども、人をして會名の其實に副はざることを歎せしむ。友人某處に余に謂ていはく。今回の會は、これを油畫彫刻會といはんよりは、寧油畫盆栽會といふべしと。蓋し廊上、庭前に陳列したる盆栽の數、實に彫刻品の上に出づればなるべし。

これより略陳列の次第によりて出品を批評すべし。場の入口に懸けたるは、深谷利正氏の夜景山水と題したる圖なり。この人は好みて夜景を作ると覺しく、前年の博覽會に出だしは、溪間月夜の畫なりき。當時余はこれを評して、彩石畫に似たりといひしが、これを這回の夜景に比すれば、尙取るべきところありしなり。故にかにといふに此夜景山水は布局着色皆宜きを得ず、地に印する月色は殆ど月色の看をなさざればなり。杉のかきさまも模糊として、用意の到らざるところあるを徴するに足る。

福原馬三郎氏の吉川の景は、尋常の布置を用いて巧を空際に弄せむとせしものに似たり。白雲の堆をなしたるところ、瑞西の氷山を望む如し。處々漆工の所謂たゞきぬりに髣髴たるを見る。その隆起したるところは、巨大なる結構に於いては此儘にても善かるべけれど、此畫の全體より見たるとき、不諧と謂はざることを得ず。或は思ふ作畫者得意の處は、却りて是れ觀畫者失望の處なりしを。道の一側の人家の殆皆飯店なるは、實に縁りたるものか知らねど、多少の過失ならむか。

れなじ人の舟橋は前の圖に比べて一籌を輸したるものなり。天も地も舟も板も皆同じやうなる色に見ゆるはいかにずや。

岡部昇九氏の想像人物。純然たる山本派の寫法なり。芳翠翁の夏、星などゝ題して畫かれし美人を見たることありしが、此想像人物も亦彼と大同小異なり。美人の骨は日本種と見ゆるに、其髪「ブロード」なるは、いかなる故ともわきまへがたかり。畫面の平滑にして、一種の光を放ち、筆痕を認むべからざるは、色料の調和に癖あるためならむか。此畫の大病は輪廓の壞れたるところに在り。同じ人の出品は猶三つあれど、皆此病あり。其一を處女陷貧悟樂圖といふ。披髮の一少女、右の脇に菜籃を懸けて、胸に聖書らしきものを推當て天を仰いで涙を垂れたり。輪廓の病の最甚しき

はこの少女の腮に於て見るべし。其二を戶外視敵圖といふ。これは西南の役に、民舎に逃げこみたる人々の戶外なる叛徒を視ふさまなり。題は視戶外敵圖とすべきを謬りたるならむ。岡部氏の作の中にては、これぞ最穩なる出来なるべき。其三を農夫といふ。農夫の牛の陰に坐して汗を拭ふところを寫したり。野徑を眞直にゑがきて、その片側に牛を立たせたるは、布置面白からず。農夫の左の腿は有るが如く無きが如し。中景の人物は輪廓の壞れたるために殆辨ずべからず。岡精一氏の景色は田舎家の前にて、農夫の耕したるところを寫したり。地面に明處のみありて、禿顏の如きは目立ちてゐるし。家のやねは泥を塗りたるやうに見ゆる處あり。桔槔の釣瓶は井欄の上に据わりたるに、うの横木の位地あまりに低し。遠景用筆の疎なるなどより推すに、この圖は「スケッチ」と見做すべきものならん。

揚忠三郎氏の花下の宿は、冑、矢立、扇などを畫きて、これに一葉の短冊を添へ、短冊の上には行暮れての歌を題したり。此畫の趣向は漢文を學びて未だ熟せざるものが、課題に應じて僅に責を塞ぎたるに似たり。小題大做は文家の秘訣なりといふに、這般の畫家は却りて大題小做をつとめらるるにや。技術上よりいはず、意を細處に用ゐること密に過ぎて、物形浮立たざるを憾とすべきならむ。滿地の綠草は筆力粗放にして、殆別手に出づる如し。

河久保正名氏の信州鹿澤の景は、浴樓の前に篋を引き渡したるところを寫したり。評を闕ぐ。日夕陽之圖、日雪景山水、日不二山、日夜景。是れ渡邊文三郎氏の出品なり。夕陽の圖は忍池辨財天の祠を寫したり。蓋舊作ならむ。雪景山水は大に倭洋折衷の旗色をあらはしたる者にて、稍其目的を達したるが如し。前景の家、橋など皆好し。樹梢に雪積りたるところに、紅色を帯びたるを見

る。知らず、何故なるかを。遠景を見るに、空も山も善く寫し出したり。幅の上際に黒點散佈したるは、雪片の如く、鳥群の如し。諦視すること久うして、其説を得ざりき。不二山の圖は隻羽片玉、水彩畫めきて愛でたし。夜景には江上に屋根舟を着けたり。前の三作に比すれば、雪中の山水と富嶽とにはいたく劣りて、神女の祠とは伯仲の間なるべし。

本多錦吉郎氏は田舎の景とて、板屋の戸前に馬の立ちたるところをゑがき、又地機の圖を寫して出したり。田舎のかたは寄木細工といふものに似て、うの色異様なり。人家は殆後山のために壓せられたり。地機のかたは余唯ほのかにこれを記憶するのみ。

彈琴美人を畫いて、名聲一時に噪ぎし龜井至一氏は、これび汝の物にあらざと題して、護謨毯を持つる童と三匹の狗とを寫したり。題目は少く「リイドル」の直譯に似たる嫌あり。童は愛息の姿を粉本にせられきと聞く。其顔は好き出来なり。狗は綿細工らしくて惡し。同じ人の黒猫、面は先づ難なきかたなれど、其脚は死したり。後なる瓶菊は畫がきたる如し。余は忍池の會にて、此人の抱孩少女を見て、竊に望を屬するところありしが、後勸業博覽會に於て其彈琴美人を見、その或は岐路に走ることなきかを顧慮し、紅葉美人とこれびの狗に戯るゝ童子とを見るに及びて、遂にこれを厭ふ念を生じたり。龜井至一氏は分明に天稟ある作家なり。余はうの用意の何故に漸く俗になりて、その揮筆何故に漸く疎になりしかを疑ふ。

加地爲也氏が出し西洋婦人の肖像は「バステル」畫なり。前回見し馬頭二つに比ぶれば、この方優れりと覺ゆ。解體學的に視るときは、首の形左右齊しからず。されど面貌大に觀るべきものあり。惜むらくは余が往觀せしときは、此圖の懸けどころあしく、玻璃上の反光劇きために、容易にこれを審

視すること能はざりき。

廣瀬孝次氏の景色は安なる作なるが、寢變化少きかそれではれぬ。若し左邊の飴うりを着けたる所を留めて、右邊三分の二許を截り去らば、品位一等を進むべかりしならむとは、或る具眼者の説なるが、さもあるべし。路傍の桑の木は蝟毛の如き觀をなしたり。

尾瀬田良恭氏のふぢ娘は、唯油にて畫いたりといふのみの事なり。輪廓は依然たる浮世繪、着色は宛乎たる土佐畫。全幅の平面に見ゆるは、光なく又陰なきがためならむ。

根岸鍊吉氏は乗馬運動圖を題して、馬背の婦人をゑがきたり。西畫を摸倣したるにはあらずやそれもはる。同じ人の調子乗は、若し取るべきところありとせば、必ず故實上よりならむ。

鬪獅の圖二つは、これも加地爲也氏の作なり。骨肉皮毛皆其眞を得ざる如し。敵手に噛付きたる獅子の眞向の面は、神樂獅子めきたりといふ評あり。その瞳孔の上に向ひたるも當を得ざるにや。原來沙漠にて二獅相闘ふところは、色彩の變に乏しく、好畫題にあらず。彼フライリヒラアトの詩「リヨオエンリット」に見ゆる如き光景を寫されざりしは、惜むべきことなり。

西村新一氏の景色は、溝に挟まれたる徑の右側に農家を着けたり。評を闕ぐ。れなじ人の驟雨一過は湖畔の景なり。これも彩石畫の類なるべし。

佐久間文吾氏の閑江は、瀟灑愛すべき圖なり。唯其兩岸の草の色は穩ならず。ハルトマンが審美論にいはいく。奈何に實に依りたりとて、蒨稜草の綠に似たる夏景色は、畫家の忌むべきものなりと。山水を作るものゝ知らざるべからざることなり。参考品の中に、森の前に池ありて、白禽の立ちたる圖ありしが、其草木の色いかにもれとなしく、模範とするに堪へたりとれもはれぬ。方張の形は

あまり堅ちすぎて實に乖へり。

廣瀬孝次氏の景色はきほめての小品なり。細流の岸に舟を繋ぎて、灌木の下に鴨を着けたり。人物あらば、此「スケッチ」の價寢加はるべかりしに。

松井貞世氏は淺草寺を畫きたり。これは嘗て我工部大學校に雇はれたりし伊太利人フオンタネジイが、りの徒に教へしより、一時盛に行はれたる畫法のなごりなり。フオンタネジイが法は、素所謂「テムペラ」畫にて頗る作りがたきものなるを、當時藥品を得ずして、粉錫などを用ゐ、一種の變色し易く、輝裂し易きものを製し、名さへ塔不刺畫と詛り、世人をして油畫は醜きものなりとれもはしめしなり。余は忍池の會にて、フオンタネジイが小西湖の圖を見しが、流石多少の經歷ある人の手に成りたるものにて、此淺草寺には優りたりき。

印藤眞楯氏の石橋山は、畫幅に散漫の弊あり。元來景象の一瞥の間に人の視神を撲たむことを求むるは、觀畫者のつねの心なれば、りの斯畫に對して満足すること能はざるは勿論なるべし。丘陵、樹木、鎧武者、一々看來たれば、其意を解すべけれども、これを貫く心、これを統ぶる勢は則ち闕げたり。

五姓田芳柳氏の菅公梅を眺めたまふ圖は、前年れなじ會に出し、實盛髪を染むる圖と好對をなしたり。或人は彼と此と面影さへ似たりといひき。されど齊く是れ想像の作なれば、深く咎むべきにあらざるべし。體の尺度を見るに、腰より上には難なけれど、脚は短きに過ぐるにや。侍童の顔は何となく泥孩めきたり。後面なる梅樹を唯善き程に寫したるのみなるは、邦畫にては尋常の事なれども、こゝにては手をぬきたるやうにて惡し。兎にも角にも現時の油畫家にて健筆の譽ある五姓田芳柳

氏なればこう、會ごとに歴史上の大作を出さるゝなれ。是れ稱せざるべからず。三輪大次氏の海岸は、沙上に網を曝したるところをゑがきたり。色太冷なるために、氣も亦沈みたり。これも一病なるべし。然れども布局妥にて、輪廓も正し。

秋風歸思切と題して提囊を寫し、これに紅楓一枝を添へ、封を拆きたる郵筒を其下に着けたるは、中本保榮氏の出品なり。靜物畫にも精神なくして協はざるは固よりなれど、謎に陥らぬやう用心したきことなり。

秋松芳太郎氏の牧場はいかなる里の牧場にか。牛あり、山羊あり、鳩あり。うの取りあはせ、何となく歐羅巴めきたり。牛の面太だ方なり。此隣に稻垣富五郎氏の墨堤觀櫻と田舎家とあり。評を闕ぐ。

太田且之氏の妙義山は秋景なり。玻璃畫の如し。うの山水は箱庭らしく見えたり。

小代爲重氏の花弁と題したる圖には、英一蝶の掛軸の前に桃、櫻、薔薇など活けたる花瓶あり。下の方には月琴を寄掛けたり。又花瓶と月琴との間に野花一束を横へたり。この複雑極なき組立に、趣意とれもはるゝもの見えず。花瓶の質は何物なるか、到底認むべからず。

姉妹と覺しき少女二人を花木の間に書き、その穉きかたに雙飛の蝶の一羽を折枝にて打落させ、題して無慘といひたるは白瀧幾之助氏なり。意匠の上よりは今度の會の第一等とすべし。技藝の上よりもねほむね好き出來なり。人物の態度一わたりには見わたれど、いま些しの心入欲しかりき。背後の樹木は、前景の輪廓渾て正きに似つかはしからで、觀者をして多少の憾を懐かしめたり。

伊東甚八氏の男女の肖像各一つ、内田勝之進氏の櫓(水彩畫)家屋、溜池、帝國大學の通用門、明治十

九年の日蝕、計五圖、吉武丈作氏の紀行つきの耶馬溪、秋松芳太郎氏の菓物、山水、田舎霜葉、計三圖、村上矢八氏の南洲の像、増田松之氏の美人の圖、皆評を闕ぐ。

花卉を畫きて出したる人あり。いひだ氏といふ。瓶に生けたる櫻も束にしたる椿と蒲公英とも善く寫したれど、花に潤澤なく渾て乾き過ぎたるかたなり。花瓶は小代爲重氏の靜物畫には少し優りたれど、今一際實したるものらしく畫きたきことなり。

生出龜之進氏の狩獵は水彩畫なり。空も山水も又樹木も善く出來たれど、秋景と覺しきに木の葉の色を不快なる暗色にせしは奈何ぞや。人物はやゝ疎に失したり。渡邊鍛太郎氏の義經院參の圖、これも水彩畫なり。前者と優劣なかるべし。全體の調子少し弱きかと覺ゆ。

角井厚吉氏の杜鵑自由自在に啼く里といふ畫あり。題の奇は人を驚かすに足る。畫も亦頗る觀どころあり。家屋橋梁など皆好し。唯草の色あまり一様なるを憾とす。

幽香女史は渡邊文三郎氏の細君なり。相撲の圖を出し玉へり。レツシングが劇評は女優を難せしために妨げられきといへば、余は敢て擅にこれを評せざるべし。さはれ行司の顔のをかしさ、觀棚の五百羅漢に目も鼻もなきにねどろきしことをばわつゝまで爰に一言す。

揚忠三郎氏の華山の像はあまりに惡相に見えたり。衣服其他身のめぐりの物は善く寫したれど、面色見苦しき限なり。到底華山の像としては受取りがたかるべし。

緋の袴の圖あり。去年の勸業博覽會にて伊藤快彦氏の筆に成りし同様の畫を見しことあり。彼も此も同一の粉本に據りたるものによ。這度の會に出でたる靜物畫にてはこれをや第一に推すべからむ。絹の光澤頗美なり。作者の名はみづの氏と記したり。

湯淺濱四郎氏の狀師某の肖像はうの面貌迥に揚氏の華山などより善し。髮の禍いろなるは實に依りてなるべけれど、禍いろに畫きて黒く見する法なからずやは。ルウベンスが畫などに紅紫の色を用いて影を寫したるを見れば思半に過ぎむ。

廣瀬孝次氏の權平種蒔の圖は意匠太奇なり。鴉四羽の中三羽殆一直線に並びたるは布局の病と覺ゆ。權平も遠處の農夫も難なし。前なる地面に光の足らざるを缺點とす。

老媪の肖像にて横文の名を署したるものあり。安なる作と稱すべし。

伊東甚八氏の畫をば既に上にも列記せしが、今又新に三圖を出したり。曰少女、曰三條公肖像、曰雞。少女は水彩、三條公肖像は一種新發明の畫法、雞は油畫なり。「チヨオク」にて畫きて後に彩色を施したるか、さらば先づ色を布きて後に「チヨオク」にてゑがきしが、孰にもせよ此三條公の肖像の如きものは、未だ曾て看ざるところなり。坊間に鬻げる石板畫には斯るものあれど、これを明治美術會の陳列品としたるは何事ぞや。

岡精一氏の美人は、紹介狀を携へて出でしものなれど、うの美ならざるを奈何せむ。面貌此の如き女子は、いづくの人種にも珍かるべし。觀るべきものは、唯衣上の紋理のみ。この度の會にて額傍に記文を添へたるは、此美人の圖の外渡邊華山の像、戶外の敵を視ふ圖などなりき。詩に典故を注したるすら五月蠅きに。

雛祭りの圖あり。色を施すに、猶生硬なるところあり。少女等が顔は善く寫したり。一人の持たる酒瓶は其製雛祭りに用ゐるものに似ず。背後の氈壇は結構の簡なるわりに重し。人物のこれがために引立たざるは遺憾なりき。作家の名はいとうと記したり。

原田安壽氏の出しは「チヨオク」畫にて、梅花一枝を手にしたる女子の肖像なり。評を闕ぐ。

深田憲治氏の作りし男子の肖像。これも「チヨオク」畫なれど、功力迥に前者及小舟抄吉氏の人物(男子の肖像一つ、哺乳の圖一つ)の上に出づ。樺山資紀氏に似たる面、寫し得て頗る好し。若し備らむことを賢者に求めば、尺度大に過ぎたるをや指摘すべきならむ。

常井久太郎氏の少女は、同じく是れ「チヨオク」畫にて、姿態こそ光寫(寫眞)の小照めきたれ、品位深田氏の下、原田、小舟二氏の上にある。松永工氏墨畫の僧侶は原田、小舟二氏の匹儔のみ。皆特に評すべき點なし。

宮武寅代氏の觀音堂は、殿宇を畫くこと疎に過ぎたり。人物の並立したるさま、模型を脱せず。或人のいはく人も鳩も閑事物なりと。其言酷なりといへども、亦善く肯綮に中りたるところなきにあらず。

二神純孝氏の敗荷鴛鴦は、純然たる東洋畫の意匠なり。難なし。

戸城はま子と署して、紙人形を弄びたる女兒の圖を出したるあり。衝立の虎の畫はあらずもがな。畫中の畫につきては、余別に論あれども、油畫中の邦畫は油畫家のために「アヒル」の踵筋なることをのみ、ここにこそわり置くべし。

倉田第次郎氏の農家の圖二つは、并に「チヨオク」畫なり。光寫の粉本ありしものならむ。評を闕ぐ。畫はこれにて畢れり。造形類には、先づ大熊氏廣氏の鑄像あり。此類の白眉とすべし。「プロファイ」の特性など殊に目立ちたり。岡見正氏の草花、鸚哥、蛇、犬、小兒の頭、計五品、菊地鑄太郎氏の椿と鶏とは評を闕ぐ。

這回より初まりたる常備陳列室は、館の樓上にあり。こゝに懸けたるは、前二度の會に出でしものと、去年の内國勸業博覽會に出でしものとのみ。多くは已に一たび評せし油畫なれば今復言はず。

其六、彌生館の油畫彫刻會

明治美術會はこたび芝の公園なる彌生館にて繪畫彫刻品を縦覽せしむ。(明治二十五年)われもこの頃の日和のよさに、花見がてらに往きて觀つ。家に歸りて後、思ひ寄りしことども、筆のゆくに任せて次第もなくかいつく。

こたびのやうなる催は、上野わたりにて屢ありき。われは初度より一たびも洩らさず往きて見しが、全體の優劣を言ふときは、却りて前なるもの善かりし如し。初度の陳列には撰擇に心を用ひたりと覺ゆるところも見わた、拙き畫の堂に入らで、廊の壁に懸りたりしなど、れもしろく覺ゆき。當時品位のれもひの外に高き畫多かりしは、人々久しく蓄へたるを、一時に出しつためにもありけめど、開會の度かさなりゆくに従ひて、觀るべき品の次第に少くなりぬるは、作家のれこたりにや、はた需要の少きにや、いと覺束なき心地せらる。第二第三の會の折などには、等下りたるをば、薄暗き片隅によせて陳列したるなど、猶殊勝氣なるところありしに、こたびは言ひ込む人の少かりしにや、あまり立派には見えざる製作品の來衆の目の先づ注がるべきあたり懸けられたるさへありと覺ゆ。されど我はこの満足し難き結果を見て、徑ちに催主を咎めむとはせじ。さいつ頃友人の許にて、會の幹事の作家に配りし告文を見き。うの中に、人々のこたびの催に對して、うの準備なかりきといひて、製作品を出さじとせらるるをば甘んじて諾せざるべしとありき。幹事の蒐集を廣くせむとれもひて、力を竭し志を致しつことをば、これにても知らるべく、又その廣く蒐集せむとする

に當りて、局外の人の知らざる障碍ありしことをも、これにて察すべし。好き品の少きを見て、作家にこたれりといひ、世の人の需要少しといふは、一わたりの説なれども、會の製作品を得ること次第に多くはならで、却りて少くなれるには、別に大いなる原因なくては協はず。蓋しこの會の美術は西洋派の美術なり。西洋派の美術は今の世にては、いまだ弘く世間に行はれず。それさへあるに政府の美術に對する方鍼は、れもに故國の美術派を奨勵するにありと覺ゆ。されば西洋派の美術を業とするものは、いづ方に向ひても、うの技の售れむやうなければ、或は學校に雇はれて徒に授け、或は果なき石版畫の粉本など作りて口を糊するに至る。このありさまにては、會の幹事の告文にいへるが如く、歐米の文明國と雄を争はむこと所詮思ひも寄らず。われは會の陳列品の漸く下りゆくを見て其因は今の我國の通勢にありとれもへり、今の反動時代の風潮にありとれもへり。こたびの催を以て、今までの催に比ぶるときは、うの衰へたるさま、うの劣りたるさま是の如し。さるにこたびの會に就いて、作者の個人的變動を見るときは、またやう人意を強うする者なきにあらず。譬へば山本芳翠氏の如し。われは初度以來この人の諸作を見て、心にあきたらずのみれもひしが、こたびの十二支の圖をみるときは、この人の巴里の遊のいたづらごとははあらざりしを知るに足りなむ。うの畫ことごとく善しといふにはあらねど、兎にも角にも去年の催より後に、かゝる大作をかくまで難少く爲し遂げられしは、賞すべきことなり。うもくわれは山本氏の手柄をれもふにつけて感ずるところあり。うは美術に「アマトウル」のあらでかなはぬことなり。十二支の圖は岩崎氏の藏するところなりといへば、山本氏をしてこれを作らしめしは岩崎氏の力なりといふべし。

これよりは一々の製作品を評し試むべし。第一壁に懸けたるは悉く「グラフィック」(畫にして繪にあらざるもの)の品類なり。其三十枚のうち、木炭畫三つ、鉛筆畫一つを除きては、皆「チヨオク」畫なり。われはこれを見てれもふやう、巴里の「アカデミー」、民顯の「アカデミー」、デル、ビルデンデン、キュンステエ」はいふもさらなり、歐羅巴諸國の美術學校にては、生徒におほく木炭畫を作らずれど、「チヨオク」畫をば作らすること少し。こは木炭畫のかたみづから改むるにも、師の斧正を受くるにも便よければなり。ここに懸けたる圖のうちには、明治美術會の近頃新に開きたる學校にて技を磨くをしへ子の手に成れるもの頗る多きを、特に陳列のためにとて物せさせたるもあるべしといへども、ほとく「チヨオク」畫のみなるはいかにぞや。「チヨオク」畫の題目は、ジャンヌ、ダクが像、能仁親王の像、普佛戰爭の圖、土耳其少女の圖、ラファエルが聖母のうつし、某の聖母のうつし、韓人金宏集の像、某の老母の像、西洋婦人の像、秋野、西洋人某の像、西洋婦人の立像、老人の圖、老いたる西洋人の圖、海上遭颶の十五枚なり、別に習畫十一枚あり、木炭畫の題目は、花下讀書の美人、つみ草、田舎の男女の三つなり、鉛筆畫は田舎の景を畫いたるなり。この中にて「プロマイド」紙にて引き延ばしたる寫真圖ならむかと疑はるゝばかりなるは能仁親王の像なり、韓人の像は一わたりなり。海上遭颶はわれ評すべき言葉を知らず。かゝる品をばいかにして捨てられざりけむ、いぶかし。又「チヨオク」畫に西洋じみたる題目のいと多きもいかにぞやとれもはる。我國にありて西洋流の畫を學ばむ人々は、願はくはわが國の山水人物を寫すやう、心掛けたきものならずや。摸寫はかくいふ限にあらねど、ラファエルが油畫などの摸寫するに堪へたるもの、こゝらにあるべきならねば、これも覺束なき業ならむかし。

第二壁より第六壁に至るまで、油畫と水彩畫とを懸けたり。油畫はれほより百四枚、水彩畫はれほよそ十八枚あり。別に第四壁に「パステル」畫一枚あり。總數百二十三枚となす。

芳翠氏の門下なる樋口喜和氏の出しは、芝なる東照宮、れなじ所なる有章院の圖、銃獵の圖の三つなり。二面の建築油畫皆いまだしき處れほし。東照宮のかたなる石燈籠のいづれもれなじ色なる、木立のあやしげなる、敷石の黄に過ぎたる杯おもなる關點なるべし。建物は皆題にとりて不足なかるべき美きものなるに、書き壞しは惜むべきことなり。銃獵の油畫は猶觀るに堪へたり。

同門の人丹羽林平氏の少女(油畫)は好習作にて、顔の色は師風に拘はらずして却りて善し。齋藤知三氏の翠楊白鷺(油)。動植ともに拙きにはあらず。鷺の羽など頗善けれど、其首の塑造めきたるはをかし。おなじ人の雞。(油)頗る好き出來なれど、地拙く、すべて紫なるに過ぎたり。背後のぼかし國畫風に似て惡し。

小笠原倫太郎氏の少女野花を摘む(油)。欄の美しきにけられされたり。加地爲也氏の某肖像、某婦人肖像、毛利忠正公肖像(皆油畫)を見るに、初なるは顔の色、服の金色など善からず。衣の襷はあまり摸實に過ぎたるにや、趣味を損じたる處あり。中なるも顔の色善からず、衣の色も榮えず。後なるは顔透明なるに過ぎたり。皮肉の起伏畫然たらざるはこれがためなるべし。さはれ其人にだに肖たらば、後に畫かむ人の参照に供ふるに足りなむ。草履はきたる足頗る見苦し。

本多錦吉郎氏の俊成女觀梅の圖、桃花村、日光裏見が瀧(並に油畫)はりの初なるもの肉色あしく、

罽羅に澤なくして紙の如く見ゆ、敷色單調なり。中なるは桃色にとりあはするに麥のみなるいかげ。菜花の黄なるなどあらばとつぶやかる。後なるは水に潤ひ氣なく、木も際立たずして憾むべき點にほし。

藤島武二氏の福神と上代婦人と。(並に油畫)いづれも好く出來たり。惜むらくは色に置し。福神の圖なる米俵のいろなど殊にきたなし。

廣瀬孝治氏は梅林と農家と(共に油畫)を出しつ。梅林のえやう頗る好きに、梅は梅にあらず、國畫の教ふる姿致をも少しく顧慮したらしかばとれもはれぬ。農家の圖は好き端ものなり。木はいまだし。

小舟抄吉氏の胃(油)は寫物なりと言はざいへ、摸實あまりに瑣細に亘りたり。添へたる梅の一枝の貝細工めきたる惡し。背面なる具足櫃は見ゆで、前といふ字のみ空に浮び出でたるはいかぢ。

河久保正名氏は老婦人肖像、魚、馬、萬綠叢中紅一點の四油畫を出しつ。最見よきは魚なり、次は老婦人なるべし。他は言ふに足らず。套語の題うるさし。

飯田雄太郎氏の初夏村寺、景色、常井久太郎氏の雜祭、(皆油畫)是等は我評することを欲せず。

稻垣富五郎氏の富士山(油)は好き端ものなれど、全幅あまり黄に過ぎて、原野、田圃皆おなじやうに見ゆ。

五姓田芳柳氏は例によりて史畫(油)を出しつ。こたびのは上杉景勝の一笑と題して二面あり。一面には景勝を畫き、一面には冠したる猿をゑがきたり。並べ懸けて組み立完くなる趣向なり。國畫の如くかく一題を析きて寫すは望ましからぬ事なり。景勝の顔、手、袴など善し。

原田直次郎氏の某翁肖像、横井小楠肖像、(共に油畫)こなたは好けれどかなたは見どころ少きにや。

安松富士太郎氏の雪景(油)は圓形の中にねもしろく組み立てたるものといふべし。水流、木立も善く出來たり。人物は商量を缺たりと覺ゆ。

倉田弟次郎氏の野寺(水彩畫)は國畫の風致あり。人物を着けずして、狗一頭を門前にゑがきたるは物足らず。着色に變化少し。

平木政次氏の小兒の遊戯(水)は拙けれど其手腕望なきにあらず。

水野正英氏の井戸端。洗ひ棄てたる米を雀の啄みたる、その閑なる處、風情なきにあらず。

和田英作氏の秋景、村上延雄氏の習作人物、三宅克己氏の田舎、皆實景によれるならむ。(以上四幅皆水彩畫なり)安松、水野、和田、村上、三宅の五氏は原田直次郎氏の門にありとぞ。

都鳥英喜氏の田舎(水)布色單調なり。人物も庭とりも餘り活動せず。

小山正太郎氏の田舎(水)中景遠景共に好し。木立の上の端と空との模糊たるを憾とす。

石川欽一郎氏の田舎、村叟負薪踏花下。(共に水彩)前なるは好し。着色の變化に乏し。

淺井忠氏の景色(水)網をこしに見せたる人物所謂摺へどころなるべけれど、全體の調子弱くしてあへなき心地す。

石井重賢氏の武時射怪。(セビヤ畫)國畫の隈取りのみなるに似たり。馬の身あまりに薄し。

西村新一郎氏の城外春色(水)本多氏門人小川茂吉氏の景色(油)大矢透氏の初夏江村所見(油)の三畫は評を闕ぐ。

渡邊文三郎氏は雪景(油)秋の山水(水)の二圖を出せり。油畫の方を優れりとす。水畫のかたはいつもの折衷流にて、石磴のさまなど實際にはありがたく覺ゆ。

玉置金司氏の烈士對酒(油)は好く出來たり。

小代爲重氏の幼女、丸山花園、春夜摘花(並に油畫)この三枚の中にては花園最すぐれたり。されど摸實の弊を免れざる如し。幼女と春夜摘花とはおなじ人の作とも覺ゆぬ程なり。

松井昇氏の晩春雨後(油)は頗善し。一隅に車の群あるはよく適へりとは言ひ難かるべし。内田勝之進氏の城門(水)中禪寺月夜、日光裏見が瀧、深谷利正氏の海岸夜景、果物、小笠原倫太郎氏の果物、根岸鍊吉氏の競争用玉來號牽運動、南海號馬匹放牧の圖、歸路、櫻井美那子の菊花、村田且之氏の漁磯(以上油畫)は評することを欲せず。唯城門の一圖に至りてはうの拙さを鳴らさざること能はず。

藤雅藏氏の婦人雪行(油)は好し。雪の色寒さ足らず。この人は巴里にありと聞きつ。

黒田清輝氏の少女讀書(油)は「サロン」にて賞を獲しものなりといへり。

山本芳翠氏が書きし十二支の圖(皆油)の首なる子の幅は假寐したる美人なり。行燈の明に照されたる美人のねもざし、うの調子硬きに過ぎて、好き出來とは言ひ難かるべし。身のまはりなる器などは好し。窓にうつれる樹影、鼠の影、皆濁りたる玻瓈ごしに見ることちして、月夜の物の影とはれもはれず。

次なる丑の幅には織女を書きたり、織女の顔は假寐したる美人よりは好けれど、衣の襞など透明なるに過ぎたり。遠景はすべて善し。牽牛星にも牛にも難なし。

次なる寅の幅には徳川家康の母を寫せり。十二支の内にてよく整ひたるもの一つなるべし。虎神を彫像めきたりといふはさもあるべし。人物の手はねもしろからず。夜具の紋の故實に違へるは深く咎むべきものにはあらざるべし。

卯の圖は野に兔の居るところなり。景色は西洋の古畫めきたり。辰の圖の美人は當時うの噂高かりし龜井至一氏の彈琴美人の好對なるべし。背後なる屏風に龍紋ほのかに見えたり。巳の圖には題して三輪神といふ。女神の顔は辰の圖の美人に比ぶるときは透明ならずして好し。衣裳はきたなし。笥中の蛇は善し。午の圖には殿中にて若君の竹馬に騎りたるところを寫せり。宮居の色透明に過ぎたり。組立は安なり。未の圖には蘇武の胡地にあるところを畫けり。人物といひ、うの後なる巖石といひ、雁といひ、羊といひ、いづれもめでたからず。十二支中の劣作なるべし。申の圖は庚申塚前を過ぐる少女の貝盛りたる筐を手にしたるなり。評すべきところなし。酉の圖は思兼神なり。衣のきたなく見ゆること三輪神にねなし。鶏を飼ふさまをば善く組み立てたり。戌の圖には祇王の狗兒の頭をさすところを寫せり。人物のかつき、全幅のくみ立、皆とりどころ少かるべし。最後の圖は運慶が佛像を塗りたるなり。おもしろき組立にて、畫品高く、壓巻といふべし。惜むらくは繪具鉢を持ちたる女子の地位安ならず。亥は像を乗すべき野猪にちなみてなるべし。おなじ人の手に成りたる肖像七枚あり。(皆油畫)就中目にとまりしは井上子の出品なる翁の像なりき。

岡部昇九氏といふ山本氏の門人は油畫四枚を出せり。悲哀と題したるを最好しとす。墓前に立ちて泣ける寡婦を畫けり。唯墓をばあまりに粗に寫したるやうなり。

湯淺一郎氏の習畫、本多忠保氏の梟、漁家清味、増田松之氏の初春郊外、岡見正氏の牛頭、西野猪久馬氏の芝公園の六枚(皆油畫)のうちにては漁家清味や取るべきならむ。舟の止毛を見せたるはれもしろき考なり。静物畫の趣向は斯くありたし。

河久保正名氏の花弁(油)櫻はよけれど、木蘭と山茶とはわるし。千谷某氏の飛花上欄干(油)はありあはせたる寺院を模寫して、花木人物を加へたらむやうに見わていかゞなり。椽の下に瓦らしきものを積みたるが見ゆるなどいよ／＼好からず。福原馬三郎氏の溪山炭烟(油)は實景とれぼしく、好く寫し出したれど人物なきを憾とす。神山清風氏の櫻花、御園繁氏の美人、飯田雄太郎氏の道灌山、西村新一郎氏の狗兒、牧野伊三郎氏の厨、以上五枚(皆油)の中にて道灌山やゝ見るべし。殊にその右半には難少し。又厨は人物を除くときは善き出来なり。

栗田啓三郎氏の習作人物(油)は安なる出来なり。柳源吉氏の春驛(油)は全幅の調子暖に過ぎずやとおもはる。されど頗好し。

塚原律子の漁のいへづと、不動尊、野分のあした、暹羅雞の圖、男子の肖像(皆油畫)のうち不動尊をば嘗て一たび評せしことあれば今復た言はず。漁のいへづとの鱗に、白き繪の具を指の厚さに塗りたるは、畫らしきところなくなりて塑作めきたり。暹羅雞は一わたり寫生なり。肖像はちと乾きすぎたり。好ききは野分のあしたなるべし。さはいへ畫中の板戸にまことの木理を見せたるは、あまりに小細工にわたりて品格を落すものといふべし。

中川某の花に猫(油)は全幅としては拙けれど、器具などは綺麗に出来たり。主人公とれぼゆる猫は紙をまるめて拋出したらむ如し。櫻井忠剛氏の景色(油)は調子明きに過ぎたり。

吉益銖而五郎氏の石帯に平縮、普賢に文珠。(皆油畫)前なるは押畫のみ。後なるは象と獅子そのおきものを、美しき氈の上に据ゑたる謎畫なり。

川村清雄氏の景色(油)はコロオが筆意を摸したるにや妙處はわからず。東條銖太郎氏の慷慨の士は好し。ねなじ人の土用干は板なりといふ失はあれど、これも頗好し。(並に油畫) 神山清風氏の晩秋曉鐘、小代爲重氏の景色(並に油畫)皆評すべきところなし。

山木芳翠氏の女子の肖像(バステル)は少しく粗に過ぎたり。色「チヨオク」の畫は兎角きたなくなりたがるものなれど、ミュンヘンなるピツケルハイムなどの作には此弊なし。かゝる好模範を見てつとめて純色を損はぬやうにせば、きたなくなる憂はなかるべきにや。

彫刻品は十七種あり。うが中にて見るべきものは、大熊氏廣氏の銅像なるべし。唯心づかひなるはうの据ゑ付けどころなり。つぎにねなじ人の少年閻龍あり。これも目覺ましき出来なり。つぎに小堀勇吉氏の静御前の浮彫あり。下半身のあまりに短きは確に失なるべくおもはるれど、あたりなる出品にぬきんで見ゆ。この人は大熊氏の門人なりとす。うの他は評を闕ぐ。

樓下出口に近きところに龜井伯所藏の古銅板畫數十枚あり。天晴めでたきものと覺ゆ。アルブレヒト、ドユウレル、セバスタチャン、ルクレルク、ルカス、フォン、ライデン、レオンハルド、ゴオチエ、ヒロニユウムス、ホオファ、クリスタチャン、ベルンハルド、ロオデ、ハンス、セバルド、ベハアム、ステファノ、デラ、ベルラ、ヤコツボ、カラリオ、アブラハム、ボツセ、ベエテル、ファン、ブレックなどの逸品は皆細に視て精しく究むる價值あるものなるべし。ざるをわが往きて觀しときには、この諸畫をならべたる机のほとりには、人影さらになかりき。こは素より今の我國人の好尚にかなふ

べきものにはあらねど、會のかたにても何とか工夫して、來觀者の注意を促すやうにはならぬものにや。

我國洋畫の流派に就きて

此頃の新聞雜誌を閲するに、洋畫流派の別といふことに就きて云々するもの甚多きを見る。所謂流派の命名は、記者のく新に造語をなすを以て、未だ一定せざるものゝ如しと雖、姑く余が目についたる所を以て言はざ、左の數種最も廣く行はるゝに似たり。

- 北派 舊派 變則派
- 南派 新派 正則派

北派とはこれに屬する諸家の東京の北に住めるもの多きよりいひ、舊派とは今の派の我國に傳來して年月を歴たるをいひ、變則派とはその自然を視る法を非なりとして貶め名づけたるなるべし。南派の南に住める、新派の新に佛國より輸入せられたる、正則派の評者のために今の自然を視る法を是とせられたる亦同じ。

余は假に南北派の名を用いて、我が此兩派に關する意見の一端を述べむ。

先づ南派の上を言はんは、歐洲にありては所謂自然派、實相派、印象派等の名目、三十年來誹謗の聲と俱に世に噪かりしを、今や漸く社會の承認を得て、展覽場等より排斥せらるゝ憂なきに至りしなり。その我國に入りての勢はこれに殊なり。社會の一般の上よりはいざ知らず、字を識る社會の上よりは、初より歓迎せらるゝこと幸なりと謂ふべし。この歓迎は我國人の性として、畫の簡淨を

喜ぶにも由るべく、又南派の代表者たる黒田清輝氏等の技倆のすぐれたるにも由るべく、何れにもせよ、我國技術の進歩の上より慶すべき事なるべし。其故いかにといふに自然を視る一種の方法とこれに伴ふ一種の技巧とは、分明に新なる分子を我藝林に輸入したるものなればなり。

扱て北派の上はいかにと問はんは、歐洲にありては既に不朽の大作を世に出して桂冠を戴きたる畫家此派に多くありて、社會も亦これの繪畫に對するあまたの要求を満足せしむること此派に於いて備れるがために、これに左袒することなり。然るに我國にては洋畫の一般の根據未だ立たざるに當りて、南派の來り加はるに逢ふ。是に於いてや、北派の人々は舊派といはれては陳腐なるものと思像せられ、變則派といはれては自然を視る法を謬りたるが如く思料せらる。亦不幸ならずや。

且今の記者の洋畫の兩派を云々するは、今年秋季の展覽會に基けり。彼處にては黒田氏が二十幅に近き油畫の外猶久米桂一郎氏の如きありて、南派殆ど全場を壓す。その北派に屬するものに至りては、淺井忠氏が僅に二面の油畫を出したる外、言ふに足るもの少きに似たり。北派豈人なきこと是の如くならんや。小山正太郎氏はいづくにか在る。松岡壽氏はいづくにか在る。又彼の原田直次郎氏の如きも、若し不幸にして病褥にあるに非ずば、いかでか二三の大作をからむ。我國洋畫の兩派を月旦するに此度の展覽にのみ依らんは、恐らくは權衡宜きを得たりといふべからず。

余は敢て南北兩派が自然を視る方法とこれに伴ふ技巧とを是非することをなさず。而れども歴史畫等に必要なる富贍なる組立の如きに至りては、北派の技巧これを能くするを知る。未だ南派の技巧のこれを能くすべしや否やを知らず。世の記者は南派獨り能く自然を視るといふ。而れども余は信ず、自然を視る方法とこれに伴ふ技巧とは藝術ごとに異にして、又一藝術の時期若くは流派ごとに

異なるを以て、必ずしも一藝是にして一藝非に又某の時期是にして某の流派非なるに非ざること

を。
世の記者よ。余は諸氏の褒貶に服せざるものなり。而れども諸氏が用ゐる所の術語を見るに、主観客観と云ひ、自然のために書くと云ひ、技術外の主張と云ひ、書題粉本と云ふ。此等の數語は果して南北兩派の分別を論ずるに當りて充分なるべきや否や。縦令諸氏は余に許すに其餘の術語を加ふることを以てすとも、今の新聞雜誌の調子は能く余に若干の紙面を借して諸子と議論を上下せしめんや否や。余は且疑を諸氏に質すに及ばずして、單に諸氏に對する一二の希望を言はむ。曰く油畫の流派を言ふときは新舊正變の語を用ゐずして南北の語を用ゐられんこと其一なり。新舊は義に於いて妨なし。今の陳舊斬新の意を帶ぶるを嫌ふ。正變は偏頗の命名なり。今のこれを分つものは太早計たるに過ぎず。曰く南北兩派の作家に望むに競争を以てすることなからんこと其二なり。世の雜工にこそ製造者の競争はあれ。美術はその既成品に就いて社會に競争の景況を見ると雖、作家に着意の競争あるべからざること論なし。今のこれ有りといふは美術を業とするもの、胸懷を知らざるものならんのみ。(明治二十八年十一月)

再び洋畫の流派に就きて

今の記者の洋畫の南北兩派を評するを見るに、大抵二三の術語を使ひて、南を褒め北を貶すに外ならず。

或人は技術のために技術を用ゐるを北派とし、技術以外に主張する處あるを南派とすといふ。

技術とは美術をいふか。美術といふものに就きては學者の見解の殊なりと雖、美術は獨り自

ら目的をなすときは、美術のために美術を用ゐるもの正當にして、美術以外に主張する所あるもの却りて卑むべきならん。譬へば近ごろ多き戰畫も、作者感ずる所ありて戰を畫けりとせば善かるべく、軍事思想を發達せしめんがために畫けりとせば第二義に落つべきが如し。

技術とは技巧をいふか。技巧は畫に關ぐべからざる作業なりと雖、技巧獨り能く美術をなさず。今の美術をなすは固より作者別に主張する所ありて技巧これが用をなすに在るべし。而して美術の高尙なる處こそ所謂技巧以外の主張に存すべきこと亦明ならん。

按ずるに記者の意は彼にあらざして此にあるべし。今の技術以外の主張といふは技巧以外の主張なるべし。然らば余記者に告げん。所謂技術以外の主張は南派の專にする所にあらず、否油畫その他すべての洋畫の專にする所にあらずして、美術全體の共有する所なることを。

されば記者の言は北派には技巧のために技巧を用ゐて何の主張する所もなき拙工のみ集れり、南派には技巧以外に立派なる主張ある良匠のみ集れり、北派は惡畫の派にして南派は名畫の派なりと解することを得べし。是れ單に技巧以外の主張を借りて南を褒め北を貶したるに過ぎず。

然りと雖記者の言はんと欲する所は獨り此の如きのみにはあらざるべし。試に我をして一步を進めて今の言の出處を探らしめよ。

我机邊に西曆千八百六十六年の佛蘭西新聞 L'Evénement あり。これに載せたるエミル、ゾラが文は彼國印象派に左袒して、當時の「サロン」の審査委員を攻撃したるものなるが、今の文中亦技巧以外の主張にわたれる處ありて、記者の言と相發明するものゝ如し。余は今の日本を以て三十年前の佛蘭西に比することの徒爲ならざるを信ず。

印象派即ち我に云へる南派の首領はエツア、ル、マネエなり。されど南派の書法はこれに先だちての端緒をあらはしき。コロオとクウルベエとを始とし、之に次ぎてはミレエなどやこの方嚮に力を用いたる先達なるべき。「サロン」は千八百六十四年及び六十五年にクウルベエが門下なるブリゾオとマネエとが作を采りたるに、六十六年に至りて又此派のために門戸を鎖したり。ゾラが攻撃はこれに由りて起りしなり。

ゾラが文中にいへらく。自然を摸倣するは卑むべし。書中には自然と共に個人的なるものあらんことを要す。書家はうの技巧能く自然を寫すに止まらずして、心身を道に委ね、唯これの目だの性にのみ適ひたる新きものを造り出さんことを要す。マチエが特性マチエが個人的なるものは明に視、又高に視るに在り。其書の明さは自然の明さよりも明なる處より手を下すを常とす。マネエがこの特性の崇ぶべきはドラクロアが特性の崇ぶべきに殊ならず。我は古を貶し今を褒むるに非ず。今の人の古に泥みてマチエ等を容れざるを惡むのみと。

是に由りて觀るにゾラが所謂技巧以外の主張は、猶人の特長といはんがごとし。人の特長は獨り南派の名家に於いて見るべきのみならず、亦北派の名家に於いても見るべし。特長なき人は獨り北派これ有るのみならず、南派も亦これ有らん。こゝに北派の色彩家ありて能く多種の色を用ひ、これをして各其處を得せしめば、うの書暗しと雖誰か敢てその特長を認めざらん。こゝに南派の拙工ありて、唯一味の黄、一味の紫を塗抹してこれを畫なりといはば、うの畫明しと雖誰かまたこれに與せん。

ゾラは蓋上に引きたる立論の部分に於いては、南派を褒め北派を貶すに非ずして、南派の名家を褒

め北派の凡手を貶したるなり。今の記者の我國現時の北派を以て惡畫の派となし南派を以て名畫の派となせるが如きに非ず。

然れどもゾラが論はこれに止まらざりき。其の文中また謂へらく。我が古來の名匠を崇ぶはクウルベエとマチエとを崇ぶに殊ならずと雖、我が特に後者の列に加はりて筆戰するは別に故あり。凡う時世には一定の風潮あり。今は心理及生理的分析の風潮の主たる世なり。クウルベエが畫派はこの風潮に適へり。今の時世を代表せりと。

この言や余が未だ述に同意すること能はざる所なり。印象派ありて三十年。歐羅巴の名匠大家は果して印象派のみより出でたるか。多色を以て長を見るものはあらざるか。形の成就と線の感覺とを以て長を見るものはあらざるか。將た富贍若くは雄大なる組立を以て長を見るものはあらざるか。

三十年前の佛蘭西は印象派が抑壓に堪へざりし時代なり。余は深くゾラが不平の鳴をなすに當りて或は偏頗の弊に陥りしを咎めざるべし。今の日本は南派が意を得たる天地なり。余は少しく世の記者が北派を貶すことの甚しきを怪む。

或人は又北派は畫かんがために畫き、南派は自然のために畫くといふ。是れ種々に解釋し得らるべしと雖、記者は唯畫の自然めき實相めきたるを以て南派の專有に歸し、これに依りて南を褒め北を貶せるならん。ゾラのいはく。畫の妙は主として個人的なるに在り。自然めき實相めきたるこれに次ぐ。自然は古今にわたりて變化せず。個人的なるものは作家ごとに殊なりと。ゾラは印象派の名家に許すに、能くこれの特性に依りて自然の一片を寫し得ることを以てす。然れどもこの言は印象派ならざるもの、亦能くその特性に依りて自然の他の一片を寫し得るを妨げず。今の記者が北派獨

り能くせずとなすはこれを貶すことの甚きにはあらざるか。或人は亦北派客觀を主とし南派主觀を主となすといふ。是れ作家の主觀的興趣の畫中に現はるゝこと、南派の有る所にして北派の無き所なりとなすならん。亦た北派を貶すことの甚きにはあらざるか。其他記者中別に畫題粉本に就きて云々せしものあり。その言餘りに釋ければ、今これに言ひ及ぶに違あらず。(明治二十八年十一月)

「パノラマ」の事に就きて某に與ふる書

先日參上いたし候節、「パノラマ」のかきかたにつきて、寫しおき候ものをさし上可申置候へども、歸宅後取出し見れば其儘にはさし出しがたきところ有之兎角れもひ煩ひ候末、書狀に認め候て、御目にかけて候事にいたし候。「パノラマ」かくには、うの骨組をこしらへ候事最初の手段に候。著作家の先づ書肆をいけどり候通、金主をいけどり候て、「パノラマ」の建ものを作らせ申候。建ものは例の丸がたにて、うの中心のところに見物の乗り候壇据えさせ申候。洋語にて「ポヂウム」と申候。壇の高さは、後にかくべき畫の地平線によりて定め申候。上の方より充分に日光を受け候ため、屋根をば「ガラス」ばりにいたし候。但し日光と申すは、理學にて散光と云ふへ候ものにて、即ち晝の間のうらのあかりに御座候。直に太陽より射おろし候光は、却りて邪魔に相成候ゆゑ、日ねほひの布にて遮り隔つる事に御座候。壇の上には傘を張りて、屋根と畫の上のはづれとを、見物にみせぬやうにいたし候。洋語にて「エエルム」と申すは此傘に候。壇と畫面との距離は、ねほより十「メエテル」ばかりも有之候。これは成功の後いはゆる前地となるべき處にて、或は砂を敷き或は土瀝青を流し、軌道を引き申候。架をいざらすための軌道に候。架の事は下に説明可致候。扱畫に取りか

ゝり候には、主任の畫工の外、猶三四人腕のたしかなる畫工入用に御座候。畫工は尋常の技能の上に、高き架によち登りて、大なる畫面に對する程の膽だましひあるものを選ぶことに候。わづかの事に眩暈するやうなる人にては、役に立ち不申候。うの下には職人のゑかき、塗師を使ひ申候。人物の粉本には例の「モデル」入用に御座候。畫工の用を足す小使は物慣れたるを選び申候。番人は篤實にだにあらば宜しかるべく候。うの外こゝに入り込み候は、土方、大工、屋根ふき、又は電氣技師、寫眞師などに御座候。畫の題によりて、畫工は豫め實地見分のために旅行いたし、許多の寫眞を取り、又畧書を取り歸り候。其上にて下畫を作り申候。うの大きは「パノラマ」の十分の一にいたすが常に候。「パノラマ」の尋常の畫とちがひ候處は、既に下畫の時に充分に心得れくこと必要に候。たゞの畫にては、見物の眼を注ぐべきところを、一點に集め候習なるに、「パノラマ」にては、かゝる點を諸方に散らしおく事に御座候。又光線も屋根の方より一面に漲り來り候事故、はじめよりその覺悟なくては協不申候。又畫の下の縁に立ち候人物は、若し眞の大きにかき候時は、大きすぎるやうに見え候に付、一「メエテル」二十「センチメエテル」又は一「メエテル」三十「センチメエテル」位に致す事に御座候。下畫を「パノラマ」に寫すには、高き壁に届くために架を作らせ候。これは建物の中にて、大工を使ひ作らせ申候。太き材木を組み合せて土臺となし、うれに四輪をつけて軌道の上を走らす事に候。土臺の上には四本の柱を立て、柱と柱との間に斜十字の木を入れて、ゆがみぬやうにいたし候。柱の高さは十五「メエテル」ばかりに致させ候。柱の途中に段をつくりてそこより壁の種々の高さに手のとぐくやうにいたし候。このねほ架の外に、高七「メエテル」の小架を作らせ候。これは地平線までの仕事に用ゐるものに候。大小の架の外に、尙梯、高低いろ／＼なる踏臺をこ

しらへたき申候。架出来候上は、書布を壁に張らせ申候。布の長さは圓き建ものゝ内まはりに應じ、譬へば百三十六「メエテル」、幅は高さに應じ、譬へば十五「メエテル」もあるべきを縫目なし、襷なしに張る事に候。但し布は三「メエテル」づゝ縫ひ合したるものにて、上の方は屋根の下なる太き鴨居に打ち付けねき、下の端には太き瓦斯管を縫ひ込み候て、處々に錘を弔り申候。斯く平に垂れたる布に、膠繪具を塗り申候。糸のぐ乾き候時は、布の目則ち氣孔は縮み上り候。この時布の上下は堅く留めある事ゆゑ、中程ふくらみて壇の方へ張り出し申候。その最甚きところを計るときは、「メエテル」位のくるひ出居可申候。これにて布の中程より上には、日光の當り候事、中程より下のたぐひにあらず、後にゑがき候空氣のためには、少からぬ利益ある事に御座候。このくるひ定りて後、布の上に油繪具を塗り申候。これ則ち油繪の地に相成申候。この油繪地は上にしるし候割合にて、二千平方「メエテル」可有之、随分大なる畫面に御座候。兼て作りねき候下書をこの上に寫すには、先づ雙方に罫を引き申候。本畫面に横畫を引くには、架に乗りて炭を持ち、これを布に當て、架を走らす事に候。かやうにして「メエテル」おきに横畫を引き申候。縦畫は大工の常に用ぬ候墨壺の絲にて打ち申候。これも「メエテル」づゝ隔て申候。さて畫工は各受持の場所を定め、かの下畫のうつしを截りて受取申候。譬へば芝居にて、役者共のくゝ受持のせりふを書きぬき、一部の正本をきれくゝに致候にひとしく候。受持のものは即ち輪廓の畫に着手いたし候。輪廓既に出来候時は、いよく本畫にとりかゝり申候。この時面倒なるは、畫面に近きところにありて引きたる線は、壇より見たる線と、其方嚮大にくるひ候事に候。架の上にて一線引きては壇の方へ見にゆくは、随分煩はしく候。この弊を避くるためには、長竿の尖に筆を結びつけて使ひ申候。五「メエテル」の

筆は珍らしからず候。山水人家木石人物の太かた出来上りたるときは、空氣をゑがくことに相成候。常の油畫をかくには、「パレット」と申す板の上に、小き錫のゑのぐいれより少しづゝゑのぐを推し出すものなるを、こゝにては繪具を大桶より取りて、濃淡いろくゝに雜ぜ、各瀬戸もの壺に盛り申候。さて空氣をかくには、手間取ることを大禁物にて、手間取るときは、思はぬところに斑出来申候。うれゆゑ此際には例の職人ゑかきにさへ手傳はせて、大急にかき申候。濡ひたる間にかき上げ申候。空氣出来たる上は山水人家木石人物の下塗りにかゝり候。これより罫の跡次第に見ゆすなりて、畫の形明になり申候。人物をじあぐるために誂へねきたる「モデル」かはるくゝ入り來り申候。繪具桶、すゞの繪具入れはやゝ虚になり、大なる筆の用少くなるに従ひて、小き筆の用多く相成申候。しあげ近く相成候時前地のこしらへに取りかゝり申候。こゝに岩組、人家の屋根などを作り、善き加減のふるびを付けて畫につゞきたるやうに見する事に御座候。架を解きて取かたづけ、軌道をかくし申候。岩組の取りつけなどは、なかゝり職人には任せおきがたく候ゆゑ、畫工も自ら手を下し申候。岩の陰をゑがくときは、一人壇の上に立ちて指圖いたす事に御座候。以上大略のみに御座候。匆匆。

原田直二郎に與ふる書

山中に來りてより、僅に數日のみ。然れども平生の累を離れて、胸間稍や餘地ある心地す。今夕驛馬須坂より足下の郵筒を齎してかへりぬ。燈を挑げてこれを讀むに、足下の風采紙上に躍如たるを覺ゆ。感慰何ぞ止まむ。

來諭によるに、頃日日本赤十字社、其病院を青山に築く。院に御座の間といふものありて、皇后陛下の

爲にこれを設けたり。社吏其壁を飾るに、油畫の御像を以てせむとす。乃ち人をして油畫家の名若干を録進せしめしが、何人のわざにか、次第にこれを削去りて、遂に二人を残しぬ。足下も亦殘されたる一人なり。一日社吏足下等二人を招きて、寫眞御像を拜せしめて曰く。我社君等に此圖の副本各一を與へむ。君等はこれによりて、鉛筆畫を作れ。我社は君等が名を掩ひて、御撰を乞ひ、その撰に當れるものをして、油畫像を作らしめ、これに報ゆるに五百金を以てせむと。足下獨これを辭しぬ。われれもふに日本赤十字社の此舉は、藝術競争の法を知らざるものなれば、足下のこれを辭したるは、固より其所なり。

夫れ藝術競争の法は、題を課し期を定めて、これに懸くるに金を以てし、天下の藝術家をしてこれに應ぜしむるを常とす。此の如くなれば、これに應ずるもの人の推薦を要せず、身の顯晦に關せず、恃む所は其技能のみ。若し具眼の人をしてこれを審査せしめば、能者進みて、不能者退かむこと期すべし。日本赤十字社は人をして油畫家若干の名を擧げしめ、先づ其多數を削去りぬといふ。而してそのこれを削去りしものは何人ぞ。そのこれを削去るに當りては、いかなる標準を取りしか。其迹頗る公明ならず。後足下等三人を残すに及びて、猶競争の常法を用ゐず、油畫を作らしめずして、鉛筆畫を作らしめむとす。その徴す所の鉛筆畫は果して油畫の工拙を卜するに足るか。彫工の競争に應ずるときは、先づ石膏の模型を作ることあり。是れ石膏模型の大理石像に於ける、其關係鉛筆畫の油畫に於ける比にあらざればなり。石膏の模型は、規矩準繩の力を藉りて、これを大理石に移すこと容易なれども、鉛筆畫は新に寫眞圖に據りて、油畫を作らむとするに當りては、一故紙に過ぎざるべし。何者の畫家ぞ、其技を盡してこの無用の圖を作らむとするは。且足下等をして皆命に遵

はしむとも、その撰擇は一に皇后陛下の嗜好に在らむ。是れ恐くは畫家をして、其技を盡さしむべき道にあらず。

或はれもふ、此競争法は日本赤十字社の其費を節せむとせしによりて生じたるかを。若し三家をして各油畫を呈せしめば、三家皆其報を受けむ。若し三家をして先づ權に鉛筆畫を作らしめて、其能不能を判じ、その上にて一人をして油畫を作らしむるときは、其報を受くるものは唯此一人のみ。是れ彼社の節費の道なりとれもへるものならむ。殊に知らず、三家果して其技を盡して、鉛筆畫を上りたらば、その應に受くべき報は必ずしも油畫を作りて受くべき報と甚殊ならざるべきを。殊に知らず、尋常競争の法に従ふときは、千萬畫工の其募に應じて、油畫を進むるものありと雖、社は唯一人に與ふるに、その懸けし所の金を以てするのみなるべきを。

嗚呼、われは日本赤十字社の特別會員なり。而れどもわれは社の徵畫法を以て、其宜きを得たるものとなすこと能はず。宜なるかな、足下の意を決してこれを辭せしこと。

然はあれど我皇后陛下の御像を畫くが若きは、畫家無上の光榮なり。常人をして此徵に逢はしめば、或は其召募の法を問はずしてこれに應ぜむ。故にかにといふに、若し幸にして其撰に當るときは、世俗の譽を被ふりて、高く自ら標置することを得べければなり。

われ聞く、目的は方便をして尊からしむとは敎家の言なるを。又聞く、鼎を負ひ、牛に飮せしは青史の稱するところなるを。古より學術技藝を以て、身を立て名を揚げむとするものは、出處進退の際に於て、迷ふこと少からず。阿曲苟も進まむとするは、蓋し人の常情ならむ。故にわれは已に日本赤十字社の徵畫の法を以て、其宜きを得ざるものとし、足下の敢てこれに應ぜざるを高しとすと

雖、未だ必ずしもかの枉げてこれに應ずるものを憎まず。彼等にして果して能く爲すことあらば、われは將に赤十字社が好畫手を雇ひ得たるを賀せむとす。

足下知れりや、是れ獨り畫家の事のみならずざるを。われ醫を業とす。姑く譬をこゝに取らむ。今の醫の宮中に出入するものは、多く現時醫學の正科を踏みたるものなり、大學に於て業を卒へたるにあらずば、獨逸に遊びて術を研きたるものなり。而れどもわれその爲すところをみるに、積弊を襲ぎ、陋習を守り、其學ぶ所に負くが如きもの少からず。聖上病なし。醫の膝行して其脈を診すること虚日なきは何ぞや。聖上病なし。醫の其厠に上りたまふを伺ひて、必ずこれを檢し、簿に上して某日某刻、御便あり、御色黄にして御量小なり等の語をなすは何ぞや。聖上病なし。醫の規尼涅と鐵鹽とを合せて、丸となして日ごとこれを上るは何ぞや。是れ皆油畫家が鉛筆畫を作りて、枉げて募に應ずることの比にあらず。

昔後光明のみかど殯宮に在り。諸大臣皆舊禮によりて茶毘せむとす。今の頃八兵衛とて、魚を禁門に賣るものありしが、茶毘は浮屠氏の法にして、我朝の道にあらずといふことを信じて、號泣してこれを廢せられむことを請ひ、その聽かるゝに及びて始めて息みぬ。今の宮中に出入する醫は、官高く祿厚し。若し宮中の醫制其宜きを得ざるを知らば、何の憚るところありてか直ちにこれを諫めざる。今の敢てせざるものは、志の八兵衛にだに若かざるためなり。何ぞいはむや、足下が日本赤十字社の徴に應ぜずして、我皇后陛下の御像を畫くことを辭したる如き心あらむや。

嗚呼、今の畫家は徵畫の法其宜きを得たると否とを問はずして、御像を畫くことの榮あるを喜ぶべく、今の醫者は宮中の醫制其宜きを得たると否とを問はずして、御脈を診することのかたじけな

さをれもふべし。是れ人の常情ならむ。若し然らば足下が爲す所の如きは、情を矯むることの甚きものならむ。奈何せむ、われは猶足下が此舉を是なりとして、これによりて足下を高しとせざることも能はざるを。

さきには足下油色を以て觀音大士を畫きぬ。油畫の佛像は古來無きところ、剝造の苦心尤も推測するに耐へたり。畫成りてこれを博覽會場に懸けたるときは、萬目齊く仰ぎ、衆口悉く稱へしに、會關にして賞を頒たるゝに及びては、一紙の其功に酬ゆるものなし。末松謙澄氏嘗て怪みてこれを九鬼審査官長に問ひしに、其分疏に曰く。觀音の油畫、頗る觀るべき者あり。然れども會の賞を頒つや、一人一賞と定む。原田氏をして若し別に肖像を出して、賞を得ることなからしめば、觀音の圖も亦賞に洩れざりしならむと。夫れ一人一賞法の一類一賞法に若かざることば、「メエル」記者も論じぬ。されば油畫觀音の賞に逢ふべくして逢はざりしことは、辯を埃たずして明なり。然るに足下之を怨み之を歎く色なく、圖を載せて歸り去りぬ。是に由りて觀れば足下の高きことは必ずしも日本赤十字社の徵畫の擧を待ちて知ることならず、早く勸業博覽會に於いて知るべかりしなり。唯疑ふ、足下はいづれの處より之を養得たるかを。明治二十三年十月二十三日、信濃山中に於て。

與某等論型品書

昨來議席に列することを得る、洵に望外の光榮となす。僕の構昧なる、平生技藝の事に熱せずと雖、聊亦聞く所なきに非ず。敢て腹心を布いて、左右に奏記せざらんや。夫れ獻品の題目、人物と曰ひ、名馬と曰ふ、未だ裁決に及ばずと雖、要するに委員諸君の意、所謂型品 *plastische Kunstwerke* に在

るは、則ち復た疑ふ可らず。然れども彫鑄の事は、諸君が平生の未だ必ずしも留心せざる所にして、論議或は徒に口辯を費すの弊なきこと能はず。爰に其梗概を陳べて、以て諸君の参考に資せんと欲す。第一型品に二種あり。一面より視るべきものと、多方より視るべきものと是なり。彼を「ルリエフ」Relief (浮彫)と云ひ、此を「スタッエ」Statueと云ふ。「ルリエフ」は高低同からずと雖、猶畫圖に近し。故に色彩を施すことを得べし。唯意匠繁密なることを嫌ふのみ。「スタッエ」には胸像あり、立像あり。皆上下前後左右の三方位を具備す。方今單色を必ずす。委員諸君は人物を取らんも、名馬を取らんも宜く「ルリエフ」たると「スタッエ」たるとを決すべし。第二型品には用材多し。石と金と其主に居る。石は大理石を常とし、金は「ブロンチエ」Bronzeを常とす。「ブロンチエ」は銅、錫、亜鉛より成りたるものなり。彫石は石膏型の技藝家の手に完成するを待ちて之を行ふ。其法、石塊を截りて略人形馬形に類せしめ、石膏型の諸點を其膚表に移記す。諸點は蓋し「ステレオメトリー」Stereometrieの法則に従ひて之を定む。移記し畢れば、錐もて之を刺し、刺孔間の石片を剝ぎ去る。是れ所謂點刺者 Puncteurの爲す所なり。軌近點刺者の手に代ふるに機關を以てするものあり。ロオベルト、トレンツ R. Toberantzの製する所の如きものは是なり。剝ぎ畢れば、之を削り之を磨す。是れ所謂型彫者 Modellenhauerの爲す所なり。點刺型彫の後、技藝家は親ら之を刪潤す。鑄金も亦石膏型を技藝家の手に受けて始めて之を行ふ。或は所謂型沙 Formsandを用いて、皮心の兩型を作り、之を地中に埋めて、注ぐに鎔金を以てし、或は技藝家作る所の中虚蠟型を取り、内外を填充するに型土 Formerdeを以てし、坑中に置いて之を熱し、蠟の流れ去るを俟つて鎔金を注ぐ。其他葉金を敲き、外に隆起せしむる法あり。間々獨逸に行はる。(Torenik)別に牙あり、陶

あり、木あり、復た贅せず。電熾法 Galvanoelectric に至つては、則ち多胡君既に詳に之を言ふ。りの技藝家の授型に待つことあるは一なり。委員諸君は宜く何の材の選ぶ所の題目に適するかを決すべし。第三既に略型品の種と材とを定むるときは、技藝家を揀びて之に托するに塑型の事を以てす。是れ最も輕視すべからず。何如といふに之を金にするも之を石にするも、皆工匠の末技なり。而して獨り原型 Plasmmodell を塑造するは、眞技藝家に非ざれば能はず。型品の審美上價值は、蓋し此に基づけばなり。原型は之を塑するに礬土 Modellirthonを以てす。その成るや之を石膏に移す。其法二あり。失衣型 verlorene Gipsformと存衣型 achte G.と是なり。原型を覆ふに石膏を以てし、その乾くを俟つて、毎片礬土を撈出し、濯淨の後之を合併す。今再び此石膏衣 Gipsmantel の中空に注ぐに石膏を以てし、乾後其衣を破る。之を失衣型と謂ふ。石刻、沙鑄、電熾並に成な之に依る。若し石膏衣を覆ぐに當りて、片々之を存じ、數々之を用かんとするときは、之を存衣型と謂ふ。多く石膏型を獲るに供し、又中虚蠟型を作るに供す。夫れ型品の眞價は、既に脆軟壞れ易きの原型に存すれば、則ち委員諸君は必ずしも心を彫石、鑄金等、工匠の末技に勞せずして、獨り善技藝家を揀ぶに於いて鄭重を加ふべきなり。且つ塑型の難き、決して一朝一夕の能く功を就すべきに非ず。技藝家の手を下さずや、神機の發動を期す。故に與來れば寐ずして操作し、與來らざる時は手を束ねて月を逾ゆ。技藝家の人身馬體を摸するや、解體學上に其形を正さんと欲す。故に着衣の像も、先づ其裸身を作りて、而る後之に被らしむるに土衣を以てす。りの裸身を作るや、肥瘠の人を索め、大小の馬を倣ひて、之を業室に致す。所謂「モデル」是なり。技藝家の同世の人物若くは名馬を塑するや、克く肖んことを求む。故に貴人と雖、頻に業室に臨みて、自ら粉本とならざることを得ず。

所謂「ジツツング」Shing 是なり。名馬の如きも亦宜く屢々牽いて其處に到るべし。塑型の難き既に此の如し。委員諸君の題目を命じ、又型品の種材を決定するは、寧疎に失するも甚密なること莫れ。是れ技藝家をして採擇の自由あらしめざるべからざるを以てなり。若し委員諸君にして先づ技藝家を揀び、之をして議席の末に列し、隨時諮詢に應ぜしむることを肯せば、則ち愈善からん。僕固陋自ら遣らず、麤く梗槩を擧ぐ。伏して希ふ、委員諸君詩非を采るの意を以て之を聽納し、而る後審量熟議せられんことを。(明治廿七年二月十三日)

告彫造家檄

彫造家諸君に告ぐ。夫れ以れば主上聖明、徳上下に格り、化内外に施す。今茲大婚二十有五年の良辰に丁り、創て祝祐の大典を擧げらる。是に於て黎民懌々、争ひて其琛を紫宸に致し、以て懷仁戴恩の志を昭にす。我陸軍將校は平生恩を承くること最厚く、榮を辱うすること最大なり。豈獨負暄の獻なきことを得んや。是を以て余等委員は獻品を選定するの任に當れり。余等胥議して以爲らく。凡そ品物の以て永遠の記念をなすべきもの、彫石鑄金に若くものなしと。爰に可美眞手命と云ふものあり。在昔神武の世、賊を討ち功を奏し、其父饒速日尊と共に物部の遠祖たり。嘗て寶を兩宮に獻じて以て壽祚を祈る。事は國史に詳なり。乃ち其像を銅鑄して、之を鳳闕の下に樹て、以て斯曠世の盛儀を祝し、彼絶類の優遇に酬いんと欲す。今四海乂安、百工蕃盛、技藝の士踵を接して出づ。名海内に重く、聲域外に聞ゆるもの何ぞ限らん。是れ余等が居常の係仰する所にして、りの以て彫造の事を託すべきもの固より寡しとなさず。然りと雖近世の技藝重きを學問に較ぶ。選擇宜きを得ること、決して易事に非ず。故に余等勉て偏倚獨任の弊を禦ぎ、公明無私の旨に従ひ、競技の法を設

けて以て藝林に普告す。其規程左の如し。惟願ふ、彫造家諸君幸に余等が微志の存する所を諒し、その懸くる所の金匱きを嫌はず、相率めて募に應じ、共に好例を開きて將來に彰示せられんことを。(明治二十七年三月十日、在職陸軍將校同相當官獻品委員)

競技規程

- 第一條 在職陸軍將校同相當官獻品委員は競技法に依り、金三千五百圓を懸けて、可美眞手命の銅鑄立像一軀を建設せしむ。
- 第二條 鑄像は顛頂より足跡までの高さ曲尺七尺にして、其基礎は花崗石を以て之を築かしむ。但鑄像及基礎の意匠は競技者に一任す、且其基礎の製作は鑄像に適合すべきものとす。
- 第三條 建立の地は宮内省の指示を俟て之を定む。
- 第四條 競技者は鑄像及基礎の三分一の縮尺土型を作り、之を借行社に送致すべし。
- 第五條 縮尺土型の送致は明治二十七年五月十五日を期限とす。
- 第六條 縮尺土型は獻品委員の定むる所の技藝家七名若くは九名をして之を審査せしめ、其投票に依りて選採す。
- 第七條 競技當選者は懸くる所の金額を以て、鑄像建設一切の工事を負擔すべし。
- 第八條 競技當選者は前條の負擔をなすに當りて、金石原料の購入、原型の塑成、銅像の鑄成、地盤の築造、基礎の彫刻等に對する金額使用の概算書を呈出すべし。
- 第九條 在職陸軍將校同相當官獻品委員は競技當選者との間に於て契約を締結す。
- 第十條 當選せざる競技者には報酬を與へず。

第十一條 成功は明治二十八年五月三十一日を期限とす。

言文論

古は言と文との差別なく、文字成りて言を寫しだし、これを讀ませむためにあらず、これを忘れざらしめむためなりけむ。我邦をのみ言靈の幸ふ國なりといはむは穩なる議論なりとも覺せず。「イリヤス」、「オドエツセエ」の詩は猶言のまゝなり。ヘロドットが叙事も亦猶言のまゝなり。ホラチウスに至りては既に好みて重疊せる句を作り、人に讀ませむことを旨とし、ツキヂデエスも亦既に讀む人をして句ごとに章ごとに尋思せしめむとしたる迹明に見ゆ。プラトオが哲學は猶言のまゝなるが多きに、アリストテレエスは早や言ならぬ文を作りたりき。

かくて讀ませむために作れる文漸く盛になりもてゆく程に、言と文との懸隔生じて、言は必ず文に先だちて進み、文は其後より追ひ行く如きさまとなれるは、萬國の史乘に照らして見るとを得べし。古歌の歌ふべからずなりて今様起り、今様も亦歌ふべからずなりて都々一の起れるさまを考へ見よ。之を支那詩の沿革に比ぶれば、殆符節を合すが如くならむ。中井積善は嘗て詩を論じて云はく。蓋唐創今體。自沈宋、李杜、王岑、錢劉、元白諸家。長句短章。朝野競傳。被之歌絃。如高適、王昌齡、王之渙。共飲旗亭。潛聽名妓奏樂。皆係其作。如李益每一篇出。樂工以賂求取。供奉天子。當時流傳之盛。可想見已。故四聲排比之法。與天下共之。唯唐爲然。歷五季至宋。俗尙寢異。而詩餘盛行。如秦黃工填詞。天下爭唱。是也。填詞即詩餘也。然而詩卒爲學士大夫之用。元明以降。詩餘移入演劇。可誦而不可歌。世別有歌謠新曲。而詩益與俗隔。明何良俊曰。詩亡而後有樂府。樂府闕

而後有詩餘。詩餘廢而後有歌曲。是也。王世貞亦嘗論之。以發浩歎。乃明詩特守唐氏成規。而弗失焉耳矣。湖上笠翁李漁者。詞曲之雄也。其言曰。曲宜耐唱。詞宜耐讀。又曰。曲以圖歌時利吻。詞則全爲吟誦而設。止求便讀而已。漁當明季清初。其時劇中詩餘自盛。而何氏先是言詩餘廢者。非辭之廢。乃聲之廢。故明清但以供吟誦。詩餘猶然。矧詩乎。乃明清而或歌唐詩。出於假設強爲爾。豈唐聲之眞也與哉。詩の樂府となり、樂府の詩餘となり、詩餘の歌曲となれるは言の沿革なり。古歌五七の調の今様七五の調となり、都々一とまで變遷せしも亦言の沿革なり。獨り文は則ち所謂學士大夫の手に遺りて昔のまゝなりしなり。而してこの昔のまゝなる文は即ち昔の言のまゝなる文なれど、今の言には違へるなり。故にこの文は死文なり。死文を摸擬するは其文の希臘なると羅馬なると秦漢唐宋なると奈良朝前後の文なるとを問はず、皆國文發達の旨に協へるものにあらず。死文を摸擬せむと勉むる人は、大抵文に雅俗の別を建て、古を雅とし今を俗とす。近く譬を取らむに、彼大八洲學會雜誌に於て福住正兄といふ人が佐々木弘綱といふ人の歌論を駁せし雅調論と題せる一篇も、古の雅なるを知りて今の未だ必ずしも俗ならざるを知らず。其識力は世の膚淺なる輩には優りたるべけれど、余等はうの大活眼を睜いて雅俗の古今と同一致ならざることを看破せざるを憾とす。

我歌人に向ひて改良を望みし萩野由之、太田好則の諸家も、我詩人に向ひて更新を説きし市村瓊次郎氏も皆死文の廢すべきを悟りて、今言の亦以て雅となすべきを知りたるなり。就中萩野氏が將來の日本詩人に望まれたる語は、雄渾濶大世の眼孔豆の如き徒をして愧死せしむるに足らむ。其言に云はく。天下の歌人苟偏見、猜忌、執拗の疾なく、大觀を達し公平を存じ、長を取り短を去り、學問

の根柢を深くし識見を大にし、思を凝らして進歩の方向に趣かば、なごか再び和歌の黄金時代に逢ひがたからむや。宇内歌詩の黄金時代を創造し得ざらむや。若果して此に進まば、其歌の長きはダンテの神曲一百段もミルトンの失樂園十二巻も其雄大を誇ることを得ず、短きは俳句片歌の寸鐵人を殺すものも、其簡勁を説くに足らず、長句短句錯綜して出で、抑揚急徐參差調を成し、其効用は天地を動かし、目に見ぬ鬼神をもあはれとれもはせ、男女の中を和らげ、猛き武士の心をも慰むるのみならず、亦能く人を慰ましめ人を樂ましめ人を悲壯ならしめ人を忠勇ならしめ、亦最人を高尚優美ならしめて、和歌の能事を満足せしむるならむと。太田市村氏等の望む所も亦た此外に出でざるべしと思はる。

此の如き進歩は獨之を歌ふべき叙情詩、誦すべき叙事詩、演ずべき戯曲に期すべきのみならず、又讀むべき散文に向ひても之を期せざるべからず。畢竟これに對する改良更新の事業には、韻文散文皆屬したり。

夫れ死文は既に作るべからず、今の文は今の言と甚く相乖戻せざらむを要すといはゞ、之を救済する道、一あらむのみ。今の文は古の文のまゝにて置き、今の言を古の言にかへらせむとするは、文を言とせむとするなり。今の言を直ちに今の文となして、復古のまゝの文を作らんとするは、言を文とせむとするなり。

文を言とすることの到底人力の能くする所にあらざるは、歴史の製造すべからざると一般なり。その或は能くすべきは古の片言隻語を取りて今の詞林を賑はずに過ぎず。例之ば頃日世をさりし獨逸のヨハンネス、シエルが古語を摘みて己が文を飾り、遂に新聞社會に傳播し一時の人口に膾炙せし

めし如し。これより歩を進めて多く古物を用ゐむるときは、李王が擬古の詩文となり、萬葉ぶりの和歌となりて止まむのみ。此時に當りてや、文の古に溯るを願みずして、言は單行獨歩して進まむのみ。此理は頗親易きものなればにや、世間流石に言を古にかへさむと云ひし人あらず。彼日本文葉の序にて、今文の蕪雜なるを慨き、古へふりにかへさばやとれもふに、古文は今人のたやすく學ぶべくもあらず、かれ古文をまねびてかける二百年こなたの文並に今人の文に己の拙きをさへ加へてこの書をなじつるは、ひとへに初學の人を導かむがためなりと云ひし久米幹文氏と雖、唯死文を摸擬せむとれもへるのみ、言をまで古にかへさむとはれもはざるべし。

されば苟心を喪ひしものにあらざる以上は、皆言を文とせむとこりれもふらめ。今の言を直ちに今の文となして、復古のまゝの文を作らんとこり思ふらめ。唯此間に雅俗の差別ありて、其極めて雅なるものと其極めて俗なるものとは、氷炭相容れざる如き勢あるのみ。

西洋人の亞弗利加内地に旅行して土民の語を究めんとするものは、音に依りて文を寫せり。其奉ずる所は「フォチチック」にして、其用ゐる所はサイワアス、スキイトの言標にあらずば、レブシウス、ブルユツケの音符ならん。是れ固より善し。何如といふに亞弗利加土民の語は吾人の其沿革を詳にせざる所なるを以て、之を文に寫さむとするに當りて、音に依る外に策なかるべければなり。却りて怪む、我邦に起りし羅馬字會は、我邦の歴史を捨て、我語の沿革を願みず、必ず今の音にのみ依りて今の言を寫し、之を文となさむとす。今往かうといふ言は其音をゆこといふ、羅馬字會はこれを yuku と書して yukan と書せず。故に往かぬといふ古今に通ずる格に至りては、其母音のをに かくて yukann と書せざるべからず。是等は母音のみなれば猶可ならむ。其甚きに至りては、子音

をも變へざることを能はず。譬へば立つといふときは *stand* と書し、立ちといふときは *stand* と書す。是 *stand* は皆訛れり。されど立てばといふときは *stand* と書す。是れ猶々の正音なり。これらは語脈をみだることの甚きものにて、國に語典なくんば則ち可なり。荷語典あらば、かくまでに支離滅裂の文をなすべきにあらず。強てこれをなさむとするは、是れ我國人を亞弗利加内地の土民視したるなり。うの或は「フオ子チック」上の研究のために今の言を寫すものあるは固より此限にあらざるべきのみ。

此「トランススクリプトオン」より一步を進めたるものは、近比大に世に行はるる落語の筆記なり。百花園と云ひ、花かたみと云ふ、皆是なり。落語の筆記も亦音に依りて之を寫したるなれど、その羅馬字會の爲す所に殊なるは、單に音にのみ依らずして、寢假名などを正す處に在り。而れども美術なる言は、未だ必ずしも美術なる文ならず。圓朝が辯は善しと雖、これを筆に上ぼしたるものは庸劣なる小説家の文にも劣りたらむ。

落語筆記の類より一層高き趣味あるは、世間に所謂言文一致なり。言文一致體は假名を正し、或る一定のてにをはを用いて、今の言を綴りたる文なり。此體の雄ともいふべき美妙子の如きは、巧緻なる言文一致體の文を作りて、大に國文の進歩を圖られたり。

世には言文一致といふ名を聞きて、文は即言々は即文なりとやうに思ふ人もあるに似たれど、言文一致も亦た今の言を取りたりといふのみにて、其質は則ち儼然たる文なり。讀ませむための文なり。讀ませむための文なれば、一種の烹鍊の迹見えて、自ら平話と相殊する處はあなる。吉川女史が嘗て此體を攻撃して、家なる老婆の轍ち解せざりしことを擧げしは、現にさもあるべきことにて、

これを以て此體の病とすべきにはあらざるべきにや。ダンテの其雄篇大作を公にせむとするや、當時の「リングア、フォルガレ」にてこれを寫すことを欲せずといひしが、意を決してこれをなすは、後は、伊太利に一種の新文章を出すことを得たりき。

美妙子の流派は吾文學社會に與ふるに新しき言を文となす勇氣を以てしたり。日本新文章の先登をなしたり。是れより先にも逍遙草村二子を始として近體の文を善くしたる人なきにあらねど、其筆墨は太温雅ならむことを勉めたるゆゑ、美妙子が所謂豹變の手段を用ゆるに至らざりき。此手段には或は瑕瑾もありしならむ。而れども此ならでは、一時文海の驚瀾怒濤を捲起して天下詞客の懶眼を打破するに足らざりしなり。

美妙子は多く新語を取りしかど、其勉めて卑語を避けむとせし迹も亦歴々として指すべし。縦令醉沈香中玉帳の一語は世議を招きたりと雖、是れ語の卑きよりは寧事の褻なるなり。唯其作用言（働詞）の活に至りては、則ち散文に於いて今の京言を取り、韻文に於いて古のてにをはを守りたる如し。余等は是に於いてや少しく疑なきことを能はず。請ふらくは之を言ふことを許されよ。

美妙子が散文の新てにをはは、前後其趣を殊にしたり。夏木立の序にいはいはく。文章ははじめ下流に對する語法の方が以上のものより簡單ゆゑ、言文一致體の基礎となるだらうと思つたまゝ、此中の文のとほり残らずそれが地を占めて居ましたが、また此頃になつて考へて見れば、些し違つた注意も出て來ましたゆゑ、今は大抵同等に對する語法をして地を占めさせて居ますと。此前美妙體にて美妙子の外に録すべき著述を出し、は四迷子の浮雲などなるべし。此後美妙體を今も猶用ゐたるは美妙子の外に北邨子などを推すべきにや。

蓋だと云ひですと云ふ、文中人物のことはを叙する處にては、各其宜きに從ひて用ゐるべきものなることは明なり。彼才名一時に鳴りしバワリヤのガングホオフェルがアムメルガウの彫聖者にて *is Glück von die Kinder is d' Seligkeit von die Eltern. — Ein edles Feuer verschönte das alte fahnenreiohe Festzelt.* 一と書きし前半はことを土語のままにて出し、後半は語格を正して地の文となしたり。我道遙篁村の二家も、後れて出でられし露伴紅葉の二子も又南翠子も此法を用ゐるを常とせり。地とことばとの別なく新てにをばを用ゐて、ことばに於いては其宜きに從ひてだ、です等を轉換し、地に於いては專其一を用ゐたるは、上にもいへる美妙、四迷、北邨の諸子なり。之が類を獨逸の文學界に求めて見むに、彼獨逸のデッケンスたるフリッツ、ロイテルやこれに當るべからむ。其「オルレ、カメルレン」中に *What wils dat? rump ik. — Ik wils dat, wat du nich wilst!* seggt hei. といへる「ラウプ、イク」「ゼツグト、ハイ」は自叙體の地の文なるに、方俗に從ひて語格を正さず。唯其我言文一致家と相殊なる處を求むれば、彼は此方俗の言を以て方俗の言となし、我言文一致家はこれを以て新語格となす如きに在り。其新語格となしたる如き迹は、美妙子が學海之指鍼、國民之友等に出し、日本俗語文法論の成りし所以を推考し、又此派の諸家が序記論文いづれを問はず、此體を用ゐらるゝに就いても見るべからむ。

余等は獨り新語の文に入るを喜ぶのみならず、又方言鄙語の時に詩に入るを嫌はざるものなり。假に譬を漢詩に取らむに、杜甫が峽口驚猿聞一個と云ひ、臨岐意頗切、對酒不能喫と云へるなど、皆一種の眞率人を動かす處あるにあらずや。而れども彼新てにをばに至りては、則ち縦合散文にのみ用ゐるといふも、余等未だ遽にこれを以て常格とすべきを信ずること能はず。

今のバワリヤにては *ich schlafe* と *Schlafe* を *ich thue schlafen* と *Schlafen* と、此新作用は文に入らず。我だ、です等はこれに似たるものにはあらずや。

今の言文一致家は古のてにをばは復用おじといふにしもあらず。其韻文には猶之を用ゐむとす。察するに是れ新語格の未だ必ずしも雅馴ならざるためならむか。夫れ韻文は之を歌ひ之を誦せむため作るものにて、猶耳に待つことあり。散文は讀ませむためにて、唯目と心とに待つことあるのみ。散文の極端の意味に於ては毫も音調の用なき處まで、美妙子は敏捷にも看破せられたるにあらずや。然らば則ち耳に待つことある韻文にてすら新語格を用ゐざらむとせば、目と心とのみ待つことある散文、讀ませむため散文には、新語格を起してこれを用ゐる必要はなかるべきか。

余等はフリッツ、ロイテルの我邦に起りしことの日本文學界に利あるを承認し、其所謂言文一致體の以て一體に具ふべきを承認し、又彼日本俗語文法論の如きものゝ大に學者に益あるを承認す。而れども余等は我ロイテルが縦横馳騁の才、既に力を新てにをばはなき韻文に用ゐむとするを見て、其何故に新てにをばはなき散文をも作らざるかを怪む。

夫れ今の國文改良をねもふ人々は、皆言を文となさむとするものなり。唯其守らむとするは舊來の語格のみ。小中村清矩氏のいはく。今の通行文は元龜天正亂離の世を経て俚俗に流れたる徳川時代の文の一變したるものにて、俗を去りて雅に近き方にはあれど、其雅なるは漢文體の移れるものにして、勉めて固有の邦語を棄つるを以て、文體流暢ならず、天然の語格（てにをばは活用の類）に違へる所多し。假令漢字交りの通行文たりとも、猶邦語を以て文をなすものなれば、語格の違ひたるは文と云ひ難し。現今宇内の萬國各其國文ありて、其國々の盛衰も或は是によりて知らると云へば、通

行文も成るべくは専ら邦語を用ひて綴りたきものなりと。物集高見氏は又一步を進めて説いて曰く。あながち雪月花がわるし、風雅なるがわるしといふにはあらねど、さる題によりて作りならふときは、自然に古人の作例を尋ね、或は古人の句調を學ぶやうになりて、自身が眞實の考を書くこと能はず、遂には考より先に語を尋ね、語を得てより考を始むといふやうに順序の轉倒する癖を引起すことあるなり。此事は余既にさる事に出會て覺あることなり。よりて余は其癖をためむがために、一年あまり中古體、其他何文を作るにも、悉く言文一致にして、古文古意の入來るを避け、更に其言文一致の文を中古體などに書きなほして用ひしことなりと。有賀長雄氏の日本國文論といふものも亦これに近かりき。此數家の美妙子等の派と殊なる處は、主に語格にのみ存ず。而して美妙子が舊來の語格を廢めむとするものにあらざるは、其韻文に於いて之を守るを見ても明なり。美妙子にして一たび散文を作るときも、其文の部類によりて、猶舊來の語格を用ひるべきことを承認せられれば、今の新文學の細分派は一時に一條の江流に歸し去らむ。

落合直文氏は今の文家中にて、彼言文一致家と相距ること最遠きものなり。其言に云く。私も言語と文章とを離るべからずといふ論者であります。さりながらこれには餘程注意せねばならぬと思ひ居ります。即ち言語を今少し上品に進め、文章を少し引下げやうと云ふことであります。今日世間に行はるゝ所謂言文一致の文章を見るに、殊更に野鄙陋劣なる言語を列擧するが如し。是の如きは私の取らざるのみならず、大に排撃せんとする所であります。余等は竊に思ふに、落合氏が引下げんとする文章と、美妙子が語格の舊を守らんをりの文章とは、相距ること今日の如く甚からざるべし。或は其間に於て某語を一家の雅なりとして一家の俗なりとすること、一家は猶文に音響あら

むことを求め、一家は極端の意見を操りて必ずしもこれを求めざる如きことなどはあるべけれど、之を今の懸隔に比すれば、豈翅に天涯と咫尺とのみならずや。嗚呼、余等は二家の心事を知るものなり。二家は均しく是れ我新國文の興らむを望めるにあらずや。美妙子にして舊來の語格を散文にも應用せむとせば、此兩極端の間に立ちたる幾多の家數は、皆力を合せて斯文の改良更新に従事することを得べし。是れ余等が切望に耐へざる所なり。(明治二十三年四月)

學堂居士の文話(文苑)

學堂居士は詩想の價値と題して説いていはく。詩想は人類のあらむ限、減ぶるときなかるべし。詩想に富みて、目に一丁字なきものあり。世の詩形を知りて、詩想なきものには優れり。詩想をあらはずには散文こそ善けれ。韻語は想をあらはずに當りて、過不及あらじむと。是れ想を偏重したるなり。又散文を偏重したるなり。

詩形を知りて詩想なきは、げに慙むべき片端なるべし。これを詩人といはむは固より不可なり。詩想ありて詩形を知らざる人は、れのが感情の小天地ゆたかなるために、世にある甲斐をも知り得べし。然はあれど詩形を得ざる詩想は決して美術を倣さず。苟くも文學を以て美術と見たる上は、批評の域内には、詩形を得ざる詩想を着くべき處なからむ。かるが故に詩想と詩形とは併存せざるべからず。

韻語の形は散文の形より繁く又煩はし。然れども韻語の形を守りて、詩想に過不及あらじめざるこそ、韻語を作すもの、技倆ならめ。古今の大詩人に此技倆あるもの少からず。かるが故に散文と韻語とは能く兩立す。

文苑記者は死文法と題して、學堂居士の言を録していはく。文は言に代ふべきものなり。速記符は古より用ゐられたる字に勝り、いろはは「アルファベット」に對して遜色なく、漢字に對して優處あり。是れ皆聲を寫して言に代ふるためなり。米國にて「*o*」の複母韻を「*o*」の單母韻に更むる説寢行はれ、普國にてもこれに似たる流風頗盛なり。我國人は米普などの民に倣ひて文法を改良せよ。假名遣は舊に依ることを須わす。盟のたらひは聲に従ひてたらいと書すべしと。是れ「*f* オ子チツク」上に聲を寫す法と正く語を寫す法 *Orthographie* と文法とを混淆したる説なり。

たらひは古歌に盟して足をばいかゞすゞぐべきと云へる如く、てあらひの約なり、あらひをあらいと書かむこと、音學上には難なかるべし。これより推すときは、波行四段の活は元來 *araha, arahi, arahu, arabe* にして、終始「*o*」の子音を離れざるべきに「一朝 *arawa, arai, arau, arao* となりて、忽にして無子音、忽にして「*o*」の音に變ぜむ。かくては國語の固有の幹は、悉くうち破られ、國文は蠻人などの言葉とおなじやうに看做さるべし。亞米利加、普魯西の學者さはなりといへども、誰か此の如き説を唱へむ。學堂居士はあうらくは聲を寫す法の應用を錯らむとするものならむ。

正く語を寫す法は、米普の儒の争ひて講ずるところなり。「*o*」を約して「*o*」となすことあり。「*o*」を約して「*o*」となし、母音後の「*o*」を棄つることあり。要するに語を寫すは、人に解せしめむためなれば、經驗をもととして法を立て、つとめて錯解なからしめむとするのみ。されば寫法のために語格を廢せず。*wohl* の *h* をば削ることあれども「*ich rühe, du ruhst, er ruht* と轉化すべき語を、みだりに *rue, rust, rut* などとは書かず。若たらひをたらいと書かば、米普の學者にして、正く語を寫す法を講ずるもの争でかこれを笑はざらむ。學堂居士はわうらくは正く語を寫す法の應用を錯らむとするもの

ならむ。

學堂居士は舊文法を改めむと欲す。然れどもこれを改むる手段にいたりては、抑また窮せりと謂ふべし。聲を寫す法も、正く語を寫す法も固より文法を改むべき力なし。畢竟するにたらひはたらひなり。假名遣は唯舊に依るべし。

因に云ふ。獨逸にアアベルといふ人あり。石油を検する器を創作せしによりて名を知らる。米に遊びて自ら *Abel* と署す。米人讀んでエベルとなす。乃ち *Abel* と書す。又讀んでイイベルとなす。乃ち *Abel* と書す。又讀んでアイベルとなす。是れ國殊なる故に音殊なるより起りたる事なれど、またアアベルが聲を寫す法を濫用したるためならずや。(明治二十四年九月)

木堂學人が文のはなし(文苑)

木堂學人は今の少年にして、文を學ぶものをして、肆然筆を下し、勝手自儘に、書かむと欲するところを書き、言はむと欲するところを言はしめむとす。漢學先生の排斥も、和學先生の非難もその愛へざるところなり。故にかにといふに、彼等の排斥非難は、文法上の排斥非難に過ぎざればなり。然らば學人は文を作るに文法を須たざらむとするもの歟。あらず、彼は新文法の成らむを待つものなり。其新文法は那處よりか來べき。學人のいはく。和漢洋の文を打して一九となしたる裡より生じ來らむと。

以上を木堂學人が論文の脈絡とす。この脈絡を行るには、多少の皮肉あり。左に一々數へて見む。大掖の芙蓉、未央の柳とは源氏物語に見たり。是れ漢語の國文に入りたるなり。榮花物語に兒啼を形容して、呱呱としたるもれなし。又阿伽椰といふ語は徒然草に出でたり。是は梵語の國文に入

りたるなり。木堂學人はこれを擧げて、何事をか證せむとする。世界萬國の文、いづれか語を域外に取ることをなからむ。國語にて達すべからざる目的を達せむために、域外の語を借來るを可とするは、近時獨逸などにかしましかりし外國語問題の骨髓なり。我國文を作るとき、支那語、印度語、歐羅巴諸邦の語を借はむときも、此用心だにあらば、何の宜からざることかあらむ。漢學先生これを責めず、和學先生これを責めず、洋學先生はたこれを責めざるべし。されどこは唯一つ、離れたる語の上の事のみ。文法は語を連ねて文となす時の事なれば、これに殊なり。域外の語、國文に入ることあればとて、新文法は成らざるべし。

アルプスの山、ナイヤガラの水などいふ語を國文中に用むこと仔細あらじと、木堂學人は允じつ。固有名といふもの、外國より來ても其骨を換へざるは、漢學先生も認むるところなるべく、和學先生も認むるところなるべし。豈獨我玉麟子のみ、あまざかるマニラの島と歌ひいでむや。域外の固有名、國文に入ることあればとて、新文法は成らざるべし。

文に奈良の大佛の如く豪放なるものあり。また根付細工の彫もの、如く纖巧なるものあり。豪語を善くするものと、織語を善くするものとは、其業を分つべしといふ。是れ木堂學人が文品論なり。鉅篇にも小品にも、豪語にも織辭にも、文法の別はあらむやうなし。文壇の分業中よりも、新文法は生れざるべし。

文には家々其妙を殊にすることあり。李王自ら李王の妙あり。袁徐れのづから袁徐の妙あり。必ずしも唐王の輩にのみ傲はずして可なりといふ。是れ學人が手法論なり。求闕齋集に文を論じていはく。古之文初無所謂法也。易書詩儀禮春秋諸經。其體勢聲色。曾無一字相襲。即周秦諸子。亦各自

成體。持此衡彼。豈然若金玉與卉木之不同類。是烏有所謂法者。亦是れ手法の別を説けるのみ。易を持して書に衡ぶるときは、用字の顛倒ありとやうに古文法の上より説きしにあらざり。豈假名遣、手爾遠彼の事とひとしなみに語るべけむや。手法古今の別もれそらくは新文法を出すに足らじ。

昔日路巧處士といふものありて、新文法の出でむを待ちき。然れども其望はいたつらなりき。我は木堂學人が望のねなじ運命に遭はむことを憐む。

今の少年にして文を學ぶものよ。外國語を文中に挿まむとせば、必ず先づ國語にてねなじ目的を達すべしやあらずやと問ひ、うの達すべからざるを認めて後にせよ。固有名その儘に使はるべきは我言を待たず。文品の浩織、ねのくねのれが長じたるを撰ぶはよし。他人の蹤跡をたづねずして、みづから一家の手法を出すもよし。然れどもゆめ新文法をなさむなどれもふこと勿れ。肆然筆を下すこと勿れ。勝手自儘に書かむと欲するところを書き、言はむと欲するところを言ふこと勿れ。洋學先生の教、固より聞くべし。漢學先生の教も聞かざるべからず。唯我日本の國文の格式に至りては、宜く和學先生の前に磕頭して、其教を奉ずべし。(明治二十四年九月)

ねなじ人の文の死活(文苑)

和學先生の文より冠詞と掛け詞とを削去らば、何も残らざるべし。漢學先生の文は千篇一律老娼の艶書の如く、馬鹿大名の茶席に居る如し。皆是れ道載せざる文にして、徒に空車を曳きまはるが如し。皆是れ死文なり。活人は死法に束縛せられず。活人の文を作るや、出たらめを以て秘訣とす。古法外に自在に馳騁すべき廣原平野を求む。是を木堂學人が文の死活の論とす。

冠詞と兩意の詞とを除去りて後、何も残らざる文なきにあらざり。千篇一律、老娼の艶書の如く、馬

鹿大名の茶席に居る如き文なきにあらず。是れ和學先生中の凡庸人の手に成り、漢學先生中の固陋者の筆より出でたるのみ。和學と漢學との然らしめしにあらず。我は木堂學人が洋學先生の作りたる杜撰の文をもちらへ擧げざりしを怪む。

國文には國文の法あり。假名遣手爾遠波即是なり。假名遣手爾遠波の中には、舊りて廢たれたるものありといへども、其大體に至りては金甌の缺ぐることなきが如し。國文は日本國人の文なり。一文派の私すべき文にあらず、反對者の斥け得べき文にあらず。而して其興廢は假名遣手爾遠波の存亡に關す。韻法は韻語の約束にして、韻語は韻法のために窘めらるることなく、文法は散文の繩墨にして、散文は文法のために迫らるることなし。所謂自在に馳騁すべき廣原平野は、唯是れ國文法中に在いて求むべきものなり。

法を守りて苟もせざる文の中、其のづから死活の別あり。法を守らざる文は是れ文ならず。(明治二十四年九月)

朗讀法よつきての争

關根饗庭の二氏が東京専門學校にて和文朗讀法の科を設けむとするや、端なくも讀賣新聞の紙上に一場の筆戦を開きたり。科を設けることを可なりとするは、東京専門學校文學科一學生と名乗れる人にて、これを不可なりとするは、日就社員の一人なりと聞けたる咄々生なり。

先づ朗讀法といふものゝ本質によつては、一學生といふ人別に説明せず。唯専門學校の朗讀法はいかなる方法によりて行ふか、咄々生夢にも知るまじといひしのみ。二氏の争を惹起し讀賣新聞の

雜報にも、歴史上の例を引ききたるのみにて、(これは饗庭氏國民之友に記されたるものに同じ)朗讀法とはいかなるものかといふことによつては、我國にてはいまだ讀方とか朗讀法とかいふ一定の規則立ちたるものあることを聞かず、(今これを東京専門學校の一科としたる)其結果奈何によりては明治の文學界に一の新模様を出すに至るべしとありしのみ。咄々生とやらむも亦朗讀法の本質に説及ぼさずして、うの一變して芝居道の本讀となり、更に一變せば彼の猥の猥、卑の卑たる聲色遣となりをはるべきことをのみいひぬ。

うもく人の言語に其のづから美醜ありて、うの醜なるものを美なるものとせずには、其道なくて協はぬことなり。試にギョオテが論を基としてこれを説かむに、醜なる言語を美にせむとする第一歩は僻地の訛を棄つることなり。つぎは發音を正うすることなり。つぎは程よく文の抑揚を顯はして情に制せられざるやうに讀むことなり。つぎは其のれを書中の人物の地位に配きて、文章の上に露はれたる情をれもふまゝに發動せしめて讀むことなり。此階級を経て修行の功をつみし人は、平常の言語をも勞せずして美はしくすることを得べし。

わがミュンヘンにありし時、一日劇を見しに、オレストといへる古希臘の一少年に扮せし俳優エレクトラといふ女子の名を呼ぶに、パワリヤ訛を以てせし聞苦しさに、一夕の興を損せしことあり。古希臘の慷慨の士が忽ちパワリヤの匹夫になりしをかしき、れもひ出すだにきようさめたるをなり。此一例によりても、僻地の訛を去ること *Befreiung vom Provincialismus* の止むべからざるを知るに足らむ。

世人はおほむね物語するとき、一二の音を吞込みてみづから曉らざるものなり。母音を吞込む例は、

言葉の終につきたる文字を西洋の如く讀みて、²⁵の如く讀まざる如し。此弊は殆ん人々皆ありて、遂に其弊たるを忘れたるものなり。われは唯落合直文氏の此弊なくして讀み玉ふを知るのみ。又子音を吞込む例は西國の人のなりをないといふなど、猶いと多かるべし。若し言語の間にて、此弊を一洗し、さて一語ごとに容易く且明に聽者に解せらるるやうになすことを得ば、是れ發音 Pronunciation を正したりといふことを得べきものならむ。

かの最後の二法にいたりては、其區別もに量別もありて、²⁶の種別は纔た量別より生じたりといふことを得べきものなり。ねほよりのを讀むに、音の抑揚つゆばかりもなきを、純粹なる素讀といふべし。されど抑揚あらせしとれもひてもおのづから多少の抑揚を生ずるは免れがたきことにて、饗庭氏の所謂どうぶしやぶしのやうなるもの生ずるは自然の勢なるべし。既に音の抑揚を以て止みがたきものとなすときは、其必要物に正不正ありて、²⁷の不正なるどうぶしやぶしを棄て、一種の正しき抑揚を研究せざるべからず。さて音の抑揚の中にも、一語の間の抑揚は、已に發音に於て正すべきものなり。例へばくもといふ語にて、くを揚げても抑ふるときは蜘蛛となり、くを抑へてもを揚ぐるときは雲となる如し。はしの箸と端(又橋)とに於けるのりの海苔と糊とに於ける(法の訓ものを揚ぐるかたなり)なども亦同じ。數語の間の抑揚に至りては、先づ尋常の素讀にての抑揚を知らざるべからず。上にもいへる如く純粹なる素讀、即ち毫も音の抑揚なき素讀は勢做し得べきものならねば、尋常素讀といふは、彼一語の發音上の抑揚を得て、容易く且明に聽者をして語々の意を解せしめ、ついで一句の中にてれもなる語を揚げ、一章の中にてれもなる句を揚げなどするなり。この尋常素讀の抑揚は、猶靜にして冷なり。この尋常素讀をして靜より動に入り、冷より熱

に入らしむるものは情なり。さてわが讀める文を人のことと思做して、人の情を汲み取りていふやうなる心となるときは其情尙弱きゆゑに、讀む人情のために制せらるる憂なし。此の如きよみ方は、西洋文法家の語にていはゞ、いつも三人稱の事をいふ心にて做し得べし、即ち我事にもあらず汝の事にもあらず彼の事をいふ心にて做し得べし。これを「レチタチオン」Recitation といふ。若し此情強くなるときは、遂に言語を左右するに至る。書を讀む人、我性を忘れて、身を書中の人物の地位に置き、其情の動くに任せて言語を出すこと、俳優が場中のほりて技を演ずるをりの如きは即是なり。これを「デクラマチオン」Deklamation といふ。「レチタチオン」の三人稱は「デクラマチオン」にて一人稱となるなり彼は我となるなり。要するに「レチタチオン」は進みて「デクラマチオン」になるべきものなれば、われは其區別をれもに量別に在りといひしなり。

東京専門學校にて一科に充てたる朗讀法は、其本質上より見て、果していつれの讀方に屬すべきものなるか、これを世人の夢にだに知らざるもののみいひし一學生の言は、いまだ人の詰難に答ふるに足らざるべく、僅に歴史上の一例を引きて、其未曾有を稱し、後には文學界の新模様ともなりなむといひし讀賣記者の言は、或は咄々生の疑惑を惹き起すに適當したりしならむ。われは明に知る、東京専門學校にて行ふ朗讀法の「レチタチオン」なるべきことを。うを奈何といふに、われは嘗て彼學校の會筵につらなりしとき、關根饗庭の二氏より口づから朗讀法の事を聞きて、われもこれを賛成せむといひし程なればなり。

咄々生は専門學校の朗讀法の一變して芝居道の本讀とならむことを恐れ、又その再變して聲色遣とならむことを憂ふといへり。朗讀法は「レチタチオン」なり。本讀も亦「レチタチオン」なり。朗讀法

はとりもなほさず本讀なれば、朗讀法の本讀となるには、一變するまでもなし。咄々生は芝居道の本讀といふものを一種卑むべきものやうにいひしが、こはまた芝居道の士君子の行ふことを得べくなりたる盛時に逢ひしことなき邦人の常情を脱せざるためのみ。朗讀法其物は美はしく讀む法にて、他の行住坐臥の美はしく立派にすべきと等しく、固より開化の結果なれば縦合劇の脚本につきこれになしたりとも、何の不可なることあらむ。劇の程度、俳優となる人物の程度、狂言作者となる人物の程度、脚本の體裁の程度相殊なるにつれて、或は卑むべく、或は尊むべし。われは専門學校の朗讀法の即是れ本讀なることを憂へざるなり。わが嘗て日本演藝協會にて、ギョオテ、シルレル、イムメルマンなどの本讀の事を説きてこれを我詩人に勧めしことありしは、蓋これがためなり。

咄々生は又専門學校の朗讀法再變せば、こわ色つかひとならむと危ぶみぬ。朗讀法の本讀となるに一變することを要せざる所以は已にいひしが、うの一變したるものは、蓋「デクラマチオン」なるべし。こわ色つかひは實に「デクラマチオン」の摸倣なり。咄々生はこわ色遣を猥の猥、卑の卑と罵りたれど、うの猥の猥、卑の卑なる道理を尋ぬるときは、朗讀法にも關せず、本讀にも關せず、また「デクラマチオン」にも關せず。うの猥の猥、卑の卑なる道理は、摸倣の性質より生ず。今一例を擧げて示さむに、依田學海氏若くは河竹默阿彌氏脚本を作りて、公衆に對してこれを讀まるることあらば、是れ「レチタチオン」ならむ、朗讀ならむ、本讀ならむ。是れ猥にもあらざ、卑にもあらぬことなり。此脚本興行せられて、市川團十郎若くは尾上菊五郎などの俳優其中の人物に扮し、せりふを陳ぶることあらば、是れ「デクラマチオン」ならん。是れは猥にもあらざ、卑にもあらぬこと

なり。こゝにこわ色遣といふものあり。うの業とするところは、某に扮したる團十郎、某に扮したる菊五郎の口吻をまねびて、僅に人の喝采を博せむとす。世の落語家といふもの自戯 *Falshironie* の心にて、聲色遣の卑さを嘲り、わが飯をくらひて、人の聲を出すといへるも亦是意ならむ。この摸倣の卑さは、決して朗讀法と「デクラマチオン」の卑かるべき證に充つべからず。摸倣者のことを憂へて、其源を塞がむとするときは、卑吝なる守錢奴のためにすべての貨殖家を罵り、偽君子のために君子を笑ふに至るべきなり。是に於いてやかの一學生が、嗚呼何物か一變せば邪道に陥らざらむ、堯舜も一變せば桀紂となり、自由も一變せば放誕となり、善人も一變せば惡漢となる、咄々生も一變せば大愚人とならむといひし漠然たる言葉も、亦多少の意味を含みたるを知るに足らむ。これを朗讀法といふものゝ本質の論とす。

われはこれより進みて朗讀法の材料を辨明すべし。材料につきての一學生の説は泰西の朗讀法は主として戯曲若くは戯曲的文章を臺本とすといふに過ぎまり讀賣記者も亦古人が源氏物語の一段を朗讀せしことゝ専門學校にて饗庭氏の作りし院本太田道灌を讀むべしといふことを録せしのみ。咄々生は泰西の朗讀は唯單に戯曲のみを臺本となすものにあらず、主として「オレエション」若くは勇壯なる戯曲を取るといひ、院本の中にも其上乗となしがたき太田道灌を取れることの非なる所以を示さむとしぬ。蓋彼は既に「オレエション」と勇壯なる戯曲とを朗讀材料の主なるものとせしうちにも、殊に「オレエション」を尊めりと見て、かの有名なるバトリック、ヘンリーとか、ダニエル、エプスタアとか、デモステネスとか、チチエロとかいへる烈士雄辯家の慷慨悲憤なる演説等を朗讀して、其巧妙を得たるものに至りては、能く惰夫をも立たしめ、猛士をも泣かしむる力ある由と、頗これ

を慕ふ如き口吻ありき。彼は又ついで朗讀材料に適したるものを示さむとて、日本外史にても可なり、盛衰記にても可なり、史記にても可なり、太平記にても可なりといひ、源氏物語、近松が淨瑠璃などは、縦令優なりといへども、艶なりといへども、朗讀の材料に適せずと定めぬ。

われ思ふに尋常の素讀までは、ねほよ文字に書きたるもの悉く材料とすべけれど、「レチタチオン」即ち専門學校の所謂朗讀法に至りては、情に關するものにあらずば不可なるべし。情に二つありて、一は實感一は審美的感なり。實感の區域に屬したる朗讀材料はれもに咄々生の尊むところにて、古烈士の談、昔の雄辯家の演説など皆是なり。この材料の朗讀は能辯法 *Rhetoric* の管するところなれば、これをおの能辯學會などに委ねて可なり。審美的感の區域に屬したる朗讀材料は専門學校の取るところにて、叙情詩、叙事詩、小説(源氏物語)、戯曲(近松が淨瑠璃)など皆是なり。

かの盛衰記と太平記とにいたりては、詩の領分、純粹なる文學の領分をば離れたれど、さればとて純粹なる歴史にもあらねば、其文の審美的道にかなひしところより、これを審美的感の區域に屬したる朗讀材料中に算ふることを得べし。見よ、盛衰記を讀みあぐる感は、決してデモステテヌの「フィリッツイカイカ」を誦し、又チチエロの法廷演説を讀む感に同からざることを。

咄々生が史記と日本外史とを朗讀せしめむとし、又玉乃世履が物語なりとて收齋齋が范文正公の岳陽樓記を朗讀するや、洞庭一湖の勝、眼前に在る如しといふことを例に引きしは、國文の何物たるかを知らざるより生ぜし感なり。史記と岳陽樓記とは支那人の書いたる支那文なり。日本外史は日本人の書いたる支那文なり。而して支那文の朗讀は、これを棒讀に上より下へよみ下し、其音をも支那音にしてはじめて其法を得たりとすべし。縦令支那音には時代によりて變遷ありて、西漢以

上の清淨なる音は、遂に得がたかるべきを以て、古文のまことの讀方は分らずといへども、兎も角も棒讀にだにせば、文法語格明ならむ。見よ、今人の洋文を讀むや、決して一字々々にこれを邦語に譯して、顛倒して讀むが如きことをなきを。

されば支那文の今の讀方は、まことはこれを讀むにあらず、語を逐ひてこれを譯し、意味を辿りつゝ、これを聲に發するのみ。わが西洋にありしとき、此讀方のことを洋人に知らせむとして、坐間これを一二の學者に語りしに、皆未曾有の奇談なりと稱へき。此未曾有の法にて發する聲は、饗庭氏がどうぞやぶしの誦讀からず、一種の自然に背きたる調をなして、これを國語なりとはいひがたし。要するに邦人の支那文を讀む法は、陰の仕事にて、堂々とおもて立ちてなすべきことにあらず。此讀みかたは朗讀法となすべしにあらざり。咄々生が史記日本外史等を朗讀材料とせよといひしとき、一學生は解していはく。日本外史記等はわが所謂朗讀法を以て朗讀し得らるべきものにあらず。これを要するに咄々生は素讀法とわが所謂朗讀法との區別を知らず。此解善しと雖、猶二の缺點あり。一は咄々生の示したる支那文の朗讀材料とすべからざることをのみいひて、其理由を示さざるどころ、一は支那文の朗讀はなすに堪へぬと、その素讀はなすべしといひてその素讀も亦たもて立ちてなすべきものにあらずる理に説及ぼさざりしところなり。

畢竟するに朗讀法は、演説をも材料とすべく、詩をも材料とすべし。我専門學校の彼を捨て、此を取りし所以は、大體よりいはず、羈絆的美術の一なる演説を描いて、自由的美術の一なる詩(戯曲)を取らむといふ審美學上の見識より出でたるならむ。蓋し演説の中にてはいかに巧なるところも、詩の平夷なるところに劣りたるが多し。譬へばデモステテヌが王冠のための演説の一段、フィリッヅ

王がエレテヤを取りたりし報のあらたに至りしとき、これのれが獨起ちて雄辯を逞うせしことを反復するところ、日の暮がたなりきといふ句より以下、聲あり色あり、百回讀みても厭はしからぬ辯談上の模範なれども、これを名ある一作者の叙事詩を讀む感に比するときは、到るところ遜色なきこと能はざるべし。専門學校の生徒一たび詩の朗讀法に熟したらば、これを他の美外の目的ある談論に應用することを得べし。豈又特に古人の演説上に應用したる詩趣を借り來りて、朗讀材料となす必要あらむや。

専門學校が詩中に就いて特に戯曲を取りしは、抑又故あることならむ。われ先に朗讀法即ち「レクタチオン」の「デクラマチオン」に於ける關係を説きて、その量別を明にしたりき。然るに「デクラマチオン」の材料となるべきものは、唯戯曲あるのみ。戯曲は文法家の所謂三人稱を交へずして、文をなせる唯一の詩體にして、「デクラマチオン」の法たるや、其本質として三人稱を交ふべきものにあらざればなり。故に彼演説叙事詩小説等は、皆「レクタチオン」までには適すれども、「デクラマチオン」には適せざるものなり、感情的に最極點までは亢進し得ざるものなり。専門學校は其生徒に教ふるに、言語の抑揚の間に情を顯はすことを以てするものなれば、其情を顯はす法を極端まで發揮するに適したる戯曲を取來りて、其練習の材料とせしは、固より怪むことを要せず。その饗庭氏の太田道灌を取りしは、朗讀法の師たる人が平生尤熟したる曲なればさもあるべき事なり。これを朗讀材料の辨とす。

咄々生と一學生とは、この他猶社會と文學と孰か因孰か果なるといふこと、文學の高尙なるものか、卑陋なるものかといふことなどを論じて、咄々生は遂に開化を以て腐敗となし、(其言に云く社會腐

つて文學者といふ蟲生ずと)美術を以て本質上より淫靡なることを得べきものとなし、(云く淫靡固より美術たるを妨げざるなり)文學を以て衆愚のために存在するものとなしたれども、(云く文學の手段は衆愚の歡心を買ふに在りと)余は今一々これを批評するに遠あらず、殊に咄々生が詭辯に至りては、これを反駁せむも大人氣なかるべしとれもへば、これにて筆を擱くこととなしつ。(明治二十四年三月)

逍遙子の朗讀説(國民之友)

逍遙子が朗讀の説は、讀法を起さむとする趣意と題して、國民之友に出でたり。逍遙子は讀法を大別して三種とす。機械的讀法と文法的讀法と論理的讀法と是なり。

機械的讀法又素讀又死讀法 mechanical reading とは唯文字の並びつながらりたる順序を追ひて、すらくと讀みながすものなり。うの讀む聲には情なく、温なく、活氣なし。俊基の吾妻下など讀む人の唱歌的句拍子も之に屬す。

文法的讀法又正讀法 grammatical reading とは發音法に合ひ、句讀よろしきを得、讀聲の緩急抑揚よく文意と調和して正當なるが故に名づけつ。この法には時に文義を斟酌してつけたる多少の句拍子あり。關根氏が唱ふるところ是なり。朗讀法の本領も亦此に在り。

論理的讀法又美讀法又感銘的讀法又批評的讀法又説明的讀法又解釋的讀法又活讀法又性情的讀法又人間研究的讀法 logical reading とは、彼文義を明にし、力あらしめ、面白くすてふ「エロキユウシヨン」より脱化して、更に一步を進め、取るころの材自作の文ならば、自家の感情を活動せしめ、若又他人の文ならば、其原作者の本意をして活動せしめ、若又院本中なる人物の白ならば、其人物

の性情をして朗讀の間に躍如たらしめむと欲するものなり。この法を行はむには先づ文の深意を穿鑿せざるべからず。(批評)あらず、寧其文の作者、若くは其曲の人物の性情を看破せざるべからず。(解釋)是を此法の精神的部門とす。其機械的部門に關する細則は以心傳心にして、自得自證せざるべからざるものあり。饗庭氏(讀かた)と逍遙子とが唱ふるところ即是なり。この法は朗讀法の本領にあらずして、百般の讀法の本領なり。

この法を唱ふるものは、必ずしも朗讀の際に此法を用ゐるべしとはいはず、默讀の際には必ず用ゐざるべからずといふなり。この法を奉ずるものは、唯目のみを以てする機械的讀法を卑み、唯智のみを專にする文法的讀法を排す。

按ずるに逍遙子が此説の主眼は、應に論理的讀法の精神的部門にあるべし。文の深意を穿鑿し作文者若くは曲中人物の情を看破するを此部門の旨とす。こはわが嘗て批評の一面として言ひし如く歸納手段を以て文を觀察し、文を探究する境界なり。われは今逍遙子が朗讀論の主眼を表面にして、さて細に其意を論ぜむとするに先だちて、我用語例を明にせむとす。蓋し讀と讀とはねなじからず。文を見て義を會するをも讀書といひ、語を逐ひて聲に發するをも讀書といふ。逍遙子が論理的讀法の精神的部門は會に外ならじ。會とは解釋の謂にして、批評の歸納面はすなはちこゝに存す。

わが所謂讀は語を逐ひて聲に發するなり。うの言標たる文を以て、再び言とならしむるのみなる最低級は、いまだ藝術の境に入らざるものなり。之を素讀(逍遙子が機械的讀法)といふ。縦令わがまゝなる拍子(節奏)やうのものありとも、うも不規則なるため、正き意味にて拍子とはいひ難し。蓋拍子は耳の藝術の初歩にて、音樂なきときは、能く之に代るものなり。拍子既に生ずるときは、之を

言語に附して節(アムチクラチオン)(あや、文章)ある藝術となる。其音の高低にして行調(ケライテン)ならば美音讀(euphonisches Lesen)となるべし。有節住(フエスチヒト)調の美術はもはや讀にあらず、性情を表(エキスプレッシオン)白する力なき唱歌なるべし。

さはいへ美音讀こゝ猶情を表白せずして行はれもせめ、唱歌の表情力なきものは、到底一種の抽象物たるを免れざらむ。(ハルトマン審美學下巻、五九〇面)美音讀をなして、性情を表白し、宗教的(御文章といふものを讀む如し)若くは世俗的(政談中にもものを讀みあぐる如し)の加味をなさず、純粹なる美術の境に入るものは、シユライエルマイエルが嘗て表情言語と名づけたる部に屬すべし。

これを表情讀(mimisches Lesen)といふ。我はギョオテに従ひて、表情讀を二つに分たむ。わが讀める文を、人のことゝ思倣して、人の情を汲取りていふやうなる心となるときは、其の情尙弱きゆゑに、讀む人情のために制せらるゝ憂なし。此の如きよみ方は、西洋文法家の語にていはゞ、いつも三人稱の事をいふ心にて倣し得べし。之を「レクタチオン」といふ。(ハルトマンが「レクタチオン」は美音讀を再生(レプログチオン)の側より見て、著作者の「テクチオン」に對したるなればこれに殊なり。又逍遙子が「レクタチオン」は誦誦の義ありて、これも同じからず。われはギョオテに従ふ。)情の愈強きや、遂に言語を左右するに至る。書を讀む人、我性を忘れて、身を書中の人物の地位に置き、其情の動くに任せて言語を出すこと、俳優が場を上りて技を演ずるをりの如きは即是なり。これをギョオテが意にて「デクラマチオン」(Deklamation)といふ。「レクタチオン」の三人稱はこゝにて一人稱となるなり、彼は我となるなり。(ハルトマンは美音讀を美術の側より見て「デクラマチオン」と名づけつ)逍遙子が論理的讀法の精神的部門は、其朗讀説の奥義なれども、われは既にうの會にして讀(わが所謂讀)にあらざることをいひき。讀を講ずるものは、かたはら會に及びても可なり。然れども讀

は會に離れて獨立すべく、會も亦讀に離れて獨立すべきものなることを忘るべからず。獨逸の女優マリア、スチユアアトをつとめ大なる喝采を博せしとき、その技に服して崇拜も嘗ならざる紳士、宴席にて口づから賞めそやしゝすゑ、わが尤驚歎せしは苑圃の段にて、れん身がエリサベスを罵りて、羊に似たる心の寛さは去れ、堪忍は空に向ひて飛べ、久しく抑へし憤は、いましめの縄引きちぎりて、洞窟より出でよ、怒れる「バジリスク」(毒龍)に人を殺すべき眼を授けし汝よ、汝は我舌の上に毒の矢をわけと叫び玉ひしときなりきといひしに、女優罪のなげなる藍いろの目睨きて、紳士の面を打仰ぎ、聲を潛めて「バジリスク」とは何の事にかと問ひぬ。善く讀む人の必ずしも會せざること此一例にて知らるべし。

シルレルは情感きはめて強かりしが、自作の戯曲を讀むときは、其聲の鼻に洩るゝために、人を動かすこと意の如くならざりき。善く會したる人必ずしも善く讀まざることこれにて著し。

逍遙子みづから云く。論理的讀法は朗讀法の本領にあらずと。蓋法の精神的部門の會にして讀にあらざるためのみ。讀を講じて會に及ばむは可なるべけれど、讀を論じて會を極意とするは、やゝ問題外に渉る嫌あるにはあらざるか。

下りて論理的讀法の機械的部門に至りては、逍遙子りの煩なるを厭ひて説かざりき。されど逍遙子は朗讀法として論理的讀法を行はむとするときの約束を示しき。その褒美、貶難、冷笑、諷刺、嘲弄、戲謔等の文章上に於ける特質、語句の論理上主客などを會得せよといふところを見るに、逍遙子が朗讀法として行はむとする論理的讀法は即表情讀なり。逍遙子は吉野拾遺、太田道灌などの表情讀をなすに當りて、よもや何處までも情を縦ちて、生且淨丑うれ／＼に聲を發するには至らざる

べきを以て、われは其表情讀の「デクラマチオン」にあらざるを知る。りの表情讀は蓋「レチタチオン」ならむ。

逍遙子若此論を讀みてこゝに到らば、生且淨丑の四字を見て、快からずとせらるゝならむ。いかにといふに他は學者の論理的朗讀法を以て學術とし、俳優の「デクラマチオン」を以て演藝とし、其間に大懸隔をねきつればなり。奈何せむ、わが眼にて見るときは、逍遙子が學術視する「レチタチオン」もりの演藝視する「デクラマチオン」も等く是れ美術なるを。われは今の我國の俳優のためにいふにあらず、また逍遙子に形而上の俳優とたゞへられたる歐米の俳優のためにいふにもあらねど、劇も亦美術なり。りの學者の「レチタチオン」に殊なるは、體を揺かし、手足を働かしむるところに在ること、逍遙子が言の如し。さればこゝハルトマンは表情言語を耳の美術に入れ、劇をば耳と目の美術に入れつるなれ。逍遙子は劇を以て、單に摸倣となし、が、會せずして讀みけむ獨逸の女優某が如きは姑くねき、妙藝ある俳優は決して摸倣に留まるべからず。こは又辯ずる折もあるべし。われはこれより論理的讀法の下にねかれたる文法的讀法に趣かむ。逍遙子が所謂文法的讀法は本來其論理的讀法の一約束に過ぎず。文法的讀法の辨にいはいはく。文の體格を分別し、細に句讀に心を用ゑ、關根氏がいへる如く、句切、段切、天仁波の懸りむすび等に注意すと。論理的讀法の約束にいはいはく。文の結構、組織、句切、段切、天仁波のかゝり結等に注意すと。われれもふに彼も此も皆美音讀なり。

曩にはわれ東京専門學校文學科の一學生と讀賣新聞の咄々生との朗讀法につきての争を評せしとき關根饗庭の二家を以て「レチタチオン」を東京専門學校の文學科に起さむとする人となしつ。今道

遙子が説を見れば、關根氏はいまだ至らざる美音讀を唱へ、饗庭氏と逍遙子とは玄妙なる表情讀を唱ふる如し。逍遙子はいとおそかに此別を立てたり。されど我は猶疑ふ、關根氏とても絶つて情を表せざる朗讀法を講ぜむとて、單に句切段切云々といひしにあらで、其眼の注ぐところは、或は饗庭氏、逍遙子におなじ「レチタチオン」なりけむかと。愈下りて機械的讀法にいたりては論ずべきことなし。逍遙子が命ぜし素讀の名は、我用語例にも當れり。

逍遙子は朗讀の材を論じておもへらく。文法的讀法のみ音讀にてよむべきは、言文一致に遠き文なり。その例は、曰文章軌範、曰日本外史、曰源氏物語、曰平家物語、曰太平記、論理的讀法の表情讀にてよむべきは、言文一致に近き文なり。譬へば脚本の如し。此材の別は便利上より出で、頗面白し。されど逍遙子は既に漢文を題外にせむといへば、文章軌範、日本外史をば、題外にすべきならむ。又所謂言文一致に遠き古文よりは、これに近き今文を讀みて情を表はし易かるべきは、げに尤なれど、古文も論理的讀法の表情讀の材に適せざるにあらず、今文も文法的讀法のみ音讀の材に適せざるにあらず。逍遙子が撰材は便利上より出でしのみにて、本質上より出でしにはあらじ。ハルトマンは小説を讀むべき詩 *Lese poesie* となしつ。こは語響を顧みずして、語義を取る謂なれば、默讀も素讀もあながち興を損せざるべし。わが所謂默讀は會にあらず、語を逐うて聲に發せざるなり。正聲器(喉頭)を動かさずして、副聲器(鼻口等)を動かすことあるべく、(耳語) また正副いづれの聲器をも動かぬこともあるべし。ハルトマンはまた叙情叙事の詩及戯曲を吟誦すべき詩 *Vortragspoesie* となしつ。こは叙情詩の歌はるゝを旨とし、叙事詩の「レチタ

チオン」の料にせらるゝを本分とし、戯曲の「デクラマチオン」の料にせられて、劇に演ぜらるゝを本分としたるを總括せるなり。(審美學下卷七一四面以下) 事長ければ詳にはいはず。(明治二十四年九月)

美妙齋主人が韻文論(國民之友)

美妙子が國民之友に出し、日本韻文論に對しては批評めきたる文字既に所々に散見す。忍月居士が評は韻文論をあざけると題し、美天狗と署したるもの柵草紙に出で、次に美妙齋に與ふと題せしもの、國會新聞に出でし外に、國會文苑中に於いて猶一の催促と一の前觸とを見き。催促にはいなく、韻文論はいつか終らむ。我手帳には論中卓絶なる處を一々書き留めおくことなるが、今やほと／＼の多きに困せむとす。蓋し早くの局を結ばざると。又前觸にはいなく、韻文論及韻文を題して、美妙子が上を論ぜむ時、雲峰子が知盛卿、某氏(梅花道人)が九十九娘の評をもなすべしと。前觸には忍月と署したれども、催促には神田なる蟲も殺さぬ男と署したり。不知庵主人が評は美妙子にあたる詩辨となりて、國民之友に出で、次に美妙齋に一言すといふ再評國民新聞に現れぬ。その署名は「〇生なりき。別に或る男投じたりといふ短文ありて、是は評判の韻文論と題したり。またさしはへたる反駁にはあらねど、路功處士の外形論者といふ文にて、韻文論にいひ及びたる處もこゝに屬すべし。後の二つは國民新聞に出でにき。美妙齋主人はまた柵草紙と國民新聞とにて忍月に答へ、日本評論にて不知庵にこたへたり。わが美妙子の韻文論を評するや、勢我より先にこれを評せし語に及ばざること能はず。上にけふま

での評判めきたるものを並べ挙げたるはこれが爲なり。世間には我が美天狗、蟲も殺さぬ男等を忍月居士なりとし、ニコ生、或るをどこ、路功處士等を以て不知庵が上に歸したるを疑ふ人もあるべけれどうは益なき遠慮ならむ。蟲も殺さぬ男の忍月居士なるをば、評したる忍月も知りたり、評せられたる美妙子も知りたり、あらず、今の文界には祀そらくはこれを知らざる人なからむ。ある男の不知庵主人なることも亦同じ。グレイゼバハがクライストの全集を物しつるとき、在々處々探り求めて作者が世にありしほどの新聞紙を取り集め、ニコ生と署したる文はいふも更なりニコ生の三字を様々に組みあはせたる署名、若くはニコ生 (Refaktion) 即ち編者の略といふ署名ある文さへ取りしが、口さがなくこれを咎むる人ありしを聞かず。苟も手法を見て作家を識る眼あらば、撰者豈戯號匿名のために惑はざる、憂あらむや。ニコ生が内田貢氏たるは、ニコ生がクライストたるを何か擇ばむ。うれがしの男、くれがしの男とありても、彼は忍月、此は不知庵と判じて、將又何の差支があるべき。

われは信ず、内田不知庵が女々しくもニコ生は我ならずといはざるべきことを。われは又信ず、石橋忍月氏が未練にして我は蟲も殺さぬ男ならずといはざるべきことを。故奈何といふに、不知庵も忍月居士も皆自ら不朽を期する人々なれば、他年一個のグレイゼバハありて、其斷簡零冊に榮願すること、絶て無からむともれもはざるべければなり。綠雨醒客好みて正直正太夫と署す。正直正太夫が文の責をば、醒客負ひて辭せざるべし。我も亦嘗て忍月居士と舞姫の事を争ひしとき、みづから相澤謙吉と署せしことあり。相澤謙吉が文中、若不都合なる事あらば、われ其罪に服すべし。因にいふ。さいつころ三昧道人虚子となのりて、雷音洞主が風流悟を評し、これのれがこれを読み

て泣きしは、我涙の自作の吾亡妻のために紅化せられしにはあらざるかといへるを、國會文苑の荆鞭にて評ししより、三昧道人は然るまじき舉動せしやうにいはいはれ、果はれろしき罪人のやうにさへ思倣さるれどもわれれもふにさならず。匿名して自ら我著作を評せしためしは、古今の大家に少からず。思ひよりたる一二例を示さむに、シルレルはウユルテンベルヒの新聞 *Vierteljahrliches Repertorium* にて自作群盜を評し、ハウフは「モルゲンブラット」(1837 Nr. 92 und ff.) にて自作小説「ナイ、レッツテン、リッテル、フォン、マリインブルク」を評せしこと、傳記と全集とに就きて見るべし。シルレルが自評にこり自讃のこと葉なかりしが、ハウフはみづから筆を下して、ハウフ君は前年の婦人手帳に比ぶるときは、文章を鍊磨し、布置を工夫せしやうなれど云々といへり。三昧道人は我文我涙を紅化せしかと疑ひて、忽ち否々と排し去りしが、縦令道人否々と叫ばざりければとて、われ必ずしも其罪を問はざるべし。われは唯三昧道人が自ら信ずることの厚きを見るべきのみ。正直正太夫が吾亡妻を虚偽なりと斷せしは、齒にきぬ着せぬ批評家の面目なるべく、蚯蚓子がねなじく虚偽なりとねもひて、正太夫が公明正大を稱へつるも、吞吐乾坤生が吾亡妻の作者は輕薄兒ならむかと疑ひて、正太夫が筆鋒の鋭さを褒めたるも、皆れのれが信ずるところを説いて憚ることなき文士の本意なるべく、雷音洞主が言の當れりやあらずやを問はざるべし。我は唯飽くまでも三昧道人を罪人視することの非なるを明にせむとす。小文學といふ雜誌世に行はるゝころなりしが、所澤の鉛筆將軍と名乗りて、書を鐵槌欄に投ぜし人あり。我文學界に自著自贊の人ありとて、これを罵りて不所存といひ、血まよひと云ひ、齒き

しりの音を聞かせける。われれもふに我文壇の自評を忌むは、文士自ら信ずることの薄ければなり、我と我がうぬ惚に慙ぢてなり、れのが仲間の利にさどく、僞名の蔭にかくろひつゝ自ら售る如きことあらむをわうれてなり。あはれ、これも世のさがにやあらむ。

われは韻文論を評して、其反論に及ばむとするに當りて、先づ忍月不知庵の二子は、其名を隠蔽して、其責を推諉せざるべきことを明にせばやとれもひて、覺わずかう長々しき閑話をなした。請ふらくは讀む人深くな答めろ。

りも、美妙齋主人が韻文論とは何物ぞ。耳の美術は高低調の行住によりて別あり。唱歌は節ありて住調なり。音楽は節なくして住調なり。節ありて行調なるものには、創めて製作する術と製作をくり返す術とあるべし。こなたをば美音讀の時ほど語りしが、今はかなたなる製作の術に及ばむ。此術には散文の姿致をなす手法 *euphonische Gestaltung* と韻文を組立つる法 (韻文法 *Metrik* 又狹義の詩學 *Poetik*) の別あり美妙齋が韻文論は、韻文をくみ立つる法を説きたるなり。韻文をくみ立つる法は純然たる詩形の詮議にして、能く詩の用をなすものなりとはいへども、畢竟詩の本質の外にあり。譬へば詩にあらざる教詩も亦能く此法を役する如し。(ハルトマンが審美學下の卷五八九及五九〇面) 韻文をくみ立つる法 (韻文法) を美妙子韻格と名づけつ。されば韻文論の骨髓は韻格の制定なり。韻格を制定せむためには、所謂韻語すなはち詩に用ゆる言葉 (詩語、うた言葉) を限りて、いはゆる散語に混ぜざらしむること肝要なり。同きみやび言の中にも、文章に用ゐて歌にはよまじきも多しと、本居がいひけむも (玉霞三〇頁) 言葉の實の中には、詩人の印記なく、詩世界に通用すべからざる錢多しと、ゴットシャルがいひしも、詩學一三五面美妙子が韻語を説く心にねなじかるべし。さて詩語のつ

らなりて句をなしたるを美妙子は韻句 (詩句、うたの句) と名づけて、散文の句即ち散句に對したり。さて韻語或は韻句の完全なる節奏を成すに至る一定の順序の標準を韻律とすと、美妙子いへり。蓋其韻律は音の抑揚なり、また平仄なり。

美妙子は揚ぐる音を高調と名づけ、抑ふる音を低調と名づけつ。されどかくては聲韻の抑揚 *Accentuation* を音調の高低 *Tonhöhe* (宮・商・角・徵・羽・D) かとれもひ誤る人あらむか。美妙子は更に揚ぐる音を長といひ、抑ふる音を短といへり。こは西洋にて希臘、羅馬の詩律を再興せしとき、抑揚を短長にしたるにねなじ心なるべし。(Voss, *Zeichnung der deutschen Sprache*, Edit. II, 1831) この美妙子が抑揚律は、將來の韻文をくみ立つる法の基となるべきか、ならざるべきか、われ未だ豫言すること能はず。然れどもここに一つの注意すべきことあり。漢 (詩法纂要) には、平聲字音皆揚、仄聲字音皆抑 (英獨などの抑揚音は、定まれるを常とし、或は抑或は揚、相通用すべきを變とすなるに國音の抑揚は、くもの蜘蛛となり、雲となり、かまの鎌となり、釜となり、はりの鎌となり、梁となる如く定まれるは却りて少く、抑揚自在なるが多きことなり。是相違をば美妙子みとめ得て、日本語の一奇相となし、驚喜雀躍してもよき程の大便利とせり。美妙子のいはく。やなぎといふ字を例にせむに、よじやどの様なる韻格によりて、句をこしらへ出して、之れを用ゐる際に於いて、其音の抑揚を勝手に換へて、大抵は差支なし。揚ぐべき音のぎを抑へて、やに與へてもよし。隨て日本語はこれを「ヤムプス」として使ひても、「トロヘウス」として使ひても、運轉の上に於いて縦横なる役に立つものなりと。われは唯所謂勝手の格律の敵なるを憂ふといひ置かむのみ、われは唯勝手の極處即是れ無格律なりといひ置かむのみ。

美妙子が韻律の定義につきては、われは猶瑣事を嫌はずして一疑問をなさむ。言葉或は句をして節奏を成さしむるときに至りて、美妙子纔に韻律ありとすれども、言葉の句をなすとき、(Versifikation) 最早韻律に入りたるにはあらずや。律文あまりに精細なれば、つらく讀む人にはかゝる節すら目に留まるべし。

初美妙子は散文と韻文との別を立つるに當りて、かなたには節奏なけれど、かなたには節奏ありといひ、また縦令散文に音調ありといへども、うは樂調又大節奏即ち音樂上の音調にあらず、樂調又大節奏ありて、猶散文なりといへるは、誤りて散文と看做されたる韻文即賦なりといへり。されば美妙子が節奏乃至大節奏又樂調といへるは、是れ韻律に同じきものなり。韻文を唱歌にするときは、調の高低を約定す。これをふしづけといふ。所謂賦詩合樂なり。ふしづけをなして、樂に合はするときは、韻文の行調變じて住調となる、住調を以て樂調とするよの常の用語例にたがひて、美妙子はふしづけせざる韻文に樂調を與へたり。こは唯李漁のいはゆる歌時吻に利ならしむる意なるべけれど別に韻律外の拘束あるにあらねばこれも讀む人の惑を惹かむことをせざる。

以上を韻文論の骨髓についての畧評とす。これよりは少しく枝葉にわたるべし。美妙子は傍ら詩の本質にいひ及んだり。學海先生が少年文學會にて漢詩の利益を談じ、興到りて詩成るとき、起ちて屏上に淋漓たる墨痕を留むる快さをいひ出でしは、戯曲の舞臺にて演ぜらるべきが如く、詩に伴ふべき目の美術(書)の事なり。韻文論の骨髓たる文格の制定は、詩に伴ふべき耳の美術(聲)の事なり。美妙子は此耳の美術をのみ語りて止まむとせず、詩の本質なる空想の美術にさへ及びしなり。

詩即「ボエジイ」を美妙子は純文學 pure literature と名づけて、(國民新聞、柵草紙) 忍月がすめし美文(美文學 schöne Literatur とは我もいひしことあり)の語を斥けつ。さらば純文學即われ等の所謂詩は、いかにして雜文學に殊なるか。美妙子はいまだ明にこれに答へざりき。

美妙子は答へざりき。されど忍月と不知庵とをして、答へざる答を摘み出さしめしものは、其思想の説なりき。美妙子既に純雜の文學を區別したれば、其區別の立つ所以なくてはかなはず。純文學中既に散文と韻文とを含むといへり。さらば雜文學の散文と、純文學の散文とは、其けぢめ聲の上にあるべからず、形の上にあるべからず。其けぢめは唯想にあるべきのみ。美妙子は純文學の想と雜文學の想との別をいはず。却りて散文の想と韻文の想とに、別なきことを論じたり。美妙子おもへらく。散文と韻文とに想の殊なる由あるべからず。所謂詩若くは詩想をば、かつて見しことなし。されば詩の思想を論ぜむよりは、單に思想といふものを立て、これを論ずるを正しとす。こは純雜文學を籠めての論か。はた雜文學を除き去りて、純文學のみを留めたる上の論か。美妙子は明にこの境界を示さざりければ、忍月、不知庵の二人、いつれも然るもの癖とて、忽ち起つて其虚を衝き、美妙子が言を純雜文學を籠めたるものと看做して攻撃しつ。

打見たるところによれば、美妙子が思想といふは、現に全思想界を統べていふに似たり。さて美妙子はうの詩にあらはるゝ状を説いては、思想は實に對する虚にあらず。細にいへば形而下に對する形而上にあらず。また具體に對する抽象にあらず。また現實に對する感情にあらず。詩の想髓は形而下に對する形而上にあらず。形而上とは何ぞや。客觀的のものにして、非我と名づけ、純質と名づけたる自然の世界ならむ。形而下とは何ぞや。主觀的のものにして、官能をつかひ

て驗し得たる我的世界なるべし。哲學論は詩にあらで、記事即興は詩なりといひ、第一義は詩にあらで、春過ぎて夏來にけらしの句は詩なりといへる美妙子が引例は、まことに詩の想髓の形而上にあらで、形而下なるべきを證するに足れり。されど古より詩世界は形而上の世界なりといひし人あるにはあらず。

詩の想髓は具體に對する抽象にあらで、詩は美術の一として、其想髓は抽象的ならざらむを望み、結象的ならむことを願ふ。類想を捨て、個想乃至小天地想を取るは、これがためなり。美妙子が詩に抽象の想を取らざるは甚善し。

最後に美妙子は、詩の想髓を以て、現實に對する感情にあらでせり。實は美ならず。されど實を出づる映象には美あり。我官能の受くるところに、空間的に並ぶべきものあり。譬へば色の如し。また空間的に並ぶべからざるものあり。譬へば聲の如し。彼方を心の相(觀相と譯するも可なり)といひこなたを心の感といふ。相は並存的にして、感は尋存的なり。相も感も詩の想髓たるに負かず。相の感に勝つや、叙事詩をなし、感の相に勝つや、叙情詩をなす。

美妙子が此の如く詩の想髓にあらじと思はるるものを分析せし中には、そのつから没すべからざる功あり。うは俳諧者流のみだりに虚實の對を用いて、我國審美學の前途を塞ぐを破したる一事なり。定義なき虚實の詩を累するは、定義なき陰陽の理を累するにねなし。美妙子は又縁用、擬人等の繪言葉(Goethe's bildliche Darstellung)を使ふは詩の本質にあらでといへり。洵にさなり。詩には繪言葉多けれど、繪言葉多きが故に詩なるにあらで。されど繪言葉を使ふを詩の本質なりといひし人は今もむかしもあるにあらで。また繪言葉を使ふは節奏のためなりといへるは、わうらくは妄ならざるべし。

し。聲の美術は、繪言葉を促し出すべきものにあらで。これを促し出すは、空想の美術のみ。

詩にあらはるる思想は、既に形而下に對する形而上にあらで、結象に對する抽象にあらで、現實に對する感情にあらで、繪言葉を使はざる者に對する繪言葉を使ふ者にあらで。是を詩の思想といふ者の立つべからずして、到底たゞの思想となるべき事のものとしたるは、即ち美妙子が思想の説なり。

美妙子若純雜文學の分るる所以を問はずして、こゝには唯純文學のみについて説きたりとならば、散文と韻文との間に思想(純文學思想又詩想)の異なることなきや宜なり。美妙子の本意は是の如くならむかとおもはるるは、小局部の教育器械として、韻文を働かせむことを欲せずといひて、教詩を斥けたる處などにあり。これ雜文學思想の韻文の衣をきて出づるを厭ひたるが如くなればなり。

若然らずして純雜文學を分たずして、すべての思想は韻文にだになりてあらはるれば詩なりとならば、美妙子は唯耳の美術(韻格)を知りて、空想の美術(詩)を知らざるやうにれもはるべし。忍月はかくれもひぬ。不知庵將かくれもひぬ。かく思はれしは何故ぞ。韻文は即ち「ポエトリー」、即ち詩の全體なりといふ斷案あればなり。「ポエトリー」は純文學にはあらざるか。詩の全體は純文學にはあらざるか。又韻文にあらで「ポエトリー」にあらで、詩の全體にあらざる純文學ありとするときは、美妙子がりの純文學の韻文にあらで「ポエトリー」にあらで、詩の全體にあらざる純文學ありとするときは、殊なる所以を示さざる處に、忍月と不知庵との疑を引くよしあるべし。况やみづから純文學(空想の美術、詩)の本質を説かずして、却りて古人の説きしところを斥けつればなり。

詩の序にいはいはく。詩者人心之感物、而形於言之餘也。この語は美妙子に斥けられたり。古今の序にいはいはく。やまと歌は人の心を種として、よろづのここの葉とがなれりける。この語も美妙子に斥け

られたり。芭蕉翁はれもへらく。作者感じて句をなす俳諧のまことなる。この解釋も亦美妙子に斥けられたり。

詩の序も、貫之の語も、おきなが言も皆叙情詩の上をいへるなり。興に乗じて現れ、境に觸れて生じ、世を觀じて動く主觀の情を歌ふところを、人心感物ともいひ、人の心をたねとすともいひ、作者感ずともいへるなり。作者の空想より出でたるもの、讀む人、聽くひとの空想に入りて、美術の働をなすには、必ず詩形を須むる處を、形於言之餘ともいひ、よろづの言の葉となるともいひ、句となるともいへるなり。古人の空想美術の解釋、叙情詩の解釋になりしは、毛詩にも、古今集にも、俳諧にも叙情詩殆その全版圖を占められたればなり。古人豈杜撰ならむや。古人を責めざる人、豈奇怪とすべけむや。

さばれ古人の詩歌の解釋は、完全なる空想美術の定義にあらざることは、美妙子がいふところの如し。憾むらくは美妙子は倒して立てず、壞ちて造らざりき。われは今問はむとす。不知庵は何を以てかこれを補ひたる、忍月は何を以てかこれを繕ひたると。

不知庵は詩形を卑み、韻格などに屑々たらざるものなり。美妙子が韻格を制定せむとてつらねし數千萬言は、彼がために眼を過ぐる雲烟に過ぎず。(烟にもせてからくかつと悟りけり) 美妙子が韻文即ち詩なりといふを聞きては、所謂詩の純文學なるべきをおし量りて、形を以て想を制せむとするを笑ひつ。(鴉とは黒い鳥だともいひ) されば彼は文法語格だにどのはざる今の散文を見れども、猶手法を卑み、音韻の制限つゆばかりも立たざる今の韻文を見れども、猶韻文法を斥けて、いたづらに時弊を長ずることを憂へず。落合直文をば手法家として編し、美妙子をば押韻者として罵

りつ。就中美妙子が平仄を取りて押韻を取らざるに、作句者 versificator といはれずして、押韻者といはれしはいと興あること、れもはる。(That will do, that will do, 'Tis rhyme now, but…….) 不知庵が韻格を卑むこと是の如し。宜なるかな。彼が美妙子に與ふる書は、一語も韻文論の骨髓に及ぼずして、却りて全幅の精神を美妙子が論のためには枝葉に過ぎざる空想美術(純文學、詩)の上に注ぎたり。さて不知庵が空想美術の解釋はいかに。

其一にいはいく。コリエルは詩を説けるとき、聲調節奏の外に猶或る一種のものありといひき。これこりは美妙子が二年間研究してえ悟らざりし者なれ、ブレトオ以來解釋する人なきものなれ、不言不説の妙想なれ。古人が詩は志なりといひし志も、若此或るものを指しつるならば、容易く斥くべきにあらずとなり。此語は要するに解釋せざるを以て解釋したるに過ぎざれば、美妙子が散文、韻文の外に、文學純雜の別ありといひて、純とはいかなるものとも説かざりしと、たゞ五十歩百歩の差あるのみ。

其二にいはいく。カアライルは文字のみ音樂的なるを詩とせずして、思想の音樂的なるを詩とせり。こは詩形のみにては詩を成さず、詩想ありて詩纔に成るといふところを、カアライルが移用法 Metaphor にていへるに過ぎず。こをもて詩想を解かむやうなし。

其三にいはいく。漢詩を説くものは、詩道妙悟にありといひ、詩の極致一あり、入神といふといへり。不知庵れもへらく。彼方には猶盛唐以上の大家を崇拜する迹ありて卑しけれど、今の悟を以て詩を説くところは美妙子に優れり。此方はグレエがいはゆる神來 (divine inspiration) にあなじうして、詩の妙域を説き得たるものなりと。われれもふに詩道妙悟にありといふは、大詩人の大乘禪、小詩人の

小乘禪とやうに比喩を以て詩人の才分境地を示すに過ぎず。カアライルが移用の語と何か擇ばむ。(答忍月論幽玄書)漢土の詩人が入神といひしは神來の事にはあらざれど、入神の詩人はいかにも神來に逢ふことあるべし。説いて神來に到れば、縦令詩の本質にあらずといへども、頗其製作の旨を得たりと謂はむ。

これよりは忍月が詩を説くを聞かむ。忍月は人と宇宙と美と連絡して、其間に振動するものを詩なりといふ。これ固より哲學上の語にあらず。譬へば語中に所謂人は作者なるか、作中の人物なるか、はた人間なるか知るべからず。若し強ひて其意を揣らば、美術上の人天契合(小天地想)かともれもはるべし。果して然らば是れ總ての美術の上にて、繪畫をも彫刻をも含みたるものならむ。又振動すといふに至りては、カアライルが移用語に殊ならず。されど忍月は別に審美學の上に基礎を定めたる泰西人が詩學の解釋を見よといへり。(柵草紙に出し)我趣意書にいはく。西歐文學者が審美學の基址の上に築き起したる詩學を以て準繩とせむと。われもこれをば善く言ひたりとせむ。國會新聞にて豫言せし韻文論及韻文は果していつか出づべき。二家の反論は是の如きのみ。

繼いで美妙子は近世空想の美術に抗抵したる勢力を説けり。美妙子は韻文の力を減らし、韻文を惱ましたる勢力といへど、うの減らしむ力は韻格の力なるべきやうなれば、うの惱ましたるものは、必ずや思想なるべし。必ずや純文學なるべし。勢力の原となれりといふものねほよ三つ。曰不可思議論、曰實體論、曰理學の進歩是なり。

先づ不可思議論といふものは何物なるかを問はむ。不可思議論とは人の心の誠信の領分を掠め取るものなり。かく誠信の領分のせはめられたる結果は、迷想ともなるべく、獨斷ともなるべく、厭世主

義ともなるべしとなり。按ずるに不可思議論とは致知法 *Erkenntnistheorie* の偏したるものならむ。

世界は果して且つは考へ、且つは覺ゆる主觀者の外に、みづから實在するものなりや否や。世界の實在は、主觀者の認むるところに同じとするときは、獨斷に陥るべし。(Mytilk)若又主觀者の認むるところの外の実(純實)を知るべからざるものとするときは、是れ不可思議論なるべし。知るべからざる實、不可思議の實は無なり、涅槃なり。人は無を厭ひて生を愛す。能く無を厭はざるに至るは悟なり。悟は即ち個人の死なり。これを哲學上の厭世主義とす。(シヨオペンハウエルが意思と寫象としての世界一の卷、四八六面)われおもふに哲學上の厭世主義はおのづから厭世の詩に殊なり。詩人の上に取りては、厭世も樂天も其感情に過ぎず。感情は事實なれば、これに同ずると同せざるの別こりあれ、これを破すべきやうなし。破すべきは唯哲學上の厭世主義のみ。厭世哲學家はおのれが世を厭ふ情を歌ふにあらず、人生我に於いて何かあらむといふにあらず。彼は世を以て本來厭ふべきものとなすなり。人生を以て本來何もなきものとなすなり。是に於いてや、反論はじめて生ず。詩人の厭世叙情詩を作るは、おそらくは必ずしも詩道の衰微を致すに足らざるべし。若し哲學上の厭世主義詩道を墮さむとする嫌疑あらば、恐くは是れ「レアリスムス」より出づるなるべし。

れもひて此に到れば、美妙子が所謂實體論にうつるべき便宜おのづから生じぬ。美妙子は實體論即ち「レアリスムス」の眞髓を信じて、その濫用を憎むものなり。實體論の眞髓は信ずべしといへども、うの信すべき眞髓は直覺のある部分を蹴散らすがゆゑに詩道に利あらずとなり。ハルトマンが如きは、「レアリスムス」を信ぜざるものなり。然れども彼は「レアリスムス」を奉じて出でたる美術家に

は、一種の長處あるを信ず。模倣は固より美術の本意にあらずといへども、若模倣するときには、自然を模倣する人、類型を模倣する人の上に立つべし。かなたは結象美に近く、こなたはこれに遠ければなり。若「レアリスムス」の模倣に陥る弊の外、猶詩を害ふ疑ありとならば、そは唯厭世的の傾ありてならむ。こゝろみに極端なる「レアリスムス」Hypernaturalismusを奉ずる詩人を見よ。うの好みて寫す人物は、狂夫ならぬは酒客、酒客ならぬは癡人なり。美妙子はゾラを辯護して、うの「レアリスムス」を濫用したる見本を示せといへども、ゾラが「ルゴン、マカルド」の大稗史中の人物は、殆一人として此難を免れ得るものなかるべし。

最後に詩の敵として擧げたるは、理學の進歩なり。古人が天地間の奇しきことどもを、奇しと見て、驚き懼れぬる情は、今理學のために奪はれたり。「ムウゼ」「エヌス」「アポロロ」「クビド」の神々をば、いまさらに喚び起さむやうなし。われおもふにこは理想の現行 Achillisch der Ideonの論なり。夫れ時は詩人を産めども、詩人は時に絆されず。一世の詩材を取りて、不朽の盛事をなすを眞詩才といふ。希臘の世には「ミトス」(神)の理想現行したりければ、當時の詩人資りて材としつるなり。ギョオテ、シルレルが詩中猶「エヌス」「アポロロ」を見るは、その理想現行せしにあらず、古書を翻し閱せし後、未だ全く塵埃を振りおとし得ざりしのみ。今の詩人のためには、詩道の憂ありと認めむとせば、先づ今の現行理想の總高を希臘の世の現行理想の總高に比べて、さし引勘定せでは協はさるべし。フライリヒラアトが熱帶世界を詠せしをねもへ、又ガイベルが蒸氣機關を歌ひしをねもへ。今の世には詩材匱しとのみは言ひがたかるべし。

美妙子は以上の三障礙を説き畢りていはく。詩はこの三障礙に逢ひて、その根を撼されぬ。されども根の動きしは、障礙の罪にあらず、詩人の障礙を排し得ざりしためなり。詩は能く開化に伴ふ。詩の命脈は自然の滅せざる間滅せざるべし。こたびの韻格の制定は詩を開化に伴はしめて、以ていよ／＼其命脈を繋ぐもとするなり。こたびの韻格の制定は、これにて我國古來の韻文の弊(餘情主義の事なり、下に出づ)を革め、引き續いて厭世的思想、其他纖弱なる思想(これも下に出づ)を遠離け、(こは作者の覺悟次第にて出來べしといへり)空想美術將來の基礎を築かむとするなり。將來の韻文は獨我が日のもとの小局部にのみ留めて、和歌俳諧などと争はしむべきものにあらず。願はくは世界の開化に伴ふべき韻文我規模より出でむとなり。按ずるに美妙子は、空想美術の三障礙に逢ひて其根を撼されしを新韻格成らざりしためとなし、其新韻格をばみづから制定せむとするべし。按ずるに美妙子は又我國の空想美術を果敢なくも萎靡せしめし積弊を一掃する手段の第一着として、其新韻格を制定するなるべし。さらば美妙子が新韻格とは何物ぞ。抑揚なり。平仄なり。抑揚平仄は希臘、羅馬、漢土の古詩人も知れりき。唯古詩人の知らざりしは、抑へむも揚げむも勝手なる日本語に應用したる抑揚韻律のみ。われは此新韻格の將來を看破する眼なきを以て、美妙子が遠謀宏圖のために、うの成敗を卜すること能はざるを憾とす。

むばらく美妙子が我國古今の空想美術を評して、うの餘情主義とその纖弱思想とに及ぶを聽け。美妙子のいはく。我國韻文の種類は、其多きこと殆三十種なれども、中に就いて羈權を掌握して、一方に雄視せしもの三つあり。曰和歌、曰俳諧、曰漢詩。この三つについて論ぜし人、俳諧の十七字、和歌の三十一字、漢詩の二十八字、いづれも短きに過ぎて用に堪へずといへるなどは、本を忘れた

るものなれば、言ふにしも足らず。されどいま引き括めて評せむに、一二雞肋のところを除く外は、ことごとく駄目なり。譬へば、田子の浦ゆうち出でて見ればましろに富士の高根に雪はふりけるといふ歌は、唯打見て景物の大に感したるのみ。其大の因りて基くところを考へてこゝろ、詩人の本能ならぬ。是の如く目前の景を平叙したるのみにては、いかでか詩を成さむ。世には此叙景の外に餘情といふものありといへど、其所謂餘情は注釋のみ。餘情の注釋なるを知らざるが故に、歌人も俳人も小にて大を兼ねしめむと勉め、其極秀句を得むとして他を顧みざるに至る。是に於いてや人丸も芭蕉も哲理を闡くこと能はず。學術の益に立つべき吟詠を遺すこと能はず。獨漢詩を嗜む人は多少無形の學に通ぜしゆゑ、時に雄篇傑作を出ししことあり。されどそれとても語法のために苦められて、天晴のものにはあらざりき。要するに我國古來の韻文は、哲學に關することあまりに薄く、厭世の病なきものも、猶纖弱の思想をあらはずことを免れざりき。

われれもふに俳諧、和歌、絶句を責むるにその短きを以てせざるは、寔にさもあるべき事なり。文海の藻屑、然れども餘情と哲理との上に就きては、われ未だ美妙子の説に服すること能はず。苟も詩の幽玄を知るものは、理路に墮ちむことを恐れ、考思に亘らむことを憂ふ。叙事詩(世相詩)若くは小説につきては、嘗て一だひこゝに言ひ及びぬれど、(答忍月論幽玄書)いさ少く叙情詩の上の幽玄を説いて、餘情の在るところを明にし、哲理のやうなさを示さばや。

理想を表すに考思を以てするは詩人にあらず。詩人の理想は表るゝに考思を須たず、必ずや心の相となりて、書圖の如くに浮び出づるものなり。(前段現實に對する感情の條を見よ)美妙子は餘情の注釋たるを笑へど、考思の結果たる注釋を以て餘情なりとする用語例に従ふときは、其注釋の歌外

にあるこゝろよけれ。若田子の浦の景を看て偉なりとし、その偉なる所以を考思して、これを言葉につらねば、注釋却りて詩中に入らむ。

詩人の詩を成すや、理想と心相と俱に至りしものなれば、その理想はいかなる考思に當れりやは、詩人みづから知らざるべし。詩人も固より世人の如く、平素ものを考ふることなきにあらねど、その考ふるところを寫して詩とせむは、彼が敢てせざる業ならむ。彼はこれの理想のいかなる考思に當れりやを考へ得ざるにあらざ。然れどもその詩人の本性は、かゝる考思を運らして、注釋を下すことを嫌ふなり。詩中若注釋あらば、われ作者の決して眞詩人にあらざるを知らむ。叙情を專にする眞詩人の殊更に詩形を小にせむとするは、(秀句に耽るに至るは)深人靴のづから淺語なしとはいへど、多くは此注釋を避くるためのみ、詩意の考思に亘らむことをわづらふためのみ。

哲學も亦考思なり。詩人は學んで哲儒となることを得べく、哲儒才あらば詩を賦することあるべし。然れども哲學若詩思を助くることあらば、是れ唯冥々裡の事ならむのみ。哲學的思想を言葉につらねて、その詩なりといふものあらば、誰か作者に詩人の稱を允さむ。かるが故に詩人の詩を賦して、哲理を闡かむことを望むは非なり。詩人の作れる詩に哲理ありて、學術の益に立たむことを望むも亦非なり。不知庵のいはく。詩は文字にあらず、節奏にあらず。極端にいへば一篇の詩を作らざるも猶詩人にして、萬言の句を吐くも却りて是れ非詩人なり。若バアクとベエコンとを詩人ならずといはば、余は詩の何物たるを知らずといひしムアが言是なりと。詩人には哲儒なるあり、哲儒ならざるあり。哲儒には詩人なるあり、詩人ならざるあり。バアク豈詩人ならむや。ベエコン豈詩人ならむや。萬言の句を吐きても、徒に考思にわたりて、遂に詩を成さざる人はあるべけれど、一篇の

詩を作らざる詩人は、一個の抽象物たることを免れざるなり。

そも、我は深く和歌、俳諧に通ずるものにあらず。我筐中には僅に古今集、七部集各一部を藏するのみ。われとても遇題應酬の作、觸興感境の詩、悉く皆高遠なる意ありとはねどもはねど、三十一字の裡、十有七言の間、往々世界人間の大理想咄々人に逼るが如きものあるを覺ゆ。豈獨漢詩にのみ雄篇大作ありといはむや。哲理は詩人の關くべきものにあらずといへども、詩は學術の益に立つべきものにあらずといへども、觀世叙情の詩は能く世界の理想、人間の理想をあらはすものなり。唯今の現るゝや、世界の理想、人間の理想としてあらはるゝにあらず、人情の理想としてあらはるゝなり、人情の世界人間の理想に感じたる果實としてあらはるゝなり。

情の動くや、うの主觀の大小によりて、或は興に觸れ境に感じて、逍遙子がいほゆる一身の哀念を訴ふるに止まり、或は生滅因果のことわりを觀じて、思を萬有の外に馳せ、れづから一種の高遠なる厭世主義に入るに至らむ。大主觀の産み出したる句には十七言の短きがうちにも、天晴一幅の小天地圖ありて、寥廓として際なき大天地の影は、此圖中にほの見ゆべし。詩眼ある人の目も枯れず見續けていよく久うして愈其妙を覺ゆるは、小天地の圖に對して、大天地の影を望めばなり。餘情とはこれをこり謂へ。(ハルトマン審美學下の卷、七三五面以下參照、明治二十四年十月)

平仄に就きて

古本山人は洋詩を國語に譯して、平仄を存せよと、忍月居士に求めたり。この平仄(古本山人は律呂といふ)はいかにして出さるべきものなるか。

洋詩を漢語もて譯するときは、西語の抑揚長短の音を漢語の平仄の音となすことを得べし。(後に於

母影にて試みたる如し)されど譯するに國語を以てするときは、われ未だ平仄を出すべき途を知らず。古本山人これを能くすといはじ、われ願はくは先づこれを聴かむ。

忍月居士 Das Erkennen を譯して識認といふ。古本山人のいはく。識別、認知は成語なり。識認は則未だ聞かずと。五車韻府 shi の部に認識又識認 to know, to recognise とあり。識別、認知は却りて見せず。(明治二十二年三月)

再び平仄に就きて

巖々生は忍月居士の譯詩を評するに直譯といふを以てせり。浮屠氏の經を譯するとき直譯といひしは、蘇伐刺那を耳とせる如く、彼の實と我の實と、其名偶相符したるにて、義譯にあらず、對譯にあらずるをいへるなり。されど今は此義失せて、洋語の意を傳ふるに國語を以てするときは、猶洋語の句法に據るを直譯といふ。

今の直譯も、巧にだにあらば、必ずしも排斥すべからず。西洋の句法中これを國語に移して安なるところあらば、これを輸入するも固より不可なることなればなり。

巖々生のいはく。洋詩を譯せば、宜くアドルフ、ピョットゲルがミルトンを譯したる如くすべしと。ピョットゲルは能くミルトンの句法を守りて、「ヤンベン」の句脚に陽性を用ゐたり。こは原詩譯詩共に洋語なれば、爲し易き事なりしなり。されど國人これに倣はんとせば、果して奈何すべきか。

又アルントの獨逸人の本國といふ詩には押韻あり。忍月居士はこれに倣ふこと能はざりき。されど若忍月何故にこれに倣はざると責めんとせば、宜く國語押韻の法を教ふべし。今の新體詩にも押韻

なきにあらず。然れどもわが見るところを以てすれば、國語には押韻に宜からざる道理あり。今の
新體詩家はこれを知らずして、強ひて押韻せんとす。今の拙くして學ぶに堪へざること固より言を
待たず。

國語の詩は一二の名詞を除く外、大抵天仁遠波を以て韻脚とす。洋語の Preposition に當る語は、
皆句尾に集れり。洋語にて變化極なき動詞の句尾となると違ひて、國語にては、に、けり、らん
如き韻脚反復して出づ。國語の押韻の難きこと、怪むに足らざるなり。

且西詩を譯するに西語を以てするものすら、今漸く原作の平仄と押韻とを守ることが嫌ふやうにな
りぬ。これを守ることが嫌ふにあらず。これに拘泥することを欲せざるなり。ダンテの神曲を譯す
るに當りて、獨逸人が「ストレックフウス」を用いて、伊太利の句法 (Terzinen) を出し、は、か
の「ロマンチック」派の好事にして、今は早陳述となりぬ。譯詩家のこのごろ多く伊太利にいふ
「エルシイ、スチオルチイ」、英吉利にいふ「ブレンク、エルセス」を用ゐるは、學者の熱く知
るところにあらずや。われは忍月を責むるに、今の譯詩に平仄押韻なきを以てするものゝ意を知る
に苦む。

唯忍月の祖國の歌には一の關點あり。今はアルントが所謂大獨逸主義の上より、普魯西、シユワアベ
ン、播墨、スタイエルマルクと數へ來りて澳太利にさへ及びつるは、決して既に一致したる國若く
は縣を列擧せしにあらず。忍月の薩摩山城などといへるはいたく違へり。(明治二十二年三月)

三たび平仄に就きて

池袋清風氏は國民之友にて、國語と歐米漢土の詩とを比較して左の如き差違ありといへり。

日本の歌	平仄	押韻
支那の詩	有 <small>(但全體の句調を善くす)</small>	無
歐米の詩	無	有

支那の詩に平仄もあり押韻もあるは洵に然り。歐米の詩に平仄なしとは受けがたき説といふべし。
わが聞く所を以てすれば、歐米の詩の平仄には概二あり。一は音の量に基づきて永(平)短(仄)の別
をなし、一は音の度に基づきて揚(平)抑(仄)の別をなす。左に漢洋の符號を對照す。

○ 平	一 永	揚
● 仄	短	抑 <small>(又無符號)</small>
● 平又仄	一 永又短	揚又抑

この中抑の符 Accentus Graviss は或はこれを用ゐずして、無記號の音を仄となす。今支那の詩と歐
米の詩とを對照するときは左の如し。

支那の詩	平仄	押韻
有 <small>(古詩は特別)</small>	有	有
歐米の詩	有 <small>(ブレンク、エルセスにはなきなり)</small>	有

池袋氏のいはく。現代の詩家は一脚長く一脚短き不具なる人なり。絶て東西に貫通して詩文の事を
論じ、又著作するものなきを歎すと。今の文壇人なしと雖、漢洋の平仄を知りたる程のものは、絶
て無きにはあらざるべし。(明治二十二年四月二日)

路功處士といふ奇異なる外形論者(國民新聞)

路功處士は外形論者なり。路功が攻撃する所は詩の外形を正さむとする外形論者にして、路功自家は詩の外形を破らむとする外形論者なり。彼の正さむとするは、誰も分明に之を知りたれど、此の破らむとするは、或はりの自認せざる所ならむ乎。而れどもこゝに之を正さむとするものありて、こゝに又これを正さむとするものを破らむとするものあるときは、この正さむとするものを破らんとするものを指して、之を破らむとすと言ふも可ならむ。夫れ路功は詩の外形論者のみ。而して其主義は詩の外形を破らむとするに在り。詩を審美的に考ふるときは、人の空想より生れて人の空想を感せしむるに過ぎずと雖もかの生れし者が此感を起すには外形の力に待つことあり。故に詩の外形は缺ぐ可らざるものなり。而して此必要物の正しきと正しからざるを比ぶる時は、その正きを欲するは當然の理なり。故に路功が言は人をして正からざる外形のために短を護する如き感を起さしむ。

語格を喋々するもの、是を文法家といひ、文格を喋々するもの、是を文章家といふ、共に純然たる詩人にあらずと路功云へり。余云。獨り純然たる詩人にあらずのみならず、又毫も詩人にあらず。語格家は語格家なり。文法家は文法家なり。彼等自ら詩人なりと誇稱したる時にこゝ之を咎むべきなれ。彼等と詩人との別は學校教師と學者との別の如し。各其職を盡して可なり。

路功云。今の文界何ぞ文法家の多くして純詩人の少きや。余云。語格家と文法家との叫ぶは語格と文法とを知るもの少きためなり。いまの世に詩人ありて此叫をなさしむるを見れば、是れ殆皆路功の所謂純詩人ならむ。即ち語格、文法に關らざる詩人ならむ。されば今の文界何ぞ語格家と文法家との少くして純詩人の多きや。

路功云。語格と文法とは美文の要素にして、元より等閑に附すべからずと雖、單に此二點に於て疵瑕なきもの文の上乗と云ふべからず。余云。路功が文の定義奈何。語格と文法とに疵瑕なきは、一通り出來たる文なり、小學校卒業の文なり。うの上乗に非ざるは、誰も怪むことなからむ。上に美文(詩ならむ)とあれば、美文の上乗にあらずとも讀まば讀みつべし。是れ三十二相備はりたりとて、女子の鑑にはならずといふに同じ。さりとて又奈何なる賢婦も痘痕滿面にては拜みにくからむ歟。

路功云。文法は時に依りて變じ、文體は人に依りて嗜好を異にす。故に沙翁には沙翁の文法あり。チツケンスにはチツケンスの文法あり。さるを己の欲する所を以て標準となし、又古人の文法を以て之に適用し、以て文を批判せば、恐くは妥當を缺ぎ又世を誤らむ。余云。路功が文法とは語格なりき。沙翁もチツケンスも動詞の活用を一人々々殊にしたることなければ、其語格は是れ同じ。路功が所謂文法に於ては沙翁もチツケンスも相殊なるものにあらず。彼嗜好に左右せらるゝは文の手法(委致)のみ。語格(所謂文法)をも文法(所謂文章)をも知りたる上の話なり。今の詩人の手法相殊なりとて、又古人の猶くならずとて、之を責めしは何人ぞ、之を批判せしは誰ぞ。

原文是より下、思軒、篁村、三昧、吟風、紅葉等は畢竟文學の小節に拘執して其眞面目を忘れしが故なりといふ邊まで、我文學家手法を貴びぬといふ證據なり。此證據を擧げて路功は、手法を貴びしために詩衰へたるやうに論ずれども、手法は固より責ぶに足るものにて之を貴べるは病となすべきにあらず。我家の詩は想の側より拙しとせむ乎。此拙さは手法を貴びしために拙かりし證據あるにあらざれば、手法は手法なり、詩は詩なり、互に風馬牛にていくら雙方を捏ね合せて論じても詮なき次第なり。詩已に拙にて手法をも顧みずば、うの陋むべきこと豈特に手法を貴べる弊のみ

ならむや。

路功云。殊に驚くべきは、國文學者として名聲高き落合直文氏が將來の國文といふ大問題を掲げ來りて僅に今日語法の亂雜に入りしを慨嘆したる謬見なり。余云。謬見とは何が謬見ぞ。落合氏は分明に將來の國文と題して、其心の注ぐ所は文にあり。語格文法正き文にあり。落合氏若審美的に詩の何物なるかに着目し、その論の根柢を語格文法に求めたらば惡しかりなむ。文を論じて其格の亂れたるを慨嘆するを謬見とは抑何等の謬見ぞや。

路功云。何故に落合氏は新文法を作らずして數百年前の語法もて今日に適應せむとするか。余云。今古になき新文法(語格)は、一人若しくは一黨作りたりとて、生活の見込なし。(文海の藻屑)若手法の上よりいはず、今の所謂文學者中固有の手法落合氏の上に出づるもの誰かあらむ。嗚呼、新手法、彼は分明に之を作り得たり。

此下一段、紫清二媛、曲亭、芭蕉などの手法相殊なるを擧げたるは好し。而れども忽ち手法を擲ちて語格に入り、古の文法(語格)を守るものを痴人の夢と誹謗す。路功よ、願くは眼を開いて見よ。紫清二媛も、曲亭も、芭蕉も語格頗正し、手法頗正し。何の論者かこれを駁撃すること、今の國文學家の世人を駁撃する如くなることを得む。今の國文學家の攻むるは語格なるに、これを手法(路功も文體といへど手法の事ともしがたし)なる如くいひなして反噬するは、却りて是れ痴人の夢を説けるのみ。

路功云。古人の文を學ばざるも可なり。文字の配合布置に苦まざるも可なり。余云。さればとて語格を知らざるも不可なり。文法を知らざるも亦不可なり。文の格式を守るは古を學ぶにあらず。文

字の布置配合を誤まる癖附きたればこり、これを正すときに苦むなれ。常に正格を用ゐるものは、何の苦もなかるべし。

路功云。文を學ぶ要は唯思想を養ふにあり。余云。文を學ぶとは眞直に取らば、文の格式を正すことならむ。此の如く解すれば、思想の涵養とは交渉なし。詩人の力を養ふとすれば、思想鍊らざるべからず、而れども語格文法も亦た無かるべからず。思想高くして語格、文法を知らざる詩人は、勇氣ありて割雞の力もなき兵卒の如し。不便や其勇氣は身を滅す媒とならむ。

路功云。美妙齋は僅に外形上散文と區別して詩を論ぜむとす。我等後進も其膽の大にして其見の小なるに驚かざることを得ず。余云。美妙齋は廣義の詩を論ぜしにあらざり。分明に韻文論と題したり。韻文を論ずるに、散文と區別して論ずる外に何の道かある。外形を棄てて論ずる日には、美なるものあるべし、美ならざるものあるべし。而れども散文もなく、韻文もなからむ。又何の韻文論かあらむ。

路功云。嗚呼「スタイリスト」、「ライムスタア」。諸君分明に此二名詞の意を解するや否。余云。嗚呼余が路功を呼ばむとするにも、亦唯是語あるのみ。(明治二十四年十月)

熊谷直好と八田知紀と

香川景樹が古今集正義につきて、熊谷直好と八田知紀と争ひ論ぜしところは、要するに左の數條に過ぎざるが如し。

第一、歌の本質は理路に涉るべきものならずとは熊谷も八田も思へりきと見ゆ。こは二人の師香川

景樹がつねに思慮といふこと、作意といふことなどを戒めし好結果なり。されど八田は天美と術美との別を立てずして、ひたすらに紀記萬葉の純粹を尊び、遂に極端なる無邪氣主義に陥り、古今の歌の中には、文華の代の風は逃れがたく、作意に落ちたるも交りけむとて貶めむとせり。熊谷は然らず。歌は美術なりといふことをおもひ得たりと覺しく、天美を抑へ術美を揚げ、古今集を以て獨り秀でたりとせり。作意を用ゐるは眞の歌にあらずとて、鳥蟲の聲を羨むべからずといひ、歌は無思慮より出でて、巧める如く、飾れる如きをよしとすといひ、人は事業の上より、義理の中に在りて、俗語を用ゐなれたれば、(歌よみて)工もあるべしといふなど、皆此意ならざるなし。若し八田が論を正しとせば、ヘルデルが民謡集をめぐる餘に、ギョオテ、シルレルの作を卑み、毛詩を取りて、李杜の篇を捨つるに至らむ。此條に在いては熊谷が説を通せりとす。

第二、歌の理想につきては、熊谷と八田との考、畧同じけれど、哲學上の用語に乏し時に當りて、強ひて緻密なる議論をなさむとせしより、無益の言葉だゝかひをなすに至りぬとおもはる。歌は理路を避くるものなれど、理想はなかるべからず。鶯蛙の聲の歌に異なるは、鶯蛙の聲に理想なくして、歌に理想あればなり。熊谷がつねに義理といふ字を避けながら、歌は俗話の言葉を備うて用ゐるものなれば、義もあり理もありといへるは、理想ありといはむとして、その語を得ざりしなり。理想を説かむとて、俗話の言葉を備ひたりといふは、きはめての窮策なるべし。八田が三十一文字すら、年の内に春は來にけり云々、袖ひちて結びし水など理りいづれば、禽獸の物に感じて鳴出づるとは更に混すべからず、彼あなによし、あづまはやなどの類は、やゝさる方に近しと分疏せしは、熊谷が歌は歎聲にて、鶯蛙の聲におなじといふ迂濶なる説を破するに足りぬべし。此條においては八

田が説を精しとす。

第三、歌は専門の藝なりや否やといふことにつきては、熊谷は歌は誰にも詠まるものなれば、師弟の道あるべからずといひ、八田は千歳此方歌は歌よみばかりよむものなれば専門の藝なり、師弟修行の所作を止むべからずといへり。歌は美術なり。天京なき人はよむこと能はず。非常の才なき人は善くよむこと能はず。熊谷が誰にてもよむべしといひしは誤なり。然りとて専門美術論に傾きて、師弟修行の所作を止めし過ぎたる八田が説も、高しとはし難かるべし。此條においては、二人の説を持とす。

第四、歌と治道との關係につきては、熊谷漢詩と和歌との間に差別を立て、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗等の事は皆詩の徳にて、大和歌にはなきことなりといへり。その本質より論ずるときは、漢詩も、和歌も、西洋の「ポエジイ」も同じく、必ずしも風俗と因果を相爲さることレツシングが言の如し。漢詩は教化を美しくしきといふは、詩を説くもの樂天主義のみ。法朗西の文學と美術とは風俗を壞りぬといふはルウソオが厭世主義のみ。八田のいはく、詩も禮樂も治道に妙用ありげに見ゆるは、畢竟聖人の代にして、政事の正きによる事なり。その政正からざるときは、其妙用いかでか施すところあらむ。其政事正き中にありては、大和歌といへども、時として其妙用國事に及ぶこともまた無からんや。此條に在いては、八田が説を卓といはむ。

以上おしなべて見るに、熊谷は考思頗こまやかなれども、動もすれば繁雜になりて、これをいひあらはすに當りて、言葉足らず、屢みづから矛盾に陥りて心づかざることあり。八田は理を覩ること極めて鋭く、その筆力もこれに適ひたれど、時としては極端に傾く弊を免れず。この評は唯古今集

正義總論補注論と古今和歌集正義追考序との上につきていへるなれば、二人の性を悉せりとは定めがたし。姑く録して同社の友に質すのみ。

文海の藻屑

文界久しく批評に上るべきものを見ず。眼光炬の如き緑雨子すら、俳諧論も誦するに足らず、新體詩も學ぶに足らねば、無事に苦みて死にたしといへば、誰か我目をのみ昏しと謂はむ。

逍遙子の言を聞くに、文界のかく淋きは、眞に寂れたるに非ず、政治に壓されたるにも非ず、文學の「チャムピオン」今猶雲の如しとなり。今年(明治二十三年)初半文學界風潮といふものを見るにつけても、小説のあながちに衰へたるに非ざるを知るべし。唯疎になりしは批評ならむか。某はこれを批評の内攻なりといふ、頗理あるに似たり。されどかの盛なりし批評を皮表よりむかひこみしは何の力ぞ。昔獨逸のハイネは文敵メンチエルを罵りて、汝が手は醜穢なるものを文界より掃ひ去りしために猶臭しといひしが、今の我國にも手臭き人あるには非ずや。

元祿文學も、國文學も、大稗史主義も、げに理勢の賜なるべし。うの含める多少の善美を揚ぐる心は、いまだ其醜惡を抑へざることを能はず。且近比出でし新體詩論と俳諧論とに就きて疑を大方に質さむ。

新體詩と云ひ、俳諧と云ふ、皆國文家の外に立ちて韻文を説くものなり。かの國文家には福住正兄氏の如く、古體の長短歌を基として、五七の調を取るものと、佐々木信綱氏、皆無齋等の如く、今様を善しとして、七五の調を取るものと、多少相容れざるやうなれど、其立言の礎は國文の語法なるに、

新體詩論者と俳諧論者とは必ずしもこれを顧みず。彼は所謂平談俗話を得意の處として、別に一派の語法を定められど、此は殆空拳場に上るものにて、うの戴く所文學上の虛無主義に過ぎず。

此分説は果して各其核心に中りしや否やを知らねど、五七の古調と七五の新調といづれか優れると問ふは、五言七言の間、「トロヘウス」「ヤムプス」の際に、漢洋詩體の取捨を定めむとする如くなるべく、或は十七字にて篇をなす故、發句を短きに過ぐと云ひ、或は一箇の短歌三十一字は猶想を抒ぶるに足らずと云ふは、漢詩絶句の妙を忘れ、西詩「エビグラナム」の奇を棄てたるに近かるべければ、いづれも取るべきものに非ず。調の緩急、篇の長短は皆並び行はるべきものなれば、唯詩材に隨ひてこれを役し、梁麗穴を室ぎ、鶴鳩畫出でざらしめば、則可ならむ。

倭歌には萬葉以還の大歴史あり。その傳最舊し。俳諧は聯歌といふ一階級を経て、和歌より出でしものなり。新體詩の歴史は若有りとせば未來にのみ屬すべし。故に三者の別には時の新古もあるなり。

先づ最新なる新體詩の論を閲するに、唯是れ一味の虛無主義なり。こは大學諸家の新體詩出でしとき、既に芽を抽きいでたるものなるべけれども、うの近く茂りし地は初の江湖新聞にて、別天樓の主人を園丁とす。かの滅々亭長、飛目逸士など名乗りたる中にも、恐らくは同じ人あらむ。此論者は國文の語法を「クラッシック」と稱して一概に排し、猶これを奉ずるものを古典屋と罵れり。其言にはいはく。文法語格は活版小僧の役目なり。既に文學者の事にあらず。紙屑の相場今少し騰貴せば、活版小僧の地位は古典屋の先生に與へられむ。若時を得貌に威張りて見むとならば、紙屑籠の底抜くるまで威張りて見るが善からむ。斯く云ひてルウツオ、ラシイヌ、ユウゴオなどに語法の過あり

しを引きて、大家は語法に拘らずといへり。湖處子は此夥伴に「クラッシック」に傾きたりとて責められし人なれど、猶後猿阿彌、湯島の世捨人などの攻撃をば免れざりき。(今は和歌を學ぶといへば、別天樓は益罵るべし)これ實に別天樓等の破壊主義の極端に達したる證なり。嘗て不痴不慧子といふ人ありて、書を別天樓に寄せていはく。別天樓主人の「クラッシック」を取らざるは善し。然れども今のこれを取らざるは、豈心にその不可なるを知りて取らざるか、抑又「クラッシック」の艱澁學び難きためにこれを學ぶを厭ひてか。われ長嘯諸篇を讀みてこゝに疑ありと。新體詩論者既に古典を紙屑とする勇あらば、讀み難きがために取らずといふ如き卑怯の振舞あるべからず。不痴不慧子がこの詩界の改良家を見ること山を負ふ蚊に等きは、吁嗟又酷なり。然れども余嘗て別天樓等が作れる所を見るに、花が散りけるといはずして花が散りけれと云ひ、月をこり見れといはずして月をこり見ると云ふ類極めて多し。是れ古に其言なく、今其文なき創製の語法なり。唯疑ふ、古今未曾有の語法は、果してこれを創製して、其生存を望むべきものなるかを。「パシリングア」を見よ。「フラビュック」を見よ。古今未曾有の言語と語格とを創作せんとして、其目的を達し得ざるもの比々是なり。「パシリングア」「フラビュック」は今の歐洲諸國の語に比ぶるに、頗輕捷なるものなれど、尙且行はれざらんとす。新體詩論者の創製は何の益もなし。これを育てこれを傳へむと欲すと雖、其れ得べけむ。嗚呼西洋の「クラッシック」は死文となりぬ。而れども繼いで起りし「ロマンチック」は古今未曾有の語格を作らず。西洋の大家の詩にも、韻脚の妥ならぬあり。句に「ヒヤツス」多きあり。而れども古今の語法を併せ棄てむとはせず。ルウソオ等の如き大家に語法の誤ありしも、過は過なり。これを恕するは可なれど、これに倣ふは不可ならむ。

俳諧は新なりと雖、多少の歴史あり。鷗鷺子が倭歌漢詩を排して、俳諧を起さむとせしも、歴史上より論を立てたるなり。其言にいはいはく。赤人人丸等の倭歌は、これを中等以下の人に示さむに、能く其意を解するもの幾何ぞ。和歌を學びたりといふ、割合に少き人の外は、巧拙の評はさて措き、其大意の在るところをだに、明解し得ざるべし。漢詩は語格の不便なるより、少數作者の詩を除き、餘は概して興味薄く、全く造りものに外ならざる如し。兩者の長處は決して消滅せしにあらねど、今日の世態には不向なり。社會自然の必要は既に消滅したり。これを再興して完全なる詩體とすべきに非ず。芭蕉翁の心は和歌漢詩を折衷するにありき。その俳諧は即ち社會自然の必要より出でて、現に其儘を究めむとす。現在俳諧の全盛を見たる後ならでは、新詩體の全盛は決して望むべからず。故奈何といふに俳諧の調、詞、觀念を全然離れて、一足飛に完全なる詩體の作らるべき筈なければなり。

倭歌の舊く俳諧の新なるは、寔に鷗鷺子が言の如し。古の文學より今の文學を生じ、今の文學より未來の文學を生ずべきは、いかにも順路なるべく、今の文學を棄て、未來の文學のために、古の文學を再興せむとするものあらば、寔に逆路を取るに似たるべし。而れども今の文學を假認したる俳諧にして、これを倭歌に比べたる上にて、退歩の迹あらば奈何。又鷗鷺子が目中にて、濕灰の觀をなし、今の和歌に、赤人人丸の作の如く解し難からずして、猶光燄を吐くべきものあらば奈何。是の如き時には、未來の韻文は其種子を俳諧に求めずして、これを和歌に求むと雖可ならむ。是の如き時には、一足飛にても妙境を履むべき望なきに非ざるべし。此種の一足飛は、歐洲の文學にも其例ありて、かの再生期ルネサンスの文は分明に中古の積習を一洗するに、「クラッシック」時代の泉を以てした

るに非ずや。余は固より俳諧中に於いて進歩の迹あるを認むるものにて、所謂平談俗話の裡に詩材の境の擴められたるを知れり。されどこれと共に俳諧中に退歩の迹あるをも掩ふこと能はず。森三溪氏は既に一たびこれを擧發しぬ。其言に云く、俳諧者流が説くところの文法の不完全なるは、文法の學の未だ闢けざりしがためなり。俳人は文法學の未だ發達せざる前、已に一定の法式を確立して、頑固なる城廓を造り、後世文法家が種々の發明をなしたりしも、これを採用することなかりき。歌は雅言を用ゐる難あるも、これを研究するに八衢、玉の緒等の書あり、以て門に入るべし。俳諧は其法式の煩なると意味の幽玄なるに依りて、遂に通俗の名義を無實に歸し去れり。此言當れり。

俳諧の法式にて語格の理に背けるは、三溪子もいひし如く、これを擧げむとするに多きに勝へざるべし。先づ其假名遣の論を聞くに、一として取るべきものなし。曰く鹽の假名をしほとするは撥字の音なるためなれど、しをにても可なり。曰く暑う寒うはうなれど、假名書の經文の如くなれば、書家の口授によりてふとすべし。曰くやふは伸なり。やうは縮なり。聞き善うては縮みて惡し。聞きよふてと書くべし。曰くひは動きいは動かす。故に鯛はたいなり。曰く葵は動かざるあふいなる理なれど、あふきて日かげを廻るゆゑに、ふひの唇音に因みてひとす。是れ所謂次手書なり。曰く奥のれは急にて、口のをは緩なり。男はれとこ、下風はれろしなれど、女はをんな、山下風はやまをろしなり。曰く庭澤粟鉞の類ははに書けど、決してわの字ならむ。曰く机はつくえなり。木末はへはえ皆善し。是等は皆辨ずる價もなかるべし。

手仁遠波の論に至りても、驚くべきこと少からず。曰く君し人しなどとしを挿むは和訓の神秘なり。

曰く見し聞しも暑し寒しと同じ截字なるは、皆いきしくの助語なればなり。喰はし飲まじは助字のしに非ざる故截字とすべき理なし。此類猶衆し。かなとやとは三溪子辨じぬ。

俳諧の文法は唯所謂截字の沙汰に存ず。古より截字は法式上むつかじきものに説きたれど、到底文法正ければ式に合ひ、正からねば合はぬ道理にて、此文法上の判断は、國文家も直に倣し得べく、洋學者も直に倣し得べし。その偶此判断に反する如きものあるは俳人の謬見なり。凡そ韻文には韻文としての句の外に、散文としての句讀あり。發句に五言七言五言と韻文としての三句ありと見て、その散文の句と一處に落ち合ひたるを心切と云ひ、韻文としての句の中間に、散文としての句の入りたるを中切と云ひ、韻文としての句に、散文としての讀(コンマ)の入るべき處を數へて何段切と云ひ、韻文としての句に、散文としての句(ブランク)の入るべき處を數へて何字切と云ふ。此外に、海暮れて鴨の聲ほのかに白しといふ天和中の作の如く、散文句讀の中間に、韻文としての句入りたるありて、句讀切と名づくれども、病弊ならむ。是れ截字の畧なり。押字とは發句の前半に、首尾鉤(西洋の鴨脚標)を附して、これを下より押ふべき字を云ひ。抱字とは發句の後半に首尾鉤を附して、(西洋ならば又前後半の間に「コロン」を下すべし)これを上より抱くべき字を云ふ。是の如きは皆極めて簡易なる文法のみ。古今萬邦の詩一としてこれなきはあらねば、正しと雖、俳諧の専有に非ず。况や俳人の解釋は屢岐路に走りて、毫釐千里の誤を致すを見るをや。次に俳諧の文法に省畧多きは、十七言の短きより來りしならん。鷓鴣子も引きし芭蕉の遺命に、調は業平が高儀を寫せとあるは、早く此必要を認めたりと見ゆ。在原業平は其心餘りて言葉足らずと評せられし人なればなり。夫れ省畧と省文とは、能く生割奇創の趣を成せども、要するに是れ變に

して、若常とせば切迫して面白からざるべし。故に石鶯子が頼政の櫻の歌を以て碩布が句に比べ、伊勢が散りちらすの歌を以て蒼虬が句に比べて、雅俗難易の外には優劣を見ずといひしは、發句に小屋の裡にて長槍を揮ふ如き處あるを忘れたるなり。此理は俳文の句法に至りても同じ。

已に俳諧の法式を檢したり。これより進みて、その所謂幽玄(三溪子は幽幻に作る)の意味を尋ねむ。近比世に出でしものに就きていへば石鶯子の析玄あり。其言の畧にいはいはく。俳諧の重すべきは、その文學の最幽玄なるものなるゆゑなり。蓋言語は觀念の表象なり。されど同じ言語の異なる觀念を表象することあり。故に若芭蕉の觀念なくして、古池や蛙飛込む水の音と詠せば、是れ凡常の句ならむ。奈何といふに此句にして唯草庵靜座の折、庭の古池に蛙飛込みて、水音も慥に聞ゆといふ淺薄なる意を含みたらば、尊ぶべき所あらざるべければなり。古池の名句たる詠者芭蕉翁なるが故なり。廼ち翁の光景境界等より生ずる觀念の幽玄なりしが故なり。翁が佛頂禪師に參して豁然大悟せしをりの句なればなり。此説は早く春亭主人の攻撃に逢ひぬ。其言に云く。若古池の句は僧と問答のをりに發したるゆゑに名句なりといはば、これを文學的のものといはむよりは禪學的のものといふこそ穩當なれ。これを文學の幽玄なるものといはむよりは、宗教の淺薄なるものといふが宜しからむ。

石鶯子が假にも文學の一部たるべき發句を以て、利久が持たりしゆゑに尊き破茶碗、楊妃が遺し、故にありがたき素鞆と同一視せし過は固より辨ずることを要せず。されど石鶯子のみ罪羊とするは酷ならむ。何如といふに已に俳諧傳の自悟自證を是認して、俳諧の禪を説くときは、到底形而上の趣味を遠離くること能はず。古池の句芭蕉が吐きしゆゑに尊しといふもこゝより出づ。憾むべし、

美の物たる形と風馬無涉の地位に立つこと能はざるを以て、美文學は此の如きものに重きを置くに由なきを。余は始より一切の偈を廢せむとするものならねど、かゝる教詩の類は、渾てこれを文學の繼子と見做さざることを得ず。橘の好古が俳諧論に、松乙がかしましい聲で淋き蛙かなといふ句を、古池の句の上にあるといひしも、これに似たる意にはあらずやと思はる。

見よ俳諧の語法は和歌進歩の背後に落ちたり。其文法は普通の文脈の外省畧に偏したる所あり。其所謂幽玄主義は教詩の小區域に收むべし。されば發句は十七言の詩としては、和歌の傍に立つことを得べしと雖、和歌に代りて一代の韻文とならむこと覺束なし。文學の全局、韻文の大體より見れば、獨存の俳諧は和歌より進歩したるものに非ずして、これより退歩したるものなるべければなり。

俳諧論者には又所謂和詩を重するものあり。三溪子も云く。俳道已に和詩といふものあり。かの新體詩の元祖にして巧に韻脚を押し、長短自在に其觀念を述べ得るものなり。これを發揮せば、詩歌を壓倒して我國文學の光輝を増すべく、韻文制定の功は則夫子の手に落つべし。鶴鷄子も云く。俳諧は平民的詩賦なり。詩人學者複雑なる思想を述べむとせば、これを土臺として、更に西詩及我邦にありとあらゆる歌曲を參考して、長篇を作るべし。俳諧を土臺としたる長篇は蓋和詩の類ならむ。余も本朝文鑑、和漢文操、風俗文選などにて、所謂和詩を讀みしことあれども、其結構にこそ或は處々參考とすべきものなきにあらね、概利病相半して傳ふるに足らざる作なりき。例を引きて此言を證せむは難くもあらねど、姑くこれを後猿阿彌一流の人にゆづりて止むべし。こゝには唯未だこれ等の書を見ざる人のために、これにつきて可笑きこと一つ二つを挙げむ。この類の俳書には歌行謠曲など一々韻文の門を立て、散文にも亦論說記傳など其名を定めたるが、

風俗文選には傳の門に許六が直指傳あり。こは俳諧血脈相承の事を書きたるものなるに、公平傳、五郎四郎傳などいふ文と伍をなしたり。傳の意義豈奇ならずや。又本朝文鑑に赤人が望不盡山歌並短歌を富士引と題して引の部に入れたり。其他古文詩の題を換へ章を斷ちたる、一として恣意に出でざるなし。試に同じ書の歌の部を開き見るに、その載せたる歌人の順序左の如し。一伊弉諾、二伊弉册、三下照姫、四柿本人麿、五源頼朝、六貫之娘、七高市萬呂卿、八芭蕉庵、九東華坊、以下は略す。これに由りて觀れば、一足飛を忌むは唯近比の俳人のみなる如し。俳諧論者は又俳諧を以て、獨り和歌のみならず、漢詩をも併せ取りて、世の進化に適應せしめしものなりといへり。和詩の韻法等は固より漢詩の分子なり。芭蕉は實に杜詩より得たる所ありといふ。而れどもこれより下の俳人に、いかなる漢學あるかと問はば、頗覺束なきことならむ。蓮二坊が眞名文の説を見て其一端を窺ふべし。

その文に曰く。先師の遺稿の夜話に、我初漢文を學ぶとて、諸書に兮字の和訓を疑ひて、普く名達の學匠に尋ね侍りしに、誰々も歌の助語とのみいひて、漢に漢文の用は達すべけれど、倭に倭文の訓義を辨へざるに、一年洛の桃溪に逢ひ侍りて、さても兮、その後兮と語を留めて、其次を按ずる助韻なりと聞きて、其後頻に和訓を考ふるに、あいうえの五音にして、譬へば大和の唱歌にも、君があ(兮)代にい(兮)と韻の餘を引かでは、平話にして歌に非ず、節とは詠聲の曲なりと知れば、盧允武が助語の數百字も、概和漢の兩用に通じて、もね(最兮)ともみえ(見些)とも和訓の用とす。然れども漢文には假音といふことありて、於鳥も一樣に用おれば、和文にも訓を借りて、待松は一樣に通ず。かくまで其理は知りたれど、唐音の平話に通せざれば、花と鼻との訓は知れども、木と

目との音を知らず。さるは智慧にも學問にも及ばず。生れて唐音に慣れぬものは、學びても知らぬ筈なりと、三十の春より思ひ果てぬ。公等も早く此道理を察して、大和に眞名の一體を立つべし。漢文の跡を留めざれとぞ。茲に所謂眞名文の例に十論讚の一節を引かむ。曰爾有則俳諧之一道者。不爲學佛兮。學儒兮。實老莊楊墨之虛兮。常知虛實之變而。將說今日之世法爾者。歌人麼。不隔臥猪之床兮。連歌麼。不爭千鳥之友兮。姿者構文武之門而。情者爲同花鳥之道矣。假令爲虛於其實了共。不可爲實於其虛者。遇名龐居士之遺言也則。其言也。何不可善焉。其以祖翁之令授道也則。是以先師之爲記法也止。譯にいはいはく。志からば(有則)俳諧の一道は(者)佛を學び(兮)儒を學び(兮)老莊楊墨の虚を實とせず(兮)常に虚實の變を知りて(而)今日の世法を説かむ(將)には(爾者)歌人も(麼)臥猪の床を隔てず(兮)連歌も(麼)千鳥の友を争はず(兮)姿は文武の門を構へて(而)情は花鳥の道を同うせん(矣)たとひ其實を(於)虚とすとも(了共)其虚を(於)實とす可らずとは(與者)名に遇ふ(負ふならん)龐居士が遺言なれば(也則)其言ふや(也)何が善からざらむ(焉)うれを以て祖翁の授けし(兮)道なれば(也則)これを以て先師の記する法ならし。(也止)是等も俳諧の進歩したる處とは看做し難からむ。

余は已に俳諧の進歩の迹は、這等に非ずして平談俗話主義なりといひぬ。俳諧口訣に、俳諧は萬葉の意なれば、(又是一足飛)貴となく賤となく味ふべき道なりとあるは、即ちこの健康なる俗談平話主義なり。石鶯子等が必ず誰にも分らずべしといふ平談俗話主義は、一々伯が一讀其意を見るべき詩を、未だ妙處に到らざるものとすると、俱に是れ極端なれば、余が取らざる所なり。健康なる俗談平話主義より生ずる新材境の事は、文章が詩歌俳諧辨善く盡したり。その和歌の關點を擧げたる條に

いはく。流石に蛸壺の底さし覗きて、哀知るに便なく、小鰓交りに竈馬鳴く蟹の屋には腰掛くべき褥も見えず、矧て野くれ山くれの端々、牛道鹿道猿すべりの邊は名を聞くにも及ばず云々。又俳諧を説いていはく。俳諧の形たるや、簑笠竹杖艸鞋しめつけて朝立したるが如し。京田舎嫌せず、一所にあなまどひせず、雪の市中に推れ、陽炎の芝原にこけたり。或は山寺の小料理に慰み、士亭に逗留をあかれたるも、一段の笑なるをや云々。

思ふに若和歌の道、赤人人丸の時代より一步をも進めず、唯舊套をのみ守りたらば、俳諧は其平談俗話主義を以て、詩材を取るべき版圖を擴め、終にこれにうち勝ちて、日本の韻文となりしも亦知るべからず。然れども歌人にも桂園一派の如きありて、材境につきての進歩をなしぬ。比日高崎正風氏の歌なりとて傳ふるものあり。いはく、ゆたかにも立てる振袖ふりかへり人の見る子は誰が子なるらむ。又いはく、吾妹子が心づくしの綿いれを風の吹透す冬は來にけり。振袖も綿いれ衣も、既に三十一言の詩に入りしを思ひ、今様の材境これよりも廣かるべきを考ふれば、蛸壺の底を覗き、山寺の小料理味ふ歌人も生れむ。余は嘗てゴールドスミスが小説にて、主人の留守に家番が盛衰張ることを叙したるを見しが、和歌一たび我家に還らば、十七言は唯十七言の一體として存すべきのみならむか。鶉鷄子石鶯子などは解し易き俳諧と解し難き和歌とを引きて論據としたれど、主客地を易へたる例は彈記すべからず。和歌の姿艱澁に見ゆるは、語格の堅礎に馴れざるためなり。これに反して俳諧の自在は、褊狹なる法式に束縛せられて、變化少きに心付かざる處より生ず。嗚呼、こは芭蕉などの意にも慚はざることならむ。今の俳諧口訣にいはく。古今の撰集に眼をさらすべし。又云く。手仁遠波は專要なり。夫れ我邦は手仁遠波の國なれば、先哲の作を味ひ、一所も粗末なる

こと勿れ。知るべし、特に法式を鍛成して、國文語法の外に小天地をなさむとするは末流の心なることを。

されば韻文の上にて、國文の語法に並ぶべき新語法(譬へば言文一致體散文の語法の如し)出でば知らず、その然らざる間は、進歩の望を繋ぐもの唯一足飛の手段あるのみ。若強ひて俳式中の語法文法と幽玄主義とを糝莠視して、其俗談平話主義は和歌に於ける如く健康なりといひ、俳諧の特性を一層々剝ぎ去らば、恐らくは參を飲みて雉經し、癪を潰して身死する如くならむ。俳諧十論、十論爲辨抄など、固より俳諧の道を説くことこゝにいふ所に止まらず。されど其正きは汎通の詩性にして、惜いかな、俳諧の私すること能はざる所なり。(かの芭蕉西鶴等が詩形を離れたる長處の、俳人としての長處にあらざるも此理なり)又今の正からざるものに至りては、審美の畛域を踏むれば文學として論ずべきに非ず。余は今の辯護者出づるを待ちて猶これを指斥せむ。(明治二十三年十月)

今の諸家の小説論を讀みて

詩に一體あり。散文を用いて事を叙す。世にこれを小説といふ。それ詩は果して結語なるを尊ぶべきか。或は散文なるを尊ぶべきか。東西の詩學者にはこれを論じたるもの甚だ衆けれども、必ず一を存じて一を廢せんとしたる論は未だ聞かず。唯だ彼結語なるものは、これを誦すれば琅然たる其聲響、憂然たる其節奏、自ら一種の長處を具へたり。而れども美術の主として空想に待つことあるを詩となすときは、詩の本體は必ずしも音響と節奏とにあらざるべし。故に春の屋主人の曰く。有形美術は専ら色彩と形容とを主眼となし、其工風をしも鍊ることなれども、音樂唱歌は之に反して、ま

づ専らに聲を主として其意匠をなん疑らずなりける。詩歌戯曲はこれとも異にて、主として心に訴ふるが故に、其主腦とする所のものも、色彩にあらず、音響にあらず、他の形なく又聲なき人間の情即ち是なりと。(小説神髓上卷三丁表) 苟くも詩の全體よりしてこれを言へば、散文は比較的純潔にして、結語は比較的雜駁なり。彼は空想以外の物に待つことなくして、此はこゝに待つことあればなり。然りと雖若し輒ち純潔なるものは必ず雜駁なるものに優ると云ひ、又彼は必ず此に勝つと云はば、則余等は未だ遽にこれを信ずること能はず。

西歐現代の大家には、或は結語を以て僅に骨骸を簡冊堆裡に留めたるものとなすものなきにあらず。日本にても春の屋主人はミルトンの詩を引いて論じて曰く。思ふに韻語を用ゐるも、詩を吟誦せしころにありては頗る要なりしならめど、現世のごとくに默讀して、唯通篇の神韻をばめで喜べる世となりては、さまで緊要なるものとは思はず。(同處上卷四丁裏) 美妙齋主人も亦嘗て失樂苑の序を引いてこれを論じ且以爲へらく。元來西洋の言葉は「エレメンタリイ」にて發音するもの多く、その引いてこれを論じ且以爲へらく。元來西洋の言葉は「エレメンタリイ」にて發音するもの多く、その點まつたく日本のと違ひて、しかも「エレメンタリイ」の言葉にて組立てたる歌曲は實際韻ありて大に益を得る事さへあり。うれをもミルトンは排斥せり。畢竟韻といふものは、句脚の整頓するため置く區域といふより外なく、うの實用は主眼にして、うの用ゐ方の巧拙は第二に位す。支那語はあながち「エレメンタリイ」の種類のみにあらねど、同調にて進む語勢多き上は、もつとも韻を要す、されど西洋のと同じ格にはならず。ミルトンも言ひしが、曲節を際立たせて明かに見するは野蠻時代の美術心より起る。歌曲に於いても韻にて特別な響を作り、感動を強く與へられずとも、猶律のわづかの高低にても句脚を聞きわくる力はありて、それ故野蠻人に一寸の感覺をあたふるも

のは一尺の感覺と思ひなされ、感に克たれて却りて厭ふ心を生ず。まして日本語は語法よりして、語調よりして韻を要めぬ種類なりとす。日本の語には音調の束縛(アクチュエツアチオンを指す)は非常に少なく、又た言葉自身も「エレメンタリイ」にあらずと。(以良都女) 唯後者は邦語の全體に就いて、韻脚の利害を説き、其主眼は音節上に在り。前者は廣く詩學上に就いて論じ、其主眼は韻語を抑へて小説の散文を揚ぐるに在り。是れ異なりとなすのみ。これを要するに、日本今日の風潮は散文の小説に左袒するもの多きが如し。

余等は散文の音響を借らずして心を動かすものを以て、詩學上比較的純なるものとなせり。この純なるものは千載の久き何れの國にてもかの琅然憂然たるものに掩はれたるが如き迹なきにあらず。故に余は近世に至りて散文詩の勃興せるを觀て、此純詩體の漸く將に暗黒裡より顯れんとするを喜ぶものなり。往時曲亭馬琴といふものあり。小説を以て一時に鳴り、これに繼起するもの皆その武を追ひて還ることを知らず。而れども其得意の文は純正なる散文にあらず、美妙子の慧眼は早くこれを看破したり。其言に云く。文章と詩との眞の定義を、文章は節奏に因らずして物あるひは事を述ぶるもの、詩は節奏に因りて物あるひは事を述ぶる者と定め、これを標準として馬琴生涯の文體の何れか眞を得たと問はば、前期の文却りて後期のに優る。何故と言ふに、前期のは文章らしき流麗にて、後期のは歌らしき流麗なりと。(新小説外篇七卷一面) 洵に然り。馬琴が後年得意の文は、殆全く七五の調ありて、韻こゝ押さね、うの一種の結語たるは掩ふべからず。今の小説家は、其文體は種々なるにもせよ、能くこの窠臼を脱したり。渠等は獨り勸善懲惡の陋小説を變じて美術となしたるのみならず、又能く結語の小説を變じて散文となしたり。亦た善からずや。

夫れ結語命脈の辨は、小説論と關係少きを以て此に細説せずと雖、竊にこれを文法語格等の我國語と相齊しからざる、又「アクセント」の強弱相殊なる外邦の詩に徴して、その盛衰の勢を考ふるに、未だ輒ち韻語を以て過去の現象となし、散文を以て現世の詩體となし、これを必然相繼いで復た並び與らざるものとなすこと能はず。否、余等は兩者の相繼げることの歴史上の事實たるを是認すると同時に、亦未だ曾てその或は兩立して而して共に盛なるべきことを信ぜずんばあらず。

試に支那の文學を以て例となさん。その歴代の沿革を観るに、散文の體、六朝に至りて一變し、併四體六の文となりて、其純然たる散文の本體をば何時しかに遺失したり。何如といふに四六文は散文にあらざり、結語なればなり。是れ豈馬琴の流麗と同じきものにあらずや。既にして昌黎等の崛起するありて、大に散文の復古を謀れり。是れ豈春の屋及其後繼者の作せる運動と等きものにあらずや。さればとて韓柳歐蘇の後、四六の文字、全く跡を支那に絶ちしにあらず。其應に摸寫すべき事物の細大、輕重、硬軟に依りては、これを藉りて以てその絢爛の光を發揮することなきにあらず。况や所謂古詩の雄篇大作は決して散文再興に依りて衰滅せず、否、これと俱に其盛を極めたるをや。嗚呼、結語の興廢起滅豈言ひ易からんや。

獨り支那を然りとすのみならず、散文韻語を兼ねて其盛事を極めたるは、西歐諸國に其例少ならず。彼獨逸の如きもレッツシング、ギョオテ、シルレルの三家が一世の文壇を領畧したる日には、散文と結語と相並びて發達し、其偏勝をば見ざりしに、今や頗る散文の偏勝する勢あり。然れども今の小説の盛なるが爲めに、結語の命脈を以て既に全く絶つたるものとするは、未だ必ずしも定論ならず。彼シルレルが小説家を蔑視して詩人の半兄弟と云ひしは姑く置き、ゴットシャルは其詩學

に於いて論じて云く。近世獨逸の文學界に散文的壞裂(プロオザ、チエルスブリツテルング)を致ししは猶是れ現世の新分子の醱酵に始まれるが爲めなるのみ。新獨逸の詩人はシルレルの遺訓を忘れず、進みて「エボス」の新境地に入らざるべからず。小説には自ら其區域あり。而れども彼は決して「エボス」の巨體を奪ひてこれに代ること能はずと。彼は特にギョオテが「ヘルマン」及「ドロテア」の長篇を引いて、第十九世紀の紛糾たる人事も亦一たび良治の淘汰に逢ふときは、有韻詩の材料となり難きにあらざることを證明したり。嗚呼、結語の興廢起滅豈言ひ易からんや。

且詩の三種よりしてこれを言へば、叙情叙事の結語は叙情叙事の散文と共に行はるべく、有韻の戯曲は散文の傳奇と並び演ぜらるべし。想髓は必ずしも形式のために縛せられざるべし。余は我邦に於いては散文と結語との偏重せられざらんことを望むものなり。長歌の作家と小説の作者と臂を連ねて進みてこそ、權衡の宜きを得たる新文界は組織せらるべきものなれ。

夫れ詩の材を採るや、寥廓たる宇宙、紛糾たる群生、苟も顯象となりて我前に陳ずるもの、適くとして宜からざるなし。小説も亦然り。唯詩の汎境に於いても、小説の區域に於いても、美の約束は避くべからざるのみ。而して詩人の材を使ふや、情感を主とするを觀相を主とするとの別ありて人各其長を殊にす。兩者は初より相拒的の意義あるものにあらず。唯觀相的詩人は外よりして詩境に進み、情感的詩人は内よりしてこれに入るを以て、其形迹頗相殊なるものあるのみ。縦令又此情感と觀相とは偏勝することありとするも、或る程度までは、詩の本體を傷るに至らず。譬へば面影の詩中にてギョオテは「ミルテ」の木はしづかに、「ラウレル」の木は高くを賦し、レナウはこゝにはあはれに柳戦きて、夕暮の風にふるふあしの葉と賦したり。彼しづかの字、たかくの字、此あ

はれの字、ふるふの字に注目せよ。均く是れ景を叙すれども、彼は観相を現し、此は情感に想ふ。而してギョオテの句を誦すれば、南歐溫和の風景忽焉として我目前に浮ひ出で、レナウの句を誦すれば、北天凄冷の物色宛然として我心頭に發露す。強ひてこれが優劣を論ずべきにあらざるなり。夫れ斯くの如く宇宙の間物として詩材に供すべからざるものなきなり。而れども金石草木は僅にこれを用ゐるのみ。詩中活動の分子は人獸に外ならず。唯獸はこれを用ゐるに多く擬人法に依る。例へば劇曲には馬琴の化龍丑三鐘あり、叙事韻語には獨逸二大家の「ライネッケ、フックス」「アッタア、トル」等あり。要するに格外のみ。故に余等は小説活動の分子を以て、主として、これを人に歸することを得べし。故に春の屋の云く。小説の主腦は人情なり。世態風俗これに次ぐと。(小説神髓上卷一九丁裏) ゴットシャルの云く。小説の境地は即ち是れ人生の境地なりと。

故に小説家の驅使すべきは人間の活現象なり。そのこれを驅使するにはギョオテ、ジャン、ボオルの如く觀相的なること多きと、シルレルの如く情感的なること多きと、各相殊なれども、詩客の難んずる所は、この現象に就いて古人の未だ到らざる處を感得し、能く一家の詩をなすに在り。幸なるかな、前世期の終末に至りて、所謂實際主義の風潮は勃然とし興り、日を逐ひて其勢を増し、今や吾人は知らず識らず生活の筏を其中流に浮べたり。試に頭を回らして見よ。哲學を事實の地盤に措き初めしより以來、政治を實力の基礎に安置せしより以來、史學を其淵源に溯らせしより以來、萬有自然の學を實驗結果の府となさんと企てしより以來、吾人は此小説といへる散文詩の材を撰ぶに、一生面を開き得たり。此手段に由るときは、以て彼隱微を極めたる人情を窺ふべく、以て彼複雑を

極めたる世態を曉るべし。一生面とは何ぞや。曰心理的觀察法是なり。これを用ゐること極端なるがために、無益なる敷衍に陥らざる限は、此法實に新詩界の好手段なり。

余等は以爲へらく。簡潔雅健なる古文字の法も固より廢すべからず。粗枝大葉、神彩躍如たる古作者の伎倆も固より棄つべからず。而れども余等はこれのみにて満足すること能はず。將に進で靈魂活動の迹を探討してこれを叙せんとす。春の屋は云はずや。世に歴史あり、傳記ありて、外に見わたる行爲の如きは、概ねこれを寫すといへども、内部に包める思想の如きは、くたくしきに渉るをもて、寫し得たるは曾て稀なり。此人情の奥を穿ち、所謂賢人君子はさらなり、老若、男女、善惡、正邪の心の内の内幕をば、洩す所なく描きいだして、周密精到人情をば灼然として見しむるを、我小説家の務とするなり。夫れ稗官者流は心理學者の如し。宜しく心理學の道理に基づき其人物をば作るべきなりと。(小説神髓上卷二〇丁) 余等は世の淡きこと水の如く大空の月の如くなる抽象理想家を雇ひ來て、此様々の妄想を盛りたる堪忍囊の内に入りて、其個々の分子を探らしめんと欲す。彼等は純白なる道念のみこれを支配するを見るべきか。純高なる思想のみ其内に充ちたるを見るべきか。余等は決して然らざるを知るなり。且一卷ツルゲニエツフの小説を開きて見よ。讀んで喜怒哀樂紛藉撩亂の處に到りて、吾人の腦髓中に無數長短粗細の絛索ありて、これに應じて鳴ることあるにあらざるや。

或るひと余に謂て云く。東洋の文は粗大なり、西洋の文は精細なりと。是れ西文を觀て未だ其全體を知らざるのみ。渠は西學の今を見たれども、未だ其古を觀ざるのみ。上希臘の「クラシック」時代より、下佛蘭西ボアロオが詩法の行はれし時代に至るまで、簡淨遒勁の語を藉りて、咫尺の間明

暗相映する畫圖を描出せしもの、果して幾許ぞや。西文は歴代巨匠の手を経て、能く粗大に能く精細なる利器となりしものなり。而して今や其精細なるものは稍や其粗大なるものを壓倒したるが如き勢あるのみ。畢竟文の粗大なるは、人情人事の粗大なるに由るものにして、人情人事にして一たび精微纖細の境に入るときは、文も亦勢これに隨はざることを得ざるなり。

余等は既に心理的小説を是認せり。然れども心理的觀察は固より作詩の方便にして、その目的にあらず。これをして美術の境を守らしめんとするには、勢多少の檢束を加へ、想化作用によりて自然の汚垢を淨め、製作の興に乗じて、空に憑りて結構せざるべからず。請ふらくは佛國近代の一家エミル、ゾラの自然派を見よ。渠は心理的分析に依りて成績を得ることに、別に美の標準に依りてこれを度ることを須たずして、これを呼びて「エトユウド」と做せり。其弊や、これを學ぶものをして、水と云へば必ず濁流を寫し、情と云へば必ず姪慾と殘忍の心を寫すに至らしむ。亦甚からずや。佛國にては他の美術區域、繪畫にも「アンプレシヨニスト」あり。自然に向ひて觀察を試み、其得たる處をば、一毫の私心を加へずしてこれを絹素に委ぬといふ。是れ固より抽象的理想家の弊を撻めんとする意に出づるなるべしと雖、其末流の弊に至りては、獨り三年茹弱を畫く(篁村子の言、國民之友)のみならずざるなり。是れ豈方便に依りて目的を忘れたるものにあらずや。ドオデエの如きは即ち然らず。其自然を驅使するや、塵埃自ら脱落して詩美顯る。縦合渠をして自然主義を奉せしむるも、其天賦の空想はこれがために累せられずとも謂ふべき歟。余等は嘗て此弊を論じて云く。夫れ分析と解剖とは之を小説の結構に用ゐること固より不可なることなし。然れどもゾラの直に分析解剖の成績(所謂エトユウド)を以て小説となすは妥當ならず。蓋實驗の成績は事實なり。小説家は果して此の如き事

實の範垣内を彷徨して満足すべきや。分析解剖の成績は作家の良材なり。之を使用する活法は製作性ある空想に依りて得べきのみと。乃ちドオデエ、ピイコンスフイイルドを擧げて、事實を活用して猶ほ美の約束に適へる例となし、ゾラを擧げて、或はこの約束を失ひしものならんと云へり。今ゾラを除きて此限界線を踰わたらんかとの疑あるものを算ふれば、西歐の大家中に猶ほスカンデナキヤのヘンリック、イブセン、又或る著作例へば暗の威と題したる傳奇に見たる魯國のトオストイなどあるべし。渠等の事實を使役するや、空想の力を用かずして自然を摸倣したるかと思はるゝ處甚衆し。余等は故に以爲へらく。所謂實際小説派の極端は、其弊遂に自然を摸倣すると徑庭なきに至る。是れ所謂自然詩派の短處なりと。

然り而して彼の實際主義の反對に立てる抽象的理想主義も亦弊あり。請ふらくは獨逸「ロマンチック」派の小説を見よ。又我邦近代のよみ本類を見よ。渠等は皆殆全く實世界と乖戾するものなり。故に讀むものは卷中に於いて、才子にも佳人にも逢ふことあるべしと雖、その才子と佳人とは皆是各一理想の擬人法にて得たる類型的才子佳人にして、心理的觀察に依りて始めて描寫し得べき、特殊の面目ある個想的才子佳人にあらず。其他忠奸、正邪、許多の人物、一々此の如し。張心齋の云く。古今小説家言。指不勝僂。大都餽釘人物。補綴欣戚。累牘連篇。非不詳贍。然優孟叔敖。徒得其似。而未傳其真。強笑不慚。強哭不戚。烏足令就奇攪異之士。心開神釋。色飛眉舞哉。(虞初新誌序)亦此の謂なり。故に曰く。理想主義を取りて其極端なる抽象的理想に至るときは、遂に舊型の摸寫をなすに至る。其中道に非ざること、彼實際的なる自然の摸倣と何ぞ擇ばん。

夫れ心理的の觀察を旨とするものと抽象的理想家とは氷炭相容れざるが如き勢あり。此は或は形骸

を土芥視し、シエクスピイヤが其テセウスの語中にて、美きくるひ心に轉る詩人の眼といへる妙語、三上氏が歌を詠むものは勿論歌を讀むものも幾分か狂ならざるべからず(美術園)といふ、ゼネカを翻案したる警句を引いて、詩材の内よりして見ざるべからざることを説くべく、彼は空想の力を忘れて、遂にゾラを崇拜するに至るべし。由是觀之、誰か世の小説家、汎言すれば詩人に、所謂實際理想兩派の争あることを承認せざらん。畢竟美術に此兩派ありて相争ふは、哲學に所謂唯物唯心の二黨ありて相闘ふと同意なり。

頃日女學雜誌の記者は二派の存在を承認せずして、其持論を公にしたり。其所謂實際派を破る段に云く。若小説にして果して美術なるか。而して美術はこれを想像によりて製作するものとするも、若くは自然の美を綜合して之を綴作するものとするも、或は自然の垢を燒盡して其美粹を集めたるものとするも、其要必らずしも自然の儘、實際の儘を寫すものにあらざるや明かなり。然るを小説は美術の一つにして、此美術や専ら世の實際を寫さざるべからずと云ふ。此の如き美術は抑も何國の美術なるかと。其所謂理想派を破る段に云く。抑も狂人愚者に非ざるよりは、一人の理想する所は亦た他人の能く理想し得る所にあらずや。而して彼人此人の能く理想し得る所のものは豈亦た人間の通情にあらずや。人間の通情を寫すもの果して實際にあらざる乎と。其結論に云く。吾人遂に理想と實際との別を知らず。否を其別を知らざるにあらず。小説の理想實際と云ふものに至りては、遂に其別あることを知らざるなりと。

記者は實際派の存在せざるを證せんとするに當りて、美術は實際の儘を寫さざるべきに、これを寫さんとするものありといふことの明に矛盾の意義たるを以てするものに似たり。是れ切に彼ゾラ崇拜

者の病に中りたるものにて、其美術の本意に違へる處は即ち是れ所謂實際派の極端に走れる弊害なり。此害の存在は決して以て所謂實際派の存在せざることを證するに足らず。否、偶以て其存在せることを證するに足るのみ。記者は又所謂理想派の存在せざることを證せんとするに當りて、人間の通情を寫すことは理想的なるべければ、理想的は即實際的なりといふ、合一の旨趣を以てするものに似たり。蓋記者は作家に個人的なる性あるを承認せず、天下の人を別ちて二大類となし、狂人と愚者とを一邊に置き、非狂人と非愚者とを他の一邊に置き、此非狂人非愚者は悉皆同一の想同一の情を懐けるものとなしたり。故に云く。彼人此人の理想し得る所のものは、豈亦人間の通情にあらずやと。此よりして推論すれば、非狂人非愚者の人類は悉く最良の小説家なり。何如といふに彼等は自ら天下の通情を懐き、世界の通情を知るべければなり。その或は小説を作らざるは、單に字を識らざるが爲めなるべし、文に嫻はざるが爲めなるべし。嗚呼、誰か又心理的觀察などの必要を見ん。奈何せん、吾人の經驗は悉くこの斷定に反したるを。

余等は嘗て記者が眞と善と美との三區別を以て、天の三位を論じ、人の三質を論ずるが如しと云ひ、極美の美なるものは決して不徳に伴ふことを得べからずと云へるを怪訝して謂へらく。若し極眞即極善即極美といふ一想起に基づきて、善ならざるものを美ならずと決定するときは、始より此三區別をなすことを要せずと。今や其目中に唯神唯物の闘、實際理想の争を視ざるときは、余等は論者が當初自然の儘に自然を寫すといひし極端實際主義より(後には自然の儘、實際の儘を寫すにあらざるや明なりと改めしにもせよ)此の如く象を抽き象を忘れたる理想主義の極端に遷移すること掌を反へずよりも容易なるに驚かざること能はず。而れども此一驚と共に余等は記者の意の

在る所を採得たるを喜ぶものなり。

女學記者の論に依るときは、苟も眞にして且善に且美なるものを現するにあらざれば、圓滿具足したる美術にあらず。其最好小説の人物は、哲理の最眞と道德の最善と審美の最美とを具足せざること能はず。此小説は其材を何れの處に取るべきか。人世には純眞純善純美的の事相なきを以て、特にこれを極めて大膽にして極めて空漠なる抽象理想に求めざるべからず。想ふに記者の所謂意匠清潔、道念純高なる理想小説にては、許多の血なく肉なき抽象的人物ありて、無何有の郷に跋扈せんのみ。亦奇怪ならずや。

夫れ意見狭く、議論陳きは、記者の笑ふ所なり。勸善懲惡に偏するも、諧謔滑稽に僻するも、精緻隱微を旨とするも、人情實際を專一とするも、心理的を第一とするも、批評的を第一とするも、結構想像を第一とするも、皆小説なれば、決してその排斥する所にあらず。而れどもその之を恕するものは、最良小説の雲上世界を外にしてこれを恕するなり。記者の意見の極めて廣きは特に最良種を除きたるそれより以下の小説に對して廣きのみ。其列擧したる馬琴、一九、西鶴、春の屋、二葉亭、嵯峨の屋、龍溪其他西歐諸家の記者の爲めに容れられたるは、最良種の小説を作り得るが爲めにあらずして、これより以下の小説を作り得るがためなり。渠等は皆唯第二流以下の小説家として容れられたるのみ。此古今東西の諸家は、斯の如き優待に對して、果して其恩を謝すべきや。又能く記者の準繩に絶りて、詩眼を高尙にし、これに最良純高の境地に跟隨せんと欲すべきや。

春の屋等の起るや、往時曲亭の末流が時として實際上有り得べからざる人物を作り、道德といふ模型をつくりて、力めて脚色を其内にて工風なさまく欲するからに(小説神髓序)知らず識らず彼餌釘

補綴の弊に陥り、個人的理想の事を忘れたる流義を痛斥したり。余等はこれを慶ぶ程に、未だ幾ならずして此の如き曲亭流の道德模型よりは猶ほ一層嚴重なる極眞極善極美模型を鑄るものゝ出でたるを歎せざらんと欲するも得んや。

記者の云く。都門に於いて近時大に其名を喧くしたる人、又は此等の人の著作を批評して廣く英米獨佛の小説に標準を求めらるゝ學士に至りては、其内外の小説を讀めること、數百卷を超へ、博覽多識にして世を見ること鷹よりも横柄なり。其論證甚だ博くして意見益狭し。吾人凡理に徴して、今日の小説、小説家といふものを考ふるに、心に落ちざる處至つて多し。世正きか、吾人誤れるか、密かに世の博識に質して相共に笑ふこともなきに非ずと。余等の言も亦た恐らくは記者のこれを聞いて笑ふ所なるべし。而れども是れ固より言ふに足らず。何如といふに先生の嗤は始より余等の憂ふる所にあらずればなり。

余等は今の文學界を見渡すに、女學記者の外、猶ほ善ならざる美の或は存ずることを是認せざるものあり。大同新報子是なり。其言に云く。人心の求むる所三つ。利、善、美。美なるもの善ならざることなし。小説の目的は美に在り。たゞ其れ鐵を點じて金となし、臭腐を化して神奇となし、完全なる美の理想を素絹として、むづかしげなる娑婆世界をも、純粹無難なる樂園、華麗莊嚴なる寂光土と寫し做し、障深き男子女人にも、懺悔悔改の念を起し、隨喜讚歎の涙を流さしめんこと、大悲大士の化身なる、神の使者なる文學者其人の指尖に存ず。然りと雖此の如き大手筆の世に出でんこと、時運或は未だ許さず。せめてはと思ふ一片の婆心は、その艶冶なる妓女、浮華なる俳優を取らんよりは、寧さうくしからんとも、山僧老尼をこりぞ思ふ。何にもせよ、神明佛陀の冥護、吾黨正

義の士の奮興に頼りて、かの紛々たる小説作者輩が筆硯を咸陽の一火に付せんことの願はしさに堪へずと。夫れ大同子の所謂大士化身の手に成るべき大手筆は、或は女學記者の純高小説と同じかるべし。而して今の之を古今の作者に許さざるも亦同じ。唯これより以下の小説及び小説家に對する處分法に二種あり。女學記者は馬琴、一九、西鶴、春の屋、二葉亭、嵯峨の屋、龍溪等を許して、猶ほ蠢爾として此大地上に生動せしめんと欲する大度量を示し、大同子は猫々、撫松、愛花及これと理想意匠を同じうする春の屋、美妙齋、龍溪等の筆硯を咸陽の一火に付して、其生命少くも小説家としての生命を斷たんと迄に熱衷せられたるのみ。

嗚呼、祇耶釋耶偶人を拜する耶否る耶。是れ審美の眼を以て文章を評せんと欲するもの、關する所に非ず。これを要するに教家目中的の所謂小説は、鬼神仙佛世界の生活を叙すべきものにて、決して這箇人間世界とは相關涉せず。而して余等の生活は人間の生活なり。余等の所謂小説は人間生活の小説なり。今の論旨の歸一すること能はざるも亦宜ならずや。彼鬼神仙佛は果して何物ぞ。これを小説中に寫し出すは固より爲すべからざるに非ず。否、小説中への出現するを見ること屢これあり。特に然るのみならず又殆これより成りたるが如き小説も亦なきにあらず。支那の西遊記などは其好例なり。是れ猶ダントの神劇、ミルトンの失樂園等の結語のごとくにて、唯こゝには散文を取れるのみ。是れ皆抽象らしくなりて、卷中の人物雲烟の捉へ難きが如きに至らんことを恐れて非常の力を費し、遂に僅にこれを僥倖したるものなり。凡う小説の區域は縱令必ずしも必有の事をらざるも、亦た必ず有得べき事を取る。若しこの有得べき境を踰ゆるときは、則物象模糊として定形なし。是を以て鬼神靈性の事は叙し難し。否叙し難きに非ず。これを叙して有得べきことの如くなることの

難きなり。畫家の云く。鬼神を畫くは易く、狗馬を畫くは難しと。嗚呼、鬼神を畫いて人をして毛髮豎たしめんとすること、豈眞に易からんや。

若又一步を譲りて、教家の所謂最良小説家をして鬼神仙佛の類にあらざる純高人物又は彼さうくしき山僧老尼の事を作らしめ、これを讀むものをして懺悔の念を起さしむることあらば、余等も亦必ずしもこれを排斥せず。否、此小説にして果して美ならんか、余等はこれを激賞すべし。ツルゲニエフの「ルケリヤ」の如きは、以て此種の例に充つべし。古人の云く。小説家推因及果。勸人作善。開清淨方便法門。能使頑夫振子。積迷頓悟。(石點頭序)是れ亦太好し。而れども是勸善懲惡の結果は、決して此小説の目的に非ず。此小説は美を以て目的となし、これを達すると同時に偶然如是の勸化をなすのみ。凡そ詩中に於いて故意に目的外的の結果を望むものは、これを呼びて傾向となす。傾向には獨り宗教的のみならず、亦哲理的、政治的、教育的あり。是れ上にいふ偶然の結果とは同からず。

讀賣新聞子の曰く。心理小説家は心の働を筆に寫し、人の性質を筆の先にて書き別くることを、小説の大主眼と心得居れば、西洋小説の長處を餘程噛み別けたるに相違なしと雖、當其事のみに苦勞して、餘事を捨つるに至りては、弊害なきにあらず。此種の論者に向ひて余輩「スケッチ」と「ノエル」の區別を説明せんと欲す。蓋し心の働を筆に寫し、人の性質を筆の先にて書き別くることは、凡手の爲し能はざる所にして、上手と下手とはこゝに於いて別ること論なしと雖、奈何に人の性質を書き別くればとて、唯書き別くる丈に留めては、應用心理學とでもいふべきものは出來上るべけれど、小説は出來上がらざるなり。斯の加きは「スケッチ」にして「ノエル」に非ず。これ等の他

日小説となるべきものを目して、以て小説とはいふべからず。之を譬ふれば彫りかけたる像の如し。彫り上げざるも甚五郎の腕前は見ゆべけれど、彫り上げざれば像にあらず。然らば則性質を書き別けたるのみにては小説にはならざるなりと。渠は「スケッチ」の例としてアルキングとデッケンスとの著を引いたり。

夫れ性質の細叙は未だ小説をなすこと能はず。彼は手段にして目的に非ざるが故なり。而して成美の目的をなすには定形なかるべからず。故に讀賣子は未だ定形を得ざるものを「スケッチ」となし、その既に定形をなせるものを「ノエル」となしたり。「ノエル」は英語の意義にて小説なり。春の屋の云く。英國人は生れながらにして實利實際に心を傾け、妄誕無稽の語を喜ばず、加ふるに自由自治の制度風此國に發達せしかば、一個人を重んずる念割合に早く生長せり。随つて物語も（上代に於てこそアルサル英雄傳の如きロオマンヌもありたれ）割合に早く二派に分れ、所謂「ロオマンヌ」の外に「ノエル」といふ新規の小説起れり。「ノエル」といふ名目は外國の傳來なり。さるは十五世紀及十六世紀の伊太利、西班牙、佛蘭西等の好話（ノエラ又ヌウエル）に基く。其頃の好話といふはボツカチオの「デカメロン」の如きもの是なり。さり乍ら年を経て其意義漸く變化し、十八世紀の英釋に因れば「ロオマンヌ」は奇怪荒唐なる時代物を指し、「ノエル」は概して世話物の道理に合ひ且人情の切なるものを指せりと。即ち此義のみ。

蓋讀賣子はデッケンス若くはアルキングが自ら題して「スケッチ」といへるものと、渠等及び他の作家の雄篇大作と相異なる點を擧げて、彼には心理的觀察のみ存せりとし、此には心理的觀察の他に猶或ものゝ存せるを斷定したるのみ。此或ものゝ性質に至りてはこれを明言せず。否、これを彫鏤

に歸したり。これを彼「スケッチ」集中の或る篇に徴すれば、實に彫鏤未だ至らざる嫌あるを見る、而れども集中未だ必ずしも充分の結構を具へ、充分の彫鏤を経たるものなからず。余等は尙に他の分類法を使ふことの必要を感じたり。何ぞや。單稱と複稱との別是なり。

夫れ小説の材は人事なり。人情と世態となり。故に其叙法に二種の別を生じたり。或は一人若くは數人の事を叙して、これと俱に詳に當時の國運世態に及び、或は一人若くは數人の事を叙して、當時の國運世態の如きは、多くこれを省略し、縦令之を言ふも、僅に其依稀たる影象を見はすに過ぎず。彼に於いては夥多の人生の圈線交錯層疊して、許多の繁結と分解とを寫し、此に於いては人生の單圈中にて生ずる一繁結、一分解を寫す。此繁結には風俗に依り、運命に依り、又一個人の性質に依るものあるべし。(Heyse und Kunz, Novellenschatz, Einleitung) 彼を複稱といふ。獨逸詩家の所謂「ロマアン」是なり。之を單稱といふ。獨逸詩家の所謂「ノエル」是なり。

複稱の例を擧げんか。我邦には源氏物語の如きあり。又八犬傳、美少年錄の如き曲亭の大著作あり。支那には水滸傳の如きものあり。獨逸にはギョオテの「キルヘルム、マイステル」、ジャン、ボオルの「チタアン」あり。英吉利にてはスコット、バルワア、デッケンス、サツカレエ等の巨篇、佛蘭西にはジョルジ、サン、ユウゴオ、バルザック、ボオル、ド、コック、ドオデエ等の傑作あり。又單稱の例を擧げんか。我邦には竹取物語の古きより、京傳、馬琴の小著述、雙蝶記、皿々郷談の類あり。支那にては思軒居士の「ゲスタア、ロマノオルム」に比せられたる、韓非國策等の諸書に見ゆる小話（少年園）中にて、當時の文飾能く美術の標準に適ひしものを始とし、夷堅、幽怪、虞初、齊諧の諸書中、この類少からざるべく、又槐南小史の譯せらるゝ鶴歸樓（都の花）などに似たるもの

多かるべし。西方にては伊のボツカチオ、西班牙のセルワンテスに至りて彼「ゲスタア、ロマノオルム」七賢人の如き小話體、始て美術的體裁をなし（春の屋の所謂ノエラ、ヌウエル、好話）メルクの「リンドル」より進みてシルレルの失ひし郷譽よりなりたる犯人、井イランドの「プロトイス」に至り、ギョオテ、ハインリヒ、フォン、クライスト以下其例に乏からず。英にはチヨオサアの「キヤンタアバライ、テエルス」の如きものあり。佛にはメリメエの小著の如きあり。米にはアルキングの雜纂、ブレット、ハートのカリフォルニア叢話の如きあり。是れ其概略なり。

心理的觀察は固より前世紀の終よりして所謂實際主義の勃興と共に其盛を致し、之を史乘に徴して明かなり。西歐にても武談（獨のリツテルロマアン、英のロオマンズ、春の屋の傳奇、思軒の野乘）話（獨のエルチエエルング、英のテエル、春の屋の傳記、思軒の物語）の類漸く衰へて、今の小説の起れるより此法の用、隨つて生じ、作家これに依りて能く個人的性質を叙することを得たるは世の知る所なり。さればとて此心理的觀察は必ずしも春の屋主人を待ちて東洋詩界に顯出せしに非ず。能く小説を作るものは勿論名ある和漢の批評家は、既に此に注意したることあり。金聖歎は水滸傳を評して云く。水滸傳寫一百八箇人性格、眞是一百八様。若別一部書。任他寫千箇人。也只是一樣。便只寫得兩箇人。也只是一樣。（水滸傳三卷三丁裏）是れ其一證なり。

心理的觀察は固より單複兩種の齊しく要する所なり。これを專用して以て限界線の畫然たる性圖（カラクテル、ビルド）をなすことは、單種に於いて最多し。此の如き觀察の成績は、空想の製作によりて出でざるときは、眞個に一片の應用心理學を産出すべし。これを「スケッチ」といふも猶或は人をして其適當なるなきかを疑はしめんとす。想ふに是れ讀賣子の非とする所なるべし。余等は人の或

は其言を謬解して、此の如き詩形未だ成らざる性圖と俱に、彼精嚴なる單種をさへ唾棄せんことを恐る。故に此説あり。余等豈辯を好まんや。

且つ夫れ今の日本小説界には唯だ單種を見て複種を見ることなし。今の紫式部は明治の源氏物語を作らず。今の馬琴は明治の八犬傳を作らず。細君と云ひ、武藏野と云ひ、初戀と云ふ、未だ其終局を見ざる浮雲はいざ知らず、悉く是れ單種なり。國運世態を詳叙したるものにあらず。若此時に當りて讀賣子の所謂「スケッチ」を錯認して、獨の所謂「ノエル」と傲し、單種となし、以て小説叢中に加ふべからずとするときは、明治世界は將に悉く其小説を奪去られんとす。此錯認は世俗の所謂長篇小説（獨の俗語のロマアン）と短篇小説（獨の俗語のノエル）との別に依りて彼「ノエル」と「スケッチ」との別を解せんとするより生ずることなしとも云ひ難かるべし。

今の日本に單種多きは、蓋又現世の風潮に従ふものにして、毫も怪訝するに足らず。人事の絲漸く繁ければ、一人にて其幾千萬緒を總括することを得難きは、當然の理なり。姑く自然學を以て例とすれば、學科の分裂日を逐ひて盛に、所謂専門主義の世界となり、アレクサンデル、フムボルト以來人の能く其全形を知りて兼學の譽を得ることなし。學問既に然り。詩も亦應に此の如くなるべし。一小説家の能く視て能く寫す所は、電光一閃の照す所のみ。他の境界は渾て暗黒裡に在り。是を以て其作爲する所は單種に宜くして複種に宜からず。是れ獨り日本に於いて然りと爲さず。西歐にても或は將に複種の衰微と單種の盛行とを見るに至るべきか。唯彼の文學史は中絶の處なきを以て、此變化の迹分明ならず。獨逸の近代猶ほフライタハの祖先、「ゾル、ウント、ハアベン」の如き複種あり。我にては歐洲流義の小説新に入りしが故に、先づ其時勢に適ひ作爲に便なるものを傳へたるに

はあらずや。

然りと雖兼學の儒は未だ必ずしも後來絶無の人物となすべからず。我邦にも或は又能く複稗の源氏物語、八犬傳の如きものを作るもの出で、現世紀に於ける社會の大現象を指すこと、掌上の螺紋局面の碁子の如きを得るも亦た未だ知るべからず。余等は既に長歌の命脈を以て既に断わたりと謂ふこと能はず。今復た此一縷の望を繋いで、以て天下同好の志を勵さんとす。

讀賣子が「スケッチ」といふ一文體を設けて、これを小説の域外に置きしが如く、北邨散士は話といふものを設けて、これを小説の未だ至らざるものとしたり。其言に云く。余の見る所を以てすれば、眞理の發揮、人生の説明、社會の批評この三つを小説家の責任とす。此三責任を合せて盡し得るものは上の小説家なり。一を闕いで二を盡し得るものは中の小説家なり。二を闕いで一を盡し得るものは下の小説家なり。三を闕いで一をも盡し得ざるものは小説家にあらず、話家なり。余の如きは實に話家の一人なりと。(柵草紙小説家の責任)又學海居士の流轉の批評に答へて以爲へらく。其賞賛は敢て當らず。如何といふに余は流轉を以て一小話と見做すも、小説と見做すこと能はざればなり。余は今小説家を以て自ら任ずるものに非ず、話家を以て自ら居るものなれば、無論小説の出來べき理なければなり。無形の眞理を有形に現はしてこり小説ともいふべけれ。然らざる間は決して小説といふべからざればなり。(國民之友)散士が擧げたる小説の三約束は、縱令其微細なる説明中には未だ全く首肯すること能はざる處あるにせよ、固より余等の是認する所なり。蓋し人生の説明と社會の批評とは小説の材に對する約束なり。其所謂眞理の發揮に至りては、則是れ詩の神髓なり。作る所、若理想的の本眞を現するに非ずば、豈小説ならむや、豈詩ならむや。

抑も散士はりの自ら作れる所を以て小話なりとし、小説に非ずとせり。余等は其詩眼の高きに服す。雖、未だ嘗て其自ら視ることの卑きに過ることなきかを疑はずんばあらず。否、余等は僭妄を顧みずして、これを小説視せざること能はざるなり。話とは何ぞや。材を撰ぶこと必ずしも精ならず、想を構ふること必ずしも美ならず、これを千載に傳ふるに意あるに非ず、僅に以て閱者が霎時の快をなすものなり。輓近話の盛に行はるゝは新聞事業に基けり。夫れ新聞雜誌は巧遲を須むずして拙速を貴び、通篇の局勢を輕んじて一段の精采を重んず。而して其作者を釣るや、旬日を出でずして羸ち得べき聲名を以てす。渠等は既に結語を卻けて散文を進めたり。渠等は既に複稗を卻けて單稗を進めたり。今や將に小説を卻けて話を進めんとす。澳都の小家數をして一時の譽を擅にせしむる「フユイェトン」も話なり。讀賣子の卑み棄つる「スケッチ」も話なり。話には流星の光の如く、稻妻の火の如く、瞬間人目を射る奇想もあるべく、茶盞の前酒杯の邊、一讀齒頰香き妙語もあるべし。而れどもこれを目して美術的完璧となさんことは、余等の服すること能はざる所なり。若夫れ散士の著す所は、詩形備はり詩想浮ぶ。豈其れ話ならんや、豈其れ話ならんや。

佛蘭西のジョルヂ、サンは嘗て某複稗に叙して云く。千八百四十四年の事なりしが、「コンヌチシヨチル」新聞は紙幅を擴めて復新の業を成したり。此時よりしてアレクサンドル、ドユマアとユウジエエン、シユウとは小説毎回の尾に看客の屏息翹望すべき警束を示すことを勉む。此伎倆は已に遠くバルザックを凌ぎ得たり。况や余が如きをや。バルザックの心は軸點より想を起して外圍に及ぶことを喜び、余が性は遲緩にして夢みるが如し。余等二人は決して兩家を俱に新趣向を出し、詭謀の迹を疊積し、以て鹿を中原に逐ふこと能はず。(Eugène Sue, Jeanne 1852, Préface) 嗚

今の諸家の小説論を讀みて

呼、是れ小説の話と變じたる限界線なり。ハイゼ等がこれを擧げて詩法の衰頹を歎じたるは、洵に故あるなり。(明治二十二年十一月)

醫學の説より出でたる小説論

エミル、ゾラは佛蘭西プロワンスの人なり。今の所謂自然主義の小説をば、ゾラ名づけて試験小説と名さむとす。

この名はゾラがその小説論の首篇に冠したるところにして、これを生理學者クロオド、ベルナルが試験醫學に取れるなり。

クロオド、ベルナルのいはく。今の學は觀察と試験とに基いたり。人力の化すること能はざる宇宙間のものに逢へば學者これを觀察し、人力の能く化すべき宇宙間のものに逢へば學者これを試験す。醫の人身の眞作用を知らむとするや、その觀察の力を補ふに試験の法を以てす。かの病院、講堂、業室の中に入りて、生活の臭穢にして蠕動する疆界を経るは、先づ庖厨を通りて燭光かゝりやける大厦に入らむとするが如しと。

ゾラはこの言を擧げて、直にこれを小説に應用したり。その小説中の人物はゾラが分析と解剖とを経たるものなり。ゾラが人情を分析するや、殆液の酸澆を擇ばず。ゾラが世態を解剖するや、殆刀の鈍銳を問ふことなし。しかして此分析、解剖の結果は即是れ「エチユウド」なり、小説なり。

ゾラは此論をなして「ルゴン、マカルド」の大作を出し、そのが實行の績を示しつ。ルゴンが福と題したる首篇より土地と題したる新篇に至るまで、化學所の日記にあらざるときは、解剖局の週報ならむとれもはるゝ叙法を用ひたり。

されど世の人はこれを厭はず。其故は奈何。かの鏡前に嬌態を弄する赤條々の淫女ナ、が活膚は解剖卓上の冷肉にねなむからざればなり。

夫れ分析と解剖とは作者の用をなさざるにあらず。されどゾラが直に分析と解剖との結果を以て小説とせむといへるは妥ならず。蓋し試験の結果は事實なり。醫は事實を得て自ら足れりとすれども、作者はこれにて足れりとすべきにあらず。

無慙なる事も正史にて見るときは厭はむからず。支那炮烙の刑、西班牙「アウト、ダフェエ」の獄、皆正史なるがために讀まるゝなり。かの日刊新聞の雜報に見えたる醜事も亦然り。願ふに事實なるを以ての故のみ。小説を作るもの若事實を得て満足せば、いつれの處にか天來の妙想を着けむ。事實は良材なり。されどこれを役することは、空想の力によりて倣し得べきのみ。ドオデエがゾラに優れるはこゝに得る所ありてならむ。(明治二十二年一月)

今の批評家の詩眼

文學の進化には批評ほど必要なるものはあらず。されど又批評ほど畏るべきものはあらず。批評の柄にして一たび凡庸人の手に落つるときは、ツルゲニエフの羞語に出でし愚夫の如く、又獨逸文學の趣味を損せしゴットシェツドの徒の如く、遺臭流毒何の底止する所かあらむ。新井白蛾嘗て曰く。凡誦評人之賢愚。及文字之工拙者。大抵非其器近彼地位者。則見而不達。言而不當也。是言や、李于麟が文大業也、校文大役也と云ひ、陳俊卿が作詩固難、評詩亦未易と云ひしと等しく、善評家の得難きこと、善詩人の得難きに似たるを示すものなり。逍遙子は明治二十二年の批評家を概品して曰

く。作家の相競ふや、斯文の爲に是非せずして、れのが嗜好によりて是非せるもの多かりしに似たり。批評家の中にも此傾多少見ゆつと。嗚呼、此に所謂おのが嗜好は果して吾人の信を得るに足るべきか、酸鹹味を殊にし涇渭流を同うせず、偏僻なる人の濫りに批評の重任を負ひて、己れに似たる「ガイスト」をのみ理會するからに、己れに似たる詩人をのみ進むる如きことはなかるべきか。是れ余等の熱く考へ正して、壘視の病を去らんことを懋むべき所以なり。

ラ、ブルユエルの曰く。美術に完成の度あるは、自然に熟了の期ある如し。この度を知りてこれを受づる人は解趣知味の人なり。これを感じせずして彼に偏し此に僻したる物を受づる人は没趣の人なり、未だ味を解せざる人なり。故に嗜好あり。惡趣味あり。趣味の争闘の起るは惟むことを須わす。世に絶頂の審美家は出でずもあれ、せめては此所謂完成の度をだに知る人の批評家となりて、文學の輓推を計れかしと思ふは余等の願なり。嗚呼、去年の評家は果して余等を満足せしめしか。

讀賣新聞は嘗て歎じて曰く。近頃小説論の盛なるは、我日本の小説を改良せんと云學者達が頻に輩出したるが爲めなるべしと雖、この學者達の議論は果して小説を改良するに足るべきか。偏見かは知らねど、余輩の見所を以てすれば、この學者達の改良論は小説をして無味淡泊ならしめんとするものなり。其興味を索然たらしめんとするものなり。終に小説の衰微を來すべき傾向あるものなりと。この言をして是ならしめんか。この學者達は批評家の資格なくして其位を瀆すものなり。この學者達の改良論は趣味を知らずして出し言なり。然らば則豈批評と製作との相妨ぐることあらむや。

趣味既に殊なり。人々れのが嗜好に任せて思ひく月の旦をなさんとす。獨りこれのみならず、偶々明史を閲すれば、王季が七子の社を結び嘉靖の頃謝榛以布衣被擯、文長(徐)憤其以軒冕壓韋布、誓不入二人黨といへり。此の如き門戸の見を持して、後進の士を拒絶する如きことは、斯文の軒冕に在らざる今の世には幸に少かるべけれど、亦た絶てなしとしも云ひがたからむ。これも亦た批評の畏るべき一因なり。

嗚呼、度量濶大にして考鑿精微なる評家の出で、海内の敦槃を主どり、一代の風雅を揚げんは、果して何れの時にかある。余等は去年の評家の詩眼を論ぜんとするに當りて、觚を操りて踟躕すること久し。

去年の評家は何をか機關とせし。先づ眼を着くべきは出版月評なるべし。而れども此着眼は終に肯綮に中らず。是れ職として出版月評が詩學即ち美術的文學に對して特異なる識見を懐けるに由る。其麴橋一人といふ名を署したる色懺悔の評に曰く。蓋し小説は詩歌と同く時代の進歩に従ひて衰頹するものなれば、今人の小説が古人の小説に及ばざるは無論の事なれども、時代益進むに従ひて、萬端の人事益多きを加へ、百般の智識愈精きに至るものなれば、其小説の脚色結構は愈新奇駭雜に至るべきは當然の理なり。之に反して文章と想像との二者は漸次衰頹に赴くべきも、また自然の勢なりといふべしと。見るべし出版月評はエルネスト、ルナンに等しく將來の善美を盡し、天地にては眞學ありて美術なしと思ふものに似たるを。又た見るべし、出版月評が學海居士の八犬傳細評などを出し、ことはあれど、今の小説に對しては略評のみ出すことの故なきにあらざるを。夫れ彼人々は既に美術を以て退歩すと看做し、詩法を以て却走すと看做すものなれば、今の漸

衰へゆく美術詩法に對して冷然たるも宜ならむ。今の學問をば古今に通じて價あるものに思惟すれど、美術をば古昔のみ精かりしものに思惟して、彼を待つこと厚く此を遇すること薄きも宜ならむ。

余等は此批評國を離れて他に適かんと欲す。春の屋主人はせずや。明治二十二年文學の木鐸となり、意識して又は意識せずと輿論を導かんと力めしは、重に國民之友、新小説、都の花、文庫、文學雜誌等なるべしと。洵に當れり。就中國國民之友と文學雜誌とは、余等の最も留神すべき所にして、これに參すべきはいらつめといふ美妙齋主人が雜誌なるべし。

上の雜誌に就いて批評的文字を求むるに、主筆者の言には文學一般に對する意味あるものこれかれ見ゆ。文學記者の自然説、民友子の詩人論、愛の説等は或は已に他處に於いて余等の議せし所なるが爲め、或は取材の範圍の濶きに過ぎんことを慮るが爲めに是にいはず。美妙子、三溪子の詩形論、北邨子の小説論も亦然り。其他國民之友の高橋五郎氏が批評は詩學的なること少ければ、これをも省きつ。余等は重に一々の詩、殊に小説を評したるものを擧げんと欲して先づ二家を得たり。

誰ぞや。國民之友に忍月居士あり。文學雜誌に不知庵主人あり。彼は詩に内外の調和あるを説き、外の調和を格調と名づけ、内の調和を精神といふ。精神は即ち眞理の發揮にして、これに繼ぐに餘情を以てす。餘情とは狀し難き景を叙して言外の意を含まざるをいふ。此は格調といはずして風姿といひ、精神といはずして風情といひ、風情に繼ぐに感應を以てす。格調も風姿も詩の形なるべく、精神も風情も詩の想なるべし。二家皆を想髓を主として風格を客としたり。是れ今の詩に對する意見なり。然らば則詩の成るや、いかなる途にか由れる。忍月居士のいはく。若散布の弊を去りて收合

の美を知ることを得ば、詩歌の精神餘情招かずして筆硯の下に來らむと。不知庵のいはく。文學の粉飾は有用に似たる無用にして、感應力あるが如くなれど、衷情より發したるものにあらざんば、虚偽の文字となりて、唯俗子婦女の玩弄物たるべしと。

權りに是意見に就いて忍月と不知庵とを比ぶれば彼は魚と熊掌とを兼得むと欲し此は璧を留めて櫃を返さんと欲する如し。不知庵は唯陀を願みずして風情を取らんとす。プラトオが狂を説き、カントが天才を説くが如し。其弊や或は唐詩に青蓮をのみ尊び、獨逸詞曲にグラッペをさへ嗜むに至るべし。忍月は精神の貴きを説けども、猶格調に眷々たり。彼はソクラテスに附和して苦吟の詩人を棄つるに忍びず。カントが所謂趣味、ゴットシャルが所謂沈思を顧慮す。其淵源を溯求すれば、フランク、グリンバルチエルより出づる如し。グリンバルチエルが言にいはく。眞の詩興は全力全能を一物に湊集す。此物や此一刹那にはこれより以外の天地を呑めり且表せりと。(Grillparzer's sammtliche Werke IX) 是れ忍月が基く所なるべし。

二家の詩論は此の如しと雖、其應用は果して奈何。試に二家の作せる批評を見れば、忍月は將軍が士卒を呵する如く、不知庵は慈母が兒子を戒むる如し。彼は刻薄にして恩少なく、此は剗切にして情多し。將軍の呵責には無辜の人を斬て軍令を明にすることあり。慈母の垂戒には兒を愛する情深きに過ぎて時として含糊の態なきにあらず。

夫れ老吏の能く獄を斷ずるも、時に疑獄に對して其明を失ふことあり。老将の兵を行るも、時に奇兵に逢ひて謀窮することあり。忍月の批評に長せるも卒然として露伴子が風流佛に逢ひて、平生の詩眼を抉出せられしかと思はれしことなきにあらず。而れども余等は忍月を貶せんとてかく言ふに非

ず。獨逸のゴッペンシユがイスキヤの謝肉祭カルネヴァレを出しよるときは、全國の批評家皆瞠目して其月旦を定むること能はざりしにあらざるや。

忍月不知庵を除いては余等美妙齋、謫天情仙の爲めに第三指と第四指とを折らむとす。美妙の緻密と謫天の鯁直とは、眞に得難かるべけれど、並に是れ常に批評に従事するものにあらず。去年の評家は果していかなる小説の定義を懐きしか。忍月居士が小説の定義らしきもの見わたるは初時雨の評なり。曰く。うも小説は作者に空想ありて、宇宙間より材料を取り、是を美術的の象形に收合するものなり。然れども唯此空想が求めたる材料を書併ぶるのみを以て小説とはいふべからず。小説は人間の實生活を模造せざるべからずと。この語中にてうも小説はとあるを、うも詩はに換へて見むに、何の接觸をも認めず。されば是れ詩の釋義にして、小説の定義に非ず。忍月も蓋こゝにて小説の定義を示さむとせしにはあらざるべし。彼は小説も亦詩なるゆゑ、小説に向ひて詩の要約を促すことを得べし。唯うも小説はと起さむよりは、寧ろ小説は詩の一體なればと起したらむこそ明晰なりけむ。余等は忍月居士がこゝにて小説の定義を出さざりしを責むるにあらず。其小説に向ひて出しよものが詩の定義なりしを責むるにあらず。余等は忍月の詩の定義が小説の定義らしく出でしを惜むのみ。

忍月が初時雨評中の詩の定義はうの前半は明かなれど、既にして小説は人間の實生活を模造せざるべからずといふ。蓋人間の實生活は空想の取りし材なるべければ、模造とは美術的形象に收合する意なるべしと雖、かくいひては人をして或は空想に待つことなきかと疑はしむべし。余等は又これを惜まずんばあらず。

これに繼ぎては、忍月がドクトル、カイネと署して女學記者を駁せし文中に見わたる小説の定義らしきものあり。曰く。小説は人と運命との間を規定する天然の法則あるを知らしむるものなりと。この語は小説の性質よりは、寧ろ「エボス」の定義に近し。

出版月評は色懺悔の評に於いては、小説の心髓は高尚なる思想と優美なる文章とを弄して、百般人事の上に出來得べき事實、有り得べき情況を寫し出すに在りと。此釋義にては出來得べき事實と有り得べき情況とを心髓中の心髓とすべし。是れ近世小説の多數に於いて見る所なり。而れども權に小説を分ちて複種、單種、奇話（メメルヘン）の三とせんに、奇話は必ずしも出來得べき事實にあらず、必ずしも有り得べき情況にあらず。獨逸の文界にてもギョオテの頃までは出來得べからざる事情と有り得べからざる情況との單複二種の境地を侵略したること甚多し。「ロマンチック」派のホフマンなども此癖尤著かりき。今や奇幻怪誕の事は單複二種の境中を逸し去りて、「メメルヘン」の域内に集りしのみ。

不知庵は小説の全體に就て何の言をも出さざること聞かず。余等は唯色懺悔の評に、小説を編むには「キャラクタア」こゝ肝要なれといふ一語あるを瞥見せしのみ。人事の妙はこれを個々の人物の外物に應ずる差別に求むべきものなれば、「カラクテル」はこれを戯曲にも求めざるべからず、これを小説にも求めざる可らず。想ふに近世作家の心理的摸寫の如きも、その是認する所ならむ。若これに參するに、彼が戀山賤の評を以てすれば、不知庵は小説に於ける具象的理想の趣味を解するものに似たり。

小説と戯曲との相關の理に就いては、これを極言せしものなし。色懺悔の一たび出づるや、忍月は

結構、句調、事實の戯曲に傾き過ぎて、小説の體裁を遠かるを惡み、此を瑕瑾の一なりといひ、藤の屋も亦縦令時代小説にても芝居の臭味あるべからずといひぬ。色懺悔其書に就きては、此篇の是非をいふ限りにあらねど、諸家は或は單稗の本性に、自ら戯曲に似たる所あり、又た勢戯曲に似ざること能はざる所あるを忘れしにはあらざるか。蓋單稗と戯曲とこれを共にするところは、一の事を拾ひ來て描寫極盡し、これより以外の天地をば、唯影の如くにほの見せしむる一點なり。故に或る單稗を評して其戯曲に似たるを責めんとするときは、宜く先づ其戯曲に似たる程度を畫定すべし。此程度にして踰越せられずば、似たりと雖何の害かあらむ。單稗の戯曲に似たる罪は其戯曲に似たるに在らず。其太戯曲に似たるに在り。批評家たるもの思はざるべけむや。

小説の傾向に就きては余等、多く人のこれを論辯したるを見ざりき。獨り如電居士の一言は、大に世の昧者を警醒するに足れり。曰く。小説は元來空中樓閣なり。されば主義なきを主義とすべきに、苟も主義ありて筆取らば、寓言とや申さむ、託言とや申さむ、居士が所謂小説にあらじと。(以良都女)如電の所謂主義は傾向なり。美外の目的なり。傾向の威力は詩人の肘を擧して其全能を發揮すること能はざらしむ。然るを世の碩儒にも或は時に詩の傾向を懲懲することあるは、其心詩に專ならずして美外に目的を置けるなり。學海居士は細君を評して曰く。若強ひて勸懲應報の理を避くとせば、その弊をいふときは、強ひて勸懲應報の事を作り出せると同じかるべし。冷を畏れて熱に死し、刃を避けて水に溺るゝに似たりといはまじと。(國民之友)若果して勸懲の料となるべき事を避くる詩人あらば、誰か其愚を笑はざらむ。眞の詩人は勸懲の事を避くることなく、故らに勸懲の事に就くことなし。勸懲は偶然の結果のみ。本來の目的に非ず。

今年となりては春の屋主人大に新聞紙の小説を論じたり。曰く。若かの美術といふものが、絶對的にいはるゝものならば、吾等は信ず、裸體美人の像も、淺間しき筋の書も(其手際だに巧妙ならば)共に美術の仲間に入るべし。併しざるは絶對的にいふ美術の美にして、社會に見すべきものとは思はず。これをも絶對的美術家は美とすべし。さりながら廣くいふ社會には階級幾段もありて、人の品さまくくなり。雅人は鹿の聲を聞いて秋の哀を知り、獵夫は同じ聲を聞いて彈藥を取出す。祇園精舎の鐘の音も、沙羅雙樹の花の色も、見聴くものゝ心にこりよれ。人さまくぐりの見解、作者の思ふやうならず。兎に角に新聞紙の小説には、われ等かゝる作の載せられざることを願ふ。寧有益にして面白きものか、又は無害にして美きもの佳し。斯く言へばとて、吾等敢て勸懲主義を復興せよといふにあらず。社會と新聞紙との關係に留意し、禍の種を蒔かざれといふのみ。此筋の議論は夙に報知新聞にて論ぜしことあり、又た女學雜誌にても論ぜしことあり。只彼と此と異なる點は、彼は此論を小説全體の上に言ひ、吾等は新聞紙の小説にのみいふ。冊子とする小説は、新聞紙のものよりも、彫琢刻鏤すべき餘地多ければ、自ら誤解せられぬやう、本意を明かにすることを得べく、又讀者を限ることを得べしと。

春の屋の論を擧げて、これを學海居士の論に比ぶるときは、一瞥したる處にて、學海居士の方には小説全體に對して勸むる勸懲傾向あり。春の屋の方には、新聞紙の小説のみに對して勸むる、禍の種を蒔かざれといふ傾向あるが如し。されどこれは一瞥の上の事にて、論法を温ねてこれを視るときは學海居士には勸懲傾向の影ありて、春の屋には其形あるに似たり。何をか學海居士の勸懲傾向の影と謂ふ。居士の尤むる所は強ひて勸懲應報の理を避くるに在り。居

士は強ひて勸懲應報の事を作り出すを非とせり。是れ陽に勸懲傾向を排するものなり。是れ積極的傾向を排するものなり。既にこれを排して又別に尤むる所あり。この尤むる所は、強ひて勸懲應報の理を避くるものなりといふ。是れ勸懲主義を以て小説乃至詩の目的とせざるものを排するにあらずして、非勸懲傾向といふ消極的傾向を排するなり。而してこの消極的傾向は何物ぞや。其勸懲善の果を呈はすべきこと猥褻の如きものなるか。曰否、評者の意は蓋し無罪の小天人阿園が惨死を不可とするなり。阿園の死は果して非勸懲傾向あるか。曰余等は此趣向に對して積極的傾向をも、消極的傾向をも發見せず。夫れ存在せざる非勸懲傾向を難するときは、其心を推して勸懲主義に傾けることを悟るに足れり。評者は陽に勸懲傾向を排したれども、陰に勸懲傾向を懐けるものに似たり。これを學海居士の勸懲傾向の影といふなり。

何をか春の屋の勸懲傾向の形と謂ふ。春の屋が小説の或る種類即ち新聞紙に出すものに對して望む所は、勸懲主義の復興にはあらずといへり。禍の種を蒔かざれといふ心なりといへり。其禍の種まきをいかにと問へば、哀なる妻戀ふ鹿の音にも、矢石を捜るさつ男あり。木下藤吉郎の所行は時に借倒しの口實となり、お七ね半の身の果は間々同感を喚び、シルレルの強盜は或は人を戒むるに足らず、我鼠小僧若くは五右衛門の芝居は、適々賊を景慕する念を養ふといふ。現にも矢石を捜る殺伐の心、借倒しをなす不良の行、お七ね半に同感する不貞の情、盜俠の曲を觀て起る巨盜を慕ふ念、皆是れ禍の端ならむ。而して此端の因は那邊にかある。春の屋のいはく。人さまぐくの見解、作者の思ふやうならずと。嗚呼、然り因は各個人の見解に在り。各個人の見解の由りて來る所には、先天の遺傳もあるべく、後天の稟受もあるべしと雖、而れども獵夫が鹿を射る心は必ずしも鹿の音ありて始

めて生ずるに非ず、無賴子が賊心は必ずしも戯曲ありて始めて生ずるに非ず。鹿の音と戯曲とは、來てこれを誘ふに非ずして、獵夫と無賴子とは往いてこれに就くのみ。鹿をして啞ならしめんか。獵夫は依然たる獵夫なり。戯曲をして盜俠を出さざらしめんか。賊心ある無賴子は君子の人とならんやうなし。中には流石に賊とまではならざるべかりし無賴子が、戯曲の盜俠を見たるが爲めに、其結果として賊となることも必ずなきにはあらずらむ。而れども是れ常にあらずして變なり、衆にあらずして寡なり。春の屋の誠實なる、詩の人生に及ぼすべき影響に注目せり。社會と新聞紙との關係に留意せり。若し衆の爲めに謀らずして、寡の爲めに謀ることあらば、其れこれ何をとか言はむ。夫れ禍原は各個人の見解に在り。詩を讀むものゝ心に在り。鹿の音も戯曲も種を蒔くにあらずして、自然の煦温、偶々禍の種をして芽を抽かしむるのみ。毒草の生ぜんことを恐れて太陽の温を嫌ふ人あらば、其れ又これを何をとかいはむ。夫れ禍原は詩其物、小説其物に存せざるに、これをして強ひて其範圍を狭めしめんとす。是れ四通八達の道に代ふるに、或方向、或傾向を以てせむとするにあらずや。而して此分明なる傾向は、禍の種を蒔かざれといふ傾向なり。語を換へてこれを言へば勸懲傾向なり。これをば春の屋の勸懲傾向の形といふべからざるか。

或は思ふ。春の屋は既に吾等敢て勸懲主義を復興せよといふにあらずといふ。其答むる所はお七ね半の事を記して誨淫の資となす如き小説、鼠小僧五右衛門の事を記して導慾の料となす如き稗史ならむ、美の目的を以て作りしにあらざる詩賦ならむと。されど若然らば何ぞ新聞紙に載する小説にのみ對して其希望をいはむや。人情を叙して男女の事に及ぶも、猥褻に陥るまでには間あり。任俠を寫して賭博盜竊に及ぶも、利欲を導き殘忍を惹くまでには間あり。春の屋豈これを知らざるも

のちらむや。春の屋の却けむとせるは、即是れ歐洲人が少年書といふものに於いて却くる所なり、又た慈愛なる父兄が子弟に對して禁ずる所なり。

春の屋は識字社會の開明の度の低きを認め、少しくこれを童孩視するに似たり。此社會は悲壯感慨の趣を極めたるシルレル群盜の如きを見ても、其「トラギック」には動かさずして、殺人放火の蹟に拘泥せむを恐るゝに似たり。而れども是れ社會の趣味の未だ足らざるには依らざるか。此趣味を長ぜんとするは、縦令いはゆる社會改良家にあらざるも、世の先覺者の務には非ざるか。此趣味を長せんとするには、誤解せば禍をも助成しぬべき小説をも、誨淫導欲の美術外目的あるものにあらざる以上は、これに授けて其本意の在る所を説き示し、危険なることありぬべき利刃をもこれに授けて其使ひかたを教ふべきにはあらざるか。余等は純粹なる社會改良家に非ざれども、民の趣味の長ずべきを信ずること、其智識の添はるべきを信ずるに殊ならず。余等が目中には純劇の光彩煥發すべき將來の劇場あり、美に感ずる氣騰上すべき將來の「ブブライクム」あり。而して余等が滿腔の熱血は養を此將來の望に資るにあらずや。我春の屋は豈冷然として此心を解せんと欲せざるか。余等は獨逸の鴻儒カントが前には脱兎の如くにして後には處女の如く、其千載の基を開きたる「クリチツク、デル、ライネン、フェルヌフト」を改削せしを見て、未だ曾てこれが爲めに慨歎せずんばあらず。往年小説神髓を著して塵寰を一洗せんとせし春の屋主人は、今安くにか在る。

小説傾向の中にては勸懲傾向を猶高しとす。教詩は詩の庶子にはあれど、なほ子たることをば承認すべし。これより外の傾向は、一時人の快樂を引くこともあるべく、又國の利福となることもあるべしと雖、詩學上よりこれを見れば、厭ふべく卻くべし。今の顯象に就いてこれを言へば、情夢樓が惟る

に嬉き場で泣かれ、可笑き時に怒らる、くださらぬものなり、赤本の終と年の始、只芽出たきことずよき(都新聞)といひしは、人の常情さることながら、これに據りて曾我の芝居を吉例とはすべからず、拈華微笑、破魔弓を國民之友の初刷附録とはすべからずといふは極めて非なり。女學記者が今は慷慨するものを要する日なるに、今の小説家は笑談すれども一滴の涙あらずといひしは、時弊に中りし言にもあるべけれど、若これを誤解して、強ひて慷慨の心を發すべき詩を求め、世潮の奈何をのみ顧み、時勢の傾向を追うて著作に従事するものあらば、是れ又極めて非ならむ。去年の批評には詩人に向ひて傾向的需求をなしたること多かりきと覺わられぬ。

小説に對して結構(局勢)の事を論ぜしは忍月居士なり。曰く。詩學に「デスボジチオン」といふものあり。是れ蓋一篇の初より終に移り行くまでの關節及其排置を指すものなり。「デスボジチオン」を普通分ちて三となす。曰發程、曰繼續、曰歸終。予近代の所謂小説を見るに、多くは歸終と繼續との間の一轉歩を誤るもの多し。故に爲めに全篇をして瓦解壊亂せしむと。初(首)中(腹)後(尾)の關節は文章の必ず有る所にして、獨り詩のみならず。大抵哲學上の論說、歴史上の叙事、演說などにては、多く「デスボジチオン」の字を用ひ、小説戯曲等にては、多く「コムボジチオン」の字を用ひたり。而れども彼此交用することもあるならむ。唯繼續の原語「フォルフェウリング」に至りては、則人をして或は誤植有べきかを疑はしむ。「フォルフェウリング」は決行の義ありて繼續の義なし。繼續は「フォルトゼツツング」なり。試に詩學の書に就いて初中後の名稱を求むるに、獨逸にては大抵「アンフアング」「ミツテ」「シユルス」といへり。獨り戯曲の三齣に於いては「エクスボジチオン」(排置)即初齣(序幕)「フェル井ツケルング」(紛錯)即中齣(中幕)「エントキツケルング」(解

紛) 即後齣(大切)の語を用いたり。忍月居士の所謂繼續は文章の腹にして、西人の「アウスフエ
ウルング」(拉句コンフィルマチオ)といふものなり。「アウスフエウルング」(完成)と「フォルフエウ
ルング」とは字音相近し。豈彼を以て此となすか。

結構に重きを置くべきは、固より詩賦に於いて皆これあり。小説獨り然らざらむや。然れども其様
式に拘泥すべからざることも、又小説に若くはなし。小説は殊に其初にて突然紛錯したる人事の中堅
を衝き、此視點より前後に補叙すること多し。彼戯曲行爲の節々相疊ね、歩々相接したるが如きにあ
らず。國學家はこれを並びと名づく。並びといふことは源氏物語にもありて、させる益あることには
あらねど、物語文の手振には、後に云べきことを先語り出で、然も其事の始をば省きて云はねど、
又殊卷に其始を語りなどせる類なり。(玉琴卷一)亦同じことなり。この自由は小説に於いて殊
に著く、單稗に於いて愈又著し。單稗の作家に向ひて結構を説くものは、深く思はざるべからず。
詩材の事をいひしものには、忍月居士が外來物の説あり。外來物は客を寫して主を知らせんとする
ものなり。風を見せんとして草を寫すときは、艸を外來物とすべし。其言に曰く。外來物は詩歌は勿
論小説戯曲等をして繊巧ならしめ、靈活ならしめ、光彩あらしむる唯一の媒介物なりと。學海居士
も亦嘗て春の屋の説を擧げて曰く。尋常の小説の佳人思婦の容貌性情を寫すや、直に其人に就いて
筆を下すがゆゑに、其言ふところは巧にして盡せるが如しと雖、全く其人の身上を離れて識らず知
らざる境界に及ぶ妙を見ず。若他よりしてこれを摸寫するときは、其人の意思の外に出で、反りて
直に其人を寫すよりも真情を得べしと。蓋皆觀相を貴ぶ説に過ぎず。
同くこゝに論及せしは露子姫を評せし露伴子なり。曰く。當世の小説家は「キャラクター」などの

論に精くして、其「キャラクター」の發表せらるゝ一部分なる衣裳持物などの點に至りては大に精
からず。今の通弊といふべし。日本にせよ、西洋にせよ、衣服容貌を精く書く必要を認めたる小説
家決して少からず。即ち衣服は其人物を能く著はすものなればなり。西鶴京傳三馬等は殊に意を注
ぎたり。當時此點に於いて見るべきは美妙子にあらず、紅葉子にあらず、二葉亭、嵯峨の屋諸先生に
もあらずして、唯僅に採菊散人、香雪山人等の老人株の諸先生なりとす。(讀賣新聞)衣服容貌を
精く書く必要は、洵に東西詩家の認めたる所なり。されど餘りに詳に書く弊害も亦東西詩家の認め
たる所なり。衣服容貌はこれを寫したるのみにて其目的を達するにあらず。これを寫したるは方便
のみ。其目的は則「キャラクター」に在り。容貌を寫すにも必ずしも頭髮より足趾に至り一々に出さず、
こゝに一態かじこに一狀と輕々に寫して却りて妙なることあり。梁谿漫志にいはいはく。始皇見茅焦。
記事者書云。王仗劍而坐。口正沫出。觀口正沫出四字。則始皇驚忍虎視之狀。赫然可見矣。衣服も
亦然り。詩は固より畫に非ず。一目して悉すべきことも、之を文に筆して帽より襟に及び、襟より帯
に及び、帯より襪に及ぶうちには、遂に帽のいかなりしかを忘るゝが如きことなきにあらず。此並
存と尋存との事に就いては、レツシングが論あり。衣服容貌を寫すは人相書の如くなること勿れ。
宜しく左氏が人の姓名字を處々に點出する如くなるべし。顯微鏡下に微蟲の手足を數ふる如くなる
こと勿れ。山嶽林木樓臺が烟雲斷續の間に出没する如くなるべし。採菊香雪必ずしも貴ぶに足らず。
この評家露伴子に於いてこそ余等時として師とすべき叙法を見しが。

小説中人物と人物との間に存する主客に就きては忍月の論あり。忍月はめぐりあひを評して曰く。
最も價値ある點は、本篇の主となるべき佳客人客となり、却りて客となるべき著者主となるに在り。之

を別言すれば形となるべきもの影となり、影却りて形となるに在り。又京人形を評して曰く。山を描かんと欲せば宜しく山を描くべし。焉んぞ川を描いたるばかりにて山を描けりといふことを得んやと。其意を描るに客を細寫して人に主を推知せしむるは好し。されど客のみ描きて主を忘れたらんやうなるは悪しといふことならむ。余等も亦思ふ、正寫は常にして側寫は變なり。變は則時にこれを用いて妙ならぬにあらねど、時として又た其弊に勝へざることあり。露伴子が戀山賤を評して、魯西亞派とか呼ぶ地質圖の横截面を見る如き文法を用いざるを喜ぶといふもこの故なるべし。(初時雨九六面)

小説中人物と人事との權衡をも忍月居士が言ひぬ。居士の新小説を評するや、苦樂に於いては人物は人物の爲めに働作するを褒め、朧月夜に於ては人物の事實の爲めに働作するを貶したり。人物の爲めに働作すといふは、「カラクテリスチツク」熟く調ひて、趣向は人物の性より自ら湧出するをいふなるべく、人物の事實の爲めに働作すといふは、強て結構を成したるが爲めに、人物のこれにつれて進退するさま、事迹に使役せらるゝ如く見ゆるをいふなるべし。其他人物に就きて命名の法を説きしは不二山人なり。曰く。悪人には悪らしき、善人には善らしき、道化形には笑ふべき、濡事師にはやさしき名をつくるを以て常とす。然し實際よりいへば馬鹿々々しき事なりと。これも馬鹿々々しき詮議なるべし。

最後に猶擧ぐべきは大作を望む説なり。女學記者のいはく。文字の英雄は兵馬の英雄と異なることなし、四海を飲む膽はあるか、宇宙を蓋ふ大觀念なくては文字の英雄とはなり難しと。北邨散士のいはく。ギョオテの「ファウスト」の如くありてこゝろ、ドストエフスキイの罪及罰の如くありてこゝろ、人生

説明的小説とはいふべけれ。又ブウシユキンの「エウゲニン」、オチエギン、ゴオゴリの按察使、ゴンチャロフの崩岸の如くありてこゝろ、社會批評的小説とはいふべけれ。悲しい哉、日本には此様な小説なしと。春の屋も亦曰く。明治二十二年の小説は依然として局部小説なり。全局即人間の運命に留意せるもの殆無かりき。(今や然るべき作家も出でたり)此上は「ハムレット」、失樂園又は「ファウスト」の如き大觀念を入るゝ頭腦こそほしけれと。安石出でずば蒼生をいかにせむ。望寛の情誰かは懐かざるべき。然れども伊太利の文華あるも、千古唯一ダンテあり。獨逸の詩人れほきも、萬古唯一ギョオテあり。寄語す、世の小説家に。敢てこの功をなさむと企圖するものは、須く先づ其力を測るべし。「チ井ナ、コメチャ」、「ファウスト」中の人物をして血あり肉あり生氣鬱勃たらしめし力は、豈尋常ならむや。(明治二十三年一月)

自評についての異議

われ嘗て文を山房に論せしとき、書を著して自ら評する事に言ひ及びぬ。(二七二面)これを聞いて此のがじと思ふところを述べたる人三人あり。自ら評することを善しとすれど、名を匿して自ら評することを惡しとする人ひとり。これを漣山人とす。(國會)自ら評することを言ひしときわが見を謬りたる見なりとして痛く斥けし人ひとり。これを正直太夫とす。(同上)自ら評することをば兎も角も恕すべけれど、名を匿して自ら評するは徳に背きたれば、例を引いてこれを許すべからずといふ人一人。これを幽篁子とす。(曙第四)先づ漣山人が言を細に聞かむ。漣山人は書を著して自ら評する事の範圍を立て、直にこれのれが著し、書を評する常の自評の法の外に、人のおのれが

自評についての異議

著しつる書を評せしときこれに答ふるをも自評の中にいれたり。われ思ふに所謂自著自評の範圍は、これより狭くも取らるべく、またこれより寛くも取らるべし。これより狭く取りて直にこれのれが著し、書を評することのみとせしは我なり。これより寛く取らば、かまへておのれが著作を評すことにはあらねど、自序のうち、人に與ふる簡牘のうち、自傳のうち、さては後の著作のうちなどにて人の批評に關らざる我著作の批評をなすをも自著自評と名づくべし。漣山人がかく範圍を立てしも、若し自ら自評の事を論ぜむためならば善かるべけれど、素と是れ山房論文の中なる自評の事を言はむためなれば、少しく問題外にわたるべし。

漣山人は次におもへらく。文士の名を匿すは答むべき事ならず。答むべきは名を匿してこれのが作を評することなりと。さて名を匿すことの名を答むべからざる故をば漣山人言はずして、名を匿してこれのが作を評することの名を答むべき故をのみ言ひ試みたり。うの言にいはく。名を匿しておのが作を評するは眞率なり、嚴肅なり、忌味に陥り難く、愚痴に陥り難く、手前味噌に陥り難し。名を匿してこれのが作を評するは眞率ならず、嚴肅ならず、忌味、愚痴に陥り易く、手前味噌に陥り易しと。

漣山人は是の如く斷じて、さてれもへらく。山房の主人が引きしシルレル、ハウフが自評は名を匿しての自評なれば、これをなしはシルレル、ハウフが一生の失錯なり。山房の主人がシルレル、ハウフがせし如き匿名自評を罪に非ずとせしは過ならむと。

われ漣山人が言を聞いて、うの善しといひしものは奈何なるものかと釋ね見しに、そは唯名を顯しての自評のみなり。顯名自評とは何物ぞ。よもや名を顯して直にこれのが作を評することにはあらざるべし。よもや漣山人と名乗りて、漣山人の妹春貝をかまへて批評するが如きことを謂ふにはあらざ

るべし。故いかにといふに、是れ今も昔も殆絶て其例なかるべき批評法にて、漣山人といへども今も昔も殆絶て其例なかるべき事の得失を論ずべくもあらざればなり。さらば漣山人が善しとする顯名自評は、人のれのが作を評せしとき、名を顯してこれに答ふるを謂へるのみならむ。顯名答評のみならむ。顯名答評はわがさきの論文の中にて自著自評といひしものにあらず。

わが所謂自評、即ちかまへての自評をば漣山人必ず答めむとす。漣山人が顯名匿名の別を立て、半ば就き半ば去るが如く見せたるは、うの意識ありてなるか、意識なくてなるかは知らねど、虚言のみ。故いかにといふに、顯名匿名の相殊なる處に、漣山人が取捨存するにはあらず、その取るところは答評にして、その捨つるところは我が所謂自評なればなり。直にしたる自評には名を顯はしたる例、今も昔もなきことは上に言ひぬ。うはれのづから名を顯すべからざる故ありてなり。答評には名を顯したる例いと多し。そはれのづから名を顯すべき故ありてなり。

けだし我が書を著すや、これを評すべき恰好の地位に居るものは我にあらずして他人なり。評の常は自評にあらずして他評なり。されば批評と稱する文の類にも論に論の式あり、記に記の式あるが如く、定まりたる式ありて、うの式は自評の式にあらずして、他評の式なり。古今の自評をなすものゝ或は名を署せざるシルレル、ハウフの如く、或は假に名のこと馬琴が魁菴子といへるが如きは、常の式に従ふのみ。かまへての自評には名を匿すべき故ありとはこれを謂ふなり。人の我著を評せしときこれに答ふる文は歐羅巴人のいはゆる開書のたぐひにして、尺牘の體裁あり、名を署すべき慣例あり。答評には名を顯すべき故ありとはこれを謂ふなり。

漣山人が匿名を去りて顯名に就きたる如きは、その言の虚なる側にして、うの我が所謂自評を斥けて、ひとり答評のみ取りたるは、うの言の實なる側なり。眞率嚴肅にして、忌味、愚痴、手前味増の弊に陥り難きは顯名自評なりといへど、これは顯名を取れるにあらず。これに反したるは匿名自評なりといへど、これは匿名を斥けたるにあらず。匿名をば漣山人みづから答めずといへり。

漣山人は答評を眞率、嚴肅にして、忌味、愚痴、手前味増の弊に陥り難しとするなり。かまへての自評を眞率、嚴肅ならずして、忌味、愚痴、手前味増の弊に陥り易しとするなり。されど答評は何故に眞率嚴肅にして弊を生じ難きか、かまへての自評は何故に眞率嚴肅ならずして弊を生じ易きか。漣山人は明にこれを言はざりき。

われ思ふに批評の眞率嚴肅なると忌味、愚痴、手前味増に陥るとは、自評他評の間に生ずる別にもあらず、直にしたる自評と答評との間に生ずる別にもあらず。其別は評者の心に存ず。他評は評の常法なれば、うの眞率なるべく、嚴肅なるべきは、何人も疑はざるべし。答評の眞率なるべく、嚴肅なるべきは漣山人みづから認めたり。いでや評者の心次第にて、直にしたる自評の能く眞率嚴肅なる道理を示さむ。

れほよそ美術に對する製作性とこれに對する感納性とは一人の上にて或は並存し、或は偏存す。世に詩を賦して拙からむと欲するものはあらず。天晴なる名作をなさむとおもひて賦したる詩の、おもひの外に拙く出来あがりたる曉に、作者に批評眼なくば猶名作なりとすべけれど、作者の感納性敏からば、かれ必ずれの製作性の足らざるを知らむ。好判者の善詩人にあらざることあるは此道理によりてなり。直にしたる自評の眞率嚴肅なるべきも此道理によりてなり。

好判者は必ずしも善詩人にあらず。此言は今の文士皆是認したり。知らずや、これを是認したるは、即ち製作性の感納性とひとりくうへにて、或は並存し、或は偏存することあるべきを是認したるものなるを。今の文士は或は意識ありて兩性の是の如きを是認し、或は意識なくしてうの然るべきを是認したり。さらば我感納性を役して、直に我製作性の結果を判することの出来べきは、復た争ふべからず。かく直に自ら評することある時、其人の心正しく、其人の感納性敏くば、うのかまへての自評は眞率嚴肅ならむこと疑なし。シルレル、ハウフが自評に忌味もなく、愚痴もなく、手前味増もなきはこゝを以てなり。

シルレル、ハウフが批評若し眞率ならず、嚴肅ならず、忌味、愚痴、手前味増に陥りたる痕あらば、これを彼等が生涯の失錯とせむも宜しからむ。シルレルが自作群盜を評して、れのが詩想の激昂したる處に言ひ及びしは極めて眞率なり。ハウフが自作マリヤ堡の最後の武士を評せし言は忌味ならず、愚痴ならず。漣山人は勝手に直にしたる自評の弊多かるべきをれもひ、古の大家の批評法たまたまれの弊多しとれもへる手段になりたるを見て、輒ち古の大家を罵り、うの一生の失錯を責む。是れ豈古の大家を論ずる法ならむや。

これよりは正直正太夫の説を聞かむ。正太夫は其立言のはじめにわが前の論文を駁せざること能はざる所以をことわらむとしたり。正太夫が國會の文苑に入りて荆鞭を揮ふや久し。國民之友去年の夏期附録出でし中に三味道人の吾亡妻あり。道人後に虚子と名乗りて、おのが文に至情の文なりといひ、我文我涙を紅化したるといふ。正太夫これを聞いて其鞭をふり翳してれもへらく。三味道人は名を匿して世を詐らむとし、假面を被りてれのれが文に至情の文なりといひ、れのれが涙は吾亡

妻のために紅化せられたりといふ。うの言に依れば吾亡妻の偽物なることを知るべしと。(荆鞭)世間これによりて吾亡妻の作者を罪人にす。われ乃ち名を匿してれのが作を評することの罪にあらざるを辨じて三味道人が罪人にあらざることの明にしつ。正太夫が山房論文を駁するに至りしは、わがために其鞭下の人を奪ひ去られむことをねそれなりき。

正太夫は先づれもへらく。山房の主人が三味道人を辨護したる手段には如才なかりきと。われ其意を忖るに、こは我文中に、正太夫が吾亡妻を虚偽なりと断ぜしは、齒に衣着せぬ批評家の面目なるべしといひ、また吾亡妻を虚偽なりといふ人々の言の當れりやあらずやは問はずといへりけるを見て、我を以て荆鞭を懼るゝものとなし、三味道人を辨護しつゝも正太夫が機嫌を覗ふものとなしたるならむ。

われは人の文を論ずるに逢ふごとに、好みてこれを評すれども、人の小説雜著を評することを厭へり。わが三味道人の吾亡妻を評せざるもこゝを以てのみ。吾亡妻は虚偽なるか虚偽ならざるか。これを吾亡妻に就きて問はむは吾事にあらず。吾亡妻を虚偽なりといふは當れりや、當らざるや。これを吾亡妻に就きて問はむは吾事にあらず。さきにはわれ唯荆鞭の文についてその自著自評の事に關りたる所のみ論じたり。是れ荆鞭を憚りてにもあらず、正太夫をいとひてにもあらず、いまの小説一雜著の妙不妙を議すること好まざるを以てなりき。われ今一步を進めて正太夫の吾亡妻を虚偽なりとする理由をたつねむ。かの正太夫が鞭若し梶と蠟とあらば、われ柳子にあらずといへども、豈これを濯ふことを憚らむや。

權に正太夫を獄卒とすれば、うの荆鞭に觸るゝ人の中には濫刑を受けたるものあるべく、また冤罪

を負ひたるものあるべし。われは吾亡妻の虚偽なるか、虚偽ならざるかを、その本文につきては問はずといへども、吾亡妻を虚偽なりとする正太夫が文案をば再びこゝに審査してこれによりて三味道人を罪にねとすことの非なることを飽くまでも明にせむとす。

正太夫はわが自評につきての見を謬りたりとし、服するに足らずとし、わが三味道人を辨護したる説を薄弱なりとし、到底成立たずとす。いでやこれより訴人が得意の口狀を聞かむ。

正太夫のいはく。いにしへの英雄には父に弓を彎きし人あり、主家の金を窃みて逃げし人あり。こは惡しき事なれば、いにしへの英雄にかゝる事をなしゝ人あればとて、善きためしには引くべからず。シルレルとハウフと名を匿してれのが作を評せし例を引きて三味道人を辨護するは、れさんが手探にて勝手口の心張棒を取るにも劣れり。名にしれふ山房の主人が神代は知らず、今の社會にはめづらしく薄弱なる論を立てたるは怪むべしと。われおもふにこは名にしれふ正直正太夫には似合はしからぬ薄弱なる駁しかたなり。シルレルとハウフとが名を匿してれのが作を評せしことの罪とすべきにあらざるは既に辨ぜし如し。われ三味道人が心を推すること能はずと雖、うの名を匿して吾亡妻を評せしことを葉を見るに、シルレルとハウフとが自評の語に比べて甚しき差異なかりき。われ我が妻を吊ひし文を至情の文ならずといはむやうなかるべく、またわれ我が妻を吊ひし文を讀みてみづから泣きたるあとなれば、人の書いたる文を讀みて悲しかりしにはあらずやと疑ふも、あながち怪むべき事にあらず。シルレル、ハウフが自評をば、後に漣山人こゝ咎めつれ、いにしへより罪する人なきに、獨り三味道人のみれうろしき罪人のやうにねもひなさるゝは、豈冤にあらずや。父に弓を彎くは極惡なり。主家の金を竊むは重罪なり。極惡は誅すべく、重罪は刑すべし。古の英雄に

は極悪にして重罪を犯し、當時の刑辟を免れし人あるべしといへども、誰かこれをためしに引いて、父に弓を彎くを善しとし、主家の金を窃むを善しとせむ。名を匿してれのが作を評するは、我感納性を以て我製作性の結果を判する正當なる手段にして、實に批評の一法に備ふべきものなれば、固よりはれ罪ならず。矧んやこれを極悪なりとし、重罪なりとすべけんや。われは罪にあらざる三昧道人が自評の事を言ひて、罪にあらざるシルレル、ハウフが自評の事をためしに引きつるを、かの極悪重罪の例とひとしなみに論ぜしは、いまの社會はさらにもいはず、神代にもなき論理なるべし。

うが上に正太夫は我を以て例によりて事を斷じたるものとすれど、苟も論理の片端をも心得たらむもの、誰か類例の證據にあらざるを知らざらむ。われは名を匿してれのが作を評せしためしは、古今の大家に少からずとこらいひつれ。われは三昧道人が自評はシルレル、ハウフが自評に比べて甚しき差異なしとこそれもひぬれ。われは古今の大家にためしあるが故に、名を匿してれのが作を評する事を善しとすといひしことなし、われはシルレル、ハウフが自評に比べて甚しき差異なき故に、三昧道人が自評は罪にあらざるとれもひしことなし。古今の大家は古今の大家なり。シルレル、ハウフはシルレル、ハウフなり。三昧道人は三昧道人なり。彼を擧げて此を證し、此を擧げて彼を證せば、固より論理に背くべけれど、彼のためしに此を引き、此の例に彼を引かむは我が勝手なり。これ程の別をだに知らずで我に打つて掛るものは、勝手口の心張棒を振り上げたるれさんにも劣りたらむかし。

正太夫のいはく。シルレル、ハウフが自ら評せしは、小説なり。三昧道人が自ら評せしは觸感のあ

りの儘をうち出して偽り飾ることなき記事なりといへり。彼をためしに引いて此を論ぜしは過てりと。れほよう類例は相似たる事を衡ぶるものにて、相同じき事を列ぬるものにあらず。シルレル、ハウフが自評と三昧道人が自評と相似たる處は、彼も此も自ら其作を評せしところなり。わが引例の範圍内にては小説と感を記する文との別を問ふことを要せざりしなり。

正太夫のいはく。シルレル、ハウフがれのが小説を評せしには愛敬あり。三昧道人がれのが記事を評せしには愛敬なし。故いかにといふに三昧道人が自評は、自評を許すべからざる時にせしものなればなりと。さて三昧道人が自ら吾亡妻を評せし時の自評を許すべからざる時なるを證せむとて、正太夫は吾亡妻の本文を引きつ。其文にいへらく。嗚呼、人既に生あり。何が故にまた死をかるべからざる。今や室内瘦羸の影だになく、略痰の聲だになし。嗚呼、誰か泣かぬを男とは定めし。薄如たる泣涕のみ、豈獨り悲歎の符號ならむや。誰浪笑敖もまた時として寸斷の悲腸より出づるものと。正太夫若しこれにて自評の其時にあらざるを證せむとせば、われは又これにて自評の恰も其時なりしを證することを得べし。夫れ悲歎の符號はひとり涙のみならず。寸斷の悲腸より誰浪笑敖も出づることあるべし。誰浪笑敖すら出づべし。亡妻を弔ふ詩、亡妻を憶ふ文、獨り悲腸より出でざらむや。詩文既に成らば、みづから誦しみづから評せむも亦悲を銷し悶を排く道にあらざらむや。要するに正太夫が訴狀の第一の要點なる引例の事は毫も取るに足らず。罪にあらざる自評の例に、罪なる叛逆を引きつるも取るに足らず。人の例を引きつるを、證を立てたりと誤り認めしも取るに足らず。類例の本性を知らずして、事の全く同じからむを欲せしも取るに足らず。悲しきときは泣いてばかり居るものなりとや心得けむ、鼓盆の時に當りて自ら文を著し、自ら文を評すべからず

といふも取るに足らず。われは正大夫がねもひしよりも淺々しきを笑はざること能はず。正大夫のいはく。山房の主人は自評を以て自信の念厚きによるものとしたり、自評即自信としたり。是れ俗説なり、是れ握飯的論法なりと。自評は自信の念厚きによるものとは誰か言ひし。自評即自信なりとは誰か言ひし。わが論文にいはく。三味道人は我文我涙を紅化せしかと疑ひて、忽ち否々と排し去りしが、縦令道人否々と叫ばざりければとて、われ必ずしも其罪を問はざるべし。われは唯三味道人が自ら信ずることの厚きを見るべきのみと。見よ、わが自ら信ずること厚しといひしは、三味道人が我文我涙を紅化したたりといはむ折の事なるを、假定したる一の場合なるを。この假定したる小き場合と自評といふものゝねほいなる意義とを打して一丸となしは正大夫なり。これをこり俗説とはいはめ。これをこそ握飯的論法とはいはめ。

正大夫のいはく。漣山人が答評を自評の中にいれたるは甚だしく眞を失へるものにもあらざるべし。答評もまた自評ならば、自評はれのが作を批評すといはむよりは、れのが作を辨護すといふべきものならむ。辨護は怖ることの果なり。自信は怖ることの因にあらざる。縦令答評を自評の範圍内に入れたりとて、自評何ぞ必ずしも辨護に陥らむや。縦令自評の辨護に陥ることありとて、辨護何ぞ必ずしも怖ることの果ならむや。自評の辨護に陥ると陥らざるとは、自評者の心によりて生ずる別なり。辨護の怖ることの果なるも然らざるとは、りの辨護するところの性によりて生ずる別なり。げに自ら信ずるものは怖ること念なかるべし。されど自ら信じて怖ること念なきもの自ら其文を評せば必ず長を長とし、短を短とし、憚るところなく判語を下さむ。是れ辨護にあらず。げに辨護は怖ることの果なることあるべし。されど怖ることの果なる辨護は短を護るなり。護

るところ若し長ならば辨護的批評もまた立派なる批評なるべし。

正大夫のいはく。山房の主人は言ふものは自ら信ずること厚く、黙するものは自ら信ずること薄しとやうに斷じたり。こは速斷なり、迂なる説なり、淺き言なりと。後に漣山人が自評は自信の力の強きに依るものなるが故に可なりといふ説を我に押し付けしは、これに基けるなるべし。うもく言ふものは自ら信ずること厚しとやうには誰か斷せし。黙するものは自ら信ずること薄しとやうには誰か斷せし。われは三味道人若し我文我涙を紅化したたりと言ひ放ちたらば、りの自ら信ずること厚きを見るべからむと云ひき。三味道人若し虚言をいふものならば、かく言ひ放ちたりとて、自ら信ずること厚きを見るべきにあらざるべけれど、三味道人を虚言をいふものなりとすべき證なき上は、自ら信じてかく言ひ放ちたりと斷ずるは當然の事なり。正大夫は次に自ら信ずるものは、れのが作を投出しねきて、これを評することなからむといへり。是れ速斷なり。故にかにといふに三味道人が人の作を評して、おなじ冊子の中に於いて、れなじ愛慕の情を寫したるれのが作に言ひ及びしは、理解し易き思想の連繋ならむも計られず。かゝる思想の連繋は自ら信ずる人にも自ら信ぜざる人にもあるべければなり。正大夫は又名を匿したるを責を避けたるなりといへり。是れ迂なる説なり。故にかにといふに名を匿すことの自評の常なるは免まれ角まれ、三味道人が人の作を評する時、みづから虚子と名乗りければとて、直に責を避けたりといはむは、理に敏きもの言にあらざるべければなり。正大夫は又風流悟を評してれのが作に及びしをみづから晦ましたるなりといへり。是れ淺き言なり。故にかにといふに、三味道人が人の作を評せしは主にれのが作を評せむがためなりきといふ明なる證は一もなきに、世の常なる思想の連繋のあるべきにも心付かで、直に人を罪せむとする

は、深慮あるものと言にはあらざるべければなり。正太夫は是の如く速く断じ、迂く説き、淺く言ひて、黙するものは自信厚く、言ふものは自信薄しとやうなる謬見を示し、さて其杓子定規もてわが論文中の自信の語に比べ、山房主人が自信とわが自信と同じからずといひ、抑自信に二種ありやと問ひぬ。自信豈二種あらむや。自ら信ずるものと黙するは矯飾して黙するにあらず、敵を度外に視て黙するなり。自ら信ずる者の物いふはうぬ惚ありてもいふにあらず、臆面なくものいふなり。わが論文にいはいく。我文壇の自評を忌むは、文士みづから信ずることの薄ければなり、われと我が自惚に慙ぢてなり、わが仲間利にさどく、僞名の蔭に躲ひつゝ自ら售らむことをわうれてなり。あはれ、これも世のさがにやあらむと。この言や激するところありて發せしなり。われは自ら信ずるもの必ず自評を喜ぶともいはず、自ら信ずるもの必ず自信を忌むともいはず。自ら信じて自評を喜ぶものには、既に引きつるシルレル、ハッフ、馬琴等が外、歐羅巴第一の批評家といはれしレッツングあり。クルツが編せしレッツングが全集の第五の巻、第五百四面より以下四十餘面は皆其自評にして、その過半はかまへて直にしたる匿名自評なり。されど文學史に通ずるものは、レッツングにうぬ惚ありとはいはず。自ら信じて自評を忌むものには俄羅斯近代の名家ツルゲニエツフあり。ツルゲニエツフが少年作者を戒むる言にいはいく。善微ならば必ず花咲くべしとギョオテいひき。世に知られで止むべき大詩人はなきものなり。時に當りてものいはず歳を経てかへりみよと。されど文學史を觀るものは、ツルゲニエツフ矯飾せりとはいはず。言ふも善し。黙するも亦善し。言ふと黙するとにて、自ら信ずると自ら信ぜざるを判すべからず。自信は一なり。能くみづから信ずるものには、言ふと黙すると、皆宜しからざることをなきなり。わが文士自ら信ずることの薄き

によりて、自評を忌むことろ生ずといひし時は、分明にその今の文壇の特相なるをことわりねきぬ。我言は抽象の論にあらざりて具象の評なりき。且く眼を放ちて今の文壇のありさまを見よ。みづから信ぜずして黨を立て人に頼るものあり。今の黨人をわかちて許多の新聞雑誌を領するや、わがれ等は自評によらずして相互に讚評すべきを以て黨外の人の自評を忌むべし。またわれ我眞價を知らずして、しばしうぬ惚の失錯をなし、かつは慙ぢ、かつは疑ふものあり。これも自評を忌むものならむ。またわがれ若し自評せば、狗肉のために羊頭を掛くべしとわがれもふものあり。これも自評を忌むものならむ。こは皆おのが自ら信ぜざる心を以て、人の自ら信ずる心を付るが故なり。此の如き人は世に我過をして日月の蝕の如くならしむべき人あらむともわがれもはず。また能あるときは我子をも薦むべき人あらむともわがれもはず。是を以て人の自著自評の罪にあらざることを言ふを聞きては、乃ち怒り、乃ち罵る。今の惑へることもまた甚からずや。

正太夫はその自信即不自評説若くは自評即不自評説（これは我説を自信即自評説といひしに報いむためなり）の終に、美妙齋主人が猿面冠者の評と藝林奇話中の自傳めきたる一則とを擧げて、これを自ら信ぜずして自ら評したる例とせしが、二文中いづくに自ら信ぜざる跡あるかをばことわらざりき。美妙子はこれを辨じてはいはい。猿面冠者の自評は平凡にして、當時諸評家の言ひしところと大なる差なかりき。また藝林奇話はある人の如き打ち毀しの筆を用わずして、つとめて人の害を避けたるものなり。うが中に叙事の我身の上に及びしは極めて少かりしを見て、我量の狭からざるを知れど（國民新聞）正太夫再び難じてはいはい。猿面冠者の自評、若し當時諸評家の言ひしところと大なる差なくば、うのこと葉の自評になりて出でざるべからざる故いづくにかある。藝林奇話にて

人の害を避けたりとて、局量の大きな處をば認めがたしと。(國會) 正太夫が猿面冠者の自評の出でざるべからざる故、即其必要を問ひたるは、因果の連鎖をいつくまでたぐり行くところなるか知らねど、猿面冠者の評、美妙子の自評にて改進新聞に出でしは、美妙子が平生改進新聞のために新著を評せし縁によりてなること、レッシングが自評のレッシングが批評欄をうけ持ちたりし「フォス」新聞に出でしにれなじかるべし。正太夫はまた人の害を避けたりとて、局量の大きさは知られずといへど、美妙子が人の害を避けたるを、美妙子のいはゆる或人が打ち毀しの筆を揮ひて人の害を避けざると、うの局量孰れか大なる、孰れか小き。こは誰にも分かるべし。正太夫はこの言を聞きて、山房の主人またレッシングを證にして美妙子を辨護したりといはむも計られねど、われはこたびも唯レッシングを例に引きしのみなれば、念のためのことわりなく。

正太夫が訴狀の第二の要點なる自信と自評との事に就きては、われうの誤なることを充分にいひ盡しぬ。素とわが山房論文はあながち三昧道人一人の利害のためにいひしにあらざ、文壇のなりゆきを慨きれもひて、道人が罪なきことを説きつるなれば、若これを駁せむとならば、矢張文壇のなりゆきを考へて言を立てざるべからず。文人に自ら信ずる心なきときは、あはれ我文壇はいかになりゆくらむ。今の文士の人の文を評せしを見るや、問ふところはうの當れりや、當らずやにあらざして、うの自評なるか他評なるかなり。今の文士の人の文を作りたるを見るや、問ふところはうの妙なりや、妙ならずやにあらざして、うの人に讃められたるか、人に難せられたるかなり。さるにかかる文壇の傾嚮に心付かずして我論文を駁するものは正太夫なり。

正太夫はまた吾亡妻を以て世に毒を流したるものなりとしていはく。葦分船には亡家尊あり。浪速

鴻には親心あり。觸感のありのまゝを記すといふ吾亡妻出でずは、かゝる摸倣者はなからむ。其責をば吾亡妻を作りし三昧道人負はざるべからずと。觸感のありのまゝをせるすは惡き事にあらざ。これを志るす巧拙は其人に存ず。拙き自傳多きために、ルウソオ、ギョオテ備をつくれりといふべからず。拙き戯曲多きためにゾフオクレス、エスキュロスには責を負はずべからず。吾亡妻を作りしを罪とすべくば、摸倣者なしといへども罪とすべし。吾亡妻を作りしを罪とすべからずは、摸倣者ありといへども罪とすべからず。

吾亡妻の虚偽なるか、虚偽ならざるかを、吾亡妻に就いて詮議せむはわが事にあらざ。われは正太夫が訴狀を審査しつれど、吾亡妻の虚偽なる證を見ず。正太夫は虚子が語中に虚偽の痕ありといひて、これを吾亡妻の虚偽なる證にすれど、荆鞭の本文にてうの虚偽の痕とするところを見れば、いたづらに三昧道人名を匿して世を詐らむとすといふに過ぎず。假面を被りて我文を至情の文なりといひきといふに過ぎず。我涙は吾亡妻のために紅化せられたりといひきといふに過ぎず。世を詐らむとすとは、名を匿しより推したるなり。假面を被れりとは、名を匿したりといふことを移用語にていふに過ぎず。匿名自評は罪にあらざ。匿名して人の作を評する間、我作に言ひ及ぶも罪にあらざ。われ吾妻を憶ふ文を至情の文なりといふは當然の事なるべし。我涙我至情の文のために紅化せられやしけむと暫し疑ひしも罪となすに足らざるべし。されば正太夫が擧げたる證據は皆薄弱なるものにして、其訴狀は到底成立たざるなり。

正太夫は最後に、汎く自評といふものゝ上よりいふときは、名を顯してなさむも名を匿してなさむも、自ら信じてなさむも、自ら信ぜずしてなさむも、許すべしとことわりてうの駁説を結びき。さ

らば正太夫も名を匿し、假面を被りて批評せし間に、自評を挿みたる三昧道人を罪するにはあらざるべし。りの自評、その匿名の世を詐らむためなるを推して、これを咎むるなるべし。若しかく推することを許すべくは、我文は至情の文なりといへるをも、詐ならむと推せらるべく、我涙我至情の文のために紅化せられやしけむと疑ひきといへるをも、詐ならむと推せらるべし。されどかく推することの邪推にあらざる證を見ざる上は、荆鞭を揮ひて三昧道人に向ふべきにあらず。

これよりは幽篁子が言を聞かむ。幽篁子はわれを凡庸にして、シルレルに心酔し、ハウフを崇拜するものとす。その仔細はいかにといふに、名を匿してみづから評するは、悪しきことなるに、シルレルがなしたり、ハウフがなしたりとてりの悪事に左袒する山房の主人は凡庸なるべし、シルレルに心酔したるなるべし、ハウフを崇拜せるなるべしとなり。われはまことに凡庸なるべし。われはハウフなどを崇拜するものならねど、シルレルには心酔したるところあらむも知れず。されどわれは匿名自評をあしき事ともたもはず、またシルレルが匿名自評せしためにこれに心酔するが如き過には陥らざるべきのみ。

公衆とは何物

民の聲は神の聲なり (vox populi vox dei) とはいにしへの羅馬の言葉なり。されどまことに民の聲に従ふべきは、唯國民の發達に關する問題あるのみ。眞、美、善の三つに就きては、いはゆる民、いはゆる公衆、所謂世間、果して何事をか解せむ (Schopenhauer, Parerga II. Cap. XX; Hartmann, Phil. d. Urb., Theil II. G. Cap. XIII.) 萬橋がいやしき技をねもしるがりては圓朝に後を見せ、鳥熊芝居を見にゆけども、新富座に向ひては足を裏み、りのさま風に捲かるゝ木葉の如く、潮にたゞ

よふ浮木に似たるは藝術に對する公衆なれば、獨逸の文士の言に公衆とは身一つにして頭ねほき怪物なりといへるも宜なり。見ずや、志ある詩人は公衆のために動かされずして、花の作りし劇の中らざりしとき、棧敷の欄より土間を見えろし、公衆は今夜こゝにて落第したりと呼びし作者あるを。又見ずや、活眼を具ふる論者は公衆のために意を曲ぐることをなくして、花のが宗論を正しとおもひては、世はこれがために滅ぶとも可なりと呼びし改革者あるを。批評家も亦是の如し。公衆若し左右すべくは則ち可なり。若し左右すべからずば、孤立しても淋しがらぬをこそ批評家の操とすべきものなれ。この故にわれは公衆のために左右せらるゝものと、兩天秤の説を立て、公衆の審判を求むるものをば、批評家なりと看做すこと能はず。正直正太夫のいはく。三昧道人は被告の如く、鴈外漁史は辨護人の如く、花のそれは検事の如くにして、世間てふ判官は吾亡妻につきての獄を決すべきものなりと。(國會) 連山人のいはく。三昧は被告なり。正太夫は檢察官なり。鴈外は辨護人なり。おのれは陪席判事なり。しかして世間實にこれが裁判長たるなりと。(讀賣) 正太夫も連山人も美術の批評、文學の審判の上よりは所謂世間、所謂公衆の頼むに足らざるを知らるならむ。知りてなほ世間を判官にし、公衆を裁判長にせむとするに至りしは何故ぞ。答へていはく。吾亡妻の問題の最早文學につきての褒貶にあらざりて純粹なる人物につきての臧否に陥りたる明徴なり。われは柵草紙を編輯して文學の評論をなせども、詩人の身の上の裁判をなすことを欲せず。讒謗罵詈訾してみづから愧づることを知らざる今の自稱批評家の口角の飛沫我面に濺ぐを以て、われも止むことを得ずして再びこの争に口を出だせど、われは決して世間公衆に訴へてかの問題を決せむとは望まざるなり。シユミットが不偏不黨の公衆は彼を信すべきか、われを信すべきかといひしとき、

ハルトマンが嘲りし言葉あり。Sはく。Auf einen solchen Appell an die Plausibilität beschränkt sich seine Argumentation fuer seinen Standpunkt. (Ph. d. Unb., Ed. X, Thl. 3, p. 477.)

匿名

漣山人のいはく。匿名は他の事には許すべきなれど、匿名しての自著自評は許すべからず。匿名の効能は別問題なればこゝに論ぜずと。(讀賣) 答評にあらざる自評のおのづから匿名の性を具ふるものなることは上の論文にていへり。それに殊なるは他の世事にて名を匿すことなり。我を隠さむとするのみなる間は、匿名も罪なきものなれど、(Disimulation) 我を我ならぬ人に見せむとするに至りては、匿名の罪容すべからず。(Simulation) されば文學上の自評ならぬ世事の上にては、匿名は時として頗る危険なるものなり。漣山人も匿名に効能のみありとはいはず、又他の事にての匿名は悉く許すべしとはいはねど、匿名は他の事には許すべきものなれど、匿名しての自評は許すべからずといひ、匿名の効能は云々ことわりたるは少く安ならぬところあり。われはこれに反して、世事の上にての匿名は時としておほいに危険なるものなれば許しがたきことあれど、匿名しての自著自評は許すべしといはむとす。

正太夫一たび漣を難す

漣のいはく。我作を自ら評する外に、我作を他人の評せしに答ふるをも自著自評といふと。(國會) 正太夫難じていはく。かくの如きを自評の目的とすべくは、自評はおのれを評すといはむよりも、おのれを護るといふべきものなり。おのれを護るには怖るゝ心を含めること明なり。怖るゝ心を含めるものを、自ら信する念厚き證にせむは覺束なからむと。(同上) 自評と自護との關係、畏怖と自

信との關係などは上方にて既にいへり。今は正太夫が漣を難する論理を見む。先づ漣は自評の範圍を示し、正太夫は勝手にこれを自評の目的なりといひ倣したり。範圍を示しておのれを評する場合をも、おのれを護る場合をも含ませたるは漣なり。勝手におのれを評する場合とおのれを護る場合との間に軒輊をなして、彼を輕んじ、此を重んずるやうに言ひ倣したるは正太夫なり。正太夫はかく漣が言を誤り引きたり。誤り引きたる礎の上に其詰難は立ちしなり。おのれを護るには必ずしも怖るゝ心を含まざることをば、上の論文にていひたれば、おのれを護ることに怖るゝ心を含めりと定めたる上の判断は効なし。

漣のいはく。今の文學者には往々豪傑ぶる風あり。譬へばたま／＼一書を著しても、これに全き心全き力を盡したりとするを厭ひ、強ひて餘裕ある風を粧ひ、人の褒貶を心に介せざる如く、鼻の先にて笑ひ、ひたすらえらがらむとし、自評、答評などするものを自惚なり、大人氣なしといひて笑ふと。正太夫のいはく。一書に全き心を盡したりとするを厭ふものもあるべけれど、うの厭へるを直に餘裕ある風を粧へりとし、えらがらむことを勉むとはし難かるべし。故奈何といふに其人は進取の氣象に富み、きのふの我を護るは、けふの我の進まざるを示すに過ぎざるを厭ふものなるかも計られざればなりと。漣は今の文學者中に往々ありとて著書に全力を盡せりとするを厭ひ、自らえらがらむ人を擧げ來りしなり。正太夫は著書に全力を盡せりとするを厭ふ人にして自らえらがらむ人を擧げ來りしなり。正太夫の云へる如き人のみありて、漣がいへる如き人なき證あらば異議も起るべし。漣は往々かゝる人ありといへるに、其人のありなしを問はずして、別に著書に全力を盡せりといふを厭ひて、えらがらむとせざる人の事を説き出したたりとて、はた何の反駁をかなさむ。况

や正太夫のいへる如く昨非を知らむ人も、昨是をも知れる時は、自ら護ることあるべきをや。漣のれもへらく。今の文學者には自評答評の勇なく、面を打たれても、痛を忍びて泣く如く怯なる人ありと。正太夫のいはく。自評不自評にては勇怯を分つべからず。自評するもの必ずしも勇ならず。自評せざるもの必ずしも怯ならず。されば漣が言は迂なりと。漣は自評せぬ怯人ありとこつひひたれ。自評するもの必ず勇なりとも、自評せざるもの必ず怯なりともいはざりき。夫れ自評する人の勇は顯れたる勇なり。自評せざる人の勇は隠れたる勇なり。自評する人の怯は怯の陰なるものなり。自評せざる人の怯は怯の陽なるものなり。漣はうの顯れたるもの、陽なるものを挙げたり。正太夫がうの隠れたるもの、陰なるものを挙げたるは差支なけれど、それにて漣が挙げたることを掩はむとするは、策の極めて迂なるものなるべし。

正太夫再び漣を難す

漣は正太夫が一たび難するに逢ひぬれども、れのれが畫したる自評の範圍を、自評の目的のやうに言做されしにも答へず、れのれが世に書を著して全力を盡せりといふを厭ひてわらむとする人の事をいひしを、れなじことを厭へどもわらむとせざる人ありとのみいひて、駁論めかしたるにも答へず、またれのれが顯れたる勇怯を論ぜしに、うの裏なる隠れたる勇怯を説きたるのみにて、これを掩はむとしたるにも答へずして、唯正太夫が我説を迂なりといひ、弱しといひしは、顯名匿名の相殊なる處を視ざりしためならむと臆測して答辨に代へたり。(讀賣)

正太夫は漣が筋違なる臆測の答辨とするに足らざるをことわりて、さていはく。さきには自評不自評の別の上に就いて難せしが、こたびは顯名匿名の上に就きて難せむ。漣は匿名を以て嚴肅真率を

缺ぐものとし、これに基いて匿名自評を不可なりとすれど、匿名に限りて嚴肅真率を缺ぐとは請取られぬ説なり。匿名は嚴肅真率を缺ぐこともあるべけれど、漣がこれによりて生ずとしたる手前味噌の弊は顯名にても生ずべしと。(同上)この争に於いては正太夫が言を正しとす。上に漣が自評説を辨じたる條を參看せよ。

正太夫三たび漣を難す

漣は正太夫が匿名顯名の上に就いての論を聽きて、手前味噌に陥るはひとり匿名自評のみならず、顯名自評にも此事ありといふは、親兵衛は小兒なれども強し、巴は女なれども強しといふにれなじと反難し、匿名自評を禁じて顯名自評を許すは狭き料見にあらず、必要の制裁あらしめむとする心なりといひ、正太夫が匿名自評をも顯名自評をも許して自ら大なる料見なりといふその料見は何物ぞと問ひぬ。(讀賣)

正太夫はこれに答へていはく。親兵衛、巴が譬は當らず。顯名にても匿名にても、自評によりて生ずべき弊はれなじといひしは、譬へば左右に溝ある道を行く人の左によらば左なる溝に落つべく、右によらば右なる溝に落つべしといふが如し。我が大なる料見といひしは、廣き範圍内に於いてといふに同じ。自評をば顯名匿名の別なく許す理由と見るべきものは、鴈外漁史を駁したる文中に陳べられたりと。(同上)

溝の譬は親兵衛、巴の譬を打ち破るに餘あり。大なる料見の解は聞いて有りがたくもなくなりぬ。顯名匿名の別なく自評を許すべき理由は、正太夫が我を駁したる文中には備はらず。上の文にて、顯名匿名の別を立てたる漣が本意は名の顯匿の外に在りといふ一段を參看せよ。

差出口

東海子のいはく。書を著して自ら評するは不可なり、不必要なり。人の書を著してこれを公にせむとするや、稿を屬したる後、數々讀みて粗に失せず、密に失せざらしめ、缺點の見ゆる限は改削すべし。されば其書は著者のためには完全なり。こゝを以て自ら評すべき必要なし。縱令また自ら評しても、その完全なるを讀むるより外ならず。これ手前味噌なり、問はずがたりの差出口なりと。(讀賣)

われれもふに書を著してこれを世に公にせむとするものゝしばしば讀みて改削することあるべきは固よりなり。されど其書は必ず著者のためには完全なりとはいふべからず。改削は著者の力の及ばむまでの事なれば、眼高く手低き人は我書は完全ならずと分明に認め得れども、これを改削して完全ならしむべき力なきことあらむ。又詩歌小説などの如く美術に屬する文は、無意識の裡に渾成したるだけは、あとより斧鉞を加へがたきこと屢あり。かゝる作の拙きをば作者の感納性儘に認め得れども、これを改削するに由なからむ。この時に當りて作者若し愛を割きて其稿を焚かば、その書世に出でずして止むべけれど、然らずして其稿を存する時は、その書は作者のために完全ならずとおもはるべし。作者は其稿を焚くほどの勇なかりきといへども、猶自らこれを評して我作の拙きを言ふことなからむや。レツシングが小作 (Kleinigkeiten, 1751) を公にするや、書中の詩七篇を指して讀むに足らざる平凡の作なりとし、鑑識家のこれを通覽する勞を省かむことを願ひき。東海子はかゝる自評あるべきことには思ひ到らざりしなり。かるが故に彼は自評の必ず自讃になるべきを信じたり、手前味噌になるべきを信じたり。現に問はずがたりの差出口は誰もすまじきことなり。

桐山人が自評説

桐山人は三昧が自評、正太夫、漣、鴈外が自評説を引きて四人を山家育なりとす。さて其理由はいかに。桐山人のいはく。三昧と鴈外とが爲しところ、説きしところは自著自贊のみ、世に所謂自畫自贊のみ。皆翼々たる行爲なりと。(青年文學) 三昧が吾亡妻を讀みて泣きぬとは、妻に別れし實なる感か、將たおのが文に動かされし趣味上の感かは知らねど、みづから其著を贊せしなりとは定めがたかるべし。しばらく一步を譲りて三昧まことにおのが作を贊しきとせむか。その行爲の難ずへきは其作の贊すべきものにあらざるに限りたるべし。其作若し贊すべくば、自ら贊すと雖可ならむ。桐山人果して三昧が自贊を咎めむとれもは、宜く先づ詳に吾亡妻を評してその贊するに足らざる所以を明にすべし。桐山人はまたわが説きしところを自著自贊なりとしたり。われは何處にて、いかなる言葉を用ひて、わがいかなる著作を贊せしか。桐山人はこれを指し示す責を負へり。或は思ふに、桐山人は鴈外自著自贊の事を是認したりといふべかりしを、其言葉足らずしてかくあやしき詰難となりしならむか。自著自贊の事は、われ其著の贊すべきとき限りてこれを是認す。桐山人はわれら等に翼々たる行爲ありとて難せしが、小心翼々たるために難せらるゝは古今未曾有なるべし。桐山人のいはく。漣が答評を自評の範圍に入れたるは論理を知らざるためなりと。聞かまほしきは漣が論理なり。

桐山人は漣が言を聽きて哄然として呆れたりといふ。めづらしき呆れやうもあるもの哉。

桐山人のいはく。正太夫の高論はやく我心を獲たるに近しと。正太夫の論のいづくを高しとはせしか。正太夫の論のいづくは漣が心を獲たるに近きか。

桐山人のいはく。われは自著自評に反對す。自評は文學のために益なくして害ありと。正太夫は自

ら信ずるものにも自ら信ぜざるものにも自評を許すといへり。細は正太夫が論を以てわが心が獲たるに近しとしながら、自評には反對すといふ。自評に益なしとは、何に縁りてなるか。又害ありとは何に縁りてなるか。

柵山人は或人の説を引き、序跋（自序自跋なるべし）をも自評に入れ、さてその序跋の謙辭は虚偽なり、自贊なりといふ。漣が答評を自評の範圍に入れたるを論理に背けりといひしも解すべからざることなれど、答評すら自評の範圍に入れざらむとする心にて、縦令何人の説に従へるにもせよ、自序自跋を自評の範圍内に入れて、みづから論理に背けりと思はざるは、いよく解すべからざる事なり。自序自跋のうちに自贊ありと雖、其書若し贊すべきものならば、何ぞ病とするに足らむ。柵山人のいはく。自評は遠く岡目八目に及ばずと。岡目八目は下手棋の上にくらりもせめ。公衆の眼にては大抵名作はわからぬものなり。

與芝廼園論粹書

蠅は微物なり。然れどもうるさく飛びめぐるときは、王思怒つてこれを拂ふ。鼠も亦微物なり。然れどもいやに譎怪の手段を弄ぶときは、蘇軾すらこれに役せらる。是故に春の屋主人はをり／＼かいなでの小説家を相手にして、人をして光武が騰遠の語をねはしめ、われもまた時ありては駈出しの批評家と論争して、賈誼が忌器の請を願みず。嗚呼、われ等豈好みて蠅と争ひ、喜んで鼠と闘ふものならむや。君は關西の領袖、騷壇の盟主なり。このごろ吾輩なる文の林は、見るも佗しき霜枯の景色なるに、浪速津に咲くや筆頭萬朶の花、誰かはめざましとせざらむ、誰かは羨ましとれも

はざらむ。されば葦分船の名はやさしといへども、これを行る君が力はいかにゆゑしからむ。兎にも角にもかゝる善き敵と勝負を決せむこと、我身の面目この上やあるべき。

君は審美上の醜美差別無差別の見を以て、此文戦の打物となさむとし玉へり。君はわが忍月居士の醜美無差別論を駭して醜は美ならずといひしを、蛙の面に水掛論と評し玉へり。是を君が第一撃とす。夫れ水掛論とは互に曲直ありて、いづれに適従すべくもあらぬ無用の争をこらひ。我等の醜美論は審美學存亡の問題なり。若醜美無差別といはば、作者に高下の差もなく、小説に巧拙の別もなく、批評もなく、文學もなかるべし。醜美差別の論、豈水掛論ならむや。又蛙の面に水とは我國の俗諺にて、支那小説に雨淋的蝦蟆（西遊真詮）などといへる如く、物に呆れたる義にあらず、耻を知らざるさまをいふなり、辱を受けてこれに感ぜざるさまをいふなり。蛙の面にみづから耻づることを知らざる人は、理を解すること能はざることもあるべく、また理を解すと雖も偽りて解せざるまねずることもあるべし。唯うのじやあ／＼としたる態度は則一なり。わが國民新聞に掲げし讀醜論と醜美の差別との二文には、片言隻字もわが耻辱とすべきものなし。忍月居士は我讀醜論出でたる曉に其醜論の筆を絶ちしにあらずや。硯友社の一切現之助は我醜美の差別出でし後に再び此争の水掛論なるを證すること能はざりしにあらずや。既に耻づべき事なし。君が眼炬の如きも、争でか我が耻を知ると耻を知らざるを辨ずることを得む。既に辱を受けず。君が識微を穿つも、争でか我がこれに感ずるとこれに感ぜざるを分つことを得む。醜美差別の論、豈蛙の面に水掛論といふべきものならむや。曩には君既に一たび蛙の面に水掛論といふ語を以て此争を評し、わが反論に逢ひて立派なる第二撃を加ふること能はず、卑陋にも蛙の面に水引掛けて返さむとしやれ玉ふ。その水ひ

きの絲はへて、織出されしこと葉の綾のあやしきを、左に一々繰り分けて見せばやな。

君のいはく。婦女容貌の醜美説はわれ屢井戸端會議に聽厭く、審美學上の醜美論は最早文壇に見厭いたり。女子肉體の醜美を説く井戸端の語に、耳を欬て心を傾け玉ふ君が、飽くまで其説を聽かれしは、さもあるべき事なり。既に飽くまでこれを聽きつ。さるに葦分船のしをり草を見れば、美人百姿を題して、文人の井戸端會議を催し玉へり。ハルトマンのいはく。官能的に快きことを、引離して美術中に用ゐるときは、その審美上の罪障をなすこと、おなじことを引離して生活間に用ゐるとき、形體上の罪障若くは道德上の罪障をなす如し。蓋官能的の快も、また女子肉體の美も固より寫すべからざるにあらず。これを寫して美術の用をなせば則ち可なり。若し然らずして、肉體の美のみを引離して寫し、是を寫すを唯一の目的とするときは、其作者既に詩人の仲間を脱して、井戸端會議の議員となり畢んぬ。美人百姿にいはゆる、心許したる中なるために薄化粧に飾らぬ色、竺仙染の浴衣の隙より見ゆる雪じろの御肌膚、(他の肉體を崇拜する御の字に注意せよ)姿見鏡に向ひてうつとり細めたる目、薄摸様の衣にやはくと白く映る乳房、裳を拂ふいたづらもの憎しとなよ／＼添ふる弓手、情の泉を漲してうつと見る偷眼、籬にまどふ瓢の花にれし當つる生温き朱唇、たまの往來の跡を慕うて柳の木蔭にもしほと呼ぶ優聲、(辻君の聲か)皆是れ徒に官能的快美を寫さむがために官能的快美を寫したるものにて、まことの文士、まことの詩人の所爲にあらず。想ふに君は婢妾の井戸端會議には聽き厭き玉へど、また文人の井戸端會議には聽き厭き玉はずと見たり。江湖新聞の記者(三宅雄二郎氏なるべし)嘗て世人の美を謬るを慨き、美婦人品評會を開く趣意といふものを頒布するに逢ひて、一讀して唾せりといふ。君等が美人百姿の募集も亦彼記者が一

唾にも價せざらむことを恐る。

君は又審美學上の醜美論には、最早文壇にて見厭いたりと宣ふ。我文壇にて審美學上に醜美の差別無差別を論ぜしは、忍月居士とわれとのみ。わが醜美差別の事に關する論は唯二篇ありしのみ。君はこれにだに見厭きたりといひて、猶美を謬り醜を露し、蕙心社に居て百姿の文を募らる。かくては理を聽きて解すること能はざる人にやまがひ申さむ。然れども君が猶能く井戸端會議の肉體醜美論と、哲學者の審美審醜の論とを辨じ玉ふは、せめてもの事なるべし。奈何といふに、世にはこのけちめだに知らずと覺しく、漫に俗言堪笑醜論、名畫何分南北宗といふ一聯を吐いて得意の色ある大悟庵主人もあればなり。

君のいはく。正否の歸する所、曲直の別るゝ所、世間具眼の士先刻承知ならむと。醜美差別論と醜美無差別論とに、正邪ありと宣ふや、曲直ありと宣ふや。正邪あり、曲直あらば、是れ此争の水掛論にあらざる證據にあらずや。

君のいはく。何ぞ限なく百萬篇(遍か)を唱へ散らしてあたら秋の嘆を招くに及ばむと。わが忍月居士の醜論を駁せし文は唯一篇のみ。わが醜美の差別を示し論も亦唯一篇のみ。君が所謂百萬篇は何をか指せる。姑く一步を譲りて、わが醜美差別の辨は、まことに賤の苧環くりかへして百萬遍に至りぬとせむか。うれにてもよし。宗教家の善を説くや、既に三千軸の經を遣して恥とせざれば、批評家の美を説くにも、あるひは數萬卷の書を著して累とせざるべき歎。君は又我論を聞いて秋の夜の嘆を發したりとのたまひぬ。あきのよの歎とは永夜の嘆なるか、厭を秋にかけ玉ひしか。美人百姿の肉體の美を説くをきいては厭かず、審美の論をきいては厭き玉ふ。我は此心の何の心な

るかを言ふに忍びず。

君のいはく。襷は短し、帯は長し、よろづ何事も程で御坐らうと。長き文の必ずしも邪ならず、必ずしも曲ならざるは、短き文の必ずしも正ならず、必ずしも直ならざる如し。されば長しと雖、憂ふるに足らず、短しと雖、誇るに足らず。我論文の理を究めて十二分に至らむことを期し、時ありては柵草紙の二三十面を填むるは、わが耻辱とせざる所なり。問ふべきは邪正曲直のみ。長短何ぞ意に介するに足らむ。うもく短襷長帯の語は、江戸紫にて紅葉山人が勸めて唱へしところなり。紅葉山人は今の世の大家にして一個の本相オウギンを具ふる人なり。今君みづから一文士の雛形となりて耻ぢず、短襷長帯の語を繰返し玉ふを思へば、さきの水掛論の評も、みづからは毫も定見なくして、唯れ先真闇に一切現之助が故智を襲きたまひしにあらざや。若然らば是等をや見厭き聞厭かるゝ沙汰といはむ。

君のいはく。されば蛙の面に水掛論は腐婦の醜態(態か)どうやら愚痴に落ちぬ所がまだしも御身上とかに聞くと。この愚痴に落ちずといふは、愚痴に落ちたりといふ心を裏より宣へるなるべし。君すでに我醜美差別論を水掛論なりといひ、水掛論をなすをくさりをんなの醜態なりといひ玉ふ。くさりをんなの醜態とは愚痴の解釋なるべし。されば君が愚痴といふ語は「ホジチイフ」なること疑ふべからず。れもふに君は忍月居士が我小説文づかひを難せし頃、醜美論起りしゆゑ、我評論を以て忍月居士に難せられたるを怨みての業とせられしならむ。我面は血冷なる蛙の面にあらざ。水掛けられて其儘止まむや。げに忍月居士若我作を難じ、我を嘲らざりせば、我も亦其醜美無差別論を評するに寢婉曲なることを業を以てしたらむも計られず。是間多少恩讐の情ありしことは、われみづから言ひ

て恥とせざるべし。テオドル、コツベが文學雑誌の編者たりし時、文を投じて其友ハイ子を難せむとする人ありき。コツベはこれを斥けていはく。われ嘗てハイ子と俱に桃を啖ひき。ハイ子は我友にして、我は我友の僕なり。所謂眞理は我に於て印度の古文字に等し。われ眞理の僕となりて我友に負かむやと。こは寔に極端に走りたる説なり。されど文士もあひみたがひみ、我は其間多少の情誼あらむことを願ふなり。わがむかし忍月居士を難じて、毫も遠慮せざりしは、わが今君に對して臆面なくものいふ如し。當時忍月居士が文づかひを難せし論點をば、一々充分に反駁しつる我なれば、又平生れのが短のために耳を塞かず、人の長のために目を掩はざる我なれば、冤うれたる征箭の此身に中らむやうもなし。我胸豈遺恨あらむや。我心豈愚痴を存せむや。れもふに君が愚痴の二字を採り來りて、我解嘲の語を評し玉ふは、蓋亦紅葉山人が粉本にならひてならむのみ。わが不知庵主人に對して空像記の事を辨せしとき、これを愚痴に似たりと評せし紅葉山人が言は、載せて江戸紫にあり。多とす、君が文に字々來歴あるを。

君のいはく。厭なもの扱花嫁の欠、兎角嗜が肝心との事に候と。我に嗜をすゝめ玉ふ君がこゝろは、我が爲に法を説きて耐忍せよといひし國民新聞の雲外居士が心に同じかるべし。れつぽ口の花嫁の嗜、欠の用心に油断なきは、げに蕙心社員ウヰシの性根ならむ。林艾軒嘗て蘇黃の詩を論じていはく。丈夫見客大踏歩便出去。若女子便有許多粧裹。此坡谷之別也。我は蘇たらむと欲す。君は能く黃たらむ乎。

君のいはく。名家の卓論も時に窮すれば釋兒の寐言に如かずといふ例ありと。此語の主眼は一窮字に在りと覺し。多く彫るものは斧のつまづきなきこと能はずといへども、多く書くものは筆のあや

まちなきこと能はずといへども、われ若君に向ひて願はくは一たび我が窮したる處を示し玉へといはゞ、彼日本評論の文學一斑記者が我文陣に老弱の兵ありといひて、其一人だに指さざりし如く、君のみづから窮し玉はむことを恐る。

君のいはく。うれかあらぬか、飛んだ處へ葦分船の主意沙汰を擔ぎ込まれて、見事善罵劍を振翳されたる積ならむが、全くれ門が違つて、惜しや茶臺が反れ申したと。否、否。蕙心社員がしやあゝとしたる様を證せむために、葦分船の無主義を擔ぎ出し、程、飛ばぬ話のあらむとも覺せず。主義などいふしかつめらしきものなしといふは、蕙心社の憲法なれば、其中に就いて蛙の面相を見出す程、れ門の違はぬ話あらむや。そが上に又しても善罵劍などつけ焼刃せらるゝこらうるさけれ。うもく善罵劍の一語は江戸紫の造語中にて極めて拙きものなり。われ嘗てある人に語りていはく。善罵劍は不成語なれば宜く改めて善罵口に作るべしと。其人のいはく。いまだ善罵舌劍の恥もしろ味あるには若かずと。嗚呼、われは復た蕙心社の無主義主義を説かざるべし。いかにといふに彼社にもせめて鸚鵡主義あるを見つれば。

君のいはく。よし無主義と披露しやうが、無責任と吹聴しやうが、つまる所の骨子は孰れも同じ谷川の水、な、うれ、解り切つた漸でれちやらうと。豈其れ然らむや。豈其れ然らむや。アリストテレス乃至パウムガルテン以來無慮百有餘家の審美談、なんでれん身等風情にわかり切つた漸でれちやらう。葦分船の無主義主義は管に披露のみならず、管に吹聴のみならず。穢らはしき百姿の募集はさらにもいはず、走馬燈は油置くして火影あやしく、うかれ鴉は到底あはう鴉たることを免れず。一新意を出さず、一奇想を吐かず。これとれなじき谷川の流を酌み、な、うれといはれて、を

いそれと應ぜむものは、君が一切現之助より借り來りたる蛙の面の旗下に馳せ寄り、某城の後詰をたのみに、れぼつかなくも功名手柄をせむとする花冠者等(千代見草)の外、よもあらじ。

君のいはく。しがらみ草紙がいかに小笠原島の蝙蝠主義ちやとて、いかに竹林の七賢主義ちやとて、責任責任とわめかれたところが、頼とありがたくも何ともなしと。君に勸む、人の蝙蝠の翼をのばすを氣にせむよりは、れのが里に鳥なきを憂とし玉はむことを。又勸む、人の高曠なる晋代の風流を追ふを笑はむよりは、みづから醜態たる花嫁の嗜を學び、時に放焉として一たび酔ふことだに爲し得ざるを恥とし玉はむことを。我がしがらみ草紙は體裁未だ備らずといへども、井戸端會議に提出すべき草案にもあらず、れ白い臭き筐中に藏めらるべき兎園冊子にもあらず。俗士にありがたがられむことは、頼と願はず。別派に惡がられむことは、(千代見草、悪いもの)微塵厭はず。苟くも今の文界にありて、時弊のために惑はされず、輕佻なる文學を斥け、浮薄なる詩人を嫌ふ程の趣味を解せむものは、彼北邸散士に非ずといへども、誰か責任、責任と連呼せざらむ。

君のいはく。葦分船が無主義でも無責任でも、黄葉を嘗めた亡者にあらねば、思ふこと言はずに引込む脱魂漢にあらず。况や吉田の法師の手前もありなむかしと。この處は花嫁のたしなみに似氣なく、見ぐるしき踏張やうと姑や叱り申さむ。葦分船の二十紙面は君が言論の自由を許せば、思ふこといはせじといふ拔舌の苦はあらじ。されど古今の意氣を脊負つて立ちし吉田の法師が引合に出されたる迷惑は、次のくだりを讀みて、遅蒔ながら悟りたまうてよ。

君のいはく。生野暮一天張の小理窟は柵十八番の出し物ならむが、さりとは餘りに世間狭い主義でれちやると。君がわれを野暮なりと嘲り玉ふは、自ら意氣に誇らむとのれん事ならむ。夫れ意氣

とは何ぞや。古今東西に哲學家多しといへども、道德學者さばなりといへども、われ未だ意氣の定義を立てしものあるを聞かず。然れども佛朗西にて「シツク」*Chit*といひ、澳太利にて「フエツシュ」*Force*といふも、いづれか意氣にあらざりける。獨りベルタルといふものあり。畫工にして文を善くし、我世の嬉劇をあらはして意氣の何物たるかを論じたり。ベルタルはねもへらく。意氣は是世紀の *je ne sais quoi* なり。然れども若強ひて解釋を求めば、人を凌いで體面を損せざること *pretension, révérité* とや言ふべからむと。ハンム嘗て巴里人に意氣とは何ぞと問ひしに、意氣とは或る外相に對する感應なり、而して其感應はすこしも體面を損せず、趣味を傷らざして、天晴あたりを拂はむことを要すと答へき。這般の解釋は、皆多少の缺點あるべしといへども意氣の人を凌ぐものなることは分明に認めらるべし、意氣の我を以て彼の領地を犯すものなることは復た疑ふべからず。唯その人を凌ぐや、體面を傷らず。唯うの我を以て彼の領地を犯すや、趣味を損せず。意氣と云ひ、粹と云ひ、また通といふ。其秘鑰蓋こゝに在り。

洗髪は容を毀ちて禮を失へり。洗髪にて能く風情を成すは意氣なり。格子づくりは立派なる客様にも身を屈め頭を下げしむ。格子づくりにて能く體裁を成すは意氣なり。然れども容を整へ、禮を正したるは島田なり、丸鬚なり。客を敬し人を尊むは門がまへなり、玄關つきなり。島田、丸鬚は洗髪に對して野暮たることを免れず。門がまへ、玄關つきは格子づくりに對して野暮たることを免れず。

兼好法師は意氣を以て、君に師表とせらるる榮を得たる人なり。其言にいはいはく。かたち心さまよき人も、さむなく成ぬれば、しなくだり、かほにくさげなる人にも立まじりて、かけずけおさるゝこり本意なきわざなれ。その人にけねされじとねもふ心は、即是れ人を凌がむと欲する心なり。又いはく。後の世の事心にわすれず、佛の道うとからぬ、こゝろにくしと。佛者の眼を以て、佛の道疎からぬものを見るに、唯其心憎き側よりす。これも人を凌ぐこゝろなるべし。君もしわれを野暮なりといはど、われ必ずしもこれを辭せざるべし。故いかといふに、わが柵草紙の一記者たるや、唯緒に觸れ境に遇ひて、自由に思ふところを陳べ、事に臨みて含糊の態をなさじとねもへるのみ。強ひて異を立てむとする心もなく、敢て人を凌がむとする心もなし。我性意氣なること能はざるか。答へてはいはい。知らざるなり。我志意氣ならむことを欲せざるか。答へてはいはい。欲せざるなり。

生れて粗々策々たるために、抵死意氣なること能はざるものは姑く措いて問はず。青樓薄倖の人は意氣なることを得べけれども、意氣なる宰相は、風流の天子にねなじ厄介ものなるべし。藝者は意氣なるが善かるべけれど、奥様の意氣なるはありがたからず。君は野暮を以て狭い主義ぢやとねつじやれども、意氣で天下は治らず、意氣で室家は齊はず。意氣は變なり。野暮は常なり。意氣は奇なり。野暮は正なり。おほより人の境遇には奇に宜く、變に宜きあり。また正に宜く、常に宜きあり。文學の世界にても、繪入新聞の小説を書いて大に售らむことを願ふものは、意氣ならざるべからず。評論の權衡を持ち、趣味の準繩を取るものは、野暮ならざるべからず。されば柵草紙の記者果して野暮なりといへども、うを怪むべけんや、こを訝るべけんや。

うが上に我は評論者たる資格を餘所にしても、猶意氣ならむことを欲せず。蓋意氣なるものゝ人を凌ぐや、古の兼好法師はいざ知らず、今の紅葉山人はいざ知らず、多くはねのれ多少の弱味あるが

ために、氣を鼓して敢て爲すなり。うの小なるものに至りては、恰も小危の人を怯れて吠ゆるごとし。我は意氣ならむと欲して、かゝる危険を冒す必要を感せず。我は強ひて人を凌がむと欲する弱味なきなり。

さらば野暮の極致とするところは奈何。答へていはく。我は野暮を厭ふものにあらずといへども、偏屈を厭ひ、頭巾の氣を厭ひ、「ベダンテリイ」を厭ふ。故にかにといふに、是皆野暮にして體面を損じ、趣味を傷るものなればなり。野暮を守りて體面を損せざるものを何とかいふ。野暮を守りて趣味を傷らざるものを何とかいふ。上品なり。高等なり。ギョオテ嘗て上品を論じていはく。上品は消極的性なり。上品ならざるものをvari盡したる謂なりと。若人ありて能く體面を損じ、趣味を傷るものをvari盡して、着意人を凌ぐ如きことなくば、是れ野暮の上品に至り、高等に達したるものならむ。世に大通と稱するものあり。説をなすものは、通より大通に至り、意氣より大通に至るといふ。其誤は平淡を以て絢爛の極なりとするものに在り。絢爛豈平淡の前階級ならむや。意氣豈大通の前階級ならむや。大通は始より人を凌ぐ心なし。大通は意氣にあらず、通にあらず、野暮にして偏屈ならざるをいふなり、上品なるをいふなり、高等なるをいふなり。

さらば野暮なるものは、絶て人を凌ぐことなきか。いはく。豈其れ然らむや。意氣はみづの上の算段なれども、野暮は皮毛を擺脫したる後も、猶依然として野暮なり。意氣なる人に眉を畫いて倚俛する姿あらば、野暮なる人には髯を奮つて蹠踞する態あらむ。見仁に拘らずして、氣儘に振舞はむとする野暮男兒は、時ありて神彩飛動、大に世間の俗士を凌ぐことあるべし。是れうの人を凌ぐもの、人を凌ぐを願ひてならず、着意にあらず、故造にあらず。是般の境地は、かの女にたやすから

ず思はれむとれもひ、妻を持つまじきものとし、子なからむことを望むが如き、即身即美術品の兼好一流の人物の得て曉知するところに非ず。

さらば又意氣なるものは、必ず能く人を凌ぐか。いはく。豈其れ然らむや。われ世の意氣に誇るものを見るに、多くは唯たのれより弱き人を凌ぐのみ。若おのれより強きものに逢ふときは、頭を抱へて逃げ出さざるもの幾希なり。うの人を凌ぎ、あたりを拂ふ所以のものは、虚喝なればなり、擬勢なればなり。中には又意氣にしてたのれより強きものに傲るものあり。其手段を察するに、先づたのれを社會の外に置くこと、西洋の娼婦の如く、乞兒の如く、糞桶を擔ふものゝ如く、たのれが地歩を占めざるを以て、人の地歩を占めたるを笑ひ、たのれが事を事とせざるを以て、人の眞面目なるを嘲る。不知庵主人が所謂雨戸をくりて節孔より吹矢をふくものは是なり。あるひとの所謂捨鉢外道是なり。たほより男子と生るゝもの、名譽を重んじ、地位を守りてこり、世に立たむ甲斐はあれ。名譽を擲ち、地位を棄てゝ人を罵るものは、人怒るときは、野暮といひ、眞面目とわらひ、人怒らざる時は、意氣揚々としてわれ能く彼を凌ぐといふ。殊に知らず、汝がために野暮といはれ、眞面目とわらはるゝものは、猶汝を人間視するものなり、猶汝を以てたなし社會の人となすものなり、汝がためには恩人なり。彼の怒らざるものは、汝を榮譽なきものとなすなり、汝を「ジェントルメン」視せざるなり。あはれ墓なき次第ならずや。意氣がるもの或はいはむ。わが彼を罵りしは文學上の戯なり。彼何ぞ眞面目に受くるやと。文學豈戯ならむや。戯作者の時代は既に過ぎ去りぬ。意氣文人若戯作者を以てみづから居らば、是れ家中の枯骨ならむのみ。

我は野暮に安んずるものなり。然れども君は柵草紙を野暮なりといはずして、生野暮なりと宣へり。

生野暮とは何ぞや。生とは熱にあらざるを謂ふ。物を煮て未だ熱せざるときは、生煮といひ、兵を學んで未だ熱せざるときは生兵法といふ。夫れ煮るに意あり、兵を學ぶに意あればこそ、生とはいへ。野暮の物なるや、天性なり、自然なり。豈別に生野暮といふものあらむや。

彼意氣に至りては、則ちこれに反す。意氣ならむと欲して人を凌ぐやうなる振舞をなし、見事體面を損じ、趣味を傷ふもの、世間其人に乏しからず。是を生意氣となし、又木葉通となす。生意氣の外相は氣障の感應をなし、忌味の反射をなす。

殘口はおもへらく。未熟柿がおのれ熱せりと甘味を付くれど、根からの美味ならねば、どこぞに否なる味の出るは、腐の付けるなり。腐付けばよろづの物も臭し。臭味の付くものに眞物はなしと知るべしと。腐の付きて忌なる味出づれば、體面已に損せられたり、趣味已に傷られたり。風來もまたいはく。木葉通といふ横飛ありて、いきすぎ(杉)のとまり木を高うすと。いきすぎれば則何の體面かあらむ、何の趣味かあらむ。

柵草紙は野暮を以てみづから居るものなり。これに生の字を冠するは宜きを得たりといふべからず。葦分船は意氣を以てみづから居るものなり。これに生の字を冠することの至當なるをば、世間具眼の士、先刻承知なりと聞く。

兼好法師はいにしへの意氣なるものなり。紅葉山人は今の意氣なるものなり。兼好の意氣も、紅葉の意氣も熱したる意氣ならむ。言を立て文を屬するに當りて、兼好法師が風を慕ひ、うの手前をかぬるは、意氣ならむとして猶生なる君がみこころならずや。風かほる紅葉の下に身を寄せて、他岸に見ゆる文増大王の冠に手の届くべき人は、八幡是人の外あらじと隨喜渴仰の涙を墮すは、(葦分船)

意氣を願ひて未だ熱せざる君が友達の心ならずや。

東京の文壇には小意氣なるもの甚多し。渠等の人を凌ぐや、猶みだりに吠ゆる小龍こりゆうたることを免れざるものなきにあらずといへども、その慧なるものに至りては、盤に上りて棋子を蹴散らしけむ楊貴妃が拂林狗ふりりんくわうのそれならねど、しほらしければ恕しつべし。若生れながらにして粹の骨なく、意氣の腸なき輩、塵泥ちんじの數ならぬ身をも願ひて、強ひて人を凌がむと欲し、みだりに吠え、みだりに噬まば、是れ瘻狗ろうくわうの往來の妨をなす如くならむ。安んず棒に逢はずして止まむや。

うもく君の生意氣なるや、到るところ氣障の種を蒔き玉へり。葦分船の初號にて、溪香、秀月、露の宿、不粹、のどか、木蔭、芝廼園と社員を併べ擧げて、みづから乳の香失せざる青二才と稱し、なにはともあれ御引立をと只管社會公衆に歎願したるさへあるに、七偏人、八笑人などいふものに見わたる如き連中の顔揃を寫せさて、挿畫とせられたるは何事ぞ。其氣障一つ。文學雀の筆始に、西鶴が詩想をわれ知りかほに屋上架屋の説をなし、西鶴は爲永の元祖といひきといふ藪人形同様の奴を相手にして、獨角觥の可笑しさよ。其氣障二つ。やつと十歳位の小娘に、早く卒業して琴江さんのやうに文學士の妻君にねなりなさいといひしに、厭な伯父さんよといひ返したりといふ。これを綴り來りて一篇の文とす。其氣障三つ。秀月が行を送りて、此期に及んで未練の留立はせじと臺詞めかし玉ふ。其氣障四つ。蛙の面に水引かけて云々と題して、再び我を嘲る文中、頻にねぢやるといふ天仁波を下して、な、うれ、解り切つた嘶でねぢやらうとほざい玉ふ。其氣障五つ。若此の如く數へ來たらば、僕をかへても盡きざるべし。然れども猶最後の氣障一つあり。君且く忍んで聴け。

君が蛙の面に水引かけて、再び我に贈らむとするや、忝くも文もて我に諭し玉ふところありき。命題して魔王の決闘状といふ。君が書は獨逸文なりき。否ず、文法に依らずして、獨逸語を排列したるものなりき。

抑君は何の目的ありてか斯る異様の尺牘を寄せ玉ひし。君は大阪に居玉ひ、我は東京にすまへども、君も我も、ねなじ日本國民ならずや。日本の語を解し、日本の文に通ずる人ならずや。世には西歐の文化に心酔するもの少からず。佛人を家に養ひて子を教へしむるものは俄羅斯の貴族なり。乳臭の兒を獨逸英吉利に遣りて、國粹を棄てたる教育のやうなさを曉らざるものは吾邦の富人なり。かゝる袁許人の子には國語を解すれども、國文を屬すること能はざるものあれども、君は固よりさる片輪にあらず。君は關西の領袖、騒壇の盟主、大阪の文學社會に於て、浪速潟に頡頑すべき専門雜誌の編輯人ならずや。何故に得意の筆を走らせて、國文の尺牘を草し玉はざりしか。

君はよもや、我を國文に通せずとはれもひ玉はざりしならむ。奈何といふに、我長文を讀んで、之に厭きたりと宣ふ程なればなり。君はよもや我を侮りて、獨逸文に通ずること極めて淺きものとなし、尋常の文法語格だに整はざる獨逸文を以て我を嚇さむとはれもひ玉はざりしならむ。われ不敏なりといへども、我邦獨逸學者の尤なる者と謀りて東漸雜誌を刊行し、みづから其編輯述作の任に當りしことあり。豈獨逸文の手紙を恐れむや。况や文法語格だに整はざる獨逸文の手紙をや。縱令君闇に向うを見きといふ鼠小僧に及ばずといへども、豈斯くまで目先の見ぬ振舞あらむや。

察するに君が獨逸文の尺牘を我に寄せ玉ひしは、今の文學社會にて獨逸語に通ずるものは、獨り汝のみならず、自分もちよつと此位を腕前はありと、多能に誇る輕はずみにもやあらむ。我今君に告

げむ。君は猶意氣ならずといへど、又意氣ならむと欲するものなり、生意氣なるものなり。是の如き輕はずみあるやうにては、生涯意氣の門戸をだに望み玉ふこと覺束なかるべし。家に金剛石を嵌めたる指環十あればとて、悉く取り出でて十指に貫かむは、意氣の大禁物なるべし。苟くも意氣ならんと欲する人は、常におのが蓄ふる所をば、成るべく多く外にあらはして、以て人を凌かむとはすれども、亦決して身上ありたけさらけ出す如きことなく、必ず些子の餘地を留めて、實は一所懸命の事をなしても、なに、この位は朝飯前なりと見せ掛くるころあるべし。譬へば君われに獨逸學の手並を見せんとれもひたまへども、まことは其手並なきときは、尺牘中に獨逸の單語を挿みて、偶これに代ふべき邦語を得ざりしやうに見せかけ玉はむが如し。此の如き手段は極めて容易なれば、必ずしもわが傳授を須たざとれもひ譏り玉はむも計られねど、これを行ふにもれのつから巧拙ありて、天分最下級に居るものは到底これだに行ふこと能はざるべし。うれがし法師の獨逸より歸るや、説法の間頻に獨逸の單語を挿みき。然れども渠の語を擇ぶや、既に其義を謬り、又其用を過ち、物を衝いて徑に出づべき日常の語のかはりに、疝氣筋の獨逸語を引出しければ、ねうらくは白面の書生をだに欺き得ざりしなるべし。

彼魔王の決闘状は、果して君が手書なるか。若然らばぶしつけながらも勸めむ。今一際勉強し玉へど。彼魔王の決闘状は、君が人を借うて書かせ玉ひしものか。若然らば君冤を負ひ玉はむ。是れしかしながら君が不明にして、然るべき吾人を得玉はざりし爲なれば、また自業自得なるべし。况や文法に依らずして獨逸語を排列する力だになかるべき君が、さる力ある如き見えを得玉はざ、其間多少の僥倖あらむをや。

硯友社に京の藝兵衛といふものあり。氣障會を起して大に天下の氣障を募りしが、倒に歐字新聞を讀む人を氣障人の巨擘なりとせり。(讀賣)わが所謂最後の氣障は實に彼魔王の決闘狀を指しつるなり。

君のいはく。鴈とか申す鳥は河海にすむものと思ひきや、また井中にもとは。これ大方鮒外道なんめりと。鴈の井に入りて鮒となるは雀の海に入りて蛤となる類なるか知らねど、あまりに手際には見ぬ駄洒落なり。されど君等蕙心社員は池中の蜆なりといへば、葦分船趣意書の冒頭(我を井底の鮒にして、中善く遊ばむころならむか。書は意を盡さず。君に献ずるに所謂 *toppette kenuniss* (魔王の決闘狀)を以てすること能はざるは、いまさらに奈何ともしがたし。別に臨んで一語の寄すべきあり。詞海は寔に渺々たりといへども、我墨田河邊は遠きにあらず。君が手弱き水馴棹はよし摧けむまでも、君がひと葉のあしわけ小舟はよし沈まむまでも、願はくは今一度、こゝまでおちやれと白す。

山房放語

批評家ありて、我上につきて悪きことをいへり。彼を咎めむも、サロモが智を學びて、*Noli respondere imprudenti ad imprudentiam ejus, ne similitis illi fias* といひて止まむも我權内にあり。時によりては、打棄ておきて聞かざるまねするも、却りて彼がために胸にこたふること最緊き罰ならむ。途にて人に罵られたるソクラテスは唯驢われを蹴たりとつぶやきしのみ。然はあれど時によりては、かゝる不頼者を引き捕へて、世の見せしめにせむも、無益にあらざるべし。そはねくれて來むもの

の護になり、又世人をして、一時猛省せしむべきが故なり。(Friedrich Paulsen, Ethik p. 493)

長し長し (江戸紫参者)

長し長し。然れどもことさらに冗漫の語をなすものと、つとめて周密の論をなさむとするものとは、具眼の人知らざらむや。世の滔々たる新聞雜誌の論説に見わたる如き道理ならば、一紙面を費さずしていふも、容易なるべし。眞の長短は理に在り、事に在りて、文には在らず。千羊の皮ともいへ、萬匹の木綿ともいへ。げに狐腋には劣りたるべく、げに寸錦には若かざるべけれど、世の片々たる襤褸に比ぶれば、或は猶取るべき所あるべし。山椒の一粒も可なり、又橄欖の一顆も可なり。而れどもそれのみにては屬塵せざる人あらむ。

理を履む人 (同上)

われも紫の一本ゆゑに、好みて彼卷々を讀むものなり。自ら許して、能く理を履むといふ、天晴の抱負なるかな。理を説くことを許したまふは情ある一言、かたじけなけれど、うれだになか／＼及ばず。反吐小説の連篇累牘、三日月小説の影をもとめざる、顧みて大に愧づる所あり。いでこれよりれもひ起して、君が理を履む杵を拾ひ、幽玄なる俳諧の趣味をたづねむ。されど驚末の我はとまれかくまれ、唯一味説理の人とせられては、新聲社裏或は怨嗟の聲あらむ奈何。

重譯 (同上)

ヘルシング、ホオルの詩人ワアルベルクとは、兄弟の約を結びしこともあり。歐の北陲必ずしも語言の通はぬ境にあらず。豈重譯をのみ藉らむや。

朝顔 (同上、以上四條明治二十三年七月)

あはれ朝顔、露もまだひぬ一段の色彩。われみるも猶憐む、仇讎視せられぬ人いかならむ。綿の如しとは謙辭。ゆかしや物に倚らぬ氣象、よの常の蔓草にはあらじ。

禽蟲八句

羔羊口在縁何事(江戸紫参看)

彼も隠遁と云へば、此も修練と云ふ。文斷食といへる必ずしも虚語ならず。眞個に是れ闇死都門無一聲。

蠻觸交争蝸角中(讀賣新聞参看)

十傑の戦未だ止まず、俳諧の争又起れり。讀賣の附録は蠻觸の好戦場。

蠹老繭成不庇身

國文の分子は處々に散見す。而してこれを用ゐるものは却りてこれを誹るものなり。嗚呼、國文も亦身を庇はざる繭なるかな。

焉用鵬鵬鱗羽多(江戸紫参看)

鱗羽多しと雖、美ならずは何の用ぞ。比日一飛蝶を見る、粉翅粲然。垣の外より譽めしも、あだにはあらざるべし。

螺母偷蟲作子孫(同上)

東漸の文は刊を絶ちて、主筆の一人誰が家の子孫とかなりし。當初裸體畫の辨護者は、何れの裸體畫をも皆善しといひしに非ず。猥褻なる裸體畫の禁すべきこと、識者に問ふまでもなし。渾ての裸體畫を破棄せむとするは、美術家の甘ぜざる所、これを言ひてれのが陋を示しは、當時の日本學者

なりき。今も見る政府の律。此律を誘ひ出とは、繪草紙屋に掛けたる醜穢の畫なりしこと争ふべからず。而れども若し大家鉅匠の「エヌス」「レダ」の像ありたらば、池魚の殃其れ奈何ぞや。彼省亭の蝴蝶、其骨は鼠の如くなりしが、身は猶處女なり。臥床の上にもあらず、化粧部屋の内にもあらず、「ロオレイ」にはあらねども、岸の邊の立姿、前なる男も厳しく鎧ひたりき。一時の詰難、延いて文士に及ぶ。誰か能く其冤枉を憐まざらむ。苟くも裸體像を説かむとせば、闕ぐべからざるもの一つあり。曰抽象力。

千年鼠化白蝙蝠(國民新聞参看)

害を避け生を衛る、其計豈巧ならずといはむや。然りと雖一轉語は空く下さず。眞綿は實に丈夫の屍を裹むに堪へず。借問す洞裡の生活、一生幽闇又如何。

鴛鴦怕捉竟難親(参看未詳)

士に文采あり、亦多く捉へられむことを怕る。親近の策豈行はれ易からむや。

塞雁聯行號弟兄(江戸紫参看、以上八句明治二十三年八月)

後鴈前、前鴈後、相属のみ。弟兄聯行は獨り逍遙の夢中に於て之を見る。ピエリンスキイの云はく。誰か早晚、庫中の物ならざる。

見聲聞色(讀賣新聞一句十評参看)

鴈の長談義は汝見ること愁ふといふ。さらばわれ紫の色あせたるを聞くがいやとも答ふべきか。

星隕爲石(同上)

草紙の刊行稀になりぬとか。發兌の期は一たびも愆りしことなき柵の噂にはよもあらじ。晝夜の循環はたがふことなけれど、地極の民は永夜を嘆く。それを日月の知らむことかは。天上別に流星の光あり。墮ちていつくの石とかなるらむ。

おくりもの (國民新聞參看)

誰か去年を我に贈りて某の時代といひし。一昨日來いといふは、的是忝き案内にあらず。

是怪非怪 (讀賣新聞大いに笑ふ參看)

忽生忽滅、世の所謂怪にあらずや。常燈明に似たりといへば千朶山の怪、知るべし、怪にあらざることを。

嚼蠟充飯 (東京日々新聞參看)

文づかひの出來を無難とは過褒ならむ。されどさら／＼したるゆゑに蠟を嚼む如しとならば、鼠に似たる評者は蠟を嚼みて飯とやすらむ。

誇人特色 (國會參看)

其理由の兒戲的なるを否とを問はず、人間に一つの純粹なる特色あるは、人間の誇るべき一つの裝飾なり。忍月の特色論は是の如し。亭主の好きな赤烏帽子。また某の殿様は、何の因果か、牡丹餅がお好。あはれ、世に誇るべき特色の多きことよ。

在無爲對 (同上、以上七條明治二十四年四月)

已に獨逸を寫して、未だ日本を寫さず。忍月すなはちいはいはく。予は窃に鴈外筆意の在るところを推し、以て君が真技倆を現はすの方は、彼に在つて此に無きことを信ず。外國を寫す筆あるもの、内

國を寫す筆なかりし例、文學史上にて見せてもらひたし。「ナタン」先だちて、「ミンナ」後れなば、ふびんやレツシングもかゝる在無の論に逢ひしならむ。

青葡萄の如き眼 (青年參看)

記者のいはく。若我をして當代の二世皇帝たらしめば、彼雪中梅を始として、何とかいふ雜誌に見えし舞姫とかいふ小説をも焼き棄てたるかも知れざりしなりと。おそろしき嵐火かな。舞姫を焚くはよけれど、雪中梅と俱にせむは、唯青葡萄の如き眼あるものゝ能くする所。

鱸をやく臭 (千紫萬紅參看、以上二條明治二十四年八月)

誰かいふ、しがらみ草紙は刊を絶たむとす。千紫萬紅の底、唯つなしをやく臭を聞くのみ。惑へる哉。

正當順序 (文苑參看)

批評の境界は濶し。近きより遠きに及ぶこそよけれ。批評の正當防禦は、是れ批評の正當順序。

身の上の防禦 (文壇參看)

あるひと云ふ。忍月と鴈外との闘は公闘なり。願はくは私闘に變せしむることなかれと。又云ふ。文づかひのイイダ姫をして怨の刃に罹らしむることなかれと。答へていはく。若私闘とならば、唯忍辱の衣かいたり棄て、我闘法を一變せむのみ。身の上の攻撃あるときは、身の上の防禦あらむのみ。又云はく。われは知らず、當初怨毒那處より來しかを。

かゝるためし (同上)

咄堂居士のいはく。鴈外はシルレルを以て自ら任ずと。こはおそらくは柵草紙に載せたる軍醫シル

レルが事を記すといふ文あるがためならむ。シルレルは醫科大學より出でし人なり。シルレルは軍醫部下僚の苦を嘗めてき。われわが境遇のシルレルに似たるを以て、其事を記せしのみ。豈敢てシルレルを以てみづから任せむや。俊基は菊川の驛にて、古もかゝるためしをきく川のおなじ流に身をや沈めむと詠せしが、たれも俊基光親卿を以てみづから任じたりとはいはざるにあらざるや。

月と鴈と（同上）

文壇子のいはく。風和ぎて月冴わたる夜、石橋の上に立ちて見れば、鴈天外より落としきて、波上の月を砕いて聲あり。鴈去れば、月又浮び、月浮べは、鴈又來ぬと。善くわれ等二人の筆戦を評したるものといふべし。

悪血と枵腹と（同上）

我に問ふ、今の文界の淋きは、文士の血の枯れたるためか、さらずは世人の腹の病めるためかと。答へていはく。血の枯れたるにあらず。悪血下りしのみ。腹の病めるにはあらず。枵腹飽きたるのみ。

蛙の面に水（華分船参看）

醜は即美なるとき審美學なく、醜は美にあらざるるとき審美學はじめてあり。忍月とわれとの争は、決して無用の辯にあらず。小説半可通の心事（讀賣新聞）に通ずること深き芝罘園既に自らいはく。主意の主眼のとしかつめらしき儀は毛頭なしと。我は彼が此審美學存亡の争を評して、蛙の面に水合戦といへるを怪まざるべし。されど彼既に華分船を文海に泛べて、みづから船長となりたれば、所謂關西の旗持の持ちたる旗には、いかなる徽章あるか知らねど、りの主義なきをも、亦一主義と

看做さざること能はず。無主義主義の文士の言は無責任なり。蛙面灌水の語は、蕙心社に送りかへずといへども可ならむ。或ひどのいはく。たのれ無責任の地に立ちて、へらぬ體の廣言するは、今の或一派の特色なりと。

學者臭（文苑参看）

柵草紙はげに學者臭あらむ。然れどもわれ其臭の由り來たることを言はむか。是れ今の文界のあまり學者臭に置き反應なり。吾文界に學者林立する時に至りて見よ。草紙の上、灑然として賸臭なからむ。

書齋と客坐敷と（同上）

賓客は多しといへども、田氏舎業の跡をば追はず。客坐敷の濶き、何ぞ憂ふるに足らむ。書齋の飾付は、季に従ひて淋きことあらむ。然れども主人猶在り。若さうなく土足に掛くるものあらば、今の儘にはたかじ。嗚呼、客豈秦に負からむや。

俠か俠にあらざるか（同上）

不倒生は忍月居士が龍溪、逍遙、篁村、櫻癡、南翠、鴈外、紅葉、美妙を抑へ、若松静子、抱一庵、乙羽庵を揚げたるを以て俠なりとす。さては老朽文學者に諛はずして、青年文學者を勵ますと讃めたまへし雲外が徳は孤なりざりけり。（國民新聞）然れども忍月が抑ふるところ、必ずしも短ならず、彼が揚ぐるところ、必ずしも長ならざることをば、不倒生も亦認めたりと覺し。忍月が露小袖の中より探出む、人間の無常といふものは、山奥の花にもあらず、水底の珠にもあらず。其言宛として癡人の夢を説けるがごとし。馬史に所謂信言果行の俠は、かゝる振舞を醜とするならむ。我は忍月居士が今

より行を脩め名を砥いで、眞の俠とならむことを望む。

中道とは何ぞ (日本評論文學一斑參看)

忍月と鴈外と醜の義を争ふ。一斑先生漫然評し去つていはく。共に中道にあらずと。忍月は醜美無差別の論を唱へて、醜も亦美なりといひ、鴈外は醜美差別論を作して、醜は美ならずといひき。思ふに先生は醜は美にもあらず、美ならざるにもあらずと説きて、みづから中道を得たりとせらるゝにやあらむ。

毒を制する毒 (同上)

一斑先生我に問うていはく。文戦に敗るゝを厭はざるか、世間に毒を流すを厭はざるかと。答へていはく。我敵に逢ひては未だ嘗て卻きわしりしことなきを知るのみ。孰か勝、孰か敗。先生其れこれを判せよ。若し夫れ毒に至りては、我筆これあり。其毒は何の毒ぞ。いはく。毒を制する毒なり。

唯これを指せ (同上)

一斑先生のいはく。鴈外の文は百萬の兵を野に集めたる如し。強兵健兒の間に、老衰羸殘の卒あるを奈何せむと。答へていはく。唯これを指せ。我は之を斬りて、首を回さざらむ。一斑先生未だ曾て其一人だにえ指さざりき。

彼厭長此憎短 (同上)

一斑先生のいはく。久しく鴈外の長論文を見ずと。長し〜と嫌ひし紫黨に反して、先生は短きをや憎み玉ふ。

三 然 (同上)

一斑先生のいはく。露伴は傲然たり、鴈外は毅然たりと。我は將にいはむとす。一斑先生は嘸然たりと。何の故にか敢て此言をなす。我が能く毅然たるを以てのゆゑに。

時代と流派と (同上)

一斑先生は鴈外時代といひ、千駄木文學といふ。鴈外何ぞ時代をなすに足らむ。千駄木豈文學あらむや。

蠹魚の群に入る (同上)

一斑先生我博渉を以て、二葉亭が人間の大问题を研究し、春の屋のシエクスピヤを玩味し、露伴が社會の實相を精察し、紅葉の才思を逞うし、嵯峨の屋の高潔なる觀念を疑し、思軒の雄健なる文を作り、忍月の森嚴なる評をなし、抱一庵、二十三階堂、三宅、徳富、中江、植村諸家が或は渾厚靈活の筆を揮ひ、或は光焰萬丈の辭をつらぬるに對したり。是れ分明に我を蠹魚の群に押籠めむとするものなり。わが蠹魚の群に入るは或は可ならむ。然れども世上必ずしも一斑先生が唯能く一斑のみを窺ふを笑ふ人なきにあらざるべし。

木乃伊 (同上)

一斑先生逍遙、露伴、鴈外の三人を擧げて大家なりといふ。抑大家とは何ぞ。一斑先生が家數の小を定むる標準にいはく。大家とは競馬場の馬の如く疾驅する世の中に立ちて、恰も流星の如く泡沫の如きものなり。されば一年の大家あり。一月の大家あり。一日の大家あり。(鴈外は明治廿三年半期即半年の大家なるよし) 大家とはをりふじに遷りかはりて長からぬものなり。大家とは竹林に眠り、書窓に醉ふものなり。大家とは小説を作らで、序文を書くものなり、だじやれを吐きて批評

をなさざるものなり。大家とは識見を表白せむことをわづらひて、眞摯なる文を作らざるものなり。(一斑先生の文の眞摯なることよ) 大家とは鑒識なしといはれむことを憚りて、書畫をめぐらざるものなり。大家とは鑒識に暗きを愧ぢずして、書畫を罵りて彫蟲の技となすものなり。大家には書畫はよく人の質をあらはすといひて、或は古帖を臨摸し、其孟浪の眼を世に示すものなり。大家には書畫はよく人の質をあらはすといひて、或は折釘めきたる我流の筆法に誇るものなり。今の大家は舊大家なり。舊大家は魅にして穴に居る。此穴を虚うすべき敵(foe)は誰ぞ。曰抱一庵。曰二十三階堂。曰愛山生。其他は雲霞の如くにて、一々數へむやうなしとの事なり。嗚呼、忽にして蠶魚となり、忽にして魅となる。舊大家たるも亦難いかな。抱一庵、二十三階堂、愛山生等は、來りて蠶魚を誅せむか。來りて魅を屠らむか。切に望む、木乃伊取りの木乃伊とならざらむことを。

味ふべき言(國民新聞近代藝林奇話參看)

奇話を傳ふるものねもへらく。鴈外と不知庵と堅忍不拔の質あり。鴈外は訥辯言ふに足らずして不知庵は快談無比なり。傳者の此言をなすや、わが訥辯を叙するには曲寫法を用ゐて、文をあしらひ、不知庵が上をいふときは文に及ばず。是處大に味ふべし。わが辯を文の如くならずといひて、文を客にし、辯を主にす。つとめて人の短を挙げむとするにあらずして何ぞ。是處大に味ふべし。またわれは奇話の文氣語脈をみて、其際髣髴として作者のれも影を認むることを得たり。是處はほいに、大に味ふべし。我口はまことに訥なり。然りと雖ザクセンの地學會に請はれて、日本家屋論を演ぜしは、日本人が獨逸にて公開演説をなしつる嚆矢なりき。(伯林の新聞は巽軒居士が演説を始とすといへど、うは後の事なり) 郷に歸りてよりは、自ら口の訥を知るを以て、演説の求に應ぜず。(櫻雲

臺にての演劇場裡の詩人は例外なり) 序なればいふ。われは社交上さし向ひて言談する體を以て、辯論の巧拙を判するものにあらず。吉原の幫間を傭ひて、口上をいはせむとせし某劇場の座元が轍を踏まむことをわづらるればなり。

奇遇といふべし(報知新聞見立取組參看、以上十九條明治二十四年九月)

さきには雪中梅と共に焚かれむとせし舞姫、いまは空屋と共に存せむとす。奇遇といふべし。

魔王の決闘狀(參看未詳、封上に文あり、芝罘園より讀まれける)

われ嘗て井ルヘルム、ハウフが集を繕いて、魔王の雜記を讀み、その決闘の事を叙して、しきりに必勝に誇るを見て、ひそかに舌を巻きしことあり。されど當時我生涯に魔王と決闘することあらむとは、おもひかけざりしに、辛卯の歳十月朔、いつもの如くおき出で、我山房の机に向はむとするとき、半空裏よりひら／＼と墮來るものあり。何心なく取りあげて見しに、これなむ兼ねて舊新約全書の噂には聞きつれど、縁なくしてまだお目にかかりしことなき「トイフェル」殿よりの決闘狀なりける。あはれ是魔王殿、いかなるかんちがへをかせられけむ、こゝ日本國の千桑山房にむけて差出す郵便狀を、鵝筆のはこびも覺束なき獨逸文にて書き玉ひぬ。其文の始にいはいはく。 Mein hoechst gnaediger Herr Ohgwai! われに神通力乏うして、まだ魔王を僕にしたるおぼえなきに、かれいかなれば鴈外に冠するに gnaediger Herr の二字をもてしたるか。 Herr と S はとも gehirter Herr と S はとも、 Monsieur と S はとも、 Sir と S はともよろしかるべけれど、臣の君に對する時、僕の主に對する折ならでは、 gnaediger Herr と S はともやうなし。想ふに魔王殿は我に服役せんとて此誓文をわづられしか。さて全篇をとみかうみるに、一つとして眞の獨乙人の口さきらに似通ひたる言葉

なく、語格の誤枚擧するに違あらず。察するところ我國にて天仁波を守らざる國文の流行する如く魔界にては語格を破りたる獨逸文流行するならむ。さて魔王殿が謎めきたる文を通讀して、その趣意の在る所を求むるに、來む十月の十五日に天晴太刀を合せむとなり。我魔王殿は果してハウフが記中の「ザタン」其人にて、身は金鐵の如く、向ふところ前なき本事ありや。先づ人の血書を求めて人のおのれに仕へむことを欲するは、魔王の慣手段なりといふに、こたびはみづから服役の誓文を出されしぞ不思議なる。抑知らず、我魔王殿は緋袍長劍、フアウストが側に侍するメフイストフエレエスが如くならむか、將黒衣して斧を提げ、ハイネが後に隨ふ鬼物の如くならむかを。しばらくの來りて命を聽くを待ちて見む。

防箭一筋(中央新聞記者)

既に身の上の攻撃あり。身の上の防禦なかるべけむや。ねほよ新聞紙にて醜事を傳へられたる時は、りの誣妄を辨ぜむとする人に許多の不利あり。辨駁書によりて始て前の記事に心付くものあり。其不利一つ。前の記事を忘れたるもの、再びこれを想起し、前の記事に深く注意せざりしもの、始めて深くこれに注意す。其不利二つ。若辨難反復して、其事一時に喧傳するときは、其弊極れり。彼獄をねこして争ふものに至りても亦同じ。我は是不利を知れり、是弊を知れり。知りて猶彼中央新聞雜報(明治二十四年十月二日)の記事に及ぶは、我より世人の注意を求めむとすればなり。蓋彼記事は文士の惡謔なり。是惡謔は今の文壇に行はるること既に久しけれども、未だ今度の如く甚きに至らざりき。或は文壇の奇談なりといひ、或は藝林の妙話なりといふもの大抵皆是なり。某の家に竹刀あるを見ては、すなはち某客を打ちたりといひ、某の家にて酒を饗せらるるときは、すなは

ち某酒を被りて人を罵るといふ。これ猶深く咎むるに足らず。某が作りし小説のために戀わづらひするものありといふ。これ猶可なり。彼記事に至りては我を以て法律に觸るゝ行あるものとなし、巡吏の履聲を聞いて厠に隠れたりといふ。抑また甚し。わが軍衛の長官は彼記事を讀みて我を論さむとしたり。我朋友は彼記事を讀んで我を稠人中に嘲りたり。此文を讀む人々は、文士なるべし、文學に志ある人なるべし。さらば人々は、彼記事の隣の項に、小説吾亡妻に關する捏造の物語あるを見ても、早く彼記事の一文士の惡謔に出でたることを知らむ。然れども人々はまた、彼記事のあまりに實じやかなるを以て、我軍衛の長官、我朋友等の認めて實となしたる所以を知らむ。惡謔者よ。我脈中には熱血あり。笑ふことあり。罵ることあり。泣くことあり。怒ることあり。汝が得意の筆は、こたびの如く審美世界の敵を現實世界にて撃たむとして、無中有を生ずる手段を弄することを要せず、他の文學一斑記者が人の眠ると眠らざるを問ひ、人の酔ふと酔はざるを問ひ、人の馱洒落を吐くと吐かざるを問ふが如く、飛耳我私言を聽き、長目我内行を見て、我を罵り、我を辱むることあらむも亦知るべからず。然れども願はくは先づ知れ、酒亭の燈下、履聲を聞いて驚き走るが如きは、我事にあらざるを。惡謔者よ。汝はわれ履聲を聞いて品川風を罵りきとしるしたれど、われは品川彌二郎氏の知を辱うして、其矯風移俗の政策を喜び、其人を敬するものなり。豈敢て世上貴賤の蕩子博徒と共に品川風を嫌はむや。惡謔者よ。汝若我身の上に向つて攻撃を試みむとれもはゞ、今一度出直して來れ。

宣戰(東京新聞十八文傑記者、以上三條明治二十四年十月)

黒川文淵は十八文傑の尾に書していはく。早晚明治三大文派批評を公にして罵外を罵るべしと。見

よ、手套 Faldhandschuh は既に投げられたるを。

蠹魚豈靈ならむや (青年参看)

放語にいはいく。二葉亭が人間を究め、春の屋が沙翁を味ひ、露伴が世相を觀、紅葉が才を弄び、嵯峨の家が念を凝らし、思軒が雄拔なる文を作り、忍月が壯麗なる評をなし、抱一庵、二十三階堂、三宅、徳富、中江、植村諸家が各述作するところあるに對して、我難籍の涉獵を擧げたるは日本評論の文學一斑記者なり。こは我を以て人間を究むる能もなく、世相を觀る力もなく、いたづらに涉獵を事とするものとなしたるなり、こはわれを蠹魚の群に投ぜむとしたるなりと。眼青葡萄の如きもの此言を聞いて以爲らく。鴈外は二葉亭以下の諸大家を蠹魚にしたりと。彼は人間を究むる蠹魚ありとれもへるか。世相を觀る蠹魚ありとれもへるか。曾て聞く。蠹魚三たび神仙の字を食ふときは、化して脉望となる、以て星使を招き、還丹を求むべしと。(支諾畢記中) 脉望は蠹魚の最靈なるものなるべけれど、猶人のために嫁衣を作ることを免れず。是れ靈なきなり。蠹魚豈能く人間を究めむや。蠹魚豈能く世相を觀むや。

燕雀何ぞ大いなる (同上)

某大家われを燕雀の類に入れたりと聞く。さて其故をたづぬるに、われ二葉亭以下の諸大家を蠹魚にせりと思ひてのみ。おもふに無何有の郷、若人間を究むる蠹魚、世相を觀る蠹魚あらば、二葉亭以下の諸大家亦甘んじて蠹魚の群に入るべし。我はかゝる世界の燕たり、雀たるべき大作用なきを恥づ。眼青葡萄の如き人に大家視せらるゝ某氏よ。請ふらくは我を買ひかぶることなかれ。文を賣らむ耶、藥を賣らむ耶 (同上)

眼青葡萄の如きものれもへらく。鴈外文を善くすといへとも、一醫生に過ぎずと。必ず文を賣りて、始て文士たることを得べくんば、誰か文士たること能はざるを恥ぢむ。

これも一斑 (同上)

眼青葡萄の如きもの、我文と正直正太夫が文とを以て小理窟となす。青葡萄の如き眼の認得たるころは、必ずや理の小なるものなるべし。縦ひ正直正太夫が文と我文との裡大道理あらむも、彼争でか認得む。

自稱長者 (同上)

眼青葡萄の如きもの文壇放言を著して我を罵り、みづから署して隠々長者といふ。彼は隠然長者を以て自居ると見たり。世間長者備十種徳。一姓貴。二位高。三大富。四威猛。五智深。六年耆。七行淨。八禮備。九上敬。十下歸。隠々長者の徳は奈何。姓貴きか、知らず。位高きか、知らず。大に富めるか、知らず。威猛きか、非なり。智深きか、非なり。年耆いたるか、青年なり。行淨きか、知らず。禮備りたるか、れもひも寄らず。上敬、下歸、所詮駄目なり。

生嚼だに任せず (大阪文藝参看、明治二十四年十一月)

蕨村子のいはく。東都の文學者にして西鶴其頃の餘唾を舐めざるものは、獨英の文字を生嚼するに過ぎずと。又いはく。浪花の文學者は東都の文學者の下風に立てり。然らば浪花の文學者は獨英の文字を生嚼するものゝ下風に立てりと自認するもの歟。浪花の文學者若し獨英の文字を生嚼することだに能はずば、いつくんぞ能く東都の文學者の獨英の文字を讀むに臨みて、これを熟嚼すると生嚼するを辨せむ。英文學はいざ知らず、我未だ浪速人の力を獨逸文學に得たるものを見ず。浪速

人の獨逸文は、今に至るまで唯一篇の魔王の決闘状あるのみ。

魔王の申譯(葦分冊參看、明治二十四年十二月)

我に向ひて *gnaediger Herr* と喚び掛けしは、仁惠なる君といふことを獨逸語にしたるなりといふ。されど仁惠なる君といふことを *gnaediger Herr* と譯すべきやうに、外國の語法を心得たるが、そもそも失錯の本なり。我國にて仁惠なる君とは誰にも申さるれど、獨逸にて *gnaediger Herr* とは主人に對してならぬ申されず。婦人に向ひては口上にて *gnaedige Frau, gnaediges Fraulein* といふもそれすら手紙には *verehrt* といふ語になほすを法とす。こゝ等の駈引は字書と首引する人の知らぬところなり。我が一たび彼に教へて、人に書を贈るときは *Herr, Monsieur, Sir* などこゝろいふものなれ、*gnaediger Herr* といふべからずといひしは、殿とも、様とも、足下ともいへど、旦那様とはいはぬものなりとのこゝろなり。彼は人に書を贈るとき、殿といひ、様といひ、足下といへば齒が浮くと答ふ。旦那といひてこゝろ齒は浮くべきなれ。又其文の語格を失へるは杓子定規を使はぬためといへり。さらば獨逸文典とは杓子定規の書物なるべし。這般の杓子定規はわが好んで守るところ。

以上魔王の申譯は一つも立たず。魔王の決闘状は果してしほのその手書なるか。さらば我今いはむ山田芝廼園は獨逸語に通ずべき望なしと。さきに我書中には、今一際勉強せよといふ言葉ありしが、それは一時の覺にあまりなりならむとれもひし故なり。語格上の過は殆算術上の過に等きものなるに、人にこれを指斥せられて猶曉らば今一際の勉強も甲斐なかるべき鈍根ならむ。若又曉りて曉らずがほする程耻を知らざる者ならば、他年能く獨逸語に通ずる時ありと雖、また何の用をかな

さむ。或はれもふに、芝廼園が強辨は葦分船を讀む人には、獨逸語を解するもの少かるべきを奇貨として、おのが非を掩ひ遂げむとてならむ歎。若然らばまことに善い御了簡なるべし。

また魔王の決闘状は人を雇ひて書かせしものか。然らばその雇はれし通事どの、若語學を仕遂ぐる望なき男ならずは、雇主たる芝廼園に對してのが非を掩はむとする卑怯者なるべし。或はおもふに、通事どののは芝廼園に頼み甲斐なしと責められて、逃道なきに困り果て、彼強辨を試みしを、芝廼園が書き取りて葦分船に上したるならむ歎。若然らば魔王殿、知らぬ處丈佛なるべし。

以上を芝廼園が地位とす。芝廼園が此の如き地位に居りて、我を烏なき里の蝙蝠と罵り、のんこのしや蛙と罵り、山水天狗と罵り、山房荒神と罵り、一知半解の人と罵り、醉狂といひ、亂舞といひ、大人氣なしといひ、鷹の守沖住朝臣とひやかし、ひとりで抱腹絶倒し、ひとりで馬鹿にかしがり、ひとりで齒を浮かせ、わざ／＼東京に出で、下谷區青石横町の白壁に十二度半ぶつつかりしは、まことにれ氣の毒千萬なるかな。しがらみ草紙をひからび艸番とはあやまちをふた／＼びならむ。(江戸紫參看) 私信を公にせりとはよもや魔王の決闘状の事にはあらざるべし。山田三之助氏の手書はま

だ受取らず。

語格と字義と(國會參看)

正太夫がわが論文を駁する語中にいはく。手爾遠波を穿鑿すること勿れ。唯だ理をおもへと。こはわが語格をたづねて道理を忘るゝことあらむをわづらひてならむ。れなき人のくらやみ座敷にいはく。「シユワルツ」と「ヅンケル」とは同じからねば、これを同じくれもふは誤れりと、一心に闇黒の解釋を講ずるは鴈外漁史なりと。こは我を字義を説きて道理を忘るゝものゝやうに言做したるなり。

されど正太夫は果して能くわがいくつにても道理を忘るゝまでに語格をたづね、道理を忘るゝまでに字義を説きしかを示さむか。

人間以上(同上)

美妙齋のいはく。正太夫に向つて多言せば、彼に嗔らるべしと。(國民新聞) 正太夫これに答へていはく。喜怒には幾分か私あり。われは私のために筆を取らざることを、きつぱりことわりねくと。夫れ私のために筆を取らざるは善し。されど人間にはよ味ありて、すこしも私なきに至らむこと難かるべし、あらず、到底すこしも私なきに至ること能はざるものは人間なるべし。正太夫は古今萬邦の文學史に於て、縦令一人にもせよ、すこしも私なかりし文人、毫も私なかりし批評家を指斥し得るか。若しこれを指斥し得ずしてかくいはず、正太夫はおのれを古今萬邦の文學史に於て例なかるべき無私の文人と称もへるか。正太夫は果してすこしも文學上の事に就きて喜怒せざるか。正太夫は果して人間以上のものなるか。

神にあらず(國會新報)

あらず、あらず。正太夫のいはく。われは今の文士を打ちて我鞭の折るゝに至りて止まむ。されどわれも神にあらず、ことわるまでもなく神にあらず、(正太夫がそれを神と称もはれむことを心配するを見るべし)言に誤なしとは保せず。誤あるときは打たるゝことを辭せず、ひとり辭せざるのみならず、寧進んで打たれむとす。正太夫はまことに神にあらずして人間なり。人間なればよ味あるべきこと論なし。人間なれば言に誤あるべきこと疑ふべからず。さるに正太夫はあるときおのが人間なることを忘れて、其心すこしも喜怒なきやうにねもひ、その筆にすこしも私なかる

べしといひき。正太夫果してかゝる人間以上の心、人間以上の筆あらば、彼必ず能く人を打ちて鞭折るゝに至り、絶つて人には打たれざるべし。

失聲變色(葦分船登音)

芝廼園わが微物の爲に動かさるゝを、膽力なき爲なりとして笑ひぬ。東坡云。人能碎千金之璧、而不能無失聲於破釜。能搏猛虎、而不能無變色於蜂蠆。是不一之患也。夫れ一ならざることは或はあらむ。膽力なしとは斷ずべからず。

官能的快美(同上)

官能的快美のために官能的快美を寫すこと勿れとはハルトマンが言なり。ハルトマンが官能的快美を寫すこと勿れといへりとは、誰か教へし。美人百姿の文は、その題とするところによりても、その志すところによりても、徒に官能的快美のために官能的快美を寫したるなり。是れ審美眼あるものゝ取らざるところなり。五大力、舞姫、文使等は官能的快美を寫すことありといへども、官能的快美のために官能的快美を寫すことなし。是れ審美眼あるものゝ病とせざるところなり。芝廼園は此別だに解し得ざるか。

雛形(同上)

紅葉山人の雛形たるは芝廼園が榮なるか。我をシルレルが雛形なりといへど、それはわが榮とするところにあらず。

鸚鵡主義(同上)

自評を鸚鵡主義とか。自評とはわが事がいふ義なり。鸚鵡は人のこと葉を眞似するものぞ。

意氣と野暮と(同上)

意氣と野暮との義は團珍の記者等も説いたりとか。非説之難也。善説之難也。

蕙心社用語集(同上)

我は水母なるか、醉漢なるか、がらつばちなるか、のうてんの熊なるか、生野暮大通なるか、山鳥の囀なるか、(窮したるしやれなるかな) 罪人なるか。我文は轆轤首のへどなるか、檻樓なるか、ヘステル、ボツクの讀本なるか、手前味噌なるか、芋環蕎麥なるか、雜言なるか。柵草紙は鼻高間が原の柵なるか、折助文學なるか。うの理由として擧げたるところは、上の五條にて打毀し畢んぬ。葦分船に芥を積まむは芝廼園が勝手なり。

今の丁參政(同上、以上十條明治廿五年一月)

宋史云。參政丁謂、事寇準甚謹。曾會食。羹汚準鬚。謂起拂之。準笑曰。參政國大臣。乃爲官長拂鬚邪。葦分船にいはいく。鷗外が鬚をちよこくと這出しては引張り、何をするか小癩なやつめとどなられ、びつくりしてあとすざりするかと思へば、又ぞろ這出しては引張り、性慾もなく悪ふざけするは芝廼園が筆癖なりと。豈圖らむや、今の文壇にも一個の丁參政あらむとは。

魔王が再度の申譯(同上)

芝廼園がわれに決闘状をつけしとき、*gnaediger Herr*と喚掛けしを、僕の主人に向ひたるときならでは *gnaedig*といふ字は使はぬものなりとをしへしに、わざと君臣の格にて最大級の形容を用ゐて書を裁せしなりと答ふ。君臣の格にて最大級の形容としては、*gnaediger Herr*の語は受取られず。君臣の格にて最大級の形容を用ゐむとならば、*Allerdurchlauchtigster, Grossmaechtigster Kaiser,*

Allergnaedigster Kaiser und Herr なども書くべきならむ。われは君臣の格の最大級にてよび掛けらるべき縁もゆかりもなければ、魔王が例の決闘状にてわれを喚掛けたる言葉の君臣の格にての最大級の形容にあらざることを示さむとてかくなむ。

芝の園はまたはいはいく。おのれは山房の主人の恩を荷ふものなれば、恩人に向ひて *Wuerdentitular* を用ゐ、*Hochwuerdigster* とか *Gnaedigster* とかいひても善からむと。 *Wuerdentitular* は恩人に向ひて用ゐるものにあらず、宗教上若くは政治上に高き位ある人に向ひて用ゐるものなり。かくはかなき再度の申譯をなして、その序にわれを罵りし言葉をば

蕙心社用語集のつゞき(同上)

として抄しおくべし。曰く雇人口入の婆さん。曰く象棋の殿様。曰く知らぬ顔の半兵衛。さてわが文藝の上につきては、興のさむる業、唐人の小使(これはからかひばりといふ地口なりとぞ) ね若い御容態、のんきの沙汰などいふめでたき言葉さはなりき。

望天不知生(青年文學叢書、以上三條明治二十五年二月)

望天不知生といふもの書を正直正太夫に與ふ。望天不知生は正太夫が三昧の自評を發きしを、その文學上に立てたる功の第一なりとし、彼が義捐小説の學を香しからずとせしを、常情に背きたる論なりとす。正太夫が三昧の自評に就きての論難、若うの文學上第一の功ならば、正太夫が第一功の價果して幾何ぞ。正太夫が論難の取るに足らざることをば、自評に關したるすべての異議を辨せしときに示しつれば、こゝには言はず。正太夫が義捐小説の學を難せしは、ひとり常情に背きたるのみならず、また正理に戻りたり。(山房拊掌談を參看せよ)

耐忍とは何ぞ (國民新聞參考、明治二十五年五月)

雲外居士のいはく。鴈外が人の批評に答ふるは耐忍せざるなり。耐忍は美德なり。鴈外これを闕ぐと。幼時塾師に聞く。韓淮陰が俛して袴下より出で、蒲伏せしは耐忍の最好例なりと。淮陰は賁育の勇なく、且寡は衆に敵せざりしゆゑ、忍びて辱を受けしならん。淮陰はこれの長處の他に存ずるを知るがゆゑに、臂力を以て人と争はざりしならむ。然らば人と相較べて、これの短處を示すことを欲せず、姑く他に一步を譲るを、世には耐忍といふか。居士は未だ鴈外が短處を以て、人に對したるところを見ざるゆゑ、鴈外が耐忍を知らざるのみ。居士は世俗の所謂耐忍といふものゝ時としては意氣地なきものゝ遁辭なりといふことを思はずや。れもふに若し當年の韓生をして、扛鼎の力あらしめば、無禮なる屠中の少年を引攬み、二三間擲退くとも、又何の不可なることかあらむ。

山房拊掌談

掲帝掲帝を三下り

朗讀法を講ずる材料には、是非を問はず岳陽樓記を取らむといふ。(讀賣) 顛倒して支那文を讀むべくば、獨逸文も争で顛倒して讀むべからざらむ。若日月隱曜、山岳潛形、商旅不行、檣傾楹摧、を日星ひかりをかくし、山岳かたちをひりめ、商旅ゆかず、檣かたふき楹くだけたりと讀むべくば、*Es laechelt der See, er lachet zum Bate, Der Knabe schief ein am gruenen Gestade* をもてるぜえわらひ、ぼあごをすくむ、でるくなあへみどりのげすたあでにぬふりぬとも讀むべきならむ。唯熱く外國の文を味はむとれもふものは、原音のまゝにて眞直に讀下すべきのみ。獨逸文に獨逸文の朗讀法

あり、支那文に支那文の朗讀法ある如く、國文にも亦これのづから國文の朗讀法あり。國文の朗讀材料なりとて、強て岳陽樓記をすくむるは、掲帝掲帝、波羅掲帝を三下りにあはせよといふが如し。漢語和讀をしひて辨護せむと思はざ、唯一道あらむのみ。いはく。とさまにゆき、かうさまにゆきて、くもはるく。きさらぞ、やよひ日うらく。これ神託なり。穴賢。

忘々生の質問

珍らし、珍らし。スカンデナキヤ文學といふ題ばかりにても、世の無學の徒をれどろかすことを得べし。(國民新聞) 起首には、余が知らむと渴望する所を擧げて、普く世の識者に質さむとあれど、うれより下は、結末まで講義體なるところ殊にありがたし。「エツダ」の事を説くに至りて、古きは韻文にて、十一世紀の頃氷島に住ひし有名なる學士シイマンド、シグファツソンの作なりと云ひ、新「エツダ」は散文にて一世紀後にスノオリ、スタアルソンの著述せしものなりと云ふ。是れ即ち其神代紀なりとあり。Edda Saemundar hins froda にして Saemund Sigfusson の作といふべくは、毛詩は孔丘が作ともいふべきならむ。Snorrodla にして Snorri Sturluson の作といふべくは、虞初新誌の文皆侯雪苑の手に出できともいふべからむ。是等は猶尋常の事なり。新「エツダ」を即ち神代紀なりといふべくは、七部集は冬の日の別名ともいふべきならむ。いかにも新祖書の上巻は神學なれど、其中 *Kaldschafrede* は一種の詩律、其下イストランド文字考と美辭學となるを知りたまはぬことは、よもあらむ。われアンデルセンが小説「」を讀で璉馬に一個のゴンチャロフあるを知り、エンリック、イブセンが戯曲を見て、又一個のゾラを得たりと思ひしことあり。スカンデナキヤの文學の兩「エツダ」にて覗ひがたきは、猶我文學の記紀萬葉にて知るべきにあらざるごとくならむ。わ

れは君が稿を繼いで、其講義的質問を出されむことを望むこと太だ切なり。某云。東坡の策問を読むときは、殆人をして復た辭を措くこと能はざらしむる心地すと。この質問も亦これに近きもの歎。羨むべし、羨むべし。

忘々生が質問のつぎ

忘々生が續稿(同上)を讀みて、今の北歐文學に於いて取る所は現世紀なることを知る。是れ先づ我心を獲たるものなり。云。スカンデナヴィヤ文學の最進歩せしは、英佛獨魯等と同一現世紀なりと。われは君が現世紀の北歐文學を評し玉ふを聞かむと欲す。請ふ、われをして曠く望ましめ玉はざらむことを。

又云。Ludewig Holberg は十八世紀の初にありて雄名を大陸に奮ひし人なりと。われは今の大名ありし所以をわもひて、彼がために悲めり。彼が *Mis Kims* 地下の旅を拉句文にて作りしは何故ぞ。郷人のこれを讀むものなるべきことを想像したればなるべし。近頃高津三上の兩學士日本文學史を著ししが、漢文を取らず。是れ或ひは少しく僻見にわたるものなるべしと雖、世人に國文の尊ぶべきを示さむ心ならむ。彼 Holberg にして此兩學士の如き史家に逢ひたらましかは、地下の旅の一篇は、遂に瓊馬文學史中より刪去せられしならむ。豈悲むべきこと其甚ならずや。君以て奈何となす。(地下の旅の瓊馬文にて出でしは、Holberg が死後に *Baggasen* が譯せしなり。獨逸に行はるゝ譯本は *Wolf* のなり)。

又云。ゴツセは *Oehlenschlaeger* を評して、群理想家中に孤立の地位を保ちたる純然たる實際家なりといひきと。彼は近人の所謂實際家には遠きやうなり。而れども極端の獨逸「ロマンチック」派

を攻撃せしところ、比較的の實際主義とも見るべきならむ歎。其作南海島は原獨逸小説の燒直しに過ぎず。而れども我馬琴の八犬傳などの例を思へば、文學史を飾るに足れりとの評尤も然るべきことなり。

忘々生は *B. S. Ingemann* と *T. C. Hanch* の歴史小説を評すること頗詳にして、*H. C. Andersen* に至りて僅に神女談(稱物語)を擧げたり。われ *Andersen* が小説にては *O. T.* を愛すること既にいひし如し。然れどもこれを除きても、猶即興詩人の如きものあり。我座右を離れざる書の一に屬す。忘々生が詳にこれを評せざることを憾む。那威に至りては、*Bjoernstjerne Bjoernson* がねなく看過せられしも亦慙むべし、*Asbjornson* と *Moe* とは兎も角也。

白雲以上

江湖新聞は白雲以上の新聞なりと聞く。何ぞ其れ珍事の多きや。彼は蝸牛廬主人をして花木考を誦せしめ、誦し畢りて又藤坡先生と叫ばしめたり。花木考を悟密詩話に引きしは林叟なり。而れども粉牌花に懸けしは藤坡に非ず。之を主人に示さば其れ之を何と云はん。嗚呼、是れ特り蝸牛をして酒の殺に這はしむるのみならずなるなり。彼は又悟密詩話を引いて曰く。任翻台州の寺壁に題して曰く。前峯月照一江水と。僧翠微に在りて竹房を開く。既に去る云々と。是れ僧在翠微開竹房の詩句なるを知らず、以て麓堂詩話中の文となすなり。既に詩句と散文とを辨せずして、猶且詩を論じ、又一句の工拙を論ず。白雲以上の珍事も亦甚からずや。咄。偏不在前邊去睡。却來我這後邊作甚。

雜誌材料の無盡藏

近き比柵草紙に田原樸水といふ人ありて、杉田日記、白猿物語など、板本の多く世に行はるゝもの

を、日本之文華、文明之母等に載せたるを擧げしが、今又東洋學會雜誌を見れば、四十二のものあらうひを出しぬ。其外日本之文華の次號豫告といふものを見るに、庚子道の記を出すよしなり。(豫告には庚子道の夢とあれどこれは誤植なるべし)世の新聞雜誌を編纂する人々に告ぐ。文化文政の頃に世に出でし國書を繕きて見ば、卷末に萬笈堂の廣告ありて、五六十種の書名あるべし。其書は大抵一部十錢乃至二十錢のものなれば、これを片端より取りて活板に附せば、勞せずして數年を支ふべき材料を得む。また好手段ならずや。

おなじ豫告に、北海に流されたる野村望東女とあれど、余等は野村望東尼の事を知りたるのみ。北海に流されたる野村望東女とはいかなる人か未だ聞かず。

誣妄といへるこそ誣妄なれ

重野、久米、星野三氏の國史眼七卷、比日友人松雲居士の藏本を借りて一讀過しぬ。天晴の史眼なるかな。眼字の義是の如くに解し去りても、誰かあらずといはむ。唯憾むべきは、卷の六、第十九紀第七十九章に、近松、竹田等が淨瑠璃の事をいひたるすゑ、是に於て著作者競ひて事實に就いて敷衍し、誣妄の譚を綴る者多し、といふ一節あることなり。戯曲も小説も分明に美術品なるに、その實と殊なるによりて、これを誣妄といふ。若し延いて他の美術に及ばず、運慶誣妄の形を彫り、金岡誣妄の圖を書きぬといふに至らむ。是れ決して等閑看過すべきことにあらず。是れ此稿本の瑕瑾なり。再刊の時はこれ等の過失なきやうにせられむことを切に望む。

ふた面

獨逸に俚諺あり。曰く。業は作者を譽むと。作者の譽むべきは業の譽むべきためなり。忍月居士の

今の文家に於ける、其業を見ては、嘲罵至らざる所なく、其人を評しては、推稱諛に近きものあり。其業既に取りべき所なくば、其人の作者たるに於いて、何の譽むべき所かあらむ。昔は「ルテエヤ」「メロツブ」を評して、一たびは大に罵り、一たびは大に譽めつ。レツシングこれを見て曰く。彼の罵言は猶可なり、其阿諛は忍ぶべからず、彼罵言を出すはわが敢てせざる所、此諛辭をなすも亦わが耻づる所なりと。居士レツシングのために笑はるゝことなくば幸ならむ。

批評の秘訣

批評家などいへば、多少値打ある人のやうに見ゆれども、世の中に批評程たやすき者はあらざるべし。我に樂屋の秘訣有れば、左に内々知らすべし。

先づ一口劍を評せむと思はば、雅言集覽のつるぎの部、淵鑑類函又は藝文類聚の劍の部、Citation-
of Japans の同様の部と、彼様に披き置き、此處彼處讀試むるときは、鋭しとか、鈍しとか、寒しとか、それ／＼の縁語あるべし。それを善き程に摘みて並ぶるときは、批評家の稱號の外に博覽家といふ名譽をも得らるべし。うたかたを評せむるときは、同様泡の部にて事濟むことなり。あはれ、これ程の秘訣洩らさむは、思へば惜きことにこそ。

義捐小説

得知子地震に遇ひし縣人のために義捐小説を輯む。三昧子これを輔け、書買春陽堂これを賛す。正太夫のいはく。是れ分別なき企なり、香しからぬ擧なり、大に誤りたる事なり。此事は極めてきたなき名聞に因りて起りしものにして、其弊は人に強ひて文を賣らしむるに至る。水兵は古汗衫を捐つて、佛徒は古單皮を捐つ。此事を起すものは文を古汗衫と同一視したるなり、小説を古單皮と同一

視したるなり。彼等は何故に街に立ちてこれ等が南瓜頭をせり賣せざるか。また此事に與したる人の中に逍遙、露伴が如きものあるは怪むべしと。(國會)得知子等が擧は慈善の眞心より出でずして、きたなき名聞より出でざれば、正太夫いかにして知りたるか。若し根なくしてかく推せば、これ邪推なるべし。れもふに得知子等は人に文を賣らしめしにあらざり、人に文を捐てさせしならむか。古汗衫も捐つべし。古單皮も捐つべし。勞力も捐つべし。勞心も捐つべし。勞心の結果なる美術品ひとり捐つべからざらむや。われは棄捨の道に於て、古汗衫と古單皮との小説に殊なるべき所以を見ず。われは逍遙子、露伴等がこれに與せしを怪まずして、かゝるあやしき詰難の南瓜頭にあらぬ立派なる正太夫が頭より出でしを怪む。

正太夫と義捐小説の發起者と

義捐の可否。正太夫のいはく。震地の慘狀はわれ知れり。されどこれがために小説を作りて賣り、この金を捐つるは誤れり。發起者のいはく。我擧の誤れりや、あらざれば知らず。正太夫が誤れりぞ知りつゝも、當初此擧に加はりしを怪む。正太夫またいはく。發起者は其擧の誤れりや、あらざれば知らずといへば、これ人間普通の智識を具へざるなりと。(並に國會に出づ、以下倣之)判にいはく。諸作家は小説を賣りしにあらざりて、これを捐てしならむとれもはるること上にいへるが如し。されど發起者は其擧の可否を知らずと逃げたれば、正太夫を勝とす。

書肆と作者と。正太夫のいはく。義捐小説は春陽堂が募れるなりとのみれもひて、文を草し遣りぬ。われは其擧を賛成せむとせしにあらざり。發起者のいはく。春陽堂が募れりとれもひては可とし、別に發起者ありと知りては否とす。其故明ならずと。正太夫またいはく。春陽堂は書肆なり、商賈なり。そ

の文を賣りて得たる金を棄つるは怪むべからず。作者にしてかゝる擧あるは不可なりと。判にいはく。作者は文を捐て、書肆はこれを賣りしならむとれもはるること、上にいへるところに就きて推知すべし。發起者はわらうらくは自ら文を捐てつゝも、文を賣ると思ひ誤り、人に文を捐てさせつゝも、文を賣らせたりと思ひ誤りしならむ。(賣文の可否につきては別に論あり)されど發起者は思ひ誤るところありて、作者と書肆との別に心付かざりしが故に、こゝにても正太夫を勝とす。

廣告と募集と。正太夫のいはく。義捐小説の廣告を見るに、春陽堂主は特別賛成者にして、別に發起者あり、補助者あり。そのさま昔の書畫會のちらしの如し。發起者と補助者とは我に一言の挨拶をもせざりき。挨拶なくして我を賛成者の中に加へしは侮蔑なりと。發起者のいはく。發起者と補助者とは最初よりあり。廣告はちらしに似たるか知らず。されど是れ形似のみ。形似のために牡丹餅と馬糞とをれなじやうに視るべからず。挨拶は賛成者の門多きために、手分をなしていはせつ。春陽堂は發起者の代理として正太夫方へゆきしなりと。正太夫またいはく。最初より發起者と補助者とありたりといふは、最初より誤をなしたりといふにれなじ。我は當初得知子の心添を受けて春陽堂がなすことゝれもひて文を贈りき。得知子の名義にてなすことゝは思はざりき。牡丹餅と馬糞との譬は、いづれ牡丹餅、いづれ馬糞と判せむこと難かるべし。賛成者多き故、手分して挨拶にゆきぬといへど、うは豫め賛成者と定めて挨拶にゆきしものなれば、順序をあやまりたるなり、侮蔑なりと。判に云く。文を捐つる擧誤にあらざるときは、最初より發起者たり、補助者たりといへども、得知子、三昧子が辱となすに足らざるべし。慈善の擧を名聞の擧ならむと推して咎め立てするほどの正太夫が、得知子の心添ならばと思ひて輕くしく文を贈り、得知子の名義を以てしたればとて、

其文の印行せられたる時、新聞紙にて攻撃せしは何事ぞ。賛成者多きゆゑ、手分して挨拶にゆきぬといふ語によりて、賛成者と定めて挨拶にゆきしものと断せしは過ぎたり。發起者等は賛成すべしとれもはるゝ人々の許に申し込みしなるべく、又挨拶せられたる上にて、其擧を賛せざる人は其群に入ることを辭する自由あればなり。正太夫が先づ文を贈りて、後に谷め立てし、また挨拶の順序を辨じたる廉々、頗る妥ならざるところあれば、こゝにては發起者を勝とす。

道遙子、露伴子が入夥。正太夫はこれを怪み、發起者はこれを喜べり。こゝは義捐小説を見る眼の殊なる故に過ぎざれば持とす。
古衣と小説と。貧者の一燈の貴きを知らずして、義捐したる古汗衫、古單皮をきたなきものにれもひ、小説をその古汗衫、古單皮と同じく取扱ふを非なりとす。こゝは正太夫が誤なり。車夫が穿き棄てたる鞋と、戦死したる兵の骸との譬を引いて言ひ解かむとせしは拙し。こゝは發起者が誤なり。さればこゝも持なるべし。

厄介物

今の批評家は書を評してこれを作りし人の身の上及ぶこと多し。思軒子これを慨きてか批評家無用なりといふ。雲外子のいはく。書を評して止むものは、批評家中の漸進派なり。書を評してこれを作りし人の身の上及ぶものは、批評家中の急進派なり。急進派は作者の人物を改造せむとする意氣込にて其書を評するなり。うの心には嫉妬もなく、怨恨もなし。急進派豈破壊黨ならむや、豈厄介物ならむやと。(國民新聞)夫れ作者の人物と其作とは必ずしも其嚮を同じうせず。詩人の心の其詩にねなじからざるは、キイランドが基督教をうたふ言葉の彼が基督教を奉ずる心に殊なりしに

ても知るべく、哲學者の心の其哲學統にねなじからざるは、シヨオペンハウエルが意を抑ふる道を説きて、平生意を抑ふること能はざりしにても知るべし。作者の人物を改造せむためにうの身の上を攻撃するは、初より覺束なき事なり。作者の人物、縱令改造せられても、其作のためには何の利かあらむ。矧や詩人は生るゝものなるをや。われは急進派批評家の心に嫉妬あらむとも推せず、怨恨あらむとも推せず。われは又急進派批評家の目的は破壊にあらむとも推せず。されどわれは所謂急進派批評家を厄介物と見做すことを断言す。

韻文と句讀

韻文に二重の句あり。一を韻律上の句とし、一を文法上の句讀とす。韻律上の句をば離して書き、文法上の句讀をば、韻律上の句に拘らずして切り、西洋の「コンマ」をわが讀とし、西洋の「ブランク」をわが句とすべし。若韻律上の句をばなれ／＼に書くのみにて善しとせば格別なれど、苟も韻文に句讀を施さば是の如くなるを最宜しとす。これを我邦にて試みし始は柵草紙の長恨歌なり。このころ雲峯子うの迷兒の篇に跋して韻文の句讀を説く。(女學雜誌)其見略ぼ我にねなじ。唯文法上の句讀を施すに當りて、韻律上の句法に拘りたる迹あるを憾とす。

詩と韻文と

雲峯子詩を論じていはく。詩とは詩體を用ひて詩想を顯すものなりと。(日本評論)うの所謂詩想は美文想なり、「ボエジイ」の想體なり。うの所謂詩體は韻文法なり。雲峯子は韻文法に依らざる詩、散文に似たる詩を認むれど、うをば詩の變體、詩の例外なりとせり。われれもふに雲峯子が論善しといへども、猶彼の美文の統括を謀りて、散文韻文の詩を分ち、小説等を散文の詩とする論には、

輸くること一着ならむ。故奈何といふに雲峯子がいほゆる散文に似たる詩は、木にもつかず草にもつかぬ頗怪きものなればなり。

正本と臺帳と

水蔭子が石橋山の自序に、正本として讀ましむるためにあらずして、臺帳として演ぜしむるためなりとありきとて、正大夫これを咎む。(國會)われは自序の全文を見しにあらず。されど正大夫が引きたるところに就いて見るに、正本を讀ましむるものゝ名とし、臺帳を演ぜしむるものゝ名としたる珍しき穿鑿なりとは斷ずべからざるにや。彼語をばたゞ我作は讀ましむるためならず、演ぜしむるためなりといひても通ずべく、又正本として讀ましむるためならず、正本として演ぜしむるためなりといひても通ずべく、又臺帳として讀ましむるためならず、臺帳として演ぜしむるためなりといひても通ずべく、又更に一轉して臺帳として讀ましむるためならず、正本として演ぜしむるためなりといひても通ずべく、要するに正本と臺帳と同義なりといへども、水蔭子が如くいひてすこしも差支なし。若一步を進めていふときは、上に引ける自序の二句に、正本の字をかさね用ぬ、又は臺帳の語をふたゝび使ひたらむよりは、一たびは正本といひ、一たびは臺帳といはむこゝろ文の姿致を取るに宜しからめ。

青年文學

青年文學の首のまきにいはいはく。今後の文體は最平易なる和文にして古雅に失せず、鄙俗に流れざるものとすべし。されば在來の日本文法は無論廢絶せしむべきにあらずと雖、れひくゝに變化すべきを忘るべからず。さて漢文の語句を借り用ひては、特に意味を強め、また擬音の法を使ひ、長を歐

文に取りては、「レトリカル、フィギュア」を得べし。その他東西文學者一般の傾向を見ての長所を取らむこと肝要なりと。皆先づ我心を獲たるもの。

諷刺小説

れなじ卷にいはいはく。小説を以て世を諷するは可なり。個人を刺るに至りては斷じて不可なりと。この言甚だ確なり。われは唯個人を刺らむためにあらずして、個人を詩材にする小説をば許すことあるべきのみ。この裏の消息を得て妙境に到れるは、佛朗西のドオデエ、俄羅斯のツルゲニエフなるべし。是を寫真派の雄となす。

言と文と

れなじ卷にいはいはく。國文の時制は今の國言の時制に優れり。言を文にせむとするものは、これを失ふべしと。この言もまた甚だ確なり。今の言文一致家といふもの、若まことに文を文にして、句尾にのみ俗語を加へば、つひに全く文を文にするものに若かざるべく、若しまことに句末の天仁波の俗なるを厭ひて、濫に名詞どめを用ひば、つひに國文の天仁波に従ふに若かざるべし。されどこは短を擧げて長をわするゝに近く、言文一致家に向ひて差扣を勸告すといふに至りては、あまり壯士風に過ぎたるべし。願はくは我言文論を讀みたる上にて再び細に論せよ。

批評家無用論

森田思軒氏が青年文學會にて、批評家無用論といふものを唱へしことをば傳へ開けり。されど親ら聽きつるならねば、あの批評家といふものゝ奈何なる批評家なるかは知らむ様なく、又批評家に用なしとは何故に斷定せしか知らざる事ゆゑ、これに同意をも表しがたく、またこれを駁せむすべを

も知らず。彼論をば森田氏みづから書くか、さらずは青年文學會にてこれを筆記したるもの、會の雜誌に出づべきならむと待居れども、今迄然るものを見ざるはいと惜し。我が見たる所にては、森田氏の論に繼いで批評家の有用無用を説きし人、けふまでに四人ありて、不動劔禪といふ人は無用なりといひ、(回天)雲外居士(國民新聞)と縦横生(青年文學)とは有用なりといひ、尾花生(國會)は有用なりといふ方に左袒しきと覺ゆ。若汎き意味にて批評家といふものは無用のものなりなどいふ人あらば、うれば没分曉漢ならむ。

角を撓めて牛をな殺しう

垢を洗ひて癢を覚むるは、今の評者の通患なり。肉を割いて癢を成すは、いまの評者の通病なり。偏りて見、私に意ひて、あられもなき説をなすは、いまの評者の通弊なり。この通患、通病、通弊はいよ／＼起りてます／＼甚し。斯くて止むことなくば、今の極文學界を漸盡せむ。(回天)不動劔禪はこれを基として、いまの文學界に評者無用なりといふ。われはかの通患、通病、通弊を免るゝこと能はざる評者を以て、偽の評者となす。偽の評者はまことに無用なり。されど偽の評者をして迹を歛めしめ、彼通患を除き、彼通弊を醫し、彼通弊を止むるは、眞の評者のつとめなり。故にわれは將に曰はむとす。眞の評者の有用なること、いまの文學界に若くはなしと。

民争へども衡は折られず

評者は評せられたる作者に自ら省みることあらしめ、その外の作者にあしきに倣はずして、善きを學ばしむ。評によりて評せられたる作者の受くる利は小なれども、今の外の作者の受くる利は大なり。評せられたる作者、評のために倣り、また評のために挫けきとて、評に用なしといふは、その

外の作者の受くる利をれもはざる過なり。(青年文學)これによりて縦横生は評者を有用なりとす。評の評せられたる作者の上に及ぼす働のみ見て評者は無用なりといふを非なりとして、評の今の外の作者に及ぼす働を説いたる縦横生が言は頗妥なり。評者の有用無用の論に關するものには、評の評せられたる作者の上に及ぼす働と、評のその外の作者の上に及ぼす働とを除きて、猶評の世間に及ぼす働あるべし。また評のすべての働を除きて、評の質をも見るべし。一步々々眞理に近づく評の大利益は働にあらずして質にあり。

恩怨と有用無用と

尾花生は作者の評者無用なりといふは、子の親の恩を忘れたらむが如しといへり。(國會)作者には評者に影響せらるゝもあるべく、また影響せられざるもあるべし。評者に影響せらるゝものゝ中には、評者の恩蔭を被るゝもあらむ。評者の恩蔭を被りたる作者にして、評者無用なりといはざ、まことに子の親の恩を忘るゝに等かるべし。されど評者に影響せられて、損害を受けたりとて、評者無用といはむは通論にあらずるべく、また毫も評者に影響せられずとて、評者無用なりといはむも太早計なるべし。要するに作者たるもののが評者に受けたる利害によりて評者の用の有無を斷ずるは、感情の上の沙汰に止まれり。これを彼縦横生が評を受けざる作者に及ぼす評の働に言ひ及びしに比ぶるときは、辯論の方角より見て、今の眼界狭きにはあらずるか。さばれ尾花生が言をば、辯論の上より見るべきにあらずるべし。

半瓶の浙瀝も空瓶に優る

尾花生は評者が人の著作の小疵を見出して、これを奇貨居くべきものとし、これに托してものが學

を銜ふを憎み、そのかへりて著作中大酔の處に盲なるを責めたり。所謂はたき評是なり。(同上)若文學界にかゝる人あらば、その憎むべく、責むべきこと勿論なり。されど疵を見ざる處に疵を指すものゝ憎むべく、責むべきは、實に小疵を見てこれを難するものより甚だしかるべし。無學を以て人に誇り、哲學を空理なりといひ、眞善美の三つを説くものを迂人なりといふものゝ憎むべく、責むべきは、學を銜ふものより甚しかるべし。疵は疵なり。小なりといへども見出したる上は難じてもよし。學は學なり。機を見て腹笥の蟲干せむもよかるべし。尾花子が所謂はたき評をなすものは、醇疵を分ちて毫釐の失なく、能ありて爪を藏したる評者には及ばざるべしと雖、われは今の文學界に所謂はたき評を倣得るものだに寡きを慨く。

持論豈得易からむや

評の褊狹なるは虚心にして書を読まざるためなり、れのが持論の徵證を求めむとして書を読むがためなり。(同上)これも尾花子が世を刺る言なれど、世間を判者にして學藝の上の事を決せむとする人々多き中に、若持論といふものを懷きて、書を読み證を覓むるものあらば、猶是れ鐵中の鏘々ならむ。

朗讀問題

青年文學の二の卷に國文朗讀につきての記事あり。記者は對話の朗讀は、青年文學會に於て美妙子がせしにはじまるといひ、美妙子がその時の技倆を評して、地の文と對話との境界、充分に明ならざりしと、地の文を読むことのあまりに急なりしとを憾としたり。以上を藝術上の批評とす。次に記者は朗讀者の喜怒哀樂の情を言葉の調子の上に發せむことを願へり。是れ獨立せざる藝術より獨

立したる藝術に入らむとするなり。低き藝術の級より高き藝術の級に入らむとするなり。時間ありて空間なき耳の映象の藝術の裏面なる朗讀法をして、まことの自由術の範圍に入ることを得せしむるには、その情を表す術とならむことを要す。自由術としての朗讀法は表情讀の術なることは嘗て論ぜり。次に記者は朗讀法の上の疑問二條を記したり。一つは括弧内に挿まれたる句、または卒然文中に疑問點、感動點を挿み入れたる句の如きはいかに讀むべきといふことなり。記者はこれを無聲的文字と名づけたり。されど古來戯曲中などにて、括弧内に挿みたる句、(ギョオテが戯曲の舊板には括弧のかはりに横線をも用ゐたり)及び卒然疑問點、感動點を施したる語あるは、口の上せざる語句にあらず。括弧をば文脈の上より挿みたるなり。疑問點、感動點には裸なるものと括弧にて圍みたるものとあり。裸なる諸點は文法上に施したるものなり。括弧にて圍みたるは文義上に施したるものなり。かの裸なる點を施したる語句は、戯曲などにて口に出すとき、うれにふさはしき調子にてあらはすべきこと勿論なり。括弧にて圍みたる諸點は、今の小説などの如く、朗讀すべきために作れる文にあらざる文(この事は下にいはむ)におほく、こは皆目のために施したるものなり。疑問の残れる一つは間接話の事なり。記者はたもへらく。間接話はたもに事情の最も入り組みたる場合に用ゐらるべきものなれば、今より後朗讀法の盛に出づるに従ひ、其式を作るべきものならむと。間接話は戯曲の中にも事情の入り組みたるところにありて、その朗讀法をば西洋の名優の意を得て行ふが常なり。我國の物語の類にも間接叙事に算入せらるべきものあり。直接叙事と間接叙事との境界は、ゆくすゑ次第に明なるべしとねもはる。次に記者は我國にて朗讀法の盛になりもて行くにつれて、あらたに荷ひ込まるべき關點を數へつ。その一つは朗讀に便ならむがために、詞

子を尊むこと甚くなりて、文の氣勢衰ふべしといふことなり。一つはまた聞いてすなはち解せらるべきために、文を冗長にするやうになるべしといふことなり。表情讀の術の料にせらるべき脚本は、叙事詩と戯曲となるべく、叙事詩と戯曲とを朗讀する習盛に行はれば、作者はこれのつから氣勢の調子と並び馳せむことをつとむべければ、調子のために氣勢を衰へしむる弊はれもひの外に少かるべし。又朗讀法の精妙なる藝術とせらるゝに至りて、識者の耳漸く藝術的受用のかたに傾く時は、冗長にして解し易き文は厭はるべければ、作者の其文を冗長にする弊も、れもひの外に少かるべし。原來朗讀に適すべきものは叙事詩と戯曲となり。これに唱歌に適したる叙情詩を加へて吟體詩とす。朗讀に適せざるものは小説なり。これを讀體詩とす。所謂讀體とは朗讀の謂にあらざして、目にて讀み、意を取る謂なり。表情讀の術を興さむとれもふものは、成るべく吟體詩を材料とせよ。かの讀體詩のうちにも、表情讀に便なる變體なきにあらねど、若すべての小説を朗讀に便ならしめむとせば、其弊を受くるもの二つあるべし。一面には小説文の手法に虚飾を生じ、一面には表情讀に自然に背きたる傾嚮を生ぜむ。われは窃に謂へらく。青年文學の記者が用ぬし無聲的文字といふ語は讀體詩の別名とするに宜しからむと。

低級術と羈絆術とを過重すること勿れ

青年文學會は前途望多き會なり。われは今の進歩に障礙ならむことを願ひて、聊告ぐるところあらむとす。會の機關たる青年文學といふ雜誌に、文學者と時事とにつきての論あり。今の略にいへらく。文學を以て小説に限れりとなさば知らず。文學を以て韻文に限れりとなさば知らず。苟くも文字上に表はれたる人心の形象を以て、すべて文學なりとなさば、文學者には特に時事を研究する必

要あらむ。世人はよくは文學者を以て全く時事に關係せざるものとなし、往々時事の記録たる新聞紙を以て、最も重要な文學と見ざる傾ありといへども、これ等時事に影響せられて起るところの人心の變動は、新聞紙に依るにあらでは、容易く見ることを得ず。これ最も勢力ある著述の一つなるべし。これ卑猥なる小説と不熟なる韻文とは優りたる文なるべしと。われれもふに、文學を以て小説に限れりとするは固より非なり。文學を以て韻文に限れりとするもまた固より非なり。すべての吟體詩は小説にあらずといへども文學に屬したり。すべての散文の詩は韻文にあらずといへども文學に屬したり。されどすべての文字上にあらはれたる人心の形象を文學なりとして、新聞紙を最も重要な文學の一つとせむは、文學の義をあまりに廣く取り過ぎたるものにて、これがために青年文學會の進歩の多少障礙せらるべきは惜むべき事なり。故奈何といふに詩といひ、美文といふものは、今の吟體なると讀體なると、散文なると韻文なるとを問はず、皆自由なる藝術なり。史傳論策などに至りては、既に墜ちて羈絆せられたる藝術中に入れり。美文は何物にも役せらるゝことなく、史傳論策は事實のために使はる。かの新聞紙の文章にいたりては、事實のために使はるゝ羈絆術の最下なるものなり。美文は詩想と詩形とを兼ね收めたり。詩想と詩形とは並に是れ文學者を益するものなり。史傳論策などは主として詩想を含むことなし。その文學者を益するところは手法のみ、「レトリック」のみ。こは已に形に偏したるものなり。かの新聞紙の文章、殊にその時事を記したるものに至りては、已に想體の取るに足るものあることなく、今の手法もまた整ひたるもの少し。これ豈文學者を益するに足らむや。青年の士の學を修めむとするや、寸陰といへども尊むべし。苟くも文學者たらむとする用心あらば、宜く今の區域を狭くして、その造詣を深くすべし。自由術

なる美文の天地既に濶し。史傳論策を文視するは、既に一步を百尺竿頭に進めたるものなり。新聞紙の時事を叙したるものを文視するは、れうらくは的のあなたを射るに似たらむ。これ青年文學會員が文學に志す順路にあらず。われはもとより史傳論策を讀みてうの事實に通ずることを益なしとするものにあらず。然れどもこは事實を知るためにして、理學、化學、博物學などを修むるに殊ならず。馬史、盲史、賈生が論策などには、手法の上、「レトリック」の上より學ぶに足ること多しといへども、これは美文學のいまだ充分に發達せざりし世の遺物にして、或は史傳論策といふものゝ本體には外れたるならん。學海居士嘗て馬史を以て一部の小説なりとす。まことの史傳はかく小説らしくなるべきものにあらず、何處までも眞直に事實を傳ふべきものなり。論策も亦た然り。新聞紙は更にこれより甚きものなり。われは文學者に時事を研究する必要があるを知る。然れどもうの必要は、時事を叙したる新聞紙を文視する必要にあらず。唯時事といふものを其儘に觀察する必要なり。史家が圖書館に入りて古記録をあさり、小説家が居酒屋に入りて賤民の生活を覗ふに等しく、材料を採集する必要なり。われ青年文學會の新聞紙の時事を重んずるを見るに、これを勢力ある著述の一つなりといひ、世人がこれを目して最も重要な文學となさざるを惜むといふ。新聞紙の時事には勢力あるべし。然れどもうは文學上の勢力にあらず。事實の勢力のみ。造化の勢力のみ。これを重要な文學と看做さしめむとして、讀賣新聞の電報文を評し、時事新聞の社説文を品し、岩村知事が震災に遭ひしときの告示文の語を成さざるを賞して摯實なりとなすが如きは、(青年文學、地震と文學)分明に是れ文視すべからざるものを文視したる文學上の閑事業のみ。是れ恐らくは文學を修むる青年の面目にあらず。かるが故にいはいはく。文學者の人間を觀察し、事實を記憶し、

材料を採集するは、藝術の明に畫せられたる範圍の外にあり。文學者が美文にあらざれども猶文視すべき史傳論策を讀んで、抽象的に得べきところは、手法、「レトリック」などの如き低級藝術に過ぎず。かの美文にあらざる史傳論策を具象的に見るときは、縦令の文何程文視すべきところありといへども、畢竟事實のために羈絆せられたる藝術に過ぎず。新聞紙の文視すべきところは、これよりも少きを知らば、之を重んずるに過ぐることを非なるを知ること、れうらくは難からざるべしと。青年文學會の人々よ。願はくは美文を講究することを以て會の事業として、わが望に負かざれ。

悲中の快感

青年文學の記者は詩人の快觀といふものを論じたり。快觀とはこゝろよしと觀する義なるべし。文中大詩人を以て悲哀を快觀となすものとし、うのまさに然るべき故を示しつ。いはく。大詩人は何故に悲哀を快觀となすか。れもふに大詩人はうの情に在いて、悲哀の悲哀たる一大神秘を感得理會せるがゆゑに、悲きことも樂きことも、彼がためには均しく是れ快觀なり。大詩人は悲むべきことを喜ぶにあらずして、悲まざるべからざる大理由を解得せることの甚だ快きを感じざるなり。大詩人は樂むべきを喜ぶにあらずして、樂まざるべからざることを解得せることの甚だ快きをれもふなりと。(青年文學)

大西子は嘗て悲哀の快感と題して、悲哀なることを快く感ずる理由を攻究せしことあり。(國民之友)この攻究は文學上に限りたるにはあらざりき。この攻究は特に詩人の上に就いていへるにはあらざりき。いま藝術家の上に就いて、うの悲を快とするや、あらずやを問ひ、又藝術家の悲を快とすることある以上は、うの快とする悲は、すべての悲なりや、あらずやを問ひ、又藝術家の快とすると

ころはすべての悲にあらざるときは、うのいかなる悲を快とし、いかなる悲を快とせざるを問はむは、頗る緊要なる事なれども、我文學界にはいまだこゝに言ひ及びし人あらず。我文學界は所謂悲の中にて審美學上に用ゐらるべきものは何ぞといふ問題、即ちいかなる悲か美なるといふ問題を顧みしことなし。

われは所謂悲哀、所謂かなしみの總べてを美なりとするものにあらず。悲哀 Das Traurige と悲壯 Das Tragische とは固より分たざるべからず。大西子が文中にもこの別は多少見わたるが如し。二つの者の外に、猶可憐 Das Rührende あり、餘哀 Das Wehmüthige oder das Elegische あり。これ等の意義を一々詳に説き明かさむことは、こゝには必要ならねば、且くその概畧をいはむ。望絶にて身生きたるときは悲酸生ず。解くべからざる葛藤に逢ひて、望を絶ち身を殺すときは悲壯生ず。さまざまの感情相闘うて葛藤を結ぶときは可憐生ず。現時に多少の安心を得て、過去の悲酸を憶ひ、其間可憐なるところあるときは餘哀生ず。審美學者は悲壯、可憐、餘哀をば美なりとすれど、こゝに所謂悲酸をば美ならずとす。人の同情は純粹なる悲酸を快とするものにあらず。

われ思ふに人の藝術に對して、大西子がいはゆる悲中の快感を享くるは、藝術に美なる悲あるときのみ。藝術家たる詩人の詩中に入るは、美なる悲に限るべし。われは青年文學會が今一際深く詩人の悲に對する感を究めむことを望むなり。われは青年文學會が大詩人を以てことごとく水鏡先生と做し了せしを惜むなり。

遺傳的習慣

青年文學の記者は再び悲中に快感あることを論じていはく。吾人は人類の悲哀を快感せる一大事實

を科學的に解釋すべき力なしと雖、つらく古今人生の慘狀を見れば、また此問題もむづかしき事にあらずと信ず。この事實はまことに怪むべきに似たり。然れどもこれを吾人が悲哀なる人生の中に存在して、永く世界に横れる大悲觀を默識感受したる遺傳的習慣と看做すときはまた怪むに足らずと。(青年文學)

記者が前度の辨にて、大詩人が感得理會すべきものなりし悲哀の悲哀たる大秘密は、今度の辨にて人類が默識感受して遺傳的習慣としたる大悲觀となりぬ。

れもふに記者は、嘗て大詩人に賦與せし悲まざるべからざる大理由を解得する性を、いまは一般の人類に賦與せむとするものか。記者は此性を遺傳的習慣なりとして説きたれど、人類の遺傳は何故に悲感を悲感として遺傳せざるかは遂にこれがために解釋せられざるを奈何せむ。若し悲哀を快感する性は當初よりありて、人類はこれを遺傳し來れりといはば、此辨は悲哀を快感する所以を明にするに足らずして、僅に悲哀を快感する性の由來を累代進化 Phylogensis 上、若くは一代進化 Ontogenesis 上に於いて、後期より遷して前期に向はしめたるのみ。かの悲哀を快感する性の由來、若し前期にて容易に了解せらるべくば、うの後期にて容易に了解せられざるは何故ぞ。

記者のいはく。淡泊なる少年は悲哀の快感を知らず。閱歴愈多くして悲哀の快感を知ること愈深し。是れ習慣の濃淡の差のみ。吾人は快樂を得むために幾多の辛酸を嘗め盡したり。うの悲觀的事物に同感を表する豈他意あらむやと。

こは一代進化の上より悲哀の快感の由來を説けるなり。記者は同感を以て悲哀の快感を説かむとするものに似たり。現に同感に閱歴と共に深くなりぬべし。されど縦令快樂を得むために嘗めたる辛

酸にもせよ、辛酸は辛酸なり、悲哀は悲哀なり。若し悲哀の閱歴ありてこれに同感を表せば、何故に悲哀を悲哀として同感せざるか。閱歴あるために同感するものゝ何故に悲哀を快感するかは、遂にこれにて解釋せられざるを奈何せむ。記者はこゝにて僅に悲哀を快感する性の由來を、特に一代進化上に於いて、閱歴なき前期より遷して閱歴ある後期に向はしめたるのみ。此性の由來、若し後期にて容易に了解せらるべくば、その前期にて容易に了解せられざるは何故ぞ。

記者のいはく。若し吾人にして嘗て奈良の故都を觀、京師の遺趾を弔せし後に、平家物語、太平記を讀たらましかば、其悲哀の快感の量の多きこと、これを觀、これを弔せざりし人の上に出づべし。同情は歴史的觀念に關すと。

こゝにては記者僅に悲哀を快感する性の由來を、一代進化の上にて於て、特に非歴史的觀念より遷して歴史的觀念に向はしめたるに過ぎず。これも甲斐なきわざならむ。

記者は是の如く悲哀の快感の由來を彼方此方へれし遣りしかど、遂に其源を窮めずして止みぬ。われらの悲哀の快感の例として引けるものをみるに、皆純粹なる悲酸にあらずして、美なるべき悲哀なり、快とせらるべきかなしみなり。記者が引けるうちにて可憐にして餘哀あるものは、曰古戰場の文を讀むこと、曰哀江頭、荒村の詩を吟ずること、曰墓場にて追懐したる辭を讀むこと、曰琵琶行を讀むこと、曰朝顔日記宿屋の段を讀むこと是なり。その悲壯なるものは、曰マクベスを讀むこと、曰オセルロを讀むこと、曰敦盛に扮したる小次郎が殺さるる段を劇にて觀ること、曰勘平が切腹するところを劇にて觀ること是なり。

空論國

雲外子空論國を著す。(青年文學)の文に就いて、審美學に關する處を求むれば、紅葉、美妙、露伴、篁村、湖處子の小説の傾向を比べ擧げたる外に二條あり。其一は大西子が悲哀の快感の論を難じたるにて、其二は諛評を排せしなり。

雲外子のいはく。大西子は悲哀の快感を論じて數千言を重ねたり。悲哀にも快感ありといふことは蕃椒にも妙味ありといふと同じ理窟なり、一言にてわかる事なり。何ぞ數千言を重ねて博學を銜ふに及ばむやと。現に悲哀にも快感ありといふことを、蕃椒にも妙味ありといふことの如く、人にわからせむために、數千言を費したらましかば、大西子は人に笑はれなむ。されど大西子は悲哀に快感ある理由を心理上に論究せしなり。蕃椒といふ受用品に妙味ある所以をも、若し生理上に論究せば、れなむ長さの文を作ることも難きにあらざるべし。これが學問といふものなり。物理學はなくても水は水のづから凍り、舍密學はなくても鐵は鐵のづから錆を生じ、天文學はなくても日月星辰はれのづから天に麗れり。さればとて物理學、舍密學、天文學は廢せられず。受用品の事は生理上に研究せむことを要し、悲中の快感は心理上若くは審美上に研究せむことを要す。博學は銜ふべきにあらねど無學も銜ふべきにあらざるべし。

雲外子のいはく。昔の漢學者が互に詩文を褒め合ひたる筆法をば、今の文學界に持ち込み、批評といへば諛言をならぶることゝれもひ、直評を嫌惡すること蛇蝎の如く、批評家無用論を唱ふるものあり。常に君子は人の美を成すといひて、何事をも粉飾塗抹し、君子面して得々たり。是れ文學界の味者なりと。れもふにこは思軒居士の上をいへるなるべけれど、思軒居士が批評家無用といひしは、直評を嫌ひてにはあらで、直評なきを慨きてならむ。分に過ぎたる諛評は固より惡けれど、規

を踏えたる詆評も亦た善からず。彼も此も直評にはあらざるなり。君子らしくすといふことの形容に得々とは、これも珍らし。

逐日政治の外なる論、ことごとく空論といふべくば、なつかしき哉空論國。

「ポエトリイ」と詩と

綱齋子は英語の「ポエトリイ」と漢語の詩とを衡べ論じたり。(同好會雜誌)の要領にもへらく。支那のいはゆる詩は叙情的「ポエトリイ」なり。叙情的「ポエトリイ」に叙事的「ポエトリイ」と戯曲的「ポエトリイ」とを合せたるものを狭義の「ポエトリイ」とす。總べて詩想を表せる文章即美文を廣義の「ポエトリイ」とす。詩と廣義の「ポエトリイ」とは到底同日に論すべきものにあらず。詩と狭義の「ポエトリイ」とも一物にあらずと。

こは今までの詩といふものゝ上に就いては間然すべからざる言なり。

古來我國にて韻語の事を言ふものは、漢詩和歌と對して稱へたり。いまこれに歐羅巴の「ポエトリイ」を加へて、漢詩和歌歐羅巴「ポエトリイ」といはば、詩といふ字も、うたといふ言葉も、「ポエトリイ」といふ語も皆其處を得て、極めて妥なるべし。

わが柵草紙を出しはじめの頃より詩といふ語の意義をおしひろめて、廣義の「ポエトリイ」に用ゐたるは、多少の理由ありての事なり。世界に貫通すべき審美學の上より、自由藝術的散文韻語を統括すべき言葉を、我國に行はるゝ言葉の中より究め出でむとして、さる範圍ある言葉の所詮あるべきにあらざるを慮り、歐羅巴の哲學者が「ポエトリイ」(所謂狭義の「ポエトリイ」といふ言葉の意義をわしひろめたる例にならひて、こゝにてもある意義せべき言葉をたづね、其意義を廣くせば

やとれもひぬ。さて言葉をたづねむとするに、詩と歌との二語の外には然るべきものなし。歌といふ字の義はその字の孤立したるとき何の事とも辨へがたきまで區々なるに、詩といふ字はさる虞なし。是に於いて詩といふ字をこそ考へ定めぬ。この手段には或は妥ならざるふじもあらむ。

綱齋子が詩といふ意義を狭きまゝにてあらせばやとふ心の妥なると、わが詩といふ字義を廣くせむとする心の或は妥ならざるところあるべきとせば、我自ら知れり。妥なる保守手段の勝を制すると、妥ならじとおもはるゝ改革手段の勝を制するとは豫め知らむやうなし。

詩と「ポエトリイ」との論には殊なるところもあれど、われ嘗て統計と「スタチステック」の用語上の論をなして、「スタチステック」社の人と争ひしことあり。今は詩と「ポエトリイ」との事に就いて我より争を求めむとはおもはねど、争は進歩のよすがなれば、敵手あらむをりは、猶論じ試むべし。保守手段は妥なるは素よりなれど、あまりに極端までゆくときは、小説といふ言葉も、合生小説などいへるとき意義には殊なるべく、戯曲といふ字などにも妥ならざるところありて、随分繁雜なる争を生ずべしとおもはる。改革手段にもれなじやうなる弊あること、これも疑なし。

綱齋子が意に負かじとするときは、りの策二つあるべし。其一是「ポエトリイ」若くは「ポエジイ」といふ語を其儘に輸入することなり。こは綱齋子が自ら履行したるところにして、かの「スタチステック」社の「スタチステック」といふ字を其儘に輸入せむとするにおなじ。「ポエトリイ」若くは「ポエジイ」といふ言葉は實際にて國人の間に單行はすれど、叙情的「ポエトリイ」、叙事的「ポエトリイ」、戯曲的「ポエトリイ」などといふ重語は實際にて行はるゝにあらず。又學問上には「ポエトリイ」といふ語を廣義に用ゐたるを今の審美學の風潮にしたがへるものとすべければ、「ポエトリ

イ」といふ語を狹義のまゝにて輸入せむは、少しく舊物を輸入するに似たるべし。其二は「ポエトリー」を美文と譯して輸入することなり。こは廣義の「ポエトリー」に限るべきこと言ふに及ばず。美文といふ語をば早稻田派にても用ぬ、われも用ぬたり。されど叙情的美文、叙事的美文、戯曲的美文などいふ語は實際に行はれず。これに反して今の國人の間に叙情詩、叙事詩などいふ語は、随分廣く行はれたり。詩に「エビツク」を入れて、叙事詩といふは義をひろむること一步なり。これに戯曲をも入るゝは第二步なり。これに讀體詩をも入るゝは第三步なり。

近刊雜評

(明治二十二年より二十六年に至る)

報知異聞に題す

報知異聞出でたり。之を評するものゝ曰く。武談に似たりと。武談とは彼歐洲「ロマンチック」の胚胎せし所にして、マンチャの貴公子が愛玩して心を喪ふに至りしものか。又曰くジュウル、エルヌが稗史に似たりと。ジュウル、エルヌが稗史とは彼自然學の事を藉りて結構をなし流俗の眼を驚かしたるものか。又曰く。「ロビンソン、クルソオ」に似たりと。「ロビンソン、クルソオ」とは彼孤島に漂泊したる蘇格蘭の一水夫が傳を潤色して千秋の名を成したるデフォオが文字なるか。

武談の陋は固より言を埃たず。「ヒダルゴ」宅裡の一炬、これを焚くも憾なし。エルヌが幾卷の書、様に依りて胡盧を畫く、又何の趣をか成さむ。デフォオが「アアル、シイ」は奇なりと雖、之に繼ぎて出でたる蕪雜なる「ロビンソナアデ」幾十百種に至りては、僅かに以て童孩の戯具となすべきの

み。

龍溪居士は狂せるに非ず。余りの既に高閣に束ねられたる武談を學ぶことなきを知る。龍溪居士は窮せるに非ず。何を苦みてか又エルヌを學びて多作の誹を受けむとせむ。龍溪居士は老たるに非ず。恐くは又兒童のために書を著すがごとき閑暇なからむ。

余は則謂へらく。龍溪居士は一代の豪なり。胸間鬱勃の氣凝りて此一篇の文を成しとなり。森田思軒氏は深く居士を知るものなり。故に其言に云く。唯先生が平素大を喜び精を喜び理科の學を喜び一種の冒險やうの事を喜ぶ氣習相合して此に洩れ出でしのみと。此説は恐らくは報知異聞の神髓を得たるものならむ。

武談と云ひエルヌが稗史と云ひ「ロビンソナアデ」と云ふ皆一種の冒險事蹟を傳へしものなり。故に報知異聞は之に形似したるのみ。今の歐洲の文學者は、大抵皆ジュウル、エルヌを卑めり。其之を卑む所以は、蓋しエルヌが其小説の主人公を驅りて、或は蒼天の上を上らしめ、或は瀛海の下に下らしむるに、多く相似たる手段を以てし、その篇を成すに及びて之を見れば、渾て是れ自然學の演義に他ならざればならむ。又彼が大を喜ぶ心は精を喜ぶ心に伴はざればならむ。

龍溪居士は嘗て經國美談を著して一時を傾倒しぬ。若し居士をしてゲオルグ、エエルヌ一流の人物ならしめむか。其歴史小説の幾十種は相繼いで出でしならむ。而るに居士は此に出でざりき。其故何ぞや。居士が精を喜ぶ心は之をして然らしめしのみ。徳富蘇峰氏も亦此書の題言を作りて作者の平生を叙して曰く。君は他事に謹慎なるが如く文事にも極めて謹慎なる人なりと。亦以て徴すべし。余は知る縱然報知異聞は今の世に行はるゝこと經國美談の上に出でむも、居士は彼エルヌ輩

が爲す所に倣ひて、幾十種の科學的小説、若くは外國小説を製作するものにあらざるべきを。
 キクトル、ヨゼツフ、シエツフエルは文才横逸なりしが、「エツカルド」を作りて後筆を複釋に絶ち、
 「フヂゲオ」を作りて後筆を單釋に絶ちぬ。我龍溪居士の報知異聞に於けるも、其れまた是に似たら
 むか。

或は云く。小説は詩なり。報知異聞は果して詩として價值あるべきかと。嗚呼、小説は實に詩なり。
 而れども其境域は決して世人の云ふ所の如く狹隘なるものにあらざるなり。嘗て單釋の盛なるや、
 戯曲の分子は小説に入りぬ。日記「リリック」と尺牘「リリック」との盛なるに及びて、叙情詩の分子
 は小説に入りぬ。今や小説は萬般の詩體を容れて復拒む所なからむとす。エツアルド、ハルトマン
 の曰く。叙事と叙情と演劇との分子を融合したる「レエゼボエジイ」は其何れの部分の最力あるかを
 問はず、悉く審美學上に存立の權を占むる者なりと。「レエゼボエジイ」は讀體詩の義にして、ハル
 トマンは此語を用いて單複の稗史を總括し、以て「フォオルトラアグス、ボエジイ」の吟體詩に對せ
 しなり。報知異聞は今僅に其初篇の出でたるのみなれば、未だ其全局を視ふに由なしと雖、其詩天
 地の間に於て一版圖を開くべきは、余の毫も疑はざる所なり。

掘出し物を讀みて

掘出し物は實に近世の掘出し物なり。竊に今の小説世界の有様を見るに、奇を探り巧を弄し、美術
 の神髓をば何時しかに打ち忘れて岐路に迷ふもの、滔々として皆是なり。西洋小説の事を言へば、先
 づ指をジユウル、エルヌの萬有學的小説に屈し、空を翔り水に入りて、纔に讀者の喜を買ふことを
 怪まず。ゾラに隨ひて行潦の波を揚ぐるあれば、ツルゲニエフを摸して青林の間に徨ふあり。彼書

は面白しとは、彼書は吾神經を刺戟すること甚しといふに外ならず。此書は面白からずとは此書に
 は盜賊、奸淫、人殺し、自殺等の道具立少しといふに過ぎず。是れ多くは美術中に美術の目的を求
 めずして、徒に暗中摸索の弊に陥るなり。然るを篁村君は鷄群の一鶴、卓としてりの間に立ち、此
 冷淡なる小説を書かれたる膽力、驚くにも猶ほ餘あることどもなり。

扱次に述べたきは、今の世に喧き悲哀小説と滑稽小説との別にて、掘出し物のこの小説分類に對し
 て占むべき位置は奈何といふことなり。先づ小説家に尋ねたきは、小説を悲哀と滑稽とに別つこと
 の必要は何處に在るかといふことなり。人の行ふことには泣くと戯ると外は小説とすべきものなし
 と思はるゝにや。察するに悲哀小説といひ滑稽小説といふ語の出來しは、西洋の「コメデイ」と「トラ
 ゲデイ」の別より變化せしなるべけれども、これさへ多くは歴史上の意義あるのみにて、達識の
 人は決して渾ての戯曲傳奇を此兩種の鑄型に嵌めんとは想はず。「ドラマ」と「ジャウスピイル」の
 中には、何方にも屬せざるもの多し。又「トラゲデイ」を悲哀小説と譯することの僻事なるはいふ迄
 もなく、これを悲哀戯曲といはんも未だ妥ならず。悲壯戯曲といはばや當れりともいふべし。此文
 字の中には哀なり、悲しといふ様なる意義主位を占めたりとは見ぬものをや。(悲壯戯曲を節略
 して悲劇といふは悲哀劇といふとは殊なり)余は將に曰はんぞ。掘出し物は滑稽小説と名けらる
 るを嫌ふものなり。また悲哀小説と名けらるゝを嫌ふものなり。然る我儘なる寸尺にてこの小説を
 度るは固より理なき事といふへし。

余曾てアルキングの作りたる海外の掘出し物ともいふべきラルファアト、エツバアを讀む。四郎太
 郎の事は實に彼のエツバアに髣髴たり。唯エツバアの黄金の夢は結末までも其夢たる性質を失は

ず。四郎太郎の夢は眞個に金筐と化したり。されば東西の小説に通ずる讀者はアルキングが都會の村落を侵すといふ社會變遷の根基の上に組立てたる意匠を愛する餘、金筐は出でずもがな、矢張りアルキング流に、街道開けて田畑に價値を生ずる位の落にして欲しかりしものを杯と云はんも計られねど、亞米利加のアルキングは亞米利加のアルキングなり。日本の箕村は日本の箕村なり。わが箕村子をしてアルキングたらしめんとするものあらば、是れ局量の狭き人と謂ふべし。かの東坡を崇めんとて、淵明を拙才といひし杯は、理かは知らねど、何となく穩ならざる所あり。宜なるかな東坡のこれを削去りしこと。

露小袖の評を見て

忍月居士の露小袖の批評出づ。この批評は余が得て批評する所にあらず。幸に余が露小袖の批評を批評すと題して此文を草せざるを怪むこと勿れ。吁嗟、露小袖出でたる後に批評と題して之を論せしは足下一人のみ。云く。此書は無常を示したるものなりと。天晴なる言かな。而れども余居士に請はむと欲すること一つあり。曰く居士願くは唯一篇の無常を示さざる小説を示せ。

小野篁に就きて

聊齋志異など譯せむこと、文章めでたくは、頗興あるべし。されどかゝる著にはうの翻譯なるをことわるかた宜からむ。三味道人はさきに都の花に仙人巖掘鑿といふものを出しを見しが、今又此譯あり。趣向は原作のまゝにて、桂府蓮花の一聯さへあり。其文は頗高雅なれど新著百種といふものゝ趣意には適へりやあらずや。

少年文學に題す

奇獄小説に讀む人の胸のみ傷めむとする世に、一卷の稱物語を著す。これも人眞似せぬ一流の心なるべし。歐羅巴の稱物語も、多く波斯の鸚鵡冊子杯より傳はり、其本源は印度の古文にありといへば、東洋は實に此可愛らしき詩の家元なり。あはれこゝに染出す新暖簾、本家再興の望を達して、子々孫々迄も卷を重ねて榮々よかしといふものは鴈外漁史森高湛なり。

春雨傘の評

春雨傘は歌曲の名にて、曉雨といふ俠客の上をうたふ。櫻癡居士の傳を作りてかくは名づけしなり。この書は詩人の手に成りたる技藝品として價あるべきものにはあらず。奈何といふに通篇いはゆる講釋種のかきなほしに過ぎずして、作者の製作となすべからざればなり。然はあれど今の世には製作のきはめて拙くして、印刷に附するだに無益にれもはるゝ小説頻に出づるがために、これを厭ふものやうやく多くなりゆき、うの反動は歴史の流行となり、實録らしきものといへば、何のれもしろ味もなき記事も人によるこび弄ぼるゝに至りたれば、かゝる書の行はるゝこと怪むに足らず。うのれこなはるゝは固よりかの所謂講釋の速記と同行はるゝなり、さて講釋の速記とこの書とを比ぶるときは、われ櫻癡に左袒することをたゆたはざらんす。講釋にもその物語の組立巧にして、これを速記したる文よみづからぬもなきにあらず。邑井一の講釋の如きものは是なり。然れども概していふときは講釋師の癖として、言葉をやまひ、故實をたかへ、知らぬことをもしり顔に無用の辯を費すを以て、少く字を識るものはこゝろよくその速記を讀むこと能はず。そのこれを讀みて厭はざるものは、趣味に乏き人たることを免れず。今この書は流石に一種の文章に長じたる櫻癡の筆に成りたるなれば、これを繕くもの別にいやなる思をなさずして、物語の筋を知ることを得べし。

これこの書の取りどころなり。或人のいはく。さらば百花園の如き速記を讀むものをば、悉く趣味に乏しとすべきか。答へていはく。必しも然らず。百花園には上にいへる邑井が講釋など讀むに堪へたるもの少からず。又圓遊を知りてうの落語の速記をよむときは、圓遊が一種の態度、西洋流にていはく言葉の表情術宛然として目の前に在るが如し。これ速記の能くしからしむるにはあらずして、速記の文字に喚び起されたる讀者の記憶のしからしむるなり。譬へば見せ物見て歸りし人の怪しげなる莖蕪ばんの圖を開きみて、枚のれが嘗て見しところをれもひ出すが如し。これも速記の功ならんか。彼の定席にゆきて樂む人に至りては、上にいへる言葉の表情術を買ふが本意なるべき筈なり。若しわれは物語の筋を知らんがために往きて聴くといはく、誰かこれを憫み笑はざらん。わが講釋の速記をよみて厭はしくれもはぬ人を趣味に乏しといひしは、これを見ること詩人の手に成りたる技藝品に等きを笑ひしなり。われ豈百花園のごときものもすべての價値を排棄せんとするものならんや。春雨傘には處々徳川時代の開明史的事實を釋きわけたる自注やうの文あり。札差また藏宿とは旗本家人等が俸祿を御藏より受取るための用途にして、その銀行をも兼ねたるものなりと云へる、振袖新造は引込新造とも唱へて、つき出しまへの十四五歳なる禿に振袖を衣せ、或は主人の手許にれき、或は全盛なる大妓にあづけれくものなりといへる、内證とは妓樓にてうの主人の居所をさしていふと云へる、畑部屋とは新造禿どもの起臥する間にて、病室にも用おらる、或人は看病部屋の略語ならんといふと云へる、御譜代席は家督相續なれば他人にゆづるべきものならねど、養子の名義にて賣買したることあり、御抱席の方はうの身一代か、へいれの譯なれば、老衰又は病氣のときは暇をいだし、番代としてうの子弟を抱へいるとなり、番代は苗字をも改むることを得き、後には

この制いはゆる株の如くなりて、與力千兩御徒五百兩など申しとなりと云へる、是等みな考證などいふべき程の價ある言葉にあらずして、折々はうるさくれもはると雖、今の年少き讀者には無用なるにもあらざるべし。春雨傘の文中曉雨が言葉を叙すること、作者の同感すくなからざるにや、文章暢びやかになりたるを覺ゆ。曉雨が女郎買の論に、女郎は惣ごう架なり云々。文章の上にてかゝる言葉に逢ふは露伴の水がらくり以來なり。イブセン、ゾラの輩もこの類の比喩には舌を巻くべし。

少年學士の序

明治二十三年の事なりきと覺ゆ。千駄木なる器堂居士が家にてはじめて堤定次郎氏と相見き。佛語に通じ漢詩を善くすることは、其時に知りぬ。今月九日堤氏我觀潮坂の上なる新居をれとづれて、持て來たる少年學士の稿本を示さる。少年學士はもと佛人クロオド、キニオンが西曆千八百五十八年に世に出し、實世界譚の中の一編なり。キニオンが書に序していはく。わが畫ける人物は必ずしも奇偉ならず。わが寫す境界は必しも幻怪ならず。われは唯實世界に此の如き事あるべしと思はるゝところを書きあらはすのみ。されどわれは今の實際派の作者の眼もて世界を視ること能はず。人の性には善き側と惡き側とあり、又清き側と汚れたる側とあり。人は天使にしてまた禽獸なり。われは實際派の作者が人性の惡き側と汚れたる側とを寫出して、人間を禽獸の如くするを嫉めり。かくては神の再び洪水あらしめざるを訝るに至らむといふ。れもふにキニオンは小説を作ることの藝術たる面目をば、深くも究めざりしが如くなれど、うの議論は頗る妥にして、うの著作は讀む人に利益あるべし。堤氏は彼の實世界譚の内より少年學士の一編を撰り出で、人物と土地とを我國に寫しかへしを、こたび博文館の主人請ひ受けて、少年文學といふ叢書に收め入るべしといふ。これを讀ま

む少年は卷中の少年學士が經歷によりて、世途の艱難をれもひやり、その艱難を排して身を立んとするには、學殖をかるべからざるを悟りて、いよく勵み、いよく勉めて、堤氏が之を譯述したる志をあだになせう。夫れ歐文を譯するは難し。かの國の事を我國の事に書き代ふるはますます難し。堤氏が能くキニヨンが文を譯し、能く佛國の事を我國の事に書き代へて此面白き一卷とせしを思へば、その能事はひとり佛語に通じ、また漢詩を能くするのみにあらずりき。われは堤氏に交はることいよく久うして、堤氏を識ることのいよく深くなりゆくを喜ぶ。

こわれ指環の評

女學雜誌に出でたるこわれ指環といふ小説、たしかに一種の見どころあり。作者はつゆ子とのみ署して、まだ何人なるか知れぬぞ、女學記者は始めて小説をつくりし一女史なりとて紹介しぬ。

原來小説を作ることは、美術上のことなれば、そのつから多少の技巧を要す。れもしろくもあらぬ事を綴りても、大家の技巧は見ゆるものなり。こわれ指環はほとんど技巧を度外視したるやうに見ゆ。さて此小説は技巧を顧みざるわりに甚善く出来たり。技巧なくして、かくまで善く小説を書く人の技巧を得たらむ後の作想ひやらる。こわれ指環には行爲といふべきもの極めて少し。唯支那風の教をうけし少女、情婦ある男の妻となりて離婚を遂げきといふのみ。そのれもなる處は叙情的なり。叙情的なる處の中にて、尤も人を動かすは、夫の夜酔ひて歸り、妻を責むる一段なるべし。また末にモニカの事を引きしも甚好し。文は所謂言文一致體にて、美妙齋などの如き一種のたしかなる文法あるにあらず、また嵯峨の屋主人の如き修飾あるにあらず、めづらしく自然に近き言葉つきればし。文の疵瑕とすべきは假名の誤、てにをはの失などこゝかしこにあることなり。これ

等は言文一致體なりとて、忽にすべからず。

學園花壇の評

卷のはじめに、麗水の再生豫讓あり。稻葉一徹を親の讎と視ひし下部の事を、上下篇にものしたるなり。漢文の分子多き書きぶりなるは、この作者の常なるべし。快く讀み過したり。思軒に笑はるやうなる文字の使ひざまも見ぬぞ、これを手柄といはば、作者喜ばざるべけれど、これだに今の世にはめづらしきころ是非なけれ。次は乙羽庵の高利貸なり。吝嗇といふ金かしの男に怨ある癩病の床よりぬけ出で、夜半に山路をくるひめぐり、吝嗇が家の前にて消え失すところを寫し、それより吝嗇が家の故なく火をいだして焚くるさまをしるしたり。讀みゆくまゝに何となくまことしからず思はる。病の牀をぬけ出づるやうな指を噛みて障子に、浮世にあきはて申候と書けりといふなど、その甚きものなり。文章は調はざるかたなり。言葉のうち處處々といふ呼ぶをを用いたるところ、多くは意外なり。若き茶屋をんなの言葉に、ふざけなさんなど云へるなど、無念といふべし。假名づかひ天仁波しどろなり。文字のあやまりも少からず。痰の事をしるすこと、必ず疸の字を用いたるなど殊に目立ちたり。次は蠶書架といふ上中下三篇のものなり。作者は思案外史といふ。視學官らしき人の收賄を寫したるものなり。乙羽庵に比ぶれば罪深く巧みたるところなきゆゑ、善き方なり。官吏と老妓との對話もひの外にととのひたり。下男平助が學校の改革を罵るところ、諷刺としては聞き取りにくし。奈何といふに肉ふとき實語教、商賣往來の文字を讀ましむるには差支なかるべき藁葺の講堂も、今の小學讀本を照すに足る程の日光をば受けざるべく、又昔の寺子屋づくゑにてかゝる細字を讀ませば、田舎の子供ことごとく近視になり果つべければなり。次は花

瘦の青山狐なり。こは舊き話を新に書きたるものなり。手柄も見ねど難もなし。次に金舟居士の深山櫻といふ上中下三篇の作あり。西郷隆盛の侍女つたといへるを主人公とす。兄は官軍の下士にて、隆盛を刺さんと妹をかたらへども、恩義をたもひて諾はず。兄怒りて劍を把り馳せいつるを、妹うしろより銃にて打殺し、尼となりて亡跡を弔ふ。始終院本めきたる書きざまなり。思ひ深めたるふしもなければ、口さがなき人は筋がきめきたりともいふなるべし。次に漣の名物京女郎あり。きれくくの「スケッチ」三篇なり。本箱より出でしにもあらず、机の上にて生れしにもあざざるが取りどころなり。文章さすがに讀苦からず。市川新藏の新刀正宗は近江守助直が名高き刀鍛冶となる因縁を叙す。新藏が筆浪六に似たりといはゞ名譽なるべく、浪六が筆新藏に似たりといはゞわれうの名譽なると否とを知らず。文章淨瑠璃の集句と見ゆるは作者俳優なればか。逝水庵の累御前は式部官何某の妻のいと醜きが嫉妬のあまり罪なき夫に辱を與へたる話なり。文章頗るあやし。角地面引廻しと云ひ、家のさかんを千歳とことぶくと云ひ、富の柱の太く逞きと云へるなど皆一頁のうちにあるを拾ひしなり。かなしくも詮なき世やわが身の恨めしきといふがうの結句なり。この間に露伴の當世文反古はさまりたり。國會に出でしときより誰も知りたる作なり。いかにしてこゝにはまぎれ入りたるにか。終に浪六の千利休あり。これ此寄席のしんうちならん。文學界といふ雜誌に出でしれなむ題に比ぶれば、議論のうるさからぬをこの方の勝とすべきか。

天鼓

近松が淨瑠璃天鼓は、文學資料の首巻として、三々文房より出でたり。文房は新文學を興すに、古文學の力を借ることの必要なるをおもひ、古文學上價值ある書の埋没せられむことを歎きて、文學

資料といふものを編むといふ。此巻には作者近松門左衛門が傳を添へたるが、こは全く聲曲類纂のみよりたりと見ゆ。さるにその出處を示さざりしは、編者のために惜むべきことなり。故奈何といふに、前人の立てたる傳を取りて、その出處を示さざるは人の功を奪ふに近く、名譽を重んずる編者は、いたくかゝることを嫌ふものなればなり。本文は誤植れもひの外に少けれど、假名は正しからぬところ多し。節付したるものにもあらぬに、第一紙面にねろしなどいふ符標のその儘存したるは校合の疎なりしためなるべし。同題の謠曲を後に附したる注意は好し。

和文消息全書

小田清雄氏の編みたる和文消息全書一卷、大阪國文館より出でたり。こは古の消息文と、今の消息文を古ぶりの國文に譯したることを、本文に掲げ、その傍に今の俗文の譯をしつつけて、對照したるものなり。その基づくところは、藤井高尙の消息文例、聽雨庵の消息文梯、黒澤翁滿の雅言用文章、消息案文前後兩編などなりと、凡例にことわられたり。評者はこの消息全書に見わたる如き和文、即ち古ぶりの國文を以て、今より後の消息體とせむとするは、到底行はるべからざることを信ず。文例の中には、古歌の句を引きたるなど多かれど、かゝる文章の飾は、人々その古歌を諳んじたる時代ならでは殆無用に屬すべし。評者の交遊中、落合直文君または小中村義象君などのつねの消息を見るに、國文の法格をば、いと嚴重に守りたれど、今の世に廣く行はるる言葉を用ひて、諺なども耳近きを引き、何人にも誦し易く解し易きやうにもせられたれば、この和文消息全書の文例とはいはく殊なり。これにても新に國文消息體の作らるべきことは知るべからむ。うをねもはで、徒に古ぶりをのみ慕ひて、此文例にならへといはむは、時の變遷世の進歩を知らざるに近かる

べし。然はあれど、小田氏か前人の國文消息體に關する著書を集めて、一卷とせられし功は、我文學のために没すべからず。この書の文例、縦令たゞちに模範となし難しとなさむも、新體をかゝむ人の參考にはなるべし。されば近ごろ多く世に出づる射利の著述など一様に觀るべきものにあらず。

作文初問 合卷

三之選

縣孝儒の作文初問と瀧鶴臺の三之選とは、こたび長周叢書の中に編込まれて、合卷となりて印行せられたり。縣孝儒とは物徂徠の門に其人ありと知られたりし山縣周南がことにて、その作文初問は古漢文を作る人のために著したるものなり。前に評せし和文消息全書の序に、外つ國よりさまざまの教どもわたり來し以來は、むつかしげなる文字もことばも出來て、近ごろになりては、こと更に人心れたしからず、ものいふさまも論議がましくて、かきかはすふみも、からもじをすくめ、横文字をまじへて云々と歎きたるやうなる眼孔にて見ば、古漢文を作る法などは、この國文再興の時代に必要ならずともおもはるべけれど、評者が意見は然らず。今より後の國文は、消息にもあれ他の體にもあれ、漢洋の文章、言語より出でたる分子をもほどよく調和して、本來の法格をみださざるやうにすべきものなれば、作文初問の如き書の翻刻も亦止むべからず。近ごろ獨逸にて高等中學（支那人の所謂任學院）の希臘羅甸文の科程につきて、一場の争を起したるを聞くに、希臘の古文を愛することあまりに深き人は、生徒にこれを作らせむとし、時の變遷世の進歩を知る人は、唯これを讀ますのみなるは可なれど、これを作らするは益なからむと云へりとぞ。獨逸にての希

臘羅馬の古文は、恰も我邦の古漢文の如し。これを作る必要は最早あらじとれもはるれど、これを讀む法をば知らざるべからず。これを讀む法だに知りたらば、今より後國文を作るに當りて、漢文の分子を正しく用ゐることを得べし。此目的を達せむには、作文初問の一書、頗る益あり。且つ作文の法には、國文、漢文を通じて行はるべきもの少からず。周南が書に衍語侈辭を戒め、脩辭達意の別を論じ、務めて陳言を去れといへるより、其篇法、章法、句法を説きたるまで皆是なり。唯うの摸擬を勧めたる處は、物門の弊習なれば、固より取るに足らず。山本北山が作文志毅などを讀まば、反對論者の言に理あるを知るべし。瀧鶴臺、名は彌八、はじめ周南に従ひて學び、後に服部南郭の門に入りし人なり。醫にして儒を兼ねたれば、當時多能を以て稱せられきとぞ。うの著三之選は、人の死生安心の説を問へるに答へたるものにて、所謂三之選は儒と佛と道となり。看雨隱士の跋には取捨折衷の語あれど、本文を見るに、取捨は或は有らん、折衷には至らざるにや。文章の上よりこれを見るに、漢文の分子を善く用ゐし國文にて、評者が望める今より後の國文に遠からざるものといふことを得べし。佛教をば漢譯によりて學びし人の文なれば、これより入りたる分子も亦漢文の外にはいず。

美術世界題言

法蘭西の鑒識家マクシム、ヂユ、カムが畫評の序に、近ごろ美術を好める國王ありて、これを興す策を或る賢き婦人にたづねしに、婦人唯これに愛せば可ならむと答へきといへり。この愛は省亭畫伯をしてこの美術世界を編せしめたるならむ。今余が歐羅巴の審美學を嗜みながら、某の君の宣ひし如く我國いやしむ心なく、喜びて一言をこの卷のはじめに題するも、豈亦美術の愛にあらずといは

もや。

烈真具に題す

獨逸の文を興したるものは新教の開祖にあらずや。第十六基督世紀のルウラル即是なり。獨逸の詩を起したるものは哲人ナタンの作者にあらずや。第十八基督世紀のレッシング即是なり。獨逸の文に通ずるもの誰かこれを快とせざらむ。このごろ麗粹子レッシングが畧傳とレッシングが宗教意見を記述してこれを世に公にせんとす。われれもふに今の我國の文壇には巢林子が後に戯曲なし。これハンス、ザックスが後に戯曲なかりし獨逸のさまに似たるなるべし。我文壇は實に一のレッシングを待てり。今の我國の宗教社會には浮屠の徒、浮屠の徒と争ひ、基督の徒、基督の徒と争ふ。これ新舊二教の、小派を立て、軋轢止むことなかりし獨逸のさまに似たるなるべし。我宗教社會も亦た實に一のレッシングを待てり。此時に當りて此著あり。獨逸の文に通ずるもの誰かまた之を快とせざらむ。

菩提樹畔逍遙の評

余が平生愛讀する所の小品文二篇あり。一を趙古農の恨々先生傳となし、一をシルレルの「リンデン」の下の逍遙となす。二家は海の東西に生れ、其境遇相殊なれども、上に擧げたる二文は、殆ど一人の手に成れるが如し。或はまた人をして古農のシルレルを譯したるか、シルレルの古農を譯したるかを疑はしめんとす。彼銷魂橋を夾める垂柳は、豈「リンデン」の林にあらずや。彼安樂窩無憂生は即是れエドキンにして恨々先生は即是れラルマルなり。シルレルの文は意匠緻密、古農の傳は楚々として筆を著く。各其妙處あり。而れども古農が所謂物態撩人、情因景觸、情之所寄、結而爲思、

思之不得、積而成恨といふ數句は、蓋能く之を盡せり。

古農の文は、夙に才人の傳誦する所なれども、シルレルの文は吾邦にてこれを知るもの罕なりしが、國民の友の藻鹽草に、吾醒廬主人といふ人の之を譯載したるを見る。余一誦して其獨逸語に達き才子の筆に成れるを知る。奈何といふに譯者が麗縛の文字は、人をして其翻譯の語たるを忘れしめんとするを以てなり。唯惜む、辭句の間猶原作の情を盡さざるものあることを。

因にいふ。所謂ラルマルは豈シルレルが自ら道へるに非ずや。奈何といふにラルマルの情婦をもラウラと云ひ、シルレルが擬定の情婦にて多く少時（西曆千七百八十二年の頃）の詩賦に見わたるもの亦ラウラと云へばなり。况や此「リンデン」下の逍遙も亦同時に成れるものなるをや。若夫れラウラの何人なるかに至りては古來諸説あり。或は以てマルガレタ、シユワシと爲し、或は以て大尉フイツシエルの夫人と爲す。然れども實は其人あるに非ずと云ふ説こり妥當なれ。

星亨氏の獨逸帝國の未來

星亨氏自由新聞の紙上にて、獨逸帝國の未來に關する意見を公にす。余其文中疑はしき箇條を擧げ、匿名にて問はむとせしに、星氏新聞社員某を介して、余が署名を求めらる。乃ち補綴再録して、これを自由新聞に出すこととなりぬ。

其一、獨逸人が人種統一の欲望

星氏云。獨逸人が其人種の統一を欲望するは一般の事にて文學の宗たるレッシング、ギョオテ、アルント等の如きは其詩賦に詠歌したることあり。問云。此所謂人種統一の欲望は、果して星氏の説の如くありふれたる者にて、誰も承認すべきもの歟。魯西亞人が「パンストラキスムス」の主義ありて、

西南の地方政治上に其痕跡を顯はすことの類なるは明白なれど、獨逸人に之に似たる「パンゲルマニスム」あることは、容易に窺知し難き様思はる。フランクフルト、アム、マインの國會時代に、當時の所謂大獨逸黨（グロオスドイツチエ）が澳大利を最負し、獨逸合併の方便に依りて、普魯西の威力を削らむとせしなどは、縦令彼右派の中に、獨逸國の興起を希望したる慷慨の士ありしにもせよ、直にこれを指して、人種統一の欲望とせむは、史眼あるもの、許さざる所にはあらざるか。又此大獨逸的思想は、アルントが詩には明なれど、レツシング、ギョオテ二人の詩に大獨逸的思想若くは人種統一の欲望ありとは、何の篇を指されしものか。

其二、獨逸と澳大利

星氏云。今や獨逸人が住居する國々は、プロシヤ、オオストリア、バワリヤ、キユルテンベルヒ、ザツクセン等の如き大國雄邦相互に屹然として對立し居れり。又云。普魯西、奧斯地、バワリヤ等の王國を廢し、以て獨逸の後圖をなすことを要す。問云。今澳大利何牙利帝國たる澳大利を、バイエルン、ザツクセン、キユルテムベルヒ等を併稱して、屹然對立の語をバイエルン、ザツクセン等今の獨逸國（ドイツチエス、ライヒ）の各部に及ぼし、其狀バイエルンが普魯西に於ける關係、恰も澳大利何牙利帝國が獨逸帝國に於ける關係と差別なき如くならしむるは、如何の譯にか。且普魯西、奧斯地、バワリヤ等の王國といふ奧斯地王國は何處にか。

其三、獨逸帝國の未來

星氏云。獨逸帝國の未來のために謀りて、獨逸人種を統一し、一政府の下に立て、再び乖睽離反の憂なからしめんと欲せば、普魯西、奧斯地、バワリヤ等の王國を廢し、都て郡縣となし、各自に自

治の制を立て、相聯合し、一政府を組織し、恰も北米合衆國の如き制度を布くべし。問云。此策は至極立派にはあれども、何者が何様にして斯くはするにか。彼西曆千八百七十年九月より十二月に至る間に、獨逸の諸邦が完結したる條約は、獨逸帝にバイエルン王（今の王オットオは精神病にて王子攝政を置けり）其外の獨逸國內の王者を廢し得べき權を與へしにあらねば、獨逸帝をしてこれを廢せしめんとするには、果して奈何すべき歟。又奧斯地王を澳大利何牙利の帝の事とせば、獨逸帝が澳大利何牙利國の帝を廢するには、奈何なる手段に出づべきものなる歟。右いづれも詳に辨明せられたし。

報知記者の人種相忌の説

報知記者のいはく。日耳曼の佛蘭西に打勝ちしとき、凱旋碑上に我國の人種、羅馬人種に克てりと題しぬ。夫れ日耳曼人種と羅馬人種と、相距ること幾何ぞ。而るに其異種相忌むが如き心あること斯の如し。歐人種の我邦人種を侮りて、條約改正の業など、阻格するも無理ならずと。われも久しく日耳曼に在りしものなり。歸途には巴里へもゆきぬ。然れども未だ嘗て彼の異種を以て我邦人を侮りたるを見ざりき。日耳曼人種は昔時トイトブルゲルの森にて、羅馬の驍兵を逐卻けしより、戰を言ふもの、殊にこれを擧げ相誇れり。今の佛蘭西に克つや、佛蘭西の民のまた羅馬派の語を操れるを以て、此語をなして、今の日耳曼人の古の日耳曼人に譲らざるを示さむと思ひしならむ。畢竟日耳曼人の羅馬寇を説くは、我民の朝鮮征伐にほこり、蒙古來襲を嘲ると一般なればなり。

されば日耳曼人が目中の羅馬人は、讎敵たる異人種なり、決して唯異人種たるのみの異人種にあら

ず。日耳曼人は羅馬人をこゝ憎みもすれ、縦令異人種なればとて、黒人種をも憎まず、黄色人種をも憎まず。豈彼の我邦人を待つに異人種を以てして、これを憎むこと羅馬人の如き理あらむや。又豈彼の我邦人を憎むこと、人種の懸隔甚きたために、佛蘭西人を憎むより甚しき理あらむや。日耳曼人は佛蘭西人をも、スラアウ人をも憎めり。其憎悪心の多少は、決して人種異同の奈何によるにあらず。歴史に基くなり。政治に基くなり。歴史上にも、政治上にも、今迄迄るまで關係なき民に對しては、愛もなければ憎もなし。譬へば支那人の如し。支那人は彼の笑諷の資となり居れど、愛憎あることなし。

若し日耳曼人、若くは其他の歐洲人の我人種に對する感情、條約改正の業を妨ぐる如きことあらば、其原因はこれを他に求めて可ならむ。報知新聞の言、あまりに皮相なりとれもへば、聊辨じたく。

想起錄

想起錄曰。安祿山の亂起り、馬嵬にて泣別をなしたる時は、玄宗已に七十一歳、貴妃も亦三十六七なるべし。若し正史に依り貴妃と戯れ遊ぶ六十以上の老天子を畫き出さば、或は人を驚かさむと。この想像甚面白し。愼夏漫筆にもななじ心をいへり。子路死于衛年六十七。楊妃死于馬嵬年三十八。人知子路之勇楊妃之美。皆以爲少壯。豈知老驥千里。雞皮三少。不可以常人律之。又云。世人或は玄宗貴妃の間柄は常に琴瑟を鼓するが如くなりしやうにおもへども、左様のみにはあらず。俗に所謂痴話喧嘩をなし、貴妃を里方に追返しとありと。按ずるに貴妃が送還せられしは天寶五歲七月と九歲二月との二度なり。一たびは以妬悍悍旨、一たびはまた以竊吹寧王紫玉笛旨とあり。悍妬不遜の四字は此二罪を盡せりともいふべきか。又杜詩を引いて云く。玄宗は楊貴妃を悦ばしめむ

とて、荔枝の生果を南方の熱帯地方より、早馬にて都に取寄せたること相違なきに似たりと。此事前人も詩を引いて云ひしことあり。妃已生蜀。嗜荔枝。南海味勝于蜀。乃今每歲馳驛以進。毋過宿。恐味敗也。故杜牧詩云。一騎紅塵妃子笑。無人知是荔枝來。

想起錄曰。日本の唐草は形西洋及支那のものに殊なり。而れどもこれを波斯及土耳其格のものに比ぶれば、大に相類す。恐らくは唐草も象嵌も彼波斯、土耳其格と同じ教の一時盛なりし西班牙などより傳へしならむと。余は此説を是非するに意なし。然れども一考を煩はしたきは象嵌又象眼といふ名なり。「タバコ」も「カステラ」も其由來する所によりて、稱呼せらるゝは、想起錄にも論せられたり。獨り象嵌は分明に支那の古語より出でたるに、支那より傳へずして、西班牙などより傳へきといふは、少しく疑ふべき所あるに似たり。縦令波斯土耳其格の品に倣ひて、其形等を変じたりとするも、これより先に支那より此術を傳へ、うの頃より象嵌の名あるにはあらずや。坤齋日抄云。宋趙希鵠洞天清祿集云。余嘗見夏瑠支。銅上相嵌以金。其細如髮。夏器大抵皆然。歲久金脫。則成陰窳。以其刻畫處成凹也。相嵌今訛爲商嵌。詩曰。追琢其章。金玉其相。筠廊偶筆云。少宰孫北海先生家。藏古玉劍一、魚腸劍一、又小劍一。上刻延陵季子之劍。以黃金嵌之。合而觀之。相嵌古之遺製也。邦俗作象眼。音之訛。當作相嵌。これに依りてみれば、支那にては古相嵌と云ひ、後に商嵌に作り、我に傳へてより象眼と訛りしに似たり。而れども又他説あり稽苑日抄の抄する所を見るに、云へることあり。通雅曰。元美曰。趙希鵠云。夏時器多相嵌。訛爲商嵌。用修以爲鑲嵌。智謂。本商嵌。蓋古謂刻爲商。商金商銀乃古之遺稱也。是れ商嵌を以て却りて、古しとするに似たり。而れども稽苑日抄の著者は商をも相をも取らずして曰く。按詩周頌。條華有鵠。釋文。鵠七羊反。本亦作鎗。鄭

箋云。鶴金飾貌。槍戟刺鏤商相。皆以音近、假借耳。是れ詩の鶴字を以て、相よりも商よりも古しとするなり。彼槍金、銃金などは張懷瓘が書録に出づ。唐草の如く髹器に嵌するなり。余は鶴嵌か、相嵌か、商嵌か、其新古を判すること能はずと雖、象嵌も象眼も、源を此等の語に發したることは明ならむとれもふなり。象嵌の支那語に出でたるを信するなり。此術別に鈿金、簡金、陷銀、鏤金の名あり。鏤は亡范の切。序なれば記す。

想起録曰。天麩羅は西洋語らし。されど山東京山が隨筆によれば、利助といふもの天竺浪人にて、ぶらりと江戸に来て、作りはじめしより名づくといふと。作者は京山が説を引きて、信夫恕軒氏の天麩羅説に及ばざること、のこりをし。信夫氏曰。都下製油磁。曰天麩羅者。指不遑樓。適緡黃一正事物紺珠。饗食部有塔不刺之目。曰用葱椒油醬熬熱。後下鴨或鵝鷄。燉火養熱。乃知唐山亦有此物。而我所謂天麩羅者。蓋塔不刺之誤也。

想起録曰。停車場の英語「ステーション」なるに、我俗「ステーション」といへるは、「ン」字の顛倒なり。これに似たるはさかつきの酒注にて、さかつぎなるべきを、顛倒したるとれなじ趣ならむと。げにも「ステーション」を「ステーション」といふ俗轉は、作者の言の如し。此轉法は諸國に言語沿革上の類例多く、語法家は希臘語にて、これを Metathesis といふ。

國語にてかゝる轉化を被ふりしは、つごもり(月隱の意にて晦なり)をつもごといふなどなり。又あぶら(油)をあるば(加賀方言)、ちやがま(茶釜)をちやまが、まないた(俎)をなまいた(東京其外の方言)といふも珍しからず。

さはれさかつきをさかつぎとの考は、當れりともれもはれず。故いかにといふに、若さか注ぎといふべきや。ふべけむや。

讀醜論

審美學上の問題、頻に世間にあらはれて、エヅワルト、ハルトマンの名盛に學者の間に稱せらるゝに至りしは、喜ぶべきことなり。今國會紙上に出でたる石橋忍月君の醜論も蓋其一つなり。君が醜論は既にハルトマンを祖述すとの事なれば、定めて彼が文撰の第三卷下半の二百八面より以下を根據とせらるゝならむとおもひしに、君は却りて其上半の醜論沿革を取られたり。余は此處にて君が所謂祖述の文を以て、ハルトマンが原構に比較し、聊安評を試みむとす。

ハルトマンがシュレエゲルの醜論を評するや、以爲らく。シュレエケルは其所謂不整といふもの即ち醜の一邊を論じたること比較的に深かりき。(ungehender の字に注意せよ) 是れ醜の他の一邊即狹義の醜と區別せられしものなりと。祖述者は即ち曰く。氏(シュレエゲル)は醜の全體を論ぜずして、其一部を論じたるに過ぎずと。按ずるにハルトマンはシュレエゲルが醜の全體を論ぜしを認められども、其論醜の一邊に詳にして、醜の他の一邊に詳ならざりしを指斥せしなり。ハルトマンは決して忍月君の如く醜なる評をなしることなし。余はハルトマンが是の如き應援を得たるに驚き、又シュレエゲルのためには、是の如き醜評に逢ひたるを悲まざること能はず。忍月君は

シュレエゲルが醜を「不快なる悪の現象」といひて、「愉快なる善の現象」に對せしやうにいはいはれしが、此譯語哲學上には大に妥ならざるところあり。シュレエゲルが醜を以て悪の不快なる現象 *die unangenehme Erscheinung des Schlechten* とせしは、惡にさきく、の現象あるべき餘地を存じて、その不快なるものを指したるなり。善の快なる現象の美たるべきも亦同じ。若し忍月君の如く不快なる悪の現象といふ字を用ゐるときは、不快を以て、悪の現象といふものゝ形容なりとも認得べく、又惡を以て不快なりと認め、うの不快なる惡といふものゝ現象を醜としたりとも認得らるべし。是れ哲學上に許すべき用語にあらず。君が祖とするハルトマンは決して此の如く前儒の言語文章を變更して、これを誣ふることなかりしなり。

忍月君云く。氏(シュレエゲル)は缺美即ち虛無、單獨音、無精神等を美の正反對(不調和、森云く此三字は原註なり)に置き、これを稱して醜なりといへり。こはシュレエゲルを誣ふること甚しきものなるべし。故奈何といふに、第一、シュレエゲルは決して缺美を以て美の顛倒對 *conträre Gegenatz* に置きしことなければなり。彼は缺美をも醜の範圍内に置きしが、缺美と美の顛倒對とを一器に盛らむとせざりしことは、本集につきて觀るべし。故奈何といふに、第二、シュレエゲルは美の顛倒對を以て醜の主位に据ゑ、缺美に至りては、僅にそのこれと相伴ふことを許したるのみなればなり。ハルトマン曰く。美の顛倒對(原註、*das Hässliche*)と共に、彼(シュレエゲル)はまた美のたゞの闕乏を醜とすることを許したりと。シュレエゲルいかに愚なりといへども、空虛(忍月君の虛無)平板(單獨音の譯は當らず)無神などを難調とはいはざるべし。是を誣妄なりといふといへども、誰か復これを咎めむ。

忍月君のシュレエゲルが不整といふものを説明するや、理想的圓滿の缺乏(即ち不整の一)の弊は、玆に器械尊敬的の唯理論、戲樂師的の技術品を生ずといへり。この處なか／＼理解し難し。ハルトマンの書には理想性イデアエクトの闕乏より自然派 *Naturalismus* 起るといふことあり。自然派は唯理よりは、唯物の方ならむとれもへど、誤寫若くは誤植のためにかくなりきとあらば、復論するに足らざるべし。理想性の闕乏より生ずる戲樂師的の技術品といふもの、是亦怪澁甚しき語なり。ハルトマンの文には理想性の缺けたるより妄に力を弄ぶやうなる僞技術 *virtuose Kunstlei* 起る *es sich* あり。妄に力を弄ぶもの、未だ必ずしも戲樂師にあらず、僞技術も亦技術品にあらず。是れも辨せざるべからず。

忍月君は又シュレエゲルが客觀性に背きたるための不整の事を論ぜしを引きて、彼が客觀性に反したるの破戒に至つては、其弊終に技術家をして、促進卑賤の主觀性を養はしむるに至るや必然なりといひきと書けり。是亦シュレエゲルの夢にだに知らぬことにて、君はこの援引をなして三種の誤謬に陥りたり。第一、シュレエゲルは客觀性に背く過をなすに至るは、最後に(これは前解あるためにいへり)技術家の發表せむとする傾ある主觀性ありてなりといひしなれば、技術家の主觀性を因となし、忍月君の所謂破戒を果となす。然るに君は、彼破戒の弊、主觀性を養はしむといふ。是れシュレエゲルの因とせる主觀性を果として、うの果とせる破戒を因としたるなり。蓋君は因果の顛倒をなして、自ら曉らざるなり。第二、原來技術上に客觀性を失ふは技術家に主觀性あるためにて、この主觀性は既存的なり。然るに忍月君は彼破戒を以て、翻て此性を養ふものとす。是れ存と生との錯誤をなして古人を誣ふるなり。第三、シュレエゲルは發表せむとする傾ある *(sich vorlaut*

sein) 主観性といへり。其意蓋技術家の技術品を作るに當りて、うの我といふもの、知らず識らざる間に、製作の表に顯れむとするを指したるなり。忍月君は則ち此性を以て、促進卑賤なりとす。是れ義理に於て通ぜざる形容詞なり。

シュレエゲルが今の技術の原素を美の裡に求めずして、却りて特性あること、面白きこと、及び哲理的なることの裡に求めたるを擧げてハルトマンはシュレエゲルの狹義の醜、即ち不整に非ざる醜の、かくまで重要な地位を占むるに至りしを歎ぜり。忍月君は此事を祖述せんとて、氏(シュレエゲル)は現今の所謂技術なるもの、原理を美上に置かずして、天性、刺戟、哲理等の上に置きたれは云々といへり。是亦不通の言語なり。今の技術 moderne Kunst とは古の技術 antique Kunst などと對する技術のことにて、これを現今の所謂技術などと、技術といふもの、現今の意味のやうに譯すべきにあらず。特性あること Das Charakteristische といへば、必ずしも天性にあらず。天賦にあらずべきにあらざり。特性あること Das Charakteristische とは人の興を引くことは、未だ必ずしもらざる特性は甚多かるべし。面白きこと Das Interessante 又は人の興を引くことは、未だ必ずしも所謂刺戟其物にあらず。哲理的なること Das Philosophische は未だ必ずしも哲理其物にあらず。況や原理を某の物の上に置くといふこと、既に不通なるをや。

次にハルトマンはシュレエゲルが今の技術の原素たる面白さの二岐に進みゆきて、一面には刺戟すること、激動すること、を形成し、一面には枯淡と粗暴とを形成し、粗暴の極は冒險的、嘔吐すべきやうなること、又は殘忍となりて、斯く自滅せざることを能はずと説きしことを引きたり。忍月君はこれを祖述して曰く。此刺戟の原理は其發達と共に、終に冒險、汚穢、慘酷の間に歸着するが故に、氏(シュレエゲル)は自説の自滅を確めたるものと謂ふべしと。刺戟の原理とは、面白さの事なるべ

けれど、面白さと面白さの發達とが、共に冒險、嘔吐すべきやうなること、殘忍などならむ由なし。シュレエゲルは面白さの一方に進みゆきて形成する(Forbildung)もの、一つを粗暴となし、粗暴の流れて(anstreben)冒險以下の三つに歸するを説きしのみ。且つ忍月君が氏(シュレエゲル)は自説の自滅を確めたるものと謂ふべしと書せしは、忍月君自己の判断なるか、或は然らずしてハルトマンが判断を祖述せんとしたるものなるか。余はハルトマンが決して此の如き判断を下さざりしを知れり。ハルトマンが文中の自滅(sich selbst vernichten)は面白さといふ技術の原素の自滅なり。うの自滅はうの進みゆきて形成するもの、うの流れて到るところにて免かるべからざるやうになるなり。獨り忍月君は自滅の語を以てシュレエゲルの説に嫁し、其自滅を確めたるをシュレエゲルなりといふ。豈冤ならずや。忍月君はシュレエゲルが自説の自滅を確めたりといふことを、故なく判定して、さて語を繼いでいはいはく。是に於いてや、氏が最得意とする、氏一個人に取つて最良好なる意見も、不忠ものとならざることを得ず、何となれば美と醜とは分離すべからざる表裏交存的關係を有するものなればなり。シュレエゲルが自説既に自滅を招きしほどのものならば、兎も角も哲學もて家を成したるシュレエゲルが最得意にして最良好なる意見、此自滅の處にあらむやうなし。所謂面白さといふ技術要素の主なる者は、流れて粗暴などに至りて、遂に自滅すべしといひしシュレエゲルが説を承けて、忍月君此判定を下されしならば、粗暴などいふものは、面白さの不忠ものなりと解することを得べけれども、奈何せむ、粗暴の一解を以て、シュレエゲルが最得意の意見にすることの頗る安なるを。

ハルトマンが原文には分明に記してはいはく。此説(面白さの説)にてシュレエゲルは其これより善き

見解、即ち美と醜とは分つべからざる相關物なりといふ見解に反戻したりと。さればシユレエゲルが面白さの説に不忠になりしは、其美醜相關の持論なり、シユレエゲルが持論なり。此シユレエゲルが論にて、ハルトマンも鴨脚標を附して引きたるものを、忍月君は自己の評語若くはハルトマンの評語の如く書きて、ハルトマンがこれより善き見解、即ち面白さの説より善き見解と譽めし處を、最得意、最良好の意見と的もなく誤譯したるゆゑ、此一句は遂に不通の語となり畢んぬ。

此句の下に括弧ありて祖述者の註あり。いはく。表裏交存的とは美表面に存ずれば、醜裏面に在り、一つの者常に必ず他のものと、所を異にして、同時に交々存在するをいふ。此の註脚はハルトマンが引きしシユレエゲルの語中のコルレラアテ Korrelate といふ字を敷衍したるのみなり。恐らくは未だ直ちに相關物と譯することの切實なるに若かざるべし。

忍月君又直ちに語を繼いでいはく。即ち詳説すれば、氏(シユレエゲル)の所謂刺戟は客觀的の固有性と同一なりと證せられべきが故に、刺戟の意味に於ける技術の發達は、偏曲の發達にあらずして、眞美の發達といふを得べければなりと。

これに對するハルトマンが文に曰く。されば(シユレエゲル既に美醜を相關物としたれば)又彼面白さの意にて、技術の進行して形成するところは、その面白さといふものゝ客觀的に特性あることゝ同じ意味にせられたる限は、美を損ずるにはあらで、美を長ずることも含みたるべき道理なり。シユレエゲルは蓋此道理にも反戻したり。余は此句につきては、唯これを對擧したるのみにて、別に語を添へざるべし。

次に忍月君曰く。氏(シユレエゲル)は技術の原理にして、若し美中に於て求むる能はずんば、固有

性中に求むるを得べしと、氏の誤謬は實に茲に存す。若夫れ美と固有性の醜とは、分つべからざる表裏交存的の關係ありとせば、技術は實に美中に求得べきにあらずや。氏はこの見易き理を知らずと。

これに對するハルトマンが文に曰く。過失(シユレエゲルが過失)は早く渠が今の技術の原素を以て、美中に求むべからざるものとなすにあらでは、これを特性あることの中に求むべきにあらずと思ひし處にあり。殊に知らず、若し美と特性ありての醜と、分つべからざる相關物をなすときは、技術の原素は愈これを美中に求むべきものなるを。これも忍月君の前後兩解とは、迥然相殊なり。

終に忍月君は曰く。若し技術の發達、美學的の醜に向はずして、非美學的の醜に向つて進みたりとせば、即是不整全なり、逆性なり、復た論するを須わす。然れども此種の發達果して出來得べきものなるやに至つては、氏は毫も反證する所なしと。

これに對するハルトマンが文に曰く。若し技術の發育するに當りて、審美的醜の方へ進みゆく代に、審美的ならざる醜の方へ進みゆくときは、それは既に顛倒(不整の一)の義中に陥るべし。而してその此中に陥るや、別の方に向ひての發育は出來べからずといふことを證せざるなりと。原文の證字(Beweis)は前解を承けたるものにて、これをシユレエゲルといふ人物に嫁すべきにあらず、且出來得べきやを反證せずといひては、出來得べからずといふことを證せずといふ意味にはならざるなり。

以上、石橋忍月君が醜論の其一を批評したるものなり。君が醜論、其二、其三と篇を累ぬるにつ

れて、我讀醜論も亦これと替を運ねて馳行くべし。シユレエゲルより下、ゾルゲル、ワイセの二家を隔て、ロオゼンクランツが醜の辨あり。忍月君が有無生の質疑に答へたる文は、全くロオゼンクランツが説にて其字句の微に至るまで、ハルトマンが其文撰上半の三百六十七面に書いたるに本づきたり。ロオゼンクランツが説はハルトマンが自説とは大に殊なるものなれば、余は知る、忍月君がハルトマンに依據せずして、ロオゼンクランツに依據するものなることを。ハルトマンを祖述して醜論を草せらるゝは、豈別に覩易からざる道理ありてのことか。(明治二十四年三月七日擱筆)

醜美の差別

石橋忍月君は醜論の筆を絶ちてはいはく。ハルトマンを祖述するは、勞多くして功少きがゆゑに、これを續ぐことを止む。壽座狂言評を終る後に至らば、諸名家の美學に關する書などを參照して、思を鍊り、更に予みづからの意見として、醜論を起草することあるべしと。余は讀醜論を作りて、石橋忍月君のハルトマンを祖述せられし方法を分析し、所謂祖述の間、あまたの誤謬あることを明にしぬ。夫れ忍月君の所謂祖述は何故に勞多きか。何故に功少きか。勞多きは、豈翻譯の難きがためにあらずや。功少きは、豈文の撰擇りの宜きを得ざりしためにあらずや。ハルトマンが審美學は、その文字頗る平易なれども、その「メタフィジック」に關したるころは、文撰 *ausgewählte Ver-* *be*全部を讀まざれば、通曉しがたし。忍月君が獨逸語に通ずることの深きに、解釋の誤謬を免かれ玉はざりしは、恐くはこれがためなるべし。宜なり、その勞れほきを厭ひて筆を絶たれしや。ハルトマンが醜の事を論じたる文は、文撰卷の三、下半の二百八面以下に載せたり。然るに忍月君

は其上半三百六十三面に見わたる醜を説くことの沿革を取られき。こはハルトマンがこれの立論の材料を得むとして、群籍を涉獵し、其重要な文句を抄録したるものにて、其間簡單なる批評を加へて、取捨のころを明にしたりといへども、要するに一綴の材料帳たることを免かれず。故に其十六紙面に亘れる文章、これのづから斷簡零冊の觀をなして、到底これを日刊新聞の紙上に出して、哲學専門の士にあらざる讀者に示すべからず。宜なり、忍月君の久しからずして、その功少きを看破し玉ひしや。

然りといへども忍月君がその醜論の筆を絶つに臨んで、徒に讀者の望を繋がんとし、他日諸名家の美學に關する書を參照して、自家の意見を述べむといはるゝに至りては、余甚これを怪む。前にはハルトマンが其審美學を著すや、歐洲歴世の典籍に富みたる獨逸の首府に居りて、カント以來の諸家を涉獵し、その醜といふ一原アイデンチッにつきて得たる所は、彼シユレエゲルよりカリエエルに至れる前後七家に過ぎず。忍月君が參照せむと欲する書はいかなる書にて、いつれの庫中に藏したるか。忍月君は我邦に在りて、涉獵の博きことハルトマンが上に出づることを得むとれはるゝか。且醜を説かむとせば、勢ひ美をも定めざるべからず。美を定むるには何人の哲學系統に據らむとせらるゝか。然らずば自ら一派の哲學を關きて、東海の表に一大光明を放たむとせらるゝか。余は唯其勞の多きこと、ハルトマンが文を翻譯するなどの比にあらざらむことを恐るゝのみ。

夫れ忍月君が壽座劇評の後に出来るべき醜の説は未だ知るべからず。而れども忍月君は早く既にその醜につきての意見を公にせられしことあり。美術世界第四號の序即是なり。其言にいはいはく。醜は美なり、醜も亦美なりと。嗚呼是れ審美學絶滅の論なり。審美學は原來美といふ

ものを究むる哲學なり。若し醜は美なり、醜も亦美なりなどいひて、醜美無差別論を唱ふるべきは、學問の區域内に審美の一科を起すべき餘地なかるべし。有無生といふものありて忍月君の醜美無差別論を駁していはく。醜は醜なり。美は美なり。(中略)美あればこゝろ醜あれ。醜あればこそ美あれ。若夫れ美をして醜、醜をして美ならしめば、決して美といひ、醜といふ區別あらざるべし。

(中略)醜なくんば美なく、美なくんば醜なしと。是れ固より當に然るべき理なり。人或は謂はむ。忍月君も既に批評家を以てみづから任じ、居常審美といふ語を口にする人なれば、恐らくは斯の如き暴論を唱へしことなかるべし。其の醜も亦美なりといふ句の下に、別に醜にも亦實に美ありといふ句あるを見れば、前なるものは唯後なるものを惹起さむために置きたるのみにて、畢竟哲學上の意味なく、脩辭上の錯誤を含みたるものならむと。是れ決して然らず。忍月君が有無生に答ふる文にいはく。醜は美なり。醜其物自身亦實に美なり。予は醜中にも美あるが故に、醜は美なりといひしにあらざ。又醜中にも美あるが故に醜と美とは同一の意味を有すといひしにもあらざ。(中略)予の文單簡なれば、疑問あるは尤なりと。忍月君が審美學絶滅の論を唱へしことは、これにて徴すべし。忍月君またいはく。痛に快あるがごとく、怖に喜あるが如く、惡に愛あるが如く、醜にも亦實に美ありと。有無生は早くこれを駁していはく。醜にも亦あるひは美あらむ。美にも亦或は醜あらむ。然れども醜中にある美は、縱令うの醜中に存在するにもせよ、美は則ち美ならずや。はたまた醜を随伴する美は、縱令うの醜と随伴するにもせよ、美は則ち美ならずやと、是言甚だ善し。忍月君既にみづから醜にも亦實に美ありといひぬ。然ればうの有無生に對して、醜中美あるが故に、美は醜なりともいはず、醜中美あるが故に、醜美の義同じともいはずと辨解せられしは、唯故

の字にてあらはしたる約束の上のみ係ることにて、うの醜中に美ありといはれしことは、毫も疑ふべからず。忍月君既に醜中美ありといひぬ。余はこの言の二様の誤を含むものなるを知る。一に曰く。忍月君若し醜の境界を正しく定められたらば、其裏面には美あるべきにあらざ。若し猶美ありといはざ、是れ一の誤なり。二にいはく。若し忍月君のいはゆる醜の中に、果して美あらば、其醜といふものゝ境界濶きに過ぎたり。是れ二の誤なるべし。

以良都女の記者は、この第二の誤を認めていはく。石橋忍月氏は先頃の國會紙上に於いて、美術世界の序といふものを載せ、其中の文句に、美は醜なり、醜中に美あるは、凄中に美あると同じといはれたり。世人の醜とするものも、美術家の目には美に見ゆ、即ち醜は美なりとは、理窟上いはれぬことにもあらざと。是れ明に醜の區域の廣きに過ぎたるを認めたるものなれど、所謂醜を世人の醜といひなして、忍月君の錯誤を世人に嫁せられたり。是れまことに寛大の批判なるべしといへども、唯恐る、忍月君のこの廻護説を納れずして、又かの審美學絶滅論を擔ひ出されむことを。

忍月君の醜は美なりといひ、又醜にも亦美ありといへるは、ロオゼンクランツが説に據れりといふこと、一度は其美術世界の序に見ゆ、一度はまたその有無生に答ふる文に見ゆたり。ロオゼンクランツが醜の趣味論 *Asthetik des Hässlichen* は余も亦嘗てこれを讀過せしことあれども、渠は決して醜は美なりともいはず、又醜中にも亦美ありともいはず。余は今こゝろロオゼンクランツが本文を引くことを要せず、唯ハルトマンが擧げしロオゼンクランツが醜の辨の一段を引いて、以て忍月君が前儒を証ふることの甚だしきを證せむとす。故奈何といふに、忍月君が引き玉ひしロオゼンクランツの片言隻句は、悉くハルトマンの文撰卷の三、上半三百六十七面の裡にあればなり。

忍月君はいはく。ロオゼンクランツは醜を稱して、消極美といへり。是れ醜は美にあらずとの意にあらずして、醜と美と均しく美なれども、感覺の原素に於いて、絶對的と關係的との別あるをいひしものなりと。又曰く。醜の美と、美の美と均しく是れ美にして、而して多少の區別あり。一は消極美なり。一は積極美なり。一は關係的美にして一は絶對的美なりと。夫れロオゼンクランツが醜を以て消極美とせしは、争ふべからざる事實なり。然れども忍月君がこれを釋せむとして、ロオゼンクランツが言は、醜は美にあらずとの意味にあらずして、醜と美と均しく美なりとの意味なりといひしは、太だしき過なり。

ロオゼンクランツが醜を消極美 *Das Negative-Schöne* といひしは、是れ醜の不足美 *Das Privative-Schöne* にあらざることを明にせむとしてなり。不足美とは或るものゝ美を認めれども、別にこれより美なるものあるゆゑ、彼或者の美を以て、猶足らざるところありと爲したるなり。されば不足美は美たることを妨げざるなり。譬へば富の如し。千金を積たるものは富めり。而れども二千金を累ねたるものゝ富めるには若かざるゆゑ、千金の富は不足富なり。唯この不足性 *Privation* は一の富人たることを妨げざるのみ。若夫れこれに反して、彼消極美といふものを見むに、是れ美の足らざるにあらず、美なきなり、美にあらざるなり、醜なり。譬へば千金の債を負へるものは貧し。彼が千金の消極富即ち負債は、世人をしてこれを富人の群に加へざらむ。故にいはいはく、不足美は美なりといへども、消極美は美ならずと。ロオゼンクランツは醜を消極美なりとはしたれど、醜を美なりとせず、又醜と美と均しく美なりともせず、美の美をば認めたれども、醜の美といふものをば一たびも認めざりしなり。

忍月君はまたれもへらく。醜は關係的美にして、美は絶對的美なりと。これもロオゼンクランツが意を得たるものにあらず。ロオゼンクランツは實に美を絶對的のものとしたれば、忍月君のこれを取られしこと怪むに足らねど、忍月君を以てハルトマンを祖述する審美家とする時は、其間に解すべからざるところあり。故奈何といふに、ハルトマンはロオゼンクランツに反して絶對的の美を認めざる審美家なればなり。ハルトマンが言にいはいはく。渾ての美は絶對的に美なるにあらず、只比較的に美なるのみと。(文撰下半二百八面) 又醜は關係的美なりとは、ロオゼンクランツの未だ嘗ていはざりしところなり。おもふに忍月君はロオゼンクランツが醜は比較的なるものなり (*Das Hässliche ist ein Relatives*) といひしを、誤解せられしならむ。殊に知らず、所謂比較的は比較的醜なることを。

忍月君は又いはいはく。美の必要件を除去する約束は、一の反面に於て、また醜の必要件を除去す。故に美と醜とは雙々相對して隨伴する者なり。醜の在るところ美必ずあり。美を離れて醜なしと。既にして有無生に對して、相對と隨伴との義を釋ていはいはく。相對すといふ、同所にあらざるを知るべし。隨伴といふ、一なくして他ある能はざるを知るべし。隨伴は「コオルデニイレン」なりと。此數句は皆忍月君の醜美無差別論とは、毫も關係なきものなれど、其翻譯の間には誤解より出でたりと覺しきもの少なからざれば、試に一の一二を左に示さむ。

先づ美の必要件を除去する約束は、一の反面に於て、また醜の必要件を除去すとあるは、忍月君が「アウスマツヘン」 *ausmachen* 即ち合成といふ獨逸語を知り玉はざりしより出でたる誤譯なり。是原文は消極性といふものゝ説明にして、醜美二者の必要件の同類 *gleichartig* にして殊嚮 *entgegengesetzt*

gesetzt なることをいへるなり。所謂「コオルヂニイルト」(coordinat) は即ち同類殊嚮の義なるを、随伴などと漫然譯し來きて、有無生のこれを解せざりしを誹り玉ひしは、抑亦人に求むることの甚だ過ぎたるものにあらずや。「コオルヂニイルト」といふ字を用ゐる一例は、人の行くとき兩脚の動くなどをも然いひて、左右は殊嚮なれども、その運動は同類なり。又忍月君は初に、醜のあるところ美かならずありといひ、後には相對すといふ、同所にあらずを知るべしといはれぬ。醜美は同じところにあらずるに、醜のあるところ、美必ずありといふ説、有無生にあらずといへども、誰か能くこれを解せむ。蓋ロオゼンクランツは美あらずは、醜全くあらじ(Wäre das Schöne nicht, so wäre das Hässliche gar nicht)といひしを、有を以て在となし、無を以て不在となされしよりは是の如き錯誤は生ぜしなり。

忍月君又いはく。醜は縦合感覺に於て嫌厭せらるるも、意識に於て不満なるも、猶特にひとつの美として好尙せらる。人はこの好尙の娛樂のために意識を枉ぐるも意とせざることもあり。是れ石橋一家の説にして、ハルトマン、ロオゼンクランツ等のいはざるどころなり。醜の美として好尙せらるべきものにあらずることは、醜美無差別論の敗れたる後、これを證するまでもなし。猶一步を進めていはいはく、醜は獨美として好尙せらるべからざるのみならず、また醜としても好尙せられざるべし。唯醜は好尙者のために恕せらるることあるのみ。ハルトマンは即ちいはく。醜は丁度、美の結象(Conterseenz)の佐(Vehikel)をなしたる限、審美的に存することを得るものなりと。

忍月君は別にシルレルを引き、フロイドリヒ、シュレエゲルを引き、怒髮冠を指す猛士を引き、迅雷風烈の事を引き、仕女阿初を引き、重の井の娘れさんを引かれたれど、皆醜美の差別無差別の論に毫釐の關係なきものなれば、余はこれを評するに違あらず。因にいふ。硯友社に一切現之助といふ人あり。石橋忍月君と余との文學上の争を以て、水掛論となしたり。彼は忍月君に左袒するものか。或は余に左袒するものか。或は別に見るところありて、孰にも左袒せざるものか。現之助よ。徒に水掛論の三字を以てこれを評し去りて、是非を辨せざるものと看做され玉ふことなかれ。

新聞雜誌

東漸雜誌に就きて巖々生に言ふ

東漸雜誌の今の日本の小説家として逍遙子と美妙子とを挙げしは、彼は所謂寫眞小説の傑ありて、兼ねて批評上より舊習を洗ひし處あるを論じ、此は歴史小説に着手して、兼ねて新文法を起さむとせる功少からざるを論ぜしなり。いづれも一時のおもなる風潮を指し示したるのみなれば、龍溪子いかに大家ならむも、うを洩したるを罪せらるべきにあらず。幸に再思ありたし。(明治二十二年) 讀賣新聞の解停を祝す

余の獨逸に在るや、國會議員リヒテル等の機關新聞は口を極めてビスマルク侯の政畧を罵り、或は又た戲謔の文を作りて陰にこれを侵すこと殆虚日なかりき。一日ビスマルク侯は一葉の新聞紙を手にして議場に出で、これを朗誦したる後、其論旨の誤れるを痛斥し、且曰く。記者が以て我失算なりとせし處は、紙面に大活字を以て植ゑたるを以て、余が老眼にも容易にこれを看出すことを得たり。亦僥倖ならずやと。滿堂悶然たり。獨逸當時の新聞は、其言論に忌憚なきこと此の如くなれど

も、余は未だ曾て其停止の慘を被りしことを見ざるなり。

(中略)今茲(明治二十二年)の季冬は何ぞ厄運の我文界を襲ひ來ることの甚きや。我讀賣新聞は曾て憲法發布の日を以て其主義を公言し、民智を開發し學問を普及せしむることを以て自ら期したり。此時よりして以來渠は能其誓を踏み、終始渝ることなく、外交に關する問題を痛論せし外には、勉て其語氣を温雅にし、滿幅の風流文字、讀者をして驚々たる太平の氣象に浴せしめしに、一紙の公文忽ち降りて其發刊を停め、余等をして流雲日を蔽ふが如き想をなさしめしは、抑も何の故ぞ。余等は此停止の命の彼國民の友の禁縛と俱に出でしを見たり。彼と此とは皆我國文學の機關たり。故に其論ずる所も亦平和を以て自ら期するものなり。二者の齊しく其厄に逢ひしは、抑又何の故ぞ。

嗚呼、余等は其故を尋ぬること能はず。唯だ其顯象を觀て、心竊に我國家の爲めに惜む所ありき。又我文界の爲めに歎ずる所ありき。

今や恩命新に布いて、國民の友の禁縛も解けたり。而して我讀賣新聞の解停も亦殆踵を接して至りぬ。時方に歲暮、朝野都卑を問はず、四民事繁きが中にも、吏人は其刀筆を措いてこれを祝し、商估は其牙籌を擲ちてこれを祝し、農夫は其耒耜を棄ててこれを祝し、歡聲國に滿ちたり。而して其最もこれが澤を被ぶり、これが恩波に浴するものは、余等文學者に若くは莫し。

我邦現今の勢を觀るに、文運隆興百藝並び起る時なり。時々刻々文學美術に關する問題は社會の表面に顯れ來て、殆ど其止むときなきを見る。週刊月刊の新誌には、國民の友あり、日本人あり、柵草紙あり、小文學ありて、其類に乏からずと雖、各問題の性質に依りては、細大深淺自ら相殊なる

が故に、余等の日刊文學新聞に待つことある、蓋鮮少にあらず。况や評論にも亦速成果斷を要するものありて、週を待ち月を待つに違あらざるをや。

嗚呼、余等は今明治二十三年の關上に立てり。我政界は將に年と俱に新ならんとす。我文界は果して能く余等の望を虚うせず、畫然として舊習を一脱し、活潑々地の運動をなし得るか。我讀賣新聞は愈々益々其本分を呈はして、此間に周旋すべきか。余等は刮目してこれを待つものなり。書して以て祝詞に代ふ。(明治二十二年)

國民新聞發刊の祝辭に代へて

偶ま辛巳の歲の日乗を續せば、十月十二日の條に一篇の惡詩あり。曰。昨迎龍鳳駕。今拜論言下。聞説明治廿三年。黔首可得參政權。政事渾因公論斷。天皇度量大如天。却笑聰明舜與禹。當年僅能設旌鼓。今やその年は來れり。而して我國民新聞社の起るも亦た茲時に於てす。其主筆を問へば、則曰蘇峯德富君なりと。嗚呼、公論の府これを措いて何かある。その國政に裨くるところある、果して何如ぞや。頌聲滿紙、その辭こり同じからね、孰れか肺腑中より流出せざるべき。されば *Jedem in seiner Sprache; warum nicht ich in der meinigen?* (明治二十三年)

肖像に添へて國民新聞社に寄する書

當世文學者の肖像を貴社の新聞に載する序に、我面をも其間に挿まむとの懇なるれほせ言に辭まむすべなく、寫真一枚まわらす。ハイチが「シユワアベン」鏡に云く。著書の首に作者の面を書きたるを見るたびに思出でらるゝは、グヌアの癡狂院の入口に創立者の像を建てたるなり。著書の裡面にはさまざまの狂念妄想みち／＼たる前に作者の面を掛けたるは、彼癡狂院前の像と何ぞ殊ならむと。

この度の擧はさる類にあらで、高尚なる貴社新聞の片隅に出づるなれば、ハイ子がいふ憂はあらざるべし。然れどもこれに添ふべき小傳を求めたまふに至りては實に策の出だすべきなきまゝに、平生世の大家先生より受けし拙文の評を寫し聊貴囑に酬いむとす。

僕は今の文學世界に毫末の功もあらず。著書といふもの一卷もなし。八年ばかり前の事なりしが、饗庭篁村君日就社より書を寄せて投書を求められぬ。我文の新聞紙に出でしはこれより始まる。されど今日に至るまで一として存ずべき價ありと自らたもふものなし。既に業なくば志のみのをのべむも可ならむ。然れどもわれかゝる小説を作らむと云ひ、かゝる戯曲を編まむと云ふはいと易けれど、これを實際に行はむとするときは、果して能く底事をかなさむ。又僕を批評家といふ人もあれど、今日まで一巻の小説をも批評せしことなし。世にかゝる批評家あらむともたもはれず。レッスンは批評家なりとて後の世までも許されたる人なるが、自ら曰く。製作の能なくして批評する時は、批評せられたるものゝこれに服すべきこと覺束なしと。是れ不磨の言なり。之を思へば、僕既に文家にあらず、又批評家といふべきものにてはなし。

我文章に就きては、世間にさまぐの評判あり。艸木に譬へて云はゞ石竹に似たりと聞く。(讀賣)文政の頃の評判記に武道の仕打は堅過ぎる石竹(中山文七)、さびしうても藝は大柄な杉、立廻りに小手の利く藪こうじ、いつでも仕打はうきくとした瓢箪などいふ評ありき。我文の石竹に似たるはうもく何の似たる所あるか。唯櫻梅などの中に立ちまじりて、微艸の如しとならばさもあるべし。又衣服に譬へていはゞ、玉「スコッチ」の外套とかに似たるよし。(國民)これも嘉永あたりの評判記にはれにも不斷にもよい博多綿、上品で袴地にかざる茶うなどある例に倣ひて、其似たるゆゑ

よしを示されたらば、自ら悟るふじもあるべきに、外套に似たりとのみにては、何とも辨へがたし。但物の外のみ寫して心髓に至らねば、彼汗衫積鼻樫などの身に近きに似すといはれしならば、これも當りたらむ。又動物にていはゞ海鼠なるよし。(芝罘園)此批評家は親切なるねん方にて、柔いやうで堅い、かたいやうで柔かいと註せられたり。我腕まだきまらねばさもあらむ。

文品は姫百合のほとりまで來たりしもの(松下亭)なりと承はる。僕にほとりまで來られたる谷間姫百合の譯者、いかにも氣の毒なり。此頃になりては折薔薇のしほれたるに匂残りて久きものにあらず(水鏡生)と或る大鑿識家の判断ありき。折薔薇に匂あらば多くは三木竹二氏の力にて、我事には與からず。久きものにもあらずは、谷間姫百合の堂に上らむ目なからむ。敢て野心あるならねど、又口惜きことなり。因に申さむ。僕に翁といふ字を賜ひしは此折薔薇云々の評のぬしなり。いかでか禮まをさざらむ。

語格などは學に素なき僕なれば正しからむやうなし。一言一句も苟且にせられず(落合)といはれしは、まことに心を識りたる人の言にて、嬉しき限なり。されど苟且にせざるのみにて、知らぬことをば誤るが多し。すぎぬといふ少女が父と書きて、すぎさりぬと改めよと教へられ、又物よむことをば流石に好みしかと書きしは、流石に好まざるにはあらねどといはでは法に合はず、善くはに讀まぬがあるにも、さへあるにとすべしと教へられしこともあり。(倩夢樓)源氏のすぎぬるは甲斐なくとも、すぎさりぬるはと改むべく、土佐日記の此わらはさずがに耻ぢていはずも、さずがに耻ぢざるにあらねばいと改めて、始て法にかなふことなるべし。さへといふ言葉も、此批評家の教へたまふ使ひさま、まだ聞かぬ所なり。嗚呼、寡聞をいかにせむ。

文に見わたる理想には、杓子定規多きよしにて、善の鍵を美文學の門楹より取去るはよけれど、世界は美文學の世界にあらず、宗教の世界なり、哲學の世界なり（江湖）との規箴を蒙りしことあり。窃に疑ふ、善の鍵を世界の門楹より取去らむとせしは誰ぞ、又美文學界即哲學界即宗教界として立つべき標準は奈何と。此境は僕淺識にして未だ看徹せず。曾て西稗の情事に係るものを抄したれど、シエクスピイヤ、ギョオテを容れず（眞理）と卑き心を誹られしことありき。シエクスピイヤは何人、ギョオテは何人ぞ。上下三千載の間に指を屈する人々なるを、僕に之を拒む力なければ、容れざらむと欲すとも得べけむや。彼兩大家の集、僕に善く讀むべき力あるにあらねば、今の博識精通のれん方々には及びがたけれど、平生嗜讀することは手を釋かずともいふべき程なるものを。

僕が理想は又ヘルデルに似たりとの事なり。（石橋）ヘルデルが「カリゴ子」はれもしろからねば善くも讀まず。されど彼が審美上の意見に依れば、美は形質共に眞と善とを兼ねて、これと一に歸せざるべからずといへり。是れ女學雜誌、大同新聞、江湖新聞などにこり見えたる論なれ。僕はこれを攻撃したることあり。いかにしてかこれに似ることを得べき。其根本既に此の如し。枝葉の上にも會得せらるゝやうに教を受けむとれもふ念いと切なれど、いまだ其機を得ず。

以上、僕が明治の文界にはしたなくも喙を容れりめてより、徳富蘇峯君の眷顧を蒙りて、貴社の新聞の端に拙き文をいだすこととなりしまで受けたる評のあらましなり。瑣末の事ども、ことごとく綴りたるなれば、用なき處は刪り玉へと請ひまをすになむ。（明治二十三年六月）

徳富蘇峯氏に答ふる書

さきに國民新聞社に寄せたる文をなめしとも見たまはで、又懇切なるれほせ言たまはり、承はりぬ。若し僕が身の上に履歴といふべきほどの事あらば、いかでか包みかくして言はざらむ。寔に文學はわが好む所なれど、明治の初年に依田學海先生に漢文を學び、佐藤應渠先生に詩を學びし外には、師とたのみし人なし。和歌は人に介して福羽美靜、加部嚴夫の二君の斧正を請ひしことあれど、師事せしにあらず。今の文壇の諸大家の中にて、殊に不棄の恩を荷ひて諉るべからざるは森田、坪内、山田、饗庭、朝比奈等の諸先輩なり。其他交淺からぬもあれど略す。この外には言ふべきことなし。

吾家は累世津和野侯に仕へし醫なり。慶安間に卒せし森玄篤より天保二年に卒せし森秀菴まで十一世、皆典醫なりき。祖父玄仙、後に白仙と改む。秀菴が養子なり。奥附を拜す。時の典醫堀杏菴、平田玄叔、加藤玄順等と大に脈を論ぜしことあり。當時の書東等家に藏したり。漢文も雅健にて、議論觀るべきものあり。江戸にて客死せしは文久元年の事なりき。家君名は靜男、母君と共に猶すこやかなり。明治二年西周氏津和野に來たりて、東京に出でよ世話せむといはる。是より先き慶應三年より、藩の學校養老館に入りて漢學を受け、旁和蘭語を修めしが、明治五年館を出で、家君と俱に東京に遷り、西氏の家に寄居し、進文學社といふ私學校に通ひて、獨逸語を修む。明治六年大學醫學校に入りて、明治十四年卒業す。是れ僕が醫學の教育を受けし略歴なり。

卒業したる後、衛生學を専修せむとれもひ起し、が、師とすべき人なかりき。明治十四年陸軍に奉仕し、明治十七年に獨逸國留學を命ぜらる。獨逸にてはライプチヒにてホフマンを師とし、ドレスデンにてロオトを師とし、ミュンヘンにてベッテンコッフエルを師とし、伯林にてコッホを師とす。皆衛生學者なり。明治二十一年歸朝す。今猶軍醫にて、同僚のために衛生學を講ず。

これにては、み心に慍ふまじけれど、ありのままを寫して左右に進ず。取捨は唯命。不宣。(明治二十三年六月)

解停の日に國民新聞社に寄す

眠足りて起てば、朝日影窓に上ぼりて、新につぎたる爐火紅なり。机上をみれば昨夜書きかけたる文あり。筆を取りてこれに向ふに、神氣爽然、塞がりたりとおもひし處忽ち開け、窮れりとおもひし處忽ち通ず。譬へば蘆葦の間を漕來し舟の一折して長江大河に出でたる如し。この時の心地よさは、解停の日待得し新聞社員の心に似たらんか。記して以て祝辭に代ふ。(明治二十三年)

忍月居士の江湖新聞社に入るを祝して

詩話は古より有り。拙堂出で後文話の著を見る。獨り近代美文の論評に至りては、前人の作りしもの片言隻語なるが多かりき。豈憾むべからずや。

石橋忍月氏久く軀を國民の友の文學批評欄に摻りて、小説の新に出づる毎に、深刻剴切なる言をなしたりしが、今又更に江湖新聞の紙上に於いて美文月旦の筆を揮はむとす。想ふに月刊週出の雜誌のみにて著書の批評をなすときは猶驥足を伸べがたきに由れるならむ。

且余は毎に謂ふ。新聞に文學上の趣味なきは木に花なき心地すと。江湖新聞は縱令言行の贅實を以て目的となさむも、贅實なるのみにては恐らくは槎枒たる古梅幹に一點の花を着けざる如く、看るものをして多少の恨あらしめむ。

忍月居士は其れ江湖新聞をして華實兼ね收めしむるものなる乎。是よりして後は世人も亦必ず此新聞を評して毫釐遺憾なしと云はむ。是れ豈祝すべきことならずや。

頃日江湖新聞を閲するに、居士が實想論は今其端を開きたり。此篇未だ必ずしも其精鍊刻意の作に非ざるべけれど、亦以て讀書の功力他に超へたるを見るに足りなむ。其援引する所を見れば、鳩巢と云ひ、淇園と云ふ、皆是れ吾邦の先哲なれば、居士は決して西洋の詩學にのみ偏したるものにあらざるべし。余は刮目して今の東西を折衷したる獨得の議論の出づる日を俟たむ。(明治二十三年)

自由新聞の歌人に問ふ

鴈外漁史は小説家に非ず、批評家に非ず、政治家に非ず、醫者に非ず、乞兒に非ず。比日忽ち自ら歌人なりとねもひはじめしが、未だ三十一字を並べしことあるにあらず。而れども已に千萬首の和歌を作りしもの、未だ必ずしも歌人ならずとすれば、曾て一篇をもなさざるものも、或は是れ歌人なることあらむ。試にラファエルが指を丹青に染めざりし時、シエクスピイヤが臺帳一つをも仕上げざりし時、豊太閤が艸鞋を握りし時、鄧通が富に誇りし時を思へ。誰か能く其本來の面目を知らむ。漁史を歌人ならずとあたまたから抹殺せむとするものあらば、是れ今の所謂第五流、第六流の批評家なるべきのみ。

思ひたたる吉日、晴瀾漁郎突として來りて曰く。自由新聞の一欄を汝がために明けおきたり何か書けと。漁史さい先善しと勇みたちて、敷島の道の門出せむとする折しも、恰も好し自由新聞は題を課して歌を募るといふ。其題を見れば曰く離騷。善し。香川景樹の才藻あるも長歌作らざりしを缺典として近比擧げし人もあり。響を萬葉に繼ぐべき巨刃天を摩する大作を出して、他の新體詩論者、俳諧論者、今様論者、韻文論者に一泡吹かせて呉れんずものこれもふに、題の奇も持つて來いなり。九皖の蘭を抜き、百畝の蕙を莖り、已矣哉國無人莫我知分といふ激憤怨懟の心を寫さん。斯くねも

ひ定めて又つく／＼と課題を見れば、離騷の右側に「ルウソオ」といふ片假名つけたり。奇怪なり。漁史支那音に通ずるものにあらねば離騷の音果して此の如きか、此の如くならざるかを知らねど、りの書き様何と爲く南蠻鳩舌の語じみたる處あるは何ぞや。或はれもふ、暮る所の歌は屈原の離騷を題とするものにあらずして、別に一個のルウソオありて之を詠せしめむとしたるにはあらずやと。若し然らば、自由新聞の紙上の事なれば、漁史が楚の逐臣につぎて愛するジャン、ジャック、ルウソオならむか。是も善し。「エミル」「ジュリイ」懺悔記乃至民約論。漁史之を讀みて熱したり。方今滿覆載間の外道禪若くは獨善的にして内柔に外剛き一種の精神上の虚無主義に鼻持ならぬ時に際して、彼一生涯理想實際の二つを腦裏に戦はせて、故山にも容れられず、法都にも容れられず、魯に奔り、英に奔り、八十四種の遺籍を萬斛の涙に浸し、後、一片の碑碣に自然の人眞實の人そのみ銘せしめたる男、唯々しきながら却りて慕はし。これも亦好詩料ならむ。敢て自由新聞の歌人に問ふ、孰れか是なる孰れか非なる。漁史其答を得たる上にて再び此紙上を借らむとす。(明治二十三年十一月)

志がらみ草紙の本領を論ず

西學の東漸するや、初りの物を傳へてその心を傳へず。學は則格物窮理、術は則方技兵法、世を擧げて西人の機智の民たるを知りて、りの徳義の民たるを知らず。况やその風雅の民たるをや。是に於いてや、世の西學を奉ずるものは、唯利を是れ圖り、財にあらでは喜ばず。椅桐の崇幹も鐘籠の罕節も、一たび薪とせられては、復た黄衣の舌、縞裳の肉を養ふことを免れず。天下の人士は殆ど將に彼のプラトオが政策を學びて詩人を逐はんとするに至れり。

今や此方嚮は一轉して、西方の優美なる文學は、りの深遠なる哲理と共に我疆に入り來れり。而し

てりの文學の種屬を問へば、叙情詩あり、叙事詩あり、又た戯曲ありて、固より一體に局せずと雖、輒今西歐諸州に盛なる小説を以てこれが主となす。夫れ小説の盛んなること、固より喜ぶべしと雖、此詩體は一定したる風格あるに非ざるを以て、無能の徒、亦能く擧に倣ひ、遂に瓦釜雷鳴の有様となりたり。

我邦の文學界には、外より來れる分子、既に甚だ多し。古釋教の入るや、重譯を経たるを以て、印度の文學はたほく俱に來らず。獨り支那の文學は、りの政治風教に伴ひ來りて、大に國風の趣味を變動せり。宜なるかな、今の文學者には歌人あり、詩人あり、國文を善くするものあり、漢文を善くするものあり、眞片假名體に長ずるものあり、言文一致體を得意とするものありて、本國、支那、西歐の種々の審美學的分子は、此間に飛散せること。此混沌の狀は、決して久しきに堪ふべきものにあらず。余等はりの澄清の期の近きにあるを知る。而してりのこれを致すものは、批評の一道あるのみ。

夫れ批評は寔に止むべからず。然れども古人も文人相輕と云ひ、文士傾軋と云ひしが如く、今の所謂批評家といふものは、徒らに相訾訾し、りの相殊なる趣味を以て、相殊なる文章を議し、人をしつて涇渭に迷ひ、酸鹹を錯らしむるもの、比々皆是なり。而れども余等の見る所を以てすれば、是れ未だ嘗てその眼の高からざるに由らずんばあらず。余等平生これを慨すること已に久し。故に逍遙子の小説神髓、半峯居士の美辭學の出づるや、我邦操觚家の爲めに此文學上の標準を得たるを賀したり。奈何せん、器械既に備れども、能く運用の妙を悟るものなく、徒らに人をして墮を得て蜀を望む想あらしむることを。

余等は固より小説神髓と美辭學との論ずる所を以て、一々醇の醇なるものなりと云はず。而れども今の文學界に此等の書を出せるは偶然に非るを知る。何如といふに今の詩文を言はんを欲するものは、邦人の歌論と支那人の詩論文則とのみ據るべきにあらず。西歐文學者が審美學の基址の上に築き起したる詩學を以て準繩となすことの止むべからざるを知ればなり。

論者或は曰く。今の小説を論ずるもの、多く標準を西歐諸國に取る。その論證愈博くしてその意見愈狭し。寧これに常識に徴することの確なるに若かずと。余等は此般の言を聞く毎に、未だ曾て剖斗折衡の政に想到らずんばあらず。若論者の意を弘めてこれを言はば、嘗に審美學と其一部なる詩學とのみならず、道學も哲學も悉くこれを常識に徴して可なり。何を苦みてか復専門特科を設くることをなさん。蓋標準もこれを用ゐること、その法を得ざる時は、承矯の力を見るに由なし。

人ありて、詩學の法則を知らず、縦令これを知るも、これを運用すること能はざる時は、その弊や、浴餘の水と俱に兒を溝壑に棄てんとす。余等は詩學の運用を妨ぐるものを求めて、偏聽と成心とを得たり。古人云。無偏聽。無成心。公而生明。則自盡心始。盡心之極。幾於無心。二者は特に心旨無學の徒のこれあるのみならず、世の學者も亦これあり。是れりの流毒の深き所以なり。

嗚呼、我混沌たる文界も、その蕩清の期は應に近きに在るべし。余等が志がらみ草紙の發行を企てしも、亦聊審美的の眼を以て、天下の文章を評論し、その眞贋を較明し、工窳を披剝して、以て自然の力を助け、蕩清の功を速にせんと欲するなり。抑余等はこれを聞く。古の文士には、當時の聲譽を抛ちて、知を千載の下に求むるものありき。故に馬遷は書を著して名山に藏すと云ひ、歐陽公は先生の嘖を畏れず、却りて後生の笑を怕ると云ふ。是れ皆時譽を抛ちて千載の下に期する所あるな

り。否、或者は更に一步を進めたり。渠は時人の菽麥を辨せざるが爲めに、認めて濟度すべからざる衆生なりとせず、自ら奮ひて之を長育し、其嗜癖を更め、其好尚を變じ、其地位をして己れが地位に近づかしめんとせり。レッツシングの傳奇折蓋薇を作るや、時人これを評して兒の長せんことを慮りて裁したる過寛の新衣なりと云へり。亦此意のみ。世間多少の文人詞客に寄語す。請ふらくは其生平蘊蓄し、抱負する所を書して、之を新聲社に投ぜよ。余等不敏と雖、聲望の爲めに眩せられず、時尚の爲めに動されず、勉めて公明正大の心を取與舉措の間に存せんとす。志がらみ草紙の作れる、豈他あらんや。(明治二十二年十月)

柵草紙と劇と

京傳も藥を賣り、馬琴も藥を賣りたり。日本の著作家に藥賣らぬものはなし、といはば奇怪に聞ゆべし。然れども獨り我國のみならず、歐洲の詩人にさまざまの内職ありしこと物に見えたり。オイリビデスは角瓶とり、ダンテは醫藥兼業、シエクスピイアは作者と役者とを兼ね、ハンス、ザックスはいふまでもなく靴つくり、レッツシングは書庫の番人たりき。獨嘯庵のいはく。學道志也。行醫業也。不以志廢業。不爲業棄志。柵草紙に醫多き何の怪むべきことかあらむ。

誰かいふ。柵草紙の初冊に文章十八篇ありて、其七篇は劇に關す。劇の總文學の五分の二を占むるも奇怪なりと。嗚呼、奇怪なるはこの統計のとりかたにこそあれ。彼卷には和歌五首あり。うが中には響を貫之に繼がむ程のものもありと。これを算すれば、計二十三篇となる。中に演劇を論ずるもの二篇ありて、この比例十分の一にだに至らず。又戯曲の事をも算せんに、六篇ありてやうやく四分の一となるべし。試にレッツシングの全集を見よ。此人は決して文學上偏倚したるところある

人ならぬぞ、「ビブリオグラフィイ」出版所の本五巻のうち、演劇の評一卷あり。これを五分の一とす。若戯曲を算せば、全部の五分の三となるべし。(明治二十二年十一月)

答無名氏論柵草紙書

拜誦仕り。我が文學界に對しての意を謹め玉ふ御言葉、たしかに承り。柵草紙の評論の部はいかにも仰せのとほり、久しく中絶いたし居。さりながら、敢て非を飾ることをばなさず、一通り我志の在るところをば、ねん聽に入れ度。うも、柵草紙の評論は、嚴に審美の區域を守り居り。いへば、世上に審美に關する事多きときは、其評論も亦多かるべく、少きときは少かるべきこと當然に。さて山房論文止みてより後の世上の模様は奈何といふに、日刊新聞には、審美問題殆く絶え、文學雜誌には、或は批評を止めたるがために審美問題減じ、或はうの方嚮の實世界の事に傾きたるがために審美問題減じたること、誰も認め得るところならんと存。日刊新聞に審美問題殆く全く絶わたるは、忍月、不知庵、抱一庵等のこの比此區域より出で去りたるや、主なる原因にいふべき。文學雜誌にて批評を止めたるは、早稻田派の所謂記實主義の勢力あるためにいはん。美は素と階級あるものにて、類の美を主としたるよみ本體の小説は、個物の美を主としたる戯曲的諸作の下にあるが如くに。さるを類の美は類の美にて結構なり、個物の美は個物の美にて結構なりとやうに、よろづの製作品を平面に羅列するのみなるときは、到底はかゝしき批評出來まじく。かの記實主義といふものには、此の如く諸物をならべて見するのみなる弊ありて、しらず、眞の批評といふものには遠ざかり申。批評は哲學的なるものにて、談理に。談理に反對して批評をなさんといふは、先づ批評の命脈をば縛りねきて、申譯に批評といふ形骸を殘しねき、これによりて

倚らず障らぬ披露をなすに外ならず。文學雜誌の方嚮、實世界の事に傾きたりとは何如なることを申しいふか。この點にて最著明なるは所謂史學の流行に。史は實世界を離れざるものにて、其骨髓には毫も審美に關するところはいはず。史を修むるときに美辭を使はざ、これは低級藝術として、審美の境に入るべしと雖、今世間にいふ史學問題は、斯様のところには存せず。譬へば早稻田文學に美辭論を出して、美辭論中に史の事を言ふは、猶低級藝術の美を説くものにていへども、うの進みて史海なんどの議論に立ち入りたるは、最早史といふ實世界を離れざるものゝ領分に脚を投じたるところに。早稻田文學が純文學の外、史學をも材料とするは勝手なること勿論に。されどかく方嚮の一轉するため、審美問題に委ぬる紙面減ずることは疑ふべからず。これは早稻田文學のみの上にはいはず。この頃の世の風潮に。これにつきて可笑しきは、世の無識なるものが、此風潮を文學進歩の兆となし、うれ見よ、小説、戯曲のやうなる軟文學衰へて、史論といふ硬文學こそ盛になりたれ、と囃し立てしことに。藝術の文にも、フアウストの如く硬きあり、事實の文にも許多のへぼ史論の如く軟なるあることを知らず、衣に軟なる絹行はれたるが、一時行はれずなりたるとき、たま／＼食に強飯はやり出したるを見て、うれ見よ、軟貨の用衰へて、硬物の用こそ起りたれ、といふに似たる迷惑には、驚き入る外なく。美文に目を注ぐ人少くなりて、實用文字に目を注ぐ人多くなるは、衣服に綺羅をかざる時代の次に、料理に奢を極むる世來るが如くにて、衣あれども食は廢せられず、食ありても衣は棄てられず。かゝる烏許のしれものは、數千年前の希臘人の迷をくりかへして、詩人を手品つかひに比べて無用のものとし、史家を靴やに比べて有用のものとしかねまじく、可笑しさに堪へず。かく世上にて審美問題漸く減じられたれば、柵草紙に評論少

きをのみ怪むべきにあらざるべくやはん。この外にも猶柵草紙評論の材料の減じたる理由とすべきものいふべし。うの一二つを申さんか。我文壇には、一時某氏の所謂踏臺主義乃至切取強盜主義といふもの盛に行はれいひき。これはこれのれ若くはこれのれに黨するものゝ短を護らんがために、人を抑へ、他人の流派を誣ひ、好みて聲名あるものに向ひて、争を求むることにはいふ。これのれまことに長ずるところあらんには、他人の傍に頭を出すべき餘地あるべく、おのれ長ずる所をからんには、他人を倒さんとすとも、到底其目的を達せらるべきにあらざり、とは初より知れたる事にいふものを、柵草紙に向ひても、許多の非難絶ゆるときはいはざりき。この事漸く止みて、柵草紙といふものゝ、我文學界の片端にありて生息するを、あながち邪魔にせられぬやうになりたるも、紙上に評論少くなりたる一原因にい。又争の端を我より開きたることもいひき。そはいかなる場合ぞといふに、審美上失錯とすべき論、若くは立派なる論のうちなる、審美上失錯とすべき部分、たま／＼世人の心に投じ、大にしては藝術の全境、小にしては詩文の一體に、多少の影響を及ぼすと見えたる時にい。かゝる時或は其論を駁し、或は其部分を指斥するをば、柵草紙の責をいたし居りいひき。此の如く世を動かすやうなる論の出でざるも、柵草紙の評論少くなりたる一原因と看做すべくい。要するに鏡はいかに明なりといふとも、形なくては影の映らんやうにはいはず。世上の審美に關する事は、猶形のごとし。柵草紙のこれに對する評論は、猶影のごとし。形なくして影のうつらざるべき、鏡をとがめんこといかゞいふべき。斯くは申せど、現今の文壇にも、審美に關する問題多少出で居るを、知らざるにはいはず。早稻田文學中の諸説、基督教派の文學論、小櫻絨中の評論、浪花文學の諸論文など随分盛なることにい。柵草紙には、これ等に對する意見あれば、これを公にすること

もあるべくい。されどこれを公にする以上は、うの中に同意すべきところには同意し、惡しとおもふところをば非難せざるべからず。かゝれば自ら争を求むるやうになりいふべし。柵草紙を戰場とせしこと久しかりしがために、戰場ならぬ柵草紙をば、淋しくねもふもの頗多く、我を怠ありと譴め玉ふさへ、或は其類にはあらずやと疑はるゝ程にいへども、柵草紙にも當初より平和の事業なきにはいはず。縦令 *never interrupt* を以て十戒を補ふものはありとも、戦はうの限にあらねば、柵草紙が暫く争を避け居りいふも、無理ならぬ事とは思召さずや。柵草紙の平和事業はいろ／＼あれど、模範となるべき歐洲美文の翻譯をば、絶えず出し居い。自由藝術として、最完美に發育したるは、英、獨、佛、魯の文學、うのおもなるものにはいふべし。英文學の紹介者は餘所にも少からねば、柵草紙はれにも獨、佛、魯の文學の紹介者たらんことをつとめいひき。こゝに既出のものをおいつまんで申さんか。柵草紙の紹介したる戯曲には、*レッシング*の折蓋薇とねなじ人の俘とあり。うも／＼歐羅巴の戯曲は源を希臘に發して、こゝに叙情の側を長じ、次に基督教劇の起りてより、*シエクスピイア*の偉觀を成せるまで、多く叙事の側を長じたりけるを、*レッシング*出でより、兩側の偏頗なるところを除き、純戯曲となさむとする傾向を生じいひき。かく申せばとて、*レッシング*まこと*シエクスピイア*を凌駕したりといふにはあらず。*レッシング*が其上に出でむとして、幾分かうの目的を達せしは、純詩體の上の事にて、曲ごとに妙處を求めば、*シエクスピイア*不朽の面目を千載の下にも保ち居ること勿論にい。うは免まれ角まれ、我東洋の戯曲は、印度、支那の古きもの、希臘に類して叙情に傾き、日本古今の淨瑠璃は、大抵叙事に偏することを免れず。近時歌舞伎座にて興行せられし櫻痴の諸作も、英吉利ならば*シエクスピイア*前、西班牙ならばカルデロン前の物たること、我が斷言すること

憚らざるところに在り。此時に當りて、レツシングが諸作を紹介せば、具眼の人は迷執の夢を打ち破ることはいひなん。一二具眼の人醒めたらん曉には、戯曲にて内の筋、心の迹を重んじ、外の筋、形の迹を軽んずるやうになりて、史上の事蹟をつらぬること、珠数の如く、めざしの魚の如く、シヨオベンハウエルが所謂唯主人公の一致を存したるのみなる戯曲、漸くにして舞臺に上らぬ日となすべきか。柵草紙は小説に於て何物をか紹介いたしたる。こゝには唯今の主なるものを擧げはらん。曰佛蘭西にてはドオデエが諸作。曰獨逸にてはオシツプ、シユピンが新篇。曰璉馬にてはアンデルセンが即興詩人。曰魯西亞にてはレルモンツツが浴泉記。是れ皆一時一代の風潮の外に立ちて、優に一家の體裁を成したるものにははずや。就中即興詩人はや「ロマンチック」派の嫌なきにあらずと雖、所謂實際派の筆次第に卑褻に流れ、苛刻に奔る時、試にこれを取りて一誦するとき、大都製造場の塵中より出で、山水明媚なる別天地に入りたる如き想あらむと存せられし。うもく實際派とは何ぞ。心理上の研究を旨とし、或は殘忍、或は淫猥なる刺激の手段を用ゆるを、實際と申さば申されむ。されどこれが爲に美を失はば藝術として何の價かいはむ。小説に心理上の真相あるべきことは論なけれど、この真相の理想にして實相にあらざること、この頃片端を出したるハルトマン派の審美論によりて知るに足るべくい。所謂實際派の中にて、極端に走れる人々の實際といふものは、理想なくして實際のみなる境界にて、自然にだにも相應せず、藝術にはいかでか入りいふべき。此弊に陥りたる作者の小説は、徒に自然を摸倣するのみにい。或人物の履歴の聞書のやうになり居りい。昔漢學先生が名教の中にも樂地はあるものを、と歎じたる如く、美は棄てずとも、世の真相は小説の中に現るべきを、とれもふ餘に、わざと即詩興人のやうなるものを譯し申す。柵

草紙は此の如く翻譯に従事して、早稻田文學中の名著梗概のやうなる古作者の筋書をは出しことはいはず。これにつきても面白き事いひき。早稻田文學が名著梗概といふものを出しはじめし頃は、いづれの文學雜誌にも翻譯ありて筋書を常にいひき。早稻田文學は名著梗概といふ筋書を工夫して、これを出すと共に、世間の文學雜誌の翻譯に従事するものに對して、その何故に筋書をなさざるかを問ひ、これのこゝに心付きたるに、餘所のものは迂濶にてこの結構なることをなさざるは奈何、と訝る如き事を書きいひき。然れども原來英文學に通ずるには英語を解せざるべからず、獨逸文學に通ずるには獨逸語を解せざるべからずい。翻譯によりて英獨の文を窺ふは、既に止むことを得ざるものにい。さればシヨオベンハウエルは希臘、拉甸の文を、獨逸文に譯するを嫌ひて、これを咖啡がはりに「チヒヨリイ」の根を煮るに譬へいひしなり。唯古來製作の能に富みたる詩人が、シルレルが「マクベス」を譯せしを始として、多く翻譯をなし、多く他人の舌を擔ぎまはりしは、或は製作の興なきとき、手を空うせじの心もあるべしと雖、大抵國民に好詩篇を紹介せんといふ誠より出でたるなるべし。又シユレエゲルとチイクとのシユクスビヤを獨逸に紹介したる例の如きも、翻譯といふ、止むことを得ざる業の、文人をして單にこれのみによりて家をなさしむるにさへ足れるを、示すものにはいふべし。かく翻譯の人に尊まるゝは、詩の受用、即ち讀者が、詩人の空想の書き出したるものに近きものを、れのが空想に書き出すこと、これによりて幾分か出来る故にいひむ。筋書に至りては、大にこれと違ひい。詩の筋は殘殺中の魚骨のやうなるものにい。これをも文學史中などには抄し出したるが多くいへども、これは或は既に讀みたる人の思出艸となし、或は未だ讀まざる人に題名を告ぐとて、蛇足を添ふるが如き性質のものかと存い。獨英の文學史は、到底獨英

の文に遊ばざる人に用なきことは、この中の消息を知りたるもの、疑はざるところにて、かの解題めきたる筋書のみを引離しては、其効能頗る覺束なきものには、これにて詩の受用は出来不申。されば大詩人に筋書をなすものなく、筋書を以て家をなしたるものもいはず。されば世間に名著梗概を作るもの少きは、あながち迂濶なるがために、結構なることに目の付かざる故のみにはあるまじく、事によりては、西洋文の形を、止むことを得ざるより、翻譯といふ影にして見することをば爲せど、うの影の影にて、殆形を存せざるやうなるものを寫さんば、意ありて嫌ふがためならんも知れず。かく申せばとて、特に早稲田文學の名著梗概をさして、無用なりと貶しめ言ふにはいはず。早稲田文學には、英文に通ずる書生に、先づかゝる手引草を授くる必要もあるべく、又記者中筋書に長じて、これにて詩の受用を讀者に與ふことを得るやうなる、殊なる技倆ある人もいひなん。さりながら早稲田文學が一般世間の翻譯をなし居るものに對して、何故に翻譯のみして筋書をなさざる、と訝り問ふは、ちとへんなる事には。柵草紙は戯曲、小説などの翻譯のかたはら、先づより哲學上の根據ある現今の審美論を紹介いたし居。これは申すまでもなく、ハルトマンが審美論には、おほより文學の興廢は、すべての藝術の興廢と共に、先づ製作の上にてトすべく、次に外國の名作の紹介の上にてトすべきものにて、文學論はこれに關せず。文學論の興廢は哲學の興廢に伴ふのみに。東西洋いづれを問はず、哲學の根據に拘らざる審美論、文學論らしきもの、藝術の批評、文學の批評などと稱して出でいへども、此方を揚げんがためには、彼方を抑へ、或は流行の波を揚げて耻ぢず、或は強ひて人に殊なる方嚮を取りて、視聽を聳動せんことを是れ圖れるが多く、大抵たわいもなき物、具眼の人は齒牙に掛けぬ事には。この故に柵草紙は、ハルトマン

が審美眼を、評論の標準といたしひぬ。さるを世の人、その評論にて飽き足らず、汝が標準をさながらに出して見せよといふ。出だすは難くもあらぬ事なれば、即ち審美論の譯述をなすことゝなりひき。この物原來雜誌に掲ぐるに宜しきものにははず。うは詳なるがためか。あらず。若しうの詳なるを嫌はば、かの哲學史の體裁を學びて、抄せむこと難くもいはず。我が宜しからずといふは、これ證據に證據を疊ねたる、うるさき一部の哲學書なればに。うの宜しからざるを知りながら、猶且稿を續ぐものは、所謂たねを隠すといふ、いやなる嫌疑を避けむがために。かの山房論文の如き我評論を解するものは、これあらでも解すべく、又解すること能はざるものは、これありとも解せざるべし。されば我怠を責め玉はんよりは、我が事多きを笑ひ玉はんこり然るべけれ。柵草紙には文學史に關する材料を蒐集いたし居。我國の文學史にては、井上通泰君が桂園諸家の傳をたづね出して、後桂園叢書と題して世に公にせられたるひひき。又おなじ人の歌人傳も篇を累ねて出でをり。歐羅巴文學史中にては、潮來宮本君多く佛蘭西詩人の傳を譯せられひひき。獨逸のレッシングが略傳シルレルが履歷のかたはしをば、われ抄出しひひぬ。これより後、魯西亞の文學史をば探美矢崎君出さるべくい。ことごとくしく欄を立つることこそいはね、第一號發行の初より、歴史上の討究をも目におきて、しばらくも等閑にせし事はいはずりき。柵草紙には又今人製作の詩文をも撰びあつめ。小説には露伴幸田君の艶魔傳、器堂市村君の數奇者、落合直文君の諸作、浪花諸家の小品、拙作のうたかたの記杯ひひき。漢詩をば東郭落合君閱せられ、和歌をば桂園の耆宿たる松波遊山大人撰び玉ひき。これより後は松浦辰男大人も一臂の力を添へむのたまへり。連歌、俳諧をもをりくは取り候ひき。新體詩といふものをも、あながち斥くるにはあらねど、其

様とこのへりとおもはるる者、多く獲がたきを奈何せん。かく風格の未だ定らざるものに對しては、特に選政を嚴にせざるべきは、みだりになり、無作法になり申すべし。世間の雜誌中には、所謂新體詩家の「アナルヒスト」跋扈するはいふもさらなり、和歌といへども、手爾遠波、假名遣だにこそ、漢詩といへども、平仄韻法の違へるさへいふと。柵草紙は、これ等の弊には、今までも陥らず、今より後も陥らざるべくい。次に柵草紙は隨筆の類を出し。基督教派の文士に、名も知れぬ人の隨筆と嘲られたるが即ち是に。隨筆は素より大著述にはいはず。然しながら、文壇には古より此類の文字を容れ來りて、後人はこれによりてさま／＼の考據をなすことを得、又文學史などを作るものは、多く材料をこゝに取るが習に。柵草紙に隨筆を出す諸君には、萬葉體の歌を以て名を知られたる井手曙覽氏の嗣たる井手今滋君、桂園派の三浦千春君、花月新誌の時代より文壇を去り玉はざる裕堂武田君等、皆一概に名も知れぬ人と言ひねとすべきにはいはず。瑕瑾ありとれもひ玉はゞ、三浦君に對する、田舎生と名のり玉ふ某君の如く、教へ諭さんところせらるべけれ。徒に好憎によりて褒貶せらるるは奈何いはん。今迄柵草紙に出でし隨筆をば、かの百家説林中に加へても、優りこそせめ、劣りはせじとれもひいへば、これよりも續き出て申すべし。以上餘所の雜誌にて欄と云者に分れ居りし諸區域を、柵草紙の上にて數へ試みいひき。若しかゝるものを人に見せはゞ、手前味噌とも申すべく、賣藥の効能がきにも比べらるべくいへども、その手前味噌のあだほめにあらず、實利を思ひての効能がきにあらざるをば、御承知下されい信じて、憚らず申し述べ。最後に申し添へたきは、柵草紙に雜報めきたるものなき事に。近頃國民之友無名の批評家をはじめとして、この文の記者まで、柵草紙と早稲田文學とを對比し、早稲田文學に

海の内外の文學界の景況を報道する欄あるに、柵草紙にかゝるものなきを闕典といはしむもの少からず。これも上にいへる名著梗概の有無と似たることに。批評は談理に。世間の文學雜誌に批評あり、談理あるに當りて、早稲田文學は記實といふことを唱へ出し、その記實の一部として多く雜報めきたるものを作りはじめ。うれば早稲田文學の特技として立てて宜しくいへども、かゝるものゝ柵草紙に出でざるを怪むはれろかなる事に。柵草紙に所謂記實文として、雜報めきたる事を出さざるは、これも見る所ありての事に。海内海外の文界に、言ふべきほどの事あらば、評論するが柵草紙の本意なり。上方審美論のところにて申したる如き、某の「レキユウ」、某の「マガチン」に見ゆるえせ批評を譯せんは難くもあらねど、いとうるさく、これを認めて今の西洋の風潮はかく、と斷せんは影護かるべくい。又海内にては、大坂をはじめとして、津々浦々まで文學雜誌といふもの出で居を、正直太夫が所謂太郎左衛門新田文學まで併べ舉げて、我國の實況はかく、といはんも面倒に。かゝる事は、柵草紙といふ我儘者の作すこと能はず、又作すことを欲せざるところにい。かゝる雜草の中より、大骨折りてめでたきものを摘み取り、美しく籃に盛りて出さるゝ、早稲田文學はまことに結構なるものなること勿論にいへども、柵草紙にも其骨折をなせといふには及ばざるべくい。右御答までに、次第もなく書き付け申す。御一覽の上これに懲りず、御教誨あらまほしくい。不宣。(明治二十六年五月)

解嘲

空像記に就きて(澤水局)

吾嘗て道樂屋人が此頃の物を讀む。中に曰ふあり。鷗外が空像記(水沫集一面)は後撰の戀歌に、うたかた人に逢はで消えぬやとある如く、容易に感服する批評家あるまじと。道樂屋人が彼記の批評家に逢はず、感服すべき批評家に逢はずといふ例に、古歌の人に逢はで消えぬや、豈人に逢はずして消えぬや、應に人に逢ふべしといふ下半截を引き來りしを見て、吾は唯放什麼屁と叫びしのみ。然れども彼記に感服するものなからむと云ふは、さもあるべしと思へり。後不知庵が露伴子に與ふる書を讀む。曰く空像記の一口劍を下ること數十等と。夫れ鷗外何人ぞや。露伴何人ぞや。鷗外は洋臭鼻を衝く煩惱殻を負へる蠢東西に非ずや。露伴は貝葉檀林の千萬朵を折り來りて、新日本の文學界に正法眼を開きたる大和尚に非ずや。一片の枯木に澹庵人を酔はしむる春を現せし風流佛と云ひ、半塊の朽骨に裸媼儂を惱ます夢を見させし對獨體と云ふも、皆露伴が出類の技、超群の能を表するに餘あり。况や其一口劍に至りては、光銜眼を眩し、氣は星隲にせまり、國民之友の一冊案頭に躍て鳴るに非ずや。頑たるかの鷗外、語を舞姫の篇に托して、僅に面上簿書の塵を洗はんと企て、迹を狂王の傳に寄せて、竊に胸裡劍戟の音を歛めむと謀る。不知庵二者の間に於いて僅に數十等を設くるものは何ぞや。かの寒暑鍼を見よ氷蒸二點の間、列氏は八十度を分ち、攝氏は百を分つ。所謂一度の其懸隔を同うせざるなり。想ふに不知庵の一等は、果して幾億由旬なるか。恐らくは其相距ること、彼洋臭學者の横陳の八字を以て描出する無限の數にあらざば、吾人類の眼耳鼻口の得て知ること能はざる無際の空ならむ。鷗外若管窺蓋測して、所謂數十等手に唾して攀づべしとおもひ、妄に覬覦の念を生ぜば、是れ不知庵が漫然吻を突く言より甚き禍階を生ずるならん。吾は不知庵が無限無際の處に定規を當てんとする不都合を晒はずんばあらず。抑吾又聞けることあり。不知庵は今

の小説家の拙を説かむとすることに、第五流第六流等の字面を使ふと。第一流第二流は古人も亦これを言ふ。シエクスピイヤ、ダンテ、ギョオテの一流たる、バイロン、ボツカチオ、レッシングの二流たる、或は之を承認するものあらん。不知庵が尊崇せる西鶴、京傳、三馬は第三流乎、第四流乎。然らば則鷗外の徒或は第五流第六流の尊きを見て、復りの卑きを見ざらんとす。想ふに流の相距ること、又等と等しからむ。而れども吾を以て今の蟻垤也似たる文學界を見れば、或はかの鷗外に似たる狂妄作者ありて、不知庵が流の階と等の梯とのために、脛を折り顛を摧かんと計り難し。豈危からずや。吾は序に不知庵に忠告す。曰く子若眞に一口劍の本阿彌たらんと欲せば、必ずしも一年を待つと云はずして、唯這般の階梯を捱倒し去れ。

答忍月論幽玄書

ランゲが古日本の春詞を寄寄せらる。こは嘗て獨逸に在りし時にも見しが、ねふせの如く注脚じみたる處ありて別段面白からず。然れども我邦の叙情詩の西洋に傳はりしは、ド、ロスニイが「アントロジイ、ジャボ子エス」ヂッキンスが百人一首の外には聞ざりしゆゑ、ランゲが功も没すべからず。君が抄録のまゝを我柵艸紙に編入れたるは、讀者にも我古今集春の部の獨逸に行はるゝを知らせまほしうての業になむ。

國民之友の九十八號に出でし空像記の評言、たしかに披誦しぬ。所謂皮相の見とは、獨り謙退の辭のみにはあらで、其外形を評して、其内面に及ばずといふ趣意を表し給ひぬとれもへば、大に是れ咀嚼するに堪へたり。

夫れ空像記豈君が月旦に上るべきものならむや。不知庵嘗て驢黃の相糝すべからざるを忘れ、一口

劍に比べて等級づけしたる時、澤水鳥起ちてこれを嘔ひしに、江戸紫記者愚痴なりと嘲りぬ。心理學上より愚痴の定義何如と問はば、我が能く遽に應ふる所ならねど、江戸紫の同じ卷に、嶺春風とやらむが新學士某を嘲らむとて、故人に逢へば下眼つかひに顔を反らし、縁者を見れば會釋の頭重くして挨拶また高ぶれり、我もまた其蔑如を忝うして、心竊に學士が錦魚の尿を牽くを卑むと記したるなど、或は愚痴といふものゝ適例ならむか。それとは違ひて、彼水鳥が文の主眼は、江戸紫記者も看破せし不知庵の諛心を擗發せむとする處にありしなり。想ふに彼も評直の惡徳なるを知らざるにあらざるべけれど、文學的批評の法に關することなれば、止むことを得ずして辨せしならむ歟。我は不知庵が果して眞に諛辭を成しや否やを知らねど、若し諛心あるにあらざれば、奈何ぞ故らに分明なる批評を下さずして、人をして猜貳せしむる。若し彼江戸紫記者は例の俳諧虛實の法を使ひ、故らに實を避けてこれを嘲りぬといはば我が知る所にあらざるのみ。知らず、君が意以て奈何となすかを。

空像記の非議に逢ひしこと既に斯の如し。故に我が國民之友の評言に接したるや、江戸紫記者が之を讀みておもはむほども心許なく、朔籟木に號びて爐火灰滅したる時も、汗我背に浹からむとしたり。奈何といふに君は我納豆流の文を以て珠盤を走る如しとなし、我妄想の産出したる狂人を以て能く狂の本然を穿得たりといひ、終始これを賞揚し玉ひつればなり。さはれ君が賞揚を被ふりて、徒に面目ながりて止まむは、友朋砥礪の道にあらざるべし。いで君が評言を見て思寄りし事一つ二つを擧げて、以て教を請ふ地をなさむ。

君は我文を評せむとするに當りて、三點に注視し玉へり。

曰文章。

曰外形。

曰内面。

文章には語法より文勢までを含蓄せしめられたれば、是れ尋常詩形と稱するものならむ。露伴子が井上通泰氏に與ふる書一たび出でしより、詩想を先にして、詩形を後にする理に心づきて、これを論ずる人少からず。君は更に一步を進めて、文章は末技なりと斷言し玉ひぬ。讀賣新聞に餘情生といふものあり。曰く文到らざれば、思想を達すること難ければ、苟も小説家たらむものは、單に思想を奉じて文章を末技視して可ならむや。我未だ舌腐爛して能く言ふものを見ざるなり。我此言は實に文想二者の兩全を望む意にして、毫も浮文虛詞の小刀細工を以て、得たりとするものにあらずるなり。されど文章を以て、小説家の末技とするものゝ量見は、聲を揚げて哄とばかりに笑はざるを得ざるなり。此人は大に君と意見を殊にする如し。空像記の文は固より言ふに足らざれば、姑く度外視して、小説の文章に對する我望をいはば、餘情生が全兩説と相似たるものならむ。君は獨逸の典籍に通じ玉ふことなれば、必ず彼國近代の單禪中にて第一といはるゝ「ロメオ、ウント、ユリヤ、イム、ドルフェ」を讀みたまひしならむ。果して然らば又うの推重せらるゝ所以を尋ねて、少なくとも半ば散文の精巧なるに因れるを、承認せざることを得玉はぬなるべし。露伴子が意は詩想を以て常住すべきものとなし、詩形を以て轉變すべきものとなしたれど、必ずしも詩形を作ること未技とのみはせざりしなり。

評言中文章に關する所は、僅に百分の二許なりしは、これを末技と看做したまひしためなるべければ、尤の事なり。而れども君が小説の内面にも、矢張百分の二許を與へしのみにて、残れる百分の九十六許を悉く外形といふものに委ね玉ひしは、内面を輕じて、外形を重せし如く見えて、面白か

らざるに似たり。されど君は輕すべきものゝ必しも細説すべからざるに非ずして、重すべきものゝ必しも略叙すべからざるに非ざるを擧げ、又輕きものを問ひ、重きものを問はざるも、批評家の勝手にて、空像記の外形に取るべき處ありしゆゑこれを賞揚したれども、其内面は言ふに足らざるものなる故、姑く不問に附したりと云ひて、徳を我に賣られむも計り難し。

此説は固より動かすべからず。批評家の勝手にすることを得べきものは、我これを君が勝手に任て止まむ。唯我が君に向ひて質さむとするは、外形と内面との性質のみ、其差別のみ。

君の所謂外形とは何ぞや。評言の初に、再三熟考して、空像記の成立したる所以、その精神の注ぐ所を會得したれば、これを論議せむと前觸れし玉ひしを見、又記中に狂者の本然を看破したるところありと斷じ玉ひしを見るときは、外形の範圍は極めて遠大にして決してこれを輕すべきものにあらずと思はる。詩の成立したる所以、詩の精神の注ぐ所、詩中の物の本然を看破したる處等は、詩の想體なることは論を待たざるべし。されば君が外形と名くるものは、想體に反對する詩形にあらざることも亦明なるべし。况や君は已に文章の二字を以て詩形を網羅し盡し玉ひしをや。

我既に君が詩形を以て文章となし、想體を以て外形とし玉ふを知る。此に於てや、君が所謂内面といふものゝ果して何物なるかを怪まざらむと欲するも得ざるなり。

君の言に云く。空像記の賞賛すべきは、唯其外形についていふのみ。其内面の果して健全にして、不朽幽玄の意志精神なるや否やは別問題に屬す。是より推して考ふれば、内面とは小説の意志精神の事にて、それに健全なるあり健全ならざるあり、不朽幽玄なるあり不朽幽玄ならざるあるに似たり。

意志精神の語につきては、意思を「キルレ」の事かともれもひしが、假令審美上に理想主義と實

際主義との二語を襲用して、ハルトマンが抽象的理想主義と具象的理想主義とを以てこれに代へずとも、實體其物に美あるに非ずして、實體を想の側より見たる處に美あり(自然美)、又うれしと見ゆる實體を假來りて、それと見ゆれど實體なき想を示す處に美あり(術美)とするときは、審美上に「キルレ」即ち働くべき力を着くる地あるべからず。

次に思ひいだしは、君が嘗て意思と書して、「ガイスト」と傍訓せしことなり。精神といふ語も、尋常「ガイスト」を指すを見れば、所謂意思精神は均しく是れ「ガイスト」ならむか。果して然らば、意思精神の想に於けるは、猶形の影に於けるがごときものならむ。而して意思精神の美術に顯はるは、決して彼「キルレ」即實體の働力の如きものを以てすること能はず、必ず想を以てすべきものなれば、(ハルトマン)云想は美に於て絶對的精神を表し得て餘す所あることなし)審美的の批評は想體を究めて止むべきのみ。

君が所謂健全と不健全とは、想體に於て認むべく、其所謂不朽幽玄も亦想體に於て認むべし。君既に想體を外形と名けたれば、健全不健全、不朽幽玄非不朽幽玄、皆是れ外形中に存するものなり。美術の境界には、固より健全にして、幽玄にして、不朽なるものあり。今のこれなきは、美術として崇ぶに足らず。今煩を憚るゆゑに、此健全而幽玄而不朽なるものを幽玄と稱すべし。而してこれに當つべき洋語は則ち「ミユステリウム」ならむ。

我は實に此幽玄の想體即外形中に存して、これを詩形即文章と想體即外形とを離れたる一種の内面といふものゝ中に求むることの非なるを知る。而れどもこれを明にするには、先づ幽玄の何物たるかを解釋せざるべからず。願くは君我が美術の幽玄を説くを聴け。

小竹散人曰く。玄可析乎哉。可析非玄也。雖然非析則人莫知玄之不可析矣。美術の幽玄も亦析すべきものにあらねど、これを析して、以てその析すべからざるを知らしむるは審美家の務なるべし。學者の美を求むるに、曲線に於てするものあり。活動に於てするものあり。是れその比較的に抽象的なるものなり。單純なるものなり。淺近なるものなり。漸く進みて類想に至り、又進みて個想に至るときは、其境地次第に具象的になり、複雑になり、遼遠になる。試に詩文を以て例となさむに、類想を表はしたる文は、薄命の佳人を寫し、惡棍を寫し、忠臣孝子を寫すなど、一々様に依りて胡盧を畫くものなれば、其形迹悉く理路の尋ねべきあり。若し夫れ結象の度これより進みたる個想を顯す文は、卷中の賓主うれ／＼の形迹ありて、その理路は却りて摸捉しがたきものあり。我邦の淨瑠璃等にて、一個の善人を出したるを見るに、其行當時の「モラル」に負きたるときは、直ちにこれを變心と見做し、奈何なる天魔が見入れし歎などと輕々説去りて、毫も其性質に應に此行あるに至るべき處あるを明にせざりしなり。是れ抽象的善人のみ。今の作家の作る所は、多少具象的意義に心を用ゐたりと見做して、無妻主義の俊橋は妻を娶り、意氣地なき正藏は名刀を鍛ひ、教育を受けし志保子は私窩兒に等き行をなすと雖、作者はこれを其個々の人物の性質より割出して、理路少しく聞き邊にても、人をしてその然る所以を知らしむ。君は嘗て我豊太郎が性質を評して前後矛盾となしたることあり。是れ固より我が小説の拙きためなりと雖、我も亦始より豊太郎が言行をして理路井然たらしめむとは期せざりき。小説の拙なるや、其理路の尋ねがたきは、作者が具象的意義を得たるためならずして、書中の人物俄に己れが性質に乖きたる行をなすことあるべし。此拙匠の記事明晰ならざるは、他の具象的なるために理路聞きものと同一視すべきにあらず。かれは到底其然る

所以を知るに由なしと雖、此は苟も詩眼を具へたる人に逢ひて、渙然會得せられずんばあらず。狭くいはば詩中の幽玄、廣くいはば美術中の幽玄、是れ具象的の美に於て理路の極端處に存するものなり。詩にても美術にても、此幽玄を會得するを悟といふなり。美術の天地には結象のために理路聞くなりたる外に幽玄あるべからず、此幽玄を知るより外に悟あるべからず。

漢詩には嚴羽卿一悟字を得て、李獻吉一法字を得たりなど稱し、又禪學貴妙悟、詩道亦貴妙悟、然悟有三、有透徹、有分解、有一知半解と氷川詩式にいへる如き、審美的に詩理を尋釋する謂にもあらず、又一詩につきて幽玄なる乎幽玄ならざる乎と品評する謂にもあらず、要するに詩才の高下を論じて其神來の時に於ては、能く幽玄の境に入る所謂「シェニイ」を以て透徹の人となすのみ。詩筆に靈ありといひ、描寫神に入るといふなど、苟くも詩の品評上に幽玄に遇ふことあらば、必ず理路聞處に於てすべし。

扱幽玄は何故に健全なるべきか。君は必や癩病は健全ならざるゆゑ、對獨體の意思精神健全ならず、勞瘵は健全ならざるゆゑ、殘菊の意思精神健全ならず、バツリヤ王が癩狂は健全ならざるゆゑ、空像記の意思精神健全ならずとはせられざるべし。所謂健全は即是れ詩體の健全、又詩想の健全なるべければ、其所在は自らこれを具象的意義の中に求めざること能はず。果して然らば幽玄裏には詩の健全存すと謂ふも可ならむ。

又幽玄は何故に不朽なるべきか。君嘗て想實論を著して、オ、ベルブライエルが言を引き玉ひしことあり。曰く、セオフラストス氏が其風俗を摸したる所のものは亞善人なり。故に此書（人物の繪畫）は實に二千二百有餘年前なる人物の肖像を畫けるものなり。然れども吾人が此繪畫を眼前に展

覽するときは、其中に於て吾人が宛然たる肖像を見、以て一驚を喫するにあらざるや。吾人は現に其中に於て、吾人の時輩なる朋友仇敵の容姿を見るにあらざるや。數千年以上の人と吾人との此驚くべき、此全然たる類似は、抑亦何のためぞ。蓋し作者は特り亞善人を寫したるにあらざる、皮を貫き核に至り、人類の微を發して、亞善人の假面を被らしめ、而してまた國風、年齢、男女、職業を問はざればなり。語中に皮を貫き核に至り、人類の微を發すといへるは、詩に個想を出すものに非ずは、能くならずべきにあらじ。されば古の大匠が其作をして能く星芒劍華の如く、千載潭滅せざらしめしは、自ら結象の美を得て歩を理路闊處に着けたるためならむ。君云はずや。大詩人は事を考へ物を察して、能く幽玄を反照す、而して小詩人はこれに反す。大詩人はいづれの地帯、いづれの時代にも讀まれむことを欲し、永遠に適應貫通する入神的の文字を出さむことを勉む。想ふに幽玄の自ら不朽なるべきは、君既に知り玉へり。氷川詩式に又云く觀詩、能知身命落處、與夫神情變化、意境周流、亘天地以無窮、妙古今而獨往者、則未有不得其所以然、是の謂なり。

夫れ幽玄の物たる、詩形中に寓すべからず、君がこれを文章に討めざるや宜なり。然れども君が之を想髓即外形に索めずして、去て所謂内面といふものに問はむとするは何故ぞ。我眼靈明ならずと雖、看て此に到りて、現今文界の一病弊の將に君を襲はむとするを知る。是れ我が非を飾り短を護る嫌あるを知りながらも、猶世俗の諛を顧みずして、敢て君に答ふる所あらむとする所以なり。

我所謂病弊は主として二あり。曰く文學を以て作善の方便となさむとするもの、此方嚮の著きは日本評論其他或種類の宗教新聞なり。曰く文學を以て求真の方便となさむとするもの、此方嚮の著きは日本之文華なり。君は嘗て屢日本評論等の宗教新聞に反対し玉ひしをねもへば、詩の善の筈にあ

らざることは、明にこれを知り玉ふならむ。詩既に善の筈にあらざる、豈又眞の筈ならむや。詩人をして信者たらしめむと欲するも、これをして哲儒たり、又禪客たらしめむと欲するも、其門達へたるや、異なることなからむ。

毒朱唇は釋迦牟尼を以て大詩人となしたり。世尊の空想、熱帶地方の花卉樹木の如く鬱蒼たるは、誰かこれを認めざらむ。これを片側より見て、詩人なりとせしは、露伴子が詩のみ、小説のみ。日本之文華は則ち却て喊聲を揚げて曰く。文學者試にねもへ、自家の胸中果して一點の禪味ある乎、一幅の哲理ある乎、心中毅然たる大信仰ある乎、眞神の實在を信する乎、佛神の造化力廣大無邊なるを信する乎、釋迦牟尼、クリストの如き思想ある乎、日蓮、西行の如き想念ある乎、老子、莊子、カント、ヘゲルの如き觀念ある乎。我等はこれに對して云はざるべからず。釋迦牟尼、基督、日蓮、西行、老子、莊子、カント、ヘゲルは、曾て何の彫刻をなし、何の繪畫を作り、何の詩賦を著ししかと。彼等は實に美術的價值あるものをば作らざりしなり。これに反してミケランジェロは宗教の祖に非ず、而れども其造術は千古に比類なし。シエクスピヤの淫酒博奕を事としたる、曾て哲學を究めたるものにあらざる、而れども其戯曲は自ら百世の師たり。江戸紫記者が梅花道人に向ひて。見よや、世間俗を棄てて一物なし。鳥俗に啼き、花俗に笑ふ。雪俗を去て黄に、水俗を去て逆流す。我縷々道人に勸むるも、亦此一俗字に外ならず。杯いひしも此點より看來れば、眞に理なきにあらず、道人の出家は別に因縁ありと聞けど。

漢土の詩人が殊に妙悟を説けることは、上にも云ひしが、是れ詩を禪なりとせしにあらざる、詩を禪に比べしのみ。詩法纂要に見わたる吳喬が書に云く。嚴滄浪之説詩、崇貴妙悟、如何。會曰。作詩

者於唐人無所悟入、終落宋明死句、貴悟之言、是也。但不言六義從何處下手而得悟入。彼實無見於唐人、作ふ妙恍惚語耳。且道理之深微難明者、以事之粗淺易見者、譬而顯之。禪深微、詩粗淺。嚴氏以來深微者譬粗淺、既已顛倒、而所引臨濟、曹洞等語、全無本據。亦何爲哉。禪を深微となし、詩を粗淺となす、是れ我が信ずる所に非ずと雖、詩人の禪を説きしは、譬てこれを顯さむとせしに過ぎざること、これにても徴すべし。

美を詩中に求めて、其想髓の外に出で、又其想髓の背後を摸索するものは、實に的なくして矢を發つに殊ならず。若し露伴子紅葉山人の小説中に、正藏俊橋が顛末を寫得て、幽玄の境に入りたりとせば、露伴が大悟道の人にして、別に禪味を正藏が形迹に寓するを須わす、紅葉が大哲學者にして別に哲理を俊橋が行狀に寄するを須わす、其能事は業に既に畢れり。空像記は固より幽玄なること能はざれども、君が評の如く狂者の本然を寫得て、又情ある人をして悉く泣かしむることを得たりと假定するときは、豈黒幕を切て落したる背後(内面)に、別に健全而不朽而幽玄なるものあることを得むや。

君若世間の徒に大觀念の語を唱へて肆口譏彈するものと肩を比べ、露伴子が所謂えらい人と臂を交へて、詩の想髓を外形となし、別に幽玄なる内面を求めむとするときは、終に詩を以て形而上(官能以外)の論説とせむ乎、個想を抛て全想を求め、四望寥廓たる境に出でむ乎、一指豎て來て這裏に大稗史ありといふに至らむ乎、是れ豈美の乾坤を以て坵墟となすものにあらずや。ハルトマンの曰く。哲學は明光の如し。輝きて温ならず。宗教は隱火の如し。温にして輝がず。美術は夢中に熾火を見る如し。温なりと感じ、且つ輝けりと覺ゆれども、實に温なるにあらず、又實に輝けるにあらずを得むや。

君が空像記を評するや、末に安子順の語を引いて、諸葛武侯が出師の表を讀みて泣かざるものは、其人不忠なるべく、韓文公が祭十二郎文を讀みて泣かざるものは、其人不友なるべく、空像記の中篇を讀みて泣かざるものは、其人無情ならむと曰はむと欲すとの玉へり。君は固より銀鈎鐵畫の出師表も、一字一涙の祭十二郎文も、併に是れ美術品(詩)に非ざるを知り玉ふならむ。美術品に非ざるものゝ人を泣かしむるは、實體的情感にして、美術品の人を動かすは、審美的情感なり。兩者の別はハルトマン之を性別に求め、エルドマン之を量別に求めたれども、其相殊なることは疑ふべからず。空像記にして果して眞に人を動かすべき力あらば、是れ文學上に出師表祭十二郎文の上

に在るべし。君が鑒識は我が厚く信ずる所なれども、これのみは辭退せざること能はず。餘情生は則ち云く。孔明腕中に昌黎ありたらむには什麼。我は將に曰はむとす。餘情生の文章を愛するや、審美を出で、能辯に入らむとするかと。奈何といふに、韓愈が實情を叙して人を泣かしめたるは、到底辯談的の伎倆に屬すべきものなればなり。

君知るや、此比不知庵は我を俳人許六に比せしを。聞く、許六は一士人に俳を問はれて、我著述は皆一時の戯なれば、その跡なし言に賺されて、我を蕉門の傳燈者なりなど思ひあやまり玉ふなど答へきと。若此話をして眞ならしめば、一篇の直指傳人をして嘔せしむるに足らむ。我は菲才無識なりと雖、未だ曾て心に信せずして、書に筆したることなし。我學問修行は跛鼈の歩も管ならねど、

日ごとに多少の進益あるが故に、昨の是とする所は、今の非とする所なること、或は有るべし。而れども之れを言ひし時は、必ずこれを信じたりと誓ふことを得べし。彼許六を以て我に似たりといひし不知庵は、既に西鶴を知ること、己より精なるものなからむと云ひし程にて、或は西鶴が腹中に下駄穿きて入るは我のみとも云ひかねぬ様なれば、此人こゝ菊阿居士には似たらめ。我は未だ嘗てギョオテが詩腸の底を探り、カントが儒骨の髓を穿ちたりといはず。我審美的思想は、徒にシヤスレル、ハルトマン等か前蹤に依傍して、極めて舛雜卑近なるものなり。吾豈我玄の或は猶白きをれもはざらむや。願はくは君備に我に教へよ。

忍月が再び我に答ふる書を見て

一。忍月は詩を見るに、左の式に據れること、其再び我に答ふる書にて知らる。

外形

|| 文章 + 結構

内面

|| 精神 || 想髓 || 詩心 || 健全 + 不朽 + 幽玄 +

二。忍月云。空像記を読み、再三熟考して、その成立したる所以、その精神の注ぐ所を會得したればこれを論議す。又云。空像記に狂者の本然を看破したる處あり。此評は皆外形に係る。

|| 外形 || 文章 || 結構 || といふ。さらば

外形 || 文章 || 結構

にて文章を除きし跡に、猶結構あらむ。文章の結構にあらざる結構は何ぞ。是れ或は詩材の排置にして、想の區域に屬するもの歟。忍月已に

内面 || 想髓

(文に云ふ、予の所謂小説の内面とは、即其精神なり、精神も迂回して説明せば、所謂想髓と同一に歸せむ歟)といふ上は、右の外形内面相對の式は、改めて左の如くせざるべからず。

外形

|| 文章

内面

|| 精神 || 想髓 || 詩心 || 健全 + 不朽 + 幽玄 + 結構 +

而れども下には、忍月が自ら定めし外形、その自ら定めし内面などに就て論ずるを以て、一に舊式に従ふべし。又云く。詩の成立したる所以、其精神の注ぐ所、其人物の本然を顯はしたる處などは皆想に屬す。而れども其想の區域に於けるや、詩材の排置と交渉なし。さるを猶外形に係れりといふは非なり。

三。忍月云。空像記に對して皮相の判定をなしたり、自ら真に空像記の心を洞見したる者に非ざることを信ず。其内面を別問題に屬すと云ひしは、予を不健全不朽不幽玄なりと曲寫せしに非ず。又云。おのれは只外面を評す。然れども囑外は認めて、内面に及べりとす。此言を得て、我眼の明なるを悟り、人に誇るに堪へたりとおもへり。

囑外云。詩想を精神といひ、又内面といふ。亦可ならむ。一小説の成立したる所以、その精神の注ぐ所、その人物の本然を顯したる手段等は、皆想の區域に屬す、即所謂内面なり。忍月が評其内面に入らずと云ひて、自ら内面に入りたるを知らざりしに、我がそれを評發したるを見て、尙自ら明眼に誇らむとするは非なり。又云。忍月は自ら知らずして、一小説の内面を評し、その外に猶内面の別問題に屬するありといひ、その第二の内面を幽玄不朽健全といふ三素の應に存すべき處なりといへり。幽玄不朽健全、是れ亦想の區域に屬するものにて、彼等若し在らば、忍月が誤

りて外形と倣したる第一の内面にこゝ在るべきものなれ。奈何といふに想外に想なき以上は、第二の内面を那處にか着得む。忍月已に幽玄不朽健全を以て、此着處なき第二の内面に在りとするときは、其幽玄非なり、其不朽も亦非なり、其健全も亦非なり。故に忍月に見出さるゝ幽玄其他の詩素は、(うの非なるために)詩素に非ず。これありといはるゝも榮にあらず、これをしといはるゝも辱にあらず。

四。忍月は亡情強作の詩の卑むべきを引きて文想兩全説を駁しぬ。

隅外云。亡情強作を誦るは、「インスピラチオン」の必要を説くなり。又想の應に全かるべきを説くなり。想の全を求むる心は、未だ必ずしも文の全を求めずはあらず。これにて文想兩全説を駁せむとするは非なり。

五。忍月は虎龍相闘ふなどを外形の大となし、閑居郊行情愛などを外形の小となし、此外形の大小は軒輊す可らずとし、別に内面の大ならむことを求めぬ。

隅外云。外形を文章中詩材の排置の事とする上は、龍争虎闘といふ一邊、閑居漫步若くは愛といふ一邊、此二者の間に反對の意を認むるに由なし。龍争虎闘は大文章、大排置にても寫すべけれど、又決して小文章、小排置にて寫すべからざる者にあらず。閑居漫步若くは愛を文章に寫し、又詩材として排置するにも、大小宜しからざるなきと亦同じ。故に龍争虎闘は外形の大の例とすべからず、閑居漫步若くは愛は外形の小の例とすべからず。又云。龍争虎闘の大は外形の大に非ずして、内面(想)の大なり。閑居漫步若くは愛の小は外形の小に非ずして内面(想)の小なり。忍月が大は審美學上の高(ダス、エルハアベネ)を指し、其小は(閑居漫步に於て)其逸(ダス、イド

ユルリツセ)若くは(愛に於て)其可憐(ダス、アンムウチイゲ)を指すのみ。高と云ひ、逸と云ひ、可憐と云ふ、皆想に屬せずして、何にか屬せむ。龍争虎闘等は内面(想)の大(高)なるに、忍月これを外形の大なりと誤認して、別に内面の大を求めたれど、此第二の内面の大は前にいひし第二の内面の總てと共に着處なし。

六。忍月云。健全の効は千種萬種の想を唯一の象形に綜合統一して、これを散亂せしめざるに在り。」

隅外云。忍月が間接に認めたる文章の結構に非ざる結構、即ち想に屬する詩材の排置は、必ず此統想作用を含蓄せざるべからず。若し實に複數の想を單數の象形といふものに綜ぶることありとするときは、此時前段の内面といふものゝ式は左の如くならむ。

内面

||結構||健全||+不朽+幽玄||

されど複數の想を單數の象形に綜ぶといふは、恐らくは審美的の具象理想主義にて、グリルバルチエルが産美の説に同じかるべし。若し然らば、唯是れ健全ならむ。不朽もこれに依り、幽玄もこゝに存せむ。

七。忍月云。幽玄とは形而上(ユウベルジンリヒ)と「ギョットトリヒ」を合せたるものにして、其妙は言外に存じ、無形裡に存ず。

隅外云。此幽玄の式

幽玄||形而上||ユウベルジンリヒ||+||ギョットトリヒ||

の當否は忍月が「メタフィジック」と其神(ゴット)の説と世に公にせられざる間は誰にも充分には

分るべき理なし。されど此物彼着處なき第二の内面にありといはゞ、忍月が哲學を敲いて、怎麼にして其「ダス、ユウベルジンリツヘエ」と其「ダス、ギヨットリツヘエ」との審美の境に顯來るかを尋ねども、甲斐なからむ。又云。強て神と美術品との聯絡奈何と問はゞ、彼「インスピラチオン」の時、神の美術家に憑りて働作するありといふ外あらざるべし。果して然らば美術品の幽玄なるにはあらで、美術品の製作の幽玄なるのみ。(姑く忍月が「メタフィジック」問題を度外視して云ふ)又云。審美學の根柢は形而上のものより來るべきも、若し忍月にして形而上の妙を詩中に求むといはゞ、是れ形而上の美を立つるなり。否、忍月が語中に言外の妙、無形の妙といふは早く既に形而上の美を立てたるにやあらむ。いと珍し。

八。忍月云。幽玄が詩の外形に存するものにあらずして、實に詩の内面に存することを知れ。

隲外云。請ふ幽玄が彼第二の内面に存するものにあらずして、空像記評中に誤りて外形と認めたる詩中の物の本然を發揮する處に存するを知り玉はむことを。

九。忍月云。平素不明の語を放つて解釋を不可言の一語に一任するを嫌ふ。而れども幽玄のみは是非なし。

隲外云。忍月が幽玄は忍月が專賣乎。忍月を信ずる人は一詩成るごとに、往て這裏に幽玄ありや否やと問ひ、其折紙を領し來れ。

舞姫に就きて氣取半之丞に與ふる書(相澤謙吉)

僕本一木強人なり。深く詩文に通ずるものにあらず。故に嘗て一たび吾友太田豊太郎が舟中にて作りし記(水沫集七九面)を讀みたれど、徒に其事に動されしのみにて、其文の傳ふべきと否を思ふ

に違あらざりき。近ごろ聞けば、隲外漁史といふものありて、此記に題するに舞姫の二字を以てし、これを國民之友の紙上に公にしたりといふ。嗚呼、是れ既に事を好めることの甚しきものにあらずや。而るに今又足下のことさらこれがために辭を費したまふを聞く。知らず其何の心なるかを。僕は舞姫の一篇、其價の幾何なるかを知らず。又これ問はむと欲せず。然れども初足下のこれを評し玉ふを聞きて、猶自ら慰めておもへらく。是れ必ず隲外漁史が好事の癖を戒め、太田生が薄倖の行を卑みて、大に彼等をして過を悔い非を悟らしむるものならむと。之を讀むに至りて、吾望の虚くして足下の言の取るべき所なきを知りたり。

足下のいはく。予は客冬舞姫といへる表題を新聞の廣告に見ておもへらく。是れ引手あまたの(も)しや草紙の雲の通路の如き)女優ならむと。然るに今本篇に接すれば、其所謂舞姫は文盲癡談にして、識見なく志操なき一婦人にてありき。是れ失望の第一なり。(失望するは失望者の無理か)而して本篇の主とする所は太田の懺悔に在りて、舞姫は實に此懺悔によりて生じたる陪賓なり。然るに本篇題して舞姫といふ。豈不穩當の表題にあらずやと。妄なるかな評。足下は陪賓を以て小説の題號に充つべからずとなしたり。知らず此法則は何人かこれを建て何人かこれを守りたるを。トニオ、キダルは主人公なり。而るにアルフォンス、ドオデエはこれに題して戦僧といひぬ。フランツ、パウエルは主人公なり。而るにフリードリヒ、ハルムはこれに題して「マルチバン、ライゼ」といひぬ。戦僧は主人公を殺すものに過ぎず。ドオデエは猶これを取りて題としたり。ライゼは主人公に殺されしものに過ぎず。ハルムは又これを取りて題としたり。就中「マルチバン、ライゼ」の一篇の如きは、其正筆の叙事、既に主人公がライゼを殺したる後に起りて、彼が暗密にライゼの鬼を見るに終

れり。されど僕は未だ評者のこれを不穩當の表題といひしことを聞かず。凡小説の題は詩の題と何ぞ擇ばむ。篇中の物一として取りて題とすべからざるものなし。一木一石の微も亦可なり。何ぞ况や人物をや。何ぞ况や陪賓をや。唯之を撰ぶに巧拙あるは、趣を解すると否とのためなるのみ。獨り足下は陪賓を以て題となすに足らずとしたり。其妄一つ。

足下は又舞姫の文盲癡騷にして、識見なく志操なきを見て望を失ひたり。敢て問ふ小説の表題に取られし人物は文盲癡騷なるべからず、識見なかるべからず、志操なかるべからず、若くは足下の所謂引手あまたならざるべからず、又雲の通路とやらむの如くならざるべからざるかを。文盲癡騷識見なく志操なきものはナ、に若くはなし。佛蘭西の大家たるゾラはこれを取りて題としたり。而れども人其自然派の傾甚きを嫌ひて、其題號を病とせず。僕不敏にして未だ雲の通路の何人なるかを知らず。唯エリスが頗る卓氏の文君、楊家の紅拂に似たるを知るのみ。想ふに足下も亦未だ必ずしも舞姫を引手あまたの女優ならざるべからずとはせざらむ。足下は其或は應に然るべきを揣りて、其然らざるを見たるが故に、失望の歎をなしたるのみ。是實に失望者の無理ならず。而れども僕は失望者の無理ならざるを知ると俱に、大に囑望者の無理なるに驚きたり。囑望者の無理なるに驚きたるに非ず。囑望者が己の望を囑したることの謬見に出でしを省みずして、却りて人を責むるに驚きたるなり。夫れ舞姫の題の世に出たるを見て、足下が引手あまたの女優を想像したるは、固より咎むべきにあらず。既にして舞姫の出づるや、足下が其引手あまたならざるを見て失望したるも亦咎むるに足らず。而れども是れ足下が心中の魂膽のみ。鴈外漁史も太田生も興り知る所にあらず。鴈外漁史は縦令舞姫の題を出したりとて、引手あまたの女優の傳を公にすべき責任をなせばなり。

足下これを以て命題者を責めむと欲す。其妄二つ。

然りと雖是等は皆鴈外漁史が杜撰なる命題より起りしことなれば、僕は足下に向ひて深く責めむと欲せず。足下の太田生が性質を説き玉ふ段に至りては、則ち更にこれより甚しきものあり。足下の云く。本篇二頁下段、余は幼なきころより嚴重なる家庭の教を受け云々より以下六十餘行は殆無用の文字なり。何如といふに本篇の主眼は太田其人の履歴にあらずして、戀愛と功名との相關にあればなり。彼が生立の状況、洋行の原因、就學の有様を描きたりして、本篇に幾千の光彩を増すか。本篇に幾千の關係あるか。予は毫も之が必要を見ざるなりと。僕は已に舞姫の光彩ありや否やをだに知らず、これを増すべき字句のありやなしや、能く知るかぎりにあらねど、此六十餘行を分析すれば、一として太田生が在歐中の命運に關係せざるものなし。先づ太田が出身、學位を受くること、官命を帯びて西に航すること、叙して十一行中に在り。これなくば誰か太田の何人なるを知らむ。次の三行には航西の途を叙したり。こゝまでにて太田が母の事、明に見ゆ。これなくば誰か太田が母の死を聞きて伯林に留まる心を解せむ。伯林の境を叙すること十九行。此熱鬧の狀富麗の景なくば、後の寂寥荒漠の天地は遂に伯林の本色とや思はれむ。これより下二十九行は太田が公命を帯びたる性質を略叙して、忽ち又これを撤去したり。彼が政治家法律家を以て自ら居らずといふ處は、其「ロマンチック」的生活に傾く張本ならずや。太田生の履歴が一篇の主眼にあらずといふも、太田の履歴なくば誰か彼が遭遇を追尋することを樂まむ。さるを毫も其必要を見ずといふ。其妄三つ。足下は又太田生の性質を以て、前後矛盾、後に反對したりと云ひ、前提と撞着したりと云へり。若し前提を以て「プレミッセン」といふ論理上の術語なりと看做すときは、我何故に足下が太田生の言

を解して、我心は臆病にて物觸るれば避けむとす、故に我に果斷あり、我は人に抗抵すと云ふことなしたるかを疑ふ。想ふに足下の所謂前提は別に一義ならむ。さて太田生が思慮はまことに常なし。うを足下を待ちて知ることかは。彼は自ら云く。學問こゝ猶心に飽足らぬところも多かれ。浮世のうきふしをも知りたり。人の心の頼み難きはいふも更なり、われとわが心さへ變り易きをも悟りたり。是れ全篇の發端に見えたる太田生が自ら下したる總評なり。さて彼が心の遷りかはるさまを略叙せむに、彼は郷を出づるをり、おのが有爲の人物なることを疑はず。またその心のよく忍ぶべきをも深く信じたり。舟の横濱を離るゝまでは天晴豪傑と思ひしなり。已に郷を離れしをり、悲泣して禁ずること能はず。是れ一變。その伯林に學べるや、政治及法律を吾事にあらずとして、歴史文學に心を寄せ、奥深く潜みし眞の我は次第々々に表に顯れて、昨日までの我ならぬ我を攻撃するに似たりと思ひぬ。其言の拙なるは麴亭の指斥せし如くなるべけれど、彼は自らかく思ひしなり。是れ二變。彼の輕薄巧慧なる同郷子弟の間に立ちて呆然自失し、我心はかの合歡といふ木の葉に似て、物觸るれば縮みて避けむとす、我心は臆病なり、我心は處女に似たりといへる、是れ三變。彼が一たび官長の縛を脱して自由の身なりとおもひしに、舞姫に馴染みて淪落せし後、忽ちおのが運命の絲天方伯の手中に在りといふことを悟りぬと思ひ、又これに果斷ありと自ら心に誇りしが、此果斷は順境にのみありて逆境にはあらずといへる、是れ四變。この幾度の自問自答は、太田が所謂事業家にあらずして、空想に富みたる畸人なることを見るに足れり。彼ゴンチャロフが崩岸の主人公レイスキイが忽にして自ら詩人なりとれもひ、忽にして又畫工なりとおもひ、又忽にして彫工なりとおもへるは、太田生が賦性に似て更にこれよりも甚しきものなるのみ。唯太田生

が余は守る所を失はじと思ひて、おのれに敵するものには抗抵すれども、友に對して否とはえ對へぬが常なりと自註せしは、即是れ彼が合歡木に似たる所にして、其所謂抗抵は猶合歡木の葉の縮みて避けむとすることし。何の矛盾かあらむ。又何の變易かあらむ。足下が太田生の言に前後の變あるを見たるは眞に善し。然れども其認めて變となしたるは、未だ必ずしも悉く變ならず。况や其前後の變を以て矛盾となし、かゝる性質はあるまじきものなる如くいひなしたるは、足下の情を解せざること僕よりも甚しきを見るに足る。其妄四つ。

足下は又メルクが少壯のギョオテを評したる語を引て以爲らく。予はメルクの評言を以て全く至當なりとは言はず。又舞姫の主人公を以て愚物なりとはいはず。然れども其主人公が薄志弱行にして、精氣なく誠心なく、隨て感情の健全ならざるは、予が本篇のために惜む所なり。何をか感情といふ。曰く性情の動作にして意思考察と共に詩術の要素を形くるもの即是なり。蓋し著者は詩境と人境との區別あるを知て、之を實行するに當ては、終に區別あるを忘れたるものなり。薄志と云ひ、弱行と云ひ、精氣なしと云ひ、誠心なしと云ひ、感情健全ならずと云ふ、皆當れり。されどかゝる性質の人を以て詩材となしたるを人境と詩境との區別を知らずと云ふ、シエクスピイヤも「ハムレット」を作りしために人境と詩境との別を知らぬ人によ數へられむ。况や「エルテル」を作りしギョオテをや。其妄五つ。

足下は又以爲らく小心、臆病、謹直、慈悲、知恩、解情の人は須く「ユングフロイリヒカイト」を重ざべし。太田生は此等の情を具へたり。故に彼は宜く「ユングフロイリヒカイト」を重ざべし。此論法は頗る正し。太田生は實に「ユングフロイリヒカイト」を重じたり。故に彼はエリスと交ること

久しくなるまで、其「ユングフロイリヒカイト」、其處女たる性を保護せしなり。其言に云く。われ等二人の間にはまだ癡騷なる歡樂のみ存じたるを。又太田生はエリスが「ユングフロイリヒカイト」を傷けたるを、これをわのれが悲痛、感慨の刺激によりて常ならずなりたる腦髓に歸せしなり。然れども足下が直に上の「ユングフロイリヒカイト」の論の末に語を添へて、今其人物(太田)の性質を見るに小心翼々たる者なり、慈悲深く、恩愛の情に切なる者なり、「ユングフロイリヒカイト」の尊重すべきを知る者なり、果して然らば、真心の行爲は性質の反照なりといへる確言を虚妄となすにあらざる以上は、太田の行爲即エリスを棄てて歸東する一事は、人物と境遇と行爲との關係支離滅裂なるものといはざるべからずといへるは、文理少しく透らざる嫌あるにあらざるや。處女を敬する心と、不治の精神病に係りし女を其母に委託し、存活の資を殘して去る心とは、何故に兩立すべからざるか。若太田がエリスを棄てたるは、エリスが狂する前に在りて、其處女を敬したる昔の心に負きしはこゝなりといはば、是れ弱性の人の境遇に驅らるゝ狀を解せざる言のみ。太田は弱し。又其大臣に諾したるは事實なれど、彼にして家に歸りし後に人事を省みざる病に罹ることなく、又エリスが狂を發することもあらで相語るをりもありしならば、太田は或は歸東の念を斷ちしも亦知る可らず。彼は此念を斷ちて大臣に對して面目を失ひたらば、或は深く慙志して自殺せしも亦知る可らず。賊獲も亦能く命を捨つ。况や太田生をや。其かくなりゆかざりしは僥倖のみ。此意を推すときは、太田が處女を敬せし心と、其歸東の心とは、其兩立すべきこと疑ふべからず。支離滅裂なるは太田が記にあらざりして足下の評言のみ。其妄六つ。

足下は猶此六妄を以て舞姫の瑕瑾を發きたりとねもへりや。謫天情仙は嘗て此記を評して云く。太

田は眞の愛を知らぬものなりと。僕は此言を以て舞姫評中の僞語となす。舞姫を讀みてこゝに思到らざるものは、猶情を解すること淺き人なり。六妄なしと雖、未だ得たりとなすべからず。况やこれあるをや。

然りと雖、僕過てり。足下に向ひて情を解くは、猶盲人に向ひて色を語るがごとくならむ。足下は何人ぞや。白ちりめんの頸巻、ちりめんの羽織、相摸取に似たる下駄を穿き、三百代言といはれ、伴内様と呼ばれて自ら覺らず、書を痴女に寄せて卻けられ、債を負ひて商賈の群より逐はれたりといへり。(露子姫)情を解するもの豈能く此の如くならむや。嗚呼獨り足下のみならざるなり。試にこれを舉げて浮木淺二郎に問へ。彼も亦知らざるべし。又これを岸村錦藏、露子姫、松葉新一、於八重、園井波之助、河井金藏、於春、於光、江澤良助等に問へ。彼等も又知らざるべし。太田生は眞の愛を知らず。然れども猶眞に愛すべき人に逢はむ日には眞に之を愛すべき人物なり。足下等は能く太田生に慙づる所なきか。

屋上の禽は造語なること足下の言の如し。之を無理の熟語といはれむも不可なることなし。さればとて又必ず惡しきもいひ難からむ。凍死の雀は豈相如が上林の盧橘なるか。將グスタフ、フライタハが獨逸十八世紀の「エレクトラル」羊なるか。僕も亦知らざるなり。足下若僕が粗率を嫌はずば、當に一夕置酒して俱にこれを論ぜむことを圖るべし。

再び氣取半之丞に與ふる書 (相澤謙吉)

其一。江湖新聞紙上に於て六妄を返さむとせられしを見たれど。これは矢張御笑留を願ひたき理由あり。足下の題號に就ての意見によれば、小説は必ず之に題するに主人公の名若くは其資格を以て

すべしといふ歎、然らずば小説に題するに人物を以てせば此人物は必ず主人公なるべしといふこととなるべし。彼の誤れることは言を須たず。ドエマが黒「トユリツブ」花は一花卉を以て題としたり。此の誤れることは初の書にても評しぬ。而れども其理由を挙げずして單に趣のあることなきをのみいひたれば、猶誤解せられやせむ。黒「トユリツブ」花は我戯曲にて實の紛失の事を作りて實を以て題としたらん如く、通篇の事蹟は此花を軸としたるに依る。ハルムが作の主人公がリイゼを殺して金を得、自ら其罪を悔てやすき心もなく、遂には暗害中に死するなども同じくリイゼを軸としたり。太田豊太郎の舞姫に於けるも亦然り。此主人公が行爲の中心は終始舞姫なりしにあらざるや。レツシグが曲にて果してミンナを主人公とすべくんば、之に題するに「ダス、ゾルダアテングリユック」(兵士の幸福)といふ第二名を以てせしは何故ぞ。此兵士とはテルハイムがことにて、テルハイムは猶太田豊太郎がごとし。さればミンナは即ちレツシグが曲中の舞姫なるのみ。こは足下の引かれし例なれど、亦以て主人公と陪賓との皆題とすべきを示すに足らむ。彼フランテスカの如き細人物の全局の主なる事蹟と痛痒相關せざるものは、固より例には引きがたかるべし。シルレルが盗俠モオルにして、若終始アマリヤを以て意となさば、之に冠するにアマリヤを以てせんも妙なるべけれど、こゝにてはアマリヤが主人公の陪賓にあらずして、細人物となりたれば、かくはなしがたかりしならむ。八犬傳を濱路傳と云ひ、姥雪傳と云ふことの不可なるは勿論なり。舞姫も舞姫傳としたりば、已に不釣合ならむ。況や相澤謙吉傳とするをや。若し八犬士を主人公として里見二公を陪賓とせば、これを里見二代記とせむも亦可なるべし。足下は萬人之を不穩當とせざるも、僕は獨り之を不穩當といはむと欲すと云へり。卓なるかな言。批評を以て事となさむものは、誰もかく

ありたきことなり。而れども萬人に反對して、自家の説を唱へむとせば、其道理を擧げて之を證せざるべからず。小説の題號の必ず主人公なるべき理、若くは小説の人物題の必ず主人公なるべき理は、果して何の邊にかある。若此理なくしてドオデエを罵り、ハルムを笑はむとせば、世の識者はこれを何とかいはむ。僕は上に事蹟の軸となり、中心となるものゝ題號に適したるを擧げたれど、猶題號の必ず事蹟の軸なるべく又中心なるべきことを明言する勇氣なし。別に趣ある好題目を撰ぶことの名し得べきを信ずればなり。苟くも太田豊太郎にして足下の歎を買はむために其叙情詩的日記體の文を作りしものにあらず、又隅外漁史にして足下の覽を辱うせむとて之を公にせざる以上は、足下一人の癖する所に從ひて、其題號を撰ぶ必要なきなり。是れ足下の笑留を請ひたき安の一なり。

足下は人の著作を批評せむとして、唯れのれの魂膽を吐露するのみにて責を塞ぐに足れりともふ歎。著作の趣意と關係せざる足下の魂膽は、果してこれを世に公にすべきものなるか。僕は其未だ必ずしも然らざることを信ず。これも足下の笑留せらるべき安の一に當つべきにや。卒然として足下にいふものあらむ。足下は盜なりと。既にして石川五右衛門の盜なる所以を擧げて、仔細に之を論じ、足下の盜なる所以に至りては一證を示さず、唯足下の盜なることは猶石川五右衛門のことのみといはむ、足下は將に何の言を以て之に應へんとするか。太田豊太郎が境遇は實にこれに似たる可笑き地位なり。足下は謂へらく。舞姫篇中洋行の筋を記したる處は無用なりと。既にして丹次郎が病を養はむとて箱根に行く途にて友人に問はれ、我は病を養はむとて箱根に行くに答ふるを擧げて曰く。是れ無用なり、重複したる故に無用なりと。既にして筆鋒を一轉して

太田に向ひて曰く。足下の重複無用の語を用ゐたるは猶此丹次郎云々の文の作者のごとしと。而して舞姫に重複の語ありといふ證に至りては毫末も之を示さず。

足下は堂々たる批評家らしき言を出して、其識見殆ど明治の忍月を壓するものゝ如く、分明に無用と重複とを指點せむと企つるかと思へば、忽又曰く。若足下無用と言はるゝを御不承知ならば、略筆の秘訣を知らざる拙手といはむと。是れ人の己れが指點したる瑕瑾を承認するを否とて己れが意見を更へむとするなり。是れ豈批評家の眞面目ならむや。太田が文は寔に拙なり。而れども彼は詳叙よりは寧省筆を事としたり。太田が出身、學位を受くること、官命を帯びて西に航すること、叙して十一行中に在り。これに増したる省筆の例やはある。

古今東西に批評家も多けれど、到底足下の如く我儘なる立法者となりしものはあらじ。人物の郷貫を主眼に附屬して點出し又言語により行爲により暗々裡に讀者に推想せらるゝやうにするも、固より一法に備ふべし。而れども氣取氏が之を好めばとて、人々かくの如く事を叙することを得むや。

文には許多の句法あり章法あり篇法あり。必ず一をのみ守らむとする人、又人に一をのみ守らせむとする人は膠柱守株いたづらにれのが陋を示すものゝみ。足下はツルゲニエフが春波を讀みしか。起手主人公たる半老の男子が夜二時に疲れて宴より歸りし狀を寫し彼をして筐中なる美人の貽を見て懷舊の心を起さしめ、これより本傳に入る。猶舞姫の舟中の一段ありて、さて郷貫などを叙する文に入る如し。此連接の處太田生は簡々淨々いでのあらましを文に綴りて見むといひて筆を一轉したれど、ツルゲニエフは筆墨老練にして、様に依りて胡盧を畫かざるため、許多の重複語あるを願

みず。

何故にけふ、何故にけふにかざりて、とれもひつゝ久く消えうせし時のかたみの再び胸に浮び來たるを見たり。

この記念は次に示さむ。

されど先づこの男の族名、父名、洗名を擧げではかなはじ。かれはチミトリイ、パウロ井ツチユ、サニンといひぬ。さて左の如き記念はかれの心に浮び出でぬ。

此連接ありて伊太利より魯西亞に歸る途、フランクフルトを過ぎて佳人に逢ふ事に入りたり。これらも氣取流の批評にかけなば、奈何に罵詈せられやせむ。れもひ見るさへれろしきことなり。

且今一步を進めていはば、舞姫は日記の變體なり。ハルトマンの所謂「タアゲブツフ、リ、ツク」なり。故に之をツルゲニエフの不幸の一女などに比したるかた穩ならむも知られず。若し彼に倣ひて

妾は此冬にて二十八となりぬ。こゝにわがいと幼かりし時の記念を寫さむ。われはタムボツフの領に居りて

なごゝ叙したるを足下に見せなば、足下は其れこれを何とかいはるゝ。若強て小説には倒叙を用ゐるべく平叙を用ゐるべからず、又は單釋には主人公の生立などを必ず葛藤の中にて示せなといひて、場屋裏の文法らしきものを出さむとせられば、是れ亦足下の笑留したまふべき一妄にあらずして何ぞや。

其二。かく書くをりに、又々我頭上に向ひて門違へにも抛還へされしは舞姫の題號なり。小説若人

物を以て題號とせば、必ず主人公を撰ぶべし、といふことの足下の趣意なるに似たるは、既に前論にても味ひ得たりしが、今に迫りて足下はこれを法の明文に寫して、公衆面前に披露せられたり。讀みて一步を進むれば又少しく此文の解釋めきたるものを見る。云く主人公は重要主宰の地位に立つが故に人物若くは身分職業を以て小説の題名となすときは、主人公若くは主人公の身分職業を撰ぶべしと。僕は大聲疾呼して天下の小説家と詩人とに告げむ。詩を賦せむとするものも、小説を編まむとするものも、是れよりはいと心安き世の中とこうなりにたれ。一篇の成る毎に、題名は早く既に移動すべからず。早く既に論理的の結果として定まりたり。拈華微笑などと洒落なる語をなすも無駄なり。所詮審美學上の有情滑稽などに氣の附く讀者は、不知庵を除きたる外には一人もなき世の中にて、少しく悲壯滑稽などの味を含みたるものを見れば日に吠ゆといふ蜀の犬、表面は誠に悲しと雖、裏面は大に可笑し、紅葉は實に涙の後にかくれて諧謔を弄する者なり、其弊は殘忍となるなど一批准了す。僕が如きは悲壯の裏面より笑顔を見せむと幾度か手を着けしが、及ばぬ事を諦めたり。閑話は姑く置き、これなども矢張人物題になほして、判任官とか何とか法文に照らして附けしかた當世にむきたりけむものを、あだ骨折られしは惜しきことなり。舞姫とても同じ。何故に鴈外漁史は太田豊太郎と題せざりけむ。何故に留學生と題せざりけむ。今さらに悔思ふ所ならむ。又一轉してれもへば、舞姫は日記體より出でし所謂我稱イロハナの一種なれば、主人公の資格は我なり。されば氣取氏家法の神髓を得て、我などと題せば、足下の稱歎にあづかりやせむ。但ギョオテの眞假自傳などと混れむも口惜し。此弊を防がんには萬國の文學史を探りて、最古き我稱より第一號第二號と番號を打ちて、例へばギョオテの自傳は私の第三千三百三十三號、鴈外の舞姫は私の第一萬

零何號などといはざ、文學史の編輯上にも大利益を興ふべし。

法の説明書に曰く。主人公の名若くは資格若くは職業を撰びて名とすべき所以は、猶一家の門口に戸主の牌を掲ぐるごとしと。但し長篇の複稗などに至りては、初に士人なりしもの商賈となり、又乞丐などとなることあり。かゝるをりには家督相續と一般初篇の題を若侍と云ひ、第二篇のを小間物屋といふなども面白からむと察せらる。足下は又親切にも主人が鰻屋なるときは蒲焼と題すべしといふやうにいはるゝ故、さらば留學生などは西洋書などといふべきかと思へど、レッスンが兵士の幸福は已に法文に乖きたりといはるれば、かゝる危きことは思ひとざるべきならむ。聞道らく。露伴子は足下の渴仰して紫雲堆裏に瞻望せらるゝ人なりと。此人の小説の風流佛は忍月居士といふ人の評にては昨年第一なるよし。題號にも難なしとのことなりき。凡眼にて見れば珠運は太田豊太郎にて、ね辰はエリスなる如く見たり。これも足下の月旦壇上より瞰下さば、仔細あらむ。或は法律上風流佛は佛なり、人に非ず、故に人物題の條例には抵觸せずなどいふ魂膽もあらむ。足下幸に教を垂れよ。

其三。讀みてこゝに至らば、足下は將に意を得て云はむとす。見よ爾も亦遂に舞姫の題の不穩當なることを悟りたるにあらずやと。而れども足下の此念を做すは蓋大なる迷なり。古人曰く。彼にして大家ならむか。我將に瞠目して自ら出る所を知らざらむとす。彼已に大家にあらず。故に我之を笑ふと。彼新詩律の條目中、小説の題にして人物に取ることあらば、宜しく主人公を以て之に充つべしといへるなどは、僕の固より度外視する所なり。僕は唯姑らく之に従ひて、其なりゆきを見しのみ。足下は此條目の成立つべき理なりとて、主人公の編中おもなる人なること、猶一家の主人のこ

とくなり云ひ、門牌まで引きて論ぜられたれど、是れ人物題の主人公を取るべき所以にあらず、主人公の講釋のみ。主人公の講釋にあらず、主人公の類例のみ。其新詩律の成りたちに於ける、何の關係する所かあらむ。若又小説の題に主人公の名を署するは、人家の門楹に主人の名を題するに同じといはむ、これも亦一類例のみ。類例は説明の力ありて證據の力なし。僕にして小説の題は一般の詩題と同じく、人家の門牌などに殊なりといはむ、それまでの事ならずや。詩題は實に此の如く没趣味なるものにあらずなり。

又主人公が編中のれもなる人物なることを證するは難事に非ず。人家の主人、民屋の門牌、鰻屋、蕎麥屋の招牌を援出づるまでのことならず。縦令之を證したればとて、うの主人公が人物題の命ぜらるるとき必ず其選に中るべきことは、僕の承認する所にあらず。又僕の其理を解する所にあらずるなり。嗚呼、此一妄の足下の許に留まらざるべからざる道理は實に一にして足らず。僕は足下の他の諸妄の返壁を待ちて、又稿を繼いでこれを論ぜむとす。

其四。僕が足下の人物題法をかりに承認して戯に草せし文は、大に足下に誤解せられたるものに似たり。獨逸の老學士輩が事を論ずる毎に、動もすれば系統を立て、條款を設け、法令の如き筆法を用ゐるを、ハイネは笑ひぬ。僕は心の往くまゝに筆を走らすものにて、足下の如き文學上の立法者ならねば、人にもものいひて必ずこれを守らせむとも思はず、又人の文をおのれが鑄型に嵌めむとも思はず。是が足下が誤解せられし源なる。

氣取の法を守らば、題名は一篇の成る毎に早く移動すべからざる世の中となりたり。氣取は已に人物題を下すものに向ひては、主人公の名又は職又は資格を擧げよといふ。此の如く法を立て來らば、

事物題には主人公が持物を擧げよなどといはむも遠からじ。僕が論の意は實に此に在り。僕が笑ふ所も亦實に此に在り。足下があらゆる小説の題號を主人公の名にせよとは言はざりしことは分明なり。誰も足下をさほどに不思議なる立法者とはおもはざるべし。善き例は足下のこゝにて主人公の名にせよとはいはざりしを相澤しか解したりといはるゝは、主人公の名又は職又は資格にせよとはなどいふべき處なるべきを、足下もかく省きて記し玉ふにあらずや。人の文を読むに、かゝる處にのみ心を着けて觀るは、心なき業なり。足下の誤解は蓋多く此類なり。

足下の長篇の複稱などに初に士人なりしもの（これも正さば主人公の事ありたし）が商賈となり又乞巧となることある場合に、必ず強て職業身分（こゝも氣取流の誤解を防がむとせば主人公の事ありたし）を以て題名とせよと言ひしことなきは洵に然り。長篇の複稱に人物題を設けむとするは何人にも起るべき考なれば、このをり必ず強て氣取家法に乖かじとすれば、逐號換題の必要も起るべし。かゝるときに人物題となるものゝ決して主人公に限らざるは已に屢論せし如くなるに、茲に人ありて此複稱に人物題を下さむと定め、さてうの人物題は人物の職にせむと定めたるとき、氣取氏は此職を主人公の職にきまりたるやうにいへばこゝ僕が擧げし怪事は起るなれ。何者の小説家か此境地に立ちて足下の法を守らむとする。主人公が鰻屋なるとき蒲焼と題せよとは流石に足下もいはねど、詩題を以て蒲焼の招牌と一般にれもふは奇怪ならずや。レツシンの兵士の幸福にして足下の法文に乖きしものならずば、何故に小説の人物題の必ず主人公（足下はミンナに當て玉へり）なるべくして、小説の人物境遇題の必ずしも主人公の境遇（例へばミンナの受幣）ならざる理を示せ。拈華微笑につきては、戯に紅葉山人のために謀りて、是の如く思を費すまでもなく、人物題を下し、

さて氣取法に従ひしかた好かりしならむと云ひしのみ。風流佛は辰辰にても可なり、舞姫はエリスにて不可なる理は猶足下の説を聞かまほし。

これほどの事は、足下の明辨し得ぬにもあらざるべきに、かく「チエエテル、モルデオ」を叫び玉ふは、僕の足下のために取らざる所なり。曰譯の分らざる人、曰不能力者、曰豕が大好だよと口を尖らせ來る者、曰蕪人形に空鐵砲を放つもの、曰天に向ひて唾するもの、曰獨よがり、曰横にねぢる者、曰迂、曰狂、曰亂、曰血迷、是れほどの雅馴の言を江湖新聞の二段の間に收めたまひし御技倆は感服の外なし。例の第二安につきては、足下が他人の著作の題號を見て、我儘なる望を囑し、後に望を失ひたまひし魂膽、誰か之を抑制せむ。唯舞姫を評したる言としては、世間これを受取るものなからむのみ。

其五。足下の所謂再評三評四評等は高架低架幾條の軌路に瀛車の競走するを見る如し。憾むべし、僕が待つ所の他の諸妄に對せらるゝ論は未だ來らず、又彼重複論の至るに逢ひたること。

僕は今に至りて知得たり、足下の所謂重複は尋常文家の所謂重複に非ざること猶忍月居士が罪過説のアリストテレス以下に罪過説に非ざることとなるを。足下は蓋反應を以て重複となしたり。「コントラスト」を以て重複となしたり。近く例を取らば、佐藤六石氏が九十九里の歌を取りて一誦せよ。瑠璃汗漫、長望際なく青山白鷺、夕陽掩映の景は忽ち變じて坤軸震盪、連山駭立の狀となる。同一の人、同一の舟、此間に點綴し得て、其姿致極なきにあらずや。舞姫は拙作なり。而れども今の初に伯林富麗の景を叙して、後に凄慘の境となしたるは、これと相似たり。是れ反應にして重複にあらず。彼太田が留學の事は前後に出でたれど、前には得意、後には失意、其寫法たなじから

ず。其他足下の擧げたる所概皆此類なり。既にして又曰く。此富麗熱鬧の狀を寫して、伯林が嘗に寂寥荒漠の天地のみならぬを知らせんとの御所存のよし。異なる哉言。小説豈此の如きものならむや。太田生が居留の地、經歷の地の光景を漏さず寫さざる可からざる必要あるか。敢て問ふ誰か詩中の人物の經歷の地を漏さず寫すべしと云ひしを。若しかく言ひし人なくんば、これや無用の辨なるべき。太田が伯林の晴景と雪景とを叙したりとて、彼已に夏と冬とを叙したり、冬を主とする物語ならば、何故に夏を叙したるかといふ如きは、詩を説かむもの言に似ず。東坡が日論もおもひ出でられて果敢なし。不普通にして普通の思慮を以て推すべからざる人とは誰が事。將又眞赤になりて怒るものは何人ぞ。

文使に就きて忍月居士に與ふる書

今朝君が文づかひ(水沫集一〇七面)の評を拜讀す。主人公イ、メエルがメエルハイムなどの如く心淺々しき人にイ、メエルを嫌ひて避むとすなど、これの一人にかゝることのやうに思倣されむこと口惜しからむといふところに至りて、姫が去りて宮に入りし原因を男嫌ひしためのみならずと見定め、其他の原因奈何と問ひ、作者はこれ等の原因を看過したれば一大失錯をなしたりといひ、讀者又は世の許多の批評家が姫がメエルハイム嫌ひて宮仕にゆきぬといひたるを過なりとし、側寫のためにかく不明なる點出來たるなりといはゞ通辭ならむといひ、作者に技術家の技倆なく、小説の代に漫録隨筆を作りぬといひ玉ひし八百餘言、天晴紙背に徹する眼光感服仕りぬ。

然しながら少々御注意までに申上たきことあり。文づかひに君が引きし一句前後の文を離れて立ちたらば、げに解しがたきふしもあるべけれど、全篇數十面、姫がメエルハイムを嫌ひて宮仕した

るを種々の方角より寫して疑なからしめたることは、今までの諸評者（讀賣新聞、改進黨新聞、報知新聞等）皆認めたり。これを明に認得たる上にて君が引かれし姫が言葉に讀到りて、その意義を斯くまで誤らむはいと難かるべし。強迫結婚の法は、幾人メエルハイムならぬ執袴子弟を牽來たりとも、到底愛を生ぜしむる力なからむと議論らしく書かば、げに君が心に適ふべけれど、人の笑を奈何せむ。報知の思軒居士はいはく。文づかひに不通の句なく、難解の句なしと。改進の評者も亦云く。文づかひの文は簡にして明と。彼人々にはかゝる句の意味は瞭然たりしならむ。彼人々は姫が宮仕の原因は男嫌ふ外にもありとは、誤解せざりしならむ。彼人々は他人の文を誤解して、これに依りて其技術家の技倆なきを斷言し、其小説を漫録隨筆といひ消し、故もなく大失錯と罵り、誰もいはぬ遁辭を其の文の作者に強ひつくるやうなることをば屑とせざりしなり。

われ若し我空想の生産力を失ひて、手を束ぬること久きことあらむをりは、君が能く解すべき小説を作りて、其人物の言葉を議論のやうに寫出すこと、或作者の雜體小説とやらむの如くせむ。されど此小説は決して印刷せしめて天下に示すやうなることなかるべし。穴賢。

再び忍月居士に與ふる書

君が答書を得て、ねん評言の主意とやらむいふもの明に知られ嬉ぎ限にこう。君のいはく。文づかひの主人公イ、ダ姫が男嫌ひとは、單にメエルハイムなる男を嫌ふ意か。將一般の男を嫌ふといふ意か云々。この彼歎此歎といふ兩天秤（Alternative）を示して、君の頗る淺々しき心にては、他に道なしと思ひ玉ひきと見ゆれども、イ、ダ姫は生理的に一般の男子を嫌ふ人もあらず、單にメエルハイムのみを嫌ふ人もあらず、其心は兩者の中間に位したること、次に證文

を擧げてねん目に掛けむ。

是證據を迫り出したるは、恰好し、君が言葉なり。いはく。若し前者の意なりとせば、（即ち姫が單にメエルハイムといふ男を嫌ふ意なりとせば）是れメエルハイムを嫌ふものにして、眞に男を嫌ふものにあらず。（この處、左なりとせば右ならず、右は左にあらざるものなりといふやうなる御文章、天晴なる批評的手腕かな）眞に男を嫌はざる姫、豈萬の希望を棄て、尼寺ともいふべき王宮に入る理あらむや。是れ通情になきことなりと。君が必ずなしと認め玉ひし理、即ち眞に男を嫌はざる姫が、萬の希望を棄て、尼寺に入る理は、ねん氣の毒ながら、君が兩天秤の中間に存したるを奈何せむ。姫は眞に男を嫌はずといへども、メエルハイムにあらずしてれのが愛することをも得べき人に逢むよしなき理は、其父に妨げらるゝ處にあり。其父に世に貴族と生れし者は、賤やまがつなどの如くわが儘なる振舞（即ち自由結婚）おもひもよらぬ事なり、血の權（貴族權）の賈は人の權なりと戒めらるゝ處に在り。姫は實にメエルハイムならぬ男に添ふべき縁を絶たれたり。是れまこと人に通情になかるべきこと、君が説の如し。されどイ、ダ姫が父ビエロウ伯爵殿は人の通情を賤山がつなどの心なりと思ひさだめたる男なるゆゑ、姫御前は迷惑し玉ひし譯なり。君が姫の外境にはつゆ心付かで、姫が情のゆくまゝに男撰びもすべき身の上なりとおもはれしは、憚ながら千慮の御一失歎。君がねん考の如く、姫がメエルハイム嫌ふか、生理的に男を嫌ふかの外に道なきものならば、又姫が通情のまゝに即ち自然を抑へられずして自由に人を擇ぶことを得べき者ならば、文づかひといふ一篇の拙文はつひに世にうまれ出づる時なかりけむものを。

これにて姫が一般に男といふもの嫌ひしにあらざること明なれば、君が第二の道、若し後者の意な

りとせば云々にはおん答申すまでもあらざるべし。

まことにイ、ダ姫はメエルハイムのみを嫌ひしにもあらず。さればとて又生理的にすべての男を嫌ひしにもあらず。イ、ダ姫は脅迫結婚の法にて、これに強附けられたる男を嫌ひしなり。此男はメエルハイムにても、他の執持子弟にてもねむかるべし。君が詰難の緊しかりしも、鼎の足を二本のみ見玉ひしたため、わけもないものになりしは、お氣の毒なりき。

ついでに申さむ。君はわがはじめの書を読み、このやうに善い著作が、汝の目には分らぬかといふやうなる小言、御自ぼれ恐入るとのたまへり。われ文づかひを善いとおもはねば、自ぼれの語は受取りがたけれども、若し詩人の交際には區々たる禮節なしとせば、汝の目には分らぬかだけは、君に向ひて言ふことを憚らざりしならむ。われ既に文づかひを善いとおもはねば、われを良好のものとするやらむ申すものと思はずかし。

三たび忍月居士に與ふる書

わが書の始に文づかひのイ、ダ姫が士官メエルハイムを嫌ひぬと云ひ、其中ころに同じ姫が男を嫌ひぬと云ひ、其をはりに同じ姫が強て媒せられたる男を嫌ひぬといひしを、君がために迫られて、血路を開いて逃たりとの評、これをや筆は重寶のものと申さむ。八面玲瓏の文なりとは、われみづから文づかひを認めぬとも、兎も角も一掃をなしたるものを、種々の方角より襲ひて、種々に打ちかへされしは君が批評の御手際なるのみ。飛彈の匠が家の前にて、流石の河成も入口を見付けざりしは、是非もなし。姫が父のビュロウ伯が貴族習あるを寫し、姫がみづからこの習慣の外にいでもとするを誰か支ふべきといへるを寫しはわれなり。君が推理提出とやらを待ちて、始めてこれ

を知ることかは。君はこれを基として、姫が貴族世界にて、同族の性質に反したるものとなりし理を、作者等閑に附したりとせり。奇怪なる言かな。商家の翁が娘に金持の婿取らせむとするも、商家の習と見ることを得べし。娘がこれを嫌ひて、おのれの好いたる男に添はむとすることあればとて、此娘一般の商家の習慣に背きたる理ありて、かく望めりといふべけむや。イ、ダ姫も若し僥倖に老夫となりたらば或は娘に迫りて、いやなる人に嫁せしめむとせむも知られず、こはわが保證するかざりにあらざれども。

君のいはく。姫は父に請うて、父をして他の多くの貴族子弟、うまく行かば、其他の子弟をもこれと結婚せしむべき自由を有す云々。これ將た奇怪なり。メエルハイムとの結婚ははしからずとだにわいはざりし姫が、かの人と共に歎き、人と共に笑ひ、愛憎二つの目にて久しく見らるゝことを嫌ふといふ性質にて、父に向ひて、とりかへひきかへ、許多の少年を見せてくれよと申さるべきか、斯る自由を得らるべきか。君は自由の二字に圈點を附せられしが、此自由は人権にてビュロウ伯の卑む所なるを奈何せむ。

君はイ、ダ姫が宮仕して世を遁がれし所以も、作者は等閑に附したりといへど、姫が性質にて、其地位に居り、避婚の策別がありとおもへりや、避婚の策のこれより近きもの別にあると思へりや。若しあらば教を請ひたし。又姫が性質の成りし所以まで、必ず示せとのたまふも計られねど、ゾラ、イブゼンの遺傳論などは、單稗の作者の必ずしも擔ひいだすことを要せざるところなるべし。君は萩のやの主人が文づかひを新好文字ならむといひし、ならむの三字に重圈を附して、豫言なりといへど、このならむは決斷を避けたる意味あるのみ。文脈語格によく注意あらまほし。

四たび忍月居士に與ふる書

君が三たび我に答ふる書に接す。萩のやの主人が手束の事を除きては、悉く理由なき判断なり。われはこれを読むにいたりて、はじめて君が理由と説明とを拒む言論に長ずることを確認して、曩に幽玄を論じたまひし時の一家の論法のまた出でたるに歎服したり。こたび書中に見わたる要點の今までのなりゆきは左の如し。

第一、文づかひのイ、夕姫が世を宮中に避けし原因

君云。メエルハイムといふ結髪の夫を嫌ひしより外に原因あり。理由は姫がメエルハイムなどにおのれ一人のみかゝることのやうに思ひなされむこと口惜しからむといひし句なり。

我云。姫がメエルハイム一人に係らずといひしは、脅迫結婚にて強ひつけられたる男に添ふ心なし、彼男一人の上にはあらずといひしのみ。故に結髪の夫を嫌ひしより外に宮仕の原因ありといふ證なし。

かくなりゆきたる時、君は斷案を下し云。最早啖々することを要せず。避世の原因は猶他に數多あるなり。其故は上來數度論ぜし所に明なり。

第二、イ、夕姫が性質と獨逸貴族社會の風俗との關係

君云。姫が父は同族との結婚のみを正しとす。姫はこれに同意せず。故に姫が父などの貴族習に姫は相反したり、當時の一社會の風俗に背きたり。

我云。少女には少女の情あり。商家の翁が娘に金持の婿取らせんと願ふを商家の習なりとして、娘がこれを辭みたりとて、此娘商家の通情に背きたる人物なりといふべからず。

かくなりゆきたる時、君は云。姫は當時の社會、習慣に反したる人物なり。此の如き人物の養成せられたる所以を作者は看過したり。

かやうなる我儘の判断を見ては、最早多言することを要せずといふ一言を吐くべきは、失敬ながら我方にこりあれ。この外にも猶君は姫が性質の源を求めて、經歷奈何などと問ひ、これを文づかひ中に求めて求むること能はずと啣てり。これをや木に縁りて魚を求めたりと申さむ。又深宮に養はれたる姫が性質を必ず經歷より後天的に來るべきものと思はれしも可笑し。まへの書にも、*ゾラ*が遺傳などの如きものは、單禱の應に示すべきところにあらずと斷りしに。

埋木に就きて

獨逸學協會雜誌に、埋木(水沫集二〇八面)の譯文中安ならぬ處ありとて示されたるは、*Main Herz* *mein Kleinod* といふ*グザ*が言葉を省きたると、*デリレオ*には育てぬれどといふ自他の相違となりき。初なるは、かはゆきものよ杯譯せば、譯し難きにもあらねど、省きたるを大なる過ともなしがたかるべし。後なるは翻譯文例といふ書の誤植なり。埋木を始めて公にせし柵草紙には*デリレオ*には育てられぬれどとあり。評者の細讀せられたる勞は、わが謝するところなり。

戯曲の翻譯法を説いて或る批評家に示す

凡そ戯曲の譯は、つとめて其意を失はざらむとするものなれば、字を逐ひて原文を寫出ださむとするときは、我國の人の解し得ざる怪僻なる語となるべし。されば古より歐洲諸國の民の互に相譯述して、殊邦文學の趣味をわが郷に遷したる蹟をたづぬるに、一として逐字の譯あることなし。是は原來極めて親易く、またこれを知りたる道理なれど、試に坐右の書を開いて一二の例を示さむ。

西班牙のカルデロンがザラマヤ村長（水沫集二九五面）の序幕のはじめに兵卒レボルレドが行軍の苦を語るを聞きて一同の答は原文にたゞ

Todos. Amen.

（皆々、アアメン）

とあり。獨逸人グリースがこれを譯したる書にはれなじどころに

Soldaten. 'S ist wahr!

（兵卒ども、ほんにさうだ）

と記したり。獨逸も新舊いづれはあれど、基督教の民なれば、「アアメン」は「アアメン」なり、これを邦語に譯して南無阿彌陀佛といひたらむやうなる不都合あるにはあらざるべし。さるを猶是の如く改めたり。又シエクスピイアの「ハムレット」にて幽霊のあらはれたるとき、太子は

Bring with thee airs from heaven or blasts from hell.

（天より瀧氣を持来しにもせよ、地獄より毒烟を持来しにもせよ）

と呼びしを、シユレエゲルが譯には、（シユレエゲルがシエクスピイアを譯せしとき、これを助けし人ありといふ説は余等も知りたれど、姑く尋常の文學史の説に従ひて、單にシユレエゲルと書す、反對者舉足を取ること勿れ）

Bring Himmelshette oder Dampf der Hoelle.

（天の瀧氣を持来しにもせよ、地獄の毒烟を持来しにもせよ）

と改めたり。よりといふ言葉とのといふ言葉とは、その意味決してれなじからねど、譯者はこれに

拘らざりき。これ等は皆多少の自由にて、これを誤謬なりとはいふべからず。これ等の多少の自由は戯曲の翻譯に必要なものなり。

蓋戯曲を譯するものゝかゝる自由をなす所以は、戯曲といふもの彼反復咀嚼して其味を知るべき哲學書などゝはれのづから殊なればなり。哲學書に於いては作者に人と同からざる用語例ありて、一字といへども動し易からず。その譯者は宜く字を逐ひてこれを譯し、文の或は艱澁になるをも厭はざるべきものなれど、戯曲はこれを讀み、これを聞きて、その幻象直に讀者聽者の目前にあらはれざるべからざればなり。故にいはいはく。戯曲の翻譯は、これを哲學書などの翻譯に比すれば頗る自由なるものなりと。

國會新聞に鎮西の一人人といふものありて、余等が手に成りし戯曲折薔薇（水沫集四七八面）の翻譯法を非難し、字を逐ひてその差別をたづね、これを譯者の罪に歸せむとしたり。而してその詰難の本意は忍月居士石橋友吉氏のハルトマンが審美書を誤解し且誤譯したるを辨護せむとする處に存じたりと見ゆ。山人の擧げたる點を検するに、多くは山人みづから獨逸語に通ぜざるより生じたる失誤にして、そのかゝる失誤を基として譯者の妥當なる語を難せんとしたるは、固より齒牙に掛くるに足らざるのみならず、その石橋氏の哲學書を誤解したるを辨護せむとて、余等が戯曲の譯を引出でしも、既に大體に於いてこれを失せり。

石橋氏はロオゼンクランツが分明に醜美の差別を立てたるを知らずして、妄に醜は美なりなどいふ審美學絶滅の論を吐きたり。（その詳なることは醜美の差別を題したる論に見ゆ）石橋氏の所謂祖述中にて、ハルトマンを誣ひたるところは、特に醜美の差別無差別のみならず。石橋氏はハルトマン

が書を取りて、字を逐ひてこれを譯し、句の艱澁なるところに至りては、擅に二三行を省きうの字を逐ひたる間に於いて誤をなし、うの甚しきに至りては原文と反對なる意味となしたること、擧げて數ふべからず。譬へば獨逸語の *ausmachen* といふ字を除去と譯して、うの合せ成すといふ意味に用ゐられたるを知らざりし如し。夫れ西洋の哲學書を一字々々に譯して、これを祖述といふ、其語已に妥ならず、况むや其間に非常なる誤あるをや。山人がこれを掩はむため、余等が折蓋薇の譯の自由なるところあるを擧げたるは、特に其言の權衡を失ひたるのみならず、余等が誤謬にあらざる比較的の自由なる譯法を以て石橋氏の誤譯なる自稱祖述法に對せむとしたる間、れのづから曲直の相殊なるものあるを奈何せん。余等はこれより山人の誤り認めて誤となしたる數點を擧げて、うの誤にあらざることを明にせむとす。

其一、れちついた

エミリヤ嬢が若殿の無理くどきに逢ひて、寺を逃出で、やう／＼わが家の鬨をまたざれたるとき

Nun bin ich in Sicherheit

といへるを、余等は

もうここまで來ればれちついた

と譯せしに、山人はいはく。In Sicherheit sein は鞏固の境にあり、反言すれば危難の境を免れたりとこの意なりと。是れ大に違へり。先づ sicher は確なること、また安全なることの意味なるを鞏固といふ譯、こゝには當らず。次に「ジッヘル」を鞏固なりと、假に一步を譲りて考へても、鞏固の

境にありといふことは、獨逸語にて am sicheren Orte sein とこゝにいふべきならぬ。是れ折蓋薇の本文の意と殊なり。本文を世のいはゆる直譯といふものにていはば、もはや我は安全なることに於いてありといふべきならむ。安全は即ちれちつきたり。さればもうここまで來ればれちついたと譯したるに、うも／＼何の誤かあるべき。

山人は修正案を出してはいはく。もうここまで來れば大丈夫とすべしと。これは意味に於いては、差支なきことにて、げに大丈夫は安全なるべし。しかはあれどエミリヤは令嬢なり。れちついたりといふ語と大丈夫といふ語と硬軟奈何。若くまで來りやあ大丈夫といはば、盜人の逃げ來りていふ言葉のやうならむ。こゝらの是非は芝居こゝろなき鎮西の山人などが知ることならず。

其二、あたりをみまはして

母親の娘を見て

Und blickest so wild um dich!

といひしを、余等は

うれにどうして、あたりをみまはして

と譯せしを、山人は wild の字を脱したりといへり。實に然り。然れども此の一字はこれを省くを尤も妥なりとす。あたりを荒く見廻してともいはれず、あたりを暴に見廻してともいはれず、あたりをぎよろ／＼見廻してにては、いよ／＼大佐夫人の品位を損ず。前に引きたるシユレエゲルがシエクスビイアの譯にも既に二字を省きたれど、余等はかしこにては言はざりき。流石の山人ども修正案には差支へられきを見ゆ。彼忍月子が *angedeutet* の一語に注意せずして、シユレエゲルが

確に論じたる醜といふ原素の一半を、論ぜざりしやうに誣ひたるなど、比べし山人の事理に味きは、
げに驚くべきことなりかし。

其二、場所もあらうに

エミリヤ嬢が寺にて若殿にくどかれしことを、母に告ぐるところの原文は

Was hab' ich hoeren muessen! Und wo, wo hab' ich es hoeren muessen!

とあり。余等が譯にいはいはく。

まあ私が何を聞かせられねばならんだと思し召します。うれに場所もあらうに。

レッスングは寺の神聖なる場所なることを示さむとて、ミ。即ち何處でといふ字を二度重ねて用ひたり。されば所謂直譯といふものにていはば、うして、何處で、何處でわたくしがうれを聞かぬばならむだつたと思召しますとすべし。何處での重複すでに耳立ちてあしかるべきに、前の句との重複いよくうるさからむ。うが上に邦人のころにては、寺にて女をくどくなどを、歐洲人の禮拜堂にて禮拜中に道ならぬ戀をしかくるほど、恐ろしくはおもはざるべければ、何處でといふ字の重複ぐらゐにては大いにレッスングが文を傷くべし。さるを山人はどこでうれを聞せられねばならんだとれぼしめしますと譯せよといへり。何處でを一度にしたらる譯しかたは、既にはなはだ粗なるに、原文を引けるとき、故らにミ。(何處で)の字を一度にしたらるは、レッスングを誣ふることの甚きものなり。うれさへあるにうの前句との重複の厭はしきよ。余等が場所もあらうにの一語はレッスングを九原に起してこれを讀ませても耻づかしからずと自信す。

其四、寺も社も

エミリヤ嬢が若殿の場所がらを思はざりしことを責むるところにていへる原文
Was ist denn Laster Kirch und Altar!
とあり。余等が譯にいはいはく。
しかし無法な人には、寺も社も何でもござりませぬ。

原文に Kirche と云ひ、 Altar と云へるは、皆寺といふことなり。何故にれなじ意味をかきわていひしと問はむに、うの語勢の上よりしかせざるべからざることは、少しく獨逸語に通じたるもの、直ちに看破するところなるべし。夫れ「キルヘ」の寺なることは、獨和對譯辭書を繕いても知るべけれど、「アルタル」のれなじく寺なることは或は辨解を要すべし。「アルタル」は原來寺の卓にて、贊卓などいふ譯をもつくべきものなれど、獨逸にて某は何嬢を娶りぬといふことを、某は何嬢を「アルタル」につれ行きぬといふことあり。これは寺につれて行きしことなり。

山人のいはく。譯者は「アルタル」(經机)を社と譯せり。尤も譯者は寺も社もと、前に寺の字あるがゆゑに、文章の勢のために、社といひしならむなれども、經机を社とは譯者千慮の一失ならむと。この言一つとして取るべきところなし。先づ「アルタル」を經机といふ譯は、一字に取りても既にれだやかならぬに、「アルタル」といふ字に別に用法あることを知らず、またレッスングが此字を下すとき寺といふ字とおなじ意味の字をたづねて、これを得たることを曉らず、却りて余等が一個の社字を探り來たりて、レッスングが心を獲たるを笑へり。彼原文を寺も社の机もとは、對譯辭書と首引する童の譯としても、少し受取りにくかるべし。次に余等が寺も社もといひしを、文章の勢のため余等がしかせしならむといふ。これ山人が我邦の俗文を見る眼ありて、獨逸文を見る眼なき證な

り。奈何といふに、この重語のレツシングが文勢にて生じたるに心付かずして、山人はこれを譯者が上に歸したればなり。

其五、なにも

母がエミリヤ嬢に

Was kann dir da an heiliger Flachte so schlimmes begegnet sein?

といへる原文の趣を、余等は

れ有難いね寺の中で、なにも悪いことの出来やう筈はないが

と譯せしに、山人はなにもを左様なとすべしといひしが、なにもといふ字は^{なにも}の字に當れるを知らぬなるべし。勿論原文に^{なにも}といふ字あれば、なにもそのやうなと云ひても善けれど、前の句にての意味は聞かぬるゆゑ、^{なにも}をば省きしなり。若山人の修正案通過せば、文義不通になるべし。以上山人の駁論の價值なきことは示したれど、若山人がこゝろみたる如く余等が翻譯を取りて、章句の上より細閱する人ありて、^{なにも}の人獨逸語に深きこと、山人の類ならずば、余等が苦心の跡はいよく明になるべし。余等とても戯曲の翻譯法につきては、猶研究せむとする心切なれば、豈公明なる批評に逢ひて、殊更にこれに反對するが如きことをなさむや。唯山人が如き翻譯の自由と、これより生ずる大利益とを、すこしも知らざるものは、余等が目中の批評家にあらざることをいはむとて、此文をば草せしなり。

余等の戯曲を譯するや、今まで種々の自由の階級に於いてこれを試みたり。自由の最も甚かりしは、洋絃一曲なるべし、^{なにも}の最も少かりしは、「トオニイ」なるべし。(未刊)而して世人は余等に彼を愛

することの深く、これを受ずることの淺きことを見せたり。此時にあたりて、戯曲翻譯法の自由を認めざらむとするものは、唯鎖西の一人あるのみ。嗚呼、山人も亦わらい哉。

俛に就きて

詩の想髓は^{なにも}の形骸のために變ぜず。これを出ずるに古言もてせんも、今語もてせんも、鳥迹の字に寫さんも、郭索の文に寫さむも、^{なにも}の歸するところは一なり。^{なにも}の乍ち千古の絶調となり、乍ち悪詩となるは技巧上の工拙相異なるのみ。夫れ詩を譯して情文兼ね至ることを得ば、固よりこれに優ることあるべからず。若唯情のみを傳へば、他邦の趣味を輸入すといふべく、若唯文のみを傳へば、他邦の風調を輸入すといふべし。これも亦全く功なきにあらざるべし。例之ば獨逸の趣味の魯西亞に入りたる「アレクサンドロイネル」調の北歐羅巴に入りたる如し。

俛(水沫集五八七面)の譯は主として趣味を傳へむとするにありき。然れども彼の字句、平仄、韻法をも流石に拋棄するに忍びず、その能く根を托し芽を抽かむは覺束なしとは思ひながら、聊又移植を試みつるなり。此心をは獨逸文の東漸雜誌中に略記しおきたり。

學海居士の俛を評する文には、文(散文)は趣向の良否を主とす。字句は^{なにも}の未なり。詩(韻語)は尤も字句音調を主とす。工拙の分るところにありて、必ずしも趣向の良否に拘らず。彼は猶譯すべく、此は譯すべからず。縦令譯詩に妙處あらむも、そは譯詩の妙にして原作の妙にあらず。原詩の妙は必ず失せり。勞して功なきものといふべし。嗚呼、物言へば唇寒し秋の風と。

此說一わたりは聞かたり。然れども散文に聲響の重ずべきあるは、韓愈の言之短長、與聲之高下皆宜といひ、グツツコオの散文の美さの抑揚(平仄)に基づくこと猶韻文の結構のごとしといへる如

し。韻語の趣意の重すべきに至りては、殊更に論ずるに及ばず。空想上の製作と技巧上の細工とは、いつれに於きても貴賤尊卑を同うせり。

今彼の散文と彼の韻文とを取りて、これを國語に譯せんには、散文の易くして韻文の難きこと明なり。然れども譯詩の原作の妙を失ふと失はざるとは、一に譯者の技倆に存ず。散文韻語の別より出づるにはあらず。俛の譯勞して功なかりきとならば、そは其譯者の拙なるにて、これに依りて譯詩の擧を必ず勞して功なきものとせむは、我文壇の未來のために利あらざるべし。批評家たるもの思はざるべけむや。嗚呼、ものいへば唇寒しあきの風。

麻布閑人に答ふる文

疇昔おくれし雁を難じきといふ義門にも、をさく、劣らじと覺ゆる君が手書を辱うしては、われ松屋の翁にあらずと雖、争でかよるこびて卑懷を抒べ、以て芳意の萬一に酬いまつらざらむ。

第一。レツシグが事を記すと書きしを、レツシグの事を記すとせよとのみ教承りぬ。されど古書にも、この歌はある人のいはく柿本人麿が歌なり(古秋詞)元輔がのちといはるる君しもやこよひの歌にはづれやはをる(枕艸紙)など見ゆ、萬葉の歌には處々になでしこが花とよめるさへあり。方丈記に周梨樂特か行にだにも及ばずといへるも、たなじ格には侍らずや。

第二。出入するなへにレツシグが事を記すと云ふなへの言葉は、出入しつるなへにとやうに、必ずつるにて繼ぐる格なりとのたまへり。古歌にもみぢ葉をねとす時雨のふるなへに夜さへぞ寒きひとりしぬれば(人丸集)千とせふとわがきくなへにあしたづのなきわたるなるこゑのはるけさ(貫之集)など、過去のつるにあらぬ現在のるより續けたる例いと多し。こうれのかかり結などとは混

ずべからぬにや。

第三。我妻の事を子に對ひていふとき、必ず母とのみいふべきよしは聞えず。なが母などいはずなるべし。書東の文をうの儘に擧げしにもあらず。行狀を叙したる中に、詐りて妻の病危しといひやりし云々(レツシグが事を記す)といへるは難なるべきにや。

第四。滅びつ(同上)を滅びぬとせよとのれん説は、古書に滅びぬとせしが多ければ、一わたり聞はたれど、自然の動詞は必ずぬといふべくして、つといふべからずとは定めがたかるべし。降りぬ、散りぬなどは常の格なること玉霞にもいへる如くなれど、我袖にふりつる雪もながらへて妹が袂にいゆきふれぬか(萬葉)といふ歌あり。君が引給ひし例にも春雨のふりつるなへにとあるにあらずや。又古歌に野への露は色もなくてやこぼれつる袖より過ぐる萩の上風(新古今)波にのみぬれつるものを吹風のためよりうれしき海人のつり船(貫之集)といへるこぼれつ、ぬれつ杯も自然なれどこぼれぬ、ぬれぬといはず、景行紀に躰月をつきをへぬと訓せしは、自然にあらざれどもへつといはざる例に引くべきにや。滅びぬのかた、滅びつより安ならむとは、われもおもふ由なきにあらねど、滅ぶは自然なるゆゑに、必ずぬ文字にて結ぶべしとのみ教は、猶合點し難し。玉霞にもつるにてもぬるにてもよき詞もあり(一一丁)といへるをや。

第五。屋にて裂かれ(水沫集二六面、みくづ)は、屋根にて裂かれの誤植なること、原作に照して知るべし。

第六。役所への道の事を役所の道(同上二五面)と書きしは、過失ともしがたきにや。さよしぐれに云く。大和ちなどふるくいへるは、大和へゆく路といふ意なるを、やく後には都の街をみやこちと

やうにもいへり。文を作るには言葉の變遷を知らざるべからず。

第七。まだきと書きしところは、原文に朝疾くとあれば、御説の朝まだきに從ふべし。(同上二六面)

されど日本紀に豫の字に當てたるころに取りても通ぜざるにはあらじと覺ゆ。

第八。露のねける硝子窓(同上二六面)と書きしを、露をかける硝子窓とせよとの御教はいかゞ。露の硝子窓にねくこところあれ、硝子窓露をねくといひては、自他の相違あるべし。古歌にも、つれもなき人をやねたくしらつゆのねくとはなげきぬとはしのぼむ(古今)といひ、後拾遺の歌のはしがきに、萩のねたるに露のねきたるを人々よみ侍りけるによめるとあるなど合せみるべし。

第九。土佐日記にゆくゆくのみくふと云ひ、伊勢物語にゆきゆきてするがの國にいたりぬとあるを思へば、岸に沿ひてゆくゆく橋のたもとに出でぬ(水沫集二七面)とわが書きしは、げにゆきゆくてなるべし。されどねなじ紙面に岸をゆきゆくてとある如く、此語を知らずで書きしにはあらず。岸に沿ひてゆきゆくて橋のたもとに出でぬと書かば、調悪しかるべく、ゆくゆくといへるかた、行くあひだに、忽橋の下に來しに、心づいたるさまをも、却りて善く狀すべきかとねもひてなりき。猶高誨を垂れ給はむことを願さまつるになむ。

鑿轍錄

即興詩人(未刊)御讀下され候由、いつもながら杜撰の翻譯愧入候。轍胸を碎くといふ事に就きての御不審承候。南翠子が轍の跡と書きしは、轍に既に迹のころあるを知らざる故の重言なり、赤い緋鯉のたぐひなり、とて大にねほ坂人に笑はれ候ひき、とは疾くに客の語を聞き居候。それに又小生が覆車の轍を鑿みたることを知らずして、南翠子と同じ誤をなしたりと思召され、ねん驚なされ

しならん歟。これには又ひとしほ愧入候。まことに轍は車迹也、とはいろくくの字書、東涯先生の名物六帖などにも有之事に候。又高論の如く、車轍馬迹とつゞきたるは、左傳昭公十二年に、昔穆王欲肆其心、周行天下、將皆必有車轍馬迹焉と相見候。又高論の如く、車の過ぎたるあとを地に印したるものを轍と申せるは、漢書張陳王周傳に、以席爲門、然門外多長者車轍とあり、又莊子雜篇外物第二十六に、周昨來、有中道而呼者、周顧視、車轍中有鮒魚焉とあり、又左傳莊公十年に、下視其轍、注に視車迹也とありと覺候。さらば先づ轍の跡といふ事ありやと問ひ試み候はん乎。御承知の如く、轍迹と連用したる例は、固より少からず候。孟子盡心下、城門之軌、兩馬之力與の注に、豐氏曰、中略、軌車轍迹也、中略、城中之涂容九軌、車可散行、故其轍迹淺、城門惟容一車、車皆由之、故其轍迹深とあり、又上に引ける左傳の下視其轍の條につきても、朱申云、我下車而視、則見其轍迹之紛亂と有之候。さらばこの轍迹といふ熟語によりて、轍の跡と申しても好かるべきかといはんは、孟子の注の車轍迹と轍迹とは、必ずしも車轍の迹、轍の迹にはあらずして、車の轍迹又單に轍迹とつゞくべきものかも知れず。殊にかの見其轍迹之紛亂に對して、登軾而望、則見其旗旆之頽靡とあるを思へば、轍迹と旗旆と對したる様にも存せられ候。以上は餘計なる心配かは知らねど、貴説の根據を、一應當つて見たる所に候。然らば南翠子が轍の跡といひしは、果して申譯相立ち難き過なる歟。小生が轍胸を碎くといひしは、同様の過なる歟。又小生が轍胸を碎くといひしが過ならば、其過は轍を車輪の義なりと心得違したるが爲なるか。此三點につきては、これより少々申上度候。御承知の通、小生もわらい學者には無之候。然し乍ら轍鮒の故事ぐらゐは、ね互に馬琴などに聞いたるばかりにても、心得居ることに候はずや。然るに單に轍を車輪と心得居たるかと

疑はんは、あまり酷には非ざる歟。莊子は小生坐右の書に候。いかにも其雜篇の鮒は、車の過ぎ去りし跡の地に印したる處に、ぼちや／＼致居りて、あはれ升斗の水もがな、とかこちしに相違あるまじく候。然し同じ莊子の内篇人間世に、汝不知夫螳螂乎、怒其臂、以當車轍、不知其不勝任也とあり。この轍若し車の過ぎ去りし跡の地に印したる處ならば、かまきりの身投とでも解すべき歟。まさか左様では有間敷候。又例の轍鮒の事を、劉向が說苑の善說篇には、乃今者周之來、見道傍牛蹄中有鮒魚焉と書いてありと覺候。若しこの蹄は牛のひづめなり、と決定いたし候はん乎。牛のひづめに挟まつて居たら、鮒も中々莊周に物言ふ餘裕なかるべく候。又蒙求に後漢の侯霸が事を侯覆臥轍と云へど、こは當道而臥したるにて、若し轍が必らず地に印したる者ならば、其跡へ臥して見送るともせんなき事に可有之候。又蘇洵が名二子説の轍も、地に印したるものとして、變に聞ゆべく候。そこで小生は、轍を以て、車の過ぎしあとの地に印したるものと限らんは、狹過ぎたる解ならんと存じ候。按ずるに古人の字を用ゐるや、頗る變通の自由ありて、車のゆくての道、うのたま／＼觸るゝ處なども、固より轍と申して苦からずと覺候。一步を進めていふときは、牛蹄は通常牛の足につきたるものに候。而れども場合によりては、うの地に印したるをも牛蹄と申候。車轍は通常地につきたるものに候。而れども場合によりては、うの轍迹を作るべき車の部分即ち車岡をも、車轍と申してよろじかるべく候。螳螂の當るといふ轍も、百姓の臥すといふ轍も、皆ゆくての道にして、この道には必ずしも前車の迹ありといふにはあらざるべく、殊に螳螂の方は、注者が直に約して螳臂當車と書したるをねもへば、これは直ちに轍を車のかたに取りたるやう存せられ候。轍の字果して車のかたに用ゐるべくば、南翠子が轍の跡といひしは、必ずしも申譯なき過にはあらざるべく候。

又車轍碎胸の方は、美文的の用語としては、どう解しても自在に候。先づ痕は刀の迹に候。刀肉を斷つといふ代に、痕肉を斷つとも申すべく候。今轍を車の迹と用ゐ候ときは、車胸を碎くといふ代に、轍胸を碎くとも申さるべく候。又上にいへる如く、車轍を車岡となすときは、刀肉を斷つといふにおなじかるべく候。原來小生が轍の字を用ゐし時は、車輪の事を轍といふ、と心得て用ゐしにあらざり、車に敷かるゝときは、必ず轍に敷かるゝものぞとねもひ、當りまへの事を書いたる積に候。後二三の友人に問ひ試みしに、いづれも當りまへの感じにて讀み過したりと申し候。以上意外に理屈めきたる箇處も有之、甚失禮の段は御免下され度候。猶末ながら申上げたきは、漢文と漢字まじりの國文との差別に候。南翠子は何の文中に、轍の跡と書かれしか、くはしき事は未だ聞かず候へども、多分小説ならんと推察いたし候。即興詩人も小説に候。今の小説は大抵訓の方が主にて、漢字は借りものに過ぎず候。されば漢文にて轍跡と書き、車轍碎胸と書くと、國文にてわだちのあそ書き、わだちは胸を碎きしなりと書いて、轍の字を借用すると、この兩者の間には、多少の差別有と存じ候。元とわだちは輪立にて、車輪の立ちざま若くは立つところに候はん歟。信實朝臣の歌にわだちといふことあり、とて雅言集覽卷十三に引きたるを見るに、小車の道の小野松はやともせわだちもみならず日はくれにけりとありて、これも道のゆくてをさしたるものか、さらば車の輪の立つところをさしたるものと覺候。わざ／＼前車の迹を求めて行くことゝすべきにもあらざるべく、又我車の地に印する迹を振りかへり見ることもあらざるべく候。南翠子の轍跡の方は、漢文にても、跡と迹とを古風に通ぜさせなば、難に逢ふことなくして止むべく、輪立の跡とれもは愈難なからん歟。わだちは胸を碎きしなりの方は、ずつとのん氣になりて、菅原傳習手習鑑の、な

がねにとまつて邪魔ひろがば、わだちにかけて敷き殺せ位を證據に提出しても、事足るべき歟。猶高教に接することを得ば幸甚。

思軒居士が耳の芝居目の芝居

歌舞伎新報社このごろ改良の舉ありて、氣脈を日本演藝協會に通じ、その新報を以て演藝社會の木鐸たらしめむとす。思軒子此運に乗じてその芝居に就きての意見を公にす。いはゆる耳の芝居、目の芝居は即是なり。思軒子は先づ美術の區別を示したり。その言にいへらく。人のたのしみは、耳によりて得るものあり、目によりて得るものあり。故世の精藝美術はまた或は耳に憩へ、或は目に憩ふ。樂曲講話は耳に憩ふる者なり。繪畫彫刻は目に憩ふるものなり。均しく耳に憩ふるものうちに、單にその音響の耳にたのしきを主とするあり、またその音響にて傳ふる意旨のたのしきを主とするあり。樂曲は多くその音響のたのしきを主とし、講話はその音響にて傳ふる意旨のたのしきを主とす。書を讀むたのしみは、目に由るが如くなれども、そのたのしき所以は、文字の形にはあらで、その文字の傳ふる意旨にあり。文字は唯だ講話音響の記號に過ぎず。故小説の如きものは、その文字をもて目に憩ふるに拘らず、強ひていづれにか屬せしめむとせば、なほ耳に憩ふるものに近しと。

いまの文學者は多しといへども、藝術の區別につきて意見を示したる人は殆無かりき。思軒子が部門のたてかたは、まことに明治の文學界にて、藝術の區別を立て試みたる始なれば、その得失を評論せむも無益ならざるべし。

むかし希臘の哲學者は大抵動靜を以て藝術を區別したりき。プラトオは靜の術を造る術といひ、動の術を奏ぶる術といふ。彫刻と繪畫とは造る術なり。樂も詩も奏ぶる術なり。(Republ. II) アリストテレスに至りて動の術を説くこと稍詳なりき。拍子のみなる動の術を舞とし、拍子及旋行ある動の術を樂とし、拍子、旋行、言葉ある動の術を詩とす。(Rhetor. I, Poetik I) 西曆の前世紀に佛蘭西の人バットオといふものありしが、夙く目の美術と耳の美術との區別を立て、彫塑、繪畫、舞蹈の三つを目の美術に屬け、音樂と詩賦とを耳の美術に屬けき。(Traite des Beaux-Arts, 1746) この基督世紀に入りては、カント語る術と造る術と感の術とを分ち、辯舌と詩賦とを語る術とし、彫塑と繪畫とを造る術とし、音樂などを感の術としたり。(Kritik der Urtheilskraft) シェリングは詩を想の術とし、音樂と繪畫と彫塑とを實の術とす。(Werke, Bd. V) ショオペンハウエルは無機有機の世界によりて藝術を分てり。無機世界の藝術は譬へば建築の如し。植物界に園藝あり、山水を寫す術あれば、動物界に獸形の彫塑あり、獸形の繪畫あり。人間界もまた此の如し。(Die Welt als Wille und Vorstellung, Edit. III, I) ヘーゲル出るに及びて視の術、聽の術の二つの外に、空想の術を添へ出しつ。造る術は視の術なり。音樂は聽の術なり。詩賦は空想の術なり。(Aesthetik II.) 思軒子が立てたる美術の部門は略々バットオに同じ。美術を目に憩ふるものと耳に憩ふるものとに分ちたるは、思軒子とバットオと殊なるところなきなり。音樂と詩賦とを耳の美術に屬けたるも、また思軒子とバットオと殊なるところなきなり。繪畫と彫塑とを目の美術に屬せしめたる、是れはまた思軒子とバットオと殊なるところなきなり。然れどもバットオが目の美術に加へたる舞をば思軒子度外に置きたり。思軒子が耳の美術に加へた

る講話をばパットオ度外におきたり。

思軒子は舞を度外にねきたり。さりとて思軒子も目の美術を繪畫彫塑に限りたるにあらず。パットオは講話を度外にねきたり。こはアリストテレスの類別に基せしものにて、美術の外に、役すべき術と飾の術とを立てたるより、辯舌を飾の術に入るやうになりしなり。我國の美術といふ言葉は、佛語 (Beaux-Art) より轉じ來れるなるべけれど、その範圍明に立てりといふにあらねば、藝術といへると太だしき差異なからむ。是に於いてや、思軒子は講話をも美術として論ずるに至れり。

思軒子とパットオとが美術の區別には分明に一病處あり。思軒子が講話讀書を以て、耳に憩ふる美術に近きものとしたることは是なり。パットオが詩賦を耳の美術に入れたることは是なり。けだし二家の部門の立てかたに此病處あるは、家隘くして客多きがためなり。すべての美術を耳に憩ふる部と目に憩ふる部とに收めむと企てたればなり。

ヘーゲルは客の二室にあふれたるを見て、新に第三の室を築いたり。視官に憩ふる術と聽官に憩ふる術との外に、空想に憩ふる術を立てたり。思軒子が其部門の立かたに病處あるを覺れたるは、講話讀書の人をたのしましむる所以を、音響の記號の外なる意旨に求めしにても知らるべく、また講話讀書を耳の美術に屬せしめしを強ひてのわざなりとことわりたるにても知らるべし。われは唯思軒子がヘーゲルの如く空想に憩ふる術のために、別に一門を立てざりしを惜む。

わが聞くところによれば、藝術の區別はヘーゲルに至りて分明に進歩の一段をなしたり。ヘーゲルが後に出でて更に歩を進むること一段なりしものは、わがらくはハルトマンなるべし。ハルトマン

は藝術の四大部を分てり。第一大部は獨立せざる形の美の術にして低き級に居るものなり。これを三小部に分つ。一を空間ありて時間なき靜なる目の映象の術とす。錐形の如く、平面をなしたる飾の如し。二を時間ありて空間なき耳の映象の變化とす。詩の手法などはこゝに屬したり。三を時間と空間とを備へたる動の術とす。烟火戲の如く、走馬燈の如し。第二大部は羈絆せられたる術なり。これを二小部に分つ。一を官能に屬したるものとす。その空間のみを備へたる靜なる目の映象の術には、建築法、園藝、化粧のしかた等、工人の手にある雜藝あり。その空間と時間とを備へたる動の術には、いはゆる體操、競漕などあり。これ動きたる目の映象の術なり。また行儀作法あり。これ目と耳との映象の術なり。その時間のみを備へたるものは闕けたり。二を製作力ある空想に屬したるものとす。教の詩を作る訣、論じ争ふ術、説教、席上演説、游説の法、談話の技倆等、皆こゝに屬したり。第三大部は自由なる單の術なり。これを二小部に分つ。一を官能に屬したる映象の術とす。その時間ありて時間なく、視感に媒せらるる靜の術を造形の術とす。彫塑と繪畫と是なり。その時間ありて時間なく、聽感に媒せらるる變化の術を音の術とす。器を用ゆる樂、表情言語の術、(朗讀法) 表情唱歌の術の三つは是なり。その時間と空間とを備へたる動の術にして、動きたる目の映象と動きたる耳の映象とに屬するものを表情舉動の術とす。全からざるものに表情舞の如き術あり、全きものに言葉と舉動との表情術、即ち飾畫なき西洋芝居、唱歌と舉動との表情術、即ち飾畫と器を用ゆる樂となき「オペラ」あり、皆是なり。二を空想の映象の術、すなはち詩賦とす。第四大部は複りたる術なり。これにつきては下に略説せむ。(Aesthetik, Thl. II, Buch II, Cap. IX, X.) ハルトマンが藝術の區別は、これのみにては會得しがたかるべしといへども、われは

これにてうの比較的に整へるさまを示したるのみ。カントが立てたる部門には、感の術の如く怪しげなるものあり。シヨオベンハウエルが金石植物によりたる區別も未だ。シエルリングが實の術といふ名もめでたからず。すべての藝術を系統の中に收めんとするときは、動靜あり、高低あり、羈不羈あり、時間空間あり、視聽空想あるを一々に考へ、この許多のものを或は經にし、或は緯にせざるべからず、ハルトマンは略々これを得たるものならむ。

思軒子は次に美術の聯合を説いたり。うの言にいへらく。芝居は耳と目とのたのしみを合一し、調諧せる者なり。俳優の扮装仕ぐさ、舞臺の大道具小道具は目にしたのしきなり。俳優のせりふ、淨瑠璃、囃し鳴物は或はうの意旨をもて、或はうの音響をもて、或は兩者を兼ねてもて、皆耳にしたのしきなり。芝居のもろくの精藝の上に超出して、大精藝大游戲たる所以は即ち此の如く各種の精藝を集めて、これを調諧せるにありと。藝術の聯合の上につきて前人の説きしところを見るに、うの淵源は希臘までは及ばざるが如し。プラトオは芝居を奏ぶる術に列ねしが、その聯合のさまにつきては論ぜしことなし。バットオに至りて目の美術なる舞と耳の美術なる樂及詩と聯合するさまを論ずること頗詳なりき。後ブランドといふ人ありて舞臺の上にての藝術の聯合を説いたることあり。(Planck, Ueber die Verbindung der Kuenste auf der Buehne.)

思軒子が見は美術の聯合の上につきても頗るバットオが見に似たり。思軒子がいはゆる扮装仕ぐさはバットオが舞に當れり。思軒子がいはゆる囃し、鳴物はバットオが樂に當れり。思軒子がいはゆる淨瑠璃、せりふはバットオが詩に當れり。

ハルトマンは藝術の四大部を立て、その第四大部に聯合したる術を收めたり。これを分ちて二小

部とす。羈絆せられたる諸藝の相聯合したるはうの一なり。譬へば化粧のしかた、行儀作法、談話の技倆などを兼ね行ひて、巧に世を渡る術の如し。自由なる諸藝の相聯合したるはうの二なり。これに二を合せて一となしたるもの、三を合せて一となしたるもの、及び四を合せて一となしたるもの、數種あり。官能の術二つを合せたる例には、三味線に合せたる踊を引くべし。官能の術一つと製作の術一つとを合せたる例には、淨瑠璃の素語を引くべし。是を二を合せて一となしたるものとす。官能の術三つを合せたる者には、西洋の「バレット」の舞あり。うの合せたるものは、曰飾畫、曰舞、曰器を用ゆる樂、是なり。官能の術二つと製作の術一つとを合せたるものには、一邊に三味線に合せたる淨瑠璃語の如きものあり。その合せたるものは、曰淨瑠璃といふ詩、曰淨瑠璃といふ唱歌、曰三味線といふ器を用ゆる樂、是なり。一邊には飾畫ある西洋芝居あり。うの合せたるものは、曰正本といふ詩、曰俳優の言葉即ちせりふとその舉動即ち仕ぐさとの表情術、曰飾畫、これなり。是を三を合せて一となしたるものとす。また四を合せて一となしたるものは、唯飾畫と器を用ゆる樂とを備へたる西洋の「オペラ」あるのみ。うの合せたるところは「オペラ」の正本といふ詩の外に官能の術三つあり。曰唱歌と舉動との表情術、曰器を用ゆる樂、曰飾畫。

我國のいまの芝居は、藝術の聯合の上より見るときは、西洋芝居よりも復りたるものにて、ハルトマンが系統の外に立ちたる術なり。我國のいまの芝居は五を合せて一となしたる術なり。西洋の芝居の三要素は正本になるべき詩(散文と韻文とを問はず)言葉と舉動との表情術、及び飾畫なり。これに器を用ゆる樂と肉聲の淨瑠璃(唱歌)との二つを加へて、我國の芝居とはなるなり。われは上の方にて、思軒子が藝術の聯合の上より芝居を見たる説のバットオが説に似たることをい

ひしが、今は我國の芝居と西洋の芝居との組立を細述したる上なれば、改めて思軒、バットオ兩家の説を比較すべし。バットオは飾畫を餘所にしたるに、思軒子は大道具小道具といふものを擧げて、芝居に屬する目の美術なりといへり。これ等の相殊なることの二つなり。バットオは詩と舞と樂とに色々の組立かたあるを説きたれども、言葉と舉動との表情術を舞なりとしたるもおもしろからず。西洋の芝居にては必要ならざる樂を入れたるもおもしろからず。思軒子は舞と言はずして俳優のしぐさといひ、日本の芝居にては必要なる樂を入れたるなり。これその相殊なることの二つなり。要するに思軒子が説はバットオが説より精きものなり。左の表にはハルトマンが用語例に従ひて數へたる我國の芝居の分子を示して、其下に思軒子が用語例に従ひての譯を附したり。

我國の芝居の組立

ハルトマンが用語例

思軒子が用語例

- Poesie (詩).....淨瑠璃せりふの意旨
- Spracheberedenninik (言葉と舉動).....俳優のしぐさ及びせりふの音響
- Gesang (唱歌).....淨瑠璃の音響
- Instrumentalmusik (器を用ゐる樂).....唯し鳴物
- Decorationsmalerei (飾畫).....大道具小道具

次に思軒子は我國の芝居、支那の芝居(劇)西洋の芝居、西洋の「オペラ」の四藝に就いて、その首にするところのれれ、相殊なるを示さむとしたり。その言にいへらく。外國にありて、我邦の芝居に似たるものは、支那の劇、西洋諸國の「オペラ」若くは「シアトル」なり。而してこれを要するに

外國の芝居の類は、大低多く耳に惣へて、少く目に惣ふ。耳のたのしみ首にして、目のたのしみは次なり。俳優のせりふ首にして、俳優の仕ぐさは次なり。劇と「オペラ」とは寧ろ我邦の能曲に近く、俳優の述ぶるところのせりふは、多く歌となりて、客はこれを聴くをもて第一のたのしみとし、俳優の扮装しぐさ、舞臺の道具等はこれに隨伴せる第二のたのしみをなすのみ。現に劇の如きは今日支那にありて、觀劇といはずして、聽劇といふ方を通例とす。亦た以てその重に耳に惣ふるものたることを想見すべし。「シアトル」は稍や我邦の芝居に似たれど、目のたのしみたる俳優のしぐさに至りては甚稱しと。

藝術の聯合の上にてれのく、その首にするところありやなしやは古より論あり。レツシング嘗て最もへらく。樂を首にして、詩を次にしたる術は「オペラ」なり。詩を首にして、樂を次にしたる術は、世にこれを講ぜしものなし。さて樂と詩とにねなじ重みを與へたる術を講ずるものなきは最も惜むべしと。おもふにレツシングは極めて美き聯合術にては、首にする分子と次にする分子となかちむことを期したるならむ。されどわれはバットオ、ブランク二家の言を引いたるシヤスレルが説(Aesthetik, Abthlg. I)を取りて聯合術には首にする分子と次にする分子とあるべきものとせむ。

ハルトマンは西洋芝居の分子に就いて抽象價値を定め、詩を首にし、言葉と舉動との表情術を次にし、飾畫を尾にしたり。おもふに我國の芝居にては、唱歌、器を用ゐる樂の二つのもの、かの言葉と舉動との表情術と飾畫との間に居るならむ。ハルトマンはまた「オペラ」についてねなじ次第を立て、詩を首にし、唱歌と舉動との表情術を次にし、器を用ゐる樂をその次にし、飾畫を尾にしたり。(レツシングがいへる如く樂を首にしたる「オペラ」は素より多けれど、ハルトマンはそれを「オペ

「ラ」の正體にあらざとせり。想ふにわが國の能は詩、唱歌と舉動との表情術、器を用ゐる樂の三つより成りて、飾畫を殆全く除いたるものなれば、其次第は詩を首にし、唱歌と舉動との表情術を次にし、器を用ゐる樂を尾にすべきならむ。こゝろみに四藝の分子を空想の分子、耳の分子、目の分子、耳と目との分子の四種に分ちて、その次第を立つるときは、左表の如し。

西洋の芝居

首	空想	詩(正本)
次	耳及目	言葉と舉動との表情術
尾	目	飾畫

我國の芝居

首	空想	詩(正本)
次	耳及目	言葉と舉動との表情術
次	耳	唱歌(淨瑠璃)
次	耳	器を用ゐる樂
尾	目	飾畫

「オペラ」

首	空想	詩(正本)
次	耳及目	唱歌と舉動との表情術
次	耳	器を用ゐる樂
尾	目	飾畫

我國の能

首	空想	詩(詠曲)
次	耳及目	唱歌(謡)と舉動との表情術
尾	耳	器を用ゐる樂

これに由りて觀るときは、西洋の芝居にても、我國の芝居にても、「オペラ」にても、能にても、首

にすべきは空想にて、耳と目を兼ねたるものこれに次ぎ、耳のみなるもの、若くは目のみなるもの尾をなして、さてその耳若くは目のみなるものうちにては、耳先にすべく、目後にすべし。われは審美學上に芝居、「オペラ」等の性質を論ずるときは、必ず世界に貫通すべき一條の道理あるべきを信ず。故われは又芝居に近き東西の四藝は、その正體に在りて、その必ず首にすべく、必ず次にすべく、必ず尾にすべき分子を備ふべきを信ず。上に挙げたる順序は或はその髣髴を得たるものならむか。

上の四藝のうちにて、西洋の芝居と我國の芝居とは、共に言葉と舉動との表情術を以て骨とす。これ等をば言葉の芝居といふことを得べし。また「オペラ」と能とは、共に唱歌と舉動との表情術を以て骨とす。これ等をば唱歌の芝居といふことを得べし。

思軒子は四藝の外に支那の劇をも添へ出して、劇を「オペラ」とは能に近しといへり。その近き所以は皆唱歌の芝居なればなり。思軒子は「シアトル」即ち西洋の芝居を以て、稍我國の芝居に似たりとす。その似たる所以は皆言葉の芝居なればなり。

思軒子は又劇を「オペラ」と能とを以て、多く耳に想へ、少く目に想ふるものとしたり。所謂耳の芝居とはこれならむ。思軒子は又我國の芝居を以て、多く目に想へ、少く耳に想ふるものとしたり。所謂目の芝居とはこれならむ。「シアトル」すなはち西洋の芝居に至りては、思軒子がためには、首に目に想ふべくして、その目に想ふる術甚だ稱きものなり。

若し審美學の通則より見るときは、我國及び西洋の芝居、「オペラ」、能の四藝はいふもさらなり、これに思軒子が引き出でたる支那の劇をも加へて五つの類藝となしても、皆空想に想ふる分子(詩)

を首にし、耳に想へ、目に想へ、又耳と目に想ふる分子をば次にし、尾にすべき者ならむ。されどは諸藝の正體につきていへるなり、其極致に就ていへるなり。我國にても、西洋にても、藝術の實相は多く極致と相背馳するを奈何せむ。

殆全く飾畫を用ゐざる能、舞臺を飾ることいと拙き支那の劇の二つには、空想を除きていふときは、耳に想ふること多く、目に想ふること少かるべきは言を待たず。されど芝居を小説のやうにねもひ、道具立にて叙事を補はむとする今の自然派の勢を違うる歐羅巴諸國にては、巧に飾畫を作ること漸く甚くなりて、表情術をも壓し、正本をも壓するに至れり。このごろ西洋の芝居及び「オペラ」にて仕度の曲(Ausaktunstuck)と稱ふる者即是なり。かく迄目に想ふること甚きいまの「オペラ」を我國の能、支那の劇に等く、耳の芝居といひ、これも仕度の曲を興行することある今の歐羅巴の芝居を、耳の芝居に近きやうにいひむは、ねうらくは少しく安ならざるべし。またかくまで飾畫に横領せられて、花の盛を見するやうなる歐羅巴の「オペラ」を耳の芝居としたるに對して、道具立極めて稱く、うのさま枯野の如き我國の芝居を、目の芝居と稱へむこと、これもおそらくは少しく安ならざるべし。

されどは諸國の芝居に近き藝術の實況より見たる上の沙汰のみ。また一々の藝に就いて、うの空想、耳、目に想ふるすべての分子を比較したる上の沙汰のみ。思軒子が耳の芝居、目の芝居の區別を立てたるは、現況に偏りたる論にあらずして、原理に偏りたる論なり。また藝術のすべての分子を衡べたるうへの論にあらずして、うの骨髓とするところの分子を比べたるよきの論なり。われれもふに思軒子が所謂目の芝居は即是れわが所謂言葉の芝居なり。言葉の芝居は言葉と舉動と

の表情術を骨とす。我國の芝居と西洋の芝居と、これに屬す。また思軒子が所謂耳の芝居は即是れわが所謂唱歌の芝居なり。唱歌の芝居は唱歌と舉動との表情術を骨とす。我國の能、支那の劇、西洋の「オペラ」皆これに屬す。

思軒子は何故に言葉の芝居を目の芝居とし、唱歌の芝居を耳の芝居とせしか。いはく。言葉の芝居すなはちせりふの芝居の骨髓なる言葉と舉動との表情術は、耳にも目にも想ふるものながら、これを唱歌の芝居の骨髓なる唱歌と舉動との表情術に比ぶるときは、うの目に想ふところ多く、また唱歌の芝居の骨髓なる言葉と舉動との表情術は、ねなじく是れ耳にも目にも想ふるものながら、これを言葉の芝居の骨髓なる言葉と舉動との表情術に比ぶるときは、うの耳に想ふところ多ければなり。言葉を代へて言ふときは、言葉の芝居にての俳優のしぐさは、唱歌の芝居にての俳優のしぐさより、其價貴きものなればなり。うの緣由をば左にいひむ。

ハルトマンのいはく。舞臺にても舞臺ならぬところにも、歌ふときの舉動は、語るとききの舉動より靜なるは、二重の緣由ありてなり。第一。ねなじ時間口より出づる音の数は、唱歌にて少く、言葉にて多し。かゝるときき舉動と言語と並び馳せしめむには、歌詞の流の滲漫なるに従ひて、舉動の時も、數人の情相争ふ時も、その内なる行爲即ち情緒の變化劇くして、これがために生ずる外なる行爲の進捗速なれば、情を賦することまはり遠く、理路を逐ひて、一たび得たる終結をも充分なる餘音あるやうに描き出す樂劇にねなじからず。約して言へば、「オペラ」は芝居の如く戯曲の性を具へず、芝居は「オペラ」の如く叙情詩の性を具へず。さればうの興行の時間同じき時は、「オペラ」の行

爲は芝居の行爲より簡ならざるべからずと。(Aesthetik, Abthlg. II, p. 708-709) けだし言葉の芝居にての俳優のしぐさの、唱歌の芝居にての俳優のしぐさより、其價貴きは、言葉の芝居にての言語の流は唱歌の芝居にての言語の流より急なると、言葉の芝居の内外の行爲は唱歌の芝居の内外の行爲より劇く、また速なるをによりてなり。

されば唱歌の芝居なる能、劇、「オペラ」の三藝の俳優のしぐさの、我國の芝居にての俳優のしぐさに及ぼざること、思軒子が言の如し。然はあれど思軒子が劇を「オペラ」との俳優のしぐさの劣れる處を押し擴めて、外國の芝居の類の通性なるやうにいへると、これに言葉の芝居に屬する西洋の芝居を殆連坐せしめて、その俳優のしぐさ甚だ稱しといへるとは、おろらくは少しく妥ならざるべし。劇を「オペラ」との俳優のしぐさの劣れる處を押し擴めて、外國の芝居の類の通性なるやうにいへるは、何故に妥ならざるか。いはく支那は姑くおきて、歐羅巴の實況を観るに、唱歌の芝居なる「オペラ」の外に、言葉の芝居の盛に行はるゝあればなり。「オペラ」と支那の劇とに、言葉の芝居に屬する西洋の芝居を連坐せしめて、その俳優のしぐさ甚だ稱しといへるは、何故に妥ならざるか。いはく言葉の芝居と唱歌の芝居と別るゝ審美上の天性より見るときは、西洋芝居は甚だ我國の芝居に近く、甚だ劇と「オペラ」とに遠きものなればなり。また西洋芝居にての俳優のしぐさは甚だ稱しと抹殺せらるべきものにあらざるとおもはるればなり。

歐羅巴の大都會には大抵「オペラ」座と芝居座とあり。わが劇場に出入すること頻なりし都會を例に引けば、伯林には王家の「オペラ」座と王家の芝居座と並び立てり。「オペラ」座にては「オペラ」と「バレット」の舞とを興行し、芝居座にては悲劇、嬉劇などを興行するを常とす。この兩座の外、

猶十五六の劇部ありて、多くは言葉の芝居をも唱歌の芝居をも興行す。維也納にも宮掖の「オペラ」座と宮掖の芝居座とあり。巴里にも専ら「オペラ」を興行する劇部と専ら芝居を興行する劇部とあり。稍小なる都會に至りては、大劇場たゞ一つなるもあれど、此の如き劇場にては「オペラ」と芝居とをかはるゝ興行す。譬へばドレスデンの如し。ドレスデン新市の宮掖劇部は小嬉劇などを興行するのみなるを以て、大なる道具立を要する言葉の芝居と「オペラ」をば必ず舊市の宮掖劇部に興行す。ミュンヘンの朝野劇部にて「オペラ」と大芝居とを興行し、王城劇部にて小芝居を興行するも亦た此類なるべし。唱歌の芝居なる「オペラ」の外に、言葉の芝居の盛に行はるゝさまは約そ是の如し。(この外の諸都會の劇部の事はクレマン、コンスタンが書などに就いて見るべし) (Clement Constant, Parallele des principaux theatres modernes de l'Europe etc. Paris, 1860.)

歐羅巴の俳優の言葉と舉動との表情術は、その由りて來るところ遠からず。假面を被ふりて技を演ぜし時代、男優のみにて兩性の役を勤めし時代には、この術の發達充分なることを得ざりければなり。(Hartmann's Aesthetik, Abthlg. II, p. 702) されば基督前世紀の末より以還、言葉と舉動との表情術の歩を進めたることは、極めて著きものなり。總じて表情術を叙するは文士の難んずるところなれば、その世々の變化を載籍に徴せむは、いとむづかしきことなれど、且くギョテが劇律 (Regeln fuer die Schauspielkunst) を以て我國の耳塵集、あやめぐさ等に比べ見よ。西洋芝居の甚だ我國の芝居に近きを知ると共に、手の振りかたはかく、足の踏みかたはかうと、定規づくめにする理想家の力も侮り難きところありて、西洋芝居の俳優のしぐさ必ずしも甚だ稱きものにあらざるを知るに足らむ。

思軒子は次に西洋芝居の沿革を説いて、西洋の俳優のしぐさの穉きを證せむとしたり。その言に「シアトル」はもと希羅にて祭日の遊戯に、神代の事どもを、さまざまに取り仕くみて演ぜるより起りたり。故うの始は我國の二十五座外道踊たどりに同きなり。漸く進みて人界の事を演じ、「トラジチイ」のたぐひの客を感ずること深切なるもの、稍體を具ふるに及びても、そのしぐさは只い社會平生の起居振舞を少しく皇張し夸大せるに過ぎず。近くこれを喩ふれば、數月前吾妻座にて某翁門下の男女が演せる一種異様の觀せものを、更に拍子よくし、更に専門的にし、工技的にせるに過ぎざるなりと。

歐羅巴の芝居の權輿は、希臘人の祭日の遊戯なること、まことに思軒子が言の如し。人身獸脚の形に扮したる群の、かつは歌ひかつは舞ひきといふ、チオニッスなどの神の御前の遊戯をば、我國の二十五座に同じといひても善かるべし。漸く進みてエスキュロス、ソフオクレスが諸曲を興行するに至りし時の俳優も、衣を厚うし、履を高くし、假面を被ふりて場に上ぼりしなれば、其技は平生の起居振舞を皇張し、夸大したるに過ぎざりきといひても善かるべし、また某翁（學海居士を指したるならむ）門下の男女が演せる一種異様の觀せものを更に拍子よくし、更に専門的にし、工技的にしたるに過ぎざりといひても善かるべし。さばれこは皆いにしへの希臘人が祭祀の時の歌舞を進化せしめて、悲劇と嬉劇とを演ずるに至りし第七十「オリムピヤアデ」の頃の事なるべし。希臘の芝居はオイリビデスより後、次第に衰へゆきぬ。羅馬の興るに迫りて、希臘の芝居の餘風を承けて、うの初には此技を盛にせしが、「ムウスマス、グラデアトオリウム」のために一たび挫かれ、「チルクス」のために再び挫かれ、「パントマイメ」のために三たび挫かれしとあるに、基督教羅馬に入りて、演劇の

事に利あらざる運動漸く勢を得、第二基督世紀の末には「トラギョヂア」は惡鬼の業わざなりといはしむるにいたりぬ。されば希臘悲劇は第四基督世紀までこそ希臘語を操れる羅馬國の東隅に残りもしたりけむ。この後は希臘の芝居全く絶たぎつにき。(Produss, Geschichte des neueren Dramas, Bd. I, Haeft. I)

今の歐羅巴の芝居はねほいに希臘の芝居に殊なり。史家に向ひてうの起源を問はば言葉の芝居も、唱歌の芝居も希臘より出づといはむ。されど羅馬滅びて後、第十世紀のころに盛なりし宗教芝居ミステリクムは希臘芝居に縁ありしにあらず。この希臘芝居に縁なき中古の劇、再生期ネチッサンスと改革期レフオムマチオンとの影響を被りて、西班牙、伊太利の近世の芝居となり、佛蘭西芝居となり、英吉利、獨逸の芝居となりしなり。第十六基督世紀のフイレンチエ人が力を唱歌の芝居に盡し、や、箆のりをいにしへの希臘芝居に取りきといへども、うは希臘の樂曲の上のことにて、希臘より唱歌と舉動との表情術を傳へたるにはあらず。(Nohl, Musikgeschichte, p. 118-130) 基督曆千三百十四年に月桂冠を戴きしムツサトオより後の伊太利詩人が希臘の昔をまねびつるも、(Klein's Geschichte, Bd. V) 前の基督世紀にポアロオが詩律(L'art poétique) 出でしころコルチイユ、ラシン、マルテエヤ等が希臘まがひの正本を作りしも、うは希臘の戲曲の上のことにて、希臘より言葉と舉動との表情術を傳へたるにはあらず。歐羅巴にては、唱歌と舉動との表情術も、言葉と舉動との表情術も近世の術なり。その起源は中古の宗教芝居より出づといふべけれど、希臘芝居より出づといひ難からむか。近世の言葉と舉動との表情術は、ひとり皇張夸大の趣あるのみならず、亦た微妙の趣あり。思軒子はこれを工技的なりとして、我國の俳優の仕ぐさの美術的なるに對したる如くなれど、うは後に辨せむ。

思軒子は次に我國の芝居の沿革を説いて、我俳優のしぐさの美術的なるに及びたり。うの言にいへらく。我俳優のしぐさは元と人形(偶人)の身振より來れるもの多し。人形は人の如く細微なる筋肉のはたらきをなさず。故眉と瞳とを著く利用してこれを表することとなるなり。人形は人の如く圓く頭を回らし、手を揮はず。故角立ちたる一種の所作を生ずるなり。芝居のしぐさは即ち人形のこれ等の身振を承けて、さらに許多の鍊磨を加へ、幾段の發達を遂げたるものなり。故その形たる即ち所作身振の極致たるものなり。若し美術といはば我邦芝居の仕ぐさは即ち美術の妙に入りたるなりと。

我國の俳優の言葉と舉動との表情術に操人形より出でしところあるは、まことに思軒子が言の如し。さばれ角立ちたる人形まがひの所作を鍊磨して發達せしめたるを、所作の極致なりとし、かゝる所作を能くする人を美術の妙に入りたりといひ、これに對したる歐羅巴の俳優の仕ぐさを甚だ稱しとせむは、ねうらくは少く安ならざるべし。人形より出でたる所作の極端は所謂人形身なり。人形身は易き業にて、をりく俳優のこれを用ゐてうの拙さを藏すことあり。若し所謂形を以て、所作身振の極致なりといふことを得べくは、ギョオテが詩律を履行して俳優の能事畢らむ。

夫れ形はもとより忽にすべからざるものなれども、言葉と舉動との表情術の主眼はこゝにあらざるべし。美術家の業は半ば意識界の中にて成り、半ば意識界の外にて成る。常の意識の外に夢の意識あり。夢の意識の常の意識に入るを空想といひ、常の意識の夢の意識に入るを自憑 *Auto-suggestion* といふ。俳優の場に登りて技を演ずるや、常の意識は夢の意識に入りて、言葉はその意味に縁りて身振を喚ひ起し、身振はうの交感に由りて言葉を惹き出す。故言葉と舉動との表情術は畢竟みづか

ら憑る術に過さず。(Hartmann's Aesthetic, Abthlg. II, p. 700) ある人昵めるところの俗人に問うてさうらく。爾がともがらは多し。爾がひとり場を擅にするは何故ぞと。答へていはく。吾がともがらその身を女にするときは、必ず併せてその心を化して女にす。さる後に柔情媚態、見るひとをして意消えしむ。如し男の心の一綫だに猶存するときは、必ず一綫の女に似ざるところあり。さるときはいかで蛾眉曼睩の寵を争ふことを得べき。場に登りて劇を演ずるに至りては、貞女たるとき其心を正うして、笑謔することありといへどもその貞を失はず。淫女たるときうの心を蕩けしめて、莊坐することありといへどもその淫を掩はず。貴女たるときはうの心を尊び重んじて、微服したりといへども貴氣を存せしめ、賤女たるときはうの心を歛抑して、盛粧せりといへども賤態あらじむ。賢女たるときはその心を柔婉にして、怒ること甚しといへども遠つる色なく、悍女たるときはうの心を拗戾にして、理誦すといへども巽る詞なし。その外喜怒哀樂、恩怨愛憎、一々身をうのところに置きて、戲となさず、眞とす。他人は女の事を行ふとき、女の心を存すること能はざれば、女らしき種々の状をなして、女の種々の心あること能はず。これわがひとり場を擅にする所以なりと。(槐西雜誌卷二)所謂女の心は實感にまがひて、その説詳ならねども、おもふにかゝる擅場の俗人は、必ず自憑を巧にするものなるべし。人形ぶりはいかに熱練すといへども、たゞ所謂種々の形をなすのみにて、種々の心あらじむること能はざるものならんか。

思軒子は西洋の芝居を社會平生の起居振舞より出でたりとして、これを工技に數へ、我國の芝居を人形の振より出でたりとして、これを美術に數ふ。工技と美術との差別は未だ詳ならざれども、工技的は美術的より低きものならむと推せらる。社會平生の起居振舞と人形まねびの所作とを比ぶる

ときは、彼は自然にしてこれは藝術なり。されど劇を演ずるときは喜怒哀樂、恩怨愛憎は實感にあらざ。これを喚び起すに自憑の力を以てすれば、即是れ藝術にして、この藝術はれそらくは偶人の形に擬する術にまさりたるべし。

思軒子が結論にいはいはく。わが平生徳川に負ふところのものは唯だ一つあり。芝居の發達これなり。わが平生世界に誇る進歩は唯だ一つあり。芝居のしぐさ所作これなり。芝居の何物たるかを辨せずして、我國特有の精藝を棄て、晚進未熟なる西洋の「シアトル」を學ばむとするものは、われ遂にその謂を解すること能はざるなり。また若し眞に「シアトル」を知りてこれを我邦に移さむと欲せば、何ぞ直に外道踊を改良する會を組織する提徑に由らざると。

我國の芝居の發達はまことに徳川文明の名残なるべし。我國の芝居の仕ぐさ所作には、世界に對して耻づかしからぬところあり。唯疑ふ、今の世界に對して耻づかしからぬところは、操人形のまねびにあらずして、團十菊五等が自憑の力に富みて、言葉と舉動との表情術を行ふにあらむかと。わが聞くところによれば、ニユルンベルヒに初めて常芝居を作りしは基督曆千五百五十年なり。千五百七十六年には龍動にも常芝居 (Black-Trains) ありきといふ。されば今の歐羅巴の芝居も三百歳の經歷あり。我國の徳川時代の芝居の沿革も亦た三百歳を超えず。西洋にての言葉と舉動との表情術は、わがらくは必ずしも晚進ならざるべし。また今の必ずしも未熟ならざるべきは、わが信ずるところなり。これを外道踊を改良する資にせむは、或は少しくもつたいなかるべきか。

演劇改良論者の偏見に驚く

演劇とは何ぞ。優人場の上りて戯曲を演ずるを謂ふ。されば戯曲ありて後に演劇あり。彼は主たり。此は客たるべし。世上或はこれに反して戯曲は演劇の爲めに作れるものゝ如くいふものなきにあらねど、若この論社會に熾ならんか、戯曲と演劇と並び衰ふること必せり。請ふらくは試に其然る所以を道はん。蓋戯曲の物たる詩の諸長を兼備せり。我邦にてこそ古來甚だこれを崇ばざる習を養來りたれ、一たび之を外邦に徴するときは、今の詩體中の主位に居ること掩蔽すべからず。印度のカリダサは姑く置き、希臘のソフオクレス、オイリピデス、エスキュロス等の傳奇は、其一代文華の盛を代表するに足り、獨逸文學の勃興は、當初一二明眼の士が私淑したるシエクスピヤの戯曲に淵源したる等、皆今の明證なり。果して然らば其品位價值、決して一劇場一優人の爲めに私すべきものにあらざるを知るべし。

然りと雖余等は戯曲を作るものに向ひて、毫も法則なく勝手に今の趣向を綴れと云はず。戯曲は優人に演ぜしめて其光焰を發すべきものにして、勢耳目を藉りて心を娛ましめざることを得ざるが故に、自ら他の詩體例之ば小説と殊なる所あり。この戯曲の約束を一言にて云はば、今の叙述する事迹は看客の目前にて、芽を萌し、花を開き、實を結び、一歩々進み來らざるべからず。これを戯曲の行爲と謂ふ。小説は則ちこれに殊なり。先づ今の花を開けるを寫して、後に今の萌芽の狀を追叙するも可なり。或は直に今の實を結べるを寫して、其萌芽と開花とは人をしてこれを想見せしむるのみなるも亦た不可なることなし。是他戯曲には猶ほ其本體の爲めに生ずる約束なきにあらねど、苟くもこれを守れる以上は、余等は戯曲を作るものに向ひて、これを場の上すための便宜を求むるを嫌ふなり。

若夫れ戯曲を作るものに向ひて、演劇上の便宜を求めんか。是れ主たる作者の肘を掣して、客たる場主優人の跋扈を致すものに非ずして何ぞ。爰に千古の傑作たる一の院本あり。これを演ぜんとするには、多少の困難ありとせんに、進みて優人を指揮し、これを演ぜしむること、梓人の群工を役するが如くなるものは、場主にせよ、狂言方にせよ、安排者の當に任ずべき所なり。渠輩にして少しく奇特なる院本に出逢ふ毎に、必ず逡巡趨起して是れ劇としては演ずべからぬものなりと斷言することあらば、偶々以て其不能を表すものとみ。看よ、泰西の劇場にはかの天馬空を行くが如きギョオテの「ファウスト」を場に上げずものさへあるを。嗚呼、場主狂言方の自ら不能に安ずるは猶ほ可なり。苟くも操觚者流にして、濁流の波を揚げて自ら嫌はず、強顔して某は好院本を作れり、而れども劇場の規矩に合はざるを奈何と云ふ。余等其何の心なるを知らざるなり。

然れども此の如き流弊は、特り我邦に於いて之あるのみならず、泰西諸國にても屢々其汚點を文藝史上に印したり。さればこりユウゴオは色然として女優ムルマルスに向ひ、その名聲の一時に喧かりしに拘らず、吾文若卿の意に適はずんば、卿其れ演者の班を脱せよと叱られた。さればこり又希臘の作者を始め、フォルテエヤ、ギョオテ、シエクスピイヤ等は自ら傳粉して場に上り、イムメルマン、ラウベ等は自ら塵を揮ひて形言方となれるなれ。詞意の活動若し隨所に得べくんば、諸家何ぞ必ずしも此に出でんや。

以上余等は戯曲の主にして演劇の客なることを明にせし積なり。之より進みて明治世界に起りたる演劇改良運動の果して其當を得たりや否やを論ぜん。

初め余等の演劇改良論の起れるを聞くや、躍然として云く。是れ豈空谷の聲音にあらずやと。其言

ふ所を聞き、其行ふ所を見るに及びて、余等は實に駭歎せり。渠等の所謂演劇改良は徒らにこれを劇場改良に求めて、其極西歐現時の劇場を模倣するに止らんとすればなり。

夫れ戯曲と演劇と劇場とは、固より當に相輔けて能く其藝術の美を致すべきなり。而れども演劇にして果して戯曲を以て主となさば、演劇の處たる劇場は抑も末の又末なり。人あり、順正の途を守りて改革の業を成さんと欲せば、須く先づ戯曲を改めて、後に演劇に及び、後に劇場に及ぶべし。さればとて余等は徒らに褊狹の見を持して、彼改良論者が劇場を先にしたるを誹るものにあらず。凡う天下の事業は奇正各々其目的を達するに便なるものあり。戯曲は無形なり。演劇は活物なり。其把持すべき形體あるものを求むれば、劇場と道具立とに優さるものあらず。有形の劇場より着手すれば、本を棄てて末を取れる嫌なきに非ずと雖、亦公衆の注意を喚起すに便なる利益あり。彼論者が明治遷都の擧を以て、此權道の粉本としたるは故なきにあらず。

今余等は一步を渠等に譲りて、權道の取るべく、演劇改良の宜く劇場より始むべきを是認せんか。余等は劇場を改むるに何の標準を取り、何の主義を取れるかを問ふべきのみ。演劇改良論者は異口同音に云く。劇場は宜く之を今の西洋大都の舞臺に模倣し、其整巧完美なる飾具を借り來りて、以て看客の目を娛ましむべしと。此論は一應尤なるが如くなれども、余等は決して之に服すること能はざるなり。余等の持論は劇場を以て簡古素樸ならしめんと欲すればなり。否、是簡樸なる劇場は劇場の本色なればなり。

人世の開化未だ歩を進めざる時には、演劇の性質甚だ簡易なるに似たれども、其所謂演劇中には實に夥多の分子を合蘊せり。彼希臘の羊歌の始も、印度の民がバラタを祀れる日の舞と同一、語りも

し歌ひもし樂をも奏せしものなりしが、第十六と十七世紀との間に至りて、歐の演劇は正劇と樂劇との二種に分れたり。樂劇は絲竹に和して歌ひ且動作するものなれば、殆ど我時代物の芝居と掛合淨瑠璃との間に位す。その行爲の進捗稍や遅漫なるが故に、看客の目は之を飾具に注ぐべき餘閑あり。故に樂劇の舞臺は月光樹影をして髣髴乎として眞に逼らしめ、以て觀劇の興を助くべし。正劇に至りては則之に反す。是れ尋常の言語應答の間に、詩想の妙味を現呈すべきものなれば、眞成に之を玩ぶものは、其精神注いで優人の一顰一笑一舉手一投足の中に在り。渠等は何の違ありてか能く意を劇場の飾具に留めん。若觀者をして此般の餘閑あらしめば、是れ戲曲の工ならざるに非ずば則優人の拙なるなり。

余等は曾て一西字新聞の紙上に於いて、日本現時の演劇改良運動を略叙し、之を品評したるとき、早く此に注目して、我邦の演劇を西劇に劣らざる純粹の一美術となさんとするには、先づ其樂劇に恰好なる分子を掃ひ去らんとせり。簡樸の劇場を求むる如きは實に其一に居れり。

然りと雖余等は決して日本今日の劇場を以て自ら足れりとするものにあらず。芝居と云へる古へは兎まれ角まれ、今の第十九基督世紀には、劇場に向ひて要求すべき儼乎たる定型あり。劇場は堅牢なることを要す。一炬にして焚くべき木造の小屋を以て之に充つべからず。劇場は衛生の理に悖らざることを要す。腐氣場に満ちて、人の肺葉を枯らすべからず。且又之を簡樸にせよと云へばとて、之をして能舞臺と一般ならしむる意にはあらず、又支那の戲園と一般ならしむる意にはあらず。柵欄の附託も取るべからず。身體の動作のみにて、騎馬棹舟の形を擬することも取るべからず、波板波幕も或は少しく改むべし、灯入の月も亦然り。余等は唯其實に逼りて故らに看客の注意を奪ひ去

るを厭ふのみ。

正劇の簡樸の劇場に待つことある略此の如し。是れ余等が私言にあらず。西歐最近の大家には之を唱へて今人嗜好の謬を刺り、龍動巴里の大劇場が飾具を使ふに奇巧を弄するを痛撃するもの尠からず。渠等は獨り之を言ふのみならず、亦既に之を行へり。近着の獨逸新聞「グレンツポオレン」に依れば、民顯府の官劇部に於いて大に劇場飾具の復古を圖り、今茲明治二十二年三月下旬、シエクスピアの一戯曲を以て之を開けり。其劇場の装置はシエクスピア時代の舊型を摸し、簡古素樸なりしにも拘らず、看客は尙非常なる快樂を嘗味したりと。余等はシエクスピア時代の劇場装置と其再興等とに就いて、別に論ずべきことあれども姑く之を他日に譲る。

再び劇を論じて世の評家に答ふ

首を回せば早く既に六葛裘を更へぬ。余が始て歐洲大陸の地を踏みて歐劇を巴里に觀てしより。余は當時これを航西日記に録して、大に劇場粧飾の華美を讚歎したり。これより獨逸に停まること五年。其來責府に在るや、新劇部に入りてラウベの遺澤を見き。其德停府に遷るや、官劇部を経てチイクの故蹟を討ねき。其他民顯と云ひ、伯林と云ふ、到る處眼を此點に注いで、演技の得喪、構場の利害を考究せずんばあらず。歸途英に赴き佛を経たるときは、再び巴里の風流天地に俯仰し、「テアトル、フランセエ」を訪ひて、其最新なる演藝の場所と狀況とを視察したり。而るに我筐裡に藏したる還東日乗には、却りて冷然たる一句を着けて、俳優の技倆を評したるのみ。曩の駭胎驚視する所は、則措いて問はざるなり。

嗚呼、余は學問なく識見なき一齋生のみ。而れども往日世の所謂演劇改良論者に向ひて言ふ所ありしは、敢て妄りに偏見の二字を掲出して、人の視聽を聳動し、名を釣り譽を求めんとしたるにあらず。蓋微蟲半寸の魂も、物に觸れては感ずることあり、感じては言ふことあり。余も亦殆其然るを知りて、其然る所以を知らざるなり。

余は其前度の議論に題して、演劇改良論者の偏見に驚くと云ひ、數千言を費して、彼所謂演劇改良論者の偏見ある所以を明にせんとしたり。夫れ余が文章に爛はざる、或は人のこれを讀みて、其意の在る所を知るに苦みしもありけん。而れども余は力の及ばん限は之を勉めたり。故に余の小文學を繕いて戀川綾町の此文を評し玉ふを見るや、實に遺憾なきこと能はず。其言に曰く。演劇改良論者の偏見に驚く。森學士の御高論。兼ねて獨逸文雜誌にても拜見せしか、乍毎度〇服〇服。余等の持論は劇場を以て簡古素樸ならしめんと欲すればなり、否、是簡樸なる劇場は劇場の本色なればなりと云ふに至りては、再びの偏見なるに驚かざることを得ず。乞ふ他日を待ちて之を論せんことをかねと。嗚呼、何ぞ戀川の嘲諷に巧にして、其言のかくまでに粗鹵なるや。余之をラブリユエエルに聞く。眞面目の作家は細心其文を寫すと雖、世の廉耻なき戲謔家の冰冷なる嘲罵を遁るゝこと能はず。彼戲謔家は屢最清高なるものを借り來りて最愚昧なるものとなすと。戀川にして苟くも一小才子を以て自居り、一「ボンモオ」を吐いて自誇るものならしめんか。余は安じて其嘲罵を受け、決して眞面目に之を辨ずることなかるべし。奈何せん。余は戀川の當代の一家にして、一派の文學を代表するものなるを聞得たるを。

不二山人の曰く。今の世獨逸の文學を奉ぜらるゝ人二あり。一は石橋忍月居士、一は即漣山人なり。

忍月居士の筆未だ獨逸文學の實相を寫したりと見受けられず、願ふは漣山人頼みまらずと。(女學雜誌)此漣山人は即ち是れ戀川綾町なりとぞいふなる。則知る世には戀川を以て獨逸文學を奉ずる文人二人中の一に數ふるものあるを。又此二人中にて忍月居士の筆には未だ至らざる所ありとなして、望を戀川に屬するものあるを。戀川たるもの、豈其責任の重且大なるを知らで可ならんや。余又之をラブリユエエルに聞く。アミオオとコアツフトオとは人猶之を讀めども、誰か復た其時流の文を讀まん。是れ文の眞面目なるもの、其妄に諛譎を學ぶものに優れるを示すなり。論文評語、豈特に然るものにあらずや。嗚呼、今の文學世界には無責任の言を吐いて人を傷けたる後、鬨を擡いで逃去るか如き卑怯なる人物少なからず。例之へば往日日本の紙上にて、我社を毀るものあり。以爲らく新聲社は百尺竿頭にほらふを掲げたりと。而して渠は自ら名乗らずして此文を公にしたれども、起ちて此ほらふを拔去らんとする程の勇氣なし。唯余は此の如き「オブスクラント」を咎めず。獨り彼戀川の漣が彼と俱に新聲社の高廈の下に立ちて、ほらふの色を望み、これを罵ること殆と葡萄架下の狐に似たるを欺せずんばあらず。

戀川は余が見を以て偏なりとなしたれども、其偏なる所以を言はず、其偏なる所以を言はざるが故に、渠の〇服(不服か難服か)なる所以も亦知るべからず。渠は他日を待ちて之を論せんと言ひしかど、其尾のかねの二字は、少くも人をしてその眞面目に之を論ずる意ありや否を疑はしむ。チムメルの曰く。レッシングの一事を非なりとするや、必ずこれに繼ぐに此より善き境地に進むべき新道を示すことを以てすと。戀川は我が由る所の道を惡しと云へど、我に右せよとも云はず、左せよとも、踵を回せよとも云はず。是れ豈善評家の應になすべき所ならむや。

戀川は唯嘲罵の語を重ねて曰く。新聲社。名を聞いてさへ天晴斬新卓絶な議論が出さうなり。而して其實を見れば、その實に新きに二度びつくりせざることを得ず。森氏の今更のやうに論駁せられたるは、二三年前に流行りたる演劇改良論なり。而して當時文學界に緊要なる問題は論じて何處にかある。嗚呼、於是初めて知る、新聲の新は又舊聲の舊にして、柵草紙はひからび草紙なる事をと。夫れまがらみとひからびとの音便を發明したるは、洵に戀川が長技なるべし。而れども彼にして果して當代の文學界にて、獨逸文學を代表するものたらしめば、何ぞ其誇る所の技の身俚なるや。彼は新聲の社號を聞いて其聲の新ならんことを思ひしに、其新なるに二度びつくりすと云へり。是れ亦渠等の「ヤルゴン」にて、其舊きに驚くとの事なるべし。而して其之を舊とする所以を求むれば、則曰く。森が駁したるは二三年前に行はれし演劇論なればと。嗚呼、渠の理に味きこと何ぞ其れ甚きや。我論にして苟くも新ならんか。その駁する所は希臘のアリストテレスの言なるも可なり。支那の李笠翁の言なるも可なり。何ぞ況や二三年前の演劇改良論者の言をや。若夫れ之に反して、昨日出でし柵草紙を今日の小文學が批評すればとて、小文學の言にして陳々相依りたらんか。人のこれを新といふものあるべからず。嗚呼、獨り然るのみならず。余に駁せられたる論は、余に先ちて充分にこれを駁せし者なき上は、愈舊くして我論愈新ならむ。世人若古人の一論を忘れて、其非を言はざりしならば、我論は開幽啓微の新論なるべく、世人若古人の一論を信じて、其非を知らざりしならば、我論は乘正辟邪の新論なるべし。其近人の言なるも亦た然り。

戀川は以爲らく。當時文學界に緊要なる問題は論じて何處にかあると。我新聲社は未だ曾て其草紙の初號に於いて、滿天下文學上の問題を論じ盡さんと約せしことあらず、又これを論じ盡すべき責

任を負ふことなし。柵草紙は獲るに従ひて材を探るのみにて、必ずしもこれが後先を選ばず。而れども其初號に演劇改良論者を駁撃せしは、其緣由なからずや。彼號は所謂演劇改良運動の將に其實相を得んとする時に顯はれにき。歌舞伎座の將に其工を落せんとする時に出でにき。戀川の言は是なり。渠の演劇改良論を二三年前の論とせし限は。戀川の言は非なり、渠の演劇改良運動を今のなき所なりと思ふ限は。

余は嘗て建築雑誌の紙上に於いて、歌舞伎座の建築計畫を見たり。後其舞臺の大に舊模型を存したるを知りてこれを喜びぬ。獨り其粧飾と装置とは、後來應に何なる方鍼を取りてか進むべき。此問題は余をして大に痛心せしめたり。何如といふに縦合式を歐洲第一の劇場といへるに取らむも、其方鍼は未だ必ずしも正からざるべく、彼華美なるものが徒らに人目を眩惑して却りて正劇を害ふべきを知ればなり。何如といふに世間には未だ必ずしも經驗の猶淺くして、余が始めて歐洲大陸を踏みし時の如き觀念を懐くものなしと謂ふべからず、一旦にして事に害ある改革を行ひ、今の自ら悔を知る比には、既に國民の趣味を損じ、巨萬の資財を失ひたらむことを嘆ずればなり。嗚呼、戀川の學識に富めるも、猶簡樸なる劇場の本色たるを承認せず、これを指斥して偏見となす。余は今にして彌益余が痛心憂慮の徒爲ならざりしを知る。蓋生れながらにして聰明なる戀川が如きものは、常理を以てこれを律すべくもあらねど、今の日本には未だ歐洲二三の戯曲に通せず、未だ一卷の「ドラマツルギイ」を讀まず、唯足一たび歐洲大都の敷石を踏みきといふのみにて、劇場の粧飾と装置とを論ずるものさへあり。若是等の説をして大に世に行はれしめんか。其毒を我將來の演劇社會に流すこと其れ奈何や。

余が簡樸なる劇場を以て劇場の本色なりとなし、抑何の見るところありて發せし言なるか。曰く。余は所謂實際主義の演劇の境に入るを喜べども、極端摸實主義のこれを侵して、其理想的妙處を亡滅せんを憂へしなり。是方鍼は余が學問に於いて守るところにして、又余が藝術に於いて守らんと欲する所なり。余の小説の事を言ふや、先づ佛蘭西の自然派が極端摸實の道に奔れるを擧げて、以て邦人の前に一面の照魔鏡を懸けたり。是より先き世に稗官の猥褻醜穢を言ふもの多かりしかど、猥褻と云ひ醜穢と云ふ、未だ其限界を知らず。其追はんと欲する所は影にして、其捉へんと欲する所は風なりき。何如といふに渠等は直ちに實境を以て詩境となしたればなり。審美的隻眼ありてこれを評論せしにあらざればなり。余が演劇の事を言ふも亦復此の如し。

古來劇國を治むるものには、必ず兩途の出づべきありき。一は所謂理想派にして一は所謂實際派なり。余は獨逸學者を以て自ら任ずるものにあらず、否、自ら安んずるものにあらず。而れども讀む所の書は獨逸多く、又た我演劇論に對して反駁する所ありし人々は、戀川と云ひ國民の友の福洲學人即忍月居士と云ふ、皆獨逸學者なれば、請ふ余をして獨逸の演劇史を以てこれが例となさしめんを、請ふ世人をして安りに獨逸劇場の故轍を踏むことなからしめむを。

所謂理想派は舊し。千七百九十一年にギョオテがワイマル官劇の長となりしときも、九十六年にイフランドが伯林梨園の首領となりしときも、ルウドキヒ、チイクがドレスデンに於けるも、シユライフオオゲルが維也納に於けるも、又福洲の引きしドユツセルドルフのイムメルマンが劇務を理せし事蹟も、皆是れ理想的趣味を存せしなり。

此世紀の半ばなりしが、所謂實際主義の勢は斂めたる翼を張る如く、閉ぢたる眼を開く如く、俄爾

として興り來り、先づデッケンス、サツカレエ、バルザックの力を藉りて小説界を席卷し、佛蘭西にて「サロン」戯曲、「ソシヤル」戯曲の出づると俱に、ラウベ、チンゲルステット、エヅアルト、ドフリヤン三家の助に依りて獨逸の演劇天地に闖入しぬ。

夫れ個人的性格は所謂實際主義の賜なり。其必要なるは獨り彼小説家に於いて然るのみならず、俳優に於いては更に焉より甚きものあり。理想派の舞臺を領畧したるときは、ギョオテの演戲法の如きありて、俳優に示すに渠等の何かに坐し、何に行き、何に喜び、何に悲むべきを以てしたり。是れ固より廢すべからず。而れども之を奉じて變化の妙を悟らざるものは依様の積弊遂に忠臣の態度、孝子の態度、奸賊淫婦の態度等、許多の模型を生じ、生ける優人をして死したる偶人に等からしむることとなりぬ。即是れ抽象理想主義の弊なり。所謂實際主義の起るに及びて、俳優始めて個人的性格の必要を曉りたり。渠等は復た去りて類型を摸せず、進みて各個人の性格を現したり。此術やガリック、エックホッフの如き名優は自らこれを得たりけめど、其共有になりしは、これを新主義の賜なりと謂ふも決して失當にあらず。余はこれを名づけて個想主義と謂ふ。余は優人の此賜を獲たるを喜ぶこと久し。實際主義は又此各個人性格の活現と俱に、舞臺の粧飾と装置との天然の事物に酷肖せんことを勉めたり。獨逸にては、德停府に二三の新劇を起し、比より、舞臺を以て眞成の繪畫となし、優人の衣帶、場面の粧飾、器械の装置、點照の方法等皆其面目を改めたり。前論に曰く。舞臺は之を簡樸にせよと云へばとて、之をして能舞臺と一般ならしむる意にはあらず。又支那の戲園と一般ならしむる意にはあらず、棕櫚の附髭も取るべからず、身體の働作のみにて、騎馬棹舟の形を擬することも取るべからず、波板波幕も或は少しく改むべし、灯入の月も亦然り、余等

は唯其實に逼りて故らに看客の注意を奪ひ去るを厭ふのみと。舞臺の改革も亦實際主義の賜なり。余豈又優人の此賜を獲たるを喜ばざらむや。

奈何せん、西歐諸洲の極端摸實主義は舞臺の改革を行ひて止むときなく、進んで止まることを忘れ、遂に他の統國夫人の如き演戲の美術をして、脂粉を濃抹せしめたり。看客の注意を促して詩情の外に逸出せしめたり。看客の視線、場面の小乾坤を迷走するが爲に、優人をして其伎倆を盡すことを怠らしめたり。斯くても彼戀川等は猶ほ複雑なる舞臺の粧飾装置を戀ひ詫ぶか。斯くても彼戀川等は猶ほ彼演劇改良論者の擧に倣ひ、其二三年前の説に左袒し、今の西洋大都の舞臺を以て典型となさんと曰ふか。醒めよ戀川、耻ぢよ漣。

然りと雖余は必ずしも華麗なる劇場を以て無用の長物なりとせず。此の如きものは之を樂劇に用ゐて可なり。彼樂劇は余が前論に於いて既に我時代物の芝居と掛合淨瑠璃との間に位すと云ひし如く、絲肉相和して人耳を悦ばずるものなれば、これを聴く人は同時に目を舞臺場面の美に注ぐべき餘閑を得べし。樂劇の場に入るものは、専ら純正なる詩情を借りて心目を洗はんと欲することなければなり。我邦に於いて若し樂劇の起るべき時に逢はば、余は其劇場の何かに粧飾をなして人目を眩することあるも、未だ遽にこれを咎めざるべし。唯其驕奢にして彼五十萬「マルク」を費したりといふなる獨都の舞戲「フラウ、エユヌス」「ズルフリイナ」「メツサリイナ」「アモオル」侏儒「キキヤアナ」二十世紀等の如きに至らば、余はヨハンチス、フラハと俱に國家の爲めに慟哭することあらんのみ。(獨逸未來記三〇面)

夫れ正劇は散文詩の如く、樂劇は結語詩の如し。而して劇場の華麗なる粧飾は、猶ほ平仄押韻の式のごとし。正劇にして此粧飾を借るときは、殆ど六朝綺靡の文の如く、馬琴が流麗なる語の如くならん。世間或はこれを見て自ら娛むものあるべしと雖、要するに劇の本色にあらず。余は斷じてこれを取ること能はず。

嗚呼、此譬諭は此意味に於いては不可なることなけれど、譬諭は多く跛することあり。余の散文結語の詩を読むや、其興味に於ける、各得る所あり。唯劇に至りては則然らず。余は正劇を愛し、又唱曲を愛すれども、樂劇に至りては、未だ其趣味を解すること能はざるところあり。余の西歐に在るや、樂劇の場に入ること數十回なりしが、「トリスタン」及「イソルデ」の艶なるも樂劇「オセルロ」の勵なるも、心に留まりしことなし。之に反して余が嘗て來責府にて新に落せし樂部「ゲワンドハッス」に入りて、一閃の短曲を聴きしときは、場に上りし俳優の素面皂衣にて之を唱へしに拘らず、心大に之を快としたり。余は既に耳を悦ばずるを専とするときも、目を射ること甚しき場面の粧飾を見るに堪へず。何ぞ况や専ら我心を樂ましむる時をや。

然れども余が樂劇を好まざるは、自ら以爲らく一個人の傾向なりと。故に余は敢て彼ポアロオ、ラシン、ラ、フオンテエン、サン、テフルモンの風を學で樂劇の命脈を斷たんことを願はず、又其我邦に輸入せらるゝを禁せんと欲せず。余は唯彼華麗なる劇場を喜ぶこと、戀川其人の如きものに向ひて、豫め我ラ、ブルユニエルが意見を告げんと欲す。渠が樂劇に於いてすらもアムファイオンと其族と(實はルルリイと其族と)の簡樸なる装置を慕ひて、當時華美の弊を痛斥せしことを。嗚呼、獨逸今日の樂劇場をして其粧飾を單一にし、以て人の心耳目の衝動をして、互に相侵さざらしめんか。余は樂劇を好むものとなりしも、亦未だ知るべからず。

華美なる劇場は、其弊實に此の如きに止まらず、猶ほ一事の尤も顧慮するに堪へたるあり。是れうの舞臺をして靈活なる變化を失はしむることなり。劇場は愈々華美なれば則愈々複雑なり。愈々複雑なれば愈々變化し難し。此の如き場合には、シエクスピイアの戯曲既に演ずるに由なし。何ぞ况や鶴屋南北の正本をや。ロオベルト、プリヨルスは實際派に屬せり。而れども渠は畫圖に似たる新舞臺の癡重なるを歎じたり。(獨逸戯曲演劇史二卷四一五面)

上方余は劇場の華美複雑なるべからざる所以を論じて、以て前論の未だ道ひらざりし所を補ひ、簡樸なる劇場の眞個に劇場の本色なるを明にしたり。是よりは更に一步を進めて簡樸なる劇場の實相を示さん。

余が所謂簡樸は始めより比較的意義にして、或程度の簡樸を指したることは、前論の末段に於いて既にこれを言ひぬ。故に余は西歐の所謂シエクスピイア舞臺を稱揚すと雖、彼レフタア伯の倡優が千五百七十六年に龍動の定芝居を興し、時まで溯りて、一切の粧飾を卻けんと欲するにあらず。場面を掩ふ終始一色の氈氍、遠近を辨つべき場の一隅の布簾、地名を書きたる木牌、晝夜を知らずる濃淡二種の青氈、一机一榻は固より完全なる舞臺にあざればなり。(ウルリイイ著シエクスピイア二板一卷九八面)余は又た前論にて民顯官劇の舞臺のシエクスピイア舞臺となりしを引いて之を激賞したれども、必ずしもフォン、ベルフアル男の跡を逐ひて、ルウドルフ、ジュテエの意匠を學ばんと欲するにあらず。彼第一「クリツセ」の後に設けたりといふ固定せる建物(グレンツボオテン四八年期二八號七九面)は時として大に美觀を損せんことを慮ればなり。

簡樸なる劇場はこれを遠きに求むることを要せず、大體に於いては我日本の劇場を保存して可なり。

り。

夫れ日本劇場は即是れシエクスピイア舞臺なり。渠は所謂シエクスピイア舞臺の長處を挙げたり。往年ホネツゲルの開化史を編するや、支那及日本の劇を以て冗長にして人を倦まするものとす。獨逸の普通新聞の評者は其非を論じて云く。劇場器械の簡樸なるはシエクスピイアのなり。此長處は古昔女優の風一變して彼小乾坤たる劇場に上るもの、悉く男子漢となりしより愈々其長を加へたりと。(アルゲマイネ、ツアイツング一八八七年四四號附録)知言と稱すべし。

日本劇場には彼舞臺の前の中央に隆起して人目を遮るべき「スフリヨオル」(黒ん坊)の隠家なし。日本劇場には舞臺の前に低き餘地を存じて樂手を居く所謂「オルケステル」ありて、觀者と戯者との間に無益の懸隔をなすことなし。日本劇場には彼簾形の幕を垂れて、觀者の面前に平板の如き嚴重なる蔽障を作ることなし。(歌舞伎座は時として此輸入品を用ゐることあれども)是れ豈西歐の識者が今の大都の劇場に就いて憾となす諸装置にあらずや。而して我劇場には眞に此贅物をなし。

日本劇場は軽く其引幕を垂れたり。若これを一側より他側へ引き、又これを引くに人の抱きて走るべし。日本劇場は彼民顯の風を學んで中央より兩側へ引き、これを引くには機を以てするも亦容易なるべし。日本劇場は簡單なる畫板を以て装置をなしたり。其運動を快利にせんには、細車輪を用ゐるも亦容易なるべし。日本劇場には簡易なる二重装置あり。これに加ふるに廻り舞臺の便を以てす。二三の器械的改革は大に其措置を速にすることを得べし。又花道の西洋劇場に類なき好装置なるは、余が東漸新誌に於いてヘルマン、マロンが説(支那日本紀行二卷一一五面)を引いて論じたる所なり。是れ皆シエクスピイア舞臺の長處若くは我劇場固有の長處なり。西歐の人は徒らに其回復

を望みてこれを遂ぐることを能はず。而して我劇場には眞に此長處あり。况や彼歌舞伎座さへこれを維持したるをや。

五百八十

譬へば猶ほ良家の女のごときは、日本劇場とシエクスビーヤ舞臺となり。譬へば猶ほ狹斜の妓のごときは、現今西歐大都の劇場なり。狹斜の妓には伶俐なる處もあるべし。風度人を動かす處もあるべし。余は彼良家の女がこれを見て自ら倣むる所あるを嫌はず。而れどもうの或は身を狹斜の境に投じて、其汗風穢俗を學ばんことを恐る。嗚呼、是れ豈獨り劇場のみならむや。

戀川の曰く。獨逸文雜誌にても讀みしが、毎度ながら○服なるは森が説なりと。余が前論に於いていひし如く、彼東漸新誌の記したる所は、日本演劇改良運動の叙述と品評とにして、其着目は偽道徳説を破る外、日本の劇に就いて、樂劇に恰好なる分子を掃ひ去らんとせしなり。余は東漸新誌に於いて簡樸なる劇場を稱揚せしことなし。前論に云く。余等は嘗て一西字新聞の紙上に於いて、日本現時の演劇改良運動を略叙し、先づ其樂劇に恰好なる分子を掃ひ去らんとせり。簡樸の劇場を求むる如きは、實に其一に居れりと。文中樂劇分子の掃去は西字新聞に屬すれども、簡樸の劇場云々は本論の上段を承け來たりし語にして、是も亦た改むべきものゝ一に居ると云ひし迄なり。余が東漸新誌にて指斥せし樂劇分子は、演劇法に關するものなりしが故に、劇場其物とは毫も關涉せず。戀川が彼にても讀みしが、毎度ながら○服なりと曰ひし毎度乍ら等の文字は果して何の意義がある。

戀川は豈正劇と樂劇との別を承認せざるものか。然らずば余が指して以て樂劇分子なりとせし所作事、附け、出語り等を正劇中に保存せんと欲するものか。然らずば戀川は未だ曾て獨逸文雜誌を讀まざるか、讀まずして讀みきと欺きしか、讀まずして讀みきと欺きて余に冤罪を被せんとしたるか。余は無學無識の一齷生なり。而れども又た頂天立地、俯仰愧ることなき一漢子なり。日本美術の將來を思ひ、焦心苦慮の餘これを筆墨に訴へ、これを世間に問ひしにあらすや。我敬する戀川よ、我愛する謎よ。君は能く誓をなして東漸新誌の森が演劇問題に就てと題せし一文を讀みきと云ひ得るか。然らずば戀川は彼小文學の評語を以て一場の戲謔なりと云ふか。想ふに渠は必ずしかいふべし。果して然らば則余又何を言はむ。

戀川は又た余が三木竹二と共に譯せし戲曲折薔薇をも評したり。其文にいはいはく。戲曲折薔薇。レツシングのエミリヤ、ガロツチイを例の通り御兩人にて譯せられしもの。然し今一と意氣正本らしうの感あるが、此處がりの簡樸主義たる所以乎。是非もなし。夫れ簡樸を以て劇場の本色となししは余なり。而れども戲曲の著作若くは翻譯に就いて簡樸主義を唱へしものは知らず何人ぞや。その簡樸主義と云ひしものは何物を斥したるか。是其所以爲簡樸主義乎といひて翻譯の拙を刺りしか。是所以爲其簡樸主義乎といひてレツシングが著作者たる資格に就き、若くは余と三木とが翻譯者たる資格に就きて非難する所ありしか。隻語寥々得て辨すべからず。余は唯我簡樸説の戲曲と毫も相關せざるを擧げて、以て自ら明かさんと欲す。又戀川が今一と意氣正本らしうと云ひし正本即ち「テキスト」は何かなる性質を具ふべき者にして、この性質が何かに折薔薇に於いて傷けられたるか。渠の所謂正本は獨逸の正本か、日本の正本か。レツシングにして獨逸正本の體裁を知らざるものなりせば、誰か善く正本の正體に通ずるものぞ。若くは余等はレツシングが語を誤譯して獨逸正本の體を損せしか。何れの處にてこれを損せしか。若くは又獨逸正本を譯するものに日本の正本體

再び劇を論じて世の評家に答ふ

五百八十一

を守るべき責任あるか。若くは又正本を狭き意義に取りて「ビユウチンアウスガアベ」となし、其「ドラマチツセス、エルク」といふ廣義を棄てんとか。果して然らば、余は戀川に告げん。獨逸には樂劇にてこり別に舞臺本を作りても賣れ、正劇には殆ど絶て此事なきを。余等は那邊よりレツシグが折薔薇の舞臺本を得來りてこれを譯すべきか。果して然らば余は又戀川に告げん。余等の折薔薇を譯するや、直ちにこれを場に上ぼさんとする心なかりしを。此心なければ復た折薔薇の舞臺本を作るべき必要もなからむ。

嗚呼、小文學の戀川の評は其獨逸文學の大家の言たるに負くこと此の如し。國民の友の福洲學人は則これに殊なり。彼は妄に戲謔して、此は眞面目の語をなしたればなり。

福洲學人は益友なり。故に余は其批評の誼に感ずると同時に、一事の之に對して辨すべき者あり。何ぞや。曰く。福洲が我演劇論を駁せし一節なり。其言に云く。森は戯曲作者の品位を高めんが爲めに、實際其曲が舞臺に於いて演ずべしや否やを顧みざる論者なり。夫れ戯曲は舞臺上の行爲（ビユウチンハンドリング）なり。故に徹頭徹尾舞臺と云へる觀念は戯曲の要素にして、又演劇と離るべからず。實際舞臺に演ずべからざる戯曲は所謂文園戯曲（リテラツウルドラマ）にして、好事者の玩弄物たるに過ぎず。グツツコオ、ブフチル、（ブルツツ）等の名家出でてより、獨り舞臺戯曲のみを以て眞正の戯曲とし、文園戯曲は擯斥する所となれりと。按ずるに此一解は全く福洲が我前論を錯認したるなり。余は戯曲の實際舞臺に於いて演ずべしや否やを顧みずといひしことなし。余は唯戯曲を作るものに向ひて渠が戯曲の約束を守る限は、場主狂言方等をしてこれを演ずる便宜を求めしむること勿れといひしのみ。余は作者の場主狂言方等に願せらるることなく、純正なる詩學上の約束を守

りて戯曲を作らんことを望みしのみ。余は場主狂言方等の客にして作者の主たるをいひしのみ。福洲の所謂實際舞臺に於いて演ずべき性質は即是れ余が所謂約束の主なるものなり。前論に云く。この戯曲の約束を一言にて言へば、りの叙述する事迹は、看客の目前（即舞臺）にて、芽を萌じ花を開き實を結び一歩々進み來らざるべからず。是れを戯曲の行爲と謂ふ。福洲の文にては戯曲行爲の語に代ふるに、舞臺行爲の語を以てしたれども、是れ普通の用語例には背けり。蓋詩境は高く劇境は卑きは、古今萬邦殆皆然り。故に一戯曲の成るや、其詩法に適へることは明かなれども、當時の舞臺は或はこれを演ずること能はざるべし。而して縱令當時の舞臺はこれを演ずること能はずと雖、他年技能ある安排者の出づるときは、これを演ぜんも亦知るべからず。「ファウスト」の如きは其好例なり。劇曲行爲の語は詩境よりして言ふ。故に萬古に亘りて更ることなし。舞臺行爲の語は劇境よりして言ふ。故に一世一處に止まる。ブリヨルスは嘗て論じて云く。戯曲の演劇に待つことありて、其光華の之に依りて發せらるべきは事實なり。而れども演劇なくんば、戯曲は其價を墜し、其味を喪ふといふは非なり。若し果して演劇なき戯曲を擯斥するときは、戯曲何ぞ一詩體に備ふるに足らむや。戯曲何ぞこれが史を編むに足らむや。若古昔の戯曲にして、演劇を待ちて始めて價ありとするときは、現時誰か又たこれを玩ぶものあらむ。何如といふに古曲は多く演ずべからず、然らざるも今人これを演せず、然らざるも古の舞臺に適せしめんと作り設けし詩人の本意を得てこれを演ぜざればなり。世人は唯戯曲の舞臺に上ぼりて其光華を發するを説けども、却りて戯曲の舞臺に上ぼりて其趣味を失ふことあるを知らず。嗚呼、演劇の急流は戯曲中一波一瀾の美麗と細膩とを掩蔽すと。又云く。戯曲を作るものは其意を舞臺上の便に注ぐこと愈多ければ、其詩品愈降り、其

詩格愈類ると。(戯曲演劇史一卷三二一面)以て定論となすべし。

夫れ戯曲を作るものゝ舞臺の觀念を棄つべからざるは、實に福洲の言の如し。然れども一世一處の舞臺の觀念にして長く心頭を離れざるべきは、詩人は應に掣肘の憾を懐いて、場主の奴隸となるべし。是れ猶ほ筆札を善くするものが悪紙に逢ふ毎に故らに其書を拙くするがごとし。豈其本意ならんや。ギョオテ嘗て以爲らく。カルデロンの戯曲は其舞臺に宜きことシエクスピイアの戯曲の上に立つと。奈何せん、其詩學上の價値を問ふに至りては、彼の此に劣れること明かなるを。

福洲は戯曲を大別して二となし、一を文園戯曲と云ひ、一を舞臺戯曲と云へり。而して其所謂舞臺戯曲は眞正の戯曲なり。舞臺にて演ずべきものなり。其所謂文園戯曲は眞正の戯曲にあらず、舞臺にて演ずべからず、好事者の玩弄物となるべきものなり。余は初め卒然として此分類法を見しときは、甚だこれを怪みぬ。何如といふに其所謂舞臺は何れの國何れの世を以て標準とするかを知るに由なければなり。エスキュロスの一曲もこれを今の巴里の劇場に上ほすこと能はざるべきは文園戯曲として擯斥すべきか。シエクスピイアの一曲もこれを今の東京の劇場に上ほすこと能はざるべきは文園戯曲として擯斥すべきか。又之に反して今の拙工の作も、これを舞臺に上ほし得る限は、舞臺戯曲として尊重すべきか。是れ殆ど解すべからぬことなればなり。

嗚呼、是れ豈忍月居士の意ならむや。余は其グッツコオの名を擧げたるを見て、其意を悟ることを得たり。夫カル、グッツコオは何れの時にか出でし。當時獨逸の作者は好みて英雄人を欺くともいふべき態度をなし、故らに舞臺を離れて戯曲の結構を定め、自ら以て拔群超倫の事業となしにき。彼グラツベが如きは蓋其一に居る。グッツコオも初め此流を酌みて、「チロ」の如き戯曲を作り

しが、一朝豁然として悟る所あり、大呼して曰く、舞臺へ(ツウル、ビユウチ)と。今の「リッピヤルド、サワアジュ」の曲をフランクフルト、アム、マインに興行せしめし千八百三十九年の七月十八日は、實に獨逸演劇史上に特筆大書せられにけり。是より先き獨逸の演劇は漸く衰へて、僅かに「ロマンチック」派の殘黨餘類に支配せられしなれば、彼グラツベ等がこれを背にして其思を構へしは、固より怪むに足らず。今グッツコオが自ら奮ひて戯曲と演劇との新調和を計りしも、亦其一世の豪たるに負かず。(ゴットシャル文學上の死響と生問と二二面)

夫れエスキュロス、ゾフォクレス、オイリビデスの戯曲はこれを今日の歐洲大都の舞臺に上ほすべからず。而れども希臘の世にてはイナイデ子イヤもオイデプスもメデヤも萬客凝視の前にて活動せしものなり。これを呼びて文園戯曲となさば、文園戯曲は決して擯斥すべきものにあらず。グラツベが「ゴオトランド」公は詩人の想を出でて書籍の間に潜み、未だ一たびも思ふが儘に手足を動かすことなし。これを呼びて文園戯曲となさば、文園戯曲は眞個に擯斥すべし。否、獨逸の詩人は典籍戯曲(ビユツヘルドラマ)の名を以て實にこれを擯斥す。

これを言語に譬へむ乎。彼は希臘語の如し。現世には其用をなさずと雖、自ら歴史上の大價値あり。此は「ヲラビユツク」(世界語)の如し。影圖的に存活するのみ。誰か又眞面目にこれを唱へん。

試に一たび眸をかへして我演劇社會を見よ。又我作者社會を見よ。演劇の振はざるは、或はグッツコオが世にや似たらむ。而れども作者社會にはグラツベ等が如き鬼臉ありや。グッツコオが其新主義を唱へし目には詩人の力餘ありて、劇場の權足らざりしなり。宜なるかな、グッツコオが舞臺主

義を唱へて其弊を矯正せんとせしや。今や我邦の詩人たる作家は僅に屈指に過ぎずして、其の作れる所は決してグッツベの極端自由の曲に似ず。而るに我劇場は徒らに二三舞臺作者が鯁釘百出の作を取りて、彼詩人の作を嘲罵せんとす。嗚呼、天稟の詩人河竹默阿彌が一たび退隱せしより以來、我劇場は古家の中を行くが如く毫も生氣なきにあらずや。是れ豈故らに舞臺主義を唱へて、詩人の肘を掣すべき秋ならんや。

聽け、我忍月居士。我黨の急務は詩人をして彼演劇者流の褊狹なる意見を蔑視せしむるに在り。彼演劇者流をして詩人に向ひて其頭を低れしむるに在り。嗚呼、我演劇場裡固より一二明眼炬の如き人をなきにあらず。渠等は實に來りて我黨詩人の意見を叩かんと欲す。詩人よ、詩人よ。請ふらくは古來舞臺の積習を顧みずして勉めて其詩眼を高うせよ。是れ余が前論を出し、本意なり。余は信ず、グッツベ又出づと雖、豈別に良策を獻ずることを得むやと。

余は今の作者に向ひて、戯曲の實際舞臺にて演ずべしや否やを顧みざれといはず、余は世の作者に向ひて、彼鯁釘作者に慣れたる劇場の需要を顧みざれといふのみ。渠にして詩法の約束を守る限は、グッツベ輩に似ざる限は、典籍戯曲を作らざる限は。

福洲は又ブフテルとブルツツとを擧げたり。ブフテルとは「ダントンが死」の作者ゲオルグ、ビュヒチルなるべし。渠はグッツベと俱に獨逸周覽の出版には關係ありしが、グッツベが徳停府に在りて千八百四十六年より四十九年に至るまで宮劇の記を編せしに比すべくもあらず。ブルツツは千八百四十六年にハムブルクにて劇志を公にしぬ。其獨逸演劇史も當時にありては價値あるものなりき。然れども戯曲體まで變動を及ぼしきとは思はれず。並びに是れグッツベと同日にして語る

べきに非ざるに似たり。

福洲は文園戯曲に對するに所謂舞臺戯曲を以てしたり。「ビュウチンドラマ」を以てしたり。若文園戯曲を余等の典籍戯曲と看做す時は、其舞臺戯曲は「ビュウチンドラマ」と曰ふべからず。宜く「ビュウチンメエシイゲス、ドラマ」と曰ふべし。「ビュウチンメエシヒ」とは今の舞臺に上ほすべきを謂ふなり。然るときは古舞臺に上ほすべかりし印度希臘の戯曲もこれに屬し、今舞臺に上ほすべき近世及現世の戯曲も將來應に成るべき戯曲も、典籍戯曲にあらざる限は、亦悉くこれに屬すべし。若夫れこれに反して、獨逸の詩人が呼びて舞臺戯曲の作家（ビュウチンデヒテル）となすものは、我邦近時の所謂狂言作者に等く、其著す所一時の博祭を僥倖すれども、文學上には其價値少きものなり。カル、フォン、ホルタイ、クラウレン、テオドル、ヘル、ビルヒ、ブファイフェル女史、フランツ、フォン、シヨオンタアン、の徒是なり。此意味に於いては舞臺戯曲が却りて擯斥すべきものなる。（戯曲演劇史二卷三五七面）

余は前論に於いて邦人を勵まして曰く。看よ泰西の劇場には彼の天馬空を行くが如きギョオテの「ファウスト」を場の上ほすものさへあるを。其意は我場主狂言方等をして、新分子の我劇部に入らんを阻格せしめざらんとするに在り。又世の氣概なき操觚者流をして、渠等と共に濁波を揚げしめざらんとするに在り。余はハンムと俱にデンゲルステットの「サロン」に入りしにあらず、怎でか「ファウスト」の場の上ほすべきと否とを事新らしく論ぜんや。且「ファウスト」其物は今の英獨二邦の舞臺にて頻りに興行せらるゝは、争ふべからぬ事實ならずや。福洲の曰く。若し天馬空を行くが如き「ファウスト」を舞臺に上して「ファウスト」の自ら有するだけの眞味を現示する

再び劇を論じて世の評家に答ふ

ことを得ば、イムメルマンの妄案空想も未だドユツセルドルフの失敗とはならざるなりと。余は上方に於いてなべての戯曲が塲に上りて、その得る所あると俱に失ふ所あるを論じたり。況んや「フアウスト」をや。嗚呼、福洲は軽々「フアウスト」の眞味と云へり。「フアウスト」の眞味。これを言ふは洵に易し。而して誰かこれを知るものぞ。或はドユンテールが訓話を以て其語脈を討究し、或はギョオテ會社の「アルヒイフ」を繕いて、其節々に成りし歴史を搜索するは容易なり。身をギョオテが「フアウスト」の諸段を作りし時々刻々の地に置いて、略々彼フイツシエルがなしく如く、内よりしてこれを解するは甚難し。否、到底ギョオテ自身にあらざるよりは、其全象を捕捉し難からむ。余等は決して舞臺に向ひてこれを求むる權利なきなり。

抑福洲は以爲らく、「フアウスト」にして舞臺に上りて、其眞味を顯呈すべくば、イムメルマンが妄案空想もドユツセルドルフの敗とはならざらむと。果して然らば則イムメルマンは妄案空想を懐きしものなり。イムメルマンは妄案空想を懐きたりしが、其ドユツセルドルフの事業は「フアウスト」の眞味が舞臺にて現示し難きが故に、少なくとも現示し難きと共に壞れて、失敗とはなりしなり。請ふ余が妄に其當否を言ふを許されんを。

夫れ妄案空想とは果して何の指す所ぞ。必ずや、これを實際に試みて行ふべからざるものならん。永存の目的なきものならむ。イムメルマンの想案にして妄且空ならば、其失敗は何ぞ必ずしも「フアウスト」眞味の顯不顯に待つことあらんや。或は思ふ福洲はイムメルマンが妄案空想を明かさんとて「フアウスト」の眞味を舞臺に顯さんとすといふ一事を模出せしならん。

レムメルマンは所謂理想主義を以て舞臺を治めんとせし空前絶後の一英雄なり。是れより先きギョ

オテがワイマルの舞臺を治むるにも同一の方嚮を以てせしことありしが、ギョオテの背後には王侯貴人ありて喙を其間に容れしが故に、其効績イムメルマンを超越すること能はざりき。唯其末路の難に至りては則彼此殆一轍に出づ。是れ古今の通弊、哀みても猶ほ餘あるべし。ギョオテは既に女優カロリイネ、ヤアゲマン（後にフオン、ハイゲンドルフ夫人）の爲めに誣陷せられ、後一狗兒の爲めに其地位を奪はれたり。渠が宮劇に長たるより二十六年の後なりしが、優あり、馴狗一頭を牽てワイマルに來り、曰ふ、善く佛蘭西の俗曲「オオブライの狗」を演ずと。ワイマル公これをして伎を舞臺に演ぜしめんとす。ギョオテ聽かずして廢めらる。ヨハンネス、シエルはこれを擧げて獨逸開化史の一特例なりと云へり。（獨逸開化史八板五〇七面）イムメルマンは千八百三十二年の十月、ドユツセルドルフに於いて一の劇會を結びしより、拮据して止まず。此小都會に於いて善美を盡したる劇塲を開き、光燄聲價一世を驚動せしに、卑吝なる土廳は四千「タアレル」の貸與を辭みて、遂に此塲を閉ぢしめぬ。（假面對語一面）其蹉跎せし原因のこれを此外に求むべからざるは實際派の傾あるブリヨルスと雖これを明言したり。（戯曲演劇史二卷二七五面）

嗚呼、イムメルマンは實に失敗せり。而れども其失敗は決して渠が妄案空想を懐きしが爲めならず。彼は一詩人の資格を以て、颯然として來りてドユツセルドルフの新劇部に入り、縱橫揮霍優人を使ふこと良將の兵を用ぬるが如く、能く劇塲をして其一厦屋たりし性質を轉じて、一の生動體とならしめ、其財政の困迫せし時に至りても、恩威並びに優人の間に行はれて、一怠弛あらしめず、舞臺の聲價は其頂點に達せし日に、忽焉としてこれを鎖ち、袂を振ひて去りぬ。是れ豈大丈夫の所爲と謂はざるべけんや。イムメルマンは自ら其退去の時を叙して曰く。千八百三十七年四月一日に

ドニツセルドルフの舞臺は廢せられぬ。劇部の全人員には既に三月前に其暇を取らせしなり。此時に當りてや、一劇部の力は應に萎靡して振はざるべき理なり。何如といふに人心は近傍に望を失ひて、遠處に彷徨すればなり。然るに我優人は三月一日に「エグモント」を、十六日に「シイザル」を、二十二日に「イフイダニイ」を、三十一日に「グリゼルデス」を演じにけり。他の小戲曲は必ずしも言はず。且「エグモント」に於ては主なる役、他の曲に於いては總ての役、皆初度なり。此の如き勢なれば、其演習に燈を使ひしは已むことを得ざる所なりき。渠輩はこれを爲し、これを行ひぬ。舞臺の其動作の最高の光燄を見せて閉づべきを願ひければなりと。(假面對語九面) イムメルマンは又閉場の時戲曲果て後、自ら「エビロオグ」一篇を作りてこれを歌はせにき。其第二関に云く。福祉の一息は軽く嘘きて忽ち大蕾を破りぬ。花は開けり、笑へり、而して凋れたりと。これを讀みて泣かざるものは、余其真成なる文人詞客に非ざるを知る。

看よ讀者。歌舞伎座の薨は朝陽に映じたり。君等は余に告ぐることを得るか。其裏面に坐するもの果して我日本のイムメルマンなるかを。

演劇場裏の詩人(日本演藝協會にての演説)

今といふは力ある神なりとはギョオテが傳奇「タツソオ」中の警句なり。人の受くる感動は目前に見るを以て尤強しとす。詩情の發揮もこれを劇に演じて生動の趣は充分に現はるべき。合併の美術多きが中に、民心のこれに向ふこと他に比類を見ざるも理なり。世に論者あり。劇を視るに審美の眼を以てせず。徒にこれを學校に列す。この説は蓋し其根據なきにあらぬと。要するに本を忘れて

末にのみ流れしものなり。

ギョオテ嘗て云はく。劇には二つの敵あり。曰宗教、曰警察、曰高尚なる趣味と。宗教の劇を侵し、迹は、英國淨信派の久く劇場を鎖し、にても若く、千八百六十四年の頃アドルフ、スタアルがエヂンホルフに遊びしをりの記事を觀るに、舟中にて讀し見し祈禱書に左の如き文章ありきといへり。

If you have the Lord and the holy ghost in yourself, how can you venture to enter in such a frivolous place as a theatre? 又近頃になりても、此國にては日曜日に劇を鎖さしめきと聞く。佛國にては「カルヂナル」リシユリユウが劇に對して嚴重なる處分をなし、亦宗教的意味を含みしなるべし。こゝにても近頃女學雜誌などには劇の觀るべきものなりや否やといふことを彼此と論じたりと覺ゆ。警察の劇に利あらざるが如きことあるは、政府が風俗の敗れむことを恐れて、多少の抑制を加ふるが爲めなり。高尚なる趣味の劇を昇むに至るは、劇風の衰へたる時の現象にて、要するにこれをを用ゐることの何如によりて藥石ともなりぬべきものなり。

かゝる敵の多きに堪へずして、辨護の説は起り、遂に劇場を誣ひて風俗を矯正すべき學校なりとなすなり。されど是等は角を矯めむとて牛を殺すとかいふ譬に似たるべき辨説なり。ギョオテも早くこれを看破したればこゝり、劇場は唯心に高尚なる官能にのみ委ねたる場なるをといひたれ。嗚呼、これを學校視せんことは固より非とすべし。劇場にて少しく學校に似たる用あらば、唯是れ間接に民の趣味を長ずる一種の趣味學校たらむのみ。然れどもこは其目的にもあらず、其本分にもあらず。蓋一國の趣味に高下あるは常の事にて、高き趣味は低き趣味を攻むれども、寡は衆に勝たざることも多し。果は上流のために開く劇場と、下流の爲に開く劇場とを分たむとするものさへあり。我

邦にても學海居士は將來の劇場を三等に別ち、上なるものを新しく作るべき所謂改良劇場となし、中を新富、千歳、中村、市村の諸部となし、下を春木、壽、桐、柳盛、淨瑠璃、赤城等の諸部となさむといひぬ。此意匠は面白けれど、これを實地に行はむとする時は、多數の觀客は必ず中以下なるものに取られて、上なるものは唯影の如き生活をのみ營むべし。

世に福澤諭吉氏の説なりとて傳ふるを聞くに、演劇は祇應に彼向正面の嗜好の赴く所に從ひて、其方鍼を定むべしといへり。これも亦偏したる説にて、苟も劇場を以て士君子の入ることなき處となさざる上は、これに從ふべくもあらず。余等は思ふ、世には別に演劇をして上下に通ずる美術たらしめ、卑俚に陥らずして衆人の心に協はしむる策あるべしと。何ぞや。劇を以て國民劇となすこと此れのみ。

二葉亭が魯國の書より抄出せしより早く世人にも知られたるレツシングが演劇論に云く。古より唯一雅典ありき。後にも唯一雅典をのみや仰がむ。卑き民にさへ細膩にして溫柔なる徳義の感情ありて、獨り淨からぬ徳あるのみにて、詩人も優人も劇場を逐下されむことを恐れしは。レツシングは獨逸演劇の大に衰へて、佛國の趣味にのみ傾きし日に出でたれば、此の如き言をも出だしけめど、希臘の盛も或は後より仰ぐ如くならず、將來の天地にも趣味高き民起りて優美なる演劇の基を開くことあらじともいひ難かるべし。

日本の劇は國民的性質を得るには最も其便あり。春の屋もつらく我國を見るに君子國、日本等の名、已に尊し、國自慢の念の吾等同胞の胸に鬱勃たるは必然なりといひし如く、千秋萬古、東海の表に獨立したる甲斐には、歴史上の根柢も充分に備はりたり。これよりして歩を進めて、劇場を以て

國民の精神を發揮すべき處となさば、其盛ならむこと期すべきなり。イムメルマンが獨逸にて演劇改革を思ひ起し、時などは、國民といふ思想は殆全くなかりしかば、唯戯曲の中に、家事人事の瑣末なるものを以てのみ人を動かすことを得たりといひ、又當時ベエルが如き輩は獨逸といふ觀念を離れて劇場に無何有の郷を現出せんとまで諦めきといふ。これに比すれば余等は蓋し多幸なる地位に立てりと謂ふべし。

國民劇の起るは何にか待つことある。曰く佛國のモリエールあり英國のシェクスピアあるが如く、古來、近松、竹田等の淨瑠璃作者五瓶、南北、默阿彌等の狂言作者を凌ぐべき詩人のこゝにも出でて文壇を一掃せむか。然らずば英のガリツク、獨のエツクホオフの如く我梅玉、世々の團十郎に優るべき俳優ありて藝園を一洗せむか。並に是れ國民劇を起すに必要なることなるべけれど、是等戯曲の眞成の進歩、技藝の眞成の進歩は、學校の能く致す所にあらず、社會の能く致す所にあらず、余等は唯手を束ねてこれを待たむのみ。

加藤博士は演藝矯風會のために説いて云く。支那と日本とにては智と徳とのみ勝ちて、美は其歩を進めず。演藝の事は西洋に劣れりと。讀賣記者は則曰く。我國の演劇及其他の諸演藝は、西洋諸國の諸演藝に比して、趣味全く殊なるのみならず、其進歩の度に甲乙なしと信ずと。其見る所は同じからずと雖、皆我今日の演藝を以て足れりとせず、將來の進歩を期するものなり。吾黨と同一大詩人大優人の出でむを待つものなり。

今の勢を以てこれを視れば、詩人と優人と、其偉人物に待つことあるは同じと雖、詩人を望むこと最切なりとす。奈何といふに今優人の領袖といはるゝ人々の技藝は、大に余等をして満足せしむ

る所ありて、彼等は奈何なる新曲の出づるに逢ひたりとて、未だ必ずしも逡巡せざるべければなり。

今や演藝矯風會は其規模を大にし、其方嚮を正して、演藝協會と改稱し、吾邦將來の演劇のために、大に謀る所あらむとす。而れども余等は肯てこれをして大詩人大優人を出して、眞成の進歩をなさしめんと欲するものにあらず。奈何といふに此の如き偉人は固より人に頼りて事を成すべからず、演藝協會の會員に此の如き人を出さむも計られねど、是れとても會員たる資格にて出るにあらず、一個人として出づべければなり。此故に余輩の我演藝協會に對して望む所は、此の如き製作的事業に非ずして、批評的事業なり。内外の舊曲はこれを撰擇して疵を捨て酔に就き、完美なる新曲の製作を奨励し、技藝を精評して其進まむことを求むる等皆是なり。

凡そ批評的事業をなさむとするものは、標準なくては協はず。演藝協會の規約は其第一條に於いて記して曰く。本會の目的は日本固有の演藝を保存し、從來の弊風を矯正し、其特質に由りて發達せしむるに在りと。讀賣記者は之を釋して云く。此會は日本演藝の其特質に由りて發達せむことを願へり。此發達主義は即是れ國粹保存主義にして、これが反對の地位に立てるは改良主義なり。改良主義は即是れ輸入主義にて、此輸入は我に害ありて益あることなしと。

余等は謂へらく。我國に國粹ありといはば、外國豈外粹なからむや。記者は輸入主義を以て保存主義に對しながら、此には國粹といひて彼には外粹といはず。余等はその此に想到らざりしか、或は故らにこれを避けたるかを知らずと雖、苟も外粹あらば、これを輸入するも、豈我に益なからむや。我演藝協會の演藝の發達を謀らむとて、其批評的事業に従事するに當りて、徒らに其標準を國

粹と國藝の特質とに取るといはば、是れその取捨をなすは、其粹を以てするにあらずして、唯國と特質とを以てするなり。其主義の狹隘なること亦た甚からずや。

規約の本文を按ずるに、始より此の如き狹隘の意義あるにあらざるに似たり。國藝の特質に由りての發達は、本來外粹の輸入と並立することを得べし。おなじ讀賣記者も亦將來應に出づべき完美なる戯曲を狀せしときは、近松三分、シエクスピイア七分といひぬ。このシエクスピイアの七分を以て推すときは、記者も亦未だ必ずしも外粹の輸入を憎まざるものに似たり。

夫れ特質に由りての發達は、其歸着する所、必ず完全なる美術に在るべし。會の猶演藝矯風會といひし時の規約にては、其第一條に左の句ありき。曰く本會は我演藝弊風を矯正して、益優美の域に進め、完全の美術たらしむるを以て目的とす。此心は今も残れるるべし。其文に異同あるは昔は終着の目的を説き、今は相尋の手段を説けるがためのみ。今の規約は其終着の目的を明示せずと雖、豈昔日直往の氣象を棄て、摸索の陋に陥るが如きことあるべしや。

余等は演藝協會の美術に於ける、僅に其發達主義といへるものを奉じたるを知るのみ。而れども發達は既に最終の目的にあらず、又恐らくは其最深の主義にあらざるべし。審美學上よりいへば、所謂理想主義と所謂實際主義とありて、自ら相對すれども、未だ發達主義に對する不發達主義あることを聞かず。春の屋は往年矯風會に問うて曰く。矯風會の奉ずる所は、理想主義歟、寫實主義歟、標準主義歟、寫實主義歟、高尚主義歟、面白主義歟と。而して矯風會は未だ嘗てこれに應へざりき。演藝協會も亦今に到るまでこれに應へしことを聞かず。余の海外に在るや、初實に極端の改良主義を懐きたりき。外粹は固より輸入すべしと雖、余が先づ

輸入せむと欲せしものは頗る其宜きを得ざるものなりき。嘗て巽軒氏とライプチヒに在り。一夕俱にアウエルバハの旗亭に酌む。亭はギョオテが學生たりし日に頻に來往せし處なり。其「フアウスト」の傑作にも、主人公をしてメフィスト鬼と共に此に飲ましめたり。巽軒杯を擧げて余に屬して曰く。「フアウスト」の兩篇、之を譯して日本に傳ふべきもの君に非ずして誰ぞ。僕東に歸らむ日には團十菊五の徒が君が「フアウスト」を新富部に演ずるを觀むと。

郷に還りてより以來、日月梭の如く、事心と違へり。是れ余が造詣の深からずして筆力の未だ足らざるに由ると雖、又未だ嘗て氣運の熱し難く、時期の猶遠きに由らざるばあらず。夫れ外粹の輸入は國藝を利すること最多し。而れども採擇の難は傳譯の難と並び存じて、我業を阻礙す。余は今姑く特質に由りての發達を以て方鍼となし、微力を我演藝協會に竭さむのみ。唯新來の客、以て禮をなすなし。聊か西歐諸國殊に獨逸の演劇論家が斯道の發達のためになし、運動の蹟に就いて、我協會に益あるべきものを拾ひ、これを演べて以て不腆の歸遣に充てむとす。直ちにこれを輸入せむことは固より吾願にあらず。儼し參考の資ともならば、幸何ぞこれに若かむ。

演劇論家の或は孤立し、或は會を結びて、其批評的事業に従事するや、其境地を分ちて、詩境技境の二つとなすことを得べし。先づ詩境よりしてこれを言ひ試みむ。

詩境の批評的事業は、演劇場外に立ちても、隨分其績を擧ぐることを得べし、舊戯曲に對しては、國語にて編みしものと翻譯に成りしものと埋没したるを採擇して、世に出すも一段なるべし。獨逸にて演劇改革運動の起りし頃には、舊曲の取るべきもの甚少かりしが、我には久く湮滅したりし名作の新に印行すべきもの多からむ。往年大和文範といふもの出で、近頃近松の作なども漸く顯

はるれども、撰擇校合の上よりは人意に満たざるものあり。これらを始として河竹翁の院本なども印行して世に頒たまほしきことならずや。次に望むべきは、外國戯曲の翻譯なり。シユレエゲル、チイクのシエクスピヤを譯せしは、大に獨逸文運の進歩を賛げ、今猶南獨の魯靈光たるシヤツク伯が輸入せし西班牙戯曲も、亦近時の梨園に對して偉効ありきと聞く。我邦にては春の屋の「シイザル」出でてより以來、カルデロンのザラメヤ村吏の譯も出でしが、シエクスピヤの院本を院本の儘に譯したるは、今に至るまで殆ど見えず。是等も今人の力を出すべき處なるべし。次に起すべきは讀曲の事なり。獨逸にてはルウドキヒ、チイクが始めて戯曲を公衆の前に讀みしより、ホルタイの輩繼いで起り、彼ドユツセルドルフにて演劇改革の偉業をなし、カル、イムメルマンも（これを半陰半陽術として演劇衰頹の世にのみありとはいひたれど）亦其鐘の如き音吐にて讀曲の伎を演ぜしことあり。凡う戯曲を讀むには、常聲にてこれを讀むと、直ちに曲中の人物に扮して其語を吐く（デクラマチオン）との間なる一種の讀法（レクタチオン）を用ゆるものなり。此伎にも思ひの外に巧拙ありて、シルレルが如きは、其作れる曲は絶妙なりしが、聲の鼻にかゝりて聞き苦しかりしたために、これを衆に讀聞かするをりには、數々失敗したりき。イムメルマンは音吐頗る宜かりしが、これも公會に於いてせし時よりは、家裡の小集の時のかた工なりきとアドルフ、スタアルが千八百三十八年中の記事に見ゆたり。イムメルマンは内外曲の別なく、好みてこれを誦讀しぬ。スタアルは其「ハムレット」を讀みしを聞きしことありといへり。彼が未だ演劇會を組織せざりし頃、畫工某の「アテリエ」を借りて、公衆の前にて幾多の戯曲を讀みしことは二年間の冬期なりき。我邦にても外國の曲を翻譯して興行の期末だ到らざるをりには、熱心なる詩人は此法に由りて衆人の

聴を聳動することを得べし。次いで務むべきは劇評の一部を以て戯曲の批評となすことなり。劇評は歐洲にて古昔よりあることにて、アリストテレスが「チダスカリヤ」を嚆矢とし、後其類多く世に傳はれり。就中レツシングがハムブルグ劇論は初興行毎に上下兩半截の評をなし、上は戯曲の評に充て、下は技藝の評に充てむと思ひしが、技藝の評は遂に優人のために妨げられて、評曲の部をのみ出すことを得てき。演劇場裏には自ら其人あり、曲を撰びて興行すべけれど、局外の評者が極言直筆を以て、其醇疵を論ずるは、頗る益あることなるべし。新戯曲に對しては、之を既成に評する外、又之を未成に催さざるべからず。矯風會には實施方法と名くるものありき。中に云へることあり。新に編輯する演藝文書等は、最も優美なるを要すと雖、漫りに歴史、文法、事實に拘泥して、我演藝を無味の境に陥らしむべからずと。此言や新曲を作るものに對して、批評家の與ふべき最緊要なる約束の一を示したり。イムメルマンが時代にもラウメルなどといふものありて、戯曲の正史に據るべきを主張せしが、遂にイムメルマン等に排撃せられぬ。イムメルマンの言に云く。對話ダイロギイニテクロノツクとなしたる年代記は、縦合シエクスピイアの手に出づるも、以て戯曲となすに足らずと。加藤博士も亦教へて云く。市井男女の事を叙せしむること勿れ。須く情愛の事を言はしむべしと。凡そ事實に就いて其蹟を敷衍するが如きは、遂に詩たるに足らず。市井男女の事は果して以て詩材に充つべからず。余等は更に新曲を作らむとするものに向ひて、一の要約をなさんとす。作者の目中には現代の看客あるべきことは是れなり。ギョオテが「ファウスト」の序詞に、誰か同世のために戯曲をなさむといふことあり。知己を千載の下に求むる文士の本意はさることながら、戯曲の如きは、殊に此弊を避けざる可らず。一時の嗜好に投ずるも不可なり。典籍の臭味を帯ぶるも不可なり。而れ

ども新に作るべき曲は、充分なる詩品を備へて、後世に傳ふべきを俱に、時俗にも入り易き性質なかるべからず。今や春の屋、嵯峨の屋等の諸家、多く社會の全局を詩中に收めんことを求むるがために、或はギョオテの「ファウスト」を以て戯曲の粉本となす如きもの、出でむも知るべからず。「ファウスト」は固より千古の奇曲なるべけれど、余等が我國民劇のために求むる所は「ファウスト」にあらず、又ギョオテが爾他の戯曲にあらず、佛國のモリエール、英國のシエクスピイアが諸作の如きものなり。演劇論家は新曲の著作を奨励するに當りて、須く詩人のために辨護の地位に立ちて其敵を打破すべし。作家の敵はギョオテの所謂劇の三敵に似て、宗教あり警察あり又卑下なる趣味あるべし。蓋既に上にもいひし如く、演劇論家の結べる演劇會が、自ら戯曲を撰ばむは格別の事なるべし。矯風會の實施方法に云く。演藝文書等を新作若しくは修正せんと欲するものは、委員會に於いて其腹稿を示し、豫め相互に協議す云々と。余等は以爲へらく。詩人が穆然として深く思ひ、其浩焉たる興に乗じて章を成さむとするとき、豫めこれを衆に議して取捨することを得べきか。その能くこれをなすものは、果して名作を得べきか。是れ頗る疑ふべしと。奈何といふに之れを指間に視ふは書家の嫌ふ所にして「アテリエ」中未成の畫は、畫伯も必ず之を掩へり。若此の如き約束をして作家の間に行はれしめば、曲中復た天來の奇想なくして、悉く是れ閻會允可の凡想となるべければなり。是れ豈余等が作家のために取る所ならむや。

詩境の批評的事業の最も其効驗を顯はすべきは、演劇論者が其詩人たる資格を以て、演劇場内に入りての後に在るべし。此の如き演劇場裏の詩人は、既に興行の權を握るべきものなれば、其内外新古の戯曲を撰擇するや、直接に劇運に關係す。イムメルマンが演劇改革をなし、目には、其采擇の博

かりしこと、尋常にあらざりき。記事に云はず。Als Korporteur und Vermittler zwischen dem Volke und den Schützern der dramatischen Literatur des Aus- und Inlandes von Kalkassa bis Ram-pach die reichste und bunteste Wirkamkeit zu entfalten. 「カリダザ」より「ラウバハ」、彼は印度太古の曲、此は獨逸同世の篇、此間伊太利、西班牙、英、佛の院本にして場を上ほりしもの幾何ぞ。此の如き博采は獨逸の當時に於いて撰に當るべきもの少かりしに依るか。曰く否、レッスング、ギョオテ、シルレルの盛代は既に閑し來れり。豈曲の場の上ほすべきもの少からむや。蓋イムメルマンが標準は眞個の美術に在り。徒らに褊狹の心を以て内外の別を立てざりしのみ。或は曰はむ。當時獨逸の民は國民思想に置しかりしがゆゑに此に出でにきと。然らば則英佛の劇場は何故に互に其曲を代へ、又獨逸西班牙の曲を收めたるか。

演劇場裏の詩人は又内外舊曲の添削に従事す。此事は演劇場外にてもなすべけれど、多くは是れ興行のためにするものにて、既に添削を経て梓に上ほりしものを舞臺本といふ。舞臺本は出つと雖、文學上には舊本の價值を損ずることなし。奈何といふに戯曲は固より一時劇場裡の觀客を樂ましむるに止まらずして、之を千載に傳ふべきものなればなり。矯風會の實施方法に云く。在來の演藝及文書中最甚き野卑猥褻のものは、矯正を加へて之を演ずることあるべしと。學海居士は則國民新聞社員に告げて云く。余は俗曲を改新せむとすること久し。舊幕の頃はかゝる遊藝は大に卑まれ、士分は勿論町人と雖、少しく家格あるものは皆之を退け、嗜好するものも頗る秘密にする傾きあれば、公然と俗曲を聞き、芝居に近くもの、大抵無識無學の徒に限れり。然るに是等無學無識の徒は、遊里に入り、藝娼妓に親むをもて、無上の榮譽となしたれば、勢の及ぶ處、見物の好に左右

せられて、必ず花柳の情を含蓄せしむるをもて常とす。彼梅の春の如き、蜀山の手に成りきといへど、うれすらよろつよし原山谷堀と云ひ、辨天様と添臥のと云ふ如き、總て無用の字句ならざるはなし。是等も畢竟は時俗に阿りしのみ。其他近松竹田等の淨瑠璃、悉くかゝる有様にて、正當に論ずれば言語同斷なり。栗山山陽等の諸氏が戯曲を讚賞せしは、一步地位を下りて評せしにて、堂々たる文書を論ぜしと同一にあらず。余が嘗て淨瑠璃を批判せしも、余の地位を落してかく賞美せしのみ。居士嘗て小永井小舟等と戯曲十種を撰評しぬ。さるを世人往々誤解して、今に到り猶昔日の餘風を貴び、依然俗曲を聞いて樂み、演劇の如き舊來に少しも變らざる卑賤の人情を寫せるを見物して、毫も厭ふ風なきは怪むべし。余は常に此弊風を歎じ、古人が作りし音律の存すべきは存じて、文句は悉く改竄寧ろ新作せんとするの念盛なりと。實施方法中の語は、之を演ぜんと欲して改竄すといへば、改竄を経たるものは、唯是れ一種の舞臺本たるのみなれど、學海居士の言にては則其關係する所極て大なり。之を諸邦の演劇史に徴するに、舞臺本の改竄、既に人意に満たざる者多し。千八百十一年にシエクスピイヤが「ロメオ、エンド、ジュリエット」を改めたるギョオテが草稿は後にボアスに發見せられて世に出でしが、其斧斤の痕にはギョオテが平生の筆力に負きたるもの多かりき。何ぞ况や今人の心を以て古人の作を抹殺せむとするをや。夫れ希臘の「ヘテエレン」は今の社會よりして見れば醜穢の事なり。而れども希臘詩中に就いてこれに係れる句を削らむとするものあらば、誰か其陋を笑はざらむ。又ギョオテの「ファウスト」シエクスピイヤの「ハムレット」中にも、中筆の言頗る多きを、一々に修正せんとせば、これも柱に膠して瑟を鼓する類にやあらむ。フィツシエルは曾て評穢(チユニスムス)と其約束ある權利とを論じて、穢語の或は止べからざることをいひぬ。蓋

流俗の弊、猥褻の事を忌まずして、一たび詩人文士のこれに言に發するを見るときは、則咆哮これに迫らむとす。是れ思はずんばあるべからず。且一代の詩は其影象なり。女を濁ぐことの醜穢なるも、腹を割くことの殘忍なるも、之を舞臺に演ぜしむるは洵に厭ふべし。而れども之を優人の口に上げずは嫌ふべきにあらず。其文詩歌曲に存じたるもの、亦悉く削る可らず。いらつめて嘗て日本俗曲に就いてといふ文を見しことあり。曰く石屋の鐵公が朝飯前に作りたる灯籠も、年を経て苔むすに至れば、新に斧鑿を加へて其形を直すに忍びず。まして名工の苦心をこめたる物に於いてをや。猥りに之を添削し、或は交歌に作らせむとするは無骨の絶頂也といふべし。是れ唯「ビエテト」の情を以て云へり。嗚呼、豈獨り「ビエテト」のみならむや。尙も舊曲に向ひて斧鑿を試みんと欲するものは、須く潛心熟慮すべきものなり。

演劇場裡の詩人は又新作新譯の戯曲を點削することあるべし。是も亦これを場の上に上さむとてなり。矯風會の實施方法に云く。脚本妙なるも實際演じ難きものあり。故に識者の著述に係るものは、從來の狂言作者に謀り、又狂言作者の著述に係るものは、識者の訂正を經、其不都合なきを以て之を實際に演ず云々と。是種の添削はレツシングも其止みがたきを知りて、世の作家が僅に一釘を抜かれ、全厦の覆へるが如き念を作すを責めしことあり。然れども演劇場裡に詩人なきときは、取捨一に賈人の手に委ねたれば、詩人の眼は高く、賈人の眼は低きがために、一場の争鬪を惹き起すこともあらむ。古今の作曲者は此境に至りて多少の不平鳴をなし、もの多し。嘘馬の詩人アンデルセンは歌妓アムンチャタの口を藉りて詩人アントニオを戒めて云く。君は恐らくは知らざるべし、彼(劇場の伶人)は君を奈何なる慘境に陥れむとするかを。(歌曲の作を勸めて)伶人は毫も君が勞を問はず。

観客はこれより甚し。君は今夕「ラ、ブルオワ、ドエン、オペラ、セリヤ」といふ曲に於いて苦艱を受けたる作者の状を視得む。而れども是は猶其色を淡くして寫せるなり。君は一曲を作りて、全幅の精神は愛らしき句となりて流出せむ。局面の一致、人性の叙寫、皆熟慮を經たり。さるを伶人は來りて求めむ、こゝに添ふべき一思想あり。君が一句は削らざるべからず。こゝには笛と鼓とを入れむとす。君はこれにつれて舞はざるべからず。劇部の首座聲妓はいふべし、己れが場面を退くをりに光采あらむために「アライ」の一節を挾め。彼は「フリオゾオ、マエストロ」を欲す。其曲に適すると否とは彼固より其責に任せず。首座の歌優(フリモ、テノオレ)も亦これに劣らぬ需求あり。君は首座より第三位の聲妓へ、又「バス」「テノル」等の歌優へと飛廻り、俯伏し、倚俛し、諧笑し、阿諛し、一言以てこれを掩はば、妾等のありとあらゆる我儘に従はざるべからず、而して此我儘は實に瑣小ならず。今や又劇長の來るに逢はむ。彼は批評し、詰難し、誹謗し、厭棄すべし。彼は分明に愚にして毫釐の才なきも、君は僮僕の如くにこれに服従せざるべからず。道具方も亦云ふべし、彼粧飾、此結構は劇部の微力にて實施するに由なし。君は是に於いて其曲の藝を代へざるべからず。劇部の通語にて、これを曲を曲ぐといふ。劇部の畫工も亦云はむ、某の藁堆、某の井欄、某の田圃はこれを新場面の畫に入れ難し。君はまたこれを記したる一句を曲げざるべからず。首座聲妓は又來りて云はむ。君が某の句の尾なる字母は聲を顛せて姿を取るに便ならず。此句は宜くあ韻を以て終るべし。君が此一あ字を那邊より得來るかは、其問ふ所にあらず。君は意を曲げて曲を曲げたり。曲は殆ど全く其結構を變じて場の上に上れり。而して君は觀客の口笛を吹き鳴してこれを嘲るを見む。伶人は此時に當りて大呼して云はむ。我業を墜しは歌曲の罪なり。我絲竹の翅は此癡重の怪物を

して飛翔せしむること能はざりきと。演劇場裏苟も詩人の在らむには、此の如き不公平なる處分をなすことなからん。况やイムメルマンが劇長たりしをりの如く、美術家にユヒトリツツあり、伶人にフェリツクス、メンデルソン、バルトルヂイあるに於てをや。

演劇場裏の詩人は又興行の際にも劇場に望みて批評を左右することを得べし。是れギョオテが毎に行ひし所なれど、兎角に看客の好尚を壓服せんとする傾を生じ易きが故に、餘りに望まじからず。ギョオテがワイマルの劇部に長たるや一夕エナの學生來りて觀たるが、聲を擧げて其意に満たざる處あるを示さむとせしにギョオテ平土間の中央より、靜まれ人々、然らずば當番の「ラザアル」兵を喚びて汝等を逐出させむと叫びきといふ。又嘗てフリイドリヒ、シユレエゲルが一曲を演せし時、場中に笑ふものありしにギョオテは忽ち起ち雷の如き聲を發し、「マン、ラツヘエ、ニヒト」(勿笑)と云ひきといふ。是等はりのビヨットゲルがワイマル 劇の批評を世に公にせむとせしとき之に迫りて、若強てこれを出さば己れ先づ劇長の職を辭せむと云ひしと等く、其爲す所殆趣味上の壓制に類して、國民劇の本色を害すべし。唯師とすべきは其熱衷の人に超ゆる處のみ。

序に云はむ。新戯曲の場の上ほりしとき其作者が舞臺に顯はれて客を見ることの可否奈何を。此習はヲルテエルが「メロツプ」の始て演せられし時に始まる。レッツシグ嘗て嘲りて云く。ヲルテエルよりマルモンテル、マルモンテルよりコルデエまで、さこり哀れげなる顔の舞臺に出でたるが多かりけめ。曲に對して其人を忘れられむが作者の本意なるに、動物園中の獸の如く、作者が客に觀られむは耻づべきことの限ならずやと。彼は自ら呼ばれしをりには、固く執りて肯て出でざりき。彼巴里の民の如きは、既に久しく此風に慣れたれば、作者も此弊を撓むること能はず、我前田正名

氏も、忠臣藏興行の時場面に出できと聞けど、日本の劇場にてはかかる習の養成せられざらむことを望む。

演劇論家の劇場の外に立ちて批評的事業を技境に試みんとするや、其方法一ならず。彼等は先づ世人の劇を解する心、即所謂芝居心を養成し、他の無責任の批評をして迹を文人社會に絶たしむることを得べし。レッツシグ嘗て曰く。畫伯も亦手に筆を握りしことなき人の己が畫を評するを憎むと。是れ其評の餘りに無責任なるべきが爲なり。絶好の批評家は固より未だ必ずしも絶好の製作家ならず。而れども全く詩才なきものは又安んず能く人の詩を評せむ。技藝の評も亦然り。故に演劇論家は宜く素人芝居を奨励すべし。ギョオテが素人美術(チレッツタンチヌムス)の論に云く。Diehtun-tismus ist eine nothwendige Folge schon verbreiteter Kunst, und kann auch eine Ursache derselben werden. 素人美術必ず其術の普及を助成することあるべし。ギョオテの未だワイマル劇部に長たらざるや、大に素人芝居を開きて、其夥中にはコロオナ、シユリヨオデルが如き超群の女優をさへ數ふることを得たりき。イムメルマンも亦ドユツセルドルフの劇部に長たるに先ちて、シヤドツ等の宅に於いて素人芝居を催しぬ。近時東京に於いても紅葉山人の其伴侶と俱に起し、素人芝居は希有の盛觀にて、學海居士は筆を把りてこれを評したり。是等は演劇論家の應に賛成すべき所なるべし。彼等の進みて眞の劇場に向ひて批評を試みんとするや、身其場に臨みたるまゝにて、一種直接の批評をなすことを得べし。西歐の劇部にては拍手して賞讃の意を表し、口笛を鳴らして厭忌の心を顯すことあり。我向正面の客も亦好で褒貶の語を出せり。レッツシグ嘗て曰く。觀棚は善き肺に逢ふことに、響高き拍手にてこれに應ぜざること稀なりと。是れ觀棚の客趣味に乏くして、優人の

聲大なれば、則其巧拙を問はずしてこれを讚美するを刺りたるなり。詩人は場に臨みて正當の美刺をなして、以て此流弊を改むることを得べし。善畫の女史ルイイゼ、ザイドレルの自傳に云く。ギョオテが未だ劇部に長たざりし頃、彼は常にワイマル公家觀棚の下なる一席を畫して己れが有とせしが、ルイイゼは數々これに伴ひて場に入りぬ。ギョオテは此席に在りて、日ごとに技藝の細評をなし、會心の處に逢ふ毎に、必ず三たび手を拍ちしに、優人も看客も皆これに耳を傾けて、技の妙は應にこゝに在るなるべしと思ひぬと。此の如き例は外の國にもありしや否や、余等はこれを知らねども、聞く所に依ればコルチイユが盛時に、巴里劇部の一席は常に彼がために設けられたりしが、彼の場に入るを見て、客皆立ちて迎へぬ。是れ當時の習にては、王族ならでは受けざりし禮なりといふ。さればコルチイユが拍手も亦或はギョオテの拍手と同く人の耳を傾くる所なりけむ。又西班牙にてカルデロンの頃に詩人が占めきいふ「デスワチス」(屋上棚)一名「テルツリヤ」も亦或はかゝる影響をなしゝなるべし。我演藝協會の如きも、重なる劇部の一席を畫して、常にこれを占め、此席の拍手は優人の光榮となり、看客の標準となることあらば、或は技藝を長ずる徑庭ならむ。進みて立文字の批評に至れば、自笑其頃の黒表紙が六二連に再興せられしは、希臘の「デダスカリヤ」がハムブルクにて復活したりし類なるべし。此種間接の藝評は、我邦にては今も昔もただ自由なれど、獨逸などに於いては障得少からず。レッシングの勇あるも、遂に二三夕の評をなしゝのみにて、詩境にのみ局することゝなりぬ。蓋彼邦には優人中に女子を雜へたるが、これには必ず庇保者ありて、王侯貴紳殊に此地位に居るが故に、批評の技境に亘るもの少しく女優の意に満たざる時は、彼有力なる庇保者は忽ち評家に禍することあり。レッシングも亦これを免るゝこと能はざりき。レッシングは既

に筆を此境に絶ちしが、尙ほ論劇葉の卷尾に書して謂へらく。優人は稀に評せられむよりは、時に惡評あるも頻に評せられむことを願ふべし。且眞の優人は唯己を罵るべき膽ある批評家の譽めたるをのみ譽とすべしと。

技境の批評的事業の演劇場裏の詩人に於けるや、これを既に演ずる後に論ぜむよりは、寧これを未だ演ぜざる前に議するものなり。ギョオテの演劇法は「レエゲルン、フユウル、デイ、シャウスビールクンスト」と題して、其全集中に收められたるものあり。其説く所甚我耳塵集、あやめ草等に似たり。此等の書は大抵優人の心育に求むべきものまでを、其姿勢に求めんとする弊あり。若其弊の存する所を知りて、能く之を應用するときは、格式の書豈技境に利あらざらむや。ギョオテが優人の技を試むるに當りて、命令の嚴重にして、毫も假借する所なかりしさまは、ハインリヒ、シユミットが言に就いて其一斑を窺ふべし。シユミット嘗てハムレットに扮して、彼有耶無耶の語を稱ふるとき、右手にて願を支へ、左手にて右肘を助けむとせしに、ギョオテはこれを許したるが、左指の宜く鬆開すべく緊閉すべからざるを諭しぬ。又ギョオテが心を用ゐることの深かりし例は、ワイマル劇部の道具方ゲナストが日乗に見わたる一話に由りても見つべし。女優オイフロナイネ或る役にて熱鐵を差しつけられしに、これを恐るゝさま充分ならず。ギョオテ自ら禁せず起ちて其鐵を奪ひ、眼を瞋して之を睨せし餘りの恐ろしさに、女優昏倒す。ギョオテも驚きて扶起しぬといへり。されど所謂ほん讀みの業はイムメルマンに至りて、始めて全く演劇場裏の詩人の手に委ねられたりと覺ゆ。イムメルマンは先づ諸優人の面前にて、自ら場に上すべき戯曲を讀み、次いで一人々々の俳優に其應に扮すべき人物の語を讀ませ而る後に纔に合讀對話せしむ。此演習既に畢れば、屋裡に

於いて技を演ぜしめ、其稍観るべきを待ちて、これを舞臺に上す。その勞を憚らざること此の如し。演劇場裏の詩人は又一步を進めて優人を養成することを得べし。譬へばギョオテがオイフロヂイ子ツケルといひて、初めワイマルに來しをりは、年甫めて九歳、此に留まりて十二の時に父を喪ひしをギョオテが身に引受けて教育しぬ。彼コロオナの如きは此優の師なりといへど、眞に之を教へしはギョオテなりき。ギョオテ自ら云く。余は此兒に頼りて舞臺に馴染みたりと。憾むべし、人に嫁して未だ幾月ならず、癆を病みて死す。年僅に十八。ギョオテの詩卷にオイフロヂイネを弔する辭あり。纏綿の恨具に見はる。或は云く。ギョオテが作れる劇曲中には、此優の性行に似たる婦人尤も多しと。

讀賣記者の云く。蓋日本固有の演藝を保存することに就いては、當局者が單獨の力充分なるべく、他より助言と助成とを要せざるべしと雖、之を發達せしめむがためには、是非とも助言を要すべく、助成者を要するなるべし、さり乍ら余等の意は當局者外の人々、日本演藝の朋友が、團十郎と共に踊り、圓朝燕枝と共に話し、延壽小文字の仲間となりて語らざれば、日本演藝發達せじといふにはあらず、只だ顧問となり、後見となり、批評家となり、之に種を授け材料を供せざるべからずといふに外ならずと。夫れ演劇場裏の詩人は、既に演藝の朋友たるを以て自ら足れりせず、進みて興行の局に當らんと欲す。りの共に踊るは必ずしも要緊ならざるべしと雖、興に乗じて共に踊らむと欲するものは、こゝに出るも亦何の妨かあらむ。ギョオテはりの作れる「イフイゲニイ」の曲に於いて自らオレストに扮し、女優コロナ、シユリヨオデルと共に技を演しぬ。ヒルがラルテエルの傳奇「ゼ

エヤ」を譯して、之を英都の劇部に演ぜしとき、オロスマンの役はヒルが友なりし一紳士これに當りき。此の如き例は英國等に於いて屢見る所なり。これを聞いて徒に疑訝するは、夏蟲の氷ならむのみ。余等は之をイムメルマンに聞く、演劇の改良は新發明の智識を以てせず、道義上の決斷を以てすべしと。此決斷は世の眞詩人を驅りて、演劇場裏に入らしめ、演劇場裏の詩人とならしむるに在り。豈他策あらむや。

答俳優某論自憑書

おん手紙拜見いたし、れん尋の件つぶさに承知いたし候。小生演劇の事につきて、批評めきたる文を公にいたし候節、俳優の技藝は自憑と申すものなりとしむる候ひしを御覽なされ、りの自憑とはいかなる事か、又俳優の技藝を自憑なりと心得て、何か御自分藝道のためになるべき仔細もあるべきかと、おん考付なされ、わざ／＼小生まで手紙にてれん問合なさるゝやうの事に相成候由、れん心掛の他人にすぐれ候事は兼ねてより傳へ承り居り候へども、又今更のやうに覺え、平生やかましき論文にのみ慣れて、兎角濫りがちな筆を呵して、早速れん答申すことにはいたし候。なほ小生が文中若し／＼の間に例の論文の辯出申候うて、くだらぬ術語すなはち哲學仲間の樂屋言葉れん耳遠くなり候やうなる事もこれあり候はゞ、少しも御遠慮なく二度も三度もれん問ひ返しなされ候うて苦しからず候。

原來れん尋の自憑といふ言葉は「アウトブグスチオン」といふ洋語の譯に御座候。憑はよると訓じて俗にのりうつるといふやうなる意味に用ゐ來り候。狐憑はきつねつきにて、これは狐が人により

たるなり、狐が人のりうつりたるなり、といふ世の人の妄想より出でたる名に候。「ズゲスチオン」といふ洋語は近時西洋にて學者の研究やうく綿密に相成候睡眠術と申す術にて多く使ひ居り候言語にて、これは醫者うの外の術者がれのの面前の人の神經を動して、その人を眠のやうなる態に陥れ、うの上にてうの人を自分すなはち術者の勝手にねひ役ひ、右へ往かするも左へゆかしむるも自在になりたるとき、その術者の心の命令の言葉によりて面前なる人に憑るところを指して申すことに御座候。これも矢張術者が人のりうつる事に候。これまで憑といふ一字、原語にては「ズゲスチオン」といふ字の講釋に御座候。

さて「ズゲスチオン」の上に「アウト」といふ字を添へ、憑の前に自といふ字を据うるときは、言葉の意味大分變り申候。この自憑の意味を解するには、先づ自憑まで漕ぎ付けざる前の俳優のありさまより説く事最便利ならむと存じ申候。初心の役者に役を付けたる時の事を想像して御覽なされよ。うの役に對する白を譯も分らずにしゃべりて、教へられたる身振をきちやうめんにいたすのみにこれあるべく候。その際には役者の心の中に、絶ずおれは某の役をつとめて居るのぢや、おれは今何座の舞臺に立つて居るのぢや、おれの前にすわつてござるのは某の役を勤めらるゝ親方某さんぢや、おれは今右の手をどのくらゐ擧げねばならぬ、左の足を何尺進めねばならぬ杯と思議することなるべく、うの心の中にはしばしも意識といふもの離れざるべく候。さてかくの如く苦勞して意識ばかりにて役をつとめ候間は自憑と申す事は微塵これあるまじく候。おほよそ燈の効能を説くには先づ燈のない闇の夜を想像いたし、舟の効能を説くには先づ渡るべき便のない大河を想像いたすが捷徑に候。小生が先づ自憑なき場合を語り候ふは、闇より燈に説き及し、河より舟に説き及

すとななじ道理に御座候。

さて藝に身の入り候やうに相成り候後、楠公をつとむる役者、おのれが楠公をつとむる役者なることを打ち忘れ、一所懸命の心になり、おのれ直に楠公になり濟まし候ふ時これあるべく候。これは最早當前の意識を離れたる場合に候。これはうもくいかなる場合に候ふか。おのれが役者たる事を忘れたるは當前の意識、常の意識にはあらず、さればとてこの人別に氣を失ひたりといふにあらず、無意識なりといふにあらず、誦んじたる白をつかひ、教へられたる身振をいたし居り候。この男には取りもなほさず一種の意識があるに相違なく候。この醒めたる常の意識と無意識との間を姑く夢の意識と名づけ申し候。然らばこの夢の意識といふものは何故に夢より確に候ふか。これは全く常の意識、すなはち楠公をつとむといふ意識にのりうつられたる、憑られたる夢の意識なるゆゑに候。常の意識も夢の意識も一人の役者の心のうちの事ゆゑ、うの憑るや自ら憑れるにて、すなはち自憑に候。これにて自憑とはいかなる事を指して申すかとのおん尋に對しての答の緒だけは僅に開け申候。

さてこの自憑といふものを綿密に見れば、なか／＼おもしろき事少からず候。はじめは楠公の役をつとむるゆゑ口に出し候言葉、うの慷慨の意味と俱におのづからそれに相當したる身振を喚び起し、この身振は又おのづからそれに相當したる言葉を喚び起し候。かくおのづから喚起されたる言葉、すなはち自憑の結果なる言葉はうの調子能く慷慨の意味に適ひて、はじめ役をつとむる氣にて出しし言葉、すなはち自憑の原因となるべき言葉より餘程上等なるものに候。否。かくの如く自憑にて生じたる言葉、自憑にて生じたる身振ならではまことの技藝とは申されず候。

斯様に説き候はゞ。初心の役者にて一所懸命になりて夢中なるものは澤山これあり、それ等が決してまことの技藝といふ域に至れるにあらざること、見功者ならでも分るものなり、これは奈何とおん疑なざるべく候。このおん疑は御尤千萬に候。いかにも楠公をつとむる役者夢中になりて、楠公になりすまじだにせば、うれにて善しといはるべくば、技藝といふものはおもひの外に容易きものにてこれあるべく候。夢の意識は誰もく寐て見る夢にて知りたるべく、また彼睡眠術におとしいれられたる人、おのが精神の病にて狐に祟られたりとおもへる人などにつきても見らるべく、殊には夜中俄に起きて常の意識なくさま／＼の事をなし、人に喚び覺まされたる後何事をなしたりとも知らざる人あるを見て、うのいかにも確なるところあると共に、また頗る締なき取留なきところあるを知るに足るべく候。かやうにはかなきもの争でかまことの技藝として頼まれ候ふべき。まことの技藝として頼むには締がいら申候。この締と申すものは常の意識すなはち醒めたる上の分別に候。小生の申す自憑は決して夢の意識の獨立いたし居り候ものには無之、夢の意識の常の意識に憑られたるものにて、その常の意識との間には絶ず交通あるものと御承知下されたく候。役者夢中にて楠公になり濟ましたるのみにては、これは自然にして技藝にあらず。楠公になりすましたる夢の意識も、猶目前に群衆の客あることを知りて、これを知りたる常の意識の力を借りて締を付くこと肝要に候。この締十分につきたる上ならでは名人にはなられまじく候。初心の役者の常の意識のみなるは、形式に縛られたるものなるべく、つぎに夢の意識に入りて締なきものは形式を失ひたるものなるべく、最後に夢の意識にありながら常の意識の制裁を受くるものは形式を備へてこれに拘泥せざるものなるべく候。これにて自憑といふものゝ本質は大抵おんわかりに相成候事と存せられ候。

俳優の技藝を自憑といふものにて説き明かすことは、素是れハルトマンと申す獨逸の大儒にはじまり候。小生が説きしはほんの受賣に候。さりながらハルトマンとても俳優の技藝に於ける常の意識と夢の意識との關係を一々あらたに發明せし譯にはこれなく、既に百年前（耶蘇曆千七百八十二年）にシルレルと申す人ありて、カントといふ大儒の哲學を基とし、いろ／＼の技藝の事を究め候ひしが、俳優の技藝を夢中に起きてさま／＼の事をなす人の振舞に譬へ、これに締をつけたるを技藝の極意とすることにさへ説き及びしことこれあり候。猶おん答申すべき點は少からず候へども、ひとまつこれにて筆を擱き、餘れるをば後便にまはし申候。早々。

歐洲の劇場 (ささのや筆記)

我が日本にて何座といふべき所をば歐洲にて「テアテル」といへり。この「テアテル」といふ語は通常演劇といふ意にも用ゐるゆゑ、自然何座と稱すべき所をも誤りて何々演劇など譯せるもの屢々翻譯文中に見ゆ。うはいづれにまれ、希臘の太古に溯りて、うの様如何なりしかと索ぬるに、初めは神社に伴へる演劇の場所より始まり、漸く獨立したる大なる劇場定まり居りしかど、うれもいつしか衰へて、終には絶間なく開場せる演劇なきに至りぬ。されど基督教劇興りしより劇場も亦やう／＼盛になり、今は何れの都會にも常に興行する劇場あるやうになりぬ。

蓋希臘時代の劇場は石もて築きたるものなりしが、天井といふものなく、俳優は青空の下に在りて劇を演ぜしなり。うの見物場所は馬の蹄形の如く、且やう／＼高くなり居りて、うの蹄の開ける眞正面にあたりて舞臺あり。舞臺の下の方には「オルケステル」と稱ふるものあり。劇題中の主人公又は

陪賓などいふべき役をつとむるものは高き舞臺にありて、大勢の役をつとむるものはみなこの低き「オルケステル」にありしなり。「オルケステル」にて劇を演ずるものを「コオル」といふ。(希臘にてはよく國王の事など任組みしものにて、國王后などは上段にあり、百姓などの「コオル」は下段に居りしなり)當時は全都府の民惣見物に出掛くる如き勢なりければ、劇場もまた隨て大仕掛ならざることを得ず。また俳優も高き足駄を穿ち、その體軀を肥大に見せしめんが爲めには、いと厚き衣を纏ひ、顔の容子を遠方より見せんが爲めには、大いなる面を被ぶりたりき。れもふに今の我邦の神樂の如き體裁なりけむ。されば當時の俳優は到底顔色もて不言の中にその情を悟らしむるやうなる技藝は出来ざりしなり。是を太古の劇場の有様とす。

降りて中ごろに至りて一旦衰へ果てたる劇のまたやうく盛ならんとせしをりの舞臺の模様を語らん。シエクスピイアが作りし「ハムレット」の曲中なる男女の石垣を隔てゝもの言ひ換す所には、石垣をつとむる人さへあり。これ等は極端の咄なめれど、またほゞ當時の状況を推知するに足らむ。さて此時の劇場はやゝ今の歐洲の劇場に似たるものなりき。然れども舞臺に奥と表との別あり。一間の様子など見せんとするときにても、奥の舞臺はうのまゝに明け放ちてありしなり。今より考ふれば斯てはいかにも氣障りならんと思はるれど、當時の人はこれを怪まざりき。道具建などは猶不足のものにて、此處は宮殿の中とか、此處は何れの山中とか、一々札に書きつけて幕毎に樹て、見物人はこれを觀てその場所を想像せではならざりき。當時の見物人は甚だ氣樂なるものにて、寢轉びて觀るものあり。觀ながらに飲食するものあり。その不體裁は今の日本の劇場にさも似たる有様なりしならむ。見物人より舞臺の役者に詞をかけ、役者はそれを受けて白を換へたる話などもあ

り。その不規律は今の日本の寄席ぐらゐなりけむ。さても當時の舞臺は斯ばかり不完全のものなりきといへど、却りてまた一種の利益ありき。之を奈何にといふに、前に云へるが如き龜末なる道具建なるがため、役者は自分の技藝のみにて人の歡を買はざるべからず。見物人も亦よく耳を役者の白に傾け、よく目を役者の身振に注がでは戯曲の趣向わからず。雙方互に氣を付け合ひしなり。此有様なれば道具建の目を射ざるがため他に氣を散らすことなし。觀客まことに演劇を玩味せんとならば、此簡樸なる劇場かへりて便よかりけんとならば。以上を中世の演劇の有様とす。

今の歐洲の劇場は言ふまでもなく、大に發達したるものなり。見物人の居所は、日本芝居の土間といふべき所を「バルケット」と稱へ、椅子を列ねたり。また日本芝居の棧敷にあたる所を五段に作りたるを「ロオジュ」と名く。最も低き所は第一等にして、それより五等まで段々に高く作りたり。「ロオジュ」の中にて欄なども麗く飾りて貴人など居らすべき所を「バルコン」といふ。「バルコン」の中にて我芝居の向正面にあたる所は外國人席と稱へて、却りて人に喜ばる。我向正面はあまりに引きこみたるゆゑ、舞臺を距ること遠く所謂豊棧敷の名に負かねど、彼芝居の外國人席は突きいでたるに由り、善く見えもし聞えもす。されば日本にて豊棧敷に入るが如き卑き客は、歐洲にては皆四五等にゆくなり。

「ロオジュ」には、一間毎に戸を設け、後の廊下より入る。その廊下の落合ふ處に、いと廣やかなる散歩所あり。「フォエエ」といふ。幕の間には上流の觀客此處に出で隊を組みて散歩す。相識の人の寒暖を叙るも此處なり。またこの「フォエエ」の處々に「ビュフェエ」に入る戸口あり。「ビュフェエ」は飲食する所にて、冷食、麥酒、葡萄酒、氷菓等あり。彼國にては大抵「ビュフェエ」の外にて飲

食せざるを常とす。唯ドレステンにては「バルケット」へも氷菓賣りに來ることあり。此處にて食ふときは、後に皿を椅子の下へなげこみかくことなり。

彼國の芝居の舞臺には我邦に所謂花道なし、俳優の出入する所は唯左右の兩道あるのみ。幕は上へ捲き揚ぐる仕掛にして、拍子木の代には號鈴を鳴らす。鈴響と共に幕をば引揚ぐるなり。

舞臺の真中に、我國の歩挽車の母衣を後より見たらんやうなるものあり。うの中には我芝居の黒坊の役を勤むるものあり。うを「スフリヨオル」といふ。即ち俳優の白を忘れたるとき、脚本を見て傍より教ふる人なり。

舞臺の道具建は多く幕と同一仰塵より吊下げたり。故に樂屋の高處に登りて見れば、或は岩、或は木立、或は宮殿の柱など、さまざまの書割を捲上げたる見ゆ。さて卓子腰懸などをばすべて幕の間に置き換ふるなり。幕あひの時間を奪ふは唯是のみ。されど幕落つると直に道具方十人餘むらゝと出で來りて、之を置換ふることゆゑ、瞬く間に整ふべし。もと彼國の劇は大抵五幕にて、うの間唯一二度長き幕間あり。長き幕間には各々席を立ち或は「ソオエ」にゆきて散歩し、或は「ビユフェ」に入りて飲食すといへども、あだし幕の間はほとゝ／＼席を離るゝ暇なきばかり早し。道具代ふる様をよく看んと思はゞ、ミュンヘンの「レジデンツ」座といへる小劇場に入りて見るべし。この劇場にては始終幕を下す事なく、客のまのあたりには道具建を取換ふ。

舞臺と「バルケット」との間にはひとさだ低き處あり。これ「オルケステル」なり。古へ希臘の世に「コオル」のゐたる場所とりの名を均うせり。されどいまの鐵柵ゆひまはしたる「オルケステル」は俳優の戲を演ずる處にあらず、音樂を奏するものゝ坐するところなり。さまざまの樂器を携へたるもの

ども、これの／＼樂譜を載せたる見臺を前に据ゑてなみぬ、うの中央の極めて高き見臺の前には禮服着たる樂長立ちて、杖を振り、指揮をなす。之を今の歐洲劇場の有様とす。

西洋芝居の番附

西洋芝居の番附は、おほよそ半紙を豎にひろげたる如き一枚摺にて、大抵一面にのみ印刷したれど、記事多きときは裏にわたることあり。

はじめに某の地、某の座と書し、年月日何曜日と注す。その次に常の價の興行なるか、又は事故ありて價を上下したるかことわる習なり。その次に太き文字にて劇の題をあらはし、作者の名、劇の種類幕數を記す。作者は古人にても、現存せる人にてても、書きざまにかはりなし。劇の種類とは正劇なるか、樂劇なるか、正劇ならば嬉劇なるか悲劇なるか、樂劇ならばうの大小などをいふ。我國にては正劇と樂劇と明に分れ居らねど、所謂時代物のうちにて樂に待つことねほきは、人の感情を主にして書けるものにて、自ら樂劇即ち情の芝居に近し。これを早稲田派にて夢幻劇と稱ふ。又我世話物のうちにて樂に縁遠きは、人の性質を主にして書けるもの多く、自ら正劇即ち性の芝居に近し。洋學者の「ドラマ」といふものは是なり。樂劇にては作者の次に、節づけしたる人別なるとき、其名を記す。幕數は五幕ぐらゐを常とすれど、これより多きことあり、又少きことあり。一幕物はいくつか集めて一度に興行し、又他の幕かず多きものに添へて、一度の興行に充つ。作者及節づけしたる人の名、劇の種類幕數の次には、安排者の名を記す。即ち狂言方のごときものなり。これよりは番附の中腹にて、役名を擧ぐ。役名の順序は、我國にては俳優の順序に従ひ、上に役々を

注するゆゑ、一度の興行に劇の數二つ三つ重りたるるとき、俳優一人の勤むる種々の劇の中なる役々を列べ擧ぐるなど、劇のかたを客位におくことあれど、西洋の番附にては、必ず劇中の人物を並べ擧げて、その下にこれを勤むる俳優の名を注し、俳優を客位にねきたり。一度に興行する劇の數二つ以上となるときは、曲ごとに役名を分ちしるせり。扱俳優の名は所謂藝名といふものなきゆゑ、直にまことの氏名を書し、又は氏のみを書して某君と云ふ。女役者は氏名のみ書きたる番附にては處女なるか人のつまなるか知れねど、尊稱を書きたる番附にては此別あきらかなり。役名中の特書すべきものは、或は大活字にて植ゑ、或は別にこれを欄外に掲ぐ。例之ば他處より來たる俳優のこれを勤むるときなど、必ず特書の例に従ふ。某の地某座よりの客と云ひ、客某の初役若くは名殘の役と云ふ是なり。

一座の俳優は番附の上にて高下巧拙を表することなし。記載の順序の曲中人物の順序に従ふことは上に言へり。又俳優の高下によりて文字の大小を異にすることなし。是も彼我の習の同からぬ處なり。

市人百姓など大人數出づるものは、必ずしも俳優の名を註せず。獸また怪ものなどを勤むるものも、亦名を掲ぐることをなし。

樂劇にては役名中別に曲中に挿みたる歌舞を擧げ、おの／＼これを勤むる俳優の名を註することあり。また衣裳に注意すべきものあるときは、衣裳方の名を書す。

新なる劇、りの他世人のねほく知らざる曲にては、役名の後に國はいづくにて、時はいつなりなど記すことあり。

次に幕あひの永きものをしるす。即ち十分若くは十五分の幕あひを知らせ、看客に遊歩場に出で、飲食所に入る便を得しむるなり。次に一座の俳優にして、りの日の興行に關げたるものを擧ぐ。某は休暇、某は病氣と云ふが如し。

樂劇にてはこの次に正本の賣渡場と其價とをしるす。例之ば正本は帳場にあり價若干といふ如し。正劇の正本は大抵りの作者の著述を書肆にて賣るのみにて、縦令別に舞臺本を作るも、これを劇場にもち出して賣ることなし。樂劇の正本即ち文句は、毎冊ねほより我十五錢内外なり。樂譜は劇場にては賣らず。西洋にては劇場にて賣る筋書をし。

次に場處の價をしるす。價は大中小の劇場の／＼同からず。大劇場にては樂劇貴く、正劇賤し。中小劇場にては正劇樂劇價を同うするを常とす。西洋芝居の土間棧敷等の我國と趣を殊にせるところに就きては、別に書きたるものあればこゝには載せず。左に一例としてミュンヘン府の劇場にての一人席の價を擧ぐ。我國の圓を單位として、「マルク」をかりに三十錢に算したるものなり。表中價の上中下は興行ごとりの曲の種類によりて定む。

	大 劇 場			中 劇 場	小 劇 場
	上 の 價	中 の 價	下 の 價		
前土間椅子	一、五〇	一、二〇	〇、九〇	〇、九〇	〇、四五
前土間(板間)	一、二〇	〇、九〇	〇、六〇	〇、六〇	〇、三〇
正 面	一、八〇	一、五〇	一、二〇	一、二〇	〇、七五

ずと存するまでに候。雷に型のみならず、すべて劇にては、外形の鍛錬によりて、愁歎には愁歎の外形、濡事には濡事の外形整ひ、目の利かぬ人をば感服せしむるに足れども、深くこれを察すれば、實が入らざるため、眞の評者には卑まるゝやうなる事を嫌ひ申し候。譬へば某といふ役者は、某の愁歎場にて眞に涙を墮したり杯ひひて、手柄のやうにおもひ、褒むるは珍しからず候へども、かの愁歎の外形をなすに慣るゝときは、生理的に涙は出づるものにて、これ等はまた中々藝に實の入りたる證據にはならず候。かゝる外形の鍛錬を西洋にては「ルチチ」と申して嘲る事に候。この「ルチチ」を脱し得て、眞の藝に入る事にて、評に上るはこれより上の巧拙に候。されば藝評の着眼は外形以上でありて、先頃某俳優に答ふる書にあらはしおき候自憑の域内に入るべきものに候。勿論外形以上なりとて、評は外形に及ばずといふにはあらず候。自憑の巧拙は一轉して、役者の外形に映じ出し、この映じ出したるところに、評者は眼を注ぐ事に候。餘は又折を得て申入るべく候。匆々。

劇品劇評

説邪卷四十四に、潘之恒が秦淮劇品と劇評との二篇を収めたり。

劇品にては、おのれ少かりしときは技を觀、壯なるに及びては音を審にし、數十年にして神もて遇ふに至りぬとて、善く觀るものゝ鮮きを歎じたり。扱神の詣るところ二途ありとて、摹古と寫生とを擧げ、摹古を以てするものは志を遠うし、寫生を以てするものは情に近づき、遠きを知れば、下りて近きに之き、近きを知れば、溯りて遠きに之くと云ふ。篇中諸俳優の評十餘條を載す。劇評は度、思、歩、呼、歎の五條に分れたり。度の條にいはいはく。才、慧、致ありて、未だ度を盡さ

ざるものありと。思の條にいはいはく。西施の心を捧ぐるは思にして病に非ずと。歩の條にいはいはく。歩の妙なるは、進むとき翔鴻の如く、轉ずるとき翻燕の如く、止まるとき立鵠の如しと。呼の條にいはいはく。呼は思に發ると。歎の條にいはいはく。歎は自然に近きを取ると。一々俳優に就いてこれを評せり。俳優の最工なるは仙度といふ人なりとぞ。

二者の他、説邪卷百段安節樂府雜錄に俳優の條あれども二三の俳優の逸事を傳ふるに過ぎず。

答評劇者某論夢幻劇書

承示す。近ごろ我國の文學社會に劇を言ふもの多く、ねほより新聞雜誌にして、平生説くところ稍々文學に涉るものは、一としてうの嚮背を明にせざるなし。獨り我等のこれに及ばざるは怪むべし。我等は果して此問題を措いて顧みざらんとするか云々。嗚呼、君が言過てり。世間眞に新しき劇論ありて出でたらんには、我等何ぞこれを不問に置かん。我が不明なる、未だ今の文學社會に新劇論あるを見ざるなり。君が書には反復して早稻田派の劇論を評せらる。想ふに君は逍遙子新なる劇論をなしたりと以爲はるゝならん。抑々逍遙子は何をか云ひし。之を早稻田文學に徵するに、逍遙子は古來の國劇に被らしむるに夢幻劇の名を以てせり。其意古きは近松より新なるは古河に至るまでの劇を夢幻に似たりとなすなり。夢幻に似たりとは、現に似ずといふ義なるか。現とは何ぞ。夢とは何ぞ。幻とは何ぞ。我はこれを言ふに當りて、必ずしも心理上に此三者の別を細論することゝを要せず。現と夢との何物たるは、君も我も常に知るところなり。幻の何物たるをば、萩原廣道がさよしぐれにも、夢にあらず、現にあらずぬものをいふと釋したり。三者の別はこれに困りて定むるも

足りなん。空間と時間とは現を織り成す^{たて}経緯なり。地理は現なり。世變も亦現なり。童蒙に課するに地理歴史を以てするときは、東西兩半球を跋渉せしめずして、一幅の小地圖を覽せしめ、未生前の世變を閱歴せしめずして、一卷の小歴史を誦せしむ。小地圖の地理の現に似ざるは、空間を縮められばなり。小歴史の世變の現に似ざるは、時間を縮められばなり。君も夢に故人と語りしことあらん。而して今の夢みる間は、故人の既に實を易へたるを知らず。我も歐洲の景色の面影に立つことあり。而して現なる身は既に歸りて家郷にあり。何ぞ童蒙の歴史を讀めることの君が夢に似て、今の地圖を覽ることのわが幻に似たるや。然りと雖地理と歴史とは猶學問に屬す。學問は猶これを律するに自然の法則を以てすべきこと現世界現世變と異なることなし。故に學問は縱令能く空間時間を伸縮するも、苟くも其伸縮の尺度にして現に異なるときは、人以て背理となし、矛盾となす。藝術は然らず。彫刻は空間ありて時間なし。今の摸する所は一瞬間の形の外に出でざるなり。音樂は時間ありて空間なし。その鳴らず所は何の地をも占領せざるなり。若これを律するに自然の法則を以てするときは、背理のみ、矛盾のみ。今の現に似ること地圖歴史に比して、更に一步を進めたるものなり。而れども彫刻を視るものは、先づ無時間界に入りて後に其美を享け、音樂を聴くものは、先づ無空間界に入りて後に其美を享く。彫刻の無時間界に入るものは、純空間の法則を認めて、その有時間なる現の理に背けるを問はず、音樂の無空間界に入るものは、純時間の法則を認めて、その有空間なる現の理に背けるを問はず。是れ藝術には別に法則の先づ認められざるべからざるものありて存するなり。逍遙子の古來の國劇を名づけて夢幻劇となすは、固より單に空間時間の伸縮よりして言ふにあらず。君が之を思はずして、劇の忽にして宮殿、忽にして茅舍、忽にして紅顔、

忽にして白頭なるを非とすることを疑へるや宜なり。逍遙子の古來の國劇を名づけて夢幻劇となすは、固より單に自然の法に背けるよりして言ふにあらず。君が之を思はずして、劇の先づ *deaminate*、*realize* して、而して後に *reactualize* するを非とすることを疑へるや宜なり。然らば逍遙子の所謂夢幻劇とは果して何ぞ。劇中獨り空間時間の伸縮を見るのみならず、又自然の法則に反するもの、存在したるを見るのみならず、切にこれを言ふときは、劇中空間時間に束縛せられざる官能而上の威力ありて、人物の運命を左右するなり。神の保佑あり。佛の阿護あり。妖怪變化の障礙あり。又古英雄にして半は是れ人、半は是れ神なるが如きものあり。凡う此の如きもの、特に國劇に於て然りとすのみにあらず。ギョオテの「ファウスト」の此の如き、シエクスピイヤの夏の夜の夢の此の如き、逍遙子も亦以て夢を混じたるものとせり。我は尙進んで古希臘の劇、古印度の劇殆皆この範圍を出でずといはん。凡う此の如きもの、特に古劇に於て然りとすのみにあらず。「ファウスト」夏の夜の夢の今猶頻に興行せらるるは、いふも更なり。我は尙進んで今の歐羅巴の「オペラ」は殆皆この範圍を出でずといはん。古今東西の劇にして、逍遙子の所謂夢幻劇に屬するもの此の如く多し。この物果して世々の審美學者に等閑看過せられて、今逍遙子の洗禮を受け、こゝに夢幻劇の名を命ぜられたる乎。否。逍遙子が夢幻劇は西洋審美家の所謂情劇 *lyrische Dramatik* のみ。今の西洋の純劇又性劇 *dramatische oder Charakter-Dramatik* は個人の性質を以て骨髄とす。劇の人物の事を成すは自ら成せるなり。劇の人物の事を敗るは自ら敗りたるなり。情劇は然らず。劇の人物概ね自ら主とすること能はず。或は一時の吉凶悔吝のために左右せられ、官能而上の威力のために驅逐せらる。その狀柳の風に靡くに似たり。何の處にかまた個人の性質を認めん。今のこ

れを情劇と名づくるは何故ぞ。うの主とする所は情にあるを以てなり。夫れ音楽は情を畫く聲なり。藝術草昧の世、劇と樂と未だ明に分れず。而してうの劇は勢情劇たらざることを得ず。古希臘の劇の歌舞の群をして場に登らしめたるは、うの情劇なるがためなり。古來の國劇のちよほあり、出語あるも亦然り。藝術漸く進化し、劇と樂と明に分るときは、劇は純劇をなし、樂は「オペラ」をなす。今の西洋の純劇と「オペラ」と並び行はるゝが如き是なり。是に由りて觀れば、古來の國劇の情劇たるは、劇猶音樂の羈絆を脱せざるがためのみ、劇未だ純劇に進化せず、樂未だ「オペラ」に進化せざるがためのみ。君は夢幻劇を以て語も新に義も新なるものとなす。是れ逍遙子の文に熱せざるが故なり。逍遙子は造語を好み、parole piquante を喜べり。沒理想既に然り。夢幻劇何ぞ此に殊ならん。之を早稻田文學に徵するに、逍遙子は近時二三作劇者の手に成りたる國劇、則所謂活歴劇の専ら正史上の事實を使ひ、舞臺を以て考古博覽場となさんとするが如きを難じ、これを認めて殆ど非劇的傾向をなせるものとなしたり。是れ劇を以て現となさんとするもの。是れ自然の法則を以て藝術を律せんとするもの。是れ君と我とが既に久くうの非を鳴したるところに非ずや。之を早稻田文學に徵するに、逍遙子は未來の國劇のために改革案を提起せり。第一條。夢幻劇の叙事詩に傾けるは、淨瑠璃の本性の叙事詩なりしより伴隨せる弊なり。叙事詩の體と劇詩の體と、之を分別すべし云々。君は我が夢幻劇即情劇なるを説けるを聞きて、情劇の亦叙事詩に傾けるを怪むならん。然れども是れ當然の事なり。古希臘劇の沿革を考ふるに、初め情劇には言語多行爲少かりき。歌舞の群一隅に列りて、殆ど叙情的符響たるに止まりし時はなり。後劇中の行爲漸く繁くなりぬ。歌舞の群の主人公と共に進退動作すること次第に甚しくなりたる時はなり。情劇の行爲ある

を免れざること此の如し。うの行爲の敘事的行爲 epische Handlung たるは、うの言語の叙情的言語たるが如し。是れうの個人の性質より出づるものにあらずして、純劇的行爲たること能はざるを以てなり。劇と樂と能く明に分るときは、劇は純劇となるべし。而して叙事的行爲を斥くるは、純劇必備の資格なり。第二條。劇をして旨の一致を具へしむべし。第三條。性質を諸作業の主因たらしむべし。並に是れ純劇必備の資格なること第一條に同じ。此改革案は逍遙子自ら認めて平凡の意見となす。善いかな言や。試に近時の審美學上の書を開いて、純劇の條を検せば、誰かうの必備の資格中にこの三條あるを見ざらん。凡う以上學ぐるところ、曰古來の國劇の情劇たること、曰近時の活歴劇の非劇的傾向あること、曰未來の國劇は純劇たらんを欲すること、是等逍遙子が叫び醒すを須ちて僅に知るべきものならんや。今や文學社會頗る荒涼を覺ゆる時なり。我は一逍遙子に苛求して、うの言の新ならざるを責めず。我は唯君の有識なる、猶世間多少の心盲者と俱に、逍遙子が造語のめづらしきに驚き、逍遙子が立論の陳腐なるを忘るゝを見て、うの何に由りて然るかを知るに苦む。抑君は劇を評することを好むものなり。うの今の國劇を評するや、概ね情劇を揚げて、活歴劇を抑ふ。而して其言間々歴史上の故實に及べり。是に於いてや逍遙子は劇を論ずる次、君等を嘲りて劇界外道となしたり。うの意謂へらく。夢幻劇には故實なし。君等これに責むるに故實を以てす。其非一なり。夢幻劇を稱揚するものは、未來の純劇の發達を妨ぐ。其非二なり。嗚呼。君愛ふること勿れ。是れ逍遙子が徒に君等に被らしむるに無實の惡名を以てしたるもののみ。情劇に故實なしとは擅斷なり。情劇中已に歴史上の人物を描き、風俗上の言動を寫すものあるときは、其打扮科白何ぞ曾て改めて故實に従はしむべからざらん。譬へば今の團十郎が菅丞相、菊萱、

小野道風の姿を改めたるが如し。演劇史上岩藤、定九郎の扮装尾上松緑、初代仲藏によりて變化せしも亦これに類す。君等純劇の發達を妨ぐとは誣言なり。君等は情劇と活歴劇との外、別に劇なき時に遭遇せるがゆゑに、單に情劇を稱揚す。若し純劇の樂を離れて生じ、情劇の樂に即きて立つことあらば、君等は純劇を稱揚すること、決して情劇の下にあらざるべし。逍遙子の君等に被らしめたる悪名は、今の無實なること此の如し。我をして君が地位に立たしめんには、逍遙子に獻するに彼劇界外道に譲らざる尊稱を以てせんも、恐らくはまた難からざるべし。書は意を盡さず。疑あらば重ねて質されよ。不宣。

演藝協會の事につきて忍月居士に告ぐ

忍月居士足下に白す。足下が國會紙上にて、我會のために大に計畫する所ありしは、僕が全會に代りて深く謝するところなり。僕は此謝辭を陳ぶるに當りて、特に會の委任を受けたるにあらざれども、まさか上野山頭、鳳輩到らず、戸々の提燈、火を點せずして止むほどの不都合はなかるべしと自信し、爰に自ら代表者となりて現れいでしなり。俳優學校の興すべき道理を賞を懸けて戯曲を募るべき方法とは、我會の夙に心付きたる事どもなれども、時勢と資力とに制せられて、今までこれを實際に行ふに至らざりしなり。然れども今や當世二大家の脚本新に成りて、會廳の案頭に在り。現代の名優をしてこれを演ぜしむる日は、應に遠きにあらざるべし。足下其れ少しく忍んでこれを待て。

若夫れ俳優學校の教授法に至りては、我會に於ても調査既に其緒に就いたるが、其見る所は大に足

下と殊なり。足下は曰く。演藝協會は須く新俳優を教育すべき途を立つべし。新俳優にして、若し藝道の外に美學、詩學、修辭學の通論、戯曲の性質、劇の主意等を知ることを得ば、彼等の眼中只美ありて、團十郎も新藏も區別せらるることなかるべし云々。是れ足下が望んで止まざる理想俳優の模型なるべし。嗚呼、何ぞ足下の美術の性質品類に通せざることの甚きや。

藝術には羈絆術と自由術との別あり。羈絆術は美外の目的を逐ふものにして、建築の如く、園藝の如く、尋常交際の舞踏の如きもの皆之に屬す。自由術は美を以て唯一の目的とするものにて、其品類皆是一點には歸着すれども、其各殊の間に猶天淵の懸隔あり。我劇の藝術たるや、純に是れ官能術にして、彼詩の如き空想術とは儼然たる反對の位置に立てり。

我國にして若し俳優學校を設くる時あらば、其教科に我邦及び外國の戯曲演劇史などをこゝろ聞かせもすべけれ。其他科のおもなる者は言語上の教育と舉動上の教育とを以て之に充て、泰西の方法を以て我邦の事實に加へ、大に明治世界の官能術の新顯象を露呈せむのみ。劇の主意といふことは、足下の何等の意義にてこれを言はれしかを知らねど、戯曲の性質に至りては、狂言作者猶且自然に之を會得するのみを以て足れりとす。英國のシエクスピヤも我國の默阿彌翁も、品位の高下こゝろあれ、皆之を會得せしものなり、之を學びしものにあらざるなり。足下は獨りレッツンダあるを知りて、遂に戯曲の性質を學び又究めざるものは、曲をつくること能はずと思はれしならむ。是れ甚き妄想なり。戯曲性質の教授、既に狂言作者のために、どこまでも必要なるにあらず、豈又之を俳優の「エレエツ」に教ふることを要せむや。

修辭學に通論各論の別あることは、何人の組立に據られしか知らず。縱令これありとするも、戯曲

中の人物の言語、即ち白を組立つるときには大に要あるべく、此科は少しく狂言作者を助くることあるべしと雖、俳優のためには別に効能あらむこと覺束なし。例へば料理法の如し。戯曲といふ膳は既に成りて、これを看客といふ贅澤人に薦むる給仕の役の俳優は、其取次の體裁だに善くば、別に獻立を代ふるにも及ぶまじきものなり。固より俳優は言語と舉動にて、戯曲を旨く見する腕前、給仕などの覇紳的禮式に殊なれども、料理法の料理人にのみ必要なことはこの例に適當すべし。

詩學は詩人のためにだに必要なりとはいひ難し。詩人の詩學なくして大著述をなすことを得べきは、狭き區域にて狂言作者の戯曲の性質を教授せらるることなくして、能く曲を編むべきに同じ。況や俳優、詩學を教へられて何事をか做得む。

若夫れ美學は詩人、畫工、彫工、皆必ずしもこれが教授を受けずして可なり。唯之を教授せらるゝ眞の必要あるものは、美術を品評する役目を負ふもの、即ち足下等の如きものゝみ、而して之を研究する必要あるものは、唯其哲學家耶。俳優に向つて美學を説かむとす。嗚呼、足下の醉興是に至りて極まれりと謂ふべきなり。且我將來の俳優學校は、決して團十郎と新藏と軒輊せざる如き盲目世界を顯出すべからず。二者の美術上の品價、いよゝ益々明になるべきのみ。足下よ。請ふらくは刮目してこれを望め。(明治二十四年二月)

演藝協會の事につきて再び忍月居士に告ぐ

忍月居士足下に白す。演藝の隆替は既に足下の大に心を留むる所なりといへば、足下は其教育上の手段に至りても、亦必ずや見るところありて、我會のために將來の計を定めむとせられしならむ。

獨怪む、其言ふ所官能術と空想術とを混同したるものありて、官能術を學ぶべき俳優後生に空想術の科を教へむとするに至られしことを。是れ僕が足下のために聊藝術の類を論ぜし所以なり。僕豈辯を好まむや。僕豈足下の文を讀みて、これを美術の分類などの説明なりとなしむものならむや。

僕先に會の計畫を説いて曰く。俳優後生の教育には、主として言語上の事と、舉動上の事とあるべしと。足下は此言語上の事を以て、修辭學ならむとおもひ、僕が修辭學は俳優學校の授くべきところにあらずといひしを擧げて、自家撞着なりとし、又自陥りたりとす。何ぞ其れ然らむや。俳優の應に受くべき言語上の教育は、前賢の既に定めたるどころあり。

一に曰く。方言を去ること。

二に曰く。發音を正すこと。

三に曰く。「レチタチオン」。

四に曰く。「デクラマチオン」。

これを主なるものとす。所謂修辭學は未だ有らざること葉を列ぬる道を教へ、俳優の言語上の教育は已に有ること葉を口頭に上ぼす道を教ふ。僕は遠からずして、大に上の四種の言語上の教育につきて論ずるところあらむとするを以て、今こゝに詳説せず、(朗讀法につきての争)暫く「エミリヤ、ガロツチイ」の曲中、マリチルリイ公の口吻を學んで、唯忍べ Nur Gerind と呼ばむのみ。僕が所謂舉動上の教育に至りては、足下これを藝道といふ語中に含蓄せしめたりといふ。其細節に至りては、他日これを足下に敲くことあるべし。

足下は通論といふ語を用ひて、通論を教へむとは、疎に教へ、淺く教ふる義なりといふ。此用語を

謬らざると思はるゝは、極めて是れ通論にあらず。僕がこれを指摘したればとて、豈我が高くもあらぬ品位を下す虞あらんや。且僕は俳優に向ひて修辭學、美學及び詩學などを教ふることを、徹頭徹尾不要なりとするものにして、これを教ふること疎なればとて、又淺ければとて、これを是認するを屑とせざれば、足下が通論の語に關する分疏は遂に何の用をもなさざるなり。

修辭學の事は既にいへり。詩學と美學とに至りては、足下これを借りて、人に優美の性、高尚の品を授けむとす。而してその之を授けらるゝものは俳優なり。是れ恰も料理通を仕立てんとて、化學上の食物分析法を教へ、又は解剖上の舌根神經論を教ふる如し。足下の所謂愚論は、豈これに匹當すべき言葉にあらずや。

足下は又俳優のために戯曲の性質を講ぜしめむとす。僕が狂言作者も猶且之を知ること必要とせずといふに及んで、奇と云ひ愚と云へり。戯曲の性質論は、空想術上の問題なり。狂言作者は此問題に近き關係あるものなり。うれすら自然に會得したるところを以て足れりとして、復たこれを學ぶことを要せざるに、官能術を以て業とすべき俳優後生、豈之を聴く必要あらむや。此論法は極めて正なり。何ぞこれを奇といふべけんや。

狂言作者の戯曲の性質を教授せらるべき理を説くに至りては、則足下これを醫の醫學を教へらるべき理に同じとす。是れ足下が科學と藝術とを知らざるより出でし誤のみ。醫學は實際に應用する學問なり。故に學んで得べし。人の天稟などは、僅に第二位に於いて之に影響を及ぼすものなり。戯曲の著作は他の詩賦と共に製作的藝術なり。故にこれを善くするものは、一種の「シエニイ」ならざるべからず。詩人は生るとは、是の謂なり。醫學卒業者は必ず能く病を療すれども、戯曲の性質

を學びをはりしものは未だ必ずしも一曲を作ること能はず。之に反して毫も此の如き教授を受けざりしものと雖、苟も詩才あらば、必ず能く大戯曲家とならむ。後來若詩人學校といふもの起らば、戯曲性質の講説も、詩の一般の性質の講説と共に開かるゝか知れず。又此講説を聴くものゝ中より、大詩人出づるか知れず。然れども是大詩人は決して此講説を聴きたために大詩人たるにあらず。是に於いてや、必要と不必要との別は明ならむ。是論を以て愚なりとするものは、恐くは自ら其愚を曉らざるものならむ。足下其れつら／＼これを思へ。(明治廿四年二月)

はなむけ (歌舞伎新報)

手の振りかたはかく、足の踏みかたはかうと、定規づくめにするは老いたる理想家なり。芝居を小説のやうにれもひ、道具立にて叙事を補はむとするは今の自然派なり。わが歐羅巴にて見たるところは是の如くなりしのみ。彼も末なり、此も末なり。作者は唯心を鍛へ。役者は唯腕を磨け。歌舞伎新報が改良の門出に逢ひて、これを錢のこと葉とす。

癸巳の歳旦歌舞伎新報社主に與ふる書

新年奉賀候。歳暮に御話の歌舞伎新報初刊祝詞、あすは／＼とおもひ候中に、けふと相成、つひ書かず仕舞申候。實は其折祝詞の文に、ことしの巳年なるにちなみて、蛇の事を募るつもりなれば、洋學者らしく歐羅巴の故事をとの御注文を蒙り、最初は當惑仕り、年賀の文に題ありては不承知なり、と威張りし太宰春臺もよろしくといふ勢にて、ことわらむかとも存じ候ひしが、又思ひかへして見候へば、徐鑑が猫の故事を記憶したること、七十の上に出で、呂徽之が驢馬の故事を記憶

したること亦七十の上に出でたりといへば、こゝが一番博聞強記のうぬ惚鏡を取り出すべきところと奮發せし時も候ひき。先づ新年初刊の事なれば、蛇のめでたいところを考へむと、遠く希臘羅馬の昔に遡り、「アガトデモン」(善神)の蛇の事を始として、獲たるどころ三三事を下らず。次に歌舞伎新報の上なれば、技藝に縁ある蛇の事をと、かの「ロオドス」派の彫工が末代までの手本に残しおきたる「ラオコオン」の像を始として、こゝにても亦三三事と思ひ得て候ひき。併し斯様なものにては、猶縁遠からむとおもひて、西洋芝居の中の蛇をつかまへにかゝり、獨逸にてはシルレルの「フエドラ」の中、太子ヒポリットが車を驚かし、蚊の事、英吉利にてはシエクスピイアの「アントニイ、エンド、クレオパトラ」の中、女王の胸を咬む毒蛇の事などを始として、こゝにても亦三三事と思ひ出し、これならば宜しからむと、筆を嚼んで見たことも候ひき。固より小生が厚顔なる、亞細亞といふ雑誌の記者乃至國民新聞の或る投書家などに、博識を衒ふぐらゐの難を申さるゝをば、何とおもひ候はねば、これが書けざりしは、全くつひ伸びくになりしために候。小生が歌舞伎新報の全盛を願ふは、申すまでもなきことにて、今になりてことさらめく遊口上は遊ぐるに飾はいらぬ (seek no colour for your going) といふナイルの蛇のクレオパトラが言葉に對して申されぬ筈なれば、まづこのとほり有體の白狀、貴覽に入れ申候。巳年の一月一日、箱根ゆもにて。

讀罪過論

忍月居士云。鴈外漁史は結果のみを寫して原因を寫さざる戯曲を稱して猶良好なるものと謂ふ耶。

鴈外漁史云。否。

居士又云。漁史は原因に注目するものを稱して猶偏聽の諂を免れざるものとなす乎。所謂原因を何ぞといふに戯曲若くは小説中に出でたる人物の行爲の結果に對する原因なりといへり。

漁史云。否。

漁史は答へ畢りて居士に請ふ。他の兩個の猶字を削去らむことを。奈何といふに漁史は未だ嘗て居士が問中の意見を懐きしことをなければなり。又かゝる問に逢ひて然りと答へしこともあらざればなり。

居士云。鴈外、山口二學士が小説に罪過説を應用すべからずといふは、横から見るも縦から見るも、解すべからざる謬見といはざることを得ず。奈何といふに二學士は行爲なき人物なき小説を作れと云ふものなればなり。否ずば二氏は木偶泥塑を以て完全なる小説を作れと命ずるものと一般なり。吾人は二氏が難きを人に責ることの酷なるに驚く。

漁史は將に云はむとす。漁史も山口學士も行爲なき小説、人物なき小説を作れと云ふものにあらずと。又將に云はむとす。漁史も學士も木偶泥人を以て完全なる小説を作れと命ずるものと一般ならずと。奈何といふに漁史と山口學士とはアリストテレスの罪過説の決して近比世の批評家のなしに如く、小説に應用すべきものにあらざることを證し得ればなり。

漁史は居士に請ふ、居士の平心夷氣にてアリストテレスの所謂罪過と自家の所謂罪過とを比較して其同異を考へられんことを。

試に問はむ、忍月居士の所謂罪過とは何物ぞと。

居士の罪過といへるは動力なり原因なりとの事なり。其言に云く。罪過とは悲哀戯曲中の人物を悲惨の境界に淪落せしむる動力(原因)なりと。

居士の罪過といへるは又伏線なりとの事なり。其言に云く。罪過は即ち結果に對する原因を謂ふなり。末路に對する伏線を言ふなりと。

居士の罪過といへるは又狹義の衝突なりとの事なり。其言に云く。希臘に於いては悲哀戯曲のみを貴重し、「トラギョデイ」といへば、あらゆる戯曲の別名の如くなりたりて、悲哀戯曲外に戯曲なしと思惟する傾向ありたり。故にアリステレエスが戯曲論を立つるも、専ら悲哀戯曲に就いていへるなり。近世の詩學家は罪過の語の代に衝突の語を用ゐる。罪過も衝突も行為結果の動力を意味するに至りては同一なり。只意義に廣狹の差あるのみ。されば罪過説を排斥するものは衝突説をも排斥するものなりと。

是に由りて觀れば、忍月居士の所謂罪過とは何ぞや。曰く動力なり原因なり伏線なり衝突なり。試に又問はむ、アリステレエスの所謂罪過とは何物ぞと。

漁史は希臘學者にあらず。アリステレエスが悲壯説は、彼希臘語に深きレツシングすら譯解して、畏懼の一語は元來曲中の主人公が後に慮りて懐くべきものなるを、觀者が懐くべきものなるやうに説いたりと、とかく論ずる人さへあるを、漁史豈敢て輕しくアリステレエスの肺腑をも覗ひたらむやうに説かむや。

且先輩の訓話によりてアリステレエスが罪過といへる語のこころを求めむに、人の世と乖ふ所以、人の命に悖る所以を指したり。悲壯曲中の人物は此「アマルチャ」に因りて、此罪過によりて

世と乖ひ命に悖りたる末、遂に滅ぶ。之を要するに是れ重を人性に置きたるものにて、其反對は重を境遇に置きたるものならむ。

重を人性に置きたる悲壯戯曲を人性戯曲といひ、重を境遇に置きたるを運命戯曲といふ。譬へばオイリピデスの妬婦メデアがおのれが子を殺すなどは人性重けれど、ソフォクレスのオレステスが父の仇なりとて母を殺すは境遇重し。河竹默阿彌の幡隨院長兵衛が俠氣のために殺害に逢へるは人性重けれど、紀海音の時姫が孝と戀との兩途に迷へるは境遇重し。

オレステスと時姫とはアリステレエスの罪過なけれど、彼等は悲壯の行為を現せり。然らば則悲壯戯曲の悲壯は必ずしもアリステレエスの罪過を須たざるなり。故に悲壯戯曲の悲壯にはアリステレエスの罪過にあらざる動力あり、アリステレエスの罪過にあらざる原因ありアリステレエスの罪過にあらざる伏線あるなり。

又今の詩學者の所謂衝突を以てアリステレエスの罪過に比ぶるときは、其差別豈特り範圍の廣狹にのみ存するものならむや。

衝突を以て「コンフリクト」の譯に充てしものとすれば、いかにも此語には廣狹二義あり。廣義の「コンフリクト」は人性より起りにたる葛藤をも、境遇より生じたりし紛擾をも統べたれど、狹義の「コンフリクト」は彼をのみ指して此を指さず。境遇より生じたりし紛擾をば、狹義の「コンフリクト」に反對して「コルリジオン」といへり。さればアリステレエスの罪過は狹義の衝突にありて、廣義の衝突には或は有り或は無し。

且舊に廣義の衝突のアリステレエスの罪過と相掩はざるのみならず、彼狹義の衝突と雖、またアリ

ストレエスの罪過の代に使はるべきものに非ず。

悲壯戯曲中の人物の罪過は、アリストテレエスが用語例によれば、其性より生じて、能く狭義の衝突を惹き起すものなれば、アリストテレエスの罪過と狭義の衝突との間には、早く已に因果の關係ありと見たり。故に罪過ありて後に衝突あり。罪過は即衝突にあらず。

是に由りて觀れば、悲壯戯曲中の動力は、未だ必ずしもアリストテレエスの罪過ならず。其原因も亦未だ必ずしもアリストテレエスの罪過ならず。伏線と云ひ、衝突と云ふも、亦復如是。

以上忍月居士の所謂罪過とアリストテレエスの所謂罪過と並べ擧げたるのみなれど、其相殊なることは分明ならむ。忍月居士の前に忍月居士の罪過説なし。敢て居士に請ふ、豫此意を了得せられむことを。

これよりは試に見む、居士の罪過といへるものと悲壯戯曲といかなる關係あるかを。

「トラギョヂイ」の語漁史は悲壯戯曲と譯し、居士は悲哀戯曲と譯す。既に獨逸に「トラウエルスビイル」といひて、「トラウエル」は悲哀なれば、居士の譯必ずしも間然すべからず。而るに漁史の猶悲壯戯曲の譯を用ゐんとするものは、聊意を寓する所なきにあらず。

獨逸人は「トラギョヂイ」を「トラウエルスビイル」といへど、「トラギツク」を「トラウエル」とはせず。「トラウエル」は悲哀悲惨などと譯して便なれど、「トラギツク」は唯かなし、いたましといふ意にあらざるゆゑ、故らに悲壯の字を撰びて之を別たむとしたるは、漁史が微意なりけり。

人の天災に逢ひて死したるは悲し。「トラウリヒ」なり。されど「トラアキシユ」にあらず。悲壯にあらず。レツシングが嘗て論ぜし「コメヂイ、ラルモアイヤント」は悲しけれど悲壯ならず。

此意によりて、僭越には似たれど、忍月居士の悲哀と云ひ悲惨といはるゝを悲壯と看做して、さて其罪過の定義を見むに、其文に罪過とは悲壯戯曲中の人物を悲壯の境界に淪落せしむる動力(原因)なりと云へれば、居士の罪過は人性境遇などに因りて起るべき悲壯の原因を總括したる新話なりと見ゆ。

試に又見む、居士の罪過といへるものと小説といかなる關係あるかを。

忍月居士云。苟も小説の名を下し得べき小説は、いかなるものと雖、悉く人物の意思と氣質とに出づる行爲及其結果より成立せざるはなし。人物の一枯一榮一窮一達は總て其行爲の結果なり。故に行爲は結果に對する原因となるなり。此原因は即廣意に於ける罪過と同一意義なりと。

漁史は小説の人事なるべきを知れど、苟の悉く行爲なるべきを悟らず、詩學の所謂行爲なるべきを悟らず。世事に驅られ自然に促されながら絶て詩學上に所謂行爲を現はさざる主人公を出したるをも小説と認定することあり。譬へばツルゲニエフのルケリヤが癡臥して起たず、氣息奄々たる間に懐ける觀念も、おもしろき小説の材料たることを妨げざりきと思ふなり。されどルケリヤはいかなる神筆を情ひ來たらむも、戯曲に作るべうもあらず。行爲は必ず戯曲に要あれど、必ずしも小説に要なきものなればならむ。是れ漁史が意見なり。

漁史が心果して忍月居士の心腹を推知すべくんば、居士が所謂小説の行爲は人事ならむ。人事の果には必ず因あれば、居士は此因をこそ廣義の罪過といふならむ。然らば則て所謂廣義の罪過は、人事の果に對する因なれば、苟かぬ種の生えざる以上は、人事に無因の果なし。小説中の人事の果にも、因は必ずあらむ。忍月居士の廣義に於ける罪過とは、此因を指したる新話ならむ。

以上忍月居士の所謂罪過乃至廣義に於ける罪過の、一面悲壯戯曲に對し、一面小説に對する關係を明にしたりと思へば、これよりはアリストトレエスの罪過といふものと小説との關係をいひ試みむ。敢て居士に請ふ、興盡きずば聽かれむことを。

漁史は嘗て見き、世の批評家が一小説を評して、其人事にアリストトレエスの罪過なきゆゑ、以て小説となすに足らずといひしを。

上にも云へりし如く、小説にはその本質上悲壯なるものあり、又悲壯ならざるものあり。アリストトレエスの罪過は、人性より悲壯生ずるをりのみあるものなり。故に小説にはアリストトレエスの罪過なきもあり。アリストトレエスの罪過なきがゆゑに小説を失體なりとはいふべからず。

さるをアリストトレエスの罪過なき故、某の小説は其體を失ひたりといふ人あらば、是れ謬見にあらずや。かくアリストトレエスの罪過説を小説に應用したるは分明に杓子定規なり。それを杓子定規なりといへりきとて、木偶泥人をもて小説の人物となせといひしと一般ならむや。悲壯なる事なき人物は、小説の主人公にも、其外の小説中の人物にも、亦實際の人物にもいと多かれど、木偶にもあらず泥人にもあざればなり。

漁史は忍月居士と相識りたり、又山口學士と相識りたり。故に山口學士に代りて忍月居士に謝す、山口學士が彼アリストトレエスの罪過説をかく小説に應用したりし批評家を忍月居士と錯認せしめぬ。山口學士の罪過は重かるべけれど、是れ或は彼がアリストトレエスの所謂罪過を知りて、忍月居士の所謂罪過を知らざりしなるべけれど、必ずしも深く咎むべきにあらざるべし。忍月居士の所謂罪過も、これを發表するには主人公其人と客觀的の氣運との争を寫すといひへば、

多少アリストトレエスがいふ罪過とも關係あるに似たれど、動力なり原因なり伏線なり衝突なりといふに至りては、則アリストトレエスの曾て言はざりし所なり。

宜なり、居士が引きし證例の廣大無邊なること。試にこれを挙げむか。第一ワルレンスタイン(シルレル)、第二マクベス(シエクスピイヤ)、第三松王丸、第四小三、第五織田信長、第六新田義貞、第七源義經、第八耶穌基督、第九孔丘、第十孟軻、第十一足利尊氏、第十二楠正成、第十三エミリヤ、ガロツチイ(レツシング)、第十四妹背鏡、第十五細君、第十六蝴蝶、第十七色懺悔、第十八舞姫猶ありしなるべけれど、さのみはとて省きつ。

漁史は初より知りたり、天地の間に因なき果なく、倒れたるは石に蹉きしためにて、睡りたるは酔ひにしためなるを。居士の所謂廣義の罪過は即是れ詩境と實境とを問はず、人事の果に對する因なりといへば、漁史不憫と雖、かゝる證例を求めば、幾千萬恒河沙數に至らむも難からじ。

されどアリストトレエスの所謂罪過に至りては、之を上十八例に求めむに、或は獲べく、或は獲べからず。試にゴツトシヤル等が爲す所に倣ひ、罪過を求めてマクベス、オセルロに及び、悉く人性の勝ちたる悲壯戯曲を「アマルチャ」所在の範圍に網羅せむか。彼十八例中には猶境遇の勝ちたるものいと多きを奈何せむ。

ワルレンスタイン、マクベスは兎まれ角まれ、又基督に罪過なしとは誰がいひしか知らねど、グラツペは早く眼を基督の詩學上罪過に注ぎて、悲壯戯曲を作らむとしぬればこれも善し。されど彼十八例中には、悲壯ならざるもの、いかに捏ねまはしても悲壯とはなりがたきもの少からず。已に悲壯ならざれば、アリストトレエスの罪過を何處にか着け去らむ。

悲壯に於いては人物が人世の鎖鑰をふり截て、所謂滅亡(ウンテルガンク)に就くものなれば、尊氏が征夷大將軍となるなどには、悲壯の分子微塵ほどもなし。さればゴットシャルの徒の所謂罪過だになし。況やアリステレエスの所謂罪過をや。細君はいかにも悲哀なり、悲惨なり。されど必ずしも悲壯なる處は見えず。強ひてこれを求むれば境遇の勝ちたるアリステレエスの罪過なき悲壯をや見るべからむ。餘は必ずしも言はず。

鴈外漁史は忍月居士の前に稽首して、さらに詳に教へられむことを請ふ。

文學上の創造權

我國にては文學上創造權の事猶世上の注意を惹くこと充分ならず。殊に戯曲に就てはこれを忽にするに似たり。されば余は曩に東漸雜誌にて少しく此事を論せしこともありしが、此頃都新聞社より配達し來れる奈智瀧祈誓文覺を見て、その不思議なる筋書なるに驚き、愈文學上の創造權の毀損せらるゝこと多きを思ふ。余は未だ此本を細閱して、これを依田川尻合作の文覺上人勸進帳に比べ見ずと雖、劇の行爲の中心ともいふべき白河御所の勸文明讀、場割より全體の組織、所々の眼目たる文言まで、剽窃の痕實に枚擧するに遑あらず、否、悉く剽窃なり。ざるを某作と立派に打ちたる銘。嗚呼、何ぞ其れ忌憚なきこと甚きや。既に東漸雜誌にてもいへる如く、今までの日本劇場にては、作者は安排者 *Metastasi* と別なきゆゑ、此を認めて彼としたりき。彼近板竹田の曲の如く、創造權の最早消滅しても差支なきものを取りて、これを安排せば、その安排者の作者顔せんも善かるべけれど、現存せる依田川尻の二氏に對して、是の如き所業あるは何事ぞ。試に奈智瀧の中

に就いて、平家追討狀の處のみを擧げて、これを原作に比べ見む。原作。君に直ならざる人は民をして憂をなさしむ。改作。君子に直ならざる人は民をして憂をなさしむ。原作。既に神佛の怨敵たり、又王法の朝敵たり。改作。すでに佛神のおん敵たり。(下闕)此中にて、上に既に云々として、下に又云々といへるを、又云々の句を削りて、既に云々の句を存じたるなどは殊に可笑し。改作者が杜撰おほむね是の如し。姑く記して世人の注意を促すといふ。

並木五瓶の事を記す (以下三木竹二編)

寛永二年中村勘三郎が中橋にて歌舞伎狂言を始めしより二百數十年の間に輩出せる江戸狂言作者にて、其名最も世に聞ゆしもの、前には津打英子、堀越榮陽、金井三笑、櫻田左交あり。後には鶴屋南北、瀬川如臯あり。雄篇傑作一時を動かししもの抄からねど、試に其臺帳を取りてこれを讀めば、文格體製未だ必ずしも熨貼せず、或は奇を釣り、幻を弄し、人情世態の真相を顧みず、唯場面の倏變して、人目を眩せんことを是れ勤め、或は一二優人の嗜好に投じ、意を迎へ、歡を充たし、戯曲傳奇の正體を察せず、片言隻句時人の一笑を博して、自ら足れりとしぬ。要するに遽に完美の名を下すべからざるに似たり。獨り並木五瓶は此間に立ち、儼薄に流れず、誇張に失せず、其作一として結構布置の宜きを失すること甚きに至れるなし。宜なり八文字含自笑が喚で名人と作ししこと。(役者大福帳)五瓶は初五兵衛といひ、又五平と署す。吾八といひし時もあり。辰岡萬作、並木正三の門に出づ。大坂道修町の産なるが、寛政六年十月都座の聘に應じ、宗十郎、菊之丞と共に來り、淺草高砂町に住せり。その頃並木といふ名に思ひ寄せて、淺草堂といふ。(紙屑籠、名人忌辰録)或は云

ふ。明和年中江戸に下り、彼廻り舞臺といふものを創作せりと。(作者小傳) われ未だ其孰れか是なるを知らずと雖、五瓶が其名を世に鳴らしは江戸に在りし時にて其得意の作は五大力なり。五大力は寛政七乙卯年春堺町の都傳内座にて興行せらる。當時の一番目の名題江戸砂子慶會我にて、二番目の名題役割は左の如し。

名題 五大力戀絨

役割

- 一出石宅右衛門 大谷 廣 次
- 一薩摩源五兵衛 澤村 宗十郎
- 一藝者廻し彌助 嵐 龍 藏
- 一升屋お此 中村のしほ
- 一笹野三五兵衛 片岡 仁左衛門
- 一小 萬 瀬川 菊之丞
- 一若黨八右衛門 坂東 三津五郎
- (歌舞伎年代記)

此狂言興行の日數七十を踰は、中途にて俳優の扮装をさへ更めにきと云へば、立川馬馬がりの歌舞伎年代記に特筆大書して、此狂言五人切、宗十郎大評判、近來の大入り大當りと云ひしも理なり。この喝采の餘波を頼みてか、同十年八月桐座薄雪物語の二番目野邊の書殘に五大力をさし替へて、九月廿九日より十月十一日迄、宗十郎、友右衛門兩人大坂登り名残り狂言として、再びこれを演せり。役割は舊の如し。唯三五兵衛を大谷友右衛門が扮せしのみ。このときも馬馬はいづれも評判よしと記せり。(蜘蛛の絲卷)

爾後江戸大坂にて興行せること數十回の多きに及び、中村梅玉(役者繁榮話)松本錦升(役者珠玉盡)より關哥山(役者名物合)市川白猿(役者早料理)等の名優、皆この劇に因りてその技を逞うせり。その

名題の一二を擧ぐれば、略三五大力といひ、街の紅摺といひ、御存じ五大力といふ。然れども畢竟少しく五大力の趣向を變へたるに過ぎず。又鶴屋南北は嘗て三賀莊曾我島臺と云ふ名題にて五大力と曾我と八百屋半兵衛とを捏合せり。最近きは明治九年十月源五兵衛中村宗十郎、三五兵衛中村芝翫、小萬岩井半四郎にて、猿若町中村座にて大當を博せし御註文薩摩上布なり。五瓶が作中、五大力に次いで喝采を得たるは、寛政十年午の春正月十五日より桐座に於て興行せし一番目着衣始小袖曾我の二番目富岡戀山開なり。役割は左の如し。

- 一出村新兵衛 澤村 宗十郎
- 一鶴飼九十郎 嵐 三 八
- 一玉屋手代三四郎 大谷 友右衛門
- 一玉屋娘おいん 瀬川 菊之丞
- 一玉屋新兵衛 市川 八百藏
- 一町がへ産 坂東 三津五郎
- 一毛の金太郎 瀬川 菊之丞
- 一三國小女郎

此狂言は五瓶が浪華の地より齋らしきものにて、訥升宗十郎、路考菊之丞、中車八百藏、三八の四優に適せしが故に妙なりしが、後にはこれに形似するもの少かりきと云ふ。路考をして藝妓と處女との二役に扮せしめしも、その狡猾の手段に出づ。後來時にこの二役を分ちて二優に演せしむるは、蓋し作者の意に違へるなり。このとき友右衛門は手代三四郎に扮し、娘お艶に吹矢の筒を授け、これを己れが耳に膺て、その嬌羞の語を聞かんとせしに、早く狡兒の詭計に陥り、矢を耳中に吹こまれ聾となりての仕打大評判なりきと云ふ。(役者大極丸) 爾後諸名優の演技を経て、最近きは明治十四年八月久松座にて演せし富岡戀山鐘にて、出村新兵衛市川九藏、小女郎尾上多賀之丞、玉屋新兵衛片岡我童等を主なる役割とす。

五瓶の聲名を江戸に博するや、遂に此地に永住せりと見ゆ、寛政より文化に至るまで、市村座立作者の地位に居り、その門陸六、祇助、新作、九一、五一の輩を出し、(役者花威草)文化五年二月二日六十二歳にして歿し、法號を彩嶽院英藻信士といふ。深川靈岸寺内正覺院に葬る。梅は咲く我は散行くきさらぎやは其辭世の句なりといふ。二世五瓶は元幕府旗下の士にて、通稱は篠田金治、初め並木宗六と號し、市村、都、中村三座にて立作者たり。文政二年五瓶の名を襲ぎしが、幾くもなくして七月七日歿し、善岳淨行信士といふ。(役者夢合、名人忌辰録)三世は江戸の人にて、二世の門に出づ。初め並木惣六といひ、後篠田金治と改め、河原崎座の立作者なりしが、天保四年の頃五瓶と改め、森田座に入り、(役者三世相)三升屋三三治の輩と脚本を合撰し、安政三年七月歿す。

五瓶が其作に五大力の名を附したるは、曲中の絃妓小萬が隣樓にて唱ふる五大力の歌を聞きて、りの三味線の胴皮に五大力の字を書し、情郎にその赤心を盟ふといふ一篇の骨子より取りたるなり。且小萬が後情郎の榮達を謀り、偽りて縁を絶ち、身を三五兵衛に委ぬるをり、筆を加へて三五大切と改め剩へ胴皮を破りてその心を勵すに至りては愈出て愈妙、眞個に作家たるに愧ぢざるもの歟。

蓋し五大力は當時世に行はれし上方唱の一曲にて、京のしらべ、松の聲などいふ冊子に出づ。其辭に云く。

一筆書りむるはなつかしさのまゝ、日々に思ひまいらせ候べくと、別れしより程はあらず候へ共、思寐にする獨寢の我は、こころもすみて目もあはず、たばこ戀草縁となる。去りし御げんにう

つりのみくらし候折からの、暑や寒やの起臥に、風などひかせ玉ふなよ。さゝを控へて身の用心、これ第一に頼み入る。よしなし草のよしやなしや。

なま中まみじもの思ふ。たとひせかれて程ふるとても 縁と時節の末を待つ。はてなんとせう。たがひの心のうち解けて、うはべは解ぬ五大力。さはさりながら更るいろなきおんふせい。やがてあほぢえ、かたろぢえ。惜しき筆留候かし。

或は云く。五瓶が此唄を活用して、なまなかまみえものおもふの上に、いつまで草のいつまでもと加へしは卓絶なりと。この獨吟のめりやすは、初め元祖芳澤伊三郎が勤め、後に坂田仙四郎(後に富久田源五)が唄ひしが、仙四郎の音吐の美は時人の聽を聳かし、より人口に膾炙して今に至れり。聞説く當時長唄に長じたる伊三郎が其名を源五郎に奪はれしは、これを惜むもの少からざりきと。

五大力の一曲節々妙に入らざるなしと雖、其最妙なるものを擧ぐれば、彼小萬の情郎源五兵衛は素と樸直の武夫なるに、佳人小萬が三五兵衛の聘を辭せんが爲に、權に情郎と喚びしより、終に冤累を帯びて職を廢められ、小萬は又その情義に感じ、方纔思を繋げるが如き、豈情を知ること深きにあらずや。又小萬が情郎の出身を謀らんが爲めに、詐りてうの情交を断たんと欲し、陽に罵り陰に泣くは、人の心腸を寸断すべき趣向なり。末齣に小萬が恨を含んで阿郎が白刃の下に命を隕し、斷臂は猶ほ郎が胸を握りて、掌中の尺書宛を雪ぎ誠を表するに至ては、雋拔の意匠、西歐の悲壯劇に酷肖せり。山東京傳が傾城葛城の奇節を寫し、は、豈亦此案を一翻したるか。(稻妻表紙)

按ずるに小萬源五兵衛の事蹟は、元文二巳年の殺人犯にて、源五兵衛の本名は早田八右衛門といふ薩藩の士なり。小萬は大坂北の新地樓風呂の抱へ娼妓菊野なり。當時共に殺されしは同所曾根崎三丁目大和屋十兵衛夫婦と婢二人となり。此材料を淨瑠璃に使ひしは、元祿十七申年正月竹本座にて操り狂言にせし源五兵衛小萬薩摩歌を始とす。作者は巢林子なり。其後寶曆七巳年九月冠子、小出雲、半二、松洛、景鯉の合作薩摩歌妓鑑は世に出でたり。(聲曲類纂)又これを劇に演せしは所謂國言詢音頭なり。人形遣の名人吉田文三郎が遣ひしより名高くなれり。かの初嵐元文嘶と云へる名題は後に脚色を改めたる時に附けたり。(實事譚)然れども機軸一新、大にうの面目を改めたりと見ゆるは蓋し五瓶の力なり。

享和二年馬琴の著せる五大力三書訓讀といへる三冊の合卷は、寛政の狂言より着想せるものなること序文に見ゆ。云く。禍福門なし、只客の招く所に通ひ來る、日本堤も唐天竺も、戀ゆるに躬をやつし事、古人訥子が名を止む、五人切粉のみせ煙草、さつま國府も、上州館も、のめやうたへや浮世は車、まはらぬ筆の長烟管、吸つけて出す格子先、洒落なんすなが身にしみくくと、口と中とはしら雪と、是墨附に十五張、ちと珍らしく老實にて綴りぬ。壬戌春端月、著作堂馬琴述。(六冊掛徳用草紙)又文化八年に山東京山は五大力中筆繼棹といふ三冊の合卷を著せり。(合卷目錄)尙ほ此他に鹽屋艶二の著せる狂言雜話五大力といふ粹書あり。源五兵衛を市人に作り替へたり。是等の書當時に並び行はれしは、五大力の評世に高かりし一證なり。

尙ほ附記すべき五瓶が逸事一條あり。寛政四年のことなりしが、澤村宗十郎が十五年振の歸坂御目見に、中の芝居にて入間詞大名堅氣といふ狂言を興行せり。宗十郎は大友宗麟の養子大友市正を

勤め、二幕目行列の場は宗十郎に一座の優遇にて、その家號紀國屋といふに基き、暗に紀侯の鹵薄を學び、座中表方及茶肆僮僕までを卒伍に雇ひ、油戟櫓弓の列は舞臺より花道に達せしが、只僮馬乘馬は慣用の紋羽張りにては體面を損ずとて、市廐より熱馬二匹を借りぬ。これを聞きて來り觀るもの堵の如く、初日より八日までには好評を博せしが、第九日に至り一馬遺矢し、一馬又これに倣ひ放溺せしより、滿場喧噪し、馬亦恐懼跳躍し、俳優は場を逃れ、觀客は鬨を争ひ、其擾亂は延いて隅大西に及びしかば、早くも町奉行所に聞か、西の奉行松平石見守の組與力同心馳來りて此紛擾を鎮め、傷者を扶掖し、劇部をして此顛末を記したる證書を上らしめたり。劇部は之が爲めに三日の遠慮休場をなして、再び初日を出したれど、今は活馬に懲りて、其後は小道具の馬のみ用おきとす。是一場の奇劇は全く作者五瓶の意匠に出でしが故に、當時の市民落首を作りて嘲りぬとす。(歌舞伎新報)

五大力を演ぜし翌年、即寛政八年に建てたる碑ありて、今尙淺草公園の内、觀音堂の後、左の方に倚りて萬盛庵といふ蕎麥店の前、老樹二株の間に立てり。碑の高さは五尺餘、上の方を撞木形に刻みたり。前面には

月光のたわみごころや雪の竹

並木舎五瓶

と題せり。右面には
なにはづの五瓶東武に來り、狂言を作り出して、あまねく貴賤の眼目を驚す。金龍の山中に雪月花の碑を築て、永き繁榮を仰ぐ。

つどくちん百三十里雪の人

五子堂大虎

とあり。左面には寛政八年丙辰十二月十日建之庭柏子書と記し、背面には篠田金二建造とあり。金二は上に擧げたる五瓶の門人にて、うの名を襲ぎしものなり。(明治廿二年十月)

梅玉の書簡及逸事

梅玉は大坂の名優三世中村歌右衛門の俳號なり。寛政享和より文政天保に至る間名聲三都を動し、或は末旦淨丑莫所不宜と云ひ、或は古今無類總藝頭と云ひ、うの一の谷嫩軍記にて扮したる熊谷、義經腰越狀にて扮したる五斗の如きは、後昆の爲め摸範を遺し、その九變化、十二變化の所作に至りては、演劇の本旨に乖ると雖、實にうの創意に出づ。其佗一世の當り狂言は枚擧に遑あらず。世人は梅玉を以て、前に古人なく、後に來者なしとまで稱揚すれど、うの少時の行狀に至りては、これを知るもの少し。近比梅玉の没後にうの遺墨を編輯せる梅玉餘響といへる冊子を見るに、うの病臥中に某に寄せんとして認めたる書簡一篇を載せたり。これを讀めばこの抱負の大なるを見るに足る。今これを抄し、註するに二三の逸事を以てす。

此節病中につくぐと存候に、當時芝居を初め候ても、砂もちにねどりつけられ、まづしばらくは御見物も御越しは有まじく、例のくだらぬ狂歌や發句もころねもしろからぬ所から、何も出ず。兼て御尋の有りし私をさな立よりの事れもひ出し、次第にしたため申上候。子どもの時分の事れもひ出せば、長いやうでも短く覺ゆる世の中とぞんじ候。

此書簡は何人に贈る心にて認めしか。うの未だ成らざるに終焉したれば、首尾辨へ難し。然れども行文流暢にして、一種の妙味あり。蓋し琢磨を要せずして自ら美なるもの歟。梅玉がこれを書せし

は病臥中の事なれば、ねほよ天保九戌年の初ならん。梅玉は天保八酉年中の座にて玉手綱といふ狂言に伊達新左衛門、番頭彦七の役を、物種太郎に鬼一法眼を、殘の鉢の木に佐野源左衛門を勤め、皆大出来なりしが、此頃より病を得て、翌九年五月に一度愈は、同六月角の座にて新洞左衛門、切に石切の梶原を勤めしを舞臺の名殘として、同七月廿五日六十一歳にて歿せり。高津の東正法寺の山内に葬り、法號を歌唄院宗讚日徳といふ。辭世は

南無さらば妙法蓮華きやうふかざり

といふ。此句は碑の右面に刻せり。一書にはうの辭世を

嗚呼名殘惜しやこの世のわかれ道

妙法蓮華きやうふの旅立

とせり。

初め梅玉の病一たび痊ゆるや、床中にて自ら作り、振を付けて人に教へなごせしはやり歌を摺物にして知人に配れり。うの標紙に題してのし達摩といふ。うの詞に曰く。

うもやうも、ささらぬ身にもうれしさに、手のまひあしのふしとをば、ねき上りましたねきました。無事をきにんにつげるとばかり。

蓋し本調子に節付せしなり。又文中砂もちにねどりつけられ云々は、當時の評判記にも記したればこゝに抄す。云く。頭取。切紅梅鞠の梶原やく。芝居好。これ迄度々のね勤、評するに及ばず。よい事は知れてあるが。此やうな梶原は此後見る事はならぬ。頭取。しかし此時は大坂中砂持が大はづみにて、芝居氣にならず。不入にて日數わづかにて殘念々々。又文中に例のくだらぬ狂歌や

發句とあるは梅玉が餘技なり。當初梅玉が始て江戸に入り、中村座に出勤し、名聲藉甚なりし時、自ら感奮する所ありて、文藝には心を寄せしなり。其當時の聲譽は馬琴が句殿實々記の序に就いて見るべし。曰く。前略。中村歌右衛門が猿牽のわざをさぶりすら、どひやうしの音に聞つゝ見來つ、堺町にて觀られしかば、猿よ狐よといひもてはやして、猫も釋氏もこれ觀ざらんは恥也とのしる程に、祇園守かけりむる水無月の炎暑はものかは、うち曇る日も日和のみ見て、よめ入姿の少女等もりの猿の羈に引れて、朝に三の塔をゆかしみ、暮てはかへさの四に驚く、朝三暮四のいなみならで、世わたる所業のはかなきうへには、亦有かいな、稀なるをや、さりとはく、面目なるべし。下略。其聲名かくの如くなれば、梅玉の技藝を愛づる餘縑帛、白扇等を寄せて、これに題せんことを求めるもの多し。梅玉は筆札拙く發句も自作はなきほどなれば、人を備ひて代作せしめ、僅に其需に應じぬ。一日梅玉を最負せる武士三階に來りて、色紙と扇とを出し、句を求む。梅玉固辭すれども聽かれず。乃ち筆を下し、が、俳句は格に入らず、字も亦陋極れり。武士又居合せし坂東彦三郎（三代目薪水後樂善と云ふ）に補作を乞ふ。彦三郎蚯蚓を畫き、側に御椽先みゝずのたぐる五月雨と題す。梅玉深く己の文なきを恥ぢ、是日より薪水、其他の師に就て書畫を習ひ、又發句を東西土卵に、狂歌を蜀山、鶴酒屋、六々大人等に受けたり。はじめて江戸に出勤のとき、きれひの御見物にいかなる事にか、顔をしたらゝかに疵付られしか

紫を顔にもらふや江戸の花

ねはつの役を勤むる時

ね使に草履片足や春の雨

吃の又平の役をつとむとて

名人の蹟をたづねについた吃

たゞたらぬ身のねゝねよびなき

傾城の賛

さくら花あれちりんすと禿より

さきに告げたる軒の風鈴

再勤して五斗兵衛の役をつとめしとき、去年引かねの的も違ひ、口上の口薬もしめり、ねらひのうれし耻辱ものと、どつさりはじめの火ぶたを切まくと端書して

打出したから鐵砲の玉でなし

響きばかりであたる事やら

さて私實父初代歌右衛門は元と加州の産にて、十七歳の時役者に相成り、江戸にいで申、歌右衛門とあらため、京都に出勤いたし、うれより三都にて人も知る役者に相成、後年水木東藏と申中芝居の役者に名前を譲り、かじや哥七とあらため勤居られし中、東藏少々心に叶ぬ儀有之、名前を取上げ、苗字丈附けさせ、中村東藏と申、是則二代目歌右衛門にて、これにて私は實子ながらも三代目にあたり申候。はじめは福之助と申、安永八年三月三日の誕生に御座候。親共申候には我は若氣の至にて放蕩に身をもち、此やうな家業になりはてたれども、其方は姉の縁付居候醫師

中川正甫のかたに遣し、少々物も讀ませ、末々は醫者にする積と申され候。初代歌右衛門は俳名一先。かゞや哥七と改めしは後の事なり。中村源左衛門の弟子中村千彌の裔なり。江戸にいでもあるは、寛保三年戌霜月の事にて、中村座に出勤せり。一書には四年顔見世に京大芝居に出られ、立者になるべき仕出しとの世の評判と記せり。遂に三箇津實惡巻頭に上り、一國をくつがへず謀反人につかひては、續く者なき人品骨柄、威あつて猛く眼中尖く、どうもいへぬれしたてとの評あり。天明八年十一月廿七日より、大坂中の芝居にて、新うす雪物語の正宗をつとめしが一世一代にて、寛政三年亥十月廿九日年七十八にて没す。法號涼池院蓮淨日清といふ。一世の當り狂言多き中に、殊に人口に膾炙せるは清水清玄の狂言なり。馬琴が歌七が肖像の贊にも、清玄の役の事を言へり。亦以てその技藝を想見すべし。哥七句あり。

雨傘で見に廻つたる柳かな

その子梅玉に訓して他業に就かめんとせしは、當時演劇を蔑視せるがためなりと雖、その氣概を見るに足るべく、京傳、馬琴が戯作の門人を謝絶せしと同日の談といふべし。

私稱心に矢張役者になりたく、いろくんと申、うの頭の立者三五郎、雛助、三保木などを母より頼み申、此人々まわり、先々われらに預けねかれ候へと申され候へども、親ごもきき入不申、私九歳の思案に、此うへは神佛を頼んでなりとも役者になりたいと、其頃千日前竹林寺に今も有之候不動尊大きに御利益あるよし承候ゆゑ、これに水をあび雪の降るのもいとはず、裸で祈り居申内に、着物を取られ候事も御座候。母申候には方々の子供は皆々子供芝居に樂屋入をするを、れもしろい事のやうにねもふ子供心は尤ぢやが、てゝ御が物堅いゆゑと、いろくんだめられ、其内

親ごも頼みて正法寺に參るとて、私をつれられ、うの歸るさ、いつも日本橋を北へ渡る所を、どういふ事にか、其日は若太夫芝居の前を通られ、看板を見て、奥次郎が座頭ぢやなと申、何心なく立て居られ候とき、勘定場に私共の伯父源藏居合せ、無理にすゝめて一幕見物いたさせ申候。その狂言は國姓爺三段目にて、頼太夫かたり首ふりにて甘輝奥次郎、錦祥女花桐、和藤内友藏、皆々私同年の子供に御座候。これを見て歸りがけに源藏に相談いたし、芙蓉、三保木、雛助、雷子などにも申合、次のかはりより私を出す積に親共申候。これは全く竹林寺不動様の御かげと子供心にうれしう存じ居候。

此一段いと面白し。梅玉は俳優を以て賤業とせしなれば、少き時なればとて、うの品位を餘り高しとは思はざりしならん。然るに不動尊に禱り、赤身にむして雪中に立つに至る。是豈藝術家となるべき天性の爲めに促されて、自ら知らざるもの歎。又文中に見えたる三五郎は嵐氏にて、人呼んで名人三五郎と稱す。雷子の號あり。小六も嵐氏にて雛助と號す。儀右衛門は三保木氏。號は素桐。源藏は中村氏。號は東齋。小川吉太郎の父なり。芙蓉は尾上氏。初名は春五郎。後鯉三郎と改む。當時聲名ありし優人なり。

程なく替り狂言になり、廿四孝三段目磯太夫にて横藏私、大切に伊勢物語梶太夫、春太夫、雛太夫三人かけ合にて有常私、是にて大入大評判に御座候。うれより三ヶ年ほどいろくんの狂言をいたし、京、大津、堺、西の宮などかけまはり、私十二歳に相成候冬、親ごも儀死去いたし、あくれば十三歳、初て荒木與次兵衛座芝居にてせりふをいふ狂言をいたし申候。狂言は鎌倉山にて、泰村と源左衛門二役に私、これも打つぎ繁昌いたし、うれより座摩いなりにて評判よろしく、道

頓堀濱芝居の邪魔になるよしにてやかましく申候處、小六、三六郎兩人とも子どもの藝道稽古の爲なれば、十五歳までと申込み、其時はいなりにて、私は日本駄右衛門を勤め、半季も致し、中途にて衣裳とりかへる程の大入り、日々に□□□□□□□□□□あり申候。その後隠居三五郎、古美雀、片岡、古いろは、文五郎、澤村の太夫同座にて宮島へ下り申候。是十五の時にて、忠臣藏に若狭之助、伊吾、彌五郎をいたし、近江源氏に芙蓉の取立にて、九つ目の谷村小藤次を致申候。其時場の御見物が芙蓉あとへよれ、かゞ屋が見ゆぬと申たと樂屋へ入り、大わらひに御座候。うれよりいなり芝居へかへり、五大力の狂言私源五兵衛にて、又々大入、まことにこれが子供芝居の世盛と皆々申候。(下略)

文中、芙蓉跡へ寄れの一語、人をして當時嶄然として頭角を出だしたる梅玉が風采を想見せしむ。片岡の名は仁左衛門。いろはの姓は芳澤。文五郎の姓は中山。澤村の名は國太郎。(明治廿二年十月)

中村霞仙の事を記す

我邦にて俳優の技藝を品評せしは、已に西鶴、團水に肇まれど、江島屋其碩が八文字屋自笑の名を假りて黒表紙を著しを以て、役者評判記の嚆矢とす。爾後評判記の名は全く八文字屋に奪はれ、年首必ず大坂、京都、江戸にて前年に演せし狂言の評を上、中、下の三冊に編し、大坂なる八文字屋八左衛門方より出版せり。蓋し元祖自笑は延享二年に没したれど、其笑瑞笑を始とし、自笑の兒孫等りの名を襲いで利を射きと見ゆ。享和年中馬琴の明眼は早く四代目自笑の編めるものを見て、批評の衰頹せるを歎きたれども、評判記は時人の嗜好に投じ、その評妙に技術の肯綮を穿つ所なきに

あらねば、好劇者のうの出づるを俟つもの多く、江戸の遠きに在るものは、其郵致の遅きを憾みきと聞く。又江戸にては八文字屋に模倣して評判記を出しものありしも、その行はるること大坂の如くならずして止みぬと、小川顯道の塵塚談に見ゆ。是等にてはもうの盛なりしことは推知す可し。當初評判記の巻尾には、單に作者自笑の四字を記せしが、文政の頃より、合作の名を附し、大文舎他笑、梅枝軒伯鸞、梅鶯亭枝聲、松樹亭緑子などと戲號を列記せるを見る。時に自笑の名を附せず、五升亭徳升、四文舎我笑、俳優堂夢遊等が編述せしこともあり。その他小説の作家にて優人を評せし者は、馬馬の歌舞伎年代記に於ける、馬琴の戲子名所圖繪に於ける杯の尤なる者なり。京傳、三馬、一九の如き演劇に關する書を著せどもその内情を摸寫するに止まりて、技藝を評せしことはなかりき。明治十一年、六二連といふ好劇者ありて、又八文字屋の絶れたるを續ぎ、俳優評判記を著し、富田、高須、梅素の輩、能く故實を按じ、時向を察し、往々適中せる評言をなしたが、二十年に到りて廢絶し、今日の劇評は全く新聞記者の手に屬せり。然れども渠等の意は主として劇場座主の需に應じ、聲名を世に傳ふるにあなれば、賞賛過當なる者多く、未だ其美刺宜きを得たるを見ず。

近ごろ大坂の俳優中村宗十郎没す。これ我邦の演劇史上に特書す可き一事實なり。余は決して八文字屋、六二連の流亞を以て自ら任ずる者にあらねど、嘗て彼が生前に其技を見、又人のこれを評せしを聞きしことなきにあらねば、今彼が遠逝せる時期に際し、所謂片最負の偏僻を除き、唯その長處と短處とを擧げて、これを世の斯道を嗜めるものに質さんとす。霞仙の技を評せんとするものは、先づ彼が純然たる實事師を以て、一方の大立者たりしことを記憶

せざる可からず。故にかにといふに實事師といふ者は生の一種にして、優人場裏自ら一の好地位を占め、他の荒事師、敵役、濡事師の類と全くその趣味を異にすればなり。故に彼が櫻丸の濡事師に扮せしを嘲りて惣領の甚六と云ひ、土師兵衛の實惡に扮せしを責むるに古今の不出來を以てするは、蓋しその評の酷なるものなり。

評者は是より霞仙がその實事師の範圍内に於いて逞くしたる伎倆に就て、その果して妙を極めたりや否やを言はんとす。

霞仙が獨擅の長技として自ら許し、又た世に稱へられたるは、明治十二年新富座にて演じたる劇春霞網島に於ける紙屋治兵衛なり。彼が兄に逼られて小春と縁を斷つ時の状は、實に摸し出して絶妙なりき。高須等これを評して云く。お家ものゝ一本だけ。扱旨い事。始は只踊のお淡ひの様に思はれしも、孫右衛門に逢うてより始終の工合、一點の申分なし。起請といふ物はと講釋をいひ掛て氣が付、兄へ憚る思入、さもある可き事。又小春に一言云ひたい事有から一寸逢はせて下されと頼む所、顔を見ず下を向いて云ふ工合、言ひ出し兼る事を思ひ切て云ふ心いき受升。花道にむせ返り、此涙を手でこすり乍らまごらし、兄に頼む所、實に情合に通つて宜うござりました。先方今紙治にかけたら此右に出る者は有升まいといへり。然れども彼が容貌態度の商人に恰好せるは、他の役を扮せしときの障害を爲し、維盛にて矢張紙屋治兵衛が乗うつりて居る様なりと云はれ、松王にて何分大百日の乗らない顔故、鬘丈け借物の様に見ゆ升たなど云はれたりき。これ霞仙が品格優美の點に乏しかりし一短處と謂はざる可からず。

霞仙品位に乏しかりきとの評は、彼が初めて名を京坂に輝がしむ出世狂言とも云ひつべき馬切信孝

に於いてすら免かれざりしなり。彼は猿若座にて三千兩初荷未廣といふ名題にて信孝を演せり。然れども信孝は固と越前忠直の遺孤長七郎といへる放逸の貴公子を摸せしものにて、その妙處は品位と威嚴とにあるなれば、此優に於いて完美なりと評し難きは、蓋し怪むに足らざるなり。信孝だに斯の如し。その秀吉の役にて神職に類し、菅公の役にて大臣家と見ゆざるは固より當然の理なり。

彼が品位に乏しかりしは一はその動止の宜きを得ざるに因りしなり。彼が愁歎の状を演ずるや、心裏萬緒の愁を抱いて、勉めてこれを外貌に顯はさざる如き態度なく、只頻に顔面を蹙蹙して、漫に兒女啼を爲すが故に、時に識者の嘲笑を免れず。例之ば二張弓千種重藤に秩父重能が其子重保を列して、駒王丸の首級に代ふる段は、此優が獨得の長技なれど、その愁歎の餘、重能が己の頬を重保の頬に當てて泣きし如きは、當時の武人の心を察せざる過にして、彼が遂に團十の上に立つことを得ざる所以なり。然れどもこの嘲笑すべき箇處は却りて俗客の賞揚する所にして、或者はかくてこの芝居の上手なれとまで賞賛せりと聞く。

蓋霞仙の動止は看客をして十二分にその伎倆を會得せしむるにあり。故に時々念入に失し、却りて興味索然たらしむること尠からず。彼由良の助が判官自盡の場に駆付くる所、檢使の許あらば速にその側に行くことを欲す可きに、華道に坐して長く思慮する所ありしが如き、菅丞相がその愛女の別離を悲み、階を踏外して落ちしが如き、その甚しきものなり。此の如き場合にては、彼は其極對手の技を妨げ、之をして惘然自失せしむることあり。これ舞臺上の權衡を覺らざる弊と、聲譽の晩進に歸するを吝むとに因るものにして、一世の名優たるものゝ宜く出づべき所にあらず。五弓久文嘗て大谷紫道（友右衛門）が事を霞仙に問ふ。霞仙曰く。亦一才優也。然爲人恒好登場扮技。每曲

己獨欲撮勝占便。是其癖也。雖然凡奏劇。使觀客不厭倦者。要在兩三名優協和推讓。分權不競巧耳。且人必有片善。不能兼長。今昔所同。而紫道犯之。可惜。事は載せて村居獨語にあり。題して名優格言と云ふ。而して今うの行ふ所を見れば亦此轍を踏むものゝ如し。これ果して何の故ぞ。而れどもこの念入の舉動は彼が士族の貧居などの塲、床の淨瑠璃に合せて極悲極哀の狀を演ずる際は、うの効を奏するを見る。否、これ即ち彼が技の世に敵手なかりし所以なり。

彼が心を其自ら扮する役に用ゐるや、焦心苦慮うの愛顧を受くること最も多しと聞ゆし文人詞客を叩いて扮装を選び、仕打を考ふること、決して儕輩に劣らず。曾て曾我祐成が討入をなすの段にて脛甲を當てざりきと云ふ争より、團十の時致と扮装一致せず、遂に病に托して塲を退きしは、うの一例といふべし。この癖や思を凝すこと深きに過ぎ、時に這入違をなすことあるは、實盛の和事を演じて赤地錦の社袴に紺足袋を着し、筆賣幸兵衛にて士族の商估となりしものと見ゆざる類是なり。這般の工夫に於いては彼の機敏を以て世に聞ゆたる菊五には、遂に一籌を譲らざることを得ざるなり。

霞仙の奇なるは、東都にて、大當を得たる狂言の時代物に少くして、却つて新作物に多かりし一事なり。これ蓋時代狂言のみを演じて自ら足れりとする大坂の優人に於いて稀に見る所なり。蓋霞仙が早く東京の藝風を會得して、舊態を一變したる爲か。當時の見功者が橋見立の評にこの地の水にうんで來つて人の氣にはまる吾妻橋といへり。見よ鏡山錦艶葉に浦井主膳が骨鯁忠直の氣象、西南雲拂東風に士人彦右衛門が毅然たる烈士の風神は詞人の擊節賞賛を受け、鏡山に佐枝佐渡が戸田大炊と紅葉狩に國家の治亂を議し、後日梅に坂田の老母が其子善三と茶室に訣別を爲すが如きは、團

十の好敵手、他に能く摸擬するものをだに見ざるなり。其他諫諍の臣、斷訟の吏、又うの隻手の技なれど、得意の役の比較的に少きがために、役名の異なるのみにて、うの脚色同じく、人の厭倦を來すことありき。

嗚呼、霞仙が混堂主人の子に生れて、轉瞬の間に他の門閥を尊める俳優社會にて、嚮として一家をなすは當初市川柏庭に藍瓶の中に投入られし安役者なりしも、數年にして此と位附を争ふ程の大立者となりし澤村訥子と、今古一對と謂ふ可く、又彼が一たび商估に變じ、うの業を復する際大當を博せしは、彼一度梨園の群を脱し、再びこれに歸せし時、市人の爪弾に遇ひて失敗せし天保の名人中村梅玉をして後に睦若たらしむるものと謂ふべし。

夫れ俳優の技は、これを評すること已に難し。况んや彼此を商量比較してうの位附を爲すが如きに於いてをや。これを黒表紙に徴するに、明曆、萬治の頃已に位附見ゆ。其法は物にならずらへて記せること數知れねど、位は上上吉を頭としたり。後元祿の末より寶永、正徳、享保の時に至りて、目を増し級を設けたり。若し八文字屋が嘗て役者産物合に記せる定義に従ひて霞仙を評する時は、六二連も嘗て大上上吉の位を許したれば、實事に於いては極位に至りたる者と認め、改めて黒極上上吉となし、又技藝社會に功績あるを以て、名の右邊の上に實事上手と書せば、或は其當を得べきを信ず。若夫れ漫りに大聲して天下の名人を以て極賞するは、余が未だ遽に左袒すること能はざる所なり。(明治廿二年十一月)

觀劇偶評

久く大磯の潮浴にて、蒲柳の質を養ひ居たる梨園の俊髦が、今回お目見え狂言に、好んで出し、程ありて、中村座近來の景氣誰か驚かざるべき。此人の暫しの間に一種微妙の「ニムブス」もて其身を圍繞したる立て且となりたるは、まことに目出度事なり。

此人の好は素八犬傳富山の場にて、伏姫の神々しき所がして見たしとの事、善く思ひ付かれたるものなり。然し八犬傳を狂言に出すは、随分むづかしき問題なり。此大文章の鍼線緻密なる所を、一寸ひと節引き抜きて演劇にするときは、兎角支離破碎といふ形にて、大に妙味を損ず。その上曲亭の奇文にて人の感情を惹く程には、迎も趣向が立てられず。今度の狂言も、強ひて富山を見せんとすれば、先づ里見家危急存亡の秋に、愛犬八房が偉勳を奏する發端を見せ、次いで賞を求めて奥殿に闖入する八房に随はんと、伏姫が健氣にも決心して、父母と訣別する場を出し、次に富山の場と、層を逐ひて進む必要あり。作者の此處に氣の付きしは尤の事なり。

籠城の場。義實が覺悟を極むるに、本文にては金鞠大輔の音沙汰なしといふ所を、りれにては機會面白からずと、石塚原吾の注進を出し、は感心なり。然し義實が自殺と思ひ定めて、一坐悄然たる處へ、八房は突如として驅出てこそ妙なれ、豫め怪き曲者あり杯と斷るは、無論蛇足ならん。幕切の敵陣潰走の注進は勇ましくして善し。

奥殿の場。翠簾を巻き上げた時、見物一同の渴仰して居る新駒を見する所善し。八房出で、伏姫一應奥に入り、跡にて義實と犬との大立ち廻りは言語同斷なり。此處は無論、琴を押しにすることなくとも、犬が伏姫の袖を放さぬ處へ、義實出でて逐へども去らず、殺さんとするより、姫との

問答始まるべき筋なり。

富山の場。これにて八犬傳の富山の場なるか。これにて伏姫の神々しき所なるか。實に興味索然、歎息の至なり。床の淨瑠璃になり、伏姫犬を先きに立て、出て來る跡より、珠數と靈像とを持ちて、母五十子が従者と俱に追ひ付き、之を交付し、色々と愁歎ありて、伏姫は山へ、五十子は花道へ行き、道具半廻になり、崖の上に立ち留りし伏姫が、母と顔見合せての歎き、木の葉の墮つる處にて幕。幕外五十子の一行が悄然としての引込みにて結局。畢竟此の離別の哀は、前の奥殿の場にて見せてはならず。否、既に見せたるなり。此重複の爲に看客は大に倦めり。まさか遺れ物を届くるが、作者の主眼にてもあるまじ。さらば此哀別離苦が一部の骨髓か。さりては拙きことかな。幕切伏姫が羊腸たる山路に登り行くは、目先變りて面白し。されど此粉本は近頃團洲が扮せし笠原隨應軒と認めらる。

寂寞荒涼、負に人間の塵を離れたるは、富山の境域なり。超然脱俗、全く愛惜の絆を斷ちたるは、伏姫の身の上なり。これを見せんには、既に山中にて歳月を閲したる後の處を取りて趣向を立て、巖室の中にて誦經の幕開き、親を思ひ、身を果なみての艱難を、原作の文章を參酌して白に連ね、此より牧童に逢ひ、其身の因果を悟り、自殺せんと決心しての最後の讀經にて仕舞ひたらば奈何ならむ。是れならば前後を截り棄て、出して、何うか斯か中幕物に纏まるべかりしならむ。秀調。五十子役。初め鉢巻袴掛の打扮は何故ぞ。打死するにてはなし、生害せむといふ場なるに。山にての愁歎は狂氣の様になりたる工合、國太郎の後一人なるべし。新藏。義成役。何處か師匠の衣鉢を傳へたる所見えて、打扮より言葉まで、一種の味あり。

芝翫。義實役。これに嵌まる人は、殊に伏姫との問答の所杯にて、團洲を除いては他にあらざるべし。

福助。伏姫役。簾を掲ぐるとき、端然として坐せる處、何等の風丰ず。素と品格の高尙なるに、這回は殊に注意せりと見え、尋常旦にて見慣れたる瑣末なる動作を悉く省き去り、成田屋の八重垣姫に髣髴たる沈着の態度、所謂高尙とは消極的意義なり、凡庸を芟除して餘す所なきなりと云ふ語を思ひ出しぬ。父を諫め苦節を明かす女丈夫の氣概も充分なり。殊に白は本文を熟讀せりと見え、優美に聞えたり。訣別の場。兒女啼を爲さず。思ひ定めたる所見えたり。富山の打扮、髪飾は品格を下げじとの譯ならんが、佛頭糞なり。衣裳の模様にも感服せず。此處は白無垢杯善かるべし。蝦夷錦の帯は勿論廢めて、しごきにして貰ひたし。歎きの所も巧なりしが、何分筋が筋ゆゑ、隨侯の珠も雀を弾く如くなりき。

其他生の中にて鶴の助、勘五郎とも華やかに善し。他は略す。唯尙一言すべきことあり。そは本傳にて緊要なる役たる八房の犬なり。渾べて芝居に遣ふ動物は、いつも不出來なり。遠くは弓張月の禍、近くは「キヤリ子」の象、また一の谷の馬などまづ善き中なりき。此度の犬は白木綿とは情なし。毛のなき處は、赤道直下の産物と見たり。これ迄は打扮にて、扱藝評にかまらん、先づ最初首を咬へての出、一目散に駈けて來べきを、士卒におくられて出るは面白からず。義實の前にては、喘ぎつゝ求むる所あるが如き様子を見せでは協はざるべきに、全く氣なしにて偃臥するは何事ぞ。終にも始終伏姫に絆りて、顔杯打守りてあるべきに、兎角倦みたる状を見せ、折々寝ころぶも可笑かりき。これにては伏姫が、みだらなる心を起さば、刺殺さんといふ張合見え。 (明治廿二

年三月)

西洋の大學にては、暑中休課に學問世界の耆宿といふべき先生の湯治廻り杯に出掛くるとき、鬼の留守の洗濯らしく、少壯なる助教連中講筵を開いて、聽衆を喚寄すと聞く。是れは賞めて言はざる事に勤むるなるべく、悪く言はざる金唄けなるべし。其孰れ當れるかは、恐らくはこれに従事するものゝ品位に依りて違ふならん。

この西洋大學の夏に髣髴たるは、我東京劇部の夏なり。彼の團十菊五等が一年の風塵を靈泉の水に洗ふ際に、都に残りて舞臺の上を城府とし、攻來る暑熱を事ともせず、技を演じ客を招くは、第二流以下の俳優なり。此諸子の演戲は、或は評する程の價値なしと云ふ人あれど、うは矮人觀場にて、若し活眼を開いて見れば、此第二流以下にも随分觀るべき所あり。之を彼私立學校にも見立つべき或劇部にて、人の目を射る飾具と借りて來し藝術とを耻とも思はず、文覺上人勸進帳も、椿説弓張月も、「ワルレンスタイン」も、「ハムレット」もといふべき勢にて、大脚本を興行する輩に較べ見ば、其得失はいかなるべきか。

壽座の夏狂言は勿論依然たる舊模型、希臘の「トリロギイ」のそれならで、曰一番目、曰中幕、曰二番目と古調新聲、交互錯出せるものなり。西洋の劇部にて一日(多くは一夕)の劇に一傳奇を演せず、二三の一幕物 *Financier* の滑稽劇を出すこともあれど、規模宏大なる悲劇の迹にて樂劇に似たるもの出で、次いで新戲曲現るゝ杯と、數時間に甘みも辛みも皆味ふことは先づ無からむ。これにては純粹なる受用は迎も出來ざるべし。今度の一番目は

の品格。秀吉(新七)は評にかゝらず。臯月(傳五郎)は故人國太郎、かの政岡、和藤内の母、藏主などにて古名優を凌ぎ、團洲に門之助の箕裘を襲がせられんとせし、秀調前の名人と云ひて不倫とはし難き國太郎が、芝翫の光秀、團洲の操、高賀の重次郎の間に立ちて超然出色の技倆を呈したるが尙宛然目に在れば、評せられず。初菊(松之助)は之を何れの高等劇部に移植しても、秋花の艶人を動かす價値は充分ならむ。二番目に出でし

夏雨濡練込

原本夏祭浪華鑑は延享二年七月並木千柳、松永松洛、竹田小出雲の合作、竹本部の操狂言、りの生を始て且に改めしは安永六年五月市村部の演劇女伊達浪華帷子、お定りの夏狂言なり。渾べて這般の翻案は一種諷刺に非ざる「パロディ」にて、所詮の體面を成さず。序幕。(兩國並茶屋の場)團七縞の棍(新藏)と一寸縞の辰(壽美藏)とがお仕着せの打扮、立引の所へ草加屋娘(女寅)が機外神の働は先づ上等の俄とは憎まれ口歟。二幕目。(藥研堀草加屋の場)三幕目。(築地岡殺しの場)義平治婆々(傳五郎)の僞女使は、誰れも騙局に乗りさうになき品位なり。然し苛虐の場は本色にて善し。棍が媼の責苦に遭ふ處は十二分の技藝、觀棚中に面を掩へる人もありしならむ。(明治二十二年八月)

明治二十二年の戯曲

明治二十二年批評家の詩眼は隅外漁史の筆に成り、明治二十二年の小説に就いての記事は逍遙子、美妙齋主人の手より出でたれど、明治二十二年の戯曲に就きては、未だ一人のこれを言ふものを見

ず。これ余が大膽にも足を此境に着けむとする所以なり。唯憾む、去年の戯曲は他の著き進歩をなしたりといひ難き小説に對してすら、猶一等を輸するが如き觀あることを。

前年出でし戯曲中にて、新脚本の名を下すべきものは、僅に文覺上人勸進帳、拾遺後日連枝楠と音調高洋箏一曲の三あるのみ。

文覺上人勸進帳は、學海居士と川尻實岑氏との合作なり。作家は源平盛衰記に據りたりと云へり。元來烈婦袈裟が盛遠の刃に死する事迹は、戯曲に適合し、院本には橋供養あり、臺帳には左交南北等の貞操花鳥羽戀塚、一陽來復澁谷兵の如きものあり。默阿彌の橋供養梵字文覺も亦據りて脚色を構へたり。見よ。渡邊橋供養の場といひ、衣川住家の場といひ、之を演じて觀者の視聽を驚かすべき那智瀧不動降臨の場といひ、これを橋供養梵字文覺に照すに出藍の色あるに非ず。唯盛遠が陽に袈裟を慕ひしなどいへる踏襲なく、決然之を少年の痴情に歸したると、月見の宴の場を設けて、袈裟が餘所ながら夫に決るゝ段を加へ、人をして涕泗横流せしめしとは、作家の苦心ならむと思はるのみ。又新に加へし勸進帳を讀むと院宣を傳ふるとの兩齣は歴然たる正史にして、學海居士の平生事實を重ざる主義見はれ、之を讀みて歴史の趣味はあれど、之を場に上ぼして美術的觀念は毫も生ずることなし。余はイムメルマンに非ざるも、正史を以て戯曲となすを喜ばざるものなり。

余は此脚本にて、二個以上の原動力ありて、行爲の一致せざるを見る。これ我戯作者の陥り易き弊なれど、二個の關係なき、若くは關係少き原動力によりて結構をなしたりとて、到底完璧とはなりがたし。余は信ず、若しこの二個の原動力によりて、始まり二曲を作ることの、これを一曲とな

すに優れるを。二個の原動力とは何ぞや。一は盛遠が袈裟に對する愛情に起り、遂に佛門に歸するに終り、二は文覺が頼朝を嗾するに起り、勸進帳を読み、荒行をなす如き事實ありて、遂にこれをして兵を起さしむるに終る。彼は薄倅なる少年の盛遠にして、此は梟雄なる沙門の文覺なり。今一曲中にて一個人が一生の經歷、若かもうの思想の前後矛盾せる一生の經歷を掲げ出さんは、到底望み難きことなり。うの他幕數多かれ、一日の通しにせむといふときは、固より論ずるに足らず。又作家が自ら全篇の大綱は源氏の盛衰を示すにありと云へるときは、愈釘釘の拙を見る。余は寧ろ序幕青墓驛の場は削去らんを願ふなり。然れども此脚本の長處は白、淨瑠璃の文章中、往々優美なる字句を發見することにて、こは漢學に達き學海居士と我演劇に通せる寶岑子とが力を併せたるに因るならん。何にもせよ、此曲を六月中村座の劇場に演ぜしは、實に演劇場外の詩人の作れる戯曲の場に上りし嚆矢にて、我文學の爲には深く祝すべきことなり。只その名題を那智瀧誓文覺と改め、竹柴其水作といひて出ししが如きは卑むべく且惡むべし。

拾遺後日連枝楠も亦學海、寶岑二家の作にて、新小説に出でにき。學海居士は自ら前者に優る作なりといへりし由なるが、さもあらむ。阿王が事はげに好詩料なれど、其父の自盡を序幕に示し、二幕目に十數年の後を出せる、辨内侍正儀などの行を叙すること多きに過ぎて、全篇の主公の誰なるかを知り難き、吉野拾遺名家譽と「トリロギイ」然たる脈絡あるがために、前者を缺きては物足らぬ心地せる、一人の長白の時に歴史の朗讀に似たるなどは、うの病弊かと覺ゆ。その對話の語勢の如きは、實に文覺の上にある。

音調高洋第一曲の作家は西班牙の詩人カルデロン、デ、ラ、バルカにて、譯者がこれを取りし微意

は、カルデロンの舞臺に宜きことは、シエクスピイヤに劣らざると、其結構の邦人の好に適するに在り。故に其の白の如きも、勉めて我語調を學び、その極豪華クレスポオは團十郎、ホアンは菊五郎、大尉は左團次が慣熟の語勢に近く、幕切、きつかけをも加へたり。(花道と鳴物とは用わざれど)此等の譯法は固より甚杜撰なるに似たれども、他日外邦戯曲の我劇場にて演ぜらるることあらば、必ずこれに似たるものより始めらるべし。

余曾て河竹新七氏を其の淺草の居に訪ふ。河竹氏の曰く。僕は吾師默阿彌翁が一生の作に盜俠を叙すること多きを以て、白浪作者の稱を得しを憾む。僕が期する所は御家騒動を戯曲に編むにあり。然れども已に世に出でしもの多く、他人の筆を着けざりしは、唯某騒動と某騒動との二のみと。余等思ふに、盜俠の事迹固より未だ嘗て詩材に適せずんばあらず。かの河竹氏の己れが筆を着くる所を御家騒動に限らむとするに至りては、頗る偏したり。宜なるかな、その作る所、概ね古院本、古小説或は講釋種の一節を取りて、毫も戯曲の規矩に適へる融化鍛練をなさず、僅に原書の地の文を白に改めたるのみなれば、詩眼を以て之れを評すれば、著作の價値は極めて少し。彼竹柴其水氏の如きも亦然り。譬へば三月中村座にて演せし仇名草由縁八房は八犬傳富山の一節にして、十一月市村座の木原山簗笠隱家は弓張月の白縫が再び爲朝に邂逅する一節のみ。十月桐座の柳生荒木譽奉書は土人荒木が柳生侯の招に應じ劍法を闘はすこと、十一月同座の密柑船入津高波は五十嵐文平が密柑を東に齎す途にて、颯に遇ひて死に瀕すること、十一月市村座の鷲模様血染御書は大川友右が火に死して主家の重寶を完うすることにして、孰れも篁村翁の所謂講釋種の洗張物を、左團次に箝めて書き卸したりといふに過ぎず。

其他香雪山人の新小説に載せし新模様蒔繪護謄、漁山人の文庫に出し、積雪操松枝は共に戯曲の變化に遠くして、小説の進歩に近きが如し。其白も稍と鍛鍊を缺きたるかと思はれし。余等は大作の出でん日を待ちて二家の眞價を知らむと欲す。

新戯曲の觀るべきもの少きことかくの如し。宜なり、古院本、古脚本の屢々場の上るや。去年中に古院本の場の上りしもの十四、古脚本は十一、新脚本は僅に六に過ぎず。古脚本は默阿彌の作に成るものを最多とす。

古院本にては、一月中村座の寄観押繪羽子板は先代萩、腰越狀、累が淵、安達原を併せたるもの、其他同月市村座の彦山權現、二月桐座の忠臣藏、五月千歳座の布引瀧、天神記、六月中村座の浮名讀賣、八月同座の伊賀越、同月壽座の太功記、十月桐座の先代萩、十一月同座の妹香山、廓文章等にて、今更論評すべきにあらず。

古脚本にては、三月中村座の花舞臺咲分源氏は曲亭の怪鼠傳に基き、八月壽座の長崎珍聞目待夜話は長崎の殺人犯團泰二の事を敷演す。一月中村座の初音里梅假名書と十月桐座の辨天娘女男白波とは共に文政の昔、尾上梅壽(二世菊五郎)の態度にあて、南北等の作り成しものなり。彼不羈の結構、常規を以て律すべからず。彼にて豪奢を極めし武人一角が忽ち盲丐となれる如き、此にて嬌賊辨天小僧が初め可憐の一少女に扮し、遽に袒きて刺繡を示し、ゆずりの長文句を吐く如き、この意單に觀者の眼を射るにあるのみにて、詩眼を以て評するに足らず。十一月桐座にての鈴森對港抗は天明八年中村座に演せし傾城吾妻鑑の中に出でしが始にて、うの後森田座にて四世半四郎權八に扮し、五世幸四郎長兵衛に扮し、始めて男の中の男一疋といふ文句を作りしなりといふ。この曲は艶

麗なる少年と快活なる俠客とを舞臺に列べし一場の活人畫に過ぎず。又默阿彌の作にかゝるものにて、一月中村座の扇富士蓬萊會我は會我の同胞が死刑の庭にて一たび敷皮の上に座せしも、崑山のために救はるゝ頭末にて、畢竟會我の曲を年首に演ずる吉例に依りて作りしなれば、一部の戯曲却りて稗史の冒頭らしき觀あり。五月千歳座にての鏡山若葉艶(紅葉)は規模の大なる通し狂言にて、加賀騒動に胚胎せり。全齣に就いても難すべき處少きものなり。尤妙なるは大月邸の場と紅葉狩の場との二齣とす。大月の邸にて姦雄の藏人と豪宕の大炊との性情相映射する處、書き出して眞に逼る。大炊が酒を乞ふに擬して談笑の中に諷刺を寓し、句々大月の心肝を刺す狀、藏人が毫も怒氣を顯さず、恭謙其意を迎ふる體、これより農夫大六を點出して樸直の諫をなさしむる段、いづれも妙なり。這般の布置、對話の詩趣を含蓄せる、泰西大家の筆に譲らず。紅葉狩の段に大炊が佐枝佐渡の狸々の亂れを所望致したいと云ふに對し、狸々の亂れではなうて、國家の亂れで御坐らうがなといふ如きは、措辭の妙言ふ可からず。唯今回は嘗て書き卸しにて演せしときの脚本を改竄したりと見えて、却りて不可なり。例之ば先に中村霞仙の爲に設けし浦井主膳邸の場を中老玉笹部屋の場と改めしは、高砂屋福助の爲めに故らにせしなれど、彼院本鏡山に髣髴たる草履打と自害とを竄入せしは、其意殆ど解すべからず。六月中村座の意中謎忠義書合は院本の玉藻前を翻案せしものにて、鷲塚を根井行親となし、桂姫を紅梅姫となしたり。彼は義に因り、此は忠に因れど、その子を刎ぬるは一なり。當初路に捨てられて、他に鞠養せられたるも亦同じ。八月同座の昔八丈月夜談話は素と講釋種に出でしものにて、全篇惡漢の醜行に止まれど、兇兒新三が忠八を唆して、その情婦熊を己が家に誘ひ、後忠八が熊を訊ねし時、知らざる擬して、彼を足下に踏み、狂人なりといふ如き、俠客

源七の中裁をなす時、彼の名の世に高きを知り、故らにその面に唾して、己が勢を示すが如き、又貪れる家主長兵衛を出して、和を新三に勧め、獲たる金より借家料の負債をひき去り、新三をして後に睦若たらしむるが如き、這個兇棍社會の寫眞、翁が人生の一側面を寫出したる妙は、蓋し獨得と云べき歟。十月壽座の梅笑檻樓一重着は、當時穢多を賤みし習を假り來りて、良家の子禮三と穢多の女靜との情事を叙せしにて、着想は頗妙なり。唯憾む、禮三が靜と縁を絶つといふ恨事を中心を惹起すに、うの非人の夥伴なるが故に、良家の配となり難しといへる大眼目を活用せず、主家の女が瀕死の花風病を救ふといふ凡趣向を借りしことを。うの末齣小塚原の雪天に禮三が新に旨せし靜に遇ひ、耳聾の舅を憚りて、僅に語を通ずる段は、人の心腸を寸断す。幕切に靜眼疾愈にて、地藏尊の石像に攀上り、禮三の姿を目送すといふのみにて、強て常套の終局を求めざるは、餘情ありて感あり。十一月桐座の俗説美談黃門記は徳川五世の時に在りし犬殺しの死罪、大船燒棄、藤井の姦謀など種々の事實を調和したるものにて、うの關係は唯主人公が前後一人の光國なりといふのみ。故らうの状恰も讀切講釋を聞くが如く、走馬燈を見るが如し。改良演劇とかいへる劇場にて、縦令營て大當をなしたりとて、第一回の興行に這般の戯曲を採りしは何の爲ぞ。此演劇に就いては世評噴々たりし中に、女學雜誌の井上某のみは戯曲の批評を試みたり。井上某が全曲變化に乏しく、演説めき、説法めきたる勸懲の話を三四回迄も出したりといひしも、光國が一生の斷惑的種子を集めしに因れり。又井上某も、日本新聞評者も、藤井の妻卷が自盡せるは輕躁なりといひしが、こは女形秀調に役を附せむとの鶏肋なればなり。而れども井上某が男女の愛情並に小兒の愛情といへるもの極めて少しとて尤めしは僻せり。戯曲の結構、豈此種の情にのみ限らむや。又哲理を敷ふこと深しといはれ

しは少く買破りには非ずや。然らずば勸懲主義の崇拜者を見ゆ。終に井上某が六幕目を評して全曲を振蕩する趣向といはれしは洵に善し。蓋し翁が戯曲を編めるや、意中主人公を團十郎にあてしものなれば、毎齣の終に警束を用ぬたり。二幕目狂犬を切捨つる所、五幕目聞いたれば聞かしてわけの語、六幕目紋太夫を斬り、猩々の舞を舞ひつゝ橋掛りを出づる段、皆な掉尾の力あり。上に列記せる去年の戯曲中にて場の上に上げして大當をなしたるは、院本中にて忠臣藏、先代萩なり。こは名優の顔揃なりし爲のみ。又古脚本にて若葉栴は趣向の面白かりため、女男白波は菊五郎の辨天小僧に扮せしために、當りとなりぬ。新脚本にて文覺上人は曲中の不動明王が信者を招きし爲め、血染御書は細川邸大火の道具珍らしき爲に愛でられたり。而れども戯曲の價値を論ずれば、新古脚本中にて黙阿彌の若葉栴こそ傑作に近きものならめ。これに次げるは同人の檻樓一重ならん。この外は稱讚し難きが如し。(明治廿二年二月)

桐座の三月狂言の開きたるや、余も往いて見たれば妄評を試みばやと思ひしに、早く學海居士の評は讀賣新聞に、篁村子の評は東京朝日新聞に出でぬ。而れども人各見る所を殊にす。兩家の繩墨は必ずしも余が標準と同じからず。技藝自ら禁せず、遂に私見を公にすることゝなれり。桐座の三月狂言は例の通り一番目、二番目、大切の三つに分れたり。今順次に戯曲より評して、技藝、裝飾に及ぼさんとす。

戯曲の評

一番目

富山城雪解清水

観劇偶評

學海居士と寶岑子とは成政の性質乍らにして怯懦なる如く、乍らにして勇猛なる如しと云ひて怪みしが、當代戰國の武人は忽ち降り忽ち反する人物尠からず。况んや曲中豊公か成政の降を容るゝ處、別に傾心の痕を認むるにあらねば、此點は深く尤むるに及ぶまじ。篁村子はこれを勇士の失意と得意とに歸したり。

此曲の骨子は學海居士に依るに、成政の妾早百合の怨魂、成政に就縛の辱を負はせ、又自刃するに至らしむることなりとぞ。蓋し作者の意も亦此に在る如し。然れども余は未だ充分に此の如き骨子を發見すること能はず。早百合の怨魂の祟と認む可きは、唯成政が彼を手刃し、狼烟を視、金鼓を聞きて、花道まで行きかけ、れんりびきにて引戻され、早百合を讒せし夫人、侍女を早百合なりと錯り認めて切り倒し、後覺めて愕くといふ場あるのみ。敵の城に通り、城終に陥いることは早百合の死と同時にれば、其祟となすべうもあらず。うの俘となるも奮闘の後にて、別に鬼に魅せられたりとも見えず。後秀吉を狙ふ所は梟雄の本性見はれ、毫も物狂ほしき體なし。事顯はれて自盡するも決然たる色あり。早百合の靈はここに現はれたれど、成政が夢寐の間これを見るに止まりて、うの祟なりとは想はれず。故に後段の成政を以て彼片言獄を斷して愛妾、良僕を殺し、成政に比するに、共に狂暴には相違なきも、早百合を害せざる前の方、却りて物に魅せられしものゝ如くなり。又學海居士は狂暴無類の人物に作るべしといへど、此上の狂暴は意料の外に在り。余を以て之を觀れば、全曲の不諧は動因の不完全なるに在り。げに學海居士も云へる如く侍女が家僕に戀の適はぬ怨より家僕と早百合と通せりと讒すといふのみにては、到底波瀾を起し難かるべし。若し眞作家をして之を作らしめば、早百合の誣殺を受けたりし原因を正確にし、之を自ら明かすに由なき禍に歸

し、成政が彼を刃せし後に目を逐ひて精神物狂ほしくなりもてゆきて、次第に己に不利なる事をなし、之をして遂に自ら敗れしめむ。彼は假令幻影、鬼燐等を隱顯せしむることはなきも、節々早百合のなす業なるを知らしめむ。唯々僅に人を殺し、日と己が死する日と同きより因果を悟るといふ位にて、看者の推察に任ずは稗史に於いては或は可ならん、戯曲に於いては決して可ならず。余は初め此戯曲の脚色を聞きしとき、必ずや彼默阿彌の名作木間星箱根鹿笛に於いて娼婦小夜が怨魂、岩淵九郎兵衛を惱まし、遂に狂せしめたる如き者ならんと想ひしに、其曲を見て大に望を失ひぬ。嗚呼學海居士の所謂骨子は遂に骨子の用をなさず。

其他曲中にて淀君が黒百合の花を説て政所を辱むること、利久の女が初め此花の由来を淀君に洩し、故、政所に申譯なしと及に伏さんとして止めらるゝことなどあれど、是れ全曲の體裁には關係少き「エピソード」にて、之を點出せしは目先を替へんの趣向なるべけれど、戯曲の進捗爲めに弛みて、却りて人をして欠伸せしむ。白は悉く鹵莽を極め、成政が述懐の語には解し難き句多し。例之は「早百合が姿で思ひ出せしが、月は違へど十四日、今宵は彼が命日なり、然も是なる村政の、新身で討ちし其晩に、われ富山城落去なし、竟に軍門に降參し、羽柴が旗下に屬せしが、今々思へば此村政、見し夢だにも不思議の因縁と云へるなど、其甚きものならむ。

序幕。更々越のだんまりは曲中の兩雄を楔出す處、我戯曲固有の趣向なれど、長き一齣の間、場の上に上れる人物が一語を出さず立ち廻りをなすはだれ易きものなり。畢竟だんまりは幕切などにて轉瞬の間に見するを妙とす。

二幕目。羽柴本陣の場にて秀吉が成政をちなみありといひ、諸士が怪むに對して、秀吉、更々峠の

雪中にて、成政、なんと二人相見てきまる處は、所謂狂言の山にて氣味好し。篁村子は更々越の雪の中で出逢つたといふ丈、是が殺さぬ縁とは異な御縁なりいへど、氏の注文の如く古朋輩たりしときに餘義なき事情ありし事などに作りては、淨瑠璃本の常套に出でて却りて面白からず。秀吉が彼を救ふ理由は縁故あるを以て主となさず、寧ろ武勇を愛するものなれば、因縁ありといふ處にて、序幕のだんまりを活用したるは、秀吉の輕捷を寫出ししにて、作者の猶能く巧を弄せしを見る。成政が後に反せむためにも、こゝには入り組みし事情なきこゝりよけれ。

三幕目。清水の場。成政が秀吉を撃たむとして果さず、其後姿を目送すといふ無言の思入は、實際を重んずる戯曲にては妙所といふべきか。此の如き場にのみ妙多きは我演藝の程度、却りて戯曲の上にて在るが爲めなり。見よ、此等の戯曲の盛になりしは、團十郎が率先して力を演劇に盡ししに由れるを。

四幕目、尼ヶ崎の場に熊本の流民を出し、面白けれど、その用を倣さざりしは憾へむし。渾て一番目は彼其水、新七等の作と見えて、毫も戯曲の價値なしといふも誣言に非ず。

二番目
神明恵和合取組

如何に音羽屋が喧嘩を見せたと云へばとて、喧嘩のみを以て曲を成さむとするは言語同斷なり。序幕、品川島崎樓の場と云ひ、品川海邊の場と云ひ、二幕目、神明芝居前と云ひ、幕毎に同じ喧嘩を反復して見せたるは煩し。喧嘩の起りを瑣末に過ぐと批難せしものもあれど、當時鶯の者、相撲等は殆喧嘩買を業とせしものなれば、かゝる瑣事より大騒動をも惹起し得べし。されば喧嘩の

原因はこれにて事足るべけれど、以て戯曲の原因となさむとすれば則ち足らず。唯だ禁出し喜三郎の家と、鶯辰五郎の家とは、暗中摸索しても默阿彌の筆に成りしを知る可く、翁が屢慣用せる手段なりとはいへど、或點に於いてはすこぶる人情の機微を描出し得たり。喜三郎が宅に初め厨を見せ、初幕、品川海邊に出でし茶飯屋とだんまりに搦みし夜番とを點出し、夜番は此家の主人に神明町の番太郎の株を買はせて近頃此に移りぬと云はせ、茶飯屋を流し元のこほれ飯を拾ふ爲に來たるものとし、扱て夜番が品川の海邊にて、これれを打ちしは、神明町へ來て氣がつけば組合の衆なりと云ふを喜三郎が聞き、彼がそのをりに拾ひし烟草入を出して、辰五郎に白狀せしむるなどは老鍊と云ふべし。翁の作には幕明に出づる仕出し大勢といふ小優などにははするせりふにも肯綮の語ありて、人をして驚嘆せしむること少からず。廻りて喜三郎の室に相撲の弟子と品川の絃妓とを出し、力士四車の勝を噂する滑稽は、後段辰五郎の訣別に映じて趣を成せり。辰五郎が來りて尋常の話頭より妻子の事に及び、喜三郎が子供は夫婦の鏡で、どんな腹のたつ事があつても、子供にめんじて喧嘩もなし、なんにしてもし事だといふを聞き、辰五郎が思入ある處は、早く已に觀者をして痛心せしむ。辰五郎、出入場先から頼まれて、甲州の身延山で、五重の塔が修復になり、足場をかけに行きますのさ、喜三郎、塔の足場を掛けに行くのか、そいつはあぶねえ仕事だな、辰、一つ落ちりやあ命がけさ、喜、むさうかと思入の處は情の一層迫れるを覺ゆ。喜三郎が身延へ行くを疑ひ、嘘でなけりやあ猶の事、塔の足場とあるからは、丁度角力の櫓位、高さはあるに達えねわ、若し落ちたらば命づく、こりやあよしにしたがよからうと云へど、辰五郎はその諫を用わず、喜、不斷はおれがいふ事を、よくきいてくれるのに、聞かれねえとお前がいふのは、八つ山下の遺恨ゆゑ

か、辰、なんといひなると合方きつぱりとなりて、喜、愈々身延へ行くならば、餞別にやるものがあるを拾ひし煙草入を出す、辰、や、此煙草入はと忸りす。喜、覺があらうな、辰、どうしてこれを、喜、おれが拾つたのだ、辰、ねえと氣味合の處、常套なれどよし。だんまりの割白の中喜三郎の今年はおれも辰年に、身の災難を免れやうと、大師河原へ夜をかけて、通りかゝつた八つ山下といへるが如きは、落想の奇人を驚かすに足れり。又辰五郎の白に相手のやつをふんづかめえやうと、争ふ中に東もしらみ、長持歌がきこれるのでといへるは、品川の實境なり。但うの異見の中に、祖父からの附渡り、肝癪持が一つの疵とは、辰五に扮する菊五郎の祖父梅壽が肝癪烈かりし當込にて、南北以來の筆癖なれど、削除あらまほし。終に辰五郎が陽に摸様替をせむといひし後、喜、しかしそれも男づく、互に顔を賣る商賣、引くに引かれぬ仕事なら、命がけでもやるがいと、骨はおれが拾つてやらうといふところは兎に角力なり。只憾む、喜三郎が禍の廣くならむを憂へて、妻子の前途を慮り、絮々説くことの切なるため、この句の重さを減せしことを。余が此曲に肖たりと思ふ同人の作極附幡隨長兵衛に、長兵衛が死を決して水野邸に趣くとき、子分唐犬權兵衛親分に代りて行かんと請ひて止まず。長兵衛聽かずして、かういつたら分らぬえ長兵衛だと思ふだらうが、武家と町家と日頃から、遺恨重なる白柄組に、引けをとつちやあこの江戸中の達衆の耻、おれも名前が惜いから、命を捨てるも人一代、名は末代の幡隨長兵衛、けふが男の立つ時ゆゑ、留めずと器用にやつてくれといへる文句を受け、唐犬が、兄貴おれがわるかつた、もう無理留はしぬえから、うれぢやあ早くいきなせね、骨は己が拾つてやるといへり。任侠の心、此は陽に説き、彼は陰に寫し、此は長兵衛を主とし、唐犬を客とし、彼の主は喜三郎にして、客は辰五郎なれど、其の事は則

相似たり。幕切に喜三郎盃を落す、喜、猪口はわれたか、辰、いとわかれませぬ、喜、われぬといふはと道具替りの知らせにて、いとさい先だといふ、亦一流の調なり。辰五郎の宅に、其妻を素と品川の妓とし、鳶の者の姉御と云ふ意氣張強き女子に作り、夫に喧嘩を勧め、うの陽に應ぜざるを卑み、縁を絶ちて歸るといふ處、一種出色の趣向なり。或人は道理に合はぬ狂婦なりといひしが、われはうの閱歷より推して、充分に此般の性質あるべきを是認すべし。妻が語中に、これが堅氣の商人なら、引込思案もいとけれど、役場へもつてく鍵よりも、男を磨く鳶の者、役半纏へ濟ますまいといふは、好き白なり。辰五郎が假酔して訣別するは、醉菩提新酒又六の又六、音聞淺間幻燈畫の初藏などと脚色相似たれど、尋常の訣別と破鏡との差はあり。後辰五郎が假酔して時を過ししは仲間の若者が急立ちて、まだはねにならぬ相撲場に押寄せ、見物に過誤あらむことを慮りしなりといふは、名譽太鼓功の酒井左衛門尉を世話にてゆくといふ工夫なり。辰五郎が後を慮りて妻に取らせむとせし離別状を、妻が押戻して争ふとき、童がこりやあれいらがもらつたよといひ裂捨つるは、眞に是れ咳唾皆珠。幕切の淨瑠璃子別れは益幡隨に似たれど、亦能く人をして涕襟を沾さしむ。角力打出しの太鼓にてさしこを着、手かぎをもち、花道へ驅入るまで、間然すべきなし。現代世話物の作は到底默阿彌擅場なるべし。

神明大喧嘩の場は、詩として評せられず。余等は唯呆然自失するのみ。蓋此曲は默阿彌の點檢を経にけめど、前の兩齣を除きては、都て門人の手になりしものならん。こは本邦の脚本を作るをりの套習なれど、全曲の結構は翁の意を経ずと云ふ理なきを以て、翁も亦未だ全く其責を免るゝこと能はず。後これを思軒居士に聞く。純然たる翁の筆に成りしは實に前の兩齣のみなりと。其龍頭蛇尾

の觀をなすも、亦宜ならずや。

大切淨瑠璃。上の卷一藤職狩場棟上、下の卷名大磯湯場對面は、余等が其正劇を混同せむことを嫌へる所作事なれば、其脚色は滑稽を可とす。上の卷には正月初興行なりといふにて曾我に縁ある、工藤、梶原、朝比奈を出し、頼朝の狩場の棟上を祝すといふ筋にして、下の卷は良順翁の建てし瀧龍館にて浴客の間に起りし争を見せたり。大意は請負師須藤一郎といふもの佐賀十太郎、蒲田五郎次といふ兄弟の父某の工事を奪ひしたため、兄弟に仇として怨まるることなり。このもつれを作者は曾我對面に寄せて、看客の一粲を博せむとしたるのみ。

技藝の評

余は優人の技を評するに當りて、番附に依りて序列をなさむとす。左團次の佐々成政は篁村子の云ひし如く、武勇勝れし猛將と一見して知られたり。序幕のだんまりは常套なり。唯成政が沈着の態度は秀吉に超ゆること一等、天晴の豪傑と見えたるは如何にや。余を以てこれを見れば、成政はだんまりの間、妨ぐる人を突き退けて無頓着に進み行きたらむこり好からぬ。富山城にて地圖を指して密議する處は、學海居士の云ひし如く、思慮あるに似たり。是れ此優の本性にて、兎角沈着に過ぐるがため、妾を切る處白は烈きも、怒氣面に見はれざるは殘惜し。其の狂惑して妻婢を錯り殺す處は巧みなり。秀吉陣にては團十郎の荏柄平太を學びし如し。清水の場。秀吉が己を狙ふものあるを覺りて顧みる時、成政が先づ殆ど全身を顯はすは非なり。形を見せむとならば、面を覆ひ誰ともしれぬ方好し。後之を見送るときは、岩角を傳ひて下らんよりは、石段を見送りく下ること、團十郎の盛遠が嘗て袈裟を目送せし如くならしむるこり却て雅致ありけ

め。刀の鞘に右手をかけ、左手にて右腕を握り、揚幕を見詰め、思はず頭を下ぐる幕切、體の構へ眼の配り寸隙なく、一幅の好畫圖なり。尼崎にて自盡の處評なし。二番目の禁出し喜三郎。だんまりに花道より駕籠にて出で、舞臺にて下りし處、歌川國周の浮世繪には三十餘の男子に書きしを、白頭の老人にせしは善し。これならではこの大騒動を鎮め得る人と認めがたし。打扮は一見して道中師と見ゆ。喜三郎宅の場。脚本にては夜番が喧嘩の相手は爲の者なりといふを喜三郎が後面にて聞くとあり。こは後に辰五郎を説破するに必要なるに、こゝに顔を出さざるは謹嚴を以て名ある遊升子に似合はぬことなり。部屋の場。箱火鉢に對し横向の座り方、其應對皆好し。故秀鶴の骨髓を得たり。辰、一つ落ちりやあ命がけさ、喜、むさうかは御兩人くんと賞すべし。だんまりのくだけ、骨はこれ拾つてやるといふまで、隱語を以て出せるも妙。此老俠は曲中第一の出來なり。四幕。喧嘩場に留めに出るに、役半纏を着、白足袋の跣足にて出で、多勢の中に入り難く、梯を立てこれに上り、梯上に立ち身を振りて一轉し、身梯を負ひ、後手に梯の兩縁を握り、人に此梯を倒させ、背を天にし腹を地にして降り、調停をなす處、實際なるべし。嗚呼、此優をして力を此の如き技に費さしむ。豈惜むべからずや。世の作者は何故にこれに授るに高尚なる戯曲を以てせざるか。九龍山の役は評するに足らず。

菊五郎の羽柴秀吉。だんまりの場。兵卒の姿にて山神廟より出づる處、其の品格を高く見せんとにや、兩頬より下顎へかけて薄き附鬚をなしたるは好工夫なれど、何となく筭を挟まざる琉球人の如く見ゆ。だんまりは念入にて、種々の見え多かりき。本陣の場。陣袍、物の具嘗て團洲の扮せしとき如く、目を眩するばかりの華美、序幕に比しては餘程見上げたり。其の斜に坐りたるも面白

し。更々峠の雪中にてといふ文句の處、兩手にて軍扇を左の膝に突き立て、身を右へひらく見えは嬉しかりき。幕切。成政の降りしを祝し、めでたいといふ白は、この優の調子にては苦しうなり。清水の場。白の襲ね、緑の直垂、烏帽子にて謹みて居りし故見るべかりき。然れども熊本亂を報ずる書を得て驚き、石田等と顔見合せ、無言の思入にて道具廻るは何事ぞ。脚本の白ありて然るべし。原來團洲流無言の思入を無上の妙技なりと信ずるは誤れり。猿冠者に扮すればとて人眞似は悪し。狙撃の場。冠を戴かず、錦の直垂、淺黄の括袴、黒の塗靴にて徐々と月を見て石壇を下る處、何等の風度ぞ。此優生平好みて坊間無頼の態度を演ずる故、此種の役はいつも拙かりしに、流石は老手となりたるよ。笠村子は大將だの關白だのと云へば、重々しく深沈大度の面附と思ふは、子供が奴風の繪を評するにも劣れりといひて、大に世の妄に演劇を評するものを戒め、菊五の輕捷却りて秀吉らしきを稱しぬ。うは理なれど、此優美なる秀吉が敵のれを狙ふを覺り、樹間を覗ひて冷笑するは、平常の音羽屋に見えて悪し。こは團十郎が戸田大炊にて、紅葉狩の歸路蟲聲の一時に止むを怪み、刺客の己を狙ふを覺るが如くありたし。彈丸はうれて直垂の袖をかする。石田等銃聲に驚きて馳來り、癖者を捕へんとす。秀吉、逃げ行く鹿を獵人が、追かけ行きしものならんといひ、猶焦立つを押へて、捨置けといふ處、中々巧なれども、之を團十郎の松平豆州が壕端に丸橋を見咎めて後、往けといふ呼吸に比すれば、及ばざること遠し。二番目の齋の者辰五郎。品川妓樓の場、自分の争を遮りて、我身を後ざまに倒し、自ら押しになして留むる處、劇とは思はれず。力士四車との詰開きに相撲でも齋の者でも矢張同じ人間だといふ處快し。出入屋敷の武士を憚り胸をさすりての引込みに、旦那衆の前がなぐばの一句こたへたり。海邊だんまりの場にて後より

跟け來り、四車にさんと突當り、つきに胸を衝かれてたぢく、とさがり、茶屋女に當りてほぐれ、皮羽織の裾を一寸まくり、中腰になりて覗ふ見は巧なり。幕切、花道へ逃れ行くを脚本にあるを、唯捨置いたる駕籠へ體をよせかけての見は善し。晒しの手拭にて顔を隠して全齣を終りしも賞すべし。芝居小屋前の場、再び力士と出入になり、うこへいつて辰五郎が喧嘩のしちちを附けにやあならねにより、纏の天窓をこがすも、此消口をとらにやあならねまで、簡様な立入文句を江戸つ子調子にて述ぶるは、此優のたなかのきれ方に及ぶもの外にはあらじ。命のやりとり仕やうかえと云ひ、偏袒右肩煙管を把ての横見は甚好し。芝居座元の願を容れ、自分の焦つを留め乍ら引込むまで隙なし。喜三郎の宅にて無音の詫、妻子の噂など、平和の談話に味あるは此優の長處なり。よろしく遠行の暇を請ひ、一つ落ちりやあ命がけさの苦笑極めて好し。喜三郎に發かれてだんまりのくだけは毎度の事にて、れ手に入つたものと評する外なし。喜三郎が骨はれが拾つてやるといふを聞き、思はず膝をすゝめ、兄貴うこだと云ひ、拳にて鼻をすゝる處は眞に逼れり。濱松町の場。假醉して妻に戯るゝ滑稽の中には時に場當に失することあり。謹むべし。後實を語り向ひを見込み、兩手にて膝を押へ、なにあいつらにまけるものかといふは脚本になきことながら快なり。此優の幕毎に扮装を更へて、其形を摸することの巧なるなど、今更云ふまでもなけれど、余が最喜ぶ所はうの白を鍊磨し、時に脚本に泄れし文句を加へ、齋の者にすれば全くうの調子を學びて、句々活動せしむることなり。其一二を擧げむに、喧嘩の處、敵手に向ひてよく覺て置けといふを、耳の穴をかつとあらつて覺て居るといひ、いふならははして置けを、あんなでどうじんには何とでもいはして置けといふが如し。聞くレツシングはエックホオフが本文の白に面白き緩急の工夫を加

へしを賞せりと。宜なるかな。結装して家を出るまで、平常の念入なる仕打を除き、極めて簡淨にせしは却りて餘情深かりき。役半纏を着ちやあいかねね、さしつこを出してくれより、門口にて辰、うれぢやあれたい、だい、かしらといへる隻言にて訣別する處、滿場肅然たりき。揚幕にて開ゆるはねの太鼓をきき、かうしてはいられねねと童を突放し、手鍵を腰にさし、齋口をかい込みての引込み、國周の晝も如かず。喧嘩場は極端に實を摸したり。菊五郎も亦何故にか常に此等の野蠻的舉動を作すを喜べる。此劇舞臺一面に三階役者を排置し、棍棒、齋口を振廻はさせしは何事ぞや。これが呼物となりて、日に棚に滿つる客の心こそ知られね。就中市川荒次郎が其體軀の肥胖せるに誇りて、赤條々一絲を掛けず、四斗樽を振廻したる如きは、其最甚きものなり。其他此惡戲の結果を舉げむに、芝翫が小道具の瓦を打付けられて、眉間を傷けし是れ一つ。吉原引手茶屋久大和の妻は齋口の頭の飛びたるに觸れて、眉間を傷られ、三針縫はせし是れ二つ。仲の町藝妓長島小いくが肩に齋口の頭當りて、傷を蒙りし是れ三つ。此等の事實は讀賣、東京朝日等の諸新聞に載せられたれば、よも虚説にはあるまじ。

福助が成政の妾早百合の役は、嘗て扮せし梅春俠客御所染の時鳥に似たる故、勤め難かりけむ。室の場、打粉は昨年の袈裟の趣ありて、下民よりなりあがりしものと見ゆ。然しうの朗かならぬ音調にて、母の兵燹に死し岐に迷ひしを成政に救はれ、心ならずも仇に仕ふることを、看者が理解する様にいひ廻しは、易きに似て難く、他人の及ばぬ所ならむ。冤を受け死に就くところは、病の爲に仕打充分ならず。されど余は固より此場の技の巧ならんを望むものにはあらず。亡靈は評なし。二役利久の女綾野は秀麗なる淑女、男子が扮せしものとは思はれず。頗に女優の利を説く改良家に

見せたかりき。幕切、黒百合を見詰め、暫し思入ありて死を決し、懷紙を出し、顔にあて思はず泣落しになる處、この至難の幕切をかく迄に巧にしこなすは實に奇才なる哉。廣庭に死を止めらるゝ場、凡趣向は此小天人を殺しぬ。

其他大出来といふ可きは、源之助の扮せし辰五郎が妻の快活なる、松助の扮せし子分龜右衛門のぐつ酔等ならむ。又最拙なるは升若が成政の妻にて癡を極めたと、彦十郎の侍女が其役に適せざりしとなり。餘は略す。

裝飾の評

余等は劇場の飾具の強て華美ならんを望まざるものなれば、目今の道具立にても足れりと思へり。况や長谷川の意匠は往々吾人をして驚歎せしむるをや。富山城外北山の場。早百合を殺す迄は暗澹たる城垣巨塚の書割なるに、その死したる後狼烟天に漲ると俱に場面一變、日光皎然たるは善し。學海居士は場中火の上りし遠見を賞せしが、成政の戦長き爲、支那花火を費すことの多きを恐れてか、忽ちにして消え忽ちにして又た燃ゆるは拙ならずや。居士は又羽柴本陣の場にて田舎家を用ひしを新なりと云ひしが、こは近頃關原神葵葉にて細川忠興の本陣に用ひしことを記憶せざるならむ。(明治廿二年二月)

歌舞伎座の第二劇は題して福地源一郎改作

相馬平氏二代譚

といへり。これに繼ぎて演したる二曲は、一を御詔賜金染と云ひ、一を道成寺と云ふ。

二代譚は近松が作にて、享保九年正月、竹本座の興行を其初度の演奏とす。當時の題は關八州繫馬

なりき。櫻痴居士の改作せし今の曲には五幕あり。

居士は既に勸進帳を改竄して、頗る世議を招きしことあるに、今又此舉あり。彼演劇場裡の詩人にも見えたる如く、後昆の古賢の詩賦を改むるは容易ならざることなれば、こたびの改竄の善惡を評するは論劇家の務ならむ。

さるを幸堂得知氏が眞の見功者といふものに、全體昔は作者の難を拾つたり、狂言に非を打つたりするを、眞の見功者とはいはなんだ、今は無暗矢たらと狂言の筋へ白人が嘴を容るゝは悪い事だといはせしは何事ぞや。先例なきことにも今人の忽にすべからぬ事あり。白人とは狂言作者ならぬものをいへるなるべけれど、批評家たらむもの戯曲といへる詩の善惡を評せずして可ならむや。無暗矢たらに評することの不可なるは、豈特り狂言のみならむや。

この度の改削につきていち早く三月十九日より二十三日に至る讀賣新聞の紙上において之を論ぜし合卷道人こり、いと心憎き才子なれ。彼は近松の作は文章すぐれて麗く、讀みて聽きてもおもしろき割合には、目に観る劇にはおもしろからざること、さる故に其曲を演ずることは、後來漸くまれなるべきこと、就中繫馬は近松が曲中にて、拙きものにもあれば、趣向のたてざま按外に軟弱にして、理義の人を感ぜしむるに足るものなきこと、通篇の主人公たるべきもの此曲中に見えず、趣向も龍頭蛇尾なること、毎節戰鬪の事多く、婉約の致に乏きこと等を述べ、曲中の人物、將軍太郎良門、出羽冠者頼平、侍女小蝶等の性質を詳にし、曲の關鎖の處なる、彼網が伯母の男装して頼光の館に赴き諫る場、其子纜の自害を歎く場などを、改作者は奈何すべきと疑ひたり。

合卷道人は自ら都人に非ずといへり。余はその何處の人なるかを知らねど、劇の事に厚きと、談論

の精緻なるとは喜ぶべし。縦令文中に昔と今とは道德殊なり、昔の道德にあてはめて書きたる淨瑠璃を以て、今日の芝居を改良せんとする、是れ果して社會の進歩を助くる方法ならむやといへる如きは、殆ど解すべからざるものなりと雖、其取るべき節は次章に於いてこれを參酌せむとす。余は先づ繫馬と二代譚とを對舉して、其得失を審にすべし。

命題の別

關八州繫馬といふ舊題は將門の旗章の繫馬に取れるにて、其子が父の遺志を紹きて兵を擧ぐることを作れるなれば、命意明なり。相馬平氏二代譚といへるも同じやうなる心にて、相馬内裏と僭號せし將門が子の再擧の事を作りたるを示すなるべし。

命題を以て果して意匠を要するものなりとせば、後題は前題の雅なるに若かず。繫馬の旗は新曲にても、初幕にて伊豫の内侍が良門を討たせむとて滿仲に賜ふ處あり。又瀧夜叉が源家の館に忍び入るも、之を奪はむためなり。大切には頼光此旗を良門に還し、これをして感恩の餘東國に隠れしむ。其全曲に關係あること此の如くなれば、取りて名とせむも亦善からずや。

主人公の別

繫馬にては出羽冠者を主人公とし、將軍太郎を閑人物とせり。二代譚にては彼を改めて滿仲の子美女丸とし、將軍太郎良門を本のまゝになしおき、主客の關係をば存じたり。

出羽冠者頼平は繫馬にて兄頼信の娶るべき詠歌姫を欺き、自ら頼信なりといひて之に通じ、伴ひて奔る途すがら、鞍馬山にて良門に姫を奪はれ、迫られて落草し、賊の偏禪となり、兄と闘ひ、敗れて俘にせられ、乳媪、妻等の諫を容れず、臣箕田纜の自殺するに及びて、始めて志を翻したるも、

猶良門との情誼を棄てず。一たび其縛を釋き恩に報ゆる人なり。

二代譚の美女丸は父の出家を勸むるを嫌ひ、奔りて箕面山に入り、良門を刺さむとして果さず、却りて良門に誘はれ、其舉に與し、還りて父を説かむと山を下る途、斷崖を踏みはつして、臣仲光に救はれ、仲光と其母との僧となれといふ諫を聽かず、檢使を受けて自殺せむとするをりから、仲光の母と仲光が子と死して之に代る、美女丸は髪を剃り、二人が菩提を弔ふ。

頼平は道理に暗く、無節操にして、且怯懦なる袴椅子弟なるに、脅迫を受けたる將軍太郎のために一言の約變ずべからずとて、固執聽かず、纜を殺すに至るは矛盾なり、故に主人公とはなし難からむとは、合卷道人の説なり。而れども余を以て見れば、頼平が行の前後相殊なるは、其性柔弱にして、是非の別なく、人に與し易き人物なるためなり。必ずしも戯曲の主人公に適せざるにあらず。近松がこれをかく用ぬきとて咎むべきにあらざるべし。之に反して美女丸は血氣ある執拗の少年なり。唯武家に生れて僧とはならじといふ意のみを執りて動かず、媼と其孫との死を迫り出すに至るは、其理義に通ずる如き言に似あはしからず。學海居士が美女丸に扮せし新藏を評し、奮勇猛悍、勇猛精進といひし讚辭はいかにぞや。

良門は繫馬にては父の志を紹げて叛し、頼光が鴨川の館に入り、平井保昌と戦ひ、詠歌姫を脅して頼平を味方につけ、俘となりたるをり、頼平に救はれ、遂に誅せらる。

二代譚にては、箕面山に籠りて官人を脅し、其財を奪ひ、美女丸が來りて己を刺さむとするをり、勤王の志を陳べて、源氏の藤原氏に諛へるを罵り、之を説服して己が黨となし、頼光が鴨川の館に忍入り、面り頼光の罪を責め、彼が藤原氏の隸屬に非ずといふを聞きて安堵し、繫馬の旗をもらひ、

朝廷に事あらば兵を擧げて來り援はむと誓ひて、東に還る。

繫馬の良門は大志を懷けりといふにしもあらず。僅に驍勇ある盜のみ。二代譚の良門は團十郎に勤めさせむためによ、一英傑とし、楠、新田の如き人物としたり。されば父將門が叛をさへ、藤原氏の專横を憎みてのわざなりとしたり。學海居士が正史に悖るといへるのみにて之を難せしは充分ならねど、篁村翁が此説は山陽、白石後の論にて、當時の人情になきことなりといひしは善し。古蒼南翠氏はその正史に乖ひしを難じ、是れにては劇として首尾の貫徹せざる所はなきかといふのみにて、その何故なるかを詳にせず。兎に角作者がかゝる「アナクロニスム」を使ひしは趣を損ずることいふまでもなき事なり。

全局の結撰

繫馬にては頼平、良門、二代譚にては美女丸、良門の兩人の關係は新古二曲の主なる趣向なり。されば繫馬にては頼平が境遇に従ひて志を易ふるさまを述べ、これを窮境に落さむとて、良門といふ人物をいだしたり。又これを窮境より救はむとて、媼の諫、纜の死などを作りしなり。近松は必ずしも心を通篇に用ぬず、主に句を鍊り、偶人の排置を考へ、さまざま材料を捏合せしものならむ。されど詩才流石に高ければ、頼平と良門との主客の分紊れず、情文兼ね至り、我舊曲としては戯曲の性質に乖きたること少きものなり。

二代譚に至りては美女丸と良門との事、離れ／＼になりて、唯或る境地にて相逢ひたるなり。美女丸は徹頭徹尾出家せじといふ片意地あるのみにて、仲光が母と子との死もこの「モチイウ」に

のみ關係したり。良門は又別に獨立し、終身帝室に盡さむとの忠心を懷きたり。かく兩主人公の相殊なる「モチイウ」にて働きしことを捏合せしゆゑ、主客の分明ならず、關係も薄らざたり。古蒼南翠氏は源家は清和天皇の流れなれば王孫なるに、世は藤原氏に蔓られ、箇程の武勳を以て四位に止まること遺憾なりとて、暗に藤原氏に含む所あるものゝ如くし、後段美女丸の良門に服するの地を作れりといへど、同氏は戲曲の何れの部分にて源家の藤原氏に含む所あるを認められしにか、この曲美女丸が良門に服するより前の段に、此等の布置ありしを見ず。良門すら大切に至りて頼光が朝廷に事あらば關白なりとて用捨はせずといへる一言にて、初めて源家の藤氏の幕下に立たぬをたしかめたるにあらずや。

重なる人物の別

主人公に次ぎて重なる役は侍女の小蝶なり。小蝶は良門の妹にて、實の名は瀧夜又と呼び、源家の館に間者となりて入り込み、源公子を慕ふことありて、曲中の兩人物を繋ぎあはすものなり。唯二代譚にては、公子の名頼信を頼光と改めしのみ。繋馬にては頼信を慕ふあまり、頼信が戀人詠歌姫を欺きて頼平と通せしめ、尙夫人にせよとて内裏より頼信に賜はりし伊豫の内侍を妬み、合巻の夜庭にて得たる蜘蛛を食中に入れ、内侍を害せんとす。此夜良門も頼信を殺さんために忍び來り、塀の外より庭の内に通せる筈にてうの意を小蝶に告ぐ。小蝶はこれの戀人を打たせしむる心を苦むる中、敵に覺られ、平井保昌に殺さる。その冤魂土蜘蛛となりて源家に祟ることあり。二代譚にては詠歌姫の事はなけれど、うの他は全く前の構に據れり。唯後段頼光の刃に死することに改め、これより土蜘蛛となりて祟ることなし。繋馬の如くあどけなき初戀より嫉妬に移り、嫉妬より毒婦の本性に移らば、

合巻道人の云し如く面白き愛情の發達をしも見ることを得べきに、新曲は頼光を慕ふ状を示す餘地なきため、初戀の様明ならず。又死に臨みて、この恨やはか返さでれくべきかといへど、土蜘蛛に化することなきため、此言も畫餅に歸したり。さては罪のなき少女かと思へば、唐金小平太がうの身の戀情を兄に告げんといひきとて、隙を見て縊殺し、泉水に投ずるは怖るべき毒婦の様なり。かく前後不釣合なるは、繋馬の如く、賊魁良門の妹にて、兄に似たる毒婦に作らざりし改作者の過にあり。而るに幸堂氏は瀧夜又といふ氣はつなる振舞見むといひ、鹿山人は失望を抱く良門の妹とは請取兼たりといひ、共に無辜の技藝者松之助を責めしは、氣の毒千萬のことなり。

次に劇に演じて尤も勤めにくき役、幸堂氏の當狂言の主人公といへる役は、繋馬の渡邊綱の伯母にて、二代譚の仲光の母賤機なり。彼は笹目の少貳と名乗り、うの保育せし頼平の命乞をなし、此は綾部保と名乗り、先にこれのが育てし滿仲に美女丸を救はんことを願へり。その男装して主を諫むるは同じ。唯彼にて老嫗が女なりと明し、裸身となりて起つ居つ歎くことあるを、いかにあらたむべきかと合巻道人の疑ひれもひしを、此にては烏帽子をとり、直垂をぬぎて、女装を示すことに改めしは好し。又二代譚にて賤機が重藤の弓にて美女丸を折檻するは、橋供養梵字文覺にて上總忠光が平宗盛を打つに似たり。うの精神は理非を問はず、親子を調和せんとするにあり。此役を團十郎の勤むる爲めに二代譚にては自殺して主を諫むることゝしたれば、人物は重くなれり。

繋馬にて箕田二郎籠といへる役は、酒宴の暗まされに侍女小蝶を挑みて、烏帽子の緒を切られしに、頼平情ありて諸士に縷を切らせたる爲め、其事顯はれず、後その恩義にて自殺して諫むといふ氣概ある士人なり。二代譚にては美女丸の事迹を編みし爲め、藤原仲光を出し、美女丸を谷間に救ひ、

うの短慮を諫むれど聽かれず、主公の怒に觸れ、蟄居を命ぜられ、尙其子に囑して美女丸と共に逃れしめ、討手をひき受け戦死せんとれもふほどに、うの母と子が先んじて死し、以て忠節を完うせり。されば思慮深く、忠義厚き臣に作りしなれど、脚色のあしきたためその本色を顯すべき餘地をかりしは惜むべし。嘗て默阿彌が著し、二代源氏譽身替も謠曲仲光を翻案せしなれど、悲壯劇の結構頗る備はりしため見るべかりき。

繫馬の源頼光は其子を刎ねんとせしだけの人なるを、二代譚にては満仲に改めたり。新曲の満仲は一部の原因となる重き人物となりたり。されど彼が子孫の冥福を祈ると云ふだけにて、此頭角嶄然たる美女丸、後來國家の干城ともなりぬべき美女丸を強て出家せしめんとし、少しも夫人、臣下の諫を聞入れず、美女丸が一たび辭したりとて直に殺さんとし、後良門に與したりとて刎ねんとせしを見れば、其拗強なることは、美女丸にをさく、劣らず、人をして父子心を合せて臣下を苦むるかと思はしむ。満仲は當時老たるに、うの思想は少壯血氣の人の如し。又彼が必ず父を恨むなよといふ處、美女丸の姿を目送する處、乳媪に弓を與ふる處などにて思慮深く見ゆるはいぶかし。これ蓋原因の不充分なる爲めの誤なるべし。

うの他二代譚にては繫馬の頼信を頼光に改め、又仲光の子幸壽丸、渡邊の綱などを加へたり。

技藝の評

坂東家橋。源滿仲役。序幕の顔の拵餘程ふけし作りなるに、打扮の古雅にて容貌の温藉なるため、武將よりは文官らしく見ゆ。幸堂氏は音調もめつきり寂を持ち申分なしの出来といひしが、余は老人の調子の中をりくはげしき少年の調子交れりとれもひぬ。臣下の諫を拒み、きかぬくくくと

申すにといふ處、美女丸が出家を辭みきとて詞を背かば手は見せぬと突立ち、刀に手をかくる處、幕切きつと異見を申聞けよといひて疊を蹴立て、入る處など、科白いづれも姿と適はず。輕躁短慮に見ゆたり。これは主に戯曲の拙きためなれど、此優も老たる中に自ら武勇の様見ゆるやう作らば、此難はあらじを。奥庭の場。美女丸の出奔せしを見送る處、右手を舒ばして徐に簾を掲げ、右の腕にて窓にもたれ、左の手を懐にしてその儘凭りかこりて向ひを見詰むるは、痛心のさまをうつし、ものにや。筋書に載せし不孝ものめがといへる白もなく、これにて木をむの幕をひくは、團洲主義にてにがくし。三幕目にては顔の拵急に若くなり、科白一としは猛々しくなりたり。幸堂氏が立派な源家の大将株といひしも、打見たる所にては尤なり。されどこの大将は親子の愛をいふものは少しも知らぬ人を見ゆ。さらば今少しんみりせる愛を隠す様なる仕打あるべし。媼が賤機は即某といへるとき、思入なきはいかにずや。されど強ひて助命のことを請はれ、目を閉ぢ、扇を膝につきて、無言の思入はなにとなくよし。源頼光役。伊豫内侍と濡の場。白の中單、淡紅の衣、薄紫の狩衣のうつりよく、烏帽子に白と緑と染ぬきの袴を着け、髯のつけ方もよく、白粉もこく、態度、言語とも優美の中に情を含みて、他に類ありとも覺えず。五幕目、小蝶を切る處は勇ましくてよし。良門との問答は評なし。鎧でたちは紅葉時平家世盛の宗盛に比して異なることなし。

市川新藏。源美女丸役。全曲の主人公に扮せしは何等の幸ぞ。加ふるに學海居士はこの度師につくものは此優なるべしといひ、篁村子は此一芝居にてめつきりと藝を上げたりといひ、幸堂子は一言もなし、見物總代に大出来と譽て置ますぞといへり。されば此優の爲には此劇は出世狂言と云ふも可なり。余は嘗てうの義成を評せし時、師匠の衣鉢を傳へて一種の異味ありといひし言の虚じか

らざりしを喜ぶのみ。序幕の打扮を祭の仕丁の様なりといふものは、未だ土佐の書巻を見ざるもの言なり。調子を師匠の假聲なりといふは、辯説の爽なるをしらぬものなり。奥庭の場。東口より緋威の腹巻、紅と緑とうめぬきの袴、金糸にて櫻花のぬひとりせし女小袖を被り、黄金作りの太刀を持ち添へ出来り、下座の謠をきき、あれが即父の御聲と振返り、餘所ながら暇乞の愁歎、ちよぼにのりての仕打面白し。これより氣をかへ花道をかけ入るまでよし。箕面山の場。女の小袖を着、かつぎを被りて出で、庵室に宿を求め、良門と山賊の噂する中、様子を伺ふ工合よし。良門が粟の飯にてもまわらせんと側を向く隙を見て、かつぎと小袖をを除き、切り付くる呼吸、いかにも烈かりき。余が見し日には、良門に扮せし團十郎が之を受けもとて、右の小指を痛めし様なりき。これより良門にあしらはれ、遂に説き伏せらるるまで隙なし。谷間の場。仲光に救はれ、良門の忠義を説き、味方につけよといふ處、仲光、どうぢやいといふ白まはしは投げだしたる様なり。これより仲光の止むるを振切りかけ出す處仇討といふではなし、あまりに氣違ひみたり。幸堂子は眞に迫り思はず泪が翻れましたといへど、余は思はず失笑せり。これ改作者の動因を示すこと充分ならぬためなり。されど此優が實際派の極端に走り、科白ともずんざいにて、活潑と粗暴とを取りちがへし弊も明かに見ゆ。仲光邸の場。兒鬚に結び、黄地に緑にて笹龍藤の縫ある衣、灰色と白と染ぬきの袴にて奥より出る處、死を極めし體見え太だけれど、前幕に比ぶれば急にちつきて重々しく見え、別人の様なり。これより媼、仲光の妻の諫を容れず幸壽丸を諭す處など、老成人の如し。檢使來りぬと聞き、仲光を押退け自殺せんとする處より烈くなり、媼と幸壽とが代りて死せしを見て驚き仰向に倒るるは、前の沈着に釣合はず。外にいくらも仕打はあるべし。兩人の菩提を弔はんと髪を切る處

また沈着したり。此處の丈を評して學海居士のかくてこり名僧知識ともなれと奥ゆかしといひしは過賞なり。

市川染五郎。仲光の子幸壽丸。顔の拵白粉濃過ぎ、兒鬚のうつりあしく、美少年とはいはれず。うの癖道成寺所化のうつくしきは何故にか。父仲光と美女丸をおとさむと計り、互に意中を察する處、至極面白き幕なれど、少しも冴えず。二代源氏譽身替にても此役は此優が扮し、仲光と親子の情見はれて妙なりしが、如何なる故にか。蓋二代源氏は脚色整ひ、此役もさまでむづかしからず、唯幼き童が忠義に死せし丈なるに、この度は筋もあしく、役も重くなり、且此優近頃脊たけは人並に超え、腕も甚だのびしたため、一舉一動うつに失ひてみにくし。此優は踊の師匠藤間勘右衛門の子にて、初金太郎と呼び、踊は上手の方なれど、劇に用ゐては精神に乏しく、いつも遠慮がちに見ゆるは惜むべし。

岩井松之助。侍女小蝶役。序幕。頼光と伊豫内侍とのかたらひを聞き、嫉妬の仕打あり、奥庭にて間者より兄の書を得、釣燈籠の光にて讀む處は、染五郎が代りたれば見ることを得ざりき。新館の場。うす紫の着附、桃色の下襲、緑の帯にての出美しく、何となく媚態あり。婚儀のため庭の掃除を命ぜられ、木の枝にかゝりし蜘蛛は毒蟲ゆゑとりすてよと侍女がいひしより、蜘蛛に目をつけ、これにて内侍を毒せんとの思入よし。この蜘蛛を木より拂ひおとし、懐紙にて追ひまはして押ふるも又よし。間者に入りし唐金小平太が己の意に従はずは頼光を慕ふことを兄に告げんと逼るを欺きて刺殺す處、幸堂氏は筋書通り縮る方瀧夜叉らしくてよさうなものだに、どういふ都合か悪い思付なりといへど、これは改作者が勤王家良門の妹に作りながら、此處にて人を縊り殺す毒婦のやうに書きしが疎

漏るるにて、此優の罪にあらず。余は寧刺殺して後につたりの思入も除きし方改作に適ふべしと思へり。良門と覺にて問答し、うの情人を打たせじと氣遣ふ仕打申分なし。この覺より話をなす前まで水の流れ落つるはいかにずや、舊曲には水の涸れたるものに作りたるに。頼光に切られ本姓を名乗るまでよくつとめたれど、改作者が前後を削除せしため、勢して功なかりき。

市川團十郎。將軍太郎良門役。箕面山の庵室に相馬行者の拵、鼠衣に鼠頭巾にて後向きに看經して居る處、佛像の古幅、朱檀の經机、鐵の花瓶などを列べ、經文の張交せし襖など建てしさま、何れも凄涼の氣色を添へてよし。女装せし美女丸がおとなふをり始めてこなたを向き、うだに火をうつして門に出で、誘ひて上るまで、嘗て扮せし八犬傳の肩柳道人に似たれど、一癖ありげに見えてよし。美女丸が良門の噂する時思入など少しもなきは所謂濫いと申すところか。彼が良門は假令賊はなせども、不義の官人を脅すのみにて、罪なき女わらへは苦めじと、外ながら辨解する處面白し。隙を見て美女丸が切込み來るを、身をかはし、ひら手をのぼして身構する處まことしからねど見た目はよし。己は勤王の士にて満仲こう國賊なれと罵る。美女丸たゞみかけて切りつく。これにて頭巾脱げ蓬髪を顯はし、圍爐裏のうだをとりて暫しあしらひつきはなし、返答あらば承らんとそだをつき立てゝの見えよし。これより素志を明し、所存を極めてといひ、うだにて壘をたゞき、返答あれよといふまで、例の辯説にての白まはし、いかなる不條理にても尤に聞ゆ。美女丸の心服するも無理ならず。五幕目。頼光の館に忍び入る處、本釣鐘をうちこみ、上手より徐々と歩み出るさま、立派／＼。金襴の直垂、烏帽子、腹巻の絨毛美く、黒鞘の大刀を鷹尻に佩びたる、その品格の氣高き、弓張月の爲朝に髣髴たり。白打の立廻りいつもとちがひ、輕々と突きはなすさま、大剛の勇士と見ゆ。

瀧夜叉を呼び活け心をたしかにといふより、もはや事はきれたるか。ぶうつと云處、豪傑の愁歎はかくあるべし。幕切、烏帽子は落ち散りあらぬかと頼光の臣下に烏帽子を拾はせ、大儀であつたといひて頭に戴きて幕となる處、世議囂々、無禮なり、傲慢なりといへるは、衆口一の如し。畢竟團洲がやたらにえらさうに見せたがるが爲に外ならず。藤原仲光役、顔の拵髪をあまりに長く生やせしかば、品格高きに過ぎ、源氏の家隸とは見えず。幸堂子が好く云へば弓張月の毛國鼎、惡くいへば沖繩縣の賣店主だといひしもこれがためならん。仕打は間然すべきなし。美女丸の言をきき居るうち、終始土に手をつき居る注意は感心。美女丸が良門を忠義なりとし、これに同意せりときゝての驚き、當惑して頭をさぐる工合、自づと膝の手を土につく模様善し。美女丸がはやりて駆け出すを抱き留るは眞に迫れど、曲のあしきためその甲斐なし。邸にてうの子幸壽丸と天命の長短を論じ、忠孝の雙全なりがたきを説きて、互に心中を明す所は詩として尤も味深き一節なり。されば八文字屋も見應へあるやういはれしが、見ては少しも悲壯の感動を起さざりき。蓋幸壽に扮せし染五郎の拙なるため團十郎の技を傷け、權衡を失はしめし爲ならん。出仕して疾足に歸り來り退去を勸むる處、美女丸の自殺を止め及を奪はんと争ふ處、孰れもよし。母と子との死を見ての驚きも、諸膝折りて腰をつくのみにて、騒がしからず。美女丸が再び自及せんとするを止め、母と倅の忠義の最期犬死にさせ玉ふかと涙を含みての言ひまはし善し。篁村子は仲光が生害せし母の替り役なるゆゑ、下を向きて母に代りて白をいふを笑ひしが、余が見しときは除きたり。妻が嘆くを叱し、れ使者の手前かまししいといふもよし。首桶をかゝへ、ねしるしたしかにね渡し申すといふ結句、力のぬけし調子妙。これを木の頭、本釣鐘にて幕とは、活歴史家は垂涎三尺なるべし。その打扮、谷

間の旅装もよけれど、邸の場にて黄直垂の古びしを着たるは、貧きさま見わたて一入よし。仲光母賤機役。男装して頼光館に来る處、學海居士は一に婦人の男子に扮せし體を失はざりしは妙なりといひ、篁村子はこじめより老女にて爺とは更に見えず、見せぬ所が團洲の妙なる處かといへり。仕打を見る事の細密と粗大とにてこの差は生じけん。げに烏帽子、直垂をこりまどひたれ、足取のこまかさ、突倒さるゝかよわさ、體は小さく、聲は咳枯れ、言は吃り、奥の對へ案内めされ、さ、ついてみよ、うつてみよなどの白廻し、全く女と見たり。唯男らしきは曲中の文句のみ。豈學海居士が所謂笑にて婦人の相をあらはしむをまたんや。頼光に利害を説くところ、意味は理に合はねど、言廻の巧なる爲め面白かりき。しかと誓ありしよなどいひて全く女になり、ようもくこの媼にうき思ひをさせ玉ふよなの泣も感服。御臺より賜はりし衣を押しし處もよし。願を許され腰の立ちかぬる仕打を省きしは、左團次の鳥居彦右がしびれのきれし仕打の品格を下だむに優れり。頼光より杖として弓を賜り、これを見つと見て不審の思入ありて、その意を覺る處妙。邸にて美女丸を諫めて聽かれず、村重藤のゆみれつとりといへる淨瑠璃にて、ごめんなされませといひ、弓にて打据うるもよし。此等の技は後の談柄となるべきものにて、一日中尤も面白く覺たり。

二番目

御詠雁金染

は竹田出雲の男作五雁金を世の嗜好に適する様こたび書直したるものなりといふ。

大切

道成寺

にて、團十の花子は舞の妙を示したり。その主眼は奏技者の態度婉約にして何處より見るも女子とみゆる處と、宛轉意に従ひ落花の風に弄ばるゝ如き處とにあり。團洲嘗て市村座にて、踊にては天下に敵なしといふ中村芝翫と二人道成寺を演せしとき、已に彼を凌駕して見功者の膽を塞からしめしに、今や一世一代として舞ひ納めたり。惜い哉。(明治廿三年三月)

ひとつ家

一つ家は古河黙阿彌が尾上菊五郎のために著はして、此四月より五月まで市村座に於て演せし新戯曲なり。冠して演劇十種の中と謂ふ。黙阿彌は明治十四年十月、嶋衛月白浪に筆を絶ちて、本所の草廬に遷れたれど、世の好尚は翁をして、閑を得せしめず、尙狂言の番附、作者連名の後に翁の名を署し、上にすけの二字を附せぬは稀なり。此間全く翁の筆になりしもの新皿屋敷月雨暈の織巧なるあり、水天宮利生深川の奇抜なるあり、筆力の雄健なる四千兩小判梅葉の如き、情致の切實なる月梅薰籠夜の如きものありて、僅に余等が意を滿たしめたり。二十一年十月音聞淺間幻燈出でし後は暫く翁の筆に接することを得ざりしが、今やこの一つ家を得て、漸く多年の渴を醫せんと思す。

菊五郎は早く已に世話物の天道様といへる稱を得たり。丈が機敏と熱心とは、能く此名を成したるなれど、かの安政の昔市川米升の爲に曲を編みて演劇場裡の雙絶と呼ばれし黙阿彌が、今又菊五郎の爲に筆を振ひて、奇想を逞うするにあらずば、奚ぞ今日あるを得むや。されば黙阿彌は菊五郎の技に困りて始めてうの詩想を發し、菊五郎は黙阿彌の筆を藉りて始めてうの材能を現せしなり。嗚呼、明治演劇場裡の雙絶もこの二人を除きて又誰かあらむ。

余は一つ家の名を聞きて直にねもへらく。これ必ず菊五郎の着想にて黙阿彌の筆になりしものならん。後々の割書に演劇十種の中の文字あるを見て、その謬らざりしを知りぬ。蓋し演劇十種とは菊五郎の創意にて、彼市川家の新歌舞伎十八番に對する尾上家の藝なるべし。丈は未だ冠題の故を世に公にせず、演劇十種も未だ悉く稿を脱せざれば、明言せむ由なけれど、之を既往に徴して明治十四年七月新富座にて演せし土蜘蛛、十六年四月同座にて演せし茨木の如きは、うの中なるべし。當時土蜘蛛の冠題は三代目尾上菊五郎卅三回忌追善狂言といひ、茨木は半劇半謠曲好み茨木といへりしに、二十年四月千歳座にて再び土蜘蛛を演せしとき、始めて新古演劇十種之中と割書したれば、その頃の創意を覺ぼし。原來尾上家の累世怪談物を演じて譽高きは、其水子が一書に題して、彼松緑が小平治にて蚊蠅の中へ入る時には、土間の五六邊迄は男さへ見るもの少く、又梅幸がお岩にて盆提燈を出る折には、兩棧敷の處女たち消入る思で見ぬもの多しといひしにても明なり。さればその家の演劇十種に土蜘蛛といひ、茨木といふ怪談物を撰びしは、據るところありしなり。而れども余は此撰擇にも自ら利害の伴ふを見る。利とは何ぞや。流石家の藝といへる丈ありて、其曲に動かすべからざる主人公あり、其副人物との別明にて、全曲の進歩も整へる節多きことこれなり。害とは何ぞや。彼團洲の新十八番に倣ひ、謠曲の改作のみを高尙なる者と思ひ、迂餘曲折の妙映けたる枯淡なる一ときり物のみを執ること。な土蜘蛛も茨木も共に謠曲に出で、唯劇に似つかはしき振を附けしのみ。うの妙も變化の凄味を示すに止まり、本體を顯はしての荒れは寧ろ所作事に近きものなり。嗚呼菊五郎の妙處、豈斯の如きものならんや。大月の佞奸、直侍の盜俠、長房のいなせの如き、若其脚色結構整ひたらば、孰れか好詩料ならざるべき。孰れか採りて演劇十種に算ふるに耐へざるべき。若

し此の如き詩材を捨て、彼も世教に益なし、此も野卑に失せりとして、悉く詩境外に逐はんとするものあらば、うの謬見識者を俟たずして知るべからむ。

一つ家は世に知られし姥が池の巷説を採りしものなり。姥が池は今の淺草中店の右裏なる妙音院にありきといへり。又一勇齋國芳が畫きし一つ家の額の觀音堂裏に掲げられたるは人皆知れり。

一つ家の舞臺は淺茅原孤家の場といへる一幕にて、初め野育の馬藏と原中の草藏とを出し、引劍の話をなさしめ、次に老婆いばらとち花若とを出し、花若に宿を求めしむ。老婆花若の求に應じて繰車を廻らす。此時淺草觀音に詣でし娘淺茅歸る。ちこは娘に訊ねられて都名所の物語をなす。老婆はうだ取らむと裏手へ出行く。後にて娘色合の振事あり。伴ひて臥床に入る。老婆うら手より伺ひ出で、鉈を石にて研ぎ、客を壓殺すべき大石を釣りし繩を切らんとす。娘の留むるを突退け繩を切る。一間を開けばちこあらず。娘がいとじさに逃がしたりと聞きて答つ。尙異見するを憤りて殺さんとす。腕痺れて切ることを得ず。槐樹の邊に觀音ちこ姿を現して、うの罪を論ず。老婆非を悔い、池に沈みて死す。娘合掌して拜む。これを全曲の筋とす。

此曲の粉本は一中節の石の枕なりといふ。安政六年四月市村座の淨瑠璃種同薩埵誓掛額にて粟島の濡事、橋辨慶の前に一つ家を出し、老婆に三十郎、觀世音に訥升、娘に糸三郎が扮したりしが、其折の筋も略こたびのものに似たり。

この一部の脚色を評するに當りて、既出の院本にて着想の似たるものを取り、彼此對照して優劣を判するは、また批評の一方便なれば、然かなせり。

一つ家の境と婆の行爲及性質とは寶曆十二年竹田和泉、近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衛等の合

作せる奥州安達原の四段目に宵たれば、茲には彼を引用して對照すべし。

先づ兩者の境を比せんに、彼にて隣る家なき一つ家の軒の柱はすねきの松の文句あり。此には浮世離れし一つ家といへる白あり。唯彼は下野國安達原にて、此は武藏國淺茅原なるのみ。彼にては風颯渺たる安達原の句に起りて、老婆が獨絲繰るさま何となく凄きに、此にては幕明に小賊を出し、筋を聴かしめたり。こは我戯曲の慣筆なれど、殆無用の觀をなせり。他に一層巧なる寫法なからずやは。此にて花若が繰車の何物なるかを問ひ、老婆がこれを廻はすことに作りしはいと拙し。これ脚色の淡泊に過ぎ、面白き節少きため、故らに加へし蛇足なり。試に一考せよ。旅に勞れて宿を借り、座に就くや否や、繰車の使ひ方を訊ね、尙うれを廻して見せよと求むるは、想像し難きことに都育のちごにも似合はぬ無作法なり。初より繰車を廻して居たりとしても、茶を進めし後どれ糸などくりませうと仕事にかゝることゝしても、尙前者には勝るべし。請ふらくは安達原の老婆が繰りし篋の段を開き見よ。初め住み馴れ、居馴れ、手馴れたるかせの車やわくかせにといひ、老女はわくをくりとめてといひ、飛脚を殺し、わく、しぶといひ、まだ財布放し居らぬ、あゝ、儘よ、腕ぐちとつておかうと芋桶の底へ取納め又くり返す繰りもといひ、少年が忍び入るとは白糸の篋にくりまく繰車といひ、戀絹が退拍子に芋桶にばつたり、やあ、こゝにも人の腕といひ、處々黠出して用をなす。その筆法孰れか巧孰れか拙、言を費すまでもなし。又兒が都名所の物語もわくかせと同じく、戯曲を引延さんため強て挿入せしものゆる、趣向浮きて振を付けし甲斐なし。此にて老婆がうだを取らんと鉈をもちて出で行くよりは、彼にて戀絹の陣痛を止むる藥を買はんと出で行く方順序整ひたり。再度の出は、彼にて後にすつくり白髮のばるといひ、いつの間にか歸りし事と

せしは、凄味は深けれど、劇として演ずるには、此曲の如く本釣鐘を打ち込み、草を押分け出來り、内の様を伺ひ、石を砥となし、鉈を研ぐなど仕打ある方面白し。此にて兒を殺さんとするに、鉈もて繩を切り、石を落して壓殺さんとして、唯舞臺の上に斜に引きたる繩を切るは、俚説をうの儘採りしなれど、事に切にして洵に好し。彼にて老婆が戀絹のたぶさ摺んで肝のたばね、刺通されて七轉八倒、苦しむ體はぐる／＼、輪乗の如く打またがり、乳の下より十文字に、腹斷破る有様は、目も當られずむごらしきといへる、天一が西洋手品に髣髴たる慘狀を目前に示すは、如何に偶人を操る丈なればとて、さても殘忍なる趣向かな。これ作者當時の人情に媚び、客を釣らんとて奇を弄したる手段の、殆極端に達せしものなり。されど今も尙劇に演じ、往々喝采を得るは、その故解すべからず。此にて婆が娘を折檻する條にて、此一つ家へ旅人を留め、石の枕で殺すのも、己れに出世がさせたさ故といひながら、其娘が強て盗心を諫めたりとて、直にこれを殺さんとするを見て、人間の觀念ほど奇なるものはなしと梅花道人はいへり。然れどもこれ恐らくは力負の説ならん。老婆は娘の爲に人を殺すといふ舌も乾かぬに、極めて冷笑したる口吻にて、なんの惡事がやめられるものか、長い浮世に短い命、息のある中喰たいものを喰ひたい事をする積といへり。これこそ婆が本意をらめ。されば先に娘の爲といふは、腹立紛れに娘を責むる口實なるべし。假令彼娘の爲といふも、これ眞に娘を愛するならず、唯己が釣らむとする旅人を留むる手段なること明なり。默阿彌が故らにこの句を付けし所こそ、人情の微を穿つ翁の長處なれ。然れどもかく斷定し來れば、この老婆は親子の愛などは毫も知らざる鬼畜に齊しき人物なり。然るに末段觀音の姿を現して諭すに至りて、直に懺悔し、尙娘に別を惜み、投身することゝなしたるは、いといぶかし。かくては悔悟の後

とはいへ、情愛も廉耻も少しは知れるものゝ如く見え、老婆の性質前後適合はず。蓋此不調和は、作家が佛力を示さんとして、娘を殺さんとする條を出しゝ爲ならむ。故に娘を殺すといへるを感しとせば解すべきも、眞に殺意を含めりとしては、原因實に不充分にて、老婆の心あきらかならず見ゆるなり。又懺悔して身を沈むるも、強て局を結ばんとせし痕見けて拙なり。翁は何故に此曲を舊説に採りながら、娘ちこの美なるにまどひ、ちこのふじどにゆきうひふしけるを姥じらず、ほどよきに石をおとしかけて娘の頭をくだき、之をかなしみ、池に沈て死す云々の一節を改竄せしにや。この文の如く娘は愛情にほだされ、ちこに代りて死し、婆は慾に耽りて惡をなすに、ちこの惡をなさんとする器にて子を殺し、初めて人の誠を顯はし、身を投ずるは共に人情に適へり。翁がこの好詩材を捨てしは、恐らくは孝女を殺さんこと勸懲の主義に違へりとして、殊更にこれを避けしならむ、惜むべし。されど安達原の結局も亦拙極まれり。婆が安倍頼時の妻と名告り、手段のうらをかゝれぬとて自殺して終るとせる是なり。斯く詐偽を本としたる脚色は、その訴ふるところ情感に在らずして、趣味に乏し。

さて全體の結構に就きて云はゞ、老婆が旅人を殺し金を奪ふは、兩者共に同じけれど、うの本意彼は軍用の爲にて、此は私慾の爲なり。軍用の爲といふは例の附會手段にして、假令前後の關係あるにせよ、私慾の爲といへる純粹なる原動力の面白きに及ばず。而れども一つ家の如き安排法にては戯曲とはならず。また兩者の文章を比すれば、此には一句の巧妙なるものなく、徹頭徹尾陳腐を免れず。彼にては句々凄慘の趣ありて、陰森の氣人を襲ふ。古作者の工夫、今人の比にあらざるを知るべし。

次に一つ家の主なる行爲と云ふ可きは、客を泊らせて殺さんと計れるを、家の娘が客を戀ひて助くいふことなり。その趣福内鬼外の神靈矢口渡、又キヨルネルの傳奇「トオニイ」などに似たり。されば茲には此二著作を引用して對照すべし。先づ客を殺す原因、矢口渡は捕へて賞を得む爲とし、「トオニイ」は舊怨をかへす爲としたるに、一つ家にては財を掠むる爲となしたり。この差異は脚色に因りての事にて、優劣を判すべくもあらず。次に少女の愛情を叙するに、矢口渡にて、お船が宿を求めし落人の義峰を戀ふるは、一見美き殿御なりと思ひて挿口説きしなり。一つ家は淨瑠璃に火影に見れば兒姿、すがたに見て思はずもあり、又女子の口から打付にお恥しい事乍らとあれど、白にはても美しいあなたといふ一句ある丈ゆゑ、唯美しきち振に思ひ染めしならん。此二曲の如き寫法にては、餘り輕卒に見ゆ、遊女に似つかはしき所行なり。「トオニイ」にてはこの間を叙すること太だ精細なり。客が世をさりし戀人のことを語れるに、娘が其情に感ずる處など、いとめでたし。斯の如き愛情の發達を描出するは、西歐詩人の特色にて、東洋從來の作者が夢視せざる所なり。次に客を逃がし親を諫むる處、一つ家にてはちこを逃がしはあちごさまがおいとさう御座りませ故といひ、母には惡事を做すが此身の爲ならば、己を殺して惡を罷めよと諫む。賞すべき價なし。矢口渡にては先づ意中の人を落し遣り、自らうの床に臥し、乃翁の刃に貫かれて、刀下に其非を諫め、尙相圖の太鼓を鳴らして捕手を散ずといふ、本邦の院本中にも超然たる妙案なり。又「トオニイ」にては黒人闖入して、情人の脱し難きを察し、自ら之を縛して敵刃を免れしむといふ奇想あり。さて三者の結局を見るに、一つ家にて觀音の利益に感じ、婆が身を沈むるは、佛力の廣大を示す方便なれば、宗敎的の趣はあれど、詩趣少し。「トオニイ」にて客と娘とを夫妻とし、目出度局を結びしも

同じく平凡に失せり。矢口渡にて頼兵衛は神箭に斃れ、お船は身死すれども郎を完うし、自ら甘じて絶命するを以て終りしは、遙かに前二者に優れり。されど「トオニイ」の結局は、改作者キヨルネルが失錯なり。これを原著者クライストが著せる悪因縁（水沫集一〇〇面）に較べて見よ。客がうの伴侶に救はれ縛を脱するや、直に短銃を擧げてトオニイを害し、うの己を縛せしは救はん爲の策なりしを聞き、銃口を取直し自ら頭を打貫き、娘の屍の上に伏し累なりて斃れ、伴侶が兩人の屍を擔ひ、黒人の兒を質とし、静々と境を出づることせり。其落想天淵も管ならず。概言するに一つ家の事蹟は、固より一段の昔話にて、うの主眼とする所も、唯不思議を示すに過ぎず。若しこれを詩材とせむとせば、唯以て叙事詩に入るべく、以て繪畫の如き技術に入るべきのみ。余は默阿彌が斯の如き作を公にして、強弩の餘勢を示したるを憫み、又菊五郎が工夫せる演劇十種も、後世に傳ふ可き價なきを惜む。

此曲には引返し幕を附し、淺草觀音堂の場一幕を示せり。あそび人嶋歸の佐渡七が夜堂裏の賽錢箱に凭掛りて假睡せしを、掃除坊主堂念に醒され、國芳の額に見惚れて居る中睡りし夢に、一つ家の書をうの儘見たりといひ、堂念に落ちし紙入を拾はれ、たいした銀貨で御座りませぬと怪まれ、銀貨は僅で、あとはみんな銅貨さといひ、五十錢の銀貨を出して與へ、睡りし故を問はれ、實は夕邊の仕事でといひ、問返されて實はわつちには夜職さといひくろめ、堂念が拾ひし手紙を見て、京町中米樓内小松どの姥が池よりと讀み、とんだ明石の嶋藏だが、こいつは種に、なり相なものだといふ白にて幕を閉ぢたり。流石白浪作者の稱を得たる默阿彌の筆なれば、句々兩意ありて面白けれど、試に前幕との關係を見るに、夢に一つ家の様を見きといへると、手紙に姥が池よりといへる文字あ

るとの二つのみ。うの關係は落語の落ちに類し、唯觀者の一榮を博するのみ。或は次狂言の種蒔なりといへど、恐らくは唯一時の思はせ振にて、玆は道具の替りしと、菊五郎の早替の上手なるに感服して、他を問はざるこそ、なか／＼作家の本意に適ふべけれ。

戯曲己に斯の如し。これを演せし劇を細かに評せむも要なし。菊五郎の老婆の拵普通なるを、幸堂氏は受けたれど、余は餘り今様の世話拵にて、淺茅原の昔忍ばれずと思ふ。活歴史的要求にはあらねど、今少し古風にあらまほし。面も尙一層恐ろしく作るこそよけれ。假髪も半白なりしが、寧ろ眞白の方勝れり。客に對してもたゞの婆にて、凄味に乏し。これ戯曲の短もあれど、勉めて技藝を平淡にせんと心掛くる結果と覺し。本釣鐘を打込み、虫の音の相方にて、藪疊を押分け出で、石にて鉦をとき、内の様子を伺ふ邊は、例の周到なる仕打にて、萬客屏息の面白味なり。娘の留むるを押退け釣繩を切らんとして畫面の見白になる處、幸堂氏も賞せしが洵に好し。娘を折檻し、これを殺さんとして腕麻るゝ邊は常套なり。悪業を悔い娘を抱きての愁歎、げに慚愧して眞情を露はしむ様はかくあらむと思はれ、始めて一つ家の婆らしくなれり。此等の仕打は此優獨擅なり。二役あそび人佐渡七。手拭を被り後向に賽錢箱にもたれ眠り居り、堂念に喚起され、初めて此方向き、手拭を取るといふ詭。散髪假髪の好みよく、唐綾の着附、半纏三尺の拵、五分も透かぬいなせ風。目覺めて欠伸をなし、それでは今のは夢だつたかといふ白廻し時代にならぬ所大受け。落したる紙入に銀貨の多きを怪まれ云ひくろむるも言譯らしくなくて偽ときかする處巧なり。禮に五十錢を出して與へ、いゝからとつときねといふ氣前を見する所好し。假睡せし言譯も思入なくさら／＼と言ひ抜くる機轉の利いた盗人の様好し。手紙を讀みて白あり。木の頭の替に一つ鉦を打込み、手拭をはた

いて肩にかけ、懐手をなし、新内の流しの相方にて堂を廻りて這入る處、何の譯もなければ、場内
どつと鳴渡りたり。松之助のちび花若、實は觀音大士。肥れたる人なれば端嚴の相なし。榮之助の
淺茅。身材少く大に過ぐれど、孝女の様見にてゆかし。初戀の様は今一と息なり。松助の掃除坊主
堂念。輕妙といふもあろかな事。へに銅貨でございますかといふ白、五十錢を貰ひて世事を云ふ工
合不思議く。明治二十三年四月)

余は新富街の劇を瞥見せしが、まだ出揃はぬうちにて、上野の戦争と勸進帳とのみを演じ畢はりし
とき、既に夜も更けむとしたれば、うがまゝに還りぬ。

上野の戦争

にては火焰の堂の間より閃きのほり、烟の廓にまはるさまなどおもしろし。曲は對話に照應なく、
全齣に局勢なく、これを文に寫して見るべき處とては絶てなかるべうおもはる。言語など一つ／＼
にいはいはむは大人氣なかるべし。曰歸農いたしてあきんど同様の身の上、曰隣家の琴の音は善けれ
ど書見の妨、曰あの琴がおかきものにさはるとおつじやる云々。此類枚舉に違あらず。氣にして
はたまらぬことなり。唯耳を閉ぢて目に堂の燃ゆるを見、鼻に烟消の臭を嗅がば、上野の戦争と
いふことは分るべし。金魚屋の場にて、池中に眞の金魚を貯へ、魚屋は眞の枯魚を鬻ぐさへある
に、井戸より水を汲みて見せたるなど、實際派とはかゝるものと涙の出づるばかりの有り難さ
なり。

勸進帳

は辨慶が目と鼻と口と一つに寄せたる貌つき、飛ろつばふの足どりなど、人目を駭かすに足る。加

旃此曲は局面の正々堂々たるものゆゑ、何となく芝居を見たるやうにて善かりき。但し相もかはら
ぬ團洲が濁音の候、わざけに何事かこれに若かずなど耳にさはりて耐へがたし。こゝは目のみにて
見るべし。何にいたせ此劇場に来るものは、入口にて兩耳に綿の栓を挿むを良策とす。(明治二十三
年五月)

きさらぎ末の日蓋の明きし壽座の狂言名題は、一番目伊達摸様春着襦、二番目妹香山婦女庭訓、切

狂言與話情浮名横櫛といふ。一番目

伊達摸様春着襦

は天明五年八月、結城座の初興行、松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸などがかほり留めし伽羅先代
萩にて、唯時節に適ふやうに名題づけせしまでの事。表裏伊達染小袖、着三升伊達襦など、此頃も
随分出でしことあれば珍しからず。花水橋の場。華奢な殿様が狼藉者を相手のあしらひ、優美の様
充分に見ゆ、こゝへかけつくる絹川のがらの大きさ、まことに釣合よし。竹の間の場。こゝは語り物
の本性顯はれ、美しづくめの奥御殿へ、黒出立の忍びの者が落ちて來るなど、想像できぬ話なり。
なかにははれなるは、八汐が政岡を罪にねとし、若君の機嫌を取らんとする時、うちはいやぢや、
政岡がよいと鶴千代に云はせ、猶れしかへすを、うちや主命に従はぬかと叱らす處、又そちこち
政岡のかほりに牢へ這入れと言はれ、さてもよう仕込むだものぢやと八汐が呆るゝ處にて、作者が
筆力の雋拔なるを見る。御殿の場。例の飯焚。歐羅巴にては食事のこと、鼻かむこと、みな卑みて
狂言に仕組まぬよし。いかさま此様なることにて、高尚なる感じの起さるゝ筈なし。六二連も心附
いて、此飯焚といふ狂言、充分悲しいものでなく、五十四郡の大主がひもじい思するといふが狂言

の山、竹の間から飯焚まで古今の長場、役者は貫目、見物は最負眼で見ても見らるゝなれと云ひしは理なり。また飯焚にて忍びをかせに雀の歌唄ふを、讀賣新聞評者は餘り殺伐で面白くないといへど、筋よりいへば、竹の間にての八汐の耳打を活かさむには、ここに出ず方無理なかるべし。しかしうちかけを被つたりぬいだり、御殿の角兵衛獅子といふ見物にぬきにして、あつさりそこなさは、或は眠氣覺しにやらんもしれず。床下の場。男之助の紅隈、萌黄の着附にて市川流の荒事と、かけ焔消せり出しの仁木が厚白粉、鼠の上下にての凄味と對をなしたるころは面白し。對決の場。幾箇條の對決を一幕にまとめしが作者の働なれば、冗談らしきを尤もるも野暮ならん。悪玉の仁木と善玉の外記とを下に据え、貫け役の勝元としよげ役の山名とを上並べしが操の三略なり。山名が證據物を焼きて、外記より見物に冷汗かゝせ、勝元が先づ仁木を賞めて、とど取つて押ふる捌き方は、芝居の法律をまなばぬ人には、解せぬ事なり。刃傷の場。立役の外記が仁木の手にかゝり、いまはに所領安堵の御行書賜はり、快く落入る處、細川侯に手づから薬湯を與へさせ、千秋萬歳云々の謠を借りてこの老父が死際を見事に引き立てたる趣向はめでたし。二番目

妹脊山婦女庭訓

は明和八年正月竹本座の初興行、近松半二、松田ぼく、榮善平、近松東南、三好松洛などの合作、殊に松洛は七十六歳の老筆のよしなり。今度は其中の二幕を引抜いての興行故、全體の評は申しにくけれど、出幕に附いて云へば、吉野川の場。大判司と定高と入鹿の脅迫に従はず、各々の子を刎ねて、恩讐一旦にして改まる愁歎場、つまり武士道を表に飾り、親子の情などは露頓着せぬといふを見物にしたる仕組方、大判司の詞に親といひ子といふも同じ世界にわいた蟲といふ文句あるにて

も知るべし。或人が一幕中首二つれもちやにして居ると悪口いはれしも無理ならず。三笠山御殿の場は、これに反して面白く趣味深き幕なり。前段入鹿が借上を極めし御殿に、無難作の漁師を出し、つゆりの權威にめげぬがさつなる問答をなさしむるは面白く、入鹿入りて後その坐せし席上に、鱧七仰向に臥すはよけれど、官女のちやら附く處には甚しき猥褻の文句あり。後段豆腐買の文句と共に宜く削除すべし。中段、淡海と橘姫とを出し、淡海が我と縁結びたくば、兄入鹿を刺せといふなど、利を以て情に代ふる、淨瑠璃一派の劣等手段にて、或人は入鹿より淡海の方がよつ程悪黨だといひぬ。後段、杉酒屋娘に三輪を出し、このあどけなき蓮葉娘が逢ひたさ見たさの一心より官女になぶらるゝつらさを一面に寫し、これを他の一面に寫せる官女の情なきあり様と反映せしめしは作者の力にて、竹に雀の振事入れしも好し。官女に撞き放されての歸りがけ、髪を結び直して、近所の衆をつれて来て、あの根太郎もつれて来ての文句、本文になき捨白乍ら、どつと受くるを無理ならず。嫉妬の醜再び燃いて取つて歸すより、鱧七の刃にかゝり、這ひまはる手に苧卷を云々の文句まで、寫し來りて間然す可らず。どじやくの相ある女の生血もて入鹿を滅ぼすといふは、これも淨瑠璃の舊套厭ふべし。忍月居士は心は鬼か蛇かいなあといふせりふを聞苦しといひしが、うの心は鬼か狼かといふ修正案を取次ぎしたるころ、なか／＼に聞苦しけれ。

興話情浮名横櫛

は四世瀬川如皐翁の書卸しにて、翁が狂言作者として譽を残しは此作與りて力ありしなり。されど其材料卑猥なれば、戯曲として長く存せんこと覺束なし。其目的はいきなるに富そうぼろなる安と破落戸ながら良家の子弟より出でし切られ與三とを安排し、面白きゆすり場を見する丈にて、藤

八の京談、多左衛門の捌き、いづれも附合せに過ぎず。しかし翁の文章に巧なる、與三がしがねえ戀も情が仇云々の白など、面白き處多し。

藝評は諸新聞定評あり。今これを參酌して卑見を述べし。

中村梅太郎。政岡役。拵はつひとほりにて申分なし。顔の作り、讀賣評者はちと若く麗しきに過ぎ、なんとなく品格足らずといひしが、若く麗しき丈を缺點とせば、むかし美貌妙齡にて女形の上乗たりし瀬川路考、岩井杜若の輩、争でか此政岡を變化七役の中に算へ得む。品格足らぬは別に故あるべし。同評者は又政岡が千松と誤り、扇にて鶴千代を打たんとして心付き、急に様子を替へ、面を和らげ、扇の金銀振返して君を愛づるさま、取付たき迄の愛嬌ありといひしが、この仕打は這入違にて、幸堂氏が嬰兒を愛する様で鶴千代には少しうつらぬやうといはれしぞことわりなる。榮御前を見送り、花道より千松の死骸に駭け寄るは、讀賣評者が尤めし如く、充分に腕を見する積かしらねど、矢張大坂臭味の抜けぬ所なるべし。千松の骸に寄りての愁歎、糸に乗つて淨瑠璃語りしは心得違と幸堂は云ひ、ちよぼに乗り過ぎて義太夫のお凌のやうであつたと竹の舍も啣ちたるは當れり。されどこの愁歎充分利きたりといふ讀賣評者の如き多情の人もあれば、世は様々なるものかな。竹の舍が何しろ此優にしては大出来といひしは、東京朝日新聞といふものを代表したる爲ならむ。忍月は政岡の役を大役といひ、難役といひ、舞臺のよもなる役の子役なるために、おのれが主動者とならではかなはざることを一因とし、政岡が忠義、耐忍、悲奮（悲憤か）の塊なるため、一言一句一舉一動肺肝より流出せむことを要するを二因としたり。いかにも子役を相手にての働は、おのれ主動者とはなるべけれども、子役は他の純粹なる能のわき師に等しく、大に主動者の藝（即愁歎）

を輔くるものなれば、これを累をなすのみなるもの、若くは何の用をもなさぬものなるやうに思ふは違へり。又彼肺腑中より流出する言語の必要なることは、決して政岡の上にはあらず、いづれの役にても然らざることを得ざるならむ。畢竟政岡の大役たり、又難役たる所以は、その忠義のためにもあらず、その耐忍のためにもあらず、又その悲憤のためにもあらず、眼中鶴千代ありて千松なく、奥づとめの眞面目を備へて、彼の男兒の足跡を絶ちたる奥むきにて、所謂をこまざりの氣概を發露すべき處にあり。忍月は又政岡の一步の失を以て、能く舞臺を活動せしめたるものとなしたり。余は忍月が認めたる一步の失の政岡に於いて、殊に其弊多き理由を發見せず。忍月又いはく。梅太郎が飯炊の場にて、子を誡め君を敬し、子に對する慈愛と君に對する慈愛と、均しく是れ慈愛なるに、其間に判然たる區別を見せたるを、一廉の手柄のやうにいひしが、これは大抵先代萩の作者の技倆にて、俳優の政岡としての舉動には、千松に對する愛は殆常に抑へられて、其形迹を露さず、後に骸に取付きて歎く段に至りて、始めて發呈するのみ。されば政岡が愛は、當初唯君に對してのみあらはるゝを以て、別に梅太郎の働にて、二種の愛の區別を立てたりと見ゆるところなし。さて梅太郎は我がいふ政岡の精神を充分摸し得たりやといふに、いと覺束なし。大坂仕込の癖として、無暗に泣過ぎ、お負に腹で泣く工夫なく、始終顔で泣きしは女々しかりき。且政岡の眼目といはるゝ千松殺しの場にて、八汐が突通するとき、すぐに若君を上手の一間に連行き、そばに引添うておてこそ、本文にも協ひ、千松を見返らぬ性根見ゆべく、團洲以下いづれもかくするに、この人の若君を上の間へ入れ、腰元に守らせ、自ら下手に來てかしこまるは、藝を見する氣かしらねど、心得違

なり。又泣をこらふるところこそ、男まさりの政岡がといふ本文に適ひて、榮御前がひき手をくつて歸る所なるを、この人は榮御前の實檢に据つた氣持か、膝に手をつき、茲も顔で泣いて見するは、精神を寫したりとはいはれず。まして舞臺を活動せしめしなどは、以ての外の事なり。飯焚の場もなんどなく色氣たつぷりにて、れきとしたる所なく、茶筌にて米かきまはすかたち、いづれ奥女中江島とは離れぬ中と見ゆ。千松の骸にすがり付く所、しかけをぬいで擲り出してかゝるは、上方流義かしらねど、見た目悪し。いかに愚に返りの本文ありても、さりてはとりはづし過ぎたる仕打といふべし。かくても君と千松とに對する愛を充分仕分けたりといふにや。後室定高役。これ亦政岡に似たる女丈夫の魂を見すべきところなれば、この人の腕前にて充分にこなし難かりしも宜なり。大判事と花道での割せりふ、枝振わるき櫻木はとあるべきを、櫻木もといひしは奈何。雖鳥の首打つまで餘り泣きすぎ、大判事さま、わけては何も申しませぬといへる、肝心のせりふも引立たず、段切まで泣伏したるきりなるは、餘り藝のなさすぎたることなり。これに満足して、看客をして幕の長さを覺えざらしむといひ、悲哀慘憺を圓滿に發表すといひたるは、いかに壽座に限りての贊詞なりとて、さても忍月の人の善さよ。

坂東家橘。八汐役。成田屋の岩藤當て込みてか、憎つぶり薄きことは、竹の舎、幸堂皆言へり。これもさら／＼としたる藝を學びすぎたる弊にや。勝元役。拵、仕打とも、これも團洲その儘なれど、大事なる辯説ものゆゑ、例の鳩ぼつぼの調子にては、妙に臻らざりしも理なり。切角おもしろき虎の講釋は、一向詰らぬものになりぬ。前に乗り出して、仁木彈正おそれ入つたかと、激しくいひ放ち、座に歸りて、さもあらむと調子を緩むるところ、息もつけぬ筈の場なれど、斯人のは本のかた

のみにて、苦しうに見ゆにき。外記に樂湯與ふるところ、竹の舎に譽められたるは、形のみ見せて善きところなりしたためならむ。われは斯人を團洲の藝を傳へむ人と思ひて樂み居れば、尙一層の心入にて、役々をしいかされむことを望む。鱗七役。體になき役を引受けて、天晴やつて退けられたり。幸堂は位を同くする役者の中にては、これが第一等なりといはれしが、われ等の見し目にては、先年左團次のせし鱗七に比べても、さまで劣れりとは覺ゆ。原來左團次の藝風は、よろづ勤慎にする方ゆゑ、このやうなる粗枝大葉的の事は、かへりて此人の長技となるにや。鎗を結び合して、枕とするは、あまり芝居過ぎたれど、簾を破りて烟管を掃除するは、無造作にて好し。銚子の酒を試すところ、物語のところ、孰れも立派にてよし。與三郎役。八代目の錦繪、權之助の寫眞など見て、その面影をなつかしみしに、このたびの嵌り役、多年の渴を醫したりき。幸堂は人の聲色つかはると難せられしが、肝心の名文句を、むざ／＼殺すが惜しさに、ゆるく言ひまはしたるが、自然本店に似たりと見ゆ。

中村秀五郎。齋藤藤太役。技藝ます／＼あく脱けて、松助のあとつぎになられさうなり。番頭藤八役。あまり旨過ぎて人に目をまはさせむとす。

中村傳五郎。荒獅子男之助役。忍月は棒調子と云ひしが、かへりて梅太郎などより抑揚あり。稽古の甲斐ありて嬉し。されど固より荒事に向く聲ならねば、悪くいはいはれしもことわりか。外記役。高島屋の専賣物として、妙藝人の目に残りたれば、この人などこれを勤めては、民部の駈付を喜ぶところなど、たゞの老爺となりて、大家の家老とは見えぬ。御教書受くるとき、上下の肩を脱して持たれしなど、心を用ゐたりと見ゆれど、上出來とはいひがたかりき。大判事役。がんにじよう親爺のこ

なし、梅太郎の定高などの上にあり。手一杯にこなされたれば、一通の價はありき。蝙蝠安役。秀鶴が當り狂言、寫し來りて遺憾なし。家桶もし團洲を學ばず、この人の秀鶴を學ぶが如くせられなきものなり。榮御前、入鹿杯、品格物は未だし。

市川鬼丸。竹の舎はしやにむに此人を目敵にして、とても評なすすべきにあらずといひきられ、忍月は藝に缺點多く羨むらざる憾ありと雷同せられぬ。忍月は沖の井を比較的善き方に數へしが、わが見たるころにては比較的悪き方なりき。八汐とのつゝばり、餘りはしたなくて、しつとりとしたる仕打なく、奥女中とは受取りにくかりしを奈何せん。多左衛門役。これも輕過ぎて借りて來たるやうなりしを、忍月の譽めたるは奈何ぞや。求女役。濡事師はうつり悪し。お村役。評なし。

澤村源之助。お三輪役。幸堂はおち氣ありて、氣組充分ならずといひ、竹の舎は本役とて座の光を増し、舞臺も廣くおもはれたりといひ、褒貶まち／＼なり。兎も角も當時のお三輪役者、どんな大歌舞伎に出しても、此人に限るべし。團洲は振巧なれど色氣なく、新駒は品好過ぎて、新藏はあら／＼し。此人は少しびびたるところ田舎娘の風見は、こなし蓮葉にて色氣あり。官女にたしなめられ、扇にて左右より頤を推上げられし見は、可愛さうにおもはれたり。竹に雀の振も好く、間がな隙がな奥へ氣を取られて居る思入、團洲うつしにて申分なし。家へかへり、仕返しに來うといひつゝ花道へかゝるところ、娘の情見にてしほらしかりき。然し花道にて嫉妬を見せたるころ、竹の舎は力ありて大に善じといひ、忍月は穿ち得て好じといひたれど、余等は今一息とおもひぬ。こゝは新駒の方へ團扇を上げたし。終りに及に貫かれて、階の欄に寄掛かりし「カリヤチイド」の儘の見えもよ

かりき。横櫛のお富役。故梅幸の當役にて、先年尾上多賀之丞が勤めしときは、大分非難ありしが、この丈は嵌り役にて申分なし。多賀之丞は湯あがりのところ、手拭をさげて居られしが、この人はそのやうなる事もなく、うれに彼の上方訛に反して、江戸言葉のせりふ廻しにて、さら／＼と藤八をあらつて居らるゝ中、音羽屋を女にていくといふ氣組見ぬ。悪婆のやうなりと、幸堂のいはれしは、無理ならぬところあり。多左衛門との出合、女の情を棄てぬ氣か知らねど、あまりめいり過ぎたり。中村小傳次。久我之助役。竹の舎は飴細工とけなしたるに、幸堂が此丈より後年に祐成を立派にしたのくる人ならぬと位附せしころうれしけれ。控目にうひ／＼しきころ和事師の上乗なれ。決して子供の御器用などとけなすべからず。柏の若葉摘取つての處、左團次が先年つとめしときは、手にちざりて水に投げ込みしが、此人は扇に載せてはら／＼と流しぬ。故人半四郎の型と聞わしが、風情ありて善かりき。

坂東竹松。雛鳥役。これこそ竹の舎のいはゆる新粉細工なるべけれ。お村の人形振のときの黒ん坊、この人につけたし。小傳次と共に外記のさし添役。合種聲にて聞苦し。

市川九藏。仁木彈正役。幸堂は雪半面なれど、常の富士を見たりといひ、竹の舎は芝翫は屈むの、菊五郎は反過ぐるの、團十郎は妻味がないの、誰がしても難あれど、此人は一種云はれぬよい所あり（三月十日東京朝日新聞）といひ、忍月さへ團十菊五になき特能あり（三月十三日國會新聞）と譽めぬ。げに善きには相違なけれど、あまり持ち上げ過ぎて、例の持病は起らずやと氣遣はる。此人はいかにも手丈夫の所ありて、馬鹿に落付いて居る故、始終はたを喰つた様に見え、人々大い／＼と感服するも無理ならず。仁木の役など、どこまでも操人形から、おして來て、怖らしい假

面は悪人と相場のきまつた者なら知らず。先代萩の名は仙臺騒動、伊達小袖は伊達實録をはらみ、仁木は原田甲斐を憚りての假の名と見れば、男振よく愛敬あり、敏捷の中邪智を含みし如く見ゆる菊五郎などこそ、却りて其眞に近き心地すれ。對決の場。竹の舎は家橋の勝元を咎め、九藏の方では少しも恐入らず、たゞさういふ段取ゆゑ恐れ入つたといふ丈で、見物は得心せず（三月十一日東京朝日）といひ、忍月も亦た九藏屹然として一場を壓し、却つて勝元の裁判の下手を冷笑ふが如き觀あり（三月十三日國會）といへり。家橋の勝元、固より大出来ならねど、この人も餘りすぎ過ぎ、舞臺の權衡に頓着なきは惜むべし。刃傷の場。短刀を逆手に持ちて四邊を見廻し乍ら優々と花道から出る處、やゝ做大なるが如し。立もがきより落入るまで、恐ろしいこと此上なく、堅く云へば兒啼を止むとでもいふべし。兎に角眞上々吉とも申すべき當世の稀者、こゝは古風に、いよ三好屋の親玉くゝと褒めて置くべし。（明治二十四年三月）

市川糸八様にまぬらす

ぶしつけなりと、咎め玉はむも計られねど、文にて申入れ候。交淺きに言の深きは、かへりて御不審もやあらむとれもひ候へども、いはで協はぬことあれば、ちび筆取りて紙に臨み、せめてわれをれし付けがましきものと、思ひあやまり玉はぬため、くゞけれど我身の上より申上げ候はむ。われは大學の一書生なるが、宿世の因縁ありてか、幼少の頃より、芝居道執心にて、故郷にありし時にも、親共に連れられて、大阪役者の旅行に出でしものゝ興行ある毎に、必ず往きて見候ひき。こゝは彼市川市十郎がまだ福太郎と申し、度々當りを取りし頃の事に候。明治六年東京に出で、はじめ大歌舞伎の見物をなし候ひしが、其時は猿若町に三芝居あり。彦三郎、翫雀猶存生にて、今の團

十郎、菊五郎などは、若盛の頃に候。其後新富町に新富座の立ちしこの方、今の歌舞伎座の出来候ふまで、評判よかりし狂言は、大概見脱がさぬ積に候。かゝる次第ゆゑ、學校休みの時は、大抵芝居へ足を向けて、友人共に女子のやうなりとあざみ笑はれしこともあり。さて其間にて、女芝居見物いたしは、十四年の頃、佐竹が原淨瑠璃座にて、狂言は俠客傳、おん前様は長總と姑摩姫となりしかと覺え候。うの後壽座、近くは吾妻座へもをりくゞまわり候へば、おん前様こゝろ、お見しりなかるべけれ、われは永年の馴染のやうにおもはれ候。かゝる烏滸の物好にて、はしたなくも狂言の批評めいたることいたし候うて、無頼なる訕流譏客の口の端にかゝり、われを見切者と嘲られしことも御座候。されど彼等に見功者とほめられたりとして、うれしくもあらず、かゝる嘲もまた解くほどの直打なしと打棄ておきて、わが芝居好の心は少しも挫け不申候。唯此一片の心、おん汲取なされ候うて、わが申す事、御聞下されたく候。

われ佐竹が原にて、はじめはおん姿見しころは、世間にておん藝の事、かれこれと噂することも少く、見物おほかたは卑きものゝみにて、唯木戸の費多からぬかたに向ひたりとおもはれ候ひき。されば口さがなきものは、彼座をも乞食芝居一様に申居りしこと、猶記憶いたし候。うの後本所の壽座に出勤なされ、勸進帳など善き評判あり、當時團十郎見物して舌を巻きぬといひ傳へ、うれよりおん前様、一朝にして九鼎大呂の重きを得られ候ひぬ。さて此機に乗じて、市川家の門に御入なされ、升之丞といふ名前を貰はれ、演藝協會の仲間にて、氣早の人々おん前様を延きて、團十郎と一座の狂言仕組まむと申ししものありきと承はり候。近頃吾妻座に御出勤のをりは、學海居士の一願に逢ひたまひしことも、世の人に傳へられ、幸堂子をはじめ、諸新聞の劇評家、みなおん前様に

女團洲の名を贈りて、したり顔いたし居り候。嗚呼この人々、果して美術上におん前様の技倆を看破りて、かく稱讃いたし候ふか。若し然らばこよなき御榮譽と存候。

うもく、勸進帳おん勤なされ候うて、大當取り玉ひしは何故と覺召し候や。うもく、女團洲の隆名に本戸に人浪打ち候は何故とおん考なされ候や。藝道左程巧なるためにもあらじ。又所作事左程優れたるにもあらじ。まさしくおん前様、彼芝居道にて天演の清きに譬ふる市川の流の末、九代目團十郎の身振聲色使はれ候ふためと存候。さて其團十郎の身振奈何と問はむに、目を据え口を結び、おもくしき顔付して、せりふ申すとき頭を左へ傾け、一口毎に頤を右へこまかく振るさま、京童の張子の虎と申すも、無理とは聞かず。また歩むに、身をすこし前に屈め、膝を曲げず、踵を擧げず、ばたりくくと無造作に踏出すが團十郎の癖に候。音聲に至りては、親七代目の儘の由にて、八文字屋が瘡聲引音にて鼻へかゝるといひしは是なめり。或る見功者は、これをどすのきかぬ聲と誹り候へども、これなくば、荒事などは勤めらるまじきか。さるにおん前様、立役荒事などおん勤の節は、右の癖一々おん學びなされ、一舉一動渾て早取寫眞の趣有之候。嗚呼、これが大喝采の來る所に候はずや。おん前様が勸進帳の辨慶、また高時などにてはやされ玉ふも、これに由るにはあらずや。

勸進帳と云ひ、高時と申す狂言の好處は、果して這裡に候ふや。否、さにはあらじと明言するは、わが憚からぬ所に候。團十郎、辨慶の役勤め候節は、權謀詭計ある豪邁の僧と、見事なり濟まし、臨機應變、咄嗟の間に不可思議のはたらきいたし候。されば勸進帳讀みて問答するより、主君を見とがめられ、はやる人々をおし戻し、遂に金剛杖揮つて主君を笞つまで、其氣じきの緩より急に入

る工合、屏息の面白味に候。又高時つとめ候節は、驕傲暴慢の態度勃々として生動し、犬を殺し浪士を刑せむと言張り、老臣の諫耳にもかけぬ様子、また説伏せられて命を助くる手輕さ、沈醜之餘、天狗に魅せられし體、醒めて息せはしき處妙に候。これ等の境は、史傳に據り、人物を鑒みて鍛鍊したるにあらずは到られ候はじ。これが審美眼にても破綻見出すことの難き所以に候。例の願振り、鼻聲などは、殆生れつきの大眼球、あつき唇と何ぞ擇び申すべき。これ自身にてあしとおもひても、或は改めがたきことか。強ていはゞ是れ關點のみ。畢竟學ぶべきは、彼ならむか、はた又此ならむか。皮相のみ得候うては、うまくまわりて壽美藏、新藏などの中役者と伍をなし、うこにも至らずは、落語家芝居の團柳樓とやなり申さむ。是れ聲色使ひ、物真似師の職に候。俳優といはれて、かゝる真似事いたして善いものとおもひ玉ふな。これを譽め候評者は、美術の何物なるを知らず、塲當のみ好めるにや候ふべき。

おん前様は實に此失あること掩ふべからず候。然しながら是れ世間にほめりやし候おん前様にて、わが眼中には別に天下の名優たるに耻ぢざるおん前様之あり候。われおん前様を立役の上手とおもはず、まして和事、濡事、武實、敵役にても無之、唯御獨得の女形の役にてこれを見候。

我國の芝居にては、元和の頃女芝居の禁せられしより以來、女形の役つとむるは男にさだまり、所謂若女形と娘形とは其稱に候。名高き岩井、瀬川などの家には、世々名人上手を出し、うれにて事足りたれば、眞の女形ほしといふ聲聞は候はざりき。男のつとむる女形、げに巧なるもありつらむ。然れどもこは男にして勤めたるより、人も譽むるにはあらずや。今も巧なりといふ女形の男俳優の藝を見候に、われ等には飽足らぬふしあり。うはりの眞の女ならぬために、何ともしても女に對する感の起

らぬことに有之候。愛、妬、いづれも善く形を寫せりとは見ゆるものから、一種中心に冷なる處あり。遺憾には候はずや。若し彼等に代りて、まことの女、女形つとめたらむ日には、うれ程の勞なくして、却りて人を動かすこともや候はむ。或る人は女形の男の藝を、女役者の藝に優りたりといふもあれど、善き女役者見ざるゆゑ然申すならむ。岩井、瀬川の如き藝ありて、まことの女ならむ役者、必ず無しとは申されまじ。歐羅巴の芝居をれもひ玉へ。絶藝妙伎の女役者、國々世々其人に乏しからず、獨女の役つとむるのみならず、やさしき少年の役など性にかなひたるをばつとむる習なり。我國にても此道の開くるにつれて、女形の役者なくて協はぬ日あらむことは、秦鏡に照すやうに候。おん前様など、これに當らむとおもひ玉はずは、誰か又之に當り申すべき。

さればおん前様の志し玉ふべき所は、明白なる筈なり。若しそれに想ひ及ばずして、猶立役などに工を弄し玉はむは、いたづら事、これに過ぎざるべし。縦令彼團十郎の身振聲色など、悉く洗ひ去りたらむ上にて、女と生れては、所詮男になりすまむこと覺束なし。胸の堆きを奈何。腰の大いなるを奈何。聲調の高きを奈何。かゝる徒事の久しからざるべきは、識者の判断待つに及ばず。おん前様の身の上のみならず、九藏を學ぶ鶴枝、左團次まがひの米花も皆數には洩れざるべく候。到底芝居と申すもの、藝妓の俄やうのものにあらぬ限は、かゝる戲、いつまでかつかむ。思軒居士の力技譽めたまひきといふなどは、何かの間違か、さらずは一時の戲謔なるべく候。

さておん前様のつとめられ候女形の役奈何といふに、尊き姫君となりても、賤き早少女となりても、今の評判高き女形の男子を凌ぐ御力量充分に相見え候。その證例には何をか引き申さむ。三姫の二つに數へらるゝ八重垣姫、團十郎にせさせむに、振事は零葉飛花の風に舞ふやうにて妙は妙なれど

愛らしげつゆあらず。高助はばいやりとして氣高し。されど藝は到らぬ所あり。福助は麗しき無比なれど、戀といふ分子絶えてなし。おん前様に至りては、右三人の長處、一も闕ぐることなく、色氣滴るやうにて人を惱殺せらるゝこといかばかり歎。又政岡を例に引かむ。おん前様の此役、美しさは半四郎に劣らず。その品格の高さ、秀調も歩を譲らむ。常に女丈夫に見せて、悲しき掩ひたるが、をり／＼本性に遷る處、團十郎に比へても遜色なく、その眞を得られて、看る人も骨髄まで動され候。この伎倆惜きものには候はずや。これを磨きて岐路に奔ることなくば、女形の役獨歩となり玉うてお國歌舞伎再興の運にも至り候はむ。これ程の事よも知り玉はぬことあらじ。唯時の勢止むことを得ずして、今のやうに立役勤めたまふか。若し然らばわれ何事をか申さむ。獨訝かしきは、近頃吾妻座興行のをりから、庵看板に荒事、市川糸八とせられし事に候。これにて意を得たりと覺さば、それより深き迷あらじ。かう思へばこそ、この文まわらせむとおもひ定めしなれ。

序に申し添へたきは女役者の品位の事に候。歐羅巴の女役者何者ぞ。宮廷にまで出入して、帶動者となれるもあり。美術家は天爵をのみ貴びて、かゝること羨むべきものには候はねど、さりては我國今日の女役者、あまりの侮られやうに候。それにも故あれば、こゝも改良の緒に可有之候。實は茶屋にて御目にかゝり、申上げむとおもひ候ひしが、人目を憚かりてかくなむ。(明治二十四年七月)

歌舞伎座一番目臺帳の總評

武勇譽出世景清

原作は院本出世景清にて、貞享三年二月近松氏が竹本義太夫の爲に作りし新淨瑠璃なるよしなり。

今度福地櫻痴氏これを添削して、原作五段を五幕に仕組れたり。福地氏は去年三月やはり近松氏の關八州繫馬を添削して出されしが、今又この改作あり。さればこの作を評するには、是非原作とてりあはずべきものにて、福地氏に頭から作者の名をかぶせ、ごくづくも持上るも、みなこの人の上にする忍月居士の評は酷かるべし。さて原作の出世景清は、近松の手際として決して大出来とは褒められず。全體淨瑠璃に離れぬ悪い癖は、あれもこれもと材料穿鑿して、さてこれをつぎ合せ、どこのつまりは無理算段して落をつくるゆゑ、いつも自然を遠かり、想像しがたき事實となるが常の事なり。この景清は主に歴史に據りぬと見ゆ、馬鹿げた巧ごともなく、さら／＼として筋とほり、讀みても聞きて興味深けれど、劇に演じては立廻りのみ多く、人を動すべき趣味少し。この度の改作はちとの増減あれど、やはりこの難を免れず。序幕に詩いた種の二幕目三幕目と順を追ひて育ち、大詰にいたりて實を結ぶといふは演劇の真面目なるに、此改作はうんなことに頓着なく、やはり景清一代記のある一節よりある一節まで、引つこ抜いての出し物なれば、主人公は一人に相違なきも、幕の替るは唯履歴を順追うて見するまでの事にて、敵を打ち損じての立廻りをいつもくりかへす心地す。此般の種子は決して好詩料とは申されず。

序幕臺帳の評。熱田境内夜寒の里の場。三保谷三郎が敵景清の娘を知り、人丸との縁をきらんとすれどさかぬより、共に死なんとする時、編笠かぶりし浪人に意見せられ死を留まる場なり。原作になき所なれば、あまり幕ごとごとく／＼するゆゑ、色氣をつけんためと見ゆ。幸堂は面白いと云はれしが、縁遠き三保の谷を引合に出さんよりは、この度は影だに見せぬ大宮司の娘の、娘が夫景清との生別を摸してこり、かへりて情は深かるべけれ。兎に角人丸三保の谷の縁組は初中後つきまどひて、

景清顛末の外、三保谷の顛末別にあるため、却りて筋の通らぬものとなりたり。こゝへ浪人姿の景清を出し、編笠の中にて物云はするなどは、團洲當込の趣向見ゆすきて苦々し。大宮司高康屋形の場。景清右幕下を狙はんと大宮司に暇乞し、痣丸の剣をもらひて出立つ場。原作第一段の上半を敷演せり。こゝにては右幕下を狙ふとあれど、原作には右幕下を打つ妨げとなる重忠を狙ふ様に記したり。娘人丸を實は重盛公の落胤とあかすことにせしは、なんの必要ありての事ず。蛇足と申すべし。景清の詞はよく原作を寫して勇まし。幕切に彌宜鈴成出て、景清に當てらるゝこと、初手は演じぬときとしが、今の如く除きたる方よし。

序幕藝の評。市川壽美藏丈。大宮司高康役。白地の直垂、白き頬髯、どこまでも師匠うつしにて押出しよけれど、顯晦録の義盛、元寇軍記の宿屋の左衛門など、いつも同じ様に見ゆ。自言ふたびに願をこまかく振り、からだをゆさぶり、あしどりをひよこ／＼とするは悪い癖なり。

市川八百藏丈。大宮司室早咲役。何役をひきうけても後れを見せぬ腕前、この師匠にしてこの弟子あり。別に仕ぐさなけれど、品格ありて加役とは見ゆ。

市川女寅丈。大宮司娘人丸實は重盛娘蝴蝶姫役。春木座出勤の折の福之丞丈は随分もかついた藝風なりしが、さて別人かと思ゆる程のかはり様なり。竹の舎が梅太郎丈に與へし大坂臭味少しの評言は、此丈に譲りたし。

市川新藏丈。浪人藤木小次郎實は三保谷四郎國後役。近頃めき／＼と上達して、新升連といへる一派さへ組織せられたるほどの勢なり。今度の三保谷は陪賓ともいふべき大役なるを、まんまと仕おふせられたるは天晴の事かな。年配は少し若過ぎしが、人丸との釣合よく、浪人に死を止められて

の引込まで、始終抜目なき仕打、市川派とてさすがに腹ありてたのもし。

市川團十郎丈。悪七兵衛景清役。此役は市川家に宿縁あり。この丈の祖父五代目白猿は享和二年木挽町河原崎座にて景清半破りの段を演じ、古今の大當にて、景清を歌舞伎十八番の中に加へぬ。丈の親海老藏も天保十三年三月河原崎座にて同じ名題にてこれを演じたり。近くは一昨年(明治二十二年)三月中村座にて琵琶名所月景清といへる名題を掲げ、丈もまた景清を勤めたり。この度の筋にて三保谷人丸が情死を留むる所、編笠かぶり乍らの異見骨にこたふ。しかし仕打同じきゆゑ、千石船の民谷轉を思出すは據なき譯なるべし。兩人が別れ際の問答の間、後向きに立ち居るは、はたへさはらぬいつもの藝風なり。一人舞臺になりて、編笠の縁に右手をかけ、向うを見込むのみにて木をしの幕切は舊いものなり。大宮司館にて笠ぬぎたる面は惣髮に頬髯長く、またこの間の仲光かと思はれぬ。浪人の心意氣かしらねど、どうせ次の幕で剃るものなら、たまには髻道樂をやめにしして、景清などは、綺麗な顔で見せて貰ひたし。頼朝を狙ひしこと三十四度に及べども、つひに本望とげ申さず、この度こそは頼朝に物一言申さんの邊、其白よほど氣に入りしにや、慷慨悲憤の様、平家の侍大將ときつと見えたり。痣丸の太刀を拜領し、よそながらの暇乞は、此丈の事なれば、さら／＼としたものなり。

二幕目臺帳の評。東大寺普請小屋の場。景清六藏と假名し、東大寺普請の職人に化けて入込み、奉行重忠に見出さるゝ場なり。原作第一段の下半を其儘使ひたり。原作にては、こゝを吉日はしら立の儀式とす。重忠はじめ本田二郎、其外の侍共居並び、番匠の頭領、空の頭、修理の頭、吉方に向ひてやがための祭文を唱へ、手斧、鋤、かんなの打始、取始了りて、神酒捧げ、祈念して引下り、數

千の番匠もこやに入りし後、はるか跡より人足とおぼしき四十許の男、書餉の櫃を荷ひ、頬被りしで通るを、本田二郎見とがめ、頬被は緩急なり、式臺せよと云ふ。かの男小聲になり、作法も知らぬ下々なれば御免といひつゝも通らんとす。本田、ちと人に似たりとて許さず。頭領のわびにて罷歸れと叱られ、擔ひし櫃をすて、迷惑さうに揉手して表へ出むとす。重忠幕の内よりしばらくと止め、平家の落人こゝかしこに忍びて君をねらふと聞けるが、唯今の人足はまさしく悪七兵衛景清と見しは僻目か、あれあますなど下知するに、もとよりはやる坂東武者われも／＼とかけ向ふ。景清擔棒に仕込みし痣丸を抜き、から／＼と笑ひて、これれ侍、をは打からせし鎌倉の浪人、朝夕に逼りかかるわびしき營仕れど、さすが人目の耻かしく、つらを隠して有りけるに、なんぞや某を景清とは、眼眩みての事か、よし何にもせよ是程難言せられ、堪忍罷成らず、景清程にはあらず共、きつと手並を見せんずとの白ありて、立廻となる。景清が不敵の落付工合、いかにもよく摸しありて、見出しの手順も無理ならず。此度の改作にては、幕明き烟草休みに、矢來外につどへる職人を鎌倉の大小名が景清をあざむかん爲に容をかへて居るものとしたり。こゝへ花道より景清の六藏出でまどおに入る。千葉の介の久作は、今度名題に上りし市川猿之助丈にて、六藏の團十郎丈に口上を云つてもらふ。もと同じ市川の流なりしが、今まで小帳場にいでしを、今度大佛殿の普請にて、始めて大帳場に出たゆゑ、今後兄弟同様にして、天晴一人前の職人になれるやう、れ取立を願ふといふ。これより木辻の買論となる所へ、奉行重忠出で人足を改むる事あり。この中六藏板割をかつぎ花道に行きかくるを、重忠呼止めて名をきく。六藏と名乗る。七兵衛とはいはぬかと問はれ、いぬ六藏と申しますと答へて、また花道へ行きかくるを、景清まで、悪七兵衛景清までといはる。う

しらぬ顔して行くを引据ゑられ、いかほど陳ず共、景清なること明白なる故、汝を捕へんために、我々職人となりてこゝにありと、銘々本名を名乗る。これにて景清包みがたしと覺り、初めて名告り、立廻りにうつる。幕明の口上につきて、この時代物の簡様な事入るゝは場當なりといふものあり、儀式は儀式として保存すべきものにて、英吉利の國會などにも随分馬鹿げた仕來りあれど今に止めず、芝居もりの通り別に一小天地をなせるものなれば難ずべからず。しかし買論になりて、久作の白に、あんな大眼玉は大嫌ひとあれがいつたなどいふは、ちと爛がつき過ぎたり。景清の見出しは初から知れて居ては、重忠の役引立たず。花道の呼戻しも一の谷の陣屋にかぶれた丈で、ほんの徒事となれり。花道をつかひたくば、原作の痣丸を抜く所を見する方、目先かはりてよかりしならん。又痣丸をつかはぬは、景清程の剛の者赤手にて十人廿人擒にせんといと易し、原作の擔棒に劍を仕込めるより、改作の如くかゝる用意なきが佳なりと、自由新聞評者は肩もちしが、うれならば序幕の切りにて、大宮司が景清に痣丸を贈る段も除かではかなはざるべし。劍の贈物は勇ましき趣向なれば、これをば存ずると共に、この幕にてもりの劍の目立つ様にしてこり、佳なりとは申すべきなれ。且舞臺を立派にするためとはいへど、景清一人召捕る爲に鎌倉の大小名職人に化け居るとは、あまり贅澤なる注文ならずや。この大勢ちよと立廻りありて黒幕の中に入る。世話役甚兵衛出で、それが今迄一番こつびどく六藏を使つたから、あれが景清なら、きつと一番さきにそれが首をもつていくだらうと騒ぐ。この様なちやりは能の間狂言と齊しく、折々面白い事あれど、これは一向つまらず。よき程に築垣より松ヶ枝さし出でたる書割の幕にて、矢來の道具をかゝし、すぐに引返し大佛殿景清捕物の場となる。大佛殿景清捕物の場。景清見出されて取まかれ、大佛の前にしつらひある

足場の上にて、畠山の郎黨軍卒と立廻りの場なり。原作第一段の切に、時刻うつらぬ其内に十四五人切伏せ、重忠に見參せんところのつまりかしこのくまにかけ入り／＼さがせど見當らず、又こり時節あるべけれ、いでれつばらうて落行かんと番匠箱ねし開き、大のみ、小のみ、手斧、やりがんな杯取出し、屈竟一の手裏劍とれつ取／＼打立つれば、わつと引いてさつと引く、なほ寄せ來る者共を、こやの小柱ひき抜きて、八方むぐらに振廻れば、むら／＼ばつとにげにけりと記せり。この立廻りにては手ぬるし、今一と際目覺ましくせんとの工夫にて、この大道具、大仕掛は引きいだされしものと見ゆ。しかしこの一幕は、若し臺帳に記さば、些し間の抜けたものなるべし。本舞臺向ふ大佛の半身にて見きり、左右朱塗の山門、此前足場の大道具舞臺一杯にしつらひなど、道具建に幾枚かつぶし、さてこゝへ團十郎出で、いろ／＼れもしろき立廻りありて、よき程にきつと見え、これを木の頭にてよろしく拍子幕。かうありて、あとほとんどんぼに任せて居れば、己の役目はすむとやにさがつて居らむこといかゞあるべき。近ごろ漁山が新體戯曲とてなへて、道具立を書く文章に力瘤をいれしも、篁村子が太田道灌の道具建に形容文字をはさみ、地の文にしてつゞりし上、大詰道灌捕物の場に、こゝにて團洲獨得の妙技を顯はす、これが此狂言の眼目なりと書けるも、これに似たる可笑きことなり。われは原作の様に、はしらだて儀式の場を一幕とし、こゝにて見出しより立廻りまで示さば充分ならむと思ふ。改作のわざ／＼二幕に分けて、眼目の見出しを黒幕外としたる處は、大道具後に構へあるため舞臺狭くなり、いつもかゝる場にては仕出し大勢にて筋にかゝはらぬ白などいふ筈ゆゑ、なんとなう見榮せず。立廻りを本幕として做大に見する二重手間は、長谷川の骨折見ゆる代り、改作者の無駄骨も見つて可笑し。原作の段切れには此たびは仕損ずとも、此景

清の一念のつるぎはいはを通さん物をと、ねどり上りとび上り、はがみをなして行雲の月の都に上りける、悪七兵衛が力わざ、はやわざ、かるわざ、じんつうりき、只とぶ鳥のごとくなりて、ねうれぬものこうなかりけれとあれば、面白き花道の引込みも見せらるべきなれど、足場のたてにては都合あしかりきと見ゆ、ぬきにせられたること、残念といふべし。

二幕目藝の評。市川猿之助丈。左宮久作實は千葉正胤役。名題昇進の披露までの役にて、さしたる事なし。買論の間猿之助としてのもて話、赤襟受けはあるべけれど、評にかゝらず。

市川壽美藏丈、同八百藏丈、同新藏丈、中村翫太郎丈以下数名大工に化けて、景清見出しの附合せは舞臺を立派にせしに相違なし、御苦勞くとは黒表紙の褒辭、われは足場の大道具同様、勞して功なしと申す外なし。

市川七右衛門丈。世話役甚兵衛役。いやみもなければ、可笑くもなし。

坂東八平次丈以下、烏山の郎黨軍卒になりし人々。大佛殿の場。さすが大道具を仕かけたる甲斐ありて、足場のたては、いかにもあぶなく、投げられて、横九太に引つかゝり、又下まで蹴落さるゝなど、この幕はわかげで持つて居たり。

市川權十郎丈。烏山庄司次郎重忠役。此役原作にては、景清は二さうをさとり候へ共、重忠は四さうをさとり、頼朝をうたんとせし事度々なれど、重忠に隔てられて本望とげ申さず、まづ重忠さへうちとらば、頼朝を打たんことを踵をめぐらさずと記しあれば、つまり景清が一目たきしこと明にて、景清をつとむる役者より一枚上手の役者ならではつとまりかぬる大役なり。この度は大分役前さがりたれど、とにかく貫目ものに相違なし。普請場見廻りとしての出は、立烏帽子にて、髻つ

け、紫の直垂、白の袴、とんと將門記の貞盛を勤めしときと同じ拵なりき。この人悪い癖にて、筒様な直垂物をつとむるとき、いつも肩肘怒らせ、兩手を腰の番にあてがひ、直垂の端、袴の裾などびんと反ね返らする鹽梅、雜市の武者人形、安仕入ゆゑ賣残つたところを見ゆ。成田屋が歴史物に名譽あるは、一つは直垂、具足の附け工合、また音羽屋が眞世話に堪能なるも、半纏の着こなし、三尺のべつ振、幾分か手傳ふに相違なし。左團次丈いつも寫眞うつりあしきも、これが至らぬゆゑとれもはる。此丈も今後注意ありたきものなり。さて床几にかゝり、職人改する處も、別に景清に目をつくるやうの事なく、花道へ行かざるを呼び戻し、名を尋ね、七兵衛とは申さぬかの問さへ、例の一本調子にて一向つまらず。再び花道にかゝるを重ねかけて呼びとめ、とゞ味方の手だてを述べ、景清に本名乗らするまで、息もつけぬ筈の場なるに、此丈のは調子の高きばかりで、腹のないため、少しも引立たざりき。

市川團十郎丈。番匠六藏、實は景清役。普請小屋の場は花道より生酔にて腕組しながらの出、番匠の拵も好み古風にて面白く、こゝは前幕の髻を剃り、安つぼき作りなれど、顔に凄味ある人ゆゑ、何となく一癖ありげに見ゆ。猿之助丈昇進の口上を餘所ながら職人によりへて言ひ廻すところ、場中どつと受けたり。併し廓遊の口論あたりはあまり輕過ぎて、かぶり物の工合杯、ごこか戻駕の次郎作らしく見受けぬ。重忠の出になりて、人々の後へ小くなつてかゝるゝも可笑く、板割にて顔を隠して花道まで行かけ、呼とめられてぶら／＼とかへり、七兵衛とは申しませぬ、六藏と申しますと手軽く答へ、また濟して花道へいくところ、うの濟し加減に見物思はず噴出したたり。七兵衛まで、上總悪七兵衛景清までといはれても、ずん／＼とゆく所、一の谷の彌陀六呼留めと一つにちぬ用

心もあらんが、誰にても思入あるべきところを、萬事逆にゆくといふ藝風さすが人並ならず。引立てもよわ／＼しく、舞臺真中へ引据ゑられても、これはなんとした事、景清などはと、やはりとぼけたる仕打面白し。兩手を引つ立てられたまゝ片膝つきて、重忠の手段、番匠の名乗をきき、包みがたしとの思入あつて、この上は包んで甲斐なし、いかにも我は上總七兵衛景清なり、汝等見事景清を捕ふるならば捕へて見よとの云廻し、凜然として當る可からぬ氣組充分見は、番匠との氣の替り目につきりと分る工合、無類の藝と申すべし。取られし手をふりほどく早業、ちよと立廻りありて黒幕に入るまでは、さしたる事なし。大佛殿捕物の場にては足場の上より出で来る處、被物とれ、髻ちぎれたの大童、たしかに悪七兵衛と見受ぬ。立廻りは目新しきこともなく、柔術のたてには随分實地に用ゑ難き手もあるやうなれど、うこは芝居と許してわくべし。立廻りの中、直垂の片袖ちぎるゝは、有る型なれど目覺し。後棒うばひとりての立てとなり、よき程にふりかざし、屹度見はにての幕切、これも一渡りと申すべし。

三幕目臺帳の評。都五條坂稽古所の場。景清の妻阿古屋の詫住居に梶原平次家探しに来る。阿古屋欺き歸す、引き違へて兄十藏來り、景清の情婦より贈りぬといふ偽書にて、阿古屋に嫉妬を起させ、うの口より泄れし景清の行方を梶原に告げて、清水觀音堂へ討手に向くる處に終る。原作第二段の上半を少し作り替へしものなり。原作にては此勇士のまた能く情を解する様を摸し、語り出しにも、誠や猛きものゝふも、戀にやつるゝ習ありといふ句ありて、東大寺にて重忠を打損じ、清水なる阿古屋が庵をねとづることゝし、こゝにて親子夫婦の久じぶりの對面あり。景清物語のうち、一向に重忠と刺違へ死なんとは思ひしが、思へば御身がなつかしく、子共が顔をも見まほしく、念

ひ乍らもながらへて、扱只今の仕合せなり、誠に久く逢はぬ間に、子共もいたう成人し、御身もずんと女房をしあげたり、なんでもこよひはしつぽりとつものつらさをかたらんといふ詞あり。また阿古屋の怨言にも、わゝ榮耀らしい、かく浪人の憂身といひ、殊更かたきをもつたる身が、せめて一年に一度の便も仕給はず、わゝりれも理よ、此比きけば大宮司の娘れのゝ姫とやらに深い事と承る、尤かな、自らは子持むしろのうらふれて、見る目にいやと思すれ共、子にほだされての御出か、りんきするではなけれ共、浮世車も年による、しやほんにわかしい迄、よいきげんのとあり。さて次には、景清打笑ひ、是は迷惑、其大宮司の娘れのゝ姫にはしか／＼物をいはいはごころ、八幡八幡さうした事でさらになし、うちならで世の中にいとしい者があるべきかと、なほもゝたるゝ袖枕、阿古屋も心打解けて、思ふあまりの小さいさかひ、犬が喰ふとやこれならんと記し、これよりさかづき事あり、三とせつもありし物語などありて、さて清水に參籠することゝせり。げに前段との反應の面白きこと凡作の能くするところにあらず。且阿古屋の格氣、どこまでもはすはにて遊女らしく見たり。わのゝ姫の事も、かくほのめかしてわければ、後に僞手紙に欺かれて、大事を泄すところに照應せり。原作にては又いや石といへる若に酌とらせてのさゝ事ありて、清水に參詣のところも、編笠取て打かつぎ、表をさして出給へば、いや石門まで送出で、さらば／＼の小手まねぎしほらしかりける生先なりとあり。若し劇にて示さば、この生別も哀深かるべし。兎に角次ぎの牢舎の段に、景清と阿古屋との對面ありて、あくまで強面き所を見するなれば、こゝにて極めて親しき所を見せて置くは妙といふべし。改作にては此等の處皆刪られたり。幕明きは景清已に清水に參籠せし後となれり。或は團十郎丈が艶場を嫌ひてのためにあらざるか。阿古屋も景清の行方知らぬと

て、梶原の刃の下に据り、色じかけにて欺き歸すこととなりたれど、こゝにて阿古屋の性根据りし様を見ずため、次の愷氣にて取亂だす趣向ひきたらず。原作にてはこゝに阿古屋の兄伊庭の十藏出で、景清のゆくへを訴へ、一かどの恩賞に預らんと、阿古屋に尋ね、阿古屋が告げぬより、景清にはこれの姫といふ情婦ありといへど、うは人のわる口なり、強て訴へんとならば妾と子供を害せよと逼るとき、大宮司が許より飛脚の姫の文を持来る。うの文を見るに中に阿古屋といふ遊女に御親み云々の文句あるよりせき立ちて、景清を男畜生いたづら者と罵り、文ずんぐに引裂く。十藏悦び思ひ切たかといふ。ねなにしに心残るべきと云ひ切りながら、いかに恨があればとて、夫の訴人はなるまいか、いやまた思へば腹が立つなど蹴躡ふうち、十藏振切つて出づ。改作は阿古屋を純粹の貞女に直したため、阿古屋を嫉妬深き遊女上りにしたる近松の意匠まる殺しとなりぬ。こゝにても阿古屋はやはり愷氣を起しに違ひなれど、圖らず行方をうち明くることとなりし故、罪はかろくなれり。大宮司の使は原作にては眞物なれど、此度は兄十藏の打合せにて仲間が飛脚に化けて來ることとなりたり。原の儘にては少しぬるく、今の人情にては欺されさうもなきゆゑか。さて十藏は自身訴人となるではなく、うばからあほりたて居るも、景清の行方を聞き出すまでの狂言にて、口あくと呼子にて梶原に相圖して討手に向はせ、褒美の金の口がためしてねき、己れは石若を蹴倒し、阿古屋を押へ付けて、さてこれをも梶原に賣り付けんとす。二重取り丈に、十藏は二倍の惡黨となれり。いき方は千歳曾我なる忠信の妾小車が父小柴入道と同じけれど、ちと眞世話になり過ぎたり。十藏の役上りし代り阿古屋の役は下り、十藏に一抔はめられしまで故、何となく嫉妬も厭氣ないものとなりぬ。

引返し清水観音堂内陣の場。原作第二段下半の趣を少しかへしものなり。江間小四郎五百餘騎を従へ、十藏を先に立て、押寄するところを梶原平次手の物にて踏込み、家探しすることなせり。原作には常陸の律師えいはん、慈悲第一の此寺に信心の行者うたせては、觀世音の誓願いかならん、防げや、法師ばらと三十餘人の荒法師命惜まず戦ふとあるを、改作にては、法師がひつ立てられて、れ助く、と手を合せ慄ひ居るやうに直したため、當時の法師輩の氣慨埋没せられて情なし。

三幕目藝の評。市川猿之助丈。梶原平次景高役。此丈腕達者の事は兼ねてより世に知られ、坂地より歸りし後、吾妻座、春木座などにて、何役となく引受けてずんぐ遣つて退けられ、中には随分見應ある役前をも見受くれど、兎角播磨屋に髣髴たる當振ちらく見ゆるが疵なり。大歌舞技に出勤あるを幸ひ、いやみな藝風はさらりと止めて、澤瀉屋の澤瀉、早晚蓮とならんこと、評者が願ふ所なり。扱景高役はさまで大した敵役ならねば、二枚目の安敵をするといふ腹かしらねど、なんだか投げたやうに見ゆ、なまぬるき仕打との難は免るまじ。阿古屋に白状いたせと屹といふところ、顔でいなびかりさするは、例の病かしらねど困つたものなり。阿古屋を手討にするどて刀つき付け切ら、流し目に見られてもたぐとるところ、相手がさつぱりの爲か一向に色氣なし。さあ早う乍らしやんせといはれ、いゝや切るまいといふところ、場中どつとくるは筋の影で、この丈の手柄見え。次の観音堂の場もさしたることなし。この丈簡様な敵役になり乍ら、白いふたび、顔に笑を含んで居らるゝは悪し。敵役ならばどこまでも悪つ振にこなすこゝ好けれ。千歳曾我の景高役は、松助丈がつとめられしが、大眞面目にて、此丈の比にあらず。つまり敵役がしよげたときのをかしみも、當人眞面目にて居ればこそ、眞にかしく思はるれ、當人から笑うてかゝるやうでは、

とても上出来とは申し難し。

市川猿藏丈。清水寺聚海僧正役。原作のやうなる荒法師でなく、慈悲忍辱を旨とする道德の様、謹んでせられてよく摸りたり。

中村勘五郎丈。阿古屋兄十藏役。原作にては伊庭十藏廣親といひて、悪者ながら一廉の武士に作りたるに、改作にては兄十藏とのみ記したるためか、此丈の作り穢な細工とはいへ、あまりげすばりて、茶辨慶の着付はどてらを直したのかと疑れ、素足に冷飯草履は兎も角も、襟に淺黄の手拭ゆはへ付けしは、あまりやつてつけなり。仕打もでんぼう肌になり過ぎて、侍ごろといふ氣か知れぬぞ、時代につりあはず。こゝはいつも得意の眞世話振をやめて、どこまでも古代の武士の格をすてず、いつもと行方違へて演ずべきものなるを、惜むべきことなり。讀賣評者は瘠い所に手がとゞき、獨得の絶技なりといひ、日々評者は輕妙といへど、余は左袒せず。幸堂氏の餘り輕すぎて油に水の嫌ひなきにあらずといひしころ、適評と申すべきなれ。しかしこれは全體よりの評にて、一々の仕打は瘠くない所まで手の届くやうな藝風いつもの如し。阿古屋の獨言を立聞し、さてろろくと花道まで戻り、こんどは足音させて入來り、先非を悔いたりといひ、ね爲めごかしにしてそろろくと花道でる工合、流石箝り役とて旨いものなり。僞使の手紙をうらつとぼけて受取る應對は拔目なく、手紙を讀みて最早當月が臨月でといふ所で、臨月だといふと繰返し早くねんめも致したくと讀掛け、はあ〜〜腹が立つ〜〜業がにわた堪へられぬといふ空泣上手にして、阿古屋の歎さるゝも無理ならずと思はる。景清の行方を聞き出し、呼子にて梶原を招きて討手に向はせ、梶原が花道に行掛るを呼止めて、褒美の金を尋ねるところは、宛然たるいがみの權太なり。石若を蹴阿古屋

を押へての幕切まで達者といふよりは悪達者といふ方なり。

中村翫太郎丈。大工女房おがら役。景清を大佛殿普請の職人に世話したといふ筋にて、幕明阿古屋の所にて話しこみ、ね釜のいりついたを忘れて居たと慌て歸る所、梶原に嫌疑のため縛られて、わあつと色氣なく大聲たてなく所など腹の皮よれたり。

坂東秀調丈。景清妾阿古屋役。讀賣評者は原本の意を守りてどこ迄も操を失はぬ思入充分ありといひしが、大方原本の意に反しての誤植なるべし。改作にてはかく貞操一圖に作りしたためもあるべけれど、如何にしても遊君の果とは見えぬ。女形は傾城だによくすれば、外の事は皆致しやすしと芳澤は申し残ししが、此丈はうれれに反し、原來寂しき藝風ゆゑ、女役など餘り箝らぬ方なり。うれれ故この役も得意の武家女房の心意氣にて勤められたりを見ゆ。梶原が入來りて景清の行方を尋ねるを、何處までも知らぬと云ひ放ち、とど白刃の下に頂さし延べて合掌する所、威しにびくつかぬ落付いたる仕打は申分なし。さて梶原の切り兼ねるを見て、あなたも五條坂へ遊びに來てお出の時分、わたしの心も知りぬいてといひ乍らじつと見るところは阿古屋の身上なるに、例の色氣薄き質ゆゑ、一向應へず。これでは梶原もまたつき悪さうなり。梶原をかへして獨舞臺となり、景清を按じての獨言はうのかはりしんみりしてよし。兄十藏入來るにいやな人が來たと思入ありて、景清に情婦ありとろろのかずを取合はぬ仕打、餘りまことらしく話すに段々聞耳立る工合、充分得心が參りたり。十藏が僞書をよみて當月が臨月だといひいろ〜〜ねだつるより、初めてさうかと格氣を起し、多くお客のある中で誠つくし〜〜甲斐もなうとのちよぼにのりて繰言あり、わじやくやしい〜〜と文を引裂く處は、充分に氣組うつりて大出来なり。兄の留むるをきかずばた〜〜と花道まで

行きかけ、氣がつきて引返し、笠と被衣とを携へて石若の手を引きかけ出すまで、一點の隙なく、この様な車輪を仕打はれ手の物なり。

市川團十郎丈。景清役。梶原が清水觀音堂に踏込み、僧正の言譯を聞入れず、戸帳の中を改めんとする時、夜陰に及び寺院を騒がし、佛罰恐れぬ大だはけめとの大音聲と共に戸帳落ち、白地に觀世音菩薩といふ文字書きたる行衣、散じ髪にて厨子の前に突立ちたる姿は、前に炷く香の煙にて佛像かと思まがふばかりなり。これより問答ありて、皆々かゝると後へぬけ、光明赫々として眼を射、捕方皆々たぢ／＼となる。光消えて厨子の扉開けば、この度は觀音の立像なり。こゝは佛力の不可思議と、此丈が若々とした昔風の景清とを見するまでなれば、只華やかといふより外なし。

四幕目臺帳の評。京六波羅土牢の場。景清が土牢に囚はれたるを慰めん、重忠酒肴を齎し、大宮司と人丸とを伴ひて對面せしむ。引違へて阿古屋、石若尋ね來り、詭言すれど聞かれぬゆゑ、石若を刺殺して自害す。こゝへ阿古屋の兄十藏來り景清を罵る。景清怒りて牢を毀ち、十藏を踏殺し、遂に義によりて三保谷に捕はる。この場は原作第四段にいろ／＼の材料をたゞき込みしものなり。原作の景清が土の牢に入り居るは、前節第三段より由來するところありて、初めて得心せらるるものなるに、改作にては此段を全く削り去りしたため、大に看客に疑を起さしむ。原作第三段にては、景清清水堂よりわち行きて行方しれぬより、由縁ある熱田大宮司を搦捕りて吟味すれど、鞆にとりしを備事とて誅せられれば力なし、行方に在りては存せぬと詞正しくいふ。重忠一計を按じ、景清は仁義第一の勇士なれば、所詮大宮司を籠舎させしと傳へ聞かば、舅の難を救はん爲め、己れを名乗出んことは目前なりとて大宮司を押籠む。この次に原作はこれ、姫道行ありて、大宮司の娘の、姫

六波羅に來り、父の命にかはらんことを願ふ。梶原景季これを聞きて、大宮司は知らぬといへど、己れは夫婦の事なれば景清の行方知らぬことあるまじと責む。なう恨めしや命をすて、是迄出る程の心にて、假令行方を知つたればとて申さうか、此上は水責火責にあふとも夫の行方は存せぬなり、唯此上は父上を助けてたべと泣叫ぶ。梶原しからばとて六條河原にて水火の拷問にかゝるとき、いつくにてか聞きたりけん、景清諸見物の中をとびこえ入り來り、皆々とりまくをぬめつけて、此景清隠れんと思はゞ天にもあがり、大地をもくぐらんずれ共、妻舅が憂目を見る悲しさに、身を捨てて出でたれば最早氣遣ふ事はなし、さあ寄つて繩をかけ、六波羅へ連れて行き、妻舅を助けよと手向ひしてんず氣色なし。重忠こゝに來り、大宮司と娘とを助け、景清に繩かく。景清悦びて牽かれ行く。これにて景清が四幕目に牢舎せられ居る筋道はつきりして、感も一しほ深きなり。あゝの姫の拷問は示さずとも、六條河原にて引据ゑになりし哀なる様を見せて、景清が矢來の中に躍り入り仁王立につゝ立ち、腕あし曲げて繩うたるゝこととせば、壯快比なき見物なるべきに、改作の如く、急に牢の場を示しては、何故にあれ程強い景清が牢中に入れられ、色蒼ざめて憔悴せしか、何故に後段に蹴破るほどのひよろ／＼格子の中に、ちんちんとおとなしうして居るか、合點ゆかず。また原作の如くあゝの姫が責苦を事ともせず、清水觀音の尊號唱へ乍ら自若として居る段を示さば、前段の阿古屋が遊女氣質に反し、武家育ちの心掛け見えて一層ゆかしかるべきに惜むべし。原作の第四段なる牢舎の構は做大にて髪を七輪にたばねて七方につり、足を牢より引出し、左手右手へ取ちがへ、首にはねぼりの大づゝを二本迄かつがせ云々とありて、人形ならば兎も角も、劇にしては見らるまじく、これを除きしは尤もなれど、改作にて重忠の詞に、景清殿はこれ式の牢踏破らんこと

易けれど、天下の法の爲に入牢あることゆゑ、出入勝手に錠開きまわらせよと牢番に命ずるなどは、餘り優長な話にて馬鹿々々し。原作にはこれの姫が酒菓をこのへていたはる事ありて哀なり。また景清が心地よげに酒のみ、御身の心ざし骨髄に通つて嬉し、是につけても阿古屋が心底怨めしとの詞ありて、次の阿古屋對面の観染となりたり。改作にては頼朝景清の勇を惜みて、麾下につけんを優待する様に替へ、重忠が酒を持來りて牢居の憂を慰むるも、大宮司、人丸を引合はずも、皆思は着せん手段なれば、興さむる話となりぬ。これ式の事にて忠臣無類に作りし景清を屈服せしめんとは目先の見ぬことなる上、當時の實情からいうても英雄を總攬するといふことは想像しがたき事なり。景清は降參の勸をいろひて、早く首打たれんとを望み、人丸の上を重忠に頼みて、三保谷に妻はし呉るゝ様と外ながらいひ、こゝにて檀浦鑿引の物語になる。こゝは序幕に出し、三保谷、人丸の一條のちちあくる糊張細工にて、つぎはぎの迹蔽ふべからず。さて景清獨り残りて、小松内府に回向し、慷慨の述懐ありて、唯今景清入牢いたすといへる邊までは、團洲に箝めんとせしなるべけれど、餘り景清を思慮分別あるやうに作りしため、後段に十藏の詞を憤りて牢を破る段と人物釣合はず。景清入牢の所へ、阿古屋が若を伴ひて詫に來り、自害するは、原作改作共に同じ。されど原作の阿古屋には前段にて嫉妬より夫の訴人に同意したる過ありて、殊にこれの姫が水火の苛責に逢ひても白狀せぬ反應あるため、うの詫言を耳にかけず、大の眼に角立てし景清が、妻とも子とも思はぬとの怒も無理ならず。しかも阿古屋が、今生にて今一度詞をかけてたび給へ、うれを力に自害して、我身の言譯立て申さんと云ひ、二人の若がほだしの足に抱き付き、いたいかや父上様との詞をききて、此上は自らはともかくも、可愛やな兄弟にやさしき詞かけてたべなど前非を悔いて歎くと

ころ、女性の氣立、親子の情充分に見ゆ、これを聞入れぬ景清も、武士道の意氣地にて苦しき隠す所ありて、阿古屋が思切つて子を刺殺す決心も尤に思はる。改作にては阿古屋が兄に欺されて、不圖夫の行方を泄すことに作替へ乍ら、こゝを原作の儘に用ひし爲、別に科なき身がこゝに來りて詫言し、うれを聞かれぬとて子を殺し自殺するとは太早計に見ゆ。またうれを聞き乍ら、奥へ引込んで影だに見せず、詞かはすも穢らはしなどいひ、子でない親でない云ひ切り、濟し居る景清は、いかにも小面にくし。阿古屋が自害してより飛んで出で、我を訴人せしは和女にあらず、兄十藏なることは疾くより存じ居れど、つれなくいひ放しは生害せしめむ爲、我死せば妻子も同罪にて梟木にかゝらんより、母の手にかけ殺させしなりとは、あまりといへば知らさうな言分なり。原來妻や子を見殺にしてわらがつて居るは大判事、堀尾茂助など淨瑠璃中の豪傑にあることなれど、今更これを用ひしは拙し。この過失は本月(四月)三日國民の友にて學海子も摘發せられて、斯くありては例の院本の熱套にて、これを人情に求むるも無理なること甚しく、絶つてある可きこととも思はれずと申されたり。これは我も同意致せど、うの前文にこの度の刪潤は極てよきよし、諸新聞に見ゆたりとは十把一束の評言なり。東京新報の八文字屋も我と同じく改作に満足せず、櫻痴の所謂景清は何處もなく分別臭き鍍金したるが爲に、他の荒事がかりたる無鐵砲を衝突する所多しと申されたるを知られぬにや。後段十藏を殺してより後、原作にては關東か西國へ落行かんとして、また男と配との難義をねもひ、もとの牢屋に入りて、中よりかんぬきをさし、千筋の繩を身にまとい、さあらぬ體にて普門品を唱へ居ることとせり。改作にてはこゝへ梶原召捕りに來て、追散らされ、三保谷出でて立廻りあり。景清太刀を捨て、搦め捕られんとす。三保谷は落しやらんとす。これを山蔭よ

り梶原見尤めて三保谷二心ありといふ。據なく繩うつて、大音聲に名乗る。梶原鎌倉殿の嚴命なりとて、自分繩取りになる。原作の切り劇にしては引立あしとれもひてかしらねど、改作はとんと一の谷嫩軍記、須磨浦組討の場うつくりとは、さてく智恵のなきことかな。熊谷は親子の愛情にて及當てかぬる處面白けれど、互に立派なる武士にてこのやうな生ぬるき仕打あるは、梶原の詞ならねど戲談も程があると申したし、これも團十郎と新藏ならよけれど、景清と三保谷なら互に人を見くびつたかと、改作者に喰つてかゝるべし。

四幕目藝の評。市川權十郎丈。畠山庄司重忠役。大宮司と人丸を伴ひ花道よりの出、幸堂子は加賀の紅葉狩に出る佐渡守の如き役なりといはれたれど、まづ白粉厚き作り、直垂の着工合、押出しは那智瀧の渡邊渡と同様に見え、さて仕草は景清をいたはり、始終りの武勇を惜む心持を見するなれば、とんと誠忠録の片桐且元と同じいき方なり。體の位置は矢張醜けれど、仕草は別に器量を顯すべき仕組にもあらず、唯謹んで景清の團十郎丈の相手をして居る丈にて、この様な役は毎度のこと故、流石前幕よりは見優りたり。景清を牢中より出し、齋せる酒肴を開きて毒見をなし、其盃を景清に與へて、大宮司、人丸と巡盃せしむる所、抜目なく注意せられ、貫け役とて受好かりき。さて景清に寛大の處置を怪み問はれて、右幕下貴殿の武勇を惜み玉ふゆゑなりと告げ、願くは心を翻へして源家へ忠勤を勵まれよとの言ひ廻し、棒調子ゆゑしんみりとした應へ場處はなけれど、氣を入れてせられたため眞實の様見えて、一と通りの出來なり。景清は二君に仕ふる心なく、死を決し居るとの覺悟を聞き、後事を托せられよといひ、人丸の身の上は引請けしゆゑ安堵せられよといふ處、親切の氣組始終失せぬはよし。檀浦錠引の物語、團十郎丈と白をわつての掛合は見劣りがして

氣の毒なりき。しかし景清が三保の谷の武勇をたゞへて、外ながら人丸を妻はしくれよとの言廻しを聞き、これにはなにか仔細あらんと意中に覺り、三保の谷の如き武勇の士に妻せ申さんと、承知せし腹を矢張外ながら景清に聞かす白、不思議の出來にて、人丸よりも我等が胸に得心がまわりて嬉しかりき。景清に猶熟考せられよと言置きての歸り際、牢番にこれ式の牢を景清殿踏破られんは易かるべけれど、法の爲に入牢いたさるゝなれば、出入勝手に錠開きまわらせよと云ふは、臺帳の評にていひし如く、何となく間が抜けて見たり。此幕の重忠、前幕よりは一段上の出來なれど、兎角今一息と申す所あり。團十郎丈はいつも思慮分別あり過ぎ、役前を大きくして困るに、此丈は思慮分別不足勝ちで、役前を下ぐるが常なり。

市川猿之助丈。梶原平次景高役。此幕牢破の處へ手の者引連れ出來り、景清を捕へんと郎黨を下知して己れ後へ引下る工合、逸足早く立つてらるゝ臆病加減、三保の谷が景清を落さんとするを二心ありと後の山蔭より罵るなど、一の谷の平山武者所りの儘の安敵、どうも氣の乗らぬ所ありと思はる。三保の谷が景清を搦めし所に出で來り、自身繩捕にならんとして三保の谷が遮るを、鎌倉殿の嚴命だと大音に云ひて繩を取る幕切、手強くつゝ込んでせられたらば大した見物なる可きに、なんだか投げたやうに見えあつけなかりき。

市川壽美藏丈。大宮司高康役。原作れのゝ姫の穴をいき、人丸を伴ひて景清に對面する役目、なんとなく附け合せのやうにて榮わす。人丸の夫を介し呉れよと景清が重忠に頼むを聞きて、人丸が憂に沈むを訝り、また三保の谷に妻はすとききて人丸が喜び勇むを見て不審に思ふ仕打など、始終舞臺を捨てぬ心掛は好し。

市川女寅丈。大宮司娘人丸役。原作れの姫が夫婦の情を見せしを、この度は親子の情にて見する趣向、大した役前引受けられしに、天晴の出来にて大手柄なり。景清より盃をさぐれ、うを受取るとして見上げての愁、團十郎丈の方はさつぱりして思入なきに、此丈充分に仕こなされて腕前見たり。景清が夫を世話せられたしと重忠に頼むを聞いて、驚きて心苦しむる様、うの夫は情人三保の谷なりときき、思はずほく笑みて、耻しさに嬉しき打混せてのこなし、娘の情見にていかにもしほらしかりき。近頃お八文字屋子、丈の此役を評せられし中に三木子は大坂臭味少しと評せられたれどもとありしが、我が序幕藝の評にて申しは、竹の舎子が梅太郎丈の藝を大坂臭味少しといはれしは穩ならずと思ひ、梅太郎丈に此名蒙らしむる位ならば、寧ろ此丈に與ふる方穩當ならむと、比較より出でしことゆゑ、わが絶對的にかく云ひし様記されしは少しく宛なり。また同子が次に甘つたるい事無類にて、まだ春木座の福之丞なりと言ひし茶毘子も無理とは思はれずと申されしは、やはり大坂臭味の上よりなるか疑はし。我が所謂大坂臭味とは上方出身の俳優の兎角腕前充分に見する積にて、うの場その時にあり得べき事とは想像せられぬ仕過し、這入違へをなして人に虫づがはしる思あらしむるを指す。東京にては流石團菊左などの上流役者、演藝の改良に熱心なるゆゑ、従つて下流までもこの様な當振など次第に絶ちしは喜ぶべし。さて女寅丈はいかにと云ふに、初め春木座に出勤の折は、一座の立お山にて、いつも大役を引受け、側かおつる故誰に見競べて勵むこともなく、自ら安ずる氣組ありしためか、藝風きちんときまりて上達の見込なく、しかもこてくした嫌味を仕打を見受けしに、市川の門に入られてより、端役のみ引受けらるゝためもあらんが、仕打次第にあつさりとなり、役々大切に氣を入れて勤めらるゝより仕過し、這入違へなどなく、役毎に情

うつりて、いつも内端なる様見受けられ、末たのもしき藝風故、幸堂子が馬十丈、幸藏丈に見合せ、上上の一白き位付せられしも無理ならず。これわが梅太郎丈に大坂臭味少しといふ竹の舎の評を此丈に譲られたしと申しわけにて、また春木座の福之丞丈とは別人のやうになられたりと申し、所以なり。お八文字屋子とても、こゝには心附かれぬ筈なきに、甘つたるい事無類と申されしは、多分口跡の事なるべし。口跡の甘つたるきはわれ等も知りたれど、これは福助が口に物含みし様なる口跡と同じく、生れつきなるべし。且これを娘形の色氣ある場に用ゐては、あまえるやうな、すねるやうな工合、随分可愛らしき感を起すものともふなり。又茶毘子の評言、無理とは思はれずといはれしが、さればとてこれを穩當の評言とも思はれず。われ今六二連の名文句を抄して、此般のわる口連に贈らんとす。曰く評判記と云ふものは、悪く云はねば見功者らしくないと云ふ氣込でかゝれては、役者の身にとつては迷惑千萬の者なりと。

市川新藏丈。三保谷四郎國俊役。景清が梶原を追拂ひし跡へ花道よりばた／＼にての出、紫糸と白糸とを交へて威したる鎧を着し、白柄の小長刀携へたる武者振いかにも美しく、目が覺むる様なりき。しかも源氏方の剛の者三保の谷四郎とは見え、まづ右幕下の愛童御所の五郎丸ぐらゐの品位に見受けぬ。舞臺へ走り來り、上手に突立ちし景清を窺ひて、長刀左手に差伸べたる見は、畫巻物見る心地せり。これより景清は囊にばいとりし太刀にてあしらふを長刀にてかけんとする立廻り、此丈の花やかなる姿と團十郎丈の着付淋き亂髮なる景清と對をなして得も言はれぬ見ものなりき。三保の谷がいつもあぶなく見は、とど長刀からりと巻落され、隙さず太刀を抜きて切付くるを、此度は景清が落ちし長刀取上げて受留むるなど、見る眼もあやふく、兎に角兩丈が此幕のたては水際立

つての出来なり。よき程に景清が長刀捨てて首打たれよと云ふに、打ち難し、疾く逃げられよと、刀にてあなたを指ししが、梶原に見尤められ、又立廻りてまた逃がさんとする邊、此丈の罪ならねど、ちと馬鹿しく見たり。梶原が二心ありといふに、據なく繩うつ所はよけれど、大音聲に平家方の侍大將上總七兵衛景清を、三保の谷四郎國俊搦捕つたりと名乗るは、一の谷うつしの積なるべけれど、戰場ではなし、ちと受兼たり。梶原が誑意を笠に被て繩取となるを瘡に障へ乍らのしよげ加減、上手にこなされたり。

中村勘五郎丈。十藏役。原作第四段にては景清訴人の恩賞に預り、立派の拵にて、手の者引連れて來り、阿古屋を尋ねるも共に榮華に暮さん爲とあるに、改作にては矢張前幕と同じそぼろなる拵にて、阿古屋を探出して金にせんとする様にせられしかば、役前下品になり、従つて萬事今様になりしは據なけれど、此丈の仕打もいなせになり過ぎて旁と釣合はず、這入違への難は免れ難し。阿古屋の死骸を見て、足ずりしてのくやみ、一點の情なくて怨氣一方よりの愁歎上手にせられ、石若の屍を見てえと餓鬼なんかあどうでもいふ處旨いものなり。景清に向ひて手前うこで見て居ながらなんで止めねぬのだ、見殺しにするといふことがあるものかと罵り、出られぬのがこつちの附目だ、さまを見ろ獄門面だなど口から出まかせの惡體、得意の髮結新三などと同じゆき方ゆき旨いには相違なきも、矢張ころ附は離れず。されば景清の面に唾して踏殺さるゝまで善くして居られたれど、うれは一々の仕打の事にて、全體よりは上評と申し難し。

坂東秀調丈。阿古屋役。石若を伴ひて牢前に忍寄り、思はず景清殿といひ、石若がやはりと様と大きくいふを、これと抑ふる處よし。はつと燃立つ胸の火にといへる邊より、ちよぼに乗りて子役をか

せにしての愁歎は充分にこなされ、見物袂を絞りたり。殊に團十郎丈の景清、奥へ引込んで影見せぬ故、詭言するにも相手なくまことに仕悪いことと思はれたり。いかに詭ぶるも聞かれぬゆゑ、覺期きはめて石若を刺殺さんとすれど、手ふるひて殺し兼る仕打、骨折つてせられ見えたへありき。とど自害してより景清の本心を聞くまで車輪にせられたれど騒がしからず、申分なき出来なりき。筋よりの不都合は是非なし。

市川團十郎丈。景清役。歌舞伎十八番の牢破りならば、わ家物の荒事にて見せらるゝ筈なれど、此度は改作の景清とて、手替りにて演ぜられ、束ね髪にて髻少し延びし作り、牢中にてやつれし工合、鬼界島の俊寛の面影あり。重忠との應對、いかにも落着きて重味あり。重忠の情にて贈りし酒盃、牢中の憂を掃ふものこれに越す賜なしと喜びて呑干し、さて盃を人丸にまはすところ、女寅丈の方は充分愁の思入あるに、此丈はさつぱりと何の風情もない處が御自慢とは困つた藝風かな。盃を原へ納めてなせ是迄に某を敷革の上へ据ゑられぬぞと重忠を詰る白は餘程疑つた積と見えて、日々の評者など有難がられたり。重忠に降參を勧められ二君に仕へむ志露ほどもなし、片時も早く首はねられよと、死を決したる仕打、氣味よし。人丸を重忠に頼み、さて三保谷の武勇を稱ふとて檀浦の昔語となり、兜の鍔をむづと取り、後の方へいと引くと云ふ白にて、えいといへる詞に力を入れて乗地になりての言廻し勇ましく、この凄然たる幕中、俄に檀浦修羅の巷眼前に露れて、矢叫喊の聲耳元に聞く心地せらるゝは全く丈が能辯と達藝と相合して活動する處なり。三保谷を賞して、外ながら人丸に配し呉れよとの意を含みての白は、他優の眞似がたき點とぞ覺ゆし。一人舞臺になりて小松の内府重盛公の、月は替れど御命日との白ありて手水つかひ、内府頓生菩提と祈念終るまで

しんみりしたる仕打充分にこたへて、塲中水を打つたやうにてありたり。さて述懐の白となり、小松の内府御存生にたまはまさればかく御一門の御没落もあるまじきにと、齒を切りての慷慨、筋より云へば當時の見識には不釣合なれど、仕打より云へば、勇士の真相を露はしるものにて、思はず感激して涙にむせびし人もあらん。氣をかへて大音にて只今景清入牢致す、錠口かたく鎖されよと這入る處は、ちと誇大に過ぎたり。阿古屋石若來り歎くを取合はぬ處、奥へ影をかくして居らるゝ爲、阿古屋を勤むる秀調丈は定めて愁歎しにくかるべく、傍をひきたつる事に氣を入れらるゝ丈にも似合ぬことならずや。この度は除かれしが、こゝは原作の如く牢中に形を見せて始終普門品讀誦して居られなば、親子が取附端なきさまも、間の抜けし様に見ゆまじきに惜む可し。影にて詞かはすも穢はしい、とくく此塲を立去りをらうといひ、また子でない、親でないといふ處、白は立派なれど筋あしきため、情知らぬ男と思はれ、感服せず。眼を閉ちて默然たりといへる床にて、音さへさせぬに、阿古屋思切つて子を殺し自身も短刀突込むとき、景清奥より飛んで出で、こりや俟て阿古屋、りの短刀暫く抜くなと止め、これより親子夫婦諸共に梟木にかゝらんより母の手にかけ、うちも自害せしめんため、かくは強面もてなしたりと本心を明し、われもねつゝ後より行かん、閻魔の廳にて俟つて居れと、牢の横木に手を掛け、間より顔差出し、涙に聲曇らせ乍ら大音に言ひ聞かする處、非命に死する阿古屋も成佛すべく思はれて、我等もこゝは筋夢中にて恐入つたり。十藏の悪口を憤ほりての牢破りは、前の馬鹿にやらさうな處あるため眞に憤りしものとは見えず、こゝの道具同様、子供欺しの觀あり。十藏を一踏に殺し、梶原を追散すも、一向乗りがなくてつまらず。これも前半のれかけなり。三保の谷出でてよりは、新藏丈を相手に面白きたてを見せられたれど、こゝ

は三保谷へ御馳走の塲故、評は新藏丈の部に譲りたり。よき程に長刀捨て、我首うてと言はぬ斗り、寂然と目を閉ちて居らるゝ覺期の體よくして居られたれど、仕組の兒戯に類せるため少く惡落を來したるは残念なり。

大詰臺帳の評。右幕下頼朝旅館の塲。こゝは原作第五段をつぎはぎしたるものなり。原作にては南都大佛の再興成就したれば、供養の報捨に大赦を行はるれど、景清は大事の朝敵なればとて首刎ねられぬ。さて頼朝は供養聽聞の爲め南都へ下向する途次、畠山來りて景清恙なく牢内にありと申す。佐々木四郎は已に一昨日の暮首刎ねて三條繩手に獄門にかけたりといふ。互に爭論の末頼朝は直に見分せんとて取つてかへし、三條堰に來て見れば、いかにも景清の首切かけあり。重忠不審晴れず、諸大名と立かゝりよく見れば、景清の首と見わたるが、忽ち明光赫奕として千手觀音の御首と變じたり。こゝへ清水寺の大衆達馳せ參じ、一昨日の夜中觀世音の扉開き、佛體の御首切れて失せ、切口より血流れて候と申す。皆々あつと感ずる中に、頼朝信心の感涙を流させ給ひ、景清年來清水觀音に祈念こめし靈驗にて、觀世音彼が命にかはらせ給ふ有難さよと御手を合せ玉ひ、この上は千人の僧を供養し、一萬座の護摩をたかせ、御首をつぎ奉れ、法事の上にて景清に對面せんとて、御首を直垂の袖に受入れて清水寺に參詣し、法事畢り、御首つぎてより景清夫婦を呼出して對面あり。さて頼朝のいはく。珍らしや景清、我を平家の敵とて覗ひ打つべき志、神妙く。尤武士の憤げにこそ有へけれ。しかれば頼朝が爲には御邊又敵なれば、打つて捨つべきものなれども、汝が身には觀世音の入替りましますゆゑ、二度誅せば觀音の御首を二度打つ道理。勿體なし。若又頼朝運盡きて御邊に打るゝものならば、觀世音の御手にかゝると思ふべし。此上は助け置き、日向の國宮崎の庄を當行ふとあり。

景清涙をどめ兼、誠に身にあまりたる御誼の段、生々世々に有難く魂にたげえ候、かく情ある我君と知らで、ねらひ申し、景清が所存の程こり口惜しけれと、御前をも打忘れ、聲を上げて泣居たると記せり。觀世音の利益きかせしはこゝのみなれば、景清が曩に清水堂に參籠せし段、牢内普門品讀誦の段杯をうけて、彼が大信者なりし結果を示し、かねて頼朝の心これが爲に折れて、景清赦免の沙汰あり、これにて出世景清の名題に協ふやうになる近松の立案なり。されど原作の儘に演じては、景清の切首、見る間に觀音の御首となるなど、ジャグラー操一の手品じみて馬鹿らしと心附かれてか、この一ちつを黒幕にて消し、影にせられしは好し。されどりの氣の利きたる人が幕府末路の志士の氣概と壽永の昔右幕下殿の思召とごつちやにせられたるはいぶかし。改作は旅館の場にて重忠と佐々木と、景清の首切た切らぬの論判ありて、さて御前へ景清の繩付引出し調べ見しに、懐にしたる觀音の佛體、首れちて身替りに立ちぬと解り、人々奇異の思をなすこととせり。しかし原作は清水寺の觀音を信心せしゆゑ、うの清水の佛體身替りに立つことなれば成程と合點もでくれど、清水觀音を祈念したりとて、懐中の觀音身替りすとは、縦令一月萬川に印すと觀ずべしとして、見物にはしかと分らず。うれに原作にてはこの利益景清助命の原動力となるゆゑの甲斐あれど、改作は頼朝のね談義に恐れ入つての助命ゆゑ、利益も利益ばねせず、佛體の御首も落つこち損なり。さてそのね談義はいかにといふに、外史氏曰くまる寫しにて源氏も平氏も共に朝廷の臣、禁裏守護の武士なるに、一朝私の怨にて干戈を交ふるは嘆はしきこと、其方が兵衛の官は平氏より賜はりし官爵にあらず、朝廷より下されし爵位なれば、矢張朝廷の臣なり、願くは舊怨を捨て、予が幕下に伏し、共に朝廷に忠勤を勤めよとのことなり。自由新聞評者は頼朝景清が史論的に時勢を説

くが如きは、蓋し先人の道破せざる所にして、巢林子時代の人には、這般の觀念は無かるべきも、今日に於ては誰れも能く知る所なり、櫻痴居士が事を一部の劇に假りて、兒童婦女に大義の在る所、興廢の由來する所を知らしめしは、豈に風教に裨補すること無しとせんやといひて、改作者の時代違に肩持ち、芝居は女子供の眼學問ぢやといひし昔風の意見を擔ぎ出されたり。かやうなる説はギョオテが劇場は準に高尚なる情事のみ委ねたる場なりといひし如き純美術的意見を懐けるものは、固より全く相反せり。うれは兎も角も、鎌倉に覇府を開きて、天下の權柄を手の中に丸めし頼朝が勤王論唱ふる笑止さ、これを聞きて忠臣二君に仕へずと、義氣金鐵の景清が下らなく恐入る馬鹿らしさ、皆時代違の甚きものなり。此様な作意は當代の河竹新七が書下し、千石船帆影白浪にもありて、神谷轉が井坂七郎太夫といへる浪人を千石家に仕官せしむるとき、矢張この論法を用ゐたり。竹の舎子讀賣新聞にてこれを評して、神谷が例の團洲主義を以て斯く申しては、日本略史の講義をなすに似たれどもと斷りて、偕大義名分らしき事を説くは大に惡し、主君あつて將軍天子あるを知らずともいふべき忠誠無二の轉が高山彦九郎にても唱ふべき勤王論の如きことを述べ、忠臣二君に仕へずといふ説を折くは、轉が精神を抑も既に殺したる如しといひぬ。この言や移して以て此度の改作者に贈るべし。櫻痴子はとかくこの様な趣向を好むと見わて、前回の關八州繫馬を添削して出されし相馬平氏二代譚にも、驍勇ある盜賊良門を改めて勤王家とせられたるが、若し西鶴本願刻する輩を獨體しやぶりと罵り飛ばす或人の口眞似すれば、勤王を喰物にすとも申すべきか。景清が頼朝の御前に召出さるゝを、原作はこれの姫と共に赦免にあひて伺候することとせしに、改作は最初繩付にて引出され、こゝにて頼朝の講釋きゝて恐入り、幕下に從ふこととなり、服を改めて出仕

せよといひて頼朝一應奥へ這入り、さて景清が伺候するとき再び頼朝出づ。この間舞臺をばかんとあけてれくは淨瑠璃にもある事なれど、見物の退屈を思はぬ仕方なり。尤も重忠と三保の谷とはなにやら話してをれど、ほんのお茶を濁す丈で、初からの氣組ぬけ、張合のない事なり。さて景清出仕して盃事あり。源平兩家の軍物語所望せられ、うの物語果ては間に腰刀ぬきて、頼朝にどびかゝり、隔てられて本意を遂げず、君を見れば仇なす心やまずとて、兩眼をくり出して退出す。この邊は原作その儘に寫されたれば、いかにも面白し。頼朝に命助けられ、しかも宮崎の莊宛行はるといふ厚き情に及向ふ刃なく、讎敵の念を翻へしに、八島の物語りありて頼朝座を立ち玉ふ後姿をつくづくとみて、舊怨むらくと起り、腰刀をぬきて一文字にとびかゝり、みなく大刀の柄に手をおくるに心づき、とびすざりて刀を捨て、五體をなげて涙を流し、あゝ南無三あさまじや、いつれも聞て給はれ、かく有難き御恩賞を受け乍ら、凡夫心の悲しさは、昔にかへる怨の一念、御姿を見申せば主君の仇なるものをと、當座の御恩は早や忘れ、尾籠の振舞面目なや、まつびら御免を被らん、まことに人のならひにて、心にまかせぬ人心、今より後も我とわが身を諫むる共、君を拜む度毎に、よも此所存はやみ申さず、かへつて仇とや成申さん、とかく此兩眼の有ゆゑなれば、今より君を見ぬやうにどの詞ありて、兩眼をくり出し、御前にさし上げ、頭をうなだれつゝ居たり。景清が心中情と義と戦ひて、自身にてもいつれと決しかぬる工合よく寫せるものかな。さるを改作にては、團十郎丈をわらさうにせし所あるため、原作の儘の所といつても差合ひて釣合はず。まつ土牢の場にて見識滅法に高く、萬事呑込んで居る大腹中の人物が、あつけなく頼朝のね談義に恐入ること不思議なり。うの四海は一天萬乘の外に主人なしといふ尊王論を、成程と腹へ入れし景清が昔

話の興に乗じて、前後夢中に切掛くる無分別も亦不思議なり。さて頼朝の片袖引ちぎりて、これを刀にて突通し豫護の見振聲色つかひて、さてふはふはとの高笑は氣の知れぬ沙汰なり。また景清の詞に武將には天運備はりてればせば、景清如きが幾度狙ふ共思ひもよらず、腹を裂きて死せんと思へど、觀世音の冥助ある身を自儘には死し難く、さればとて此儘世にありて頼朝を目に見るならば、遺恨遣方なければ眼を破りぬとは、さてく得手勝手なる人物かな。即ち頼朝に助けられても、ちつとも有難くはない。どこまでも殺したいが、天運があるからしかたがない。しかし己は死にたくも、觀音様がついて居るから死ぬわけにはいかぬ。あゝ仕方がない。いつうのくされ眼でもくりぬいて、これで帳消に仕様といふ。この腹の中いかにも卑く、眼をくり出すもせう事なしの仕打にて、一向に哀れになく、ごろつきの親分なら威勢がよいとも申さんが、日本一の剛の者の魂とは受取れず。こゝにも人丸、三保谷等をばつを付ける爲、引合ひに出されたれど、出し榮せず。景清が切付くとき重忠が人丸をひき据ゑ、人質にするも出來合の趣向にて、全體より見れば衰むる程の事ではなし。大詰藝の評。市川八百藏。右幕下頼朝役。諸新聞擧つての上評も尤にて、品格といひ、調子といひ、立派なるものなり。うれも道理、顔の作り類髻長く生やしたるは、浮島原對面の場の頼朝を師匠が勧められしときをそつくりなり。これで三割位引つ立ちしが、我等が古畫古像などで拜見して想像する頼朝とは似ても似つかず。辯説はさはやかなるに、例の顎を振り鼻にかゝる病なきは仕合といふべし。しかしこの度はとてつもなき尊王論にて器量を下げたることを氣の毒千萬なり。市川猿之助丈。梶原平次景高役。市川壽美藏丈。梶原平三景時役。兩丈共社頭のことま犬然と頼朝の左右に扣居る役廻り、御苦勞を申す可し。

市川權十郎丈。重忠役。とかく優美の態度なく、仕打ごつ／＼して威服せず。頼朝に人丸が重盛の落胤なることを外乍ら姫小松であらうがなといはれ、仔細らしく頭を傾け、さて顔を上げてずつと見廻し、ぼんと膝をたたく所、例の癖にて做大にせられ、いかにも見苦し。人丸引据うる所を受けたるは筋の爲にて、此丈の仕打はうれ程でもなし。

市川新藏丈の三保谷役にて、景清の刀持つ右手引つ立たる息組、市川女寅丈の人丸役にて、景清の階を下るに取鏡り別を惜むこなし、共に一通りの出来なり。

市川團十郎丈。景清役。初め繩付にて頼朝の前に曳出され、観音の利益を怪みてのどぼけ顔、尊王論に初めて心付いての間拔づら、改作の和蔭で景清も此丈も器量を下げたり。二度目の出は持病の有職好み、片身變りの直垂に、滅法長い長袴を穿きて、大したものなり。壇浦の物語は前幕に差合ひしたため、さまで聞きたへせざりしが、物語の中情激して、突然剣を抜きて頼朝に飛かゝる息込、下手にすると間の抜くる所、此丈のは息もつけぬ旨味あり。三保谷に及持つ右手引立ちられ、左手に直垂の片袖もちたる見ゆ、物凄き勇士の形相よく摸されたり。いかに右幕下儘に聞くと大音に呼かけて、今こりかへす無念の刃先と直垂突通しての高笑ひまで、いかにも大きいに相違なければ、景清が馬鹿にえらくなつたため、腹達の感あり。眼に刀突込みて仰向に倒れ、直垂の袖にて眼を包みて起上るは、血を見せぬためと見ゆれど、見た目悪し。聞く「オチツブス」の曲にて國王が幼きとき捨られし母と知らずして契り、後に卜者の言にてそれと覺り、先非を悔ひて眼を抉る段、佛蘭西の劇場にて演ぜしとき、優人うれがし國王に扮し、奥殿にて眼抉りての出、兩眼を閉ぢ、創口より流るる鮮血混々として衣襟を沾し、よろ／＼として石柱を抱きての見え、無類の見物なりきと。丈もぐ

つと手替りにこの類の工夫あらば、後世の粉本ともなるべきに惜むべきことなりき。(明治二十四年三月)

三升會の會員、市川氏の門下にて名題下の諸氏のみ打寄りて、福田會育兒院のために劇を友樂館に催したり。さればりの目的の主なるものは慈善の上にあれど、要するに青年俳優諸氏をして充分に腕を振はしめ、技藝の如何ほどに熟せしかを試みんとするの點もなきにあらざるべし。團十郎丈夙に俳優學校を起して少年を養成せんとする志ありと聞けば、この度の演劇は恰も學生が臨時試験を受くるが如き觀ありとれもはる。余は故ありて千本櫻堀川御所の場と六歌仙の所作事とを見ざりしが、他の三幕

千本櫻川連館の場、熊谷陣屋の場、太閤記尼ヶ崎の場

につきて一二の贅をいふべし。當興行にて座頭ともいふべき升藏丈の佐藤忠信は、すべて音羽屋ばりと見ゆしが、刀の下緒をさばきて袂に入るゝなどといふ器用な仕草をさらりとやめ、始終謹みてさ／＼とこなしすれば難なかりき。狐忠信になりては随分まめに働かれしが、どこかごはなごころ見ゆしは無理もなし。次に熊谷はもと猿藏丈のものなりしを、病氣にて此丈に廻りしこと見物も當人も大任せと申すべし。勿論教師のさし金はありときゝしが、着附、顔の作りより仕打思入まで、師匠にうの儘なるには驚きたり。ねぢ伏せし女が藤の方なりしに心附きてぼんと膝をうち、又つゝかゝるを上方へ押やり、大小投出して平伏する所など見物とよめきたり。慾を申せば花道の引込など少し泣き過ぎたるが惜しかりき。兎に角一昨冬新富座にて薄雪の興行に上使の役をつとめしとき、熊谷の身振にて見物を笑はせしことありしをれもひ、此度正則の熊谷役は品格の點に付きていかに

と危みしが、見れば按外の落附ありて、當興行第一の當りなりき。臯月役は誰がつとめても榮にぬ
役ゆゑ、さほど受けざりしも尤なり。何故田舎にては毎度出さるゝ由聞きし得意の重次郎役をつと
められぬか。團七丈の義経役は師匠うつしと見ゆてよけれど、調子を最少し優美にしてほしかりき。
彌陀六役は松助丈の面影ありとの評ありしが、幽霊の講釋あたり、今一息軽く願ひたし。光秀役は
矢張師匠張にて押出し立派なり。しかし飽くまで根強き性根をきかする眼目の白などは、左團次丈
にても左程應へざりし位ゆゑ、此丈を責るも無理か。才三郎丈の相模役は高福丈の面影ありといふ
評判は尤にて、いかによくしておられたり。しかし熊谷に褒められてかしましたかをすます仕
打は秀調丈さへ味増をつけし所、此丈もまことに醜くかりき。操役は初の出の附着、相模と同じゆ
ゑ引立たざりしが、後の出には着附かはりてよし。さはりのところにて、現在母といひかけて口を
おさへ、四邊を見まはす仕打など、よく秀調丈をまねられて、見物ごつとうけたり。とにかくこの
むつか敷二役を任分けたる腕前は後生畏るべし。雷藏丈の静役、義経役、ともに奇麗なれど今少し役
役に氣を入れてほし。他人の白いふ中も氣をゆるすべからず。初菊役の振はよくできたり。團五郎
丈の龜井役、團助丈の軍次役、いづれも氣の入方たらぬやうなり。大よしの飛鳥役、平次役は難
なけれど、久吉役はひよこ／＼しすぎて、春木座の右田作丈に似たり。しやこ六丈の川連役は法眼
とは見ゆず。やはり幕明きの仕出しのやうなり。こゝに特筆すべきは正清役をつとめし團太郎とい
へる役者なり。調子も仕打も妙に並をはづれ、さながら五月人形のやうなり。此優が長き鎗をふり
まはして舞臺一杯になり、どうも聲をふりたてゝわめきしたため、十段目の幕切はさん／＼にこわさ
れて、恰も素人茶番の觀をなし、罵聲場にみちたり。附言。新藏丈が陣屋の幕明にいでて市川家十

八番の口上を述べしは御苦勞なりき。(明治二十五年一月十四日)
歌舞伎座の初春狂言名題は一番目

鹽原多助一代記

中幕箱根山曾我初夢、大切梯子乗出初晴業なり。一番目は三遊亭圓朝丈が得意の讀物、經濟家鹽原の
傳記なり。平民主義の流行する時節柄にはまりし出じものとして大受なり。後日譚を残しても十八回の
長物語を、一日の通しに書きどめし割には筋通り、是と申す山もなけれどさ／＼とよく出来たり。
中幕は相替らず曾我の對面に因みし立派なる時代のもの、大切は去年の風船乗に劣らぬ氣組にて梯子
乗の輕業、これも賑なる所作事なり。序幕上州在大原村の場は出幕にならず。逢貝村入口の場。八
百藏丈の浪人鹽原角右衛門役。獵出立にて鐵砲もちでの出、拵はつひとほりなれど、顔の作り少し
白すぎ、さかやきの工合など、やゝ勘平にちかきやうなり。勿論丹次役とのつりあひもあるべけれ
ど、今少し年配につくりし方、本文にもかなふやう覺ゆ。打留めし賊がわが家來右内なるにれどろ
きての介抱、うの不心得をさとしながら己の早まりしを悔ゆる述懐など、仕打はあつさりなれど調子
のよきためこたへたり。女房に右内の死せし故を問はれて口籠る工合よし。金子を贈られしを固く辭
む一徹の仕打より、とぞ得心して倅を遣すまで、潔白なる武士の氣組をよく寫されたり。かくなう
ては後幕多助に對面せぬ段の引立わるし。秀調丈のれせい役。こゝは別に仕草もなけれど、倅を所望
せられて、思ひもよらずといふ素振してかばふ様子より、倅は百姓角右衛門の子なりときて、あんな
うそばつかりと打消す仕打まで、母親の情愛よく現はれたり。菊四郎丈の右内役。初め調子丈がつ
とむる筈なりしが、此丈に廻りしなり。この役は旅商人の拵の中にもとは武家出といふことをきか

せねばならず。百姓角右衛門を殺さうとするも威しのためなれば、うの意氣組なくてはなはず。随分むつかしき役前なり。此丈は音羽屋派にて屈指の人ほどありて、つゝこんでよくしてゐたり。されど手を負ひてよりの物語は大分師匠の流義を學びたりと見え、なにとなく時代じみて受難かりしは、少しく荷が勝ちし爲なり。松助丈の百姓鹽原角右衛門役。拵は本文をうつされきと見えて申分なし。右内が頼を詐なりとねもひ、氣をとめて聞かぬ工合、五十兩借せといはれ、懐中の金をおさへ、羽織の前をあはせなどする仕打、自然にてよし。強身を見せて打擲し乍ら、實は内心ぶる／＼して居る様子妙なり。腰の抜けしにあがき／＼遊行くもよし。角右衛門を同類かと疑ふ臆病加減もをかしかりき。浪人角右衛門が右内を介抱する間、上手にうづくまりたるまゝ瞬もせず見詰て居り、氣の毒な事をしたりと心付きてうろ／＼這ひ出してくる工合無類なり。ねせいが夫に右内の事をきくを氣の毒がりて、腕ぐみしながら横を向き、又角右衛門が始終の様子を物語るうち膝に手をつき、首をうなだれて居る風情、ます／＼己が過ちを悔いし氣組充分に得心がゆきたり。多助を養子にするとき／＼うれしきのあまり大聲をたて、よろこぶ體、百姓の性根見えてよし。唯この丈は江戸つ子のちやき／＼ゆゑ、がんす詞がうつらずとの評あり。成程五十兩の捌きなど、少し田舎者にしては達者すぎしやうなれど、こゝを正銘の田舎ものでやられては、随分だれて堪へらるべきものでなし。さればこの役は難なき大出来にて、序幕の面白かりしは此丈のねかけなり。

二幕目は下新田鹽原宅場及作塲道庚申塚場。八百藏丈の原丹次役。武家の色惡なれば、顔も淺黒く作り、鶺鴒の羽織の紐、紺足袋など武張つたる拵、舌味もない代り、總體に色氣もなさずたり。本文にては四十四五歳とあれど、今度の作りにては丹三郎の兄か叔父かと思はる。仕打は手丈夫に

さら／＼とこなされ、口迹の烈きため随分手強く應へたり。こゝが親子水入らずちやと笑を含みて、ね龜の膝にもたれかゝるところは色氣ありてよし。ね作の附文を讀むところは文句のをかきたためもあれど、塲中大受なりき。いよ多助の色男めといふ苦笑も中々の憎味あり。しかし幕切多助を殺さんと決する邊、今一息氣組の足らぬ憾あるは、根が敵役の身上ならぬためか。彦十郎丈の分家太左衛門役。馬鹿に大きな紋のつきたる羽織を着て、饅頭の入りし重箱をさげての出、あまりがんす詞をつかはねど、例のにむきらぬやうな調子が妙に籍りて、さながらの太左衛門なり。中裁に這入りて頭ごなしに多助を叱り飛ばし、一家の相續人でゐながら折檻にあふやうな大馬鹿ものめといふ詞の中に慈愛を含みたる工合、なんともいへぬ旨味あり。お龜が勘辨せぬといふより丹三郎がねとむ／＼文を出して、亭主が邪魔になるもんだから追出して仕舞ひてえと不義の名を附け様とする太い阿魔も世にはあるもんだと、一杯にかけていふところ、儲役として見物どつと受けた。その外多助とね作は出来たといはれ、何が出来たといふあたり、此間まで青鼻あくつ垂らして居たがこんやうな事を仕出かすやうに成たかに、なんと馬鹿／＼しいといふあたり、斯様な質樸な親父形にかけては比類なし。秀調丈のね龜役。繼子いぢめの憎まれ役なれば、品格物に長けし此丈には極めての難役なるをよく／＼しくこなされたり。古今若女形の上手といはれし元祖芳澤あやめ丈が言にも、ねやまは貞女をみださぬといふが本體なり、是を以てほんの女とおなじ道理を合點すべし、いかやうに當りの來べき狂言にても斷をいふべし、女形より役をいぢるといふは此塲が專一なりとありしを心得ぬ此丈にてもあるまじきに、この淫婦の役を見事に引受けしは、人氣のみを頼にせぬ開明役者の心掛また格別なり。拵立居等もよく注意せられて蓮葉に見えしが、本文の通色氣たつぷり

といふわけにはゆかず。うの代り憎味の方は充分にて、多助の哀なるも一つは此丈のね蔭なり。しかし多助の悪いのも継子ゆゑといふ譯ならず。本文にも月に五六度はね留申度と思つても、多助の手前もありまして思ふやうに参りませんが、眞實に此頃は變に多助が悪らしくなつてきましたとあるごとく、色氣がもとにての憎みゆゑ、多助に對して憎味あるかはり、丹次に對しての色氣も充分になくは、此役を仕出來たりとはいひがたし。ね作の文を種にせんと丹次にさ、やくところ、袖を口のそばに當がふは女の情ありてよけれど、丹次が膝によりかゝるときは、今一息うれしき思入ありたし。多助が立つを呼留めて遠まはしにね作の事を語り、多助が言譯する詞尻をねさへ、たみかけていちめる工合、菊五郎丈の多助と意氣組合ひて滅相の面白味あり。太左衛門の入來るよ、急に詞を改めて馬鹿丁寧に會釋し、ね榮が多助に嫌はれるのが實に可愛さうで御座りますと空涙をこぼすところ、本家分家の間柄で、だいられた事をしては、どうも世間さまへすみませぬといふあたり、ねのれ云ひ込められたりとて多助に、ぐづ／＼せずと早くいつてくるがよいとあたる工合、合羽をもつていくなら、やぶつてはいけないうなどといふ捨白まで氣を入れてせられてよし。幕切の殺しを勸むるあたりは、やはり八百藏丈と同じ難を免れず。菊四郎丈の五入役。本役とはいひながら、脊の高く、體の不格好なるところよくうつりて、只の作男たあ譯が違ふが、後添のかゝあなんざにこそ使はれて居るねらぢやあねね、さあぶつならぶてと肩を怒らせて座るところ大受なり。多助がとむるをきかず、ね龜に悪口をいふところより無理に引立られて這入まで、車輪にせられて氣味よかりき。榮三郎丈のね榮役。蓮葉に見えたり。菊三郎丈の丹三郎役。圓次役。共に菊之助丈病氣につきての代り役なるが、うの割にはよく出來たり。菊五郎丈の多助役。見ぬ前は多助役は質樸い

つさんまいの野州者、ねまけに繼母にいちめらるゝねめでたき人物をれば、此丈の柄にはなし、故人高助か、今の高福の役ならんといひし人もありしが、うれは十年前の音羽屋丈の事、近頃は藝道にます／＼熱して、名人の域にすゝみ、伊左衛門の如き和事より鬼一の如き大物まで、何を勤めても悪いといふことなき丈ほどありて、いかに哀に出來たり。假髪のほうけし工合、脊と筒袖とは色の褪めてかはりし布子を着たる拵、已に涙なり。がんす詞も下手にすると悪落がくるを、器用につかはれたり。丹次などの團居を見乍ら、ねつかさんうめねものを出して御馳走をあげて下せね、わしい青を引いていつて來ますからと尻輕に出かくるところ、少しも悪氣のなき工合、いつもの音羽屋と全く反對に出でしには感服せり。ね作との濡衣をいひかけられ、わしいわるとさをした覺えはがんとせんと言ひ、離縁状かくことは死んだねとつさまの遺言にうむくから勸辨して下つせねといふあり、秀調丈のね龜がいかに手酷しきと此丈がとつかはすると呼吸あひてひと事とは思はれぬ感あり。五八いできたりて中にはいり、ね龜を罵りて打たんとするを止むるところ、手拭にて涙をふき／＼押戻す様子、芝居とは思はれず。太左衛門の詫かなひて出でゆくまで、どこまでも好き人に見ゆ。庚申塚の場。青が進まぬに當惑し、圓次が牽けば歩み、己が牽けば歩まぬより、圓次の荷物に背負ひてゆくまで、さしたる仕草なし。唯妙な調子にて高話する田舎人の様をうつしたりといふまでなり。圓次の意見につき、衢の錢六百をもちて遠國と決し、馬に別をつぐるところが、此狂言の眼目と見ゆ、こゝは舞臺一面に薄敷千本をうねつけ、音羽屋丈も肌をぬいで腕一杯にこなされしかば、いかに旨いものと恐入つたれど、うの割に面白しとも悲しとも思はぬは妙なものなり。全體去年來馬を相手の愁歎は新富の鉢の木といひ、協會の御厩といひ、度々出でたれど、いつもさほ

ど興味なきは、全く人情に遠きためか。

三幕目。鹽原宅馬部屋の場。同奥座敷婚禮の場。八百藏丈の丹次役。太左衛門をなだめんとして云ひこめらるゝところ一通りなり。百姓のよするをきゝて太左衛門をあてゝ奥庫へゆくところより裏口にて馬を切倒して落ちゆくまで、烈しき仕打と申すまでなり。秀調丈のお龜役。太左衛門に言ひ詰められてねど、し乍らひひ解くところ自然にてよし。丹次と太左衛門とが争論の間旁で氣をあせるところもうまいものなり。彦十郎丈の太左衛門役。祝言の盃をとりあげ、分家の私に断らずに亭主のあるものへなせ婚をとると、先づね龜をいひこめ、次に庄屋にくつてかゝり、わしがどうしても邪魔をするを強情を張る頑丈なる仕打大當なりき。菊四郎丈の五八役。馬に行水つかはするところより、婚禮の席に暴れ込みて額を傷つけられ、うの傷を手拭にて押へ、熊手を以て丹三郎にうつてかゝるまで、始終大出來なり。榮三郎丈のね榮役。太左衛門が祝言の邪魔する間、氣遣ふ思入なきは如何。菊三郎丈の丹三郎役。前幕と同評。歌藏丈の庄屋役。とぼけた調子にて太左衛門といひ争ふ様子、ほん物なり。この場はいつれもさしたることなけれど、青といふ馬一疋はねまはりて面白くしたれば、この馬の足の役者こゝ第一の出來と申すべけれ。後に聞けば馬をつとめしは斧藏、梅助兩丈なりき。中幕

箱根山曾我初夢

箱根権現の場。八百藏丈の鬼王新左衛門役。顔の作り、着附の好みまで、市村座にて曾我の敷革を出しゝとき菊五郎丈が勤めし鬼王と同様なれど、箝り役にて大出來なり。始終十郎の穴をゆきて、箱王を制する仕打、つゝしんでよくせられたり。松助丈の近江小藤太役は立派なれど、菊三郎丈の八

幡三郎役は少しく見劣りせり。彦十郎丈の梶原役。調子のたゞぬため憎味うすかりき。翫太郎丈の平次役は充分憎かりき。きく丈の箱王九役。子役中の親玉ほどありて白廻しつかりと應へ、すべて勇ましき仕打の中に無念の思入見えて、よく出來たり。歌藏丈の行實阿闍梨役はつひとほりの出家にて、貴き聖とは受取れず。菊五郎丈の工藤左衛門祐經役。立烏帽子大紋の拵大立派。物語のうち少し體を揺し過ぎたるため、幾分か貫目をそぎたるやうなりしが、うの外は花道の引込まで一點の申分なかりき。早幕にて二役道連小平。朝から見物がまぢかぬし得意の傳坊肌。月題の延びしいなせの假髻、半纏三尺の拵にて假寐して居る體大受なり。相方に起されてうんちら今のは夢であつたかといふに極り文句より、夢の話になり、小道具や落書を見て、口上茶番のやうな下らぬ駄洒落をいふあたり、いつものことなれどなんとなく面白いは不思議の愛敬なり。榮三郎丈の相方。宿場女郎にて小平の情婦とは受取りにくし。

四幕目。横堀村地藏堂の場。同裏山越崖道場。松助丈の尼妙岳實は亦旅れ角役。この役はいつゞやこの丈がつとめし島衛月白浪のねぢがねれ市とねなむ向の役前にて、本文にては大分狂言のある筋なれど、このたびは無暗に筋をはしりてきりつめたる改作ゆゑ、亦旅れ角の中の面白きゆすり場などは見ることできず。尼妙岳となりてよりの出、頬のこけたる顔付、凹みたる眼のするどく光る工合、鼠の着附、頭巾によくはまりて一と癖あるべく見ゆ。唯音羽屋肌の凄味ゆゑ、いつか猫になりはせずやその懸念ありき。旅人夫婦を留めたるに、この夫婦は丹次、ね龜にて、ね龜がうなれたはね角ではないかといふをきゝ、丹次が刀の柄に手をかくるを見て、驚きとびすざり、うの舊惡をわび、今は悔悟して出家したりと、口から出任せに空涙をこぼし乍ら、さも殊勝氣にいひくるむる

工合、寸分の隙なし。しかし本文を讀まぬものは、この舊惡といふほどのやうな事かわからぬゆゑ、いづれもまごつく道理なり。うれより打明け話する中に、何故本街道を通らぬかと問ひ、夫婦がつまるを見て取り、落人の人相書のまはり居ることを夫婦の胸に應ふるやうにいふところ上手なものなり。繼立仁助がねふくろ家にかと何心なく尋ね來るを見て、うぬよくもく、小平を牢へやりやあがつたなといひながら、いきなり横面をはり、太えやつだくといひながら門口へつきだし、跳足にて追かくる振して、呆れてをる仁助を花道までこづき乍ら押しつけてゆき、尙大聲あげてがなりながら耳の側へ口をやりて、小平と打合せよと云ひ合めてかへす呼吸、息もつけぬ旨味にて、われ等も思はず膝のり出して手を拍ちたり。とどちちく、と後戻りして門の柱につきあたり、肚側をうたれし振をなして内に入り、倅の仇をとうく、逃してしまひましたと泣きながら語るまで、腹と仕打と反對に出で、うの妙後の世の模範とすべし。念佛を唱へ乍ら横に臥すところ、小平を案内し乍ら襖に耳を聳つるところよし。丹次が臥床の下の大小を取出すあたり、始終口に念佛を誦する仕打抜目なし。財布を奪ひて逃出し丹次に切らるゝところ一通りなり。八百藏丈の丹次役。庵主をれ角をきく、抜きかゝるところ、賊入りぬときくはね起き、刀々といふところ、谷間の崖にて小平と斬結ぶところ、いづれも氣組充分にて、抜目なく烈き仕打大受。此様な藝にかけては高島屋といへども、場を擅にすることを得ずと覺ゆ。秀調丈のね龜役。乳香子を抱きて雪に惱む様子、體の顔ひ足のはかどらぬところ妙なり。れ角を呼びかゝる驚き工合、赤子を見せてほゝゑむさま、どこまでも女の情充分なり。忍び込みし小平の足音に少しく睡覺め、なにか寐言をいひて又睡る工合、眞に逼る。乳香子をかゝへ乍ら逃げまはり、ゆきつもどりつする足取あわてたるさま見わたる大出來なり。

しかし八百藏丈といひ秀調丈といひ、奸夫とも淫婦とも見えず。菊四郎丈の仁助役。だしぬけに角になぐられての呆加減、ねふくろどうしたのだくといひ乍らつきださるゝところ、松助丈と氣組よく合ひたり。小平の先にたちて忍び入り、丹次に切らるゝまで申分なし。菊五郎丈の道連小平役。仁助を先にたて、花道よりの出、假髻も鬢のゆるみし、月題のよほど長き誂、廻し合羽をはぶり、長物をうちこみ、足持も嚴重にて、とんと長脇差といふ作り、好し。門口に來り様子を伺ひ、れ角の手引にて土足のまゝ座敷に忍び入るまで、毎度の事として軽く、有合の小袖をとりて行燈にうちかけ、うの片端をかゝげて床の下の財布をひきだす仕打、細いものなり。丹次が切りかゝる切先の烈しきを、劍術をしらねば危く見え乍ら、始終下手になりて受流す身輕な仕打、巧者なものなり。ね龜の財布を握りつめし指を齒にて開かせ取るは松助丈もしたれど、随分厭な仕打なり。ね龜の落ちし谷を見込みて、惡黨の性根をきかする長白、凄いことく。母親の陥りし谷に望みて片手にて拜まねする幕切まで、得意物とは申しながら、五分も透なし。五幕目、戸田家通用門の場。同家中鹽原宅の場。八百藏丈の鹽原角右衛門役。ね勢が多助をわが子なりとて喜ぶを制しながらの出、この幕は前幕とは年経たる心ゆゑ顔も肉色にせられ、餘程更けし作りにて申分なし。苟且にも殿様のね側近く勤むる鹽原角右衛門、炭屋の下男に知己は持たぬときつぱりといひ切るところ、武士の意地を立て通す氣組よく解りたり。外ながら百姓角右衛門に對しての義理を述べ、うの位牌に對しても親子の名乗はできねば早々出て往けと叱るうちに情をこめて諭す工合、充分に得心が参りたり。多助が分疏するをききて、さほど恩義をわきまへ居らば身を立て家を興せと教訓しながら勵ます仕打、腹に一ぱいの涙をもちて、表に強面くもてなす工合、さら

さらとしたるうち大分狂言ありて旨いものなり。この丈のよく師匠の骨を得て、うれに自身の器用を衣にかけたる、まづ當時の角右衛門なるべし。ぐづぐづして居らば鎗玉にあげんといふところは、塲を引立つる趣向とはいひながら、少しく爛の強すぎる本文なるを、至極穩當にこなされたり。秀調丈のね勢役。拵の若作なるは女のたしなみやよきためかしらねど、誰が見ても前幕から二十年も立ちたりとは思はれず。この丈に似合しからぬことなり。多助にれつかさまと呼ばれて不審がる工合、愈々わが子を解りてから大きくなりし多助を子供のやうにかゝふる仕打、序幕の情愛どこまでも失せぬやうに思はれて妙なり。夫の義理だてする詞に是非なくつれなくもてなしながら、實はいたはる心盡、充分に行届きて感服せり。菊五郎丈の多助役。通用門のところ、さしたることなければ多助の氣組になりすましてゐるところ、流石なり。炭をわたして、代を貫ひて向もんでがんすといふは、すこしをかしみに陥りて落語のやうな筋なれど受けたり。明荷につきし札を見てよりの驚き、若黨にききよていよ／＼うれと、心附く氣組、旨いものなり。ね勢の名を聞てお母さまといきなり絶りつくところ、堪へられたものにあらず。角右衛門が外ながら論じ勵ますを障子の方に耳を傾け、椽側に手を支へ乍ら脊のびして、一言一句を肝に銘じて聞き取る仕草、うの筈の事ながら親切なり。どうか父親様の顔を一目見せてくだされと繰返し／＼いふあたり、本文は餘程あつさりして居れど、此丈のことゆゑ随分念入にせられたため、稍女々しきに過ぎたり。父親の顔が見たじとて思はず草鞋のまゝ椽側に上り、心附きて手拭にて泥を拭く仕打は新しく目につきたり。鎗玉にあぐさとき、突殺された氣で死身になつて奉公しやんと、別を惜みながら花道にかゝり、ちよと蹶きて氣を替へ、天平棒を擔ぎて、すた／＼と驅込むまで、確かに堪能したり。音五郎丈、扇造丈の門番

役。出入の商人をいためつけて上前をとる仕打旨いものなり。梅助丈の若黨役は少しけたまじきやうなり。

大詰本所四ツ目茶店の塲。相生町炭屋の塲。堅川通川岸端の塲。松助丈の明樽買久八役。拵は本文には刺衣に筒袖を着、膝の抜けたる半股引を穿き、天平棒をかついであるといふを、角袖のある着附、手拭にて明樽をいはへて提げた好み、樽久の子孫から物言をつけられた爲かしらねど、すこし品が好すぎたり。しかしすることは例の軽い調子にて面白いことなりき。多助に金の尻をはたく講釋をきいて感心してつりこまれ、同じ眞似をするあたり實地のやうなり。藤野屋に呼込まれて出て來り、びつしより汗になつたと襟や脇の下をふくあたり妙。多助に庭の結構を語る中、枯松葉の布きありしを掃除のどかぬためといひ、見事のね菓子といひかけ、あ、しまつた、忘れて來たと立あがりて内を見こも鹽梅、娘が惚れたといふところにてそれが妙だ、よつぼど妙だ、實に妙だ、とくりかへしいふあたり、いづれも誰がしても塲當になるのを、この丈すこしも當込つ氣なく大眞面させられ、旨いと申すも愚なり。秀調丈のね勢役。右手拭をかぶり、荒布のやうな襦袢を着て、竹杖をつき、俄旨の拵にて、わが子の手をひきての出、さて／＼れもひ切たる作り方かな。籠釣瓶にて小團次丈が扮せし女乞食、ね清と一對のきたな細工、うれも小團次丈は變物に妙を得し役者なれば當然なれど、當代女形の開山にてかやうの事をせらるゝは勿體なし。仲間の乞食に折檻せらるゝを助けられて、喜びて禮いひしうの人は多助とききて、はつと驚き、杖を力に進まぬ足にて驅出すところ、眞に逼る。引留られて面目ない／＼と舊惡を懺悔し、多助の惠の金を受けて濟まぬと思ひ押しもどすところ、充分に悔悟のさま見たり。御恩をあたに思うてはならぬと、幾度も子供に禮をい

はせて這入るまで、なにとなく心地あしくなるほどに應へたり。別て足取の内へ曲りし様子、上手にせられたり。家橋丈の藤野屋左衛門役。茶店の場にては多助の後影を見送りて、あれがこつちの望みでござるといふ白丈なれど、拵人品いかにも籍りて天晴御用足の旦那と見ゆ。炭屋の場にては、始終娘のために使うゝ父親の情合よく寫されて大出来なり。羽織も袴もときすてゝ、提燈もちて炭を運ぶ手つだひするところ、見物一同嬉しがりたり。この丈和事師専門にてありながら、壽座の甚兵衛といひ、歌舞伎座の三浦の母といひ、この度の此役の如き役前をひきうけて、見事やつてのけらるゝは大した腕前なり。榮三郎丈の花役。唯奇麗と申すまで、薪割にて振袖を打切るところ、滅相の儲場なるに、うの氣組少しく不足なりしは憾むべし。願はくは人氣を頼みにせず、今一息精神を役々に籠められたし。翫太郎丈の茶店の婆、豊の早耳の工合無法に旨し。二役家主も相替らず如才なし。菊四郎丈の町同心役。器用にこなされたり。鶴五郎丈の手代役はさしたる事なし。

菊五郎丈の多助役。炭の入りし籠をかつぎての出、堅氣な小商人と見えたり。久八に金の尻をひつばたいては、稼いでこう、稼いでこうと出してやりやすといふ經濟論を説くところ、旨い事／＼。全體前幕の多助は始終叱られたり、擲かれたり計して居り、いかにも意氣地なき人物に見えしに、この幕に到りて始めてその經濟家たるべき本領を示すところゆゑ、氣味好かりき。されば多助が大富限となりし根本も亦こゝにあり。若しまことの詩人が筆を採りて、多助の事を戯曲に仕組まば、必ずこの經濟論を眼目とすべきに、一代の履歴を順追ひて見する偏僻なる筋立は、遂に滑稽に傾き易き馬の別を以て眼目のやうにせしこと惜むべし。ワイマルの劇場も、ギョオテが言を用ゐずして、

渡り役者に小犬を率ゐて場に上らせしより衰頹せり。我邦の狂言作者並木五瓶も嘗て舞臺に本馬をつかひしに、この馬溺せしため、世の嘲を受けたり。菊五郎丈が奇を好む癖ありて、實地々々を氣を採むもよけれど、餘り極端に陥らぬやう注意ありたし。こは少しく作の評にわたれど、今の作は随分役者の注文にて左右せらるゝもの故こゝに一言す。女巧にいちめらるゝお龜親子を助けて、三人に一文づゝやるところ、手堅き性根見え、いつも盜賊の役にて氣前のよきところを見する裏をゆきてをかしかりき。助けし乞食が養母なりしに驚き、叔母さん、わし多助でがんとはいひ、お龜が面目をい／＼と逃げかゝるをためて、叔母さん、面目ねえといふことが分りましたかえといひて、うれより今迄おのれが辛抱せし話をなし、またお龜が零落れし顛末をきゝて、惡の報とはいひながら淺ましきことなりと貰ひ泣する工合、親切の氣組溢れて見え、われ等も思はず貰ひ泣したり。金を恵み、氣を附けていきなさいと見送るまで行届いたる仕打にて嬉しかりき。お龜の子供がお旦那様有難うござりますと禮をいふを見て、かはいさうに、ほんとの乞食のやうだといふ一句に無量なる實意こもりて、身にしむ程に應ふるは、こゝらが名人のところなるか。しかし子供が腹がへりたりといふをきゝて茶店の饅頭を取りてやるは、どつと受けたれど、多助には少し氣が利きすぎたり。久八が婚禮の話を馬鹿々々しいと耳にもかけぬ工合も旨し。久八がしつこく云ふを振切りながら、今の話は駄目でがんとはいひはなし、籠をかつぎてさつ／＼と掲幕へ這入るところ、無慾の性根よく解りて、後に少しも氣が残らぬ工合、無類なり。團十郎丈がいつぞや光秀役をつとめし折、草履つかみの猿面冠者、いで一とひしぎにしてくれんといふ文句にて、掲幕を見込みて大股に這入るところ、後より久吉に呼びとめらるといふ氣組少しもなかりしを、さすが名人は違つたもの

なりを得知子が評せしことありしが、時代世話の差はあれど、今度の音羽屋丈の多助が引込は、之と一對の佳話とすべし。炭屋店の場。計炭を賣りて、お世事をふりまく工合、多助にしては愛敬があり過ぐるかと思はるゝほど旨し。一體音羽屋丈がこの幕あたりには、始終にこゝと笑を含みて、顔中どこも嬉しさを働かせ、さもよい人のやうに見ずるは、注意の周到せるところを敬服の外なし。篁村子が二幕目の多助役を評し、顔の筋の働までを鈍くして、といはれしは穿ちて微に入りし名評なり。お花の押掛嫁入を強情に断るところ、多助を見るやうなり。お花が薪割にて振袖を切りしを見て、思はず手をうちて、うれでこりれが女房だといひてびよこゝお辭義をするところ、眞に逼りて嬉涙こぼれぬ。うれより炭を河岸揚する大詰まで、多助役は古今の大當にて、長く年代記に残るほど名譽のことなり。二役道連小平役。お龜の殺しも手軽く、捕物もあつさりにてよろし。

大切

梯子乗出初晴業

秀調丈の待合の女房。慄ひつかるゝほどの美しさ、これでお龜の穢な細工の取消は濟たり。榮三郎丈の藝者。美きことなり。家橋丈の鶯の者。いつもながら女形にこづきまはさるゝ役廻り、よき生れ合せとはいひながら、さだめて五月蠅かるべし。八百藏丈の鶯の者。おつな漢語を使ふ工合、活歴史風の穿になりて妙なり。翫太郎丈の書生役。黄八丈の着附に太き杖をもちて、田舎紳士を氣取り、第二の撰擧には議員になるの當込大受なり。藝者にじやらつきて居る中時計をすりとられ、遠くは往くまい迹ねつかけてと花道にかゝり、音羽屋丈が天徳の引込をまねて、帽子を首級と見せ、

六法を振つて這入るところ大當なりき。菊五郎丈の鶯頭。六區の組頭の半纏を毎日着替へて出るといふ人氣取の親玉ほどありて、若々したる男振、水の垂るやうなる愛敬なりき。八百藏丈の鶯の者が丑之助丈の鶯の子役に向ひて、おめねもねとつゝあんのやうな頭になるのだよといふをききて、なあに今ぢやあれ見れやうなもの駄目だ、かう髻でも生やして、むづかしいとでも言はなくつちやあいけねといふ謙遜したる白、場中どつと受けたり。あまり老込んだといはれてはいまゝしいから一番やつつけやうかといふ白廻しも氣味よかりき。梯子乗の所作は襟と胸に弔りはありしが、兎も角も見事の手際に相違なければ、これは早竹虎吉が繩張内のものなるべし。此等は團十郎丈の能掛りを好まると同一の癖にて、成べく避けたき事なり。若し同丈もうれは承知の上にて、唯見物を呼ぶために出しゝものどせば、見物はいゝ面の皮と申すべし。丑之助丈の鶯の子役。うんなことはこつちの畑にはねえのだといふ白も、梯子乗の眞似事も年には増してよく出来たり。(明治廿五年一月)

演劇世界の共和国と見立てられて、勢力日に月に彌増せる本郷の春木座は、最早今年になりて三替目の興行とはさて、手つ取り早き事かな。うれも其筈、十五日毎に狂言差替といへば、殆落語、義太夫などを寄席にて掛替ふるに同じ。お負に價は廉く、時間を違へず、幕間の早き杯、飽まで注意届きて感服せり。實に劇場にまつはるゝの悪き習慣を一洗して、この簡便なる改良手段を施したる功は、予等も深く烏熊芝居に謝せざることを得ず。さればまたいつも大入大繁昌を極め、この度の興行なども大入場は爪もたぬほどの景氣なり。機敷うづらにうの割に客數の少きは、上流社會の人々がこの芝居を何となく卑みて自然と足を遠くするためか。若し然らばこの人々は菊見といへば吹上のお庭に行くものと心得て、巢鴨本所に杖を引くことを忘れしに同じからむ。さて今

度の狂言名題は、一番目

東下向天明日記

なり。これは天明中中山大納言が勅使として關東に下向し、五箇條の難問に答へて、京都に貢物を納むるやう取計らひし一件を仕組みしものにて、東京にては去明治十二年六月新富座にて、市川團十郎丈が始めて演じたり。うの時の名題は花洛中山城名所二卷にて、塲割は傳奏屋舖書院の塲、同邸奥殿寢所の塲、白川侯邸密談の塲、舞鶴城玄關前の塲、同大廣間議論の塲にてありき。この度は少し變りて序幕市郎兵衛内の塲、二幕目中雀門の塲、三幕目殿中の塲なり。山城名所は默阿彌の作にて、傳奏屋舖にて若山殿寢ながら幕府の使者に對面せらるゝ處あり。白川侯邸にて攝中守と井住守との打合あり。水の面に云々の歌は扇町殿が書くこととせり。固より流布本又は講談などより篩にかけて正味を取りたるものと見ゆれど、初手より歌舞伎にしたら定めし面白からむと思ひし割には存外榮えずと六二連の評ありき。此度の天明日記は竹柴諺藏氏の作とき、しが、序幕は見ず。中雀門の塲は徳川玄關先の塲の穴をゆきしなるべく、例の歌は中山殿が書き、備中守にお役御免を願はしむる事とせしは掉尾の筆力ありて、幕切引立たり。されどこの狂言は大歌舞伎にて大立物が演じてすら一場の討論演説丈が見せ場ゆゑ、とても演劇とするほどの面白味あるものでなきを、この小劇場などにて出すとは随分迷惑の事なり。さて二番目は生寫賢處女油畫にて、松林伯圓丈秘藏の讀物なる獨逸の賢嬢オチャリ草紙を探りしものなり。これは伯圓丈が某に譯してもらひ、濱の離宮にて一度貴き邊の方々の聴に達したりとかいふ自慢物にて、固より二晩六席位にて讀切になる講談なれば、同じ讀物にても一箇月もかゝる鹽原多助一代記とは違ひ、筋もよく通り纏りもよく、二番

目物にはもつてこいといふ堀出物なり。うの上役々よく徹りて、哀きところあり、をかしきところあり、腹立しきところあり、嬉しきところあり、初幕より大詰まで少しも厭が來ず。探偵的事實丈ありて跡はくと思はしむる側の張りは充分あり。唯名題に生寫賢處女油畫洋裝美本五冊といふは、西洋種子と聞せむためなるべけれど、油畫といふもの製本するものならねばいかど。

一番目三幕目殿中の塲。雀右衛門丈の中山亞相安近卿役。衣冠束帯にて中啓を持ちて花道よりの出、中々立派なり。團十郎丈が勤めしときは、六十二歳とかきこわたる年配にしては餘程若作りなりしを、大器量を顯すには老鍊ならでは似合しからずと六二連は難じたりき。此丈のは随分白粉の濃き作りにて、どこまでも公家のやはらか味を見する心と思はれしが、固より柔弱なる公家の中にて絶群の技量、非凡の見識ある人物なれば、縦令老年の白髪役に作らずとも、白粉もあつさりとし、つとめて品格を保つことを第一とすべし。素と山城名所の若山卿は故人彦三郎丈に勤めしめんと、默阿彌の立案なりしが、薪水没後なりしゆゑ團十郎丈に廻はりしよし。薪水ならば充分に勤め得たりしならむ。又團十郎なればこそこの品格を保ち得て、一點の申分なかりしなれ。雀右衛門丈は老功の人といへども、品格の點に於いてはこの兩丈に比ぶべくもあらず。これ此役を任果せたりといひがたき所以なり。次ぎにこの役につき必要なるは辯説のさはやかなるべきことなり。しからずば關東の諸大名幾人と舌戦して、取つて押ふる譯にはゆかじ。こゝが團十郎丈の外に仕手は無かるべしとまで感服させしところなり。雀右衛門丈も花道にて當こすりらしき事をいふところ、五箇條の答辨など中々の落附はありたれど、一體に口跡ねばりて、音聲低く、能辯家とは受取れず。殊に攝津守をせつゝうのかみと引延すなど聞苦し。しかし備中守に説破られたりを見せて調子を弛め、忽ち大猷

院に下したる贈位を剃ぐべしといふ薄墨の繪旨をかざして備中守を言伏する烈き調子に替るは眼目のところとて、中々功者にこなされたり。幕切花道にかゝりて、水の面の歌を吟じ、備中守の御役御免を願ふを見てのにつたりも、あつさりにてよし。八百藏丈の松名備中守役。この一役にて歌舞伎座よりの掛持、鶏群一鶴の心地せり。此前宗十郎丈の役にて、品もよく、貫目もありて老中と見ゆ、相應の出来との評ありしが、今のところにては何處の大歌舞伎にてこの狂言を出しても丈に廻るべき役前、品格といひ辯説といひ、天晴樂翁公が若年の頃と見ゆ、古人に耻ぬ出来といふべし。殊に中山郷をぐつとつまらするところ、切りに短冊を折りて、備中守今日よりね役御免を願ひますといふ焦込工合も、けたましからずして應へたり。芝鶴丈の關谷大和守は佐倉曙の堀田家々老職と同じ様なり。右田作丈の大路町亞相卿役。この前故人仲藏丈の役にて、中山殿と幕府方との間に立ちて心惱ます工合、老練ならでは能はずとの評ありしが、此丈はたゞこの神主のやうなり。猿之助丈の上田伊勢の守は中山殿の揚足を取る役なり。小團次丈にては應へたりといはれしが、今度はなにとなく氣が乗らぬやうなりき。宗三郎丈の吉田和泉守役。この丈世話物をば中々軽くこなされるれど、斯様な品格物にては何だかひよこ／＼して落付かず。勘五郎丈の小田攝津守は少し安つぽいやうなり。駒之助丈の井戸宰相役。此前菊五郎丈が勤めてすら仕打は申分なけれど、宰相殿とは受取れずといはれし品格物なり。座頭ゆゑこの丈に廻りぬと見ゆれど、まづ暫らく／＼と呼びかけての出、無暗に體をゆさぶりて重味なく、中山殿が繪旨を納めしを見て、それで安堵と胸を撫り目を睨り口を尖らす仕打、安い事／＼といふべし。

二番目

生寫賢處女油畫

洋裝美本五冊。松之助丈の浪邊銀行の令嬢艶子役。この役は當狂言の主人公にて、己れが戀ふる教師文雄を支配人郷藏が嫉みて陥入れんと謀るを知り、わざと教師と暴論し、尙ほ教師の身に難あらせじと銀行より逐出すやう計ふといふ筋にて、一通りの芝居の處女ならば途方に暮れて泣伏すべきを、却りて雄々しき思慮を運ずところが西洋婦人たる所にて、こゝが又狂言の山なれば、大分むづかしき役にて餘程腹が入用なり。されば伯圓丈の意にては故人半四郎丈か、已むことなくば成駒屋福助丈に勤めて貰ひたきやう聞きしが、いかさま美しき點に到りては半四郎丈の方優るべけれど、この役を仕活して賢嬢オチリヤが性質を顯さんとせば今の福助丈の嚴格なる態度と沈着なる仕打とに依らでは能はじと思はる。これ同丈の伏姫耶須陀羅女などを見て知るべし。されば松之助丈にては、固と箴り役ならねば、今一息の憾なきこと能はず。顔の作り滅相に美しく、束髪もよくうつりたれど、拵が少しは過ぎたり。西洋料理の場などは洋裝にてもよき位なるに、此丈被布も羽織も着られぬゆゑ、猶更普通の町家の娘のやうなりき。調子は艶のある仇つぽい方ゆゑ、橋本の場など、どうかすると藝者がだゝを捏るやうに見ゆしも是非なし。こゝは腹で泣く所を見せねばならぬところゆゑ、少し得心がゆきかねたり。しかし文雄が己を嘲りたりときまて却りて喜び、最早松藏に關係せず、いそ／＼と二階へ上る邊は色氣ありて大受なりき。正久が東京府の涙を讀むをききて、云ふに云はれぬ胸の中のせつなさを押しかへし乍らほろりと一雫の涙を墮す邊はしつとりとよく出来たり。どうかこの次は夕霧や松山のやうな體にある役をつとめて、己れ等を呻らせたまへ。雀右衛門丈の春戸衛守役。撫附、附髭にて年配の作りよく箴り、着附も相應し、艶子を見送りて世が世であら

ば嫁にしやうものとの述懐、新聞に詐偽をしたりと記し、を見て倅文雄を打擲する一徹の仕打、昔武人にてありし氣性顯れて、よく出來たり。坂地にても此丈のあつさりしたる藝風の噂はありしが、いかにも呑味なくて嬉しかりき。芝鶴丈の教師春戸文雄役。伯圓丈は菊五郎丈に勤めさせたりといひしが、此座にては人氣取の此丈に廻りぬ。人品、拵とも小學校の教師位に見ゆ、東京に名たる大學者とは見ゆ。梅邸の場にてはひよこくして輕躁に見ゆ。艶子と議論のところは突込んで仕たればよし。唯令嬢といへばよきを御令じよくといひしは學者に似合ず。濱町河岸にて荒太郎と別るゝ仕打、蝙蝠傘を杖にし、肩掛を引張らるゝ様子、少し振事じみて見ゆたり。自宅禁錮の場にて艶子を罵る調子、此丈だけ時代になりて釣合はず。仕打も壯士演劇に近し。右田作丈の藍玉商喜兵衛役。吃りの調子、仕打とも大出來なり。優も中々侮るべからず。猿之助丈の銀行支配人須貫郷藏役。原の名はスヌウクといひ、新潟の花柳社會にて厭な客にスヌウクと譚號をつくる程、伯圓丈が流行らせし憎まれ役なり。差詰松助丈の役といふところを引受けしものなるが、これは同じ敵役にて、色氣ゆゑに教師を陥るゝ筋なる上、うの後になり教師の信用を失はぬといふ随分狡猾極まる役前なるを、この丈よく腹に入れたり見ゆ、體裁よき紳商に作りて無暗にこすく立廻る仕草、滅相に旨くできたり。橋本にて艶子に思ひありげにいはれて、ずくゝ喜ぶところ、ね爲ごかしに文雄をなだむる工合れ巧者く。二役警部長天原役。頭の餘程禿げし假髮、官服の着こなしも申分なく、國訛にて喜兵衛を尋問する調子大受く。この丈も大舞臺を踏みし功見ゆ、次第に場當などのなくなるは有難し。中村太郎丈の銀行子息荒太郎役。伯圓丈の講釋にても本筋にからまりて働く大役。この狂言にても筋の緊要な處はこの子役が饒舌る仕組なり。この丈の拵、仕打ともどこ

となく生意氣にて大家の我儘ぼつちやんと見ゆ。姉さんの額を見て涎を垂した先生だよといふ白にてどつと笑はせ、姉さんお前がわるいから謝まつてねしまひといふところにてほろりとさせ、跣足にて羽織を頭から冠りて雪道をかけて來て教師を留むるところもいぢらしく、東京府の涙を大利根が讀むをきこめて、あの婦人の辯に男子を輕蔑しと書いてあるのは姉さんのことだ、あゝいゝ氣味だといふあたりも、子供の罪のなきところうつりて感心なり。芝雀丈の丁稚仙太郎役。主人思ひの中に年の行かぬ情まじりてよし。みんし丈の令嬢安子役。調子のねぼつくのは瑕なれど、被布女靴の拵など注意見ゆてよし。宗三郎丈の銀行頭取波邊隆役。老込みて萬事支配人任にする老紳商の様子妙によく倣りたり。西洋料理の場にて己の刺らるゝを聞きて赤面する邊最旨し。勘五郎丈の銀行馬丁松藏役。馬鹿に色を白く作り、紛脱を襟にまき、銀鎖を淺黄の三尺に巻きつけ、巻烟草をふかす馬丁作り、飽まで生意氣な仕草相替らず達者のこと。但し無暗に淺黄の法被の裏を引くり返すは何だか氣になりたり。此役の白に、こんな馬の少し氣の聞いたやうな役をいつまでもして居るは感心せぬとある通り、いつまでもかういふ役前のみにて満足せぬやう願ひたし。富十郎丈の清元延今役。上等の淫賣といふ役前なれば、厭に色氣ありて京音をつかふ鹽梅、氣味悪き心地す。春戸の妻お早役はふけたる作りにて、子をいたはる母親の情、中々よくこなされたり。殊に守衛が折檻するをこめて、倅も子供ではなし、今では立派の學者で御坐ります、悪い事があれば、言うて聞かずがよいでは御座りませんかと腹立しくいふ工合、さもあるべく思はる。駒之助丈の大利根大尉役。この一場の疑獄を解く儲役。伯圓丈は團十郎丈にと望みし位の貫目ものなり。この丈武官をきかするつもりか、餘り聳むしやに作りし様なり。橋本の前にて郷藏に怪しきやつと目を附くるところ、さらく

としてよし。西洋料理の場にて東京府の涙を讀みて文雄の一條を糺す工合、餘り輕すぎて少し演説調子になるは悪し。文雄が艶子を毒婦なりと罵るをきいて、あれは君に戀着して居るよといふ高笑は一寸受けたり。しかし始終兩手を振つて歩く洋服付の變なると、調子に乗り過ぎて、何々でありませうといふ詞尻を上ぐるとが癖なり。さて終にこの狂言につきて不審を抱きしこと二箇條あれは、序にいふべし。一つは梅邸の場にて銀行頭取親子も春戸親子も茶代を置かず清まして出行きしこと、この鹽梅にては橋本の勘定も氣遣はし。二つには橋本屋の二階も、銀行の令嬢の居間も、春戸の宅もいづれも同じ墨畫の瀧の襖立てでありしことなり。こゝらがこの劇場の共和國たるどころか。(明治廿五年二月廿一日)

音羽屋丈の多助どん歌舞伎座にて古今の大當りをなしたる後、高嶋屋丈につぎて浪花に往き、成田屋丈のみ踏住まりて、同座の三月狂言に出勤の噂とりくくるところ、俄に深野座開場を聞かじには驚かぬものなかりき。こはけだし此座改稱以來とかく景氣引き立たず、茶屋出方一同困難を極めし折柄、今春の興行を頼まんとせし高嶋屋丈坂地へ乗込と定りしかば益々驚き、遂にこの事情を述べて成田屋丈に出勤を乞ひたるなり。同丈固より義侠の人なれば快く引受、無報酬にて出勤すべしといひしかば、芝翫丈、福助丈も義に勇み、同じく無報酬にて出勤することを諾し、この開場に運びしはかへすくも感賞すべき美舉にこころ。さて當狂言の一番目成田仇討は若手の腕揃、大切會我礎は花やかにて、目の覺むるやうなる出し物なれど、中にて最も價ある呼物は中幕

伊勢三郎

なれば、先づこれより評判を試みて次ぎに前後に及ぶべし。

この伊勢三郎は默阿彌が屈指の名作と噂の高きものにて、去明治十九年十二月やはりこの新富座にて興行せしが、書卸しにて大當なりき。この時の大名題は萃源氏陸奥日記といひ、伊勢三郎隱家の場として出したりき。うの後井上伯の邸内にて演劇天覽のときも、第二日目に取任組みて演じたり。されば評判といひ名譽といひ、中々のね箱物なれば、この度の興行にて新歌舞伎十八番の内と題し、名題に伊勢三郎と主人公の名を取りたるも宜なり。さてこの筋につきては藝に六二連高須、梅素兩子の評に、この狂言は默阿彌が當時の時勢に倣ひ、予等の改良作は此様なるものなれば、一番見て呉れとの氣組にて書れしものときくしが、果してうの趣あり。都て能曲を歌舞伎に寫したる演じ方にて、幕明を掃舞臺にし、板付の仕出もなく、義太夫を地謡と見せ、のつけに出る義經をわき師、義盛の妻濱萩をつれと見せ、こゝに出る老黨左六太は狂言師の格、是より坐定まりて花道より出る伊勢三郎をしてと見する順序なり。うの外白萬端高尚にて、すべて華やかに演じ終りたるは目新しくかりきといへり。いかにもこの作の品格高きは能を摸せしためなるべけれど、見終りて淡泊過ぎ、少しく喰足ぬ心地するも、亦能を摸せしために外ならず。原來能を演劇に摸するは好處三つありと我等は思ふ。第一能の形を摸するなり。うの故は能にはわき、つれ、して、狂言師をど、うれくしの順序正しく、うの役々の並び方まことに整へり。演劇は眼にて見るものなれば、淨瑠璃作者が早く人形の並べ方に苦心する如く、俳優が舞臺に並ぶ風情、よく整はではかまはず。所謂引張の見えなどいふはこゝの事なり。されば勸進帳にて辨慶が往來の巻物を取りて讀むを、富樫が何ふ邊を言ふべからぬ味あり。第二は能の振を摸するなり。例之ば橋辨慶の立の如き、土蜘蛛にて蜘蛛の糸を出す如し。第三は舞臺の道具立の淡泊なるところを學ぶことなり。我等も固よりわが邦演劇の舞臺を

能舞臺と一樣に味なきものにせよといふにはあらず。しかれども歐洲、殊に佛蘭西などの大演劇場にてあまり大道具にこるため、観客はうの景色よきに目移りしてじやくその喝采はあれど、うの代り藝の方は次第に二の町になるは識者の卑むところと聞く。わが邦にても近頃隨分道具に凝る癖起りて、實地々々と摸するやう勸むる人もあれど、勞して功なきことも亦少からず。例之ば菊五郎丈が梵字の彫物にて使ひし日光陽明門の道具に數千圓を費し、それが評判もなかりき。中には左團次丈が血達磨の火車など大當りなりしが、これらは藝道の上にては餘り誇るべきことにあらず。固より兩丈などは道具建の當りを頼みて藝道をゆるかせにするやうなる人にはあらねど、後進の人々がかゝるまねをすることなど流行りては斯道の爲に憂ふべし。又能より演劇に摸して惡しきこと一つあり。うは正本の脚色を能より取ることなり。うの故は能の筋立はもと淡泊なるものなれば、うの好處は優美にして品格を備へ、おもに叙情的若くは叙事的なるところにあるべし。正本の筋立はこれと異なり。こゝにてはまことに戲曲的ならんこと必要なり、うの筋の上の葛藤も分明ならざるべからず。鉢の木、勸進帳は猶可なり。然れども釣狐、土蜘蛛の如きは純粹の能とほどく差別をつけがたし。予等は成田屋丈、音羽屋丈などが斯様な無味淡泊なるものを採りて、新歌舞伎十八番、演劇十種の中に數へ、幡隨長兵衛、明石の嶋藏などを遺すを怪む。かの橋辨慶、茨木の所作事の範圍を脱せざるも亦此類なり。さて伊勢三郎はいかにといふに、先づ能の形を摸したれば、高須梅素兩子のいひしごとく、役々の順序正しく、又並び方も整へり。道具建も強ち能舞臺を學びしにはあらねど、荒木作りの山家にて、二の間の飾附も小柴垣、枝折戸まで至極あつさりにてよし。さて脚色の上につきてうの概要をいへば、左馬九郎義經が奥州下向の途次、草屋に宿を求しに、うの家

の主人はもと源家恩顧の郎黨の一子伊勢三郎なりしかば、主従連立ちて秀衡方へ下らんと出立すといふだけにて、要するに義經記の一節を殆どりの儘引抜きしものなり。これにては叙情の側を満足せしむるには足るべけれど、戲曲的にはならぬも道理なり。近頃中村梅昇といふ能役者より出でし下等俳優、常盤座、高砂座などにて安宅、土蜘蛛などを演じたるが、うの振金剛流に出でて目覺しとて町中の大評判なれば、若し俳優、作者等これに倣ひて能掛など類に出し、切角少し戲曲的になり居る我演劇の幾分かこれに壓せらるゝこともあらば、うは實に憂ふべき事なるべし。

これより藝評にかゝるべし。先づ女寅丈の三郎妻演役。この前は源之助丈にて中々善くしておられし由の評ありき。この丈の拵は少し前度よりはるかのやうなりしが、うは三郎の拵もはでになりしに弔合はしたるものと見ゆれば難なし。仕打は源之助丈同様舞臺を謹みて勤められたれど、かやうな活歴史風のお附合はあまりせぬためか、少しく見劣りが致したり。まづこの丈の調子は市川家入門以來大分ねばり氣取られたれど、どうも句毎に抑揚なく、うれゆゑ娘がたまゆるときには至極符まれど、思入の入るものにはやゝ難澁なり。義經の宿を辭む時、いろ／＼に頼まるゝをびつたりことわりて枝折戸引さし、二重へ上りて柱を支へてちよと振り返りて見えあるところ、氣強く言ひ切りながら腹に充分いたはしと思ふ氣組を見すべき筈なるに、この丈の仕打は唯形だけを摸せしのみにて殘惜し。左六太が歸りて止めんといふを、止むれば却りて御身の爲惡しと心惱すところ、うれとあらはにいひかねてといふちよばに合して今少し息込ほしかりき。三郎に宿を借し故を訊ねられ泣伏すところ、杯の餘滴を貰ひて飲むあたり、このさら／＼と相手かまはぬ師匠の藝風に對して、

たど顔で泣くにせよ、泣きを堪ふる仕打を得心さずるは、中々感心な事なり。今より役々を腹に入れて求めずとも自から仕打が出て来るやう熱心に勤めなば、所謂自憑の手柄も見ゆるに至らん。猿之助丈の僕左六太役。この役は正本にても親父形に作りあり。この前は門藏丈がつとめて能くこなされ、お功者の事との評ありき。いかにも女主と留守居する役といひ、義經の若衆形と濱萩の旦役との釣合能くするには是非白髪役ならでは引立悪し。作者が心ありて作りたるものを漫に改めて壯年の拵にせしは心得ず。うれに門藏丈は車輪にて御曹司を止めんとする親切面に顯れしが、この丈は何となく氣合乗らず、濱萩が宿を許さぬを不審がる工合も應へず。一體の白も世話調子にて輕過ぎ、側と釣合ぬ心地す。かやうな品格のある狂言に出づるときは仕打のなき役にて、捨てずに氣を入れて勤むべし。左團次丈が今三優の中に數へらるゝも、始終この心掛を持ちたる爲に外ならず。猿藏丈、團七丈、染五郎丈、雷藏丈其外の衆、義盛の郎黨となりて、いづれも謹んで主命に従ふ丈の仕草なれど、氣合がよく師匠と合て、恰も手足を使ふやうに自在に見ゆるは、流石平生の薰陶と丈等が勉強とにあるところと敬服々々。福助丈の左馬九郎義經役。花道にて駒を止めて白ある處、薄紅梅の着附、白地の袴にて黒き駒に乗りたる様、畫のやうなりといはんよりも、畫も如かずといふべし。この義經役は例の眞柴久吉と同じく、淨瑠璃、芝居の方には無暗に引合に出る人氣役なれば、うの筋立に因りて色々作りも變るなり。勸進帳にては女形より勤むるほどの優形に作り、泉三郎にては類髯生えたる大將に作る如し。されば左馬九郎の頃も、若し活歴史といふ大間違を考より説を下さば、故人海老藏など然るべしといふ團十郎丈の議論も出るやうな譯になれど、役々の作りは唯正本の趣旨に適ふやうにすれば足れり。義盛の白に優にやさしきうの中に自ら武威顯るゝとあれ

ば、かく見ゆるや否やにてこの役の善悪は判ずべし。拵はこの前と同じかりしが、いかにも六二連がいひし如くさもあるべしと思ふ好みにて優美に見ゆ。品格は丈が特有にて、漫に體を動さず、仕打も極落付て、面貌も物に動せぬ氣組見ぬ、義盛が常人にてはよもあらじといふも尤もに思はる。起居などは心掛けて勇ましくせらるれど、緊要の勇氣を示すべき調子が、顛ひてさも苦しうに聞かぬ、言廻しは充分に届きたれど、いかにも義經が旅路に勞れて居るやうなりしは微瑕といふべし。白は丈の事なれば正本通りを正しく守られたれば、少しの申分なれど、主が歸宅さるゝまでは、今の新聞紙風の手爾遠波いやなり。宿を辭まれ押して頼むを、枝折戸立切られて少しく當惑する仕打は卑しからずして解り、馬の轡を執りて首を傾けたる見ぬも美し。虎臥す野邊にも罷出でなんと云白に力を込めて言ひしは流石なり。古歌の下の句を吟ずる思入も應へたり。義盛が歸りぬと知り、太刀取直し身構しといふ文句にて、左手にて太刀を執り、右手にて柄を握り、居合腰になりて下手を見込み、義盛が顔を屹と見るところは、氣組充分にて隙なし。三郎を郎黨につけんとの思入もよくこなされ、物語もちよと華やかに嬉しかりき。義盛が本行に装束をつくるを待ち居るは退屈なるべし。濱萩の別をいたまはる仕打はお附合にて仕悪きやうに見えたり。兎に角方今俳優中にこゝを行く人物は無いといふはまり役との前度の評判は益々動しがたきを知りぬ。團十郎丈の伊勢三郎義盛役。濱萩、左六太の引込みしあとにて床の淨瑠璃になり、時刻を告ぐる山寺の鐘こゝろと山風に遠音もさえし眞夜中過、松明の灯を案内となし此屋の主人三郎がといふ文句切るゝと、本弔鐘をうち込み、揚幕より眞先に郎黨に唐櫃を擔はせ、うの後より引きつゞいて小長刀を杖にし、無雜作にさつゞくと歩みての出、何ともいはれぬ好い心持なり。顔の作りもこの前よりは白きやうにて、髯の形も優美にてよし。假髪はこ

の前は棒茶筌なりしを、今度は前へ曲げたる結び方にて品格あり。直垂を着込みたる上に黒絲威の腹巻せしを、この前蒔黄威なりきとて香沁園の主人が難せしが、こは直垂のこの前よりはでになり、色も濃くなりたるため、配合をよくせんとして改めきと覺し。門邊に繋げる馬に目を附けて不審立て、長刀を郎黨に渡し、松明を左手に執り、先づ靴脱の上の靴を見、次に二の間を見込みて上手へつか／＼と歩むと、知らせなしにこの道具下手へ半廻りになり、二の間の道具になるころ、恰も奥の方へ歩行くやうに見ゆるは、今更の事ならねど好き工夫なり。二の間の義經が太刀取り直し身構へして、下手を屹と見込むとき、義盛も二の間の椽先近く歩みより、左手を上へ延し、持ちたる松明を少しく内の方に傾けてふりかざし、右手に太刀の柄を握り、右の小膝を少しく折り曲げ、左の足を後方の方へ踏み延し、義經の顔を屹と眺め、暫しためらひ、さて真直に立ち、差上し松明を下し、少しく小首を傾け、再び入口の方へ向くと、この道具逆廻しとなり、義盛再び下手へ歩み戻るやうに見ゆ。こゝは黙々の中に不可言の妙味ありて、幾度見ても見厭かぬ處なり。書卸しにては義盛が靴脱にて草鞋を脱ぎながら上手の間を伺ふと記しあるを、半廻しの道具を遣ひて、この趣味を生ぜしめしは、全く團洲の意匠に出でたりと覺しく敬服の外なし。郎黨を次に扣へさせ、さて椽端に腰打ち掛け、出迎ひし妻に向ひて客を留めし故を尋ぬるまで、始終不審の思入は得心せり。二の間の人は誰ぞといひ、正本に記し、如く二の間に寐たる人はいはぬはよけれど、日によりて人は誰れといひしは、少し元祿詞じみて惡し。妻が客の古歌を吟せし件をいひかくるに聞き耳立て、りの優しき言葉に止めたりと聞き、始めて疑解け、思はず微笑む工合、至妙の藝なり。片田舎に人となりしに似げなく、事の顛末を辨へて、よく止め申したるとて妻を賞むる詞の中に笑を含みたる

言廻し旨い事／＼。むくつけきものなどいふ古風なる詞のさら／＼と耳立たぬ言廻し、君ならではといふ歌の上の句を誦する前に一寸思出す様子あるなど嬉し。さて草鞋を解かせ、腹巻を脱ぎ、直垂のからげを弛めなどする仕草あり。この直垂は蒔黄色にて、裾に金にて蘆の葉をすらせ、兩肩に白鷺の縫摸様あり。この前よりは、大立派のものなり。さて妻に夕餐をまゐらせたるかと尋ね、まゐらずと聞きて事に逢ひたる人ならんとの白あり。酒肴の用意を命じ、烏帽子を取り寄せ、折り曲げて被り、刀を杖にし立上るところにて道具廻り、やはり二の間の方へ歩み行くやうに見せ、簾の外の方に跪つき、れとなひて簾を巻くまで間然すべきなし。こゝにてこれは主の男にて候がといふもよし。義經が杯を辭むを見て御用心と覺えたりとて下手に向ひ、人やあると大きく一ぱいにいふところ壯快なり。宿直を郎黨に命じ、左六太に燈臺を點させ、床に飾りし弓を執り、二の間の椽端に立出で、後様になりて下の間の鳴居に弓の片端當て、押し曲げ弦を掛け、さて真向になり、片膝突きて弦をすかし見、再び立ちて満月の如くに引絞り試みて、弓を壁に立てかけ置き、再び杯をすくむるまで、當時の武士のたしなみかくもあるべく思はれて感服せり。客の面影に始終目を付くるところも目立たぬやうにせられてよし。妻と僕とを退けて、客の姓名を尋ぬるところ、誠籠り、さもなつかしげに見たり。こゝにて正本には東山道へかゝり玉はどとあるを、一日ならず屢々山陰道といひしは心得ず。こは香沁園主人も難せしが、この後は改められたし。聞けば重代の主君なるに打驚き、椽端に飛びすざり、兩手を突きてひれ伏し、はら／＼と涙を流す様芝居とは思はれず。さて亡父母の事述ぶる件には、懐舊の涙に聲を曇らせ、頭殿亡せ玉ふ件には口惜しき様を聞かせ、公達に運り會ひしは弓矢八幡の阿護ならんといふ件は喜び勇む様を示し、かく調子をいろ

いろに變へて、勇士の本相を失ぬ白廻しは聞事にてありたり。然し白の中のおん名を問ひ奉らずばいかでか知るよしなくは、いかでか知るよし候はんといふべし。遂に野武士となり然れども云々は、野武士となりたれどもといふべし。又若し自然の事も候はども自然事も候はども改むべし。義經の物語に感じ入り、さておん供して出立せんと、妻を呼びて目見えさせ、腹巻を着籠みて身拵へするまで、手ばしこくしてよし。妻に歸る期を尋ねられ、今まで君の御供せんと思ふ方にのみ心を取られたるが始めて心付きし工合、自然にて妙なり。腹に一ぱいの涙を飲み込みて曇聲に後の事を言ひ聞する呼吸、情をわきまへし武士の切なる心見えて、思はず涙はふれ落ぬ。と伴ひ行かれたしといふを叱りて、夫の耻をば思はぬかといひこらすところも勇士の眞面目なり。下り立ちて絶る妻を叱り、右手を延ばしていざと騎馬の義經を先へ進ましむる幕切まで、豪傑のありさま躍然として目の前に現れ、とりわけ高尚にて優美なる白を高く朗なる調子にて自在に活かしていひこなさるゝ手際は、前代にも比なく、後世にも見らるまじ。

さてこの中幕を先にして、後一番目と大切を評する者なりしが、伊勢の三郎が餘に長びきたれば、こゝにはしよりに細説せず。一番目はいづれも中出来。香沁園、竹の屋兩子の團七丈の鳴岩と雷藏丈の鴉石とを賞められしはうれし。大切は孰れも上出来。中にも家橘丈の十郎役と團十郎丈の五郎役とは聯璧とも稱へつべき絶代の見物にて、實に尊く勿體なく、これが一世一代かと思へば、名殘惜しさに幾度拜みても見厭ぬ中に、急に閉場とは何事ぞと唯恨めしくのみ存ず。(明治二十五年三月十一日)

高砂座は

大江山土蜘蛛奇談と浮名種蒔天網島

にてわが見しは一番目の大切と二番目の半幕となり。此座は番附に事々しく是迄の通電燈相用申候と記しある通り、電燈を用ゐる上棧敷の鐵柱などは中々奢つたものなり。予が往きたるは替りて二日目なるためか、入りは常磐座の時ほどにはあらざりき。梅昇丈の保輔。鼠色の衣を引抜きて金糸の縫取ある四天に大百日にての白眼、九藏丈に家橘丈をつきませたるやうなる顔立にて中々凄味あり。大評判の蜘蛛の糸を出す手際は如何にも目覺しく、見る間に舞臺より土間、棧敷までも糸を張りたり。成程見物によりては豪勢なりとて喜ぶ人もあるべけれど、斯様な事はあつさりにしたる方が凄味深し。音羽屋丈の土蜘蛛が引込の際にてもさなりき。梅昇丈のは塲所を變へて幾度も同じ事を繰返す故、どうも悪しつこく、やゝ子供だましの氣味ありと思はる。殊に兩棧敷に雨樋を作り、きつかけにてこの樋の中の細き紙を一時に落すは馬鹿氣て見ゆ。糸の工夫は櫛の細き竿に雁皮紙を糊にて一重丈巻付け、その上を又幾重にも巻き、それを端より小さく切り、さてその巻き込めたる紙の端いくつかを手に握りて擲ては、その眞の重にて擴がり、長く糸を引くものなり。殊に舞臺の釣枝を低く吊り、これを打越して糸をかくるなど中々の工夫なり。時若丈の頼光は餘りめづし。九十郎丈の綱は左團次丈の聲色を遣ひ中々立派なれど、侍女を不審がる思入は拙し。歌久藏丈の公時は敵役じみたり。歌女太郎丈の侍女實は鬼太郎は一通り。二番目にて歌女太郎丈の紙治は末廣屋直傳だけありて、すべて車輪にてつとめられ大出来。花昇丈の小春は小紫丈の面影あり。ね三の手紙を見ても平氣にて、ちよぼに合しての振も故意らしくて悪し。九十郎丈の太兵衛は此座の松島屋といふ氣か、一向に投げて居るは不埒千萬なり。時若丈の善六役はよく筈まりて、どこへ出しては耻かしから

ぬ善六なり。飛鶴丈の孫右衛門は少し氣拔の方にて春木座の右田作じみたり。(明治廿五年三月) 深野座の一番目

天一坊大岡政談

七幕は、神田伯山丈が得意の讀物を殆其儘狂言に仕組みしものなり。いかにも伯山丈の講釋にて聞けば、紀州表調の件などせはしき中に手懸りを見出す順序面白けれど、さて芝居に直しては、この邊は時と所とが變らぬゆるゑ一向につまらず。少し芝居らしきは越前の守が死骸のつもりにて乗物に乗り、不淨門より忍び出で、小石川の館に參りてお目見えする件と、忠相生害と覺期せる場に治右衛門、三五郎驅付くる件とのみ。かゝる狂言を喜ぶものは所謂筋見にて、講釋場の定連を申込む老人株ならん。中幕の

熊谷陣屋

寛濶出立廓鞘當

は並木宗輔の傑作と世にもてはやさるゝ丈ありて、幾度見ても厭の來ぬ壯快なる出し物なり。大切は市川家十八番の不破の留女を留男に改めたるものなり。權十郎丈の平石次右衛門役。主人に切腹を勸むるところ、落附ありて老臣と見たり。紀州表調の場は二人品好けれど、仕打も調子もあらしく、この様な粗忽の男にては調はつくまじと思はる。中間は今少し軽くは出來ぬものによ。驅付の場に出ぬは歌舞伎座掛持の都合と聞けど、いかにも不親切に見ゆ。小團次丈の天一坊役。序幕は見ず。常樂院にて大風な様子をがらりと變へ、おれが八代將軍の御落胤と見えるかといませの調子にて舊惡を語るところ、どうも音羽屋の聲色じみたり。この役は尊大に構ふる中に邪智奸佞の

様を面に顯すべきものなるに、此丈は音羽屋の様に顔の變化出來ねば是非なし。調子も今一息ねばり氣なくといつたところで無理なるべし。吉田三五郎役。切腹を勸むる處少し騒々敷やうなり。中間の評は權十郎丈と同じ。紀州の幕はいかに急場なりとて、餘り急ぎ過ぎ、立居もけたましく見えたり。驅附は此丈一人にて氣の毒の心地したるが、車輪にて勤められ上評なりき。義經役は堀越流の拵にて立派なれど、釣合は悪し、調子も大分たんか切れたれど、至つて諺に嬉しいと悲しいと云々といひしは可笑し。小紫丈の大岡奥方と藤の方どちらも紙や襦袢の袖にて涙を拭ふのみの仕草は御苦勞なり。白いふに頭が重くろしく、尻がすうと消える様な調子ゆゑ、惡落の來ることあり。中大岡の奥方は少し泣き過ぎたり。猿之助丈の天忠役。大膳の白の如く惡事にかけての明僧とは行かねど、破戒の惡僧には見ゆ。天一を絞め殺す處もよし。喜猿丈の久助、天一、大助代り、軍次の四役。いづれも役目大事と達者にこなされたれど、後幕の久助は最少し更け作りの方よかるべし。軍次にて肩を振るは醜し。九藏丈の伊賀之亮役。常樂院の場に顔を見せられぬは、例の持病かむらねど残り惜し。大岡役宅の場、頬骨の張りし面いかにも一癖あるべく見え、口を結びて折々じろり／＼と上眼に見廻す眼中凄く、再度のお勤といひ、十八番の仁木と同じ役前とはいひ乍ら、何の仕草なくとも無類の伊賀之亮なり。五條家の式例を引きて大岡を取て押ふる處、ねちり／＼と咳枯聲にて言伏する呼吸、また一種の妙味あり。大岡を尻目に見て冷笑ひ、後へ引下り少し反身になりての引つ込いへぬ／＼。水府網條公役。此人の水府公は越後騒動の時にも見たるが、此度も其時と同じ趣あれど、流石年功とてなかくの重味あり。花道にかゝる大岡を呼留め名奉行の名空しからぬなの白も應へたり。然し幕切の笑は少し宗吾の亡靈じみて、こゝは團洲ならばと思ひたり。同人

の彌陀六役。親御團藏丈の型と見え、むかしの錦畫りの儘なりき。拵仕打とも極じみにせられて、この丈だけの滋味あり。幽霊の講釋も可笑味は薄けれど、正直一遍といふところには適ひたり。引立のところもどうかすると手鼻をかむ人あれど、唯少し腰をのす丈なるは受たり。後にはこれをも罷めて後へ思入ありし丈なるが、前の方よし。花道にかゝり親父待てにて一寸思入ありてさつ／＼と行き、彌平兵衛宗清待てにてさつ／＼思入ありて氣を變へ、彌兵衛さん／＼と呼び、うんを人居てちや御座りませぬと舞臺に向きて跪き、名を聞かれ、さて面を擧いといはれて顔を上げ。見覺のある眉間の黒子といはれてぐつと詰り、舞臺へ早足に戻るまで無理のなき仕打にて大得心なり。團十郎丈の勤めしときは、海老藏丈の型なりとて、軍兵がからみ、これを突退けて舞臺へ来るやうなりしが、さほど見榮もせざりき。述懐の件も菊五郎丈など大働にて達者過ぐる位なれど、この丈は極あつさりとせられ、假髪をむしりこはすなどいふ小細工もなくして應へさせたり。尤も記憶力は優れぬと見え、白など大分抜かれたるやうなり。悶着附の襦袢も普通の者にて難なし。鎧櫃を擔ひ上ぐるにも重くて持上らぬといふ思入のくどい人もあれど、唯少しよろめく丈なるは好し。總體に老人の息續かず、少し聲の顛ふ様な工合よく拵れど、いつもよりは餘程老込みし様にて寂しい人もあるらん。されど義経などの年配より推さば此位にても難なかるべきか。齋頭三吉役。松藏、金太郎などにて大當りを得し拵り役なり。いかにも若々としたる勇肌。音羽屋とは行きかた違ひて嬉し。形容の白は面白くなければ、口上ちやと思へば濟んだものなり。八十助丈(守田勘彌氏の令息)當年十一歳にて大岡の子息を勤む。口跡もはつきりし、愁も應へ、切腹場はね蔭で泣く人多からむ。茶屋廻りもよし。茂々太郎丈(九藏丈の子息)の茶屋廻り中々威勢よく、末頼もし。種五郎丈の大

岡の家臣、出来たり。忌味なき藝風なれば、ゆく／＼御出精を祈る。鯉之助丈の水戸家中老、口跡も容貌も好し。秀五郎丈の藤井左京役、常樂院の場は惣髪にて、元は山賊なりきと見え、後幕も謹みてせられて嬉し。女口入宿の主は此人にしては今少し旨く出来さうなものなり。梶原平次役は調子も立ち幅もありて中々立派なり。竹松丈の主税役は中嶋座の時鶴松丈が勤めしに及ばず。最少し腰が据らぬものにや。茶屋廻りは藝者の鐵棒引かと思ふ程美し。八百藏丈のね三婆は大出来とき／＼が見ず。赤川大膳役は人品、白ともいかにも立派にて、どうも斯様な無謀の擧に與しうに見えず。喜知六丈の赤川傳藏役。一通り。後家ねつぼ役はうつくりの儘の田舎婆にて、一向に存じませんと清ます工合巧まずして旨く、治右衛門の説諭につりこまれて口を切る様子より澤の井を取違へ菊の井の事を一心に饒舌立て、とぞ申着と烟草入とを持ちて鈴と幣との代りに振りたつるまで、りの妙神に入る。家橋丈の越前守役。古人の型を守られきと見え、品格仕打共總體に申分なれど、うは態度の上の事にて、腹の確ならぬと調子の朗ならぬのため、今一息應へぬ心地す。されば常磐橋外の場が尤も好きやうなり。水戸の館も忠節面に顯るといふ程に至らず。こゝは講釋にてはうの苦心の様を思ひやりて涙こぼるところなれど、此丈のは唯立派なるのみ。伊賀之介を見送りてやがて鼻首にかけて呉れんといふ白廻し強い丈にて息込足らず。切腹せんとしたる幕切、めでたいめでたいの調子も餘りはしたなくて品格を損じたり。大切天一坊蹴落しの件は先づ好き方なり。相模役は女振も拵まり、仕打も芝翫丈の相手なれば大派手にせられて好し。調子が強過ぐる難あれど、加役としては上々の相模なり。名古屋山三役は無類飛切なり。調子も仕打もいかにも和く、いよ和事の家元と褒むるも舊し。芝翫丈の大助役。切腹の場にて兩人の歸り遅きをもどかしがる仕打、この人に

しては出来たり。熊谷役は五斗兵衛などと共に梅玉より傳來せる十八番の出し物なり。市川家の活歴史を加味したる熊谷と違ひ、昔のまゝの熊谷なれば類と眞似手なし。顔の作りより赤地錦の上下に黒天蓋絨の着附まで紋切形にて、仕打もきちんと箱に箝りしやうなれど、此役に扮すると、平常とは別人の様にて、音聲も壯年の人も及ばぬ程によく通り、動作も若々と勇まじきは不思議なり。すべて華やかにて大はでなる藝風なれば實の無きを咎むるは野暮なり。唯いくさの戦といふことを繰返していはれしはをかじかりき。不破伴左衛門役はこれも毎度の礼勤、手に入つたものといふより外なし。(明治二十五年三月)

歌舞伎座一番目

求馬塚身替新田

の原本は近松の吉野都女楠なり。吉野都女楠は正徳元年九月竹本座初興行なれば、彼出世景清の如き初年の作にはあらず、已に夕霧阿波鳴渡、冥途の飛脚など出でし後なれば、その筆力も益々雄健になりたる上の作なるべし。されど近松の長處は概して世話物にありて、時代物にあらず。この吉野都女楠なども凡五段あれど、大概は正史に據りて筋を立て、これを潤飾したるものなれば、翁が擅場ともいふべき人情の微を穿ち得たる詩想も、流暢にして珠を聯ねたるやうなる文字も、充分に見れず。その筋立の如きも、第一段に楠判官の討死を叙し、第二段に小山田の妻が麥を刈る件より高家が身替の件までを叙し、第三段に東寺の首實檢より狂女の首争ひ、庄司高春の切腹を叙し、第四段に天皇の御幸より正行及女楠の事を叙し、第五段には清忠、盛長などが罪せられ、天皇還幸の事を叙したり。されば楠家の事、小山田の事、女楠の事など入組み居りて吉野都女楠といふ名題

には適ふべけれど、とても一つの戯曲としてこれを劇に演ずること難く、若し演じなば筋の通らぬ、錯雜を極めたるものとなるべし。櫻痴子がこゝに見るところありて、その名題を改めて求女塚身替新田とし、その第一、第四、第五の三段を除き、第二、第三の二段を取りて一番目四幕に仕組まれしはさもあるべきことにて、いつもの不手際に似るべくもあらず。さればこゝといふべき葛藤もなく、さほど人を感動せしむるところもなければ、筋は亂れずよく通り、淡泊なる中に見應ずる處あるは、三升會々員には適當なる出し物なり。序幕攝州兵庫在麥刈の場、新田本陣詮議の場は原本通り。唯さみだれの詮議は義貞がなすべきを長濱六郎左衛門がなし、義貞の詮議を陰にしたり。此幕は二三日中に時間の都合にて預りになる筈なるが、全曲の種を薛く發端ゆゑ惜むべし。高家浪宅の場は幕明に高家の姑ねきびを出し、又後幕の手長の猿太をうの子として出したるが原本と異なり。こは市藏丈、猿之助丈の爲にせしかしらねど、高家をいちめの處など何となくうつらぬ心地す。さみだれが狂女になりしとき被りし打衣を猿太が盗み來りしものとしたる心遣ひは解りたり。幕切正面の障子を除きて向に旗差物を見するなど、常套なれど勇ましき序幕となりたり。二幕目生田森危難の場は原本第一段正成が助くとありしを高家となし、内侍が鏡直垂を見て義貞と誤ることとし、首争に己を救ひし男子なりといふやうにしたるは好し。西宮亂軍の場は義貞の出を重くせんためなるべく、求女塚の場は原本うの儘にて益々よし。唯大森彦七が山澤彈正と替りたる丈なり。三幕目東寺旅館首見分の場は幕明に足利三老職と山澤との議論あり、小山田庄司の名が監物と替り、原本にては義貞の首に似たりといふが、相違なしといふことに替り、尊氏がうの素振を怪む件を加へしのみ。四幕目二人内侍伴狂亂の場を所作事となし、警固の下部を軍兵二人となし、これに揃みて

の振は華やかになれり。内侍が首争のところは近松の新意匠に出でしところなれば中々面白し。高春が述懐の中今やくるくると毎日の高名帳夜はくつて翌日を待つといふ邊は近松にあらずば云ひ得まじき名文句なり。原本にて首かき落すを切腹とし、愁歎をも二人の女房を遠けし後としたり。幕切尊氏を出し、高家を犬死せしめぬ件を加へしは引き立ちたり。兎に角この一番目が義侠なる親子が甘じて死に就くことを眼目とし、これに二人女房の花を加へたる狂言にましまりしは福地氏の力なり。唯不審なるは、監物の詞に人皇九十五代の帝、正統の天子に仕へ奉りとあることにて、これは福地氏の創意と覺し。原本第三にては尊氏後伏見の院宣を申給はると記し、第五にては後伏見第一の宮量仁親王を御位に即くと記し、猶ほ末段には同親王を新帝と仰ぐと記せり。されば原本の作意にても、已に南北兩朝の勢自ら存じたり。若し南朝の武士の口より出づる詞ならば、己の戴ける方を正統の天子といふこともあるべし。さるに彼言をば足利家を重代相恩の主と戴きたる忠義一圖の武士の口より出させしは何事ぞ。可笑きは此白を團十郎丈が言ふときに拍手する様敷連ありし事なり。さて中幕は新歌舞伎十八番の内

女楠

と名題を掲げたれど、これは自ら一番目大詰の形をなしたり。聞くところに依れば吉野都女楠の女楠は餘り面白からねば、太平記の本文によりて福地氏が筆を取りしものなりと。成程紀、恩地の注進より正行のはやるを柏の方の留むる件ありて、次に持佛堂にて正行の切腹せんとするをねん方が諫め、先づ菊の御劍を汚す勿體なきをいひ、己が被りし故殿の直垂を使ひて異見するまで順序はよく整ひて中幕にましまりしに相違なければ、立派な道具を使ひ腕揃の役者を並べて見する割に面白くなく、

唯繪巻物をくりひろげて見るやうな心地のするだけなるは残念なり。新歌舞伎十八番といふ名も山伏接待以來、どんなことに出逢ひてもびくともせぬ度胸試の看板になりぬと京童は噂したり。又女楠ともいふべきものを狂言に仕組みしは、八代目團十郎丈初座頭の時に、五代目杜若丈が楠の妻にて、多門丸に菊水の巻を渡すこと、役者初曆に記しあり。猶ほ今の條に三十年以前六代目團十郎丈初座頭のとときもこの狂言を演じきと記せり。されどこれは唯初座頭となりて口上をいふ趣向のみなりきと覺し。中幕の後半ともいふべき

鴉舞、鶯娘

は素と大切淨瑠璃の筈なりしが、團十郎丈毛剃役を勤めし後に鶯娘を勤むるは顔の作りなど冗手間を要するため、女楠の後へ直に出ずやうになりきと聞きたり。こは明治十九年六月新富座にて雪月花の所作事中、上の巻に出して大當りをなしたるものなり。當時は鶯娘に對する鴉娘といふものありしが、今度は福地氏に托して徒然草の鶴庖丁の事を仕組みたりとの事にて、庖丁せんといふもの鶯が脱出たることに作り、こを舊へ返さんとして鴉踊をすることにしたり。罪のなき可笑味あるため、中々の場受あり。又二番目

毛剃九右衛門

はやはり近松が享保三年十一月竹本座にて操狂言に仕組みし博多小女郎浪枕なり。これは吉野都女楠など違ひ、素と世話物の筋立なれば、近松得意の筆力も見わて中々の面白味あり。但し原本は三巻にて、上の巻に船と揚屋とを叙し、中の巻に京の心清町の件を叙し、下の巻は惣七、小女郎の道行より惣七が自殺する結局までを叙したり。さるを演劇にては彼夕霧阿波鳴門と同じく、僅に上

の巻のみを出すなれば、到底原本の全局を味ふことを得ず。さて船の場は主に長崎詞を利用したりと見ゆれど、九右衛門の話などいかにも豪壯なる快文字なり。すべて冒頭より船の切まで奔浪迅波の寄來る様なる筆力にて、大海賊を摸し出すには、かくなうてはかなはじと、唯敬服の外なし。また揚屋の場は一轉して露の垂るほどの艶やかさにて、座頭の滑稽、惣七、小女郎の色合など不思議といふべし。お前の心に小女郎はまだ傾城ぢやと思つてか。此身は曲輪に居るとても、心は疾から夫婦ぢや。肩裾結び手を引いて、人の戸口に絶る共、交した詞違やせぬ。これ等夕霧と同じやうなる文句なれど、ぞく／＼する程好し。長者經を讀む件は長ければ劇にて除きしは宜なり。惣七が毛剃との詰開きのところ、惣七も手詰の返事、仲間へ入れば家の大事、命の仇、いやと云へば小女郎を人手に渡すのみならず、命迄とらるゝ、いづれの道にも死ぬる命、國法をや慎むべき、小女郎にや添ふべきと、二つの心身一つに定めかねて居たりけるといふ邊は、露伴子が常に好みて誦する名文句にて、氏が小女郎浪沈を近松淨瑠璃中の傑作とする所以も亦ここにありと聞ぬ。これを大坂にて始めて演劇に仕組みしは安永五年七月にて和訓水滸傳といふ名題なりきといふ。此時は淨瑠璃に志摩の小平次が異國へ漂流したりといふ一話を加へて、元祖淺尾與山丈が九右衛門大當なりき。其後寛政三年七月響灘入船噺といふ名題にて九右衛門を實ごとと改め、船頭九太夫の名にてやはり與山が勤め、娘の爲にしげ日和を合點にて乗出し難風に逢ふとの筋にて、破船の處など中々の骨折なりしが不入なりき。以上は大坂にての事にて、江戸にては天明五年七月千代始音頭瀬渡の二番目仲藏締博多今織といふ名題にて、元祖中村仲藏丈が九右衛門を玄海灘右衛門といふ謀反人にて勤め、軍用金を集めん爲海賊となれりといふ筋にて評判好かりき。天保五年の春七代目團十郎丈春狂

言ゆゑ三幅對書初會我といふ名題にて勤めて大入を爲し、遂に市川家の狂言のやうになりたり。其後八代目團十郎丈が一度、九代目團十郎丈が四度（横濱興行共）出したれど、いつも評判よく大當りなるは全く原作の面白く出來たるためなり。又この度の名題は毛剃九右衛門と本行に改まり、やはり福地氏が筆を入れたり聞きしかば、大方一番目が新田、中幕が楠なれば二番目の毛剃は名和長年の後裔にて、勤王の爲に海賊を働くともいふ改良主義を見るなるべしと實はひやく／＼せしが、幸にうの様のこともなく、原本うの儘にて見せられたれば、あの世に居らるゝ阿壽院穆矣日一具足居士もわれ等と共に別段二番目に對しては苦情を鳴さず済むべしとれもはる。（明治廿五年三月）西鳥越町の鳥越座は舊の中村座なり。常磐座主根岸丑次氏近比この座主を兼ね、名を鳥越座と改め、うの初興行として、大坂より新顔の俳優數名を招き、二三の東京俳優と顔合せの勉強芝居をなせり。狂言は

北國奇談譽仇討

の通しにて、中幕に

川中島の配膳

を出しぬ。前者は大坂朝日新聞の續き物とかにて、常套の筋立なれど、うの割にだれ場なし。後者は近松の作なれば申すまでもなく配合よく整ひたり。されど役者揃ならでは見られぬ芝居なり。序幕、二幕目は見落したれば、三幕目後につきて予が見る所をいはん。市川瀧十郎丈の作田次郎左衛門役。人品福々しく、物に動せぬ氣組ありて、仕草の輕卒ならぬところ、慥に淺野川家の重臣と見ゆ。唯善左衛門を叱るとき武士に向ひて過言の一言といふを改めて無禮の一言とでもいはせせし。

尾上榮次郎丈のね秀役。女形は初役なれば勤め悪きよしひたるが、滅相に美しくどこまでも親御より菊五郎丈の面影あるは不思議なり。子役の時の調子がどこか残り居るが直らば尚好かるべし。菅神社にて悪侍に出逢ふところ、始終氣味悪き仕打、手堅き御新造振まことに映り好かりき。片岡小六郎丈の近藤忠太夫役。壽座にては随分受の悪かりし藝風なり。今度も今一息あづがきれぬは残念なり。實川若松丈の近藤忠之進役。當狂言の主人公といふべき大役を引受けて見事やつてのけられり。始終の仕打中々功者にて、決してまづくはなけれど、江戸がりの腹へは少し籍り悪し。久保田郎娘二人の戀争の場にて、彼を捨て此を取らばいづれか我を恨みつらんといふは聞苦し。中村紫琴丈の忠太夫妻ねみよ役。調子が上方流にて少しわれ等が耳には強く聞ゆれど、愁もしつとりと出来、仕打も手丈夫なり。勘介妻ねかつ役。容姿もよく、女の情合もあり、吃りもあつさりにて、琴の手もあざやかなり。この役はね手に入つたものにて、中々の見物なりき。中村明石丈の娘菊江役。さしたる事なし。相方富榮役。相應に色氣あり。坂東市家六丈の僕久平役。車輪にてよく映りたり。實川家正丈の百姓善左衛門役。當込氣無きゆゑ質樸に見たり。直江山城守役。品もあり、落附もあり。坂東雛助丈の前田土佐守役。一通り。母白妙役。諸新聞にては大層の上評なれど、われ等はそれ程に思はず。拵は最少し更け作りの方好からむ。老人の調子少し態とらしきところあるやうなり。今一息手強くは行かぬものにや。坂東三津太郎丈の直江妻役。評する程の事なし。尾上幸藏丈の長尾輝虎役。謹みてせられ申分なし。小達磨吉五郎役。師匠の道連小平の拵と不動の文治の仕打と搗き雜せたやうな役前。此丈一人でよい心持にさせたり。中村歌雀丈の山本孫太郎役。操の敵役のやうなる顔の作り、仕打もそれに相應して受惡し。嵐璃鳳丈の近藤忠次郎役。やまと評者のいひ

し如く雁次郎そつくりなり。拙者までになれ包みあるとは、兄ちや人、ねうらやましう存じまするは、ねうらめしうなるべし。實川玉七丈のねきさ役。やまと評者のいひし如く、野崎村のね光と同じ役前にて、中々むつかしきものを引受けて見物を泣かせられ腕前は未頼もし。予は新參の人々の中、尤もこの少年俳優を推す。丈が容貌は二の町なれど、藝に身の入ることは不思議にて、少しも悪き癖のなきが爲なり。兎に角大坂俳優の中通りはわれ等春木座手合に懲々したるに、この度新參りの人はいづれも腕達者にてきざ氣なき藝風のみなるは、全く根岸氏等の撰擇の宜しきゆゑと思はる。土地に馴染のなきためか一座の大車輪に引替へ、入りの今一息なるは残念なり。江戸氣負の人々は必ず往きて見てやるべし。高尚振せし似而非狂言よりは餘程面白きところあるは、予等確に保證すべし。(明治廿五年四月)

吾妻座千歳米坂女史作偽狂女假着振袖は後れて行きしゆゑ見ず。これを朝暮に廻したるは芋兵衛氏同様残念に存ず。

橋供養梵字文覺

はいつぎや市村座にて團十郎丈が演ぜし折、大詰の不動尊が呼物になりて大評判なりしものなり。されど盛遠の事と忠光の事と殆別々になり居ると、盛遠の袈裟に戀慕せしを末に到りて胡蝶の内侍の身替りになさんためなりといふやうにせしとは、この曲の關點なり。

姫山姥

は近松の作にて、八重桐の廓嘶の段とあける山の段と多くは別々に演ずるを、この度纏めて見せられたるはよし。殊に山の段にて綱が山樵になり居るといふ所作事の脚色を改めて、殆ど原本の儘に

て見せられたるは愈々好し。米坂丈の袈裟御前役。美貌は無類にて、一寸小傳次丈と眠獅丈とに似たる所あり。仕打は極功者にて、憂もよく利き、色氣も充分なれど、少し小手が利き過ぎる爲か、渡邊橋の場はあまり處女過ぎて、後幕との釣合悪し。衣川内の場も今一息しつとりとはゆかぬものにや。福助丈が勤めし折はいかにも優美に品格を保ちて、當時の袈裟御前を追想したる程なりき。矜羯羅童子役、侍女白菊役とも夫々に仕分けられたるは巧者なり。兎に角僅に一度か二度か舞臺を踏みたるのみにて、かくまでに落附好く、腕任せにこなさるゝは感服なり。かゝる女優が我藝苑に出でたるは返すくも喜ばしきことにて、予は飽まで芋太郎氏(紅葉山人)のね説に賛成す。錦糸丈の渡邊巨役。何となく人物籍らず。璃寛丈が勤めしときと同じ趣なり。忠光室國町役は品格もあり、愁も利きて天晴の出来なり。制陀迦童子役。立派なり。太田十郎役は突込んでせられ大受。斯様な半道は男優にも少かるべし。小鶴丈の盛遠妻薰役。立廻りは大働きにて御苦勞。然し少し長過ぎしやうなり。梅之介丈の番匠木作役、永井齋藤六役共一通。米子丈の胡蝶の内侍役。中々美しく、仕打も届きたり。鶴吉丈の遠藤將監役。氣丈なる老武者のこなし能く映りたり。石田爲久役はさしたる事なし。糸一丈の六代君役。白よく通りたり。紫女八丈の八劍平太役。内侍の後をつけて來るところ餘り氣を入れぬため、連立ちて歸りしやうに見ゆ。鶴升丈の猪の熊左近役、永井齋藤吾役は御苦勞。眞賣源七役は柔くてよし。坂東吉次丈の逸倉右近役。矢張御苦勞。衣川役は傳五郎丈の俣ありて上出来。侍女歌役はちやりの態とらしからずしてをかしきは妙なり。桃市丈の怪童丸役は眞の子供にて箝り好く、滅相の大出来。糸八丈の盛遠役は聲がつぶれて立たぬ上、無暗に顎を振るが極めて醜く、むしづが走る心地す。先づ團五郎丈の盛遠位の面影はあり。忠光役もこの

弊は免れぬど、流石重病の仕打は旨し。不動役は評なし。萩の屋八重桐役は無類。調子は悪けれど、容貌は滅相に美しく、故大和屋の大大夫の歿後は天下に敵なかるべし。しやべりの振も達者にて、始終格氣の工合ありてよし。殊に昔の全盛忍ばるゝ仇めかしきところ尤もよし。山姥の振事は毎度の得意物。この度は筋が改りたれど、凄味もあり、憂も利きて感服なり。兎に角此度の興行にても女俳優が勤めてうの妙に至る役は矢張女役のみなれば、この劇を見るものは、必ず我邦に女優の必要あることを認むるなるべし。予はこれらの女優が早晚他の男優と混合して、眞に情致の備りたる演劇を見ることあらんを俟ち遠く思ふものなり。女優諸丈よ。願くは向後勤めてうの特性に適ひたる女役を研ぎ、姫山姥の如き出し物のみを撰ばれんことを。彼の男優の身振聲色をつかふ如きは、決して丈等が爲に名譽の事にあらず。(明治廿五年四月)
春木座一番目

摘絞鮮血染野晒

崎陽新聞五枚は教員團泰二が百姓末次郎の妻れみのと通じて罪せられしことを、竹柴診藏氏が仕組みしものにて、種子は好けれど、脚色少し陳臭し。しかも此度の興行にて、泰二處刑の幕を抜かれしはれ手柄なり。中幕

一谷嫩軍記

二幕、須磨の浦の場を出したるは親切にて嬉し。二番目

隅田川續傳

二幕、(淨瑠璃深い緑し、深いは恨み染分葱彩色)は前幕をはしりて、法界坊の殺さるゝ場と両面

の淨瑠璃丈にしたるが、これもあつさりにてよし。この筋はいつぢや竹の屋主人もいひたる如く、どうせめちや／＼の趣向にて、唯汚い坊主と奇麗な娘との替り目を見するが狂言の山なれば、幾幕も汚細工を見せられては閉口なり。家橋丈の熊谷役。團洲信仰の此丈が十八番としての出し物なれば、着附、顔の作り、仕草まで大成田屋の儘にて請たり。されど口跡が例の通り合んで居らるゝやうな言ひ廻し故、大事な所にて舌がまはらず、焦込みじやうに聞か、はつきりと音聲の通らぬが殘惜し。りの代押出しの立派なることゝ仕打の手丈夫なることゝは、團十郎丈、芝翫丈などが勤めし本家の熊谷を見て間の無き目にてすれ見劣りがせぬ程なり。殊に敦盛の首を打ちて勝鬨をあげさせ、さて心弛みてよろ／＼となるどころ、僧形になりたる後、花道にて陣鐘の音を聞きて屹となり氣を替へてすた／＼と駆込むところなど尤好し。然しかちどきいと大音にいふとき、力足を踏まるゝは悪し。こゝは勇み立ちたるところならねば、腹に悲を持ちて、態と聲を張上ぐるやうにせではなるまじ。又首桶を抱へて、行きかゝるとき、後より呼止めらるゝを承知して居るやうの氣組見、何となく脚蹴ふは悪し。こゝは團十郎丈などはさつ／＼と花道へかゝりたるやう覺ゆき。兎に角團十郎丈の精神と辯説とを得るものは八百藏丈なるべく、團十郎丈の形と仕打とを得るものは家橋丈なるべしとわれ等頼もしく思ひ居れば、丈も益振ひて勉められんことこそ願はしけれ。小團次丈が法界坊役。丈が變り物に妙を得たることは今に初めねど、この度の役も大當に當てられたり。極の穢作にて、安つばい仕草の中に愛敬を含みたる工合、總て寺島寫しにて好し。此丈の寺島寫しはどうかすると身振聲色になる憂あれど、今度は腹に入れてこなさるゝは有難し。野分姫、お組にじやらつきの色氣も、お組の父と姫とを殺す惡味も、色氣一方、惡味一方にならず、始終可笑味を

失はぬは極めて好し。穿を作るゝて墳穴を掘るところ、甚三と雨傘、菅笠などにて立廻りをなすところ、いづれも軽くて大出来。殊に場當などなく、車輪にて勤められしは一む嬉し。切倒されてよりよろ／＼と化のやうな手附をして甚三の側へよろけかゝるところなど旨いものなり。初め川の中より亡靈にて出でて藪陰に消ゆ、二度目に庵室の天井より倒に出でて釣上げらるゝまでの手際、お巧者／＼。淨瑠璃の野分姫法界坊の亡靈は花道にてのせり出し、中々に美しく、所作のある人故見事にこなされたるが、例の両面するとき、處女の態度にて松若にじやらつく時は好けれど、怨靈の態度にてお組を悩ますところ唯目を張るのみにて惡味薄く少し化けでもいひさうな氣味あるは見苦し。音羽屋丈などはこゝの凄味が滅相に好かりしが、仕方のなきものなり。然し世にはこの丈が何となくあづのきれぬやうなる藝風を嫌ひ、何を勤めさせても感心せぬといふ人あれど、今度の土手場の法界坊などは、先づこの丈十年以來の出来といふとも恐らくは過稱とはいはれまじと思はる。こゝらを見れば今音羽屋丈の專賣ともいふべき怪談物變化物などを傳へ得るものは、或はこの丈をらむも難し。われ等は家橋丈同様此丈が益勉められんことを願ふものなり。松之助丈は病氣にて出勤なく、丈が尤も適役といふべき末次郎妻れみを見落したるは殘念なり。小次郎役、お組役も亦然り。勘五郎丈の人力車夫三吉役。口説は見ねど、調べの場はこの人で見られたり。いつもの惡達者な手を出されず、法庭丈に控へ目にせられて大出来。この丈この心掛を失はずば、いつも出来に極つて居ることなるべし。平山役は少し氣が乗らぬやうに見ゆ。今少し突込むで貰ひたし。雀右衛門丈の末次郎役。随分意氣地のなき損を役なれど、氣を入れてせられて好し。判事役は餘り清まし過ぎて、區役所の受附じみたり。相模役は好き年増振にて、仕草も控へ目にせられたる心掛は

感心。唯笑ふとき、調子を張るときなど、女の聲でなく、男の聲になるは悪し。又首を持ちての愁歎に、餘りちよばに乗り過ぎて、細く體を揺すは人形振の様に醜し。富十郎丈のねみの役、玉織姫役とも容貌の悪きためと、めうく泣き過ぐるためとにて評悪し。藤の方役は年配人品もよく、仕草も出来たり。唯熊谷の物語を聞くうち今少し息込欲しかりき。女漁師役評なし。宗三郎丈の探偵役、泰二父役、梶原役共一通。右田作丈の僕精藏役、車輪にて映りたり。軍次役も好し。吾妻藤藏丈の山脇女房役は謹みて勤め、悪き癖の見ぬは頼もし。芝鶴丈の教師泰二役。ねみのを無暗に引立つるところ何の積りか思召が分らず。こゝは大出来なり。捕物の場、法庭の場などを見るに、此丈は兎も角も本行の俳優にてあり乍ら、書生俳優の藝風を學ばるゝやうなるが、さて妙な心掛かな。彌陀六役。假髻と着附とは彌陀六のやうなれど、歩き附や仕草などが、壯士の儘とは、これが明治の彌陀六なるべし、唯、恐れ入つたり。物語の中に意氣込はありしやうなれど、これを三河屋丈の彌陀六より好いとは、芋兵衛氏もね世事ものかな。要助役は奇麗といふまでなり。竹松丈のねくみ役。口跡悪く、氣合乗らず。振にかゝりてからは少しは見直したり。駒之助丈のねみの、兄山脇役。これが大したもので、堀川のちよばに乗りて與次郎やら、ね俊やら、七役早替りも宜しくといふ大振事、已のことにあてられさうなりしが、先づ命に別條のなかりしはわれ乍ら大慶なり。警察官役は旨し。義経役。陳羽織に幾つとなく金房を下げ、狐の縫ぐるみも宜しくと申す好み、首實檢の思入は極の念入にて、日の丸の扇を振廻されたるを見て、ねつべけべにても歌ふにやと田舎の客人はわれに問ひぬ。甚三役は初の中は好き方なりしが、法界坊わりや迷うたなといふ邊より大分齒をむき出して、妙な顔をせられたり。終に申したきは、大坂の俳優諸丈が白の

尻を無暗に引延すと、割白をいふときに、詞の尻を妙に軽くはねあぐるとが極めて聞苦し。これ丈にても改めなば、少しは惡落を減ずることもあるべし。(明治廿五年四月)
五月一日より三日まで歌舞伎座に於て慈善會の劇あり。番組は

八犬傳、大藏郷、扇屋熊谷

なり。八犬傳の如き大作を僅二回か三回だけ引拔て芝居にするは随分無理なれど、圓塚山、古那屋などは馬琴も幾分か芝居がかりにて仕組を立てしものゆゑ、まことに人物の配合よく、うの儘にて芝居となるべし。されば全曲の筋は到底通らねど、見た目には中々面白し。神宮川の場は見す。墓六家の場、圓塚山の場。新藏丈の信乃役。あまり見せ場のなき書き方なれば無理もなければ、本文の信乃にしては今一息の憾あり。しかし愁もしつとりと出来、この前我童丈がつとめて落附のなかりしに比べて一段上なるは、此丈が腹のあるためなるべし。女寅丈の濱路役。この前福助丈がつとめて大當したる大役のつきたるはね仕合せ。さればにやこの丈も骨打つてせられたるは嬉し。只福助丈がつとめし折は、充分に本文を飲込みて居られたりを見ぬ、煉馬の老臣の娘たる品格を保ち、餘り惡泣をせぬところに女丈夫の氣組あらはれたれど、この丈のは庄官墓六が實の娘にて、操正しき女と受取れる丈なるは據なし。されば養父母に逼られて是非なく再縁を得心するあたりは好けれど、圓塚山にて左母二郎を罵るところ、處女らしくはあれど、烈婦とは見えず。殊に手負になりて信乃の事を繰返すとき、左母二郎に寄添ひて膝に手をかくるは、川崎屋丈の注文かむらねど、極めて濱路の品格をねとしたり。こゝはずつと離れて伏し居らでは潔からし。市藏丈の墓六役。この前團十郎丈がつとめてわれ等を呻らせたる迹なれば、中々につとめにくかるべし。されどこの丈は

まづ當時の墓六役者なれば、出た丈にて其人とは受取られたり。切腹するといひて娘を威すところもをかしく出来たり。唯毘殿が見事の道具を一本喰へば云々の白は言語同断なり。墓六はかゝることをいふかもしらねど、墓六を芝居に見るときは、かゝる卑猥なる詞を用ゐずともいくらもいひやうはあるべし。舊き正本にはかく記もあるかしらねど、こゝらは今の役者や添削者が注意して改むべきところならむ。娘が逐電したりといひて慌て騒ぐところに婚儀がた出ときますます慌て、あちらこちらを駆けまはり、袴を前後に穿く工合、大車輪にて手一杯にせられ、受好し。婚禮の席にて無暗に恥辭義をしては下手へゆきてのぞく仕草を幾度も繰返すあたりは、少しわざとらしきところもありしやうなり。顛ひながら村雨丸と思ひて腰刀を出すところは旨し。總體に少し騒々し過ぎ、成田屋丈の如くあまり騒がしからずして慌てたる様充分に見るといふ段には到らねど、まづこの丈の身上にては上出来といふべきか。猿之助丈の龜笹役。この前鶴藏丈が大評判の役前なり。この丈の作は女振が好過ぎて、本文のこいやらしき龜笹とは思はれず。白は市藏丈同様の難あれど、墓六にじやらつく仕草はよく出来て笑はせたり。紋附を着てからの慌工合、例の鍋炭を鼻の上に塗りてのをかし味は、鶴藏丈は大真面目にて見物の腹筋をよりしが、この丈のは時々氣合の抜くるやうなところありて真に逼らぬと残念と云ふべし。權十郎丈の網乾左母二郎役。この前八百藏丈が勤めしが、體になき役と見ゆ、今一と息應へかぬるやうなりき。こん度は菊五郎丈を除けてはまづこの丈に廻るべき役前ほどありて、男振もよく、憎味もありて、手丈夫にこなされたり。しかし本文の左母二郎は扈從上りの人にて、流行唄など歌ひ、幫間染たる輕薄人物なれば餘程厭味の優男に作らでは適はず。八百藏丈はこの注意ありたりと見ゆ、作りは餘程にやけたりしが、固

さつぱりせし藝風ゆゑ箝り悪かりき。この丈の拵は普通の惡侍ゆゑ、本文には適はねど、見事にやつてのけたるは年功といふべし。團八丈の宮六役。この前勤めし時に較べて別に變りしところも見ゆ。何役をつとめても、只惡ぶざけのみして同じ様なるに、見物が嬉しがるは不思議の愛敬なり。猿藏丈の五倍二役。今少し突込んで貰ひたし。宮六が刀を振廻すとき、水氣がまだ出ませぬ／＼といふのみにて、刀の方へ目を附けぬは悪し。升藏丈の供侍は始終仰向いて見て居らるゝ心掛感心なり。團七丈の春助役。本文にては餘程の老僕なるに、中年の下男に作りたり。兎に角正眞の田舎男にて、立て居て會釋する工合、今年は婚の閏年かしらんといひての引込まで、少しも當込つ氣をにせらるゝは嬉し。この丈いつも役々に氣を入れて勤められ、見物の目について參りしは感心々々。どうかこの期をはずさず御出精を願ひたし。われ等もいよ十九代目の親玉と褒めて置くべし。歌女之丞丈の下女れ由役。下女には勿體なき女振なり。芝翫丈の額藏役。この前も勤められたるが、いつも若々と思はぬのせぬは不思議。これも本文の通り犬川莊助義任といふ八犬士の隨一人としては受取れねど、小厮額藏としては立派過ぐる程のね奴様なり。だんまりの立廻りも無暗に掛聲のみかけて居らるれど、此人ならでは幕が切れじと見物の喜ぶはね得の事といふべし。團十郎丈の道節役。この前も勤められ、珍らしく大芝居をして見せて、われ等を堪能させられし出物。少し更けては見ゆれど、八犬士の隨一人と誰に見せても受取れるほどの貫目品格ありて申分なし。殊に本文を腹に入れてこなさるゝ故、白萬端行届きたるものなり。火定の坑よりのせり出し、此前は大百に鼠の着附なりきと覺ゆしが、こん度は白の淨衣に白布にて頭を包みて出でたるは、本文肩柳道人の姿に適ひて好く、また濱路を介抱するとき、この白布を解きて手創を結へて初めて大百を見する順序も好し。

この本文にては隠家に退きて假髯をかなぐり捨て舊の姿に更めつと記しありて已に淨衣を更め、南蠻鐵の鎖帷子に四天まるぐけといふ袴にて出で来るを、芝居にては、初の出を行衣にし、後に火定の坑に飛入り、後の立木の緞子張になりたるころへ吊上らるゝとき、四天鎖帷子の立姿を見するやうせしは火遁の術を利かせたる狂言の山なるべし。しかし火定の坑よりせり出すため、濱路の殺さるゝを見て居る様に思はるゝ丈が大不都合なり。村雨の太刀をためつすがめつ見て、現に音に聞く村雨の寶劍云々の文句を誦するところは、例の能辯にて聞事にてありたり。文句の中、本文には空に虹蜺の引く如く、地に清泉の流るゝに似たりとあるを、丈が空に虹蜺を引き、地に清泉の流るゝに似たりといふなど、二三の異なる點あるは難ざるほどのことにあらず。濱路をいたはるところ、肩に手をかけて抱起しなどし介抱する仕打親切にて、兄妹の情合映りたり。既往の長物語もこの丈の事なれば、厭が來ずて面白し。村雨丸を信乃に渡し呉れよと濱路が末期に頼むを首肯はず、貞操節義は婦人の道なり、忠孝義烈は男子の道なり、勇士の本意まつりの通りときつぱりいひ切り、濱路がすりやどうあつてもわたしの願はといふを打消し、君父の仇には代へられぬはと一杯にいふところは無類々々。唯此度は濱路が今少し好からばと思ふ丈なり。村雨丸を携へて花道の方へ優々とゆく無造作の工合、額藏の鎧を握みて引戻すを、振拂ひて頓着なく向へ進む足取など、本文の道節の様子に妙にこの丈の藝風に符り、譯もなきことなれどいかにも好し。二つ三つ立廻りありてほぐれ、上手へゆき、引提たる太刀を取直して横向になり、下手を透し見る見え、幕切淨衣を引抜ての立姿などいづれも本ほんの大成田屋にて嬉し。大藏卿は固鬼一法眼三略卷の一節なれど、原本の筋立は離れくゞになり居りて、この大藏卿も二幕丈にてましまりつきをり、殊に長成が初め伴阿房にて後に本

心を顯す仕組方は中々面白き工夫なれば、中幕などには好き出し物なり。八百藏丈の鬼二郎役。人品好く、仕打に抜目なく、調子もひし〜と應へて小氣味よし。大藏卿を見送りての幕切は一通なれど、常磐御前を弓にて打擲するところ、形よく、氣組充分なりき。秀調丈のね京役。鬼二郎との釣合よく、振も達者にやられたり。壽美藏丈の八劍勘解由役。人品は籍りたれど、相替らず師匠の聲色をつかふは悪し。市藏丈の廣盛役今少し更け作にしたるかた、腰の曲りたるに釣合ふべし。坐睡して居、心附きて大欠伸する口に菓子を投込まれ、うの儘むじや〜と喰ふ可笑味、耳の穴に蠅を入れられ、くすぐつたがりて横顔をしかむる工合まで眞面目にて大出来。翫太郎丈の茶屋の亭主役。さしたる見所もなけれど、輕くて旨し。福助丈の常磐御前役。品格も落附もありて美し。物語もじとやかなれど、筋の寂しきため、さほど受けざりしは残念なり。秀世丈の鳴瀬役。身分にしては出来たり。團十郎丈の長成役。この前も上評なりしが、こん度も中々見應ありて旨いものなり。まづ檜垣茶屋の場、裝束の好よく、とりわけ公卿の柔味ありて氣高き態度極てよし。鳴瀬とね京との問答の中、石垣の數や傘の骨など數へて居る仕打も、目立たぬやうにせられて嬉し。ね京との問答もとぼけきつたことのみいふが、態とらしからず。振を見て床几より落ち、尻餅をつくところも自然にて受けたり。花道にて鬼二郎に目をつくる工合も、あるかなきかと疑はするが丈の腕前にて、こゝは大炊が郷右衛門に目をつくることに似て、猶一層あつさりなりき。邸の場。舞の裝束は派手にて見事なり。振事は巧妙にて目覺しき見物なり。かゝる場所にては極めて巧に舞ふこゝり俳優の技倆といふべけれ。長成はうんなに旨くはない筈なりと當推し、態と下手に舞ひなどせば、うれこそ活歴史熱にかされし病人にて、見物一同廣盛の様に坐睡を始むべし。廣盛の口に菓子を入るゝとこ

ろ、ねりやもう疲勞れたといひて急に舞を止むる工合、菓子の上の蠅をとりて、花道に往きかけし廣盛を大事な用があるといひて側へ呼び、耳の穴に捕へし蠅をねぢこみ、北京こいといひながら上手に這入るまで、いかにも軽くできて、不思議くといふべし。こゝにて例の鼻屎を丸めて丸樂ぢやといひて飲まするなどいふ汚細工を除かれしは、注意といふべし。二度目に白地の装束を着し、長刀にて勘解由を當てゝの出より、本心を明しての物語は、この丈に箝りて小氣味よき場なれば、兎角いふまでもなく、好いに極つて居るなり。大切勘解由を長刀にてあしらひ乍らの白ありて、どゞその首を刎ね、ふゞと高笑ひにての幕切、息もつけぬ面白味なり。切にて再び阿房になることを止められたるは、この前六二連が賞したることし。兎に角この役は丈が古人の型を折衷して自身の工夫を加へたるものと見ゆ、一種團洲流の滋味ありて、難癖をつけなば何とでも申さるべけれど、予等に於いては大受に受けたり。扇屋熊谷の筋は、一の谷の組打を五條の橋に繰上げて見するなど、随分無理な御趣向もあれど、敦盛が扇折の女に扮せし美しさ、熊谷の義強き、姉輪の半道と、この三つ丈にて、見て面白く思ふは、やはり配合のよきに外ならず。福助丈の小萩役、毎度のね勤め、娘の中の可愛らしさ美しさ、敦盛に變りての品の好き、ちんたら且那さんの替目にて見物をわつといはする腕前、いつまでもこの人のものにて動きなし。花道の引扱は體の工合か舞臺にてせられたるが、抜けてからの敦盛役は、義經、正行などと同じ向の役前なるを、それ／＼に仕分けらるゝは感服なり。壽美藏丈の上總役。木下蔭の治右衛門を當てられし後、かやうな老役はいつも旨いものなり。この上總も固は平家の侍と見ゆて大出来なりき。秀世丈の女房役は箝り悪し。女寅丈の桂子役、色氣ありて愛らし。翫太郎丈の扇折役。巧まらずして妙に到るは敬服。新藏丈の忠太役。此丈が

つとめたる割には可笑味少し。猿之助丈の軍次役。御苦勞。芝翫丈の熊谷役。手に入つたる出し物にて大立派なれど、陣屋とはちがひ、少し應へ兼ねるところあるは無理もなし。うれに姉輪が好過ぐるため、見劣りのするは據なきわけなり。團十郎丈の姉輪役。これをこりね世辭氣なしの大御馳走といふべけれ。作りの立派なるはいふまでもなけれど、調子の高きこと老人とは思はれず。仕打も氣を入れて手丈夫にせられ、勿體なき心地せり。餘りに丈の姉輪が大きすぎるため、流石年來賣込んだ家元の熊谷が、すつかり喰はれてしまひしは是非もなし。どうかやうな面白いことをば、慈善會に限らず、平日にても施し玉はゞ、隨喜渴仰の涙をこぼすもの、豈われ等兩三輩のみならんや。(明治二十五年四月)
吾妻座狂言は

鎮西八郎英傑譚と蜘蛛の拍子舞と

なり。英傑譚は今の河竹新七氏が書御して、市村座にて興行したるが初なり。これは弓張月の琉球の巻だけを探りて仕組みしものゆゑ、筋も通り、幕毎に目先變りて厭が來ず、殊に毛國鼎夫婦の亡靈が寧王女主従をかくまふ件は、本文にて極あつさに記したるを一幕に作り直したる、天孫廟にて阿公が懺悔して刃に伏すところを大詰にしたるなどは、添削者の働なり。されば書御しの時評判好かりしが、この度女優諸丈が引受けての出し物には随分骨の折ることなるべし。拍子舞は歌舞伎に上したしと、或劇通が頻に望み居られしが、この度糸八丈が工夫して、餘りに稚き節をば除きて振を附けられきと聞きたり。舞の件は辰橋の娘振にてゆき、本體を顯してよりは、土蜘蛛に似たる所も、紅葉狩に似たる所もありて、派手やかなる所作事なり。米坂丈の寧王女役。相變らず美しけれど、氣高

き段に到らぬは殘惜し、白縫の憑るところの聲音男のやうなりとの難あれど、御曹司と呼ばけて爲朝にとりすがるといふところは色氣ありて受けた。海棠役に利勇に媚び、大臣様が一番よい殿様と耻かしさうにいふあたりはよく箱れり。吉次丈の新垣役。作りも仕打も今少し病人らしくすること得ならぬ。亡靈も成るべくうつむき加減にするがよし。林太夫役は妙に箱りて、島長らしく見ゆ。鶴吉丈の朦雲役、紀平治役とも、大成駒屋うつしと見ね、いかにも映り好し。慾には禍獸の講釋にて立上るとき、一段調子を張上げて貰ひたし。錦糸丈の陶松壽役。押出し立派にて落附もあり、慥に東風平の按司と受取られぬ。書卸しの我童丈よりはつと好し。公時役も押出し立派なり。鶴升丈の查國吉役。少し小體なれど、氣組充分にて、禍獸の面を見ても瘡に障り云々といふ白など、川崎屋その儘なり。とゞ手痕を負ひて落入るまで、見物息をはづませぬ。鶴役は體に箱り、若々として勇し。頼光役はさしたることなし。小鶴丈の千歳役。よろづまめやかな素振見わた、其人に適へり。龜役は鶴升丈の鶴同様のいかにも美少年にて、書卸しの時藏丈、權十郎丈の類にあらず。歐羅巴にて女優を美少年に扮せしむるも宜なりと思はる。華升丈の利勇役。憎味は相應にありたれど、髯は長きより短き頬髯の方が宜からん。紫米八丈の玄武徳役。振は一寸受けた。季武役は一と通。桃市丈、何役となく引受て御苦勞のことなり。毎度のとんぼは旨いものといふべし。舜天丸役は調子わるくて引立たず。桃丸丈の王子役。つとりとよう出来たり。此一役にて當人役不足をいひをるとは愛敬へ。象八丈。阿公、爲朝、毛國鼎の三役をうれしく仕分て見せたる築地の師匠の型を唯一度見物したるのみにて、これ程に真似らるゝは大した腕前なり。殊にわれ等がいきすぎた妄言いひたるをも、幾分か斟酌せられたりと見ね、主に師匠の腹を仕打とのみ採りて、身振聲色らしきところを餘程除

かれたるは大に悦ぶべし。少し己が藝に天狗になると素人の忠告などには空耳を走らせ、なにあらが何をしつてと高ぶる手合に名人のでくる筈はあるまじ。レッシンダが言に、優人は稀に評せられんよりは、時に悪評あるも頻りに評せられむことを願ふべし、且眞の優人は、唯己を罵るほどの膽力ある批評家の譽めたるをのみ譽とすべしとあり。金言といふべし。然し世には新聞の評はどうせ芝居の提灯持ゆゑ、賞めて面白く書けば好いのみ、うんなに正直になつて評をして居たら、今に劇評學といふ課程が出来たとき、その大博士になるであらうと冷かす人もあれど、これが果して新聞記者の眞面目なるか。さらば舊きは八文字屋の評判記などにて、役者總後見の位附したる大立者の藝を、随分手酷く批難したるなどは、時世を知らぬ骨頂なるべし。阿公役は凄味薄けれど落附あり。仕打も手丈夫なれど、富藏川の場にて眼を刺くことを控目にし、水門の場にて引込の足取を今少し弱々としたる方よからん。爲朝役は少し若過ぐれど、まことに美しく、源家の御曹司と見ゆ。小琉球の場は花やかにて、寧王女との配合よし。南風原の場にては紫の直垂のうつりよく、萬事大手の仕草大出来。鶴龜に利勇を任せて後見する工合よく適り、とゞ海棠を切る幕切の見えまで、爲朝役はこの幕が見せ場丈ありて尤好し。くば山の場の作、着附ともあまりに大將らしく、世を忍ぶとは見ねど、この座にては據なきか。毛國鼎役は亡靈のみ見たれど、品格といひ落附といひ、師匠その儘にて、始終沈みたる調子にてうつむいての白、この世の人を見ねぬところ、三役中一の出来なるべし。拍子舞役は自身振を附けられし見附物。かやうな所作事とはかういふまでもなく、お見事のことと恐入るまでなり。丁度われ等がゆきたる日が大切は出幕なりとささし、場は少しの穴もあけず、見事にやつて退けられたるは、御器用の事と申すべし。聞く吾妻座は長く丈等を留めて、一の女優演劇

に供ふる劇場とする目算なりと。われ等も女優諸丈の爲にこゝに萬歳を唱へて筆を擱く。

ついでに申したきは弓張月にて大働きをする禍獸は、この前も大評判なりしが、こん度も中々よく出来、呼吸する度に脊筋の張る工合など巧者な者なり。唯松壽が隱家の道具立は、樵夫の家として立派すぎたり。本文にも前度の興行にも荒果たる家のやうに作りたり。しかし役者を大勢並ぶるためにかくしたるものか。かゝることをこの座に向ひて真面目に小言いはど、又誰やらに野暮と笑はるべし。穴賢。(明治廿五年五月)
春木座一番目

新薄雪物語

四幕。清水花見の場は見ず。二幕目より見たり。この狂言はどうも寂しき筋にて不當がちめえ、この間新富座にて當時の腕揃が寄りて出されたれど、あまりやんやとは參らざりき。されどこの座は例の二週がはり、休日なしの勉強芝居なれば、何を出しても、狂言などに關らず、一杯に見物の來るは不思議なり。中幕

三日太平記

嘉平次住家の場。義太夫ではよくきけどこちらの芝居であまり出ず。奴姿で久吉を見するほどの膽力ある役者の少きためなるべしと思ひしに、この度珍らしく見物したり。二番目

本朝醉菩提

三幕。酒賣又六の件、小山三と伴作との件などは別々に居る筋ゆゑ、野晒悟助の件のみ離して見せたるは好し。花見の場は花やかなる所ありて、これに詫助の哀なる件を挟み、悟助内にて押掛嫁入の

可笑味、提婆仁三と悟助との達引も面白く、流石京傳の意匠ほどありて、中々好き仕組方なり。芝鶴丈の國俊役。どこまでもこの前の要助でやつて居るは不思議。葛城民部役。これを見ては、先度の權十郎丈の思入をも仰山とはいはれまじ。一作役。この役にて芝鶴は達者なものをちやとの評判を確むべし。右田作丈の皐月役。何をさせてもどこかぬけたやうなれば、右田作を改めてぬけ作とせは如何と、手ひどからんか。藤藏丈の款の方役。今少し意氣込欲しかりき。芝童丈の薄雪役。番附に侍女松ヶ枝とあるを見て、はゞお間に合せかといひたり。櫻井小新吾役。お扨従上りなるべし。綺麗なことなり。芝雀丈の園部左衛門役。いかにも柔く、ぼいやりとよう出来たり。大膳に睨まれてべたべたと座るところ、やすり目を見てのおどろき方、枝折戸の外へ忍寄りてのこなし、何れも申分なく、一番目中第一の出来なり。穴目の忠藏役。車輪にて受たり。どうか中途で腰をかけた、今の立花屋どこにちなるやう御出精を願ふ。銀之助丈の十次郎役。今時子役の利物。惜しや生年十三の苔の花云々の本文にはまりていかにも愛らしく、やつぱり子にして下されのあたり、たまつたものにあらず。落入も申分なく、鏡山の又市もこの子役のためにつかり側が喰はれてしまひしが、こん度もこの場はこの丈がしよつて立ちしやうなものなり。中村太郎丈のでつち三太役。をかしく出来たり。竹松丈の小田井役。綺麗は綺麗なれど、體の動ぬ工合、どこやら今の田之助丈に似たるは困つたもの。駒雀丈の澁川右内役、提婆の子分役。この座の團八といふべし。梅樹丈の子分役。いつも目と口を一所にしての白、御苦勞千萬。宗三郎丈の大膳役。一通。正宗役はよき方なり。提婆の子分は出来たり。勘五郎丈の澁川藤馬役。この前家橋丈がつとめし熊谷を當込みて、花道の引込まで工夫せられ、至極の御趣向なれど、その割に可笑くもなく、この前の升藏丈の方が

當てたやうに覺ゆ。詫介役。この前大六の親父方はどうも悪黨染みて見えしが、こん度は音羽屋張と見え、至極こくめいにて哀に見えたり。持つべきものは我子ぢやなあとはいふ調子は少し底意がありさうに聞えしが、土器をずまむる様子、餘所の娘のなりを見てわが娘にもあつてやりたいたと涙溢す工合など、よくできたり。土器を提婆組にこはされ、天平棒を持って跡を追ゆく意氣込、悟助に涙ながら譯をかたりて金を惠まれ、うの後影を伏拜むまでよくうつりたり。内の場にて己が娘と扇屋の娘とを半月交に嫁にしてくれと悟助にたのむところも、をかしませて出来たり。筋のよきためもあれど、兎に角この役にて大分見物を泣かせられたり。追々藝をつくしむ心掛出でたりと見ゆ、役々に氣を入るとやうになりしは喜ぶべし。富十郎丈の梅の方役。相變らず顔で泣けばかり居られたり。笑は三人の中にてはよき方なり。扇屋女房役はよき年増振にてありたり。駒之助丈の兵衛役。左衛門折檻よりうろ／＼うなり初め、花道にて伊賀の守との内談にて倣大に肩をふり、いかゞでござるとのり地になるところ、いつも乍らうんざりしたり。血附の刀を見るところ、妙な身振をしては幾十度となくうちかへし／＼見て、うれで思召が見物にのみこめぬに、次の幕にて一と目見るより知つたれどとはよくいはれた義理なり。陰腹のいたがりやう、うれは／＼大したもので、笑ひは四つ谷のれ岩か宗玄かといふ凄しい聲を出して、れ約束通り見物笑となりたり。團九郎役は焦込過てさう／＼し。光秀役は人品は籍りしが、やはり手痕の痛がりやう白痴が踏抜でもしたやうにて、銀之助丈が勤めし十次郎の父親とは受取れず。まして惟任將軍とは思ひもよらず。下女れ政役は一寸軽くできたり。雀右衛門丈の伊賀守役。詮議の場にて駒之助丈の兵衛などよりはぐつと謹みてせられし心掛はよけれど、今少し物思はしげに氣を入れられなば一層好かりしならん。己が白いふた

びの外は氣樂な親父のやうに見ゆるは、いかにこの座なりとてなめすぎた仕打なるべし。例の陰腹を切りての出は流石あつさりせし藝風だけありて、花道にて枝折戸の敷居を越ゆる足取、沓脱より縁側に上り、刀を杖にしてべたりと座るところ、調子を張上ぐるたびに痕所にひやく心遣ひなど、いづれも仰山にせられぬは受たり。外ながら左衛門を叱るところは少しあらずぐるやうなれど、三人笑のところは、まづ悪落の少き方なり。嘉平治役は坂地にては評判の當役。れ目見えになせこれを出されぬかと或劇通がつぶやきしが、いかにもどつとりと手丈夫に出来たり。唯年配が少し若いやうに見受けしが、こゝは最少し更け作りの方映りがよからん。うの外は着付、仕打ともその人を見る心地したり。光秀に宿を借す應答も始終素振に目をつけて腹に一物ある言廻し、れ巧者なり。追手に向ひての廣言より足踏延して寝るところ、久吉を見下して叱り付くところは嘉平治の見せ場ほどありて、あくまで落附をもちて大手にこなさるゝ工合、流石淨瑠璃元地の仕込ほどありてしつかりと應へたり。年季證文を返して平伏するところは、庭に飛下り三拜九拜の文句に合して最少し相手の引立つやうにはできぬものにや。浮世戸平役はちかごろ九藏丈も、家橘丈もつとめられて、いづれも大出来なりしが、どうも坂地訛の男達では、われ等の腑に落ちず。貫目は相應にありしが、側が江戸つ子調子だけに猶々釣合ぬ心地したり。松之助丈のれ連役は相應にいろ氣あり。お静役は哀にみすぼらしく見えたれど、どうも藝風がさびしくなり、體の動止がなにとなく重くろしくなりしは、いかにも殘惜し。花見のところは、飽くまで親を介抱してまめ／＼しくする筈なるに、こゝも氣合乗らず。又悟助内にてだからと／＼さんに急いで來なさんせいというたのに云々の白が見物を泣かすところなるに、この前の菊之助丈の方が情合のうつりしやうに覺わたり。小團治丈の久吉役。奴姿の天下取

といふ大物を引受けられたれど、どうも上評とはまわりかねたり。先づ初めの拵が紺看板とは悪い思ひ附なり。こゝは黒縹子に金にて千生瓢箪の縫取ある着附が普通にて、末廣屋丈は萌黄に瓢箪の縫あるを着たりとか聞きしが、とにかく花やかには作らでは場が引立ず。うこそを本文の紺の布子とあるからとて寂しく作り、これで久吉を見せるのだといふ御了簡にて、この座の團洲先生になりすまされしならば、苦々しき次第なり。花道にての振は軽く、嘉平次との應答も大分調子直りしやうなるが、今や日本弓矢の頭領と嘉平治が敬ふところにて、自然と備る武將の權柄云々といふ文句にて久吉になるところが、この役の眼目なれど、いつもの引拔もなく、やはり奴姿のまゝにて上手に直るだけは大了なものなれど、さつぱり久吉らしきところなきは不思議なり。たゞいかに嘉平治と調子の變はるところ、妙にねばりて悪落の來たげがね景物なり。二度目の出も鐘出立がつひとほりなるに、重忠然たる長上下は少し抽匣がちがひしなるべし。齋清吉役はいなせな着附にて、戸平と悟助との達引を留めに這入る役前、一寸音羽屋もどきの謙遜したる白などありて、最負連は嬉しがりたり。提婆の仁三役。この役は月題、顔の作りより着附、持物まで注意せられたりを見れて申分なく、ぐつと役者をあげたり。音羽屋丈より白粉を厚く作りしたため、中々の凄味あり。棺桶に腰うちかけて悟助を子分に打擲させて見物するところ、小田井の袖を鑑にて押へ乍らぐつと呪むところなど大手にこなされてよし。銀のくべ烟管にて悟助の額を打割、戸口にかゝりてさげすみたる白ありて、ふふふと笑ふところ、随分と憎かつたり。評判の山門のたては見落したれど、兎に角この役は中々の落附にて、この座出勤以來身上を上て來られしは賀すべし。家橋丈の勿川兵藏役。兵衛のところは刀箱をもち來て口上をつたへ、さて花道にかゝり一寸思入ありて這入る丈の端役を引受けたるは大

役者になられし愛敬か。御馳走にしては随分あつさりすぎ、どうか越前守が戸惑でもしたるやうに見たり。野晒悟助役。この前久松座にて勤めし折も評判なりしが、こん度も大當に當られたり。花見の場。紫縮緬に野晒の白抜、白博多の帯に尺八をさしたる拵。ぐくぐくするほど男前好し。詫助をなだめて金を恵み見返りもせずに入合、大様の中に達衆の心意氣見にて、お静の見染むるも無理ならずと思はる。提婆組を懲じて小田井を救ふところもさら／＼としてよく、白も大分たんかゞきれてよし。戸平に呼止められてびくともせず、手強くつゝこんでゆく様子、男達のひんぬきひんぬき。どうかりの下駄で己がしゃつ額を割つてくたせえといふ悪びれぬ工合、滅法よし。家の場の着附二度ともよく映り、兩度の押掛嫁入に當惑するところが悟助の見せ場にて、花見の場のやうに男前と調子とで持切る處は随分お茶を濁すことできれど、こゝはどうもこれ加減になるものを、この丈はほいやりと大鳥にこなされ、悟助はかゝる人なるべしと思はれたり。小田井のおぼこなるにこまり切るところも愛敬ありてをかし、提婆組に打擲せられながら母の命日なればとてじつと辛抱するところ、この丈の身上に拵りて無類の出來なり。提婆に額を割られ、こりやあ男のいき面をどの意氣込も出來たり。百兩の金の出來たるより仕返しにゆかんと花道にかゝり、駕籠に乗りしお静に向ひて、何にもいはぬ辱けないと手を合して禮をいふ幕切まで少しも抜目なし。山門は見ざりしが、この悟助役は當時向ふに敵なしともいふべき出來にて、これが呼物になりて大入大評判、日延の沙汰までありしは大手柄。いよこちの立花やさま／＼と祝ひ申す。(明治廿五年五月)

歌舞伎座の一番目

戀女房染分手綱

は寛延四年三好松路等の作にて、近松の伊達與作の作りかへなり。又中幕

太鼓音智勇三略

は河竹默阿彌の作ほどありて、淡泊なる筋の中に一寸面白きところあり。唯家康が防戦の用意に及ばずといひしを用ゐず三士が驅出さんとするを、酒井が呼留めての出になるは、酒井に重味をつけためならんが、餘り主君を蔑ろにするやうに見えて悪し。又甲州方の馬場信房が徳川方の城門を開きしを見て、古今無雙の名將といふだに妙なるに、將軍家に上るは此君との見通しは、あまり淨瑠璃の趣向染て、最早今の見物は承知せず。次に奥殿の場にて、諸國の武將の棚下しをした擧句、智勇兼備の大將は、畏れ乍ら即ち我君との白は、やはり酒井の人物を損じたり。兎に角書卸のとき村山座にて古今の大當をなしたる後、新富座にても見物のたるみしを、この差替にて一時に回復したることあり。こん度の呼物も、やはりこの一幕にあるべし。さればまづ中幕を評して次に一番目に及ぶべし。福助丈の徳川家康。この前家橘丈が大當をなしたる役前。この丈のも年配が少し若けれど、品格ありて大將と見えたり。それに團十郎丈の義貞を腹に入れてこなさるゝためか、飽きて落附ての仕草、その役に符りたり。防戦の用意をすゝむるを打消して、誰がある給仕いたせといふ大度量の工合、忠次に外ながら訣別の盃をさす思入など、いづれも申分なし。唯奥にてまどろまんといひて立上るとき、欠伸をするは品格を損ずるやうに見ゆ。無難作にするも事に因るべし。團十郎丈の酒井忠次。この前の通り皮足袋に肩幅狭き上下、うの頃の武士の風を摸したりと見ゆれど、随分見た目は妙なり。飽くまで酒に酔ひたる體にて鳥居に向ひての輕口より、手前獨できこしめさうかといふところ、主君に酒を飲みたるやと問はれ、お目立まして恐れ入りますといふところ、

いづれも好し。主君の盃を戴きて餘所乍ら暇乞するところは、あつさりなれど受けたり。姉伏屋に揺り起されて、はい起きましたといふところ、何をいひても取上ず御免々々といひて寐入るまで、生酔の身上にてよし。鳥居が鎗にて突掛るを、よろめき乍らやり違はする手際面白く、鎗のしほ首を握りてはね返し置き、よろ／＼と下りて階段に倚かゝり、大欠伸するところ大きいものなり。又開きたる扇子にて鎗を押へながら體を倚懸らせて、扱體をひくとたんげえとねくびを吹掛くる工合、鎗をからりと卷落して階段によりかゝりて大息つき、水を取寄せて舌打して呑むところなど、この狂言の面白味は全くこの立廻りにありて、うれば／＼稀代の見物なり。坊主の持ちたる椀をとりて櫓に上るところにて道具半廻りとなり、屹と甲州勢を見下す見えも立派にて、れ約束の太鼓を打つところ、見物一同を呻らせたり。福はうち／＼の豆蒔にての幕切、後向の立身は、八百藏丈の鳥居と一つにならでよし。いつぢや菊五郎丈が此丈の五斗を見物して、幕切まで酔つて居るは流石成田屋なりと感服せりと聞きしが、こん度の酒井なども始終酒氣の失ぬは御注意といふべし。唯例の智勇兼備の大將は畏れ乍ら即ち我君といふ白は、御人體に係ることにて、前幕では太鼓を敲き、こゝではお太鼓を叩いて居ると、正太夫氏の洒落が出でしも尤なり。又親譲りの大眼玉で睨み返してやりますとの白も、相變らず感心せず。どうか眼玉の當込は、この丈も新藏丈も以來止めて貰ひたし。權十郎丈の馬場信房。押出立派にて、調子もよく、先陣の大將といふ貫目あり。山縣との爭論よりはやる士卒を制するところ、相應にこなされたり。唯幕切に將軍職に上るはこの君云々の白にてうんざりしたり。市藏丈の山縣昌景。家康をつけ來りて鳥居との立廻りありて、後城中に乘込まんとて馬場に制せらるゝまで、随分のしよげ役なれど、氣組は充分なりき。女寅丈の操の方。この前

半四郎丈が肉色にてつとめられて評判好かりし役。別に仕草もなければ、どうも荷が勝ちたり。秀調丈の伏屋。この前つとめられし折は不評なりしが、こん度は年配相應したり。されど仕打はやや寂しき心地す。こゝは相手がぐづ酔ゆる、今少し派手にして貰ひたし。猿之助丈の鈍阿彌。別に變りしこともなく、一通の出来なり。壽美藏丈の渡邊、新藏丈の柴田。共に御苦勞といふの外なし。才三郎丈の楓。兄の手痠を氣遣ふ仕打、油断なくせられ、情合箝りて好し。八百藏丈の鳥居彦右衛門。書卸しが時藏丈、二度目が菊五郎丈にて、銘々身上丈にこなされしが、こん度が第一の箝り役にて、大當に當られたり。まづ徳川の臣下が山縣を喰止め居るところへ、黒革絨の鎧、大童にて手鎗を引提げ出で來りてこの中に搦み、こゝは拙者にお任せあつて君のおん供いたされよと立廻り乍らの白凜として、勇氣惣身に充渡りたる心地好き、朝からだれ氣味の見物初めてほつと息をついたり。山縣との立も烈しく、池より上りて無念の息込より股の手痠を結ぶるまで申分なければ、この場の切は同じく跡追つ懸て這入る氣組にしたし。家康公に防戦を勸めて聞かれず、忠次も酔潰れてたはいなきため獨で心焦燥つ工合、討て出んとして妹に留められ、尤なりと思ひ止まる様子、始終うの人らしくて好し。妹が手痠の手當をせんといふを、今死ぬ命にいらぬことだとは一杯にいひて、さて白布を占直し、妹の肩に倚掛りての引込、大受々々。忠次を試さんと鎗にて突掛かりて立廻りになるところ、こゝは親玉の見せ場なれば、始終下手になりての仕打、これで相手が引立つたり。忠次が太鼓を打つ件に、鬼は外へとの豆蔲にて道具廻るところ、見物一同手を打ちて喜びたり。次に一番目の役々につきて評すべし。新藏丈の伊達與作。さら／＼過ぎて芝居の色男といふ趣に乏し。慶政。さら／＼流の悪癖を出されず、始終神妙にせられ、座頭の離れぬは感心なり。ま

づ馬に乗せられての出より、八藏に手を引かれて入り、老母や三吉に向ひての捨白まで、氣を入れていはれしは好し。八藏と老母との話の間、一間の中にていろ／＼の思入するは一寸場受あれど、本文には違へり。留むるを聞かず餘所乍ら暇乞して出て行く様子、哀に出来たり。鼻唄うたふ喉もよく、坂道にかゝりて足元危き工合、松葉に眼をつかれてびつくりする様子、可笑味まじりて受たり。追剝に出逢ひてはいかに固が武士なりとて餘り落附過ぎしやうなるが、切られてからはか／＼に凄く、立廻りも無法に杖にて敲きたつるなど車輪にて好し。八藏に逢ひて落入るまで、この役は中々の出来にて、うんと貰けられたり。福助丈の若年の重の井。美しといへば足れり。權十郎丈の由留木右衛門尉。大守の貫目備り、臣下に情厚き様も見たり。馬士八藏實は逸平。體も箝り、することも別に悪くはないが、どうも氣乗うすく、今一と息應へ兼ねたり。殊に白の片言多く、主人の與八郎と知れてからも詞遣うんざいにて、別に敬まふ様子もなきは吞氣をことなり。八百藏の鷲坂左内。末廣屋ごこの締立役は此人のものなり。市藏丈の鷲塚官太夫。いつも乍らの敵役にて悪からう筈なし。本田彌惣左衛門。紋切形の赤い物づくしにて、三吉に馬鹿にせらるゝとほけ加減可笑く出来たり。女寅丈の藝子いろは。よくうつりたり。壽美藏丈のおさん。ね骨折は見れたれど、りれで見物が欠伸をするは是非もなし。猿之助丈の八平次。普通。翫太郎丈の米屋。造作もない役なれど、この言譯では泣き出し悪からん。猿藏丈の古手屋。平凡。團七、升六兩丈の悪者、蝦蟇六丈の馬士。何れも抜けるほど好し。團十郎丈の竹村定之進。ね骨折だけのことは確にあり。乳人重の井を引受けて出されたれど、りの面白さ加減、どうも女楠と離れぬ間柄のやう見受たり。先づ打掛、着附が高尙すぎて寂しく、春日局が政岡かに擬ひさうなるは残念なり。高つきでなく並の菓子盆をもち

て出で来て、見れば見るほど發明さうなよい子、こんな子に馬追さする親達はよく／＼のことであらうといふところは、此人の事ゆゑほろりとさせたり。しかしこれから先は、ちよびに乗りてたつぶりと振を見せて貰はゞ、芝居として面白くも拜見いたすべきを、すつかり精神を穿ちて思入でたて切り、獨で承知して居らるゝは、定めてせつないことならんが、見物は迷惑、正太夫氏が欠伸の勘定をして居られしも無理はなし。さて中途で呼立てられ、一旦這入りて出直し、花道に往きかゝる三吉に、山川で怪我ばしすなといふ白を立身でいはるゝところ、馬士唄をきゝての泣笑ひは、流石に旨し。兎に角丈の女形も少し鼻につきし上、同じことでも、政岡、春日の局の如き女丈夫は、氣慨の點にて欲り好けれど、この重の井はうれに反して、極もろき女の情合を見する事ゆゑ、この丈には極めて不向の役なり。うれを前の役々の心意氣でせられしかば、情合のうつらぬものとされたり。どうかかゝる欲り悪きものを出さんより、この前の毛刺のやうなものを見せて、人助けをせられし。丑之助丈の三吉。彌物左衛門を馬鹿にするいたづら加減、小癩にやられたり。うれぢやあれぬれつかあだといふあたりから肝腎な泣かせ場に穴が明き、どうも頑是なさずたり。しかし馬士唄のところは音羽屋／＼と聲がかゝり、花道を驅込むまで、いかにも可愛らしきと親御の愛敬とで見物が得心するは不思議／＼。芝居丈のひぬかの八藏。大詰にて人形然たる顔を見せられ、初めて芝居らしき心地したり。白も科も可笑味ませて軽くでき、荷を下したやうな氣持になりたり。所作事

加茂空屋運動競

寺内の河竹氏の御趣向ほどありて、さて／＼恐入つたものかな。寄語す。ねんばさん、子守女の人

人、三升會員の素顔を見んと欲せば、樂屋口に立つに及ばず、早々大枚四錢を投じて、歌舞伎座の大切を御覽候へ。いやはや、たはい／＼。(明治廿五年六月四日)
鳥越座の一番目

名末世千代田松

五幕は文政年間松平外記が殿中及傷の事を仕組みしものにて、固と須藤南翠氏の小説に基きて書卸し、初手は中島座にて大當をなし、其後吾妻座にても出したりと覺ゆ。當時故參の者が新參の者を苦めて手柄顔する面憎さは想ひやられ、これを堪へ／＼し上、堪忍袋の緒を切りて敵役残らずを撫斬にして潔く最期を遂ぐる外記の行はいかにも心地よけれど、唯敵役が外記に強顔く當るのはこれこれの遺恨ありといふ原因を明に示さざるゆゑ、譯もなく怒らせやう／＼とするやうに見ゆるは拙し。本文には立敵安堂が所望せし八重子を外記に奪はれしが遺恨の原となるやうに記しありしやに覺わしが、この度は時間の都合かかゝるところもなく、又敵役が外記を吉原に伴ひて辱めんとせしを、却りて粧太夫が外記をかばひし爲めに遺恨を増す件も、一寸花ありて面白かるべきに、こゝも喰つて仕舞ひたるは殘惜し。虎の間の場にて、外記の辨當に馬糞を入れ置く件、又痰を土瓶に吐入れて與ふる件など、見る人はいやなる感じを起さするやうなることは、可成狂言に仕組まぬがよし。こゝらも怒らす趣向に苦しみての拙手段と見るの外なし。頼母邸にて母と下部とが交る／＼外記に異見するは、これも五月蠅き仕組方なり。殊に後幕の別盃の場にて、舅の異見もあり、何となく前幕とつく憂もあれば、かゝる幕は抜くがよし。駒場野お成の場と松平家別盃の場とは、有職鎌倉山の佐野と同じ行き方にて、彼程の見立はなけれど、あつさりなところは好し。然し態と立腹して

妻を離別する紋切形の無法加減は、大陳腐にて欠伸が出でたり。こゝらはぐつと新しく何事も打明けて話すやうに作りし方、一際情逼りて悲しかるべきに。又親子泣笑ひの幕切も、餘り出来したものにあらす。下乗橋の場にて犬を切るところ、こゝは決心の鋭きさま見わた好き仕組なり。刃傷の場にて外記が按摩せよといはれ、安堂の御紋服を調伏の恐れありと云ひて脱がするは、鮮血に汚さじとの用意にて好し。こゝは佐野と違ひ、片端より撫斬にすることゆゑ、いかにも面白し。残らず打留めて階段によりかゝり、訴状を片足にて踏まへ、咽喉を貫ぬきて自盡せしところに檢使來りて、その手並を賞するが耳に通じ、につたりとして落入るは、好き大詰なり。中幕所作事

賤機帯斑女物狂

は固と一中節にありしを、享和の頃三好某が所作となし、日吉の祭にて一度演じたるのみにて、その後廢れ居りしを、この度出しゝやに聞きしが、未だ致ふる暇を得ず。狂女の狂ひゆゑ、忙しき節多ければ、厭が來ぬ丈は有難けれど、終始目先の變らぬは残念なり。二番目

夏祭浪花鑑

三幕は竹田小出雲の作にて、年々の夏芝居にはきつと出す位の舊き狂言なれど、近比はあちこちを抜きて、唯達衆三人が銘々の意氣地、お辰がやき鐵をあつる男まさり、義平次が因業な工合などを見するだけなり。されどいづれも心地好き仕組方ゆゑ、暑よけにはこれに越す面白さはなし。八百藏丈の松平外記役。虎の間の場。始終下手くさとして、敵役の言がかりを風と受流す辛抱どころ、しつとりとしてきくつかぬは流石此丈なり。御紋散しの重箱を割られてぐつと焦込む幕切、例もの氣組にて申分なし。頼母郎。當日は妙に氣が散りて松藏との氣合しつくりとゆかぬは、困つたもの。

御成の場は役目の前として、敵役に向ひても前幕と意氣込の違ふは尤もなり。拍子木にて額を割られての思入、敵役の入りし後影を見送り、白紙にて創口を押へ、これを持直しての幕切、よかつた。邸の場にて舅により乍ら決心を告ぐるところ一通。女房を離別する件は、趣向の爲にこはしたり。父に試されての立廻りは面白かりしが、切の笑は受けられず。下乗橋の場。犬を切つて、外記、畜生切つたる鐵味は、松藏、犬を切るには、外記、よいと申すかといふ幕切は、よい引張であつたり。詰所にて按摩をせよといはれても、何氣なく受引き、さて御紋服を脱がしてより、所望があるといひ、その所望はと問はれて、各方の生首を所望致すとぐつときつく出で、刀の鞘を足に狭みての身構、思はずぐつと致したり。敵役多勢を相手に當るに任せて斬りまくる手練の仕打あぶないほどに烈しく、亂鬢となりて色青ざめ眼血走りし様物凄く覺えたり。残らず止めを差してほつと息をつき、階によりかゝりての自殺よりにつと笑ひての幕切まで、この役は非常の出来にて、この後は此人の物となるべし。われ近頃國會にて歌舞伎座の品定をしたる時、この丈の鷺坂左内を評して、末廣屋とこの締立役はこの人の事なりといひしに、衆議評の一番はこれを難じて、何處かの評者が宗十郎に行くと申しましたが、彼なことではいけるなら何人でもゆかれませうといひたり。わが末廣屋とこといひたるは鷺坂左内の役前の事にて、即ち前に末廣屋へぶつとけ持つて行く役前は、今のところにては八百藏へ持つて行くべきものぞといひしのみ。八百藏丈と宗十郎丈との技藝が同等なりといひたるにはあらず。されどこん度のこの丈が外記の役を以て、先年末廣屋丈が勤めし佐野の役に比べ見ば、年功の外さして見劣りするところなきに、一番評者も恐らくは指をくはへて引込むことなるべし。市藏丈の安堂志摩之助役。お手の物として氣味よき出来なり。例のたんかの切れた調子に

て、びし／＼と外記に切込んでくる工合、手丈夫にて好し。拍子木にて外記の額を割りての空會釋より、拍子木を渡すといひて投出し、外記が受取らんとするをたぐりあげて、ぶは／＼と笑ひての引込み、憎くかつた／＼。一刀切られてからお氣を附けなさい／＼といひ乍らよろけまはるところも申分なし。釣舟の三婦役。作も箝り、着附も大派手にて、することも投出したやうにさつぱりとして、年寄氣質よく映りたり。駕籠屋を懲るところもよく、九郎兵衛にあひて、何から何まで世話やく仕打よく届き、序幕の面白さは、この丈が賑なる藝風にて持つて居たり。内の場にてお梶に強顔くあたるところ、やき鐵あてしに驚くところなど、どこまでもさつぱりした腹が見ゆ、この度は義平次役との替り目を綺麗に仕分られたり。三河屋義平次役。本役とはいひ乍ら古今の出来なり。作り萬端一點の申分なく、九郎兵衛が男が立ぬといふを、うの男には誰がしたとせうら笑ふあたりより、わつ／＼口説きつ頼むを耳にもかけず、空ううぶきて居る憎てさ加減、たまつたものにあらず。三十兩の金があるといはれて少し和して駕籠を歸し、九郎兵衛あついなうと幾度も繰返していひ、うれ今の事をな、わしにも喜ばして呉よと金をねだるところ、妙に／＼こつきて世事をいふ鹽梅、旨いこと／＼。金はこのには無いといはれてはつと尻餅をつき、すた／＼花道にかけゆきて、其駕籠返せ／＼とあせるところ、最早體は／＼にあれど氣は先へとられて居る工合、只不思議といふの外なし。九郎兵衛に引戻されて口惜まされに打擲するところもむごたらしく、刀に手をかけしを見て、わしを殺す氣ぢや、さあ殺せ／＼と體をすりつくるところ、誤りて一太刀切られて親殺し／＼といひ乍ら驅廻り、／＼溝に落ちて名代の泥仕合になり、蛙の身振振ありて落入るまで、息もつけぬほど面白かりき。こん度は三役ともいづれねろかはなかりしが、取分義平次役は當代に獨歩すべき旨味ありて、實に大出来大

當といふべし。新藏丈の池邊吉十郎役。外記最期の場に来り落附いての仕草、一寸受たり。斑女の前役。流石出物だけありて、見事に出来たり。只振のや／＼荒つばい所が申分なり。一寸徳兵衛役。さしたる見せ場もなければ、大手にこなされて好し。猿之助丈の松藏役。異見の場はちと白が時代なためか、外記との氣合もつくりゆかぬは残念。下乗橋の場は外記と別を惜む仕打、御兩人にて好い見えであつたり。船頭岩藏役はいつも乍らのわき師にて、悪からう筈なし。團七九郎兵衛役はれ仕着の中は餘り見立がなさずたれど、二度目の出は作着附ともさつぱりとして、／＼と男前を上げたり。一寸との出入もあぶなつてなくて好し。殺しの場にて義平次に手を下げて詫入るところ、石を胴巻に入れて、金と見せて駕籠を取戻すあたり、厭なところを出されぬは感心なり。散々打擲にあひ、額に傷つけられて／＼と焦込み、また氣を取直して詫入るところ、手一杯にせられて受けたり。殺しになりてから例の刺繍を出しての大働き、本雨をつかひての立は氣持よかりき。祭の人数に紛れて神輿をかつき、／＼と編笠をかぶりての引込まで大御苦勞であつたり。壽美藏丈の將軍役。無理な役廻りなれば評なし。松平頼母役は寂しき藝だけ見榮はせねど、仕打は抜目なく出来たり。笑はさうも感心せず。阿部四郎五郎役は落附て好し。辰辰役。器量の好いところによき鐵をあつるが狂言の山ゆゑ、箝り悪し。しかし氣組仕打は師匠張にて旨かつたり。體になき役をこれ丈にこなさるるは感服／＼。瀧十郎丈の松平備前守、座光寺玄蕃の二役。いつも同じ様な役前なれば、間違ひなし。しかし白が少し早言すぎたり。以後はゆつたりとやられたし。紫琴丈の奥方二葉役。あまりあつてを過ぎたり。この丈の白もあまりべちやくちやとするは聞苦し。しかしこれは軽くは直されぬものにや。女寅丈の奥八重子役。初産の事をいはれて耻かしき思入、夫が覺悟をききて別れともな

き仕打、いづれも上品にて愛らし。ね梶役もよき年増振なり。染五郎丈の玉嶋磯之丞役。この前の右馬之助にくらべては餘程見上げたり。玉七丈のねつぎ役。初見目見えより評よかりし丈ありて、よき役がつきたり。どこか三津之助丈の面影あれど、あんな重つくろしき所はなく、ね辰が來てのやきもちも出來たれど、三婦の引込を見送りて花道に出でて譽立つるは坂地風ならんが、かゝることとは當地では受けず。才三郎丈の琴浦役。評者が大最負の此丈が追々と御出世にて、こんな嬉しいことはなし。まづ容貌を見違ふるほど美しく作られ、體のこなしも柔く、相應に色氣もありて、九郎兵衛に磯之丞のところを教へられてとつかはと驅出す工合の情合もわかり、三婦の内にてのじやらつきも、ちつと計りやけ氣味であつたり。團七丈の戸田役。顔立も師匠に似てする事も應ふれど、どうも舞臺をなめてござるやうに見ゆるは悪し。腕がたしかなとて慢るやうでは仕舞なり。しかし外記に殺さるゝところは旨く、なまの八役もよかつたり。升藏丈もこつばの權が出來なり。大よし丈の御坊主。御新役でござるかといひて辨當箱を置いてつひと這入るところは、一寸好し。蝦蛄六丈の髮結。これもりの儘なり。市右衛門丈の侍。殺し場にて腰を抜かしてがた／＼するところ旨し。うの外殺し場の諸士にて、いづれも周章狼狽して轉つ輾びつする様は、いつも乍ら市川の門下ほどありて、いづれも眞に逼りたり。大出來／＼とほめて置くべし。(明治廿五年七月)

怪談牡丹燈籠

を借り來りて盆替狂言に出されたり。圓朝丈の讀物には随分新しからぬ趣向もなきにあらねど、篇中の人物が對話する言葉の中に、いかにも人情の微を穿ちたるどころありて、こゝが咄にしても、芝居にしても面白きところなるべし。この曲は素と剪燈新話の牡丹燈籠記に新幡隨院濡佛の縁起を附會し、お露、新三郎の事を作り、うれに忠僕孝助の一條を結び付けたるものなり。さればこの前の多助一代記の如きなだらかなるところ多き立志談に比ぶれば大分變化ありて、この件は芝居に籍り好し。唯例の世界一／＼さりをつなきたるなれば、圓朝丈は一回置に話したるが、芝居に纏めて見ると、初段にては孝助の事とお露の事とが別々になり居り、後段にては孝助の筋と伴藏の筋とが別々に終り、たとひ源次郎とお國とだけごちらへも顔を出すも、充分に雙方の連絡がつかず。かゝるところは芝居の筋立には適當せず。又圓朝丈の作りし善人と悪人とは同じやうなる性質の者多ければ、若し重ねかけて芝居に上るときは、うの仕方方はいかにもむつかしかるべし。例之ば前度の多助、今度の幸助、榛名梅香の安中草三の如きほと／＼同性質の人物なり。又前度のお龜と今度のお國、或は丹次と源次郎の如き何れも似寄のものなれば之を演ずる役者が一々仕分くることは中々骨折なるべしと思はる。さて今度も圓朝丈の咄は廿一回もありて一日の狂言に纏らぬ故、櫻癡居士が刪修補綴して七幕十七場となし、猶河竹氏が世話口調に直し、其水氏が幕切などに加筆したりとせきぬ。されば孝助の舅相川のう／＼つかしき件、娘お徳の戀病の件など、すつかり端折りたるは是非もなし。尙補綴の可否につきては幕毎にいふべし。先づ序幕飯島邸庭前の場。幕明に飯島の娘と妾との折合悪く別戸する事と、娘に虫がつくかもしれぬといふ件とを下部にいはずは好し。飯島が孝助の素性を聞きてさては我手にかけし黒川の倅なるかと驚き、助太刀して敵を討たせんと受合ふところを見せたるが、こゝは本文第三回どほりなる上あつさりにて好し。正本にはこゝにて源次郎と孝助との仕合あれど、これは陳臭ければ、抜きたる方好し。飯島が娘のところに見舞にゆかんといふは、後

幕とのつなぎだけなり。柳島別荘の場。お露と新三郎との濡場を見せ、これを父平左衛門が見尤めて引放すといふ筋、本文第四にては、こゝを新三郎が船にて假寐したるときに夢にして、二人共手打にせらると思ひて夢が覺むるなど面白き趣向なるを、現在のことにしたるは、前段の見染場が見せられぬため、見る人に會得ゆくまじとの用意なるか。略筋を讀みしときは、随分趣向をこはしたりと思ひしが、芝居にかけて見ればお露を連れ歸る件は、中々むごく、かくては焦れ死するも宜なりと思はれたり。しかしかく改めては、飯島は娘の焦れ死を見殺しにしたるやうに思はるゝが如何にや。こゝに下部六藏を使ひて新三郎を打擲するも、この度の筋にては至極好し。本所横川の場。こゝは本文にては伴藏と新三郎とのみが漁に来る丈の筋なるを、初め志丈と伴藏との顔を見せ、ろくに新三郎が逃げ込むやうにしたり。こゝの幕切は、正本にては六藏がつけて来て、新三郎を川に突落し、これを兩人が引上ぐるやうに記しあれど、芝居にては唯新三郎が飛乗りしに兩人驚きて船を出さんとして、水引きしたため出し得ぬやうに改め、一寸面白き場となりたり。しかし新三郎は逃出したのでなく、突出されたのゆゑ、こゝは萎々として出づべき筈と思はる。松助丈の飯島平左衛門役。本筋にては餘程腹の入る役にて、隨意にならば團十郎丈にでも持つて行くべき品格物ゆゑ如何と危みしが、流石老功の人だけありて天晴の出来なり。年配の作り、着附の好みまで申分なく、品格も落附もありて、慥にね簾本の殿様と受取られたり。孝助を傍近く呼びて素性を尋ね、お嬢は元なものだといふを聞き氣にもかけず、其方は正直な奴だと微笑みて居る工合旨いものなり。又孝助の父は人手に掛りぬと聞きて、それは怪しからぬことぢやと不審る工合、黒川の倅と知りてぎつくりとの思入、いづれもよし。孝助が敵を討ちたいと口惜しがる様子を見てせつなき工合、

氣を取り直し平左衛門が助太刀してきつと敵は討してやるときつぱりいひ、いつづは討たれてやらんと覺期する心、よく解りたり。別荘の場。紹の羽織袴にての出、品格立優れり。燈さへ點じなきに口小言をいひ乍ら通り、兩人の姿を見てびつくりし、手燭の明を吹消しての思入、六藏が新三郎を引据ゑて賊なりと叫ぶ間、黙して居らるゝ工合、とんだ事になつたはと思ふ父親の腹見えたり。六藏が折檻せんとするを留て、新三郎を戒め、娘を懲して、こゝな不埒者めがといふあたり、立腹一方でない工合は、腹のある侍と受取られたり。二役山本志丈役。お持役とはいひ乍ら太鼓醫者の拵好みよく、伴藏と酒を酌交して輕口をいつて居る中も、浮薄のさま見ね、飯島役と同人とは思はれず。萩原が舟に飛込むときびつくりする様子、慌てゝ船を出さんとするに潮が引いて出ぬ故、棧橋に上りて船を押出すと、出るとたんに仰向に引くりかへるをかし味、久し振で輕いところを見せられて、わつ／＼といふ場受であつたり。秀調丈の飯島妾お國役。若々とした作りにて滅相に美し。六藏を呼びて源三郎を迎へにやるところ、國が申しましたとさういつてれ出といふところに少し力を入れていひ、往きかくるを呼止めて金包みをやるところ、小ざりまはしの中に色氣ありて、成上りものと見ねたり。菊之助丈の萩原新三郎役。青黛、帷子の好みよく、調子も餘程耳立ぬやうになりすつきりとしたよい男振であつたり。お露にあひて極りを惡がり、側を向きて扇をつかふ工合はよけれど、お露が留むるを振拂ひて歸らんとする形は最少しこゝとやかにせられたし。六藏に捕へられて庭にひれ伏して面目ないといふ思入、覺悟を極めて平左衛門に詫言するところは好し。六藏のために表に突出さるゝを、出でまじと争ひて散々に打擲せらるゝところは和事師の身上なるが、この丈がとつかはとあせる息込充分にて、中々の出来であつたり。横川の場も慌てゝ舟に

飛乗り、早く船を出して呉れ〜と氣を揉む様子、抜目なく寫されたり。榮三郎丈の披露役、顔の作り着附とも本文の口繪を寫されたりと見え、例のきやしゃながよく役にはまりて中々美しかりき。新三郎との色合も相應にこなされしが、慾には戀病をして居る位ゆゑ、今少しやつれたる作りにて、殊に逢ひたくてたまらぬところに尋ねて來られしものゆゑ、喜も倣大にして、見物がほろりとする位の情愛を見せて貰ひたかりき。父に見出されても、唯袖を翳して御座る丈にて、今一と息心つかひの様不足なり。六藏の打擲を見兼ねて新三郎をかばふあたりは一と通なれど、六藏が歸り來りしを見て、新三郎さまはどうなされたといふあたり、唯の娘に歸りて憂の氣組がどこかへいつてしまふは困つたものなり。彦十郎丈の若黨源助役。端役にて氣の毒なれど、箝することは不思議な位にて調子から様子まで正直一遍の男と見て好し。菊四郎丈の下部六藏役。これもさしたる役ではなけれど、この丈がせらるゝと格別に好く、お郎の讒訴をし乍ら汗を拭く幕明よりお國に使を頼まれて口上を呑込み、使賃を貰ひて世事をいふ工合などその儘に寫されたり。新三郎を捕へて泥棒だ泥棒だと聲を上げ、お露がかばふのを見て、さてはと顔をのぞき込むで逢引だと氣の附く様子お嬢さまをも殿様がよもやうつちやつてはお置きなさるまいと遠まはしにいふ工合、よく師匠の藝風を呑込んだものかな。飯島が新三郎を追出せといふ笠に着て、新三郎が胸をつき、頭をくらはせ、用捨なく打擲するところ、眞劍にて憎かつたり。幸十郎丈の寮番役。あやめ丈の同女房役。いづれも好し。菊五郎丈の黒川孝助役。着附袴とも若黨の作り申分なく、忠義一圖の侍と見えたり。若様があつたら劍術のお稽古のお相手が出来やうに、ほんにね武家様にお嬢様はむだなものだとうっかりいひて、氣が附いて詫ぶるところ、自然のやうにせられてよし。親の切殺されしことを話し、今

でも敵に出つくはしたら、劍術では協ひませんからうれこり咽吭にでも喰ひついてやりますといふところ、氣組充分にて嬉しかつたり。飯島が助太刀して呉るとき、あの助太刀をして下さいませるかと思はず膝を乗出して喜ぶ工合、ほろりとさせたり。二役孫店の伴藏役。月代中延の假髻、兎未なる着附にて、どこか下司張りたる作よく出来たり。これで女が居りやあ橋本は跣足だが、さう旨くは問屋で卸さねえなどと志丈を相手に輕口をいつて居るところ、さら〜として好し。新三郎が飛込み來るにびつくりして船を出さんとして出ぬ故あせる様子、志丈が船を押すの力で急に船が出たので、前へのめるをかし味、松助丈と兩人にて面白い幕切であつたり。二幕目飯島茶座敷の場。こゝは本文第五回りのまゝにて、宮の邊源次郎が弓の折にて幸助を折檻するところなるに、源次郎を勤むる八百藏丈が鳥越座よりの掛持間に合はぬためにや預りとなり、直に次の根津萩原宅の場を出すことになりたり。こゝは本文第八回ト者勇齋が新三郎の死相あるを見て、新幡隨院の良石和尚に頼状をつけてやり、良石が海音如來の尊像と御符經巻とを貸與ふる件なるを詰めて、新三郎を良石和尚の檀家となし、勇齋の知らせにより、良石が自ら尊像と御符とを携來りて與ふることに改めしゆゑ、大層手つ取早くはなりしが、うの交り圓朝丈の話にて寂莫と端座して居る高僧良石が大分安つぽく見え、殊に勇齋と連立たず、志丈と連立ちて來るは、随分やつてつねな趣向なりと思はる。又本文第六回にて、新三郎が盆の十三日に端居して居るところに、からんころんと駒下駄の音をさせてお露お米が牡丹燈籠を下げて來て、圖らず邂逅ふといふ件は、此怪談の眼目の場なるに、こゝをも時間の都合にやすつかりとはしよられたるは殘惜し。さて改作の幕切は、正本にては伴藏が海音如來のことをいふ筋なるを、芝居にては伴藏があ、もう出て來やあがつたといふと、萩原がね

ねと驚くを伴藏が押へて、なまに旦那、ひどい蚊でございませうといふは、菊五郎丈の注文か其水氏の工夫か知らねど、機轉の利いたる趣向にて、見物をわつといはせたり。菊之助丈の萩原新三郎役。色蒼ざめてやつれし工合、いかさま死靈に取つかれ居るやうに見えて、よく箝りたり。良石に甘露の事をいはれて極りの悪き様子、次に志丈に甘露は亡せたりと聞きてびつくりし、又思ひ直して私をからかふのであらうと微笑むところ、さら／＼とこなされて好し。いよ／＼甘露が死して毎夜來るは死靈なりと聞き、ぞつと身の毛のたつ工合、實に旨いもの。良石を送り出してほろりとの思入も應へたり。とりわけ始終病中の心持の離れぬは、いかにも御注意の事にて、この場は一點の申分なし。彦十郎丈の良石和尚役。筋の改りしため、この役も餘程安くなりたれば、お前は死ぬるといふ名代の白も引立たず。圓朝丈の諷すやうな道德高き上人とは受取れねど、親切な氣組は充分に見えたり。然し同丈が本文を吞込んで居られなば、今一と息工夫のあるべきに、残念なことなり。幸十郎丈の白翁堂勇齋役。これも改作にて大分役が悪くなりたる上、この丈の勤むるところにては、前幕の寮番と同じやうに見えて評にかゝらず。これも本文を腹に入れぬからの誤なり。扇藏丈の雇婆ねくろ役。手に入つた役前なれば、とかういふに及ばず。松助丈の山本志丈役。さしたることも無けれど、うの人になつてござるは嬉し。良石を案内して門口に立留り、涼傘にて風を入るゝところなど、芝居とは思はれず。新三郎に死靈がとりつきて離れぬ件をききて、あまり色男に生れるも困つたものだといふところ、見物にぢや／＼が來たり。何となく怖氣だちてう／＼に歸るまで、お附合とはいひ乍らまことに難有かりき。菊五郎丈の伴藏役。蓮の花を持ちて花道より出で、何か内談ありと見て、一寸垣根にしやがみて様子を聞く工合、いつも乍ら軽い事。足元にまつはる蚊

を手で拂ふのはまだしもなれど、扇子で扇ぐなどは、立聞する人にはちと遣りすぎではなきか。金無垢の尊像と聞いてうつと延上る工合、音のせぬやうに花道の方へ後戻りして、こん度はすた／＼と足音をさせては入るなど、毎度のことなれば、申分のあらう筈なし。お寺さまとお醫者さまと易者と揃つたのだから、御病氣も直るでせうとの白、何となく輕薄にて好し。尊像を開き見て目方を引くなどいふ正本の筋をはしよられしは、これもよし。目方もずつしりといひて、いかに難有さうな尊像でござい升との白は、一通なり。幕切にもう出やあがつたと大きくいひて、新三郎が驚くと、なまに旦那ひどい蚊でございませうと裾を捲くりて蚊をはたく工合、いかにも軽く出來て、唯あつと感服したり。三幕目伴藏裏借家の場。萩原宅裏口の場。同座敷怪異の場。こゝは本文の十回と十二回とを合せたるものなるが、まづ伴藏が盗み來りたる海音如來をねにねに見せてこれを埋め、次に幽霊に頼まれた筋を話すこととせり。又本文にては新三郎が幽霊に取殺されたりと見ゆるは、伴藏が殺して置きての細工のやうに記しあるを改めて、幽霊が實に取殺すことになしたり。芝居にするにはかうでも直さでは納りがつくまじ。菊之助丈の新三郎役。お露の聲を聞きて蚊鬮より半身を出してびつくりし、片膝つきたる態好し。お露に恨まれて困る様子より、尊像のすり替へられしに驚き、驅出さんとして引戻され、苦みて落入るまで、この役はいかにもよくこの丈に箝りて、うの人を見るやうに思はれたり。これと申すも丈が近年御修行の功顯はれたるところなれば、かやうに喜ばしきことはなし。どうかこの役を出世役として、めき／＼と賣出し玉へや。榮三郎丈のお露役。からんころんと音をさせて紙子張の向にほんやりと形を見るところは、いかにもあざやかにて好し。新三郎に口説のところは、調子が太くかんばしつた丈で、凄味のところも陰氣なところもないゆゑ、

どうも受兼ねたり。その代り顔に當つる團扇の畫が髑髏と見ゆるは、御趣向にて好し。引戻しはさしたることなし。菊三郎丈のお米亡靈の代り役。年増振の箱好し。秀調丈のお峯役。貧乏世帯にやつれたる女房の拵よく寫され、たばね髪の様、裾を短くからげ居るなど、少しの申分もなし。伴藏がうつと歸りしに驚く工合より、尊像の目を引いて見る様子、行燈を差向けて尊像を埋さずるまで、五分の隙もなし。伴藏が幽霊の仕方話をして、伴藏さんあなたと凄じい聲を出すにびつくりして、きやつと聲を上ぐる様子、うの儘の女にて、不思議な程に旨し。九つの鐘を聞きて戸棚に這入るまで始終音羽屋と呼吸を合せて居らるゝ工合、いつもの團洲丈を相手とは行き方を違へて仕て居らるは、遊んで居るやうなもの。時々ひどい蚊だといひ乍らうこら中はたき廻すと、見物が無暗に嬉しがる時は、妙に愛敬のある藝風かな。幽霊の話は旨いには相違ないが、あまり圓朝丈をまね過ぎて、ちと五月蠅いやうな心持がしたり。一體この丈がやはりお米の亡靈をつとむるのゆゑ、お米の聲色などをあまり旨く遣ふのは、後にさし合ひて悪し。こゝらは今少しあつさり願ひたきものなり。いつやこの丈が大工六三役のとき、前狂言に自分が勤めしおさよの聲色を男の聲でつかひたりとて評よかりしが、こゝもりの呼吸にて行くべきところなるべし。しかし話に身が入りて、伴藏さんあなたと妙な聲を出し、お峯が驚きてきやあと聲を立つるに自分も驚きて、あゝびつくりさせやがたといふ可笑味は不思議。一旦蚊屋に這入り、自分で名を呼びて、はいくゝと返事をし乍ら出て、幽霊と伴藏との掛合を、自分一人で調子を替へてやらるゝは御苦勞の事なり。しかしどうせ仕舞まで兩方の白を使ひわくる譯にはゆかぬ筋ゆゑ、これはやはり初めから幽霊の仕方を見て、覺る

やうにするがよかるべし。金を幽霊から受取らんとして、薄氣味悪くて足進まず、うちらに向いて居て下さいといひて、びく／＼と乍ら片手を延しひつたくるやうに取り、行燈のうばに持て来て員數を改むるところ、怖氣と怨氣と合併して居る工合、旨いと申すもおろかなことなり。うれより萩原の裏手に廻りて、立木の枝にさはりてわつと飛のく可笑味、引窓のお札に手の届かぬ思入ありて、梯を持来しところへ、幽霊が又形を顯はすに、梯を持ち乍らがた／＼と胸ぶるひをするところ、大受／＼。梯をかけて上らんとして、足を棧の間に落とし、又は御札の剝がれぬを、上下へ手で唾を塗りつけてろ／＼とまくるなどいふ小細工ありて、やう／＼剝して下ると、幽霊がこなたへ向ひて思入あるゆゑ、わつといひて着物の襟を延し、頭からすつぽり冠りて、這ひ乍ら下手へ這入るまで、音羽屋思ひ切つて大茶利をやられ、うれで又幽霊が滅法凄く見えるので、見物の喜びやうは一と通でなかりき。この度も全くこの幕が利いて又候大入大當を占められたるお腕前は、實に天下の伶俐者といふべし。二役下女お米の亡靈役。萩原麻間にて、代り役のお米に己れが仕度の出来る迄髑髏を冠せ置くは、好き思ひ付なり。お米の顔の作りがいやに蒼白く、どうしても冥府の人と見ゆる工合は、いかにも好し。調子も例の凄じい聲で、もうこの上はお嬢様冥土へお連遊ばせと、横向に立ちて體をねぢ向け、右の人差指で下手を指す態は、お家十八番のこなしと見え、凄じいことであつたり。とぞ新三郎をたぐり寄する幕切は、さしてあげつらふほどの事なし。四幕目飯嶋與座敷の場。同與庭立退の場。こゝは本文第十一回の孝助が盜賊の濡衣を被る件、十三回孝助が計らず父の仇を報ずる件、十五回源次郎お國出奔の件などを殆りのまゝ芝居に直したるものゆゑ、補綴のことにつきては彼此いふところなし。唯正本にては與座敷の場の切に平左衛門が孝助に百金を與へて相川方に遣すこと

あれど、これにては孝助が源次郎を殺さんといふ意氣込少し抜くる氣味あれば、芝居にてこゝを除き、うの交りに孝助が源次郎に目を付くる件を添へたるは至極よし。この二場は共に芝居に宜しき筋立にて、殊更飯島が孝助の罪なきことを知りてうの冤を救ふは、主従の情を盡したる趣向といふべく、又奥庭にて平左衛門が源次郎を見せて孝助の刃にかゝり、よくぞ仇を打つたるぞといひて昔語になるは、芝居としては極めて見榮あり。こゝは圓朝丈の大手柄なり。されば此狂言中、舞臺にかけて見應あり、尤も芝居らしき心地したるは、やはり此一幕なりき。松助丈の飯島平左衛門役。番下りの心にて繼上下にて早足に出で、これを脱替へて黄帷子の着流しとなりたる姿はまり好く、品格も上々なり。ね國がふさぎ居るを訝り、盜賊入りたりと聞き、尙ね國が盜賊は内々の者ならんといふを、夫程の器量ある者は獨も居らぬといふところ、家來まで目の行届く人を見たり。ね國が念晴しに詮議するといふを、萬一盜みしものがあるとも、今迄葛籠や文庫の中に入れて置く筈がないといひて取合はぬ工合、まことに好し。ね國が女共を呼出し調ぶるところ、本文にて正本にてもその持物につき、下らぬ捨白あるをすつかりはしより、唯笑ひ乍ら傍を向き扇つかひをして、少しも詮義の事に頓着せず居らるゝ工合、女子には困つたものだといふやうな腹見にて大受へ。ね國が女共には疑ないといふゆるゑ、最う氣が濟んだであらうといふに、まだ若黨仲間を調べむと言張るを、苦々しがる思入も好し。孝助の葛籠より胴巻出で、お國が孝助に白狀せよとせまるどころ、雙方の様子をじつと聞き居、孝助にこの場の申開きが出來まじと思ひ、態と申開きがならずば手打に致すから左様心得ろと屹といひて、刀を取りに奥に這入る息込、少しの隙なし。次の出にはぐつと氣を變へ、手持無沙汰な様子にて、一同安心して呉れ、金子が紛失したといふは大な間違ひであつ

たど、己れが仕舞ひ違へせし由をいひ、孝助に向ひて其方に對しては誠に相濟まぬ、外の者なら腹を切つても濟まない所であつたと、手を突いて詫ぶるところは、圓朝丈の趣向とはいひ乍ら、又この丈かりこそ仕活したる腕前も拔群にて、見る人は唯我を忘れ、かうも主従の情愛は深いものかと思ひやりたり。孝助が金は出たにしましても、どうして胴巻が私の葛籠に這入つて居りましたかといふを冠せて、うれはいつぞや某が遣はしたのではないかといひ、孝助が押返しを、はて物覺の悪い男ぢやといふところも、唯感服の外なし。源次郎にあひて、何の隔もなき様子もよし。切に孝助が源次郎に目をつけて、いつそ殺して仕舞はんと決心する様子を覺り、始終立居に目をつけて居らるゝは、親切にてよし。奥庭の場。白地の浴衣に源次郎の羽織を冠りて椽側を傳ひ出で、孝助のために鎗にて肚側を充分に突かれ、右手にて鎗先を引抜きさま突返し置きて、傷口を押へ乍らよろよと庭に居りて膝をつくと、孝助が又突かゝる鎗を握りて、やれ待て孝助、われは飯島平左衛門ぢやといふまで、本文通りを寫されてよい見ゆであつたり。創口をゆはへさせて、鎗を杖につき乍ら孝助に扶けられて外庭に出づるまで、氣丈な殿様と見受けたり。敵同士とはいひ乍ら現在汝の鎗先に命を果すは輪廻應報との白ありて、實は其方の父を討つたはかく申す飯島平左衛門であるぞと調子を張つていはるゝところ、悪く手癢を痛がるなどいふ小細工なくて大受。これより後の仕末を孝助に頼み、飯島の家を再興をして呉れといひて、書置と差料とを與へて落すまで、主従の情愛よく映りたる中しつかりしたるところありて、この場は丈のね骨折で持つて居りたり。鎗を杖にして孝助の後影を見送り、さて椽側に上る足取も、創のない方の足で上り、これを力にして片々の足を上ぐるなどの注意届き、よろめく足を踏みながらうろ／＼と上手に來り、お國源次郎、成敗致す、

覺悟いたせと呼はり、出で来る源次郎の膝の邊を一鎗突き、立廻りになり、お國に火入を打付けられて源次郎に討たるまで、この役は古今の大出来にて、丈が年頃團洲、秀鶴兩丈の骨髓を得たる腕前充分に顯れたりといふべく、長く歌舞伎年代記に記し置きて、後世この役を扮する人の手本とすべし。八百歳丈の宮の邊源次郎役。前幕が出ぬゆゑ仕悪きところもあらんが、兎に角本文にて圓朝丈が話す源次郎は、お坊さん然たるぐにや助にて、時々きつくなるも相手を見くびつたとき計の男なれば、はきくしたる調子と藝風とで賣込んでござるこの丈には、とても箱らぬ役なり。固より補綴の方にては、圓朝丈の話す程には人物の性情顯れねど、兎に角うの腹で充分にやつて貰はでは上評とはいひがたし。飯島邸の場。拵も作りもこの前の原丹次を若くした丈で、目先替らず、お國と密會のところを飯島に見出されて、ぶる／＼顛ひ乍ら詫言するところも、一と通りと云迄なり。飯島が重傷を負ひ居るを見てうつと領き、かうなるからは百年目だと暗雲に切つてかゝりて仕留むるまでは、流石に烈しくて好し。秀調丈の飯島妾お國役。お化粧は大念入にて、若い男を可愛がるやうな淫婦に見れて好し。源次郎に金が紛失せしゆゑの罪を孝助に着せんと相談するところ、次第に膝をつきつけて来る工合、色氣有りて好し。正直一方の源助を呼びて、孝助がお前の讒訴をするなどいひていろ／＼と焚きつける工合、毒婦の本性見れて抜くる程旨し。孝助の葛籠を取寄せさせて改むる振し、源助に四邊に氣を附させ、うの間に袖より葛籠に胴巻をうつと入れ置き、さも自分が見出したるやうに、おやまあ呆れたものだよといふ鹽梅、空々しくて旨いものなり。飯島が歸り來ると急に物案じの様子をして、どうも心が濟みませぬゆゑ盗人の詮議をしますといひて、女共の荷物を一々調べ、もうよからうと飯島が留むるを、いね若黨仲間のをも調べねば氣が濟みませぬと飽ま

で強情を張る工合、妾の幅を利かするさま見れて好し。孝助の葛籠を改め、中の胴巻を團扇の柄に引掛けてずつと差上げ、孝助これは何だいといふ濟し加減、憎いこと／＼。孝助がさつぱり存じませんといふを、おとぼけでないよ、これが無くなつては私が殿様に濟まないから、御金を返してお呉よといふ落附工合も旨いもの。孝助が獨でに胴巻が這入つたのですといふを、獨でに這入るやうなものかね、うんなやさしい顔をして、ほんとに怖い人だよといふところ、この前のお龜役にて邪慳一方な繼母根性を見せたるとは行方をかへて、奥様の品を作つて居る中に、真綿で首を巻くやうな憎い仕打を見せられて大受／＼。うれより源助が六藏かど知つて居るであらうといひて孝助を責めさするところ、飯島がいよ／＼手打にするといふをきくと、うれ見たことかお側を向いて團扇をつかつて居るところ、源助が詫をせよといふを孝助が聞入れぬを見て、およしよ、大方お手打にしたいのであらうといふところ、いづれも申分なし。飯島が金子が出たといふに、據なくお目出度ござい升といひ、尙孝助にあやまれといはれ、澁々に孝助どん、どうも濟まなかつたねえといつて、つんと側を向いてすます工合、いかにも好し。この役はこの場が一の出来にて、かゝることは外に仕手はあるまじと思ふほどによく箱りたり。彦十郎丈の源助役。顔の拵などどこまでも好い人を見れてよし。お國が孝助は増長するだらうといふを聞いて、どう致してあれ程よく出来た人はありませんと賞立つる工合、生真面目にて少しの飾もなく好し。お國が孝助は胡麻をするといふを聞いて、へお胡麻をすり升かといふもよし。うれよりすつかりお國の口車に乗せらるゝ工合、旨いこと／＼。詮議の場所にて孝助が盗みたりと思ひ込みて、早く申上げてしまふがよいと逼る氣組、手打になるを聞きてお詫をしろ／＼と氣を揉む工合、親切面に溢れて好し。金は出たりと聞きて、孝助を疑つ

て濟まなんだと後悔して詫入るところ、穴にでも這入りたいといふ様子ありて好し。菊四郎丈の六藏役。手荷物を持出して、看板ばかりでございませうといふあたり、中間の性根見にてよし。己れに疑かゝりしに驚き、孝助に白状しろと責むる工合も抜目なく、孝助が手打になると聞きて詫を頼めと云へど聞かぬ故、人が親切に勧めるのを聞かなければ勝手にしろといふあたり、憎體にてよし。菊五郎丈の孝助役。紛失金ありときて手荷物を持出して改を願ひ、己の葛籠より胴巻が出でたるを見て、お國がこれは何だいといふと、うりやあ私の品ではございませぬといひ、お國が金を出せといふに、おんだ事を仰います、私は殿様の物をちりつば一本盗んだ覺はございませぬといふあたり、餘りびく／＼するやうな事をせず、何の思案もなく存じませぬで持切て居る工合、潔白の性根見にてよし。源助や六藏が早く申上げろと責むるに、お前達まで一所になつて私を疑ふのはあんまりだと言争つて居るところ、正直一圖の男に見て好し。飯島が申開きをせねば手打に致すといふを、不埒をした覺がなければ詫をする廉もなく、この疑でどうもお手打になるは是非もない、大方跡でそのお金を盗んだ奴が出たら、あゝ可愛さうに孝助の業ではなかつたと仰つて下さるだらうから、どうぞお手打を願ひませうといふところ、覺悟極めしさま神妙に見て、ほろりと泣かせられたり。六藏が源次郎に詫を頼めといふを聞き、何の鄰の次男なんぞに、たとへ舌を喰つて死んだつて、詫言なんぞを頼むものかと、お國に當るやう息込んだ言廻し、嬉しかつたり。飯島が金が出たといひ手を突いて詫入り、皆々に詫さするに迷惑がる仕打はさら／＼とせられたり。それにしても胴巻が何故葛籠にあつたかと不審がり、飯島が身共がいつぞや遣はしたではなかつたかといふを呑込めぬ様子もよし。源次郎が入來り、明日は共に釣に行かうと飯島がいふを聞き、愈々お出でに

なり升かど幾度も問返し、こりやもういつう手短にと源次郎に思入有りて、今宵打取らんと決心する思入得心したり。この場はこの前多助役でね龜に責めらるゝ件と役も筋も同じ様なれば、如何と思ひしに、拵や息込などは見事に仕分られたれど、餘り手拭を持つて涙をふく仕草がうるさいので、おれ丈がどうも多助染て申分であつたり。奥庭の場。下手より股立をとりて鎗鎗を持ちての出より一寸しごきをかゝるところ、例の男振の好いところに氣合満ち／＼たる顔立、よかつたよかつた。垣にしゃがみて伺ひ居り、飯島が羽織を冠り縁側傳ひにくるをやり過して立上り、又一つしごきを入れ、走りかゝりて肚側を目掛け充分に一鎗突き、突戻されてたぢ／＼となり、よろ／＼と庭に下りて飯島が膝をつくを、上から嵩にかゝつて又一鎗つくるところ、寸分の隙なくてよい見ゆであつたり。おの鎗先を握りて飯島が名乗るに、初めて主人と氣がつき、はつと驚きて仰向に引くり返り、起上りても、あまりの驚きに體がぶる／＼顛ひて、手足の筋がこはかりて働かず、口も思ふやうに利けぬ工合、實に神に入るの妙あり。飯島が創口を／＼といふに有合ふ羽織を當がひ、手拭を裂きてこれを結び、肩に引掛けて外庭に出で、唯御免なすつて下さい／＼と泣乍ら詫るところ、途方に暮れしさま見にてよし。飯島がよくお仇を打つたるといひ、實はおの方の父は某が切捨てたこの話に又びつくりなし、父の仇にても主を打ちては申譯なしと切腹せんとするを止められ、再興の事を頼まるゝ處、おは松助丈に藝をさせて、自身は淡泊にせられて好し。おれちやと申してこの深痕を捨置てといふと、飯島が未練者めがと叱るところ、これが別れと孝助が這寄りて飯島と主従手を取替し、顔を眺めての泣落し、御兩人にて芝居をせられて心地よかりき。お書置と差料とを貰ひて泣く／＼花道まで行かけ、行かぬる思入あつて、御免下されませうと手を突くと飯島が

吳々も再興の義を頼んだぞといふをはつと受けて立上り、思ひ切つて記念の太刀を袖にかゝへ、早足に花道にかけこむまで、この丈の體には無理な役前を引受けて見事にやつて退けられたるは大手柄なり。しかし當日は切の敵討の場が出幕にならぬゆゑ此役もこれ切にて何となく喰足らぬ心地したり。五幕目栗橋宿権現祭の場。幸手堤ね峰殺しの場。こゝは本文第十七回を二場に分ちたるものにて、本文はね峰が馬士久藏より伴藏の隠し女を聞出す處を關口屋の店先にし、悋氣をいふ處を寢間にしたれど、芝居にてはこの二場を、権現祭に兩人が往きて料理屋に憩ひしときのことにしたなり。いかさま本文どほりにてはあまり寂しき幕のみつゞくゆゑ、かく改めしかしらねど、せつせとね國のところに通ひて、女房が悋氣を起すほどの伴藏が、うの女房を祭に連れゆき、料理屋に寄るとは随分解せぬ話なり。しかし平常家を明る口塞げに連れ出したのだといへばうれ迄なり。正本にてはこゝを笹屋の場にして、伴藏がね國と夫婦約束をするやうに作りありしが、これは又一倍拙き趣向なり。こゝでは是非共ね峰が悋氣募りて伴藏の舊惡をどなり、これにて伴藏が殺意を起すといふやうに作りでは、折角の圓朝丈の意匠を殺すといふものなり。彼ね峰が馬士を賺して夫の不身持を聞出すより、つんとすまして否味をいひ、とゞ高聲になりて夫の舊惡をどなり又氣休に乗りて心解くる工合は、實に教育なき婦人の性情を摸し出して、骨に透るといふべし。殺しの場にては幕切にね峰の魂魄が飛ぶやうに正本に記しあるを、伴藏が襟につき居るお峰の指に氣が付き、氣味惡さうにもぎ放して捨つるやうにせしは、これも梅幸丈の工夫と覺て新し。秀調丈のね峰役。作りが若いやうなれど、悋氣をする筋ゆゑ、この位にてもよからん。着附うの外も相應して申分なし。久藏を呼入れて一口のませ、心附をやるどころ手軽く、ね國のことをきいてもしらを切つていはぬゆゑ、實は昨夜旦那が打明けて

大笑をしたのさといひて口を開かせ、一々調子を合せて聞出す工合、平常の話をして居るやうで、芝居とは思はれず。話を聞く中じり／＼と肝癢の込上げ来る様子も好く、残らず聞て呆れたものだよ、今まで私に言はないとはいふと、久藏がそれぢや旦那はいはねわのかねと驚くを見て、あたりまへさ、うんな馬鹿をいふ奴があるものかねと鼻で笑ふ様子旨いもの。伴藏が歸りて一杯酌をして呉れといふと、側を向きて私の酌ではね氣に入るまいから、笹屋へいつてね國さんに酌をしてお貰ひよとずつけりいひて、徳利をずつと側へ退くるところより、伴藏がいひまざらさんとするを、首ねつこをとつて押へつくるやうにじはり／＼やきたつる鹽梅、見て居ても冷汗が出るやうなり。伴藏が詫ぶるを耳にもかけず、お前はね國さんと一所にねなり、私は別になるから、さあ元手の金を出してね呉れと伴藏をつき倒す、これにて伴藏がぐつとなつて、これ式のことば當前だといふを聞き、どうも悪い事を申し升たと低く出で、又調子を變へ、大層もないことを云ひでないよとこれから昔の貧乏ぐらしのことをしやべり、追々高聲になりて舊惡を並べたて、伴藏が驚いて口を押ふるその手を拂つてずつと飛退き、あついでから傍へね寄りでないよといふあたり、恐ろしいほどの手際なり。伴藏が決してね國のところへ行かぬと誓言して、そんな下らねわことをいはなくつても好ぢやねわかと肩を押しとぐにやりとなり、お前の氣休めも當にならぬよと打解くる様子、さながら女の情合にて、旨いとも何とも申さうやうなし。この幕にてこの丈と菊五郎丈とが悋氣いさかひは、實に格外の氣乗にて、見て居ても氣が氣でないほどなり。いつぢや鳥藏千太が招魂社前の出合なども梅幸、薙升兩丈の仕打、あまりに眞に逼りて、冷々するほど見る人の心を動かし、長く目先にちらつくほどの出来なりしが、こん度のこの場もやはり同じ様にて、嫉妬に眼尻のさかつり色の蒼ざめしこの丈の様子

と、びく／＼する菊五郎丈の様子とが餘りの凄さに、芝居もこれ程まで進むものかと思ひて、唯恐入る外なし。相合傘の出にてしぶきのかゝるに大聲立て、途のぬかるを氣味悪がるなど、どこまでも女なり。伴藏に向を見よといはれ、何氣なく向を見るところを一太刀斬られ、お前は愈々お國を女房にする氣だねといふところよりなぶり殺しになるまで、目も當てられぬむごいことなり。翫太郎丈のよたんぼ久藏役。馬士の拵にて馬の脊をぶら下げての出よく箝り、お峰に馳走になりて伴藏の事を聞かれ、わし知んねわよとしらを切る工合、お峰が旦那はすつかり話したよといふを聞きて、本まのことかおと念を押して此迄の事を話し、お國の容貌を褒むる件に、お前さんよりは餘程といひかけて口ごもるところ、お峰が旦那がうんなことをいふものかねといふ故、あれまあ玉けたなあを呆るゝ様子、始終微醉の中にをかしまを交せて、田舎もの丸出しにやられ大受／＼。菊五郎丈の伴藏役。帷子にすきやの羽織、白足袋に雪駄で、扇をつかひ乍らの出、田舎に居ても江戸子がつて居るところ見わた申分なし。何心なくお峰に一杯酌をして呉れといふに、お峰がお國の事をいふ故きくりとし乍ら、お國とは誰の事だ、己は知らねわとしらを切る工合、旨いもの。色々ごまかさんとすれど、何もかも知つて居るゆゑ、どうもいらんなことを知つて居やあがらあとしよげる様子、例の嬉しがらする藝風ゆゑ、面白いことであつたり。とても云ひくろめられぬと思ひ、實はこれ／＼の色が出来たともいへねわからだまつて居たのだとさら／＼と言譯をして濟さんとすれど、中々きかず、元手をね呉れと突倒す故むつとして、一人や二人色があつたらどうしたんだ、これが世間にねわことぢやああるめわし、べたあることぢやあねわかといふ白わつと受けたり。若ねものぢやああるめわし、いゝ加減にしねわなときつく出るところも好し。お峰が昔の事をいひ出すゆゑ氣を揉んで、

こゝをどこだと思つて居る、茶屋小屋ぢやあねわかと制すれど聞かず、舊惡までも饒舌立つるに驚き、口に手を當つるとお峰がうの手を突放し、暑いからよつてお呉れでないといふと、手前よりか己の方がよつほど暑いやと團扇で風を入るところ、こゝも場當りがして見物が喜びたり。これから無暗にあやまり、兩手を突きて頭を疊にすりつけ、びよ／＼お辭儀をするところ、わつ／＼といふ場受であつたり。いろ／＼言譯をして、何も下らねわことをいはなくつても好いぢやあねわかと、お峰の肩をゆさぶるところ、口前の上手な工合も映りたり。お峰がうれではきつと思ひ切つたのといふと、こんなひどい目にあふことではもうこり／＼したと溜息をつくところも、をかしかつたり。お峰に話がある人が來やあしなないかといひて四邊に氣を附させ、その間にこいつはとても荒仕事をしなくつちやあならねわと了簡を極むる仕打、凄いほど好し。お峰と相合傘にて雪駄を帯に狭み羽織を懐に入れての出申分なく、お峰を呼びて向に人が居るやうだから見て呉れと向ふを指し、その間に四邊に目を配つて一太刀あびする工合、隙なし。むしやぶり附くを又一太刀切つて、一寸花道の附際まで行つて見ねをせらるゝところ、あまり芝居らしくなく、生世話にせられて嬉しかつたり。どしやぶりの本雨をつかひ、一寸傘をかせの見えも氣持よく、どしなぶり殺しをして、羽織を懐にねち込み傘を持ちて立去らんとし、襟にぶら下りたるお峰の指に氣がつき、いゝと氣味悪さうに離して投捨て、傘を開きて上手に入る幕切、御器用なことであつたり。六幕目關口屋座敷の場。幸手宿笹屋の場。關口屋見世先の場。こゝは本文第十八回りの儘にて、唯幕切に伴藏の捕物を引上げて見せたるまでなり。下女のお増にお峰の靈がつきて譚語をいふ件、志丈が計らず見舞に來てこれを聞き、こいつは妙だといふ可笑味、源次郎がゆすりにくるを伴藏があべこべにきめつくるなど、流石

は團朝丈の配劑ほどありて、うれしくの人柄見えて面白し。松助丈の志丈役。初手は診察に招かれしことゆゑ、物體ぶりてはいくといつて居り、伴藏と氣がついて、やあ伴藏さんと調子のかはる工合、これが君の御新宅か、いや恐れ入つたねえ、拙も兼々君のことは褒めて居たが、十指の指すところ、いや恐悦々々大恐悦だといふね太鼓醫者の性根、申様なき箱方なり。江戸から夜逃をして、此土地でまぐれあたり流行る話をする可笑味も受たり。ね峰の變死をきいて、やれ、これはどうも存外などの驚き方、ね増が志丈さん誠に暫くと云ふにあつと驚く様子、いづれも好し。ね増が伴藏の舊惡を片端より饒舌るに、伴藏が驚くを押へ、宜しいよ、僕だから心配し玉ふなと止めては、病人の方に来て、こいつは妙だ、よつほど妙だといつて聞く工合、團朝丈の話し振うつくりを寫され、いく度もくり返していはるゝのが、少しも五月蠅くなく唯無暗に面白いのは、實に妙だ、餘つ程妙だといふの外なし。伴藏が心配するを、ずん／＼下ぐれば直るといひて下させ、うの間てつきりさう覺りて、にこ／＼と乍ら、だが伴藏さん、打明けて晰してね呉れなど舊惡を打明さずなる工合、巧者なもの。伴藏がすつかり話をするに、よくいつた、あゝ感服、ね前は立派な惡黨だ、天下の惡黨だと調子に乗つて褒立て、伴藏に止められて口を押ふる工合、態とらしきところ毛ほどもなくて好し。幕切の出逢とは難有いねといふところも申分なし。笹屋にてね國に出逢ひ、伴藏に素性を話して、この場を外さうと相談するところに女中が来て、御病人でね迎が参りましたといふ。伴藏が改まる、志丈も改り、うゝ宜しい、直ぐいつて見てやりませうと調子を變ふるところも受たり。店先にて伴藏の源次郎をやりこめし迹に出で、旨かつたなあ、二三の水出し云々といふところは、實に唾の垂るやうによかつたと賞立つるところも、軽く出來、とど繩にかゝる幕切まで、

此役は當時類と眞似手なき箱り役にて、切幕の面白いのは、全くこの丈のね蔭といふべし。八百藏丈の源次郎役。五分月題の浪人姿映り好く、伴藏との掛合も始めの内は懇懇にして、千疋貫ひし金をつゞ返して、百兩貫ひたいと吹かかるところ、申分なし。伴藏が不義をしたらどうなさいませといふと、だまれと大聲に叱りつけて、刀を引附け嵩にかゝつて威す勢も、氣味よし。伴藏があのね國はどつから貰つた、あれは飯島の妾でね前が間男をして連れて來たらうといふと、どうしてそれをといふ驚き方、今一と息しつくりと呼吸が合ふやうにはゆかぬものかと思ひたり。誤り入りて廿五兩の金を貰ひ、そこ／＼に歸らうとして呼止められ、跡をみて行つて下さいといはれ、承知いたしましたといふてれ加減、役も悪いが、この丈の仕草もどうかね附合ひみて不評なり。秀調丈のね國役。こゝは茶屋女の心にて一倍若く作られ、いかにも男たらしと見ゆたり。志丈に逢ひて急に歸らねばならぬといひ、伴藏を傍に呼んで、あの坊さんは嘘つきだから、あれのいふことを本當にしてはいけませんよと吹込み、團扇を持つ手を握りて、きつと待つて居て下さいよとちやほやする工合、舌打する人もあるべし。菊之助丈の下女ね増役。病氣で臥し居たるが急に立上り、志丈さん暫くでしたねといふところから、貝殻骨の所から乳の下へかけてずぶ／＼と突かれたときの苦しきといふところ凄味ありて、久藏に負はれ乍ら後へ振り返り、首を延して伴藏を見込む仕打も凄くせられ、この役も大出來であつたり。翫太郎丈の久藏、菊三郎丈の手代文助、音五郎丈の探索、梅助丈の丁稚眞吉役。いづれも夫々の旨味ありて好し。菊五郎丈の伴藏役。志丈に出逢の昔話、どうしてうんな名醫にねなんなすつたといふところ、ね増が讒語にて舊惡を饒舌るを、嘘ばかりいつていやがると打消さうとして、志丈に留められ、四邊を氣遣ふところ、可笑味ありて面白し。志丈が、幸手堤の荒療

治すつかり話して聞しなさいといふにぎつくりして、烟管を落す仕草は毎度の事にて、うつのあらう筈なし。舊悪を話すところ、一寸歌舞伎らしくせられて嬉し。笹屋にてね國に逢ひてのぢやらつき、さしたるをなし。唯男前と調子の好過ぐるが申分なり。店前の場にて源次郎が案内するを断り、押しはいふに、さてはと感づく素振抜目なく、戸を開きて上手に通し、初手は極丁寧に會釋して、お世事をつかつて居る中、商人氣質見わたる旨いこと。千疋出してつゝ返され、百兩貫ひ度と云れ、へゝとと空笑をしていろく言譯し、かうやつて店を張つて居り升が、遊んだ金はないものでござい升と飽く迄下手に出る工合、一點の申分なし。手切を取りに來たといはれ、不義をしたらどうなさい升と落附いた調子でいひ、源次郎がたけり立つを押へて、静にしなせえ、名主のない村ぢやあねねよといひて、それより己の舊悪を並べ立て、二三の水出しやらずの最中といふ名代の長白あつて、お前もやつぱり凶場持、悪くするとお前の首がさきへ飛ぶかも知れねわから、よく氣を附けて物をいひなさいと烟管に煙草つめ乍らせゝら笑ふ鹽梅、梅幸丈十八番のいなせ調子、しかもあまり勿體をつけず、形も崩さずにさら／＼とせらるゝ工合、無類飛切の面白さ、天下一品なり。源次郎が詫るより、江戸つ子だ、話は早ねと廿五兩をやり、出で行くを呼留め、後をびめて行つて下さいといふまで、抜くるほど好し。志丈に尊像を見する件はさしたる事なく、うれより捕物になる立廻りは、毎度のこと故申分なし。こん度は三役ともいづれも大出來なれど、とりわけこの役は今迄の悪奴や盜賊の役々と一つにならぬやうその御工風ありし丈ありて、伴藏はかうかと思ふところを見せられ、大出來大當りのことであつたり。七幕目飯島墓所の場、碓氷峠敵討の場は本文廿回と廿一回下とを見せたるものなり。前段伴藏捕物は六幕目の切に引上げ、後段は中頃出し、が、思はしからぬより預

りになりたるよし、惜むべし。大切演劇十種の内

菊 慈 童

は、いまの河竹氏の作、杵屋六左衛門丈の節附、至極あつさりせしものにて、夏の出し物には適當せり。役々いづれも立派なる上に、女蝶の振は壽輔丈の振附程ありて手際の好いものであつたり。(明治廿五年七月)
吾妻座の一番目

本朝廿四孝

四冊は、勘助内の場、竹藪雪中の場、謙信館の場丈を出し、狐火の場は、餘程手際が好くなくてはね目まだるかるべしとの事にて、預りととなりしこと残念なり。中幕

是吾妻浮名讀賣

上下二冊は、油屋店と藏前人形振とにて、これ丈を糸八丈が助られたり。二番目

八幡祭禮宵宮賑

は、默阿彌が故人米升丈に符めて書卸され、近頃中村座にて三猿丈が出されたるものにて、夏向には適當の世話物なり。かく狂言の取合せよく、俳優一同車輪の勉強ゆゑ、この暑さにもめげず、開場間もなきに大入の景氣は、結構なる事と申すべし。
錦糸丈。長尾景勝役。金びかの上下、下駄掛といふ紋切形の拵と思ひの外、團洲張にて簑に藁靴といふ拵は案外であつたり。こんな事は團洲丈がせられても釣合の悪い工夫で受兼ねたに、こゝらの芝居で眞似らるゝは御損と申すもの。やはりかやうなところは大時代にせらるゝが宜しかるべし。

ねん履物これに候ふの件より老母との應對、花道の引込まで、よく此役の氣組を吞込んでせられ、申分なかりき。松屋源右衛門役。毎度お勤の半道敵なれば悪からう筈なく、軽い仕草の中に大分可笑味があつたり。縮屋新助役。流石この丈の出し物ほどありて、滅相な出来なり。着附りの外總て三猿丈を張つて居らるゝやうに見ゆ、三好屋くゝと聲が掛りたり。序幕手込に逢ふところはさしたることなし。厭がるを無理に披露に突出され、據なく三代吉の色男はこの新助でござりますといふところ、面目ないといふ仕打見ゆてよし。二代吉が態としなだれかゝるに、初めてづつとして見とるゝところ、目立たぬやうにせられたるは感心なり。一同には悪口せられ、源右衛門には額を割られ、皆皆が氣遣ふを、なに色男といふものはかうしたものでムリ升といふところ、受けたり。三代吉が新三郎と上手の家體に這入ると、その跡を見送り氣を取られて居るところ、下男に焦立てられ乍ら幾度も上手を覗きにゆく仕草も得心したり。この幕も總體によく出来たれど、どうも女役者の事ゆゑどこか愛敬があつて氣の利くところが申分なり。三猿丈などはもう一倍質樸にせられたかと思ふやうなり。船の場にて三代吉に心中を打明くるところは、さしたることなし。縁切の場は、縮屋仲間と連立ち來て、つんけんする三代吉の機嫌を取るところも好く、金はいらぬ、先度の約束は嘘だといはれ、ぐつと焦立つ工合より皆々に悪口せられたり、打擲せられたりして門口へ突出さるゝまで、氣組充分にて、面白いことであつたり。足袋はだしにて羽織をひっかけ、よろゝとし乍ら花道の引込、凄いほど好くせられたり。縮屋の場にて六兵衛に外ながら暇乞をするところ、村政を買ひて計らず刀屋を切り、氣が附きてひよろゝとなし、門口の柱にとんと當るところにて、當日は打出しとなりたるが、すべて色の蒼ざめ氣の逆つりし工合など、芝居とは思はれぬ程にて、かくては

殺しの場の氣乗も、定めて充分なるべしと思はれたり。二役齋の者白瀧佐吉役。大いなせの着附にて、源左衛門との立入さつぱりと出来、とゞ肌脱になりて刺繍を出し、大島の子分との立廻り、女優とは見ぬほどに氣味よかりき。

鶴枝丈。横藏實は勘助役。押出しは立派なれど、横藏の間は妙に白がもがついて、今一と息應へ兼ねたり。しかし勘助となりてからの物語りは、大手にこなされて受けたり。山家屋清兵衛役は人品も籍り、仕打もさらさらとせられて好し。穂積新三郎役。これも男前はよけれど、やはりぎざぎざせらるゝのが目につきてどうも感心仕らず。どうか春木座の駒之助じみたる癖は、この後つゝしまれたきものなり。

藤村吉次丈。勝頼役。顔立の好き人ゆゑ映りはよけれど、體のこなしが少し棒立といふ氣味に見ゆたり。今少ししつとりとせられなば、一倍見上げたるならんと存ず。藝者糸糸はさしたる事なし。藝者三代吉役。男鬚、手古舞の拵にて花やかなる出なれば、見物をづつとさする程の貫け役なれど、總體に寂しい藝風にて、調子も重つくろしい方ゆゑ、一向に榮えざりき。新三郎との色合、新助とのもたつき、いづれも氣が重いやうに見ゆしが、縁切になりて新介に愛想づかしをいふところは、塞いで居る様子籍りてよく出来たり。

坂東吉次丈。慈悲藏女房れ種役。唐織が門口に捨置きしわが子をきつかひて立寄ると、上手の兄の子が泣出し、上手に來ると下手のわが子が泣出すに氣を揉みて、行きつ戻りつ身をもたふる仕打、ちよぼに乗りて手一杯にせられ、よう出来たり。後の出の時、勘助の白の間は外目ばかりして居られしが、かやうな事は至つて見苦しきものなり。腰元濡衣役。姫山姥の歌の時の様を面影ありて、

少し映りが悪く、うれに色氣も不足のやうに思ひたり。油屋後家ね峰役。これは質店の女主と受取れたり。尾花屋女房ね露役。新助を無理に大島の座敷に連れ行き、三代吉の色男なりといはする魂膽、新三郎が惡體いふをなだむるところ、新助が三代吉に愛想づかしをいはれ大勢の打擲にあふをかばふ仕打など、いづれも申分なく、これが一の箝り役であつたり。

峰升丈。慈悲藏實は直江山城守役。母に孝行せんとしては叱られ、兄を介抱せんとしては當たらる辛抱役、しつとりとよう出来たり。女房を戒めて鍬を擔ぎいづるあたりは、大分こつてりなりしが、雪の立はあつさり出来、直江に抜けてからも申分なし。八重垣姫役。品格は充分とはゆかねど、着附りの外よく箝りて美しく、それに色氣ありて、情合うつりたり。振は糸八丈の指金か、總て成田屋張と見ゆ、濡衣の手を取りて拜むところ、珠敷を柱にからむところ、軸をちよほに合せて巻くところなど、いづれもしなやかに出来、ねみごにてあつたり。切に勝頼を討手の人數を聞き、ての嘆も應へ、口跡の惡きは是非なしとして、面影より思入まで、糸八丈とよく似たるところありて、まことに癖のなき藝風なり。この度は狐火の場を出されざりしが、體のこなしなどから考へてもよいう出来るに相違あるまじと思はる。久松役。小がらの人ゆゑよく箝り、申分の箇所もなかりき。

鶴吉丈。越路役。景勝とのつめ開き、勘助に命を所望と逼るところ、いづれも巧者に出来たり。大鳥源左衛門役は上總の親分らしく、念佛六兵衛役は親切に見ゆて、うれしく好し。

紫女八丈。原小文次役。身輕にこなされたり。下女ねとり役。善六との泣別は此人で持つて居たり。仲居ねすゑ役。これも二階廻しそつくりのがらくしたるところを見せられ、口寄の可笑味など、不思議な程に旨し。この丈は一芝居毎にあく抜けて來られたり。

小鶴丈。唐織役。白須賀六郎役。娘ね染役。いづれも御苦勞といふより外なし。荷持作助役はうぶの田舎者をうつされ、主思ひの工合などいかにも箝りよく、大受到受けたり。こん度は此丈珍らしいもので當られたり。

糸七丈。謙信役。相應にこなされたり。縮屋は憎體にできたり。

糸喜丈。道具屋、船頭長次、善六の代り役、いづれも申分なし。

糸八丈。番頭善六役。思ひ切つて可笑氣に作られ、仕打も大茶利をやられて見物の腹の皮をよらせられしが、どうも自然に可笑味の出るでなく、少しくすぐりの方に近いと思はれ、上評とはまわりかねたり。無暗に目をきよろつかせらるゝも態とらしく、調子も今一息軽くゆかねものにや。流石にこの役は今迄も大立者が勤められたるものゆゑ、どうもわれ等には得心が参りかねたり。ね染の人形振は本役ほどありて、善六を勤めし人と同人とは思はれぬほどに美しく、振事はこの前清姫の人形振を勤められし折の通り、彼此申す迄もなく、唯恐入つて拜見いたしたるのみ。(明治廿五年八月七日)

春木座一番目

今文覺助命刺繡

五幕は明治十六年九月市村座にて梅幸丈に箝めて書卸せるものなり。これは同座にて其前狂言に三升丈が橋供養の文覺を勤め、瀧の場にて不動明王との早替り大當りなりしより、うれを世話に直して不動の文治が大山の瀧にかゝることを脚色みて出したるものなれど、少しね茶番じみたるころありて當時は不評の方なりき。この度は家橋丈が兄御を張つて出されられど、どうも筋立がせはし

なく出来をるためか。此邊の見物の腹には這入り兼ねたれど、兎に角瀧の場の仕掛が利きて評好かりしこと御仕合せなり。二番目

伊勢音頭戀寐及

二幕は坂地にてはよく出る狂言のやうなれば、同座の人氣役者と聞わし芝鶴丈が出したるものと覺し。近頃新富座にて梅幸丈が出されたる變則の十人切音頭新唄などと違ひ、随分阿房らしき件多けれど、こゝらの見物にはかゝるところが大受なるべし。われ等は後れて行き、一番目二幕を見落したれば、その後につきて聊か品評を試むべし。

芝鶴丈。萩原良作役。病中の浪人風、相應にこなされたり。春高清水太役。この前は家橋丈にて評好かりしが、別にこれぞといふ仕草はなく、唯態度で得心さする役前故、坂地仕込のこの丈には無理なり。されば江戸の駕籠昇らしきところの露なきは致し方なけれど、親分が豊になつたといふところに来ては優々閑々として御坐るは、さてく頼もしけなき一子分かな。瀧の場は勇ましき趣向にて、唯男前を見する丈なれば、茲はまだしも我慢ができたなり。福岡貢役。代々講の場ねこんを叔母のつもりにしてのじやらつき、こゝもやたらに厚く塗つてゐる丈にどうかかうか見られたれど、幕切正太夫詮議のところは、妙に調子を張つて威張り散らされ、正太夫ならぬものもうんざりいたしたり。油屋の場。花道よりの出は例の通肩を振り立てゝの歩き附ゆゑ、川上派の和事師はかゝる人物なるべしと思はれたり。縁切の場は凄しいものにて、ねこんの愛想づかし、敵役の惡體をきく度々顔で電光をさせ、體をばやたらにしやつちこぼらせてござる様子、紙人形に空気を吹込むだとして、亡者に猫がとりついたとして、よもやこれ程ではあるまいと、ね骨折の程が察せられたり。羽織々々と呼

立てゝの引込より二度目に取つて返すあたりは、少しふれて居るやうに見わたるが、是で好いのか悪いのかは預りと致し置べし。十人切になりて車輪などころ丈はよけれど、無暗に刀を上段に振冠ぶるなどは見た目悪し。かゝるところは餘程形を注意して貰ひたき者なり。例の萬呼べくの邊、ねこんの手紙を読むあたりにつきては、寸鐵の紫生が故震仙丈の型を引きて難じたるが、われはかゝる贅澤なる注文をせず、唯吾妻座に往きて錦糸丈の新助でも見て來たらよかつたらうに思ひしのみ。富十郎丈。萩原妻ね柳役。さしたる事なし。伯母ね峰役。かやうな更け役はいつも乍ら手に入つたもの。殊更貫け役とて見物が嬉しがたり。

右田作丈。後室慶壽院役。加役にしてはよく出来たり。正直正太夫役。この丈は何役でも引受けらるれど、いつも氣拔がして困る代り、かやうな役になると阿房らしき工合よく箱りて真から可笑く、オチリヤ草紙の吃り以來の出来なり。お鹿役はあまり拵へ過ぎて、評判程に受けず。仕草も少し悪ふざけの方にて、この位なら駒雀丈にて澤山なり。

松之助丈。坪内妹小澤役。書卸しの時も勤められて評よかりしが、こん度も上品な中に色氣を含みて、いかにもね旗本のね嬢様と見わたる好く出来たり。詮議の場にて文治の事を問はれて、ねと驚き、直に言譯をする工合、問ひつめられて、馴染の件を打明け、申譯なきゆゑ自害せんとする様子、武家育の娘氣見わたる得心したり。文治内に驅込むところ、華美な着附の好みよく、豊になりし文治を相手の口説も受たり。油屋ねこん役。素人作りにて貢に逢ひに來る場。ぞつとする程美しき中に遊女の仇めきたるところ見わたる、いへぬく。貢の叔母のつもりになりてのじやらつきより彦太夫に逢ひての可笑味、いつもの重つくるしきところなくて受けたり。縁切の場は腹に涙をもちて、表

面に強くいひ放す工合、この丈の身上に箝りて、いかにも好うこなされたり。貢が往きかゝるを呼止めて、うれではこれ切りでムんずえといひ切り、思はず継りし團扇の柄を折るあたり、身の震ふ程に應へたり。岩次を賺して折紙を取るといふ手段も巧者に出来、貢が引返して来しとき上手の障子をあげて折紙を投出し、四邊に氣を配るところも、よい姿であつたり。廊下の場にて寝巻にしごきの拵にて走り出で、貢を留めていたはるところも情合深くて好し。こん度のこの役は初中後共申分なき大出来にて、先づ當時のねこんなるべしと思はれたり。

勘五郎丈。中間熊藏役。書御しに松助丈が勤めて當てられしものにて、此丈も體に箝つた役なれば抜くる程よい筈なるが、さてうれ程でもなかりき。文治内へいたぶりに来たところ、前夜盗みをしたる尻が割れながらやはりしらを切つて居る邊、一と通りといふ迄なり。坪内郎にて、その金を盗むだ奴はどこに居やがるかと空つとぼけたるところ、見物は受たれど、この人の手柄は見えず。瀧の場。瀧壺に突込まれ、頭から水びたしにあふところもうれ程でなく、總體に役目だから勤めて居るといふ丈の様に見え、氣込に不足なところがあるためか、見る方ではずみが来ず。こんな事ではこの丈の藝も、大方此邊がとまりなるべし。萬野役は流石に當人も氣が乗つたと見ゆ中々美しく作られ、着附なども幾度か着替へて、仕草も相應にこなされたれど、生嚙の京音などを遣つて器用がらるため、どうも總體が安つぽく見たり。今少し仲居の見識を見せ、落附いてこなされたら、一倍憎味がつく工合、お鹿さんのね金は私が受取つて廊下でね前に渡したではないかえと貢にいひかけする様子などは、猪尾の本性顯はれて受けたり。

駒之助丈。坪内慶十郎役。この前故高賀丈が勤められて評よかりしが、この丈のは相變らず散々なり。先づ突袖をして出て来らるゝ様子醜く、例の文治を手討にするといひて立寄り、不動の刺繍を見てびつくりし、抜いた刀を納むるところは當狂言の山なるに、この丈は刀を上段に振かぶりてたちかゝり、やゝやと仰山に後へ下り、うの刀を一振ふつて鞘に納むる間抜けさ加減、素人でもかうは出来まじと思はる。うちを殺すどころか禮拜をいたさにやらぬといふくだけ方も、首と體とを細く振り立て、堪つたものでなし。不義せし妹の書置を讀むところは、不便なといふ思入だけで澤山なのに、れい／＼と鼻をつまらせ、涙でしまひまで讀めぬほどに泣くは興さめたり。この役は三千石のお旗本の殿様ぢやといふことをどこかへ忘れて来られたりと覺し。こんがら幸次役。芝鶴丈同様にて、評にかゝらず。ね負に文次内に驅付けて来らるゝところ、長い半纏をざろりと着てござるは、一層優長に見えて恐入つたり。猿田彦太夫役。敗鼓の皮も何とやらはこの丈がこの役なり。正太夫に勤められ、下坂の刀を岩次に渡して、出世すればね馬に乗つてひん／＼とどう／＼とできる。と任方話をする可笑味、おこんに逢ひて大層若い叔母御ぢやとの會釋、いかにも眞面目にて、盗人の詮議となりて正太夫とつがひし詞をすつかり忘れ、正太夫が氣を揉むにかまはぬ濟し加減、正太夫が講中にさいなまるゝをかばひて慌つる工合、始終とぼけ切つた親父形うつくりに寫され、右田作丈と御兩人にてどさくさする騒ぎ面白く、近頃の上出来であつたり。

宗三郎丈。用人倉澤役。あまりひよこつかぬ丈はいつもよりよし。胴脈の金兵衛役。まづ出来たる方なり。

芝雀丈。文治妹ね瀧役。書御しに菊之助丈に箝めて啞に作りし役。この丈始終氣を入れてせられ、

母と兄との身の上を氣遣ふあたりもぼいやりとしてよう出来たり。うろく／＼人の目について参りたれば、この圖を抜かさず勸み給へ。

竹松丈。萩原林之助役。書卸しには親御に依りて評好かりしが、この丈のは唯ぬつべりとした色男にて、商家の手代とは受取り悪く、仕草も今一と息はがゆいやうな心地したり。

雁昇丈。清太妻を綱役。此度初のね目見えなれど、見所のなき役ゆゑに氣の毒なり。芝童丈。ねきし役。いくらか氣を入れてせられて好し。藤藏丈。寄席の與吉役。徹り悪し。萬次郎役。今少し志つとりするやう工夫ありたし。駒雀丈。娘榊、岩次二役。いつもの通り騒々し。梅樹丈。北六役。出来の方なり。

家橋丈。不動文治役。顔の拵、着附の好み、仕打迄、總て兄御寫しにて人物よく符り、申分なし。内の場にて熊藏がゆすり込んでくるをこむるところ、ね綱が小澤の文を届けしをうれ處ではないからと投歸すあたり、いづれも調子が立ぬ上(瀧の場で喉をつぶしたりと聞きたり)焦込んで御座るゆゑ、少し安つぽく見れたり。手紙を種に坪内方へ金の無心に往かんと心附くところより、留むる妹を突放し、帯をば乍ら一散に驅込むあたりの氣組は隙なし。坪内の庭先より中間を突退け乍ら出で來り、倉澤と懸合ひて椽先にあぐらをかき、百兩ばかりのはした金出して呉れたつていふぢやあございませんかといふところ、些と許よい心持であつたり。坪内が手討にするといふに覺悟をきはめ、さあすつぱりとやつて下さいと袒になりて、兩腕を組み合せ悪びれぬこなし、よかつた。すべてかやうな形で見するところは、兄御の儘の面影ありて大出來。命助かり金を貰ひて喜ぶ仕打は、さしたることなし。家に歸れば最早跡の祭にて、林之助と良作夫婦とは行方が知れず、母は死

んで仕舞ふといふ。小澤は邸を逃げて來て置いて呉れねば自害するといふ騒にて、一時に逆上せ聲になるといふ筋、梅幸丈の體に切つてはめたせはしない仕組方ゆゑ、唯さへ焦込むでござるこの丈では、一層焦込んで來て口がもたらなくなり、無暗に場が騒々しい丈で、狂言の筋が見物に飲み込めぬ程なるは残念な事なり。しかし聲になつてびつくりし、何にも聞ぬといふ仕草は、騒がしき中に可笑味ありて、流石に旨し。大山の瀧の場。岩組其外より本水の瀧はこん度の呼物にて、中々見事に出來たり。假髪より着附の好み一寸文覺と見する趣向よく摸されたり。願籠をして瀧にかゝらんとしてしぶきをよくる様子より瀧にかゝる仕打、熊藏を捕へて水びたしにする件、利益にて耳が聞ゆるを喜び、清太、幸次と三人並びて不動二童子の見聞をする幕切まで、この場は大出來大當のことであつたり。料理人喜助役。着附の好みすつきりとしてよく、する事もきまるどころがきまつて、まことに心持よく、大役者になられた貫目たしかに見て、大請。すべてこの度の二番目は松之助丈のねこんと此丈の喜助とで持つて居つたり。いよこちの立花や。 (明治二十五年八月二十三日)

歌舞伎座夜芝居の一番目

仕立卸薩摩上布

は新七、其水、彦作諸氏の合作のよし承りしが、どうもやんやとはまわりかねたり。もと八右衛門の菊野殺しは名代の五大力戀織といふ狂言ありて、當地にもてはやされしものゆゑ、近頃家升丈が春木座にて出したる袖浦戀仇浪、又は福圓丈が三崎座にて出したる置土産今織上布など、いづれも實録に近く作意を構へたるものなれど、あまりがつと仕らず。さるを今度は梅幸丈が浪華土産なり

その觸込にて正真正銘の實録を其まゝで見せられたれど、根があつさりすぎた事柄ゆゑ、貸本屋に借りたかき本を讀むほどの面白味もなし。作者もそこらを考へてか、うろ覺の國訛をつかひて、ねい共とねまへんかどで立て切つてお茶を濁さうとせられたれど、見物も御所模様萩葉の折に手ごりをしたれば、さう旨くは納得せず。町中一般の不評判はまことにね氣の毒な次第なり。全體實録だの實説だのといふことは辻講釋が天狗をいふときばかりと思ひしに、この頃大家先生が芝居へも實録を擔ぎ込まうといたされ、役者の中にも實録に限るやうに思ふ人達のあつたのが、かう間違つて來た始なるべし。兎に角實録の仕立卸薩摩上布が實録を種にして芝居に拵へ上げた五大力ほどの面白味なきはうのはずの事にて、狂言作者諸氏も自身の頭から趣向を出した譯でもなく、唯西澤一鳳の隨筆から取次いだけのことなれば、諸氏を責むるにも及ばぬにや。二番目

與話情浮名横櫛

は如臯翁が一世の當狂言ほどありて大店の息子株を切られ與三といふ惡黨にして見するなどの手際は、實に凄いものといふの外なし。しかし前幕の見染場を出さねば、翁の意匠は半ば殺されたやうなものなれど、源氏店だけにつきて見ても、生粹の江戸狂言はかうしたものと、なんとなくぞくぞくするは、流石五瓶、南北につきての作者と申すべし。市藏丈の大和屋十兵衛役。善次郎の死を留むるところさしたることなけれど、拵りの外相應し、どことなく輕薄なさまも見ね、いつも乍ら胸のすくやうな藝風なり。女房が度々善次郎を見舞にくるより氣を廻しての夫婦喧嘩も可笑く、うれより善次郎に向ひて、あんを奴でございませが、彼でも本は好合つた中でございませから、どうか箸をとらないやうにして下さいと言惡さうにやつといひて手拭で汗を拭くところ、兎の毛でつ

いた程も當込つ氣なくやつて居らるゝは有難し。茅田に金の言譯をするところは淡泊なれど、菊野の在家を聞きに來たを、空つとほけて湊を呼出し、うればあなたのね目違ひだといふ憎つ振より、家捜しもしなれば疑も晴さないといふ、うりやあなな無理でございませとすつけりいひ、それより段々詞遣がうんざいになつて來る王合、不思議く。口ではね爲ごかしを並べて、實は出て往けがしにする様子、在來の客を突出す筋と往方を違へたる趣向なるを、松助丈と御兩人腹に入れてのこなし方、無類の面白さであつたり。今度の筋は菊野の愛想づかしがなく、正本の様に國侍が出て嘲弄する件もくつたれば、唯この場で二人の惡口するだけが、八右衛門に殺意を起さする主なる動因ゆゑ、一倍腕前が分りたり。殺しの場は天秤をもちてのたてより、大分糊紅をつかひてのもがき死、御苦勞といふべし。米津宅之進役。假髮の外の注意届き、老實の侍と受取れたり。八右衛門に腕立せぬなどの意見、後に切腹を留めて短慮を戒め、番頭を連れての引込みまで、朋輩を思ふ心意氣見にて好し。其上調子の爲もあらんが、二役共訛をつかはれぬは、御注意なことを賞めて置くべし。番頭藤八役。二番目は此丈の此役でめめらるゝかと思ひしが、さてうれ程でもなし。まづ假髮の王合より顔の拵など申分なく、私が出てさら／＼の可笑味も軽く、座敷に通つて天井や庭を賞立つるところも受よく、下女に祝儀を無理やりにやりてお富さんにもれると私が耻づかしといふあたり、巧者にせられたり。次第にお富の側に膝を摺寄せ、白粉をつけらるゝ間拔工合、安の前へあつかひには入りて當百を出し、ね歸り／＼と叱り付けて、とごあべこべにこめらるゝしよげ加減、襦袢一つになり與三に縛られてもがくあたり、いづれも好し。さればどこに一つ申分なく、上出來といひて差支なれど、總體に最一と息可笑味があつたらばと贅がいひたくなるだけなり。書卸しの現十郎丈は肥り肉にて京談が上手

ゆゑ、やたらに可笑かつたよしなるが、この丈の可笑味足らぬは、役者が上つた爲か、藝風がさつぱりしてをる爲か。このやうな役は役者の好いばかりでもゆかぬものと見たり。松助丈の錢屋善兵衛役。前狂言に當てられてより顔を出されるとわつといふ人氣は結構なことなり。初めは大府に菊野を取持つといふ丈のことなれど、さすがに舞臺がしまつて来るは不思議なものなり。後に善次郎を勘當するところもさら／＼とせられて申分なし。大和屋女房に留役。善次郎を度々見舞に來るところから夫十兵衛に叱られ乍ら、涙片手に言ひ返す惡體口、さながらの人の見るやうにて旨いものなり。顔の作りから拵萬端、色深き家と慥に受取りたり。座敷の場。茅田が酒の相手をして調子を合せ、和座を持つて居る中に、なんとなく客をなめて居るやうな様子見せて大受々々。番助が迎へに來たをしほに、追立つるやうにして茅田を歸すあたりも申分なし。茅田が菊野の在家を聞きにくるを言紛らず空々しき工合より、こりや大方いつづやのね金に心が殘るのであらうと押付けていひ、全體あんだのやうな野暮な人が藝子を色にしやうなどといふのは間違つて居ると遠慮なくいひて、これは茅田さん大きに失禮をいひましたねとあやまる工合、無類の旨味にて唾の垂るほどよかつたり。茅田が出て往くを呼止めて、忘れて往きし扇子を暖簾の間から入口に投出し、すまし切つてようれ出といふ憎つ振、これなら茅田が切る氣になるは尤だと思ふほど好し。惣じてこのね留役は伊勢音頭の萬野ほど憎く書いてなきゆゑ、筋ではどうも茅田が殺し悪からうと思ひしに、芝居で見ても成程と得心するは全く片市丈と此丈との仕打が上手なためならんや或老人の語られしは尤にて、われらも近頃春木座にて勘五郎丈の萬野にむかついたる折節、兩人のね蔭にて留飲の下る心地いたしたり。殺しの場にて八右衛門を見てわつと驚きて腰を抜かず様子より一太刀あびせられてその儘に息絶ゆ

るまで、一寸新しくこなされて受けたり。蝙蝠安役は衰賤の沙汰まち／＼にて、この品定には名にねふ諸劇通も頭痛を病まれしやうに聞きしが、われらには當二番目中の箝り役にて、先づ當時の安であらうと思はれたり。勿論二日目あたりより風を引き、大分喉を痛められたりを見、後には餘程聞苦しき白などありしは、いかにもね氣の毒なり。最初揚幕より頭に巻手拭をして、女着物の裾を端折たる拵にて與三と連れ立ちての出、この前の平左衛門などと違ひ何處までも下司ばつたる様子、この丈の體に箝りてよし。花道に立留り一寸與三に耳打をして舞臺に來り、手拭を取り裾を下し門の格子を開けて、いやにへい／＼いひて上り込み、友達を湯治にやる草鞋錢を下さいとの無心をいひ、烟草入に烟草のなきに氣がつき、ね先烟草を呑むづ／＼しき加減、旨いこと／＼。ね富が無心をいはるゝ筋がないといふを聞き、あなた方は結構なね身分だねといくつもねねを重ねて、ひ／＼と笑ふ工合、枯れた仕打の中にいへぬ旨味ありて、面白いことであつたり。藤八のあつかひに這入るを叱り飛ばすところ、ね富が一分呉れても與三が歸らぬといふに、手前は看板だのに、何が氣に入らねねので歸られねねのだとむきになるところ、うの一分も返してしまへといふにし／＼一分を戻すところ、始終りの人の腹になつて居らるゝ故、譯もなく面白し。成程一分ちやあ歸られねねといふところも軽く、多左衛門に逢ひてのしよげ加減より三十兩貰つた與三が歸らぬを見てもちもちして居り、堪へ兼ねて中に入り、此が手切とか足切とかいふのではなし、今日貰つて歸つても又明日でも出て來られるではないか、といひて氣が付きいひ紛するあたりの飽までこすいとりまはし、抜けるほどよし。花道に往きかけ、與三が引返すを呼び止め、忘れ物があるといひて金をねだり、五兩貰ひて、もうちつとくんねねといひ、手前一分でも歸るところちやねえかといはれ、澁々承知し、捨白ありて

這入まであつさりなれど氣を入れてせられて好し。總じて書卸しの秀鶴丈などは、相手が和事師の八代目ゆゑ今一倍相手をくつて落付があり、ゆすり方も餘程憎つ振にこなされたよしなるが、この丈は相手がゆすり専賣の師匠だけ、與二を看板に連れて來たほどの悪黨にしては、いくら前々より安つぽく思はるゝなるべし。しかし此丈は藝を見て呉れと振延す達の人と違ひ、始終腹ではうのになり濟し、することは扣目にして居らるゝゆゑ、見て居る中に噛めるほど味の出て來るところあるは、或は故人の及ばぬ長所なるべし。菊之助丈の錢屋善次郎役。この前の萩原新三郎と同じ向の役前ゆゑ、手覺のこゝろで相應にこなされたり。菊野と口説をしてつひと側を向くあたり、一寸味をやられたり。十兵衛に疑はれての當惑、茅田に悪口せしを氣にかくる思入など、身上だけにはこなされたり。八百藏丈の番助役。こん度は丈の注文にて老僕に拵へしが、この役も今織上布ほどの役でもないゆゑ、お氣の毒な心地せり。茅田が泥酔しをるを無理に引立て歸るうつけなき、忠義一圖の小者と受取れたり。主人の放埒を意見して追出され、お宅之進を伴ひ來りて切腹を留め、時計屋に供をして往くまで、この丈には易すぎた役前ゆゑ申分なし。大番頭多左衛門役。この役は赤間源左衛門の穴をいく役にて、書卸しには二役とも關三の當藝なりと聞きしが、丈は拵も調子もきつぱりして居らるゝゆゑ、斯様な色氣のない役には至極拵り好く、お富が與三郎を兄といふを見て、よい兄を持つて仕合せぢやといふあたり、中々手丈夫にこなされたり。幸十郎丈の浦田役。この前の勇齋などは違へど、今少し冴わかねたり。翫太郎丈の中村役。菊四郎丈の石崎役。いづれも一通にて、お腕前の見ぬは残念。菊三郎丈の湊役。菊野と見違へられたりといひくろめ、私も菊野はんに見違へられたら何か買ひまほか、姉はん大きに、茅田はんようおいでといひてつひと這入るあたり、當込でもある

か、一寸憎くできたり。秀世丈の花扇役。どことなく甘つたるい様子、上方風に見て映りよし。あやめ丈の下女ねよし役。お富と相合傘の出より、藤八に心附を貰ひて押返すあたり、妾宅向の召使と見わけてよし。梅助丈の幫間たこ八役。一寸貰かる役なれど、きんらいの踊など、重つくるしくて、受けかねたり。音五郎丈の平馬役。こんな役はいつも乍ら映りよし。佳調丈の女房ねせん役。評よし。市右衛門丈のうごんや役。呼聲など出來たり。音藏丈の櫻風呂下男役。男前よし。斧藏丈の下女役。茅田に切られて庭にうつむけに伏す工合新し。音次郎丈の手代小助役。さしたることなし。龜藏丈のねちよぼ役。小唄を唄ひ乍ら花道をかけ込むところ、八右衛門に小鬘を切られて逃廻るあたり、一寸れませに出來たり。丑之助丈の丁稚役。中々はしこさうに出來てよし。榮三郎丈の菊野役。作りたつて出られたところは、大府ならぬ人も一様に美しいものぢやと見惚るとは御仕合せなこゝろなり。しかし善次郎との口説など、今一と息巧者にやつて貰ひたし。次に自害せんとして止めらるゝところ、裏家にて善次郎に遇ふところさしたることなけれど、美しいので持つて居たり。茅田に思ひ切つて呉れと頼むところ、在來の愛想づかしと違ひ、唯虫がすかぬといふ丈の心意氣、ようこなされたり。今夜はゆつくり樂むがよいといはれて、にこりとする工合もよし。茅田に見られて驅込んで來るところもあざやかに、殺しの場の形もよくできたり。されば丈の身上にしてはよき出來の方なれど、惣體のこなしが遊女よりも處女に近いと、上方詞が誰よりも一番うはついで耳立つとが申分であつたり。横櫛のお富役。名にしれふ書卸しの梅幸丈以來、諸名優が仕残したる大役。いかゞと思ひしに、これも御容貌のよいのと脊の高いのが拵りて、よい年増振であつたり。相合傘の出より藤八を伴ひ這入るまではさしたることなし。身仕舞をし乍ら藤八をあしらつて

居るところ、故人の一寸筒持せのやうな腹が見て餘程面白かつたよしなるが、丈のは一と通といふまでなり。安がねだりに来てびくともせず。と一分出してやるまで、門閤だけにさして見劣りのせぬは不思議。與三郎にさういふ前はと尋ね、顔を見てえとびつくりする形、疑ふも尤と言譯をする邊、流石に荷が勝ちすぎたり。多左衛門に面目ないとの思入、與三郎に亭主といふのは前前の事だあねといふ色氣は相應に出来たり。しかしこの役も本筋にては長脇差の妾にて、與三郎と色になり、後には安をも與三郎をも殺すほどの女にて、與三郎を可愛がるも人形くひといふやうな譯なれば、是非凄味なところも、あばずれたところもなければならず。さればこの丈にはつまり無理な役廻りなれば、大した見劣りなくやつて退けらるれば先づれ手柄の方なるべし。菊五郎丈の茅田八右衛門役。下座敷の場。兀びんたに淺黒き顔の作。肩臂を怒らせ、薩音にて武張つたことをいつて居らるゝところ、御器用には相違なけれど、何だかもつて来ておつたやうなのは致し方なし。菊野の自害をとめて白刃をもぎとるあたりの氣組は受たり。菊野が様子に目をつけて扇をつかふ手が段々にのろくなり下へさがる工合、後影を見送り乍ら行きて下手の障子を細目にあげ、矢張見詰めたまゝ後へ下りて烟草盆にあたりて倒れ、うのまゝべたべたと座り、一心に上手を見込みての幕切、烟管を落すなどいふ手、輕な見染とちがひ、殺す程の惚方ゆゑと、かく追念入にして見せらるゝは、梅幸丈餘程の御工夫と存すれば、彼此申すところなし。兎に角正本通り幕切に番助を出されぬは御注意にてよし。酒宴の場にては妙に通をいつて皆々に遊ばれ、菊野を見て悪じつゝこくちやほやする工合、舌味に舌味に心掛けてせらるゝのちらんが、どうも中々の通り者に見ゆるは妙な譯なり。菊野が病氣といふに、晝來やうといふ可笑味受好く、きつぱり断られての思入、一寸應へた

り。十兵衛夫婦に金の行先を尋ねるところ、さしたることなく、番助に無理やり引立てられて、よろ／＼しながら花道の引込、生酔のこなしはこの丈にしてはお茶の子なれど、ほんのりしたる男前滅法よく、これを嫌ふ菊野の心意氣が解らぬやうに思はるゝが申分なり。宅の場は悔悟の様見にて申分なしといふまでなり。菊野の後をつけて黒の薄羽織に袴を小高く穿き、紺足袋草履にて早足の出、こゝが一番八右衛門らしく思はれたり。お留に菊野の事を尋ねしにいひくろむるを飽までいひ張るところより、十兵衛が湊を連れ來りて分疏しても納得せず、と二人が惡體をつくを口惜しとの思入、無念を堪へて立歸るまで、こゝは片市松助兩丈に充分藝をさせてこの丈は受身だけのことなれど、あまりぎく／＼とこせつかずに、始終抜目なくこなさるゝはよし。唯これでおい共がなかつたらばと思ふだけなり。門口へ早足に出るを呼止められてふり向くところに、お留が扇子を投出すを見て己れと思込み、お留がようおいでといひてつひと這入るに、流石に切込みかねて氣組脱け、よろ／＼と二足ばかり下る呼吸、妙なり。こんなところでこれ程の味を見するは、流石日本に一二といはるゝ大立者かな。とど落ちたる扇子をひろひ上げ、下座の唄にわくら乍ら思案をして花道の中程までゆきかけ、唄きると屹となつて振り返り、覺て居れといひ捨て早足に花道を驅込まると、一番目中での面白いところであつたり。塀外の場。花道まで出て屹となりて塀際來り、天水桶の後にかくれて菊野の使が高聲に話して往くをやり過し、桶の後に立上り、羽織の紐を解き、うの儘兩手にて襟を持ちて肩よりすべらして脱かけ乍らきつとにちも見は、よい心持であつたり。脱ぎし羽織を抱へて裏木戸をあくるところにて道具廻り、奥庭の場にて羽織を垣に挟み、草履を敷石の上に脱ぎ置き、少し宛明なきし雨戸の際に立寄りて、腰の物を抜放すところにて又道具廻り、奥

座敷の場にて行燈を持来りて見定め、蚊帳のつり手を切落して菊野を一太刀あびせ、起出づるに留を切り菊野を追廻して打留、尙ほ十兵衛との立ありて元の奥庭へ追出し、こゝにて下女、小ちよくまで三人を殺したる邊り、あつさりして居る中に薩摩武士の落附見ぬ、今迄の伊勢音頭や五大力と一つにならぬは御工夫く、と賞めて置くべし。と刀の血を袴にて押拭ふ見えも凄く、鶏笛をきき羽織を着、草履をはくまで始終落着いて申分なし。阿治川の場。着流しにて船を漕ぎて出で来り、正面にて船を止め、高言を放ちてたち腹をきるまで、至極あつさりにて、さして評する程のことなし。唯奥庭の場にて弔燈籠、手洗鉢より敷石、雨戸の好みなどに物數寄を盡したると、阿治川にて漣を濃藍色に細く絞れたる波幕の好みよく、向一面奥深の遠見立派なりしとは、道具方と梅幸丈とに御丁寧の程を謝するのみなり。切られ與三役。この役はいふまでもなく狂言堂が故三升丈の體にはめて書卸したるものにて、つまりいつも源氏の君や兒雷也のやうな綺麗事で押通す和味一方の人が疵だらけの顔でゆすりにくるといふが狂言の山にて、うれ故前幕に充分ぼいやりしたところを見せしなるべし。さればこの役の性質からいへば、此丈の畑になきこと、名題の割書を見ずして明なり。うれに年來心がけて居られし由なるは、大方三升丈がかやうな役は投げて居らるゝ故、一番廢物利用と出掛けられたりて見えて難有し。先づ豆絞りの手拭にて目深に頬被し、紋切形の着附にて安と連立ちて花道の出より門口に立つて居らるゝあたり、體の極りかたいかにも好く、八代目の後姿はどれ程なりしかしらねど、うれにも劣るまじと思はれたり。呼入れられて會釋し、門口にしがみ居り、次にお富と心付きての驚も、あつさりにて嬉し。安が一分貰つて歸るといふを聞入れず、成程一分貰つて歸る所もあり云々の白、この丈の調子では無理ゆるゑ、成田屋張でいかれるのは據なし。

うれよりずつと上へあがりてお神さん、お富さん、いやさお富の白ありて、さういふお前はといはれ、與三郎だと手拭をとつて肩にかけ、裾を捲りてあぐらをかくところ、今更ならねど若々と滅法美しいので、何となくよい心持であつたり。名代のしがね戀も情が仇といふ白も、初日には丸で成田屋を張つて居られたれど、聲色なりとの注意ありしか、後には大體自聲でいかれたやうなるか、兎に角調子に艶を持たせて仕打も色つぼくせられたは受けたり。これぢやあ一分ぢやあ歸られぬといふ條より藤八をいため、多左衛門と掛け合ふあたりは、大分音羽屋になられたれど、どうも手足をくゞられて居るやうにて、最一息たんかの切りたいところを堪へて居るとしか見えぬ。安に焦立てられ卅兩の金をとつて、今日の所は歸つてやるが此儘では濟まねえせとだめを押す所、門口にて歸つた迹は差向ひといふ白ありて花道まで往きかけ引返すまで、お富に未練の残る色氣よりもつとこすい趣向がありさうに見ゆ。花道にて安に五兩やり、ねだるをこむるところも至極あつさりにて受けたり。二度目に裏口より出でて藤八を縛り酒盛をする色合より藤八を葛籠に入るゝ件、捕手を相手に引張の幕切まで、こゝといふところもなし。總じて此丈は年來器用だこはいつて居る人故、近頃になりても勘平はお家の物なり、伊左衛門、小次郎、重次郎、櫻丸と随分時代物では柔いところを當てられたれど、世話物の突轉しはいくらも無理なところありと見ゆ。八代目の與三郎は悪といつても、どこかうぶなところのありしが旨味なりとさしに、丈のは抜けた悪黨が皮を被つて居るといふ方に傾き易し。さればこの役は先達で壽座で勤めし舎弟丈の方が箱り役なりとは、萬人一口なるべしと思はる。今度は梅幸丈初役との觸込にて二役共體にないものを出されたれど、どうもやんやと參りかねたり。次狂言にはどうか先度の伴藏のやうな天下一品の出し物を見せて、

われ等を堪能させ玉へ。いよこちの大音羽屋へ。(明治廿五年九月十九日)
 今度の歌舞伎座は如何でせうと問はれし折、役者を並べて見せるだけさ答へしは蓋明まへのこと
 なりしが、察しの通り二年振にて團、菊兩丈が幕毎に(伊吹落の外)顔を合すといふ趣向大當りにて、
 これを見ぬは一代の不覺と思ふ好者達、日毎に詰掛けて賣切の景氣とはすさまじきことなり。され
 ば狂言や藝の好悪はとやかういはぬが花かもしらねど、或筋よりつゝかるゝが苦しさにちよつぴり
 と聞いた風をやるべし。一番目

關原譽凱歌

は伊吹落を眼目にして、これに頭と尾とをくつゝけたるものなれど、秀家が主人公といふ譯でもな
 く、却つて相替らずの大御所様が大貫けをするやうになり、其外の役の悪さは氣の毒な位にて、團十
 郎一人芝居の名は虚しからずと思はる。唯悪長いところのない筋があまりこづからぬだけが仕
 合せなり。序幕伏見向島花見の場。侍女の捉迷藏に初まりて滋野を伴ふといふ筋は常套の三立目な
 れど、歌占をつかひしは一寸働いたり。秀調丈の滋野役。武家女房のやつし形は毎度の事といひ、
 體にある役ゆゑ苦もなき出来なり。召連れらるゝを斷りて去らんとするあたり、調子に角があるだ
 け、きつぱりとして映りよし。しかし世に知られし歌よみといふところが見ぬぬといふは、注文す
 る方が無理なるべし。榮三郎丈の梅の前役。近頃お興入ありし人に見ぬ、甘つたるいところはあれ
 ど、ぬつぱりとして綺麗なり。福助丈の秀家役。道服小さの拵にて幕張をあげさせての出より滋
 野を留むるまでさしたることもなけれど、どつしりした重味の中にふつくりした柔味ありて、いか
 にも中納言の貫目備り申分なし。取分け白粉を薄くせられたるは難有し。あやめ、秀世兩丈の老女は

親切氣に見て好し。侍女の中才三郎丈は際立ちて美しかりしが、升六丈はそれ程に可笑くもな
 りき。同伏見堤の場、兩浪士が柄當の爭論ありて秀家に見出さるゝまでの筋は團、菊兩丈の顔合せ
 を目覺しくせんとの趣向より、苜蓿の狐川をそつくり持込んで不破名古屋を衣にかけたといふ氣味
 あり。團十郎丈の矢野五郎右衛門役。下座の唄一節ありて向よりの出。熊谷笠を目深に被り、大百
 足虫を書きし羽織に虫盡しの縫取ある着附、朱袴の大小をたばさみ、白なめしの鼻緒をすげたる黒塗
 の足駄を穿き、目を驚かす物好は流石好事家の本家ほどありて、昔の八文字屋に見せてやりたかり
 き。花道に留りて述懐の割白、調子にめりはりのある人として一層引立ち、我人をもにづくつきたり。
 柄當の口論ありて笠を脱ぎ、進藤の手をとりて河岸に飛下り、羽織を脱ぎ捨て、果し合を所望する
 まで丈が無造作の仕打至極箝り好く、氣組にも隙なく嬉し。進藤が手をつき詫るにじつと目をつ
 け、見物を追拂ひてより大小を投出して兩手をつき、うの孝心に感して己が疎忽を詫入るところ、思
 入の應ふる人ゆゑしんみりしたり。秀家の賜物を謝するあたりはさしたることなし。菊五郎丈の
 進藤三左衛門役。編笠草履やつし形にて小包をさげて假花道よりの出、述懐の割白も下手に受けて
 柔く言廻されしが、不破名古屋なら片々が荒つぽく片々が柔いのゆゑ釣合よけれど、こゝでは進藤
 も矢野も同格の勇士ゆゑ、いかにも仕悪かるべし。されど久し振の出合ゆゑ見物の譯もなく嬉しが
 りはれ仕合せなり。矢野が嵩にかゝつて言掛するを柳に受けて身の上を語るところ、假髪の好より
 顔の拵まで滅法美しく作られたため、どうか和事師にでもなりさうなのが懸念なだけに、母の病
 氣に刀の中身を賣代なしたりとのせつなき胸を明かすあたり、ほろりと致したり。福助丈の秀家役。
 寛仁大度の様見にて好し。秀調丈の滋野役は前と同評。その外の諸士は申分なし。見物人大勢思ひ

思ひに古代の拵にての出、御苦勞であつたり。二幕目大垣城内の場。幕明の首片付は随分氣合を悪くする御工夫にて餘り目新しとは褒められず。浮田主従が出陣の不利なるを知りて慥く件、後幕伊吹落の連懐とつくところより、後にぬきたるはさもあるべし。福助、菊之助、松助の浮田主従何れも氣組充分にて、あつけなしとて投げてゐるやうなところ見ぬは感服。奥女中大勢首級の仕末は御苦勞。赤坂出馬の場。大柿獻上の件、饅頭を與ふる件、大黒頭巾を被る件など、いづれも實録の切はざと見ゆれば、作者の御骨折もなく結構なこと。團十郎丈の徳川家康役。同丈が此役を勤むるは已に十餘度の多きに上り、殊更徳川氏康といふやうな變名をやめて、神君の實際はかうもあらうかと工風し、人物の模範を拵へられたる程の名譽の役なれば、むかしはねろか後代にも眞似人があるまじと思ふほどの箱り方なり。されば近比春日局にても家康役が大當りのため局の役よりも此方が主人公に見ゆ、此度の狂言にても伊吹落が本筋なれど始終大御所が頭を押へ居る譯になりて、自然此役が主人公の形をなせり。幕明敷皮の上に腹巻小袴、大なる葵の紋つきし黒縮緬の羽織を着、眼鏡をかけて燈下にて日記をつけ居る體、正本のお坊主に具足をつけさせ居るなどといふ凡手段と違ひて、いかにも老いて益々根氣よかりし當年の東照公に見ゆる心地す。旗差物の好みなど大擬に凝られて御本陣りの儘を見るやうなり。天下分目の戦に秀秋ごとき若年物を當には致さぬはの白も受けたり。大柿を獻上せりとききて、これは見事な大柿といひかけ、にこりと思入あつて籠を覆し、大垣が手に入つたぞ、倅共分捕いたせとの頓智にて士卒の心を勇みたくする呼吸、さもりの場で浮びしやうなり。毛谷主水の注進を聞きて賞美し、其方は甘いものが好きであつたと饅頭をやるどころ、一寸したところにも人の心を攪る工合、妙に箱れり。近習が主水を笑ふを見て、何を笑ふ、

彼の眞似が出来るなら致して見いといふ意外の詞も面白けれど、ちと見物が一所に叱られたやうな風に見ゆたり。福島の注進を聞きて、さては愈乗つたと見ゆるなといふ獨り笑、老人の聲音よくうつされたり。福島が御老體ゆゑと危むを、なに、大丈夫此通ぢやと屈みし腰を伸して立上り、三度飛上つて見せ、うふあゝゝと高笑するあたり、正本で見えてはどうしてこんな馬鹿らしいことが出来るものかと思はるれど、此丈がすると妙不思議の面白さにてかうもあらうかと思はれ敬服々々。こころは太閤が唐冠を擲ち作髻をかなぐり捨つるなど、他人がしては狂じみたるを此丈が仕活して見功者の荒膽を挫いたると一對なり。出陣となりて近習に向ひ、明日の合戦に不覺を取り、叔父や親の面に泥を塗るなといひて勇みをつくるどころ、兜を持來らんといふを、小供等を仕置致すに兜はいらぬ、頭巾をもてといひて頭巾を被るところ、眼中に人なき腹見ゆて大得心。吉例の馬ひけといふ幕切まで感服づくめにて、息も出來ぬ面白さなり。いつぞやこの丈は花見時眞書太閤記にて毛利攻の筑前守を勤め、大英雄の肚をむくつたやうな旨味を見せられて堪能せしことありしが、それは似寄の呼吸にても、ちと大風呂敷をひろげて人をけむに巻かうとする猿面冠者らしきところあり、これは年寄の崑丈作にて誰人でもつかまへて小供あしらひにする狸爺らしきところあり。名優といふものはどんな眞似でもでくるものか。市藏丈の福島正則役。立派には相違なく、勇ましいには相違ないが、顔立が下品を生れ附ゆゑ、どうも左衛門太夫とは受取れず。可兒才藏に近い方なり。これを褒むるは市藏といふ役者に對しての買かぶりなり。猿之助丈の毛谷主水役。大層な儲役なれど、相替らず氣合が猿之助ゆゑ感心せず。かうして見ると饅頭を喰ふだけでも中々むつかしいものと見ゆ。しかし丈も御子息の初舞臺が上評ゆゑ、それにて埋合せはつくといふもの。新藏丈の本多

上野之助役、染五郎丈の使番、其外諸士一同。此幕はいづれも御退屈さまといふべし。三幕目伊吹山落足の場。幕明に關西方の落武者が引剝に逢ふ件、さしたる可笑味もなかりしが、これも後には拔となりたり。辻堂に火をかけて秀家主従が落延ぶるところは當狂言の眼目ともいふ場なれど、あまりあつけなすぎで面白味なく、唯道具を三かはりもつかつて見物をねどすに過ぎず。しかし辻堂の火が燃上ると大向でばち／＼と手の鳴るところを見ると、明治のちよび見物は火事を拵へておいて逃げ出すといふことは是から始まつたのだなと大受なるべく、うこそ當込むで書いてやる作者は明治の才子かもしれないねば、めつたなことは申されず。福助丈の秀家役。辻堂の場は遠寄の鳴物にて郎黨も手創を結へ居るところゆゑ、初手より落仕度はいかにやとの考より最初に鎧を着けて居り、こゝにて鎧を脱ぐなどの工夫ありし丈ありて、追手を切散すところも體崩れず、生害せんとし獨舞臺の述懐より進藤の諫に落行くまで、大手にこなされて申分なし。菊五郎丈の進藤三左衛門役。刀の鞘に水を盛り、藁にてつめてこれを持ち、中身を巾に巻きて腰へ挿しての出はよき思附なり。主君の生害を見て、持し鞘を投捨し刀持つ手を押へ、死を留むる白廻し仕打共、隙なく好し。持來りし水を參らせ、主君が喜びて飲玉ふを見ての愁歎、こゝは此丈が福助丈に鞘を左の手に持直してこれを飲み乍ら進藤へ思入あるやうと注文せしところ、態と左の手に持直すも妙なる上、病氣の爲に左の手が顛ふゆゑ用捨せられたしと同丈に斷られたりといふほど苦心せられし場なれど、少し無理に泣する氣味ありて、見物にうれほご應へざりしは残念なり。手負の延原を介抱するより、屹と思付きてうの骸を辻堂に入れて火をかけ、主君を雜兵の形に作りて伴ひ落つるまで、例の行届いたる仕打申分なし。しかし總體より言ふときは、面白くもなんともなく、蠟燭をかざるやうなと

は、こゝらにもつてくる譬喩なるべし。菊之助丈の延原初め諸士一同、追手まで、うれ／＼によくして居られたり。翫太郎丈の兩股役。此丈には造作がなさず堪能せず。菊四郎丈の早腰役。さしたる事なし。四幕目白樫村の場は矢野が妻子と別れて秀家を落す件。秀家をかくまひしを妻に認められて一命を所望し、うの決心を見て初めて大事を打明けて離別するは手順好し。しかし粥を進むる都合だけにて一度幕を引くは随分難儀なり。殊更粥を喰ふ場は蔭にしたれど、矢野が見廻の役人と命掛の應對の中、安閑と粥を喰つて居らるゝ筈なし。さればこゝは麥飯でも何でもよきゆゑ、初手納屋に忍び居る中に罅を明くるやうに工夫ありたし。何も粥焚が眼目といふ譯でもなければ、どつちにしても好い筈なり。團十郎丈の矢野五郎右衛門役。山獵に往きし歸ると鐵砲をかつぎての出、拵をこつて作られ、申分なし。四邊に目をつけて中に入り、女房が浮田殿の事を尋ぬるを空とぼけて外へうらす工合、庄屋が落人の詮議を言付くるを手軽く受合ふまで、さら／＼としてよし。浮田主従が出で來りてねとづるゝを聞きて門口をあけ、秀家を見てふつと手燭を消して伴ふまで一寸したことなれど好し。道具廻りて裏手を見せ、納屋馬小屋の拵方、檐に絲瓜の生りし様子、烟草の葉を藁にて結び乾しあるなどの好み、いづれも山家らしく見えて結構なり。捨石に莖を布きて秀家を招きまわらせ、一別以來の物語ありて、かく落足の御有様、申上やうが御座りませぬとの白に涙を含みての言廻し、申上やうが御座らぬほどよし。納屋へかくまひて出でんとして下手に伺ふ女房と顔見合せてびつくりせし思入も、芝居らしくせられて嬉し。二重に上りて女房に二人を見届けたであらうとまづ先を越し、自分と進藤とに武士を立てさせて呉るゝには命が貰ひたいとずつけり言放し、様子に目をつけて覺悟極めしところを認め、ぼんと膝をうちて今夜の中に落ちて呉れと本心を明す

まで、思入で立切りし中に腹が透いて見ゆる藝風は此丈の一手捌にて外に仕手なし。我子の寐顔を
 行燈にもたれかゝりて見下す様子、女房に離別の状を無理に持たせて不便だとの思入、立ちかぬる
 をせき立てり門口へやり、又這入りかゝるをつき出し、はずみでよろ／＼と轉びかゝるを、あぶな
 いとの仕打ありて、切戸をびたりと占め、體を戸にもたせかけ後向になりての愁歎まで、近年珍ら
 しき世話場を引受けて芝居をして見せられ、見物一同大泣に泣せられたり。どうかこの後はあまり
 高尚ぶらず、いつもかういふ世話物で腕一ぱいの芝居をして見せ人助けをせられたし。粥をまぬら
 せんとして再び見廻り役人の來りしを、一たび調べ濟みなればとて再應言譯なし、聞入れぬより上
 手に立塞り、武士の住居は城廓同前なるに土足に汚すのみならず、身不肖なれ共塚原卜傳が高弟、殊
 更徳川内府公も御存じの浪人云々の白ありて、いざ御相手になり申さんと腰刀の柄に手をかけての
 意氣込、千萬兩の價値あり。疑なしといふを猶も疑念を晴さんと伴りて金打するところ、落附いたる
 仕打申分なし。厩より馬を引出して鞍を置き沓をはかするなどの小細工は少々だれたれど、これに
 秀家を乗せて引張の白渡るところ、何となく氣持よく、道具又廻りて忍びの者を手裏劍にて仕留め、
 落行く秀家の後影を見送りての幕切まで、此役は大出来大當であつたり。秀調丈の滋野役。浮田殿を
 夫が隠匿ふ心なしといふを、さういふ筈はあるまじと理詰をするより子供を寝かすがよいと叱られ、
 心を残して寢所に這入るまで、始終心配の模様ありて好し。夫が淨田主従を納屋に入れしを隙見し
 て夫に見られ、次の出に今迄寐入り居りし様子をすると、夫を憚る人情はこの位なものなるべし
 と思はる。夫が自分に武士を立てさするため命が貰ひたいといふに、ええと仰山に驚き、後に離別す
 るといふ時夫程に驚かぬは悪し。こゝは初めに命の所望をせられし折は悪くびくつかずには武士の妻

といふ腹をきかせ、後に離別すると聞きて、これ程に誠を顯すものを離別するとは何故とこゝで仰
 山に驚くこゝ好からぬ。しかし夫に諭されて成程と合點し乍泣伏して立兼ねる様子は女の情合にて
 好し。離別の状を受取りかぬるところ、子供を夫に突きつけて見るところ、門口まで出掛りて後
 へかへり、夫に突出されてうのまゝ泣伏す迄、團十郎丈との意氣組あひてたんまりと泣かせられた
 り。團子丈の千代松役。猿之助丈の御子息にて今度が初舞臺なるが、わんぱくらしき中に可愛氣な
 ところありて、父の歸るを見てとこまぢや／＼と驅寄る工合より母の膝で寐入る様子もよく出来、
 寐込みしを母の背に負はせんとする折、欠伸をする様子など巧者にせられ、場中がわつと受けたり。
 いや大出来／＼。福助丈の秀家役。雑兵の形にやつしての出より五郎右衛門との應對もしつとりと
 出来、後糸立を着て菅笠を被り、小荷駄馬に乗りての引込みまで、どこまでも中納言の貫目を失は
 ぬは、持つて生れたこの優の品格にて種々の評もあれど、われ等に於ては大受／＼。菊五郎丈の進
 藤役。秀家の御供して來り始終介抱する仕打行届いたものには相違なけれど、あまり仕草がなま過
 ぎてお氣の毒なり。技は五郎右衛門の持場とはいひ乍ら、あまりな役者の殺し方なり。總じて團十
 郎丈と菊五郎丈との顔を合せてつかふといふには、大月に大炊とか、河内山に直侍とかいふやうに
 役をふらではその甲斐なし。この幕の三左衛門などは八百藏丈でも片市丈でも誰でも間に合ふ役前
 にて、何も菊五郎丈に御苦勞をかゝるまでもなきことなり。姿を變ふる件にて藝たばねに頬被をして
 糸立を着たるはどうしても多助らしきところより、簀を着て竹の子笠を被ることにせられたり。こ
 れといふも根が氣が利いて何にでも體が筈り過ぐるからのことなり。御用心／＼。翫太郎丈の早川
 役。ちと道化過ぎたれど、軽くできたり。團七丈の代り役は一と通。升藏丈の宮塚役。ちと調子が

重つたるくて吃又の手際のやうにゆかず。猿藏丈の庄屋役。こせついで居るためか、目立ちて悪し。大よし丈の村行事役。此方がまだりの者になつて居るやうなり。榮三郎丈の玉藻役。三段目のね輕が逃げて来たやうな丈で、これ程解らぬ役はなし。併し丈の知つた事でもなければ、只作者の思召が解らぬと申す丈なり。大詰江戸城の場。家康が滋野、八郎丸を呼出して調ぶる件は欠伸場にて、春日局の中、堪忍の講釋と一對の難有味、どうしてかういふ戸籍調のやうなことが仕組まれたかと感服する計。下の三左衛門御調はいくらか芝居の大詰らしけれど、玉藻といふ美婦人を出して並べた切、白を一言もいはせぬとは古今東西に珍しき仕組方にて、これも一つ荒唐を抜かれたり。團十郎丈の家康役。千代松を八郎丸と知りての仕打、すべて無法に大氣がる鹽梅、福地氏の注文に適ひてよし。三左衛門を手打になさんと肩衣を外し、薙刀を携へて椽端に出で、とん／＼と椽板を踏鳴して薙刀を三左の領に當がひ、ちつと様子を眺め居りて、武運つたなき秀家なれど、よい家來をもたれたなあといふ呼吸、何ともいはれぬ味ありて、思はず感涙にむせぶ程なり。とど亡骸を召抱ふるといふ件まで、一點の申分なし。菊五郎丈の進藤役。牢中にて寢れし心にて惣髪に頬髯の延びし作り、左團次丈の忠彌、團十郎丈の華山などと同じ様な好みなれど、顔に凄味ある人ゆゑ、どうも忠義一團の人には受取り悪し。こゝは餘り活歴史がらずに、色蒼白く、月代延びて、髯などはなき方が此丈には映りよからんかと存ず。一向に存じませんといふところより、今は何をか包み申さんといふあたり、調子にさびのある人ゆゑ、やはり立役一本ぎの人には似合はしからず。しかし御存分に遊ばされませうと肩衣はね退けつか／＼とよりに領差伸べ、つゆ悪びれぬ仕打は大出來にてありたり。兎に角此役は當狂言の心棒になる役なれど、よいところは御所と五郎右衛門に喰はれて仕舞、序と

切と中とはうれ／＼に腹が違ふやうな役になり、此丈でなくてはならぬといふ見せ場もなきゆゑ、自然見劣りするやうなるはれ氣の毒なり。此次にはどうか十八番の眞世話物を出して、向に敵なき腕前を見せて貰ひたし。秀調丈の滋野役。我子千代松に仕立てし八郎丸を連れて出づることゆゑ、始終其方に心を配り、側に引寄せて離さぬ位の思入はありてしまるべきを、とんと繼子あしらひにするは不親切なり。しかしこれが實際なのかもしれず。福助丈の阿茶の局役。美しき中に氣高き様子ありてよし。新藏丈の本多役。徳川家の老職といふ程の貫目見せず、唯清まし過ぎてござるだけ。榮三郎丈の玉藻役。白のなき位ゆゑ評のあらう筈なし。丑之助丈の八郎丸役。さかしげに出來たり。中幕

皿屋敷化粧姿見

は名代の怪談物なれど、時世に連れて御化の逆さ巾を見ても子供が笑ふやうになりたれば、怖がらせやうといふ工夫はまづ方無し。殊更皿十枚の中一枚をかくし敷をよませて十枚に足らぬといふところが狂言の山とは、さて／＼無理な仕組方。うれにかよわい女を繩からげにして井戸に切落すなど、始終残酷一てん張にて面白きところは煙程もなし。されば固と人形で見せし物を役者がこなしで見するのゆゑ、縛られてあれ程の藝も出来るものかと思ひてこり見ても居らるれ。若し身に染みてうの場合を思ひやれば、限りなき不快の感必ず起るべし。さればかやうな芝居が此後とも長く行はるゝことは覺束なけれど、今度は名にねふ團、菊、松の三優が三役につきては極附ともいふべき奥の手を出して後進の二本にするといふわけゆゑ、彼美術展覽會の参考品と同じく見て置きて話柄とするは至極よし。われ等は見ぬ前にかやうな出し物は賣出し役者にはよけれど、老年になり

し人にはふさはしからず、何もれ附合丈のことにて、まづ中幕は投物をちんといひ居りしが、見れば滅相の氣乗にて大満足いたしたり。されば菊五郎丈のね菊役が艶々しき中に恨を含める凄さ、縛められ乍ら繰言いふ仕打のしなやかさ、此役の本阿彌に疑なきこと、團十郎丈の鐵山役が大派手大舞臺にこなされ、蟻助の落入を見てのいせ笑、銀煙管を床几につきての横見、怪異に恐れぬ落着工合より後向きの幕切まで、調子といひ無類別品勿體ないやうなれど、色氣だけが此丈の體にないこと、松助丈の忠太役は皿を見するに似てい仕打より萬歳樂の慌加減、四谷怪談の宅悦以來の面白さなれど、最一息安つぽい方がこの役には適當ならんかとの贅がひたくなることなどは、いづれもよき程に致し置くべし。淨瑠璃は上下の巻とも結構づくめなれど、太郎冠者の御見事なのに比べて替間の御器用も少し見劣せしは、一つは仕組の淋しきためならん。まだりの外の役々もあれど、聞いた風もあまりちよつびりでなく、讀者も評者も少しだれ氣味ゆる、これ丈にて御免を蒙るべし。

(明治二十五年十一月一日)

柳盛座の一番目は

太鼓音智勇三略

これは村山座にて書卸しの後も天現寺と濱松城とは新富座、歌舞伎座にても出されしが、こん度は珍しく序幕より切まで通して見せられたり。われ等は遅く往きて味方が原討死の場より以下を見たるのみなるが、随分解しかぬる筋があるやうなり。味方が原の場はどんちやんの鳴物にて、梅雀丈の鳥居四郎右衛門と仲藏丈の鳴瀬東藏と兩人立廻りの末切腹のところ、刀を突立てよから、はふふと高笑をするのは、思召の程解らず。甲州黒澤獄屋の場は譽田の妹梅枝が番卒に麻薬を飲ませて刀

を獄屋に入るどころ。龜由丈の梅枝。やつし姿の中もすつきりと美しくてよし。よく利いたものぢやなあから間者に忍び入りたりといふあたり、調子傳坊になりて、譽田が妹といふ腹はなくなりしが、筋からいへば據なきか。源氏嶽捕物の場は牢脱せし善三郎を捕方が搦めんとするところ。勝雀丈の辻屋源次、仲藏丈の土谷幸藏簑笠にて兩花道よりの出。鎗を携へての割白は芝居らしく、此座の定連には大受なるべし。和好丈の徳川善三郎は牢任着の儘にて山より轉げ落ち、短刀を携へて立去らんとするところ、大百の映り好く顔立より落着加減、すべて堀越寫しにて恐入つたり。立廻りの雪ぶつけは随分馬鹿げたれど、道具も存外新しく、雪も思ひ切つてたんまり降らせたるは難有し。とて捕手を切穴へ打込み、朝日の昇るを見て、後向の幕切はどうもはや凄いものなり。天現寺門前より濱松城の場。梅雀丈の家康は苦戦の勞か、餘程たるみしところ見、第一品格が乏しく、不評なり。しかし和好丈の酒井に盃をさして餘所乍ら暇乞する呼吸はしつくりと合ひたり。米次丈の御臺。加役とはいひ乍らさりとは猿芝居の御臺様じみたり。此後眼の縁に紅をさすことだけはやめたが好し。仲藏丈の鳥居。當座の花形にて赤襟受はよきよしなるが、新藏丈の聲色をつかひて時々息込むだけにて、うの間すこととして居るは困つたもの。手疵の痛がり様の大袈裟な工合、今死ぬ命にいらぬことだはいふ緊要な白を何の氣もなくすらしりといつてしまふなど、さてくんのきき事かな。龜三郎丈の鳥居妹楓は振袖をあやなしてたつぷりと振を見せられたるが、どうも色つぽく、兄弟の情合うつらず。龜由丈の梅枝役は並んだ計なれど目につきたり。歌女之丞丈の姉伏屋は着附も襦袢も派手を方にて、調子も張つよく、思ひいれ突込んでせられて受けたり。惣體にせつちの氣味にて、少し騒々しけれど、片々の酒井が大落着にてたはいなきゆる、この位の方映りよからん。

書御の門之助丈もきつい方なりと聞きぬ。勝雀丈の馬場。此丈は顔も調子も瑠久三郎丈に似たるが、藝風もねつちりの方なり。城外にて長々と押問答ありし末、花道にて念入の思入ありて、こゝでつげを打たせ、做大に向へ振つて這入るとは氣の知れぬ沙汰なり。鰐十郎丈の山縣。この丈も見立がなく、御兩人とも甲陽の大將とは受取れず、まづ陣笠首の方なり。和好丈の酒井。この丈の出し物ほどありて、これも三升丈の儘なれど、糸八流の身振聲色を離れ、顔立や地聲が自然三升丈に似て居るところから、白のめりはりにて應へさするところを應へさせ、平常は無造作にて悪見えなどせず、極るところで極つてきつと見ゆをするなど、總て腹と呼吸とを真似しはよき心掛なり。拵は時代に活歴史を加味せし鹽梅なれど、初手の生酔から主君と別を惜む盃事、姉の異見を茶にして大言を吐くところ、鳥居との鎗のたてより櫓に上りて甲州勢を見下す見え、御約束の太鼓を打つまで、始終一點の申分なし。取分櫓に上る生酔の足取などは念入にせられ、おどかし一方で役を投げぬは感心なり。中幕

四季眺千種色彩

は梅雀丈の出し物なり。初め雪轉しが割れて禿二人つれて傾城にての出、振ありて這入り、次には浦島にて乙姫侍女とせり出しになり、中頃に乙姫はせり込みになると玉手箱の蓋を明けて老人の假髪になりて這入り、次には船頭にて出で矢場女との振ありて、切に一寸所作立のある仕組。こゝらには勿體なき程手のかゝつた出し物にて面白し。同丈の所作はいづれも軽々とやつてのけられしが、取分浦島の扇の小事はしなやかに出来たり。龜由丈の乙姫、矢場女とも艶つぽくてよし。二人の子役も出来たり。二番目

阿波鳴門

は産湯稻荷前と十郎兵衛住居とに割つて見せ、前にてお弓が我子に逢ひ、次にて十郎兵衛がね鶴を殺す仕組なり。和好丈の尼妙林。流石堀越信仰の人だけありて、側の邪魔にもならず、可笑味もありて、ようこなされたり。仲藏丈の尼妙貞。わる味澤山にて鼻持のならぬ場當り、これこり當座の人氣役者といはぬ計の顔して、外見し乍らこんな役は茶の子とすまますまじさ、福圓丈を小劇場の名人といひて感服する人は、この丈をも小劇場の腕利といひて最負にすること請合なり。歌女之丞丈のね弓役。作り萬端上方風と見てよく映り、手一杯に芝居をして見せられて堪能せり。これ得手附のね目障がなくば一倍よからん。家の場の出に子供を尋ねあぐみたりとの心にて鼻緒の切れも草履をぶらさげ、御殿のね三輪といふ身は這入違へにて受兼ねたり。草履を心付かずは團扇と思ひて扇なども悪落の來る方なり。小桃丈のね鶴。三崎座より掛持の甲斐ありて、ちよぼに合せて憎らしい程よくこなされ、上々のお鶴なり。梅雀丈の十郎兵衛。子役にわつと口説きつ頼むところもよく、計らず手の廻りしに驚くところも悪騒させず、ね弓が愁歎をききて尤ちやと黙して居る腹も解り、體にある役とて申分なき出来なり。鰐十郎丈の非人もよくして居たり。兎に角當座は普請も新しく、日光の取り方もよく、こん度は和光丈の酒井、梅雀丈の所作など存外の面白さにて、これで二錢の木戸とは大安賣なり。(明治二十五年十一月十三日)

英勇後藤義心傳

の通し、これは劍客後藤半四郎の講釋種を狂言に書御しものなれど、此後藤役はぶつとけ左團次丈

にもつてゆくべき役前ゆゑ、萬端寺島うつしといふべき幸藏丈には無理ならんと思ひしが、按の定體に意氣のある人ゆゑ籍り悪し。尤も緊要の熊谷堤は見ず、僅切前的一幕を覗きたるのみなれば、あまり通も申されねど、兎に角年配かつぶくがうの人らしく受取れず。どうも師匠の梵字の徳次郎が侍に化て極樂寺へゆすりに行くときの形に見えて残念。此丈も當春雪駄直しの長五郎を當てられてより、この中布引の實盛にて師匠うつしの小手の利いたところを見せられ、大受大評判にて、次狂言の道庵役もやはり師匠が勤めし按摩道玄の面影ありて評よく、こん度も此丈を心棒にしての狂言を出さるゝ程なれば、いつも體にある物を撰びて出さるべき筈なるに惜むべし。中幕

通俗西遊記

は先年寺内の河竹氏が書卸し、市村座にて興行せし淨瑠璃にて、彼時藏丈が諸方をもつて廻らるゝ西遊記とは別物のよし。孫悟空役は菊五郎丈もいつづはやつて見たいと目をつけて居らるゝやに聞きし輕業物にて、書卸しに權十郎丈が賣出しの人氣にて評判よかりし役なり。幸藏丈の拵は流石齒を露出してさい／＼やらるゝ川崎屋程にはうつらねど、まづ相應に出來たり。しかし餘り額の紅の濃過ぐるため、猿が大層若く見ゆるだけは申分なり。多見丸丈の猪八戒役。此丈はどこか八百三郎丈に似たところありて、顔も藝風も少々の方がなれど、先度の西郡駒吉役はきつてはめたやうなぐらゐ出來よく、前狂言にて松藏の大世話場を勤め、調子がきつ／＼して侍あがりを見ゆる難はあれど、兎に角根岸の御前が最負にするといひ出されしほどの車輪は結構なりき。されど今度の八戒の拵は少々「キヤリネ」の道化師じみて不受なり。雛助の沙悟淨役。此丈は調子少し舌つたらずの鹽梅ありて、押手の利かぬ達なれど、先度の瀬の尾といひ、伊十郎といひ、形が立派に出來たり。此

度の悟淨は頭に角が持上り髮髭の赤い工合、とんと八丈島の鬼夜叉といふ趣なれどまづよし。紅車丈の三藏役。先頃まで公園の音羽屋と呼ばるゝ程の寺島張なりしに、幸藏丈が一座せらるゝと直に上目使をしてはあ／＼と鼻を鳴し、高島屋一てん張に變へられしはさて／＼調法な事かな。先度のお瀧は蓮葉に／＼と其方に計り氣を入るゝため、仇つぼくはあるが、思入皆無とは情なかりき。今度の三藏も綺麗には塗られたれど、うれ程器用なら家橋丈でも張ればよいに、やはり高島屋の聲色とは餘り意氣込が達ひて驚き入つたり。榮次郎丈の西梁國女王實は蜘蛛の怪役は先親御菊五郎丈の妃妃といふ面影ありて滅法美しけれど、調子がまるきり男にて、總體がきつ／＼たり。これは極色氣ありて愛らしく見せ、次幕にて正體を顯してより充分凄味を見するが宜しからん。うれ故先年は前幕を故人女寅丈が勤め、後幕を家橋丈が勤めしを、こんど榮次郎丈の兩方一人にて勤められしは大天狗なり。正體を顯してより先親御の土蜘蛛の作りを寫されしはよい思附といふべし。璃久三郎丈の百眼魔王役。この丈は中島座で敵役のみを勤めて居られし頃より、當座にては親父形をかね、一寸松助どこをやつて居らるゝ此頃まで、さしたる上り目もなく、先度の五郎助杯大出來なるは、調子のさねぬと始終氣拔のするためならん。今度の魔王は暈どりをした河童の様なだけにて見處なし。さて總體の振事はいつれも大が／＼と申すだけにて、取立てゝ賞むる程の所もなし。しかし悟空が宙乘にてかつぼれを躍り、これに合せて小猿の縫ぐるみが躍り出すなどのゝんきさは、公園散歩のお子供衆には面白いこと受合の出し物なり。(明治二十五年十一月十日)

市村座の舞臺開きに引幕が滅法に來て、連中見物が毎日々々ひきも切らぬとの噂はよるとささはると承はりしが、折好く感胃のため見物する苦勞のないを結句仕合と喜び居りしに、斯ういふ甘いとは

長くはつゞかず、愈病氣本復となる直様、二長町に参りて詳に評判を記されよと社主の依頼に力なく、一兩日前大奮發にて見物に参ることとなりぬ。さて一番目は

賤嶽眞書太閤記

と大名題に書上げし如く、太閤記賤嶽の件を眼目として見する積、しかしどんちゃん／＼計では御見物がお逆上になるだらうといふ御注意から、うの次北の莊の生害場などいふ睡い幕を加へられたるなるべし。どちらにしても作者方は實録に場割役割をつくるだけのお骨折なれば、別段彼此申すには當らず。二番目

松名高紅葉京橋

とは意味深長にして、凡人には解らぬ名題なり。これは四十代の人は現に見聞したる松田の喧嘩に遊女の仇討をかき加へしものと聞きしゆゑ、こいつは面白い世話物が出来たらんと喜びしが、さて筋立をきいて見ると、兩方の關係も舊めかしく、かしくの役も一向ひき立たず、つまり御座船が部屋に變る大仕掛と松田の立廻だけが目當とは、随分旨いところのない仕組方かな。扱これから藝評にかゝる筈なれど、こん度位役者澤山の仕處少きは珍らしき故、捨役同様な役前で舞臺に顔だけ並ぶる連中を一々眞面目にさしたる事なむづくめに書いて居たら、今年一杯では覺束なきゆゑ、重な役だけにて御免を蒙るべし。左團次丈の秀吉役は落附いて大手にこなされたるが、此役の專賣ともいふべき三升丈が猿若町の舊座で大腹中を見せられし迹といひ、ざつくばらんのところ見ぬゆゑ受兼ねたり。勝家役は焼香場では評よかりしが、こん度は佐々成政をつくといふ注意か白髪にせられたためあらんが、落附すぎて荒氣足らず、分別くさく見えて、これも鬼柴田とは受取りに

くし。毛受勝助役は本役だけありていかにも勇ましく、後藤基次、湯淺吾助などと同様の大出来なり。家慶公は品格だけゆゑ申分なし。梅田雅樂之助役は九橋忠彌、金子市之丞さては安宅郷右衛門などで毎々でかさるゝ十八番の劍客なれば、すつかり箱りて、うの人を見るやうなり。かしくこのじやらつきも思ひ切つたる野暮の仕打出來よく、師匠との別は少し泣過ぎたるが、幕切の引張は立派にて、松田の大立廻りはいつものこととて烈しく氣味よし。米藏丈の御小姓幾江役の舞の手は柔くてよし。久喜萬字のかしく役は調子の金切なものと春の足らぬだけが憾なれど、容貌は滅法に美しく、ちよぼに合しての振も受たり。しかし櫻井と梅田とのつめ開きの間、今一と息思入がして貰ひたく、うして始終張臂をして居らるゝは醜し。權十郎丈の利家役はいつぢやも犬千代にて當てられし程ありて、その人らしくてよし。しかしそれは見たところだけにて、思入は例の通仰山過ぎたり。村田小八後に櫻井武雄役。これも人品見掛はいかにも悪侍に箱りたれど、演る事は随分福圓一流の臭味あり。とりわけ松田の二階にて生酔の白はお里のなまりが出で、仕草は白癡がすてゝこでも踊るやうな形あり。お負に自慢らしく膝頭を出すいやらしさ云へたものでなし。小團次丈の清正役はいかな田舎者も受取る氣遣のなき賈物なり。うの外の役々はいつもの通。善美藏丈の鳶頭は一番世話がないだけ一番無難なるべし。壽三郎丈の文荷齋役はありこんだ中から虚した聲のである工合、寶窟奇譚の夢留姫に似たり。亭主役もぼち／＼なり。荒次郎の段助役は御苦勞、大工役は出來たり。家橋丈の内宮新太郎役はつゝこんでせられてよし。茂々之井舜藏役は年配の作りもよく、感心に利目な處で調子を張らるれど、例の鳩つぼつゆゑ、うの割に應へず。しかし舞臺がしまつてきまるころのきまるは此丈の貫目なり。秀調丈の小谷之方役は大濫なことに、われ等には好悪分らず。

渚の前役は並ぶだけ。召使おむらは白石の信夫以来味を覺ての御馳走ゆゑ、三つ大連は喜ぶなるべし。小紫、女寅兩丈は幾度も着附を替へて出られたるが、いづれも役名は違ひ居るよし。これ第一の御苦勞なり。うの外一統の衆も同様御苦勞と申すより外なし。(明治廿五年十二月一日)

例の引風にて午前十時開場の木挽町の慈善芝居に午後二時の出頭は遅い、と師直もどきのれ小言あらんと恐れ入りしが、なにさ聞かぬは放樂とも申すべきは、我國のシエクスピイヤが尻尾をきつたやうな調子でぼつり／＼とやらるゝ大風な御演説と、緋の衣の上人が博識ぶりに述べらるゝお難有き御法談となりと、先駆せし一人は慰め呉れたり。そのかはり残念なことに野崎と大島を見落したるが、大方秀調丈のれ光は田舎娘の寂しいところが姿に箝り、振も手軽くやつてのけられ、市藏丈の久作はこの人の身上では質樸一本の田舎翁とは少々受取り悪く、菊之助丈の久松は切て箝めたやうによく箝りて、仕草もふつくりとでき、れ負に例の潰れた調子も丁稚のことゆゑ耳立たず、まづ今の久松役者でげせうとの通をいつても差支あるまじく、榮三郎丈のれ染は一と通といふ外に詞をかるべく、團十郎丈の爲朝は此前の通といへば珍しく髻道樂をやめにして、白粉をつかつて滅法若く作られ、北齋の畫面うつくりの拵難有く、朝稚を紙鳶にくるを鬼夜叉がとむる件にて、くどういと大きくいはるゝ調子はづつとするほど好く、紙鳶の糸を切りて向を見込み、狼煙を見てにつとの思入は相替らず見物を伸らすか知らねど、大分年數立ちしゆゑ、この前ほどの勇氣はいかにやと疑はれ、市藏丈の鬼夜叉は形は箝りても、左團次丈か焦込調子ほどには感せさせまじく、福助丈の彫江は申す迄もなく結構なりしならん。さて

忠臣藏

三段目で翫太郎丈の件内は吾妻座でも拜見せしが、相變らずばつさりの可笑味などくどからず、又騒じからぬは何より結構なり。菊五郎丈の師直はすべて梅壽翁の型を寫さるゝと見え、いかにもきちんと定つてよい心持なれど、餘りうの方に身が入りて、役の方の氣込が少々れ留守のやうに思はれたり。菊之助丈の判官は花道の出も男前よく、初手の悪口には別段に惡むつこき思入などなく、鯛侍のあたりからぐつと焦立つ仕打、よく飲込まれて出來たり。しかし焦込んでからが例の丁稚じみた調子ゆゑ、いかにも残念なり。猿之助丈の若狭之助は大分顔で藝をせられたれど、どうも吾妻座の舞臺でないさうれ程に見榮せず。

蜂の巢

に團十郎丈の平右衛門は長らく噂のみ承り、やう／＼此度拜見したるが、蜂の巢の變を見て鎌倉へ廻らうか廻るまいかとつとつといつの獨言より、とぞ思ひ切つて花道をかけこむまで、始終氣味合で持切つてござるは他人に真似のできぬ旨味なり。

鹽山邸

の筋にて下郎が雪を投掛けし小袖を乾したるが、後に源藏が訣別の折の種になり、又この下郎が生酔なところから源藏の噂を引出すなどは、一寸したことなれど、無理がなくつよい趣向なり。市藏丈の鹽山與左衛門は弟の不身持を歎く述懐も應へ、彼が宅は本所であつたなといふ名代の慕切も相應にやつてのけられたり。しかし此役は名にねふ薪水、三升の兩丈がうれ／＼に型を遺して息もつけぬ旨味を見せられし迹ゆゑ、貫目がづつと落ちて見劣りせしはれ氣の毒なり。菊五郎丈の源藏はこれも毎度のね勤にて手に入つてござるゆゑ、たんまりと芝居をして見物を泣かせられたも其筈の事

なるべし。しかし生酔の仕草には随分ぐらゐりに近いこともあり、泣き方の女々しいには誰にでも
 ね氣が附かれやうと思はるゝところもあれど、うこらは十二分にほうばらする寺島一流の藝風ぢや
 と思ひて見れば、いかにも面白いことであつたり。菊之助丈の與之助は餘り作りが柔弱にて、こん
 くわいの時の若旦那が袴をつけて來たやうな悪し。それに源藏が意見の間此前の福助丈などは最
 一倍謹んで聞いて居られたりと覺ゆ。福助丈の鹽山の妻は目の覺むる程美しく、始終源藏をおぼ
 義理ある姉の心掛、少しの抜目なく大出來なり。松助丈の半助は此前も大出來なりしが、こん
 度も同様にて、づか／＼と用捨なく源藏を誹る下郎の性根より、布子羽織のことをくりかへしていふ可
 笑味、始終寒さにいぢけて不精がる様子まで無類の面白さなり。

士農工商

の所作はいづれも綺麗なことゝ申すだけにて、やれ染五郎の踊は流石大いの、新藏のははき／＼し
 てよいのなどといふやうな聞いた風は、當分お預けとすべし。(明治廿五年十二月九日)
 常磐座の師走狂言は同座十八回目の興行祝として、出方役者の顔見せにながらへて出し物を撰び、
 本町育、彦山、紙治、矢口の四番續きを

四組重葺繪定紋

と名づけて出したり。本町育に紅車丈の本町丸は燕枝さんの聲色をつかふ譯でもないに、起きて居
 て罎をかくやうな凄いとところを見せられたるならんが、生憎いつもの出不精にて見落したれば預
 けとすべし。彦山に幸藏丈の六助。なぜこんなものを出されたかといふは野暮の行止りにて、大方
 前狂言には和國橋の藤次を出され、故人米升丈が書卸しおのときに子役をつとめて居て心覺ゆがあり

とやらにて、梅幸丈が散髪頭にてやり損ひし眞似をせず、どこまでも書卸しのおまゝで行届いた仕打
 を見せられ、われ等を帥らせたるほど御骨折の後なれば、こん度は骨休めに芙蓉丈のね園に附合つ
 て居るのだと思へば濟んだものなり。されば氣組に隙間なけれど、すつきりして幅の足らぬところ
 などはだんまりで居る方然るべし。芙蓉丈はいつもね茶屋の内儀とか植木屋のかみさんとかいふや
 うな端役には箆りよけれど、先度勤めし布引の小萬など少しも氣乗なく、前狂言の藤次女房なども
 年より若くて、子持とは見えぬといふ筋であり乍ら大層な更け方にて、ね負に白廻し時代なれば先
 度の松之助丈を思ひ出すばかり、こん度のね園も更けて居るところは本文にかなひ、振も坂地仕込
 ゆゑ相應にこなされたれど、どうも色氣薄く受けかねたり。紅車丈の袖右衛門は見物を相手にふざ
 けてござるゆゑ場受はあれど、馬鹿／＼しいばかりなり。璃久三郎丈の老母はほんのね間に合せな
 れど、とても間には合はず。網島に多見丸丈の治兵衛はでれりとした藝箆りて至極よし。兄貴にあひ
 て面目ない逃出さんとして引戻さるゝところより小春の愛想づかしを口惜がりて足蹴にするまで
 例の車輪ゆゑ面白く見らる。まかし高砂座のときの歌女太郎丈には及ばず。雛助丈の孫右衛門もね
 附合にて車輪にせられしゆゑ、兄弟の情合うつり、小春の心中を覺る仕草もあつさりにて分りたり。
 璃久三郎丈の太兵衛、花菱丈の善六。どちらももつてこいの役前にてよし。中にも花菱丈は段々あ
 く抜けて來られ、どこか片市丈の係あり。三好丈の小春は毎度同じ筋の役廻りにて手覺ありと見
 ら、憂もこれへて、高砂座のときの花昇丈などよりはぐつとよし。矢口に雛助丈の頼兵衛は仕草も大
 手にて押し出しもよく、娘の異見を耳にもかけぬ根強き性根も相應に見たり。榮次郎丈のね船。い
 かに美しくても、毎度同じ様なつくりゆゑ、見榮せず。近頃で出來なのは道庵の妾ね春だけにて、

これは常にはまして仇つぼくできたり。ね船も義峰との色合は、例のきい／＼いふ調子にてまだ青い方なれど、手負になりてからの異見は氣乗がしたり。こゝろは大歌舞伎に育つたね蔭か。三好丈の義峰は金切聲をぬきにすれば、かなり柔くできたり。小桃丈のうてなは當り目のない役とてさしたることなし。幸藏丈の六藏は榮坊にのれ附合ならんが、流石舞臺が賑になつてよし。殊更左團次丈が大味噲をつけし前を敲いて氣の早いやつだといふやうな仕草をぬきにせしは、いつも乍ら感服な心がけかな。總じて當座に這入られてからはいつも大當り、取分け實盛、道庵、藤次など滅相の大出来にて、當時寺島家一流の藝風を受續ぐ人はこの丈の外にはあるまじと思はる。いよ六代目の候補者／＼。(廿五年十二月廿一日)

市村座初春芝居の一番目は 隅田川乗切講談

四番續き。これは講釋屋の阿部の乗切を前代河竹氏が芝居に箱められしものなり。しかし今になりては、當狂言の眼目ともいふべき乗切の大道具にも、見物がびくともせぬやうになりたり。其上乗切を家光が血氣よりの所望とせず、溺れし人を助くる爲めと勿體つけしは難有からず。中幕

犬莊士噂樓

は申す迄もなく今の河竹氏が八犬傳を芝居に直されたもの、去十六年七月春木座にて興行の折は墨田川高評樓といふ名題にて、高屋繩手道、阿任谷一家、鳥越山麓の場などありしが、この度は毒婦船蟲の件をくひて馬加郎より見せられたり。うの中此前右團次丈に箱めて書かれたる品七の腹切などいふだれ場をぬきにせられしは仕合せなり。大體八犬傳の趣向を今の眼より見ると、小説として

のあらは随分あれど、流石一文人形を並べて拵へ上げたものほどありて、芝居らしく出来て居るところは澤山あり。對牛樓の件もりの儘で芝居になり居れり。唯本文にて朝毛野が小文吾の許に忍びし折には、どこまでも女のつもりにて驅落の約束をなし、後に馬加の首を携へ來りて本名を明すこととせしを、正本にては初めて逢ひし折に本名を明させたり。それは芝居にして引立つやうにとの考なるべけれど、毛野が小文吾に助太刀を頼むといふこん度の筋は、犬士に似合はしからず。二番目は

双蝶々曲輪日記

にてこれも近頃角力場のみを出してちちを明くることなるに、こんどは珍らしく米屋の意見場より大詰仕返しまでを出したり。家橘丈の安倍豊後守役。われ等は三幕目より見たるが、下城の所も切腹せんとする所も、同じ向の役前とはいひ乍ら、この前の大岡越前守そのまゝにて拙し。しかし名たる奉行職とは違ひ、當時は未だ若年の近習役なれば、まだしも今度の方が箱り好し。邸の場にて奥方が取絶るを振切り、白の小袖をかへての引込みは、あわたたしからずして味ひあり。出水に駈付の場はたつ／＼け拵の映りよく、豊後守と見たり。乗切の仰を受け、笥にて袂のくけめをほどき、彈右衛門が留むるを振切つて花道をかけこむところも、氣組充分にて受けたり。肝腎の乗切は波幕の向を馬の頭に抱きついて往きつ戻りつするだけにて、さして見所なし。總體に此役はこそいふ見せ場もなく、まづさら／＼と好し位のところならん。犬田小文吾役。最初は三猿丈にもつてゆく筈なりしが、納まらぬゆゑこの丈に廻りたりと見ゆ。本文にても小文吾は大まかな人物なれば、三猿丈よりも此丈の方が適役ならむ。拵もあまり武者修行じみたれど、一幕切ゆゑまづ相應

とすべし。但しあまり大まか過ぎて白が腹にはいらず、随分氣なしの個所もありしやうなり。志かし押出しの立派な人ゆゑ、舞を見て居る中も、朝毛野が忍び來りしを怪みて切掛くるより心底を見届けたりといふまでの間も、始終小文吾らしくてよし。唯朝毛野に實名を名乗らす折まづ、と上手に直すは、己の主筋といふ譯でもなければ見た目悪し。九藏丈の馬加大記役。待ちこがれた此丈が顔を出し乍ら、わづか此一役の受持とは、何か折合の悪い筋があるかしらねど、あまりあつけな過ぎたり。しかし箱まる事はれ手の物の國崩しなれば勿體ないほどにて、さながら舞臺から根が生れた如く、お蔭で大歌舞伎らしい心持が致したり。しかし毛野との立廻りはあまり冗談らしき様思はる。福助丈の女田樂朝毛野役。男舞の姿にて花道より出で、一寸口上をいはるゝところ、申す迄もなく美しきことなり。桃源の舞の中に小文吾に目をつけ、簪を刀の下緒に投つくる件も目立たぬやうにせられてよし。休息場にて九念次より犬田の事を聞き出し、篋より歌をかきたる柏の葉を流すところ思入の應ふる人ゆゑ、利目々々が解りたり。正本にてはこの場は一向つまらぬ筋なれど、朝毛野で居りて毛野の腹を利かすところゆゑ、芝居にしては一番味あり。こゝをゆく役者は堀越氏の外は當時此丈のみなるべし。小文吾の處に忍ぶ件は本文通り晒の手拭を被りたる拵にて出で、一寸立廻ありて、手拭がとれて顔見合せ、うれより口説になりて刀の下に直るまで、芝居らしき筋といひ、この丈の身上に箝りて申分なし。實は私は男でござんすといひて四邊を見廻し、歩きつきと調子にて男子になるところは、小萩が敦盛にぬくるところを腹へ入れてこなされたりと見受けしが、歩き附荒つぽく、悪落が來しは残念なりき。しかし本名を名乗るとて、小文吾をさし置き悠々と上手に通るは腹違へなるべし。助太力を頼むといふ件になりて下手に替るも、あまり現金過ぎて醜し。

こゝは始終下手に居り乍ら、充分に役前を引立つる工夫をすべきことにはあらずや。對牛樓の場は八犬傳の畫面通りにて、大道具の廻り舞臺をつかひての立廻り、れ見事のことであつたり。壽美藏丈の感心なれど、この役は貫目一つで持つ役前ゆゑ、どうしても彦左衛門とは受取れず。濡髪長五郎役。この役は近年芝翫丈が度々出されてお株のやうになり、近頃は家橘丈が大層當てられたる貫目物なるが、この丈も昨年瀧見山役を出來されたる手覺ありと見ゆ、大出來なり。木戸口よりの出、顔の作りより着附うの外まで申分なく、慥に大關と受取れたり。與五郎の放埒を戒め、扇によろへて異見する件は親切の氣組見ゆて應へたり。長吉にあひても初手はくだけて吾妻の事を頼み、愈々聞入れぬより氣色かはり、長吉のかけたる床几を踏碎く息込まで始終力士の腹ありて大出來なり。茶碗を握り碎く件より幕切の引張りまで立派にできたり。米屋の場。長吉の焦立つを制する落附工合も盗人の掛合の中煙草を吸ひて居るところもよく、長吉が自害すると見て押留めての異見は取分けてしんみりと應へ、うなははよい姉きをもつて仕合のこつたなあの白も受けたり。新藏丈の家光役。まことにあつさりにて評の仕様なし。大方こんな役はその御所存ならむ。放駒長吉役。惣體に随分甘つたるくせられたれど、まづお茶を濁された位のものなり。調子も時々妙にきつく張らるゝばかりで、うの迹はたはいないだどつ子見た様なのは感心仕らず。しかしいつもは茶碗が握み碎かれぬとて、土に打つけて碎くの刀の鏝に打付けて碎かれしは目新しく、又姉に盗みをしたとて責めらるゝ時、うの様なことは知らぬはいといひ乍ら、さあらぬ振にて襦袢の袖を目に當てゝ涙を拭く仕打はよくできたり。女寅丈の奥方吳竹役。昨年の外記の奥方などと同じ役柄なるが、品もあり

憂も利きて結構なり。取分け夫の心を酌分けて白の小袖を持来りぐつと詰らするあたりは、さつぱりとしてよし。吾妻役は申分のあらう筈なし。姉お關役はいつもの甘つたるい調子では如何にやと危ぶむものもありしが、流石上方仕立の人ほどありて、年増振もよく映り、異見もしんみりと應へ、兄弟を思ふ情合よく解り、大出来なり。秀五郎丈の平田彈右衛門役。始終車輪にやつておらるゝゆゑ、仕草には申し分なけれど、根が此丈の體にない役柄ゆゑ、貫目に乏しく受兼ねたり。袖角九念次役。この丈へきつて欲めたやうな役前なれば、輕薄な様子も、女田樂にのろける工合もよく出来たり。茶店の亭主岡介役もこの丈にもつてこいといふ役ゆゑ、例の濡髪を褒めて祝儀や羽織を貰ひ、あなたおよしなさればよいにといふ件軽くでき、角力の眞似をして花道を引込むまで大受く。竹松丈の守澤出羽守役は少し若輩すぎ、朝露役は美しけれど、いづれも氣を入れてせられしは好し。山崎屋與五郎役はごか親御の面影ありて、吾妻とのじやらつきもでき、角力がはねてよりお約束の緋縮緬の襦袢を出しかけて木戸口に出で、濡髪を褒めて放駒をけなす獨力味がこの役の見せ場なるが、流石門閥家だけありて、ぼいやりと大鳥にこなされしは感心なり。長五郎の異見を聞く中極りの悪いといふ仕打、吾妻と添はずと聞きて喜ぶ様子もよし。茶屋の亭主が濡髪を褒むるを聞きて祝儀や羽織をやる工合より濡髪の部屋着を二人して着て花道を這入るまで、始終柔くできたり。この丈は子役の折は評よく、中頃になりて暫く腰かけの氣味にて、見込はあるまじと思ひしが、この度の役々はいづれも氣を入れてせられ、取分け與五郎の大役をこれ程にこなされしは大手柄なり。この圖を抜かさず勵み玉へ。團七丈の平岡郷左衛門役。假髪の好みより着附まで申分なく、放駒を褒め立てゝの引込もよし。米屋の場にて帯ひろ裸にて、傘をさし雪駄を履きながら家に駆け込みて、

慌てるな〜といふ工合可笑しく、うれより吾妻を取返さねば切腹をするといひて腹に墨を引く可笑味減法に面白く、腰刀と傘をもちここにさして花道を這入るまで、大眞面目にこなされて見物の腹の皮をよらせたり。いや大當り〜。升藏丈の尼妙林役。白粉こて塗、色氣たつぷりに作られたれど、調子が男にて、仕草も悪ふだけの方にて道化にならず。お氣もじ乍ら上評とは申し難し。うれに長吉が刀を振廻す折、土間に逃込むなどいふ當込も受兼ねたり。種五郎丈のとりてき八つ頭役は出来たり。升六丈の下駄の市役もよし。喜猿丈の卜部季六役は御苦勞なり。瀧十郎丈の山崎屋與次兵衛役はまづよし。兒福丈の女田樂、玉七丈の姉小笹、蝦蛄六丈の三原有右衛門役、いづれもさしたることなし。うの外の役々は評するほどのことなし。(明治廿六年一月十二日)
春木座の初興行は家升丈が十年振の御目見えにて日々一杯の景氣なり。一番目は

相馬太郎李軍談

六幕にて、これには家升丈顔を出さず、在來の立物衆に銘々氣焰を吐かさうといふだけの御趣向なれば、筋立について不足をいふは愚なり。序幕と二幕目口とは見ず。二の奥琵琶亭遊宴の場。右田作丈の田原秀正役。白拍子に琴を弾かすのび工合より、扨従となりし良門が姉の首を持来りしに驚き、うれより妖術の爲に氣を失ひ、亂心の様な身振にて刀を振廻し、とど良門の爲に親の仇なりとて首をとらるゝ情ない役前、いつもの通白をいはぬ間は虚して御座るといふのんきな藝風なれば、先づ籍りの好い方ならん。良門が脇腹に突込みし刀を抜き取るときあいたと小聲でいふなど、お正月だけお目出たいものなり。芝鶴丈の相馬良門役。厚化粧の大若衆の拵にて姉の切首を持来りて頭から主人をどなりつけ、にぎりでも拵ふるやうな手附をして一旦切穴に這入り、着附も替らずに假

髪をほぐした丈でまたせり上になり、うれより澄まして笑ひ乍らぐる／＼と廻り、秀正の首を切りて前の流れに打込み、欄干に足をかけてきつと中を見込むは、首の落着が氣になると見たり。うれより道具大廻りになり、一段高き壇の上に入りて錦の旗を横げ、大見えの高笑ありて、又逆もどりの大廻りにて幕とは、手数のかゝつた御趣向にて、うの癖思召は一向に解せず。三幕目如月庵の塙。松之助丈の瀧夜叉姫役。切髪に白の着附、紫の衣を纏ひ、蓮の花を鬨物桶にさしたるを携へての出、美き中にみづ／＼としたるところあるは福助丈、米藏丈杯も及ばぬ程なり。阿果坊がじやらつきを避くる間もよく、安方を捕へて色摸様の口説は露のたるやうにて、かやうな艶つぼき事にかけては當時向に敵なかるべし。安方の自殺を見て痛ましとの思入も尤なり。装束を改めて長刀をかいこみ、花道にて六法の稽古は少々恐入りたれど、此小言を此丈にいふは無理なるべし。勘五郎丈の阿果坊役。眉毛の太い作り、瀧夜叉を捕へての口説にて踊り廻り、振りつけられたやけ腹に注進せんと花道まで往きかけ、持ちたる足駄にてつけをうち、音に氣が附きて下駄を口へ當て、土をなめて顔を蹙むるなど、當人の考ではこゝはおれが持ち場だから思ひ切つて氣焰を吐きやせうと例のちよび根性を出したのか、仕たいはうだいの悪ふざけをするばかりで一向役に氣がはいらず、いつまでも道化と悪ふざけと一つに心得て居る様では、とても枯れた藝といふ段には到らず。駒之助丈の善知鳥安方役。姫君に逢うたるを喜ぶ初手の中は謹みて居られたるが、色合になりて迷惑な素振、良門を見て氣を揉む思入などは此丈には無理と見え、たゞぼんとしてござる計、うれより治まる御世の官軍にといふやうな諫言をしても用おられず、刀を腹に突立て、うれ御覽なされ切腹致しましたと自惚れても一向に感じのないところから、鱗が獵夫を鵜呑にしたといふ見えで彼方此方との

たうちまはり、呻るやら吠ゆるやらさま／＼の藝道を取立て、さて良門に首を刎られ、ぼたりと後方へ斃れ、かたりと前の切穴より首が出る仕掛まで御苦勞のことにて、樂屋入の後は本郷区内の按摩惣じまいといふやうな御趣向もあることならむ。芝鶴丈の良門役。人形町仕込の拵にて赤いこと／＼。花道にて瀧夜叉に六法の稽古をして先へやり、後より日の丸の扇を開き踊り乍ら引込みのいやらしさ、こゝに來る赤襟連は涎々でがなごらう。四幕目越中立山の塙。雀右衛門丈の鷺沼上郎役。六部の拵にて出で、亡靈より傳言を聞く役。昔の海老藏か團藏のねぢいさんにでもさせたらうればそれはぞくつくやうな見聞がござらうに、此文などは一向に睨みのきかぬ人ゆゑ、只舞臺へ出てござるといふばかり。駒之助丈の善知鳥亡靈役。西洋花火で土間の見物をけむがらせながら、出て來たところは足があつて、れまげに話をする間にくたびれたと見聞、ちやんとかしこまるなどは此丈でなくは出來ぬ仕打。鳥が二三羽來ると手出しもせずにもだえ苦み、切に鳥の羽が生ねて宙乗をせらるゝまで相替らずね骨折なり。五幕目外濱安方内の塙。富十郎丈の安方妻錦木役。毎度ね勤めの世話女房なれば通常には出來たり。しかしね骨折の割には筋が悪いゆゑだれこみたり。勘五郎丈の醫者老熊役。手強くせられたるゆゑ阿果坊などよりは見上げたり。しかし松葉いぶしなどいふ無法は今の時世には籍らぬ筋ゆゑ、音羽屋の聲色を使つて當人はいゝ氣で居れど、神經のある人には大不受なり。雀右衛門丈の六部役は相替らず出來されず。銀之助丈に蹴落さるゝばかり。宗三郎、團若兩丈のかけ取は御苦勞。東藏丈は御免被りたし。銀之助丈の千代童役。子役の中の大立者だけありて、假髪の好より着附も申分なく、かけ取が責むるを見て、自分の着物を形代に出す仕打、その場で思ひついたやうにこなさるゝは大したもの。縛られてよりの仕打も拔目なく、親の仇をしめて

の見えなど大立派にて、他の立者を蹴落すほどの出来は、いつも乍ら感心／＼。まづ當狂言中にては第一の出来といふべし。中幕

義経腰越状

三段目口切は家升丈の出し物。芝鶴丈の源義経役。拵も仕打も相變らず壯士役者を張つて居るとしか見えぬ。駒之助丈の泉三郎役。義経屋形は謹みてあまり悪身も出されざりしが、屋敷の場は藤紫の帯地のやうな上下でまづ荒膽をぬき、うれより女房にの物語に、後藤が亂酔のため面目を施したりと大真面目にいひて腹をか／＼させ、いか／＼の乗地になりてより鐵砲を做大に投出して膝をぼんとうつ仕草など、後藤よりも見物が膽を冷したり。勘五郎丈の錦戸太郎役。拵も相應してその人らしく見え、仕草も大落附にて手丈夫にこなされ、其中に憎味もありて結構。後藤に酒を飲まする工合よし。この丈はいつもこの呼吸でゆかると、立派な所に使へる人なれど、ちよびをやられるので事はしとなるなり。とに角一番目とは見違ふるほどの出来なり。團若丈の伊達の二郎役。もはや年輩ゆゑ若衆假髪のうちりは悪けれど、仕草も調子もきつく出来、錦戸との呼吸も合ひて、後藤に酒を飲まする件もよし。小紫丈の高の谷役。こん度當座に這入られての初役なれど、いつもの愛摸様にて其人になつて居らず。かんじんの關女を呼び留めての出より、むじやくしや腹のあたりも同じ尻抜調子にて氣乗なく、次の出より關女をこむる邊も一向に應へず。一昨年の女寅丈などはこれから見ると數等の上なり。珍しき不出来といふべし。富十郎丈の關女役。これは悪くはなからうと思ひしが、さて／＼按外なものなり。名代の竹の節か木の節かのつゝ込白など、一昨年の秀調丈のはまだ耳底に残つて居れど、この丈のはさら／＼といふだけで少しも應へず。さあ往

きまずどねと足音をさするところもさしたることなし。二度目の説の件も相手が格段に悪いとはいひながら、ほろりとする段には中々到らず。切の乗地のところはいくらも見直したれど、これもまづ通常なり。右の助丈の徳女役。右團次丈の御子息にて初お目見えなれど、まだこの役は無理と見え、あ／＼と繰返していはるゝばかり。竹田奴の中にては宗三郎、梅樹兩丈出来なり。右田作丈の龜井六郎役。かんじんな氣乗に乏しく、その間は外視をして居るなど、お持前にてのん氣なもの。右團次丈の後藤兵衛役。義経屋形の場にて拵もつひとほりにて、人品も常體、花道の出端にて座り、東と西と後との見物人へ一々の御會釋は丁寧なもの。舞臺に來て下手より上手、うれから真中と場所をかへて座つて見るは、後藤ほどの豪傑もかやうな屋形に場馴れぬゆゑまごついたといふ仕打か。こんなところを坂地では細いと申すと見えたり。伊達と初對面の口誼ありて、先づお手上げられいとお互にいひてひい、ふ、みと拍子をとつて一所に手を上げるなど、後藤も中々洒落た人物かな。それより盃を辭みて清まし居る工合は、遊三丈がふうんといふときの様子あり。酒の香をかゞされ、滴をはねられて顔を盛むるところは、居酒屋の前は通り切れぬといふ肌合を見ゆ。盃がもめるからとて引受けて次第にへびくる工合は地があるだけに結構であつたらうし、階段を上る足取は大芝居をせられたよしなるが、こゝは少し睡氣がきざしたるため見落したり。酔潰れたところを起され、何を聞かれてもたはいないところは好くこなされたり。奴が來てより竹箒にてわくをかく足どりもよく、めぬきの講釋も軽くこなされ、三番叟も申分なし。總じてこの場は手に入つたところ見えて、あぶなげなく出来たり。泉邸の場は竹箒に二升樽を下げてかついでの出に上下ちやんとたゞむでゆはへつけて居られしは、流石生醉本性たがはぬ節儉なところ見えて、坂地ものは大受ならん。志か

し上下をとられてからぐつと人品の下つた上、花道にべたりと座つて膝頭を出しかけ、かろ又くの間懐紙を口に當て、ぺつ／＼とやらるゝは小間物店の用心か。おまけにその紙をそこら中へまかれるとは随分下作な思付なり。實は食客さまのね歸ぢやといふところも一向をかしくなく、女房とのじやらつきも裏店の八公なみにやられて面白くもなんともなし。離縁狀の文句をきくとき、一寸愁がかつた思入のあるのは、女房に別れでもないこの御了簡か。無理ひまをとる女房がうれ程に可愛いとは、後藤殿もふだんは先へ起きてねまんまを焚く方を見ゆ。高の谷がつめ開きの中に、すつかり後向にて顔を作り直し、鐵砲をきいて長白あつて起き直ると、假髪が上へはね反つて耳を出すは、岡崎の猫が取りついたといふ風情ありて不思議／＼。この間の睨みが舞臺の三分一しか届かぬといふやうなことをいひて、三崎座の太郎丈と比較して測量することは、ほんとの劇通諸君にね譲り申す。鎧出立にて出で、徳女の生害を見て頭から顔で泣かるゝゆゑ、別に涙を見せじとくひしげるといふやうな手數もかゝらず。女房が別れかねて、こんどはあべこべに鎧に絶るときも、ぶうと叱りのけるなどいふ無慈悲なことはせず、やはり引切りなしの御愁歎は、重ね／＼やけますと申すの外なし。この狂言は折角な目見ぬに出され、骨折つて勤められたれど、惜い事には一昨年歌舞伎座にて團十郎丈がつとめられ、後藤はかうもあらうかといふ豪傑の腹をぐつた氣味合を見せられたのがまだ目先にちらつき居るゆゑ、どうも感服の場合に到らず。しかし先年上京の折に比ぶれば大坂風の當振も餘程少くなり、總體にさらりとしてこられたは、全く御出精の効見えたるものとの評判はお仕合せ／＼。大切は

彫刻左小刀

人形が振にかゝると一時に仕事場の書割が上へ反りて仲の町の道具になるは、今まで見ぬ型にて花やかなり。雀右衛門丈の甚五郎役。振のない人を見ぬ、この方が人形じみたり。松之助丈の女房おとく役。先年市村座にて芝翫丈の相手になりて當てられし役ゆゑ、こん度も油がのつて無類の出来なり。例の酒事のところ、あほらしいわかしやんせと女房の腹になり、氣が附いてあい／＼と仲居の調子になるところ、ふるひつくほどよし。いよこちの太夫さま／＼。右團次丈の京人形。御年配であり乍ら滅相に美しく作られて驚入つたり。振事も花やかに色氣ありて結構なり。兎に角此丈が初れ目見ぬにて、同座も近年珍しき上景氣とはね手柄／＼。(明治廿六年一月廿一日)

安政三組盃

は松林伯圓丈の讀物を河竹新七氏が補作せしものよし。この出し物は昨年の初興行に圓朝丈の鹽原經濟録を出して大當りをせしよりの思附ならんが、われらはこの豫報を承はりし折、三組盃の筋は立者の藤吉郎にも大内藏にもこれぞといふ仕草なく、例の小染がまづ主人公らしくなり居れど、總體にこゝが狂言の山といふところなければ、芝居になるまじと申したり。さていよ／＼皮にかけると見ると按の定ごとも喰ひたらぬがちにて、跡部邸と門前の場とは築地の近松が折角の御助筆も寺島が納まらぬゆゑあづかりとなり、只小村井の梅屋敷だけが梅青梅幸雨丈の腕前にて面白き幕となりたるのみ。大切

奴風廓春風

は默阿彌翁をせついで書いて貰ひたりとか聞きしだけありて、流石年來曾我の仕組にはたこがはい

つてござる故、舞鶴屋の店前も役者を遊ばせておかず、奴傭の件も寸法がきちんときまりて面白し。序幕越後國村上布屋の場。同奥座敷出立の場。観音前一軒家の場。この筋の中源次郎はね麻より聞きて、大助が穢多の子といひたることは先刻承知で居ながら、大助に證據を見せよと無法な注文をなし、大助が刀の拵をいふたびにぎくり／＼驚くといふは、源次郎をば健忘にしたる作意と見たり。菊四郎丈のぬの屋の番頭丹六役。ひと芝居ごとにあくぬけてこられ、こん度の手代敵なども松助丈の呼吸ありて源次郎が棄子なりとき／＼／＼喜ぶ工合、獨りよがりをしての幕切まで旨いものなり。故障をいひて昔の事をいはれ、しよぐるところもよし。此丈も竹次郎の昔はがらがのびすぎて醜かりしが、役者がよくなるとうんなことも目に立たぬやうになるは不思議なものなり。蟹十郎丈は久しく旅に出て居り、久々にてこん度上りよし。どこか彦十郎丈の俤ありて、ねばり氣澤山の人物なれど、これも寺島家末社ふやしの政略からいへば萬更捨てたものでもなきか。篠原大助役にて秋廣の刀の由來を述ぶるところは妙に時代がかつて、田舎芝居を見る心地したるが、源次郎を足蹴にする惡味は手強くこなされ、二重から足を投出して仰向に倒れたる殺され方も目新しく、本が武士といふ品には乏しけれど、新上りにしては出來されたり。翫太郎丈の女房ね熊役。化七のかゝ衆でありながら一寸三味もづるといふ肌合が箝りてよし。大助が口をすべらす度にやき立つる工合も面白く、立廻りより殺された形まで申分なし。松助丈の原重右衛門役。布屋にて蟹十郎丈に役をさせ、自身は控目にしてござるは感心。刀の由來を聞きてうつむいてござるところもよし。一軒家にて幕明に寢込み居り、起されて一間に這入るまでさわりとして申分なし。源次郎が出で行くをうつと伺ひ出て呼びとめ、振返りて息込むを見て、決してね手向は致さん、この通り／＼と刀を投出

すところ、慌てた調子の中になつかながる性根見えて大受／＼。うれより共々に出世の工夫をせんといふ惡智恵をふきこむ工合凄いほどよく、ね褒に預つて恐入るといふ調子軽いこと／＼。これ雜物をと立ちかゝる幕切まで點の打ちどころなき大出來。まづ師匠の富藏と九藏丈の藤十郎とが堀端の出合と同じゆき方にて、一對の見物であつたり。秀調丈の布屋の後家役。着附の様子では、布屋の御亭が江戸に出たとき、柳橋から引張つて國へ歸つたといふ條件つきの代物と見えたり。番頭の子供の折のことをいひてこむる調子も、あまりつここみずきて菊四郎丈が受惡からうと思はる。大助が源次郎の刀を秋廣の作なりといふを聞きて、えと驚くは、跡で穢多の子といふ時のびつくり突きて惡し。こゝは不審の思入にて澤山なり。幕切にこれが因果のよりあひぢやなあの割白も正面をきつて、力を入れていひ廻さるゝは惡し。これも打萎れてあつさりさせらるゝがよし。總じてこの様なね附合の役では扣目にするが見好し。この邊から見ると此間亡くなられた杜若丈杯は真に大太夫様であつたり。榮三郎丈のね麻役。着附の好みも田舎の物持の娘に相應して好し。源次郎との色合、母にあひて羞かしい思入もかなりこなされたり。むかしいつも舞臺をはにかむといふ工合見ね、振袖をれもちやにしては體をぐにやつかせ、やりばがないといふやうな風のあるだけなのは残念なり。どうかこのねんえ仕立をぬけて、一人前の女形らしくしつかりと身を入れて貰ひたいもの。容貌がよいから、作つて舞臺に出て、白さへいつて居ればよいといふ氣では困るなり。菊五郎丈の渡邊源次郎役。月代かづら一本差にて釣竿と魚籠とをさけての出、あまり白粉つ氣がなくて男前減法によく、いつも若々として居らるゝは不思議／＼。ね麻の話を書いて居る中も火鉢の灰をかきなちして居るだけなれど仕草にうつなく、自分が穢多の子なりといふに驚き、持ちたる煙管をどん／＼

と灰吹にて敲き、小膝をすゝめて何といはるゝときまるころ、造作もないところなれど、この丈のはまた格別の旨味ありて大受く。半信半疑で居ながらも、じつと思案に沈み、自分の身を耻ぢてうつつむき勝になる工合得心がまぬりたり。娘の自害を留むるところ、是非なく路金を納むるところ、いづれも行届いて申分なし。一軒家の場。袴なりの旅袴もよく映り、大助に足蹴にせられてぐつとなるところは先度の八右衛門らしき節もあれど據なく、うれより夫婦を相手の立廻りにはふるひつくほどのよい見聞があつたり。重右衛門に呼留められて屹と振返り、刀に手をかけて後向の息込も隙間なく、とど腹を合せて出世を計らうとの幕切まで、相手が松助丈ゆゑ申分のあらう筈なし。兎に角この役はさらりとした筋なれど、當時他に仕手なき充分の箱り役ゆゑ、まづは上々の出来といふべし。二幕目米澤在紫見世、同奥座敷の場。この筋は源次郎御當人のいはるゝとほり天一坊のやうな筋なれど、菊之助丈が聲のつぶれたところからの思ひ附で啞娘を出し、穢多の入舞になつた猿之助丈の藤兵衛に、世間に出て名を上げねばならぬといふやうな見當違ひを云はするとは、これも役者様に對しての義理かしらねど、随分見物は欠伸ものなり。壽美藏丈の紫藤太夫役。拵も相應し、仕草も謹みてせられしは好し。源次郎を我子と聞きて喜ぶところもよく、始終自分を顧みて扣目にせらるゝ心いきも得心したり。菊之助丈の娘村役。餘計な附合せといふ役廻りゆゑ見物がだれ込みたり。啞の振もあゝくゝとばかりいはるゝは、あまり啞がりすぎ、色消しにて損なり。先度春木座の今文覺にて芝雀丈の啞娘は手真似が多くて、それで自然に啞と見えたるが、あの方が出来なり。猿之助丈の藤兵衛役。若く見せむがためか大層厚く塗られたれど、やはり若旦那といふよりも、いつもの番頭さんに近い人柄なり。松助丈の重右衛門役。衣服大小立派にて源次郎を藤太

夫に引合はす辨説といひ、三千兩の金を借出す調子といひ、たしかに世話の伊賀之助と見えたり。菊五郎丈の源次郎役。鐵色の紋附羽織より美々しき大小など一倍男前をあげ、藤太夫にあひて親子對面の嬉し泣も品を持ちてこなされ、すべて如才なき中に鷹揚なところも見え、この役の腹を穿ちての仕草は、これも世話の天一坊、たつと藤吉郎と見わた大賛成く。三幕目は預りになりて、四幕目兩國青柳樓二階の場。福助丈の藝者小染役。この役は三組盃の本文にては主人公のやうになり居り、初手が大家のね嬢様で、うれよりた大名のね妾に上り、我儘で藝者になり、うれから都築の思ひ者になる筋にて、性來酒の上が悪くて暴れ廻るといふ大變物なるが、こん度は三味線堀ね郎の件も出でず、こゝと花川戸の場とに顔を出さばかりゆゑ役は軽くなれり。島田かつら、黒縮緬裾摸様の拵にて大内藏の手を引きての出。本がお嬢様で、しかも御殿下りといふ品のあるはよけれど、うれが又邪魔になりて柳橋で腕を鳴した藝者とは受取り悪く、どうやら腰元浪路に近いやうなり。酒の上にて小園と大内藏とがわけがあるといひが、り、内儀の仲裁に氣が折れてわぶる工合、都築への愛想つかし、いづれも氣を入れてなされたれど、どこか重つくろしいところありて自然の妙に到らず。一體藝者の酒亂などといふ者は、先頃梅幸丈が宇田川屋久吉(酔月のね梅)の愛想つかしの時にやつて見せられ、芝居とは思はれぬ面白さに感心したるが、これを梅幸丈に望むが無理なり。家橋丈の杉田大内藏役。拵も人品もね宮師に相應して、小染との口説、都築との應答も鷹揚にせられ嬉しかつたり。かやうな何の仕草もない役に旨味あるは、實に役者に生れ付いた人といふべし。榮三郎丈の小園役。この方が小染より藝者らしいとは見物の輿論ならんが、うれにしても今様すぎで、うの頃の羽織とは受取悪し。小染との詰合は割にでかされたり。秀調丈の内儀役。着附の好み

目につきたり。菊四郎丈の同心高橋吉十郎役。鹽原の時切に顔を出されたと同じ様に一寸出て一寸引込むだけなれば、大向で御苦勞といふは尤なり。しかし穴のあぬは流石に巧者。菊五郎丈の都築藤七郎役。鬢の張つたかつらの好み、黒羽織着流しの拵へ、其頃の輿力衆の風をうつされたりと見えてよし。小染を貰ひたいと所望し、はねつけられてじつとの思入、立あがりさまに一昨日お出でといはれてきつと振り返り、又氣をかへての引込まで隙なし。二度目に出でて高橋を返し、三人三つ金輪になりて白渡り、色は思案の外でござるの幕切迄、斯様なてれ役をこれ程にこなさるゝは、流石は大立者の心掛にて感服々々。五幕目小村井梅屋敷の場。松助丈の跡部甲斐守役。ごましほのかつら、黒のぶつさき羽織、馬乗袴、塗笠に鞭を持ちての出。品格といひ貫目といひ、天晴の奉行職なり。亭主の案内にて離れ座敷に通り、酒肴を言付くる間も御前らしくてよし。幸吉に遠慮には及ばぬから、うこにかけて一杯のめ、まあよいからのめと無理やりに酒をのまするくだけ調子、幸吉が夜毎に遊びにゆくこと、かけ事をする事などを雑談のやうに言廻す工合、金の出どこは伯父なりといひてうの名をいはぬより、有體に申して仕舞へと調の調子になりて荒膽を挫き置き、すぐにがらりと世話になりて、うれは表向のことぢやといひ、威しつ賺しつ問ひ落す氣の變目不思議にて、息もつけぬほどの妙味あり。幸吉が證據の書付を入れ置きし紙入を取寄せ、中より女郎の文や、寄席の丸札を出して一々讀上ぐる可笑味も滅相面白く、書附を見て、さては都築がどの思入も應へ、これは千兩の代物ぢやと智恵をつくる所も軽くてよし。總體にこの役は下々の事情に明るく、何處から何處まで鋭く氣が附きて、始終寸分の隙間なき奉行職の腹を穿ちてのこなし振にて、殊更菊五郎丈の幸吉とのいきが合ひ、大出來大當りのことであつたり。菊四郎丈の高橋役。八町堀風の拵よ

くはまり、取巻にあはられてのうかれ工合、跡部と顔見合せて慌てゝ物蔭に逃込む様子、いかにもかくれんぼの氣味見れてよし。榮三郎丈の小園役。善し。菊三郎丈の船宿女房役。あんまり褒められもせず。蟹十郎丈の亭主役。これはねぼり氣ありても差支なき役ゆゑ質樸に見えたり。菊五郎丈の馬丁幸吉役。淺黄のはつび、尻はしよりにて揚幕から舞臺までかけ込んで來らるゝ工合大いませにて、今御前がね出でだから掃除をしてねいてくんなどといひ乍ら肌を脱ぎ、手拭で脊中や領の汗を拭く仕打大受。御前のね出を見て花道まで出迎ひ、ね供をして奥へゆきかけ、一寸梅の花に鼻をねつゝけて嗅ぐといふやうなちよびをやり、私はね馬の口を洗つて來ませうと下手に入るまで、氣の利いたものなり。亭主が自分の膳を御前のところにもつてくるを見て、あつちへ持ていつてくんなどしきりにいひ、跡部がこゝで苦しくないと据ゑさするに顔を盛めて額に手をやる工合、本もの。跡部がこゝへかけろといふに幾度も辭義をして、やう／＼腰をかけ、盃をさゝれ酌をせられて勿體ながり、ね酒はね供先では頂きませんと一應辭退し、強ひていはれて、うれでは一杯だけ頂き升といひ、もう一杯と勧められ、うれではこれつきりというて飲む工合、下司の性根を穿たれて不思議。遊びのことや賭博のことを残らず知つて居るに驚き、びつしより汗になつて恐れ入り、うの度ごと下にありて、土に手をついて物をいふなど、細いこと。金の出どこを問はれてくつとつまり、有體に申してしまへといはれて下手にうづくまつて恐入るところも、松助丈との呼吸あひて甘いもの。と書附を入れし紙入を渡し、女郎の文や丸札をよまれ、うの度ごとに冷汗になつて引たくる可笑味大受。この書附は千兩になるといはれ、これが千兩になり升かと乗地になりて座敷にあがり、われ知らずぼんと手をうち、その音に心附きて慌てゝ下へ降りて來ると

ころ、寺島十八番の氣をとつた趣向にて、見物一同を呻らせたり。この馬丁役はいつもの悪奴ほどの悪黨ではなく、唯道樂で身をもち崩し、一寸銀鎖の紙入でも下て、骨あたりで通がらうといふ手合なるに、音羽屋よくこの氣組を飲込んで、唯氣の利いたちよびだけにこなされたるは、流石といふべし。六幕目花川戸都築宅、同じく男部屋、小塚原地藏前の場。秀調丈の藤七郎妻ね貞役。白粉こつてりには作られたれど、朝幕の布屋の後家とがらりと替つて居るとは申されず。しかし苦勞と血の道とのために塞ぎ勝て居る人とは確に見えたり。幸吉の立つを呼止めて心附をやるところは届いたり。行末を按じての道具替りは一通り。猿之助丈の手代藤兵衛役。幸吉が千兩借せといふを聞きて、こりやあれ前作者かあるねといふ白、時代がかつて受け悪し。地藏前の場にて傘をすぼめての出より殺し迄の立廻りは御苦勞であつたり。松助丈の下部友助役。幕明に雪をかいてござるところも感心。幸吉と杯一きめ乍ら兄いゝと無暗にねだつる安い仕打、骨の女が兄いゝの事を惚けて居たがあいつは本物だともたせかくる鹽梅面白し。幸吉が今夜奢らうといふと、ういつは難有いといつて直に着物を着替へ乍らもちよいゝと捨白でごまをすつて居らるゝ工合、この一場のとりやりは一寸としたことなれど、この丈の抜けた腕前にて面白い場となりたり。相合傘の出より、實はこゝで料理つて仕舞ふのだと氣の替るところも大袈裟にきまらず、立廻りも相手のひつ立つやうに心掛けられ、とど慌てゝかけこままで大出来ゝ。さうして甲斐守といひ、友助といひ、こん度の三役はいづれも相手になる師匠の役をくつて居るほどの大役なるを、何の苦もなくやつて退けらるゝは大した御出世をせられたものかな。殊更一つは天下の奉行職、一つは黒鴨の紺看板物と、これほど違ふ役廻りをがらりと替へて、どうしても一つ人とは見ぬぬ様に仕分けらるゝはいかにも

恐入つたものにて、松助丈萬歳といふべし。秀世丈の下女ねかめ役。ねどなし作りのね小間使にてよし。菊五郎丈の幸吉役。どてらの上に羽織、袴、大小までさしたたがさつ加減、ござり奉るといふ八五郎のねもかけありて妙なり。羽織の裾を法被のやうに捲り、懐から手を出して火に當るも面白し。ゆすりもいつもと手替りにて、他人の指金で口を利いて居るだけの罪のないところ見ぬ、千兩貰ひたいといふところも至極手軽く、證文の中の此方の密事といふところが千兩の價値だと高慢ぶつていふ工合、不思議に軽く嬉し。友助が一杯のさうといふに、ういつは難有いといつて立上りしなに腰刀を忘れてゆくと受けた。友助との小酒盛にほろ酔機嫌になり、無暗に體をゆさぶつてゐる工合、好い心持になつたといふ風見にて好し。友助がねだつるを打消す中にも何となく恐悦がつてゐる鹽梅、銀鎖の紙入をひけらかしてこれがなくつちやあたりの馬丁だといふところ、ね龜を口説くにもちかづけにきざな文句を並べ、ふられたやけ腹半分これから奢るからつきあひねわと出掛るまで、すべて下司ばつた手合の根性を寫されて、その中にどこか愛嬌のある藝風は十八番ゝ。一杯くつたと心づきてたんかを切るところもよく、どつこいさう旨くはいかねと傘にて舞臺を敲き立てゝの立廻りより落入まで、悪長くなくて目覺しかつたり。大詰都築藤七郎邸はなれ座敷、ねなじく玄關さきの場。福助丈の妻ね染役。奥様風の上品仕立はいつもながら鮮なもの。一所に寝たこともなくといふはあまりむき出しの言分なれど、この人の知つたことではなく、大内藏ならぬ人にも安心せしめんため書加へたる補作者の婆心と見ゆ。家橘丈の大内藏役。紙入を拾ひてさては物取と見ぬるわねの幕切もきまつてよく、拵も堅氣の商人となりし體見にて申分なし。秀調丈のね貞、猿之助丈の藤兵衛、これは又つまらなすぎて御氣の毒なり。菊五郎丈の藤七郎役。立

聞をするところの人體もよく、さら／＼と立ちをあげて氣前を見する件も申分なし。捕方の向ひしをびくともせず制する工合は落附いてこなされ、大舞臺であつたり。繩付になりて引かれ行く幕切も三河屋の藤十郎といふ腹にて、鼻つ張のつよいところ、其人らしく思はれたり。大切舞鶴屋見世先の場。福助丈の大磯の虎役。白玉、阿古屋、八橋以來手に入つてござる太夫職、貫目もありて結構なり。十郎と口説の振も、あつさりなれど受たり。榮三郎丈の化粧坂の少將役。福助丈と連立ちの押出しも見劣りなく、振も手綺麗に出來たり。家橋丈の曾我十郎役。當世無類といふべき專賣物なれば評するに及ばず。思ひ出せばれ／＼うれよの物語も見事なもの。志かしどこか艶氣が薄らいたやうな氣のするは、白粉の濃過ぎるせい、分別くさく滋味のついたせい、たゞしはわれらのひが目なるか。菊之助丈の下部十内役。いつもの五郎の穴をゆく作意と見えて、十郎の大鳥なところへ搦てきばり／＼としたきつい振を見せられ、奴なりの男前も滅相によし。猿之助丈の鳶の者役。皮羽織の映りもよく、崩玉をもちての振も出來たり。竹松丈の娘に雛役。ね嬢様仕立びつくりするほど可愛らしく、振もふつくりして、菊之助丈についての出來なり。菊三郎、秀世、佳調諸丈の新造。いづれも綺麗つくめ。中にも佳調丈の振は目についたり。日本堤の場。丑之助丈の舞鶴屋倅小傳三役。數千の見物を前にねいてやんちゃをいふ膽つ玉は、さすが門閥家だけありて恐れ入つたり。きく丈の鳶の者役。丑之助丈の影になりて、いきを合せてゆかれる工合感服／＼。菊五郎丈の奴風役。當人望んで出されたる輕業物なれば、點の打ち所のあらう筈なく、たゞあつと申すばかり。初め押出したときの顔の作りから髻の附工合、腕組をしてふんばつた形、この前の紙人形の時も當てられたるが、今度もやはり紙鳶のまゝにて恐れ入たり。釣上げられてからの振も窮屈らし

いどころ微塵もなく、こら／＼と浮かれかへつて躍つてござるのんきさ加減不思議／＼。手拭を投るときべつかつこをしたたり、じやんけんをする愛嬌には見物一同手を打つて喜びたり。とりわけ目を驚かしたるはくるり／＼とこのところにて風車のやうに宙でぐる／＼廻られる離れ技にて、うれより風に吹とばされての引込みまで、當時外に仕手のなきけれんものなれば、かゝることは俳優の大家たるものゝ須く行ふべきところにあらずといふやうな片意地ものを除きては、大受／＼との評判なり。又この幕に出語りの小文字太夫丈が唄はれた奴風の可笑味の調子は面白し。(明治二十六年二月五日)

春木座の三の替りを評するに先だちて、一寸言ひたきは二の替りの事なり。先づ

楠公遺訓軍歌譽

といふは、竹柴諺藏氏の書卸しを右團次丈が阪地にて勤め大入大當をなしたるものと聞きしが、われ等が見たところでは第一楠公の夢を盗人が見て改心するといふぬきの趣向からして取合せ悪く思はれ、一度も二度も顔を合した人でも、又合さねばならぬ筈の人でも筋の爲には側を向いて知らぬ顔をして居るのんきさ加減、隣同士で掛合をさするため二尺に三尺もある大穴を壁に明けて置く馬鹿らしさ、くら暗で手探りに金剛石の指輪を蝙蝠傘に入るゝほどはいつこい盗人が、その蝙蝠を禮をいつてもつて行く女の方を見向きもせず、空耳を走らせて居る都合好さ、何々でありませうと尻上りの演説調子を使ふ人あれば、根生の江戸つ子が詛り澤山な詞でたんかを切るなど、一々あらを並べたら際限あるまじき次第なり。さて右團次丈の藝道はといふに、當時堀越の外には真似ても見られまいといふ楠公の大物を出され、頭から正行をつかまへて愚痴たら／＼の大泣で、さては例

の泣男が楠公の名代を勤めたのではあるまいかと疑はせ、何か肺肝をめぐらすといふやうな理屈を並べても一向にめりはりがないうえ、唯もがついてござると見ゆる計、幕切馬上の引ばりといふと勇ましいが、これが此世の顔の見納めといふやうな女々しさ、こゝで鏡を踏み外して落馬するといふ細い仕打を見せられぬだけはまだしもなり。道具かはつて車夫御前吉のいなせ肌といひたいが、拵も調子も一向いなせな所なく、なぜこんな事なら大阪根生の車屋にせなんだのかと作意に不審を立つるが落なり。こゝから切までいくつとなく幕を替へたるが、どこまでいつても一向に氣合の替り目なく、何か氣組んで時代にいひかけ、世話に調子を軽く替ふるといふやうな器用なこともせず、いつも同じねつちり調子にて、序幕を見て直に歸つても未練の残らぬといふ藝風なり。總じて此丈の役々を勤めらるゝを見るに、假髪と着附とはうれ／＼違へらるれど、楠公になりても楠公とは見えず、唯右團次と見ゆるだけ、御前吉になりても御前吉とは見えず、唯右團次と見ゆるだけなのは大したものなり。又丈の御子息右之助丈がこの折に小楠こゝ御前吉を勤むる右團次丈の白を借用いたずを勤められたるが、頭をぶる／＼震はせて、肩で息をしてござる様子。かうさへして居れば泣いて居るやうに見ゆるからその親御の差金を守られたりも見たり。かう並べて居らば、三の替りの評判に進むときなかるべけれど、うかがそれ曰くのあることにて、三の替りの評はあまりちよびりすぎてあきもじゆゑ、先づ劍の巻の格で二の替りをすつばぬいて留飲を下げたるなり。さて三の替りにはやう／＼十一時前になりて遅刻出任を任り、二時過には避易して退出し、三時間あまりに二幕目切より三幕目と中幕とだけを見たる次第なり。こん度の名題は

優風流景清外傳

とありて、中幕は

雪月花眺賜

といふ淨瑠璃。これは本筋と搦み居るやうには見えず。景清はどの景清ですと問はれて、さうさ大阪の景清だらうといひし位なれば、われ等もあまり利いた風は申されぬど、繪本で見れば九幕あり。最初大日坊が忠清の奥方に戀慕して痣丸に殺さるゝところは、法界坊と牛若丸とをてれこにしたとでもいひさうな繪組に見え、五條坂の場は扇屋熊谷をそつくり借りて来て、熊谷どこをゆく景清が姉輪どこをゆく難波次郎をへこませて阿古屋を救ふ、うこへ景清の義兄弟長田と云ふ人が来てじん助を起したるが、阿古屋が自身の妹と知れてから名残を惜みやれといふやうな通をいひ、うこで景清と阿古屋が簾をあげたりさげたりして散々ちよ／＼難波の次郎を勤むる宗三郎丈の白を借用す、痴情なるべし)を見せ付けた末、壇の浦へ居所替りとなり、こゝにて鏡引ありて景清が引ちぎりし鏡をもちて鏡六方とでもいふべき身で這入るといふ筋なり。中幕は初手に化されを見せ、次に一つ家の婆と二刀傳の熊の精のやうな娘とが雪降の山家に居るところに、廻國修業者が来て地獄變相の繪解きかなんかして紫の包物を出すと、娘がこれこゝ胡蝶の何々とかいひて息込み、本鐵砲がぼんと鳴ると、婆と娘とは下へぬけ、盜賊の手下が出で修行者に搦み、家體を上から壁が落ちて隠し、こゝに前の顔が又候並びててん／＼に引抜き、吉野の花盛りといふやうな道具幕で隠し、上から花の釣枝、下から菜の花の植込が出、こゝにさつきの娘が女狐小太郎といふ役にて、天徳然とした假髪、びかついた四天にて下から吊上げられ舞臺を下手から上手へ切り、狐六法に宙乗六法を加味したとでもいふべきこゝに振つて這入ることなり。何だか少しも解らぬところが狐につまづれた證據

なり。次の十三内の場、非人小家、重忠邸などは、相生源氏からうづくり借りて来たやうな繪組に見え、琴責は人丸で濟ませ、入佛供養はいつもの大佛殿を見ゆ。理屈はともかくも無暗に目先が變つて同座の定連には嬉しくつて堪らぬ仕組方なるべし。駒之助丈の大目坊役。法界坊が泥仕合でもしたか、蒸氣船のまどろすが烟突の掃除でもしたかと思はるゝやうに、どこが目か口か解らぬほど黒く塗られたるは、凄いのなり。後ではもどりになりて、わざと痣丸の手にかゝつたといふものが、さりとて手敷のかゝつた大立廻り、道具を廻したり、山から轉げ落ちたり、いつも乍ら御苦勞千萬の事なり。魯智深然とした肉禰禰の腹に鬱金の腹巻をしたところから紅をたらゝと流してのうなり聲は大向の見物を悦ばしたり。三保谷四郎役。のりと然とした相方にて揚幕より駈出で、躍り乍ら舞臺に来て、見掛計りの大立廻りありて鏡引になり、兜を引ちぎらるゝ件、こゝも十八番の大呻りにて、最負連は思はず力瘤がはいつたとの噂なり。芝鶴丈の修行者台山役。男前を見するだけの役ゆゑ、新駒屋くゝと聲をかけて、ぐくついた人もありしよし。宗三郎丈の上總忠清役。謹んでせられ、相應に品も見わたり。難波次郎役。これもつゝこんで安くせられ、受の好き方なり。右田作丈の上總太郎役。右圓次丈の聲色は中々巧者なり。獵人谷藏役。男前も可成に見受けたり。藤藏丈の上總二郎役。金切聲であんに計らんや(豈計んや)といふやうなことをいひて器量を下げたり。團若丈の老嫗判役。中々惡體にて難波を宥めて返すところも出来たり。下部きよろ平役も可笑味ありて受けたり。梅樹丈の僕當内役。忠太ぼりにてよく箱りたり。雀右衛門丈の長田秀頼役。餘計なちよつかいに出る役にて一向に榮はず。この丈も何をさせても雀右衛門の方なるが、これでどこが名人なのかしらぬて。富十郎丈の五十奈役。素顔で出られたのかしらぬが、いつもこの丈の更け役は色が

黒すぎて不受なり。松之助丈の阿古屋役。一向阿古屋らしき處なき仕組ゆゑ仕方もなけれど、唯相變らず男好きのする女と見ゆるだけなり。小圓次丈のね篤實は女狐小太郎役。初め娘形にて、次が四天形にかはるのが御苦勞といふだけなれど、これ位の御苦勞は役者には當前なり。宙乗は寺島の奴風などと違ひ、大相せつなさうにね見受け申したり。右圓次丈の痣丸役。後に景清になるほどの勇氣は見ぬねど、假髪や着附にて牛若然と若く見たり。立廻りにて倒さぬ中に轉んでかゝるやうなことをせらるゝは、相手を引立てんとする立者の心掛かしらぬて。五條坂の場の拵は盜賊兇雷也といふやうな風にて男前も好けれど、どこか更けて見ゆると歩くときに體をゆさぶられるとが氣になりたり。早拵へにて鏡出立となり、長刀を杖にして夢が覺めたる見ぬ、髻の作りなど、この前の楠公と同じ様に見ゆるは残念。鏡引の立廻りの生ぬるきは芝居なればうの筈のこととして、鏡をもちて花道を六法で入らるゝ大見ぬ、どこからどこまでまんべんなく見るといふ振方にて、見物一同大堪能をしたりとの噂なり。深見實は地獄谷夜及馬役。老人の仕打に胸をついては前へ屈まるゝ工合、先代の小圓次丈でも當込まれたのではないかといふやうな氣がしたるが、兎に角衣裳を引抜いての大見ぬなどは中々凄くやられたり。これにてねしまひとして、残りはいつかね埋合せを致すこととすべし。(明治廿六年二月廿四日)

公園の吾妻座は暫く休業のところ、二三の新顔を加へたりとやらにて初春早々久々にて蓋を明けしに、何が人氣に向かざりしやら、間もなく落になり残念なことと思ひしに、こん度は太郎丈が一枚ぬけて跡は大體前の顔にて二の替りの開きたるはまづ以てめでたし。一番目は

難波戦記和陸盟

四幕なり、この序幕には近江の兼といふ時代違ひの勇婦が洗濯盆をかゝへ込んで足駄で馬のたづなを踏まへて居るだんまり模様番附にあれど、二幕目には穴山小助の注進と眞田出陣との模様見、三幕目には淀君が和陸の約定したりとて眞田が心痛し、木村が使者に立つ件、四幕目には茶臼山神文取かせ落着の件あり。兎に角議論づくめの割にはだれのこぬ出し物にて見應へあり。中幕は

戀女房染分手綱

の由留木御殿と八藏との件。二幕目は

誰根岸成就掛額

三幕なり。このかたりに噂に残る戀情奇談と記しあるは金水時代の小本の割書にありさうにてをかしかりき。根岸の寮の場など罪もなく可笑くて大向より畜生めと聲をかけさするに足る出し物なり。眞面目にいひても、男嫌ひの小三が金五郎の眞情を聞き初めて命を打込むといふ作り方は感服なり。扱一番目のはな二幕と二番目の切一幕とをぬきにして評せん。福圓丈の木村重成役。假髻は今時の流行物だけに惣髪がうの人らしけれど、こゝらの芝居では青黛にせられたも據なし。淀君の生害せんとするを留め、自身神文受取の使者にたゝんと願へど聞かれぬゆゑ自殺せんとするところ、存外氣を入れてこなされ、いへど側を向いて笑ふやうなこともせず、人の白の間すまして横目をするやうなこともせず、まづ謹んで居られただけはよし。幕切守刀を見せて、これで家康をこの思入は四段目の由良之助を張つて大念入にこなされ、一回得心がまゐつたこのこと。本陣にて揚幕より聲かけての出、お立派なことゝ見物大喜び。父が讒死の物語を聞きての愁歎、誓文が偽なりと心付いての詰合もすきなくやられたるが、ぐつと調子をつゝ込んでいて、さて做大に正面を切り、左の

大紋の端を口に啣へ、右の手をうの下にかくして七首を握りし心にて、體を左へずつと寝かし、どこを見詰むるともなく目を空にして、小十分間ぼんとしてござるは、三崎座にてこの丈が源藏を勤め、玄蕃が歸りし迹にて腰の抜けし折と同様、大方放心の體であらうが、こゝが放心をすべきところなるか、うれども家康の手元にきつと目をつけ、まこと血判せずば一と打と息込むべきところなるかは預けとすべし。うれより列座の人々に稱美せられ、と暇を乞ひて花道にかゝり呼留めらるるまで、大儲け役にて受けた。幕ひきつくと立上り、何かやりとの思入ありてきつと揚幕を見込、二足三足ゆきては又ぞろ舞臺を見込みて思入あり、こん度は氣を替へてさつと這入らるるは猫が秋刀魚をとつた振とでも申すべし。鱗昇丈の眞田幸村役。惣髪に八の字髻、六文錢の紋つきたる紫地の大紋を着下し、舞臺一杯幅をとつたる大きき、例の唸る様などがり聲で何かいひ廻さるゝ凄さ、此座組の大元帥とは確に受取れたり。唯餘り反かへらるゝので何か手丈夫のつゝかひ棒を後からせねば無用心に思はれたり。しかし正直のどこ敵役じみぬだけは流石老功といふべし。八百三郎丈の郡主馬役。いつも乍らぬりすぎのすこたん流には閉口なり。ちと師匠の氣組を學ぶべし。澤村門之助丈は故人高賀丈の門人にて、暫く坂地に赴かれ御修行あり、今春新上りとのこと。後室淀の方役。品格の點は故人杜若丈すら難せられし役ゆゑ據なしとし、拵の安つばいもこの座ゆゑとして見れば、色氣もあり、思入もよく仕分けられて申分なし。乳人重の井役。御目見の出し物ほどありて、すべて高賀丈うつと見、御腕前のほど確に分りたり。双六の間は師匠の聲を肖せてござる丈なりしが、二度目の出はかけを變へて出られしゆゑぐつとひつ立ち、馬方させる親の身はの白はあつさりなれど、それなら己が母様ぢやと縋り付くをふり切る折に、正面をきりての

立姿もよく飛ついで懐きの邊、上手に來て奥を見込みては下手に來て手をかけんとこのなほ、とつた氣も亂れ、絶られてよろ／＼と二重より引れろされて泣伏すまで女の情合よく寫されて、大泣に泣かせられたり。得心せんと分別を定めての物語もきつぱりして厭がこず。現在わが子に馬追させの邊は少し振になりすぎたやうなれど、糸に乗るところゆゑ據なしか。奥より呼ばれたときは一旦這入り、山川で怪我ばしすの件は立身で離れていひ、金はやはり服紗包みをやらす、白紙につゞみてやるなど、こゝは堀越流を學ぶ方が無理がなくよきかと思はる。母は魂消白入つての邊の大泣も充分にこなされ、二重によりかゝり扇を開き泣をかくしての幕切まで、すべて芝居をして見せられ、少し騒々しい氣味の處もあれど、うれば年功の足らぬところとして、これ程の大物をさほどの難もなくやつてのけらるゝは大手柄大出來のことにて感心／＼。追々師匠直傳の和いものを拜見いたしたく、楽しんでまつて居るべし。藝者小三役。これはぐつと重の井と氣を替へて仇つぱい作り、中々よし。八百膳へいつて飲み直さうとの白あつて入るところ、少し安つぱいとの評あれど、微酔のところゆゑ勘辨すべし。根岸の場。籠の鳥によりへていふことを利かぬとの白ありて這入るまで、男まさりの氣性見たり。金五郎の物語を聞きて心底に思込むところ、刀の下に直りて覺悟極めしところ、いづれも申分なし。金五郎に見えれ乍ら傘の柄を握り、うの傘は一角が差出し居ると心附きて突放し、つひと外に出て金五郎の傘の中に這入るところ、いかにも色氣ありてぢや／＼が來たり。されば三役共うれ／＼にこなされてお上り早々上評とは結構なことなり。市川男女太郎丈の自然じよの三吉役。故人男女藏丈の御子息のよじ聞きしが、可愛らしく發明さうながら欲り好く、烟草の吸壳を彌三左衛門の頭ではたいたづらも受よく、重の井を母と知りての物語もはつ

きりし、夜は沓打草鞋作りの邊ちよばに乗りて草鞋をふまへての見ゆも出來たり。母でも子でもないならばの件もたつぷり泣かせ、坂はてる／＼の幕切まで、この前が丑之助丈でありしだけ、一倍あぶなつけないところが見ゆ、大出來のことであつたり。鶴助丈の沓掛の八藏役は少し虚しては居れど、宇十郎丈のひぬかの相手ゆゑこんなものでよいか。中村源之助丈は故霞仙丈の門弟のよし。陸奥左衛門役。男前はよけれど、さしたることなし。金江金五郎役。少し小作りなれど、天鷲絨額のうつりよく、額と短冊とに目をつけ、小三の後姿を見送りて、ても美しいとの白ありて氣を替へての幕切、貫目のことはぬきにして、どこまでもさつぱりしていやみのない藝風は嬉しかつたり。小三の文を見て悪いと知りつゝ察に忍ぶ件もくどくなくて受けたり。打擲せられても身の科と平伏し居り、身の上をかたりてす／＼と追出さるゝまで身上に嵌りてよし。二度目に焦込みて追取刀にて踏込み、一角とのつめひらき、小三の心底を見て、若し討られたら女敵うたんと氣組抜目なし。とど相合傘の幕切までさつぱりといふ一點張にてやらるゝところを見ると、役によりては喰足らぬ憾もあるかもしれねど、まづやりすぎの臭い仕打よりは遙か上にて、新盛座の歌女太郎丈と共に儘に未廣屋の門下と受取れたり。宇十郎丈の後藤又兵衛役。本多上野役。いづれも大疑に作られたれど、體にない役ゆゑ受けかねたり。獅童丈の代り役にひぬかの八藏。これもやせつぱりの丈には不釣合にて悪落が來た方なり。しかし仕打はいづれも相應にこなさるゝは、全く年功の爲に見たり。富田偏竹役。これが本役にて、作萬端大歌舞伎の半道として少しも恥かしからず。刀をすり替ふる可笑味より花道の引込、偽筆の案文など、いづれも大鼓醫者の根性見ゆて、喜知六丈のおくば以來の出來なり。菊十郎丈の徳川家康役。品格は論にならねど、木村に昔語りをさせて、うの間に板倉

の指の血を刺す工合より木村の人物を賞美する件も思入をもちてこなされ、感心なものなり。茶屋の女房も力役。これも味よくせられたり。丈は四代目菊五郎の門弟にて、後に市川九藏の門に入り、新富町で忠臣藏りりの折勘平の母をつとめ見功者を驚かしたる功の者のよし、さもあるべしと思はれたり。咲松丈の板倉内膳役。新藏まがひのさら／＼藝、鼻もちがならず。本田彌三右衛門役。中々凝つてせられたれど、つひちよ／＼の邊も一向に可笑くなく、重の井の泣くを尤めての笑も妙な堀越張、見悪かつたり。奴作平役も芝居を離れて實地がらだけ堪へられず。馬十丈の秋月一角役。月代かづらは好けれど、白粉こつてりは京家の侍といふ心かしらねど映り悪し。菊五郎丈杯も肉でせられたれば、どうせ安敵のことゆゑ、其方がよさうなものなり。僞文をかゝるところはさしたることなけれど、金五郎の踏込みし折にあやまる工合は中々大舞臺なり。起請を書きぬと聞き、小三を手打にせんと焦立つ工合、刀の下に廻りし小三の美しさに切りかねて、手打はやめだとの可笑味も安くせられたり。幕切傘をつき離され、これを振上げて打たうとする見ゆまて、仕打は流石に功者なもの、この次には體にある物を出して腕前を見せ玉へ。(明治廿六年三月七日) 歌舞伎座の彌生狂言は左の出し物なりき。

拜賀卷、鏡獅子、黒手組、忍岡戀曲者

一東鑑拜賀卷

櫻癡居士

拜賀卷は東鑑の二三の記事をつなぎ合せて四幕に引延したるものなれど、根が芝居になるほどの代物でなきゆゑ、大詰の外は見物一同大だれにだれこみたり。取分三幕目諫言の場は、半分は後から附加へたものでもあらう位の縁起を事々しく並べ立て、實朝は半分殺さるゝ覺悟で行くやうに見

ゆるは、いかにも馬鹿／＼しくて不評なり。鏡獅子は長唄の枕獅子を書直したもにて、傾城では下品なりと御小姓に改めしなりといふ。

一黒手組一對白柄

故黙阿彌翁

花川戸の助六が事を仕組みしものにて、大分講釋屋からの借物もあるやうなれど、二番目物にきちんと箝まるやう芝居にこなしてあるゆゑ、安政五年の書卸しを二十六年目の今日見ても腰の來ぬは、流石なり。淨瑠璃も權九郎のちやりより白玉のくどきまで、名句づくめにて結構なり。こん度は少し手が這入り、白玉の父の浪人を門付の母にしたるは哀れにてよく、晋山が猥褻の白、權九郎を悪くいふ可笑味などは今に箝らぬゆゑいはぬ方よし。

一禮室頼家卿
一文章博士仲章
一紀伊國屋交左衛門

市川權十郎丈

頼家役は信長のやうなりとの評あれど、こん度はこの丈に箝めて痾癖のある大將に書卸しゝものゆゑ據なしか。金窪の口車にうかど載せらるゝ淺はかな工合、計略と知つてぐつと焦立ちての烈しき立廻り、身上に箝りてよし。唯われを召捕らん爲なるかといはれしは、將軍家の詞に似合はしからず。仲章役は博士の人品備りたれど、無法に古例を並べて諫言に邪魔を入れ、後ではぐつさりやらるゝ筋にて、随分悪い役廻りゆゑ、總體に受けかねたり。幕切に折れたる木劍の柄を持ちて不審の思入も見當違ひなり。紀文役は書卸しの香以山人にもならず、正銘の紀文には猶ならず。圓右の聲色に走をかけたといふなまり調子で、とんだ口上茶番だといはるゝと、齒が浮く様にて堪へられず。根が此丈の島にないものとはいひながら、まづは古今の不出來といふべし。

尾上菊之助丈

千壽丸役は姫君の拵にて出で、立廻りになりてもやはり女のこなしで居り、いよ／＼千壽丸と知れてより、きつぱりと男になるまで、心得たものなり。しかしこの名告は調子をきつく張らねばならぬゆゑ、例のつぶれたのどが際立ちて聞苦しかりき。朝時役は男前よく、松島の局に振つけらるるいつもの狂言とは大層の相違なり。牛若傳次役。近頃やつし役にて大分賣出してござるところへ、こんなでんぼう役がつきたれば、ひいき連は何れも氣遣ひしが、さすがは梅幸丈、初日前に或鼠負の人がどうであらうかと按じて聞きたる折、別段稽古もしてやりませんが、總凌ひのときに體がきまつて居ましたから、多分大丈夫でございませうと答へしよし。子を知ること親に如かずとはよくいつたもの、苦もなくやつてのけられてわれらも大悦なり。手拭目深に冠つての三尺拵も透なく、白玉が傳次さんといふをこれと押へて下手に替り、手拭をとり肩にかけての見聞、苦味もあつて滅法男振よし。鉄をもつて生れもしねねがの白も、せきこまぬゆゑさしたる難なく、口説の中の迷惑さうなこなしも、格子色にとられて居さうな人柄にはまりて申分なし。ねさがに逢ひて面目ないこのこなし、見返りがちの引込もよし。白酒を呑むところも存外軽くせられ、金を桶へこかすところ、手先につかまつても初手は強情をはり、しまひにはいくからいぢぢやあゝりませんかとふてる工合まで透なくせられたり。助六の内へ来て新兵衛に掛合ふところ、ゆすりの方では本阿彌もいふべき親御の助六を向へ廻してわるびれぬこなし方、さすがに寸法を心得ておられて嬉し。これで調子が直つて油が乗つたらさぞかしといふ慾が出る丈なり。

一掃部の局
一白玉母れさが

坂東秀調丈

掃部局役はあまり白く塗られしたため、女客はいづれも頼家の愛妾のつもりで見て居るも可笑し。風呂の加減を試すところ、數寄屋町の隠居は天井に目をつけるから風呂場の政岡だといひ、二葉町の師匠はなに女政宗さといひ、この處西棧敷に小波瀾を生じたり。落人となりての出より手負になりての落入まで、女ながらもといふやうな角の立つた白まはしはいつも乍ら力が這入り、手を負ひてうつとりとなる様子、公曉に抱起されての物語も氣が上釣つて居る工合、流石に巧者なり。ねさが役は書卸しの浪人を女でゆくといふ筋、萬事扣へ目にせられて哀に出來たり。こゝは傳次と白玉との見せ場ゆゑこんな役で長々と邪魔をせられては閉口するところを察し、あつさりによつてのけられしは、感心なり。

一金窪 行親
一白酒賣 新兵衛

尾上松助丈

金窪役は顎丈髭のある作り、どこか一癖あり氣にて、いかにも北條の手先につかはれさうな人物に見えたり。どこまでも殊勝にもちかけて涙まじりの述懐、巧者なものなり。風呂場にて頼家の立廻りに目を離さず、隙を見て一と刀つゝこむまで、外に仕手もあるまじ。新兵衛役。荷を下して一服呑んで居る様子、役者とは思はれず。傳次に白酒をついでやる間の拾白も、こくめに聞えたり。手先のかゝるにびつくりして飛のくところ、桶をこぼして金を拾ふところ、夜はつまつてまゐりまじたの幕切まで、此丈には樂すぎた役前にて申分のあらう筈なし。仲の町にて武士に手込に遇ひ、二度目の出にこは／＼後よりついて来てしやがんで居り、助六が立廻りの中天平棒をもつて擬勢を張り、武士があやまりに來ると驚いて自分も辭義をする様子、金を押しもどす律義を性根、揚卷の事をいふとき四邊に遠慮していひ出しかね、引受けて世話をすると聞いて大聲をあげて喜ぶ工合など、

例の自分といふものを無いものにして新兵衛になりすましてのこなし方ゆゑ、一舉一動自然に出でて實に感服づくめなり。部屋の場合はさしたることなけれど、花川戸にて傳次にあひて面目ないこの仕草充分に得心がまゐつたり。

一伊賀光季
一貫拔門兵衛

片岡市藏丈

光季役は饗應の場は堀越がやたらに腹でしたがるゆゑ、利處の白は残らず引取つてこの丈が云ふ大した役前、例の竹を割るやうな調子で小氣味よく言廻され、北條と息を合せてのこなし方大層好し。門兵衛役は銀杏の葉を紺で抜いたる白地の浴衣に置手拭の拵滅法箱りよく、湯冷がして風を引いたかしらんの引込まで、どうしても門兵衛なり。助六に悪くねぢこんで舅だといふ悪つ振も旨いもの。蕎麥をかけられて切られたの可笑味も受けたり。

一公曉
一黒手組助六

尾上菊五郎丈

公曉役は當人望むで出されしものよしなれば、拵や仕草にうつのあらう筈はなけれど、どうも人品が難行苦行をするよりも、女犯か破戒でもしうに思はれ、荒法師の公曉といふより、岩倉の宗玄か鳴神上人かに近いやうなところ、持つて生れた色氣や男前が邪魔になると見たり。駒若丸を相手の述懐、掃部の局を呼生けての愁歎が一向に應へぬは、筋のためとはいひ乍ら勞して功なき形なり。北條が父を弑したりと聞き、經卷を焼き、珠數を引切つてあぢぢ乍らの幕切、光善だの崇徳院だのといふ見立もありしが、どうも今一と息見物の腹にはいりかね、上評とは申されず。北條邸は緋の衣の拵ゆゑ一倍男前が上りて色つぼく見は、延命院とは猪尾問答に先だちてわれもいひたり。義時を語り、誓文を見て疑半ば晴れ、供奉の役を聞きての引込まで、福地氏は大層な役のやうにい

ひて、丈の仕打に満足せぬやに聞きしが、誰がしても別に仕様もなく、まづ下らない役前といひて可なり。鶴岡の場は實朝の社參の迹にて幕張をあけて上手を見込見え、頭巾、法衣より太刀の好みいかにも思付よく、顔立の苦み走つたところ加はりて、初めて禪師らしく見えたり。下向を見て躍り出で、實朝仲章を一太刀つゝにあびする工合、實際と思はるゝほど烈しくてよし。それより信光定景を相手の立廻りは飛鳥のやうなりとも申すべく、石段にかけ上り、太刀ふりかざしての見は、幕張を切落して向、雪の遠見を見する工夫など、いづれもよい心持にて、一番目中の退屈をこの場にて取返したり。助六役は先度勤められたる御所五郎藏と同じゆき方にて、男前と男氣とを見する役なれば、この丈にぶつて付なのは申すまでもなく、此丈ほどの男前の人は恐らくは前後にあるまじと思はるれば、これ位の助六は後々は見られまじと思ふ程なり。最初武士の手をぬち上げての出、四つ輪と杏葉牡丹とを染めたる縮緬の着附目を驚かすほど見事にて、羽つばたきもさしやあしねいの白廻しなど、たんかの切れ方ぐくぐくするほど好し。武士を懲し、新兵衛をいたはり、紀文の異見を聞くまで、始終達衆の腹をもちて一點の申分なし。格子先の場は尺八の音を揚幕の中できかせ、禿に袖を引ばられ文を見乍らの出、着附がかはつて一層艶つぼく、露のたるやうとはこゝを申すべきか。子供にはかなはねわやつさといふ白も受けたり。進左衛門にあひてのつめ開きよりちつとして手込に逢ふところもすつきりとしてよし。足の指に挟みし煙管を取りて、誰だと思ふと思はれあつて、つぎかへてねくんせねと碎けるところ、下駄を刀にさして頭に載せられしを押へて、じつと目をつけ、焼刀は正しくといふ、進左衛門刀を納める、雙方きつときまるところ、天下一品なり。こりやあ男の生づらへといふ息込もよし。部屋の場で門兵衛に蕎麥をかくる件、宅の場にて傳次をあしら

ふどころなど、この丈には造作もないことゆゑ、點の打ち所のあらう筈もなく、總じて勿體ないほど結構なりといへば足れり。

一駒若丸

尾上丑之助丈

玉繩山にて親御の公曉に弔みての振、御馳走に附けられし程ありて、見物の目にとまりしは感心なり。

一御小姓撫子
一同深見

市川實子兩丈
市川扶伎子

姉娘の方は體が踊にはまり居るよし親御も申されしよしなるが、こん度はどちらも見劣りなく、よく覺ゆられたと感心の外なし。志かしこれが一人男ならば、今頃は暫でも出ずだらうにといひし一老人の繰言は、われも同感なり。

一白玉妹記さき

片岡龜藏丈

母をいたはり、姉をとむる仕草、さしたることなけれど、小首を傾くる工合、高砂屋のぼんち政次郎丈にどこやら似たり。

一安東忠家
一判人忠藏

中村翫太郎丈

忠家役を少しも可笑味にならずこなされしは感心。忠藏役はさら／＼としてよし。

一武田信光
一併請師晋山

市川新藏丈

信光役は白まはしが活歴史張ゆゑ、こんな役では目立ちてよし。長刀のたても毎度のことゆゑ手綺麗なり。晋山役は書卸しの虚した晋山ではなく、どうやら寶晋齋でも張つて居るのか、高慢くさく受けかねたり。

一三浦屋亭主
一御藥竹の方

市川壽美藏兩丈
市川女實兩丈

どちらも評するほどのことなし。御苦勞といふべし。蟹十郎丈の相摸守時房、朝川仙平は相替らずねちこく出來たり。菊四郎、團七兩丈の鳥居門弟は出來よく、幸十郎、梅助兩丈の一通なり。菊三郎丈の茶屋の女房は安つぽし。團八丈のやりてはいつもの通り。升藏丈の御末女中は懷妊でもして居るやうなり。染五郎、雷藏兩丈の北條の子息品ありてよし。

一三浦屋の白玉

尾上榮三郎丈

權九郎と連立ての出綺麗／＼。しなだる／＼をうるさがるどころ、傳次にあひての口説も丁度身上に箝りてよし。三浦屋格子先も新造姿一際目立ちて美し。

一右大臣實朝卿
一三浦屋揚卷

中村福助丈

實朝役。紅の着附にて髪を結上げられて居らるゝ氣高き、いかにも鎌倉右大臣と見てゆかし。白の直衣に烏帽子を着してより一層品格立まさり、畫にもかけぬほど優美なり。世を果敢なみて居る腹も充分に得心がゆきたり。拜賀の場は装束も黒に更りて又よし。これ程の實朝は恐らくは前後にあるまじく、一番目中の箝り役といふべし。揚卷役は毎度手覺の太夫職にて、團菊兩丈の中に挿まつて見劣りせぬ立派さは、當時外に類なし。愛想づかしの白もはつきりして氣味よく、後では氣の毒でムんすが顔を見るとむか／＼してといふ白も受けたり。しかし故人がせられたら今一倍色氣があつて仇つぽからうと思はるゝ節もあり。お巻になりてよりは、同じ年増振でも鹽山の妻のやうな野暮作りの役が此丈には映りよきやうに思はれたり。

一長尾定景
一番頭權九郎

市川猿之助丈

定景役にて白鳩が落ちたりとの白を述べらるゝところ、こんな活歴史物は丈の調子には向かぬゆゑさまで引立たねど、立廻りは烈しくせられて相手が引立たり。權九郎役は地に踊があるだけ、白玉に搦みでの振が少しやりすぎるやうにも思はるれど、まづ車輪にて受よし。池を這上りてから悪長い仕草をせず、石橋のあて込でかづらにつきし藻をふり立て、獅子がしらと見する思ひつきは、あつさりにて笑はせられたり。

一北條義時
大江入道覺阿
御小姓綱生
獅子の精
鳥居進左衛門

市川團十郎丈

義時役。公曉の案内をしての出、いつもの道樂にてごま鹽の頬髯を長々とつけられしは、巡島記や何かで近附の義時よりは餘程の更作りにて按外なりき。公曉の身の上を傷みでの落涙、光季が大事を打明けしに驚く素振など、いづれも做大にせらるゝゆゑ、どこか空々しきところ見わたる旨いものなり。公曉が誓文を見る間うの方に目をつけ居るなどはいふも管なり。公曉の迹を見送りて膝立直し、いせ法師め、この義時まで切る氣で居る（正本の、あの小僧め、其序におれまでも殺さうといふ決心だぜといふ白は言語同断なり）と横向の形にていはるゝところ、義時の腹を利かするめぬきだけありて、流石老奸と見受けられたり。供奉の道にて俯伏に倒れ、病起れりといひて肚側を押へ乍ら花道にかゝり、後を振返つてじつと思入ある中押へた手が緩み、氣を替へて又強く押へながら揚幕に這入るといふだけ、成程實際はかうであつたかも知れぬど、芝居としてはとんと面白くなじ。さうじてこん度のこの役などは、成たけ形に顯はさず、腹の中でやりたいと苦心せられ、菊五郎丈

にもうのやうにと相談がありしやに聞きしが、うれ程腹でやりたいものなら、いつかの事公曉と示談で引き下つて貰ひたき位なり。覺阿役の拵はいつもの凝り方にて大層立派なものなるが、することは落涙留めがたくのうるみ調子より腹巻の講釋、大臣の大将（來年の大小とは數寄屋町の秀句）云々よりあらまほしく存じまするといふやうな諫言、成程外に眞似手もなきものかしらぬが、面白くないことは無類なり。木劍の折るゝは間々ある例といふ幕切の一句は、入道をいよく、やけ腹にせし作意か。彌生役は滅相に若々を作られ、うゝつかしい人の、あれが團十郎の娘ですか、大相團十郎によく似て居りますと眞面目でいひたるも可笑し。こん度同丈の天狗は傘とか手拭とかいふやうな調子をとるものも持たず、中頃は一寸扇子や帛紗をつかはれたるが、後先は大體素手で踊られたるところにて、いかさまこれはごまかしが利かず、正真正銘の腕前凄いのなり。うれにいつも乍ら體のこなし嬌々として、どこからどこまで十六七の娘盛りと見ゆるは實に不思議の熟練にて、涙が溢るゝほどなり。獅子頭をもちて狂ひ乍らの引込みも御苦勞さうと察し申す。白頭を被り本行の出に、獸足を抜かれたのはどうしたものか不審を立てし通もありしが、顔の作り體の構などいかにも見事にて、白毛の振り方が足らぬなどいふは贅澤なり。進左衛門役。假髪や着附の工合、お家柄だけ少々兒雷也じみたれど、同じだゝら大盡ゆゑ、據なしか。揚巻にふりつけらるゝ件、助六に出入の所望をするところなど、随分のてれ役なれど、例の貫目と調子とにて大歌舞伎風にせらるゝゆゑ、譯もなく立派にて難有かりき。煙管を足でさしつゝるところ、下駄を刀にさして出し、助六が不審をうつつに鞘に納めて雙方きまるところ、よい心持なり。行かけて後日の極印といひて刀の鏝にて助六の額を割り、息込むを見て口惜しいかといひ、ぶはゝゝゝと笑ひ、悠々と懷手をして花道を這

入らるゝ大さ天下一品なり。しかし進左衛門は根が極悪無惨の人物ゆゑ、うの點はこの丈に拵り悪く、さればにや憎味も幾分か薄く見え、丈の何か大望でも懐いて居る人のやうに思はるといふ人あり。うところは平常の賣込みにあるところにて、見物の方の成心かもしれず。(明治二十六年三月三十日)

市村座彌生狂言は

山開目黒新富士と壇浦兜軍記と

にて、一番目は寛政文化の頃蝦夷地へ渡りたる近藤重藏の傳記、二三の記録物から借りて來たものなるべく、最初古川新水氏が立案にて、新富町にて皮にかくる筈なりしがねくらととなり、竹柴其水氏が譲り受けて場割などの筋を立て、故黙阿彌、新七、彦作の三氏も一幕位宛助筆せしものよし。筋の細評は姑く預りとして、藝の品定のみを致すこととせり。

家橋丈。中間峰助役。どこまでも勇み肌の忠僕にて、腹の悪い奴とは受取れず、又腹の悪い奴にならうとも受取れず。長坂坡の仁藏になりてよりは、ごろつき風の拵五分も透なく、お山を引立つるところより、譽堂にこめらるゝまで、皮をかぶつたる仕打得心したり。くしやみをして、あゝ寒くなつたとの幕切もさつぱりしてよい心持なり。目黒の場にて女着物をずろ／＼引ずつての出に微塵も舌味のないは、實にあく抜けたもの。ねつういやがらせをいふところもたんか減法きれて小氣味よく、とどばれてからお山と手をとつての引込も大當りなり。蕎麥屋にてごたくを並ぶるところは申分なけれど、立廻りのあつさり過ぎしは残念なりき。二役大里周右衛門役。早拵にての出御苦勞なり。津々井伊賀守役は拵、仕打とも堀越寫しにてよけれど、調物になると妙に舌もつれがする

のと、言ふ事が無理な筋なので器量を下げたり。高島郡之助役。初手に出家の拵にて出で、たつ／＼拵になりて譽堂との暗仕合、あぶないやうにせられて受けた。鹽竈の友吉といふ船頭拵になりての立はさしたることなし。秩父の重忠役。こん度の二長町は此丈の此一役だけならんと樂にせしに、うの甲斐なかりき。人品ある人にて着附も立派ゆゑ、押出しは申分なけれど、岩永との詰開き、阿古屋にの尋問、いづれも調子を張りすぎ、肝心の白も鳩つぼつぼになり、總體きつ過ぎて、寛仁大度といふ和味に乏しかりしは、身上に似合はぬ不手際なことなり。

荒次郎丈。曾長光作役。鎗を落す幕切の悪いは作のためゆゑ様なし。降参の件も片言を囁るだけゆゑ評なし。植木屋拵吉役。お山を預る件はやはりこくめい一方の老人としか見え。蕎麥屋になりてよりは性根の悪いところ見え、ふて／＼しき工合も見えてよし。寒参り虎松役。裸身にての出は丈の專賣ともいふべく、譽堂を盗人と思違へての胸震ひより提灯を持ちての引込みまで、大愛嬌のことであつたり。易者運天堂役。ねふみの身の上を見てごまかしをいふ可笑味もすましてせられ、眞面目に見料を願ひますといひ、いひこめられてもびくともせぬあつかましき工合、巧者に出來された。湖西丈左衛門役。これも落附ありて、情をわきまへし武士のこなし、存外に出來されたり。竹田奴は御苦勞。

瀧十郎丈。小田切彦三郎役。いつもの通りもがついて、かゝるやからがはつこ(跋扈)なすといふやうなことをいひてうんざりさせたり。大善寺光仁役。御馳走の返禮に十人切の手傳をするといふ無法な筋にて、評にかゝらず。

左文次丈。曾長乙順役。荒次郎丈同斷。播新手代義兵衛役。壽美藏に拵めて書卸したりと見ゆるが、

幕毎にちよい／＼頭を出しても、これぞといふところもなく、随分榮ぬ役なり。しかし御目見の時のやうな臭いことなく、始終神妙にせられしは感心なり。鈴森にて腰を抜かしての可笑味、評定所にて譽堂の身の上を按じてのこなし、當込氣なくてよし。

秀五郎丈。曾長陳叔役。評なし。大山金四郎役。瀧十郎丈と並ぶと流石にさつぱりして見たり。物見の松五郎役。仁藏より一枚下の悪と見えて箝り好し。義兵衛の迹を見送りての出に、前が馳走になつたといふ筋ゆゑ、家橋丈は微酔で出られしに、此丈の方しらふに見ねたるは不注意なるべし。拾吉女房役はべちやくちやと騒々しい工合、この手合の山の神にはまりて受けたり。つぼ焼さどに役もよく拵へられたり。竹田奴は御苦勞。

左伊助丈。土人の妻役。ちよいとした役前なれども、道化ともつかず愁歎ともつかぬゆゑ、上野の戦争の折當てられた湯屋の木拾ひ程には受けず。萬歳長太夫役は一と通り。種五郎丈。中間助十役。出前持文助役。どちらも此丈にはやす過ぎた役にて申分なし。

米藏丈。田舎娘お山役。田舎娘としては申分なれど、品川で散々敲いて来たあぼずれとは受取れず。お妾風で居ながらちりと調子をかへて莫連の性根を利かすといふやうなことは、顔にけんもなく、調子に凄味もないねんね仕立の此丈にはまづ無理ゆゑ、評は略す。千島の三保藏實は倉橋彌一郎役。花道で何やら船唄を唄はるゝは、あまり褒められた藝でもなし。遊君阿古屋役。中幕はこの丈の出し物となりて、先年市村座興行後も、大坂名古屋と持つて廻つたものゆゑ、流石貫目もついで結構なり。こん度は衣裳の新調に五百圓かけたなりとの評判ほどありて、揚幕より襦袢姿にての出、目を驚かすほどの物好は大張込の事なり。見ぬ前は脊丈が足らなくはないかと按せしがその

やうなこともなく、調子もゆつたりして、いつもの金切聲にならぬはよし。三曲は前々より氣を入れて勉強せられしほどありてあざやかに出来、殊更三味線と胡弓には長唄連中の連弾ありて聞事であつたり。振もしとやかにせられて申分なれど、慾にはこれでもう一倍色氣が添うたらばと思ふなり。

竹松丈。譽堂民藏役。父に小普請入のことを告げて残念がる工合、大分落着が出てよし。仁藏お山の所置を憤り、追取刀で這入るところも申分なし。稽古着袴形にて父の代りに十八切をする間の氣組も透間なく、大貫役にて受けたり。榛澤六郎役。男前のよき爲一倍見上げたり。登り鯉丈。譽堂倅熊藏役。今一と息なり。薙子丈。腰元、藝妓、豆藏女房の三役。うれ／＼によし。兒福丈。腰元、藝者の二役。これも目について美し。葛之助丈。蕎麥屋女房役。兩親や夫の無法を氣遣ふ心いきしほらしく出来たり。八平次丈。扇箱賣役。できよし。手品早介役。本物そのまゝにて大出来であつたり。左伊次丈。奥住伊三郎役。男前よし。皿廻し豆藏役。いつも乍ら御器用のことにて受けたり。升若丈。乳母娘おふみ役。始終主人思ひのこなし申分なく。とりわけ武部郎の場は子役をつかひて大分芝居をせられ、しんみりと泣かせられたり。

左團次丈。譽堂龍藏役。擇捉島の場にて大熊との組打より榜示杭を引抜いての立廻りは、この丈の十八番にて、強勢なものなり。鎧出立にて土人を恐入らせ、誓の盃を取上げて、ても心地よき云々といひて笑ひ乍らの幕切、最負連を嬉しがらせたり。宅の場にて小普請入を聞きて、さまで驚かず、小田切に向いて、とう／＼これになりましたといふあたり、びくともせぬ落着いた性根を見るところ、この丈の身上にはまりて、大舞臺にこなされたり。時世を慷慨する件も、上に學力の役

人なくといふやうな白を除きては申分なし。花山を抱ふる件、仁藏をこむる件もさら／＼とせられ、申すところなし。鈴森の場。黒頭巾の拵は金子市らしくも見られたれども、馬士を切り倒し馬を引いて花道の引込は、座頭の貫目確に見たりといふものゝ、あつといふ程のことはなし。目黒の場は大層殿様らしく仙石左京とでもいひさうなり。騙りの裏をかくところはしつかりしておられたれど、十八切の迹をついて歩いての手傳は、筋の爲に人品を損じたり。評定所にては始終身を謹みてのこなし尤にて、申譯の辯説もさわやかにてよし。武部郎にて外ながら親子の別をする愁歎も女々しからず。短刀を見て落延びんと決心するところも得心したり。二男賢藏役にて闇仕合の立廻りは目覺しく出来たれど、松島にての立腹は、拵が商人體ゆゑ、少し長脇差らしく見たり。兎に角車輪の大働にて見物受減法よし。談洲樓この幕を見て、高島やたゞ高島屋／＼ともぢられしは、相變らずの秀句なり。岩永左衛門役。體に振のない人のことゆゑ、どうも威張加減が奴風じみて不受なり。中頭家橋丈病氣によりて重忠にかはりしよし。この方がまだしも見榮ありたりと、さもあるべし。

(明治廿六年三月二十日)

三崎座は糸八丈ひとまきの入座より、見物を呼ぶ出し物をわりぬいて出さるゝ爲もあらうが、二替りとも客止とはめでたき事かな。われらも賣切の日につゝかり、椅子を踏臺にしてのぞいたる二幕三幕について評すべし。一番目

忠臣血染御朱印

は左團次丈專賣の細川の血達磨、糸八丈も先頃吾妻座にて當りを取られたる手覺の出し物なり。本石町瀧山住居の場。糸壽丈の瀧山玄庵役。女房に醫者が下手といはれて喧嘩するところ、この前よ

りも功者になられ、柴米八丈との氣組もしつくりあひて笑はせたり。柴米八丈の玄庵女房おさじ役。この前も大當をせられたるが、こん度もかん走つた調子で做大に會釋をする工合、すべて輕薄すくめの様子もくすぐりにならでよし。玄庵が病家のしくじりをすつばぬくが序の口で、裏長屋で按摩をして居た時分のことをべら／＼しやべる工合もまるで本物なり。玄庵が打擲すると、さあ打つならいくらでもねぶちなさいといひ乍ら、櫛や笄を一々抜いて紙につゝむところも大受／＼。この呼吸をゆくものは、男でも喜知六、光十郎諸丈の外にはあるまじ。小仙丈の友右衛門妹れ菊役。打萎れた工合もよく、この役の腹を充分呑込んでせらると見ゆ。和歌太郎丈の印南數馬役。いつも乍ら女役者の若衆姿は丸ぼちやで閉口するが、うれば據なしとして、敵の在所を聞きての氣込は出来たり。糸八丈の大川友右衛門役。拵も武張つてよく、仕草も高島屋ばりにて落着をもちてよし。吳服橋外堀端の場。細川家寶藏の場。同中郎立退の場。桂升丈の細川太守役。火中へ引返さんとして焦立し調子もきつぱりして勇ましく、切口より出でし御朱印を見るより思はず床几をすべり下りて大川の忠死を賞する仕草、臣下をいたはる氣組充分に見えて大出来なり。桂三丈の奥方照葉役。火事装束にて立退くところも綺麗にて、大川の死骸に對面する件もよし。清吉丈の堀帶刀役。御家老と受取れたり。糸八丈の友右衛門役。太守の馬の轡にすがりて火中へ引返す役目を言付かるところ、氣組は充分なれど、小兵なだけに見立のなきは残念。寶藏の場は火事を見するだけゆゑ、丈が煙の中に飛込むのと、火の子だらけの着物を着て出てこらるゝことが強勢だといへば充分なり。會津曲輪敵討の場。清吉丈の横山圖書役。此座の立敵には相應せり。丈もどうやら高島やばりかと思はる。和歌太郎丈の數馬役。立廻りも手した／＼とせられてよし。糸八丈の會津中將役。三葵紋付の上下にて

悠然と扣へて居られる容體から寛仁大度の白まはし、太刀筋に目を配る工合など、堀越うのまことに大出来なり。中幕の

中將姫

にて、雪責の場の前に横萩館の場を出すは、勿體をつけたのであらうが、同じ繼子責の筋が重りて目先の替らぬは残念なり。桂三丈の岩根御前役。襦袢の中は大福餅との評がありさうなりしが、被風にかはりてより器量を上げたり。眞綿に針を包むたやうな初手の仕草も届き、懐劍をつきつけて姫を威す件もよし。雪責の場は前段の譯にて、前の割に引立たず。桂升丈の奥女中桐の谷役。危なつけなくは出来たれど、一番目の細川太守ほどには氣が乗らず。しかし儲役ゆゑ大分聲がかゝりたり。榮吉丈の浮舟役。岩根御前に一杯はめられてむきになる工合も出来、桐の谷との打合も花やかにてよし。清吉丈の豊成役。人形でつかつても大層むつかしいさうなるが、只貫目を見するまでの役ゆゑ、丈のは大貳廣繼に近いやうにて受かねたり。多見吉丈の大貳廣繼役。神主らしき着附にて、一調子かはつた聲を出して惡落を來したるは不手際なり。糸八丈の中將姫役。上手家體の障子を引いてとると經卷を誦して居らるゝ姿。權者の化身かと疑はるゝほど氣高く、高助丈のも福助丈のも見たるが、又趣交りてよし。繼母の責にひや／＼する仕草もよけれど、調子のつぶれて居るだけが耳ざはりなり。花道を追立てられての出も痛々しく、上着をとると水色の着附うつりよく、昨日までも今日までもの件にて、下部が割竹にて打たうとするを留むるあたり、相手が紫女八、糸壽兩丈ゆゑ一倍よし。ま一度ね顔をの件にて、振返りて父の顔を見上ぐるころも鮮なり。さうじてこの役は出し物ほどありて、申分なき上出来といふべし。(明治廿六年四月十日)

新盛座は先頃新築せられしものなるが、建築は柳盛座に倣ひしかと思はれ、明りのとり方など極めてよく、あれよりはずつと横幅廣く、ぎつしりつむれば千八百位の客ははいるよしなれば、小芝居には勿體ないほどなり。役者も筋の好いのを集め、引くるめて臭味のないは感服なり。幾度か興行の中、前々度あたりに出されし中村歌女太郎丈の紙治は、すべて故霞仙丈うつしの上諸方にて勤められたりと見えて、油が乗つてあぶなつけなく、大歌舞伎でも見られまいと思ふほどの出来なりき。皐月興行は

籠釣瓶花街酔醒と太功記鷺の森岩の場と

なるが、今一番目の高松邸より吉原見染まで中幕とについて申すべし。家太郎丈の都築武助役。總體團三郎丈に似寄のさら／＼藝ゆゑ、高松との暇乞、お千代との別も否味なく出来たり。千貫松原にて次郎左衛門を助くるときの拵もよく、貫役だけ聲がかゝりたり。記念讓りの場は病中の體映りよく、横死の件まで申分なし。立花屋長兵衛役。親切に見えたり。鈴木孫市役。雜兵の拵にての出も申分なく、忍の者との立もきつぱりして目覺まし。女房子供をかせにしての愁歎も手一杯にこなされ、切の切腹まで無難に出来たり。此丈何へでも使はれて人氣もあるやうなれど、これはといふほどのものなきはさら／＼流にかたまつたものか。鶴若丈の下男次六役。凝つて作られ、車輪だけに受よし。榮之丞役はいつものやつし並なら、さぞ惡からうと思はる。鷺の森八郎役。びか／＼した着附にての御注進は、いつも乍らにらみ澤山にて御苦勞なり。此丈は口跡顔立から車輪な様子が見え、秀五郎丈の儘なり。宇十郎丈の腹太の彌七役。中々押手が利くやうになられて、蝶昇丈の文次をくつてをるやうに見えたり。鈴木飛驒守役。大念入の拵にて、仕草も大手にせられ、身上にない割

には出来されたり。こゝらが老功といふものか。蝶昇丈の悪漢盲文次役。咲松丈と一流の藝風にて、手軽くやつて居るつもりかしらぬが、投げて居るとしか見えず。今少し役に身を入るゝがよし。米三郎丈の高松松太郎役。着附の工合大津繪の鷹匠にでも出さうなるが、兎に角好太郎丈に似寄な綺麗首なり。太門丈の妹春山求女役。四千兩の巾着切などいづれも味ようこなされしゆゑ大層に買つて居たるに、今度の高松娘お千代は美しいには相違ないが、武助との別れにも、二度目の出會にも針ほど思入といふものなく、始終けろりかんと横目をして居るは困つたものなり。三津之助丈の安之進妻おとし役。中島座當りつゞけの頃からの舊い顔なれど、首をこまかく振らるゝだけにて上り目も見えず。兵庫屋抱九重役。柄にあるだけ綺麗に見えたり。門之助丈の孫市妻雪の谷役。お目見えの重の井を見て惚込みしに、二度目のお七にて愛想をつかし、小芝居の役者は緑日の植木同様當にならずといふ或人の穿ち尤なりと嘆せしが、今度は流石本役と見えて、夫の勘當の詫をして聞かれぬ件、夫が我子に首をうてと教ふる覺悟を見ての愁歎、ちよぼに乗つてのこなしは上出来にて安堵したり。兵庫屋八橋役。梅三郎丈の代りにて、仲の町だけを見たるが、次郎左衛門の突當りしを見ての秋波は色氣あつてよいとするも、外八文字はあまりきつすぎはせずや。歌女太郎丈の高松安之進役。持前にある役廻りゆゑ、家老の品格見ゆ、玄關にて八重垣の門弟を追返すあたりは今一息と思はるれど、めつたなことはいはいはれぬものぢやの幕切まで、まづ一通の出来なり。佐野次郎左衛門役。高島屋うつしの顔の拵にて、着附も實體に見ゆ、追刺にあひてわな／＼する仕草も申分なし。打擲の中廻し合羽がぐるりと廻りて後前になりし形は間が抜けたやうに見えてよし。記念讓りの場も、田舎氣質な仕草出来たり。あなたが高松の奥様でムリますかと思はず乗出して、

先が己の姿に驚くに心付きて、定りを悪がる處も受たり。見染の場も大野暮にせられ、道中を見て拜む可笑味より、宿に歸るが否になつたの幕切まで巧者にせられてよし。中川清秀役。烏帽子直垂の拵、書にかいた楠じみて強勢なれど、まだ白が腹に這入らぬと見ゆ、今一息と申す勤め方なり。次には何か末廣屋直傳と申すべき座頭の出し物を是非一幕出して貰ひたきものなり。(明治廿六年五月) 歌舞伎座臯月興行の一番目

十二時會曾我

四幕は、博文館の廣告にては櫻痴居士が近松の曾我會警山に基ける新著なりと吹聴すれど、正味は居士が例のお家物のこはしや主義にて、まづ近松が十二時にたゞみ込みたる狂言の山を(時間の都合があるにもせよ)顧着なく、五時か六時かに縮め乍ら、わざ／＼十二時の銘うつて天賞堂の奉納時計をまごつかせ、二の宮太郎の早打を立消にさせ、武藏屋本も知らぬ田舎者には次幕の團三を見て、は／＼あ二の宮が鹿の皮を冠つて出ましたなど無理ならぬ不審をたてさせ、し／＼(鹿)の皮を身に纏ひといふやうに活歴史がるかと思へば、いやに對面をはつて五郎に頂きますべいといふ様な場しらずをいはせ、悪れちのくるに氣がつかず、討入の場で前々の書物をうつくり借りて來たは至極よいが、椽の下に雜兵を忍ばするなどいふ小細工に大味噲を附けられしものなり。全體曾警山の類作には夜討曾我狩場曙といふ花も實もある作があるのに、わざ／＼こんなものを出すのは、うれがうれ曰くのあることと思はるれば、やきもきする方が野暮の行止りなるべし。中幕

勸進帳

は故海老藏丈の創意に出でし市川家名譽の出し物。謠曲の安宅に出でしだけありて、脚色の順序、

人物の配置よく整ひて、勘進帳より問答のかゝりも隙間なく、金剛杖をねつとつての件にはいかなものも袖をぬらすべく、矢島の物語より延年の舞の面白さ、幕外片手六方のひつ込まで、役者を働せて見するにはこの上もなくよく出来てをれば、これを仕活す團十郎丈の如き名優ある限りは、例の忠臣藏などと同じ様に獨參湯の名を負はせて末代に傳ふべきものならん。二番目

梅雨小袖黄八丈

三幕は故黙阿彌老人が咄家の方から種を取られしものゆゑ、車力の善八が唯鶏すゝめて雄鶏時をつくるといふやうなことを繰返していふなどは、今でも素的な場當はずれど、ちとくすぐりに近くて受けにくし。しかし忠七をうゝのかしてあいて、うつてかはつてつらくあたり、源七を馬鹿丁寧にしてあいて、ぐつとあそからさげすむあたりの新三が性根、又その上をこして初手は筋をなめさせてあいてきうに苦手を出してぐつといはする大屋の手際などはこの社會の人情を摸し出して好し。取分け例の五兩に十兩で十五兩だよといふ件、鯉の片身は貰つていくよといふ件など、實に妙といふべし。市川左團次丈。曾我五郎時致役。馬送りの場はばた／＼にて花道より驅出で、弱む雜人を引つけて、あち合ひ玉へ／＼といふあたりよい心持なれど、顔の白粉が濃すぎた爲か、どうやら分別くさく、太田道灌じみて見え、廿歳前後の五郎とは受取り悪きやうなり。この難はさいつころ堀越氏が狩場曙の五郎を勤められし折にもありしが、かうして見ると今迄の眼角に紅を入れた拵へはいかにもきつくて若々しく見え、實に感心を思付なり。對面が／＼し白ありて、無法に口惜しがるあたり、調子の据り、體のきまりいづれも今一と息黒つぽくやつて貰ひたく思はれたり。閑居の場は母の意見の間うつむいて聞いて居られ、盃の間も腹に不平をもちてぶり／＼する工合、心入ありて至極よし。

志かし少將に手を引かれて這入るとき呆れたやうな風をせらるゝは場當りに過ぎはせずや。次に書置の場にて討入の物語はこれも少しく騒々しきかと思はる。討入りの場は着附がお約束の拵だけに、正眞の五郎らしくなり、十番切になりてからはお手の物にて申分なし。水盃の割白、馬は吼え云々の狂歌の誦し方、兄討たれたりと聞きての足踏、五郎丸を引ずり乍ら力足を踏むで板椽を踏抜くあたりの呼吸は、息もつけぬほどな堀越の上物を見て間がないゆゑ、感服といふ場合に到らず。富樫左衛門役。年來富樫だこのはいつた人故相替らず立派なり。あゝらむつかしやのあたりから焦込み初めて、摺足にて勘進帳をのぎき込みてきつときまり、そも／＼九字の眞言とは云々の長白を息をつかずにいひ廻し、強力を呼止むる件にて身を開いて大見聞をなし、疑へばこりかく折檻もし玉ふなれといふ白を弛めていひ廻すあたりが、いつも見物を呻らするところなるが、こん度も満場拍手のれほ人氣は高島屋萬歳といふべし。彌太五郎源七役。仲藏丈の體に徹めて書卸したるの故、この丈に徹らぬところがありとて、頭からけなすは無理なり。すべてやきのまはつた顔役の腹は確にもつて居られしやうに見受けたり。されば新三をも安く見て造作もなく捌きをし、金を打付けられてからぐつとなり、又虫を押へてす／＼歸るまで、中々大舞臺にこなされたり。

市川壽美藏丈。鬼王役。蒲殿の有様を見て落涙の思入より曾我兄弟の辛苦を物語る間も始終濕つぽくせられて一通にできたり。近江小藤太役。鬼王と一つにならぬやうその注意は見たり。四天王は立派なり。後家お常役。堀越の加役を張つて含み調子で何かいはるゝは氣になりたれど、することは申分なく出来たり。

市川新藏丈。二の宮太郎役。早打を争ふ中のこなしは息込のよき人ゆゑ大受なり。拵も濫くはある

が相應してよし。團三郎役。鹿の皮を纏ひたる拵も申分なく、雑人そのたても手ばしこくてよし。祐經の前に引出されての述懐より兄弟の中に搦みての意見まで、大した役柄をあれだけにこなされたるはまづはお手柄の方なり。四天王は御苦勞。

市川猿之助丈。蒲殿役。袈裟衣の好みよく、いかにも御連枝と見受けられたり。梶原の難言を聞流し、その迹を見送りにてじつと思入あるところ、存外品よくせられてよし。鬼王を見て、何者なるかと尋ぬるあたり、調子が上から出るだけ耳立ちたるが、うの外は申分なし。營中の場にて刃傷より切腹までの顔で藝をするやうなことも少く、さら／＼このこなし方は、役者を上げられたり。この役は大歌舞伎入座以來の出来なるべし。海老名源八役。さしたることなし。京の小次郎役。身上にある安敵なれどあまりそはつきすぎ、着附の工合いつづやの手長の猿太じみて受にくし。四天王役は御苦勞。

片岡市藏丈。宇佐美次郎役。曾我兄弟が詰めかけし折に刀を引つけての身構は隙なし。仁田の四郎役。情をわきまへし侍としては映りわるし。番卒軍藤役は御苦勞。車力の善八役。律氣の中に可笑味を交ぜたるむづかしき役前、氣を入れてせられて受よし。思ひきつてそくけた作りにせられしも申分なし。お駒に入婿を勧むるあたり、調子がきつすぎるため何か腹にありさうにも思はれしが、お駒が聞入れぬに當惑して投首する工合は至極よし。粗粉らくがんの折をもち乗物町にゆきての可笑味は、場受は大層あれどちとくすぐりの筋にて、われ等は受けず。しかしこの丈の少しも當込みけなく、始終うの人になつて居らるゝは神妙なり。新三内に源七の供をしてくるころ、花道からぶる／＼とふるひ居り、尻込みして格子戸をあけぬところ、中に這入つても下手に小くなつて腰をか

け居り、押入の物音を氣にする工合、新三の様子に始終目を放さずびく／＼して居る様子、この場が一の出来と見受けられたり。大屋の捌きを立聞きして、名に負ふ彌太五郎源七さんも、恐れて歸つた新三さんが、猫に逢つた鼠のやうだといふ可笑味は眞剣にて受たり。

尾上松助丈。四天王役は御苦勞。家主長兵衛役。こん度は一番目にお役がなく、丈もこの一役が見せ場、見物もまた仲藏丈の再来を見る心持にて、初日前より町中の評判ありし場なるが、根が故人の體にきつて箝めたやうに書卸されしものゆゑ、この丈もよくして居られたれど、堪能といふ場合に至らず。家主内の場にて帳合をして居らるゝところ、見たところが總體に人柄にて、どうも苦勞人の果で、俳諧の點取にでも疑つておさうな大屋さんと見れ、本所きつてのにざりやにて、因業な親父とは受取にくきやうなり。しかしする事は何の造作もなく、禮を當に仲人を引受くる性根も見わたり。新三内にて鯉のさしみや酒を賞め乍ら、源七のことをくさし、よく鼻をはじいてやつたと新三をほめりやす工合、軽くてよし。新三が強情はるより召連訴をするといひて脅迫し、上總無宿の何とか云つたなと根を押すあたりも小氣味よくせられたり。まだ手前に金をやらなんだかといふとぼけ工合より小判を一枚／＼に數へ、十兩に五兩、十五兩、鯉は半分おれが貰つたと幾度も繰返すあたり、流石眼目の見せ場ほどありて、抜くるほどよくしておられ、可笑味ませて面白いことであつたり。新三を分らねば奴だとけなし、勝公、いや手前は咄せる男だなあといふあたりも不思議の旨味あり。婆の目を廻したに構ひつけず、鯉の片身を提げての引込に、鯉の持方にまで氣を入れて居られしは親切にて受けたり。さればすることはよくして居られたれど、どうも少し話がくだけて軽すぎる氣味ありて、實は最一倍苦虫を嚼つぶしたやうな氣もづかしい大屋の方が新三のこはが

るに釣合がよからんと思ひたり。

市川荒次郎丈。梶原平次役。大兵ゆゑ何を勤められても見物に可笑味のくるは氣の毒なれど、この役など底から惡味をもちて、虎の威を借る狐侍の様見えてよし。大藤内成景役。番の工合着附の好みなど、工藤の取巻じみて受たり。番卒兵藤役。毎度のお勤ゆゑ、酒事の可笑味など、三人中一番面白く覺わたり。

中村翫太郎丈。彌平馬の允役。評なし。家主女房お角役。お二から出世したものかとも思はるれど、まづ合長家の噂衆に近いやうなり。しかし何事もそれづくさね、おほくく空笑ひをする工合、店賃の滞りが二兩ありますと出てくるどころ、泥坊が這入りしとき、何か置いていつたかといふところなど不思議に旨し。とゞ目を廻してしやつちこぼり負はれて歸るまで大當りなり。

尾上菊四郎丈。愛甲三郎役。評なし。下剝勝奴役。脊の馬鹿にひよる長い不恰好な工合も、この手合にある體にて映りよし。お菊に當つてはじかる、可笑味も出來たり。新三の内にてちよい／＼惡まれ口を叩く役なれど、寺島内輪の芝居だけありて、少し愛敬が勝ちて惡味が薄いやうに思はれたり。例の鍵をかくすあたり、刺身庖刀を剃刀のやうにとゞ工合、あとから鍵を出してこめらるゝあたりは軽くできてよし。

尾上蟹十郎丈。八幡三郎、新開荒次郎の二役。替り目も見えず。金貸利兵衛役。箱り好し。

市川左文次丈。榛谷四郎役。大坂なる市川荒五郎丈に似たりとの評は適當にて、いかにもねばり氣無類なり。安西彌七郎、本田次郎、勸進帳の後見とかう幾役もつくところれ仕合せなり。

尾上幸十郎丈。合長家權兵衛役は御苦勞。市川團七丈。足柄鳥太郎役はよくして居られたり。市川

升六丈の笹原九郎役。いかにも立派にて、猿之助丈の小次郎に劣らぬ重味あり。升藏丈の米屋役。御苦勞。市川團八丈の加賀屋藤兵衛役。何をさせても幫間じみたり。尾上梅助丈の大新の蝸八役。職人らしく見わたり。尾上扇藏丈の木戸の番太郎役。正の物にてよし。尾上音五郎丈の魚賣新吉役。揚幕の呼聲から筒袖半天の映り滅法よく、鯉の料理方から、わいていきまますかと聞て金を貰ふところ、又何か新しいものがあつたらもつて來ますといつての引込みまで、實に魚屋に生れ付いたかと思ふほどの箱り方にて、げにゆかり生がたゞへし如く、二番目中大出來の一つなり。市川左伊助丈の庄屋役は一通り。夜蕎麥賣役は出來たり。市川猿藏丈の權藤役は一通りの出來なり。尾上きく丈の大工の奴役。こまじやくれて好し。

尾上丑之助丈の紙屋の丁松役。なまをいつて親御の身振をする工合巧者にでき、見物よりも親御が大喜なるべし。

尾上菊之助丈。手代忠七役。お熊に泣きつかれて當惑のこなしは身上にある役廻りにて見物大やけなり。新三が髪を撫付けながら乗せかくるに、初手はびつくりし、追々りの氣になつてくる工合申分なし。事によつたら願ひませうといふあたりもとつおいつの腹見にてよし。お熊が死ぬといふに是非なく、思案をかへねばなりませぬといふ幕切、得心したり。お熊を連出して來て新三に遇ひ初めてほつとするまで隙なし。新三が傘をさして先へ行かうとするを不人情ではあるまいかと怨み、また詫ぶる工合、やつしの性根見にて滅法よし。新三に足蹴にせらるゝかよわい仕草より欄干につかまりてほつとの思入、獨吟のめりやすにて身投の覺悟をする獨舞臺、味ようこなされて腕前見わたり。

尾上菊五郎丈。曾我十郎祐成役。馬送りの場は五郎につゞきて花道より出で、重藤の弓をたばさみ

てきつと見ね、何ともいはれぬよい心持なり。假髪の拵より淺黄色の鬘紐と紫模様の獵裝束まで映りいかにもよく、その上白粉を極薄くせられて、團十郎丈の工藤との釣合をとり、すべて従前の十郎でなく、極上品に活歴史がかりに作られて、うれで充分和事の腹をもちて十郎を見する手際、いつも乍ら注意充分にて感心。取分け年を後へ取らるゝと見ね、左團次丈の五郎などよりはぐつと若く見ゆるところ不思議なり。對面模様の割白と見ね、母の病と聞きて是非なく思留まる心入、五郎がはやるを制するところ、いづれも柔い仕打を新しく、しかも扣目にこなさるゝ工合大得心。荒馬を鎮めて三人引張の幕切大歌舞伎らしくてよし。閑居の場。花道より早足に出、母の介抱するまではよけれど、母がつき放して異見をする間も、うつむいて居るといふこともなく、正面を見て居られ、どうやら氣がはいらぬやうに見受たり。又婚禮せよといはれても、盃事になりても、一向に思入のないは、あまりさら／＼すぎたり。書置の件より出立まで、この場は男前のよい外にさしたることをなし。討入の場にて、ね約束の烏帽子直垂に炬火をもちばた／＼にての出、五郎と入かはつてきつときまり、實にや三千年に云々の白あるところ、先年も堀越と御兩人にてぐくつかせしところなるが、今度も同様の心持にて國周氏の錦繪にも寫し難きほどの姿なり。只西王母をせいわうぼうと引張らるゝは聞苦し。兄弟手を取かはして、おなつかしうござりまするといふ割白もしめつぽく嬉し。本望遂げて出で、大藤内を切下げての笑も品よく、水を含ませたる假髪を散し乍ら、後に裾野の書割を見せての立廻りも、其人を見る心持して勇まし。仁田と立廻りありて臍を切られ、たぶさを口に啣ひて合掌する覺悟の體も書いたやうなり。總じて家橋丈は前の月世を去られ、この役をこれ程にこなさうといふものは當時三がの津にあるまじと思ふほどにて實に勿體ないほどの

十郎にてあつたり。髮結新三役。見ぬ前はもうかういふ大立者になられてからの出し物にはあまりじやけらつぽくはないかとも思はれ、ちつと男がよすぎてやはりこの役は三河屋のものであらうかとも考へられしが、さて舞臺にかけて見ると、勸進帳のあとだけこれのを見てくれといふ腹で愛敬をふりまかるゝかと思はるゝほどにて、その面白さ言語につくしがたし。めくら縞の仕事者に博多の三尺をしめ、仕事の箱を提げて早足に出で、花道にて大工の奴をからかつて舞臺に來り、内の様子を見て、氣を揉むやうにできておらあと戻りかけ、又ぬき足をして立聞くまで、何の譯もなければ無法に嬉し。初手に奥をのぞいておいて、忠七の髪を撫付けにかゝり、水で鬘をたゞいたり、櫛で鬘をしごいたりして、うの間に片手で鬘を押へながら、ね熊を連れて逃げてと吹込む工合、いかにもちよびにせられて大受なり。女の方は氣が狭いからさうはいきませんとか、ね前さん強勢意氣な人になりますとせとかいつて、妙にのせかくる工合悪いこと／＼。事によつたらなんといはずにさうきめておしまひなさいと切込むところも隙なく、御子息の迎の小僧に引ばられ、一寸裾を端折つて脇に挿みてのひっこみ、大いなせ／＼。裏手の場は着附かはつて手拭を肩にかけ、新内の流しの相方にての出も大受にて、勝奴に耳打をして駕籠を雇はせ、お熊を先へやりて、忠七を引離す言廻しも手軽く、花道にてね菊に出合ひし折忠七を後にかこひて擦違ひ、忠七が振返るを手にて向へ往けと知らせ、すまし切つて後よりの引っこみ、一分一厘隙のないこなし方には思はず息をはづませたり。相合傘の出に、傘の柄を二人でもつては持重りがするとか、くつゝいて歩かると足が搦むとかそろ／＼皮肉をいひ初め、足駄の緒の切れたを見て、安物買の錢失ひ云々といひ、傘はれれが立引いてかつたのだといふまで、次第／＼に邪慳になる工合抜くる程よし。何かいひ捨てゝはさつ／＼と先

へ行かうとする工合妙なり。ねむ己のところへ何しにくるのだといふあたりからぐつと空つとぼけ、今時うんちまぬけがあるものかとか、自惚たことをいやがるなとかいふあたりいかにも憎つ振なり。足駄で踏付けてお乍ら得意の長白あつて、と眉間に剣をつけ、ごまあ見やがれといひて、ほんど傘を開き、これをおついで、橋を渡り乍らのひつこみ、御注意ほどありていかにも意氣な姿であつたり。内の場にて魚屋を呼びとめての出、湯上りの心にて、手拭を縫合せた浴衣をはふりて前で押へ、三尺を肩にかけ、楊枝を鬚にさし、濡手拭にて顔を拭きながらの出、誰やらの口調に習へば、意氣といふものが衣裳を着て出て来たやうなりとでもいふべきはまり方なり。鯉一本の値をきいて、一朱ばかり瘤を出すなねとねざる工合、腹掛から錢を出してやり、残りも借の方へ入れてくんなど大束をきめる様子も好し。源七が花道の出の間に石竹の鉢に水をやり、これは鉢から下した方かいととか何とかいふのも、穴の明かぬ御工夫といふべし。乗物町の親分と聞きて、急に慌てふためき三尺の結び目を後へ廻し、團扇でうち中はたきたて、今日はどちらへ御参詣ですか、なぜ御用があるなら人を下さいませんかといひ、暑うございませうから羽織をねとんさいと團扇であほき乍らべんちやらをいひてびよこ／＼辭義をする工合、後での悪體がぐつと引立つやうこゝで馬鹿丁寧のこなし方、この道の鬼を申すべし。勝が茶を汲んでくるを見て、うんなものが親分にあげられるものか、いゝのをいれてきねねといふところも、源七がね熊のことで来たときいて、少しつんとする氣味ありて、わつちのところの茶だつて、まさか毒をいれてあげはしませんと少し毒をいふ工合もよし。源七が己に任せてくれと金包を出すを、どうも濟みませんと頂いてねいて中を改め、十兩のこの金でかねと念を押し、てえげねにしやがれと敲き返すところぐつと瘤の込み上げし工

合凄し。何をされるものか敲きけえしたのだといふ白にてきつと極り、これ十兩といふ相場はどこで立てて来たのだといふからりからぐつと前とかはつて下すんだ白廻し小氣味よく、彌太五郎源七だひから負けられねえといふ皮肉ないひ廻しも外に真似手なし。勝や見や、いやなねちさんだなあといつて、せゝら笑ふ意氣組天下一品の呼吸にて、これでどう黙阿彌翁の文句初めて活動したりと申すべし。源七が立あがると火入をかこひし身構も隙なく、留守をつかつてくんなどつこむところも悪くけれど、取分け勝が種ゆるんだ伯父さんへといふをどめて、これ二つ名のある親分だ、失禮なことをいふもんぢやあねねと、こん度はいやに丁寧ないひ廻しで冷かす工合、また手替りの面白味なり。勝がなせ手出しをせしに歸つたらうと聞くと、うかがやつぱり年の功だといふ工合、いかにも生利にて妙なり。鍵を探すところから烟管で錠を叩いて血豆をこしらへたといふ幕切まで、いづれも面白し。長兵衛が這入つて来たを見て無暗にこまをすつて馳走をする工合は借金の催促を恐がる様子見え、三十兩の内裁を聴かず、上總無宿の入墨新三だとなんかをきくからいばりも、急に氣がついてあやまる工合も軽くよし。得心するか召連訴をしゃやかと嚇されて、うれぢやあ負けてしまひませうと得心するところも後とつかぬためあつさりにてよく、お熊が禮をいひ居る容姿の美しさに見られて勝と目を合せ、その儘柱によりかゝりて、あゝつまらぬえといふ心にて内懐から手を出して顎をたゝいて居る工合、捨てぬ仕打にて大得心なり。長兵衛が金はやつた筈だといふに驚き、腹掛をふるつて見るところから、夫を忘られぢやあ大變だといふ可笑味も受たり。金は小判だと喜んで目の子勘定をするところから、旦那こりやあちつと違やあしませんかと幾度も勘定して見て、ねりやあめんくらつちやつてどうしてもわからねえといふ工合も眞剣にて面白し。半分貰ふと聞いて抑

山に驚き、そんなものはいらねえとふてるところ、又召連訴を嚇されて據なく承知する工合、この度は體がくた／＼になつて、着物の襟が脱げかゝりし様子、芝居とは思はれず。おれもよつぽどふてえ氣だが大屋さんには協はねえ、これが圖ぶてえといふのだといふ白も、がっかりした調子にて大受なり。又二兩引かれてしよぐるところ、いらざあやらねえといはれて慌て、金の蓋になるころも可笑しく、ええと長くねくびを出しこれであつと留飯が下つたといふ幕切、金をほうり出し投首をし乍らつまらねえとの思入も抜目なし。殺しの場。月代の延びし假髪に半天の好み男前よく、勝に掛金を持たせてやる工合、手軽く、源七との立入に地獄がかりし形容の白、たんかの切れ方は申さうやうなく、立になりて橋の上へとん／＼とゆき、どすを振かぶつてのきつと見ねは小氣味よく、殺されまで隙なし。總じてこの役は勘五郎の方が本家ですと當人も申されしやに聞きし如く、ちと今の身上には安すぎやうかとも思ひしが、どうして／＼とちよびに安つぽくせられて、廻り髪結を見るやうな心地し、又男振がよすぎてね熊が惚さうにはないかとも按せられしが、小惡らしくいやな奴と思はるゝやうなこなし方は、流石世話物の名人といはるゝ人だけありて感服なり。

中村福助丈。大磯の虎役。果して當時の遊君はかうした拵かどうかはさて置いて、いかにも古代の遊君と見てよし。又さう見ゆればうれにて澤山なり。白まはしも仕打もしとやかにて結構なり。十郎と婚禮せよと云はれ、耻かしとの仕打も、只團扇を顔にかざすだけにて、しつこからぬほうの人に適ひてよし。馴染の初めよりかうした別は覺悟をして居たりとの物語も、確に情を解するほどの人泣かするに足り、これで後尼法師となりて、夫の菩提を吊ふ節婦と受取れたり。判官義経役。揚幕より出られし折の美しさ類なし。判官御手を取り玉ひと云ふ件も主従の情合うつり、今の所に

てこゝをゆく役者は外になし。白子屋に熊役。町家の娘で色男を拵ふる役ゆゑも少しは仇つぽい所があつてもよし。忠七に泣き付くあたりより黄八丈に着附が變つての出まで申分なし。新三内のやつれ姿も一しほ容貌を上げたり。

市川米藏丈。手越の少將役。着附や髪飾が赤いだけに福助丈に較べて餘程今様に見受けたり。婚禮の耻かしがり様も遊君にしてはちつと素人くさく思はれたり。御所の五郎丸役。この丈には無理な役廻りゆゑ、調子のかんばしりなど受けかねたり。

坂東秀調丈。巴御前役。押出しが肉のない人故、名代の勇婦とは受取れず。白まはしなど力を入れて言廻され、大層きつさうにりきんではおらるれど、一向に力味ばせせず。諸士の立騒ぐのを制する所も、筋のためとは云ひながら、當込が見えすいてへんなりき。萬江役。故人坂彦はよくしておられたりとき、しが、名にねえ兄弟の頭を押へて、工藤を計らうといふほどの人物ゆゑ、差詰め堀越に持込も等を、都合ありてこの丈に廻しよし。丈もどこか堀越をはつて仕て居られしやうに見受けしが、さて重味と云ふものは器用ばかりでゆくものでなく、總體に幅のなきが故映り悪く、一番目中的の見せ場の一番目中的のだれ場となりしは御氣の毒なり。兄弟の異見も調子のとまりのはつきりせぬため應へ薄く、小次郎を見送りての出に、すらしとした姿でよろ／＼しての歩きつき、兩手をぶらりと下げたる形は、どうやら柳の精とでもいひさうなり。襦袢を着ての出は餘程見直し、虎少將を打擲すると云ふ筋を改められたるもよく、只一人を勵ますだけの白も力が這入りてよし。二人を左右に引付けてちよびに乗りてのこなし、見物は大分泣いたれど、形はやはり今一と息なり。

市川升若丈。榛澤妻役。初手愁にしづみての出は相當ならんが、二の宮が悶着の間只うつむいてお

らるゝ形、仕草がないにしてもあまりの不恰好なり。巴が由良の助けみたる丈、この丈は九太夫の坐
睡じみたり。源七女房役。この丈だけ大坂訛がとれ切れぬゆゑ大層けなす人もあれど、さして悪落
のくることもなく、女振も至極相應したり。

尾上榮三郎丈。喜瀬川の龜菊役。すつきりとした姿は此丈のものにて、女舞鶴と云ふ格で兄弟を宥
むる白も大分落附が出たり。狩屋にて手引の折の白まはしが古代なだけ、何々であらずかしといふ
やうなる白、口真似のやうにきこゆるは残念なり。どうか白に餘情あるやう言廻はされたし。下女お
菊役は白粉つ氣なし、色氣なしで、そして男ずきのする女振、いかにもよし。忠七とお熊とに話をさ
せて、粹を通して這入るあたりも巧者に出来、使先にての獨白も主思ひの様見え、勝奴をつきまは
すうつけなさ、うんなら今のはこのこなしある幕切まで、この役は樂にして居て、大出来にてあつ
たり。

市川女寅丈。内命を受けての出といふ心かしらねど大層てきばきして、束髪女學生と云ふ風あり。

二の宮も避易するなるべし。

市川團十郎丈。工藤左衛門祐経役。道服の拵が羽織を裏返しにしたやうな濛い好みゆゑ、いろ／＼
の説もあれど、惣髮の好みも品よく、顔立もどことなく一と癖ありげに見ゆ、一鴈別當にて倭奸の
人物とは確に見受たり。殊更いつもの道樂をやめにして髯をつけられぬは大助かりなり。高燕老人
は工藤は固京家に入出し、文事に爛ひし人物にて、右幕下の氣に入りしも幫間らしきところありし
ためなり、さればこの役なども今少し文弱に見する様派手を作りにしたらばよからんといはれたり。
いかさまうの方が芝居としても見榮あるべし。全體會警山の工藤はよほど懦弱な人物にて、この場

にても兄弟を見てれのゝきれり乍ら、老母の病を聞いてこれ幸と一寸逃れを云ふやうな作意なり
しを、こんどは對面の工藤をはつたところもあり、殊更この丈が菊左の兄弟を向へ廻して勤められ
たることゆゑ、人物も餘程重く作られ一かどの奸雄となりたるため、一番目中的の見せ場となりたり。
周の文王は云々より鬼王が弟團三を得たりとの白は、この丈の氣に入りさうな文句にて立派に聞け
たり。兄弟が老母の大病と聞き當惑の體を見て、老母の大病さうな氣遣ひ、一家のよじみ祐経も人
事とは存じ申さぬとすぐに切り込んでくる工合隙なく、どこか空親切らしく見ゆて受けたり。わが
云ふことをよつく聞かれよとの白にてびたりときまり、何故あつて和殿等が父の河津をうつべきや
とか、何を以て何を證據にか重ねかけて言譯する辯説いかにも巧者なり。團三の諫に兄弟の勇氣
挫けしを見て取り、さもしげに言譯はいたさぬ、此場において太刀打せんが云々と打たれぬやうに
理づめにする言廻し、お爲ごかしの腹見にて憎く、こゝは新三が忠七をねだつる件とおなじゆき方
なれど、見物が夫れほどにかつてくれぬは妙なものなり。和殿等が孝心祐経殆感入ると云ふとこ
ろもしめたと云ふ腹見の透きて、本街道は餘程のみちのり云々と云ひかけて、ちよと思入あつて、
むゝと扇子にて膝を突き、幸ひ祐経が秘藏の逸物云々と云ひて馬を餞するところ、この一呼吸の間
にて兩人を懲さんと思付きし腹を聞かすところは、げに菊五郎丈がたゞへし如く、この丈が一手
捌の妙處といふべし。他日面會にて木の頭、致すでござらうとの幕切、引張の見ゆはよい心持な
り。勸進帳武藏坊辨慶役。お家物十八番の中にて第一に据ゑ置かれ、天覽を辱うしたるほどの天
狗物なれば、彼此云ふべき處なし。唯此丈も最早老體の事と云ひ、此程より氣管を痛め居られ、調
子を餘程いとはるゝやうに見ゆたり。又白を勝手に變更せらるゝ爲か、往々聞づらいことあるは申

分なり。(明治二十六年五月)
歌舞伎座今度の興行は

時代物陳列舞臺、愛宕連歌誓文臺、新七つ面

にて銘々大肌脱の芝居をして見せられたるは、安生堂産院の慈善にも優つた功德と申すべし。聞けば團十郎丈も新作は骨ばかり折れて御見物が嬉しがらず、時代物は眼をむくだけでわつと受けて下さるから、もう新作はだめだと太い息をつかれたとやら、新作全體がだめだといふのは太早計なれど、太田道灌や大久保彦左衛門のやうな新作を骨を折つてやらうよりは、古脚本の面白いものを繰返してやる方が當人は勿論見物も大助かりなり。

横山家形の場は所用ありて見落したるが、兎に角猿之助丈の横山太郎役、阿房の内は吾妻座で見た大藏卿の格で手軽くこなされ、歌女之丞丈の淺香役、宿場女郎の肌合も見せず、しつとりとやつてのけられしならむと存ず。

頼兵衛内の場。兒福丈の義峯役。福助丈の聲色をつかつてござるだけなり。團次郎丈のうなて役。子役の調子がまだ抜けず。市藏丈の頼兵衛役。顔の作り萬端お仕着せ通りにて、金儲の話もかなり大手に出来、ぬつと出でたる主の頼兵衛の出も立派、人形身などにならずに忍び込むところもまづ一通りにて、殊更娘の意見を聞かず、邪慳なる仕打欲り好く、大分よい見物もあつたれど、待つて居りし割には今一と息の憾あり。新藏丈の六藏役。前々の例にて御馳走に勤められたれど、どうもくずかつたいところありて受けられず。しかし新盛座の團升丈に較ぶれば遙によし。團七丈の雇八介役。なぜこの人に六藏をさせぬかと思ふほどに出来て、すつかり新藏丈がくはれてしまひしも是非

なし。訥升丈のお舟役。四年振の御目見に、吾妻座で朝稚丸を見せてわれ等に後世畏るべしと舌を卷かせたる源平丈とは見違ふるほどの御成人にて、十年前に高賀丈が新富座で勤められた縁か、この度の出し物、美しき中に才はぢけたるとりなし、身上にはまりて大當であつたり。義峯と顔見合せて、お留め申しませいで何と致しませうといふところの色氣充分にてざわつかせたり。うてなを見ての格氣から妹であらうと推量する件、口説から濡、又六藏をのせかくる言廻しまで、極器用になされたるが、慾には今少しほいやりとしたればこ娘の情合がほしかつたり。手を負うてからも大車輪の働にて、意見から太鼓の件まで少しも氣のゆるみなく、樂にやつて見せたるは實に大した腕前にて感服。しかし向後の御注意は餘り小手の利くに任せて、藝を鷹揚にすることを忘れぬやうにすることなるべし。

喜内住家の場。市藏丈の喜内役。病中の拵申分なく、いざり乍ら戸口に這寄り、刀を杖にじつと重太郎の様子を伺居る様子もよく、子を刺殺したを見て出来したと聲をかけ、行くを呼留め、重太郎の手をとつて引上げ、本心を明す件、新藏丈と呼吸合つて、息もつけぬほど好し。新藏丈の重太郎役。人品は徹り好けれど、母や妻につれなく當る件より門口で子供をつき付けらるゝまでは例の流義で何にもせず、白に力がいり過ぎて聞苦しいだけなりしが、子供をかせる愁歎から大分身が這入り、傍輩に耻しめられて焦立つ氣組充分にて、思ひ切つて子を刺殺し、驅往かんとして父に呼ばれ、はつと平伏したまふ手を取られて引上げられ、と本心を明すまで、せつない心持を得心のゆくやうにせられたるは流石なり。これで高慢氣がなかつたら尙よからう。團七丈の竹森役。申分なし。幡谷丈の喜内妻役。身上にしてはあんなものか。女寅丈のありえ役。三つ四つの重着をといふちよ

ぼに合しての振も苦もなくでき、初の中はこの丈一人芝居をして見せられ嬉しかつたり。兒福丈の浮橋役。綺麗ではあつたれど、例の調子で書置を讀まれたには閉口したり。田津丈の太市役。痘瘡子らしき聲を出すといふ人あり。

産湯稻荷の場。福助丈のね弓役。横濱で出された重の井が大層よかつたと聞きしゆゑ、定めしみつしり應へやうと思つたわりには堪能せぬところあり。さうじて義大夫物は人形に合して拵へたものゆゑ、ちよぼに合して充分動いて見せでは情合映らず。悲しいところも悲しくなるはいふまでもなし。ところがこの丈は堀越信仰の人ゆゑ、大抵なところは思入で立て切り、内端に／＼と心掛けらるゝためか、どうも舞臺が寂しくなり勝にて、重ねかけての愁歎には調子が一つゆゑくどくなる心地するは残念なり。しかし容貌や拵は例の高等づくめにて勿體なく、ね鶴を我子と知つて愁を隠す仕打も流石に上品に出来、ま一度顔を引寄せての件には大分芝居をせられて有難く、跡を見送りてべつたりとなりて、狂氣半分／＼はの文句をいひ、跡をつかくる件に柄杓で水を一口飲むのも尤にて、息せきとの引込みまで、二三の人の大不評の割にはわれ等は受けたり。翫太郎丈の妙貞役。顔を出さるゝとわつといふほどの人氣にて、身の上咄から辨當をくふ可笑味ぬくるほど好し。市藏丈の妙林役。これも後生願ひの隠居連にある柄にて、飯を喉に支へさずるところ、自分も菓子ね鶴にやるからといひて、妙貞の菓子を一貫ひ、半分お鶴にやりて半分自分もくふところなども生地滑稽にて、愁歎をこはすといふ人があるかもしれぬど、われ等は大笑／＼。荔枝丈のお鶴役。まだこれといふ役のついたのは一度か二度かと思はるゝのに、少しも危なげなく、人の檐の下へ寐ては敵かれたりといふ振も大分場馴れ、ね弓に絶りついで泣く形も愛らしく、花道にかゝり笠と杖と

をとり直しての引込みまでよく出来され、この場はこの丈のこの役で泣かせたりとの評あるはお手柄なり。

本能寺の場。新藏丈の信長役。いつもの小田春永にならぬ様との御見識か、性懲もなく活歴史がつて髯などをつけ、白に馬鹿に力を入れて重々しくいはるため、思慮分別があり過ぎて、一徹短慮も御大將とは見えず。されば随分つゝこんではこなされたれど、本文の趣意にも、この場の釣合にも協はぬやうにて不評なり。團十郎丈の光秀役。呼出しになりて、揚幕の内にてはあゝと答へ、中腰になり、大小を妹に抱へさせての出、ねんで假髪にて青髯を薄く作られ、額に鐵扇で破られし迹をつけ、拵は白の重ねに紫の着附、上下も同様紫にて、これに金縫の桔梗の紋ある好み、これは幸四郎も海老藏もかうせられたとやらにて、市川流の拵のよじ、二さもあるべく思はれて大立派なり。花道中程にて舞臺に向ひて斜に平伏し、御機嫌伺より御免のね禮までを、例の名調子を一杯に張つて、ゆる／＼の言廻しは、他人に真似のできぬね家の株なり。鳥の塒を焼かれし心地、しいゝんたい度を失ひし折柄のあたり尤難有し。信長は難有いか、辱ないかといはれ、はあ、はつと恐入つて、次第に體を下ぐるところも好し。一同にね進みなさいといはれ、はつと立上り、兩手にて袴の前を押へ、兩足をちり／＼と左右へ開き、中腰になりて屹と極まると、どん／＼と大太鼓を打込むところの形は芝居好の涎を申すところならん。舞臺に來り斜に平伏し、盃を下さると聞きて頭を上げ、馬盃を眺め不審の思入ありて、この器をお盃とは尋ね、その方の望に任せ云々といはれ、君々たれども臣々たらぬこの光秀との白ありて、謹んで飲干す露惡びれぬこなし、范雎の引事を聞きて、君臣の道に於いて恨に存ずるいはれなしとの殊勝なる言廻し、始終信長の難題を柳に受け、一

向中國の後詰を願ふ心入大得心なり。秀吉の指揮に従へといはれ、すりや秀吉の下知に従ひと少し氣色ばみ、馬に譬へて轡を投與へらるゝ件に、かく迄申しても、心解けざる御大將との白ありて、轡を内懐に納め、じつとの思入も應へたり。蘭丸が所領を望む件にて、信長に慥か其方の領地ぢやなといはれ、御意にござりますると不承く言廻し、信長に他家の領地はなう光秀といはれ、天下は天下云々の白ありて、憚ながらこの光秀、存せぬやうにござりまするとおすれたやうな言廻し、いづれも人物に適ひて凄し。淺山が日吉丸を拜領するを見て、己が懇望せし及なることを述べ、お羨ましく存じまするとの快からぬ言廻しも好し。拜領の箱の蓋を取りて切髪を見、合點の行かぬ思入あり、覺があるかといはれ、又思案をして右手に蓋を持ちしまゝ正面の方を見廻し、屹と心附きし仕打にて、件の蓋にて箱の端をとんと叩き、信長と顔見合はしての氣味合ありて、蓋を取直して下へつき、上に兩手を重ねしまゝ、じつと切髪を見詰むる無念の相も震ひつく程よし。この切髪は越路にて、光秀流浪のうの砌との昔語きつぱりして、烟も細き朝夕のより僅なる價にかへまでいひかけて氣を替へ、かたりと箱の蓋をして三寶をつき出し、慥に落手仕ると平伏するまで、胸をさすつての仕打得心したり。一同這入りし跡にて、桔梗を次へ追立て、靜に大小を挿し、箱を右の脇に抱へ、うつ向勝に花道にかゝり、附際に留まりて跡を振り返り、さて正面を向きて、屹との思入にて、謀反の腹を極むる心持を利かせ、箱を左の脇に抱へ直して、右手にて箱の端をぼんと叩き、揚幕を見込んでぐつと大見あり。これにて木が這入り、幕を引くと一所に向へ這入らるゝまで、無類飛切の面白さなり。さうじてこの丈は英雄、豪傑、忠臣、義士といふやうなものが好物にて、毎度出さるれど、謀反人の國崩しといふ風の者はやつぱり三河屋などの方が本職であらうと思ひしは

素人の量見にて、やる氣になれば何でも出来るとはいへ、見るから謀反人の相好顯はれて、何となく場が殺氣を帯ぶるほどの凄味は又格別なり。三河屋も凄味は充分なれど、品格の段になると、此丈の方が遙か上にあり。信長の御前に伺候して居る間も、始終上眼にて信長の舉動に心をつけて、少しも油断なき取成、充分腹に一物ある人と受取れて唯々恐入るの外なし。染五郎丈の蘭丸役。こゝでは見せ場がないとはいふ條、どうやら菊人形の桃太郎じみて、應へかねたり。訥升丈の桔梗役。これ目見の口上でもあるかと思ひしに、さうでもなかつたれど、始終役に氣を入れて居られしは感心。その外の衆の評は預りとすべし。

光秀旅館の場。團十郎丈の光秀役。早足に歸り來り、後詰の願の協はぬことを告げ、安田に軍兵を殘らず國へ返せと表向にいひ付け、次に傍に呼びて耳打をなし、安田が氣組むをこれと押へて急がせやり、左右を遠ざけて妻に切髪を見せ、これより割白の述懐はみつしりと應へ、取分け留めての後悔はのあたり、今日の耻辱もこの黒髪、この身の爲には思あり仇あり、わが胸中推量いたせのあたり尤も好し。紹巴が次の間より出づるに目を附け、謀反を勧むるを二重より突落して一刀に切下げ、死骸を取片付さするところも大舞臺なり。上使れ入りと聞きて近習を呼びて耳打をなし、二重に下りて出迎ふる件にて燈消ゆ。こゝは所も愛宕山の白ありて、この中に仕度をなさんと近習を呼び、疊をたいて自身の場所を知らせ、腹切刀を据ゑし三寶を探ぐるあたりいふ迄もなければ難有し。上着を脱ぎ、白無垢、無紋の上下になるところ、趣向も好けれど、この丈の凄味がうれに加はりて身の毛が立つほどなり。燈を取寄せ、上使の驚くを見て、謎意の先を越し、讀上ぐるを聞き、かくまでに悪ませ玉ふもと、少し息込みて氣を替へ、日吉丸にて介錯せられたしと頼み、白

乃の裏表を手燭にてとつくり眺めて、疑もなき日吉丸といはるゝ形も申さうやうなし。文臺を取寄せて辭世を認め、扇面を上使に渡し自身で辭世を吟じ、目を閉ぢ腹の邊を撫づるまで、充分に落附きて覺悟極めし有様、いかにもよし。これと一所に時の鐘を打切ると遠寄になる。長尾が太刀を振かざす。南無阿彌陀佛と靜に念佛を唱へながら、向を見込み、最早手筈が整ひしかこの腹を利かするところ不思議。長尾が切下す白刃を引外して、左手にてうの利腕を押へ、右手を懐より出しかけ、右の足を前に踏出し、糸を引いて着込の網襦袢を見せ、今ぞ成就のその白ある。上使がやあど驚くと、右の片肌を脱ぎ、右手に腹切刀を取上げて淺山の咽元へ打付け、うの手にて日吉丸を奪取りて立上り、長尾を一太刀あびせ、兩足を開きて身を屈め、手燭に照して白刃を眺入る。この間に安田は鎧出立にて花道より駆來るといふ取合せ、御兩人の映りいかにもよく、息もつけぬ程にてあつたり。待兼ねた、安田作兵衛の白ありて、兩肌脱になり、右の足にて三方を踏碎き、例の網襦袢の拵にて、日吉丸を右の肩に擔ぎてぐつと大睨をやらるところ、九代目市川團十郎を代表すべき大歌舞伎にて、たまつたものにあらず。さて軍の駈引を聞き、妻の白を耳にもかけず、馬引けつと大音に呼はり、血刀を安田に拭はせ乍ら、御兩人引張の幕切まで大極上々吉なり。この役はいふまでもなく名代の鼻高の幸四郎丈や、親御の海老藏丈などの當藝と聞きたるが、それにも譲るまいと思はるゝほどの出来なり。市藏丈の作兵衛役。こゝらが本役にて上下出立も鎧拵もこの上なく映り、屹と強勇の兵と見て、三役中一の出来なり。女寅丈の皐月役。亭主が好過ぎたせいもあらうが、何にしろ緊要の切髪の件が持切れなかつたは致方なし。

北山楓狩の場。團十郎丈の曾呂利役。着附の好面白く、人物も曾呂利然として、面の名を聞かれて間違へをいひ、うかが曾呂利流でござるとのほげ加減をかしく、新七つ面の中、最初の邯鄲にて、しなやかなる足取手振を見せ、次の頼政にて、きぼくとはでなところを見せ、殺生石を新藏丈に代らす間に衣裳を着け、葵の上にて凄味の乗地も申さうとところなく、面を取替へて被せられしを知らずに、羽衣の面で羅生門の鬼を舞ひ、鬼の面で羽衣の優しい振をする可笑味大受にて、どど惣踊まで大御苦勞であつたり。新藏、猿之助、染五郎の諸丈。いづれも一粒にりのとことんやなれど、親玉の後ゆゑ見榮せざりしは、いかにも氣の毒の次第なり。(明治二十六年十一月二十二日) 初春の壽きに何ぞ書いて見たく、硯には向ひながら、別に趣向もあらねば、昨年中大歌舞伎よりも緞帳の方が芝居をするから遙に面白うござると、いつも肩臂を張し位、随分小芝居の役者に知つた顔あるを幸、一番讀者の御案内旁

明治二十七年初芝居の豫評

といふものを、未だ誰もためさぬだけに、やつて見やうと思立ちぬ。

歌舞伎座は一番目の雪駄直し長五郎、中幕の廿四孝、大切の明烏とも、ある評者にはせたら露の滴るほど結構なりと申すべき艶物揃なれば、眞の芝居好といふほどの芝居好は、我人ともに暮の内から、この十二日の蓋明を指折數へて待つて居るはいふまでもなし。菊五郎丈の長五郎。汚を細工の拵五分も透なく、源之丞を殿様ごがしにするあたり、主膳宅のこはもて、半次内のくだけ方など抜くるほど好かるべし。八重垣姫は御器用な事と申す丈にて、狐火を人形でゆかれ、人形遣に綺麗首を使はるゝなど政略といふべし。時次郎は白く塗らるゝだけで、ねかやに謀反があるに相違なし。福助丈の勝頼は二度目といひ、固より勝頼役者のことゆゑ、出たばかりで見物の女性を惱ます

はまだしも、浦里の仇つぼきにはいかなきまじめやをも浮き立たすべし。松助丈のね虎ばあ、半次も苦もなくやつてのけられ、市藏丈の主膳は品が乏しいかもしれねど、山名屋亭主は憎味たつぷりならん。秀調丈のね長は容姿二の町なれど、濡衣は大結構なるべし。菊之助丈の源之丞。少し若すぎるかもしれねど、榮三郎丈のねこよには好き對なるべし。家橋丈、訥升丈の更科、原は花形揃にて勇まじかるべし。

明治座は伊達騒動の實録のよし。筋を知らねば好悪はいへねど、固よりくらう人の細工にうつあらう筈もなく、先代萩といふ狂言のあるのに、わざ／＼實録を持出されし程のものゆゑ、左團次丈の落着いたところ、小團次丈のねばついたところ、壽三郎丈のもがついたところ、さては米藏丈のきばついたところに依つた箇處定めて多かるべければ、新案ずきの竹の屋主人は、定めて朝日新聞の十日位を書つぶして、例のめでたし／＼をきめらるべし。序に權十郎丈の小十郎は人品倅り、秀調丈の淺岡は皮肉なことになるべし。大切の石橋、これ又目を驚かす大立派は今より思ひやらる。

春木座の一番目楠正成にては八百藏丈の正成、附髭鎧下の大濫好みにて、辯説滔々と勤王論を唱ふるなるべく、中幕の瀧夜又は福助丈のね目見ゆゑ、白綾の振袖を引抜いて、金糸の網襦袢になり、小長刀でもかい込んで六方をふつて這入らるゝか、但し引張の見ゆるしくかはらしぬが、なにしろ華やか／＼といふ株ならん。大切に松之助丈のね光、田舎娘には仇すきはせずや。雀右衛門丈の久作、ある劇通を恐れ入らざること受合なり。

新市村座の忠臣藏の裏表にて、九藏丈の由良之助に勘平、兎も角も手替りといふだけのことはある

ゆゑ、松王や藤次に敬服した手合は、こゝが好劇家の喜ぶところであせうと顎を撫で、随分面白くないところも我慢するに相違なし。しかし由良之助が惣髪になつたり、勘平が頬髯を生やしたりする底の活歴史は、ね爲を存じて留め申す。訥子丈、芝鶴丈とも、役々を敷でこなさるゝところ當世なり。瀧十郎丈、勇賞丈までも、この座にいれば身分不相應の賞賛を被ること間々あるは、三河屋の人望大層なものなり。

常盤座の一番目の紀文大盡に雛助丈の紀文、梅曆の藤さん位には見ゆるならん。中幕源氏礎の多見丸丈の忠信、車輪といふことが技藝の妙ならば、この丈は名優に相違なし。

三崎座の一番目弓張月に福圓丈の爲朝、醫者に見立てさせなば、この爲朝には神経系の病ありて、時々筋の痙攣を起し、放心することありといふべし。團升丈の紀平治、棧敷のね客が死んだ女房八代に似て居るので、御曹司はどうでもよいといふ風情あるべし。二番目黒手組の助六に家太郎丈の新左衛門、團三郎丈の助六、どちらもつゝこんでよくして居れど、惜いことには二人とも小柄にて見立があるまじ。其答丈の揚巻は五厘のこぶ巻といふ悪落がきて、猿枝丈の新兵衛、舊悪のある親父のやうに見にはせずや。

新盛座の一番目酒井の太鼓に歌女太郎丈の忠次、悪い出し物なり。此丈にはどこまでも片倉小十郎がついて廻はつて、少しも泥酔して居らぬところが、大酒量の證據とでも逆を張るかしらぬが、兎に角二錢團洲を思ひ出すが落より。幸藏丈の鳥居。氣組だけは慥なり。二番目神明の喧嘩に幸藏丈の辰五郎。常盤座で一度出された上、持前の勇肌にて、師匠うつしの小手の利いた仕打大出来に相違なく、梅三郎丈の女房との別は、御兩人にてたつぷり泣かせらるゝに極まつたり。この次には菅

原でも出して幸藏丈の相丞、松王、歌女太郎丈の覺壽、源藏でも見せられたいものなり。眞砂座は嵯峨の怪猫にて福圓丈の化猫、こゝらが本役にて、足も達者手も達者なところ顯はれ、最負評者は大受なるべし。中幕の祀三輪。自分のすることだけ手つとり早く片付けるは、日の短い時には徳用なり。馬十丈の鱧七、獅童丈のれむらなど、手覺のこゆゑ危なげなかるべし。柳盛座の一番目夜討曾我に和光丈の五郎、大堀越信仰のことゆゑ、勿論火事見舞の拵にて、討入の荒つほきこなし、敷皮の述懐など點のうちどころなかるべし。梅雀丈の十郎。時候柄風邪の氣味あらん。中幕に梅雀丈の六歌仙、達者やのこことんなれば、兎に角倦はこぬ筈なり。二番目のお園六三は、仲藏丈と吉三郎丈との兩花形にでれ／＼させて見するのが呼物の一つなれば、下町の娘子はいづれも大悦なるべし。

吾妻座は一番目鳥追お松、中幕盛綱陣屋、大切淨瑠璃にての女優一座。鶴枝丈の梅干を含んだやうな顔附は少々恐れ入れど、錦糸丈の三好屋然とした舌味なき藝風は男優を凌ぐ値ありて、時代世話ともれ手の物なれば、芝居好は必ず見てやるがよし。藍染座は忠臣藏にて、桃十郎丈の由良之助。播摩屋が熱に浮かされたやうな藝風なれば、由良之助定めて肩を振つて歩くべし。

新聲館の人形芝居は千本櫻の通しにて、播摩丈の鮎屋は例の喉で唄はるゝだけならんが、津賀丈と綾瀬丈との川連館は、いかにも折合ひてずつしりするなるべし。(明治二十七年一月七日) 春木座の初興行一番目

嗚呼忠臣楠柯夢

といふ名題丈では、何れ八百藏丈の楠公に氣焔を吐かす御趣向かと思ひしに、繪本の模様ではさうでもなく、藤房の諫言やら、義貞の出陳やらありて、たまけに大詰の瀧の場は作り阿房の楠明王丸が本心を顯すといふ筋とやら、いかさま幸堂氏のいはれし如く、先代の新七氏が書卸されし記念の海老胴と同じ様を趣向と見ゆ。(役者商賣往來) 何んでも棟割長屋の安普請同様、手あたり次第に拾つて来て敲きつくと云ふが、この節の流行ものなるべし。見た人の話に、駒之助丈の義貞が富十郎丈の勾當の局に別を惜みながら花道まで行きかけ、いやだいやだとだまをこねて後へもどり、又馬にひきづられての引込は古今獨歩の滑稽にてありしよし、見落したるは初春早々の不覺なりき。それに反して芝雀丈の明王丸はいかにもよくして居たりとのこと、兼ねて目星をつけしわれ等は何より満足なり。中幕

瀧夜又

は勝諺藏氏が福助丈のね目見えに書卸したるものよしなれど、同丈に瀧夜又と唐衣との早替りをさすのど、焼討の火事の方に計氣を入れて、肝心の同丈が演て見せやうといふ箇處なきは残念。つまり例の活歴史かぶれで役者に正本の素讀をさす丈故、一向に面白くなく、女子供まで愚痴たらたらなり。これよりか在來の瀧夜又でもよければ、歌舞伎座の向を張つて、先年壽座で當てられた八重垣姫でも出された方遙によかりしならん。筑波明神の場にて、廟の中より聲かけての出、下げ髪、白綾の襲着、胸に鏡をかけた拵、目の覺むるやうなれど、生贄の首とくのひ、蔭の太刀の手に入りしを喜びて、皆萬歳を諷へよとの幕切、錦繪を正で見るといふだけのことなり。光國と八郎との仕合を止めて、光國を味方につくるところ、將門の息女といふ威嚴はね持前にて慥かなり。

唐衣に代りての襦袢姿は、又立優りてうつくしきため、夫にあひてのなつかしさより耳打のところ、少しく色模様に見せしは是非もなし。薄紅梅の着附にて責にあふところ中將姫ほどの面白味もなく、だれこみてつまらず。焼討の場の姫も、氣を入れて居られたれど、火事の騒ぎに紛れて、何が何やらわからざりしは残念なり。八百藏丈の大家の光國。古館の場。惣髮に裁附じんべいの拵へにての出、花道の述懐は釣合の悪い白もあれど、兎に角きつぱりして氣持よく、古御所の椽端に腰打かけて、女童の振を見る間の形もよく、こゝ丈は芝居らしく嬉しかつたり。八郎と仕合をなし、神文を認むるまで申分なし。案内せられて歩むうちも四邊に心を配る工合抜目なく、唐衣との出合、空井戸より出で妻をいたはる幕切まで、役だけのことは充分にこなされたり。早拵にて二役老女岩崎。更作も筋りよく、凄味も相應にありて申し分なし。駒之助丈の隅田八郎。例のどんきやうにて、これを片腕の老黨とは危い話なり。うれに白の尻をやたらに引張るのが相變らず耳立ちたり。勘五郎丈の侍女。明けまして、ちよびはやつぱりちよびなり。宗三郎丈の侍女。悪味の中に可笑味を交せて、不恰好の體附もある形にてよし。雀右衛門丈の武藏五郎。焼討の場で何か言はるれど一向に解らず。瀧夜叉の介錯をして、幕切の見え、義理にも賞められず。銀之助丈の女童。一番見てくれといふ振事目に付きたり。二番目ね染久松妹脊門松。野崎村の場。見ぬ先より田舎娘には仇過ぎはせずやと豫評に記せしが、按の定島田鬚の羽が開き過ぎ、首を前に突出した領元意氣にすぎ、どうしても藝者の肌合に見ゆるは不注意なり。髪も結うてねかうものといふあたりは流石色氣あり。ね染に當るところ、灸を据うる可笑味のあたりも相應にざわついたれど、尻になりてよりは、切髪が長いため品がよすぎ、後室様じみて不受なり。雀右衛門丈の久作。こんなことはまつ手に入つたも

の、方なれど、小助をやりこむる田舎氣質も一通りといふまでにて、旨味といふものに乏しきは水の違ふ爲か。やいとのあつがり様は、場受ありたれど、異見の場ですてこじみた手附をせらるゝは、随分臭いことなり。右田作丈の久松。容貌といひ、仕打といひ、宵越の蕎麥同様のびきつて形なし、まづは古今の不出來と云べし。芝雀丈のね染。色氣が不足にて、少々人形芝居のね染じみたれど、門口で長々と待たする間相應に芝居をして居しは感心。さはりになりてからも今一息の憾はあれど、此座に居ながら一向に臭味のつかぬところは何よりのことなり。(明治二十七年一月十七日)歌舞伎座の初興行一番目

夢結蝶鳥追

は根が色つぼき話の上に黙阿彌翁が例の艶筆にて書きこなされしものゆゑ、どこもかも色氣だらけで、見て居ては面白けれど、小梅の小屋にてれ古代源之丞が同衾の始終を見るところ、日暮里の隠家にてお長が夫に鐵捕薬を飲ませ、とど引窓の紐にて縊り殺すところなどは、共に鄙猥に過ぎたれば削除すべし。小屋の場にてれ虎が源之丞より祝儀を貰ひ、ね難有うござりまするとね貰ひの様にいふところ、長五郎が逢引をして、これで一うく揃つたといふものだといひ、居酒屋にてれ直しだよといはれてびつくりするところなどは、場當りとはいひ乍ら、その社會の風俗を穿ちたる才筆といふべし。主膳の宅の場にて源之丞、喜六などが團樂するところにて、主膳が長五郎の身持を悪くいひ、とかく非人といふものはといひかけて心附き氣の毒がる様子、一座も白けて他の事に紛らする鹽梅など、實際あり得べきことなれど、凡作者にては夢視することも出來まし。源之丞が見染の幕切、長五郎が喜六の跡をつけての引込の道具替りも寸法が極つてよく、お長が出刃をふりまはし

て半次の疑念を晴す件も珍らしからぬ事とはいひ乍ら、芝居にては新しき趣向なるべし。中幕

本朝廿四孝

謙信館庭先の場は、八重垣姫の顔を拵ふるつなぎだけのことにて、餘り難有くもなし。十種香と狐火とは音羽屋が姫の初役とありて、道具衣裳とも大張込にて見事なことなり。大切

明烏春泡雪

は珍らしき出し物にて、榮壽太夫の物語り、梅吉の三味線色を添へて結構なれど、梅幸丈が時次郎とわかやと二役を勤むるといふ道楽にて、部屋を賣場との間に廊下の場を加へ、女郎の上奏案やら幫間の茶番やら長々と見せられしは迷惑千萬にて、その爲に緊要の氣が抜けてしまふは随分悪い思ひ付なり。

菊之助丈。阿古木源之丞役。吾妻橋の場にて黒紋付の着流し挿み帯大小にて花道よりの出、男前上上にて見物を呻らせたり。雪駄の鼻緒の切れしを爪先に引かけながら下座の合方にて舞臺へくる中、少しも體の崩れぬは感心。長五郎との名告合もしつとりとこなされ、おこよの姿に目をつけてより、四邊を眺むる素振にて橋の方へ歩み乍ら、二足三足ゆきては後を振返る工合も目立たぬやうにして得心させられたり。欄干にもたれ乍らしつとこれよの後影を見送る姿もよく、梅が香やの白にて前へ歩み出で、はてあてやかなと見とれて居り、長五郎に袂を引かれて持つたる扇を落し、世話であつたといひながらやはり向ふを見込む幕切、いかにも大どりにこなされ、序幕はこの丈のこの役で持つて居りし位にて、大當り。小屋に忍ぶところは着附かはつて一倍男前よく、おこよの出合も色氣を充分もつて居ながらすつきりとこなされ、微塵厭味氣のないところ大受。主膳宅にて髪を

撫付けさする件あつて、おこよが手を洗ひ居る後へ忍び足にゆきて、柱にもたれ乍ら立身にて寄添ふと、おこよも心附きて下から見上ぐるところは、洒落本の口繪にでもありさうな形なり。長五郎が狼藉を怒り刀に手をかくる條、例のつぶれた調子ゆゑ、白が急込みすぎ、惡落の來たはれ氣の毒なり。長尾景勝役。赤面の映りもよく、することもつゝこんでせられしは受けたり。人形遣は御苦勞。

榮三郎丈。おこよ役。序幕に鳥追の拵は明治子のわれ等には珍らしくて受けられど、顔を出されぬ位ゆゑ評するところもなし。小屋の場にて長五郎の歸りしあとにて上手の障子を明け、お虎と顔見合せてにつこりと笑を含む件、美しくてよし。庭口の場にて長五郎の相圖を聞きお虎が立たうとする、いきなり袂につかまつて離さぬところ、處女の情合にて受けたり。やたらにはにかむで煙草盆や茶碗を置いてはつひと離るゝところも態とらしくなくてよし。父に向ひて、ほんに父様大明神様といふ白は、世話場には釣合悪しきやうなれば、抜いた方がよかるべし。この丈の振袖役も大分度重なりし爲か、段々役に身の這入つて來たは結構なことなり。主膳宅にて丸髻の奥様風は一しほよく映り、菊之助丈源之丞との色模様よかつた。人形遣は御苦勞。

松助丈。小屋ものお虎役。序幕に鳥追の姿にて三味線を抱へての出、帯の間に紙捻りの紙をいくつか挿んで居られしは受けたり。小屋の場にて長五郎が昨日の殿様に頼まれてお前に用があつて來たといふを聞いて、おこよも嬉しむねと急に色身になるところどつと場受はありたれど、後にも同じ筋があるゆゑ、どちらか抜きたし。うの話なら大承知だと受合ひて長五郎を歸すまで、師匠と二人の出合ゆゑ譯もなく面白し。おこよと顔見合せ、おこよさんうと嬉しからうねえといひ、又今晚

はお樂だねといふ白、したるく色氣ある言廻しにてよし。庭口にて待遠がつて立つたり居たりする件より、長五郎を迎へに出て源之丞と顔見合せねちけて後へ下る工合も自然にて、煙草盆にかち／＼はいらないかといひ、今夜は初會だからといひ、又小判を貰ひて、ね難有うござりまするといふ可笑味など、作者の趣向を活かしてよし。長五郎が氣休めをいふを眞に受け、傍によつて突倒され、後をねつかけて這入るにも口取の折を忘れぬところ大屋の鯉なみに面白し。この場は若い二人でばつの悪いといふ筋のところを、師匠の長五郎がちよびなのとこの丈のね虎のがちや／＼したのとで面白く浮かせて見せられたり。小手柄半次役。居酒屋の場。遊び人の旅形申し分なく、長五郎の頼を受込むところさしたることなけれど、釣銭をとりて、百だといふ幕切は利いたり。石薬師前の殺しは、劍術も何も知らぬといふ腹で、一寸切つては一寸石の蔭にかくるゝといふ仕打、場受ありたり。手傳つて仕舞つて川に突込まるゝは随分悪い役なり。日暮里の場。川より上つて、どこかで借着をしたといふ風にて何か素肌引かけ、足駄をはいて出てくるところ見すばらしく、長五郎の煙草入の落してありしを取上げて、有様にいつて仕舞へとね長に逼る間もむきに怒らずに、不機嫌の體にて腹を探る工合よし。ね長が出刃を出して殺して呉れといふに、うんな手に乗るものかと振向きもせぬところ、遊び人の性根にてよし。とど刃物を突立てんとする覺悟を見届けて初めて押留め、ね長が悪かつたとあやまつて來るのび加減大出來なり。鼠捕樂を飲ませられて悶き廻り、細引で首を絞めらるゝまで、どうしても埋らぬ役廻りなり。長尾謙信役。品をよくしやうとの考か、頬髯をつけられたれど、大時代の白廻しは今一息据りが悪く、何だか御當人も氣のないやうに見え、ね間に合せの形あり。

市藏丈。梶井主膳役。序幕に浪人の賣卜者にて、番頭を手打にすると威して小五郎より百兩の金をゆすり、尙喧嘩の仲裁をする振にて貸金の證文を卷上ぐるずぶとい仕打、例の手強いところに欲りて出來たり。宅の場は急に出世したといふ筋より、撫付假髪、黒紋付羽織に袴といふ拵ゆゑ、人品も相應し、一癖あり氣にてよし。喜六に向ひては鷹柄に、お古代源之丞に向ひては鄭重に會釋をなし、お古代がいつもかうして居りますといふを聞き、どうござりませうやらと笑ひ乍らいふあたりもよし。兎角非人といふものはといひかけて紛らすところ、伯圓丈の講釋ではこんな人物ではなけれど、この筋では據なし。長五郎のこはもてにびくともせず、灸所を押へてさうといはする手並、中々大舞臺にこなされたり。石薬師の場にて石を投付けられての殺され方は目新し。齋藤道三役。顔の作りも白髮假髪の映りもよく、調子のよいため押手が利き、形のきまりも申し分なく、この前の頓兵衛などより荷が軽いだけに大出來なり。山名屋四郎兵衛はね持前の役柄とて、何もせず巨燧にあたり乍ら責を見て居るだけにて、憎味充分にこたへたり。秀調丈。熊坂ね長役。日暮里隱家の場。遊び人の姉御といふ拵申分なく、子分に肩を揉ませて居る形、中々仇つぼくてよし。三次のゆすりをあしらつて居る度胸のよいところも解りたり。長五郎がずぶ濡で來たのに着物を着替へさせ、酒盛をし乍らむだをいつておる間も、少しも遠慮のなき工合、情人あつかひの腹見にて受けたり。亭主の歸り來しに驚き、慌てゝ長五郎を揚板の下へ忍ばせ、そこら中を片づけながら、生欠伸をして、今日覺めた振をして戸を開くところ功者なり。半次が長五郎の煙草入を出して問詰むるに、はつと思ひ乍らぎつくりなごせせず、濟ましてまらきるところ滅法よし。言譯を聞かぬゆゑ、出刃をもつて來て殺して呉れといふ落附加減も身上に欲りて受けたり。疑

の晴れしを見て、酒徳利の中へ鼠捕薬を入れ、これこんなにあるよと振つて見せ乍ら、中の薬をよく混ぜるといふは御工風なり。夫が聞くを見て、人にもちつとは利くを見ぬるといふところの凄味も相應にて、殺しより繩にかゝるまで、按外よくして居られたれど、調子が例の通りすいてしまふので、どうも緊要の白が生ぬるく聞ゆ、正銘江戸子のたんにゆかぬゆゑ、凄味もそれ丈薄く覺ゆたり。濡衣役。後世に型を残さうといふ意氣組とやら聞きしが、さてうれ程でもなし。わたしや輪廻に迷うたさうなといふ詞もあるゆゑ、この役は水々として、色氣のある方がよき様に思はる。この丈のは顔立寂しく、先年市村座で見たる松之助丈のに劣れり。記念さへぢやにといふ文句ありて血のつきし白衣を持出すは、やはり鳥籠の傳なれど、汚細工にて嬉しからず。御許されてと伏沈むといふ件にて經机の前に泣伏すところは好し。諏訪法性といひかけて四邊を見廻し、うれが盗んで貰ひたいを、ね取出しが願ひたいといひ、取持の件にて後向になり廊下に立ちて四邊に目を配るなど、大分手替りをやられたれど、うの割にわれ等は受けず。

女寅丈。新造重里役。有形とて評判よし。

家橋丈。更科六郎役。男前と着附とのよい上、先に出らるゝだけ見榮ありて得なり。鶯の者役も貫役にて綺麗なれど、立廻りの二度ありしは過ぎたり。人形の足拍子は御苦勞。

訥升丈。原小文治役。着附の引立悪く、泉水の都合で二度目に出られしため見劣りして損なり。それに例のね齒黒口をやらるゝのが目について悪し。新造浦波役も不の字なのはね氣の毒。この次には小手を利かす役をつけて貰ふがよし。

福芝丈。歌女之丞丈が改名して名題に上られしはめでたし。娘れてる役。ちと無理な役廻りゆゑ中

位なり。山名屋女房役。體は徹りたれど、異見のところの白が時代すきて、軽くゆかぬは残念。染五郎丈。山崎屋小五郎役。師匠を張つて軽くするつもりかを見ゆれど、體がぐにやつくだけで不受なり。

兒福丈。調子がべたつきに聞けて閉口なり。この丈の調子が耳立つため、師匠のまで氣になつてくるは困つたものなり。

蟹十郎丈。小屋頭喜六役。小屋頭の人柄に相應して、長五郎を残してはつすところ、謠を歌ひ乍らの出も申分なし。長五郎に逢つて娘は身投をしたと、實しやかに話して居て、底に作り事といふ腹を利かす中々もつかしい場を、充分得心のゆくやうにして見せられしは感服。下男が持つて來た肴を間違だと叱り付け、うれなら返してくるといふと、なにとつてねくがよいと紛らすところ、上上の出來なり。主膳宅にて身分を顧みての仕打も届いたり。堀井理左衛門役。これも妙に徹りてよし。

翫太郎丈。番頭權九郎役。いつも替らぬ手代敵なれど、いつも替らず面白し。幫間辨孝役。八重垣姫のね茶番は旨いものなり。

菊四郎丈。小使勘太役。肴籠を持つて來て、注文が違ふたといはれ、呆れて押問答する鹽梅、長五郎が吊詞をいふのが飲込めず、顔ばかりじろく見て居る工合、うのまゝの山出しにて大出來。山名屋の若い者も體にありてよし。

菊三郎丈。芥太夫役は臭し。幫間も中位なり。猿藏丈。三原傳三役。一と通り。音五郎丈。鶉つかひ役は一と通り。居酒屋亭主は出來たり。扇藏丈。山名屋下男役。こんなものはいつも乍らよし。升

藏丈。替間にて狐火の義太夫は下手なのが賣物か。丑之助丈。禿みどり役。さしたることなし。福助丈。武田勝頼役。豫評にも申しと如く、勝頼に生れついたかと思ふやうな人なれば、彼此いふに及ばず。三優中第一に依り役と見受けたり。昔の勝頼はもつと色氣があるというた人があるやに聞きしが、さほど色氣が入用でもなきゆゑ、うこらは榮耀の申し分なるべし。浦里役。湯上りの姿にて下手よりの出、黒縮緬裾ぼかしのしかけ、鼈甲の一本ざしの映りいかにもよく、解けぬ思に浦里はといふ文句につれて、部屋の前に立留り、ほつと息をせらるゝだけにて、愁の利く人ゆゑ、苦勞に衰れた様子見ゆ、思はずほろりと致したり。三途の川もこれこの様に手をとつてと口説の愁顔などふるひつくほど好く、見物の魂をかきむしられたり。責の場はさしたることなし。春木座では唐衣で責められ、こゝでは浦里で責められ、とう／＼御病氣とは困つたもの。中幕と大詰とはこの丈で半分かついで居るといつてもよい位なれば、どうか一日も早く御全快のほど願はし。

菊五郎丈。雪駄直し長五郎役。橋詰に店を出して仕事をして居る拵萬端、生寫しにて申す所なし。駒下駄の直しを持つて往きて歸り、小さなたはしでそこらに水を撒いて又仕事にかゝり、源之丞が緒の切れし雪踏をとり、裏の泥を落とし、鼻緒のところをしめすなどの小細工受けたり。冠り物をとつて昔語になるところの極りよく、仕事をし乍らお虎と話をして居る間もむだなし。お雪駄が出来ましたといひても源之丞が心附かぬに呆るゝ可笑味面白く、とど袂を引いて大きいひひ、源之丞が落す扇を拾つて泥をはたき乍ら不審の思入にて幕は、御兩人／＼と申すべし。小屋の場。小ざつぱりした着附にて、滅法様子がよく、手拭に包んだ年玉を出すところ、氣が利いたものなり。お虎に見染の事を話す間も、松助丈と御兩人ゆゑ愛嬌たつぷりにて、草履をはき違へて、へ、慾にかまけて

目も何も晦んじまつたといひ乍ら急ぎ足の引込まで透なし。ぶら提灯を提げて源之丞を案内し乍らの出、花道にて首尾は大極上々吉といひて、容貌をよく生れるのは一割徳でござります、ねへ、と額に手をやつて反かへつての空笑ぬくるほどよし。家は汚なくつても、綺麗なもの居りますとこれよに指さすところ、お虎の立ちし迹で、あれで亭主があるから可笑いぢやありませんかといふところ、源之丞の紙入から金を出して包むところ、お虎と二人になり、おめめに亭主がないとなあど持たせかゝるところ、たゞ口合をいひて坐を持つだけなれど、うのちよび加減にいへぬ旨味ありて難有し。兎角烏と明の鐘は悪まれ者でござりますの幕切も手輕いものなり。裏田甫の場。道具の籠をかつぎ舊い笠を被りたる形そのまゝにて、喜六に出合ひ、おこよが身投の話を聞き、そんな取持をして濟まなかつたと後悔して涙に呉るゝところは、良心を顯した筋を腹に入れてのこなし振極めて好し。下男の持ちし肴籠に目をつくることも透なく、喜六の遣した手紙を見て、さては一杯くつたかと息込む顔立凄いほど好く、狸親父の化の皮、ひんむいたうの上で、どうか元手といひかけて四邊を見廻し、氣を替へて笠を被り、でい／＼と流しながら迹をつけての引込、無類飛切の妙なり。主膳の玄關にかゝり、雪駄を直すといひて籠を卸し、喜六の脱いで置いた雪駄をとり上げ、くすべ鼻緒云々の白ありて雪駄をたゞきつけ、息込み乍ら手甲をほどく道具廻りもよかつたり。庭口の場。下手に立間をして居り、よき程に頬被のまゝつか／＼と椽端近くゆきてしやがみてをり、主膳がどこから来たといふに、おれは小屋から来たのだと手拭をとつて肩にかくるところ受けたり。喜六の胸づくしをとつてこつき廻し、吾妻橋からどんぶりと、そんなところへ身を投げたなとこれよにかけていひ、三千石の御知行も、もし殿様、棒にふらにやあなりますめいと源之丞にあ

たるやうにいふところ、手酷く應へてよし。源之丞が刀に手をかくるを見て、さあ切られやうとあぐらもかゝらずに椽端に腰をかくる見くびつた仕打もよし。主膳の口を利くを鼻で笑つて、わつちは非人だが今のあまやこゝに居るぢいはいは何だといふところ、只任せろ／＼ぢやあ任せられぬといふところ、こけが將茶をさすやうに待てとは何んだといふところ、金をやらうといはれ、こいつはちつと話せるはねと舊に返るところいづれも小氣味よし。石薬師の出合を約束して下手にかゝり、いつそ主膳をばらしてといふ腹を利かすところもあつさりにて得心したり。居酒屋の場。半次の合、羽をひつかけて一杯飲みながら、後でお直しだよといはれ、びつくりして飛びのくところ安くして、笑はせられたり。殺し場は石を倒しかけたり、龜の子のやうに出たり引込んだり、少しちやりすぎはしたれど、兎に角面白し。半次を川に蹴込み、どうで今夜は濡れにやらねの幕切も申す所なし。日暮りの場ずぶ濡で来て、半次の着物を着せて貰つたり、あんかをこはして股火をしたり、情人がつて我儘三味をするところ、何か拾白をいつての小酒盛もあつさりにて止められしは御注意なり。半次の歸りしに揚板の下に隠れ、お長が半次を縊るところにて、板をはね揚げて半身を出し、片肌ぬいで細引の片端を引張る見得は、幸四郎の錦繪にでもありさうな形であつたり。召捕はさしたることなし。八重垣姫役。まづ道具の好み、いつもなら障子一重の上手に姫が住ふを、渡殿を隔てたる居間にしたるは尤なれど、同じ羽色の鳥翼といふ文句ありとて、泉水に鳥籠をしつらひしは物數奇といふまでにて、さほど感服もできず。文句の中添臥のを妹と脊のと改め、たまへの姿をあなたと改め、勤する身はいざ知らずといふ文句を除いたるを見識とすれば、なせ結髪ばかりに枕かはさぬ妹脊中といふ文句をうのまゝに置きしか聞かまほし。容貌は極念入の厚化粧の上、骨

折つて可愛らしい顔をせらるゝゆゑ、いかにも美しく、これが雪駄直しをした人とは見ゆず。振は今迄の型に新案を加味せられしと見ゆ、行き届いたることなし方なれば、兎角申すは勿體なき程なれど、所謂榮耀に餅の皮をいへば、小手が利きすぎるためか、深窓に生長ちし姫君といふ風に乏しく、調子も凄味になり勝にて、どうかするとおつかぶせの喰せものではなきやと思はるゝだけなり。人形身は風姿よりも動作を示すものゆゑ、一舉一動節にかなひて、いかにも輕妙にでき、容貌も着附の爲か前より立優りて見ゆ、惣體に香場より狐火の方大出来なり。此役については世間で彼此申すものもあらんかなれど、色惡專賣の梅幸丈が八重垣姫をこれ程にこなされしは大手柄といひても差支なかるべし。時次郎役。男前若々として、愁に沈みし様子一しほよく、浦里と色つぽい口説、露のたるやうであつたり。おかや役。好んで出されたほどのことなく、これ程ならこの役を松助丈に譲つて、切まで時次郎を見せて貰ひたかりき。(明治二十七年二月六日)
春木座の出し物は

伊賀越道中双六、一谷嫩軍記、三千兩駿河土産、女鳴神

なれど、大和橋は菊之助丈病氣の爲見物の當日は出幕にならず。又一番目の序幕は見落したり。二幕目本田家邸の場。駒之助丈の内記役。仕合の所にて何か烈しく言切つてさつ／＼との引つ込、けたたましきことなり。政右衛門を成敗せんとの出に、鳥指の持つ鶴竿のやうな長い鎗を持つて出られしはどういふ思召にや。政右衛門に鎗を押しへられて離れぬとの思入は仰山に過ぎて下品なり。すべてこの仕合の手は戯らしくして論にかゝらず。幕切行くを呼留めて、早うかへれよと輕くいひ、氣を變へてゆけ／＼といふところ、ほろりとささする筈なれど、此丈はつんと濟まして兩手を袂に入れ

たやつを前で重ねて本の座に戻るといふ仕打ですつかりこはしたり。勘五郎丈の櫻井林左衛門役。仕合に勝つて暇を貰ひたりとて、花道にかゝつてから何か悪體をついての引込、悪味が足らぬやうに思はれたり。雀右衛門丈の政右衛門役。仕合の場にて内記が引込みし迹にて述懐めいた言廻しにんみりとゆかず。下手へ這入らるゝところ、袴の裾が後へびんとはね反つて居る様子から例の體を振つての歩き方堪つたものでなし。役者をら體の風情といふことを少しは考へるがよし。廣間の場に花道から早足に出て、捕方を投げつけてつか／＼と舞臺にくるところ、坂地の人の喜ぶところか。鎗の尖を喉に當てがはれて濟まして居る工合は、洋行がへりの天一も跣足といふ見ゆなり。花道に残りてしほ／＼としての引込に、拜領の刀を右手に捧げ屈み勝に歩まれしは、どうも見榮のせぬ仕方なり。芝雀丈の志津馬役。着附も相應し、氣組もありてよし。沼津の場。八百藏丈の重兵衛役。手拭で頭を巻き、合羽をはふつたる旅拵の映りよく、平作がたつて荷を持ちたいといふに據なく持たするところも、輕口をいひ乍ら歩む間もさら／＼としてよし。只根からの町人と見ゆず、侍の上りの様に見ゆるだけが申分なり。お米の後姿を立上つて見送るところ風情あり。家のことをきき、さして平作を後にのこし、先へさつ／＼と這入つてゆくところも可笑味ありたり。平作家にて荷持が無理に引立て、往かうとする故せうことなしに立かゝりながら、娘に引かされてとつたいたつする様子も可笑く、とゞ腹が痛んで来たといふところ大受なり。このあたりは色氣があつても厭味になつてはならぬところゆゑ、この丈のさつぱりした藝風に符りて至極よかつたり。盗人は娘を見て、腹立つ聲のふるふところも自然にてよし。昔語を聞いてさては現在の親かと驚き、名告つてしまはうかとの思入といたり。門口を出掛りてお米が差出す笠を取りながら、親父どんもとる年ゆゑと外

ながら親の事を頼むところ、利かせ場だけにこなされたり。花道にかゝりながら雨にならねばよいがといひての引込も申すところなし。松原の場。後より呼ばるゝゆゑ提灯を吹消し、早足に逃げやうとの仕打も尤なり。平作との問答も例の名調子ゆゑ、平作がお前様は御發明といふ詞に適ひていかにもよく、うれにうるみ聲での言廻しゆゑ一しほ應へたり。名題の又五郎の在所をいふところから親子の名告合までたつぷりと泣かせられたり。松之助丈のね袖役。素と廓に居たといふ筋がこの丈の體に符りてよし。重兵衛を大切にするところ、どこまでも親父の世話になりし禮といふ心にて、少しも色つぼき様子のなきは流石なり。重兵衛が女房に貰ひたいといふに腹を立て、早ういなして下されと父をせがむところ、いかにもよし。印籠を取りにかゝり、押へられて面目ないとの仕事も一通りなり。我身の瀬川に身を投げてといふさはりの件にて懷手をして胸を突出し、ちよと太夫のこなしになるところ受けたり。父を焦立てゝ出すところから立聞をしての愁歎も申し分なし。雀右衛門丈の平作役。日に焼けた顔の作りから、目の周圍のたぐれたやうな塗り方、汚な細工の拵まで申し分なし。無理に荷をかつかせて貰ひ、二足三足かついでは肩をかへて息をつぎ、冗談をして間をのぼす、例のやとまかせのところ、調子から足取まで大出来にて、政右衛門をした役者と同人とは見ゆず。流石この丈も地藝はある人と感心せり。足の爪をはがして倣大に聲を立つるところ、それでは荷を持たせてあげませうかとの可笑味、自分の家を重兵衛に教ふる輕口から、且那樣はれ早いことぢやと息杖を後に廻し兩手で押へての引込まで上々にこなされたり。家にかへりてお米をまだるがつて箒でうちの中はたき廻すところから、澁紙を被つて寝るまでも申分なし。盗人をきき、飛起きてうろつき廻り、灯をつけて見て娘を知り、びつくりし、重兵衛が息込むに手を合せてこれござ

りますとあやまり、娘を引据えて涙乍ら異見するところ、見せ場だけありて隙なく出来たり。われではいかぬと重兵衛の跡を追うての引込も氣組充分にてよし。こけつ轉びつ重兵衛に追ひすがり、敵の在所を無理に聞かうとする老人氣質もよく映り、脇差を突立て、息をつめて居る間も、あれ聞いたか娘といひかくる件も申分なし。親子の名告をして落入るまで、この役は當込氣なくつこんでせられ、珍らしく臭味を出されず、この丈と舞臺にて近附になりし以來の出来なり。近年坂東太郎丈吾妻座にてこの役を演じ、大に新聞社の劇評者を驚歎せしめしことありしが、尤も伊賀越は暫く大歌舞伎で出ぬゆゑ、初めて見た人多き爲もあつたらうし、太郎丈のよろほひ加減、丁度平作の年輩ゆゑ、自然真に逼りたる爲もあるべし。こん度の雀右衛門丈の平作もさしたる甲乙なき様に思はる。唯太郎丈は今一と息老込んで哀れつぽく見わたれど、理窟をいふ工合から腹切の工合は今度位にてよきかと思はる。宗三郎丈の荷持役。使に引返すところにて花道にかゝり、目印を頼み升よといひての引返も軽く、平作の家にて茶を出した娘に目をつけてもう一杯頂きたいといひ、親父が次に汲んで出すを見て顔を蹙めて茶をこぼすところも可笑味ありてよし。重兵衛を無理に引立て、往かんとして叱らるゝところ、腹が痛むといふに驚き、不審ながら花道にかゝり、初めて娘に氣があると感じ、勝手にしをれといひてかけ込むまで、つこんでよし。勘五郎丈の孫八役。こんな役は男前もよく、氣も利いて結構なり。總じてこの幕は役々の散りよく、まづ近年の沼津と思はれたれば、芝居好は必ず一見してれくがよし。さて迹は一口評にて御免を被るべし。岡崎の場。八百藏丈の幸兵衛役。體が武張つて居り、する事も手丈夫にて、大事の人質何故殺したとの突込み方、唐木政右衛門、和田志津馬、不思議の對面、さぞ満足であらうといふところの貫目も、この座組には相應

せり。梅太郎丈のた谷役。車輪にやられたれど餘り榮わらず。雀右衛門丈の政右衛門役。政右衛門といふ人物でなし。志津馬と出合のところ做大に過ぎたり。芝雀丈の志津馬役。前幕同様の上評なり。七嘉助丈の幸兵衛妻役。役者になつて居らず。中幕に芝雀丈の熊谷役。老體に似ず、いつも若々と大派手大立派なるは不思議。只足の悪いのを見て涙が溢るゝ計。福助丈の義経役。大御馳走。總て澁がらぬ處よし。駒之助丈の彌陀六役。頭巾附髭の工合、頓兵衛か關兵衛と間違へたものと思はる。頼朝を助けずんばとの白は改良。梅太郎の相摸役。無難。藤藏丈の藤の方役。身替りの首を見ながら、未だ小太郎と知らぬ中から泣いてかゝるは異なもの。大切福助丈の女鳴神役。紫縮緬の法衣に金襴の袈裟を纏ひたる姿、釋迦八相の悉達太子を女にして生で見るとやうなり。一度は絶間之助を疑ひて屹となり、又疑を晴して口説になり、盃事ありて酔の廻る風情、随分色つぽく出来たり。松之助丈の絶間之助役。若衆姿藹藹けて見ゆ、振も見事にせられて、代り役とは見ゆ出来なり。芝雀丈の佐久間信盛役。青竹を持つて押戻しの荒事、無類飛切の立派さにて、近頃になき大芝居なり。この幕は小文字太夫の出語、和楓丈の大薩摩色を添へて、善盡し美盡したる出し物なり。(明治廿七年五月四日)

市村座の一番目

新門辰巳小金井

序幕薩埵峠茶店の場。芝雀丈の新門辰五郎役。大分焼の廻つた親分の様にも見ゆれど、例の愛敬にてどうにか見て居られたり。菊五郎丈の小金井小次郎役。假髪の恰好から足拵の様子まで行届いたものなり。茶店の澁園扇を使ひ乍ら往きかけ、氣が附いて亭主に返すは何でもなきことながら面白

實錄先代萩

福助丈の淺岡役。堀越の重の井といふ格にてこなされたれど、今一と息堪能せぬところあり。菊五郎丈の片倉小十郎役。拵を凝り過ぎた爲か、分別臭くて感服せず。福祿丈の龜千代役。調子のよき子役なり。丑之助丈の千代松役。痒いところへ手の届いた仕打振にて、梅合、梅幸兩丈を後に隠若たらしむる趣あり。淨瑠璃

鈴音真似操

松助丈の寢臺老人の人形。眼附の凄いところも徹り好く、少しとぼけた工合もよし。家橘丈の椅子藝の人形。小柄の恰好よく人形に徹り、下目遣をして頭を細く振る工合などうのまゝに真似られて大切中の出来と見とめたり。鈴踊りの人形。さしたることなし。猿之助及外兩丈の一寸法師の人形。出来たり。丑之助丈のほてる少女の人形。これもよし。福芝榮三郎兩丈の婦人の人形。頬の紅の附方が濃過ぎし上、形が充分につかぬものと見ゆ、中出来なり。芝翫丈の警官役。體に振のある人だけこの役はいかにも樂にでき、寢臺へ乗つてすますところ大出来なり。菊五郎丈の足長の人形。この前も「キヤリネ」を摸してわれ等を驚したる器用者の大將ほどありて、麥酒を飲む可笑味の中に手輕な振事は、外に類なき面白さなり。寢臺道化師の人形。寢臺の持上がるを不審がるところより、一旦反とばされて次に仰向に寝るときびく／＼しては起上るところなど受けたり。骸骨は未だ見ぬゆゑ評なし。兎に角舞臺の飾附より道具の捲上がる工合などうの儘に寫されたるは大凝のことなれど、「キヤリネ」のとき程に受けぬは、役者の體を人形に比ぶるとどうしても寸法が延び過ぎて居るためなるべし。(明治廿七年七月)

市村座一番目

霜夜鐘十字辻笠

は、二世河竹新七が俳優六人に好みの役柄を投票させて、それを二番目物に仕組みしものにて、三題晰といふものがあるからには、まづ六題晰とでもいふべきものなり。されば題は兎に角聯絡がついて居れどその聯絡が誠に薄弱にて六通りの人物が思ひ／＼に運動して居る所は、やゝ廻り燈籠の形あり。それでも歌舞伎新報に正本仕立で載せられしときは實に讀んで面白かりき。それはその筈、句々當時の流行を穿つて、五分も透かないといふ風に出来て居れり。殊に文情兼至といふ所は車坂町の場にて、巡查が少女を惠む一段なり。少女お竹が私と一所に學校に居た者が、今頃は日本略史を讀で居り升といふ杯は、課業に熱心なるをよく寫したるものにて、又巡查薫が角燈を見せてそこに一厘錢が落ちて居るといふ所も、實に巡查の保護といふ題に協つた趣向なり。又楠公の奇計といふ難題を型を撮ることに使ひたるなど、日本にてはまづ新意匠といふべし。讀んで此程面白いから皮に掛けたらさぞと思ひし割には、最初の時も榮わず、只役者の敏腕と愛敬とで持つて居たりき。それを十五年経つた今日、何の手入もなく舞臺に出しては、穿ちも多分は時代後れになり、因縁を聞かねば難有味もあるまじと思はる。中幕

源平布引瀧

九郎助住家の場は齋藤實盛が源家の落胤を見逃すといふ筋なれば、實盛は大層捌けた男の様なれど、よく考へて見れば平家の祿を食ひ乍ら、如何様の義理ある連、源氏に心を通はず二股侍、武士の風上にも置けぬ奴なり。ねまけに加賀國篠原で打たる／＼杯と、二十年先の事を豫言するは可笑し。之

に比ぶれば瀬尾は餘程忠義者なれど、うれも鬼の目に涙で、大事を使に立ちしを打忘れ、我子の恩愛に引かされて變心し、縦令自滅すればとて孫を源氏のお役に立て下されなどといふたはいなさ、情義めちや／＼なり。併しさう言つては丸で三馬の偏癡氣論なれば、こゝは一番九藏がどつてれき

の實盛に、市藏の瀬尾、松助の九郎助といふ名物揃として、古風の劇評をなすべし。
八百藏の六浦正三郎は適役なり。奥山の場で眼病のこなし申分なく、見ずばらしき中に士族氣質のところありてよし。安泊にて薄命の述懐もあつさりにて應へたり。宗十郎はどうかすると時代臭くなる弊があつて困りしが、此人はそれがなくてよし。二役楠石齋にて最初の出に、團十郎は八反の綿入羽織で髯も生さぬ爲、演説家とは思はれぬといふ評のあつた所なるが、此人は黒紋付の羽織で八字髯を生されてよし。豊三郎と立身で話をする時、兩手を帯に當て一寸演説師の形を見するは趣向なり。楠公の拵も申分なし。猿之助の杉田薫は貫役ゆる中々の喝采を受けた様なるが、此役は菊五郎が周到なる仕打と固有の愛敬とで一代を動かした程の當り物なれば随分がたり落がつた様なり。猿之助も愛敬はあれど、まだ藝に旨味といふものが充分出て來ぬ故是非なし。市藏の按摩宗庵は仲藏が獨占の大當を取りし役なれば、さしづめ松助に持つて行くべきのが此人に廻つたもの故、何となく目的が外れた様な氣がしたり。別に悪い所はなけれど、此人がすると頭から強く且惡黨らしいから、初めは哀れに見せてぐつと氣の變るといふ凄味に乏しきが申分なり。されば三枚橋は知らず、安泊の場はやゝあつけなけれど、山下の場で金助とのつかみ合は一寸面白かりき。訥子の讚岐金助は、車坂の場の拵人物共、まづあんなものとしても、歩振や體のこなしが誰かを氣取つて居る様に見え、鼻持ならず、お村を口説く白廻しも時代過ぎて不都合なり。根岸のゆすりはやゝ地金の

訥子になり、歸り掛に暴れ乍ら喜美太夫の煙草入を抜くところはやゝよし。兎に角こんな藝風では大歌舞伎に上すべき人物に非ずといふも差支なし。榮三郎のお村は素と流れの身で今は堅氣な奥様になつたといふ處見えてよし。下寺跡の場で池から上つて泥塗れにて氣絶して居る様子よく、巡查の外套を着せられた形もよく、車に乗せられてからも疲勞の心持で居る工合受けたり。兎に角美貌無雙の半四郎の後でこれ程にやらるゝは手柄なり。富十郎のお豊は哀れさ持前にあり。小傳次のお竹は役が本當に腹に這入らぬと見え、菊之助が見物の涙を絞りし俤だにあらす。菊三郎の稲田豊三郎、兒福のお兼、共に普通なり。蟹十郎の泥藏はよし。扇藏の喜美太夫は言語同斷にて、評すべき限りにあらず。二役お熊は鶴藏の役なりしが、まづよし。梅助の丹作は梅五郎（今の松助）の後なるが、まだ此人は軽い所には往かず。瀧十郎の楠下男佐兵衛は例の通り。あやめの楠下女おしづは好し。九藏の齋藤實盛役。拵はやはり白地錦の様をはつきりしたものにして貰ひたかりき。押出しは若々として立派なり。小松殿の内命を言渡す白廻し、眼遣ひやゝ仰山なれど、此人の藝風ではあんなものならんか。瀬尾とぢり／＼の詰合はなかく活氣ありてよし。物語の間にちよく／＼世話に碎くる様なるは、あらずもがなと思はる。小萬を呼生くるとき九郎助を井戸にやつて呼ばする代りに小萬の耳元に自身口を寄せ、白旗を奪ひ取られなといふは好き思附なり。産氣ついたり聞きての喜、太郎吉を叱つては白旗の前に行つて禮拜するあたりは、此人では一向面白くも可笑くもなし。御男子といふを押ふる可笑味を除かれたるも右等の解か。太郎吉をあやし乍らの仕草も愛敬に乏しき人ゆゑ面白味をかりき。仁惣太を切る幕切は流石に締まつて見たり。市藏の瀬尾兼氏役。拵仕草も型通りにて清盛公の御誼意だといふ所も手強くてよく、實盛との詰合も見劣なく、扇子で腕を

動かして見る仕草も安けれど好し。胸に思案がなくちや協はぬとの苦笑もよし。小萬の死骸を蹴飛ばし乍ら憂を含みての言廻しも出来たり。松助の九郎助役。始終仲藏寫しと思はれ當時類のなき九郎助なり。初め鉢巻をして肌を脱いで實盛に詰寄り、後に氣がついて鉢巻を取り肌を納めて様子を聞かせて下されといふ處大に好し。女寅の小萬役。御苦勞。英太郎の太郎吉役。活氣ありてよし。然し白がのりになる所今一と息を見受けたり。蟹十郎の老婆役。よし。兒福の葵御前役。勢がよすぎた様なり。扇藏の仁惣太役。近頃見た菊四郎には遠く及ばず。(明治廿八年九月廿三日)

月草終

索引

- 哲學の歴史……………四〇〇
- 哲學と宗教と……………八八
- 無二の眞理に向ふ道……………九〇
- 常識哲學……………二二
- ハルトマンの哲學……………八〇
- ウンドの哲學……………八二
- 撰譯的哲學……………一四六
- 厭世的哲學……………二八三
- 密教……………二八三
- 眞、善、美……………三一九、四七四
- 致知法……………二八三
- 物育と類育と……………一〇八、一一五、四二九
- 類例と證據と……………三五四
- 一分法と全分法と……………二八
- 矛盾と反對と……………二七
- 個人の哲學上所見……………六七、八六

懷疑と虚無と……………八四八

自信……………三五七

審美學……………一四四、六三〇

審美學の歴史……………一三九

實相的審美學……………五八、六一、二八三、三二四、四八六、五七四

ゾラの實相論……………九四、二八四、三一六、三三〇

煩はむき描寫……………三四五

實相派の心理的分析……………三二四、三二四

遺傳……………五二九

プラトオの藝術觀……………七六、四七八

主觀的審美學……………五八

抽象理想派……………三一七

ジャスレルの審美學……………一四四

ユングマンの審美學……………一一〇

審美的華文……………九四

所謂理想派と實際派と……………一一

ハルトマンの審美學……………五九、四八八

其應用……………九二

論美者の階級種類……………一四四

批評……………四二二、四二二、四一六、四一九、四二〇、四二二、四二二、四七九、四八二

批評の標準……………二、四、四八〇、四八八

批評と製作と……………二、四、三三二、六〇五

批評と教育と……………三七

原量(直覺、覺悟)と比量(思議、理解)と聖教量(真理)と……………二九、三一、三七、一四四

駁論の必要……………三八六、四〇八

自評……………二七二、三四七、四〇五、四〇七

匿名評……………二七二、三六四

審美學と鑒賞法と……………一一八

形而上と形而下と……………二七七、五〇七

絶對と現象と……………二九

空間、時間……………二九

實相……………二二、五八

理想……………七四、八〇

先天理想……………二一八

理想の現行……………二八四

映象……………五九、二七八

感情と観相と……………三三、二七八

感情と思議と……………一五一、二八六

主観と客観と……………三三

作者主観の呈露……………九二

美感と實感と……………七〇、二四〇、四〇〇

美と醜と……………三七一、三九二、四六二

醜……………四五五、一三二、一四四

美の結象階級(抽象と具象と)……………一六五、二七八

官能的快美……………三八八、四〇五、二六〇

形美と醜美と……………一四八、一八〇、一八八

類想、個想、小天地想……………四、一〇四、二七八、六四八

性格……………三三七、五七五、一六四、一六四、二〇〇

幽玄……………四九七、五〇四

自然美と實美と……………一〇八、二九六、四九七

葛藤……………一五三

社會的葛藤……………一五五

高、柔、逸……………一五三、五〇六

喜、悲(悲酸、可憐、餘哀)……………一五四、四二八、五〇七

詭謀……………一五二、三二九

滑稽……………一五四

悲壯……………一五四、四二八

罪過……………六三四

藝術と科學と……………一七、三三三

藝術と時尚と……………一五、一三三

藝術と需要と……………一三一、一六七

藝術と商賈と……………一四四、四一三

藝術と國風と……………一〇六

藝術と宗教と……………一〇九、三三三

獸形主義と人形主義と……………一〇

藝術に於ける想像物……………一〇六、一一一

藝術と政治と(保護)……………一六七

藝術と公衆と……………三六二

競技……………一三四、二四〇

旁修藝術	一四六、六〇五
製作性と感納性と	二二、一一四
記憶(經驗)	一〇七
趣味	三三二、一一一
空想	一〇一、三三二
自憑(趣味、沈思)	三三五、六〇九
神來	二四、一四、二八二、三三一
製作	一六一、四一三
模倣	七五、一〇八、一三二、一六二、二八四
模型	一〇六、二三九、四一九
想化	一六三、三三三
聯合	一六四
製作の興	一六一、四二八
製作の胚胎	一三〇
内術品と外術品と	五八、一〇二、一五七
固定	一六二、四二八、四三〇
技巧	一〇一、一五七
個人的手法	二五四、二七四、二九三

正本と謄本と	一三二
復寫	一三一、二〇三
翻譯	二八八、二八九、五三一、五三九、五八一、 五九七、六七〇
改削	六〇〇
藝術の分類	一五九、五四七
低級術、羈絆術、自由術	四三四、四八三、六二九
文章と寫音法と	二四五、二五二
文章と言語と	二四二、四一九
語格、文法	二九二、二九九、三〇二、四〇三、五四〇
倒置法	四五四
擬古文	二四三、二五五
國文	二四九、四一八、四四五、四四六
言文一致	二四六
脩辭法	六二九
繪言葉	二七八
移用語	二八一、二八八、二八八、二九〇
散文法	二七四、四九五、五三九

韻文法(詩學).....二七四、三一三、六三〇
 平仄韻法.....二七五、二八八、二八九、二九〇
 韻文の句讀.....四一七
 反歸句法.....一四二
 土音を去ること.....二五七、六三一
 發音法.....二五八、六三一
 素讀.....二五八、二六六
 美音讀.....二六七
 表情讀(朗讀法).....二五九、二六一、二六七、四〇八、四三二、
 五九七、六三一
 讀と會と.....二六六、二六七
 表情せざる唱歌.....二六七、四八三、五二六
 演説.....二六三、五四三
 彫塑.....二三七
 象嵌.....四五二、六三〇
 繪畫とその歴史と.....一九九、二八六、三二一、三三六、三三八、
 傳色.....二〇八、二〇三
 油畫の金銀箔.....一九六、一九八

油繪の輝裂.....二〇〇
 ドラクロアの畫則.....一五九
 繪畫の分類法.....一二八
 繪畫の技巧上の分類.....一〇〇
 彩畫.....一〇〇
 油彩、水彩、乾彩、掩色、鮮、壁、水碓畫.....一〇〇
 膠畫.....二〇九
 線畫.....一〇〇
 木炭、鉛筆、「チヨオク」畫.....二一六
 繪畫の題目上の分類.....一〇二
 宗教畫.....一〇九、一一九、一二二
 歴史畫.....一一〇
 風俗畫.....一一一、一二四
 動物畫.....一二四
 風景畫、植物畫.....一五四
 裝飾畫.....一三三
 填飾畫.....一八二
 「パノラマ」.....二三〇

印象派……………二二四、二二六
 洋書と國畫と……………一〇〇、一六七、一七五
 二者の折衷……………一七九、二〇六
 表情言語……………二六〇、四四〇
 詩(純文學、美文學)……………二七六、二七八、二八一、三三六、四一二、四三二
 詩と哲學と……………六八、二八七
 詩と政治と……………二九七
 詩題……………五〇九、五一五、五一九、六八九
 詩の分類……………一〇、一三、二七八
 吟體詩と讀體詩と……………一三、二七〇、四一七、四三六
 抒情詩……………二八〇、四三二、四九三
 抒情詩の幽玄……………二八六、三〇四
 厭世抒情詩……………二八三
 戯曲と其歴史と……………四一八、四四八、四八一、四八五、五六〇、五六五、六三二
 戯曲の没主観……………二五
 戯曲の結構……………三四三

滑稽戯曲、悲壯戯曲……………四三七、六三八
 抒情戯曲……………六二三
 正本……………四一八、六一九、六四二
 典籍戯曲……………五八五
 小説……………三〇九、三三〇、三三六、四三六
 小説の結構……………三四三、五一八
 小説と戯曲と……………三三七、三四三
 單稗と復稗と……………三二四
 傾向小説……………三三八
 教詩……………二七四、三〇五
 劇……………五四〇、五六五、五六九、五九〇、六一三、六一七
 劇の歴史……………五六〇、五六七、六一三、六二九
 劇の理想派と實相派と……………五七四、六三二
 劇評……………五九八、六〇四、六二〇、六二二

一六面 一〇行至一七行
 一〇四面 一八行
 一〇五面 四行

匡正

アリストテレスハアリストテレスノ誤
 上の類の字の下以下の二字を脱す
 個想は個人的

有所



印刷所

發行所

者 者 者

つき草奥付
 實價金壹圓廿錢

森 林太郎

東京市日本橋區通四丁目五番地

和田 篤太郎

東京市日本橋區兜町二番地

星野 諤治郎

東京市日本橋區通四丁目五番地

春 陽 堂

電話五拾壹番

東京印刷株式會社

東京市日本橋區兜町二番地

電話浪花二百〇五番

版 權 所 有



同 明 治 二 十 九 年 十 二 月 十 五 日 印 刷
年 十 二 月 十 八 日 發 行

著 者

森 林 太 郎
東 京 市 日 本 橋 區 通 四 丁 目 五 番 地

發 行 者

和 田 篤 太 郎
東 京 市 日 本 橋 區 兜 町 二 番 地

印 刷 者

星 野 諤 治 郎
東 京 市 日 本 橋 區 通 四 丁 目 五 番 地

發 行 所

春 陽 堂
電 話 五 拾 壹 番

印 刷 所

東 京 日 本 橋 區 兜 町 二 番 地
東 京 印 刷 株 式 會 社
電 話 漢 花 二 百 〇 五 番

つ き 草 與 付
實 價 金 壹 圓 廿 錢

美奈和集

關外漁史著
定價六十錢
郵税十六錢

うたかたの記の哀れなる、舞姫の優し氣なる、文使の面白き、戦僧のうら悲しき、偕は盜俠行の勇まじきなど、小説韻文脚本雜録、柳櫻をこき交せて三十九章、悉くこれ漁史が八斗の才を一管の筆にそまざれたるもの、「つききくさ」かげぐさと共に、文壇三美の稱あるもの

かげぐさ

關外漁史
新著近刊

本書は「つき草」の好對として双美双玉の名あるものにして關外漁史が多年間の執筆にかゝるもの所載の小説脚本數種は獨國魯國の傑作佳什を翻譯にして其文學者逸話及傳記の如き英獨佛露の作家を氏が靈筆を操つて宛然生けるが如くに描き出したる千有餘頁の大冊子なり苟しくも文學に志あるものゝ一讀せざるべからざるの珍書なり

特別割引箋

稟告

- 一 江朝御花主權方の御取立により日に倍し盛大に相成奉深謝候向世運風潮に先だち文學社會に歸々たる大家方の手に成る新編新案の原稿相送ひ掃蕩製本に注意し逐次出版致候間愛顧諸君方御愛顧の榮を給はらん事を希望仕候
- 一 此書目録の外百般の書籍は御命令に隨ひ御取次仕候間書名若者出版人等御記載御注文願上候尤も直段は無油断拙店より一層廉價に相働き候間自然高價にも差上候時は御申越次第御引可申候
- 一 送金方は内紙運送便早送又は銀行法は江戸橋郵便本局宛郵のいはせにて何れも前金に御願申上候
- 一 御注文書若三日以内に必ず出資可仕候
- 一 此切取紙へ品物御賣入御注文の御方へは該買價書目の内特別一割引にて御送り申上候
- 一 郵券代用は一割増にて願上候
- 一 宿所姓名は可成御明瞭に楷書文字にて判然御願上候
- 一 御親友御同僚中小説雜書御愛讀の御方の宿所御姓名御通知願上度拙店より早速書目御送り可申候
- 一 前件申述候通り下段及裏面に書入場所有之候間御注意願上候

東京日本橋
通四丁目角

春陽堂

和田篤太郎

電話五十一番

切取線

名氏所住の君諸いらせ求購と類籍書	名氏所住主文注御

福地櫻痴著、三島蕪窓書

秋の夕暮

實價廿五錢
郵税六錢

めざまし草の天保老人は曰く
さす昔の幕府の制度事情をくはし
く御ぞんじの櫻痴先生の御作丈あり
てよく御用達町人の事情をうつされ
ました。この小説はこゝが見どころで
ムリ升。

全 小説通は曰く
文章は澁らず滲らず流石にかれたるも
のにて、時と事に人それぞれ用意あ
りともなしに用意あるは、今の所謂青
年作家等のちよいとほ及ひ難き所、さ
ればこそ居士にせまりて稿を求むるの
事件も生ずるなれ。
全 大の最負は云はく
さす櫻痴氏の作として、一二回のあた
りは二番目狂言の序幕を見るが如くに
て面白し。文章も読みづらき所なきは
さすがなり。

二葉亭主人著
鈴木華郵書

かた戀

浮雲の一篇洛陽の紙價を高からし
めしより、斷然筆を文界に抛ちて、
又書肆の需に應せざりしが、弊堂
再三強ひ請ふて、始めて
一諾を得、纔かに本書を
得るに至りたり、其精華爛熳
たる筆端は日を期して江湖を驚かす
に足らん。

紅葉山人著
武内桂舟大書

浮木丸

實價三十錢
郵税六錢

世話女房

新製
テリメン
表紙

浮木丸は篇中の奇異なる主人公の名なり、其
一途一退變幻を極めて幾と思議すべからず、
忽ちにして危く、忽ちにして喜び、或は息を屏
めて恐れ、或は襟を披いて樂む、其危きは龍隠
に珠を探り、其喜は大旱に雨を致し、恐るゝと
と孤棹の亂流を下り、樂むと花下故人に逢ふ
が如し、一部の叙する所は、賤民の一子九死の
命を全うして、ゆくりなくも一城の主となる
の經歷なり、巻末附するに、世話女房の一篇を
以てす、構想慘憺、筆致深酷、字々殆ど鬼氣を
吹かむとす、蓋し讀むもの目を掩ふに到らざ
れば休まざるもの歟。

尾崎紅葉著
渡邊省亭書

青葡萄

定價三十錢
郵税六錢

青葡萄は去夏に於ける著者身上の厄難
をば一種獨創の記録體に綴れるものな
り、能文の事を叙するや、**人其妙**
と稱すれば、恍として身其
境を踐むが如しと云ふ、况むや紅葉山
人の文有つて、而も親しく自家の**經**
歴する所を寫すに於てをや、其妙の
至到底謂ふべからざるものあらむ、

戰國寫真畫報

寫真畫報は日清韓三國交戦中の風景人物彼我の名將等の寫眞を精巧なる寫眞版によりて印刷したるものにして加ふるに森三溪氏の詳細なる説明を付したり本邦寫眞版を雜誌に挿入したるは實に此畫報を以て嚆矢とせり日出づる處の國民が世界に於ける運動を始めたる日の紀念として當時の光景の如何に壯大にして颯爽たる英妻の後世に示すべきものありしやを活寫したる好紀念なり

合卷 彩色刷總クロース厚サ四寸長サ七寸五分横五寸の大表装強勁にして裱裁完美寫眞版六百廿餘圖總紙數千七百餘頁上下二卷大特別減價金貳圓送費廿錢

右は坪内逍遙氏が廿四年以來の著述に係る種々の論說、批評、諷刺、滑稽等の文章を取合訂正し、或は類によりて集め、或は年月の順序を追ひて集輯せる者なり、すなはち文學上の時事を評論せるもあれば演劇脚本等に關したる論文もあり、或は海外近世文學の傳論、或は明治作家の月旦、或は博引旁證、或は隨感隨草、或は靜思刻鑠、或

坪内 著 **文學の折々** 近
逍遙 著 **文學の折々** 刊

は一氣呵成、或は諷談洒落、讀みてほろむべきものあり、或は直議不憚、讀みて味ふべきものあり、要するに、此の書は、重に二十四年來の時文學を評論せるものなれば、また以て明治思潮の濃淡深淺及び其の干瀆の跡を測度するの料たるに足らん、續卷はたひきつゝ出版すべし

名譽實錄

●合卷二冊 背クロース上製 紙數千五百餘頁

特別減價金壹圓 小包遞送料廿錢

忠臣義人節婦孝子苟しくも其名の江湖に喧傳せられたる者の事蹟にして正史に漏洩したるものは本書收め悉して殆んど遺憾なし其編纂の方法は好材料といへども猥りに取らず深く諸家の文庫を涉獵し古人の實話に徴し或は編者の意見を以て取捨を加へたれど敢て改削を恣まゝにせず故に家庭の一夕話とし講學の餘暇に一讀するも少しも正史の研究をさまたげずして偶々奇聞を知るの補助とならん

古今新語

●合卷 總クロース製金文字 入紙數壹千頁餘

特別減價金壹圓 小包料拾五錢

本書は史學研究に於て有名なる後湖生小倉秀貫樂真子池田晃淵兩氏の編述する所第一卷信玄謙信有髮の説より筆を起して第五卷關ヶ原役に於ける黒田孝高と加藤清正に到りて筆を擱す全部五卷掲載する所の事蹟實に四十有八の多きに至る從來其事蹟を世間に傳傳せられたるもの本書によりて始めて明確火を見るが如きものあり後世史家の材料として裨益するところ尠なからざるべし

村井菘齋著
小弓御所
 鈴木華村密書
 定價三十錢
 郵税六錢

櫻の御所は 三浦に御座る
 小弓の御所は 蘇我野に御座る
 咲いた櫻に射る小弓 語り傳へて雨御所の
 櫻は先に世に出でたり
 今や弦音天地に響く 小弓の弓勢御覽候へ

運塚麗水著
さんざ時雨
 富岡永洗密書
 定價卅錢
 郵税六錢

鶯の羽をかいつろいぬ初志ぐれ (作者)
 初志ぐれ小鍋の芋の煮加減 (春陽堂主人)
 どの柴の濡れ色買はん和時雨 (愛語者諸君)
 新涼故人の訪れは何の日ぞ、今日此頃のあつ
 さには、あはん昔話の白雨賣の來て欲しや、
 爰に雁の後ならで、聽くことならぬさんざ志
 ぐれを蚊やりの烟たなびく簾端に移して、聽
 きて晝の曇を忘れたまへや

百家選

● 優美帙入 全部十五冊
 なる帙入 以て書架を飾るに足る
 ● 紙數二千壹百頁餘特別減價壹圓三拾錢
 ● 運送料貳拾錢

百家選は文界の寫眞なり今の文壇諸子が面觀
 風采盡く此書によりて讀者が眼前に躍々たる
 べし先進後進の小説家を網羅し悉したる全部
 十五卷の小説雜誌或は軟語を聞くが如く春花
 秋芳實に百花の研を恣まゝにするあり題して
 小説百家選と云ふ

